

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書XXXVI

鳥取県鳥取市気高町

SHIMO SAKA MOTO SEI GOU
下坂本清合遺跡
(4 ~ 8 区)

第1分冊 本文編

2018

鳥取県埋蔵文化財センター



1 調査地遠景(7区 東上空より)



2 6区SI1焼失住居炭化材検出状況(東から)



1 埋藏錢と容器・蓋石



2 埋藏錢

序

鳥取県埋蔵文化財センターでは、鳥取市本高から同市青谷町を結ぶ事業区間である一般国道9号「鳥取西道路」の改築に伴う発掘調査を、平成20年度から実施しています。

本書に掲載した、鳥取市気高町に位置する下坂本清合遺跡は、平成26年度から同28年度まで発掘調査を行い、弥生時代から江戸時代までの遺構や遺物を確認することができました。とくに室町時代の甕に埋納された約15,000枚もの銭貨の発見は全国的に注目され、当地域の歴史を解明するための重要な資料となりました。

本書は下坂本清合遺跡の調査結果を報告書としてまとめたものです。この報告書が、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、また、広く活用されて、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しています。

本書をまとめるにあたり、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、県土整備部ならびに地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成30年10月

鳥取県埋蔵文化財センター
所長 北村 順一

例 言

1 本書は、一般国道9号(鳥取西道路)の改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが平成26年度から28年度にかけて実施した下坂本清合遺跡(第Ⅲ工区)の発掘調査報告書である。

なお、下坂本清合遺跡のうち、第Ⅱ工区(県道233号「矢口鹿野線」以東・1区から3区)にかかる範囲については、公益財団法人鳥取県教育文化財団が発掘調査を実施した(「一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X X I」(2016年)、「同X X II」(2017年))。

2 下坂本清合遺跡の所在地は、鳥取市気高町下坂本114である。調査面積は平成26年度が2,703㎡(4～6区)、平成27年度が1,260㎡(7区)、平成28年度が1,191㎡(8区)である。現地調査は、平成26年4月22日から11月28日まで、平成27年4月14日から9月18日まで、平成28年5月24日から10月13日まで行い、調査記録と出土遺物の整理作業、報告書の作成は平成30年3月まで行った。

3 発掘調査は、平成26年度は株式会社イビソク・株式会社ティー・エム・エス共同企業体、平成27年度は株式会社シン技術コンサル、平成28年度は株式会社アコードに埋蔵文化財発掘調査支援業務を委託し、鳥取県埋蔵文化財センターが監理を行った。

4 調査で作成した図面の再編集、出土遺物の整理作業や記録作成は鳥取県埋蔵文化財センターが行った。

5 本書の執筆は第7章を除いて調査を担当した高橋章司、加藤裕一(平成28年3月31日付退職)、荒川和哉(平成29年3月31日付退職)、小口英一郎で分担し、執筆者名を目次に記載した。編集は小口が担当した。

6 遺物の写真撮影は、銭貨を除き小口が行った。

7 本調査に係る図面及び写真等の記録及び出土遺物は、全て台帳等に登録されており、今後活用できるように随時検索できる状態で鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

8 出土した埋蔵銭、銭貨は永井久美男氏、加藤裕一氏に調査指導をいただいた。埋蔵銭、その他銭貨の写真撮影は加藤裕一氏、小口によるものである。

9 平成26年度調査の放射性炭素年代測定及び樹種同定を株式会社加速器分析研究所、平成27・28年度調査の放射性炭素年代測定、樹種同定、珪藻分析及び植物珪酸体分析を株式会社古環境研究所に委託した。第7章の執筆は自然科学分析の各委託先によるものであるが、著作権は本センターに帰属する。

10 現地調査及び報告書作成にあたって、下記の方々、機関から様々な御指導、御助言を賜った。記して感謝申し上げます(敬称略、順不同)。

浅川滋男、加藤裕一、永井久美男、高田和徳、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、鳥取県土整備部鳥取県土整備事務所、鳥取市教育委員会、下坂本地区自治会、瑞穂地区公民館

凡 例

- 1 本書で記載された測量成果は、世界測地系に基づいている。図中のX・Y座標は国土座標系V系によるものであり、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を示し、磁北は座標軸に対し7°30′西偏する。
- 2 本書で示す標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、本文中ではT.P.を省略している。
- 3 本書で使用した地図は、国土地理院発行地形図「鹿野」「浜村」（1/25,000、1/200,000）、鳥取市作成の「鳥取市都市計画図」（1/5,000）を縮小、加筆して使用したものである。
- 4 本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』2007年版に基づき、土の色相、明度及び彩度を判定したものである。地層の粒度の記載は、地質学で標準的に用いられるWentworthの区分を使用した。同一地層内に粒度が幅をもって認められるときには、より主体を占める粒径を先にして「シルト～粗粒砂」「極粗粒砂～細粒砂」のように記載した。
- 5 遺構平面図や断面図の縮尺は統一していないが、挿図ごとにスケールバーと縮尺を示している。
- 6 遺物番号は算用数字を種別毎に付している。土器以外の遺物には、数字の先頭に、石器:S、木製品:W、金属製品:Mのアルファベットを付した。また、S088埋蔵銭については表4に基づき、銭種別に番号を付している。
- 7 遺物の実測図の縮尺は、土器を1/4、土製品1/2、石器1/2～1/6、石製品1/8、金属製品を1/1～1/3、銭貨1/1、木製品1/4～1/8で示した。各挿図のスケール表示を参照されたい。土器の断面は、須恵器を黒塗りとし、それ以外は白抜きで図示している。
- 8 遺構図や遺物実測図において、地山、炭化範囲、焼土、赤色顔料付着範囲は薄い網掛け（20%表示）で表現した。土器のケズリの方向（砂粒の動き）は→で示している。木製品の断面には木取りが分かるよう年輪を模式的に記載している。
- 9 遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値である。
- 10 遺物の注記における遺跡名は、平成26年度が「セイゴウ4区」「セイゴウ5区」「セイゴウ6-1～4区」、平成27年度が「セイゴウ7区」、平成28年度が「セイゴウ8区」の略語を用い、併せて埋蔵文化財センターの「土器注記の基準」に基づき、「遺構名、遺物番号、日付」を原則記入した。
- 11 本書における遺構・遺物の時期決定については下記の文献を参照した。

愛知県史編さん委員会2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』

大橋康二1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社

岡田裕之・土器検討グループ2010「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』

鳥根県古代文化センター

河合章行2009「第1節 弥生時代後期から古墳時代前期初頭の甕について」『青谷上寺地遺跡10』

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告27

木村孝一郎2008「越前焼の編年的研究ノート」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会

重根弘和2005「中世備前焼に関する考察－製作技法から－」『古文化談叢』第54集 九州古文化研究会

太宰府教育委員会2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

永井久美男2002『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院

中森祥 2006「鳥取県における中世後期土師器の展開」『調査研究紀要』1 鳥取県埋蔵文化財センター

八峠興2004「山陰の中世土器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究』XVⅢ 日本中世土器研究会

八峠興2013「鳥取城初蔵跡(第20次調査)から出土した土器・陶磁器について」『鳥取城調査研究年報』第6号 鳥取市教育委員会

牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ 園第6遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 61

目 次

第1分冊 本文編

序・例言・凡例

第1章 調査の経緯

- 第1節 調査に至る経緯…………… (小口) 1
- 第2節 調査の経過…………… (小口) 2
- 第3節 調査体制…………… (小口) 5

第2章 遺跡の位置と環境

- 第1節 地理的環境…………… (荒川・小口) 7
- 第2節 歴史的環境…………… (荒川・小口) 8

第3章 調査の方法

- 第1節 調査地の地区割…………… (小口) 16
- 第2節 発掘調査と記録の方法…………… (小口) 17

第4章 4～6区の調査成果

- 第1節 4・5区 立地と基本層序…………… (高橋・小口) 19
- 第2節 4区の調査成果…………… (高橋・小口) 19
- 第3節 5区の調査成果…………… (高橋・小口) 22
- 第4節 6-2・3区(平地部) 立地と基本層序…………… (高橋・荒川) 26
- 第5節 6-2・3区(平地部) 検出した遺構…………… (高橋・荒川・小口) 33
- 第6節 6-2・3区(平地部) 遺構に伴わない遺物…………… (小口) 40
- 第7節 6-1・4区(丘陵裾部) 立地と基本層序…………… (高橋・荒川) 46
- 第8節 6-1・4区(丘陵裾部) 検出した遺構…………… (小口) 53
- 第9節 6-1・4区(丘陵裾部) 遺構に伴わない遺物…………… (小口)129

第5章 7区の調査成果

- 第1節 7区 立地と基本層序…………… (加藤・荒川)153
- 第2節 7区 検出した遺構…………… (加藤・荒川・小口)164
- 第3節 7区 遺構に伴わない出土遺物…………… (小口)256
- 第4節 7区 下坂本清合遺跡埋蔵銭の内容…………… (加藤)262

第6章 8区の調査成果

- 第1節 8区 立地と基本層序…………… (小口)293
- 第2節 8区 検出した遺構…………… (小口)303
- 第3節 8区 遺構に伴わない遺物…………… (小口)416
- 遺物観察表・ピット一覧表…………… 446

第7章 自然科学分析

- 第1節 6区出土遺物放射性炭素年代測定…………… 499

第2節	6区SI1出土炭化材の樹種同定	505
第3節	8区植物珪酸体分析	515
第4節	8区珪藻分析	520
第5節	7・8区出土遺物放射性炭素年代測定	526
第6節	8区出土木材樹種同定	534
第8章 総括		
第1節	下坂本清合遺跡における地すべり地と丘陵斜面地の土地利用	(荒川)543
第2節	下坂本清合遺跡出土埋蔵銭の評価	(加藤)549
第3節	焼失住居SI1の構造復元	(高橋)571
第4節	下坂本清合遺跡の変遷	(小口)589
報告書抄録		

挿図目次

第1図	鳥取西道路路線図と調査地の位置	1	第25図	畦畔5・畦畔5-P1平面・断面図	42
第2図	遺跡位置図	7	第26図	6区平地部第5遺構面遺構配置図	43
第3図	周辺遺跡分布図	10	第27図	6区平地部北部第Ⅱ～Ⅳ層出土遺物	44
第4図	調査地の地区割	18	第28図	6区平地部南部第Ⅱ～Ⅶ層出土遺物	45
第5図	4区土層断面図	20	第29図	6区丘陵裾部北部南壁土層断面図	47
第6図	4区第1遺構面遺構配置図	21	第30図	6区丘陵裾部北部ベルト土層断面図 (1)	48
第7図	4区第2遺構面遺構配置図	22	第31図	6区丘陵裾部北部ベルト土層断面図 (2)	49
第8図	4区第3遺構面遺構配置図及び第Ⅳ層 出土遺物	23	第32図	6区丘陵裾部南部南壁土層断面図(1)	50
第9図	5区土層断面図	24	第33図	6区丘陵裾部南部南壁土層断面図(2)	51
第10図	5区第1遺構面遺構配置図	25	第34図	6区丘陵裾部第1遺構面遺構配置図	52
第11図	5区第2遺構面遺構配置図	26	第35図	SB1平面・断面図	54
第12図	5区第3遺構面遺構配置図及び5区出 土遺物	27	第36図	SS3・SE1平面図及びSS3出土遺物	55
第13図	6区平地部基本層序・遺構検出対照図	28	第37図	SS3断面図	56
第14図	6区平地部北部西壁土層断面図	29	第38図	SE1平面・断面図	57
第15図	6区平地部北部東壁土層断面図	30	第39図	SE1出土遺物(1)	58
第16図	6区平地部南部東・南壁土層断面図	31	第40図	SE1出土遺物(2)	59
第17図	6区平地部南部西壁土層断面図	32	第41図	SD6平面・断面図	60
第18図	6区平地部第1遺構面遺構配置図	34	第42図	6区丘陵裾部第2遺構面遺構配置図	61
第19図	畦畔1平面・断面図(6区平地部北部)	35	第43図	SS1断面図及び出土遺物	63
第20図	畦畔1平面・断面図(6区平地部南部)	36	第44図	SB2平面・断面図	64
第21図	6区平地部第2遺構面遺構配置図	38	第45図	SB3平面・断面図及び出土遺物	65
第22図	畦畔2・3・4平面・断面図	39	第46図	SB4平面・断面図及び出土遺物	66
第23図	6区平地部第3遺構面遺構配置図	40	第47図	SD5出土遺物	67
第24図	6区平地部第4遺構面遺構配置図	41	第48図	SD5上層平面図	68
			第49図	SD5下層平面図・断面図(1)	69

第50図	SD 5 断面図 (2)	70	第89図	SB 8 平面・断面図	114
第51図	SX 1 平面・断面図	71	第90図	SB 9 平面・断面図	115
第52図	SX 1 出土遺物	72	第91図	SB 5 平面・断面図及び出土遺物 (1)	116
第53図	SK12・13、SD 7 平面・断面図	73	第92図	SB 5 出土遺物 (2)	117
第54図	焼土 1 平面・断面図	74	第93図	SD11 平面・断面図	118
第55図	第 2 遺構面ピット平面・断面図及び出土遺物	74	第94図	SD11 出土遺物	119
第56図	6 区丘陵裾部第 3 遺構面遺構配置図	76	第95図	SD17、SK17・18、P345・381・403・404・462 平面・断面図及び SK18 出土遺物	120
第57図	SI 1 炭化物・焼土出土状況	78	第96図	SD20・21 平面・断面図	121
第58図	SI 1 床面 1 cm 等高線及び最終面・焼土 3 平面・断面図	79 ~ 80	第97図	SD19、SK19・21、P424・464 平面・断面図及び SK19・21 出土遺物	122
第59図	SI 1 ベルト及び中央ピット断面図	81	第98図	杭 4 ~ 6 出土遺物	123
第60図	SI 1-P 1・3 ~ 7・102・103 断面図	82	第99図	P138 ~ 140、杭 7 平面・断面図	123
第61図	SI 1 周堤溝・垂木・SK14 断面図	83	第100図	第 4 遺構面ピット平面・断面図及び出土遺物 (1)	124
第62図	SI 1 周辺ベルト断面図	84	第101図	第 4 遺構面ピット出土遺物 (2)	125
第63図	SI 1 出土遺物 (1)	85	第102図	第 5 遺構面ピット平面・断面図 (1)	126
第64図	SI 1 出土遺物 (2)	86	第103図	第 5 遺構面ピット平面・断面図 (2) 及び出土遺物 (1)	127
第65図	SI 1-SK 2・P 2 出土遺物	86	第104図	第 5 遺構面ピット出土遺物 (2)	128
第66図	SI 2 出土遺物	87	第105図	6 区丘陵裾部第 I 層出土遺物 (1)	130
第67図	SI 2 平面・断面図	88	第106図	6 区丘陵裾部第 I 層出土遺物 (2)	131
第68図	SI 3 平面・断面図及び出土遺物	89	第107図	6 区丘陵裾部第 I 層出土遺物 (3)	132
第69図	SI 4・焼土 2 平面・断面図	90	第108図	6 区丘陵裾部第 II・III・IV-1 層出土遺物	133
第70図	SS 2・SD 8 平面図及び SS 2-P 1 平面・断面図・SD 8 出土遺物	92	第109図	6 区丘陵裾部第 IV-2 層出土遺物 (1)	133
第71図	SS 2・SD 8 断面図	93	第110図	6 区丘陵裾部第 IV-2 層出土遺物 (2)	134
第72図	SS 2 出土遺物	94	第111図	6 区丘陵裾部第 IV-3 層出土遺物 (1)	136
第73図	SD10 平面・断面図及び出土遺物	95	第112図	6 区丘陵裾部第 IV-3 層出土遺物 (2)	137
第74図	SD 9 平面・断面図	95	第113図	6 区丘陵裾部第 IV-3 層出土遺物 (3)	138
第75図	杭列 1 平面・断面図及び出土遺物 (1)	96	第114図	6 区丘陵裾部第 IV-3 層出土遺物 (4)	139
第76図	杭列 1 出土遺物 (2)	97	第115図	6 区丘陵裾部第 IV-2・3 層出土遺物 (1)	140
第77図	第 3 遺構面ピット平面・断面図及び出土遺物	98	第116図	6 区丘陵裾部第 IV-2・3 層出土遺物 (2)	141
第78図	6 区丘陵裾部第 4 遺構面遺構配置図	100	第117図	6 区丘陵裾部第 IV-2・3 層出土遺物 (3)	142
第79図	SS 4 及び第 4 遺構面ピット配置図 101 ~ 102	101 ~ 102	第118図	6 区丘陵裾部第 IV-4 層出土遺物 (1)	144
第80図	6 区丘陵裾部第 5 遺構面遺構配置図	103	第119図	6 区丘陵裾部第 IV-4 層出土遺物 (2)	145
第81図	SS 4・5・7・8、SD13 断面図	104	第120図	6 区丘陵裾部第 IV-4 層出土遺物 (3)	146
第82図	SS 5・7 及び第 5 遺構面ピット配置図、SS 5 出土遺物	105 ~ 106	第121図	6 区丘陵裾部第 IV-4 層出土遺物 (4)	147
第83図	SS 4 出土遺物 (1)	107	第122図	6 区丘陵裾部第 IV-5 層出土遺物 (1)	148
第84図	SS 4 出土遺物 (2)	108	第123図	6 区丘陵裾部第 IV-5 層出土遺物 (2)	149
第85図	SS 8・SD13 平面図	109			
第86図	SB 6 平面・断面図	111			
第87図	SB 6-P 2 出土遺物	112			
第88図	SB 7 平面・断面図	113			

第124図	6区丘陵裾部第Ⅳ-5層出土遺物(3)	150	第158図	S178段状遺構平面・断面図	192
第125図	6区丘陵裾部第Ⅳ-5層出土遺物(4)	151	第159図	S178段状遺構掘方平面・断面図	193
第126図	6区丘陵裾部層位不明・攪乱出土遺物	152	第160図	S178段状遺構出土遺物	194
第127図	7区調査前地形測量図	153	第161図	S188段状遺構平面・断面図	195
第128図	7区中央部東西トレンチ断面図155～156	156	第162図	S145地下式坑平面・断面図	196
第129図	7区中央部東西トレンチ北壁断面図	157	第163図	S189段状遺構平面・断面図	197
第130図	7区東西トレンチ断面図(1)	158	第164図	S075地下式坑平面・断面図	199～200
第131図	7区東西トレンチ断面図(2)	159～160	第165図	S098・147地下式坑平面図	202
第132図	7区東西トレンチ断面図(3)	161～162	第166図	S098・147地下式坑断面図	203
第133図	7区南東部壁土層断面図	163	第167図	S135地下式坑平面図	204
第134図	7区第1遺構面遺構配置図	165～166	第168図	S135地下式坑断面図	205
第135図	S104道路遺構平面図(第1～3段階)	167	第169図	S137地下式坑平面・断面図	206
第136図	S104道路遺構断面図及び出土遺物	168	第170図	S138地下式坑平面・断面図	207
第137図	S095道路遺構路面平面・断面図	169	第171図	S153地下式坑平面・断面図	208
第138図	S095道路遺構掘方平面図	170	第172図	S149竪穴状遺構平面・断面図	209
第139図	S006段状遺構平面・断面図及び出土遺物	172	第173図	S002袋状土坑平面・断面図	211
第140図	S008段状遺構平面・断面図及び出土遺物	173	第174図	S002袋状土坑出土遺物	212
第141図	S013段状遺構平面・断面図	173	第175図	S107・198袋状土坑平面・断面図及び出土遺物	213
第142図	S092段状遺構・S091溝平面・断面図	174	第176図	S105・061土壙墓平面・断面図及びS105土壙墓出土遺物	214
第143図	S091溝出土遺物	175	第177図	S109・180土壙墓平面・断面図	216
第144図	S100段状遺構平面図	176	第178図	S009・011土坑平面・断面図	217
第145図	S100段状遺構掘方平面図	177	第179図	S060土坑平面・断面図	217
第146図	S100段状遺構断面図(1)	178	第180図	S076土坑平面・断面図	218
第147図	S100段状遺構断面図(2)	179	第181図	S089土坑平面・断面図	218
第148図	S100段状遺構に伴う遺構平面・断面図(1)	181	第182図	S102土坑平面・断面図	219
第149図	S100段状遺構に伴う遺構平面・断面図(2)	183	第183図	S106土坑平面・断面図	220
第150図	S100段状遺構に伴う遺構平面・断面図(3)及び出土遺物	184	第184図	S126土坑平面・断面図	220
第151図	S100段状遺構に伴う遺構平面・断面図(4)	185	第185図	S136・148土坑平面・断面図	221
第152図	S100段状遺構に伴う遺構平面・断面図(5)	186	第186図	S125土坑平面・断面図	221
第153図	S110段状遺構平面・断面図	187	第187図	S125土坑出土銭貨拓影及び計測表	222
第154図	S120段状遺構平面・断面図	188	第188図	S150・156土坑平面・断面図及び出土遺物	224
第155図	S161段状遺構平面・断面図	189	第189図	S155土坑平面図	225
第156図	S161段状遺構に伴う遺構平面・断面図(1)	190	第190図	S155土坑断面図	226
第157図	S161段状遺構に伴う遺構平面・断面図(2)	191	第191図	S158土坑平面・断面図	227
			第192図	S159土坑平面・断面図	227
			第193図	S160土坑平面・断面図	227
			第194図	S177土坑平面・断面図	229
			第195図	S183・210土坑平面・断面図	230
			第196図	S201土坑平面・断面図	230
			第197図	S090溝平面・断面図	231
			第198図	S094溝平面・断面図	231

第199図	7区東端部溝・ピット群平面図及び 溝断面図 ……………	232	第229図	錢種分類における上・下層 ……………	263
第200図	7区東端部ピット群断面図 ……………	233	第230図	錢貨の各部測点 ……………	263
第201図	S119・146・185～187・191・192 ピット平面・断面図 ……………	234	第231図	王朝別錢貨枚数の比率 ……………	265
第202図	S001・004・005・007・050～054 ピット平面・断面図 ……………	235	第232図	王朝別錢貨枚数の比率(明錢を除く) ……………	265
第203図	S051・071・124・127～131ピット 平面・断面図 ……………	236	第233図	代表錢拓影及び計測表(1) ……………	266
第204図	S088ピット(埋藏錢)平面・断面図 ……………	238	第234図	代表錢拓影及び計測表(2) ……………	268
第205図	S088ピット(埋藏錢)出土遺物 ……………	239	第235図	代表錢拓影及び計測表(3) ……………	270
第206図	7区第2遺構面遺構配置図 ……………	240	第236図	代表錢拓影及び計測表(4) ……………	272
第207図	S012段状遺構平面・断面図及び出 土遺物 ……………	241	第237図	代表錢拓影及び計測表(5) ……………	274
第208図	S020～022・025・056・059・132 ピット平面・断面図 ……………	242	第238図	代表錢拓影及び計測表(6) ……………	276
第209図	S016～019・026・027・055・057 ピット平面・断面図 ……………	243	第239図	代表錢拓影及び計測表(7) ……………	278
第210図	S023・024・028・058ピット平面・ 断面図 ……………	244	第240図	代表錢拓影及び計測表(8) ……………	280
第211図	7区第3遺構面遺構配置図 ……………	245	第241図	代表錢拓影及び計測表(9) ……………	282
第212図	S063段状遺構平面・断面図及び出 土遺物 ……………	246	第242図	代表錢拓影及び計測表(10) ……………	284
第213図	S049土坑平面・断面図 ……………	247	第243図	代表錢拓影及び計測表(11) ……………	286
第214図	S029・041溝平面・断面図 ……………	248	第244図	代表錢拓影及び計測表(12) ……………	288
第215図	S039・044～047ピット平面・断 面図 ……………	249	第245図	代表錢拓影及び計測表(13) ……………	290
第216図	S030～036ピット平面・断面図 ……………	250	第246図	8区調査前地形測量図 ……………	293
第217図	S037・038・040・042・043・ 048・062・066ピット平面・断面図 ……………	251	第247図	8区トレンチ配置図及び土層断面 記録位置 ……………	294
第218図	S068～070・073・074・077・ 078・080ピット平面・断面図 ……………	252	第248図	8区トレンチ5土層断面図 ……………	295
第219図	7区第4遺構面遺構配置図 ……………	253	第249図	8区北壁土層断面図(1) ……………	296
第220図	S079土坑・S081溝平面図 ……………	254	第250図	8区北壁土層断面図(2) ……………	298
第221図	S079土坑・S081溝断面図及びS081 溝出土遺物 ……………	255	第251図	8区北壁土層断面図(3) ……………	299
第222図	S082土坑平面・断面図 ……………	256	第252図	8区南壁土層断面図(1) ……………	301
第223図	S083～087・099ピット平面・断 面図 ……………	257	第253図	8区南壁土層断面図(2) ……………	302
第224図	7区第I・II層出土遺物 ……………	258	第254図	8区丘陵斜面部南壁土層断面図 ……………	304
第225図	7区第III層出土遺物 ……………	259	第255図	8区トレンチ11土層断面図 ……………	305
第226図	7区第IV層出土遺物 ……………	260	第256図	8区第1遺構面遺構配置図 ……………	307
第227図	7区第V層出土遺物 ……………	261	第257図	8区第1遺構面遺構集中部 ……………	308
第228図	鳥取県内出土の埋藏錢分布 ……………	262	第258図	S228自然流路、S224・225・ 227・229・243畦畔、S246～248 ピット平面図 ……………	309
			第259図	S228自然流路、S224・225・ 227・229・243畦畔、S246～248 ピット断面図 ……………	310
			第260図	S228自然流路(1)、S224・225水田、 S227・243畦畔出土遺物 ……………	311
			第261図	S228自然流路出土遺物(2) ……………	312
			第262図	S244・245・306溝平面・断面図 ……………	314
			第263図	S244・306溝出土遺物 ……………	315
			第264図	S412・419溝、S413・418・524ピッ ト平面・断面図 ……………	316
			第265図	S349・350・406溝平面・断面図 ……………	317

第266図	S349・350溝出土遺物	318	断面図	356	
第267図	S354杭列平面・断面図	319～320	第292図	S305自然流路平面・断面図	357
第268図	S354杭列出土遺物	321	第293図	S257・259・262・263・272・275・ 276・281土坑、S273・274・278 ピット平面・断面図	359
第269図	S531杭平面・断面図及び出土遺物	322	第294図	S262土坑出土遺物	360
第270図	S311・345・346・348土坑平面・ 断面図及びS348土坑出土遺物	323	第295図	S284・292・297柱穴平面・断面図	361
第271図	S356土坑平面・断面図	324	第296図	S254ピット平面・断面図及び出土 遺物	361
第272図	S371・385・407・425土坑、S404 柱穴、S384・405・424ピット平面・ 断面図及びS371土坑出土遺物	325	第297図	8区第1-3遺構面遺構配置図	362
第273図	S427～429・466・581土坑、S414 柱穴、S420ピット平面・断面図	327	第298図	S315溝遺物出土状況図	363～364
第274図	S432・435・467・480土坑平面・ 断面図	330	第299図	S315溝平面・断面図	365
第275図	S484・486・496・497土坑、 S514・552ピット平面・断面図	331	第300図	S315溝出土遺物	366
第276図	S517・522・546・567土坑平面・ 断面図及びS546土坑出土遺物	332	第301図	S533杭列出土遺物(1)	367
第277図	S591・592・698土坑、S733ピット 平面・断面図及びS591土坑出土遺物	334	第302図	S533杭列平面・見通図	369～370
第278図	S301・309・364・369・370・ 375・386柱穴平面・断面図	335	第303図	S533杭列立面図(1)	371
第279図	S382・397・402柱穴、S380・381・ 395・396ピット平面・断面図	337	第304図	S533杭列立面図(2)	372
第280図	S410・417・426柱穴、S408・409・ 411・416・436ピット平面・断面図	339	第305図	S533杭列出土遺物(2)	373
第281図	S438・439・447・478・482柱穴、 S477・479ピット平面・断面図	341	第306図	S533杭列出土遺物(3)	374
第282図	S483・488・507・508・511・519 柱穴平面・断面図	343	第307図	S727溝平面・断面図	375
第283図	S525・528・548・556・563柱穴、 S584～586・589・590ピット平面・ 断面図	345	第308図	S727溝出土遺物(1)	376
第284図	S569・571～573・577・579・583 柱穴、S570・578ピット平面・断面図	347	第309図	S727溝出土遺物(2)	377
第285図	S594・714～716・728～732柱穴 平面・断面図	348	第310図	S727溝出土遺物(3)	378
第286図	第1遺構面柱穴出土遺物	349	第311図	8区第2遺構面遺構配置図	380
第287図	S230・367・437・506・574・617・ 696ピット平面・断面図	351	第312図	S290・300溝、S312ピット平面・ 断面図及び出土遺物	381
第288図	第1遺構面ピット出土遺物	352	第313図	S220・232・233・239土坑平面・ 断面図及びS220・232土坑出土遺物	382
第289図	8区第1-2遺構面遺構配置図	354	第314図	S271・277・282・288土坑平面・ 断面図及びS277土坑出土遺物	384
第290図	S307段状遺構平面・断面図	355	第315図	S287柱穴平面・断面図	385
第291図	S249・286溝、S285土坑平面・ 断面図	356	第316図	8区第3遺構面遺構配置図	386
			第317図	S314・331・332・334・339土坑 平面・断面図及びS339土坑出土遺物	388
			第318図	S316柱穴平面・断面図及び出土遺物	389
			第319図	8区第4遺構面遺構配置図	390
			第320図	S473溝・S474ピット平面・断面図	391
			第321図	S475杭列平面・断面図	391
			第322図	S216土坑平面・断面図	392
			第323図	S216土坑遺物出土状況図	393
			第324図	S216土坑出土遺物(1)	394
			第325図	S216土坑出土遺物(2)	395
			第326図	S502・535・544土坑平面・断面図	396
			第327図	S543土坑平面・断面図	397

第328図	S443・460・470・523・633柱穴平面・断面図及びS523・633柱穴出土遺物	398	第357図	8区第IV-2層出土遺物	431
第329図	S355炭化物集中部平面・断面図及び出土遺物	399	第358図	8区第IV～V層出土遺物	432
第330図	8区第5遺構面遺構配置図	401	第359図	8区第V層出土遺物(1)	434
第331図	S750掘立柱建物平面・断面図	402	第360図	8区第V層出土遺物(2)	435
第332図	S750掘立柱建物出土遺物	403	第361図	8区第V層出土遺物(3)	436
第333図	S600溝・S606土坑平面・断面図	404	第362図	8区第V層出土遺物(4)	437
第334図	S624・626・627溝平面・断面図及びS626溝出土遺物	405	第363図	8区第V層出土遺物(5)	438
第335図	S600溝・S606土坑出土遺物	406	第364図	8区第V層出土遺物(6)	439
第336図	S630・650・657・665溝平面・断面図及びS630・650溝出土遺物	407	第365図	8区第V層出土遺物(7)	441
第337図	S625・629・631・637土坑平面・断面図及びS629土坑出土遺物	409	第366図	8区第V層出土遺物(8)	442
第338図	S645・649・658・672土坑平面・断面図	410	第367図	8区第V層出土遺物(9)	443
第339図	S596・608・620・647・651・668・678・709柱穴平面・断面図	412	第368図	8区斜面流土出土遺物	444
第340図	S596・620・651・668・709柱穴出土遺物	413	第369図	8区層不明・廃土出土遺物	444
第341図	S694柱穴平面・断面図及び出土遺物	414	第370図	8区攪乱出土遺物	445
第342図	S613・641ピット平面・断面図及び出土遺物	414	第371図	6区出土遺物暦年較正年代グラフ(1)	503
第343図	S717杭平面・断面図及び出土遺物	415	第372図	6区出土遺物暦年較正年代グラフ(2)	504
第344図	8区第I層出土遺物	416	第373図	8区植物珪酸体分析結果	517
第345図	8区第II-1層出土遺物(1)	417	第374図	8区珪藻ダイアグラム	524
第346図	8区第II-1層出土遺物(2)	418	第375図	7・8区出土遺物暦年較正結果(1)	531
第347図	8区第II-2層出土遺物(1)	420	第376図	7・8区出土遺物暦年較正結果(2)	532
第348図	8区第II-2層出土遺物(2)	421	第377図	7・8区出土遺物暦年較正結果(3)	533
第349図	8区第III・III-1～3層出土遺物	422	第378図	7区第3遺構面等高線図及び弥生時代遺構配置図	545
第350図	8区第III-4層出土遺物(1)	423	第379図	谷状の凹地断面図	547
第351図	8区第III-4層出土遺物(2)	424	第380図	空間分節の推定	572
第352図	8区第II～III層出土遺物	426	第381図	構造材の識別	574
第353図	8区第III～IV層出土遺物	427	第382図	葺材分類と構造材の配置	577
第354図	8区第IV-1層出土遺物(1)	428	第383図	SI 1復元平面図	580
第355図	8区第IV-1層出土遺物(2)	429	第384図	小屋組平面図	584
第356図	8区第IV-1層出土遺物(3)	431	第385図	小屋組(南から)	584
			第386図	外観(南から)	585
			第387図	外観(北から)	585
			第388図	内部(入口から)	586
			第389図	主要遺構変遷図	590
			第390図	耕地段差模式図	591

挿表目次

表1	鳥取県内出土埋蔵銭一覧	262	表43	土器観察表(30)	481
表2	S088埋蔵銭出土銭貨一覧	264	表44	土器観察表(31)	482
表3	王朝・国別銭種及び枚数	265	表45	土器観察表(32)	483
表4	銭種別枚数及び順位	265	表46	土器観察表(33)	484
表5	最新銭による時期区分	292	表47	土器観察表(34)	485
表6	ピット一覧表(1)	446	表48	土器観察表(35)	486
表7	ピット一覧表(2)	447	表49	土器観察表(36)	487
表8	ピット一覧表(3)	448	表50	土器観察表(37)	488
表9	ピット一覧表(4)	448	表51	土器観察表(38)	489
表10	ピット一覧表(5)	449	表52	土器観察表(39)	490
表11	ピット一覧表(6)	449	表53	土器観察表(40)	491
表12	ピット一覧表(7)	450	表54	土製品観察表	492
表13	ピット一覧表(8)	451	表55	石器観察表(1)	493
表14	土器観察表(1)	452	表56	石器観察表(2)	494
表15	土器観察表(2)	453	表57	金属器観察表	494
表16	土器観察表(3)	454	表58	ガラス製品観察表	494
表17	土器観察表(4)	455	表59	銭貨観察表	495
表18	土器観察表(5)	456	表60	木器観察表(1)	496
表19	土器観察表(6)	457	表61	木器観察表(2)	497
表20	土器観察表(7)	458	表62	木器観察表(3)	498
表21	土器観察表(8)	459	表63	分析試料一覧	499
表22	土器観察表(9)	460	表64	6区出土遺物AMS暦年代値一覧(1)	502
表23	土器観察表(10)	461	表65	6区出土遺物AMS暦年代値一覧(2)	502
表24	土器観察表(11)	462	表66	6区出土木材樹種同定結果	506
表25	土器観察表(12)	463	表67	8区植物珪酸体分析結果	516
表26	土器観察表(13)	464	表68	8区珪藻産出表	523
表27	土器観察表(14)	465	表69	7・8区測定試料及び処理	529
表28	土器観察表(15)	466	表70	7・8区測定結果	530
表29	土器観察表(16)	467	表71	8区出土木材試料一覧	535
表30	土器観察表(17)	468	表72	8区出土木材樹種同定結果	535
表31	土器観察表(18)	469	表73	主要な撰銭令の概要	550
表32	土器観察表(19)	470	表74	埋蔵銭事例における銭種別枚数上位 一覧(1)	553
表33	土器観察表(20)	471	表75	埋蔵銭事例における銭種別枚数上位 一覧(2)	555
表34	土器観察表(21)	472	表76	埋蔵銭事例における銭種別枚数上位 一覧(3)	556
表35	土器観察表(22)	473	表77	埋蔵銭事例における銭種別枚数上位 一覧(4)	557
表36	土器観察表(23)	474	表78	精銭主体の埋蔵銭における明銭の内訳	559
表37	土器観察表(24)	475	表79	王朝別組成比率(全体：抜粋)	561
表38	土器観察表(25)	476	表80	王朝別組成比率(明銭等を除く)	561
表39	土器観察表(26)	477			
表40	土器観察表(27)	478			
表41	土器観察表(28)	479			
表42	土器観察表(29)	480			

巻頭写真一覧

- | | |
|-------------------------|-------------|
| 1 調査地遠景(7区 東上空より) | 1 埋蔵銭と容器・蓋石 |
| 2 6区SII焼失住居炭化材検出状況(東から) | 2 埋蔵銭 |

文中写真一覧

写真1 現地説明会(平成26年度)…………… 6	写真27 6区SII出土炭化材顕微鏡写真(3) …… 510
写真2 瑞穂地区文化祭展示(平成26年度)…… 6	写真28 6区SII出土炭化材顕微鏡写真(4) …… 511
写真3 現地説明会(平成27年度)…………… 6	写真29 6区SII出土炭化材顕微鏡写真(5) …… 512
写真4 現地説明会(平成27年度)…………… 6	写真30 6区SII出土炭化材顕微鏡写真(6) …… 513
写真5 SX1礫出土状況 ……………… 71	写真31 6区SII出土炭化材顕微鏡写真(7) …… 514
写真6 SI1炭化材出土状況…………… 78	写真32 8区植物珪酸体(プラント・オパール) 519
写真7 S125土坑出土銭貨写真及び計測表 …… 223	写真33 8区珪藻…………… 525
写真8 埋蔵銭検出状況(東から)…………… 237	写真34 8区出土木材顕微鏡写真(1)…………… 538
写真9 埋蔵銭掘削後状況(俯瞰：上が西)…… 237	写真35 8区出土木材顕微鏡写真(2)…………… 539
写真10 縉遺存状況…………… 239	写真36 8区出土木材顕微鏡写真(3)…………… 540
写真11 容器内における銭貨の状況…………… 239	写真37 8区出土木材顕微鏡写真(4)…………… 541
写真12 代表銭写真及び計測表(1)…………… 267	写真38 銭貨を綴じた状況…………… 565
写真13 代表銭写真及び計測表(2)…………… 269	写真39 タッパー収納状況…………… 565
写真14 代表銭写真及び計測表(3)…………… 271	写真40 西屋根垂木と葺材…………… 586
写真15 代表銭写真及び計測表(4)…………… 273	写真41 西屋根葺材…………… 586
写真16 代表銭写真及び計測表(5)…………… 275	写真42 東屋根垂木と葺材…………… 587
写真17 代表銭写真及び計測表(6)…………… 277	写真43 東屋根葺材…………… 587
写真18 代表銭写真及び計測表(7)…………… 279	写真44 東屋根葺材細部…………… 587
写真19 代表銭写真及び計測表(8)…………… 281	写真45 西屋根と屋根土…………… 587
写真20 代表銭写真及び計測表(9)…………… 283	写真46 東屋根補修状況…………… 587
写真21 代表銭写真及び計測表(10)…………… 285	写真47 西屋根上部屋根飾り部分…………… 587
写真22 代表銭写真及び計測表(11)…………… 287	写真48 北屋根綿状葺材…………… 588
写真23 代表銭写真及び計測表(12)…………… 289	写真49 綿状葺材と格子下地…………… 588
写真24 代表銭写真及び計測表(13)…………… 291	写真50 西壁内装…………… 588
写真25 6区SII出土炭化材顕微鏡写真(1) …… 508	写真51 西壁内装細部…………… 588
写真26 6区SII出土炭化材顕微鏡写真(2) …… 509	

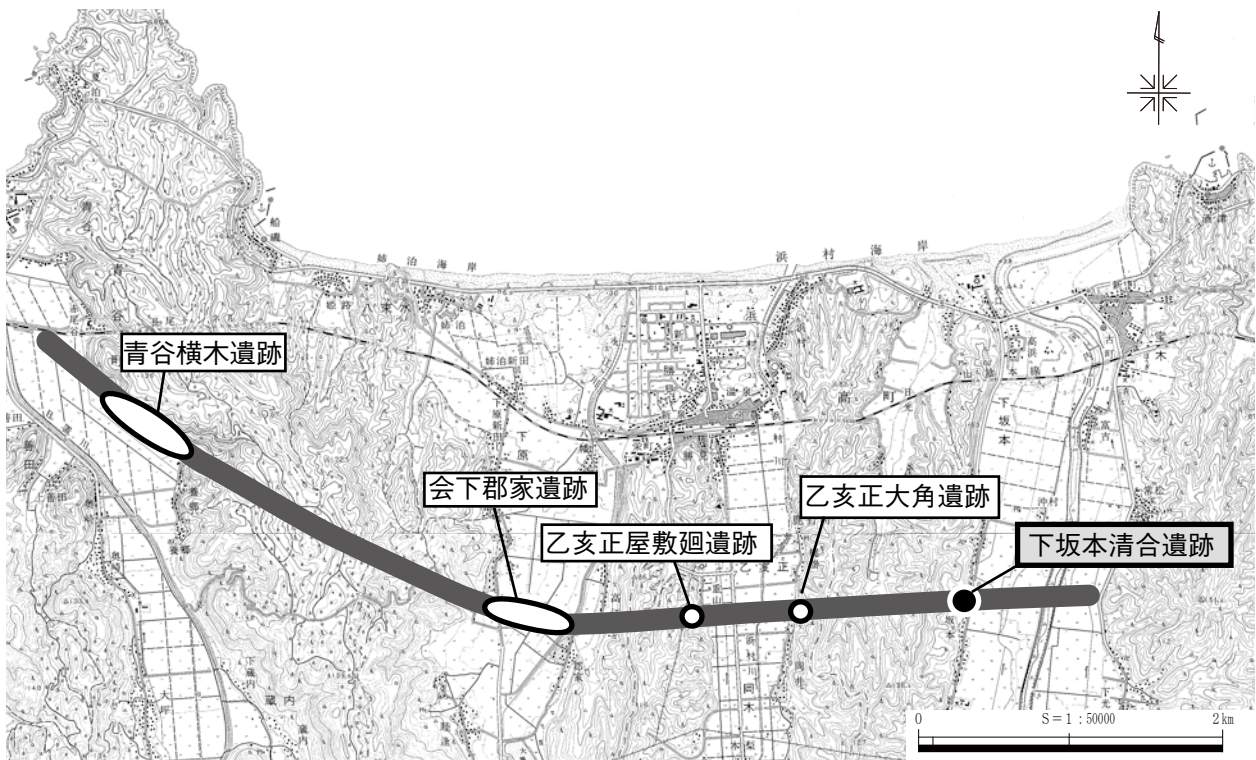
第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

山陰地方では、観光や物流などの地域活性化をめざした幹線道路ネットワークの形成、交通渋滞の解消と緩和、災害時の緊急輸送路の確保を目的として、国土交通省により中国横断自動車道姫路鳥取線や山陰自動車道等の国土開発幹線道路の整備が進められている。このうち、山陰自動車道は鳥取県鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする延長約380kmの自動車専用道路である。その一部となる鳥取西道路は、鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長19.3kmの区間で、鳥取インターチェンジで鳥取自動車道（中国横断自動車道姫路鳥取線）に、青谷インターチェンジで国道9号「青谷・羽合道路」に接続し高速道路ネットワークの一翼を担う。

鳥取西道路の事業計画地内には周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く存在している。そのため道路建設工事に先立って国土交通省、鳥取県、鳥取市により埋蔵文化財の取扱いについて協議が持たれ、まず、計画地内に存在する埋蔵文化財包蔵地の状況を把握する必要性が確認された。これを受け、平成17年度から計画地内の踏査による分布調査や鳥取市教育委員会による試掘確認調査が逐次進められ、調査結果に基づき道路事業と埋蔵文化財保護との調整が図られている。

下坂本清合遺跡は遺跡の範囲や内容を確認するため、平成25・26年度に鳥取市教育委員会が文化庁の国庫補助と県費補助を受けて試掘調査を行った⁽¹⁾。その結果、道路橋脚及びトンネル坑口部分となる計5,154㎡を対象として記録保存のための発掘調査が行われることになり、文化財保護法第94条による手続きを経た後、調査対象のうち平成26年度に2,703㎡（4区140㎡、5区140㎡、6区2,423㎡）、平成27年度に1,260㎡（7区）、平成28年度に1,191㎡（8区）の発掘調査を鳥取県埋蔵文化財センター



第1図 鳥取西道路路線図と調査地の位置

第1章 調査の経緯

が国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託を受けて実施した。発掘調査にあたり、現地での発掘作業、調査記録作業等については、平成26年度が株式会社イビソク・株式会社ティー・エム・エス共同企業体、平成27年度が株式会社シン技術コンサル、平成28年度が株式会社アコードに埋蔵文化財発掘調査支援業務として委託した。

なお、これとは別に鳥取県教育委員会が国土交通省の委託を受けて、道路盛土部分（第Ⅱ工区、1区から3区）となる約24,000㎡を対象として、記録保存のための発掘調査を公益財団法人鳥取県教育文化財団に再委託して実施した⁽²⁾⁽³⁾。

【註】

- (1) 鳥取市教育委員会2013『平成二十四（2012）年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』
- (2) 鳥取県教育委員会2016『下坂本清合遺跡Ⅰ』一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXⅠ
- (3) 鳥取県教育委員会2017『下坂本清合遺跡Ⅱ』一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXⅡ

第2節 調査の経過

平成26年度調査

調査区は道路橋脚部分2箇所を東から4区、5区、トンネル坑口部分を6区とし実施した。このうち6区は、中心部を縦断する仮設の農業用水路を基点として西側の丘陵裾部と東側の平地部に分かれるが、調査の手順上、丘陵裾部と平地部をそれぞれ2分割して北西部から時計回りに6-1～4区とした（第3章第4図参照）。なお、6-3区は翌年度調査予定地であったが、事業計画の前倒しにより本年度着手となった。3月11日にラジコンヘリコプターによって調査前航空写真撮影を行っている。

4・5区は6月11日に基準点測量、調査前地形測量を行い、表土の重機掘削を開始、23日から人力掘削に着手した。調査区の堆積状況を観察するため側溝を調査区の四周に掘削し、両区で3面の遺構面を設定した。4区では第3遺構面から古代の流路の一部を、5区では第1遺構面で近世以降の水路等を検出している。8月20日に高所作業車による全景写真撮影を行った後、8月26日まで補足調査を実施して、両区の現地作業を終了した。

6区は4月17、18日に基準点測量、調査前地形測量を行い、22日から6-1区、30日から6-2区、7月7日から6-4区、11日から6-3区の順に重機による表土掘削を開始した。これに合わせ4月30日に6-1区を先行して人力掘削に着手した。鳥取市教育委員会の試掘調査結果を受け、第Ⅰ層から第Ⅴ層の基本層序を確認しながら、第Ⅱ層上面を第1遺構面として計5面の調査を行い、中世から弥生時代後期の遺構・遺物が数多く出土した。5月30日から弥生時代後期のSI 1焼失住居の調査に着手し、埋土上層で多数の土器、埋土下層で建築部材である炭化材等が良好に残存している状況が確認された。7月18日に炭化材出土状態を3D測量し、22日から25日まで剥ぎ取り作業を行った。その後、継続的に精査、記録を行い、11月26日にSI 1焼失住居を完掘した。6-1区は同月28日に調査を終了した。

6-2区は5月2日より人力掘削を開始し、第Ⅳ-1層上面を第1遺構面として計4面の調査を行い、中世の擬似畦畔等が確認された。7月2日に高所作業車による最終遺構面の全景写真撮影及び測量を行った後、他地区から搬出される廃土の置場として利用するため7月16日に先行して埋め戻しを実施・終了した。

6-3区は7月22日より人力掘削を開始し、第Ⅳ-1層上面を第1遺構面として計5面の調査を行い、中

世の畦畔等が確認された。10月29日に高所作業車による最終遺構面の全景写真撮影を行い、調査を終了した。

6-4区は7月15日より人力掘削を開始し、第Ⅱ層上面を第1遺構面として計5面の調査を行い、中世から弥生時代後期までの遺構及び遺物が数多く確認された。このなかで溝の底面に粘土を貼り、大型礫を組んだ奈良時代の祭祀跡であるSD5溝や、曲物を井戸枠として利用した鎌倉時代のSE1井戸などが検出された。6-1区と同じ11月28日に調査を終了した。

11月27日、ラジコンヘリコプターを利用して6-1・3・4区の最終遺構面の全景撮影を行った後、28日に補足調査を行い、全ての現地作業を終了した。

なお、良好な残存状態で出土した焼失住居が注目されるなか、8月7日に記者公開、地元住民を対象とした現地説明会を8月9日（参加者25名）および10月18日（参加者21名）、一般市民を対象とした現地説明会を9月6日（参加者108名）に開催した。また、11月9日の地元瑞穂地区公民館主催の文化祭において、下坂本清合遺跡の調査成果速報展・講演会を行い126名の参加者があった。

現地調査終了後は引き続き遺物整理作業を行い、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業は埋蔵文化財センターが直営で実施した。一方、現地で作成した図面整理、編集図作成、写真整理、遺物台帳等作成作業については、発掘調査支援業者によって行われ、平成27年1月30日に成果品として納品された。

平成27年度調査

前年度の鳥取市教育委員会による試掘調査のトレンチ名称に基づいて、平成27年度調査では便宜上3区画に分けて調査を行った（第5章第127図）。調査区の大半は斜面部になっており、斜面上方をTr15エリア、中腹をTr14エリア、下方及び平坦部をTr16エリアとした。基本的に斜面上方から下方、平坦部へと順次調査を行ったが、調査効率を上げるため斜面部のTr15及びTr14エリアの調査と、Tr16エリア北部の調査を並行して実施した。

4月2日に基準点・水準点測量、調査前地形測量、7日にラジコンヘリコプターによって調査前航空写真撮影を行い、13日に重機による表土掘削を開始した。16日より前年度行われた試掘調査トレンチを人力によって再掘削し、基本土層の確認及び記録を実施した。22日にはTr15エリア西部の表土掘削が終了、包含層上面の遺構検出作業を行った。5月11日にはTr15西部の第1遺構面の調査が終了し、13日から第2遺構面の包含層掘削、遺構検出を行い、19日に第2遺構面調査が終了、第3遺構面の調査を継続し、5月22日に完掘記録作業を実施した。

6月1日からTr15エリア東部、Tr14エリア西部の第2遺構面調査を開始し、段状遺構等の掘削を行った。記録後、第3遺構面の包含層掘削と遺構検出を開始した。10日に第3遺構面の調査が終了したが、調査時にトレンチ土層断面において第3遺構面下面に遺構が確認されたことから、第4遺構面として溝、ピット、大型礫を含む土坑などの調査を18日まで行った。その後、Tr14エリア東部の表土掘削中、22日に表土直下から壺に埋納された大量の銭貨が出土した。良好な状態で検出されたため、表土掘削を一時中断、23日にはS088埋蔵銭として記録作業を行い、速やかに埋蔵文化財センターへ搬入した。30日にTr14エリア東部の表土掘削が終了し、第1遺構面の遺構検出を開始した。

7月2日からTr14エリア東部の第1面遺構掘削を行い、S120段状遺構、S125土壇墓等が検出された。6日に第2遺構面の包含層掘削と遺構検出を行い、同日終了した。10日からTr16エリア中央部の表土掘削を開始し、13日にS075地下式坑やS110段状遺構、同エリア南部の調査区南壁際でS095～097道路遺構、同エリア北部で大型のS100段状遺構、その他多数の遺構が検出され、調査・記録を逐

第1章 調査の経緯

次行い9月15日に掘削作業を終了した。

9月16日、ラジコンヘリコプターを利用して調査後全景撮影を行い、現地作業は全て終了した。なお、埋蔵銭の出土が注目されるなか、現地調査終了後の9月18日に記者公開、一般市民を対象とした現地説明会を9月20日に開催した。現地説明会には163名の参加者を得た。このほか、平成28年1月16日に鳥取市気高町中央公民館で開催された平成27年度気高町歴史講座において、「下坂本清合遺跡の発掘調査成果について」と題して出前講演と出土遺物の解説を行った。

現地調査終了後は引き続き遺物整理作業を行い、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業は埋蔵文化財センターが平成29年度まで直営で実施した。一方、現地で作成した図面整理、編集図作成、写真整理、遺物台帳等作成作業については、発掘調査支援業者によって行われ、平成27年11月20日に成果品として納品された。

平成28年度調査

過年度の調査成果を踏まえ、地形の特徴を加味して便宜上3区画に分けて調査を行った。調査区は丘陵斜面部をエリア3(224㎡)、丘陵裾部をエリア2(767㎡)、平地部をエリア1(200㎡)とした(第6章第247図)。基本的に丘陵斜面部のエリア3の調査と、平地部・丘陵裾部のエリア1・2の調査を並行して実施した。

5月16・17日に基準点・水準点測量、調査前地形測量を行い、24日にエリア3から重機による表土掘削を開始した。26日にエリア3の表土掘削を終了し、エリア1・2の表土掘削に移行し、6月2日に完了した。6月6日から人力掘削を着手、調査区の堆積状況を観察するため調査区の北・南・東辺に側溝を掘削、エリア3は遺構面が1面、エリア2は攪乱・削平が著しく遺構面の残存が1面部分と5面部分に分かれ、エリア1は3面であることが確認された。このうち、エリア1は中近世に帰属する遺構面3面が確認されたため、第1・1-2・1-3面とし調査を進めた。

エリア1・2では6月7日から第Ⅱ層上面の第1遺構面の調査に着手、S225水田・S227擬似畦畔などの調査・記録を行い、27日に終了した。同日から第Ⅲ層上面の第2遺構面の包含層掘削・検出作業に着手、S220土坑やS244・245・306溝などが確認され、7月11日に調査を完了した。その後、第Ⅳ層上面の第3遺構面の包含層掘削・検出作業に着手、S535土坑やピットの掘削及び記録を行い、8月9日に調査を完了した。10日から第Ⅴ層上面の第4遺構面の包含層掘削と検出作業を開始し、土坑やピット群等数多くの遺構が確認された。なお、R22・S22グリッドの第Ⅵ層上面で検出されたピット群について第4遺構面として調査を進めたが、その後の整理作業を進める中で、これらのピット群は弥生時代から近世に至る遺構群であることが明らかとなり、本報告では第1遺構面として位置付けている。9月27日に第4遺構面の調査を終了した。この間、9月末までの現地調査の工期を天候不順等による遅延から、2週間延長する協議を委託業者と行っている。28日から第Ⅵ層上面の最終遺構面の包含層掘削・検出作業を開始し、溝、土坑、ピットの掘削及び記録を行い、10月11日に第5遺構面の調査を終了した。エリア3は急斜面であることから安全柵を設置した上で、安全ロープと安全帯を着用して調査にあたった。流土など厚い二次堆積土を除去しながら遺構検出を行い、土坑やピット等が確認された。その後、遺構の掘削及び記録を行い、9月14日に調査を終了した。

10月12日、ラジコンヘリコプターを利用して調査後全景撮影を行った後、13日に補足調査、土壌サンプルの採取を行い、全ての現地作業を完了した。

調査に並行して7月4日から遺物の洗浄、注記の基礎整理作業は発掘調査支援業者が実施し、10月

31日に遺物が埋蔵文化財センターへ移管された。移管後の接合、復元及び実測作業等は埋蔵文化財センターが直営で平成29年度まで実施した。一方、現地で作成した図面整理、編集図作成、写真整理及び遺物台帳等作成作業については、発掘調査支援業者によって行われ、平成28年11月30日に成果品として納品された。

平成29年1月21日に鳥取市気高町中央公民館で開催された気高町歴史講座において、「下坂本清合遺跡の発掘調査成果について」と題して出前講演と出土遺物の解説を行った。

第3節 調査体制

下記の体制で発掘調査、報告書作成を行った。

所長 中原 斉

平成26年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所長 中原 斉
次長 中村 靖浩(兼総務係長)
総務係
係長 白岩 準市
主事 松浦 広美
事務職員 高橋 優
市村 篤則

次長 近藤 健(兼総務係長)
総務担当
係長 白岩 準市
主事 岡 梓
水本 裕子
(平成28年2月～3月)
事務職員 高橋 優
植木 朋子

発掘事業室

室長 山栞 雅美(兼調整係長)
調整担当
発掘調査員 長谷 琢也
事務職員 中村 ゆかり

発掘事業室

室長 山栞 雅美(兼調整係長)
調整担当
文化財主事 岩垣 命
発掘調査員 平井 克知
事務職員 坪内 恵子

調査担当(気高調査事務所)

文化財主事兼係長 高橋 章司
(主任発掘調査監理者)
文化財主事 荒川 和哉
(発掘調査監理者 8月18日から)
文化財主事 原田 克美
(発掘調査監理者 8月18日まで)
文化財主事 岩垣 命
(発掘調査監理者 6月9日まで)

調査担当(気高調査事務所)

文化財主事兼係長 加藤 裕一
(主任発掘調査監理者)
文化財主事 荒川 和哉
(発掘調査監理者)

事務職員 竹内 努
新 ともみ

発掘調査支援業者

株式会社新技術コンサル

現場代理人 松田 秀貴
支援調査員 安生 素明
中里 正憲

発掘調査支援業者

株式会社イビソク・株式会社ティー・エム・

エス共同企業体

現場代理人 淡路 壽一
副現場代理人 本道 和夫
支援調査員 折井 敦
中井 勝治
調査補助員 矢井 明
大塚 一彦

平成28年度

鳥取県埋蔵文化財センター

所長 中原 斉
次長 近藤 健
(兼総務担当係長)

総務担当

係長 港 浩二
主事 水本 裕子
事務職員 坂本 真奈美
中森 貴子

平成27年度

鳥取県埋蔵文化財センター

第1章 調査の経緯

発掘事業室

室長 松井 潔
(兼調整担当係長)

調整担当

係長 濱 隆造(4月～5月)

文化財主事 岩垣 命

発掘調査員 平井 克知

調査担当(気高調査事務所)

係長 小口 英一郎

(主任発掘調査監理者)

文化財主事 田中 正利

(発掘調査監理者)

事務職員 綾木 久美子

発掘調査支援業者

株式会社アコード

現場代理人 原田 幹夫

支援調査員 西村 匡広

島軒 満

調査補助員 林 貴光

福井 露子

平成29年度(整理作業)

鳥取県埋蔵文化財センター

所長 中原 斉

次長 近藤 健

(兼総務担当係長)

総務担当

係長 港 浩二

主事 松浦 広美

事務職員 高橋 優

発掘事業室

室長 松井 潔

調整担当

文化財主事兼係長 小山 浩和

発掘調査員 平井 克知

調査担当(気高調査事務所)

係長 小口 英一郎

事務職員 神田 孝彦

(平成30年2月9日まで)



写真1 現地説明会(平成26年度)



写真2 瑞穂地区文化祭展示(平成26年度)



写真3 現地説明会(平成27年度)



写真4 現地説明会(平成27年度)

第2章 遺跡の位置と環境

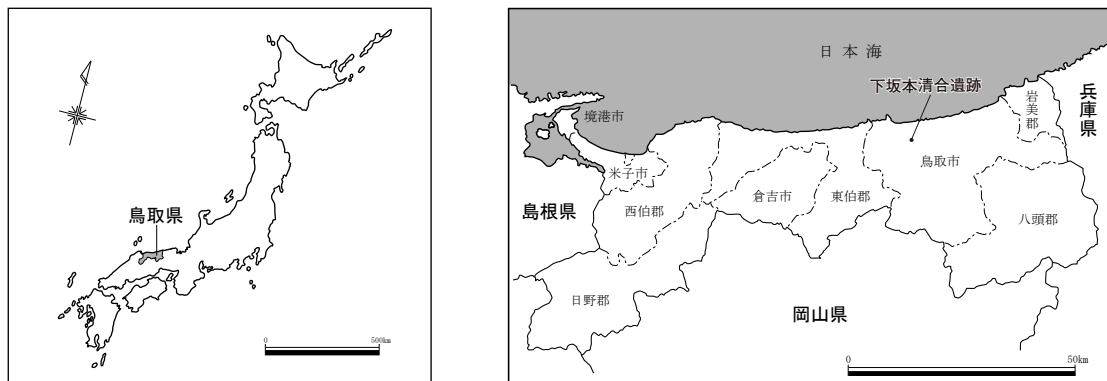
第1節 地理的環境

下坂本清合遺跡は、鳥取市の北西部、鳥取市気高町下坂本字黒田に所在する。鳥取県は中国地方北東部に位置し、東西約100km、南北約40kmと東西に長く、総面積は約3,500km²を測る。県域は鳥取市、倉吉市、米子市を中心とする東部、中部、西部の3つの地域に分けられる。このうち鳥取市は、県庁所在地で平成16年(2004年)11月に、岩美郡国府町・福部村、気高郡気高町・鹿野町・青谷町、八頭郡河原町・用瀬町・佐治村の8町村を編入合併し、現在の面積は765.31km²、人口は約19万人となり、平成30年4月1日に中核市へ移行した。鳥取県の旧国名は東部を因幡国、中西部が伯耆国に当たり、下坂本清合遺跡は因幡国旧気多郡の郡域となる。

旧気高郡は、南部にそびえる鷲峰山(標高920.6m)西側の佐谷峠から長尾鼻に伸びる丘陵を境に、日置川、勝部川流域の山西地域(旧青谷町)と河内川、末用川流域の山東地域(旧気高町、旧鹿野町)に分けられ、下坂本清合遺跡は、このうち山東地域の北東部に位置する。

山東地域には、南北方向に丘陵が展開し、その間隙を3つの谷が伸びている。これらの谷は、西から逢坂谷、勝見谷、瑞穂・宝木谷と呼ばれる。逢坂谷、瑞穂・宝木谷の大部分と勝見谷の北端部が旧気高町域で、勝見谷の北端部を除く大部分と山東地域南部が旧鹿野町域である。山東地域は、南部の山地のほとんどが山林で、谷沿いの丘陵裾に集落が分布し、谷が畑地・水田として利用されている。日本海に面して東部に酒津漁港、西部に船磯漁港がある。日本海の海岸線に平行し、国道9号とJR山陰本線が東西方向に横断し、主要な交通網をなしている。JR山陰本線浜村駅北側には、明治15年(1882年)に道路工事の際に発見された浜村温泉がある。温泉街が位置する勝見谷には南北方向に伸びる断層があり、この断層に従って温泉が湧出している。

この地域の地形を概観すると、北側に日本海を望み、南部は標高500m以上の山々が峰をなし、山地を形成している。これらの山は新生代第三紀中新世末の大規模な火山活動により、中国山地から流れ出した溶岩が河流により流されて堆積してできた白兔円礫層と、第三期鮮新世の火山活動で流出した多量の安山岩溶岩により造られた溶岩台地が、河川の浸食を受けて残されたものである。主な山としては、毛無山(標高570.5m)や鷲峰山、鷲峰山の南側に地元の人が「ゴーロ」「アタマワレ」と呼んでいる山(標高1136.8m)がある。この山の北西麓から鷲峰山の南西麓にかけては河内川の水源地で、毛無山の西麓が末用川の水源地である。鷲峰山からは、標高100～200m前後の丘陵と逢坂谷、勝見谷、瑞穂・



第2図 遺跡位置図

第2章 遺跡の位置と環境

宝木谷の3つの谷底平野が日本海に向けて細長く南北方向に伸びる。逢坂谷には河岸段丘が残されており、勝見谷、瑞穂・宝木谷は平坦な沖積平野である。

逢坂谷の段丘本体は、花崗岩風化層の上位に堆積する礫層と、その上位に堆積する粘土層に分かれる。段丘本体は大山倉吉軽石層(DKP)で覆われ、その上位に明黄褐色ローム、大山上部ローム層・褐色ローム層の順で載り、最上部を黒ボク層が覆っている。逢坂谷に大山の火山灰層が堆積していることから、逢坂谷を流れていた河内川は、大山が噴火し大山倉吉軽石層で覆われた時には、勝見谷を流れるようになっていたと考えられる。やがて、現在と同じように瑞穂・宝木谷に流れるようになった。河内川が瑞穂・宝木谷に流れるようになった時期は、黒ボク層の形成より前である。

旧気高町の沿岸は、西端の長尾鼻と東部の酒津漁港周辺が溶岩流により形成された岩石海岸であるが、それ以外は殆どが砂丘である。砂丘の砂は、中国山地を構成する岩石のうち、主に花崗岩が風化により砕け、河川の浸食により流され、海に運ばれる間に円磨されたものである。その砂が波や海流、あるいは風により運ばれ、海中や砂浜の障害物に掛かることにより形成されたわずかな高まりに沿って堆積し、砂丘が形成されてゆく。砂丘の発達には緩急があり、砂丘の発達が緩慢な時には、砂丘上での人の活動が盛んになり、クロスナ層と呼ばれる地層が形成された。このほかの地形としては、湖沼がある。主に海岸の入江が砂丘の発達により堰き止められた潟湖が主で、旧気高町内では水尻池があり、かつて日光池があった。浜村、宝木の市街地が乗る砂丘列の後背低地も、かつては潟湖であった可能性が強い。山に近い谷合には谷を堰き止めて人為的に造られた溜池が多くあり、また、小規模な池や沼地がわずかに残っている。

第2節 歴史的環境

下坂本清合遺跡が位置する山東地域(旧気高町・旧鹿野町北部地域)を中心とした歴史的環境について、遺跡の発掘調査の成果などを踏まえ、時代ごとに概観する。

縄文時代

この地域で人々の活動の痕跡が確認されるのは縄文時代からで、旧石器時代に遡る遺跡は、今のところ確認されていない。

縄文時代の遺跡としては、逢坂谷では山宮茶山畑遺跡(160)で晩期の刻目突帯文のある土器片が出土し、殿地内で凹石、郡家地内で石鏃、高江地内で打製石斧や石鏃が採集されている。勝見谷では寺内廃寺跡(117)で石鏃、打製石斧及び磨石、寺内京南遺跡(119)で後期の土器片や石鏃、瑞穂谷では柄杓目遺跡(65)で早期の押型文土器、打製石斧が出土している。宝木谷では下光元地内で磨製石斧、閉野地内で草創期の局部磨製石斧が採取されている。沿岸部の浜村砂丘上の短尾遺跡(89)でクロスナ層から中期の土器の他、石鏃、石斧、石錘、石槍などが出土しており、八束水やつかみの砂丘で黒曜石製の有茎尖頭器・槍先形尖頭器おくぞうみが採取されている。水尻池南側の奥沢見地内で打製石斧、石錘及び石鏃が採集されているが、いずれも採集品や遺構に伴わない出土遺物が多い。

縄文時代の遺構としては、逢坂谷の山宮笹尾遺跡(159)で後・晩期の土器、石鏃、石錘及び蛇紋岩製首飾りなどの遺物を伴う土坑や落とし穴、山宮茶山畑遺跡で落とし穴が検出されており、瑞穂谷では土居地内の正寿寺裏山斜面で中期前葉土器を伴う土坑が確認されている。瑞穂谷では柄杓目遺跡で早期から晩期までの土器を伴う溝状遺構、晩期の土器を伴う土坑が検出されている。

このように、縄文時代には沿岸部の砂丘や河岸段丘、扇状地上で、狩猟・採集を中心とする生活が

営まれていた痕跡を確認することができる。

弥生時代

弥生時代は、発掘調査などにより多くの遺構や遺物が出土しているが、特に逢坂谷で弥生時代の居住域・墓域に伴う遺構・遺物が目立っている。

逢坂谷では会下・郡家遺跡(2)で中期後葉から後期の竪穴住居や県内でも最大規模を誇る独立棟持柱建物が検出されている。中期後葉の袋状土坑や木棺墓群も数多くみられ、拠点集落と考えられる。陸逢遺跡(154)では後期前葉の袋状土坑と木棺墓、三王尻遺跡(156)で中期の土坑と木棺墓、上原遺跡(163)で竪穴住居、木棺墓及び土坑、上原南遺跡(164)で中期から後期の竪穴住居と土坑墓を含む土坑が検出されている。また、山宮茶山畑遺跡で中期の土器が出土しており、山宮地内で石斧が採集されている。瑞穂谷では柄杓目遺跡で中期の竪穴住居と土坑、後期の袋状貯蔵穴を含む土坑、竪穴住居、掘立柱建物、木棺墓及び溝が確認され、宿地内で後期の土器が採集されている。勝見谷では寺内廃寺跡で中期末から後期土器、寺内京南遺跡で後期の土器片が出土している。乙亥正屋敷廻遺跡(97)では後期から古墳時代前期を中心とする集落が確認され、急峻な斜面に雛壇状に段状遺構が構築されており、狭い谷底には大規模な木造構造物を伴う水路が検出されている。八禽鏡の破鏡や巴型銅器等の遺物も特筆される。宝木谷では下光元地内で石庖丁の破片が、浜村海岸の砂丘上にある短尾遺跡や宝木砂丘の第2砂丘列上の宝木高浜遺跡(6)では、クロスナ層から弥生土器、石庖丁などが、奥沢見地内で弥生土器の底部と石錘が採集されている。常松大谷遺跡(19)では後期の水田跡が発見された。

以上のように、弥生時代には河岸段丘や扇状地上、沿岸部の砂丘上で生活が営まれていたことが確認できるが、前期に帰属するものは現段階で未確認である。また、中期以降において生産域を伴う遺跡は少ないが、常松大谷遺跡のように水田跡が確認されていることや、下光元地内で石庖丁が採集されていることなどを考えると、谷底平野の居住域縁辺の低地部分で水田耕作が行なわれていた可能性がある。

古墳時代

古墳時代には山麓や尾根上に多くの古墳が築造されるようになり、河岸段丘や扇状地上で生活が営まれる。前期古墳としては、二本木7号墳を含む同一丘陵上に並ぶ6基の方墳群(33)がある。二本木7号墳は、東西22m、南北17mの方形墳で、発掘調査により墳丘中央部を南北に横断する溝と、その溝を挟み東側に1基の埋葬施設、西側に3基の埋葬施設が検出されている。ここでは、4世紀中頃に比定される古式土師器が出土している。このほか前期の墓域に伴う遺構として、上原南遺跡で供献土器と見られる土師器を伴う方形周溝墓・円形周溝墓が、柄杓目遺跡で木棺墓が検出されている。

中期には、丘陵上に前方後円墳の重高4号墳(全長21m、49、市史跡)、重高5号墳(全長35.5m、49、市史跡)、宝木1号墳(全長19m、5)、宝木16号墳(全長26m、5)、上光10号墳(全長33m、37)、矢口1号墳(全長21m、12、市史跡)、山崎17号墳(34)、重山9号墳(全長20m、100)、出百姓13号墳(全長22.5m、128)、前方後方墳の西山1号墳(全長47m、13、市史跡)、八束水7号墳(全長約38m、138、市史跡)などが築造された。山崎17号墳の箱式石棺の内外から、須恵器や鉄刀などが出土している。丘陵上には、これらの前方後円墳や前方後方墳以外にも、主に小円墳からなる群集墳が形成された。内部主体は主に箱式石棺で、箱式石棺には勝見15号墳(93)に見られるように、棺内に板石をV字状に立てかけた石枕を持つものがあり「妻波型」と呼ばれる。箱式石棺を主な内部主体とする群集墳や古墳として、下光元古墳群(22)、日光小池古墳群(84)、勝見古墳群(93)、重山古墳群(100)及び神越谷古



- 1下坂本清合遺跡 2会下・那家遺跡 3酒津古墳群 4湊山砦跡 5宝木古墳群 6宝木高浜遺跡 7富吉城跡 8富吉横穴墓 9常松第1遺跡 10常松第2遺跡 11常松1号墳 12矢口古墳群 13西山古墳群
 14下坂本遺跡 15下坂本横穴 16下坂本岩谷遺跡 17坂本古墳群 18常松菅田遺跡 19常松大谷遺跡 20堤知光城跡 21持木横穴 22下光元古墳群 23夏ヶ谷遺跡 24夏ヶ谷古墳群 25大杉横穴群
 26堤谷横穴群 27下光元第1遺跡 28下光元第2遺跡 29大杉城跡 30下坂本城跡 31二本木第1遺跡 32二本木第2遺跡 33二本木古墳群 34山崎古墳群 35山崎横穴群 36葛谷古墳群 37上光古墳群
 38後谷横穴墓 39高尾口横穴群 40狭間遺跡 41赤平衛山城跡 42上光第1遺跡 43戸島遺跡 44馬場遺跡 45上光塚ノ上古墳 46上垣城跡 47灰谷遺跡 48灰谷口横穴墓 49重高古墳群 50漆谷横穴墓
 51土居古墳群 52丸山城跡 53西分古墳群 54西分横穴群 55首露谷古墳群 56駒ヶ坪城跡 57熊ヶ坪横穴群 58熊ヶ坪1号墳 59熊ヶ坪遺跡 60宿第1遺跡 61宿第2遺跡 62新築谷古墳群
 63柳野目古墳群 64鹿野所在城跡 65柳野目遺跡 66鹿野1号墳 67鹿野2号墳 68鹿野上地遺跡 69鹿野上地遺跡2 70宿古墳群 71持西山砦跡 72杉原上園跡 73鹿野城跡 74鹿野所在古墳
 75鹿野所在遺跡 76興雨寺跡 77法楽寺遺跡 78午房山城跡 79法楽寺砦跡 80水谷古墳群 81水谷遺跡 82中峰遺跡 83矢口陣屋跡 84日光小池古墳群 85日光古墳群 86日光横穴群
 87藤ヶ脇城跡 88西浜遺跡 89短尾遺跡 90北短尾墳墓 91浜村城跡 92浜村古墳群 93勝見古墳群 94勝見山城跡 95梶掛遺跡 96梶掛古墳群 97乙亥正屋敷遺跡 98乙亥正大角遺跡
 99乙亥正合谷所在遺跡 100重山古墳群 101岡木古墳群 102岡井谷所在中世墓 103藤山城跡 104岡木古墳群 105木梨遺跡 106観音山城跡 107中国所在遺跡 108西中国古墳群
 109西中国所在遺跡 110西中国遺跡 111谷田遺跡 113寄馬場遺跡 114石ヶ谷遺跡 115宮方1号墳 116宮方宮谷遺跡 117寺内庭寺跡 118寺内古墳群 119寺内京南遺跡
 120今市古墳群 121神越谷古墳群 122馬の池古墳群 123今市馬の池所在遺物出土地 124今市馬の池所在遺物出土地2 125今市所在中世墓 126謙伝寺庭園跡 127下石城跡 128出百姓古墳群
 129出百姓東砦跡 130出百姓西砦跡 132寺谷遺跡 133古仏谷所在遺物出土地 134古仏谷遺跡 135会下谷遺跡 136奥会下谷遺跡 137姫路城跡 138八束水古墳群 139姫路所在遺跡
 140下原古墳群 141八幡第1遺跡 142八幡第2遺跡 143勝見谷奥所在遺跡 144谷奥古墳群 145谷奥1号横穴墓 146会下古墳群 147会下1号横穴 148会下城跡 149会下の土圍
 150那家寺ノ上横穴墓群 151那家遺跡 152那家口三谷遺跡 153那家1号墳 154陸達遺跡 155陸達古墳群 156三王尻遺跡 157山宮古墳群 158篠尾堀跡 159山宮笹尾遺跡 160山宮茶山畑遺跡
 161山宮阿弥陀森遺跡 162上原遺跡 163上原遺跡 164上原遺跡 165田仲古墳群 166上原古墳群 167飯里古墳群 168飯山城跡 169殿遺跡 170風情城跡 171殿古墳群 172小別所古墳群
 173小別所土坑断面確認地点 174米日所在遺跡 175天王遺跡 176青谷第2遺跡 177青谷上和田谷出土地 178青谷第3遺跡 179青谷古墳群 180青谷カアカ遺跡 181阿古山古墳群
 182養郷下毛菰池ノ二出土地 183青谷滝尻出土地 184青谷横木遺跡 185養郷岩手遺跡 186小平田蔵谷城跡 187奥崎古墳群 188奥崎中村畑遺跡 189奥崎谷田出土地 190奥崎上村畑第1出土地
 191奥崎上村畑第2出土地 192奥崎丸尾城跡 193善田東村畑出土地 194養郷小丸山城跡 195養郷村内出土地 196養郷古墳群 197養郷田口ノ二出土地 198蔵内古墳群 199蔵内立岩出土地
 200蔵内あか平遺跡 201蔵内細工谷出土地 202蔵内下長谷出土地 203蔵内上長谷第1所在遺跡 204蔵内上長谷第2遺跡 205蔵内上長谷第3出土地 206蔵内上長谷第4所在遺跡 207蔵内水船遺跡
 208蔵内南田出土地 209大坪天神第2遺跡 210大坪天神出土地 211大坪イカサカ遺跡 212大坪大縄手遺跡 213大坪家ノ空出土地 214大坪岸ノ上遺跡 215大坪古墳群 216露谷第3遺跡
 217カヤマ遺跡 218カヤマ遺跡(藤田地区) 219大口古墳群 220大口第1遺跡 221大口第2遺跡 222大口第3遺跡 223早午城跡 224早午古墳群 225早午宝免遺跡 226早午中瀬遺跡 227早午矢島城跡
 228早午六原出土地

第3図 周辺遺跡分布図

墳群(121)などが分布する。下光元3号墳(22)では棺内から成年男女各1体の人骨、直刀、須恵器蓋坏などが出土している。他に中期の墓域に伴う遺構として、戸島遺跡で埋土から5世紀中頃の須恵器が出土した弧状にめぐる古墳の周溝と見られる溝が検出されており、帰属時期は不明であるが、方形周溝墓あるいは方墳の周溝と見られる溝も検出されている。

後期には、谷に沿った丘陵上に径10m前後の円墳を主体とする群集墳が形成された。内部主体は横穴式石室であるが、逢坂谷を中心する地域では、板状節理輝石安山岩の板石により、奥壁1枚、側壁各2枚を立て、その上に天井石2枚を置いた形を基本とする横穴式石室が見られる。この型の石室は、逢坂谷を中心として、西は旧青谷町日置谷周辺、東は勝見谷周辺に分布し「逢坂型横穴式石室」と呼ばれる。石室には線刻壁画が描かれているものがあり、陸逢11号墳(155、市史跡)の石室には鳥、格子状、横筋状、綾杉文及び殿15号墳(171、市史跡)の石室には綾杉文、殿25号墳(171、市史跡)の石室には鳥と綾杉文、西中園8号墳(108)の石室には木葉と直線状、旧青谷町の吉川43号墳の石室には船、阿古山22号墳(181、県史跡)の石室には数隻の船、魚、星などの線刻が見られる。横穴式石室を主な内部主体とする群集墳や古墳として、逢坂谷の丘陵には八束水古墳群(138)、下原古墳群(140)、会下古墳群(146)、陸逢古墳群(155)、上原古墳群(166)、飯里古墳群(167)、殿古墳群(171)、小別所古墳群(172)、山宮古墳群(157)、田仲古墳群(165)、郡家1号墳(153)、勝見谷の丘陵には岡木古墳群(101)、西中園古墳群(108)、寺内古墳群(118)、馬の池古墳群(122)、日光池周辺の丘陵には日光古墳群(85)、瑞穂・宝木谷の丘陵には宿古墳群(70)、西分古墳群(53)、首野谷古墳群(55)、新葉谷古墳群(62)、鹿野所在古墳(74)、閉野古墳群(66・67)、鷲峰山北麓には釜子谷古墳、口水谷古墳群(80)などが分布する。山宮14号墳(157)から須恵器蓋坏、短頸壺、広口壺及び高坏、口水谷2号墳(80)から須恵器、耳環、鉄刀、鉄斧、鑿状工具及びガラス製小玉、西中園8号墳(108)から須恵器蓋坏、高坏、壺、甕と鏃、刀、刀子、鏢、鎌など鉄製品、金銅製太刀、馬具(鞍、鉸具片)が出土している。

また、宝木谷の下光元及び上光とその周辺の丘陵には横穴墓が群集しており、富吉横穴群(8)、持木横穴(21)、大杉横穴群(25)、堤谷横穴群(26)、高尾口横穴群(39)、後谷横穴(38)、灰谷口横穴(48)、山崎横穴群(35)、西分横穴群(54)及び熊ヶ坪横穴群(57)が分布する。この他に、瑞穂谷の丘陵には下坂本横穴(15)と漆谷横穴(50)、逢坂谷の丘陵には郡家寺ノ上横穴群(150)と会下横穴(147)、勝見谷の丘陵には谷奥1号横穴墓(145)、乙亥正合谷所在遺跡(99)及び西中園横穴群(108)、日光池西岸の丘陵には日光横穴群(86)、水尻池西岸の丘陵には水尻横穴墓群が分布する。漆谷横穴は、内部は四注式の天井を有する家形で、壁面には綾杉文の線刻が確認されている。他に後期の墓域に伴う遺構として、寺内京南遺跡(119)で7世紀代の木棺直葬墓、柄杓目遺跡(65)では板石ではなく塊石で築かれた横穴式石室が検出され、須恵器壺、提瓶、蓋坏、耳環、碧玉製管玉、刀子及び鉄釘が出土しており、土坑墓の可能性のある土坑も検出されている。

終末期の古墳としては、谷奥1号墳(144)と谷奥2号墳(144)が知られる。江戸時代と明治時代に石室がほとんど破壊され、その際に谷奥1号墳から馬鐸、銅鏡、金環、銅鏡(変形神獸鏡)、直刀装具の鏢、鏢金具、鞘尻金具、背金具及び足金物、玉類、須恵器の高坏、平瓶、盃、柑、脚付長頸埴及び脚付盃などが出土しており、奥谷2号墳からは人骨が出土している。銅鏡が古墳から出土する例は、群馬県や千葉県を主とする関東地方を中心に、東北から九州にかけて見られるが、県内では智頭町の黒本谷古墳からの出土例が知られる。他に終末期の墓域に伴う遺構として、戸島遺跡(43)で7世紀後半の須恵器高台付坏が底面から出土した土坑墓が検出されている。

第2章 遺跡の位置と環境

先に挙げた古墳や群集墳以外にも、内部主体は不明なものが多いが、勝見谷の丘陵に浜村古墳群(92)、梶掛古墳群(96)、宮方1号墳(115)及び今市古墳群(120)、瑞穂谷の丘陵に下坂本古墳群(17)と土居古墳群(51)、宝木谷とその丘陵に常松1号墳(11)、夏ヶ谷古墳群(24)、葛谷古墳群(36)、上光塚ノ上古墳(45)及び熊ヶ坪1号墳(58)、水尻池東岸の丘陵上には水尻古墳、宝木谷東側の日本海に突き出た丘陵上には酒津古墳群(3)など多くの古墳や群集墳が分布する。

古墳時代の集落は不明な点が多いが、主に逢坂谷の段丘上で確認されている。会下・郡家遺跡で前・中期の竪穴住居が検出されており、中期の竪穴住居からは、暗文が施された土師器高坏や赤彩された土師器高坏やミニチュア土器が出土している。睦逢遺跡で後期の竪穴住居、三王尻遺跡で前期の竪穴住居と土坑、山宮茶山畑遺跡、山宮阿弥陀森遺跡(161)及び上原遺跡(163)で前期の竪穴住居、上原南遺跡(164)で袋状土坑を含む土坑が検出されている。宝木谷の戸島遺跡では後期の竪穴住居が確認されている。勝見谷では寺内京南遺跡で前期の竪穴住居、袋状土坑を含む土坑及び溝、中・後期の土坑、ピット及び溝が検出されており、寺内廃寺跡で土師器と須恵器が出土している。瑞穂谷では柄杓目遺跡で前期の竪穴住居、掘立柱建物及び土坑、中期の竪穴住居と土坑が検出されている。常松菅田遺跡(18)や常松大谷遺跡(19)では後期から終末期にかけて、礎盤や根石を持つ掘立柱建物が構築されており、谷底平野の低地部にも集落が形成されていたことが明らかとなっている。

沿岸部の砂丘上の短尾遺跡(89)で須恵器、宝木高浜遺跡で古式土師器と須恵器がクロスナ層から出土している。このほかに、祭祀関連の遺物として下光元地内で土馬、浜村地内及び日光地内で子持勾玉が採取されている。古墳時代の集落遺跡は逢坂谷に多いが、勝見谷、瑞穂及び宝木谷の丘陵での古墳群の分布を見ると、これらの谷の丘陵裾部や扇状地上に未確認の集落遺跡があることが想定される。

古代

鳥取県東部は、古代律令制下では山陰道因幡国に属した。『和名類聚抄』によると因幡国は、巨濃、法美、八上、智頭、邑美、高草及び気多の7郡からなる。旧気高郡域(旧気高町、鹿野町、青谷町域)と鳥取市西端の一部を含む地域が、気多郡に比定されている。気多郡は大原、坂本、口沼、勝見、大坂、日置及び勝部の7郷からなる。平城宮跡で出土した木簡に「因幡国喜多郡雑腊一斗五升 養老四年十月」「因幡国気多郡勝見郷中男神部直勝見磨作物海藻大贄壺籠六斤太」(表)「神護景雲四」(裏、707年)という記載が見られるが、これが気多郡という郡名の初見である。

気多郡衙の比定地は、逢坂谷の段丘上に展開する上原遺跡群(山宮阿弥陀森遺跡161、上原西遺跡162、上原遺跡163、上原南遺跡164)である。上原遺跡ではL字型の配置をとる大型掘立柱建物群、大型の二面庇付掘立柱建物を中心とする掘立柱建物群、礎石建物及び区画溝が検出されている。二面庇付掘立柱建物を中心とする掘立柱建物群は9世紀以降に下る新しい段階の政庁の中心建物群と推定されている。また、掘立柱建物群よりも古い土坑から、土器、瓦、埴輪、鞆羽口及び埴埦などが出土している。出土した須恵器から、7世紀末から8世紀初め頃の時期のものが見られ、この付近に郡衙施設造営以前の寺院、あるいは古い段階の郡衙施設に伴う仏教施設があったと推定されている。

山宮阿弥陀森遺跡では掘立柱建物群が50棟以上検出されている。桁行3間、梁行2間の側柱掘立柱建物を主体とするが、桁行6間、梁行2間のものを含む総柱掘立柱建物や大型の掘立柱建物も検出されており、他に柵や土坑なども検出されている。これらの土坑埋土などからは、7世紀末から9世紀末にかけての土器が多く出土しており、この中には30数点の墨書土器がある。墨書は「郡家一」「中」「長」「三町」などの文字が判読されている。また、土師器の坏、皿、甕、竈及び支脚、須恵器坏の転

用硯、鉄滓などが出土している。これらの出土遺物から、郡官の居住区、郡衙の鍛冶工房か工人の居住区、あるいは郡衙の厨の機能を持つ区域と推定されている。この掘立柱建物群の東側では、長大な掘立柱建物群、区画施設の可能性がある溝が検出されている。この掘立柱建物群は、7世紀末から8世紀代にかけての古い段階の政庁の中心建物群と推定されている。

上原南遺跡では、掘立柱建物群、柵及び土坑などが検出されており、7世紀末から10世紀まで存続する郡衙関連施設と推定されている。また、大型の土坑が検出され、その埋土から多量の瓦片と鴟尾が出土しており、気多郡衙と関わりを持つ寺院か仏教関連施設が存在した可能性が指摘されている。上原西遺跡では総柱掘立柱建物が検出されており、郡衙の正倉跡かその一部、あるいは郡衙に伴う正倉以外に置かれた倉庫跡と推定されている。

宝木谷の戸島遺跡と馬場遺跡(44)では掘立柱建物群、掘立柱塀、溝及び土坑などが検出されている。戸島遺跡の中心は東西45m、南北55.5mで周囲を掘立柱塀で囲んだ方形区画と掘立柱建物群である。方形区画は正殿と見られる中央の掘立柱建物と掘立柱塀により南区と北区に分けられ、正殿を囲むように布掘り掘方の掘立柱建物が10棟左右対称に配置されている。この配置は、7世紀後半から8世紀代にかけてのもので、その後、建物配置を変え10世紀まで続くことが確認されていた。馬場遺跡では溝とその内側の掘立柱塀で区画された90m四方と推定される区画内に、南北方向に長い側柱掘立柱建物と総柱掘立柱建物などが配置されている。この配置は、8世紀中頃から10世紀にかけてのもので推定されており、その前段階の大型側柱掘立柱建物1棟が7世紀後半から8世紀中頃までのものと推定されている。戸島遺跡と馬場遺跡で検出された2つの区画内に配置された掘立柱建物群は、公的な機能をもつ施設、気多郡衙の出先機関的な施設、あるいは気多郡に属する坂本郷の官衙とも推定されている。

他の古代の遺跡としては、逢坂谷北部の睦逢遺跡で7世紀後半あるいは7世紀末に開始され、奈良、平安時代に至る掘立柱建物群、礎石建物及び溝が検出されている。掘立柱建物の中には2棟並列の配置をもつものがあり、有力者層の居宅と推定されている。会下・郡家遺跡では溝状遺構の埋土から奈良時代後半のものを主とする土師器と須恵器が大量に出土している。土師器は坏、皿、小埴及び甕、須恵器は蓋坏、壺及び高坏で土師器坏のほぼすべてに暗文が施され赤彩されている。三王尻遺跡では掘立柱建物群、柵及び土坑、山宮茶畑山遺跡では掘立柱建物群が検出されている。これらの掘立柱建物は、桁行4間以下、梁行3間以下の小型の建物であることや、配置の計画性が希薄で、方位にばらつきが見られることなどから、一般農民層の集落と推定されている。逢坂谷以外では、勝見谷の寺内京南遺跡で奈良時代の掘立柱建物群、宝木谷の狭間遺跡(40)で奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、井戸及び平安時代の掘立柱建物が確認されている。瑞穂谷では、柄杓目遺跡で平安時代前期の掘立柱建物群と柵が検出されている。掘立柱建物群には桁行が6間ないし7間、梁行2間の長大な側柱掘立柱建物、桁行3間、梁行が2間の総柱掘立柱建物も含まれ、一般の住居とは性格を異にする掘立柱建物群と推定されている。沿岸部の宝木高浜遺跡ではクロスナ層から糸切り底をもつ土師器坏が出土している。

瑞穂谷と宝木谷の合流部に位置する下坂本清合遺跡2区(1)では、11世紀後半から12世紀にかけて低地部における土地開発の様相が明らかとなっている。自然流路からは土器や下駄などの日用品、人形、舟形、刀形などの木製祭祀具が発見されるとともに、当時貴重であった漆器椀や皿が数多く出土している。

第2章 遺跡の位置と環境

これら谷底平野には条里に基づく地割があったと推定されている。その施行時期は不明だが、逢坂谷の段丘上、勝見谷、瑞穂と宝木谷の谷底平野の南部に、条里の手掛りとなる小字名が残されており、また、圃場整備が施されるまでの地図や航空写真で方形地割が確認されている。

この地域における古代寺院として、郡衙周辺寺院として「郡寺」の性格を有していた可能性のある旧鹿野町寺内地内の寺内廃寺跡がある。飛鳥時代から奈良時代にかけての瓦片が出土し、塔心礎だけが残されているが、寺域や伽藍配置については明確ではない。

古代の官道(駅路)として、山陰道が整備されていた。『延喜式』「兵部省諸国駅伝馬条」に、因幡国の山崎、佐尉、敷見、柏尾の4駅に駅馬各8疋、巨濃、高草、気多の3郡に伝馬各5疋を置くことが記されている。駅路は、高草郡家以東と柏尾駅以西は、現在の国道9号のルートとほぼ同じで、気多郡内では気多郡衙を経由する内陸を通過していたと推定されている。気多郡西部に位置する青谷横木遺跡(184)と青谷上寺地遺跡では、古代山陰道とみられる道路遺構と条理遺構が一体で確認され、前者では税や出挙に関する木簡、墨書土器の他、人形や馬形など膨大な量の木製祭祀具が出土している。とくに、墨で描かれた古代の「女子群像」の板絵は、高松塚古墳に次いで国内2例目となり全国的にも注目された。

この他に、信仰に関連する遺構や遺物として、勝見15号墳で経塚が検出されている。この経塚は、古墳の墳丘上に川原石を盛り、墳頂付近に掘られた方形の土坑に板石を立て経筒を納める石室にしたものである。盗掘により破壊されていたが、蓋と身からなる陶製の外筒が土坑の内外から出土している。12世紀後半から13世紀初めにかけて製作されたと考えられ、身の外面には「藤井□□惣テ井造候也」の墨書が見られる。

中世

中世の各争乱の中で、全国各地に城郭や砦が数多く築かれたが、この地域も例外でない。日本海に伸びる丘陵の先端部や沿岸には、姉泊海岸の東端部の姫路城跡(137)、浜村海岸に向けて伸びる丘陵の先端部とその周辺に櫛ヶ脇城跡(87)、浜村城跡(91)、矢口陣屋跡(83)、水尻池を挟み日本海に突き出た丘陵上に大崎城とその出城である湊山砦跡(4)が立地する。逢坂谷には、逢坂谷を見下ろす西側の丘陵に会下城跡(148)、篠尾柵跡(158)、飯山城跡(別号梅津の城、168)及び風情城跡(170)が分布する。会下城跡の丘陵下の河岸段丘上には、会下の土圀(149)があった。勝見谷を見下ろす西側の丘陵上には、勝山城跡(94)、藤山城跡(103)及び観音山城跡(106)が分布する。鷲峰山と毛無山北麓の山上には、荒神山城(別号要害ノ城)、シンジャク城跡(別号ニョウゴウの城)、狗屍那城跡(別号古仏谷ノ城)、金剛城(別号コンコノ城・ココノ城、汚登路免城、踊見ノ城)、霧谷城跡及び釜谷城跡があり、河内川を見下ろす右岸の丘陵上には出百姓西砦跡(131)、出百姓東砦跡(129)及び鹿野城跡(別号志加奴城、鹿奴城、王舎城、73)が立地し、左岸の丘陵上には下石城跡(別号讓伝寺山城、127)と持西山砦跡(71)が認められる。鹿野城跡の北側には、杉原土圍跡(72)がある。瑞穂谷を見下ろす西側の丘陵上には、丸山城跡(52)と下坂本城跡(30)、東側の丘陵上には、鹿野所在城跡(64)と駒ヶ坪城跡(56)が分布する。宝木谷の奥、末用川を見下ろす丘陵上には、午房山城跡(78)と法楽寺砦跡(79)があり、宝木谷を見下ろす東側の丘陵上には、上垣城跡(46)、弥平衛山城跡(41)、大杉城跡(29)、堤知光城跡(別号持木城跡、シリフリ城跡、20)及び富吉城跡(別号宮良城、7)が分布する。

これらの中世城郭は、鎌倉時代以降に在地領主(国人)により築城されたもの、また、南北朝時代以降の因幡守護に任じられた山名氏の内乱、因幡国への尼子勢、毛利勢の侵攻に伴う争乱、織田信長に

遣わされた羽柴秀吉よる中国攻めなど、各時期における因幡国内外の勢力争いを背景として築造あるいは利用されたものである。ところが、城郭や砦を築いた領主や国人の居館や、この地域に住んでいた人々が生活した村落については、その全容をつかめるようなものは、遺跡の発掘調査によって確認されていない。発掘調査により検出されたものを以下に挙げると、逢坂谷では会下・郡家遺跡で15・16世紀頃の掘立柱建物、土坑、土坑墓、地下式坑及びピットが検出されている。遺構の埋土などから、土師器、瓦質土器、備前、越前、瀬戸美濃などの国産陶器の他に、中国産の白磁、青磁、染付や朝鮮産磁器、輸入銭が出土している。山宮阿弥陀森遺跡で土坑墓が検出されている。山宮茶山畑遺跡で大型の土坑が検出されている。この大型土坑の埋土の下層に砂鉄を含み、土師器、須恵器の他に鉄釘1点、鉄製楔1点が出土しており、野ダタラによる製鉄遺構である可能性が指摘されている。上原南遺跡で地下式坑、土坑及び柱穴と見られるピット、宝木谷の戸島遺跡で火葬を行なった可能性がある土坑墓が検出されている。また、山崎17号墳の発掘調査で後円部の表土下で五輪塔の頂部(空、風輪部)が出土し、山裾から宝篋印塔の九輪部と見られる石片が採取されている。勝見谷では寺内廃寺跡で廃絶以降の掘立柱建物や土坑墓群が検出されている。土坑墓の中には井戸を転用したもの、備前焼甕に木製の箱型の蓋で覆い、さらにその上に板石を置いたもの、墓坑の端に土師器皿を大小の配列で埋納したものが見られる。寺内京南遺跡では土坑が検出されており、また、圃場整備に伴う基礎工事の際、宝篋印塔や五輪塔が一群をなして出土しており、中世の墓域があったと考えられている。瑞穂谷では柄杓目遺跡で室町時代から近世初頭にかけての土坑墓、五輪塔、列石群など墓域に伴う遺構や遺物や15世紀末の石列、石組み溝などが検出されている。石組み溝で囲まれた内側でピットが検出されていることから、石組み溝は建物を囲む溝と考えられている。

会下・郡家遺跡では室町時代中期頃の仏具を埋納した土坑が検出されている。出土した仏具は青銅製で、香供養具、華供養具、燈供養具及び飲食供養具からなる。青銅製仏具の出土は、同遺跡における中国産、朝鮮産磁器及び輸入銭の出土とともに、これらの物品を入手、所持し得る有力者が居住していたことを示している。

近世以降

中世の各時期の争乱を経て、この地域は、天正9年(1581年)、豊臣秀吉により因幡国気多郡鹿野城主として1万3,800石を与えられた亀井武蔵守これのり茲矩により治められる。後に、茲矩は徳川家康により因幡国高草郡2万4,200石を加増され、3万8,000石の鹿野藩初代藩主となる。茲矩は藩内の諸産業の振興、新田開発のための干拓、治水、植林や銀山開発、朱印船貿易などの政策を行なった。産業振興のひとつとして茶栽培が勧められたが、山宮茶山畑遺跡で検出された植栽・施肥施設の痕跡は、近世初頭に開かれた茶園に伴う茶木の植栽や施肥の跡と考えられている。

鹿野藩は、元和元年(1615年)、茲矩の嫡子まさのり政矩が石見国津和野4万3,000石に加増転封された後、廃藩となり鳥取藩領となった。その後、寛永17年(1640年)、播磨国山崎藩主池田輝澄がお家騒動(池田騒動)を起こして鳥取藩お預かりとなり、堪忍料として1万石を与えられたことで再立藩した。寛文2年(1662年)、輝澄の後を継いだ政直が輝澄の死後、1万石を与えられ播磨国福本藩に転封されることにより、鹿野藩は再び廃藩となった。貞享2年(1685年)、鳥取藩主池田光仲が2万5,000石を次男仲澄に与え、新田分知による分家とし鳥取東館新田藩を立藩した。幕末に至るまで藩庁は鳥取に置かれ、鳥取藩から蔵米の支給を受け、藩政は鳥取の本藩から派遣された役人が行っており、形式的な藩であった。明治元年(1868年)12月に鹿奴陣屋を藩庁とし鹿奴藩と呼称されたが、明治2年(1869

第3章 調査の方法

年)に廃藩し、鳥取藩に吸収された。その鳥取藩も明治4(1871)年の廃藩置県により、鳥取県となった。

茲矩が入城した鹿野城は、本来は中世山城で山名氏配下の志加奴氏の居城であったが、入城した茲矩が山城を総石垣造りにし、新たに麓に本丸と二の丸を築き、城下町の整備を行なった。茲矩の嫡子政矩の津和野転封後、鹿野城には独立した領主は入らず、鳥取藩主池田光政の重臣である日置豊前守忠俊の居城として残された。しかし、寛永5年(1628年)の出火により城内の建物は焼失した。寛永9年(1632年)、池田光政が備前岡山藩に移封され、これに従い日置豊後守も備前に移り、残っていた石垣も正保元年(1644年)2月に取り崩されたと伝えられる。

発掘調査により検出された近世以降の遺構は、山宮茶山畑遺跡で墓標を伴う方形の土壇状遺構と台座礎石状遺構が検出されており、信仰に伴う遺構として、北短尾墳墓(90)で3基の塚が検出されている。これらの塚は、浜村砂丘の海岸に突き出すように浮かぶ小高い丘陵上に立地し、塚はいずれも石を環状に積み上げ、その中に盛土を行ない、穴を掘り蓋石をしている。塚の盛土内から寛永通宝・康熙通宝が出土している。農耕に伴うものとしては、会下・郡家遺跡で用水路、暗渠及び耕作溝、睦逢遺跡で暗渠が検出されており、会下・郡家遺跡の周辺は水田や畑地として利用されていたことが窺える。近世以降は、丘陵裾に沿う集落、河岸段丘上や谷底平野に広がる畑地、水田という景観が展開しており、その景観は、果樹園造成や圃場整備による地形の変形はあるが、現在に至るまでほぼ変わらずに残されている。

第3章 調査の方法

第1節 調査地の地区割

調査区名

下坂本清合遺跡は、これまで鳥取西道路の改築に伴い鳥取県教育委員会が国土交通省から委託を受け、公益財団法人鳥取県教育文化財団に再委託をして平成25～26年度に調査を実施している。ここでの地区名称を1～3区としている(鳥取県教育委員会2016『下坂本清合遺跡I』)。

これに継続するかたちで、鳥取県埋蔵文化財センターが実施する調査では、平成26年度調査区の道路橋脚部を東側から「4区」「5区」、トンネル坑口部を「6区」とした。「6区」はさらに「6-1区」「6-2区」「6-3区」「6-4区」に細分している。また、報告書記載の際には地形上の特徴から、6-1区、6-4区を「丘陵裾部」、6-2区、6-3区を「平地部」と呼称する。

平成27年度調査区は前年度調査区「6区」の西隣に位置し、「7区」とした。調査段階で鳥取市教育委員会の試掘トレンチ名をとり、便宜上「Tr14」「Tr15」「Tr16」とエリア分けしている。

平成28年度調査区は平成26年度、同27年度調査区の南隣に位置し、「8区」とした。調査段階で、地形区分によって東より「エリア1」(平地部)、「エリア2」(丘陵裾部)、「エリア3」(丘陵斜面部)とエリア分けしている。

地区割り

遺跡と遺構の位置は平面直角座標系V系(世界測地系)を使用して表示する。区割りについては、10m×10m(100m²)の区画を基本的な最小単位として、調査区に基準杭を設定しグリッドを設けている。グリッド名は、X=-55,200、Y=-23,700の交点を基準とし、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を用い、各交点の北東杭名を採った。座標は、6区で調査区ほぼ中央のN20杭：X=-

55,330、Y = -23,890、7区で調査区はほぼ中央のN24杭：X = -55,330、Y = -23,930、8区で調査区はほぼ中央のR22杭：X = -55,370、Y = -23,910などである。

第2節 発掘調査と記録の方法

調査の方針

鳥取市教育委員会の試掘調査及び本調査の実施過程での検討の結果、6区では5面、7区で4面、8区で5面の調査となった。なお、平成27年度の7区において16世紀前半の埋蔵銭の発見があったが、これを受け、翌年度の8区では中世後半から近世前半の調査を慎重に実施している。

第6章でも触れているが、8区は近世における大規模な造成によって弥生時代から近世の遺構群の重複が著しかった。とくにピットが多数に上るため、6～8区全体として明らかな柱穴や主要遺物が出土したピットのみ掲載し、その他のピットは集計表としてまとめている。

出土遺物の取り上げ

遺物の取り上げは、上記地区割りを基本にして、グリッド単位、遺構単位で行っている、遺物カード及び遺物取上台帳にも上記地区名を記入しており、地図上でも出土地点を示すことが可能である。下坂本清合遺跡の発掘調査では、調査年度毎に通しで取上番号を記した。

遺構番号と遺構種類の呼称

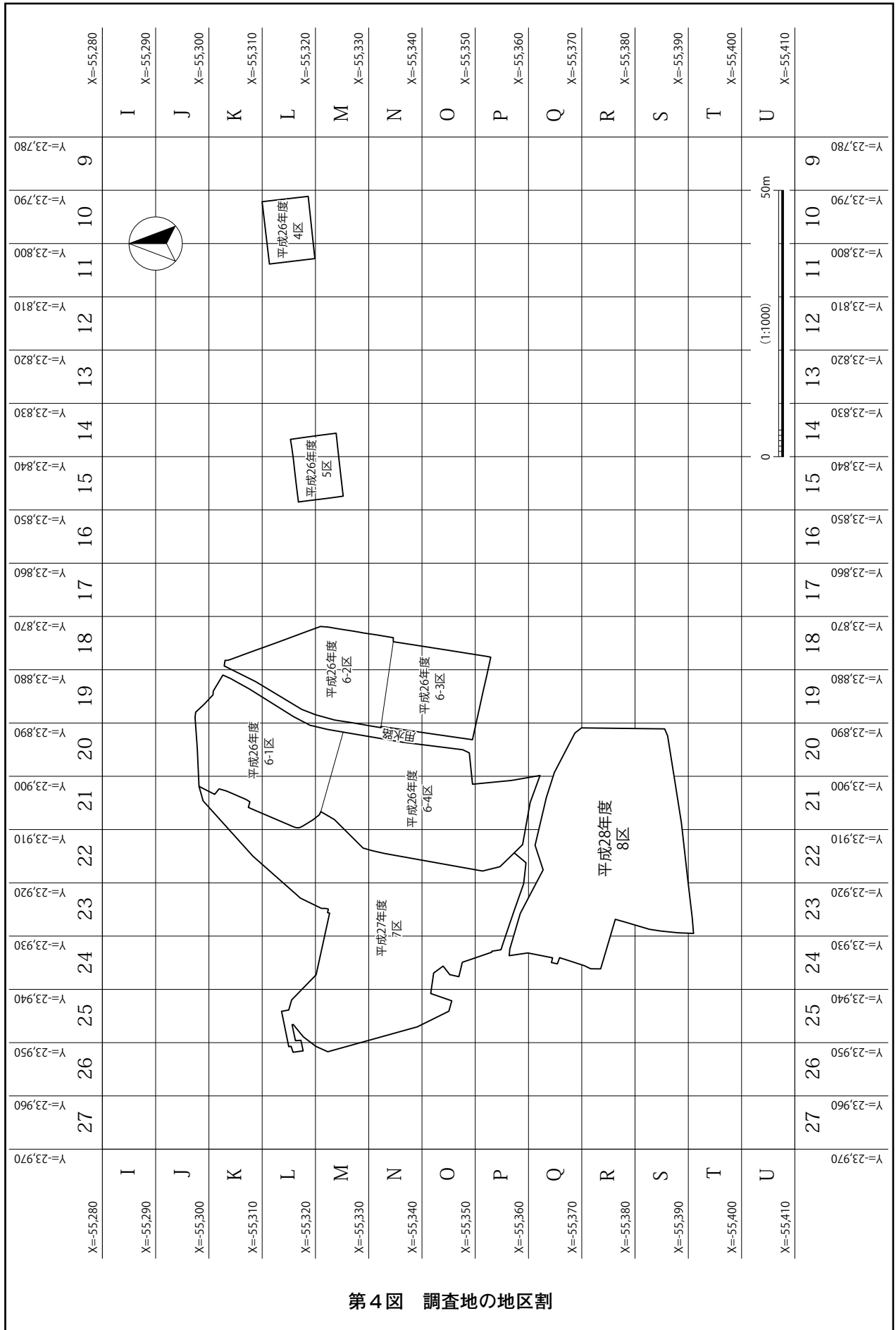
平成26年度調査では、遺構種類の呼称後に竪穴住居1、2、土坑1、2のように番号を付与している。平成27年度、同28年度調査では、遺構番号は、検出した順に番号を付与することを基本方針とし、遺構種類の呼称は、遺構番号3桁数字の後に種類を組み合わせることでS001段状遺構、S002土坑のように記載している。遺構種類については調査の進展、整理段階で変更されることがある。また、遺構番号を付与したものの、調査の結果、攪乱や自然地形であることが明らかとなった場合には欠番とした。下坂本清合遺跡では、平成27年度調査及び平成28年度調査においては1番から通しで遺構番号3桁数字(S001～S750)を付している。

図面記録

図面は作成した年度ごと通し番号を付して管理している。調査地全体図、遺構図、土層図などは電子平板またはトータルステーションを用いた測量、デジタル写真またはレーザー測量を行い、DWG形式またはDXF形式で描画した。ただし、平成26年度調査の一部の遺構図については手測りによる測量を行った。原図(素図)の縮尺は、それぞれ状況に合わせて縮尺1/10、1/20、1/40、1/60、1/80、1/100、1/150、1/200、1/300、1/400で作成した。作成した原図は番号を付し、登録台帳を作成して管理している。

写真撮影

調査地全体の写真撮影は、遺跡の立地と景観、周辺地形との関係性を表現するため、ラジコンヘリコプターを使用した。また、4×5判カラーリバーサル、白黒、6×7判カラーリバーサル、白黒、35mmカラーリバーサル、白黒、デジタルデータの4種類を、撮影対象に応じて適宜選択しながら使用した。4×5判以外はいずれも撮影日順に番号を付し、登録台帳を作成して管理している。なお、デジタルデータには撮影の諸データを写し込み、各フィルムカットの検索性資料の役割を持たせた。デジタルデータは各カットRAWデータとjpegデータの2種類を作成し保存している。



第4章 4～6区の調査成果

第1節 4・5区 立地と基本層序

4区は標高約7.5mの水田内に位置する調査区で、橋脚予定地の南北9m×東西12mを調査した。主な調査地である下坂本清合遺跡6区の山裾部分からは東に約90m離れ、県道を挟んで北東には(公財)鳥取県教育文化財団による調査で礎石建物や井戸などが出土した下坂本清合遺跡3区がある。

現況ではほぼ平坦な地形であるが、下層では南から北に向かう傾斜が存在する。基本層序は次の通りである(第5図、PL.3)。

第Ⅰ層：表土。

第Ⅱ層：灰褐色土(7.5Y R 6/2)。やや粘性があつて鉄分に富む。水田の床土。層厚10cm。

第Ⅲ層：灰褐色粘質土(7.5Y R 5/2)。砂粒をわずかに含む。層厚20cm。

第Ⅳ層：灰褐色粘質土(7.5Y R 4/2)。砂粒を少量含む。層厚20cm。

第Ⅴ層：灰褐色粘質土(7.5Y R 4/2)。砂粒をわずかに含む。粘性が強く、植物遺体を含む。層厚25cm。

第Ⅵ層：灰黄色砂層(2.5Y 6/2)。締まりが良く、粘土と炭を含む。基盤層。

5区も4区同様に水田内の調査区で、4区からは西に30mを隔てる。橋脚予定地の南北9m×東西12mを調査した。基本層序は次のとおりで、第Ⅰ～Ⅳ層は4区と同じ層と、第Ⅶ層は4区の第Ⅵ層と対応する(第9図、PL.3)。

第Ⅰ層：表土。厚さ15cm。

第Ⅱ層：灰褐色土(7.5Y R 6/2)。やや粘性があつて鉄分に富む。水田の床土。厚さ10cm。

第Ⅲ層：灰褐色粘質土(7.5Y R 5/2)。砂粒をわずかに含む。厚さ10cm。

第Ⅳ層：灰褐色粘質土(7.5Y R 4/2)。砂粒をわずかに含む。粘性が強い。厚さ10cm。

第Ⅴ層：灰褐色粘質土(7.5Y R 4/2)。わずかにシルト質。粘性が強い。厚さ15～20cm。

第Ⅵ層：灰色シルト(5Y 5/1)。やや粘性があり少量の炭を含む。厚さ20～35cm。

第Ⅶ層：灰黄色砂層(2.5Y 6/2)。締まりが良く、粘土と炭を含む。基盤層。4区第Ⅵ層に相当。

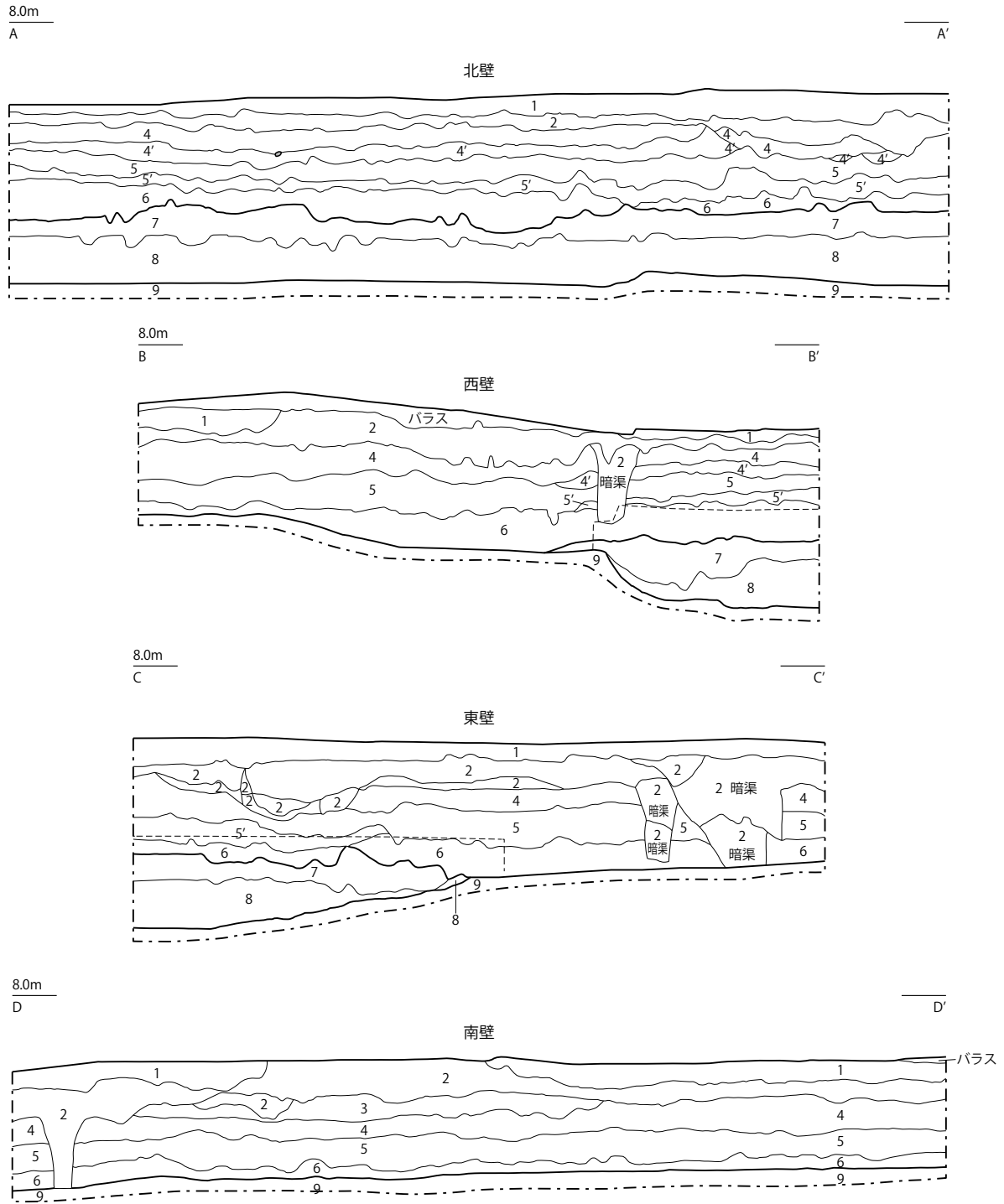
第2節 4区の調査成果

1 調査の概要(第5～8図、PL.3)

第Ⅳ層上面(標高約7.15m)を中世から近世ごろの遺構面と想定して遺構の検出を行ったが、遺構は検出できず、時期不明の土器片が少量出土しただけであった。その下の第Ⅴ層上面(標高約7.0m)では、調査区中央北寄りでは植物遺体が多く含まれる部分を平面的に確認したため、遺構の検出を試みたが遺構は確認できず、摩滅した土器片がわずかに出土したのみであった。

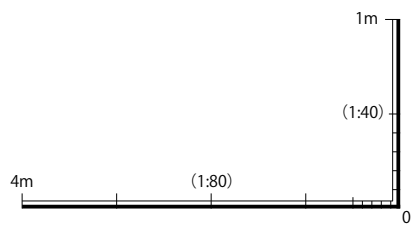
最後に、基盤層と考えられる第Ⅵ層上面(標高約6.5～6.9m)での遺構検出を行った。上述の2面がほぼ平坦で水田耕作に関係していると推定されるのに対し、この面は北から南への傾斜がやや強く、40cm近い比高差がある。特に調査区北辺では深く落ち込む。この落ち込みの堆積層は無遺物であった。また、南部には一見テラス状を呈する部分があるが、幅が狭く不整形であることから、自然地形と考えられる。第Ⅵ層上面では数点の動物骨の小片が出土した。耕作に利用された牛馬のものの可能性があり、そうであればこの面の形成は古代か中世以降になるであろう。

第4章 4～6区の調査成果

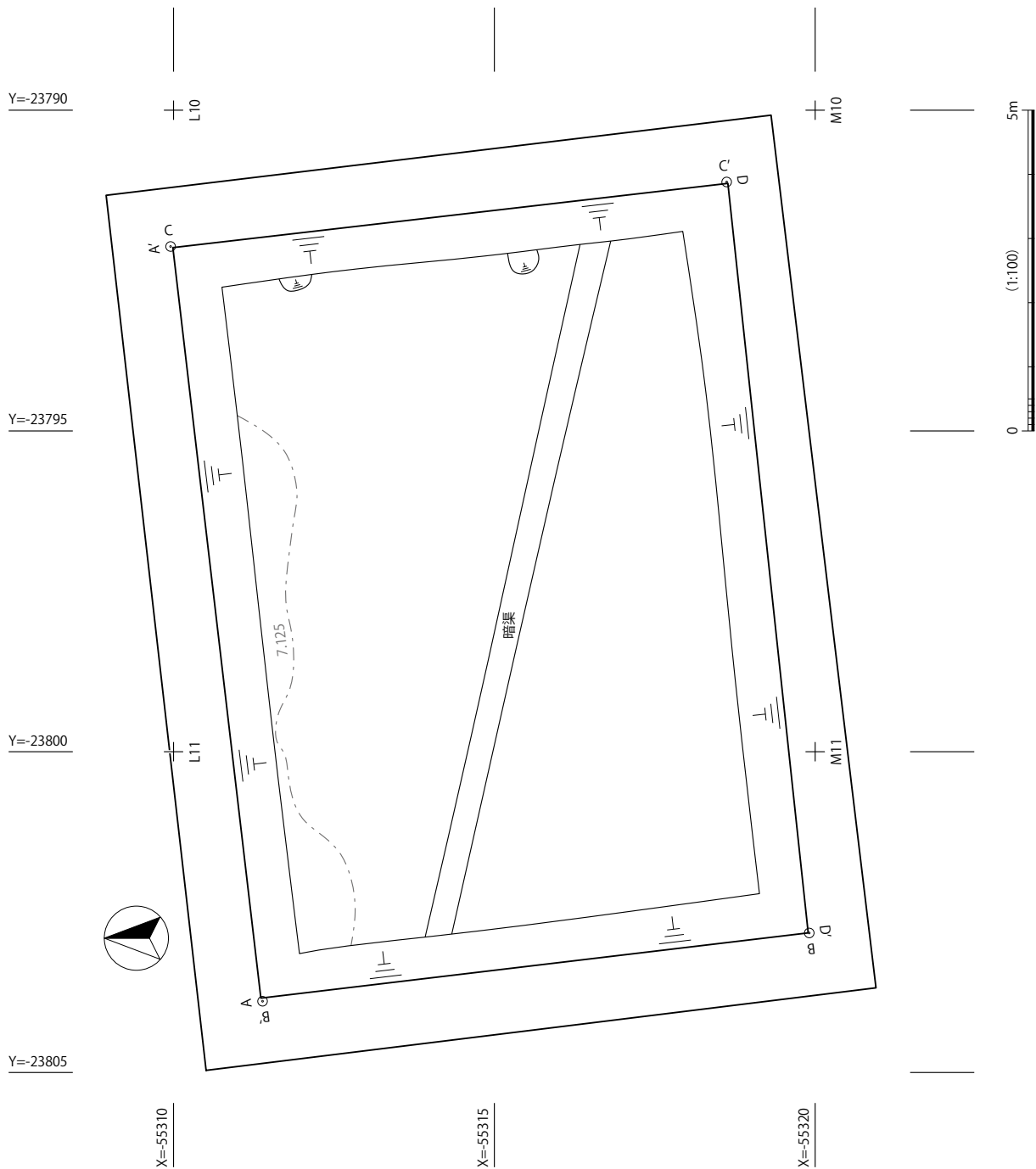


断面基準点 (A-A'～D-D') は第6図に図示

- 【第I層】
- 1 表土
- 2 カクラン土
- 【第II層】
- 3 7.5YR6/2 灰褐色土 やや粘質 砂粒(～径2mm)少混 鉄分多〔床土〕 5区の2と同じ
- 【第III層】
- 4 5区の3と同じ
- 4' 4と同じで、砂粒は混 鉄分は少
- 【第IV層】
- 5 7.5YR5/2 灰褐色粘質土 砂礫粒(～径5mm)少混 5区の4と同じ
- 5' 5と同じで、粘性は強 6のブロック含
- 【第V層】
- 6 7.5YR4/2 灰褐色粘質土 砂粒(～径2mm)わずかに混 粘性強 植物質混 骨片出土
- 7 5Y6/1 灰色シルト 炭少混 無遺物
- 8 10G6/1 緑灰色細砂・2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土の細互層 植物質混 無遺物
- 【第VI層】
- 9 2.5YR6/2 灰黄色砂 粘土混 炭混 しまる 5区の5と同じ



第5図 4区土層断面図



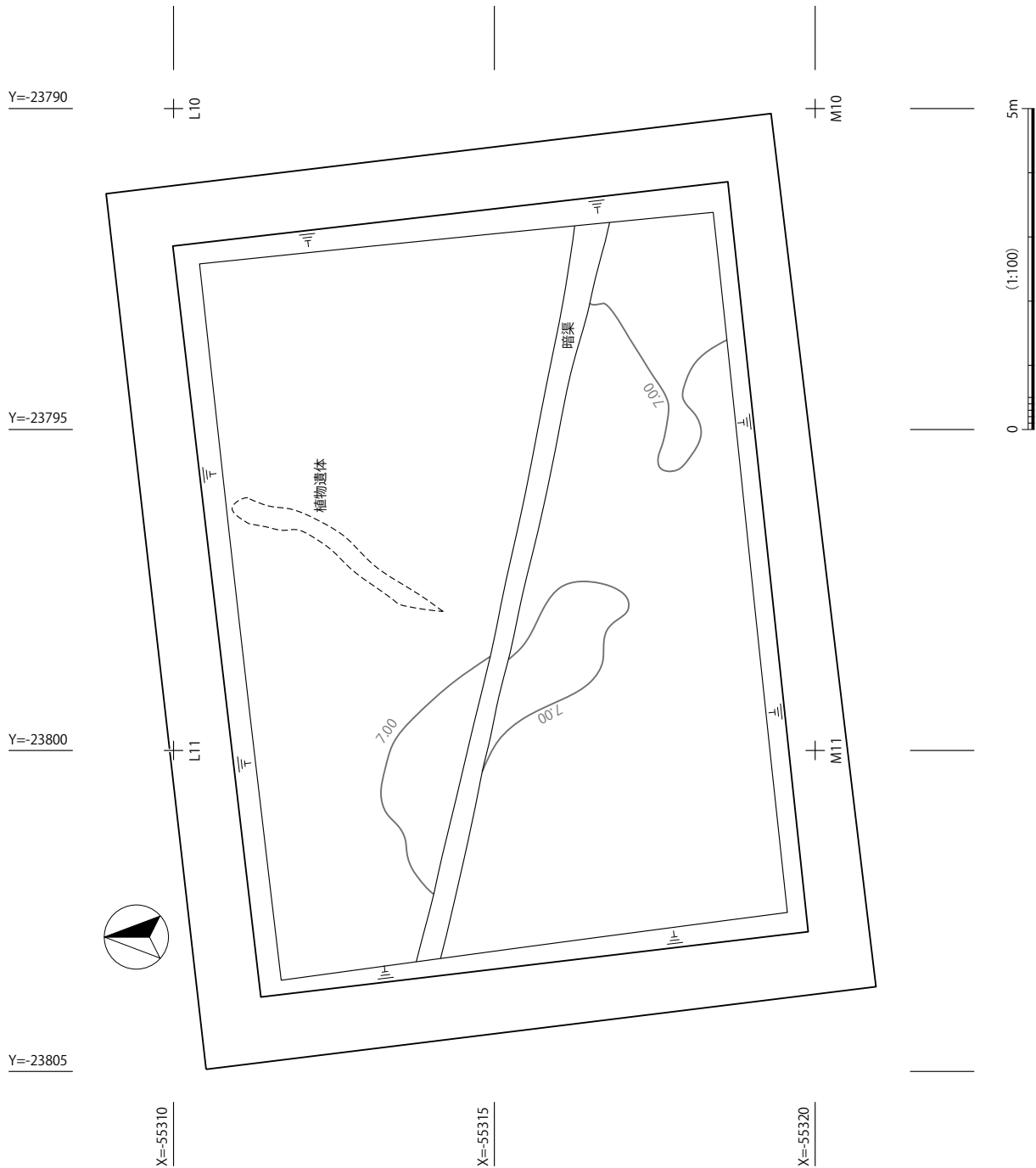
断面図(A-A'~D-D')は第5図

第6図 4区第1遺構面遺構配置図

2 遺構に伴わない出土遺物

4区第IV層出土遺物(第6~8図、表14・54、PL.4・75)

4区からの遺物は総じて少量で、第IV層から4点(1~4)の遺物を掲載している。1は土師器碗である。天神川編年X期に相当しようか。2は土師器甕の口縁部である。古墳時代前期頃に相当しよう。3は青磁碗であり、見込みに圈線が1条めぐる。13世紀中頃~14世紀初頭に比定される。4は砲弾形の土錘であり、器面調整は粗いナデで起伏がある。



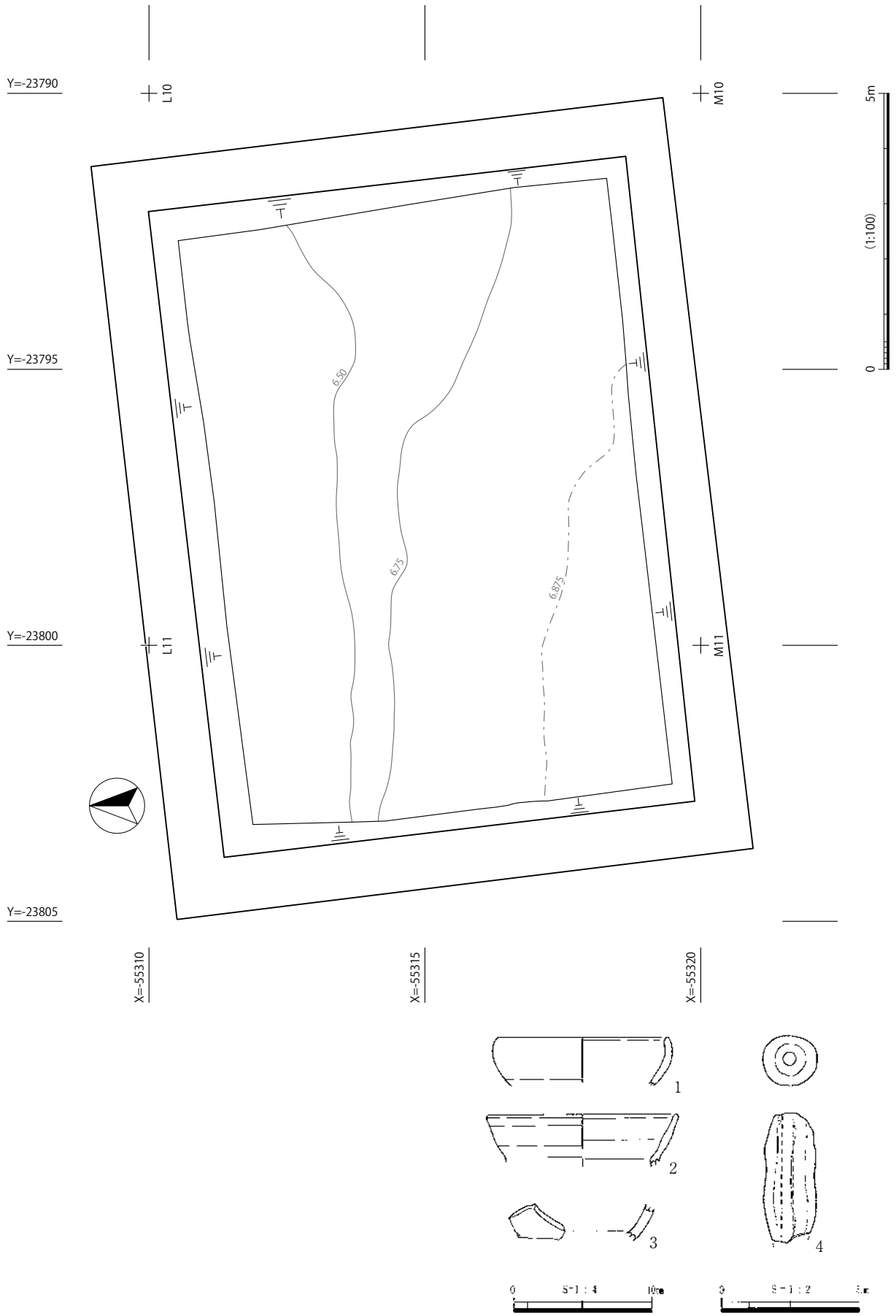
第7図 4区第2遺構面遺構配置図

第3節 5区の調査成果

1 調査の概要(第9～12図、PL.3)

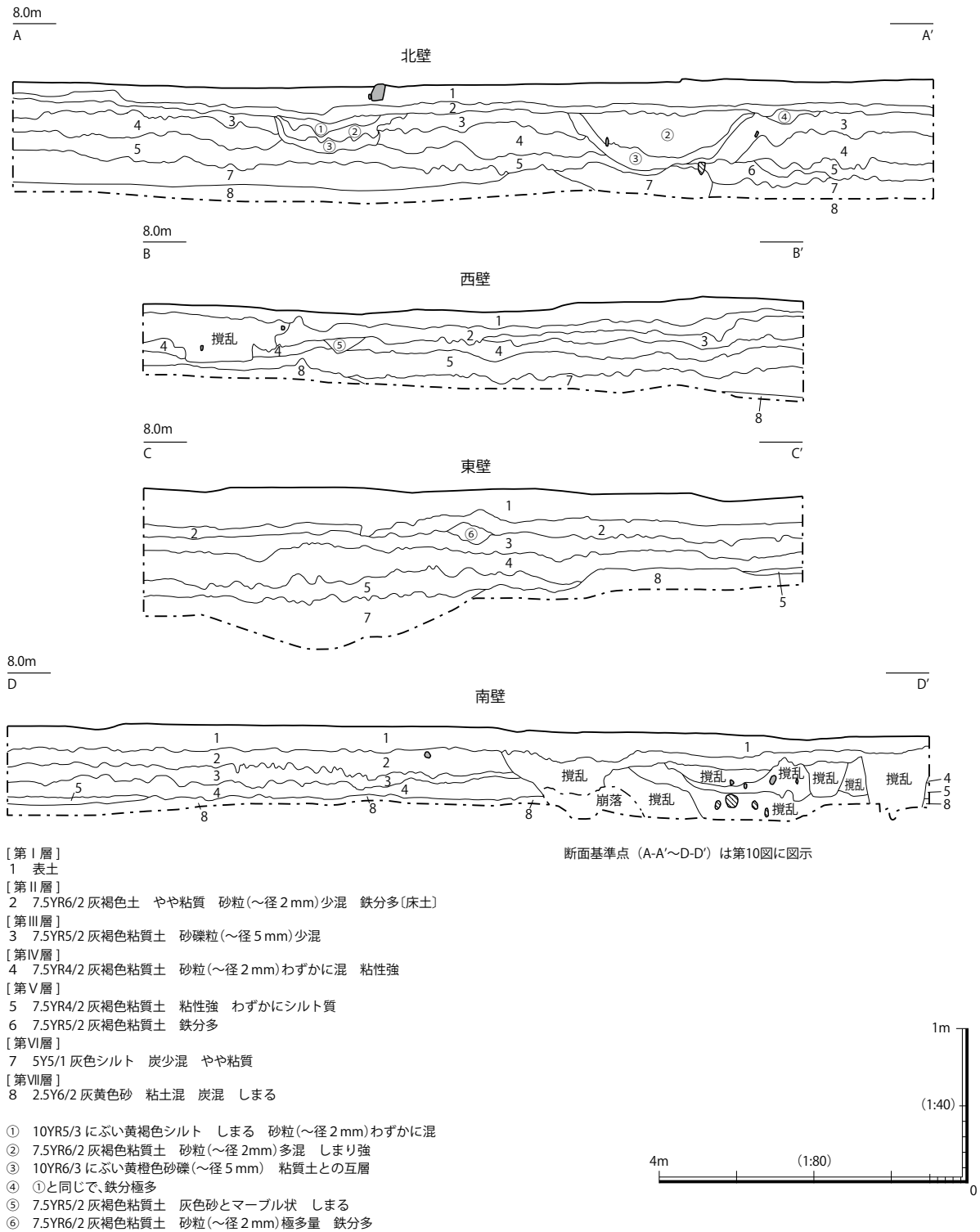
調査区の南西隅から北部中央にかけては昭和後期まで使われていた水路があった場所にあたり、さらに南西隅には4m×2.5mの大きな攪乱が存在するため、調査面積のかなりの部分では元々の地層は失われていた。

まず水路跡を確認した第V層上面(標高約7.3m)で遺構の検出を行った。遺構は存在せず、水路跡



第8図 4区第3遺構面遺構配置図及び第IV層出土遺物

第4章 4～6区の調査成果



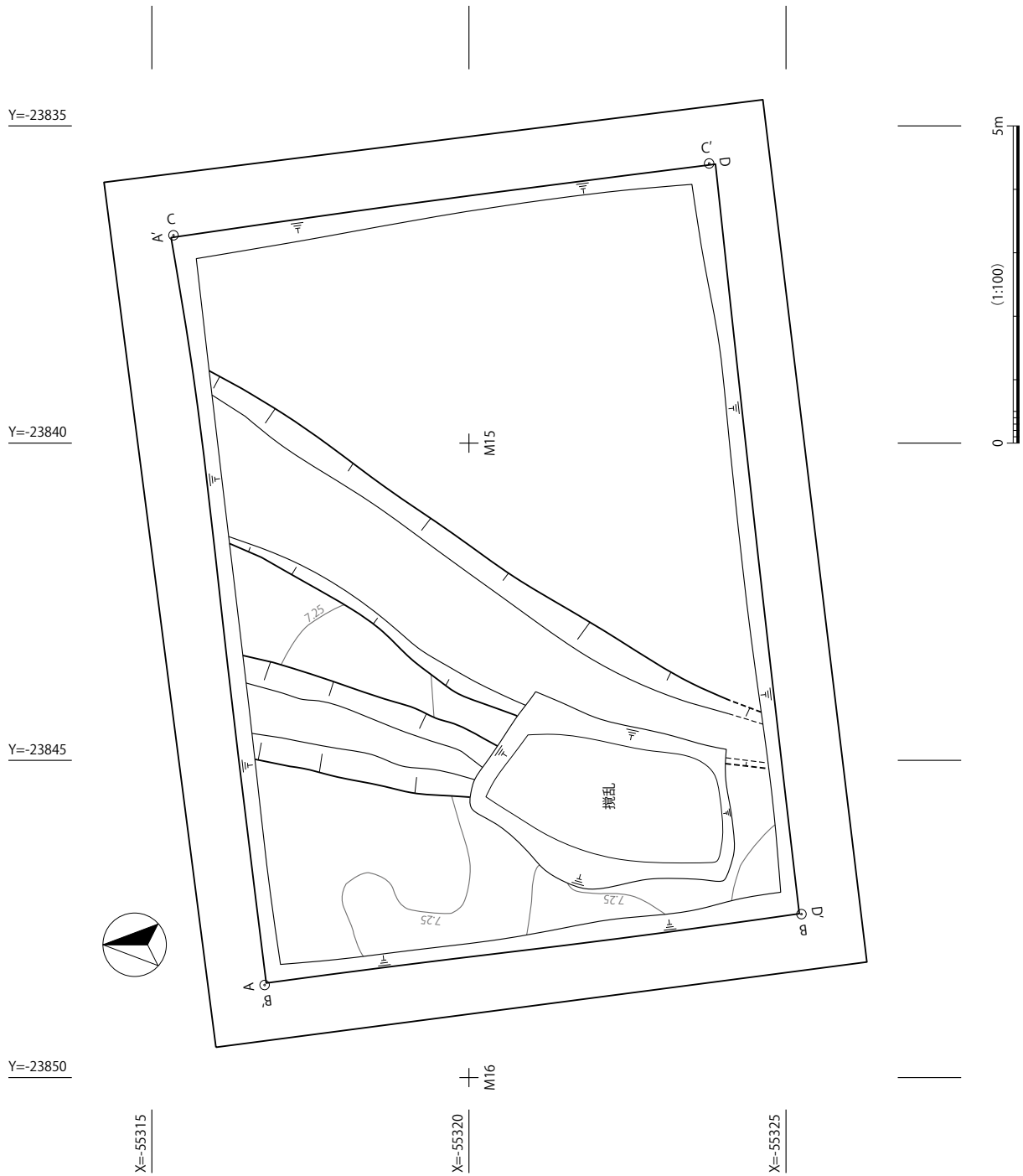
第9図 5区土層断面図

から近世～昭和後期の陶磁器やガラス、金属器などが出土したのみであった。

次いで第Ⅵ層上面(標高約7.15m)で水路に伴う木杭を多数確認したため遺構検出を試みたが、やはり遺構はなく、摩滅した土器片が少量出土するにとどまった。

最後に基盤層である第Ⅶ層上面(標高7.0m前後)を調査した。北東隅でくぼみを確認したが不整形で土層的にも自然地形と判断される。遺物は出土しなかった。

豊富な遺構や遺物を出土した下坂本清合遺跡3区と6区に挟まれた場所でありながら、4区と5区



断面図(A-A'~D-D')は第9図

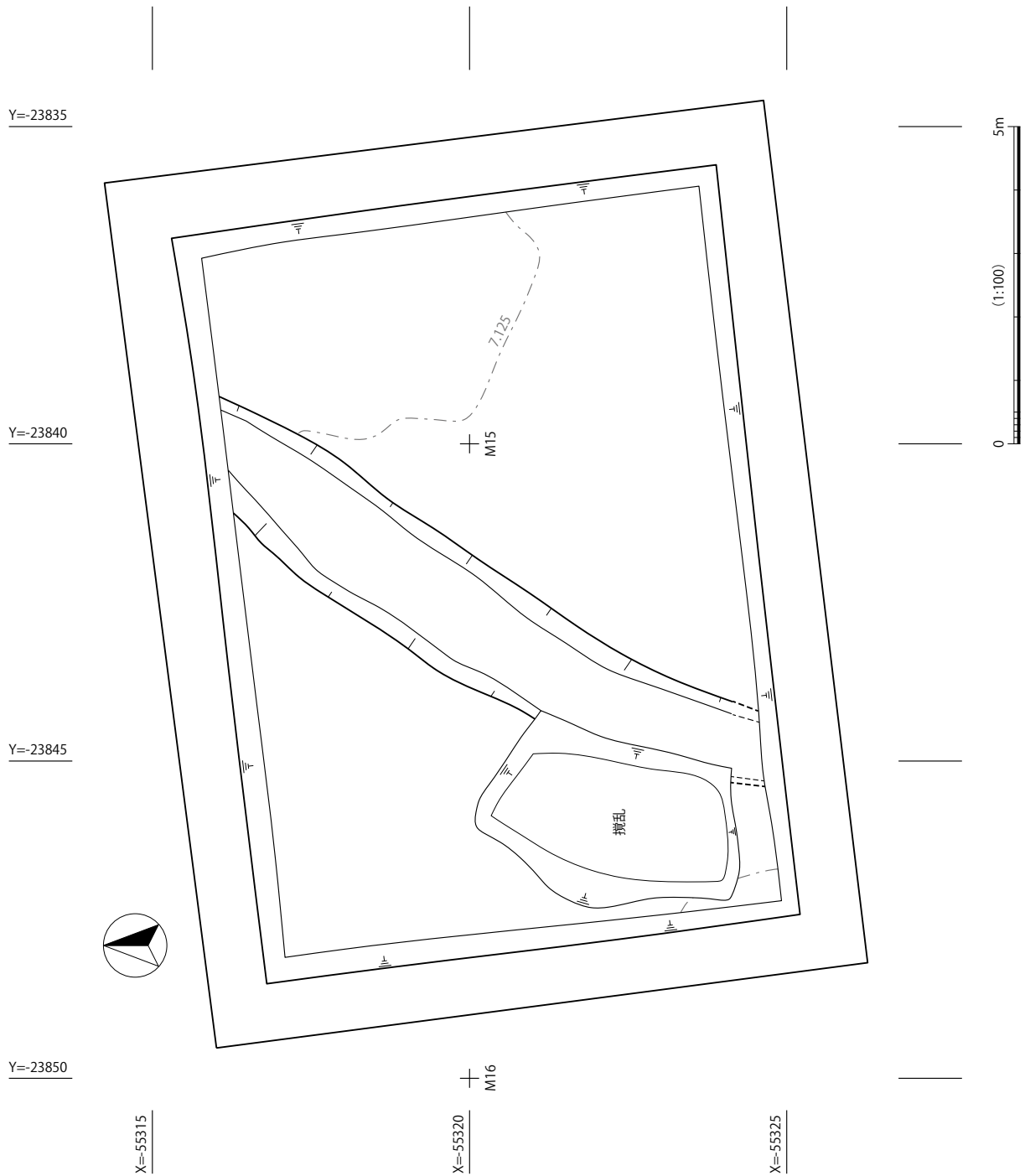
第10図 5区第1遺構面遺構配置図

では明確な遺構や状態の良い遺物が出土しなかったのは、調査区のある谷の形成が古代以降の比較的新しい時期と考えられていることと関係するかもしれない。

2 遺構に伴わない出土遺物

5区出土遺物(第12図、表14、PL.3・4)

層位不明遺物を2点掲載している。5は多条平行沈線を口縁部に施文した複合口縁甕である。弥生



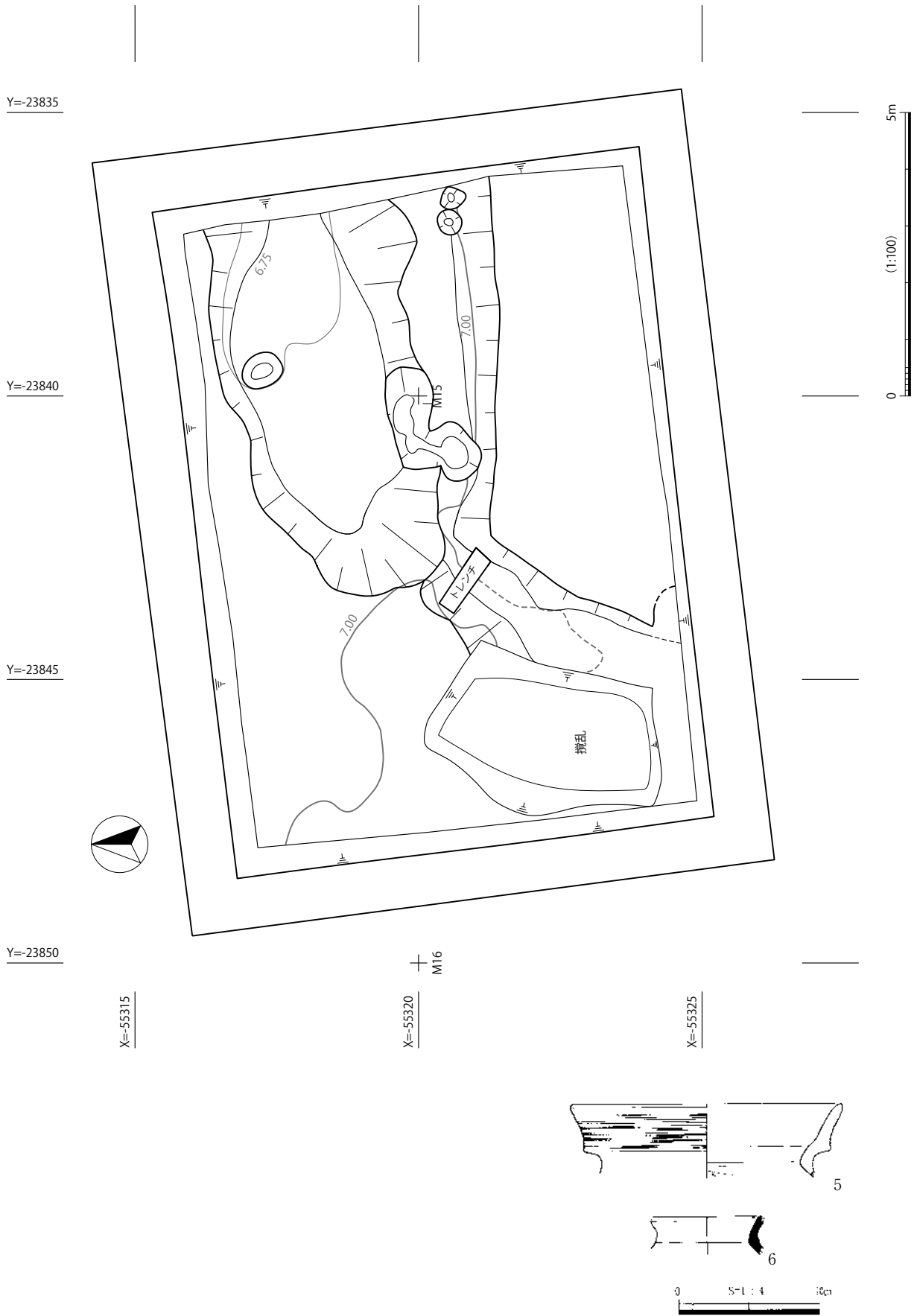
第11図 5区第2遺構面遺構配置図

時代後期後葉である。6は小型の須恵器壺である。

第4節 6-2・3区(平地部) 立地と基本層序

1 基本層序の前提

6区平地部の北部(6-2区)と南部(6-3区)で確認した地層を、色調、粒径、堆積構造及び含まれる遺物の時期により分類し基本層序とする。6区平地部の北部と南部に堆積する地層を別個に記述する理由は、先行して調査を行なった北部より、後で調査を行なった南部の方が地層についての所見が



第12図 5区第3遺構面遺構配置図及び5区出土遺物

第4章 4～6区の調査成果

増したこと、北部は湧水が激しく壁面の崩落も進んだことにより、壁面下部の記録を取ることが不可能な部分が多く、北部と南部の地層の直接的な対照ができなかったことによる。調査後の検証により考え得る6区平地部の北部と南部の基本層序と遺構検出面の対照を第13図で示した。

2 6区平地部北部の基本層序(第13～15図、PL.4)

第Ⅰ層：暗褐色、灰褐色、暗オリーブ褐色土(東壁)。灰黄褐色土(西壁)。圃場整備後の現代水田耕作土と耕盤層。

第Ⅱ層：暗灰黄色、灰褐色土、砂礫混(東壁)。灰黄褐色、にぶい黄褐色土及び砂混(西壁)。圃場整備より前の水田耕作土と耕盤層。

第Ⅲ層：黒褐色から灰褐色、暗オリーブ褐色土及び砂礫混(東壁)。にぶい黄褐色土、礫混(西壁)。近世初頭の水田耕作土。第Ⅲ層までを除去した面は第1遺構面。

第Ⅳ層：以下の5層に分けられる。

第Ⅳ-1層：暗灰黄色砂少混シルト、所により白色粘土ブロックを多く含む(東壁)。にぶい黄褐色土(西壁)。第Ⅳ-1層までを除去した面は第2遺構面。

第Ⅳ-2層：暗灰黄色、暗オリーブ褐色シルト、ところにより白色粘土ブロックを含む(東壁)。にぶい黄褐色土、砂混(西壁)。第Ⅳ-2層までを除去した面は第3遺構面。

第Ⅳ-3層：暗オリーブ褐色砂少混シルト(東壁)。にぶい黄褐色土、砂礫混(西壁)。第Ⅳ-3層までを除去した面は第4遺構面。

第Ⅳ-4層：黄灰色礫多混砂、土器と炭を多く含む(東壁)。にぶい黄褐色土、砂礫混(西壁)北端部に堆積する。

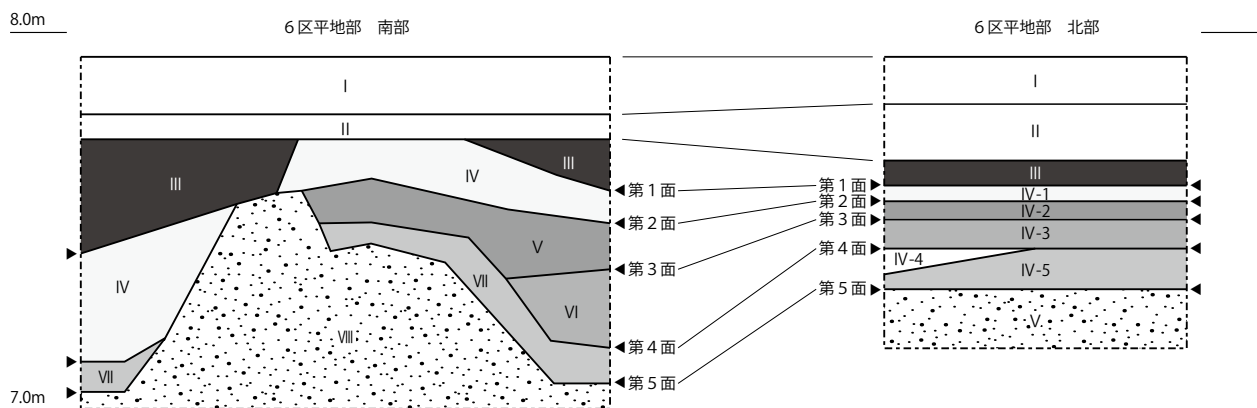
第Ⅳ-5層：灰色シルト。第Ⅳ-5層までを除去した面は第5遺構面。

第Ⅴ層：黄灰色・灰色砂混シルト。基盤層。

3 6区平地部南部の基本層序(第13・16・17図、PL.4～7)

調査直前の客土(第16～17図の1層)を除く基本層序は以下の通りである。

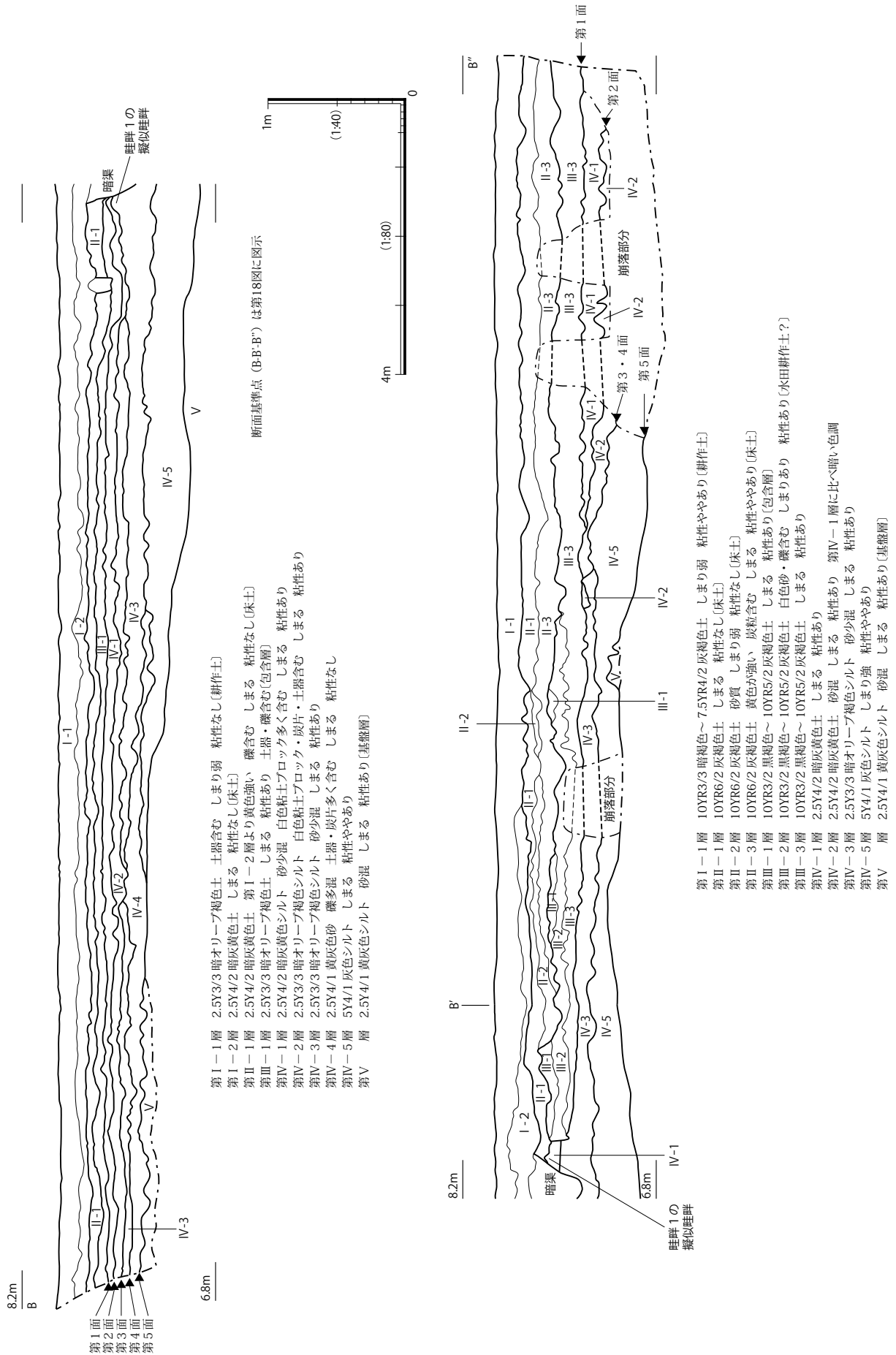
第Ⅰ層：しまりにより分けられる上下2層のにぶい黄褐色細粒砂から礫混シルトから極細粒砂からなり、局所的のにぶい黄褐色中粒砂から礫多混シルトから細粒砂を挟む。下部(第16～17図の5層)に



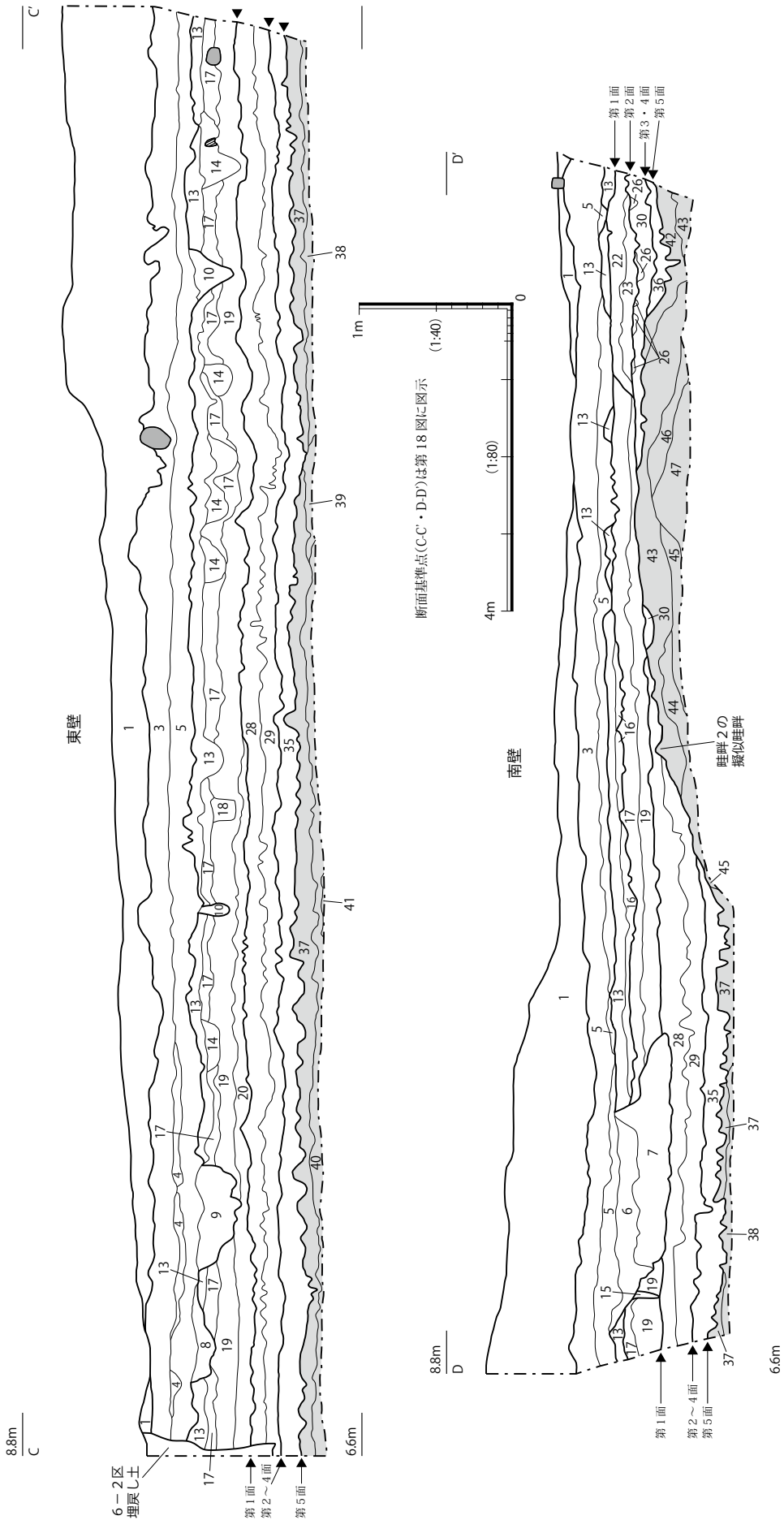
第13図 6区平地部基本層序・遺構検出面对照図



第14図 6区平地部北部西壁土層断面図

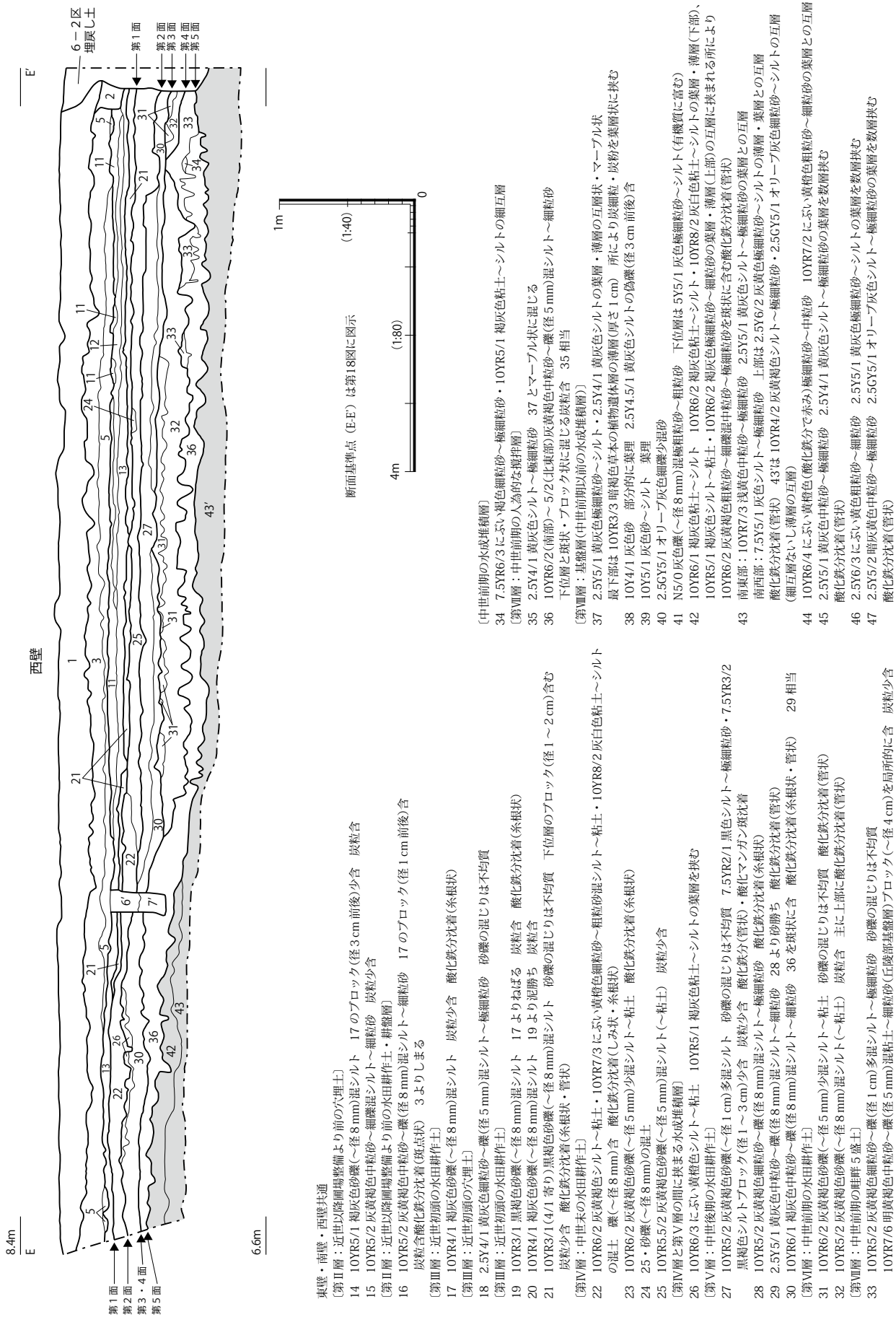


第15図 6区平地部北部東壁土層断面図



第16図 6区平地部南部東・南壁土層断面図

- 東壁・南壁・西壁共通
 (調査直前の客土)
1. ブロック土・碎石・マサ
 2. 3・11のブロック土
 3. 10YR5/3 に近い黄褐色細粒砂～礫(径8mm)混シルト～極細粒砂
 4. 10YR5/3 に近い黄褐色中粒砂～礫(径1cm)多混シルト～細粒砂
 5. 10YR5/3 に近い黄褐色細粒砂～礫(径8mm)混シルト～極細粒砂
 6. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
- 第1層：圃場整備後の現代水田耕作土・耕盤層
7. 礫(卵大～径20cm)主体 7は卵大前後
 8. 13・17・19のブロック土主体(径5～10cm) 礫(径2～5cm)含
 9. 17・19・13のブロック土主体(径5～10cm) 礫(径2～10cm)含(所により礫主体)
 10. 13のブロック土主体 17のブロック土(径5cm前後)含
 11. 10YR6/1 黄褐色中粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂
 12. 酸化鉄分沈着(茶根状・斑点状)
 13. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
- 第1層：近世以降圃場整備より前の水田耕作土・耕盤層
14. 10YR6/1 黄褐色中粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂
 15. 酸化鉄分沈着(茶根状・斑点状)
 16. 10YR6/1 黄褐色細粒砂～礫(径8mm)混シルト～極細粒砂
 17. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 18. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 19. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 20. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 21. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 22. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 23. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 24. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 25. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 26. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 27. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 28. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 29. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 30. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 31. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 32. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 33. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 34. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 35. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 36. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 37. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 38. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 39. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 40. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
 41. 10YR5/2 灰黄褐色礫(～径8mm)混シルト～砂
- 第1層：現代暗葉灌漑土
42. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
 43. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
 44. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
 45. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
- 第1層：圃場整備前の現代(穴埋)土
46. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
 47. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
 48. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
 49. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
 50. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
 51. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
 52. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
 53. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
 54. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)
 55. 13・17・19のブロック土(径5cm前後)



第17図 6区平地部南部西壁土層断面図

は斑点状に酸化鉄分が沈着する。ビニール製品等の現代遺物を含む。〔主に圃場整備後の現代水田耕作土と耕盤層〕

第Ⅱ層：褐灰色ないし灰黄褐色の中粒砂から礫混シルトから細粒砂、礫混シルトから砂の数層の単層からなる。第Ⅰ、Ⅲ層より砂勝ち。ところにより下部(第16図の16層)に径1cm前後の下位層のブロックを含む。しみ状と斑点状に酸化鉄分が沈着する。近代までの国産陶磁器片を含む。〔主に近世以降圃場整備より前の水田耕作土と耕盤層〕

第Ⅲ層：砂礫の混じりの多寡や色調により分けられる数層の黒褐色ないし褐灰色砂礫混シルトからなる。塊状。第Ⅲ層までを除去した面は第1遺構面。〔主に近世初頭の水田耕作土〕

第Ⅳ層：灰黄褐色砂礫混シルトから粘土の数層の単層からなる。塊状。中世土師器片を含む。第Ⅳ層まで(南東部は第Ⅴ層まで)を除去した面は第2遺構面。〔主に中世末の水田耕作土〕

第Ⅴ層：灰黄褐色を基調とする数層の中粒砂から礫混シルトから細粒砂、砂礫多混シルトからなる。全体に砂勝ちで、砂礫の混じりは不均質。ところにより径1～3cmのブロック土を少し含む。中世土師器片を含む。南西部では、第Ⅳ層との間に、粘質土の葉層からなる水成堆積層を部分的に挟む。第Ⅴ層までを除去した面は第3遺構面。〔主に中世後期の水田耕作土〕

第Ⅵ層：灰黄褐色砂礫混シルトから粘土。下面は凹凸があり、砂礫の混じりは不均質。南部の北西部に堆積する。中世土師器片を含む。第Ⅵ層までを除去した面は第4遺構面。〔主に中世前期の水田耕作土〕

第Ⅶ層：灰黄褐色ないし黄灰色のシルトから細粒砂。南東部では中粒砂から礫混。下面は凹凸があり、第Ⅷ層と斑状、マーブル状に混ざる。中世土師器片や加工木片を含む。北西部では、細粒の砂と粘土からシルトの細互層からなる水成堆積層を局所的に挟み、これを平面的に擬似畦畔として検出した。第Ⅶ層までを除去した面は第5遺構面。〔中世前期の人為的な攪拌層と畦畔盛土〕

第Ⅷ層：見た目灰色の砂、シルト及び粘土からなり、層理や葉理が見られる。自然木片を含む。〔中世前期以前の水成堆積層。基盤層〕

第5節 6-2・3区(平地部) 検出した遺構

1 調査の概要(第18～26図)

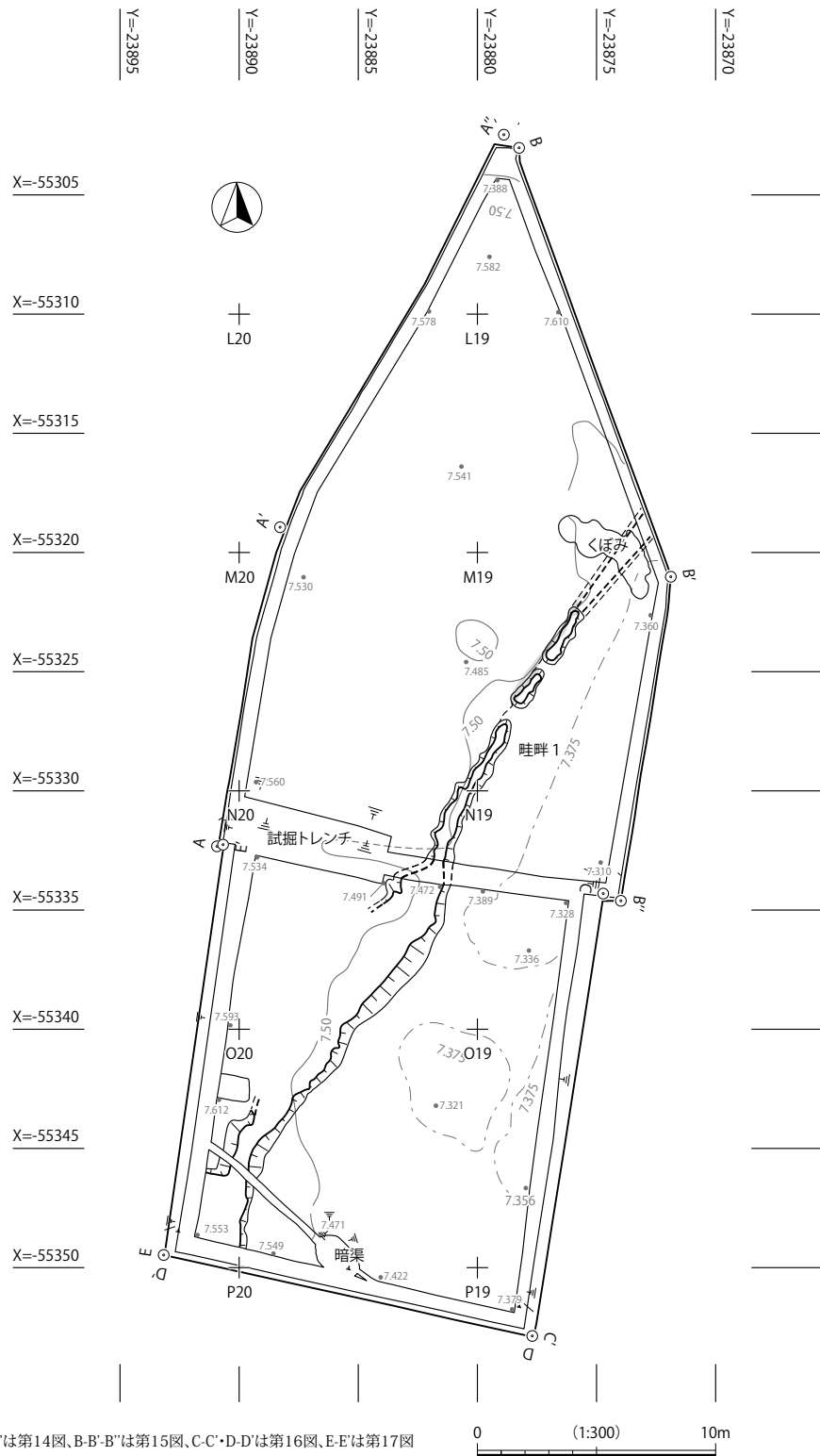
6区平地部では、5面の遺構検出面で遺構検出を行なった。その結果、畦畔5条、ピット1基を検出し、他に、水田耕作による耕地段差や窪みを検出した。耕地段差や窪みについては、遺構としては個々に記載せず、地形として各面の遺構配置図に示した。

2 第1遺構面

第1遺構面は第Ⅲ層までを除去した面で、この面で検出した遺構は畦畔1条である。

畦畔1(第18～20図、PL.4～6)

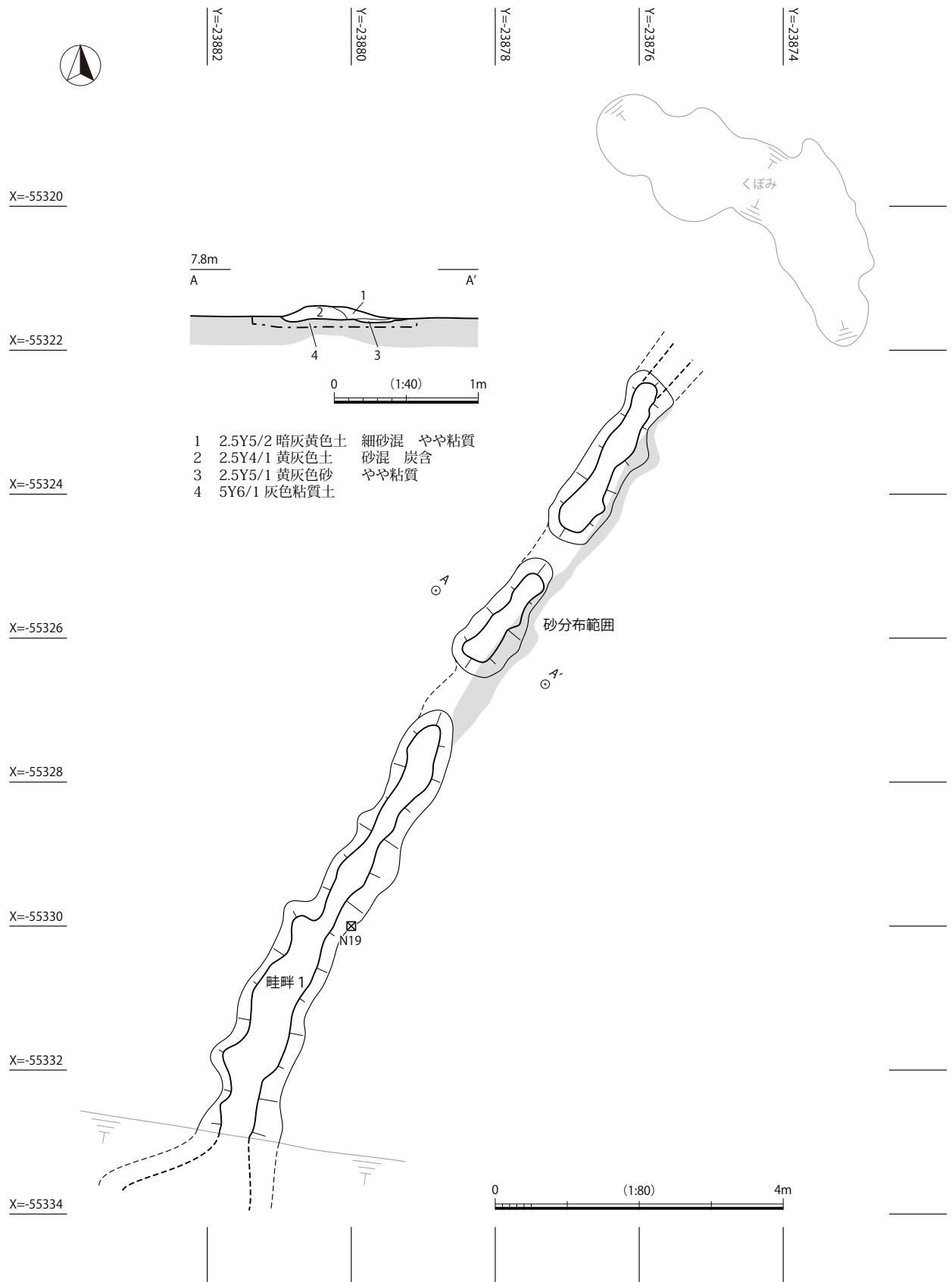
6区平地部の南西部から北東部にかけてのM18～19、N19、O19～20グリッドで検出した。南西-北東方向に延び、規模は、検出長31.72m、幅0.56～2.7m、壁面で確認できる構築面からの残存高は0.16mである。畦畔を構築する盛土はほとんど残っておらず、南端部で残っていた盛土も表土掘削時に削平されたため、わずかに残る盛土の基底部と水田耕作により削り残された砂層を擬似畦畔として検出した。わずかに残る盛土は、灰黄褐色細粒砂から礫少混シルトから極細粒砂で、所により砂礫はブロッ



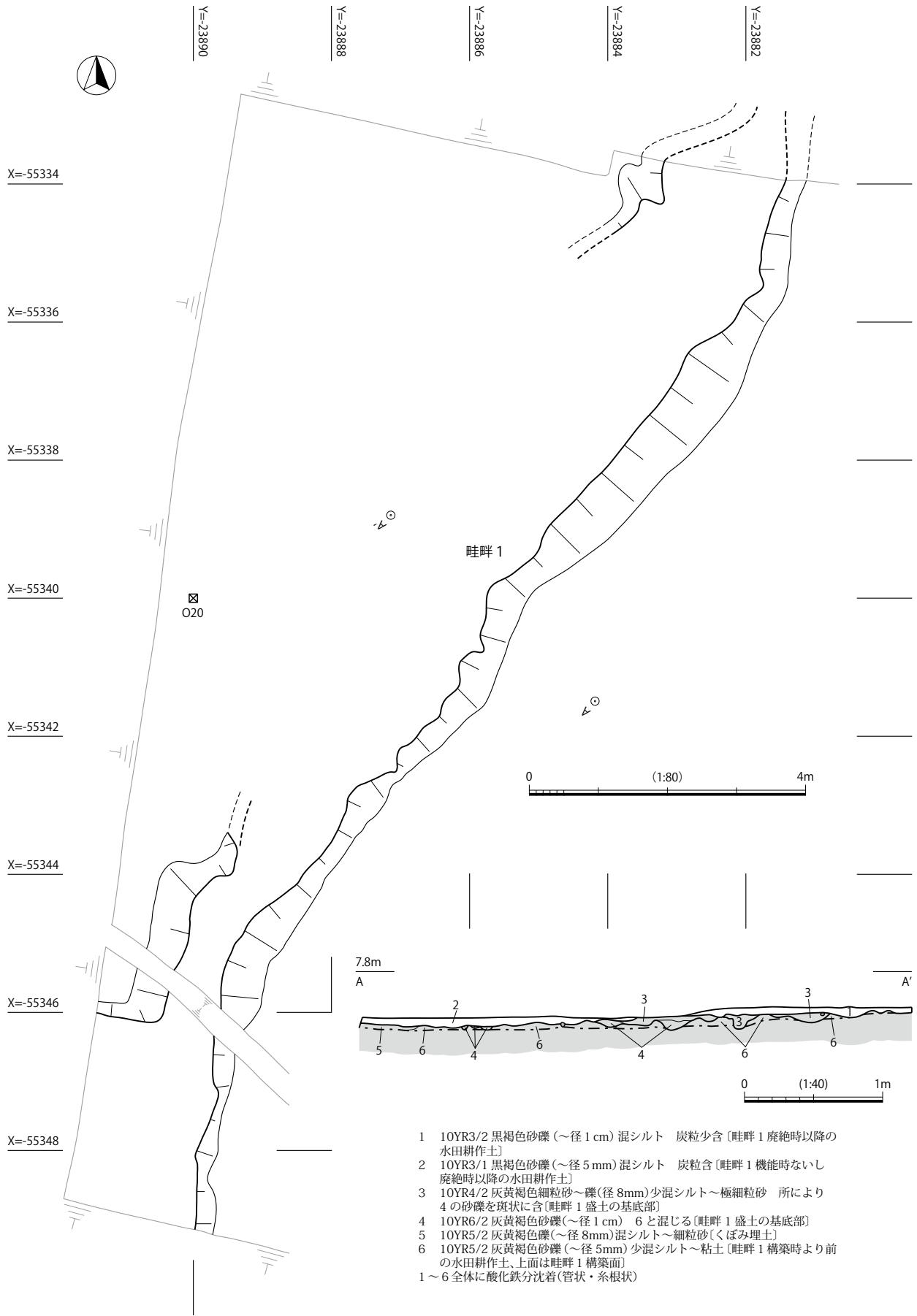
第18図 6区平地部第1遺構面遺構配置図

クを含む。盛土内から出土した遺物はない。畦畔1の帰属時期は、層位から、江戸時代初頭に比定できる。

畦畔1の検出面は、畦畔1を境に西側が高く東側が低い。このことから、畦畔1は耕地段差の境に構築されたものと推定できる。



第19図 畦畔1 平面・断面図(6区平地部北部)



第20図 畦畔1 平面・断面図(6区平地部南部)

3 第2遺構面

畦畔2(第21・22図、PL.6)

6区平地部南東部のN18～19、O18～19、P19グリッドで検出した。南西 - 北東方向に延び、規模は、検出長18.33m、幅0.14～0.79m、擬似畦畔として残る基盤層の高さは最大0.04mである。畦畔を構築した盛土はほとんど残っておらず、南部では水田耕作により削り残された基盤層を擬似畦畔として検出し、北部ではわずかに残る盛土の基底層と水田耕作により削り残された砂層を擬似畦畔として検出した。

わずかに残る盛土は基盤層のブロックを主体とし、下位の砂との混土である。盛土内から出土した遺物はない。畦畔2の帰属時期は層位から、室町時代に比定できる。

畦畔2の検出面は、畦畔2を境に西側が高く東側が低い。このことから、畦畔2は耕地段差の境に構築されたものと推定できる。

畦畔3(第21・22図、PL.6)

6区平地部南東部のN19グリッドで検出した。第Ⅵ層を除去した第2遺構面で検出した。畦畔2から概ね直交する形で北西方向に延び、規模は検出長1.82m、最大幅0.8mである。盛土は残っておらず、水田耕作により削り残された砂層を擬似畦畔として検出した。北西側は後世の水田耕作により完全に削られており、残っていなかった。畦畔3の帰属時期は、畦畔2に連結し並存していたと考えられることから、室町時代に比定できる。

畦畔3は、検出した状況から、畦畔2によって東西に段状に区画された水田の中をさらに小さく区画するために構築されたものと推定できる。

畦畔4(第21・22図、PL.6)

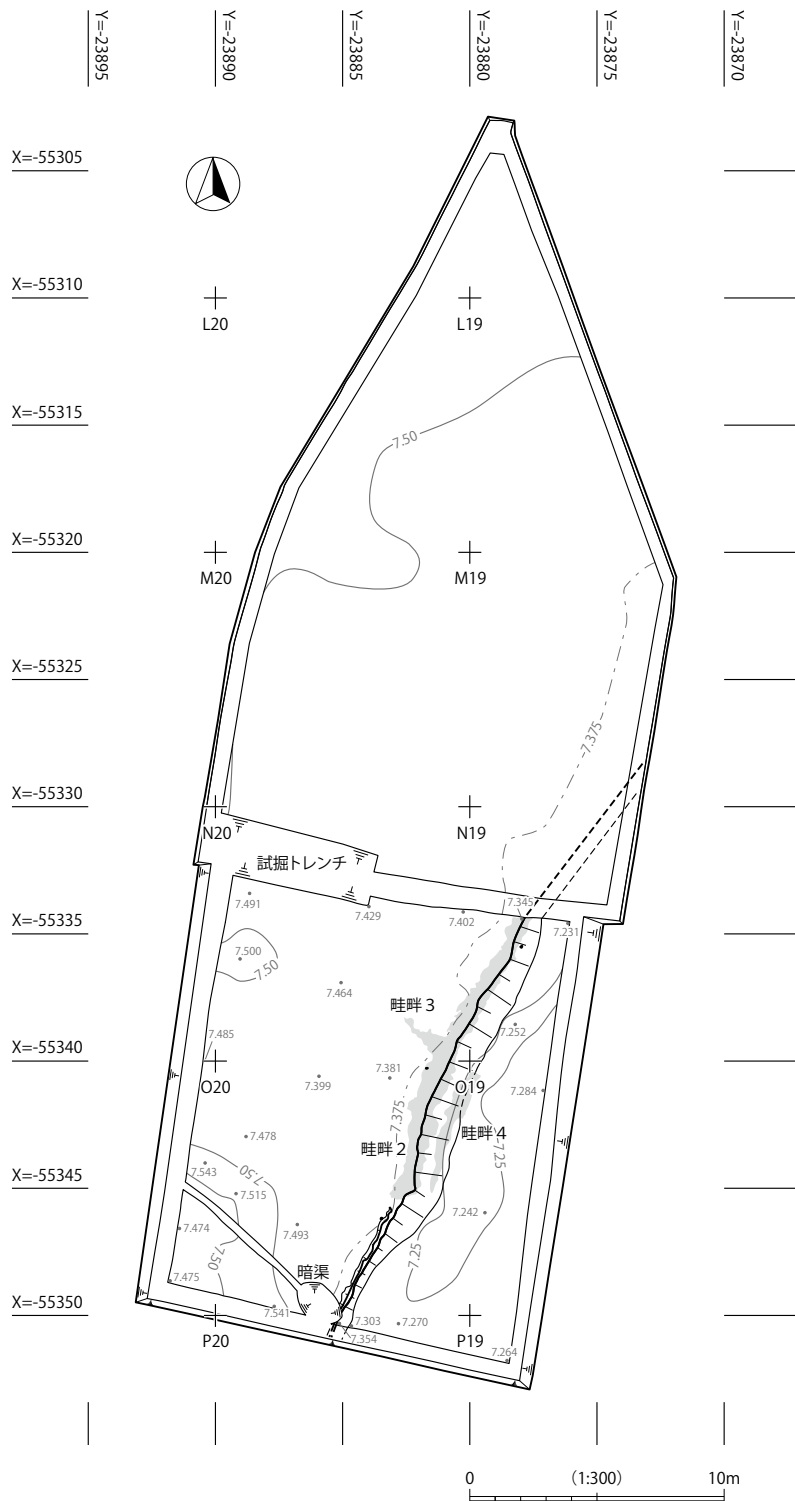
6区平地部南東部のO18～19グリッドで検出した。基盤層のブロックと混じる砂礫からなる帯状の広がりが残る擬似畦畔として検出した。畦畔2の1m前後東側で平行し、南西 - 北東方向に延び、規模は検出長5.04m、幅0.26～0.77m、残存する砂礫の厚さは最大0.08mである。北東側と南西側は後世の水田耕作により完全に削られており、残っていなかった。畦畔4の帰属時期は、層位から室町時代に比定できるが、畦畔2よりは新しい。

畦畔4の検出面は、西側が高く東側が低い。このことから畦畔4は畦畔2に後続する畦畔として、耕地段差の境に構築されたものと推定できる。

4 第4遺構面

畦畔5(第24・25図、PL.4・7)

6区平地部の中央部西寄りのN19～20グリッドで検出した。北西 - 南東方向に延び、規模は検出長6.83m、幅1.03～2.28m、壁面で確認できる構築面からの残存高は0.1mである。畦畔を構築した盛土は南東側に行くにつれ後世の水田耕作により削られ、ほとんど残っていなかったが、北西部では比較的残りが良かった。そのため、北西部では畦畔5の構築時より前に堆積した水成堆積層を擬似畦畔として検出し、その脇に部分的に残る盛土を検出した。南東部では水田耕作により削り残された部分を擬似畦畔として検出した。最も残りの良い西壁部分で確認した盛土は、細粒砂から礫が不均質に混じる灰黄褐色シルトから極細粒砂で、山側の基盤層である明黄褐色土のブロックを局所的に含む(第17図の33層)。盛土と同じ土は、畦畔5周辺に散らばって分布しており、畦畔5は後に崩されたと推

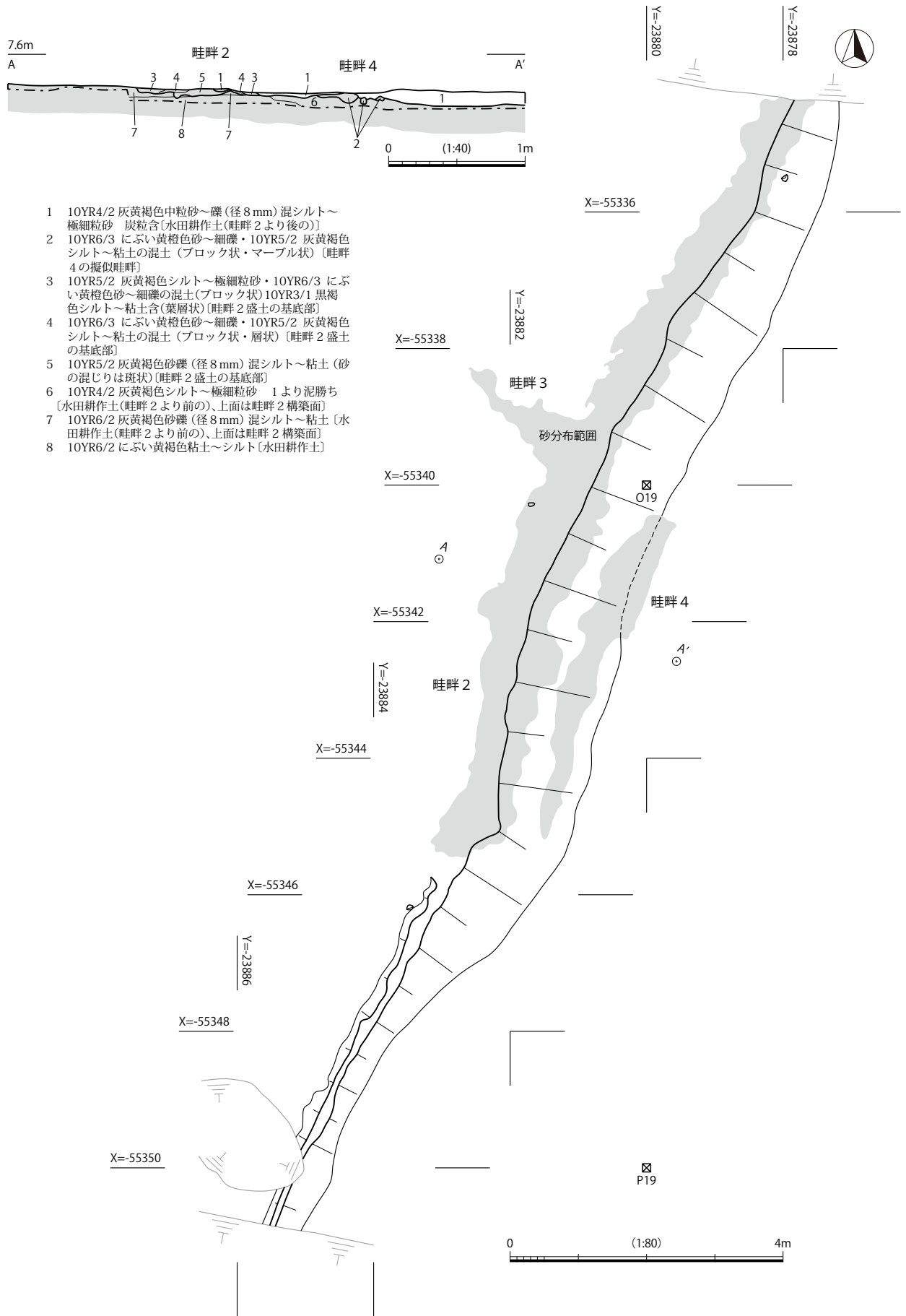


第21図 6区平地部第2遺構面遺構配置図

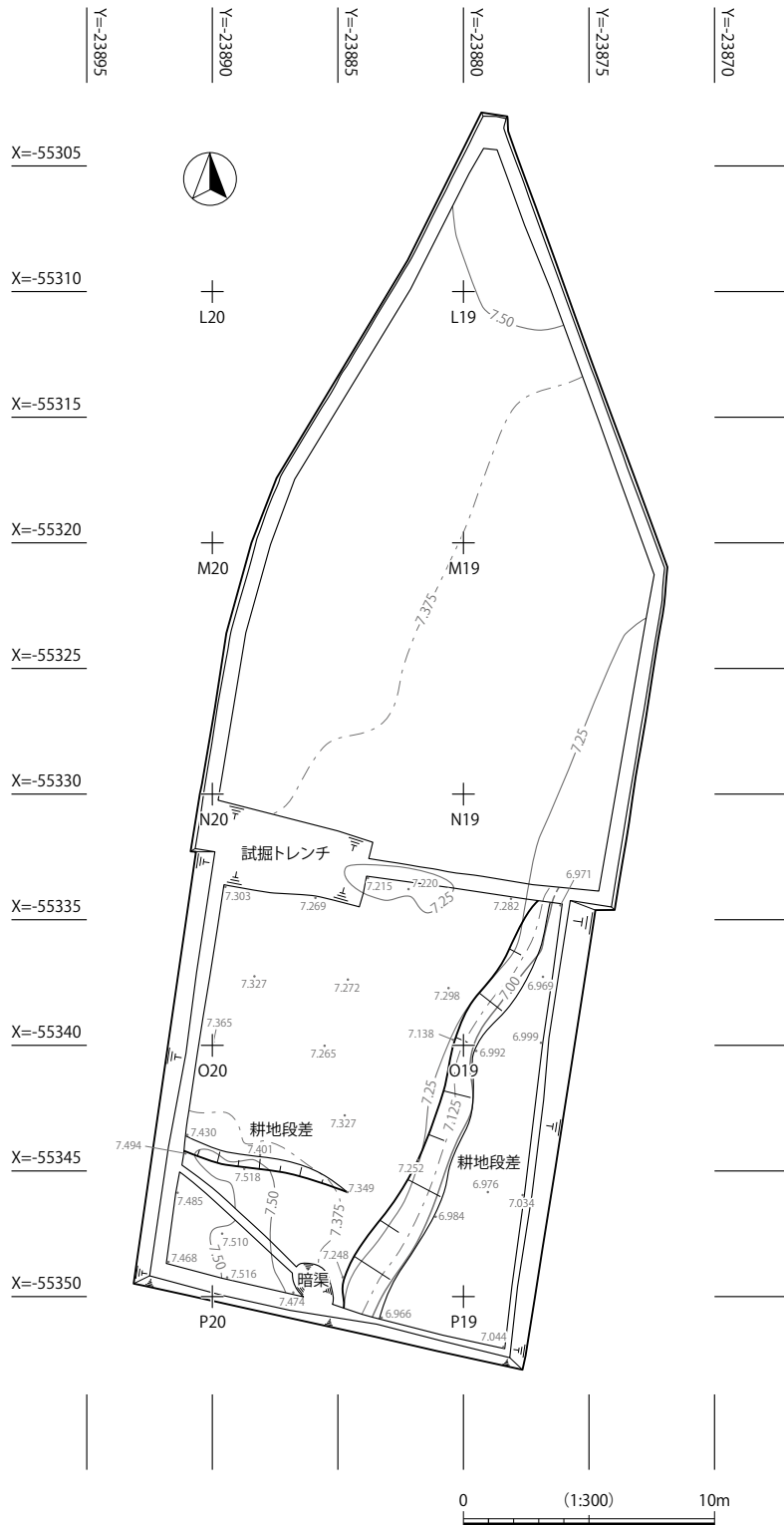
定できる。盛土内からの出土遺物はない。畦畔5の帰属時期は層位から、鎌倉時代に比定できる。

畦畔5-P1 (第24・25図、PL.4・7)

6区平地部の中央部西寄りのN19グリッド、畦畔5の南で検出した小さな穴である。平面は不整な楕円形で、規模は長軸0.18m、短軸0.16m、検出面からの最大深さは0.06mである。埋土は、炭片を含む混土からなる。埋土からの出土遺物はない。P1の帰属時期は、畦畔5を覆う土の除去面で検出したことから、鎌倉時代に比定できる。



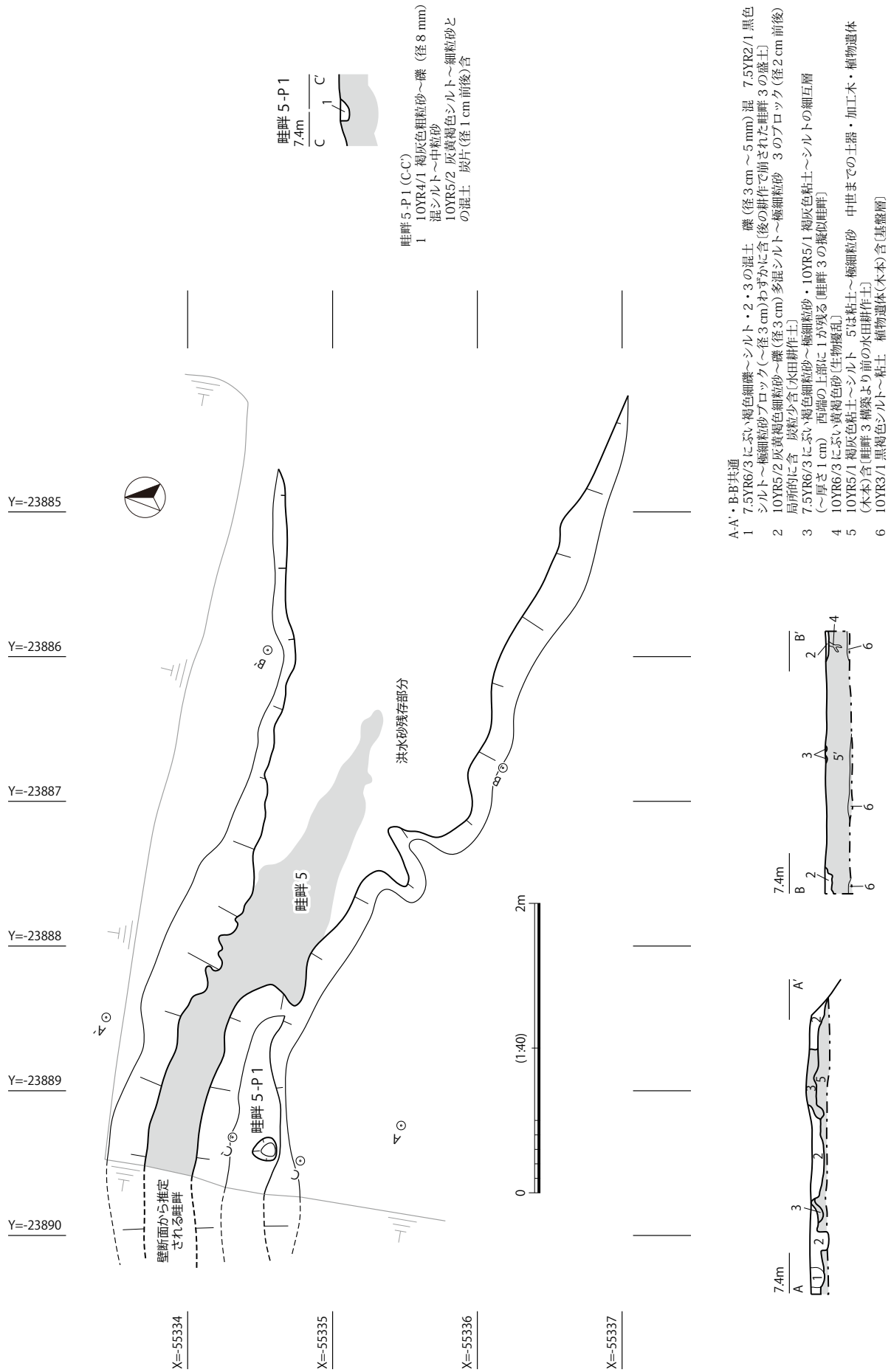
第22図 畦畔2・3・4平面・断面図



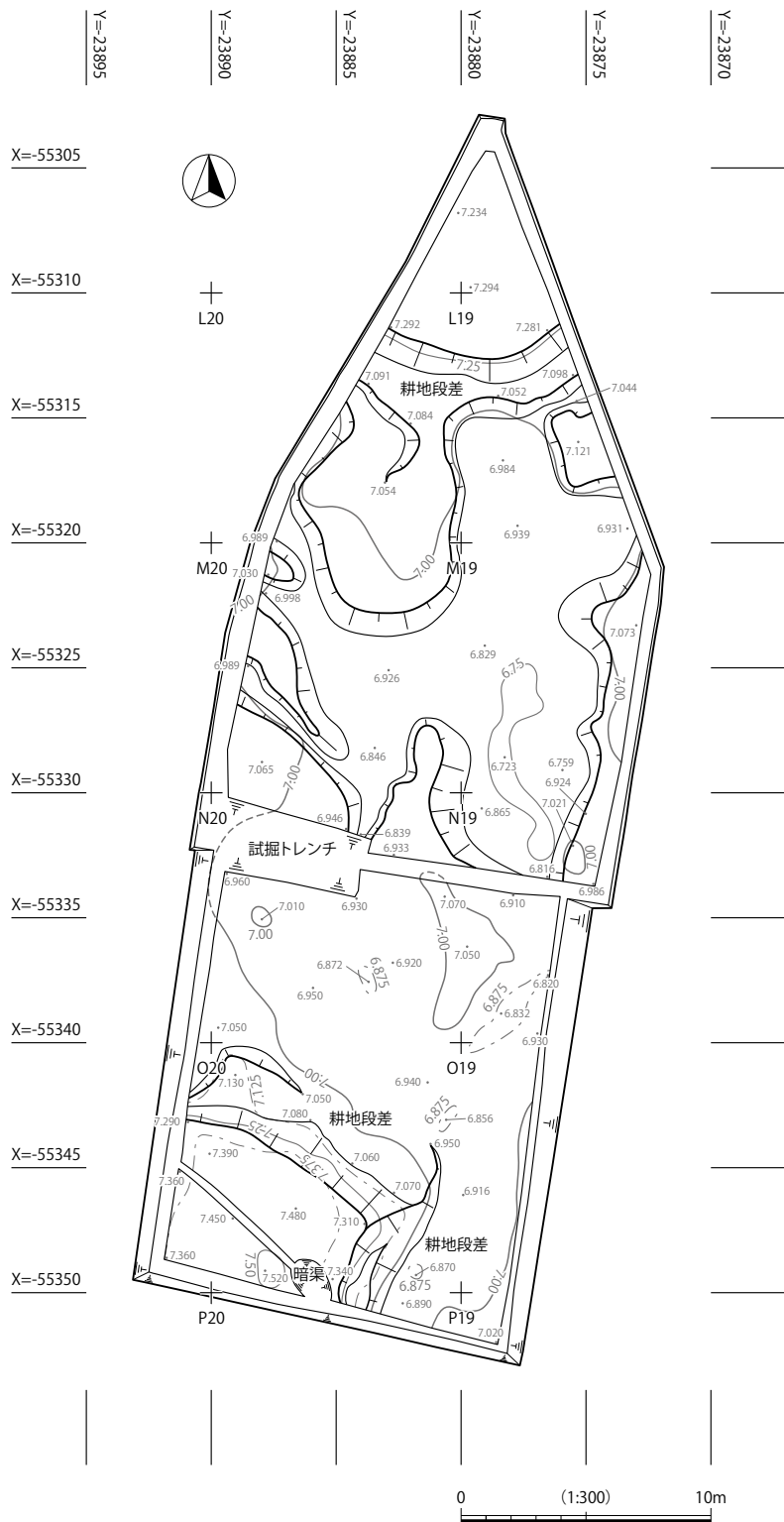
第23図 6区平地部第3遺構面遺構配置図

第6節 6-2・3区(平地部) 遺構に伴わない遺物

残存する畦畔の盛土やピット埋土からの出土遺物はなく、基盤層より上の水田耕作土からの出土遺物がすべてである。出土した遺物は土器の細片が主で、他に加工木片や自然木片を含む。以下に、各層から出土した土器について記載する。



第25図 畦畔5・畦畔5-P1平面・断面図



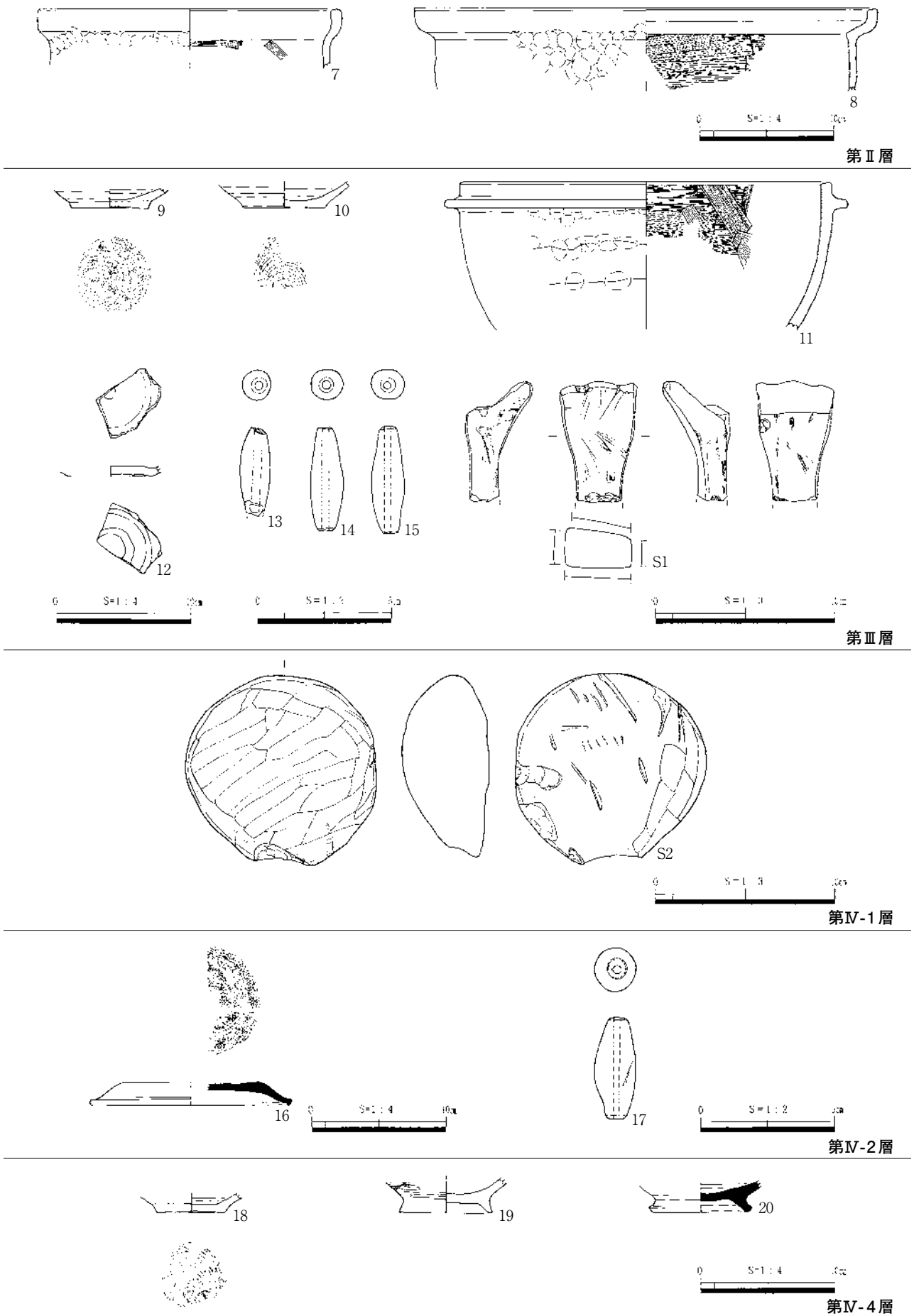
第26図 6区平地部第5遺構面遺構配置図

～15は紡錘形の土錘。S1は撥形の砥石で、使用頻度が高く砥面は4面確認される。

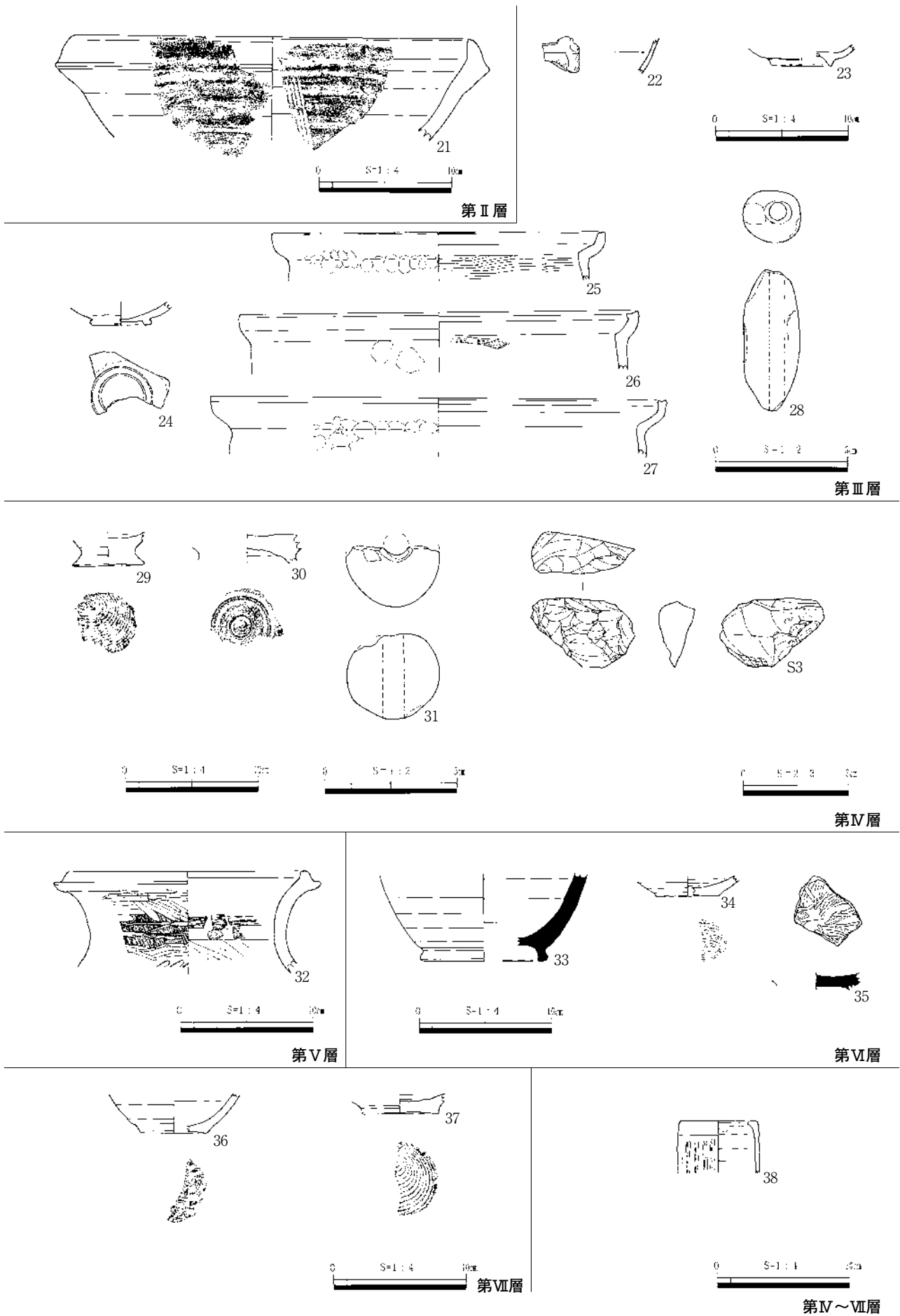
第IV-1層からは砂岩製の砥石と推測されるS2が出土している。器面には幅1cm単位の複数の切削痕、線状痕が確認される。

第IV-2層からは須恵器蓋16及び土錘17が出土している。16は天井部に回転糸切り痕を残し、口縁周縁がナデにより窪む。8世紀中葉から後葉の所産と考える。

第IV-4層からは、土師器坏18、土師器高台付坏19、須恵器高台付壺20が出土している。18は底部に



第27図 6区平地部北部第II～IV-4層出土遺物



第28図 6区平地部南部第II~VII層出土遺物

第4章 4～6区の調査成果

回転糸切り痕を残す。19は高台が「ハ」字状となっており、高台内はミガキが施される。平安時代の所産であろう。20の高台も外側に踏ん張る形となっており、端部が面取りされている。7世紀後半から8世紀前半の特徴を示す。

(2) 6-3区第Ⅱ～Ⅶ層出土遺物(第28図、表14・15・54・55、PL.8・75・76)

第Ⅱ層からは備前焼播鉢(21)1点が出土している。口縁部が外剥ぎ状を呈し、4本以上単位の播目を持つ。胎土は粗く小礫を含む。14世紀中頃から15世紀中頃の所産であろう。

第Ⅲ層からの出土遺物は7点掲載している。22、23は青磁碗である。22は体部に櫛描文が施文され、内面に圏線が認められる。12世紀中頃から後半の特徴を示す。23は高台内を施釉、高台端部は釉を掻き取っている。13世紀中頃から14世紀初頭頃か。24は肥前系磁器碗で、底部は露胎。25～27は瓦質土器の鍋である。25の口縁部受け口はしっかりとしている。26は口縁部が厚く、内傾が甘い。27は口縁部の内傾が甘く、直立気味である。以上の3点は、14～15世紀頃の所産と考える。28は砲弾形の土錘である。

第Ⅳ層からの出土遺物を4点掲載する。29は土師器の柱状高台坏であり、高台裾が薄い。11世紀後半から12世紀中頃に相当する。30は土師器高台付坏で底部に回転ヘラナデ痕が残る。平安時代に帰属する。31は1/2欠損した土玉。S3は緑色凝灰岩製の剥片であり、玉作関連遺物であろう。

第Ⅴ層からは弥生土器壺(32)を掲載する。口縁端部に1条の凹線文がめぐり、頸部外面はハケ後ミガキ、内面はハケ、肩部はヘラケズリである。中期後葉に該当しよう。

第Ⅵ層では33～35の3点を図示する。33は高台付壺であり、高台は底部外周近くに貼り付き高い。8世紀中葉の特徴を示す。34は土師器坏であり、底面は回転糸切り痕を残す。35は土師器高台付坏であり、内面は丁寧なミガキが施されている。いずれも平安時代に帰属する。

第Ⅶ層からは2点の土師器坏(36、37)が出土しており、いずれも底部に回転糸切り痕を残している。平安時代に相当する。

第Ⅳ～Ⅶ層の38は青磁の香炉で、器面は細連弁様の凹凸が確認される。内面は無釉である。15世紀後葉から16世紀の所産であろう。

(3) 小結

6区平地部では、鎌倉時代・室町時代・江戸時代初頭の畦畔を検出し、壁面で水田耕作土の重なりや水田耕作に伴う穴や耕作溝の断面を確認した。これらの調査成果から、中世前期には水田として利用され始め、近世を経て近現代に至るまで、水田として利用され続けていたことが判明した。

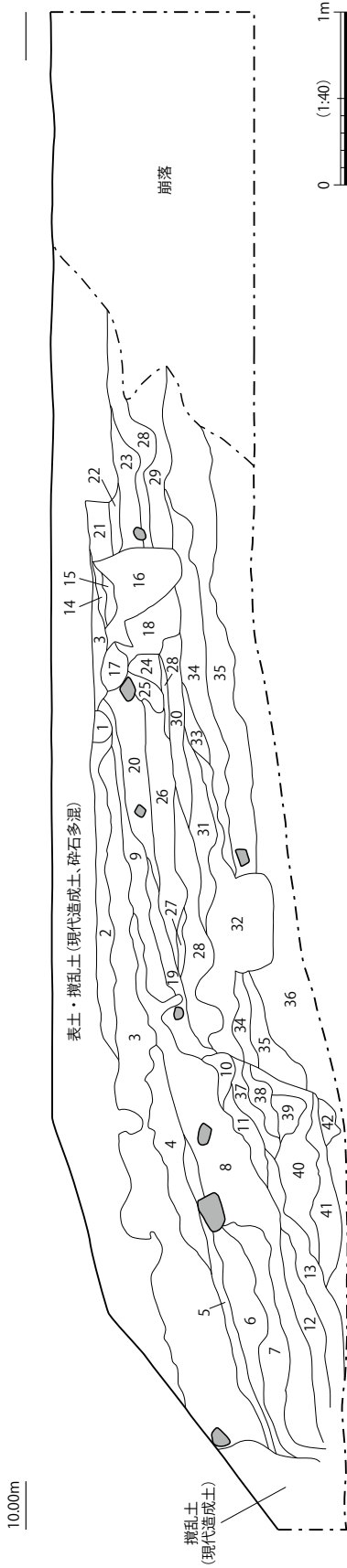
第7節 6-1・4区(丘陵裾部)の立地と基本層序

1 基本層序(第29～33図、PL.9・10)

6区丘陵裾部のほとんどは、急な丘陵の斜面から勾配が緩くなる部分である。基盤層が尾根状にわずかに張り出す調査区中央部は表土直下で基盤層が露出する部分があり、丘陵裾に堆積する基盤層までの地層も薄い。その北側・南側は、基盤層までの地層が比較的厚く堆積していて、地層の色調や粒径に若干の違いがあるものの、概ね対照できる。

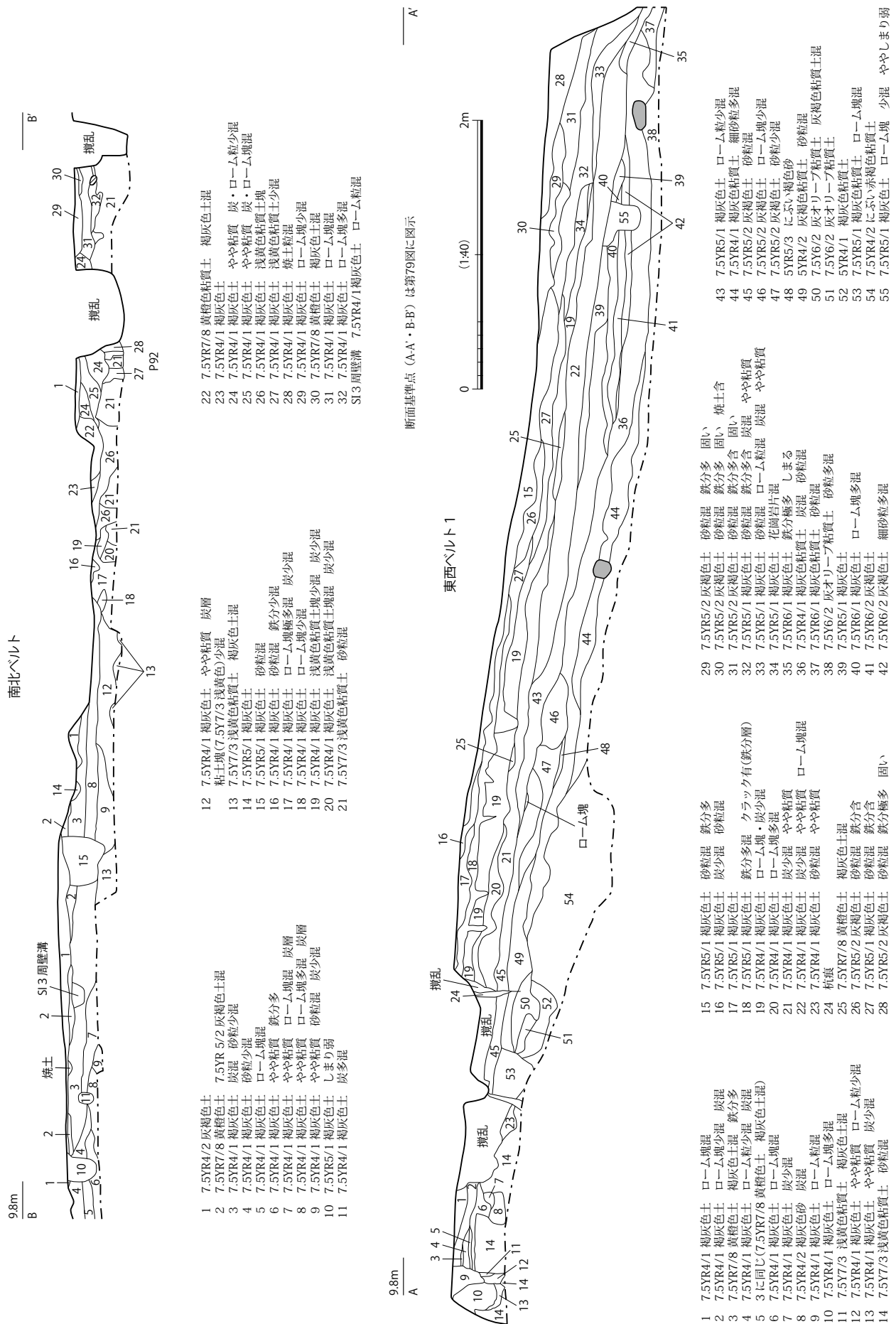
ここでは、表土から基盤層までの堆積が比較的良好に残る南部南壁で確認した地層を、色調、粒径、堆積構造及び含まれる遺物の時期により分類し基本層序とする。

第Ⅰ層:黒褐色、暗褐色、にぶい黄褐色の礫混シルトから砂を主体とする数層の単層からなる。ブロッ

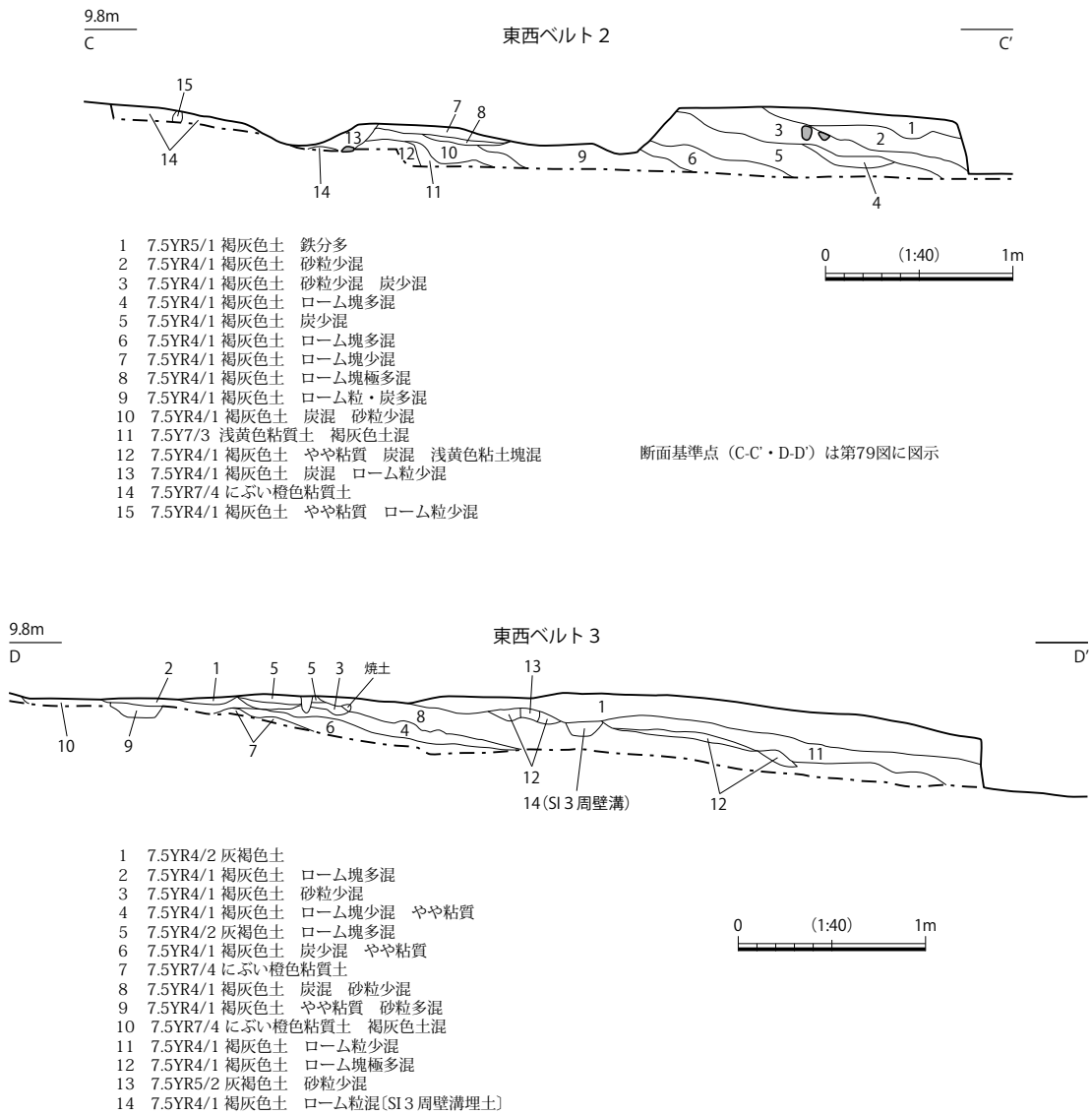


- 1 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや強 しまり弱 径5mm以下の炭粒混(近世耕作土)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性やや強 しまりやや弱 径5mm以下の砂礫少混(近世耕作土)
- 3 10YR4/4 褐色土 粘性ふつ しまりふつ 径3-10cmの礫・黄褐色土ブロック少混 径3cm以下の礫・黄褐色土ブロック多混 径1cm以下の炭粒少混
- 4 10YR3/4 暗褐色土 粘性ふつ しまりふつ 径3cm以下の礫・黄褐色土ブロック混 径1cm以下の炭粒少混
- 5 10YR4/6 褐色土 粘性ふつ しまりふつ 径3cm以下の礫・黄褐色土ブロック混 径1cm以下の炭粒少混
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性やや弱 しまりやや強 径3cm以下の礫・黄褐色土ブロック少混 径1cm以下の炭粒混 ややシルト質
- 7 10YR4/6 褐色土 粘性ふつ しまりふつ 径3cm以下の礫・黄褐色土ブロック多混 径1cm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 8 10YR4/2 灰褐色土 粘性ふつ しまり強 径3-10cmの礫少混 径3cm以下の礫・黄褐色土ブロック少混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 9 10YR5/3 にぶい黄褐色土 粘性やや弱 しまりやや強 径3cm以下の礫・黄褐色土ブロック混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 10 10YR5/3 にぶい黄褐色土 粘性ふつ しまりふつ 径3cm以下の礫・黄褐色土ブロック混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 11 10YR5/4 にぶい黄褐色土 粘性ふつ しまりふつ 径3cm以下の礫・黄褐色土ブロック混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 12 7.5YR4/2 灰褐色土 粘性やや弱 しまり強 径1cm以下の礫混 径5mm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 13 7.5YR5/2 灰褐色土 粘性ふつ しまりふつ 径1cm以下の礫混 径5mm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 14 7.5YR6/2 灰褐色土 粘性やや弱 しまりふつ 径1cm以下の礫混 径5mm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 15 7.5YR6/2 灰褐色土 粘性やや弱 しまりふつ 径1cm以下の礫混 径5mm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 16 7.5YR5/2 灰褐色土 粘性やや弱 しまりふつ 径1cm以下の礫混 径5mm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 17 7.5YR6/2 灰褐色土 粘性やや弱 しまりふつ 径1cm以下の礫混 径5mm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 18 7.5YR6/3 にぶい褐色土 粘性弱 しまり弱 径1cm以下の礫混 径5mm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 19 7.5YR5/3 にぶい褐色土 粘性やや弱 しまり強 径1cm以下の礫混 径5mm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 20 7.5YR5/3 にぶい褐色土 粘性やや弱 しまり強 径1-10cm以下の礫混 径3cm以下の黄褐色土ブロック混 径1cm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 21 20 とほぼ同じ
- 22 7.5YR5/6 明褐色土 粘性弱 しまり強 径5mm以下の礫混 シルト質 鉄分多混
- 23 7.5YR5/2 灰褐色土 粘性やや弱 しまり強 径1cm以下の礫混 径1cm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 24 7.5YR5/2 灰褐色土 粘性やや弱 しまり強 径1cm以下の礫混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 25 7.5YR5/2 灰褐色土 粘性やや弱 しまり強 径1cm以下の礫混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分多混
- 26 7.5YR5/2 灰褐色土 粘性やや弱 しまり強 径1cm以下の礫混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分多混
- 27 7.5YR6/3 にぶい褐色土 粘性弱 しまり弱 径1cm以下の礫混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 28 7.5YR4/2 灰褐色土 粘性やや弱 しまり強 径1cm以下の礫混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 29 とほぼ同じ 29 より鉄分多混
- 30 29 とほぼ同じ 29 より鉄分多混
- 31 7.5YR5/1 褐灰色土 粘性やや弱 しまり強 径1cm以下の礫少混 径1cm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 32 7.5YR5/2 灰褐色土 粘性やや弱 しまり強 径5cm以下の礫・浅黄褐色土ブロックがまだらに混じる 鉄分多混(掘込み)
- 33 31 とほぼ同じ 31 よりやや鉄分多混
- 34 7.5YR4/1 黒灰色土 粘性やや弱 しまりふつ 径3cm以下の礫・浅黄褐色土ブロック混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 35 7.5YR3/1 黒褐色土 粘性やや弱 しまりふつ 径1-10cmの礫少混 径1cm以下の礫混 径1cm以下の炭粒混 径1cm以下の炭粒微混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 36 7.5YR2/1 黒色土 粘性ふつ しまりやや弱 径1cm以下の礫混 径5mm以下の炭粒混 径5mm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分多混
- 37 7.5YR5/4 にぶい褐色土 粘性ふつ しまり強 径1cm以下の礫・褐色土ブロック混 径5mm以下の炭粒少混 径5mm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 38 7.5YR5/6 明褐色土 粘性ふつ しまり強 径1cm以下の礫・褐色土ブロック混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分少混
- 39 7.5YR6/1 褐灰色土 粘性やや強 しまり強 径1cm以下の礫少混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分多混
- 40 7.5YR5/3 にぶい褐色土 粘性弱 しまり弱 径1cm以下の礫・褐色土ブロック・炭粒混 径1cm以下の炭粒少混 径1cm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 鉄分多混
- 41 7.5YR4/2 灰褐色土 粘性弱 しまり強 径1cm以下の礫・褐色土ブロック・炭粒混 径1-2cmの礫少混 径5mm以下の炭粒少混 径5mm以下の炭粒微混 不均一に鉄分多混
- 42 7.5YR5/2 灰褐色土 粘性ふつ しまり強 径1-2cmの礫少混 径5mm以下の炭粒少混 径5mm以下の炭粒微混 径5mm以下の炭粒微混 不均一に鉄分多混

第29図 6区丘陵裾部北部南壁土層断面図



第30図 6区丘陵裾部北部ベルト土層断面図(1)



第31図 6区丘陵裾部北部ベルト土層断面図(2)

ク土を含む混土主体。第I層までを除去した面は概ね第1遺構面。表土、近現代の盛土と造成土。

第II層：にぶい黄褐色、黄灰色の礫混シルトから砂を主体とする数層の単層からなる。砂が勝ちで混土主体。第I層除去面で確認した耕作溝(畝間溝)群の存在から、一部は畑耕作土と考えられる。上面に切込みを有する遺構埋土が多く確認できる。主に中世の造成土。

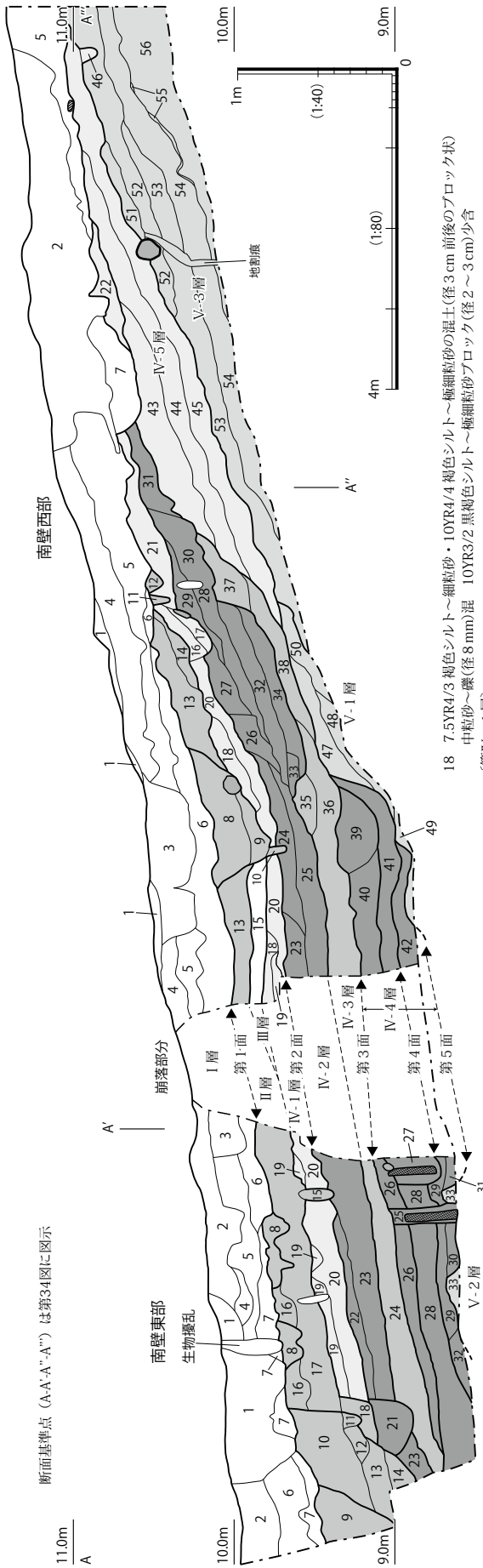
第III層：にぶい黄橙色砂からシルトと明黄褐色細礫混砂の薄層の互層を主体とする。調査区南西端部で帯状に分布する。中世の丘陵からの流入土。

第IV-1層：褐色系の礫混シルトから砂を主体とする数層の単層からなる。混土主体。第IV-1層までを除去した面は概ね第2遺構面。中世の畑耕作土。

第IV-2層：礫から粗粒の砂が混じる黒褐色、灰黄褐色及び褐灰色のシルトから細粒の砂を主体とする数層の単層からなる。混土主体。古代までの遺物を含む。

第IV-3層：粗粒の砂から礫が混じる褐灰色、黒褐色のシルトから細粒の砂を主体とする数層の単層からなる。ブロック土を含む。砂礫の混じりは不均質。第IV-3層までを除去した面は概ね第3遺構面。古墳時代。

第IV-4層：粗粒の砂から礫が混じる見た目黒褐色ないし黒色のシルトから細粒の砂を主体とする数



第32図 6区丘陵裾部南部南壁土層断面図(1)

- 南壁東部
- (第I層)
- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～砂・7・5の混土(径3～10cmのブロック状) 礫(～径1cm)含 ビニール製品含
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色礫(～径1cm)混シルト～砂
 - 3 10YR2/1 黒色シルト～砂・5の混土(径3～10cmのブロック状) 礫(～径1cm)少含
 - 4 5と10YR6/4にぶい、黄褐色砂礫(～径8mm)の混土(径3～5cmのブロック状) 炭粒少含 ビニール製品含
 - 5 10YR5/3にぶい、黄褐色礫(～径1cm)混シルト～砂 礫(径1～5cm)少含 10YR6/8明黄褐色シルト～砂ブロック(～径7cm)少含 炭粒少含 ビニール製品含
 - 6 7.5YR4/3 褐色中粒砂～礫(径5mm)混シルト～細粒砂 礫(径1～3cm)少含 炭粒少含
 - 7 10YR4/3にぶい、黄褐色粗粒砂～礫(径5mm)混シルト～中粒砂 10YR6/8明黄褐色シルト～砂のブロック(径1cm 前後)少含(所により密に含)
- (第II層)
- 8 12・10YR5/4にぶい、黄褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～極細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 礫(～径5cm)少含 10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径5cm)・10YR6/8明黄褐色シルト～砂ブロック(径2～3cm)少含
 - 9 7.5YR4/2 灰褐色シルト～極細粒砂・10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂の混土(径2～4cmのブロック状) 粗粒砂～礫(径8mm)混 炭粒少含
 - 10 7.5YR4/3 褐色中粒砂～礫(径5mm)混シルト～細粒砂 礫(径3～5cm)少含 10YR6/8明黄褐色シルト～砂ブロック(径2cm 前後)少含
 - 11 10YR4/3にぶい、黄褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂 礫(径2～3cm)のブロック状(径2cm 前後)少含
 - 12 10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂・7.5YR5/3にぶい、褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 粗粒砂～礫(径5mm)混
 - 13 10YR4/3にぶい、黄褐色粗粒砂～礫(径5mm)混シルト～極細粒砂 礫(径1～3cm)少含 炭粒わずかに含
 - 14 7.5YR4.5/2 灰褐色粗粒砂～礫(径5mm)混シルト～極細粒砂 炭粒少含
 - 15 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂・14の混土(径4cm 前後)のブロック状
 - 16 7.5YR4/3 褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂 礫(径6・10より砂勝ち 炭粒少含 管状の生物擾乱多 礫化鉄分沈着(管状))
 - 17 7.5YR5/3にぶい、褐色中粒砂～礫(径5mm)混シルト～細粒砂 8・12・19より砂勝ち 炭粒少含管状の生物擾乱多 礫化鉄分沈着(管状)
- 南壁西部
- 18 7.5YR4/3 褐色シルト～細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～極細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状) 中粒砂～礫(径8mm)混 10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂ブロック(径2～3cm)少含
- (第IV-1層)
- 19 7.5YR4/3 褐色中粒砂～礫(径5mm)混シルト～極細粒砂 20より砂勝ち 炭粒少含
 - 20 10YR4/3にぶい、黄褐色中粒砂～礫(径8mm)混シルト～極細粒砂 礫(径2cm 前後)少含 22より砂勝ち 炭粒含
- (第IV-2層)
- 21 7.5YR4/2 灰褐色シルト～細粒砂・10YR4/3にぶい、黄褐色シルト～極細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 粗粒砂～礫(径8mm)混 礫(径3～5cm)少含 炭粒少含
 - 22 7.5YR4/2 灰褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂 7.5YR6/8 褐色粘土～砂ブロック(径2～3cm)少含 礫化鉄分全体に沈着(しみ状)
 - 23 10YR4/1 褐色シルト～細粒砂・10YR4/2 灰黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2cm 前後のブロック状) 中粒砂～礫(径1cm)混(不均質) 炭粒含
- (第IV-3層)
- 24 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/1 褐色シルト～細粒砂の混土(径2cm 前後のブロック状) 中粒砂～礫(径1cm)混(不均質) 10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂ブロック(径1cm 前後)少含 炭粒含 礫化鉄分沈着(しみ状)
- (第IV-3・4層)
- 25 2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径5mm)混シルト～細粒砂 礫(径1～2cm)少含 33・10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂ブロック(径2～4cm)含
- (第IV-4層)
- 26 10YR4/1 褐色中粒砂～礫(径5mm)混シルト～細粒砂(砂礫の混じりは不均質) 28より砂勝ち 礫化鉄分沈着(しみ状)
 - 27 10YR3/1 黒褐色細粒砂～礫(径5mm)混シルト～極細粒砂 礫(径1～1.5cm)少含
 - 28 2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径1cm)混シルト～中粒砂 炭粒含
 - 29 10YR2/1 黒色シルト～細粒砂・2.5Y3/1 黒褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 炭粒・炭粉多含(所により厚さ2～3cmの層状に含)
 - 30 5Y3/1 オリーブ黒色シルト～極細粒砂・2.5Y4/1 黄褐色シルト～細粒砂・33の混土(径2～3cmのブロック状) 粗粒砂～礫(径8mm)混 炭粒含
 - 31 2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径5mm)混シルト～細粒砂 33のブロック(径2cm 前後)含
 - 32 2.5Y2/1 黒色細粒砂～礫(径8mm)混シルト～極細粒砂 炭粒含
- (第V-2層)
- 33 5G5/1 オリーブ灰色礫(～径8mm)混シルト～砂 炭粒含

南壁西部

(第1層)

- 1 10YR2/2 黒褐色砂礫(径8mm)混シルト 4のブロック(径5cm)含
- 2 10YR3/2 黒褐色礫(径3cm)混シルト～砂 礫(卵大・径15cm)含 炭粒含
- 3 10YR2/2 黒褐色砂礫(径8mm)混シルト 6・4・10YR6/8 明黄褐色シルト～砂ブロック(径7cm)との混土
- 4 10YR3/3 暗褐色礫(径1cm)多混シルト～砂 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～砂ブロック(径3cm)・10YR6/8 明黄褐色シルト～砂ブロック(径1.5cm)含
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色礫(径3cm)混シルト～砂 10YR6/8 明黄褐色シルト～砂ブロック(径5cm 前後)少含 (所により主体) 炭粒含
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色粗粒砂礫(径5mm)混シルト～中粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～砂の混土(径3cm 前後のブロック状) 礫(径1～3cm)少含 10YR6/8 明黄褐色シルト～砂ブロック(径3cm)少含 炭粒少含
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂・10YR5/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 粗粒砂～礫(径8mm)混 10YR6/8 明黄褐色シルト～砂ブロック(径3cm)少含

(第II層)

- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色(グライ化している部分では5GY5/1 オリーブ灰色)中粒砂～細礫混シルト～極細粒砂 礫(径5mm～拳大)含 6・18・20より砂勝ち
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～中粒砂 礫(径1cm～長径20cm)含 6・18・20より砂勝ち
- 10 2.5Y5/3 黄褐色礫(径5mm)混シルト～砂 20のブロック(径1.5cm)含
- 11 10YR4/4 褐色細礫混シルト～砂 10YR2/1 黒色シルトブロック(径1.5cm)含
- 12 10YR5/3 にぶい黄褐色砂～シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状)
- 13 10YR5/3 にぶい黄褐色極粗粒砂混粗粒砂～シルト・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～シルトの混土(径3～5cmのブロック状 部分的にマーブル状)
- 14 2.5Y5/1 黄灰色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～中粒砂 10YR6/8 明黄褐色シルト～砂(マーブル状)・10YR7/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂(径3cmのブロック状)含 20より砂勝ち

(第III層)

- 15 10YR6/4 にぶい黄褐色砂～シルト・2.5Y6/6 明黄褐色細礫混砂の薄層(厚さ2cm 前後)の互層 2.5Y7/8 黄色シルト～砂・7.5YR5/3 にぶい褐色シルト～極細粒砂の薄層状

(第IV～I層)

- 16 10YR5/2 灰黄褐色中粒砂礫(径5mm)混シルト～細粒砂 17を除く周辺層よりしまり弱
- 17 10YR5/3 にぶい黄褐色中粒砂～礫(径5mm)混シルト～細粒砂 16よりしまり弱
- 18 10YR6/4 にぶい黄褐色細礫混砂～シルト・7.5YR5/3 にぶい褐色シルト～細粒砂の混土(径4cm 前後のブロック状) 炭粒わずかに含
- 19 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト～細粒砂 20より砂勝ち 炭粒わずかに含
- 20 7.5YR4/2 灰褐色シルト～細粒砂・5YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂の混土(径3cm 前後)では灰褐色土ブロック 8mm) 多混(不均質)10YR6/8 明黄褐色シルト～砂ブロック(径1～3cm)少含 炭粒含 東部では灰褐色土ブロック 主体で砂勝ち
- 21 7.5YR4/2 灰褐色粗粒砂礫(径1.5cm)混シルト～中粒砂 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm)含
- 22 7.5YR4/2 灰褐色シルト～極細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂の混土(径5cmのブロック状) 粗粒砂～礫(径8mm)混

(第IV～II層)

- 23 10YR3/1 黒褐色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～中粒砂 礫(径1～3cm)少含 24より砂勝ち
- 24 2.5Y4/1 黄灰色中粒砂礫(径8mm)混シルト～細粒砂 礫(径1～5cm)少含 10YR6/4 にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂ブロック(径3cm)少含 25より砂勝ち 炭粒含
- 25 10YR3/1 黒褐色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～細粒砂 礫(径1.5～5cm)少含 36より泥勝ち 炭粒・炭片含
- 26 7.5YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂・7.5YR4/2 灰褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後)のブロック状 中粒砂～礫(径5mm) 混(不均質) 礫(径3cm 前後)少含 10YR6/8 明黄褐色シルト～砂ブロック(径1～3cm)少含 炭粒含
- 27 5YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂・7.5YR4/2 灰褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後)のブロック状 中粒砂～礫(径8mm)多混(不均質) 炭粒含

- 28 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂礫(径5mm)混シルト～中粒砂 29・30よりしまり弱
- 29 7.5YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂・7.5YR4/2 灰褐色シルト～極細粒砂の混土(径4cm 前後のブロック状) 中粒砂～礫(径1cm)多混(不均質) 10YR6/8 明黄褐色シルト～砂ブロック(径1cm 前後)少含 炭粒少含
- 30 7.5YR4/2 灰褐色シルト～極細粒砂・7.5YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂の混土(径4cm 前後のブロック状) 中粒砂～礫(径1cm)多混(不均質) 炭粒少含
- 31 7.5YR4/2 灰褐色粗粒砂礫(径1cm)混シルト～極細粒砂 礫(径1～3cm)少含 43より砂勝ち 管状の生物擾乱多
- 32 7.5YR4/1 褐灰色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～細粒砂 礫(径1～3cm)少含 10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂 ブロック(径1～2cm)少含
- 33 7.5YR4/1 褐色中粒砂～細礫混細粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～極細粒砂の薄層の不明瞭な互層
- 34 7.5YR3/1 黒褐色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～細粒砂 礫(径1～2cm)少含

(第IV～3層)

- 35 10YR4.5/1 褐灰色中粒砂礫(径8mm)混シルト～細粒砂 礫(径1～1.5cm)少含 炭粒含
- 36 10YR4/1 褐灰色中粒砂礫(径8mm)混シルト～細粒砂 礫(径1～5cm)少含 炭粒含
- 37 7.5YR4/1 褐灰色粗粒砂礫(径5mm)混シルト～細粒砂(砂礫の混じりは不均質) 礫(径8mm～4cm)含 10YR3/1 黒褐色シルト・10YR2/1 黒色シルトブロック(径1～2cm)多含 炭粒含
- 38 5YR4/1 灰褐色粗粒砂礫(径5mm)混シルト～細粒砂 砂礫の混じりは不均質 礫(径8mm～3cm)含 炭粒含

(第IV～4層)

- 39 10YR4/1 褐灰色シルト～極細粒砂・10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂の混土(径3cm 前後)のブロック状) 粗粒砂～礫(径8mm)混 5GY5/1 オリーブ灰色シルト～砂ブロック(径5cm)多含 炭片少含
- 40 10YR4/1 褐灰色シルト～極細粒砂・10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 粗粒砂～礫(径8mm)混 5GY5/1 オリーブ灰色シルト～砂ブロック(径2cm 前後)少含 炭粒少含
- 41 10YR3/1 黒褐色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～極細粒砂 10YR2/1 黒色シルト～極細粒砂ブロック(径2～3cm)含 炭粒少含
- 42 10YR2/1 黒色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～極細粒砂 49のブロック(径2cm 前後)含 炭粒少含

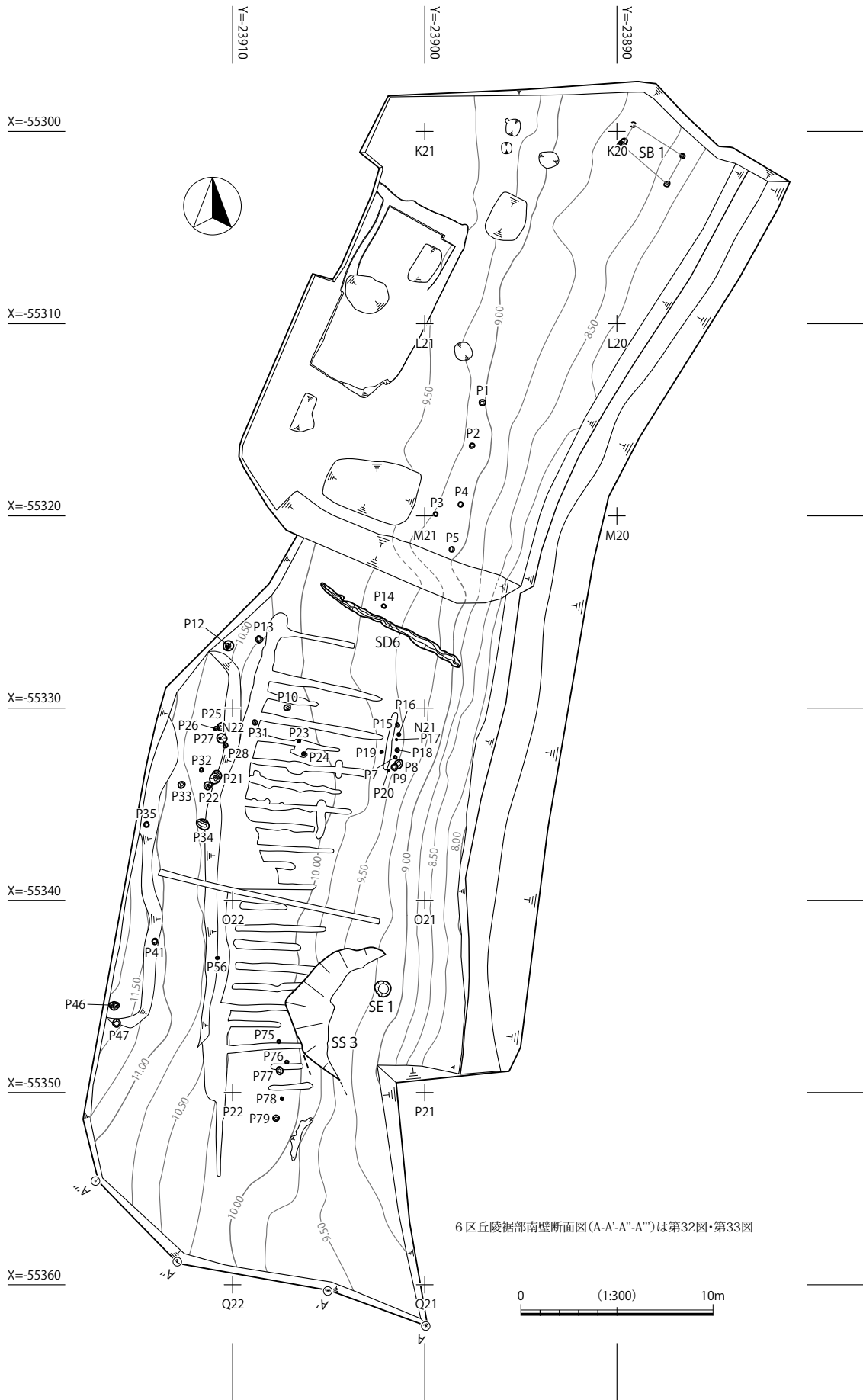
(第IV～5層)

- 43 7.5YR4/3 にぶい赤褐色中粒砂礫(径1cm)混シルト～極細粒砂 礫(径1～2cm)少含 管状の生物擾乱多
- 44 7.5YR4/2 褐灰色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～細粒砂 45より砂勝ち 管状の生物擾乱多
- 45 7.5YR3/2 黒褐色粗粒砂礫(径5mm)混シルト～細粒砂 44より泥勝ち 管状の生物擾乱多
- 46 10YR3/2 黒褐色粗粒砂礫(径5mm)混シルト～極細粒砂 礫(径2cm 前後)多含

(第V～I層)

- 47 10YR3/1 黒褐色粗粒砂礫(径1cm)混シルト～極細粒砂 炭粒少含
- 48 10YR4/1 褐灰色粗粒砂礫(径1cm)混シルト～極細粒砂 5GY5/1 オリーブ灰色シルト～砂ブロック(径5cm)含 炭粒少含
- 49 2.5Y4/1 黄灰色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～極細粒砂 5GY5/1 オリーブ灰色シルト～砂ブロック(径3cm)少含 48より泥勝ち
- 50 2.5Y4.5/1 黄灰色砂礫(径1cm)混シルト～粘土
- 51 5YR3/1 黒褐色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～細粒砂 炭片少含
- 52 7.5YR2/1 黒色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～極細粒砂 礫(径1～3cm)含
- 53 10YR2/1(3/1 寄り)黒色礫(径1cm)～粗粒砂混シルト～極細粒砂 礫(径1～5cm)含
- 54 10YR2/1 黒色粗粒砂礫(径1cm)混シルト～極細粒砂 礫(径1～5cm)含 53より泥勝ち
- 55 10YR3/2 黒褐色シルト混砂～細礫
- 56 7.5YR3/2 黒褐色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～極細粒砂 礫(径1～5cm)含 54より砂勝ち 地割痕 10YR3/2 黒褐色シルト混砂・52以下のブロック(径3cm 前後)の混土

第33図 6区丘陵裾部南部南壁土層断面図(2)



第34図 6区丘陵裾部第1遺構面遺構配置図

層の単層からなる。ブロック土を含む。第IV-3層より泥勝ち。第IV-4層下部の任意の面は概ね第4遺構面。弥生時代後期後葉。

第IV-5層：粗粒の砂から礫が混じる見た目灰色ないし黒褐色のシルトから細粒の砂を主体とする数層の単層からなる。管状の生物擾乱が顕著に見られる。丘陵部の急な斜面から丘陵裾部にかけての勾配が緩くなる部分に堆積する。弥生時代後期後葉以前。第IV-5層までを除去した面は概ね第5遺構面。

第V-1層：灰色系の粗粒砂から礫混シルトから極細粒砂を主体とする数層の単層からなる。第IV-4、IV-5層より泥勝ち。第V-2層のブロックを含み、人為的な層である可能性があるが、遺物は含まない。調査区南部では段状に第V-3層を切って第V-1層が堆積する部分があり、整地層と考えられる。弥生時代後期後葉以前。

第V-2層：オリーブ灰色礫混シルトから砂。丘陵裾の基盤層。

第V-3層：黒褐色、黒色の礫から粗粒砂混シルトから細粒の砂を主体とする数層の単層からなる。硬く締まる。谷状地形に堆積するクロボク由来の土。単層の層界や堆積中に生じた地割痕とみられる隙間にシルト混砂を挟む。尾根が張り出す部分ではその下位の明黄褐色土が露出。丘陵斜面から丘陵裾にかけての基盤層。

第8節 6-1・4区(丘陵裾部) 検出した遺構

1 第1遺構面(第34図、PL.10)

(1) 概要

第I層を除去した面で中世以降の遺構群を検出した。小規模な掘立柱建物1棟、段状遺構1基、井戸1基、溝1条などを調査したが、遺構は水田部付近に偏っており、密度は希薄で出土遺物も多くはない。その中では、大型の曲物を井戸枠に用いたSE1が特筆される。

(2) 掘立柱建物

SB1(第34・35図、PL.11)

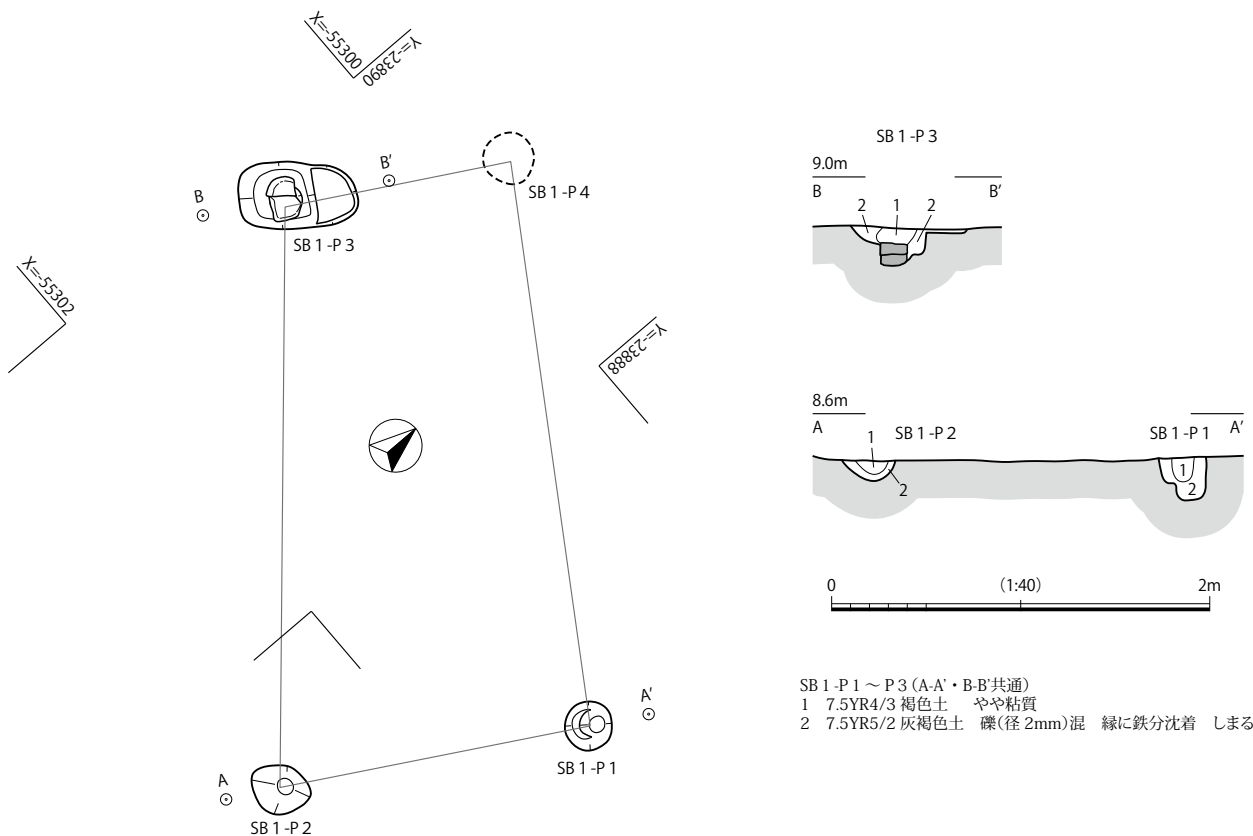
調査区の北端、K19グリッドで3基の柱穴を検出した。北西側の柱穴にあたる部分ではごく浅くぼみしか検出できなかったが、もとは東西3.1m×南北1.7m規模の1間四方の掘立柱建物と考えられる。主軸を南東方向に39°振る。柱穴はいずれも深さ0.2m程度と浅く、小規模で簡易な建物であったと推定される。柱穴のうちの一つに礫が2個据えてあったほかには遺物は出土していないため、時期は不明であるが、付近の包含層の出土遺物から近世以前のものであろう。

(3) 段状遺構

SS3(第34・36・37図、表15、PL.12・44・45)

調査区南部のO21グリッドで検出した。検出した規模は、南北6.9m、東西5.5m、法肩からの深さは最大1.9mである。法肩部分は後世の土地造成や畑耕作により削平されていること、また、平面的に検出できた面が第IV層中であったことから、本来の段の深さは1.9m以上であると考えられる。埋土は大きく4つに分けられ、所々に流入あるいは帯水により堆積した礫混砂ないしシルトを挟む。上層は中層、下層、最下層を切り、中層と下層は最下層を切ることから、少なくとも2回は造成し直されていることが確認できる。南壁東端部でもSS3の上層埋土に似たものが見られるので、本来は平面的にもっと広い範囲の遺構であった可能性がある。

平坦面北部の埋土下層上面で井戸1基(SE1)を検出した。SS3の埋土下層上面で曲物の破片が面



第35図 SB 1 平面・断面図

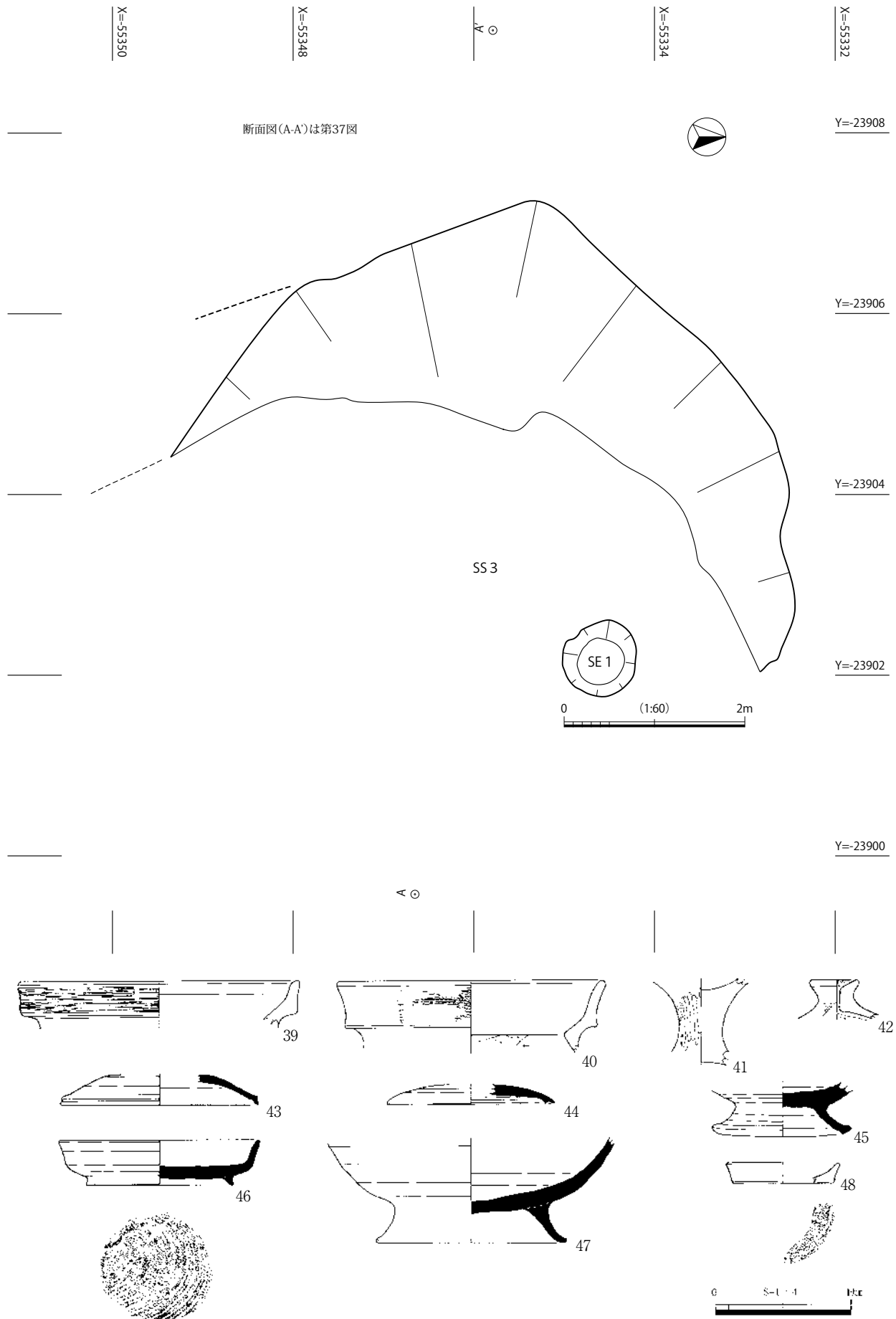
的に出土しており、SE 1 はSS 3 に伴い、埋土下層上面を構築面として作られたことがわかる。SS 3 の帰属時期は、SE 1 の出土遺物から、鎌倉時代に比定できる。

本遺構からは弥生時代から中世にわたる遺物10点を図示している。39、40は弥生土器の甕であり、外傾した口縁を有し多条平行沈線が施される。40は平行沈線施文後、部分的にナデ消している。いずれも弥生時代後期中葉から後葉に比定される。41は弥生土器の高坏脚柱部であり、外面は丁寧な縦方向のヘラミガキが施される。42は弥生土器の蓋であり、つまみ部中心から天井部に向かって貫通している。43～47は須恵器の坏蓋(43、44)、高台付皿(46)、高台付壺(45、47)である。43は天井端部がやや外反して折れ曲がり、外面にナデが加えられる。7世紀末から8世紀前半に位置付けられよう。44は器高が低く、口縁端部のかえりが内側へ強く屈曲する。7世紀後半の特徴を示す。46は体部が直線的に外傾し、高台が底部周縁より内側に貼り付けされ、底部には回転糸切り痕を残す。8世紀中頃の所産と考えられる。45、47は高台が高く「ハ」の字状を呈し、端部が面取りされている。7世紀後半から8世紀前半の特徴を示している。48は土師器小皿で、体部がやや外傾するが器高が低く、口径と底径の差が小さい。底面に回転糸切り痕が残る。13世紀後半から14世紀代に帰属しよう。

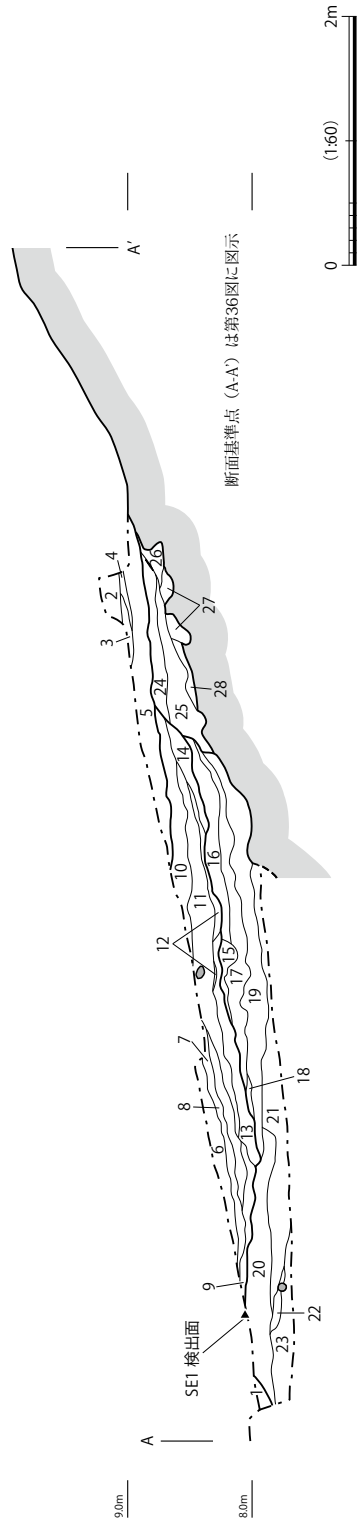
(4) 井戸

SE 1 (第34・36・38～40図、表15・60、PL.13・48・77・78)

SS 3 の平坦面の北寄り、法尻から約1.5m離れた位置で検出した。上部が直径1.2m、深さ0.3m、下部が直径0.8m、深さ0.2mとなる2段の円形の掘方を設け、下段には径0.15m程度の礫を2段に詰め込む。礫の間に砂を充填した後に、底を抜いた径55cmの曲物を据えて井戸枠とする。この曲物には内面に数列の朱点が打たれており、井戸の設置に伴う祭祀に関連する可能性がある。井戸枠の周囲にはまず砂礫を、次いで外側を粘質土で埋めて固定する。井戸枠内には小割りした板石を敷いている。い

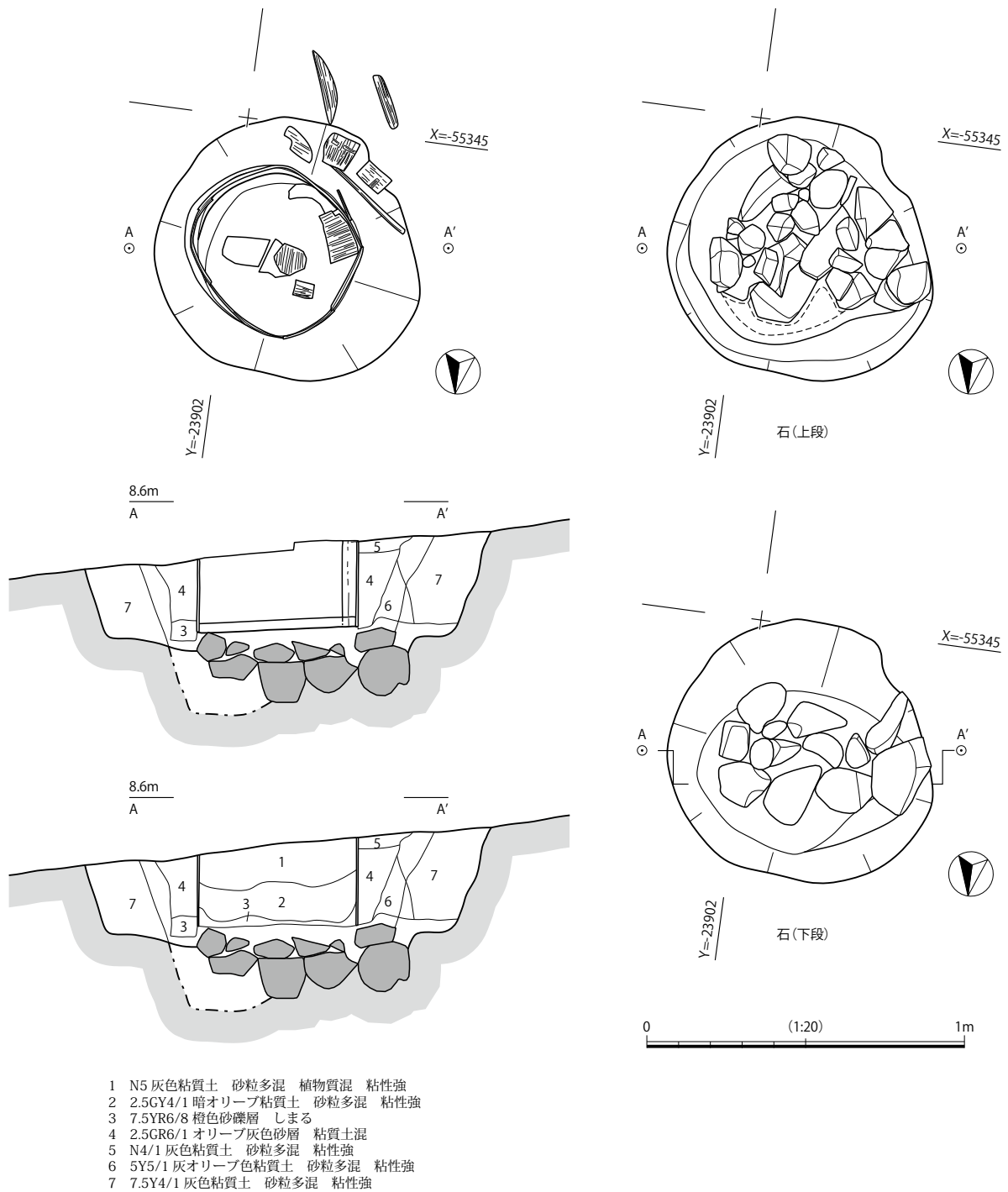


第36図 SS3・SE1平面図及びSS3出土遺物



第37図 SS3断面図

- 1 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂礫(径8mm)混シルト～中粒砂(近現代溝埋土)
 - 2 10YR5/2 灰黄褐色礫(径8mm)混シルト～砂 10YR6/3 灰黄褐色細粒砂～極細粒砂礫状に含 酸化鉄分沈着(層状、7.5YR4/6 褐色)
 - 3 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂
 - 4 10YR4/3 にぶい、黄褐色礫(径5mm)混砂～シルト
 - 5 10YR4/2 灰黄褐色シルト～中粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂の混土 粗粒砂～礫(径1cm)混
 - 6 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂～礫(径1cm)混シルト～細粒砂 酸化鉄分(しみ状)沈着
 - 7 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂～礫(径1cm)混シルト～細粒砂 1より粘性あり 炭粒わずかに含
 - 8 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂～礫(径1cm)混シルト～細粒砂 1より砂礫の混じり少
 - 9 10YR4/1 褐灰色シルト～粘土 10YR6/1 褐灰色極粗粒砂～シルト礫状に含
 - 10 10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂 粗粒砂～礫(径1cm)混
 - 11 10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂 10YR5/1 褐灰色シルト～シルトブロック(径3cm前後)との混土 粗粒砂～礫(径1cm)混
 - 12 10YR4/1 褐灰色シルト～粘土
 - 13 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～粘土との混土 粗粒砂～礫(径8mm)混
 - 14 10YR4/1 褐灰色シルト～砂 10YR4/1 褐灰色シルト～粘土との混土
 - 15 10YR3/1 黒褐色砂礫(径1cm)混シルト
 - 16 10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂 10YR5/1 褐灰色シルト～シルトブロック(径3cm前後)との混土(不均質) 粗粒砂～礫(径1cm)混
 - 17 10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂・10YR4.5/1 褐灰色シルト～細粒砂の混土 粗粒砂～礫(径8mm)混
 - 18 10YR5/2 灰黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂の混土 礫(径1cm)混
 - 19 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂・10YR5/2 灰黄褐色シルト～砂の混土 粗粒砂～礫(径1cm)混 炭粒含
 - 20 10YR5/3 にぶい、黄褐色極粗粒砂～礫(径8mm)粗粒砂～中粒砂(砂礫の混じり)は不均質で礫状 10YR5/1 褐灰色礫(径3～5cm)混(径1cm～拳木)多含 下部は全体に酸化鉄分沈着(7.5YR5/3 にぶい褐色)
 - 21 10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂 粗粒砂～礫(径8mm)混 砂は所により礫状に混 炭粒含
 - 22 7.5YR4/6 褐色中礫(径4～8mm)混細礫～極粗粒砂 全体に酸化鉄分沈着
 - 23 5Y4/1 灰色シルト～砂
 - 24 10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂 粗粒砂～礫(径5mm)混
 - 25 10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂 10YR5/1 褐灰色シルト～シルトブロック(径3cm前後)との混土 粗粒砂～礫(径1cm)混 7.5Y5.5/1 灰色粘土～シルトブロック(径7cm)含
 - 26 10YR5/2 灰黄褐色砂～細礫混シルト 7.5Y5.5/1 灰色粘土～シルトブロック(径4cm)多含
 - 27 10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂・10YR4/2 灰黄褐色シルト～細粒砂の混土 粗粒砂～礫(径8mm)混
 - 28 10YR4/1 褐灰色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂 10YR5/2 灰黄褐色シルト～細粒砂 粗粒砂礫状に含
- ※ 混土：特に記載がない場合は、径3cm前後のブロック状

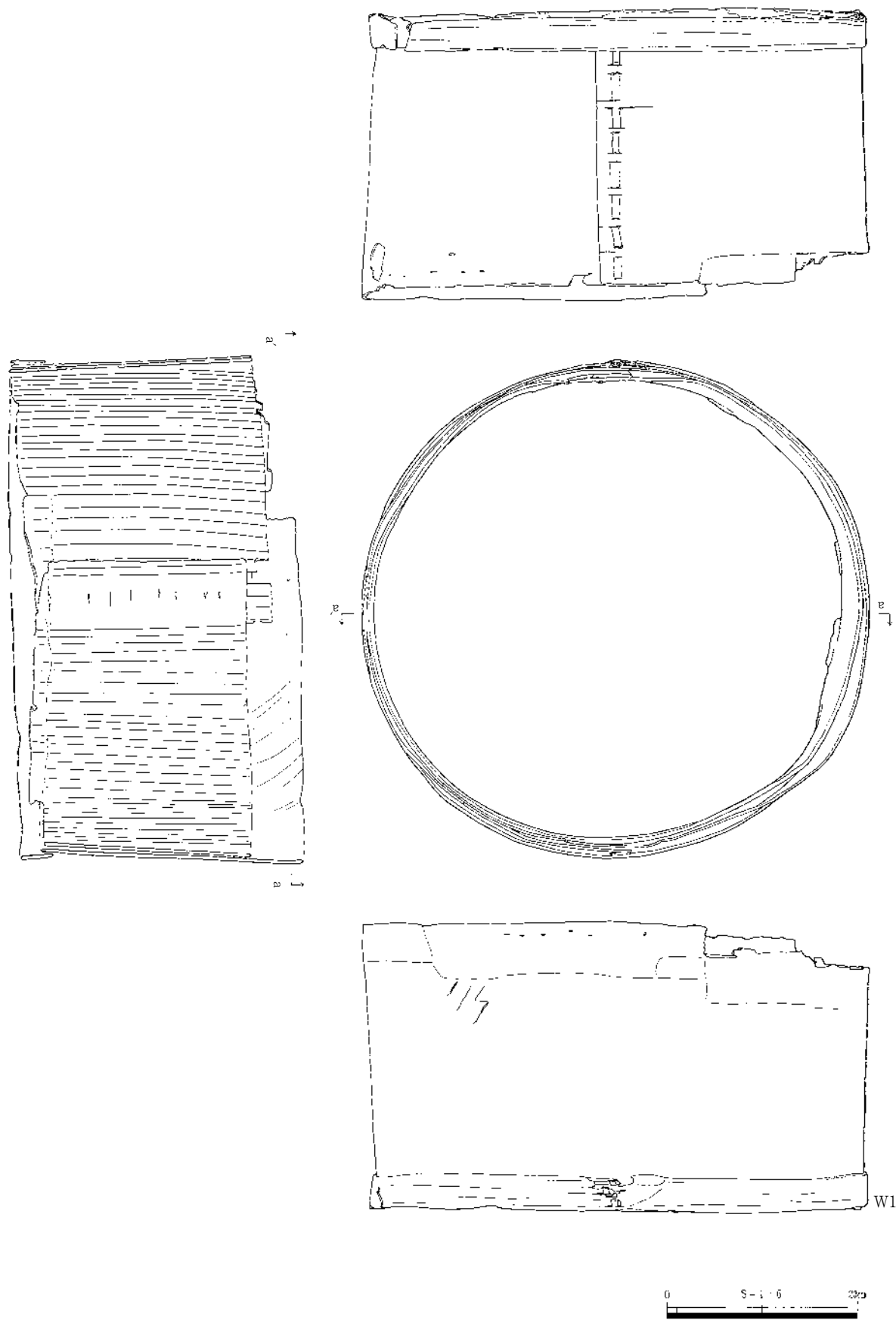


第38図 SE1平面・断面図

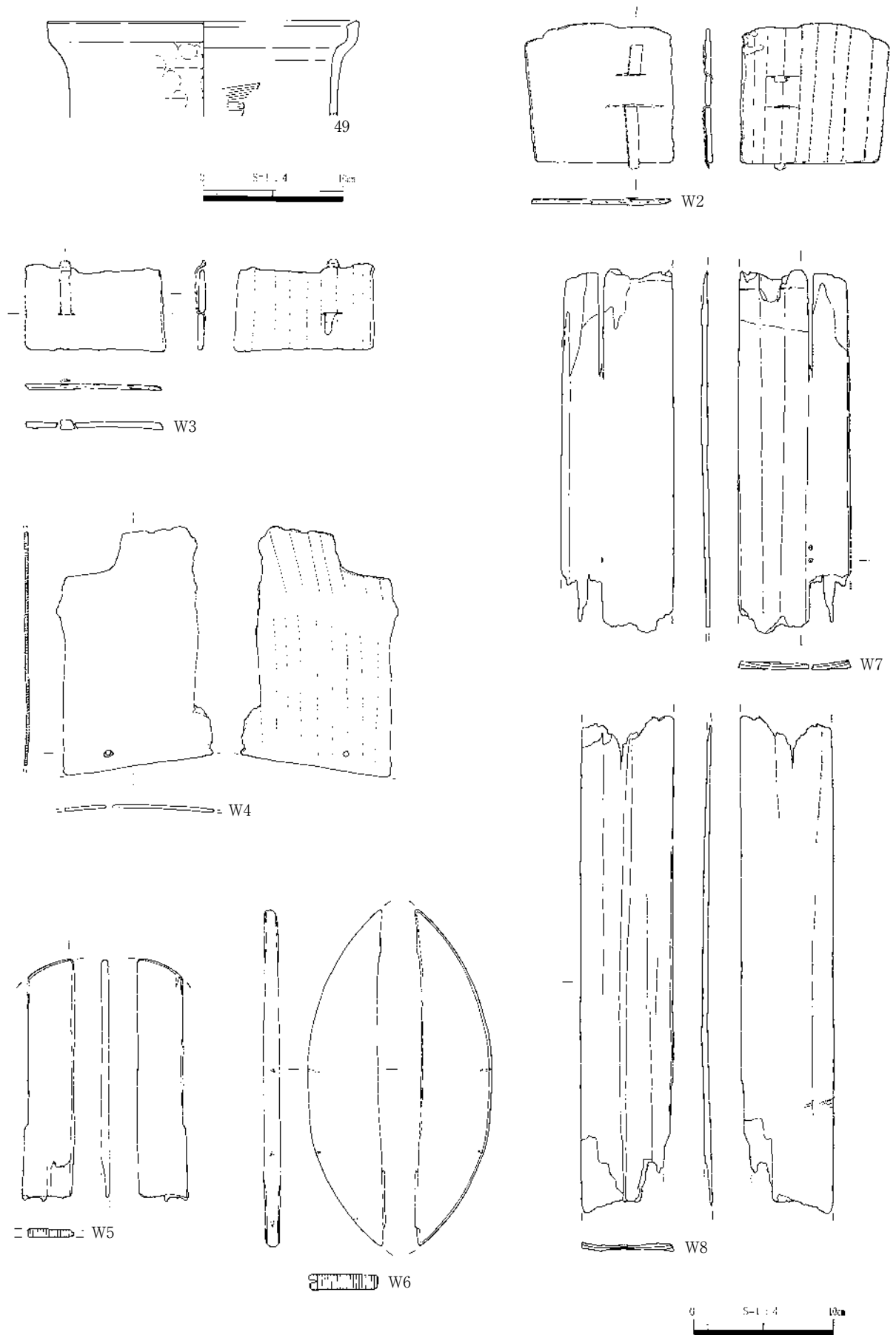
ずれも浄水のための工夫とみられる。井戸枠の上面付近からは板材と小型の曲物の底板が出土している。板材は井戸上部の囲いとして、曲物は水を汲むために使用したものであろう。井戸枠内から出土した瓦質土器の鍋などから14世紀頃の遺構と推定される。

小規模で急な谷地形の地表面近くを下る水を、礫と砂によって濾過して溜め置いたものである。井戸としては非常に浅く、溜桮に近い。

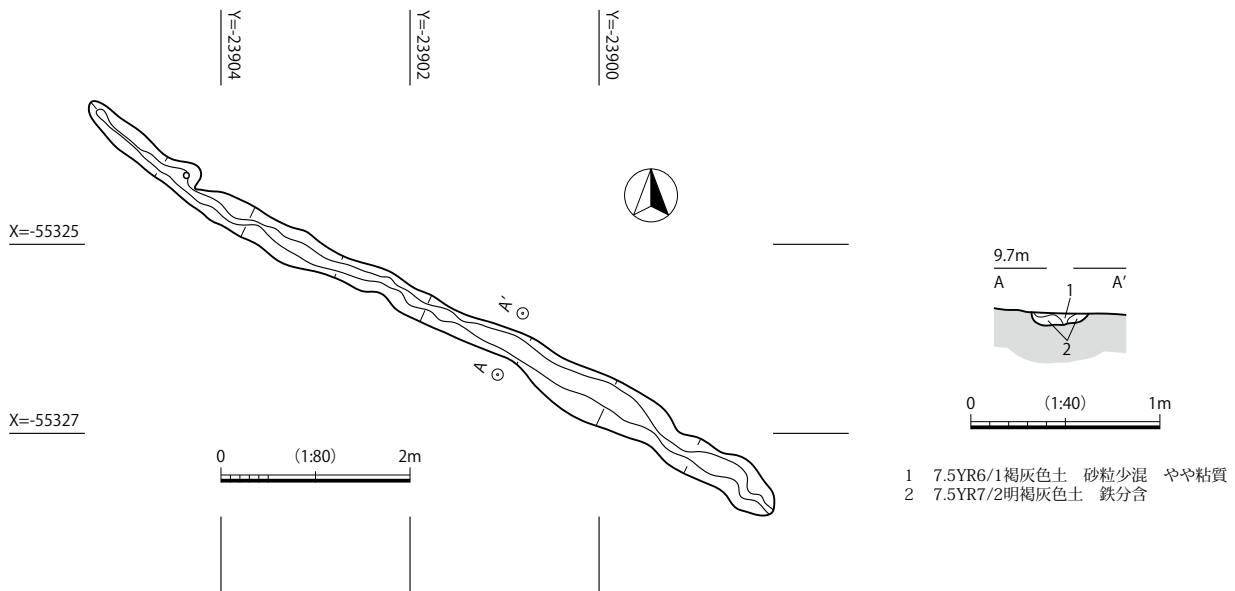
W1は井戸枠であるが、曲物の転用品である。井戸枠は最大径53.9cm、器高30.7cmを測り、2個の曲物を入れ子状にして、枠を強化している。内外とも約1.3cm間隔で縦方向の切り込みを密に入れ、湾曲させる。繋ぎ目は樺皮で縦方向に梯状に緊縛する。下方は幅3.5cmのタガで全体を固定する。タガの繋ぎ目も同じく樺皮を用いている。W2～4は井戸枠の破片で、W2、3は樺皮による緊縛方法



第39図 SE1出土遺物(1)



第40図 SE1出土遺物(2)



第41図 SD6平面・断面図

がわかる資料である。W 5、6は曲物の蓋もしくは底板である。W 6は側面に木釘孔が確認できるため底板の可能性が高い。W 7、8は不明板材である。最大厚が0.6～0.7cmと薄く、曲物の素材であろうか。49は瓦質土器の鍋である。口縁部受け口と体部が直立気味の器形を呈し、外面に輪積痕や指頭圧痕、内面にハケを残す。13世紀前半から14世紀初頭の所産と考える。

(5) 溝

SD6 (第34・41図、PL.12)

M20～21グリッドで検出した。等高線に概ね直交し北西－南東方向に延びる。検出長8.5m、最大幅0.6m、検出面からの深さ0.1mを測る。出土遺物はない。層位から、中世以降で近代よりは古いものであろう。

(6) ピット (第34図、表6、PL.10)

第1遺構面で検出したピットは39基である。出土遺物は土器の細片がほとんどで、図化し得るものがなかった。調査区南西部の、後世の造成により基盤層まで削平された部分で検出したものについては、中世より以前に帰属するものが含まれる可能性がある。

2 第2遺構面

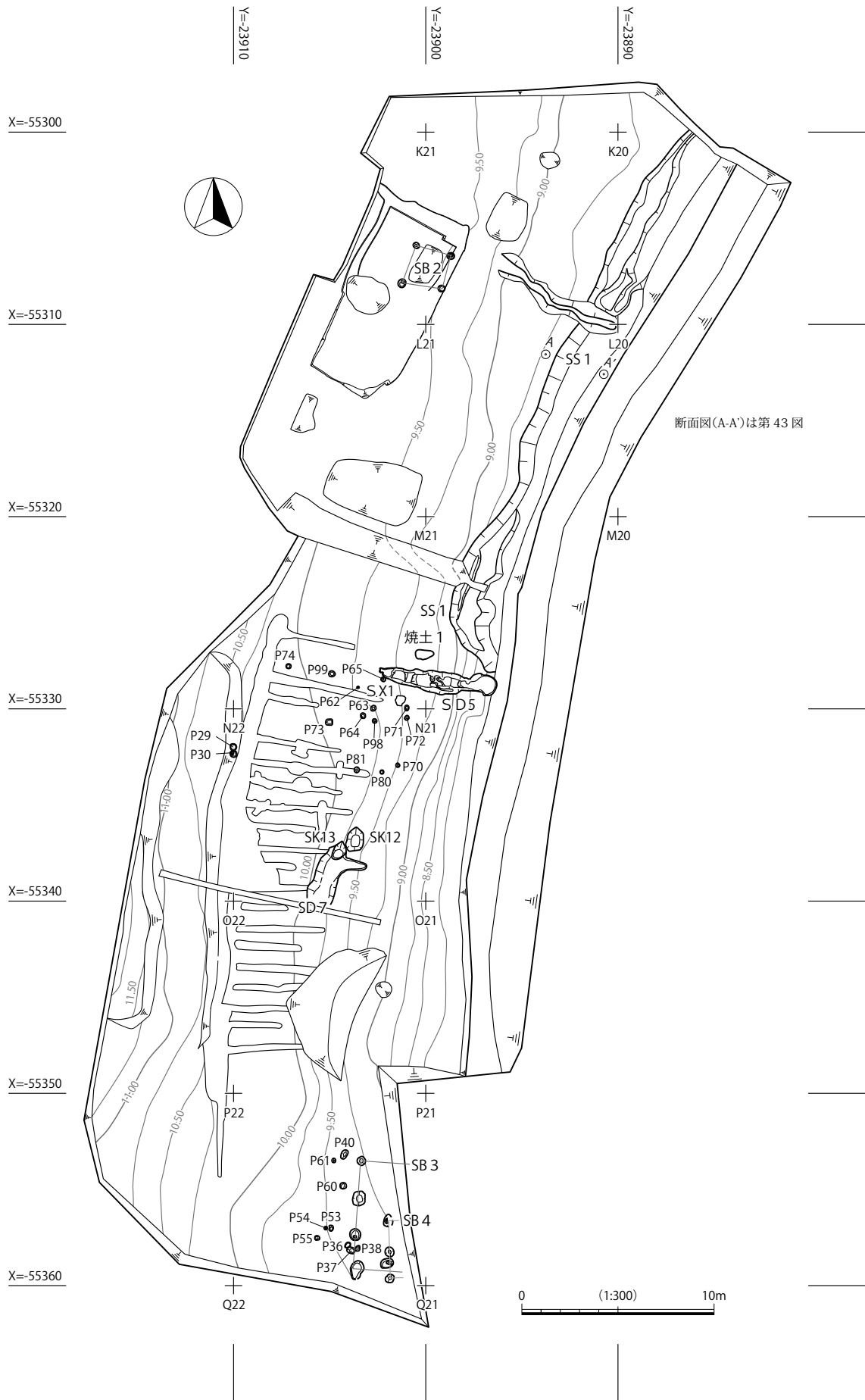
(1) 概要 (第42図、PL.14)

主に第IV-1層を除去した面で検出した遺構群である。掘立柱建物3棟、段状遺構1基、平石を伴う不明遺構1基、溝2条、焼土1箇所、土坑2基、ピット22基を数える。第1遺構面と同様に遺構密度は希薄であるが、祭祀に関係すると考えられる一連の遺構や、建て替えが行われた掘立柱建物など、注目される遺構を含む。この面に属する遺物の出土は偏っていて、調査区中央付近のSD5溝とSX1不明遺構の周囲から須恵器や土師器の甕などが多く出土している。奈良時代から平安時代にかけての遺構である。

(2) 段状遺構

SS1 (第42・43図、表15・16・54、PL.16・17・44・48・75)

丘陵裾部の標高9.0m以下を1.3mの深さにカットして形成された段状遺構で、調査地の北辺と東辺



第42図 6区丘陵裾部第2遺構面遺構配置図

第4章 4～6区の調査成果

に達するため正確な規模は不明ながら長さ16.5m以上、幅2.7m以上にわたる。埋土の状況から、少なくとも3回の掘り直しが行われている。調査地北東端の最下層では砂質土の堆積が確認され、平安時代の土器片が出土しているため、平安時代頃に耕作に関係して設けられたものと考えられる。最上層は厚くて締りがよく、近世前半の陶磁器を含むため、その頃埋め立てられたものであろう。

第43図に本遺構から出土した弥生時代から近世の遺物を図示した。50は弥生土器の器台受け部であり、S字状スタンプ文が施文されている。後期後葉と考えられる。51～58は須恵器であり、器種は51、52及び56は坏身、53と54は坏蓋、57と58は甕である。51は底部から口縁まで大きく湾曲して立ち上がり、かえりが大きく内傾する。これに対して52は体部が若干開き気味に立ち上がり、かえりは大きく内傾しない。53は天井端部から天井部が内傾しながら直線的に立ち上がり、天井部は平坦である。以上はTK217に比定されようか。54は輪状つまみを持つ蓋であり、かえりが短く、下方へ伸びない。7世紀後半に相当しよう。55は高坏脚部であり、脚裾が立ち上がり、三角状の透かし孔が認められる。56は高台付坏の転用硯であり、底部周縁より内側に高台が接合し低く、底面は回転糸切り痕が残る。7世紀末から8世紀前半の特徴を示す。59は器高が低く、体部が外傾しながら立ち上がる土師器高台付坏である。内面は丁寧なミガキを施す。8世紀後半から9世紀代と考えられる。60は「く」字状に大きく外反する土師器甕である。61～66は瓦質土器である。61、62及び65は鍋で、61と62の口縁は受け口状であり、62は端部内側がつまみ出される。63、64及び66は羽釜であり、このうち63の鏝は断面三角の粘土紐が貼り付けられたもので、体部は直線的に立ち上がる。64と66は鏝から口縁部までが深いことから、13世紀後半から15世紀中頃の所産と考えられる。67は在地産の香炉か。内面は無釉である。68は土玉、69～72は土錘であり、このうち69と70は胴が張る紡錘形を呈している。

(3) 掘立柱建物

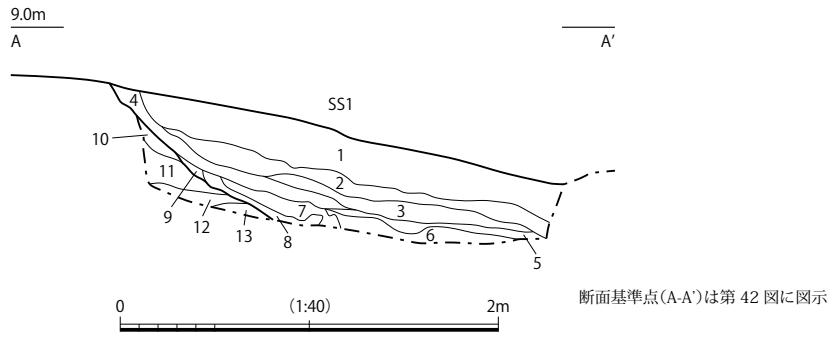
SB2 (第42・44図、PL.14)

調査区北東のK20～21グリッドにかけて検出した1間四方の掘立柱建物である。平面形は柱間距離約0.9m～1.1mのやや歪な正方形で、主軸は北北東方向に15°振れる。後世の削平のため柱穴が深さ0.1m程度しか残っていなかったが、いずれも礫が入っていた。時期を推定できる遺物は出土していないが、柱穴の1つが弥生時代終末期のSI1 竪穴建物を切っていることから、それ以降の遺構である。

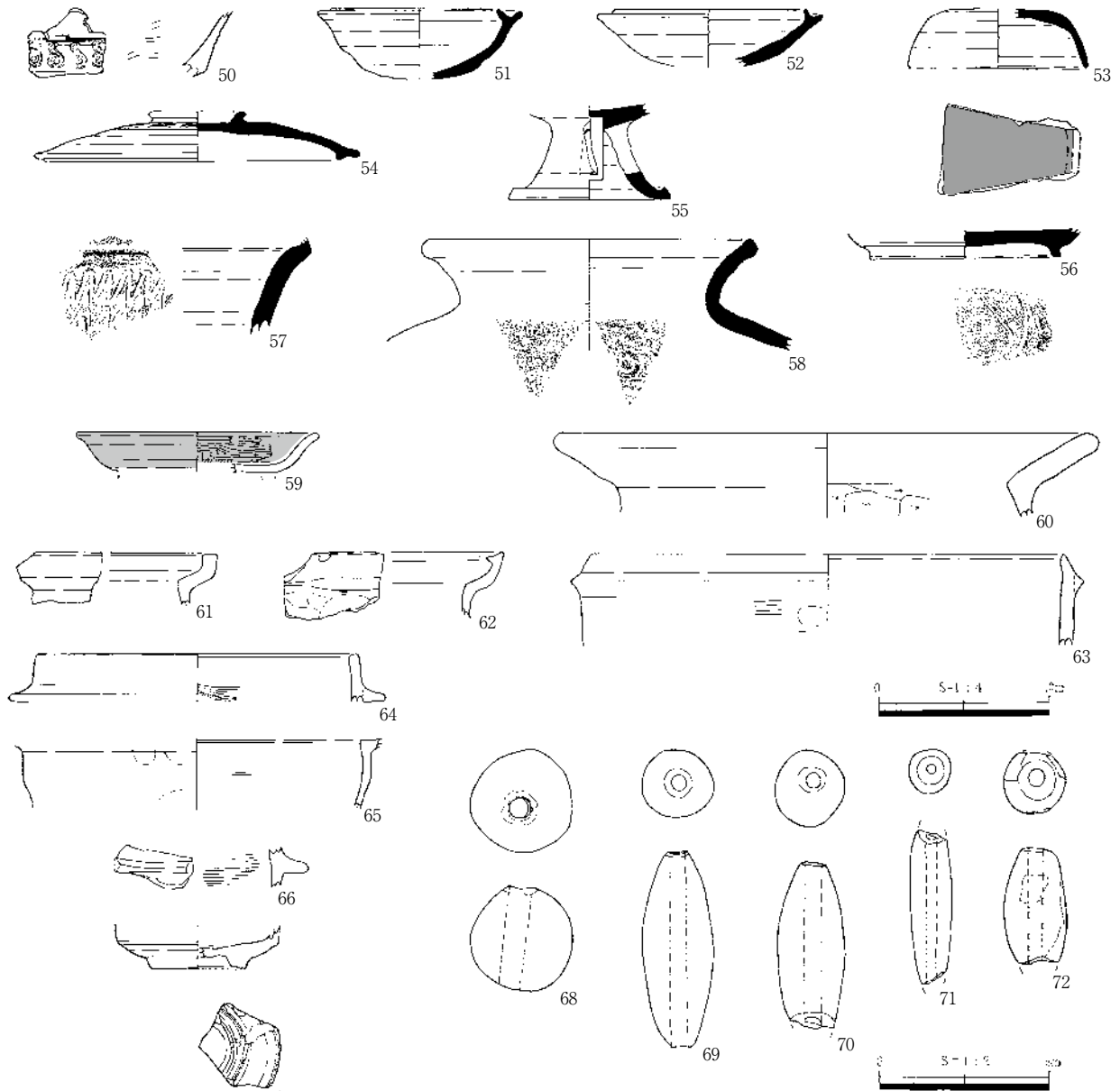
SB3 (第42・45図、表16、PL.15・16・43)

調査区南東端P21グリッドで検出した掘立柱建物。南辺の一部と西辺の柱穴列のみが調査区内にかかるため正確な構造と規模は不明ながら、1辺5.5m、桁行3間、梁行2間以上の建物で、軸はほぼ真北に合わせる。柱間距離は1.6～2.0mを測る。柱穴は0.7m前後とやや大きな円形で、柱痕から推定される柱径は20cm程度。後述するSB4と一部が重なり合う。柱穴自体は切り合い関係を持たないが、SB4の柱穴はいずれも上層の埋土が締まっていて柱痕が認められないことから、SB3が後出すると考えられる。柱穴から出土した土器片から平安時代頃のものと推定される。

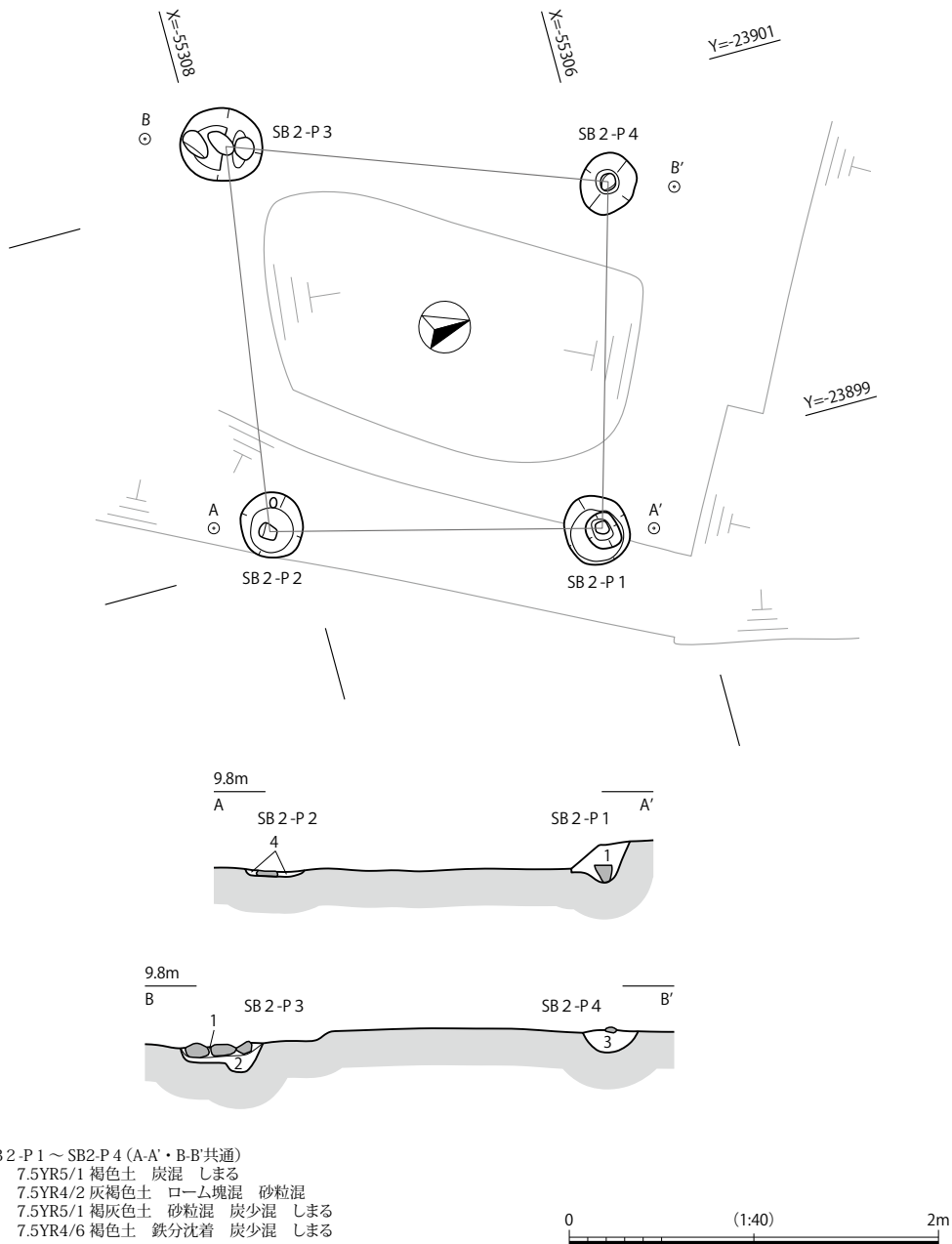
本遺構からは2点の土器が出土している。73は弥生土器で、外反する口縁部に8条の平行沈線文がめぐり、内面は横方向のミガキが施されている。器台の受け部もしくは壺口縁部であろう。74は須恵器坏であり、体部がやや湾曲しながら外傾して立ち上がる。器壁は薄い。9世紀末～10世紀初頭の特徴を示す。



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色土 炭粒混 礫(径10mm以下)多混 焼土ブロックわずかに混 粘性ふつう しまりやや強
- 2 10YR4/4 褐色土 炭粒少混 礫(径5mm以下)混 若干シルト質 粘性ふつう しまりやや強
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色土 礫(径5mm以下)混 ややシルト質 粘性やや強 しまりやや強
- 4 7.5YR4/2 灰褐色土 礫(径5mm以下)混 シルト質 粘性やや強 しまりやや弱
- 5 7.5YR4/2 灰褐色土 礫(径5mm以下)混 鉄分混 シルト質 粘土少混 粘性やや強 しまりやや強
- 6 7.5YR4/1 褐灰色土 礫(径5mm以下)混 シルト質 粘土少混 粘性やや強 しまりやや弱
- 7 7.5YR3/1 黒褐色土 礫(径5mm以下)混 炭粒混 焼土ブロックわずかに混 鉄分塊混 盛土か? 粘性やや強 しまりやや強
- 8 7.5YR4/3 褐色土 礫(径5mm以下)混 鉄分多混 やや砂質 粘性やや弱 しまり強
- 9 10YR3/4 にぶい黄褐色 礫(径5mm以下)混 砂質 粘性弱 しまりやや弱
- 10 10YR5/2 褐灰色 礫(径5mm以下)混 炭粒少混 やや砂質 粘性弱 しまりふつう
- 11 7.5YR3/3 暗褐色土 礫(径5mm以下)多混 炭粒少混 焼土ブロック少混 鉄分多混 ややシルト質 粘性ふつう しまり強
- 12 7.5YR3/1 黒褐色土 礫(径5mm以下)少混 炭粒少混 焼土ブロック少混 ややシルト質 盛土か 粘性ふつう しまりふつう
- 13 7.5YR5/1 褐灰色土 礫(径5mm以下)混 炭粒少混 鉄分多混 やや砂質 盛土か 粘性やや弱 しまり強



第43図 SS1断面図及び出土遺物



第44図 SB2平面・断面図

SB4 (第42・46図、表16、PL.15・16・43)

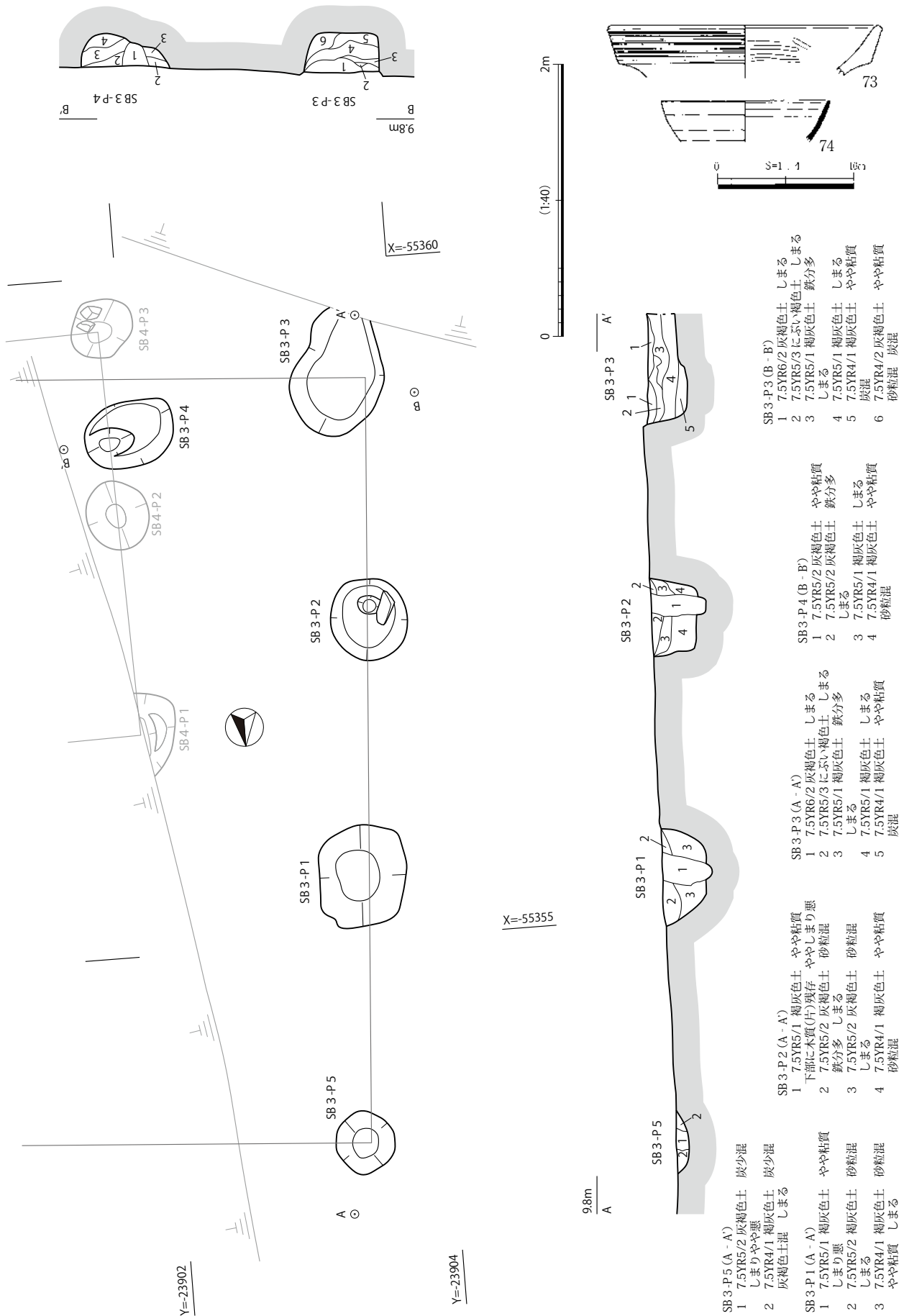
P21グリッドで検出した掘立柱建物で、西辺の柱穴3基のみが調査区にかかっている。SB3同様真北を向く建物と考えられ、柱間距離は1.5m前後、柱穴も直径0.6m程度とSB3と比べて小ぶりである。SB4をSB3に建て替えたものであろう。

本遺構からは2点の土器が出土している。75は土師器高坏の脚部であり、脚裾が大きく「ハ」の字状に開く。76は外面にハケが施された壺か甕の底部であり、底面が若干上げ底となっている。

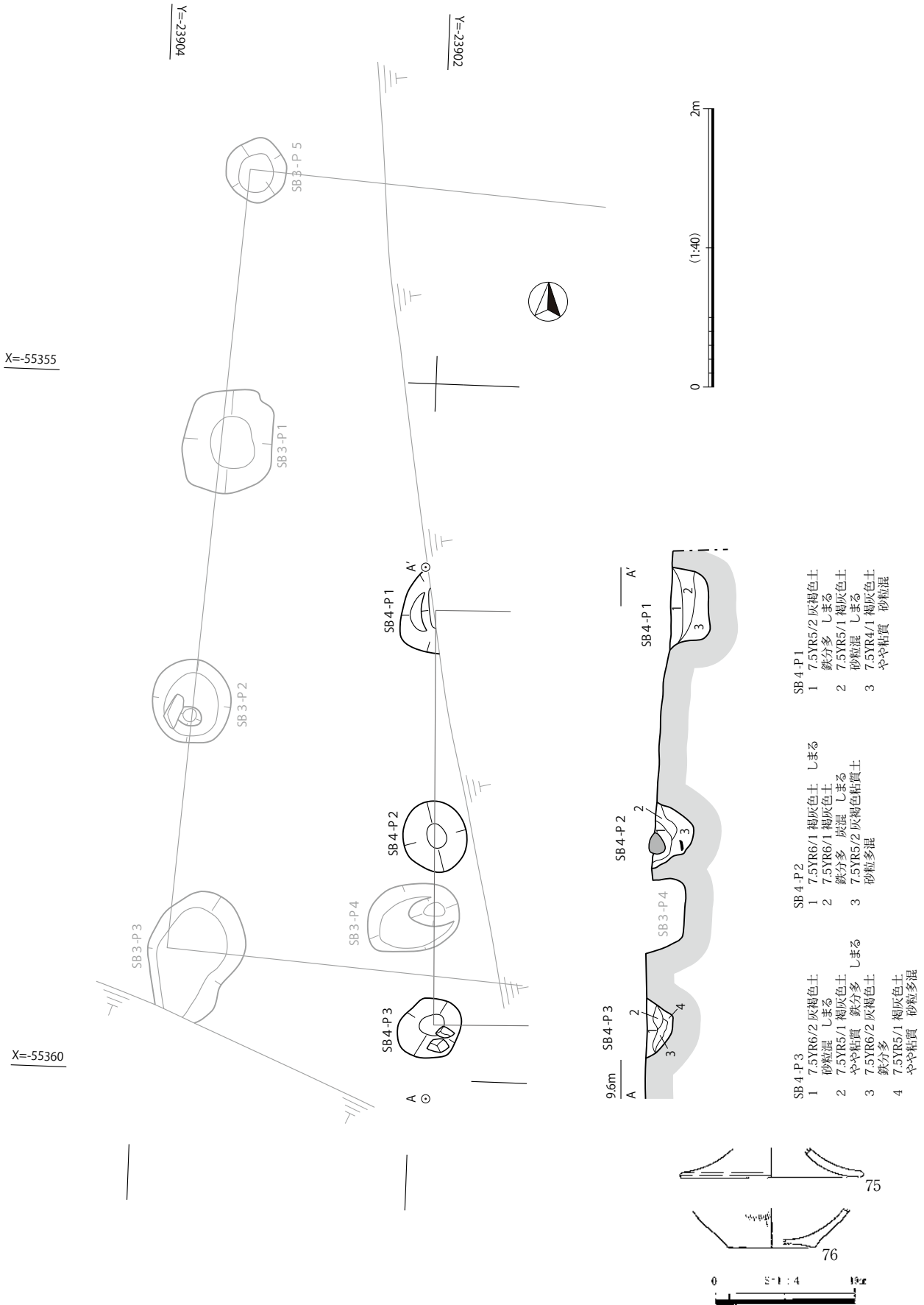
(4) 溝

SD5 (第42・47～50図、表16、PL.18・49)

M20～M21グリッドにかけて検出した溝で、長さ7.9m、最大幅1.2m、検出面からの深さ0.5mを測る。標高9.8m～8.0mまで、丘陵裾部を約15°の傾斜でほぼ西から東に下る。一見窯跡のような見かけと規模であるが、焼け歪んだ土器や炭などの窯跡に特有の事象は認められない。



第45図 SB3平面・断面図及び出土遺物



第46図 SB4平面・断面図及び出土遺物

特筆すべきはこの遺構の構造である。底面付近の両側面には黄色土が貼られているだけでなく、底面を中心に埋土中程にかけて、拳大から0.5m程までの大小の礫が多数分布する。特に、溝の上端から2.5mの位置では1辺1.0mの枡形に礫が配置されている。この部分の下層の埋土は砂粒を多く含むため、実際に水を溜めていた可能性がある。溜枳状の配石を挟んで、北側地上部分には焼土1、南側地上部分には平石をもつSX1が存在する。付近のSD5の埋土上層には奈良時代の須恵器や土師器が多数含まれることから、おそらく水に関連する一連の祭祀行為を目的に構築された遺構である可能性を指摘しておきたい。

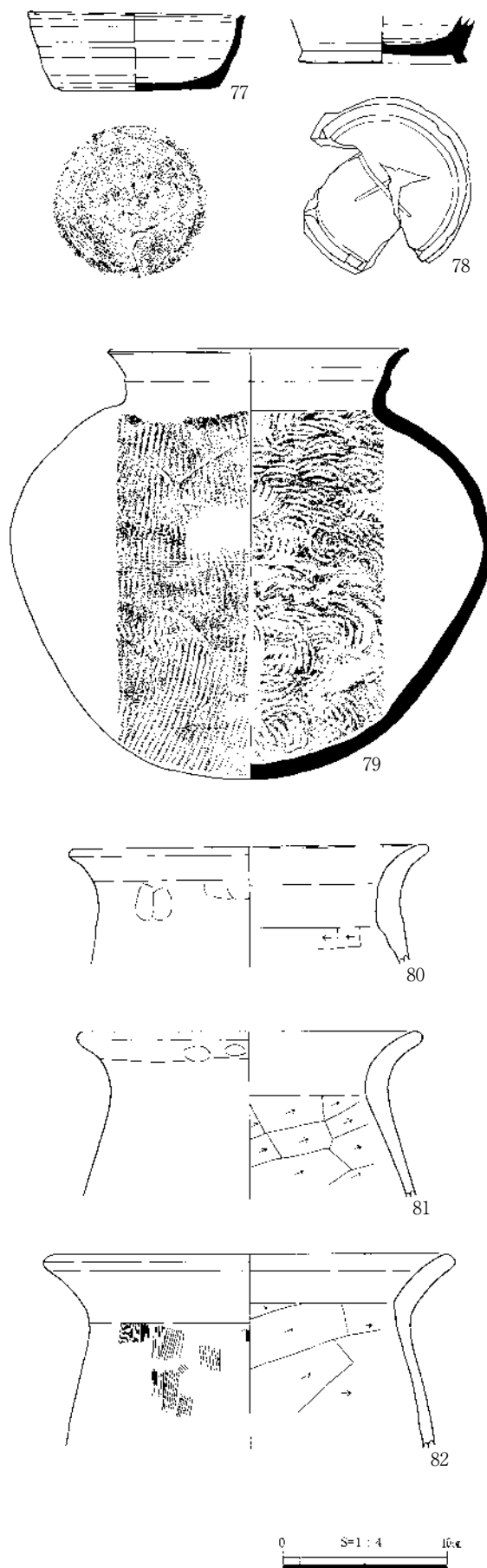
本遺構からの出土遺物は6点掲載している。77は須恵器坏であり、78は須恵器高台付坏である。77は体部がやや外傾しながら立ち上がり、底部は回転糸切り痕を残す。8世紀代の所産と考えられる。78は底部最外周に高台を貼り付け、外側に踏ん張る形態を呈している。底面には「×」のヘラ記号が認められる。7世紀末～8世紀中頃の特徴を示す。79は体部中位に最大径をもつ須恵器甕である。80～82は口縁部が最大径となり、体部の張りが甘い土師器甕である。

(5)不明遺構

SX1 (第42・51・52図、表16、写真5、PL.17～19・47・48)

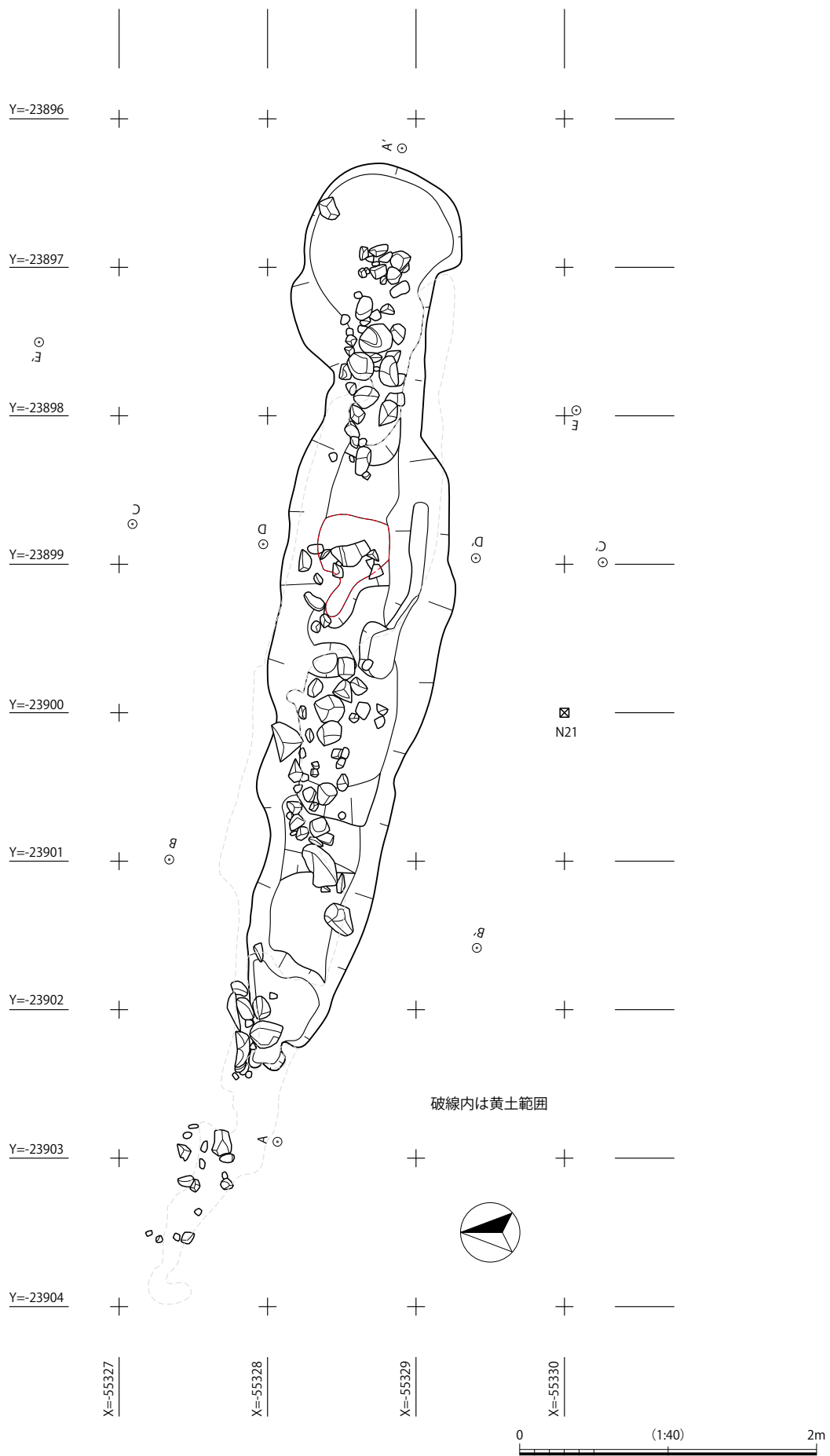
調査区中程のM21グリッドで検出したテーブル状の平石をもつ遺構で、前述したSD5溝に接している。平石は0.5m四方の自然石で厚さ0.05mを測り、大小の礫を約10個置いた上に水平に近い状態で据えられていた。最大径2.5m、深さ0.3mの浅い掘方を伴うが、掘方の北側はSD5に続いており、独立して設けられたものであるかは疑わしい。SD5との間の地表部分で奈良時代の土師器や須恵器の甕などが多数出土していることから、SD5に関連して、供献などの祭祀的な行為を目的として設けられた遺構であると考えたい。

本遺構からは多数の須恵器及び土師器甕が出土している。83と85は須恵器甕であり、外面は平行タタキ、内面は青海波状当て具痕を残す。84と86は短頸壺で、前者は器壁が薄く硬質であるが、後者は軟質で器壁が

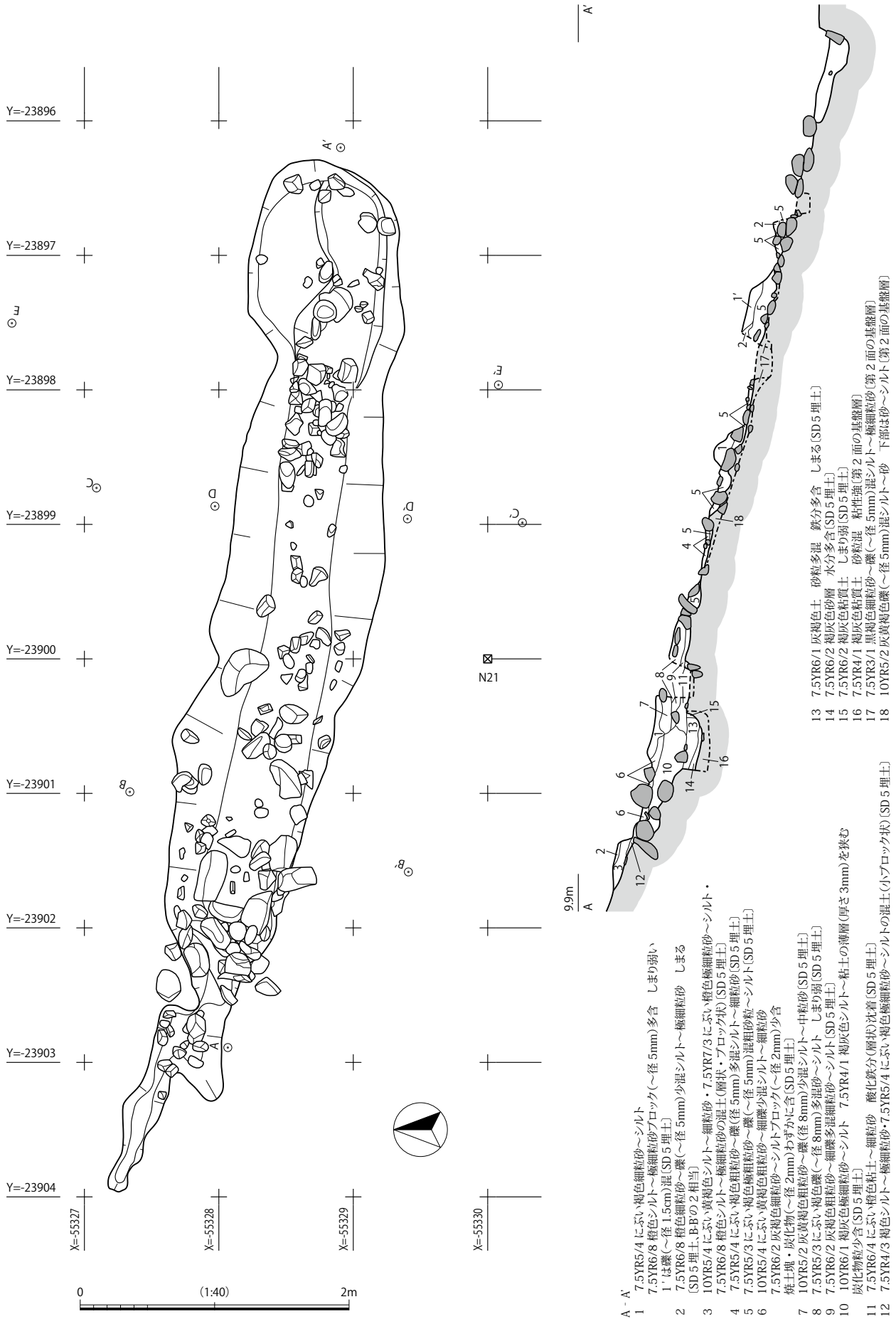


第47図 SD5出土遺物

第4章 4～6区の調査成果

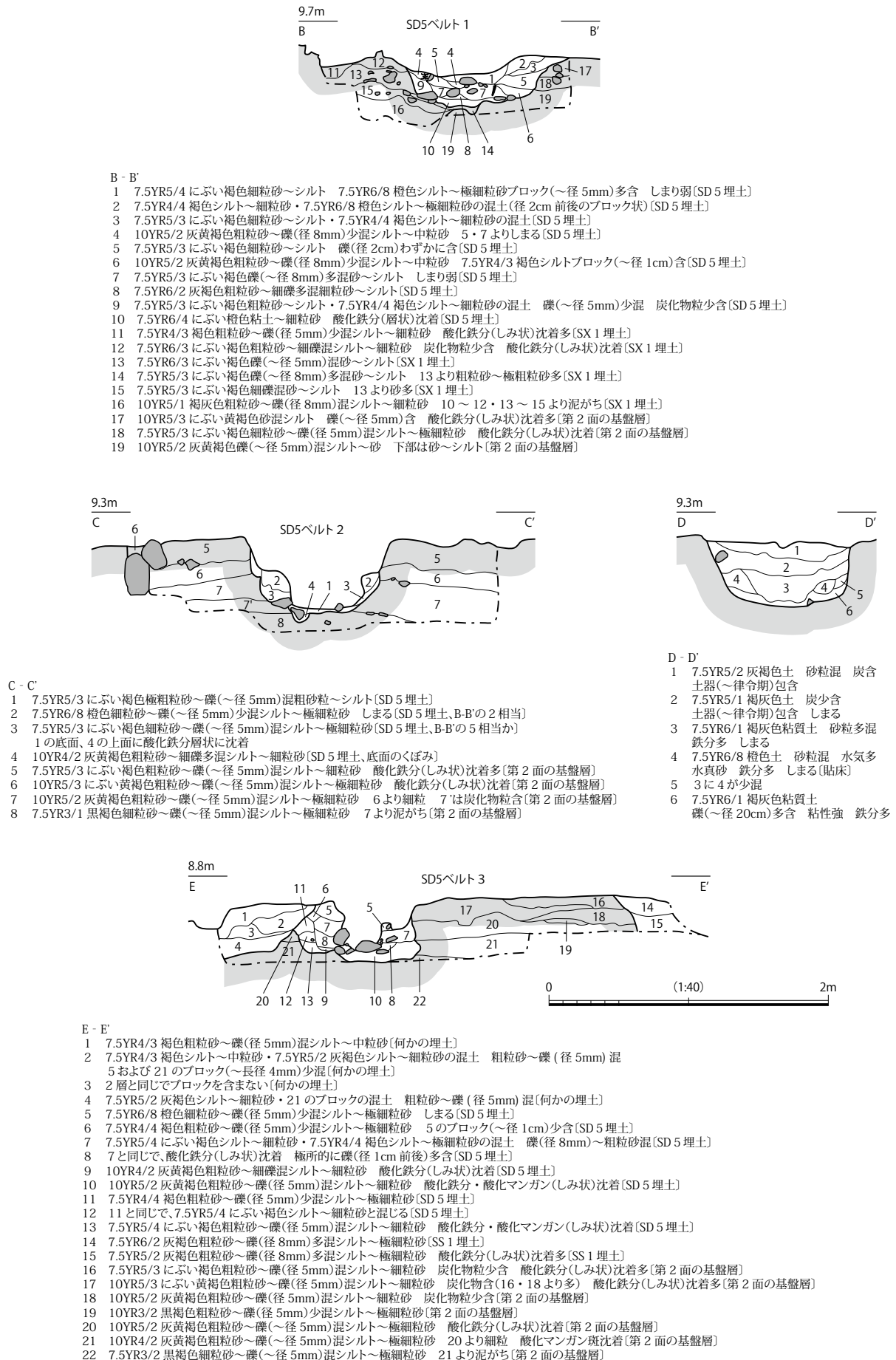


第48図 SD5上層平面図



第49図 SD5下層平面図・断面図(1)

第4章 4～6区の調査成果



第50図 SD5断面図(2)

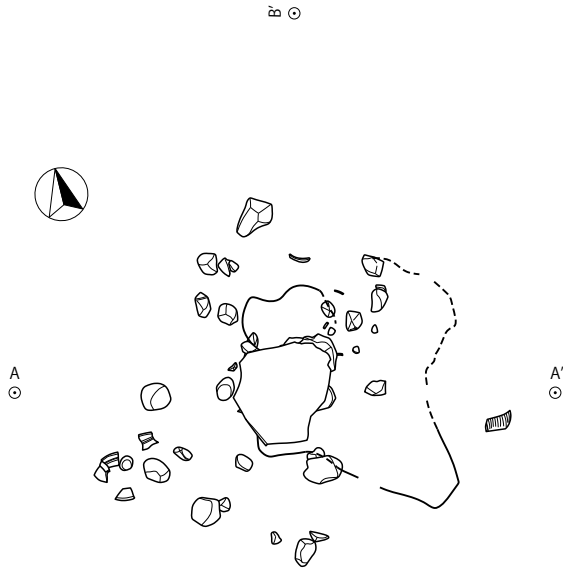
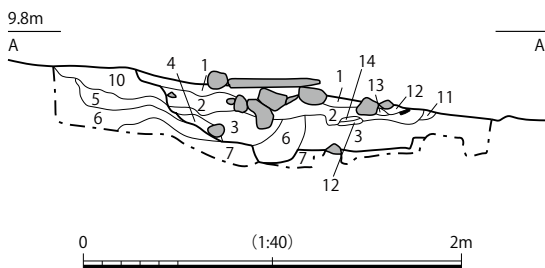
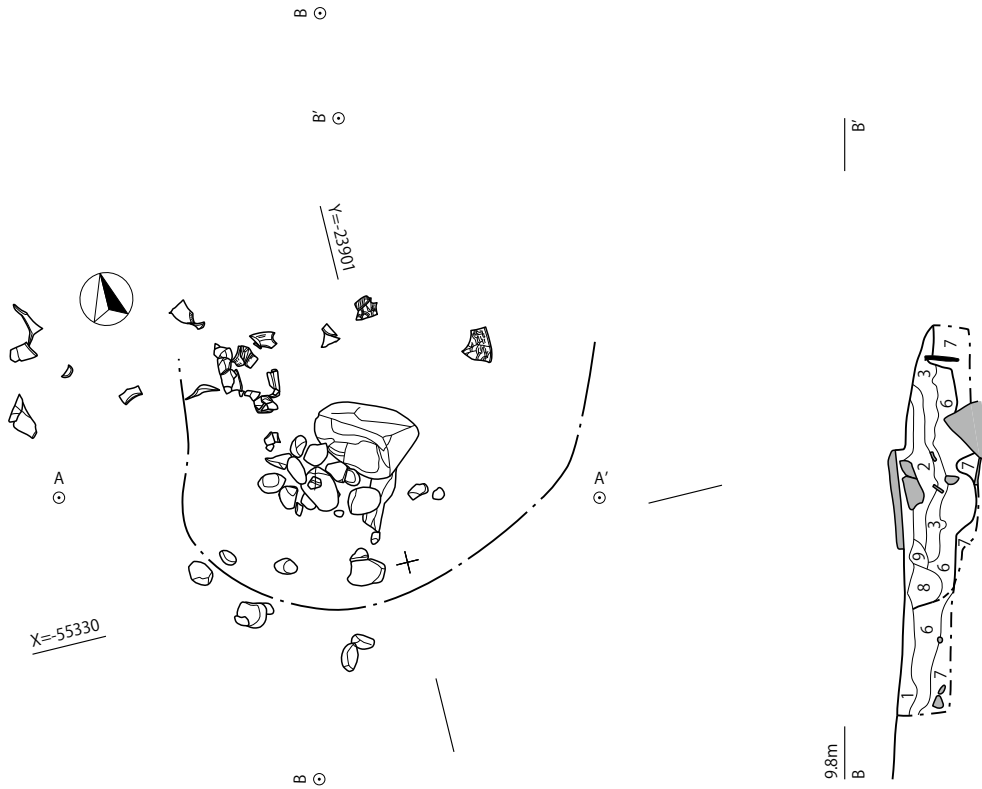
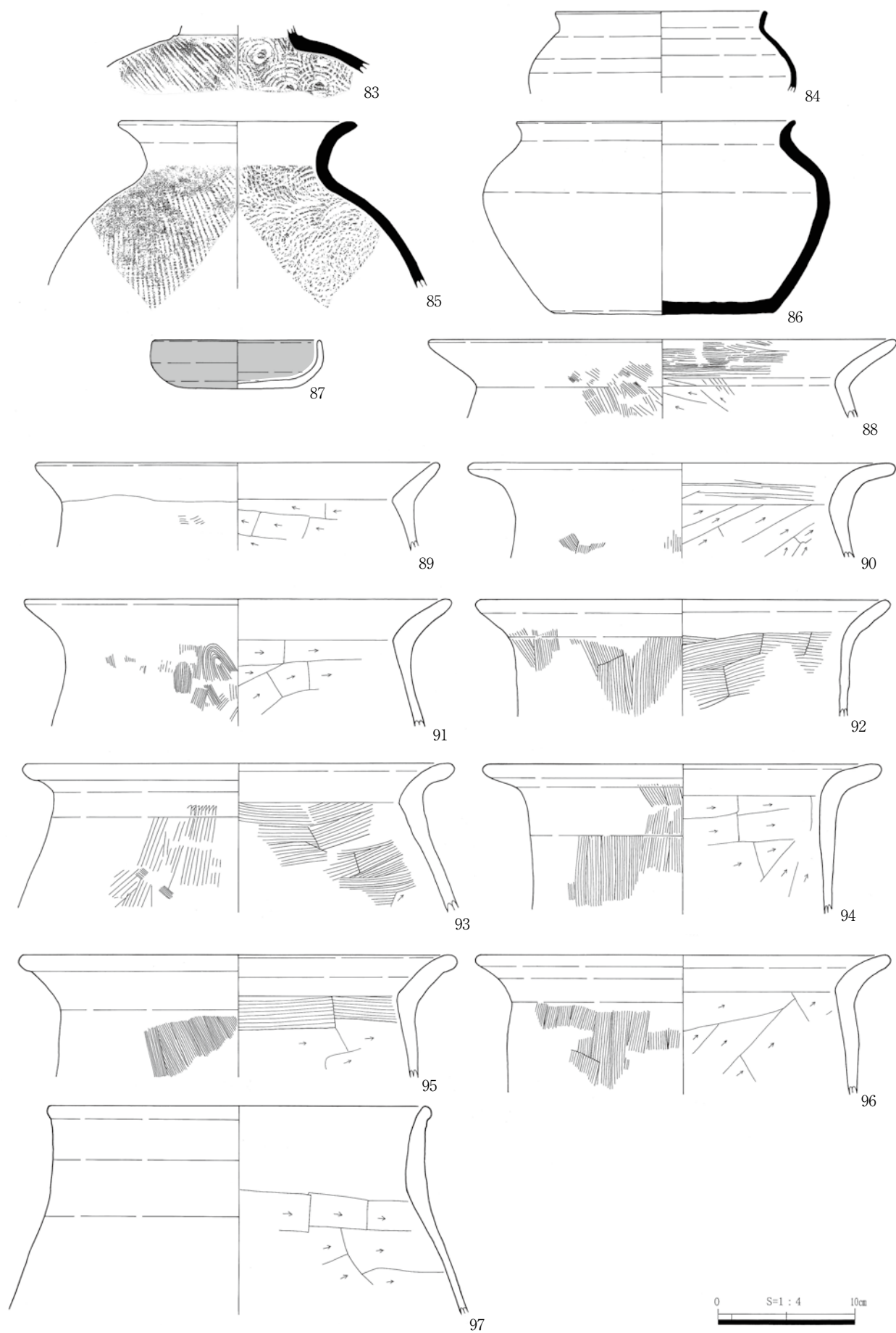


写真5 SX1 礫出土状況

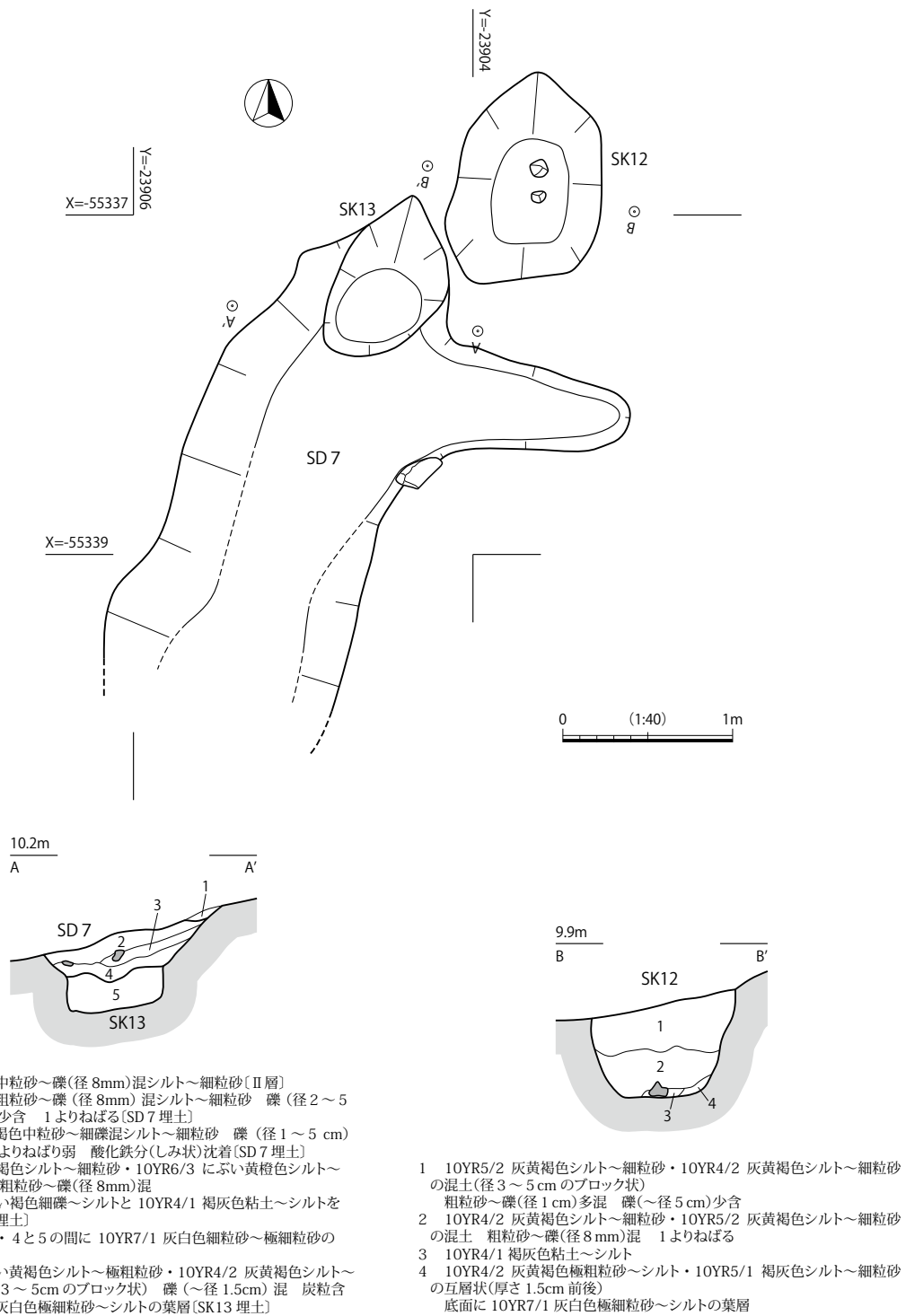


- 1 7.5YR5/3 にぶい褐色土 鉄分多 炭少混 しまる
- 2 7.5YR6/2 灰褐色土 砂粒多混 しまる
- 3 7.5YR6/1 灰褐色粘質土 砂粒多混 しまる
- 4 7.5YR6/1 灰褐色粘質土 砂粒多混 鉄分多 しまる
- 5 7.5YR6/2 灰褐色土 炭少混 やや粘質
- 6 7.5YR6/3 にぶい褐色土 砂粒混 やや粘質
- 7 7.5YR6/1 灰褐色粘質土 砂粒多混
- 8 7.5YR6/4 にぶい橙色土 砂粒混 やや粘質
- 9 7.5YR6/4 にぶい褐色土 砂粒多混 鉄分多
- 10 7.5YR6/3 にぶい褐色土 鉄分含
- 11 7.5YR6/1 灰褐色粘質土 炭混
- 12 7.5YR6/3 にぶい褐色粘質土 鉄分多
- 13 7.5YR5/1 灰褐色土 やや粘質
- 14 7.5YR6/2 灰褐色土 鉄分多

第51図 SX1 平面・断面図



第52図 SX1出土遺物

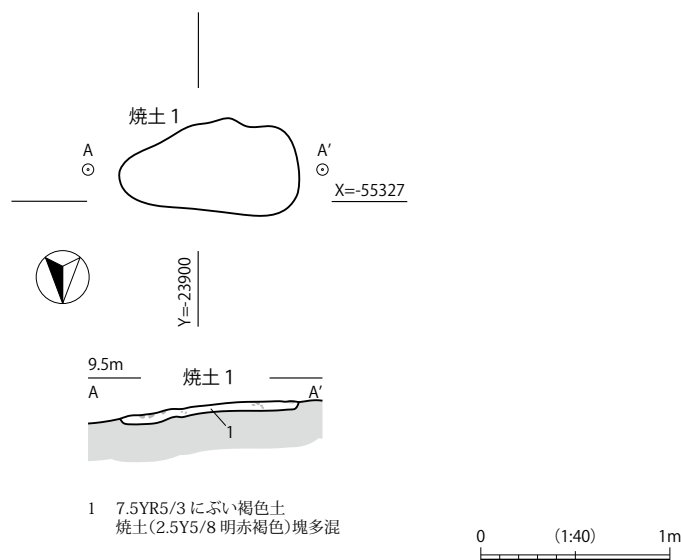


第53図 SK12・13、SD7平面・断面図

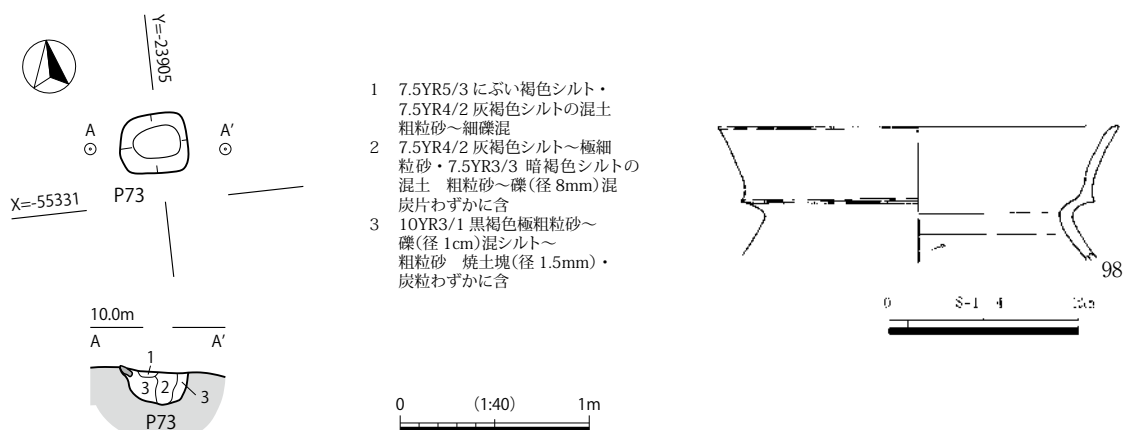
厚い。87は体部が内湾して立ち上がる土師器坏であり、内外面赤色塗彩がなされている。7世紀末から8世紀前葉の特徴を示す。88～97は土師器甕である。このうち88～96は口縁部が大きく外反し、体部にハケを施すことで共通するが、93のように体部に最大径をもつものと、92、94～96のように直胴形で口縁部に最大径をもつものが認められる。97は体部が最大径となり、直立的な口縁部を有する器形となる。口縁端部は肥厚して丸みを帯びている。

SD7及びSK13(第42・53図、PL.19)

調査区中央付近のN21グリッドで検出した溝とこれに伴う土坑である。SD7は検出部分では約20°東に振れて南北方向に伸び、検出長3.2m、幅1.3～1.5m、検出面からの最大深さは0.5mである。溝



第54図 焼土1平面・断面図



第55図 第2遺構面ピット平面・断面図及び出土遺物

の北東側には長さ1.2m、幅0.5m前後、深さ0.1m前後の小溝が直交するように東側に延びる。SS3段状遺構はSD7の埋土を切っている。

SD7の北詰にはSK13が掘られている。長軸1.0m、短軸0.6mの平面が不整な楕円形の土坑で、検出面からの深さは0.6m、SD7の底面からの深さは0.3m前後である。SD7に伴って掘られた穴で、SD7はSK13が埋め戻された後も一定期間溝として機能していたと考えられる。出土遺物は土器の細片のみで、SS3に切られることから、古代に比定できる。

(6) 焼土

焼土1(第42・54図、PL.19)

M20～21グリッドの標高9.4mで検出した焼土で、長軸1.0m、短軸0.5mの楕円形を呈し、熱によって深さ5cmまで赤化している。掘り込みなどの構造は認められない。0.4m南方に存在するSD5や、SD5を隔てて1.5m南方にあるSX1と一体の、祭祀に伴う地床炉の可能性はある。

(7) 土坑

SK12(第42・53図、PL.19)

N21グリッドで検出した南北方向に主軸をもつ不整な楕円形の土坑で、長軸1.2m、短軸0.84m、検出面からの最大深さは0.64mである。埋土はほとんどが埋戻しによる堆積土であるが、下部に帯水により堆積した粘質土と丘陵側から流入した砂質土と粘質土が互層に堆積し、底面に極細粒砂からシル

トの葉層が堆積する。このことからSK12は掘られてから埋められるまでの間に、一定の機能していた時間が認められ、機能時には水が溜まっていたことがわかる。埋土からの出土遺物は土器の細片である。遺構の帰属時期は、層位的に古代に比定できるが詳らかにできない。

(8)ピット(第42・55図、表6、PL.14・15)

第2遺構面で検出したピットは24基である。大半はSX1の周辺やSB3の西側に分布するので、それらの遺構と関係するものである可能性がある。埋土からの出土遺物は土器の細片がほとんどで、図化し得るものがなかった。

P73(第42・55図、表16、PL.14・51)

N21グリッド、調査地中央部で検出したピットである。長軸0.41m、短軸0.39m、深さ0.18mを測る。埋土は3層に分かれ、2層の灰褐色シルトは柱痕の可能性はある。

P73から出土した土師器甕(98)1点を図示した。器壁が薄く、口縁部が外傾して端部は外剥ぎ状と、口縁下端は大きく外側へ摘み出されている。弥生時代終末期～古墳時代前期に比定されよう。

3 第3遺構面

(1)概要(第56図、PL.20)

第IV-3層までを除去した面で検出した遺構群で、一部第IV-3層上面ないし第IV-3層中で検出した遺構も含まれる。主に弥生時代後期後葉～終末期に属する竪穴建物(焼失住居)1棟、平地建物3棟、焼土1箇所、杭列1条(古墳時代後期)、段状遺構2基とこれに伴う溝3条、ピット26基を検出した。

調査区北西で検出した竪穴建物と平地建物群は、住居の構造や集落の景観を復元するうえで重要な手がかりとなるものである。特に焼失住居であるSI1竪穴建物では、屋根の構造材や葺材が床面に貼り付いた状態で良好に遺っていた。

(2)竪穴建物

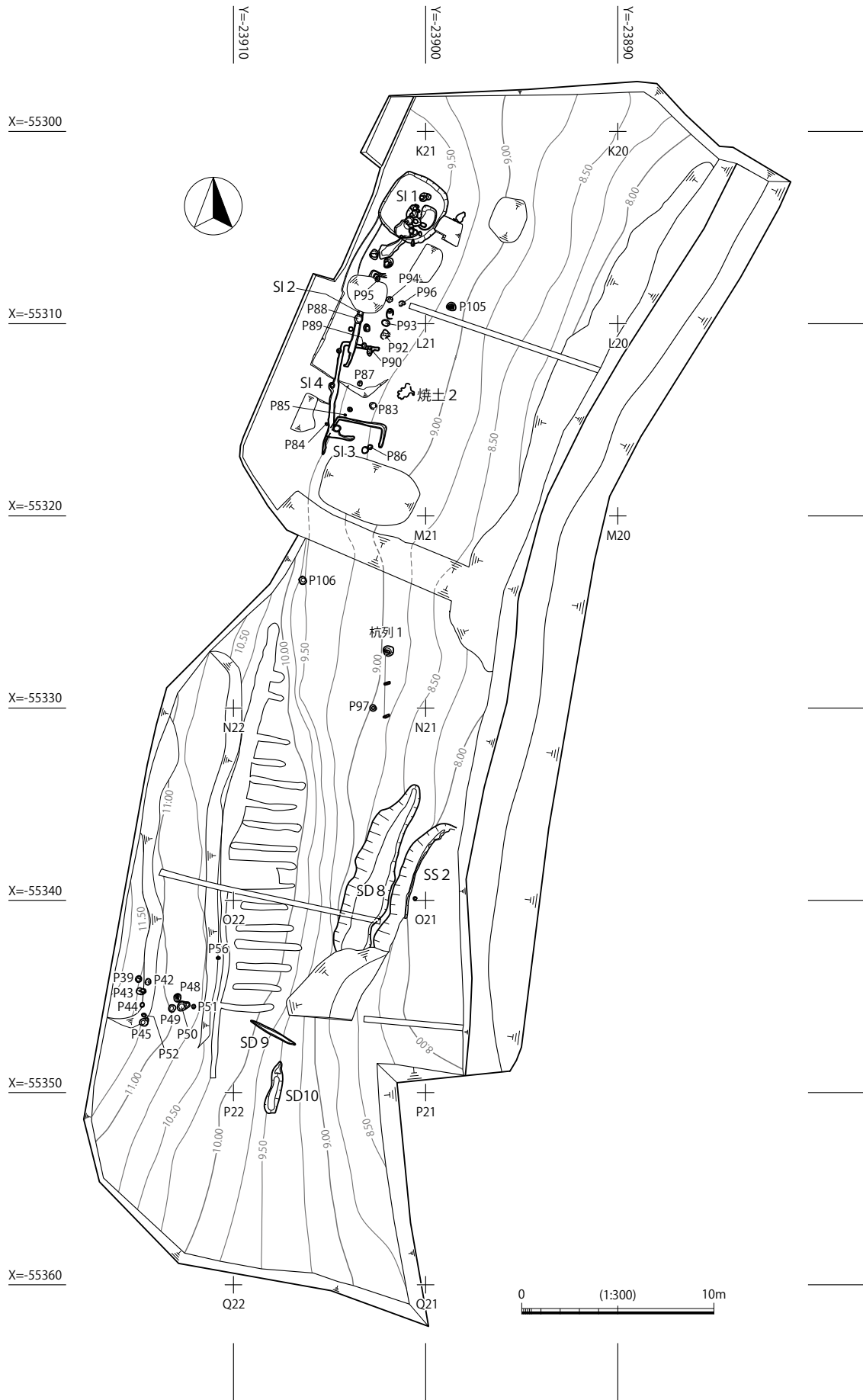
SI1(第57～65・371・372・380～388図、表16・17・55・63～66、PL.20～26・41・42)

K20～21グリッドに位置し、検出面での標高は約9.5mを測る。丘陵裾部をカットした崖面に西側を、なだらかな斜面に東側を挟まれた帯状の平坦面上に立地する。竪穴は3.5m×3.1mの隅丸方形で、床面積は8.2㎡とやや小振りであるが、これは地形上の制約によるものと考えられる。長軸はN30°Eと北東方向に30°振れる。以下では、記述の便宜上各辺を東西南北で表す。

長く宅地に利用された場所にありながら、建物間に位置していたため、大きな削平は受けていない。特に北東隅から北辺にかけては構築面が残っており、床面までの深さは0.41mを測る。

埋土上層は、主に遺構廃絶後に残っていたくぼみに流れ込んだ土である。出土した弥生時代終末期の甕3個は、薄い炭層を伴うことから建物の焼却と埋め立ての祭祀に関わる可能性がある。中層は黄褐色土のブロックを多く含むよく締まった土で、部分的に薄い炭層と互層をなして環状に竪穴の隅を埋める。周堤の土を崩して固く埋め立てたものであろう。下層は粘性の強い均質な黒褐色土で層厚は約0.08m。葺材や構造材等の炭化物を良好にパックした状態であることから、屋根土の可能性が高い。

竪穴はローム層まで掘り込まれているが、黒色土が露出する部分約1.3㎡には厚さ0.05mの貼床が施されている。貼床下の土坑2基(SK1、2)とピット4基(P3～6)はこの竪穴に先行するもの。周壁溝はない。炭化物に覆われていた上に火を受けて硬化したこともあって、床面の凹凸が最後の使用時のまま非常によく保存されていた。主柱穴は3基で、竪穴の長軸上に1列に並ぶ。主柱穴の間隔は



第56図 6区丘陵裾部第3遺構面遺構配置図

北から芯々間で0.65m、0.85mで、深さは0.61m、0.498m、0.36m。東半部では床面上で置き柱と推定されるくぼみが2箇所確認された。西半部は柱のない空間である。

中央ピットの掘方は、直径0.55mの不整形な円形を呈し、深さは約0.25～0.29mを測る。南辺を除く3辺に薄い板を立てて外側を埋め、1辺0.35mの正方形のピットとして機能した。ピット内の底面には樹皮がパッチ状に貼られている。内部からは多くの炭化物と熱によって発泡した小礫が出土しており、火処として用いられたことが分かる。中央ピットには外径約1.2m×1.0m、最大厚0.07mの周堤が伴う。貼床とは異なって砂質土が用いられている。

竪穴の床面と壁面に張り付くような形で、上屋や内装などに用いられた木材やカヤが非常に良好な状態で遺っていた。東屋根と西屋根では、屋根土と葺材の下から元の配置をほとんど崩さずに垂木が平行に並んで出土している。これに対し竪穴の長軸付近では、中央やや北寄りから南端に向かってラッパ状に開く形で焼土が分布し、その下から炭化が進んだ材の細片が多数検出された。この部分は開口部であったと考えられる。

東屋根には丸太8本と板1枚が最大0.25mの比較的広いピッチで平行に並ぶ。これに対し西屋根には板2枚、角材2本、丸太7本を最大0.3m間隔で配置する。崖面から垂木穴が検出されたことから、西屋根の垂木裾を崖面に固定して、支柱と合わせて主要な構造材としていたことがわかる。北屋根では少なくとも12本、入口側の南屋根では少なくとも5本の放射状に配列された垂木の断片が検出できた。樹種同定の結果、板材と角材はスギ製で、丸太はゴンズイやクリなどの雑木製であった。

葺材は、東屋根と西屋根の垂木に重なる形で良好に遺っていた。ほとんどが水平方向の1層のみで薄く、土屋根の下地であったと推定される。同定の結果はイネ科植物であった。東屋根の南側では、長いカヤが斜め方向に重ねられている箇所があり、流出した部分を補修したものと考えられる。北屋根と南屋根では綿状の炭化物が検出されていて、曲面を描く箇所には異なる下地が施されることも判明した。竪穴の壁面には薄く束ねたカヤを斜めに貼り付け、その上から水平方向に鉢巻状に2段のカヤの帯を回している。

竪穴周辺の遺構もよく保存されていた。北東角の竪穴から0.6mの構築面上では長軸0.52m、短軸0.31mの範囲で強度の焼土面が検出された。竪穴上の屋根際に設けられた屋内炉とみられる。構築面上ではほかに周堤土の削り残しと考えられるロームが3箇所で面的に認められる。また、南辺中央では竪穴の縁から1.2mの位置で、0.4m間隔で並ぶ礫を入れた2基のピットが検出された。一方には炭化材が遺っており、竪穴建物の入り口部分と推定される。南西角付近では、現代の住宅建築によってカットされた法面で、周溝と周溝外堤がそれぞれ幅0.6m、深さ0.15m分と幅0.7m、高さ0.1m分確認できた。山から下る水を防いだ半円形の周溝があったものと思われる。

床面からの出土遺物は、床面上に置かれていた座席か作業台の可能性のある平石のほかには、貼床に含まれていた終末期の甕の口縁部小片があるだけである。このことから不慮の火災ではなく、家を始末するために意図的に火をかけたものとみなされる。

放射性炭素年代測定は、葺材と壁材のカヤ1点ずつと、支柱と垂木1点ずつについて実施した。2 σ 暦年較正年代で、葺材：121calAD-236calAD(90.9%)、壁材：64calAD-214calAD(95.4%)、支柱：48calAD-135calAD(93.3%)、垂木：55calAD-172calAD(92.8%)という結果であった(第7章第1節)。概ね2世紀前半を示す数値であるが、土器から推定される弥生時代終末期とは100年ほどの開きがある。日本産樹木年輪試料と較正曲線IntCalとの不整合による問題であるかもしれない。

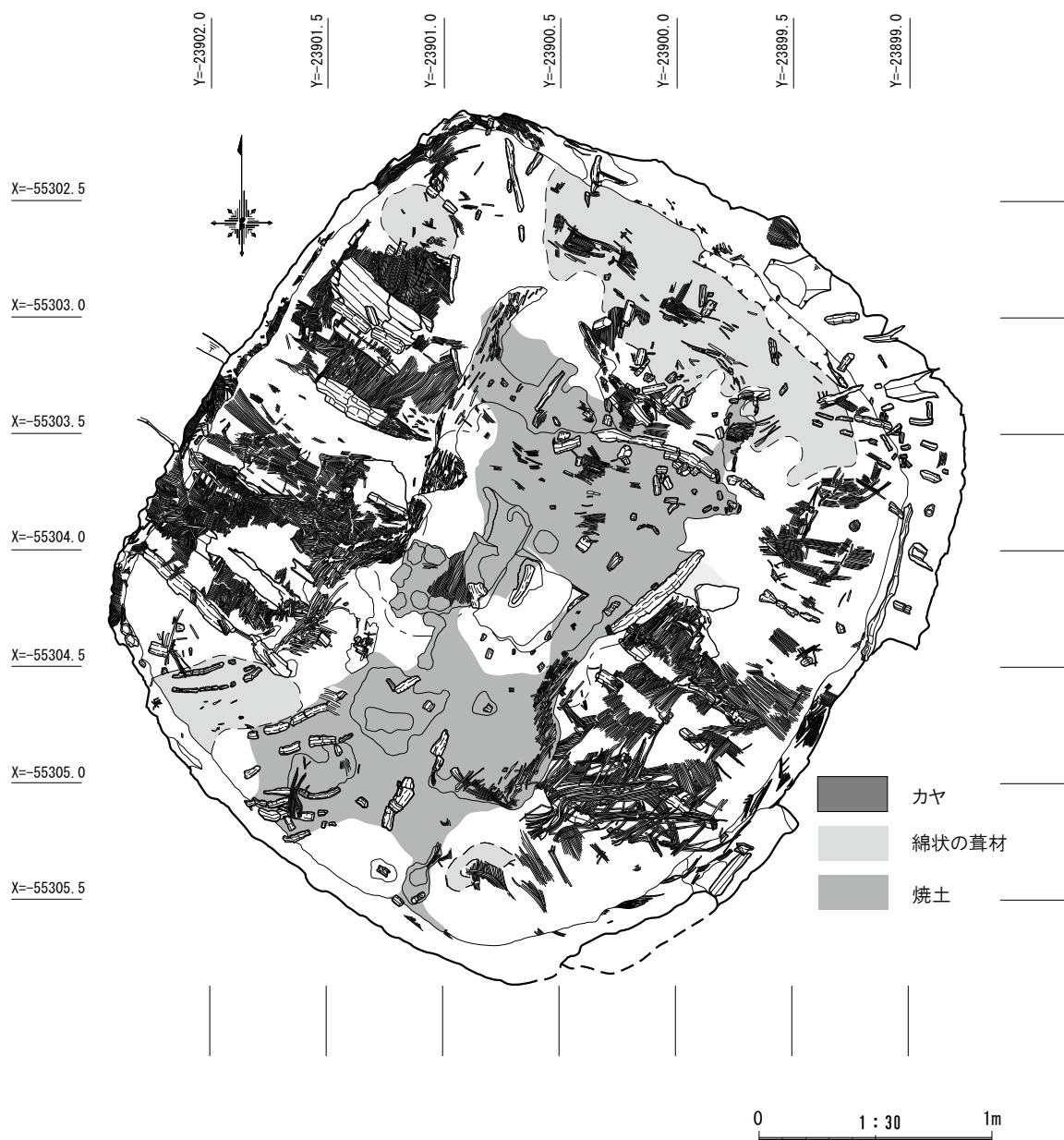
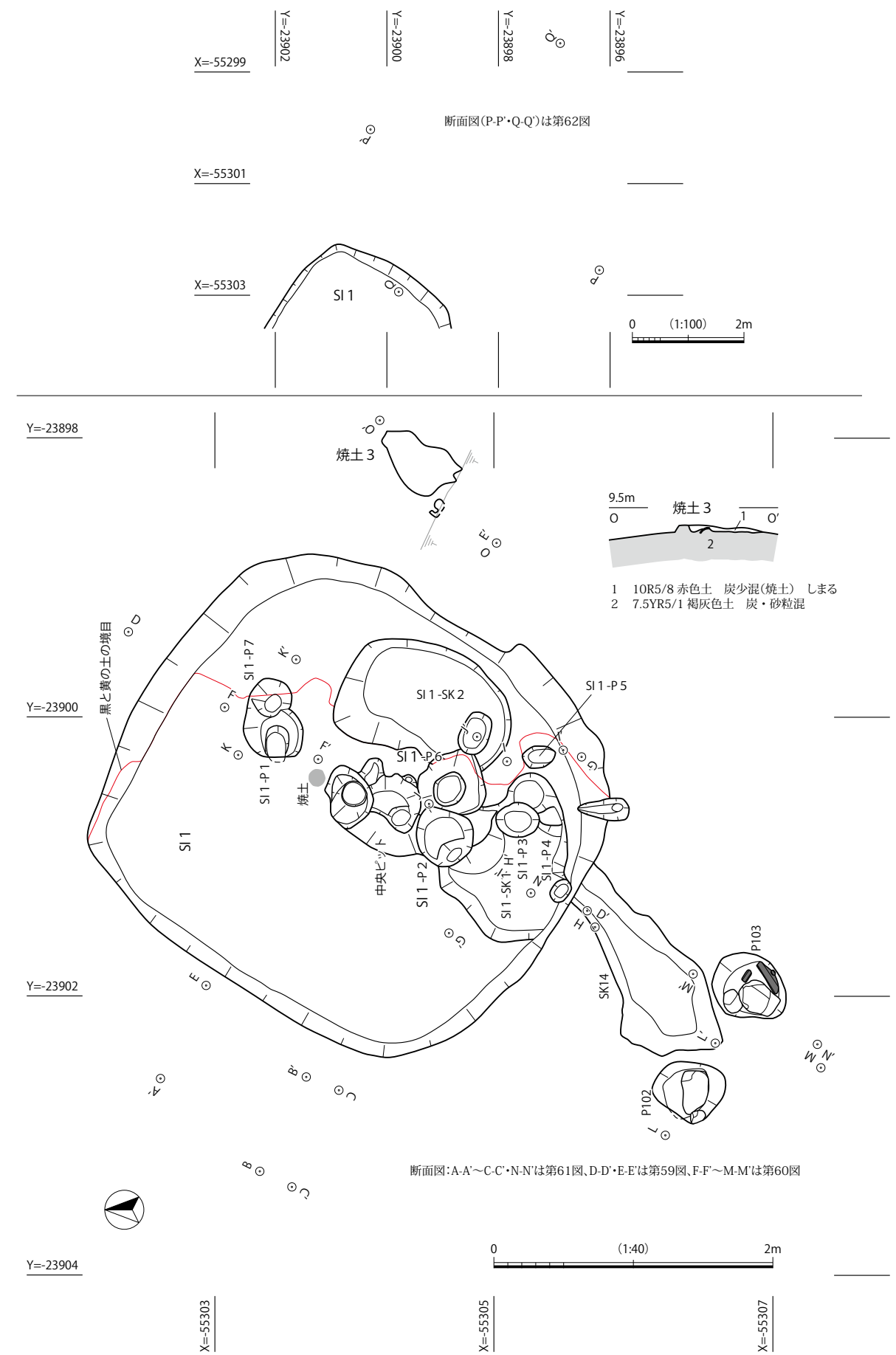
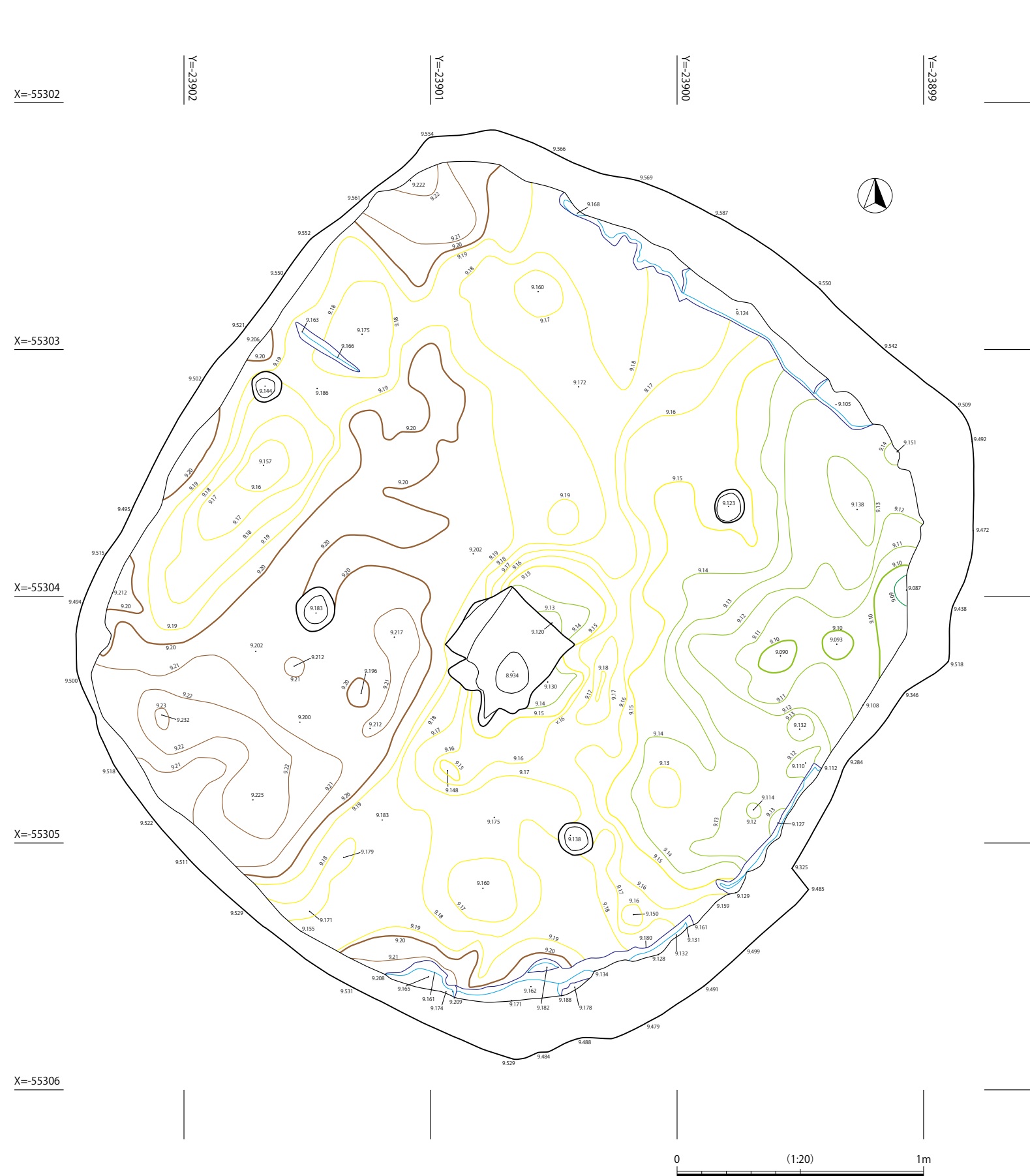
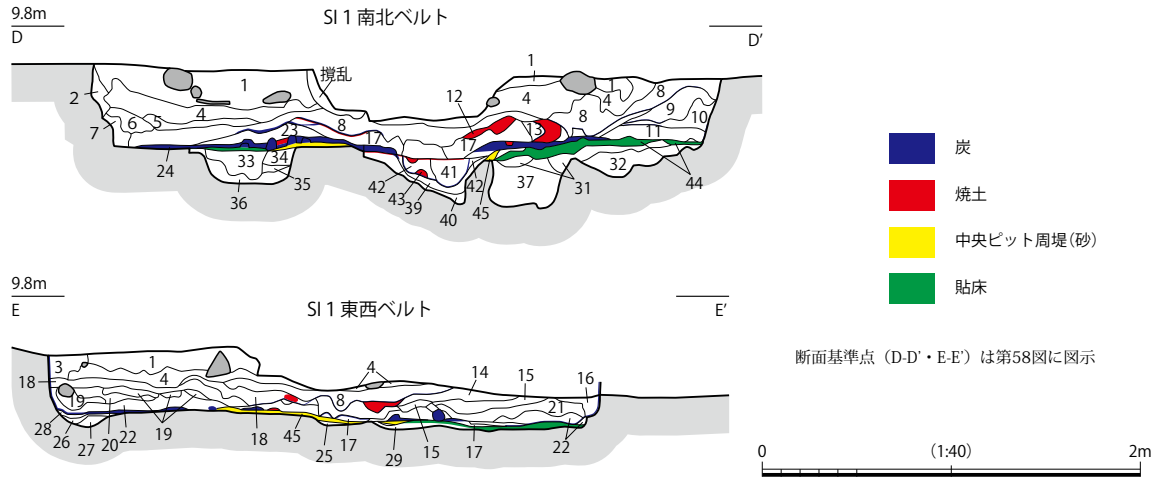


写真6 SI1炭化材出土状況

第57図 SI1炭化物・焼土出土状況



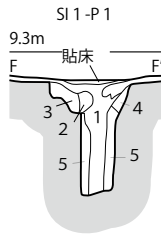
第58図 SI 1床面 1cm等高線及び最終面・焼土3平面・断面図



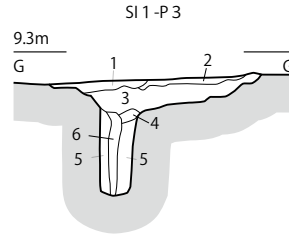
- 1 灰褐色土(7.5YR4/2)粘性ふつう、しまり強。0.2cm以下の礫多混。0.1cm以下の炭粒混。0.1～3cmの橙色・黄褐色土ブロック少量混。ややシルト質。鉄分少混。0.5～20cmの礫少混。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3)粘性ふつう、しまり強。0.1cm以下の礫多混。0.1cm以下の炭粒少混。ややシルト質。鉄分少混。
- 3 褐色土(7.5YR4/4)粘性やや強、しまり強。0.1cm以下の礫混。0.1～3cmの浅黄色土ブロック混。やや粘質。鉄分多混。
- 4 にぶい褐色土(やや粘質)(7.5YR5/4)粘性やや強、しまり強。0.1cm以下の礫混。0.1cm以下の炭粒少混。やや粘質。鉄分少混。0.1～5cmの礫少混。灰褐色土(ややシルト質)(7.5YR4/2)混
- 5 灰褐色土(7.5YR4/2)粘性ふつう、しまりやや強。0.1cm以下の礫混。0.1cm以下の炭粒少混。ややシルト質。
- 6 明褐色土(7.5YR5/6)粘性やや強、しまり強。0.1cm以下の礫混。やや粘質。
- 7 黒褐色土(7.5YR3/1)粘性ふつう、しまり強。0.1cm以下の炭粒少混。0.1cm以下の橙色土ブロック微量混。
- 8 黒褐色土(7.5YR3/1)粘性弱、しまり弱。0.1cm以下の礫少混。0.1cm以下の炭粒少混。0.2cm以下の暗灰黄色土ブロック混。
- 9 褐色土(7.5YR4/3)粘性やや強、しまり強。0.1cm以下の礫混。0.1cm以下の炭粒少混。0.2cm以下の橙色・黄褐色土ブロック多量混。やや粘質。
- 10 褐灰色土(7.5YR4/1)粘性ふつう、しまり強。0.1cm以下の炭粒少混。0.2cm以下の橙色・黄褐色土ブロック少混。ややシルト質。
- 11 黒褐色土(7.5YR3/1)粘性やや強、しまりやや弱。0.1cm以下の礫少混。0.1cm以下の焼土ブロック少混。明黄褐色土(2.5Y7/6)混
- 12 にぶい赤褐色土(5YR4/4)粘性弱、しまり強。0.1cm以下の礫少混。0.1cm以下の炭粒少混。焼土。
- 13 灰黄褐色土(10YR4/2)粘性弱、しまり弱。0.1cm以下の礫少混。0.1cm以下の炭粒少混。0.1cm以下の焼土ブロック混。0.1～2cmの浅黄色土ブロック混。
- 14 黒褐色土(7.5YR3/1)粘性ふつう、しまり強。0.1cm以下の礫少混。0.1cm以下の炭粒少混。ややシルト質。
- 15 黒褐色土(7.5YR2/1)粘性ふつう、しまりやや強。0.1cm以下の礫混。0.1cm以下の炭粒少混。0.1cm以下の暗灰黄色土ブロック少混。
- 16 にぶい褐色土(7.5YR5/4)粘性やや強、しまり強。0.1cm以下の礫少混。やや粘質。
- 17 黄褐色土(2.5Y5/3)粘性弱、しまりやや強。0.1cm以下の礫少混。0.1cm以下の炭粒少混。所々被熱。
- 18 黒褐色土(7.5YR3/1)粘性やや弱、しまりやや強。0.1cm以下の礫少混。0.1cm以下の炭粒少混。0.1cm以下の黄褐色土ブロック少混。
- 19 暗灰黄色土(2.5Y4/2)粘性強、しまりやや弱。0.1cm以下の礫少混。0.1cm以下の炭粒少混。粘質。
- 20 黒褐色土(2.5Y3/2)粘性やや強、しまりやや弱。0.1cm以下の礫少混。0.1cm以下の炭粒少混。ややシルト質。
- 21 暗灰黄色土(2.5Y4/2)粘性やや強、しまりやや弱。0.1cm以下の礫混。0.1cm以下の炭粒少混。黒褐色土(2.5Y3/2)混
- 22 黄灰色土(2.5Y4/1)粘性やや強、しまりやや弱。0.1cm以下の礫少混。0.1cm以下の黄褐色土ブロック混。やや粘質。
- 23 黒褐色土(2.5Y3/1)粘性ふつう、しまりやや弱。0.1cm以下の礫少混。0.1cm以下の炭粒混。
- 24 褐灰色土(7.5YR4/1)やや粘質。
- 25 灰オリーブ粘質土(7.5Y6/2)黒色土混。
- 26 灰白粘質土(7.5Y7/2)黒色土少混。
- 27 灰白粘質土(7.5Y7/2)黒色土混。
- 28 灰白粘質土(7.5Y7/2)粘性強。
- 29 灰白粘質土(7.5Y7/2)褐灰色土と互層。炭混。
- 30 灰オリーブ粘質土(7.5Y6/2)
- 31 褐灰色粘質土(7.5YR4/1)にぶい黄色粘質土塊多混。
- 32 褐灰色粘質土(7.5YR5/1)にぶい黄色粘質土塊微量混。粘性強。
- 33 褐灰色粘質土(7.5YR4/1)灰オリーブ粘質土塊少混。炭混。
- 34 褐灰色粘質土(7.5YR4/1)灰オリーブ粘質土塊混。
- 35 褐灰色粘質土(7.5YR4/1)灰オリーブ粘質土塊極多混。
- 36 褐灰色粘質土(7.5YR4/1)
- 37 褐灰色粘質土(7.5YR4/1)灰オリーブ粘質土塊混。砂粒混。粘性強。
- 38 褐灰色粘質土(7.5YR4/1)粘性強。
- 39 褐灰色粘質土(7.5YR5/1)焼土・炭混。
- 40 褐灰色粘質土(7.5YR5/1)粘性強。炭混。
- 41 明緑灰色粘質砂層(7.5GY7/1)しまり強。
- 42 褐灰色粘質土(7.5YR4/1)炭化物混。粘性強。
- 43 明赤褐色粘質土(2.5YR5/6)焼土。
- 44 にぶい黄色粘質土(2.5Y6/4)褐灰色粘質土少量混。貼床。
- 45 黄色砂質土(2.5Y8/6)砂粒混。水真砂。中央ピット周堤。

第59図 SI 1 ベルト及び中央ピット断面図

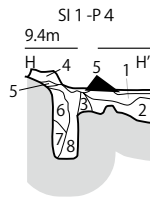
第4章 4～6区の調査成果



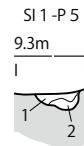
- SI 1-P1 (F-F')
- 1 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 粘性強 しまり弱
 - 2 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 粘性強 灰オリーブ粘質土塊混
 - 3 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 灰オリーブ粘質土極多量混
 - 4 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 粘性強
 - 5 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 粘性強 灰オリーブ粘質土塊極多混



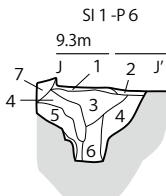
- SI 1-P3 (G-G')
- 1 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 灰オリーブ粘質土塊混
 - 2 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 灰オリーブ粘質土塊多量混
 - 3 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 灰オリーブ粘質土塊少量混 炭混
 - 4 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 灰オリーブ粘質土塊極多量混
 - 5 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 灰オリーブ粘質土塊少量混 砂粒混 粘性強
 - 6 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 しまり弱 砂粒混 粘性強



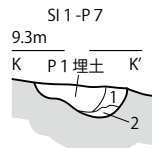
- SI 1-P4 (H-H')
- 1 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 灰オリーブ粘質土塊少混 炭混
 - 2 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 灰オリーブ粘質土塊混 炭混
 - 3 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 灰オリーブ粘質土塊多混
 - 4 7.5YR4/1 褐灰色土 やや粘質 炭混 ローム粒少混
 - 5 貼床
 - 6 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 灰オリーブ粘質土塊多混 粘性強
 - 7 5Y7/3 浅黄粘質土 粘性強 褐灰色粘質土混
 - 8 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 粘性強



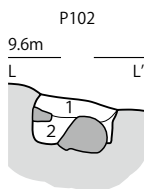
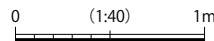
- SI 1-P5 (I-I')
- 1 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 ローム塊多混
 - 2 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 砂粒混



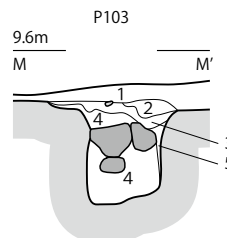
- SI 1-P6 (J-J')
- 1 7.5Y7/2 灰白粘質土(貼床)
 - 2 7.5YR4/1 褐灰色土 やや粘質 灰白色土粒少混
 - 3 7.5YR5/1・7.5YR4/1 褐灰色粘質土 灰色粘土塊少混
 - 4 7.5YR5/1・7.5YR4/1 褐灰色粘質土 灰色粘土塊極多混 ややしまる
 - 5 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 灰色粘土塊少混 ややしまり悪
 - 6 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 粘性強 しまり悪
 - 7 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 灰白色粘質土塊極多混



- SI 1-P7 (K-K')
- 1 7.5YR5/1 褐灰色土 灰白色粘質土塊少混 しまる
 - 2 7.5YR5/1 褐灰色粘質土



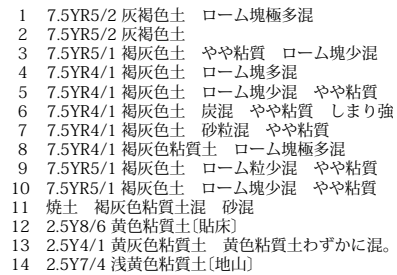
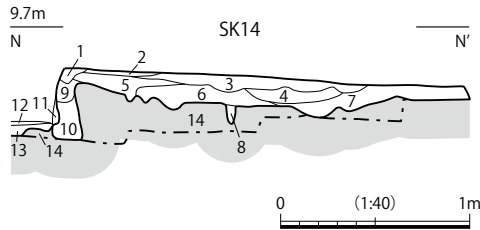
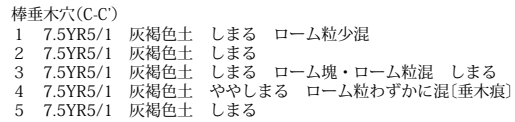
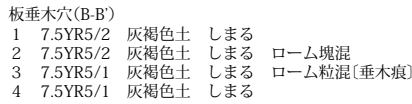
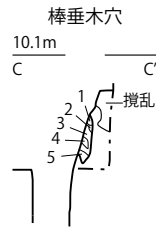
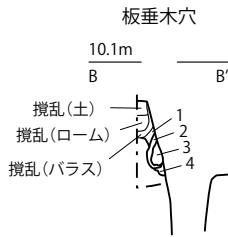
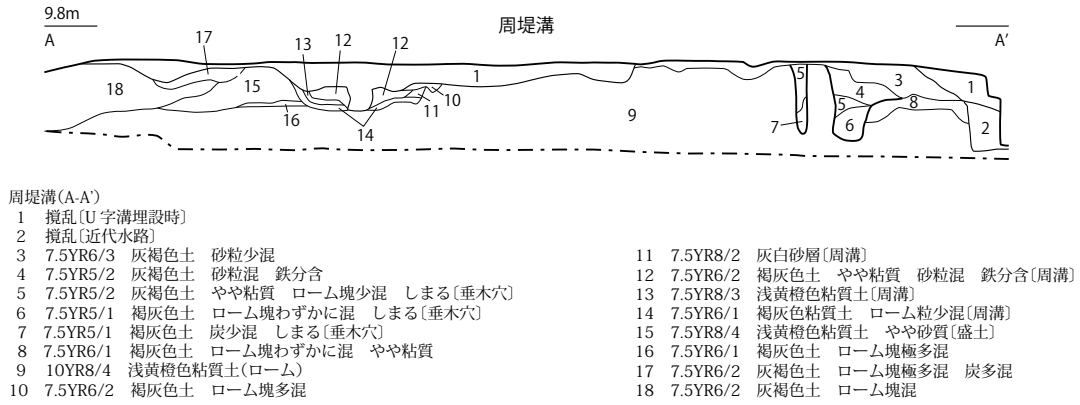
- P102 (L-L')
- 1 7.5YR5/2 灰褐色粘質土 ローム塊多混
 - 2 2.5Y7/3 浅黄粘質土 黒色粘質土混



- P103
- 1 7.5YR5/1 褐灰色土 炭混 ローム粒混(包含層)
 - 2 7.5YR4/1 褐灰色土 ローム塊少混
 - 3 7.5YR4/1 褐灰色土 ローム塊わずかに混
 - 4 7.5YR4/1 褐灰色土
 - 5 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 浅黄粘質土少混

断面基準点 (F-F'~M-M') は第58図に図示

第60図 SI 1-P1・3～7・102・103断面図



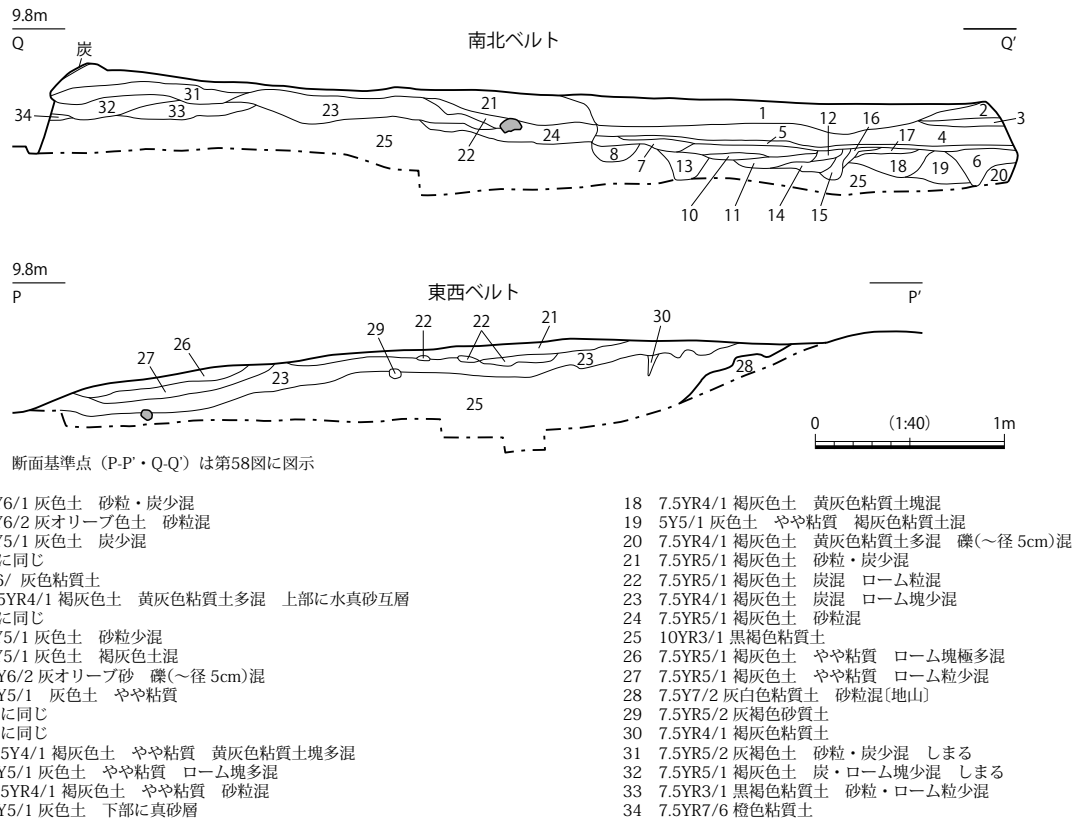
断面基準点(A-A'・B-B'・C-C'・N-N')は第58図に図示

第61図 SI1 周堤溝・垂木・SK14断面図

SI1の構造の詳細と、建物の復元方法および復元像については、第8章第3節で詳しく触れる。

本遺構からは数多くの遺物が出土しているが、上層の遺物は一括性が高く比較的残りも良好である。99～104が上層出土土器である。99～103は口縁部が外傾し、体部が大きく張って最大径を有する甕。口縁部はいずれもナデ、99～101は肩部に波状文を施すもの、102はハケ調整のみのもの、103は平行沈線を施すもの3者が認められる。口縁端部は先細りをして丸みを帯び、口縁下端の外側への摘み出しは102を除き甘い。以上は、弥生時代終末期と考えられる。104は外傾した口縁部に多条沈線文を施文し、口縁内面は横方向のミガキが丁寧に施されている。弥生時代後期後葉の特徴を示すが混入であろう。105は外反する口縁に15条の平行沈線と体部に8条の平行沈線がめぐる甕である。後期後葉のものである。106は大きく外反する口縁部の端部は幅狭で、ナデが施されわずかに凹む甕である。摩滅のため器面の調整が不明であり、中期後葉から後期前葉に帰属するものと推測する。107～111は下層出土土器である。107は外反する口縁部と最大径を体部にもつ器形の甕で、口縁端部は丸みを帯び、下端の摘み出しもやや甘い。肩部にはハケ状工具による刺突文と平行沈線が施文される。108は直立気味の口縁に多条平行沈線を施す甕、109は口縁部と肩部に平行沈線を施す甕である。

第4章 4～6区の調査成果



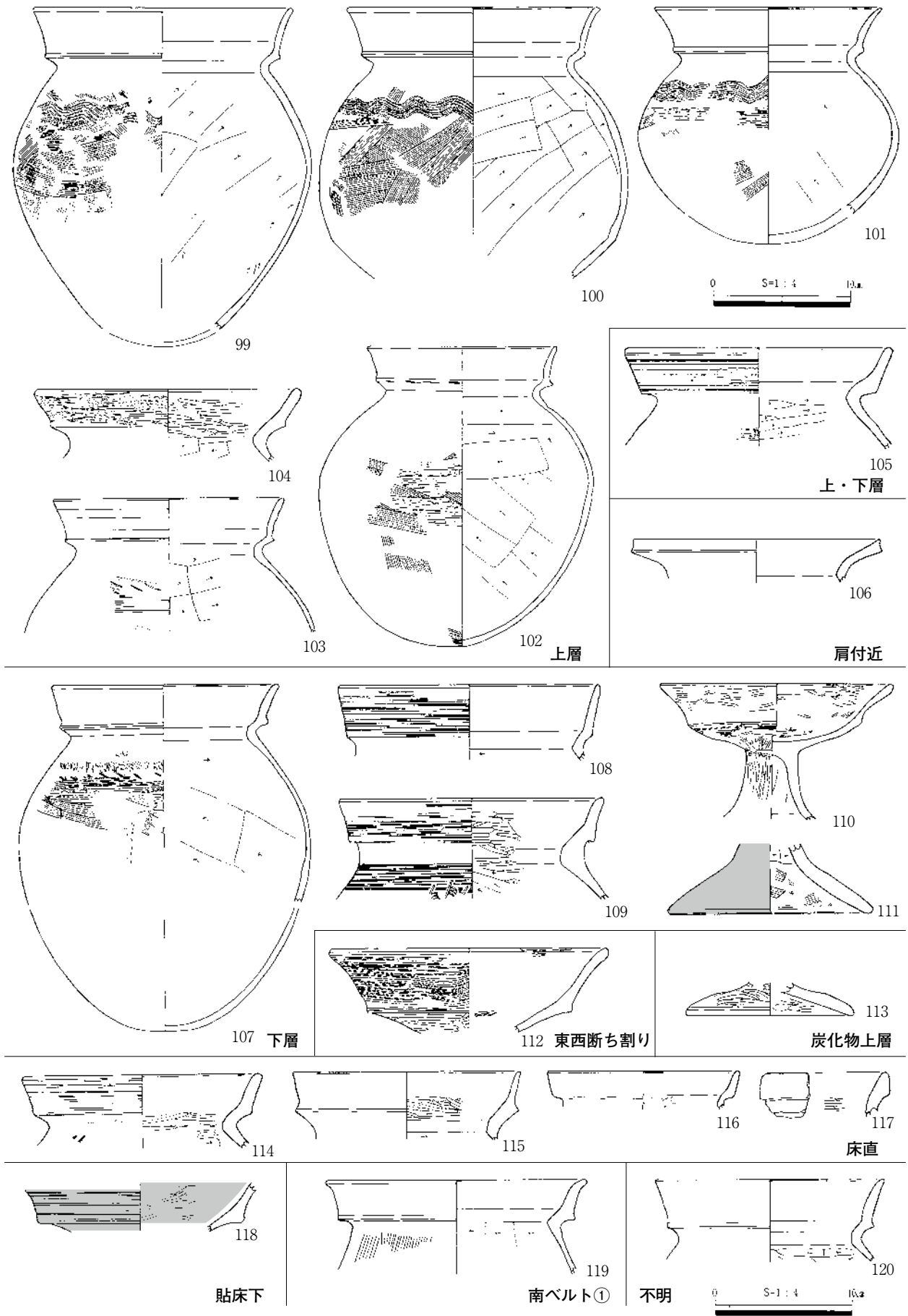
第62図 SI 1 周辺ベルト断面図

110は稜をなす段部をもつ高坏で、内外面ミガキを丁寧に施している。111は「ハ」字状に開く高坏脚部である。107は終末期、それ以外は後期後葉から終末期に相当する。112は後期後葉の器台受け部であり、多条平行沈線が施文される。113はつまみ部が欠損した蓋天井部である。114～117は床面出土遺物である。114は外傾する口縁部に多条平行沈線がめぐる甕である。115・119は外傾する口縁部にヨコナデを施し、口縁下端を外側にやや摘まみ出す甕である。器壁は上層出土土器に比べ厚い。114は後期後葉、115、119は終末期前半に該当しよう。117は外傾する口縁部が屈曲して直立気味に立ち上がる甕である。張床下から出土した118は器台の受け部で多条平行沈線がめぐる。116、120は南ベルトと層位不明の甕であり、口縁部が外傾しナデが施される。後期後葉に相当しよう。S4は床面から出土したアプライト製の砥石で、上、下面及び側面が砥面となっており、表面は被熱している。S5は方形を呈した安山岩製の台石である。上面には使用に伴う窪みが散見され、被熱している。第65図は床面で検出したSK2土坑及びP2出土遺物である。121は18条以上の平行沈線を口縁部に施文している甕であり、後期後葉と考えられる。122は外傾した口縁部にナデを施し、口縁下端が外側に摘まみ出された甕である。終末期前半であろうか。123は高坏の坏部で、口縁下に段を持ち、そこから外反する口縁部となり、内外面は丁寧なミガキが施される。

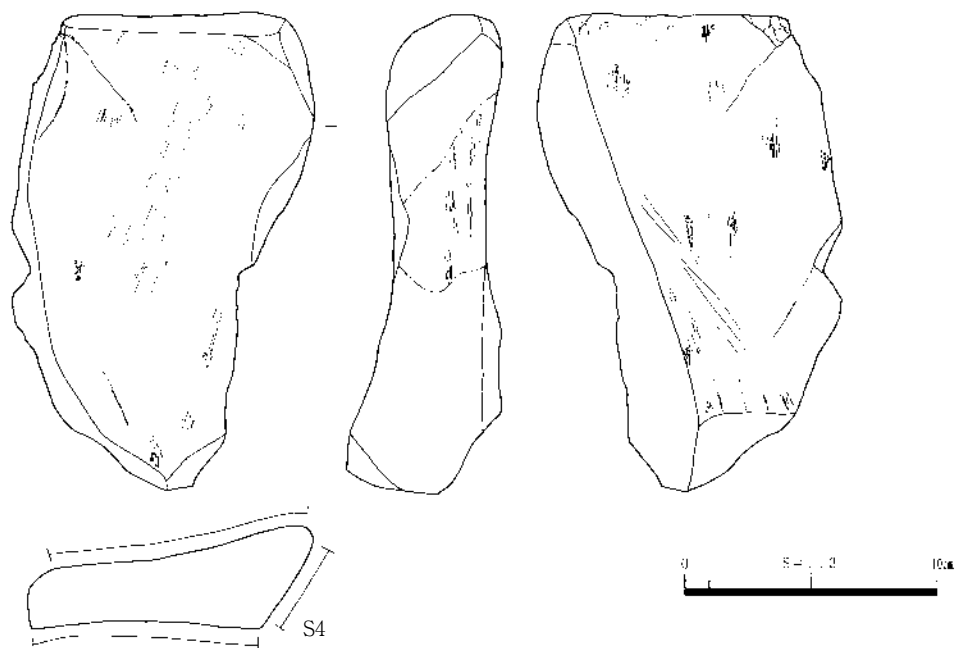
(3) 平地建物

SI 2 (第56・66・67図、表17・18・55、PL.27・29・43・76)

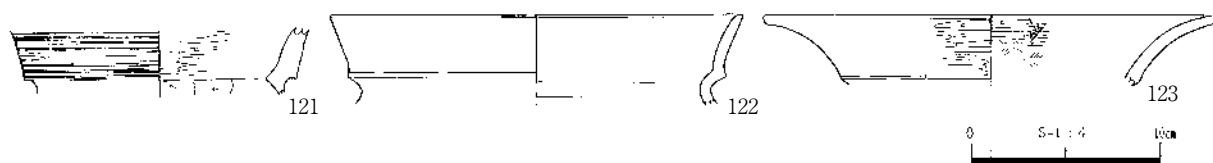
調査区北西のK21～L21グリッドにかけて検出した建物跡で、検出面での標高は9.4mを測る。近年まで宅地として利用された場所に当たり、ある程度削平を受けている。北隣で検出したSI1 竪穴建物の床面(標高9.1～9.2m)との比高差を考慮すると、竪穴建物とは考えにくい。床面はSI1の構築面(標高9.65m)あたりに位置するとみられ、平地建物と考えられる。後述するSI3とSI4も同様である。



第63図 SI1出土遺物(1)



第64図 SI1出土遺物(2)



第65図 SI1-SK2・P2出土遺物

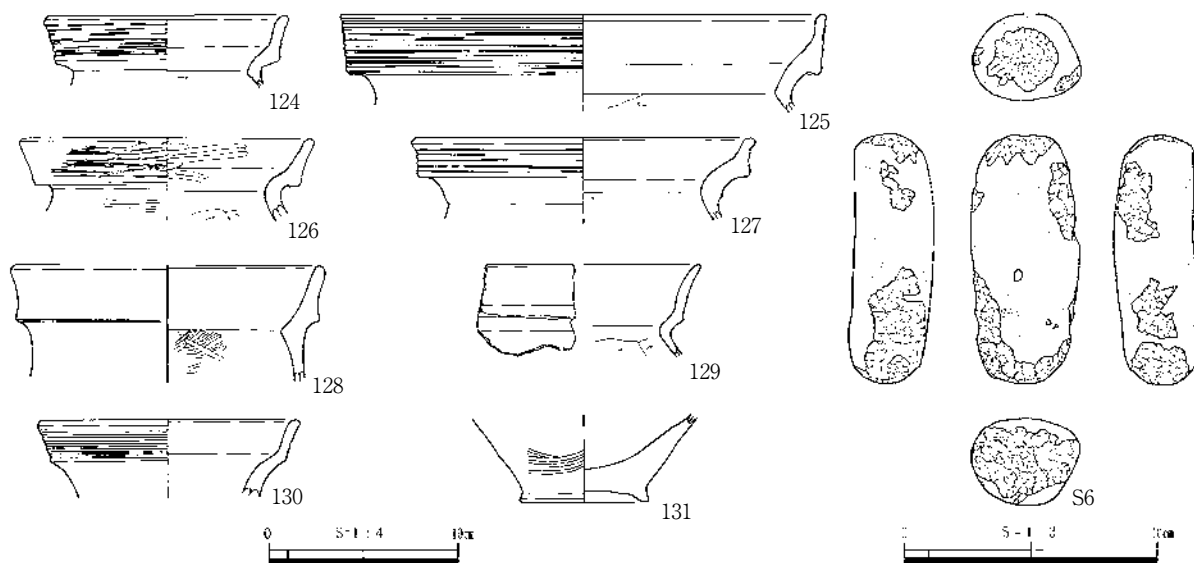
SI2はテラス状の平坦地に位置し、SI1の入口とみられるP102およびP103とは0.5mの距離がある。南側ではSI4を切っている。遺構の東半は黒色土が堆積する斜面地にあたるため流出により失われたものか遺構の続きを確認できなかった。調査できた遺構は北西角の5.2×2.0m分だけである。床面は削平のため残っていない。主軸は北北東に13°振れる。遺構は、ほぼ直角に曲がる幅0.2～0.3m、検出面から深さ0.1mの溝と、3基のピットで構成される。このうちSI2-P3は溝の外側にあって同様の深さをもち、溝に立てた壁を外側から支えた柱のものと考えられる。主柱穴の一つとみられるSI2-P2は深さ0.4mを測り、底に礫を2つ重ねて入れている。柱穴の位置から2本柱の建物と推定される。

本遺構からは弥生土器を9点掲載している。124～127は外反もしくは直立気味に立ち上がる甕の口縁であり、口縁部に平行沈線が施文される。128は直立気味の体部をもち、外傾した口縁部にナデを施す甕である。以上は後期中葉から後葉に位置づけられよう。129は同じく口縁部にヨコナデを施した甕であるが、器壁が薄く終末期に相当する。130は外傾した口縁部に平行沈線を施す壺であり、後期中葉の所産であろう。131は上げ底の形態を有する甕か壺の底部である。S6は棒状礫を素材としたデイサイト製の敲石である。裏面以外に敲打痕が確認され、使用頻度が高い。

SI3 (第56・68図、表18・54、PL.28・29・43・44・75)

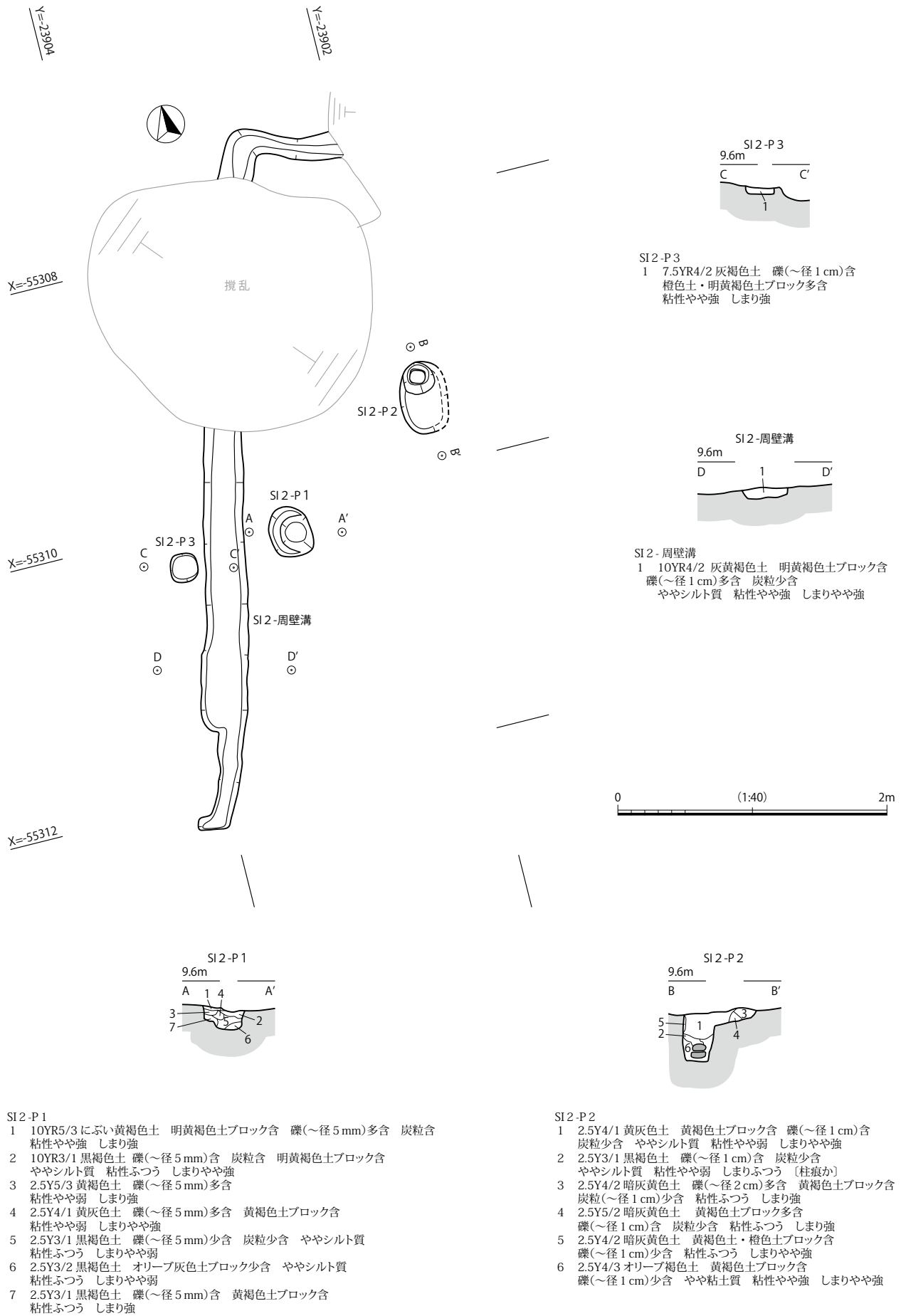
L21グリッドで検出した平地建物で、SI4に切られる。南側は後世の削平によって失われていて北側の壁溝を中心とした部分のみが残っている。南北2.1m以上、東西2.6mの方形で、主軸が北北東に12°振れる。柱穴は1基検出した。他の2棟と一連の建物である可能性が高く、やや小ぶり、最も古く建造されたものである。

SI3上層～床面の出土遺物を11点掲載している。133、134は上層出土の鼓形器台である。134は脚台部が「ハ」字状に開き、端部が反り上がる。脚柱部と脚台部の境界の稜も明瞭である。133は受け部が逆「ハ」字状に直線的に開き、端部が外側に折り返される。脚裾は134と異なり、やや内側に向いて外剥ぎ状となっている。132は口縁端部が平坦となり、外側へ摘まみ出される甕であり、口縁下端の稜が高く、体部は大きく張っている。以上の3点は古墳時代前期前葉に位置づけられよう。135～140は床面出土土器である。135、137は直立気味の口縁部を有する甕であり、口縁下端の稜は甘く、端部も丸みを帯びる。136は外反する口縁部にナデを施す甕であり、口縁下端の稜はやや丸みを帯び

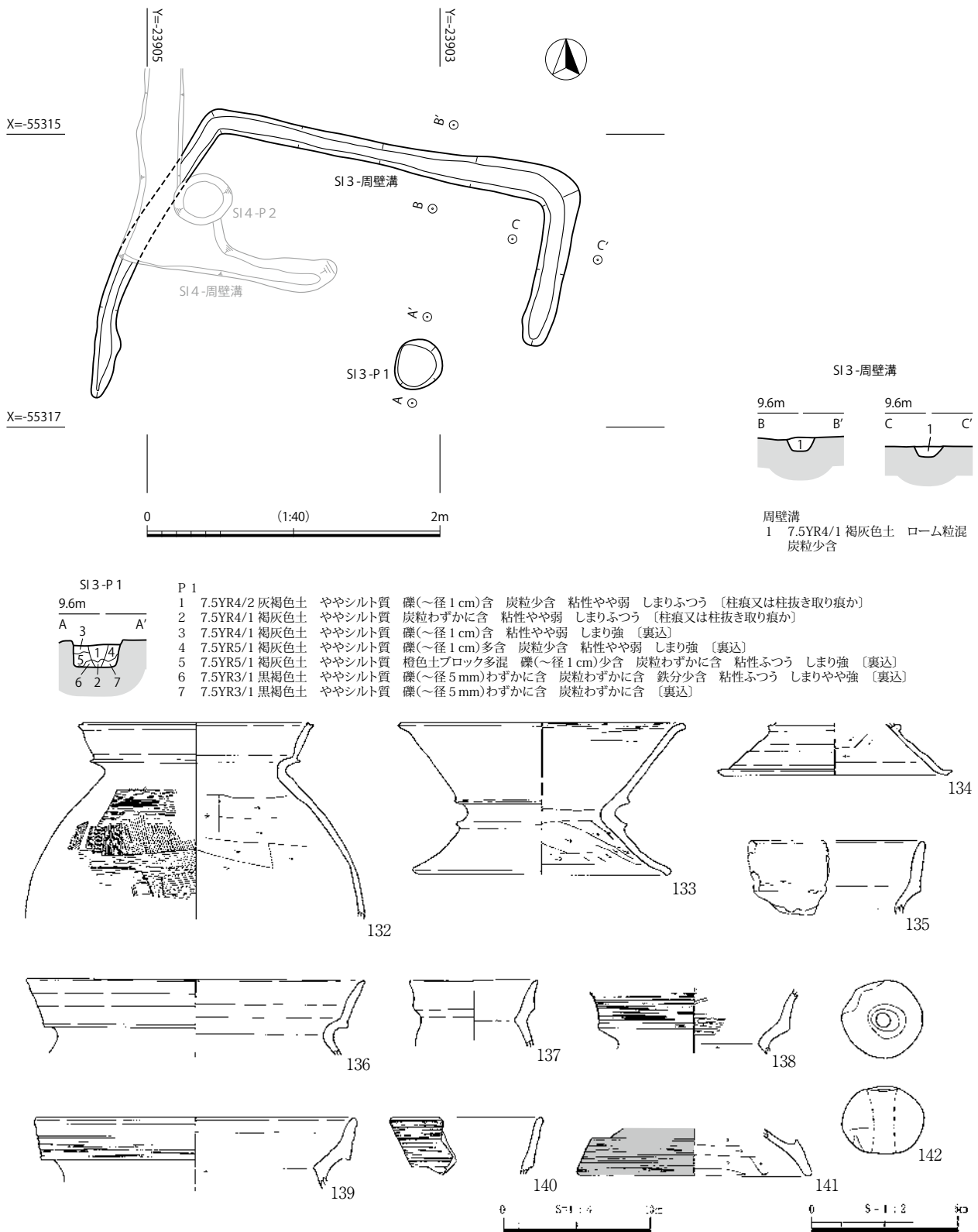


第66図 SI2出土遺物

第4章 4～6区の調査成果



第67図 SI2平面・断面図



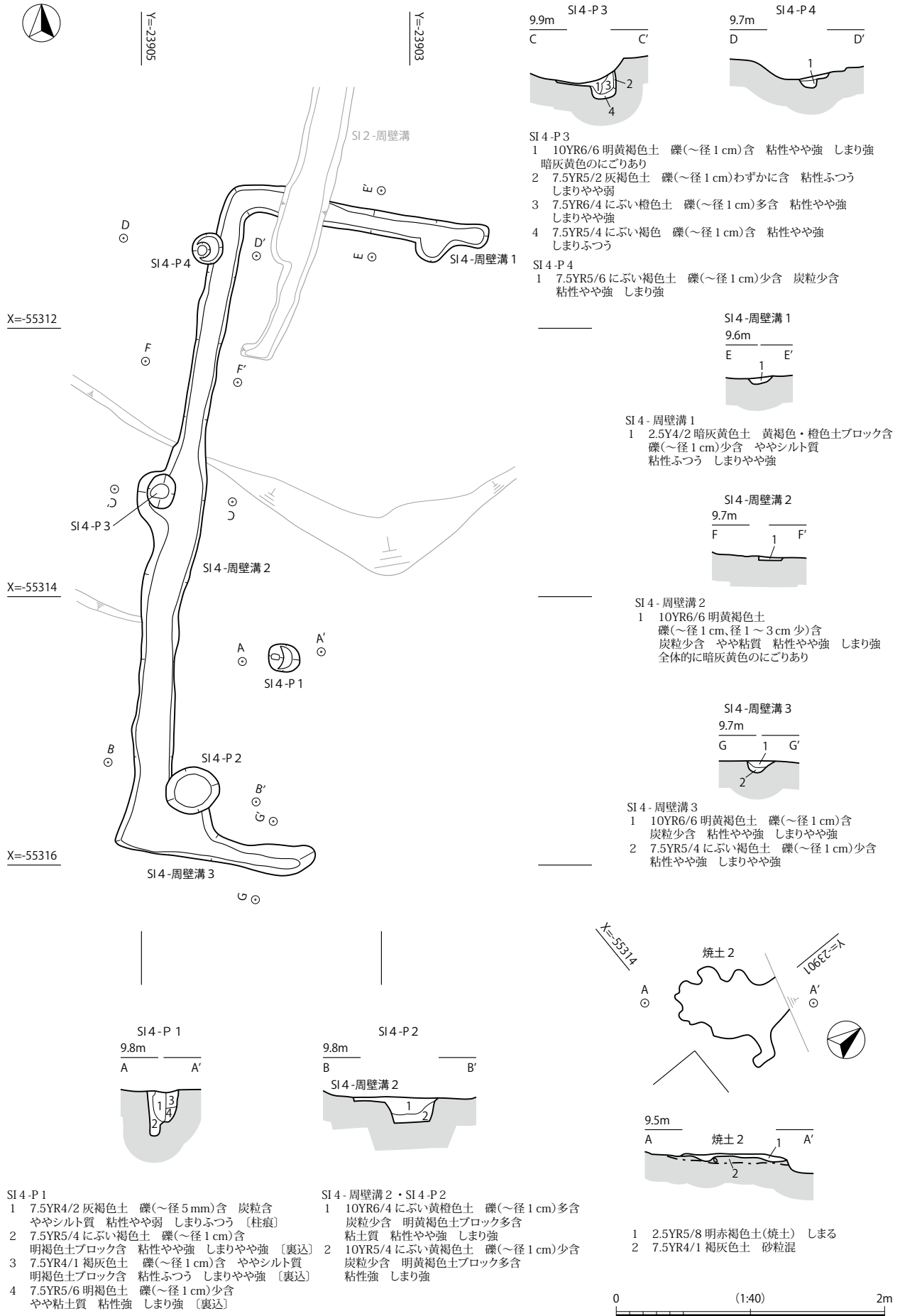
第68図 SI3平面・断面図及び出土遺物

る。以上は弥生時代終末期と考える。138～140は外反した口縁部に多条平行沈線を施す甕である。141はP2から出土した器台の脚台部で、7条の多条平行沈線が施文され、外面は赤色塗彩がなされている。以上は、弥生時代後期後葉に相当する。142は土玉であり、表面は粗いナデを施している。

SI4 (第56・69図、表18・54、PL.28・29)

SI2とSI3の間で検出された平地建物で、SI2に切られSI3を切る。斜面部にかかる東半部分は確

第4章 4～6区の調査成果



第69図 SI 4・焼土2平面・断面図

認できなかったが、3棟の中では最も残りが良く、構造をある程度理解できる。検出できた壁溝は南北5.1m、東西2.0m分で、幅0.2～0.3m、深さ0.1mの溝が直角に曲がる。南辺では角から1.5mのところまで途切れているので、こちらに入口があり、建物の東西幅は3m強と推定される。主軸は北北東に9°振れる。壁溝に沿う外側の2箇所と、コーナーの内側の1箇所で、溝に接する浅い柱穴を検出しているほか、北辺の中央にあたる位置では壁の内側に張り出しがある。これらは壁を支える柱のものとみられる。直径0.2m、深さ0.3mの支柱穴の一つを南西に偏った位置で検出しているが、その他の構造は不明である。

焼土2はSI4の東壁があったと推定されるラインの中央付近で検出されたもので、長軸2.3m、短軸1.5mのアメーバ状を呈し、深さ0.05mまで赤化している。SI4に伴う地床炉で、SI1における焼土3の例を参考にすると、屋内炉であったと考えられる。

SI2～4は同じ様な壁立ちの平地建物と考えられ、南のものから北に向けて建て替えられている。冬用の住居と推定される土屋根のSI1 竪穴建物と一列に並ぶこれらの建物には、夏用の住居としての役割があり、建築と解体を頻繁に繰り返した可能性があることを指摘しておきたい。

(4) 段状遺構とこれに伴う溝

SS2及びSD8 (第56・70～72図、表18・54・55、PL.20・30・44・45・50・75・76)

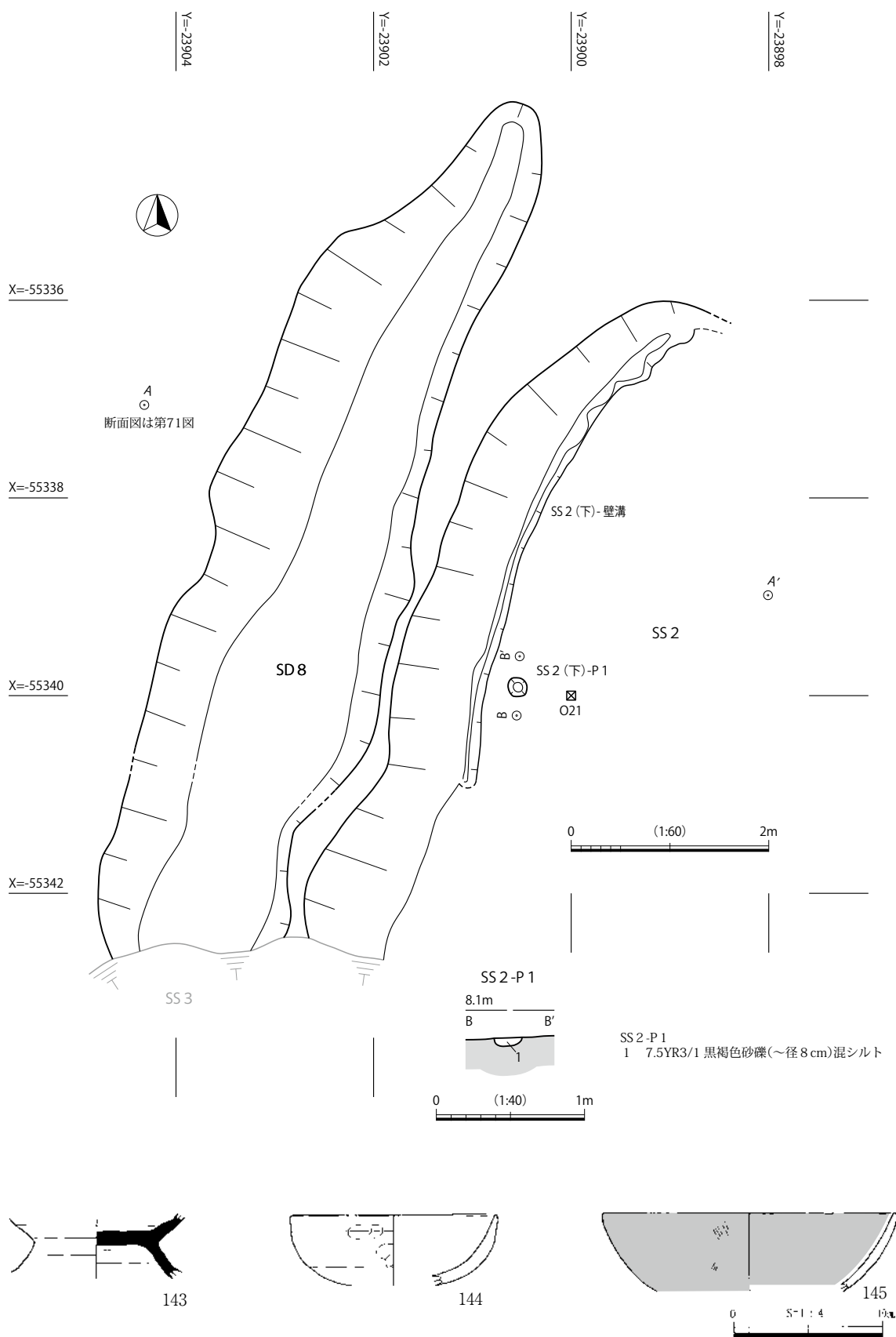
SS2はN・O20～21グリッドで検出した段状遺構で、SD8はSS2の西側で検出した溝である。いずれも、軸は約20°東に振れて南北方向に延び、南側がSS3に切られる。SS2は長さ7.4m、幅4.5m、検出面からの深さは1.1mを測るが、東側が調査地外に至るため全容は不明である。埋土の状況から、最初に造られたSS2(下)段状遺構の廃絶と埋立て後に一度掘削し直し、新たなSS2(上)段状遺構が構築され、その廃絶と埋立て後に残る段差を完全に埋め立てて造成したことが確認できる。

SS2(下)の壁の法尻では、壁溝を検出した。長さ5.4m、幅0.2～0.3m、SS2の底面からの深さ0.2mを測る。また、SS2(下)の床面で直径0.2m前後、深さ0.1mの円形のピット1基を検出した。

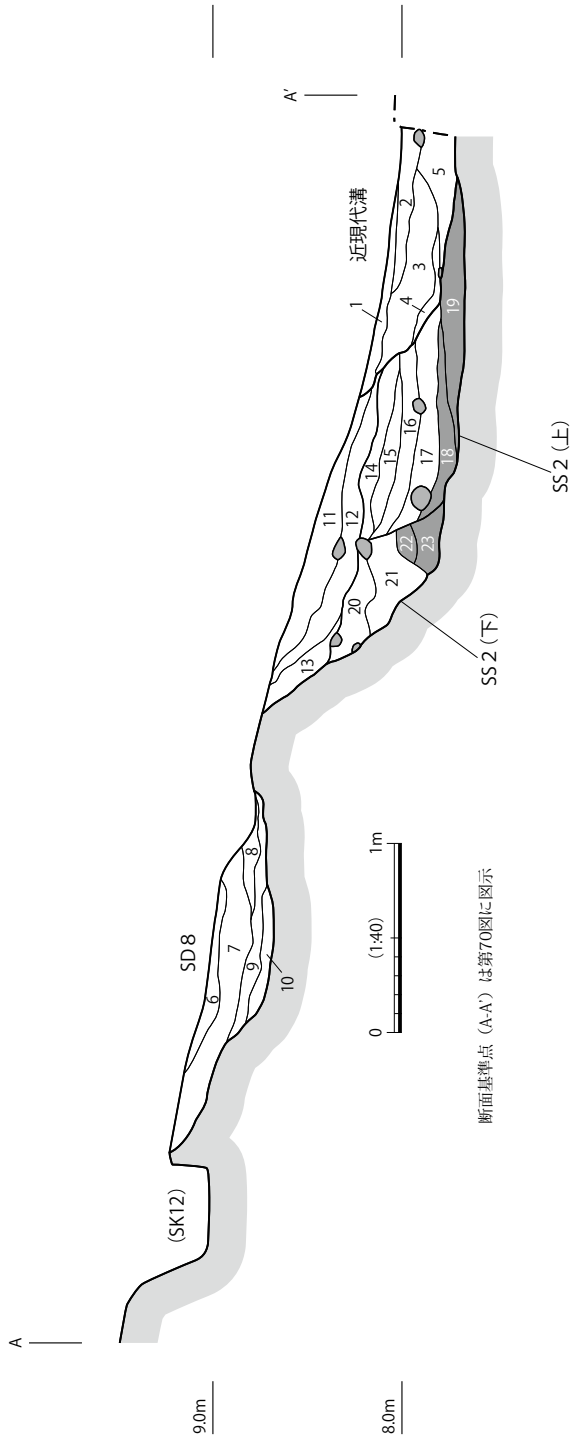
SD8はSS2の法肩に平行する形で延びる。検出長9.6m、幅1.7～2.3m、検出面からの深さは0.6mである。位置的な関係から、SS2の周溝のような機能を有する溝状遺構であると考えられる。

SS2では12点の出土遺物を掲載する。146～148、150～153及び156は埋土中、149とS7は下層、154と155は上層出土である。埋土中出土のものは一部、近現代溝の埋土のものが混入している可能性がある。146は弥生土器装飾壺の体部で、平行沈線間に渦文のスタンプ文が施文される。148は内外面丁寧なミガキが施された高坏坏部である。149は鼓形器台で器壁が厚い。器台の脚台部である150は多条平行沈線がめぐり、ミガキにより部分的に消されている。151は須恵器蓋である。天井部は回転ヘラケズリで天井端部と天井部の境界に稜が形成される。陶邑編年MT15段階に比定されよう。152は須恵器高台付坏の底部であり、高台は底部周縁より内側に貼り付けられ、体部はほぼ直線的に外傾する。陶邑編年TK217段階に比定されようか。153は底部周縁よりやや内側に低い高台が貼り付けられる須恵器高台付坏であり、その特徴から9世紀前半と考えられる。154は須恵器高台付壺であり、高台が底部の最外周に貼り付き低い。8世紀中頃の特徴を示す。155は体部が大きく張る須恵器の短頸壺であり、体部にカキメがみられる。7世紀後半に相当しよう。156は土玉である。S7は2/3ほどが欠損した半月形の石庖丁である。紐通しの孔が2箇所認められるが、1箇所は穿孔途中のもので貫通していない。刃部は使用に伴う剥離が数箇所確認できる。

SD8からの出土遺物を3点掲載している。143は須恵器の高台付壺であろうか。高台が底部外周に



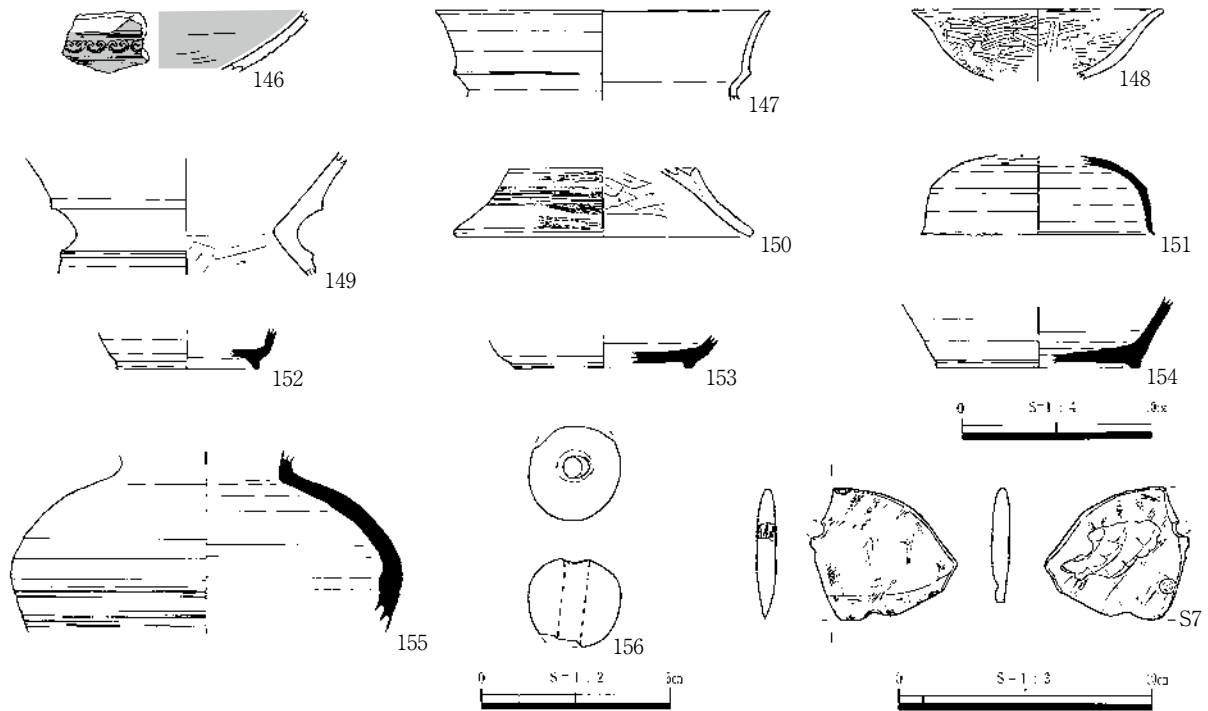
第70図 SS2・SD8平面図及びSS2-P1平面・断面図・SD8出土遺物



断面基準点 (A-A) は第70図に図示

第71図 SS2・SD8断面図

- 近現代埋土
- 1 10YR4/3 にぶい、黄褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂 礫(径2cm 前後)少含 酸化鉄分沈着(しみ状) [埋戻し土]
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂 炭粒わずかに含 酸化鉄分少し沈着(しみ状) [埋戻し土]
 - 3 10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂(粘性あり)・10YR4/2 灰黄褐色シルト～細粒砂の混土 粗粒砂～礫(径8mm)混 10YR6/2 灰黄褐色極細粒砂斑状・層状に含 礫(卵大)わずかに含 酸化鉄分沈着(しみ状、局所的に密) [埋戻し土]
 - 4 10YR4/1 褐灰色シルト～粘土 10YR5/2 灰黄褐色極細粒砂～シルトの葉層・薄層抜む [機能時埋積土]
 - 5 10YR4/3 にぶい、黄褐色砂～礫(径4cm) 上部は 10YR5/3 にぶい、黄褐色砂～細礫 [機能時埋積土]
- SD 8
- 6 10YR5/4 にぶい、黄褐色極粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～粗粒砂 炭粒含 酸化鉄分密に沈着(しみ状) [埋戻し土]
 - 7 7.5YR4/3 褐色粗粒砂～礫(径8mm)多混シルト～中粒砂 礫(径1～3cm)含 炭粒少含 酸化鉄分沈着(しみ状) [埋戻し土]
 - 8 7.5YR6/3 にぶい、褐色礫(～径5cm)混砂～シルト [機能時埋積土]
 - 9 7.5YR3/1 黒褐色細粒砂～礫(径1cm)混シルト～極細粒砂 礫(径3cm 前後)わずかに含 7.5YR4/3 褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm 前後)わずかに含 [加工時埋積土]
 - 10 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細粒砂(砂がち)・10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂の混土(斑状) 粗粒砂～礫(径5mm)混 [加工時埋積土]
- SS 2
- 11 7.5YR5/4 にぶい、褐色砂礫(～径8mm)多混シルト 礫(径1～3cm)含 炭粒含 [隆絶時造成土]
 - 12 7.5YR4/3 褐色砂礫(～径8mm)多混シルト 礫(径1～5cm)少含 炭粒含 11よりしまる 酸化鉄分沈着(しみ状) [隆絶時造成土]
 - 13 7.5YR4/3 褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～極細粒砂 酸化鉄分密に沈着(しみ状) [隆絶時造成土]
 - 14 7.5YR4/3 褐色粗粒砂～礫(径5mm)混シルト(粘性あり) 礫(径1～2cm)少含 酸化鉄分沈着(しみ状) [SS2(上)埋戻し土]
 - 15 7.5YR4/2 灰褐色粗粒砂～礫(径5mm)混シルト～細粒砂 7.5YR4/3 褐色シルト～極細粒砂ブロック(径3～5cm)少含 礫(径1.5cm)少含 [SS2(上)埋戻し土]
 - 16 7.5YR4/2 灰褐色シルト～細粒砂・10YR5/3 にぶい、黄褐色シルト～極細粒砂の混土 粗粒砂～礫(径3cm)混 礫(径3cm)わずかに含 炭粒少含 [SS2(上)埋戻し土]
 - 17 10YR5/3 にぶい、黄褐色シルト～極細粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト(粘性あり)の混土 粗粒砂～礫(径8mm)混 [SS2(上)埋戻し土]
 - 18 10YR3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～極細粒砂(粘性あり) 炭粒多含 [SS2(上)貼床]
 - 19 2.5Y4/1 黄灰色 色調以外は18と同じ [SS2(上)貼床]
 - 20 5YR4/4 にぶい、赤褐色粗粒砂～礫(径3cm)混シルト～極細粒砂 炭粒少含 酸化鉄分ほぼ全体に沈着(もとの色調は7.5YR4/3 褐色) [SS2(下)埋戻し土]
 - 21 10YR5/2 灰黄褐色細礫～中粒砂・10YR6/4 にぶい、黄褐色中粒砂～細粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂の混土 礫(～径8mm)混 炭片少含 [SS2(下)壁溝埋土]
 - 22 10YR3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～極細粒砂 礫(径1.5cm 前後)含 [SS2(下)貼床]
 - 23 10YR5/1 褐灰色中粒砂～礫(径1cm)混シルト～極細粒砂(粘性あり) 10YR6/1 褐灰色粘土～極細粒砂ブロック(径4cm 前後)との混土 [SS2(下)貼床]



第72図 SS2出土遺物

接合し、「ハ」字状に踏ん張っている。144は土師器碗であり、表面は粗いナデを施し指頭圧痕を残す。145は湾曲しながら立ち上がる高坏坏部であり、内外面赤色塗彩がなされている。古墳時代後期に相当する。SS2とSD8の帰属時期は、出土遺物や層位から古墳時代後期に比定でき、奈良時代には段差の完全な埋め戻しが行われたと考えられる。

(5) 溝

SD9 (第56・74図、PL.20・30)

O21グリッドで検出した溝で、丘陵斜面の等高線に概ね直交し北西-南東方向に延びる。規模は、長さ2.65m、幅0.29m、検出面からの最大深さ0.07mである。埋土は単層で、出土遺物はない。遺構の帰属時期は、層位から弥生時代後期中葉ないし古墳時代前期に比定できるが、詳らかにできない。

SD10(第56・73図、表18、PL.20・31・50)

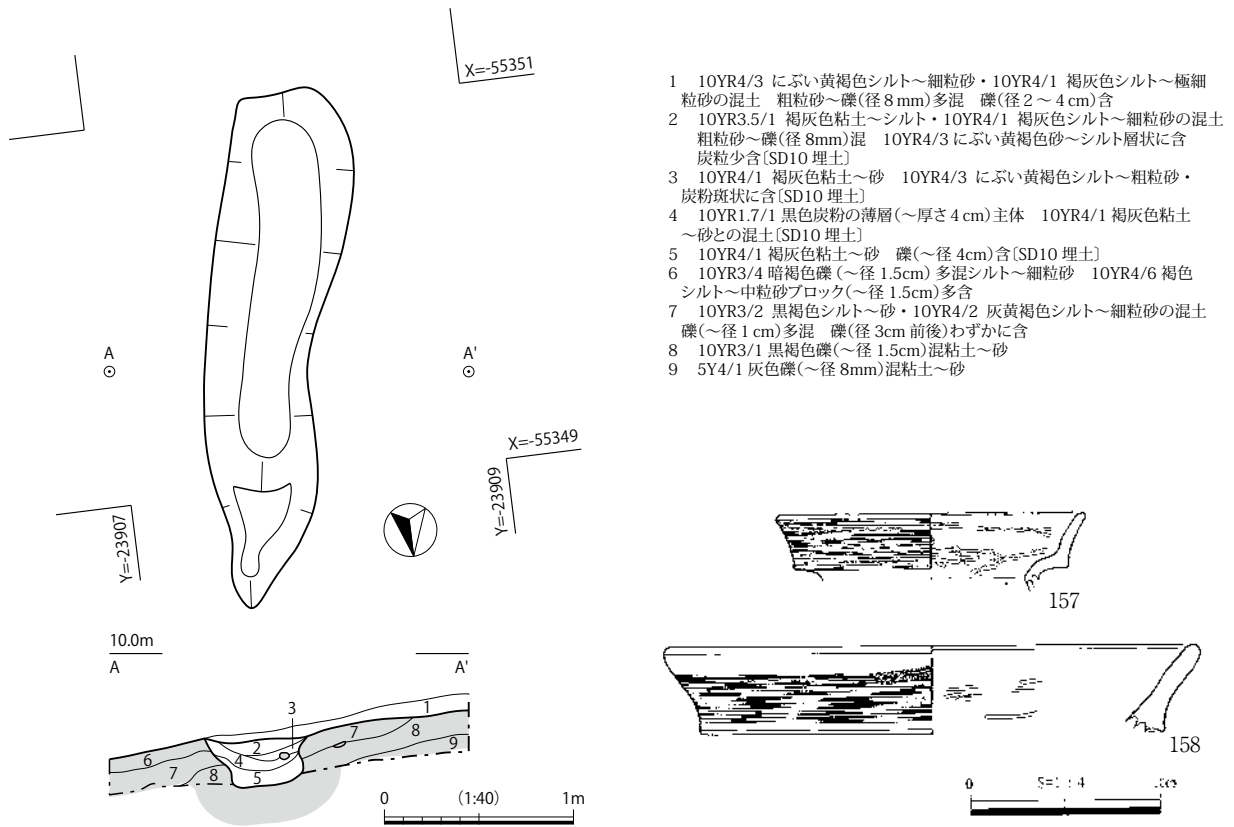
O、P21グリッドで検出した溝で、丘陵斜面の等高線に平行し南北方向に延びる。規模は、長さ2.8m、幅0.68m、検出面からの最大深さ0.27mである。南東側は、第IV-3層を整地土とする造成により削られていたため、全容は不明である。埋土は混土を主体とする上層、炭粉や炭粒を主体とする中層、基盤土でIV-4層のブロックを主体とする下層の3層に分けられる。

本遺構からは2点の土器を図示している。157は外反する口縁部に多条平行沈線がめぐる弥生土器の甕である。158は弥生土器器台の受け部であり、外面に多条平行沈線が施文され、内面はミガキが施される。いずれも弥生時代後期後葉に該当する。遺構の帰属時期は出土遺物や層位から、弥生時代後期後葉に比定できる。

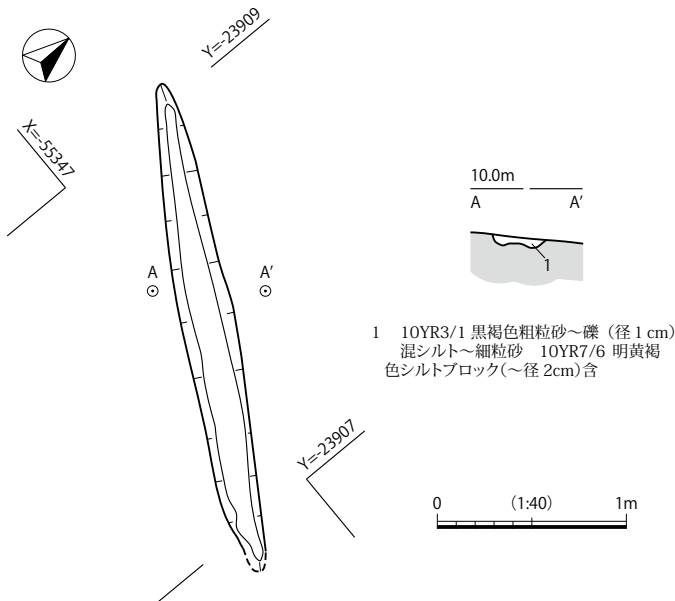
(6) 杭列

杭列1 (第56・75・76・372図、表18・60・63～65、PL.20・32・51・78)

M、N21グリッドにおいて古代の包含層第IV-2層を除去した面で、ほぼ等高線に沿って南北に並ぶ3本の杭(南から杭1、杭2及び杭3)を検出した。杭1と杭2の距離は1.7m、杭2と杭3は1.6mで



第73図 SD10平面・断面図及び出土遺物



第74図 SD9平面・断面図

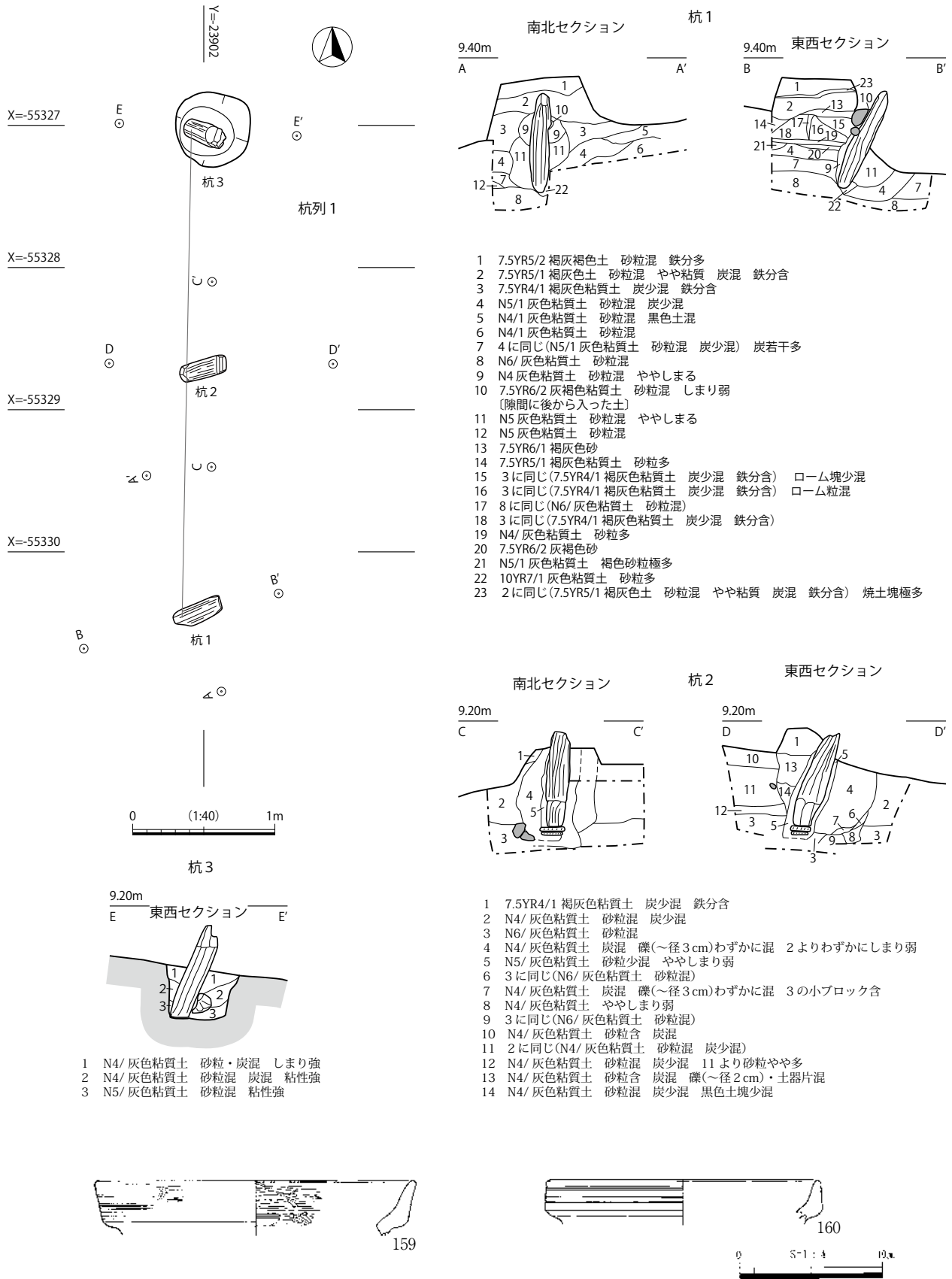
ほぼ等間隔に並ぶ。杭はいずれも直径15cm程度の丸太で、検出面から地中まで70cm前後が残っていた。どの杭も地面に打ち込むのではなく、直径0.6m程の掘方を掘って設置している。杭は垂直には据えられていない。杭1では検出面付近の山側に礫を挟み、杭3では杭最下部の山裾側に丸太を置いて、山裾側にむけて65～70°に傾斜するように工夫している。したがって、掘立柱建物の支柱ではなく、逆茂木のような杭列と考えられる。

杭1と杭3の放射性炭素年代測定を行なった結果、杭1が1610±20yrBP、杭3が1600±20yrBP、暦年代範囲(2σ)は、杭1が395-

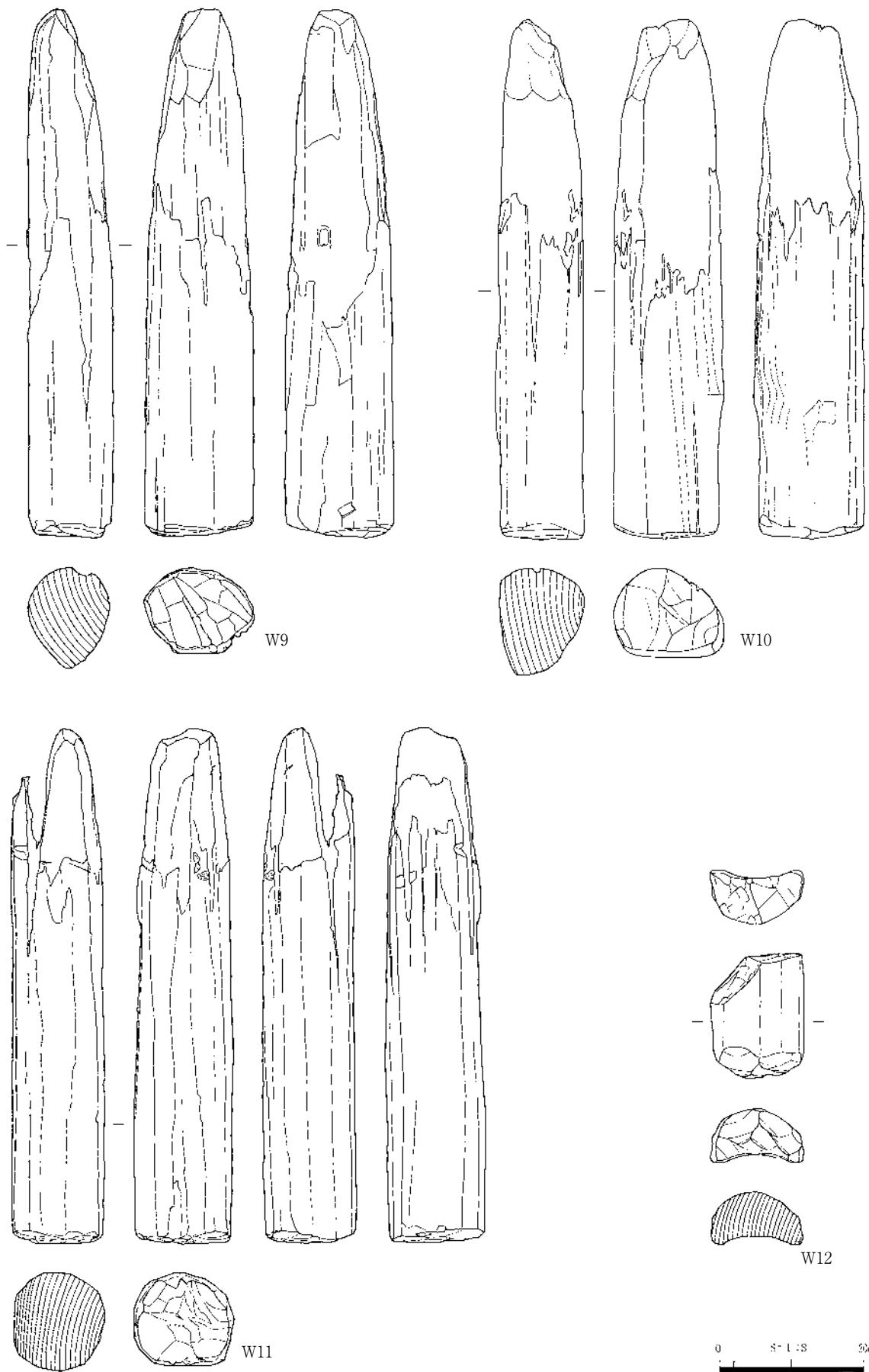
475cal AD(54.0%)、485-535cal AD(41.4%)、杭3が402-536cal AD(95.4%)と、古墳時代中期から後期の年代が示された(第7章第1節)。この遺跡では遺構や遺物とも希薄となる時期のものだけに、防御施設とすれば、何を対象としたものか推定することは困難である。

杭列1からは2点の土器が出土している。159は杭1から出土した弥生土器甕である。外傾した口縁部に多条平行沈線が施文され、口縁内面は横方向のミガキが丁寧に施される。160は杭2から出土した弥生土器甕である。直立した口縁部に4条の平行沈線がめぐっている。いずれも弥生時代後期中葉に相当しよう。W9～11は杭である。W9は最大長73.1cm、最大幅15cmを測り、底面に加工痕が残る。

第4章 4～6区の調査成果



第75図 杭列1平面・断面図及び出土遺物(1)



第76図 杭列1出土遺物(2)

第4章 4～6区の調査成果

W10は最大長71.8cm、最大幅15.7cmを測り、底面に加工痕を残す。W11は最大長71cm、最大幅13.8cmを測り、表面が面取りされ多角形となっており、底面に加工痕がみられる。W12はW11を支える添木であり、上下面に加工痕が残る。以上は全て芯去材である。

(7)ピット(第56・77図、PL.32)

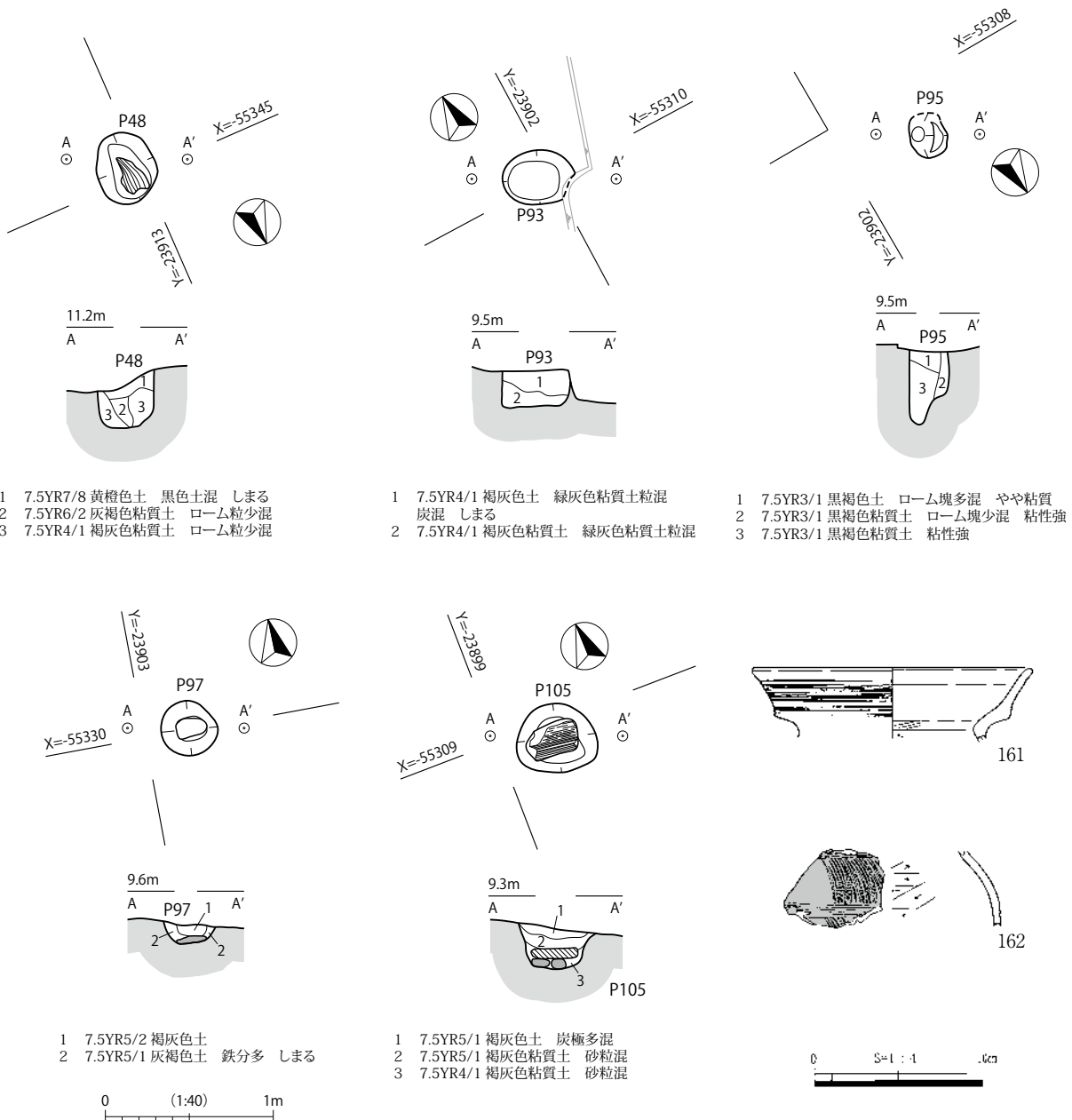
第IV-3層までを除去した面で検出したピットは27基で、出土遺物は土器の細片がほとんどである。

P93・95(第56・77図、表18、PL.20・32・51)

第3遺構面で検出したピットのうち、2基のピットの出土遺物を掲載した。P93から出土した161は、外反する口縁部に多条平行沈線がめぐる弥生土器の甕である。P95ではヘラ状工具による羽状文が施文された弥生土器の装飾壺162が出土している。以上は弥生時代後期後葉に比定される。

4 第4遺構面及び第5遺構面

(1)概要(第78・80図、PL.33・35・51)



第77図 第3遺構面ピット平面・断面図及び出土遺物

第4遺構面の遺構群は第IV-4層中で検出したもの、第5遺構面の遺構群は概ね第V層上面で検出した弥生時代後期後葉のものである。第4遺構面では段状遺構1基、掘立柱建物1棟、布掘建物1棟、杭群1、ピット77基。第5遺構面では段状遺構2基、掘立柱建物2棟、布掘建物1棟、土坑4基、溝5条、ピット208基をそれぞれ検出した。上部の3遺構面とは大きく異なり、遺構密度は非常に高い。

発掘調査の工程上、2面を設定して遺構検出を行なったが、第4遺構面で検出した遺構も第5遺構面で検出した遺構も、それぞれ必ずしも同一の面から構築されたものではなく、弥生時代後期後葉に第IV-4層が形成される比較的短い期間の中で、3面以上の構築面で継続的に構築及び廃絶された遺構と考えられる。遺構配置図は調査時に検出した2面に分けて示しているが(第78、80図)、層位や遺構埋土及び出土遺物についての所見などから、一連のものとして扱う方が良いと判断したため、ここでは遺構面ごとに分けずに記載する。

遺物量は非常に多く、特に調査区北端の西から下る谷地形の堆積中からは弥生時代後期の土器が大量に出土している。付近に大規模な集落が存在することを窺わせるものである。

(2) 段状遺構

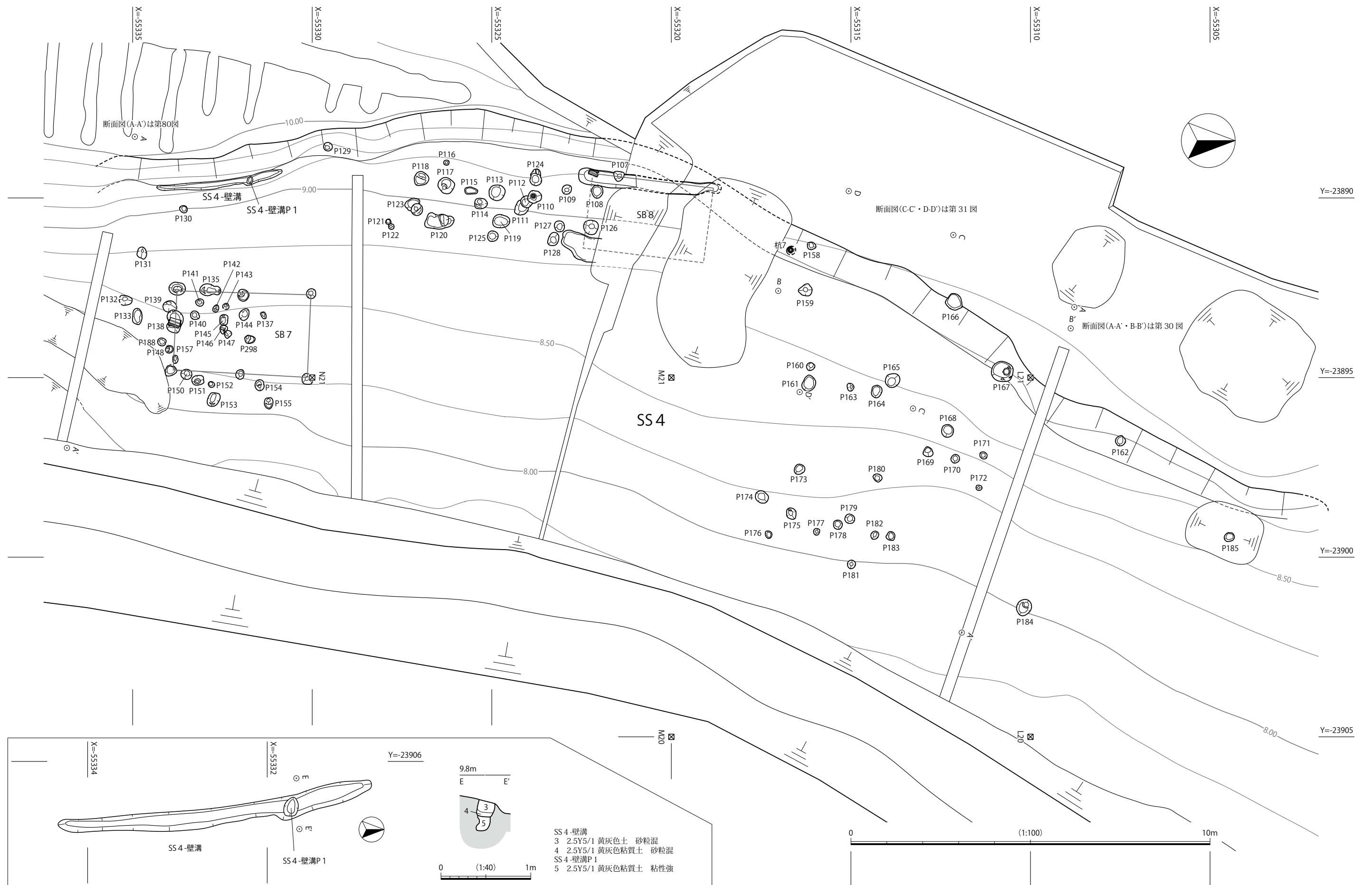
SS4(第78・79・81・83・84図、表18・19・54、PL.33・34・45～47・75)

調査区中央部から北部にかけてのOライン以北、22ライン以東、第IV-4層の上部を除去した面で検出した。丘陵斜面を切土して造成した段である。段の法肩は丘陵裾部の等高線に沿って約15°東に振られて南北方向に延びる。検出規模は、長さ34.0m、幅11.2m、法肩からの深さ1.7mである。段の平坦部は完全な水平ではなく、約15°の勾配で東側に緩やかに下る。SS4南部の法尻で壁溝を検出した。検出長3.6m、幅0.1～0.3m、SS4の底面からの深さ0.2mで、箱形の断面形状をもつ。壁溝の北寄りにはピットが掘られていて、最大径0.2m、壁溝からの深さ0.2mを測る。

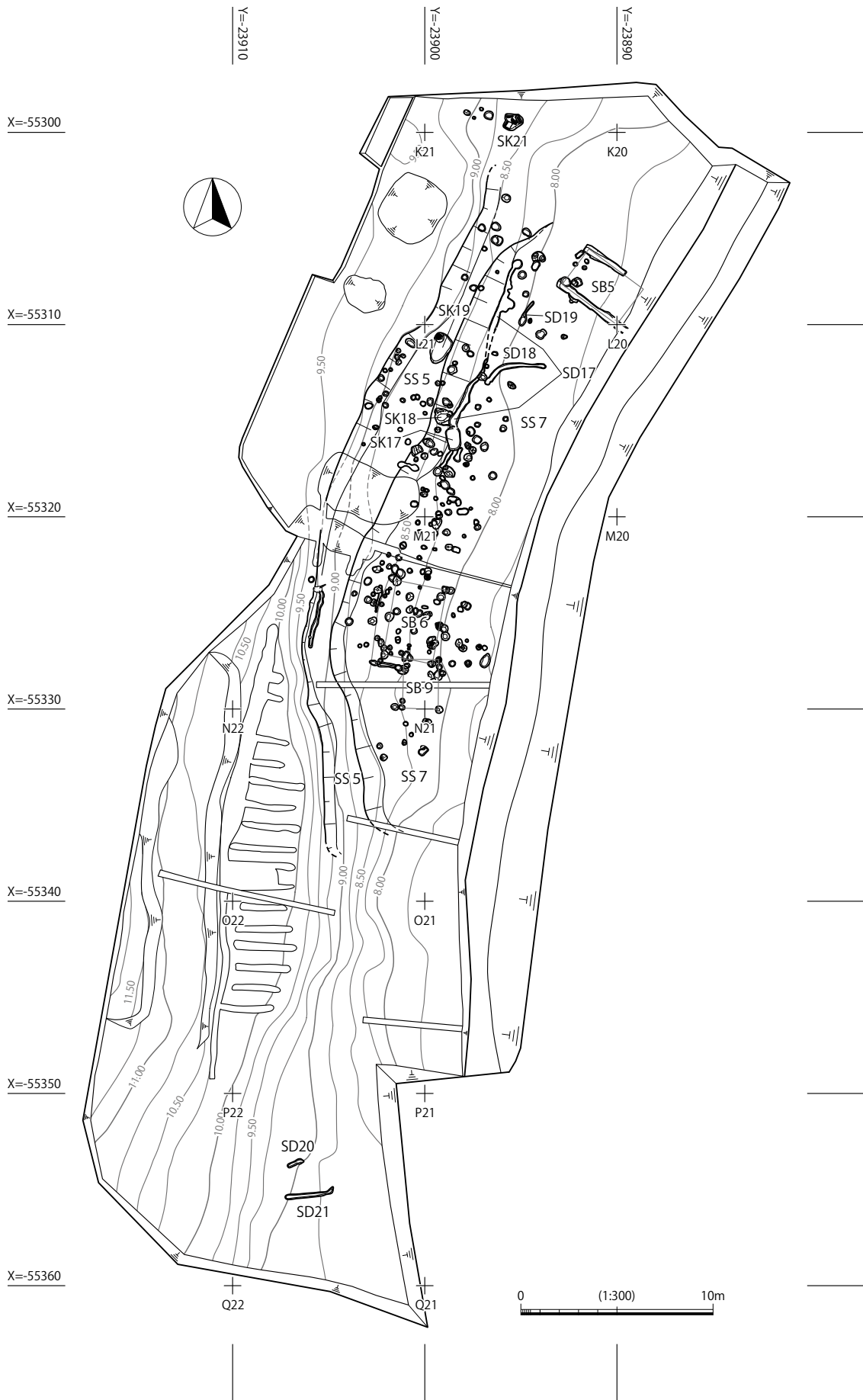
SS4段状遺構から出土した遺物は数多いが、ここでは31点の弥生土器・土製品を図示した。164は甕で口頸部が「く」字状に外反し、口縁端部を撫で付け凹みが生じている。165、166は口縁端部が上下に拡張して面を形成し、3～4条の凹線文を施す甕である。以上は、肩部や体部内面のケズリが口頸部の境まで及ぶことから後期前葉に比定される。167～169は外傾するやや幅狭な口縁部に平行沈線を施す甕であり、169の口縁内面は丁寧なミガキが施される。170～176は拡張した口縁部に多条平行沈線がめぐる甕であり、175は肩部に波状文が施文される。177～180は口縁部にナデを施す甕であり、179の肩部にはヘラ状工具による刺突文がめぐっている。181は台付甕であり、脚台部は縦方向のミガキが施され、脚裾は4条の平行沈線が施文される。以上は、弥生時代後期中葉から後葉に相当する。182～185は壺である。182は口頸部が「く」字状に甘く屈曲し、口縁部が直立的に立ち上がる器形を持つ。口縁部には3条の平行沈線、頸部に逆U字状のスタンプ文が施文され、口頸部内面は丁寧なミガキが加えられる。183は口縁端部が上下に拡張して平坦部を形成し、3条の凹線文がめぐっており、器壁が厚い。184は口縁部に4条の平行沈線が施文されて、頸部のミガキが細かい。185は口縁部に平行沈線を引き、その上から波状文を施文している。182と183は後期前葉、184と185は後期中葉から後葉に帰属しよう。186は拡張された口縁部に2本単位の棒状浮文を貼付し、その間に3本単位の三角文を施文する大型器台である。棒状浮文上には浅い刻みが施される。このような特徴を有する事例は県内東部では少なく、浮文を貼付するものは中西部に散見される。類例の増加を待ちたい。187は注口土器の把手であり、外面は丁寧なミガキが施されている。188と191は器台であり、受け部及び脚台部に多条平行沈線が施文される。後者の脚柱部は3条単位の沈線がめぐり、いずれも外面のミガキ



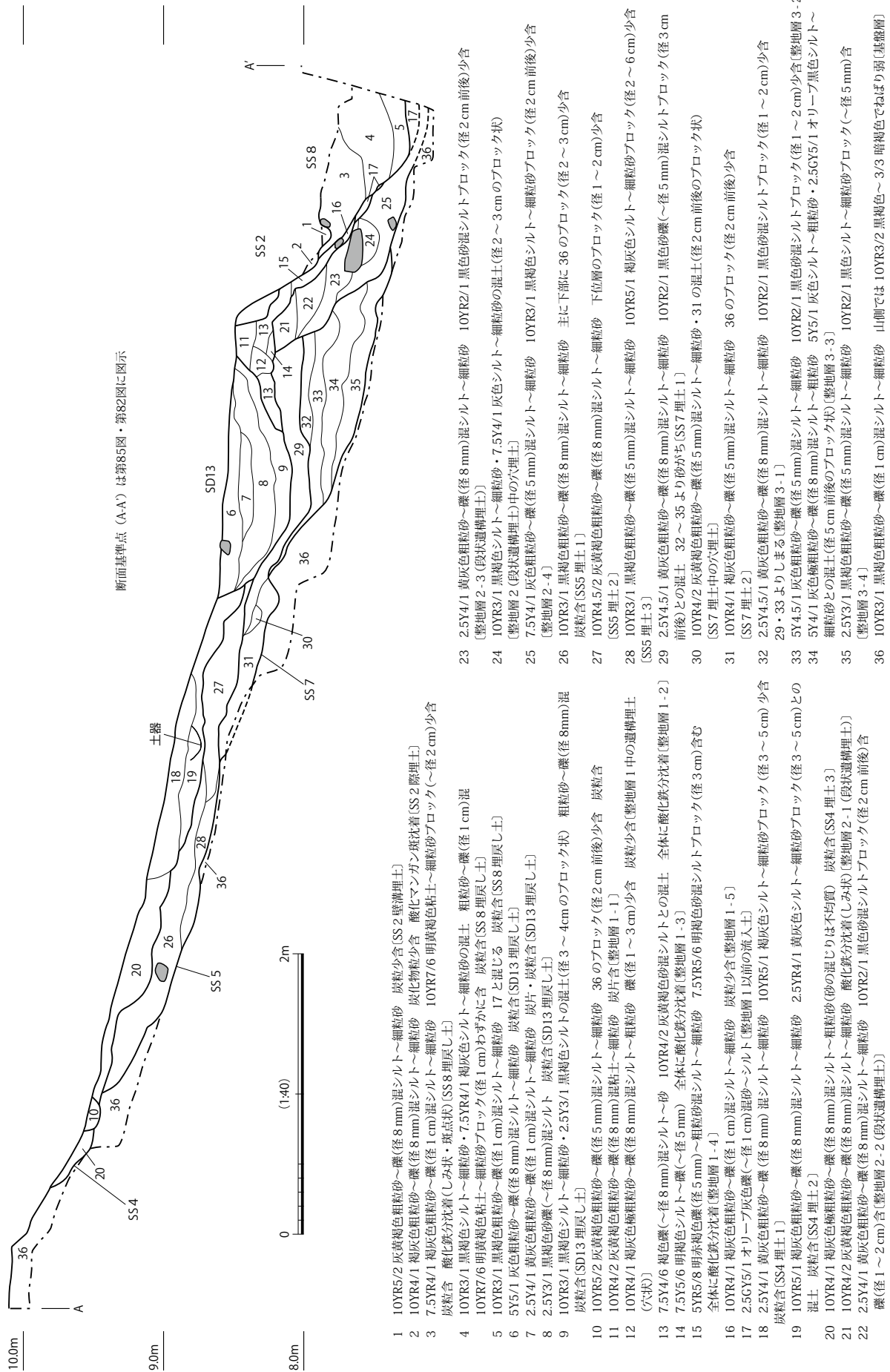
第78図 6区丘陵裾部第4遺構面遺構配置図



第79図 SS4及び第4遺構面ピット配置図



第80図 6区丘陵裾部第5遺構面遺構配置図



第81図 SS4・5・7・8、SD13断面図

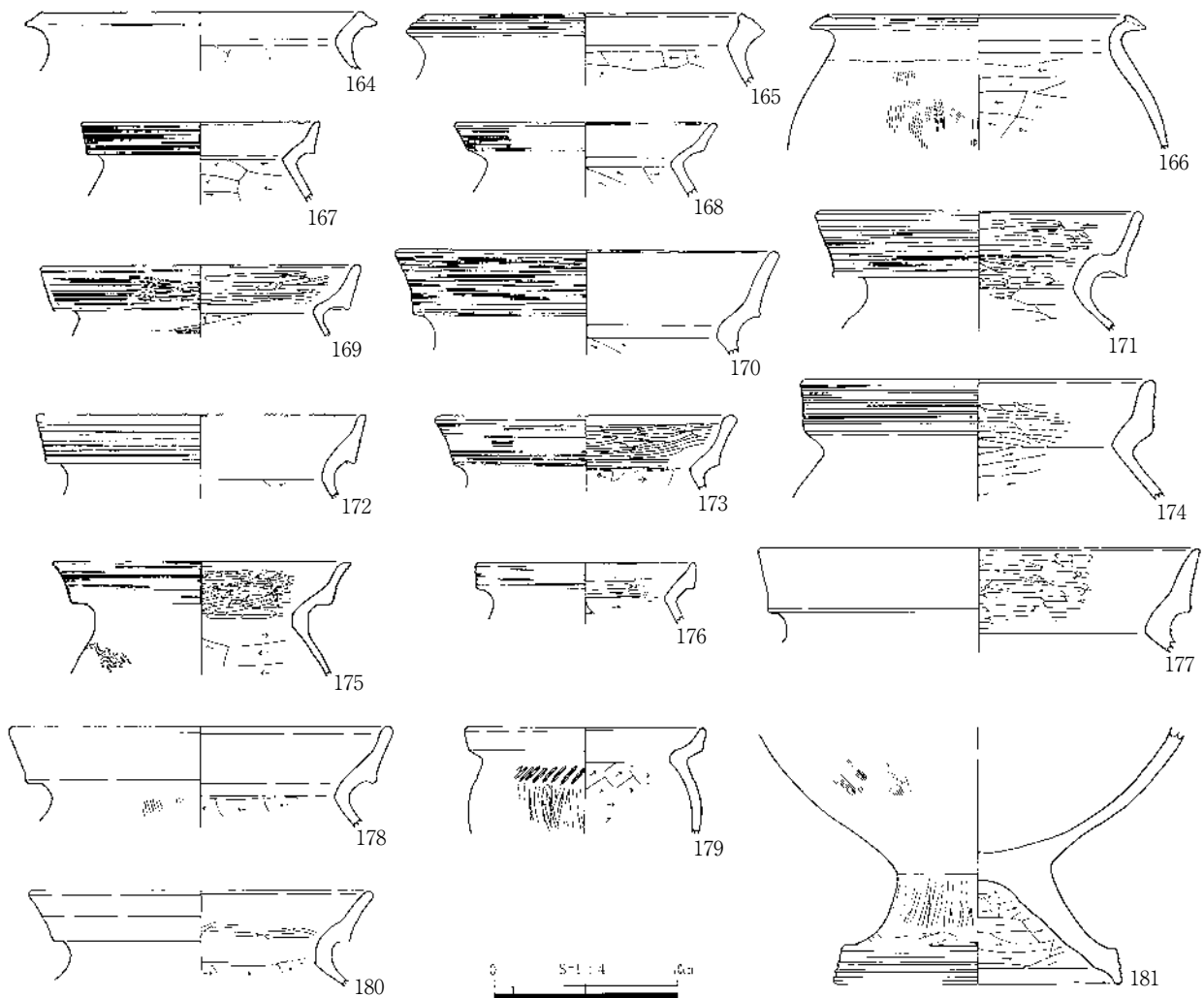


第82図 SS5・7及び第5遺構面ピット配置図、SS5出土遺物

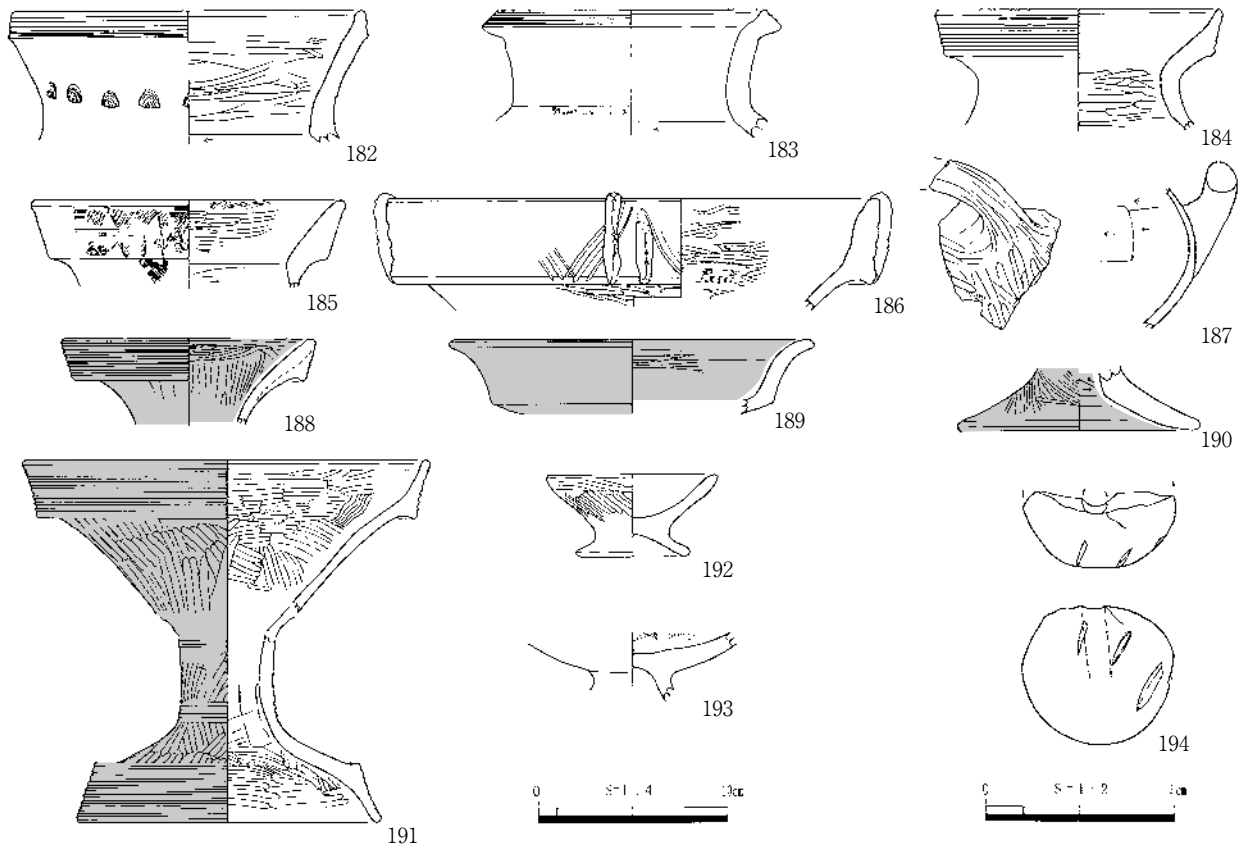
は細くなされる。189と190は高坏の坏部及び脚部である。189の坏部は斜め外方に向けて開いた後、屈曲部を経て外反する。190は器高が低く、「ハ」字状が開く。192と193は低脚坏であり、前者は坏部が小さく直線的に立ち上がるのに対し、後者の坏部は丸みを帯びている。以上は後期中葉から後葉の特徴を示す。194は外面の3箇所へラ状工具による刻みを施した土玉である。遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代後期後葉に比定できる。

SS8及びSD13(第78・81・85図、PL.33・34)

SS8はN、O20～21グリッドで検出した段状遺構で、SD13はSS8の西側で検出した溝である。両者の軸は約20°東に振れて南北方向に延びる。SS8は南側がSS3に切られ、東側が調査地外に至るため全容は不明である。検出した規模は、長さ7.9m、幅2.4m、検出面からの深さ1.3mである。SS8の下位には部分的に湧水を伴う砂が厚く堆積し、壁面の崩落が懸念されたことなどにより、完掘はできなかった。埋土には丘陵の基盤層である明黄褐色土の小ブロックが含まれている。SS8の廃絶時にSS2を造るために埋め戻されたものと考えられる南側の埋土上部からは、炭化木、炭片及び炭粒が面的に多く出土した。SD13はSS8の法肩に平行する形で伸びる。長さ9.7m、幅1.1～2.2m、検出面からの深さは0.6mである。SD8およびSD13と、SS2及びSS8は検出位置がほぼ重なることから、後者を造り替える形で部分的に土地の造成を行ない、前者が造られたと考えられる。遺構の帰属時期は、層位から弥生時代終末期以降に比定できる。



第83図 SS4出土遺物(1)



第84図 SS4出土遺物(2)

SS5 (第80～82図、表18、PL.35・44)

SS4の埋土を除去した底面で検出した。SS4と同じく、丘陵斜面を切土して造成した段である。段の法肩は段の北部ではSS4と同じで、段の南部ではSS4の法肩から1mあまり東側にあり、等高線に沿って約13°東に振れて南北方向に延びる。検出規模は、長さ35.5m、幅10.7m、法肩からの深さ1.08mである。段の平坦部は完全な水平ではなく、約10°の勾配で東側に緩やかに下る。SS5南部の法尻には壁溝があり、長さ3.0m、幅0.2～0.3m、検出面であるSS5底面から深さ0.08mを測る。出土遺物のうち、1点を図化した(第82図163)。遺構の帰属時期は、層位から弥生時代後期後葉に比定できる。

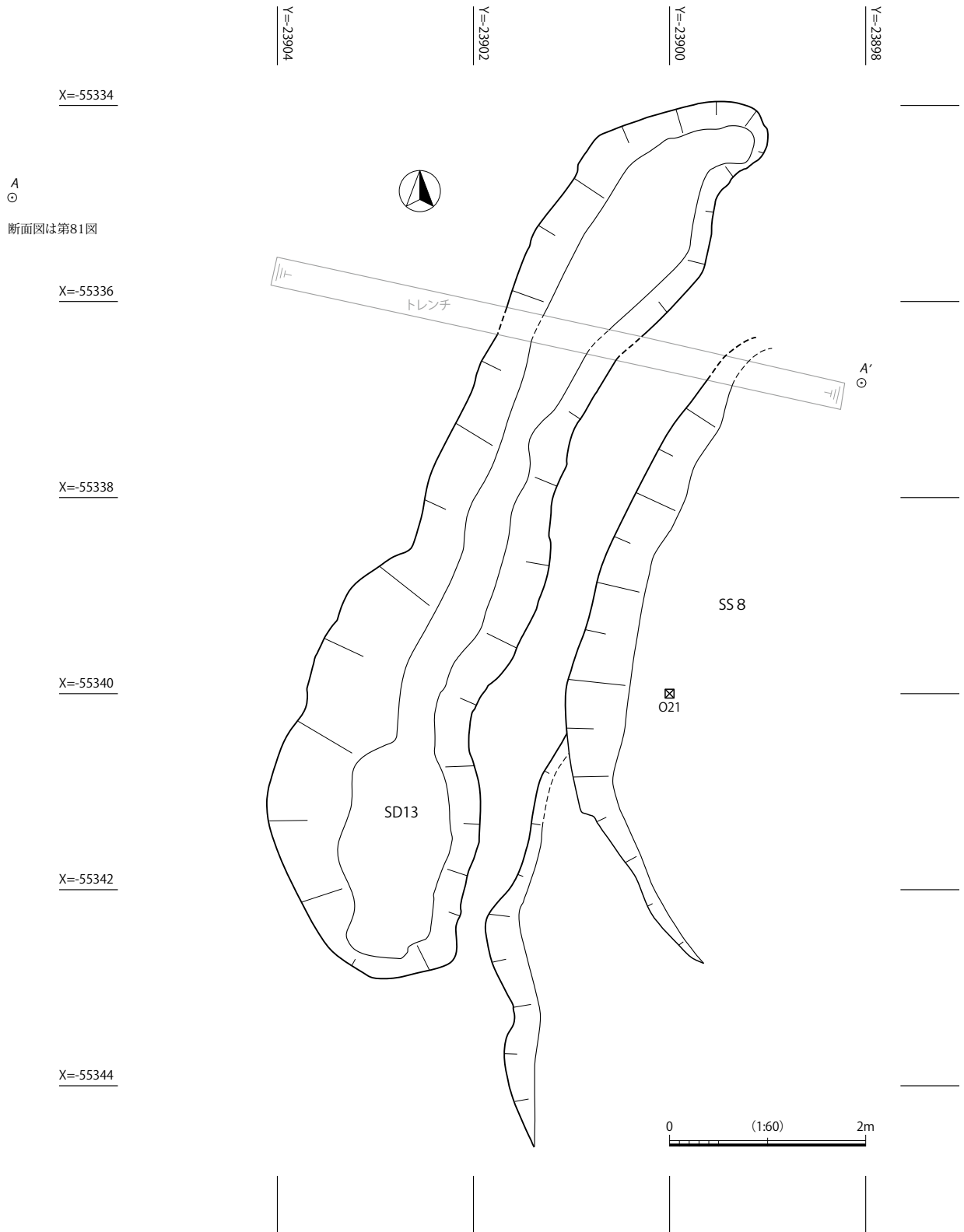
SS7 (第80～82図、PL.35・36)

SS5埋土を除去した面に帰属する段状遺構で、SS4、5と同じく丘陵斜面を切土して造成した段である。段の法肩はSS5の法肩から東側3m前後東側をほぼ平行して延びる。検出規模は、長さ32.4m、幅9.2m、SS5底面からの深さ0.65mである。平坦部は約7°の勾配で東側に緩やかに下る。遺構の帰属時期は、層位から弥生時代後期後葉に比定できる。3つの段状遺構の土層断面を検討した結果(第81図)、SS7が最も古く、これを丘陵側に拡張したものがSS5で、さらにこれを丘陵側に拡張したものがSS4であることがわかった。

(3) 掘立柱建物

SB6 (第80・86・87図、表60、PL.35～38・79)

M20～21グリッドで検出した。桁行2間、梁行1間、柱間距離3.9m×2.59～2.65m、平面積10.2㎡の建物である。主軸方位はN-10°-Eで、概ね南北方向に主軸を持つ。柱穴は6基でいずれにも柱根は残らず柱痕も見られない。うち3基の底面には板材や角材、丸太材が置かれており、礎板として使われたと考えられる。SB6の南側で主軸と直交する方向に伸びる小溝と、西側で主軸とほぼ同じ方



第85図 SS8・SD13平面図

向で伸びる小溝は、位置関係から見てSB 6に伴う外周溝と考えられる。礎板として使われた木材を除き、わずかな土器片が出土したのみである。遺構の帰属時期は、層位から弥生時代後期後葉に比定できる。第87図にはSB 6-P 2から出土した礎板3点(W13～15)を掲載している。最大長27.7～31.5cm、最大幅6.4～7.6cmの芯去材であり、端部には斜めに切断した加工痕が残っている。

SB7 (第78・88図、PL.33・34)

M21、N20～21グリッドで検出した、桁行2間、梁行1間、柱間距離3.71～3.8m×2.25～2.36m、平面積8.8㎡の建物である。主軸方位はN-1°-Eで、ほぼ南北方向に主軸を持つ。柱穴は6基で埋土からの出土遺物はない。遺構の帰属時期は、層位から弥生時代後期後葉に比定できる。

SB9 (第80・90図、PL.35・36・38)

M、N20～21グリッドで検出した、桁行1間、梁行1間、柱間距離2.56m×1.85m、平面積4.7㎡の建物である。主軸方位は真北で、南北方向に主軸を持つ。柱穴は4基で出土遺物はない。遺構の帰属時期は、層位から弥生時代後期後葉に比定できる。

(4) 布掘建物

SB8 (第78・89図、PL.34)

L、M21グリッドで検出した。概ね南北方向に伸びる2条の溝からなる。調査時点では西の掘方を単独の溝と認識し、東の掘方を細長い土坑と認識していた。しかし、整理段階で再検討したところ、土坑と認識していた東の掘方が、北側と上部が後に削られ失われたことがわかった。かつ、西掘方の南部の底面近くで水平に置かれた状態で出土した板が、礎板である可能性が高いことと合わせ、布掘建物と判断した。

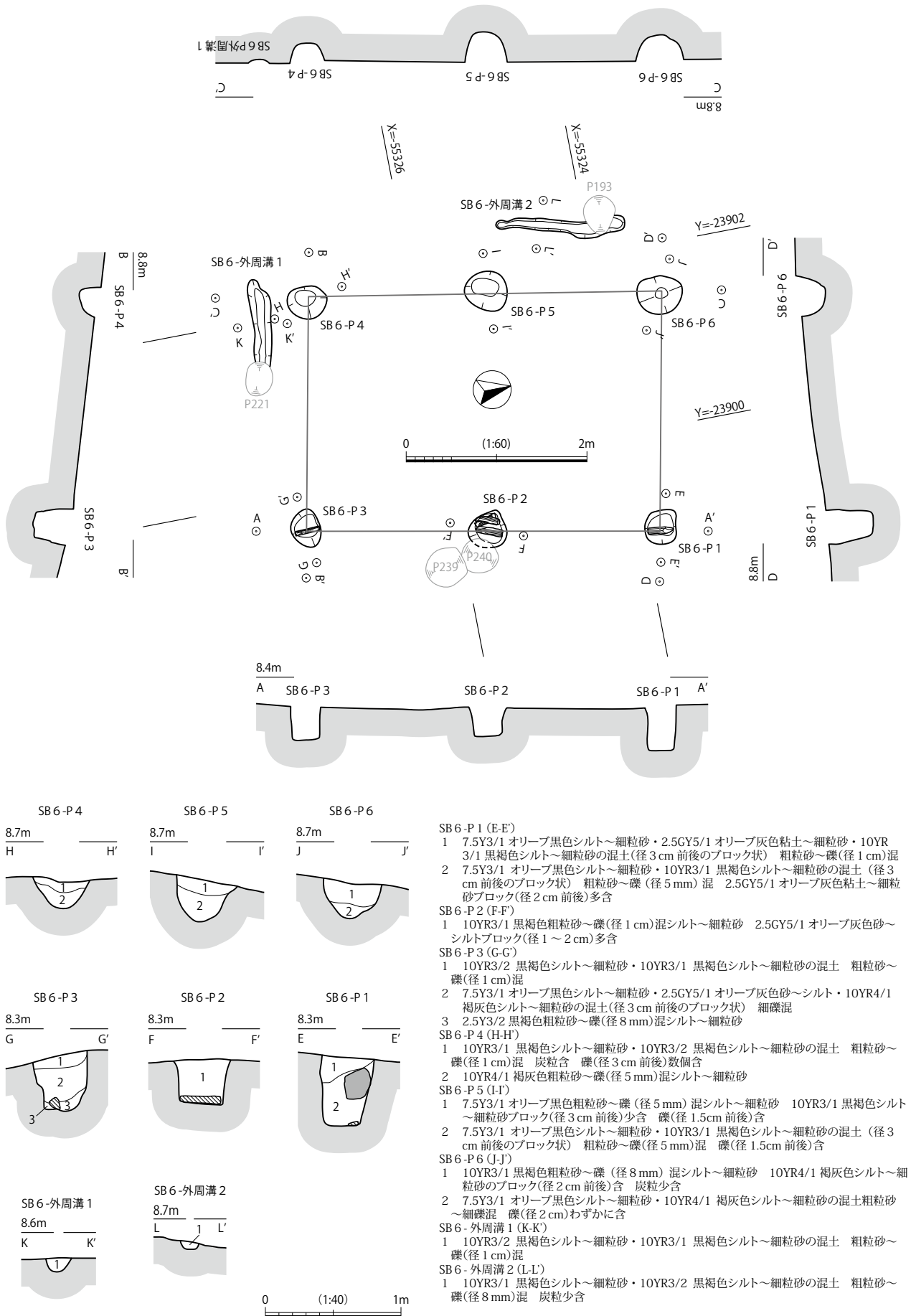
主軸方位がN-7°-Eで、概ね南北方向に主軸を持つ。西掘方は検出長4.0m、幅0.3～0.5m、検出面からの深さ0.8mである。埋土はブロック土主体の上層と、ブロック土を含む黒色粗粒砂から礫混シルトの2層に分けられる。東掘方は検出長1.0m、幅0.5～0.7m、検出面からの深さ0.3mを測る。埋土は西掘方の埋土下層と同じである。2つの掘方の底面標高は、0.05m以内の差で概ね揃う。建物規模は不明だが、西掘方の礎板と見られる板が原位置に残存していると仮定した上で、掘方底面との位置関係から、桁行3.4m前後×梁行2.1m前後と推定できる。

出土遺物は、西掘方から出土した礎板と見られる板以外にはない。遺構の帰属時期は、第IV-3層の堆積よりは前であることから、弥生時代後期後葉に比定できる。

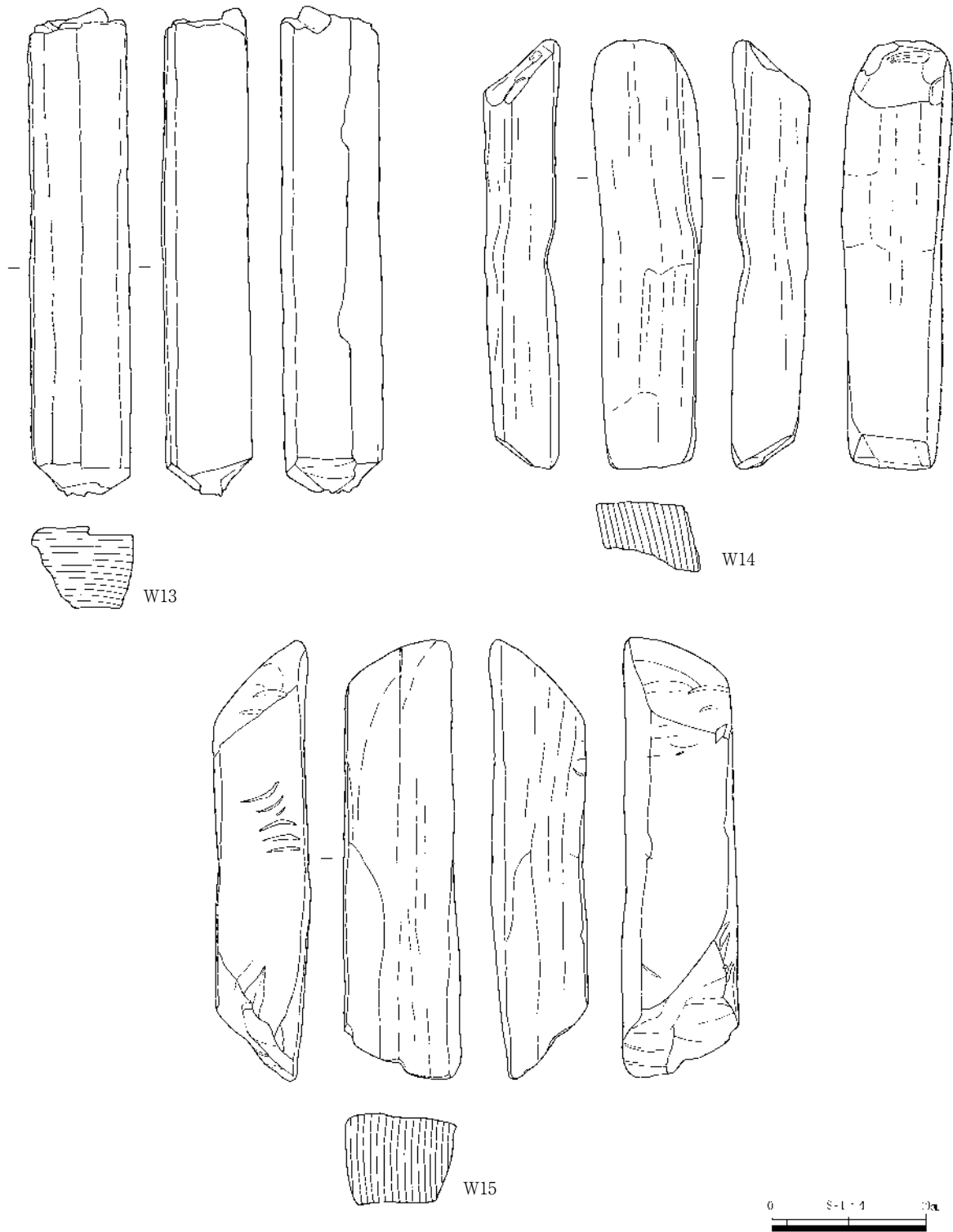
SB5 (第80・91・92・372図、表19・60・63～65、PL.35～37)

調査区北東のK19～20グリッドで検出した布掘建物である。丘陵裾部に近く多数のピットが存在するSS7段状遺構の北東のはずれ、西からの谷地形に接した部分に位置し、検出面での標高は7.9mを測る。東側を平安時代頃のSS1段状遺構の形成によって失っていて、調査できたのは東西4.1m、南北2.8mの範囲である。

遺構は西北西方向に主軸を取る2本の溝で主に構成される。南側の溝は幅0.2～0.3m、深さ0.5mで、残存長4.1m、幅0.2m、厚さ0.05mの頑丈なスギの板を横に立てて据えてあった。地中梁と考えられる。西端には直径0.5mの柱穴が設けられ複数の板材からなる木製の礎板が置かれていたが、礎板と地中梁の間には0.15mの距離がある。この礎板から1.6m東方では、地中梁から0.45m南にずれた位置ではあるが同様の礎板が検出されていて、柱間距離は1.6m程度であることがわかる。北側の溝は2.5m分しか残っていないが、やはり同様の地中梁が遺存していた。こちらは幅0.3～0.5m、深さ0.4mの溝の底に、幅0.15m、厚さ0.05mのスギの板を、西端に枕木を3枚据えた上に横に立てている。南溝のように柱穴はなく溝の中に複数の小板からなる礎板を据えてあるが、やはり地中梁との間に0.06mの隙間がある。溝の東端で出土した径16cmの丸太は、柱の一部の可能性はある。2つの地中梁の間の距離は2.3mを測る。輪雑込のように地中梁が直接主柱を支える構造ではなく、不同沈下防止のために



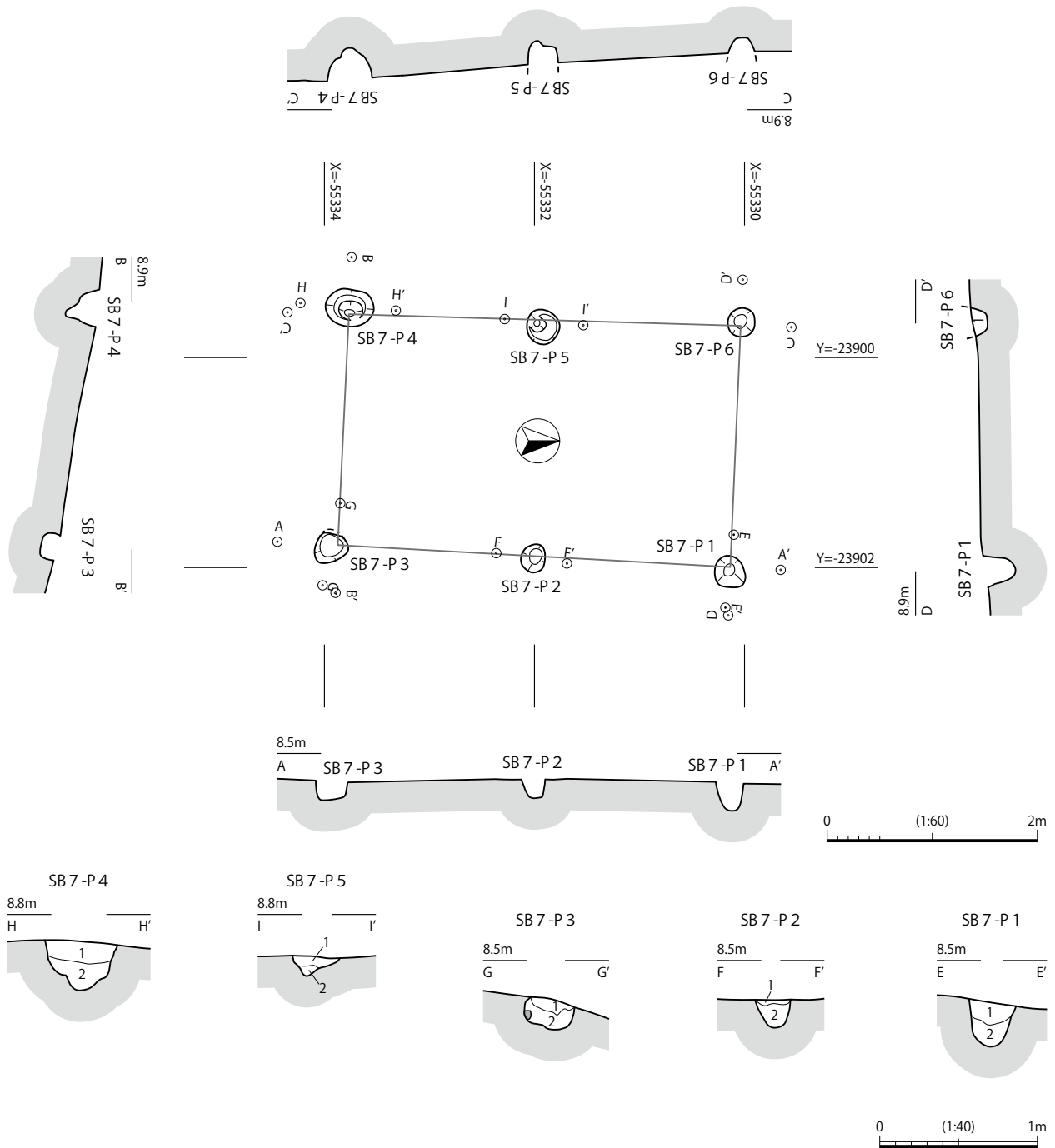
第86図 SB6平面・断面図



第87図 SB6-P2出土遺物

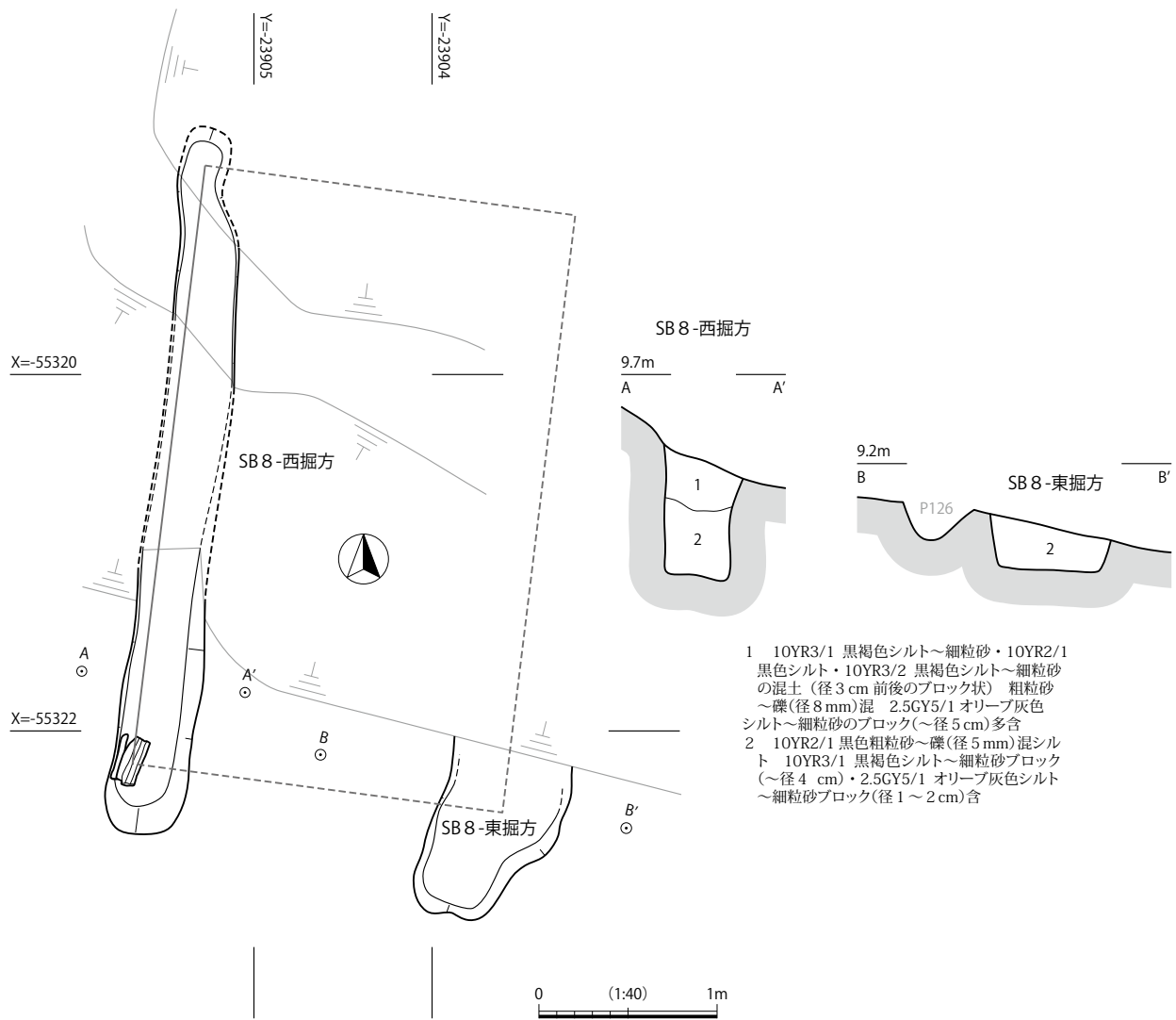
地中梁を用いた布掘の掘立柱建物と考えられる。

第91図に布掘掘方埋土中から出土した土器を図示している。弥生土器の器台受け部の195は、多条平行沈線を14条施文し、内面に丁寧なミガキが施される。196～198は北側の布掘で出土した弥生土器である。196は複合口縁甕の口縁部下端であり、口縁部はナデを施す。197は器台の脚台部で3条の平行沈線がめぐっている。198は複合口縁甕の口縁部で、口縁部はナデを施す。199は南側の布掘から出土した甕か壺の底部である。以上の土器は、弥生時代後期中葉から後葉の特徴を示している。



- SB 7-P 1 (E-E)
 1 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂・2.5Y5/1 黄灰色粘土～細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状) 粗粒砂～礫(径1cm)混
 2 2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂～細礫混シルト～細粒砂
- SB 7-P 2 (F-F)
 1 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂の混土(径2cm 前後のブロック状) 粗粒砂～礫(径1cm)混 炭粒含
 2 2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂
 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm 前後)含
- SB 7-P 3 (G-G)
 1 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂の混土(径4cm 前後のブロック状) 粗粒砂～礫(径1cm)混
 2 10YR3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径5mm)混シルト～細粒砂
 2.5Y5/1 黄灰色粘土～細粒砂ブロック(～長径3cm)含
- SB 7-P 4 (H-H)
 1 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂の混土(径4cm 前後のブロック状) 粗粒砂～礫(径1cm)混 炭粒含
 2 2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂
 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm 前後)含
- SB 7-P 5 (I-I)
 1 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂の混土(径4cm 前後のブロック状) 粗粒砂～礫(径1cm)混 炭粒含
 2 10YR3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径5mm)混シルト～細粒砂
- SB 7-P 6 (D-D')
 1 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂の混土(径2cm 前後のブロック状) 粗粒砂～礫(径1cm)混 礫(卵大)1個含

第88図 SB 7平面・断面図



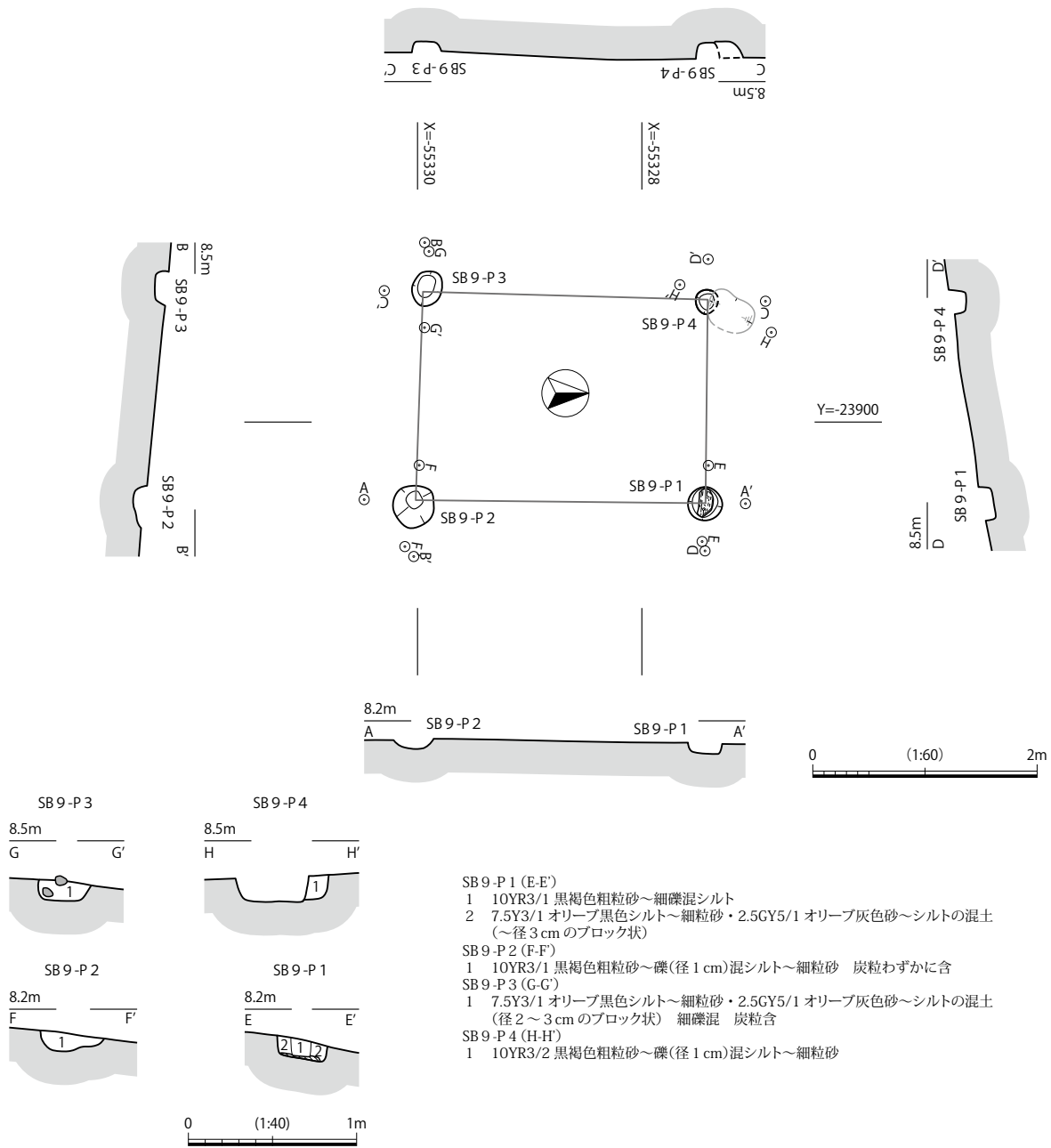
第89図 SB8平面・断面図

(5) 溝

SD11(第78・93・94図、表19・20、PL.31・33・50)

M、N21グリッドで検出した。SS4の埋土掘削中に土器や礫が帯状に出土したため、周辺を精査し平面的に検出した。SS4の法肩に平行して南北方向に延びる溝で、規模は長さ4.4m、幅0.42～0.76m、検出面からの最大深さ0.3mである。SS4とSS5の埋土観察用ベルトで、SD11の埋土上層と同じ窪みを確認しており、本来の規模は平面的に検出したよりは長いと推定できる。埋土からの出土遺物は、一個体分の壺の破片と、拳大前後の礫が大量に含まれていた。これらは弥生時代中期後葉のものであるが、本来SS4に属していたものと考えられ、遺構の時期は、SS4の埋土を切ることからそれよりも後である。SD11は層位や遺物出土状況から、SS4がある程度埋め戻された後に、壁に沿って掘られたもので、溝を埋め戻す際に周辺で出土した土器や礫を廃棄したと推定できる。

SD11から出土した遺物は弥生土器7点を図示した。200と201は甕である。200は口縁端部が上下に拡張して面を形成し、4条の凹線文を施す。内面は口頸部までケズリが及び部分的に指頭圧痕を残す。201は「く」字状に屈曲した幅狭い口縁部に3条の平行沈線がめぐり、体部上半はハケ、下半は縦方向のミガキが施され、体部中位にはハケ状工具による刺突がめぐっている。体部内面はハケ後、ナデが施され指頭圧痕が残る。202～204は壺である。203と204は内折した口縁部が上下に肥厚して、3～5条の



第90図 SB9平面・断面図

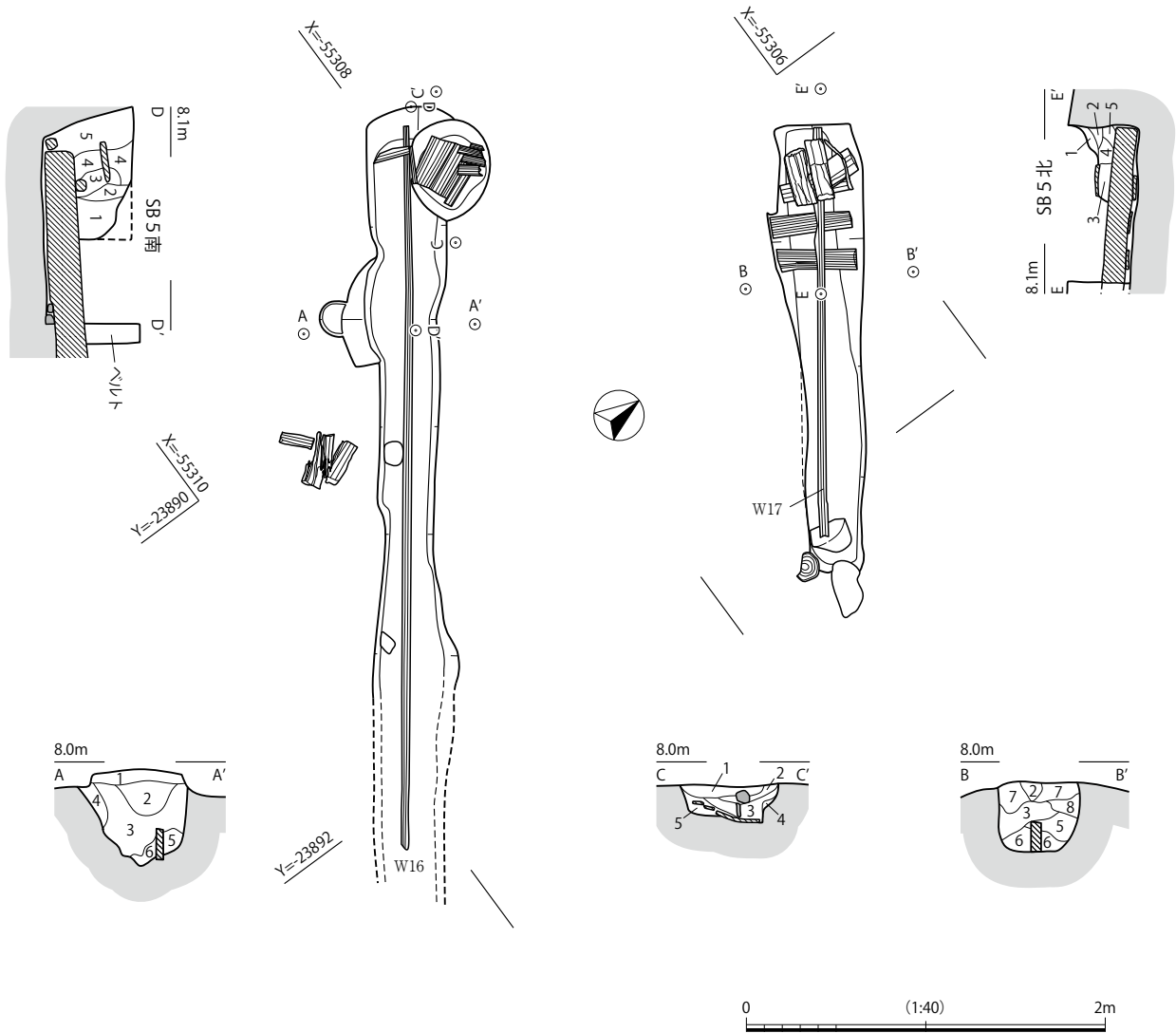
平行沈線が施文される。後者は頸部内外面に丁寧なミガキが加えられる。202は口縁部に4条の凹線文がめぐり、頸部から体部にかけてハケ後、ミガキが施される。肩部にはハケ状工具による羽状文が2段施文されている。頸部内面はハケ後ミガキ、体部もヘラケズリ後ハケ調整がなされ、肩部は指頭圧痕が残る。205と206は甕か壺の底部である。205の外面は縦方向にミガキ、206の外面はハケが施される。

SD17(第80・95図、PL.35)

K20、L20グリッド、SS7の丘陵側を北東方向に走る溝で長さ6.2m、最大幅0.5mを測り、最も深いところでも0.3mと浅い。性格は不明であるが、SD18と合わせて段状遺構内部の空間を区画するためのものかもしれない。

SD18(第80図、PL.35)

L20グリッド、SD17の中程近くから東に向かって延びる弧状の溝で長さ2.3m、幅0.2mと小規模である。



A - A'・B - B'

- 1 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 砂粒混(第5包含層)
- 2 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 砂粒混 ややしまり弱 抜取痕?
- 3 7.5YR5/2 褐灰色粘質土 オリーブ灰色粘質土塊少混
- 4 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 炭少混
- 5 7.5YR5/2 褐灰色粘質土 粘性強 砂粒混
- 6 7.5YR6/1 褐灰色粘質土 粘質土混
- 7 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 オリーブ灰色粘質土塊多混 しまる
- 8 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 オリーブ灰色粘質土塊少混 しまる

D - D'

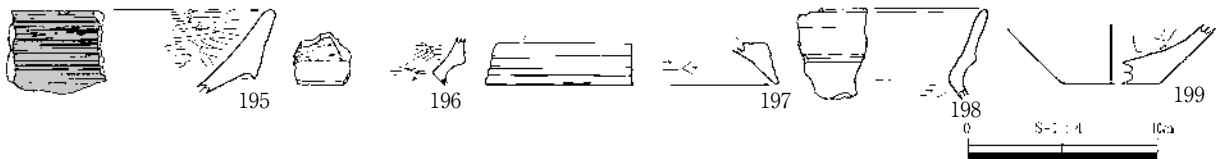
- 1 7.5YR5/2 灰褐色粘質土 砂粒混 しまり悪
- 2 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘質土 灰褐色粘質土少混 しまる
- 3 7.5YR5/2 灰褐色粘質土 オリーブ灰色粘質土塊混 しまる
- 4 7.5YR5/2 灰褐色粘質土 砂粒混
- 5 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘質土 砂粒混 灰褐色粘質土わずかに混

C - C'

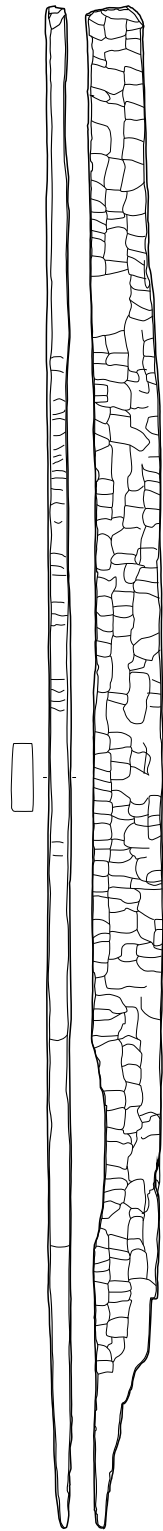
- 1 7.5YR5/2 灰褐色粘質土 砂粒混 しまり悪
- 2 7.5YR5/2 灰褐色粘質土 灰オリーブ色粘質土塊混
- 3 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 砂粒混
- 4 2.5GY5/1 オリーブ灰色粘質土 褐灰色粘質土少混
- 5 7.5YR5/2 灰褐色粘質土 灰オリーブ色粘質土塊混

E - E'

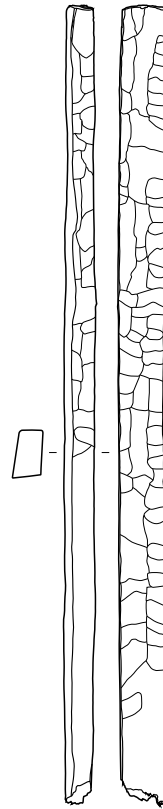
- 1 7.5YR5/1 褐灰色粘質土
- 2 2.5GY5/1 オリーブ灰粘質土 褐灰色粘質土わずかに混
- 3 7.5YR5/2 褐灰色粘質土 オリーブ灰粘質土縞状に少混
- 4 7.5YR5/2 褐灰色粘質土 オリーブ灰粘質土塊混
- 5 7.5YR5/2 褐灰色粘質土 オリーブ灰粘質土塊少混



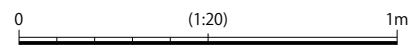
第91図 SB5平面・断面図及び出土遺物(1)



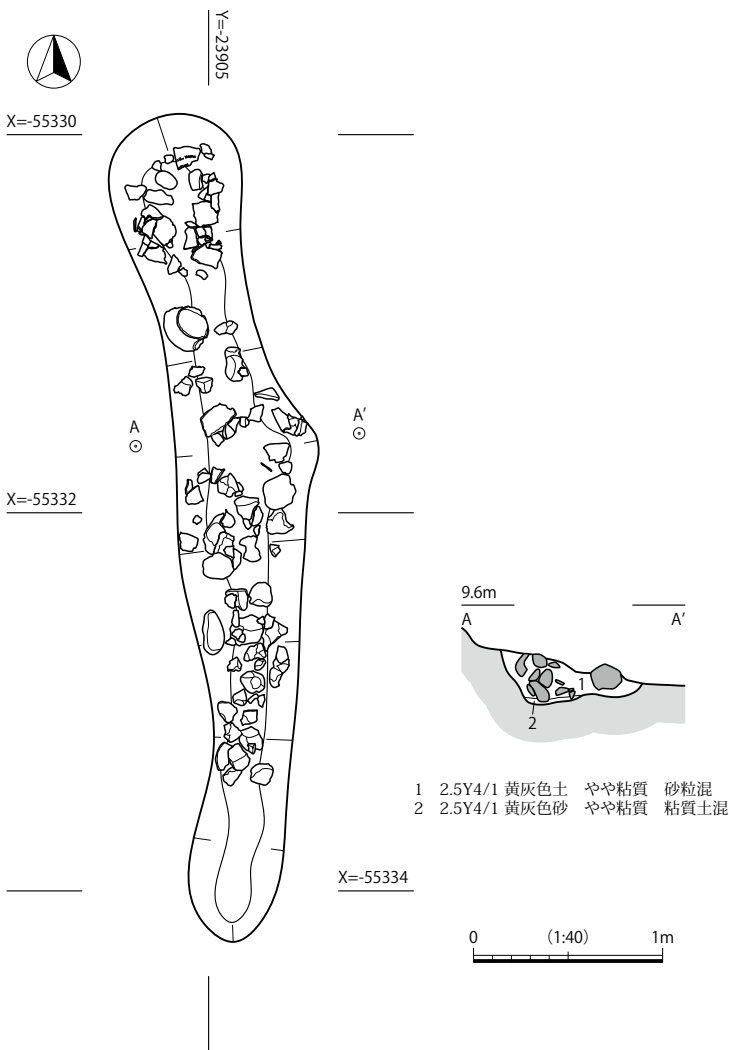
W16



W17



第92図 SB5出土遺物(2)



第93図 SD11平面・断面図

SD19(第80・97図、PL.35)

K20グリッドで検出したSD17と並ぶ溝。長さ1.4m、幅0.1～0.3m、深さ0.1mとごく小規模で、性格不明。

SD20(第80・96図)

丘陵裾南端のP21グリッドで検出した。記録できたのは北東-南西方向に延びる溝の曲がる部分で、検出長0.88m、幅0.2～0.28m、検出面からの深さは0.12mである。埋土は第IV-4層最下部と同じ単層である。埋土からの出土遺物は土器細片であり、遺構の帰属時期は層位から弥生時代後期後葉に比定できる。

SD21(第80・96図)

P21グリッドで検出した概ね東西方向に延びる溝で、検出長2.55m、幅0.15～0.27m、検出面からの深さ0.08mである。埋土はSD20と同層の単層である。埋土からの出土遺物は土器細片であり、遺構の帰属時期は層位から弥生時代後期後葉に比定できる。

(6)土坑

SK17(第80・95図、PL.35)

L20グリッドで検出した、SD17の一部が膨らんだような形のごく浅い土坑。長軸1.2m、短軸0.8mの楕円形で、検出面からの深さは0.08mを測る。遺物は出土していない。

SK18(第80・95図、表20、PL.35・39・51)

L20グリッド、SS7の斜面部、SK17の北側で検出した土坑で、東側でSD17と接する。長軸1.0m、短軸0.8mの不整形円で、深さは0.3mを測る。

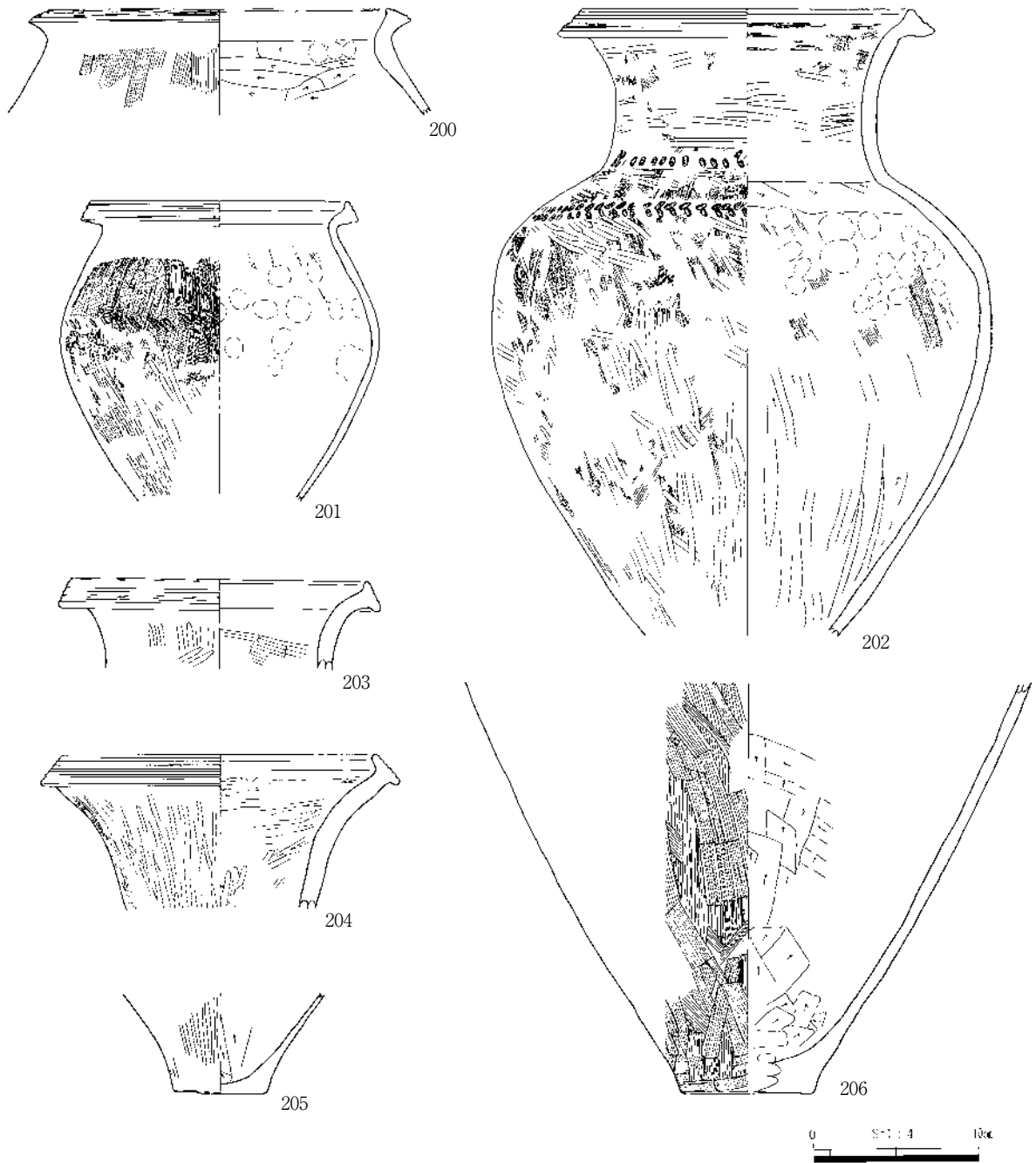
SK18からは2点の弥生土器が出土している。207はボタン状の形態をとる蓋のつまみ部である。208はやや外傾する口縁部に5条の平行沈線を施す甕である。弥生時代後期中葉の特徴を示す。

SK19(第80・97図、表20、PL.35・39・40・51)

L20グリッド、SS7の中央で検出した皿状の土坑。長軸1.6m、短軸1.0mの楕円形で、検出面からの深さは0.1m。北西端に礎板をもつP464ピットが重なり合うが、埋土は単層であるため、一体のものとして掘られた可能性がある。SK19からは2点の弥生土器が出土している。209は複合口縁甕であり、口縁部に7条の平行沈線が施文される。210は高坏の脚部であろう。脚裾には3条の平行沈線がめぐっている。いずれも、弥生時代後期中葉の特徴を示す。

SK21(第80・97図、表60、PL.35・39・79)

J20グリッド、調査区北端の標高8.6mで検出した不整形な土坑で、長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.3



第94図 SD11出土遺物

mの大きさ。底面近くに長さ0.4m程の板材が乱雑に入れられている。配置からは礎板とは言い難く、性格は不明である。SK21からの出土遺物は板材1点(W18)を図示している。一辺31.9～35.0cmの方形の板材で中心部に方形の孔が穿たれている。

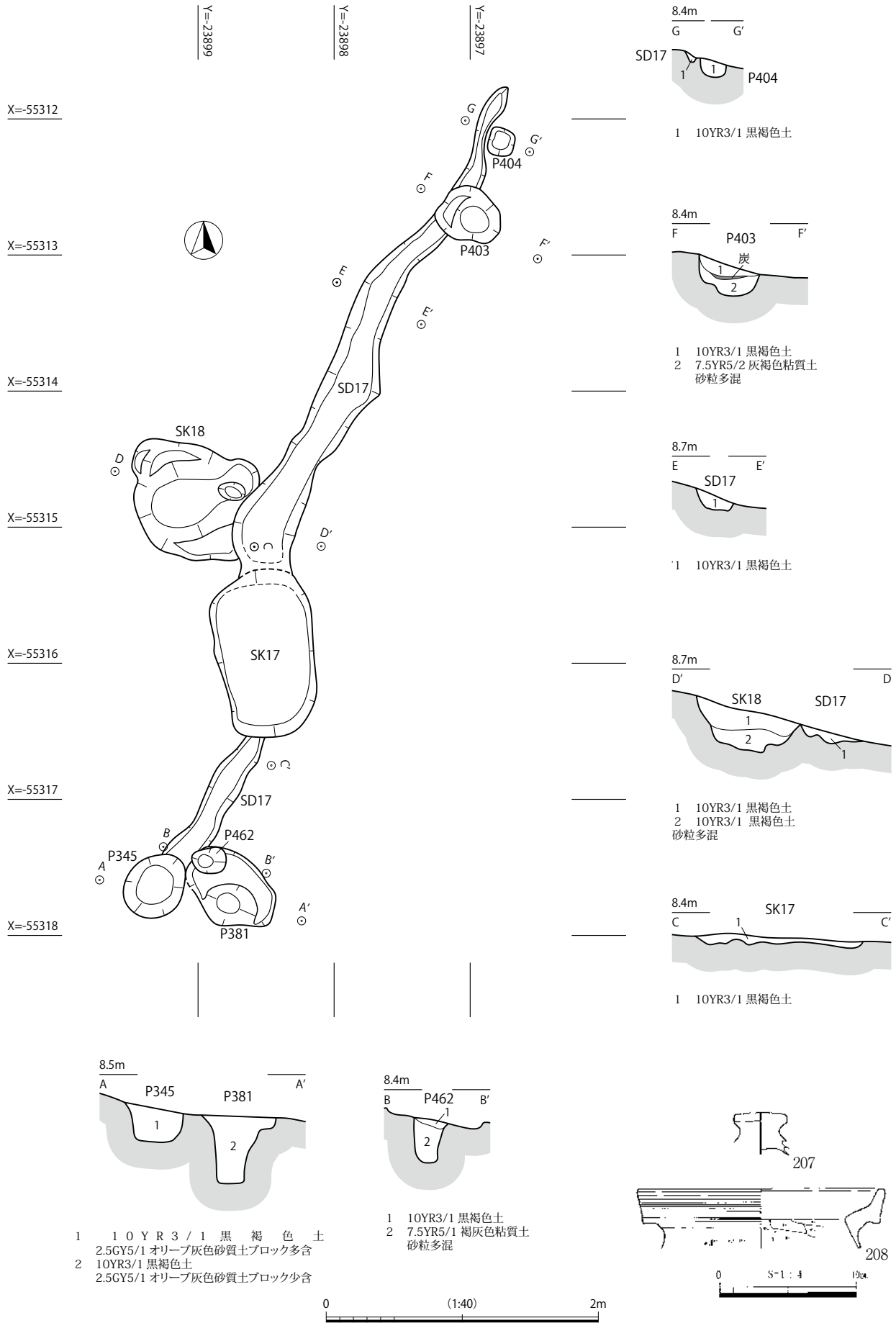
(7) 杭群

杭群1ほか(第33・78・98図、表20・60、PL.33・51・78)

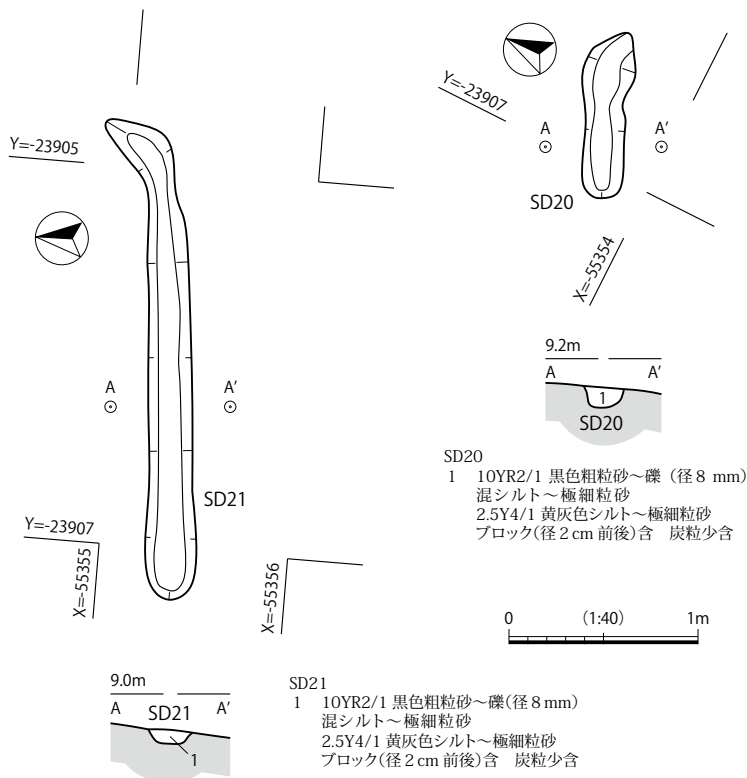
丘陵裾部南端のP21グリッドで検出した。平面的に検出した10本の杭のほかに、南壁断面でも2本の杭を確認している(第33図)。南壁での状況から、第IV-3層除去面ないし第IV-4層上部除去面で、杭は掘方を掘って設置されたことがわかる。層位から弥生時代後期後葉に比定できる。

杭には規則的な配列を積極的に認めることはできないが、地面に直接打設されたものではなく、掘方を掘って設置されたものであることから、柵や建物を構成していた可能性がある。その他、M21グ

第4章 4～6区の調査成果



第95図 SD17、SK17・18、P345・381・403・404・462平面・断面図及びSK18出土遺物



第96図 SD20・21平面・断面図

SS4段状遺構、またはSS5の中に位置する。そのほとんどは、埋土の特徴から、第IV-4層上面ないし第IV-4層中から掘り込まれたものであると考えられるが、第IV-4層上面では平面的に検出することが困難なものが多く、最終的には第V層上面で検出した。柱根が残るピット以外には、柱痕を示す堆積が見られないものが多い。しかし、柱根や柱痕がないピットの中にも、底に板や薄い角材、または平らな面を上にした石が置かれているものがあり、元は柱か杭が立っていたと考えられる。その他の出土遺物は、土器の細片が多く図化し得るものはない。

既に述べた3棟の掘立柱建物(SB6、7、9)は、各ピットの並びや底面の高さ、礎板のあり方などから復元したものである。この他にも、ピットの並びのみから掘立柱建物を復元することができなくはないが、分布が密なため如何様にでも組み合わせることができることから、底面の高さが共通することなどの積極的に認められる要素がないものは建物として復元しなかった。検出したピットのすべてが建物を構成したわけではなかろうが、ピットが密に分布し、かつ、複数次の切り合いを確認できるものが多いことから、段状遺構の平坦部では継続的に建物が建てられていたものと考えられる。

第4遺構面で検出したピットのうち、7基のピット(P117、P121、P133、P138、P161、P167、P185)出土遺物を掲載した。P117から出土した212は口縁部に17条、肩部に5条以上の平行沈線を施文する甕であり、弥生時代後期後葉の特徴を示す。P121から出土した213は弥生土器の甕か壺の底部。P133から出土した214は直立気味の幅狭な口縁部に3条の平行沈線を施した甕であり、弥生時代後期中葉の特徴を示す。P161から出土した器台の受け部215は、内外面に赤色塗彩を行い、多条平行沈線をめぐらせている。弥生時代後期後葉に該当する。P167から出土した甕216と217は、複合口縁に平行沈線をめぐらし、216は肩部に波状文が、217は内面に丁寧なミガキが施される。弥生時代後期後葉に比定される。P167から出土した甕218は、大きく外反する口縁をもち、器壁が薄い。弥生時代終末期に帰属しよう。P185から出土した壺219は、口縁部に5条の平行沈線がめぐっている。第101図は

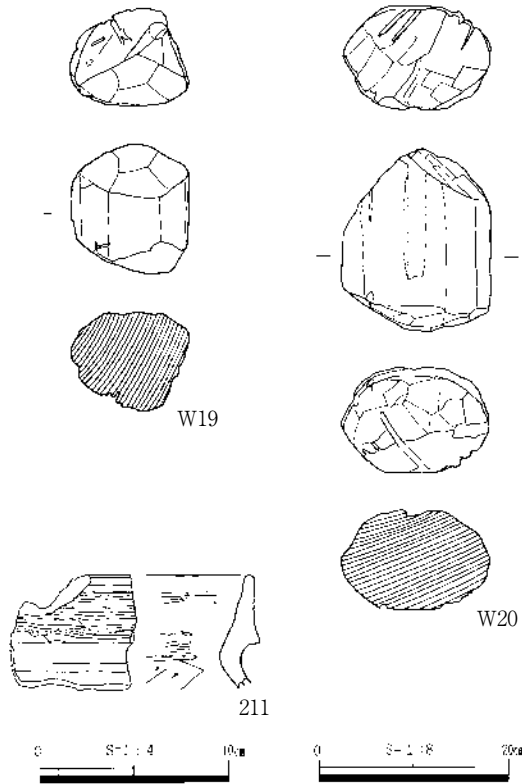
リッドで検出した杭4、5(W19、20)を図示する。W19とW20は最大長13.7～19cm、最大幅12.5～15.8cmの杭である。上下端ともに角度は甘い明瞭に加工痕が残っており、いずれも芯去材を用いている。K21グリッドで検出した杭6からは複合口縁甕の口縁部片(211)が出土しており、口縁部に8条の平行沈線が施文されている。弥生時代後期後葉の特徴を示す。

(8)ピット群(第78～84・97・99～104、表20・60、PL.33・35・39・40・51・71・78・79)

調査区中央部南寄りのM、N20～21グリッド、北寄りのK、L20グリッドの第IV-4層上面ないし第V層上面で多数のピットを検出した。大半は

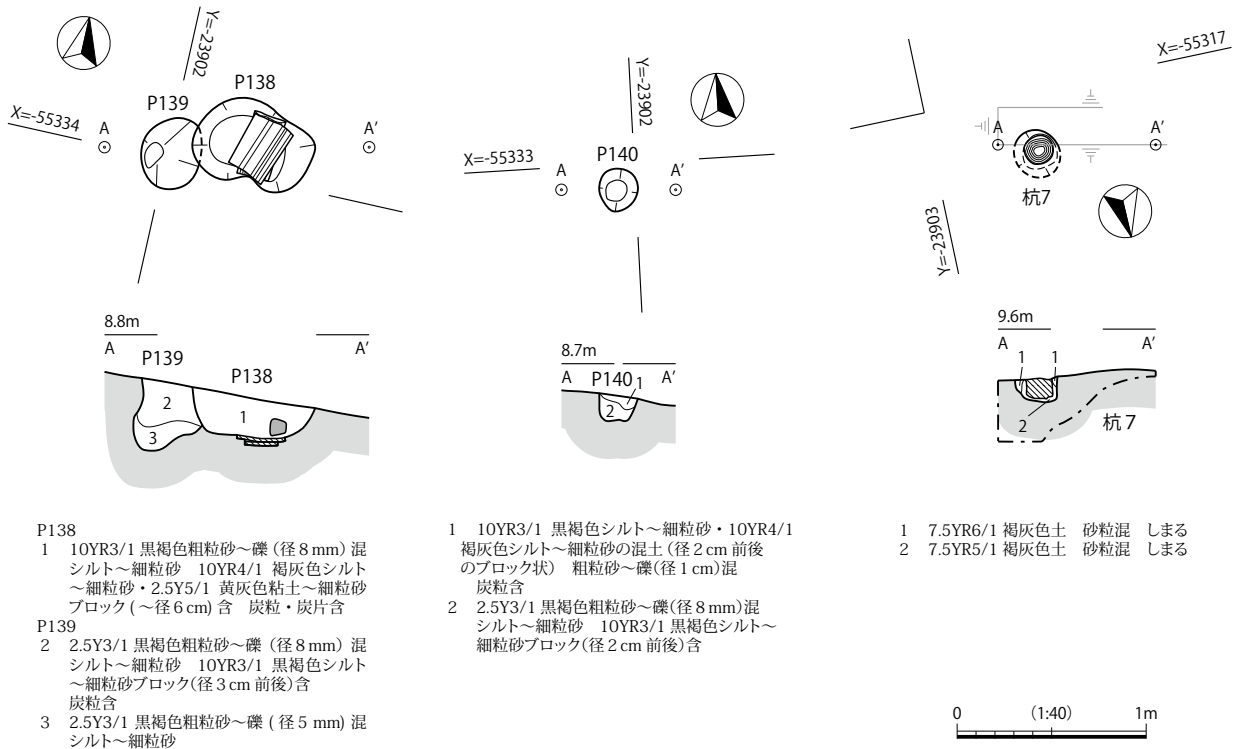
P138で出土した礎板(W21、22)であり、器面の加工痕は確認できない。

第5遺構面で検出したピットのうち、9基のピット(P226、P255、P281、P350、P372、P406、P412、P442、P464)出土遺物を図示した。いずれも弥生土器である。P372で出土した222は外反する口縁端部が肥厚し、2条の凹線文が施文される中期後葉～後期前葉の甕である。P406で出土した壺223は、体部にハケ状工具による刺突文を施している。P255出土の甕220は外反した口縁部に7条の平行沈線がめぐり、肩部に貝殻腹縁による刺突文が施される。後期中葉の特徴を示す。P412から出土した224は、口縁端部の平坦部に3条の凹線文を施文する中期後葉から後期前葉の甕である。P350出土の221は、口縁下に稜をもって口縁が大きく外反する高坏坏部であり、内外面丁寧なミガキが施されている。P442出土の225は甕もしくは壺の底部である。P281から出土したW23は柱根もしくは柱を礎板として転用したものか。芯去材を用い、表面を面取りしている。P226とP464出土のW25～27は礎板である。このうちW27は表面及び側面に手斧による加工痕が明瞭に残っている。



第98図 杭4～6出土遺物

取りしている。P226とP464出土のW25～27は礎板である。このうちW27は表面及び側面に手斧による加工痕が明瞭に残っている。



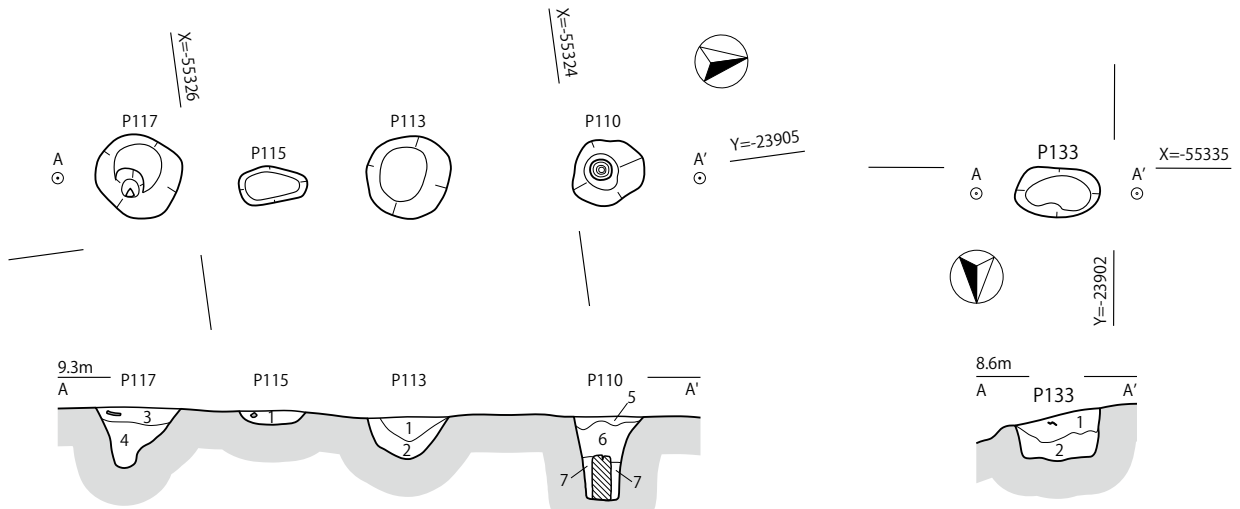
- P138
- 1 10YR3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂 10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂・2.5Y5/1 黄灰色粘土～細粒砂ブロック(～径6cm)含 炭粒・炭片含
- P139
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm前後)含 炭粒含
 - 3 2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径5mm)混シルト～細粒砂

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂の混土(径2cm前後のブロック状) 粗粒砂～礫(径1cm)混炭粒含
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂ブロック(径2cm前後)含

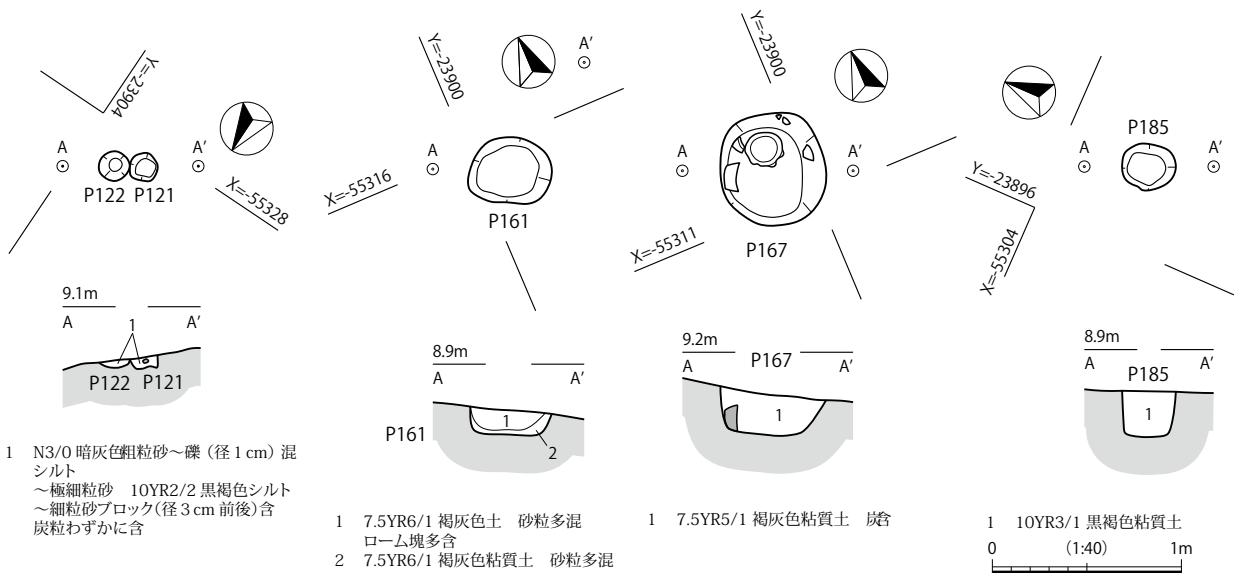
- 1 7.5YR6/1 褐灰色土 砂粒混 しまる
- 2 7.5YR5/1 褐灰色土 砂粒混 しまる

第99図 P138～140、杭7平面・断面図

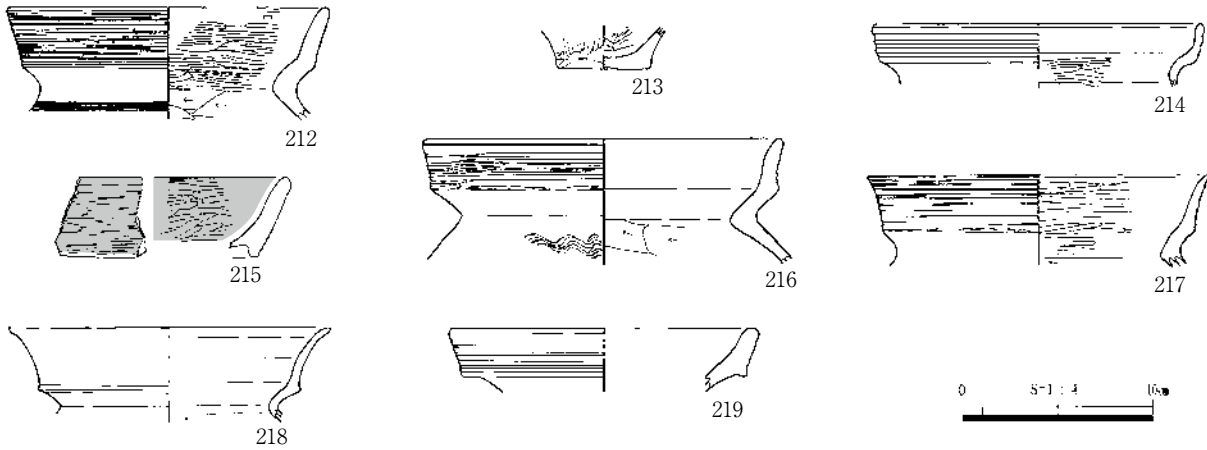
第4章 4～6区の調査成果



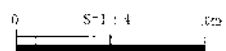
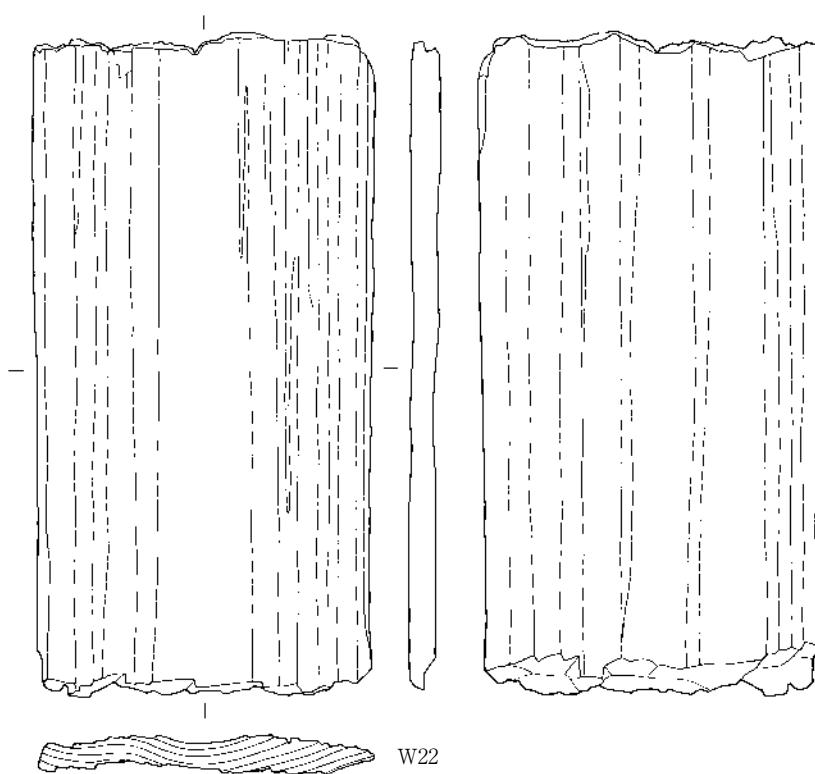
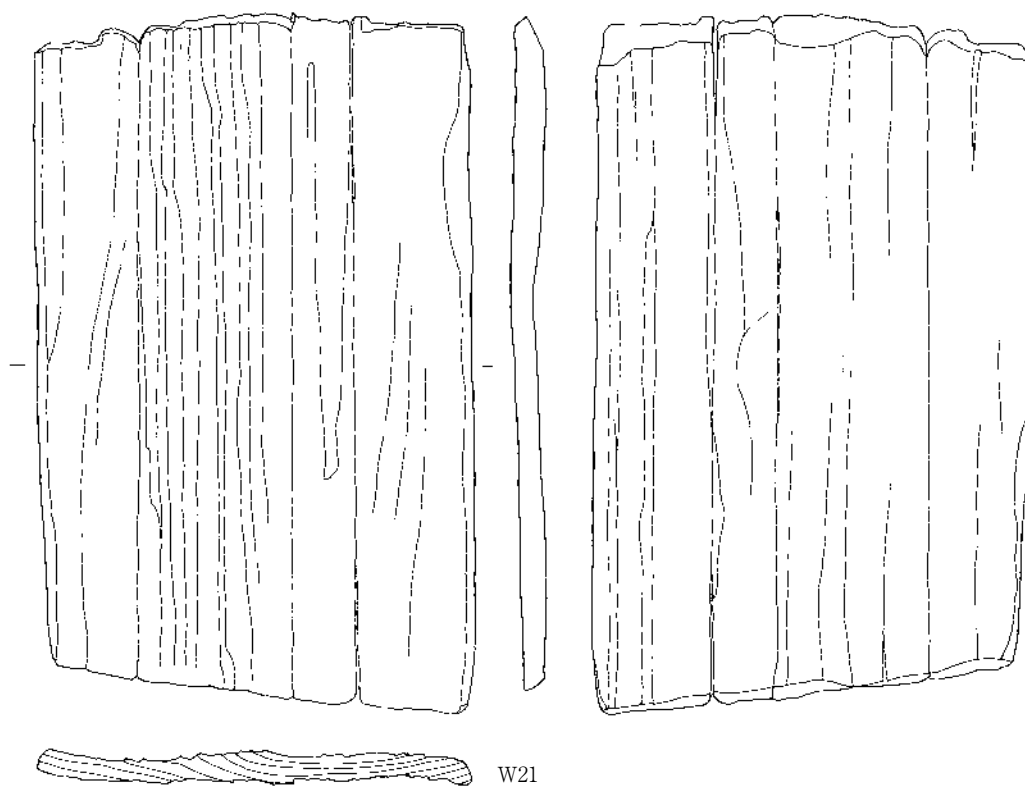
- | | | |
|---|--|---|
| <p>1 2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径1cm)混シルト～細粒砂 10YR2/1 黒色シルトブロック(～径3cm)含 炭粒少含</p> <p>2 2.5Y4/1 黄灰色粗粒砂～礫(径8mm)少混シルト～細粒砂 10YR2/1 黒色シルトブロック(径2cm前後)少含</p> <p>3 N3/0 暗灰色粗粒砂～礫(径1cm)混シルト～極細粒砂 10YR2/2 黒褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm前後)含</p> | <p>4 2.5Y4/1 黄灰色粗粒砂～礫(径8mm)少混シルト～細粒砂・10YR2/1 黒色シルトの混土(径3～5cmのブロック状)</p> <p>5 2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂 10YR2/1 黒色シルトブロック(径2～7cm)含</p> <p>6 2.5Y4/1 黄灰色粗粒砂～礫(径8mm)わずかに混シルト～細粒砂</p> <p>7 2.5Y3/1 黒褐色砂混シルト</p> | <p>1 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～細粒砂の混土(径4cm前後のブロック状)粗粒砂～礫(径1cm)混</p> <p>2 2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂 10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm前後)含</p> |
|---|--|---|



- | | | | |
|---|---|-----------------------------|-------------------------|
| <p>1 N3/0 暗灰色粗粒砂～礫(径1cm)混シルト～極細粒砂 10YR2/2 黒褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm前後)含 炭粒わずかに含</p> | <p>1 7.5YR6/1 褐灰色土 砂粒多混</p> <p>2 7.5YR6/1 褐灰色粘質土 砂粒多混</p> | <p>1 7.5YR5/1 褐灰色粘質土 炭粒</p> | <p>1 10YR3/1 黒褐色粘質土</p> |
|---|---|-----------------------------|-------------------------|

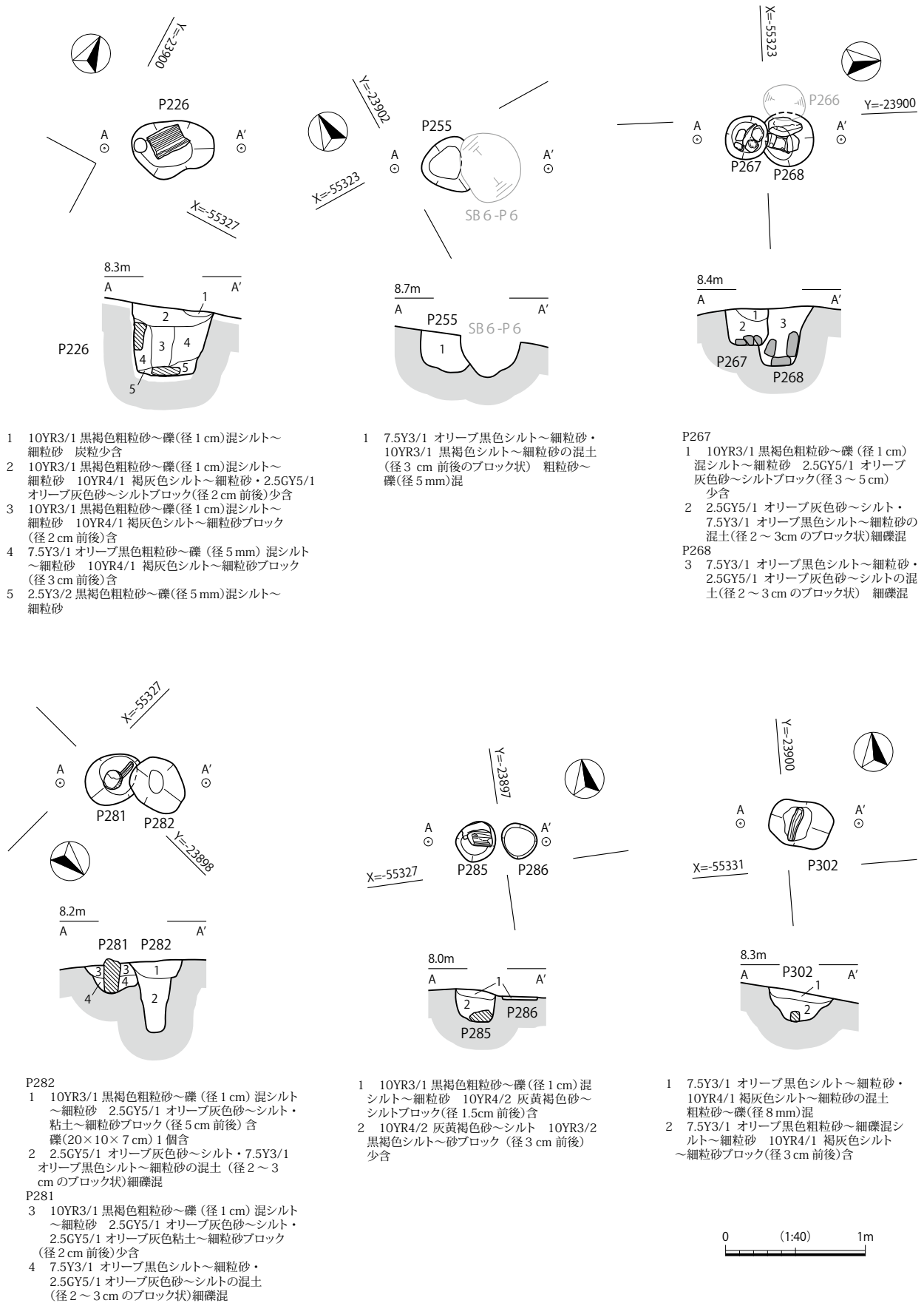


第100図 第4遺構面ピット平面・断面図及び出土遺物(1)

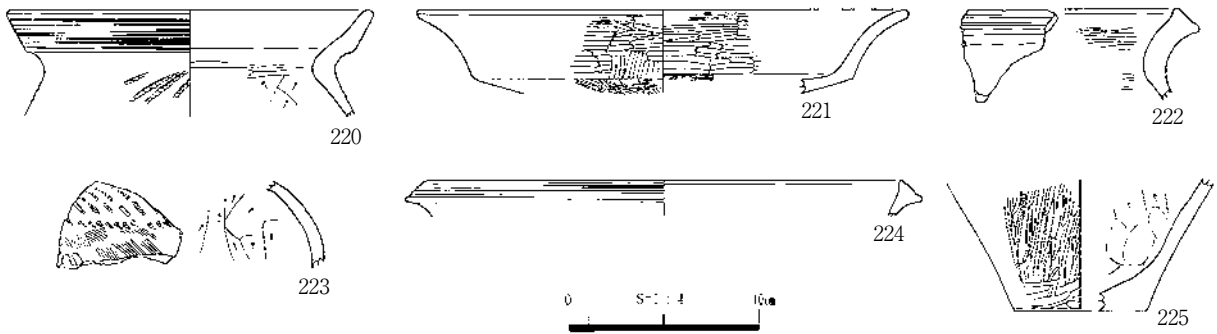
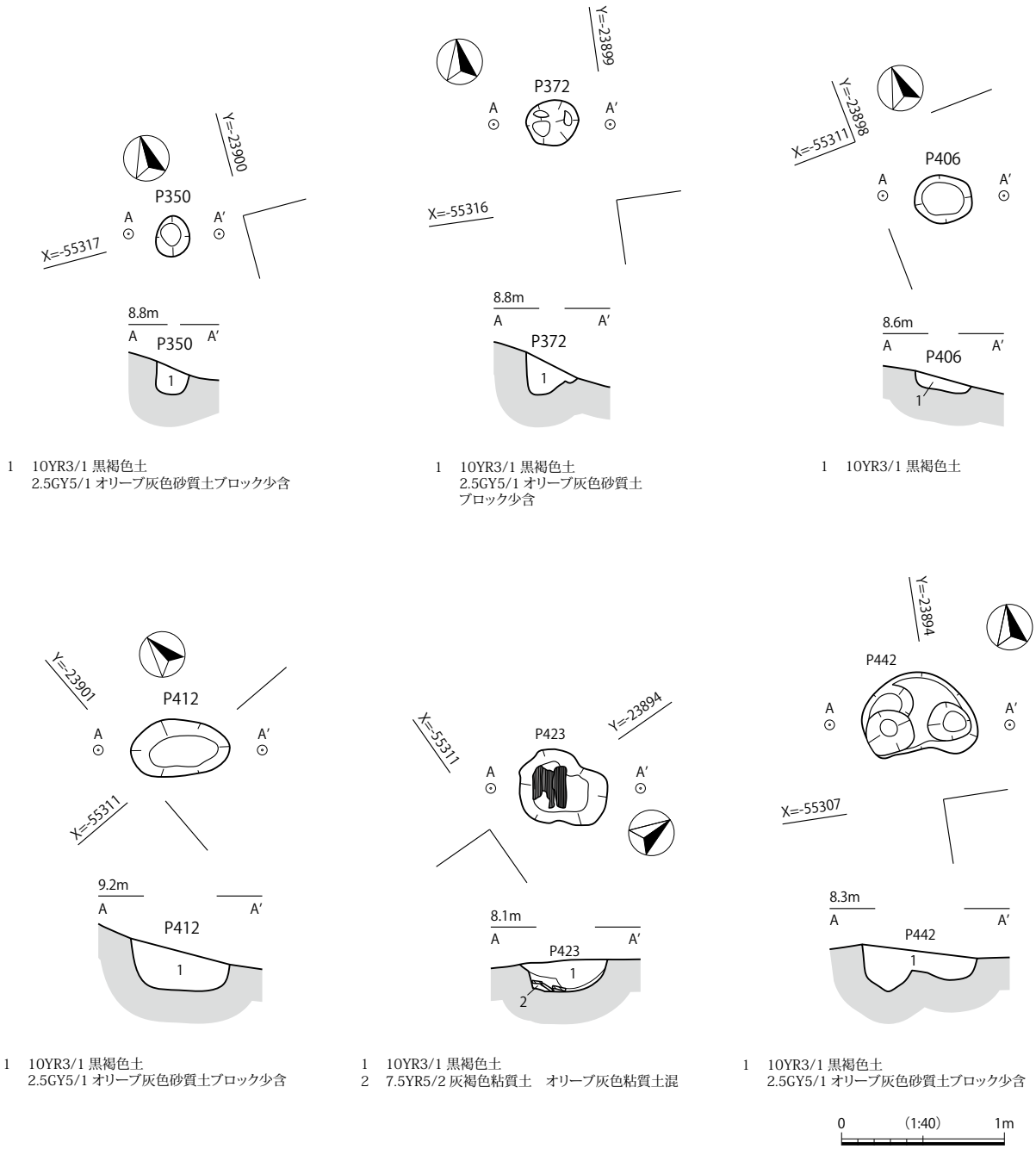


第101図 第4遺構面ピット出土遺物(2)

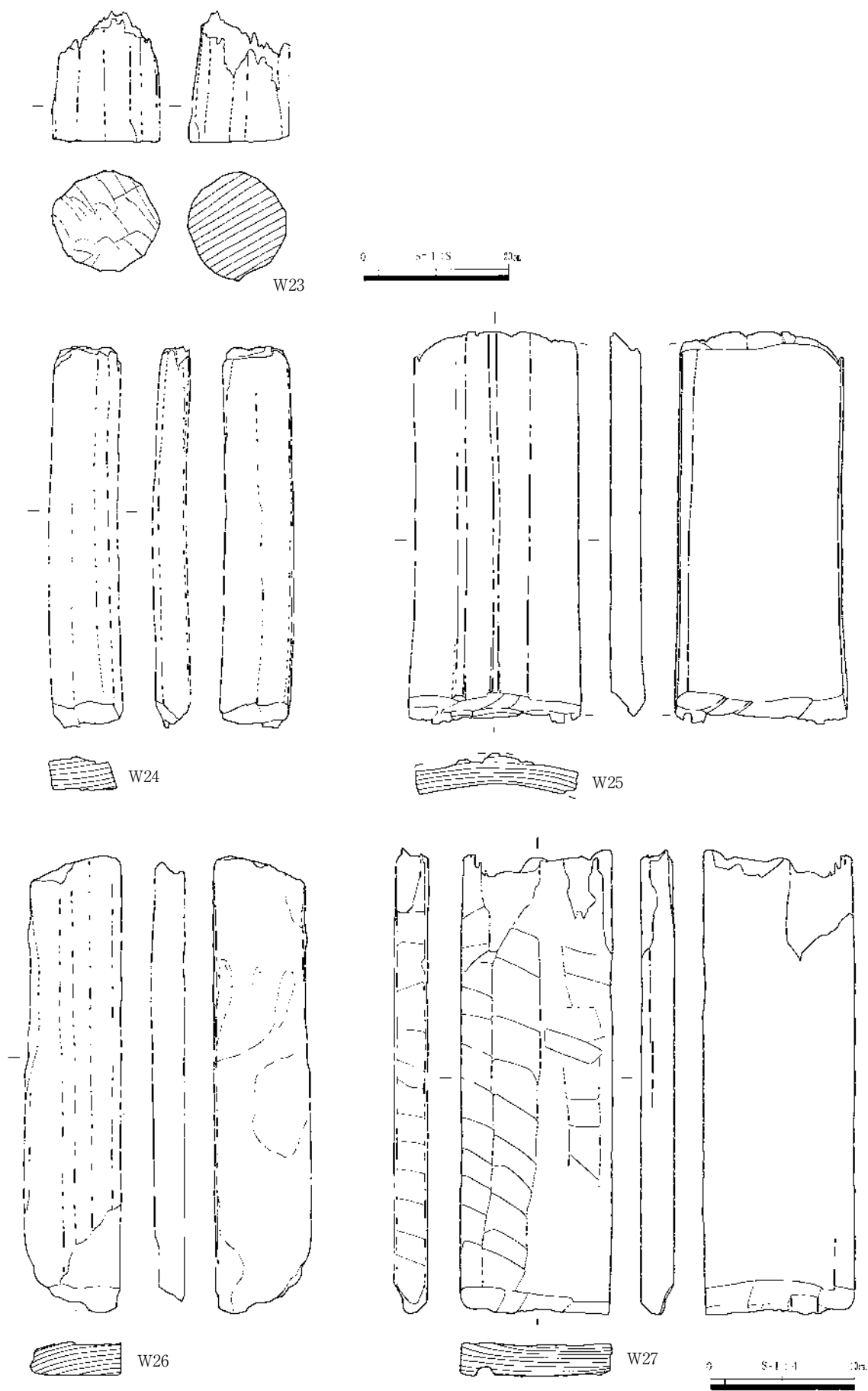
第4章 4～6区の調査成果



第102図 第5遺構面ピット平面・断面図(1)



第103図 第5遺構面ピット平面・断面図(2)及び出土遺物(1)

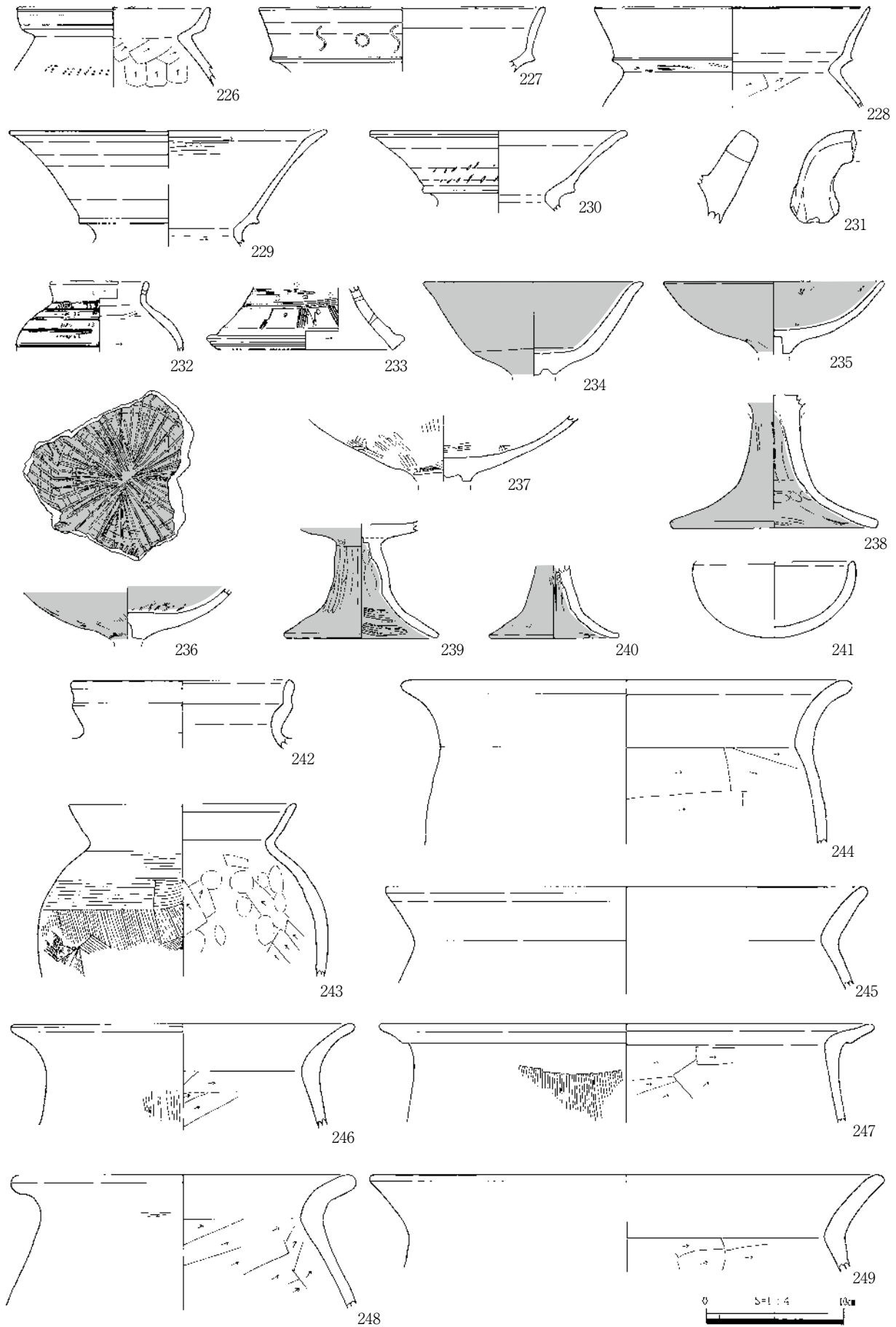


第104図 第5遺構面ピット出土遺物(2)

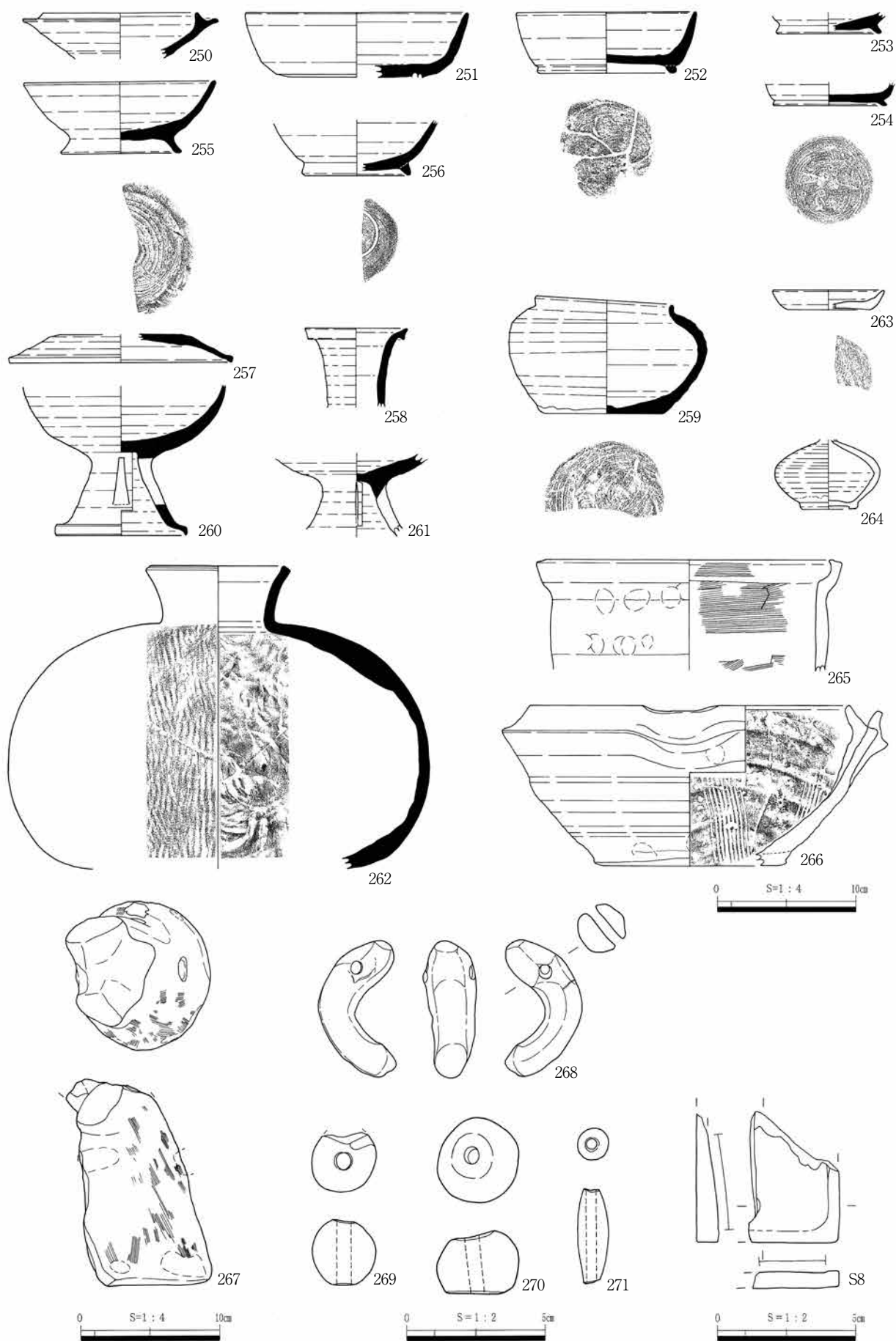
第9節 6-1・4区(丘陵裾部) 遺構に伴わない遺物

(1) 第I層出土遺物(第105～107図、表20・21・30・54・55、PL.52～59・62・64・75・76)

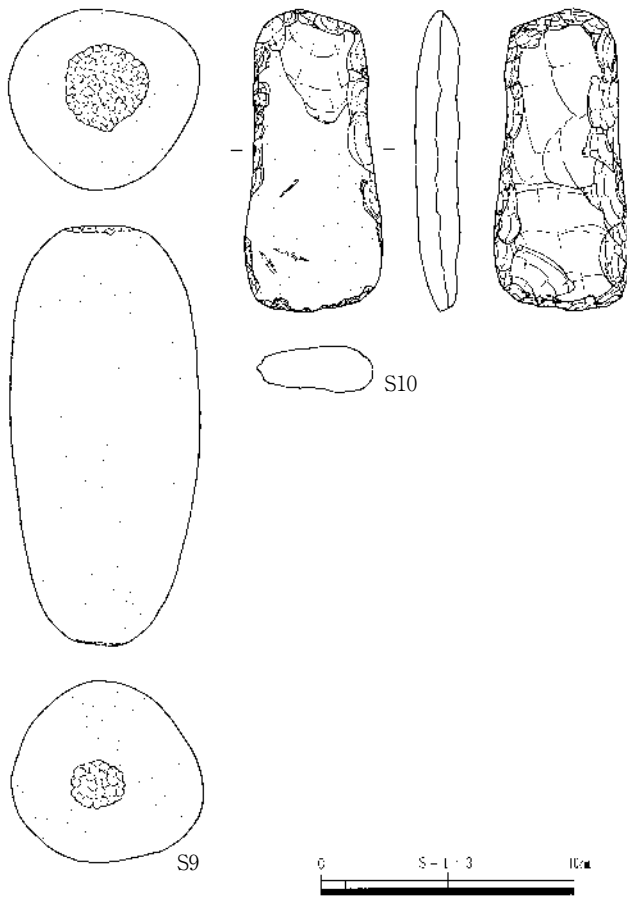
第I層からは、弥生時代から中世に至る遺物が出土しているが、古墳時代及び古代の遺物が目立っている。弥生土器の甕226は外傾した口縁に5条の平行沈線がめぐり、肩部に貝殻腹縁による刺突文を施している。後期中葉と考えられる。227と228は弥生時代終末期の甕である。外傾した口縁部の端部はいずれも丸みを帯びており、口縁下端の稜は高い。227は口縁部にS字文や円文を交互に施文している。229と230は弥生時代終末期の鼓形器台であり、受け部が外反して開くことで共通しているが、229は端部が先細りとなるのに対して、230はやや厚く丸みを帯び、受け部下半に2列の刺突文がめぐっている。231は水差形土器の把手であろうか。232は弥生土器の小型装飾壺であり、口頸部に2箇所の穿孔が認められる。体部には2条単位の平行沈線が多段化して、その間隙に半截竹管工具による爪形文が施文される。233は弥生土器台付鉢の脚部であり、脚裾に凹線文2条がめぐり、脚部が5条1組の平行沈線によって縦横位に区画され、その間隙に円孔が穿たれている。類似品は第IV-5層から出土した542でも認められる。後期前葉のものと考えられる。234～243は古墳時代の土師器をまとめている。234～237は高坏坏部であり、234は坏部下部に稜をもち、外反して立ち上がるが、235は湾曲しながら立ち上がっている。235と236は内面に放射状のミガキを残し、内外面赤色塗彩がみられる。237も235に近い形態をもつ。234が天神川編年Ⅶ期、235と236は天神川編年Ⅲ期頃に比定されようか。238～240は高坏脚部であり、いずれも脚柱部から脚裾にかけて「ハ」字状に開き、内外面赤色塗彩がなされる。241はボール形状をした埴であり、器壁が厚い。天神川編年Ⅹ期に比定されよう。242は複合口縁の痕跡を留めた甕の口縁部である。243は単純口縁で球胴化した体部をもつ甕であり、外面は丁寧なハケ、内面はヘラケズリや指頭圧痕が明瞭に残り、器壁は厚い。天神川編年Ⅴ期に比定されよう。244～249は口頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部が大きく外反する土師器甕である。245と248のように体部が大きく張り、最大径となるものと、244、246及び247のように長胴化して口縁部が最大径となるものが認められる。これらは古墳時代から古代に帰属しよう。第106図250～262は須恵器をまとめている。250は坏身であり、体部が大きく開き、かえりが内側に強く屈曲する。7世紀後半の所産であろう。251～256は高台付坏である。251、252及び254は体部が外傾しながら直線的に立ち上がり、高台は底部周縁よりやや内側で接合され、252と254は底面は回転糸切り痕を残す。7世紀末から8世紀前半に比定されよう。253、255及び256は体部が湾曲しながら立ち上がり、高台が高く踏ん張っている。底面はナデ及び回転ヘラ切り痕がみられる。以上の特徴から7世紀後半と考えられる。257は蓋である。器高が低く天井肩部をわずかに押さえ、端部が直線的に屈曲する。7世紀末から8世紀前半の特徴を示す。260と261は高坏であり、脚部に縦長台形状の透かし孔がみられ、脚裾端部は直線的に下方へ折れ曲がる。7世紀中頃から後半に比定されよう。258は長頸壺の口縁部で、口縁端部が下方へ伸びて面をなす。7世紀末から8世紀前葉の特徴を示す。259は短頸壺で、器高が低く肩部が大きく張り、底面に回転糸切り痕を残す。262は横瓶で、外面に平行タタキ、内面に青海波状当て具痕を残す。263は土師器小皿であり、器高が低く、体部が外傾する。底面に回転糸切り痕を残す。265は瓦質土器の鍋で、口縁が受け口なり、体部が直線的で深い。266は備前焼播鉢で、口縁部が「く」字状に内折し、体部がわずかながら湾曲して立ち上がり、播目は9本単位である。15世紀中頃から16世紀初頭の特徴を示す。264は19世紀以降の仏花瓶か。267は土製支脚である。甕を受ける二股



第105図 6区丘陵裾部第I層出土遺物(1)



第106図 6区丘陵裾部第I層出土遺物(2)



第107図 6区丘陵裾部第I層出土遺物(3)

状の突起は欠損しているが、体部から底部に向かって太くなり、背面上部に径2cmの窪みが認められており、器面はハケ調整、指頭圧痕が残る。268は土製勾玉である。上方に径0.5cmの貫通孔があり、器面は面取りを行ってナデで仕上げている。269と270は土玉であり、前者は球形であるが、後者は上下面に平坦面を有した円柱状となっている。271は紡錘形の土錘である。S8は最大長4.7cmの硯の角部である。S9は楕円礫を素材とした安山岩製の敲石であり、上下面に敲打痕を残す。S10は安山岩製の石鋏であり、表面は自然面を残し、両側縁に調整加工を行って撥形に成形している。

状の突起は欠損しているが、体部から底部に向かって太くなり、背面上部に径2cmの窪みが認められており、器面はハケ調整、指頭圧痕が残る。268は土製勾玉である。上方に径0.5cmの貫通孔があり、器面は面取りを行ってナデで仕上げている。269と270は土玉であり、前者は球形であるが、後者は上下面に平坦面を有した円柱状となっている。271は紡錘形の土錘である。S8は最大長4.7cmの硯の角部である。S9は楕円礫を素材とした安山岩製の敲石であり、上下面に敲打痕を残す。S10は安山岩製の石鋏であり、表面は自然面を残し、両側縁に調整加工を行って撥形に成形している。

(2) 第II～IV-1層出土遺物(第108図、表21・22・54、PL.52～57)

第II～IV-1層出土遺物は、数量は少なく弥生時代から古代の遺物が散見される。272は弥生土器の器台、274は鼓形器台である。272は受け部に3条の平行沈線がめぐり、外面調整はタテミガキである。274は器壁が厚く、高坏273は口

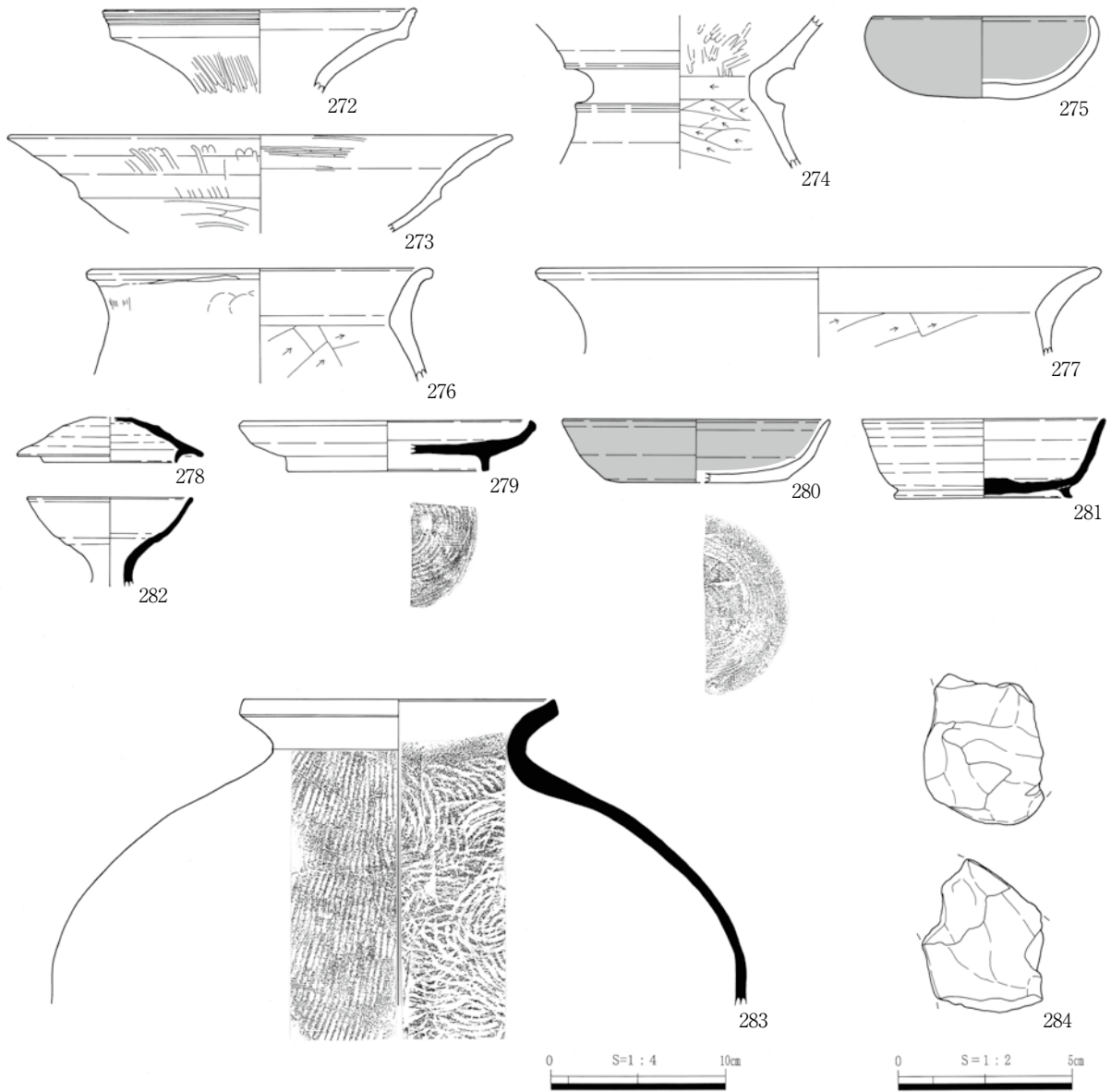
縁下に稜をもって大きく開く坏部となっている。受け部下端と脚台部上端に稜を形成している。272は後期中葉、274は終末期の前半頃に帰属しよう。275は内外面赤色塗彩がなされた土師器碗である。天神川編年X期に比定されようか。276と277は土師器甕である。口頸部で「く」字状に屈曲して口縁部が外反するが、276は体部が張るのに対して、277は直胴状となる。土師器坏280は体部から口縁部に向かって外傾し、底面に回転糸切り痕を残している。278、279及び281～283は須恵器である。278は坏蓋で、かえりが下方へ大きく伸びる。7世紀後半に比定されよう。高台付皿279は、体部が外傾し、高台が底面外縁より内側に貼付される。底面は回転糸切りである。281は高台付坏で、体部は外傾しながら直線的に立ち上がる。底面はナデを施す。以上は、7世紀末から8世紀前葉の特徴を示す。282は臚で逆「ハ」字状に口縁部が開く。7世紀中頃に比定される。283は体部中位に最大径をもつ甕。口縁から頸部はナデ、体部外面は平行タタキ、内面は青海波状当て具痕を残す。284は土製支脚であり、底面及び甕を支える突起が欠損している。外面調整は粗いナデである。

(3) 第IV-2層出土遺物(第109・110図、表22・55、PL.56・61・76)

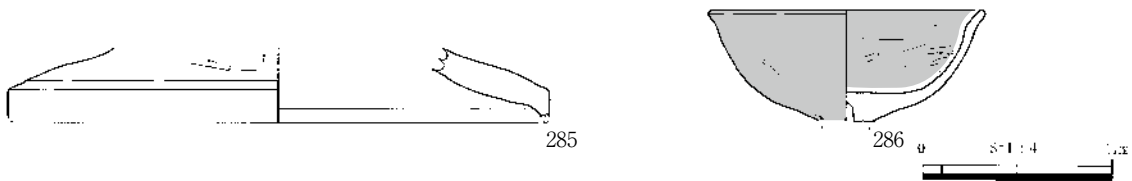
第IV-2層出土遺物を4点掲載する。285は低い器高を持つ弥生土器高坏の脚部である。286は土師器高坏坏部で、体部は湾曲し、口縁端部がわずかに外反する。内外面に赤色塗彩がなされる。天神川編年III期に比定されよう。S11とS12は砥石である。S11は砥面2面を有し、線状痕が明瞭に残る。S12は軟質石材を用いており、側面を削り込む痕跡が並列している状況が確認できる。

(4) 第IV-3層出土遺物(第111～114図、表22～24・55・60、PL.54～64・76・79)

第IV-3層からは、弥生土器を主体として古墳時代と古代の遺物が混じる状況である。287～308は

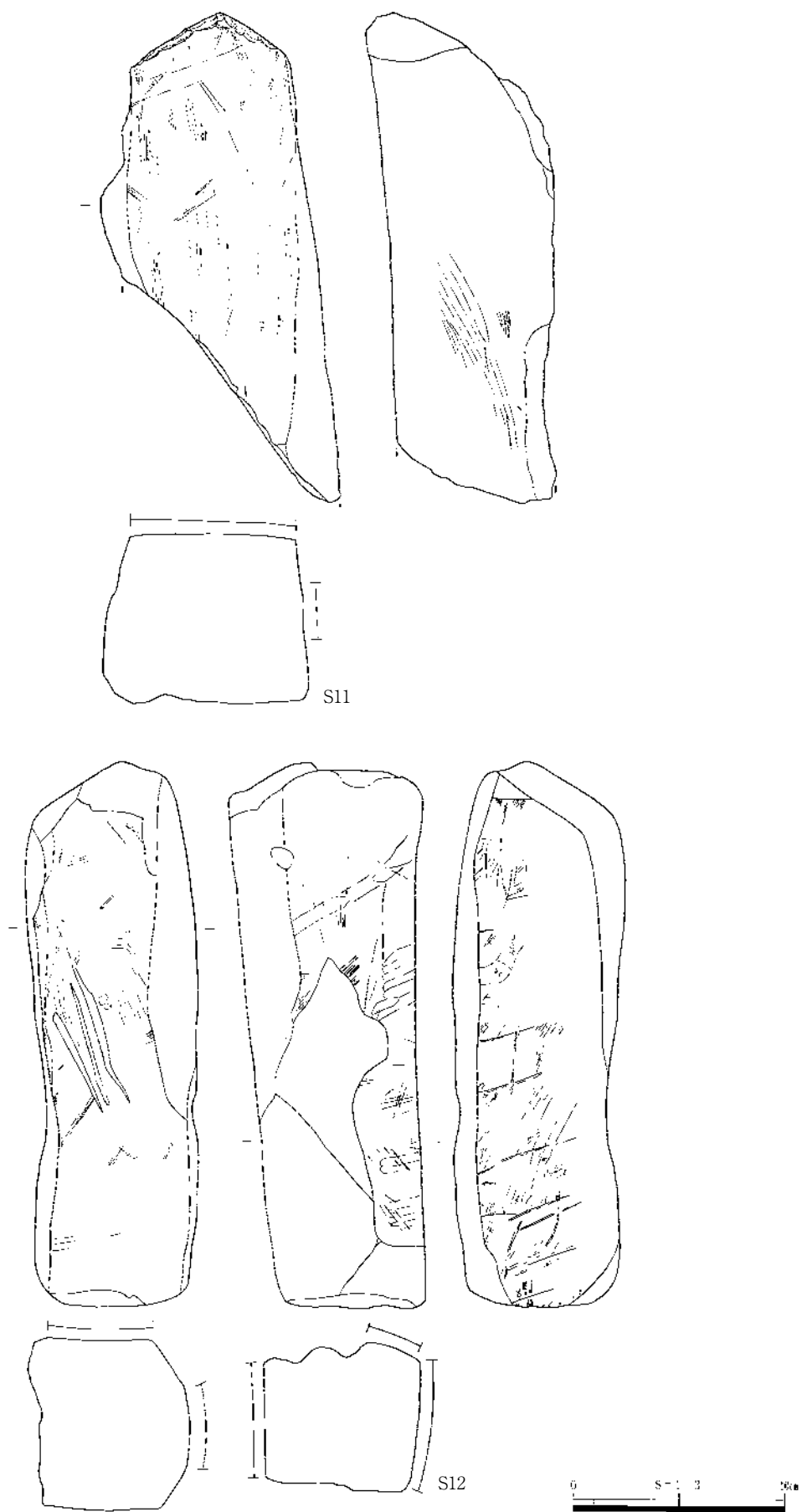


第108図 6区丘陵裾部第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ-1層出土遺物



第109図 6区丘陵裾部第Ⅳ-2層出土遺物(1)

弥生土器の甕と壺をまとめている。甕287と288は口縁部の端部が上下に拡張して面を形成し、3～10条の凹線文と平行沈線を施文している。287は体部上半の調整がハケで、ケズリが及んでいない。288は大型の壺口縁部で、円形浮文が貼付される。289～293は複合口縁甕で、口縁部がやや外傾するか直立する。口縁帯は短く、2～9条の凹線と平行沈線がめぐっている。後期中葉に相当する。296～299は後期後葉の甕である。口縁部に多条平行沈線が施文され、肩部から体部上半に平行沈線、波状文及び貝殻腹縁による刺突文が施文される。302は口縁部をヨコナデする壺であり、口縁下端を外側へ摘まみ出すが、器壁が厚いことから後期後葉に該当するものと思われる。300、301、303～305、307及び308は終末期の甕である。300と303は口縁部の多条平行沈線をナデ消し、300は肩部に波

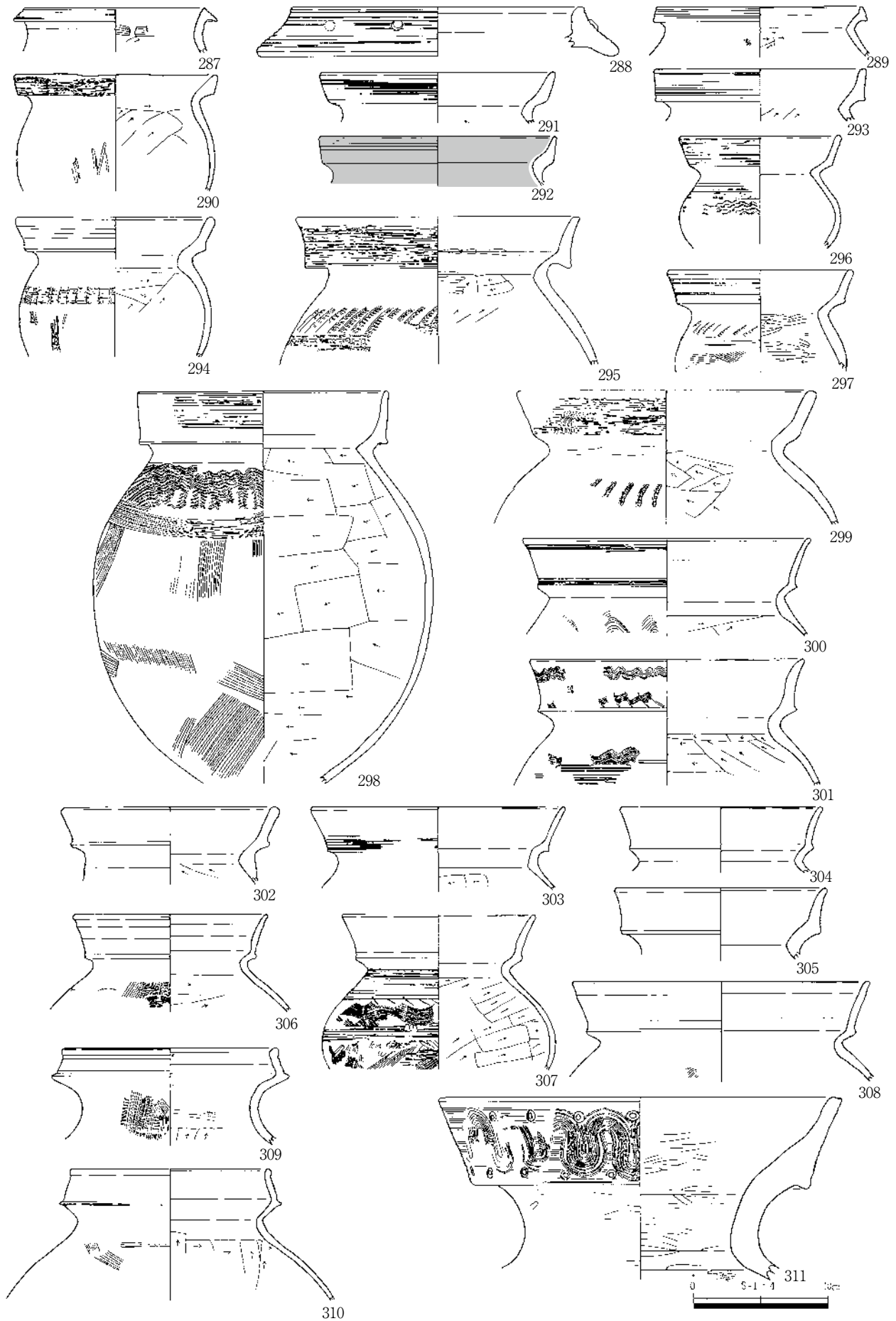


第110図 6区丘陵裾部第IV-2層出土遺物(2)

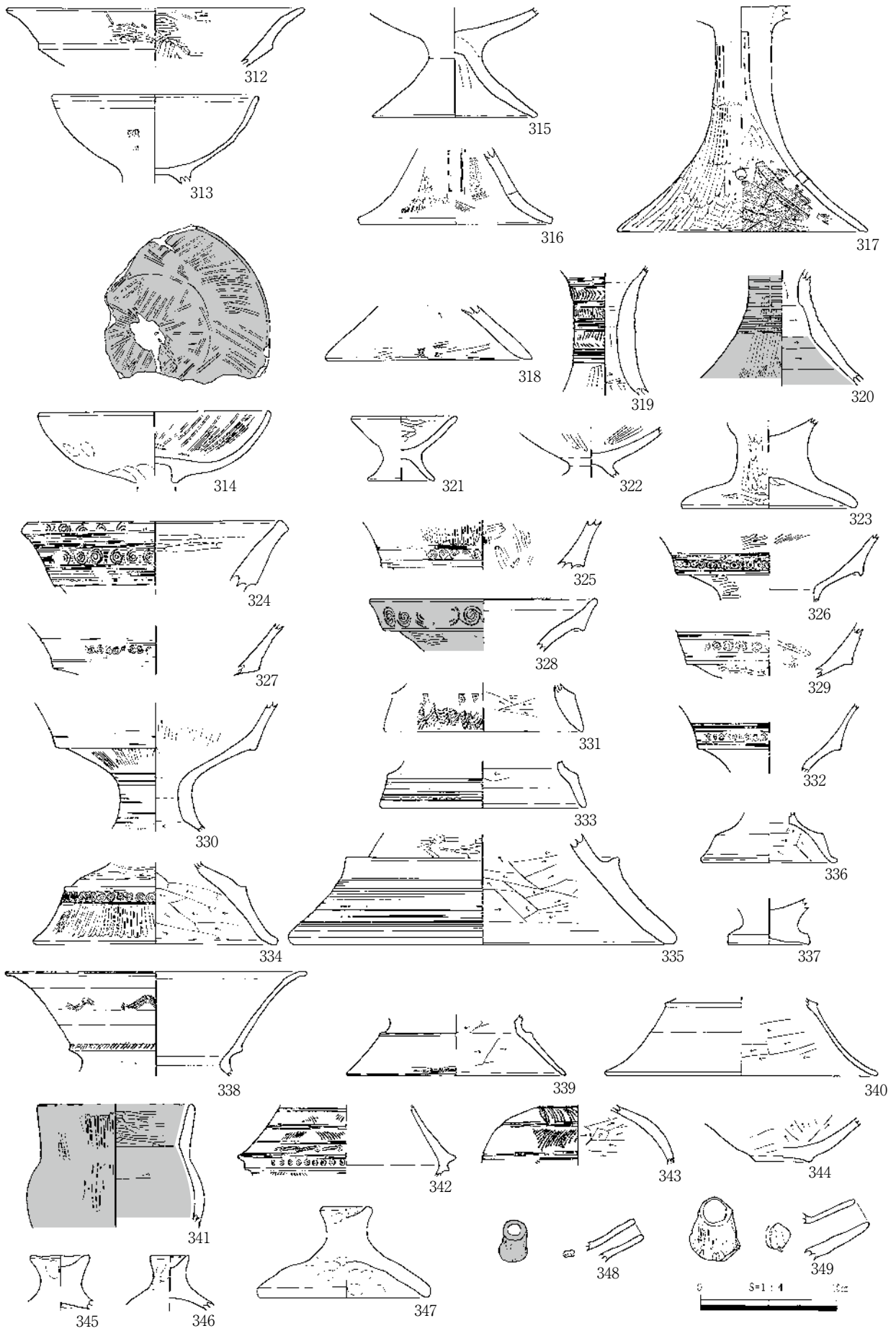
状文がめぐる。301は口縁部がやや反り返り、口縁部と肩部に波状文を施す。304と308は口縁部がヨコナデ、口縁下端に稜を形成する。306は口縁部を板状工具によってナデ付け、端部が面を形成する。古墳時代前期前葉の特徴を示す。309と310は受け口状の口縁をもつ古墳時代前期の壺である。311は弥生土器の壺口縁部である。拡張された口縁部は外傾し、口縁帯の外面には平行沈線上に波状文をめぐらせ、波状文の上下端に竹管文を刺突している。本資料は東伯耆地域でみられる大型の鼓形器台の系統かと考えたが、下端部が外側へ大きく反ることから壺と判断した。弥生時代後期後葉に相当するものと思われる。312～323は高坏と低脚坏をまとめている。312は坏部下端に稜をもち口縁部が大きく開き、内外面丁寧なミガキを施している。315は脚部が低く「ハ」字状に開いている。317は脚部が縦方向のミガキを施し、円形透かし孔を持つ。319と320は脚柱部で、319は3～4本単位の平行沈線と凹線間に羽状文を施文する。320は9条の平行沈線をめぐらせ、内外面赤色塗彩がなされている。321と322は低脚坏である。313と314は湾曲しながら外傾する坏部をもつ土師器高坏であり、後者は内面に放射状のミガキを施している。天神川編年Ⅲ期頃に比定されよう。324～336と338～340は器台である。324は器台受け部である。拡張された口縁部は外傾し、端部には竹管文を刺突しており、口縁帯の外面には平行沈線上に1列の竹管文をめぐらせている。東伯耆地域でみられる大型の鼓形器台の系統であろう。325～327、329、330及び332は器台の受け部である。325～327、329及び332は受け部下半に2～5条の平行沈線をめぐらせ、その間隙に渦文を施す。328は口縁帯に連続渦文が施文されている。器台330の脚柱部には3～4条単位の平行沈線が3段めぐっている。331と333～335は脚台部で、331は波状文、333と335は平行沈線をめぐらす。334の脚台部は平行沈線間に渦文がめぐり、丁寧なタテミガキを施している。以上は、弥生時代後期中葉から後葉に相当しよう。337は小型の台付甕か壺の脚部であろう。338～340は弥生時代終末期の鼓形器台である。338は受け部に波状文がめぐり、脚柱部との境の稜には細かい刻みを施す。339と340は脚台部であり、339は脚裾が直線的、340は外側に反り返る。341は内外面に赤色塗彩がなされた無頸壺である。342と343は台付装飾壺である。342は体部がソロバン玉状を呈し、平行沈線間に羽状文、S字文及び渦文を充填する。343は球状の体部に平行沈線をめぐらせ、その間隙に貝殻腹縁による矢羽文が施文される。これらは、弥生時代後期後葉に相当するものと思われる。344は高台付甕か壺の底部である。345～347は弥生土器の蓋であり、いずれもつまみ頂部が凹み、器面調整に指頭圧痕が残る。348と349は注口土器の注口部である。第113図350～353は須恵器坏、壺及び高坏、354～357は土師器甕である。350は高台付坏であり、高台が底部外周よりやや内側に貼付される。8世紀中頃に比定される。351は長頸壺の口頸部であり、やや内湾しながら立ち上がる。7世紀後半頃に相当しようか。352は三角状透かし孔を有する高坏脚部である。7世紀中葉から後葉頃に相当するものと思われる。353はやや大型の須恵器の坏の可能性はある。奈良、平安時代の所産であろうか。354は複合口縁を有する甕であり、口縁部は外傾して下端の稜は低くなり、体部は球胴状を呈する。天神川編年Ⅳ～Ⅴ期に比定されよう。355～357は口頸部が「く」字状に屈曲して口縁が大きく開いており、体部があまり張らずに長胴化している。S13は扁平な円礫を用いた安山岩製の敲石である。上面及び周縁部に密に敲打痕が残る。W28は用途不明の板状木製品であるが、湾曲することから桶材の可能性もある。

(5) 第Ⅳ-2・3層出土遺物(第115～117・125図、表24～26・30・54・55、PL.53～62・64・71)

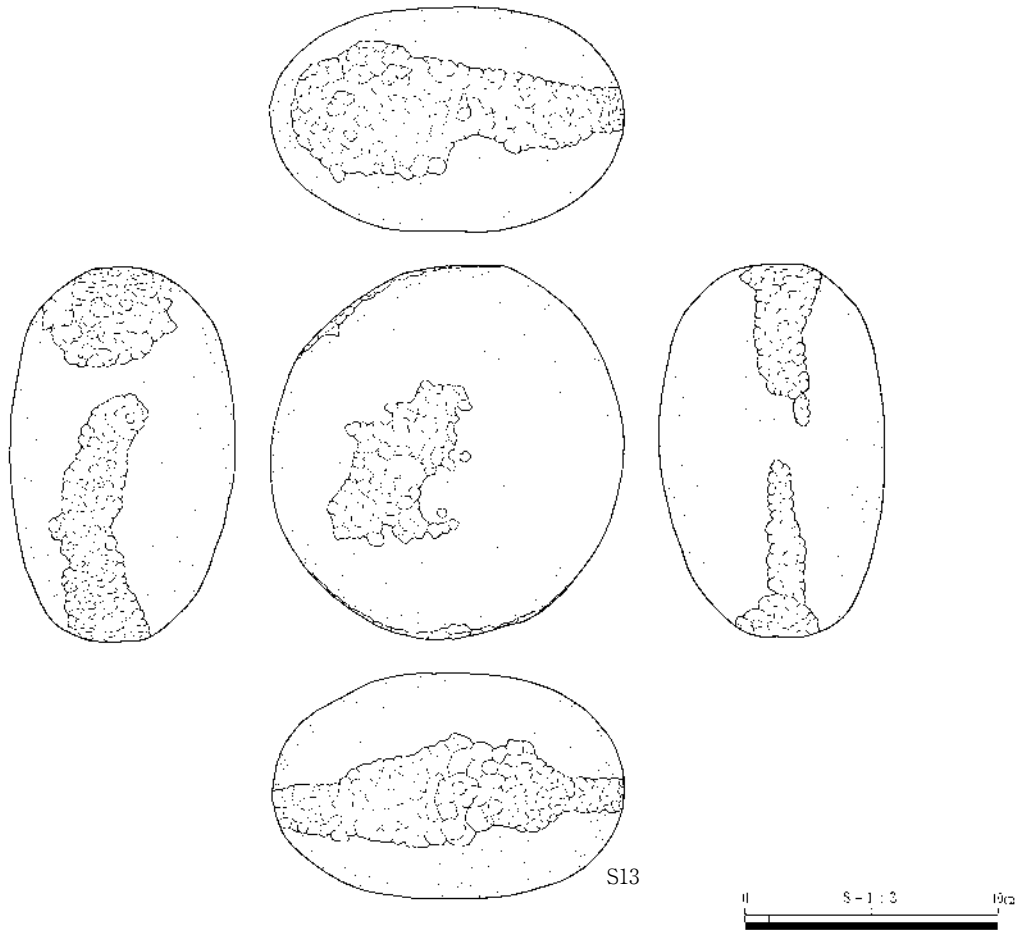
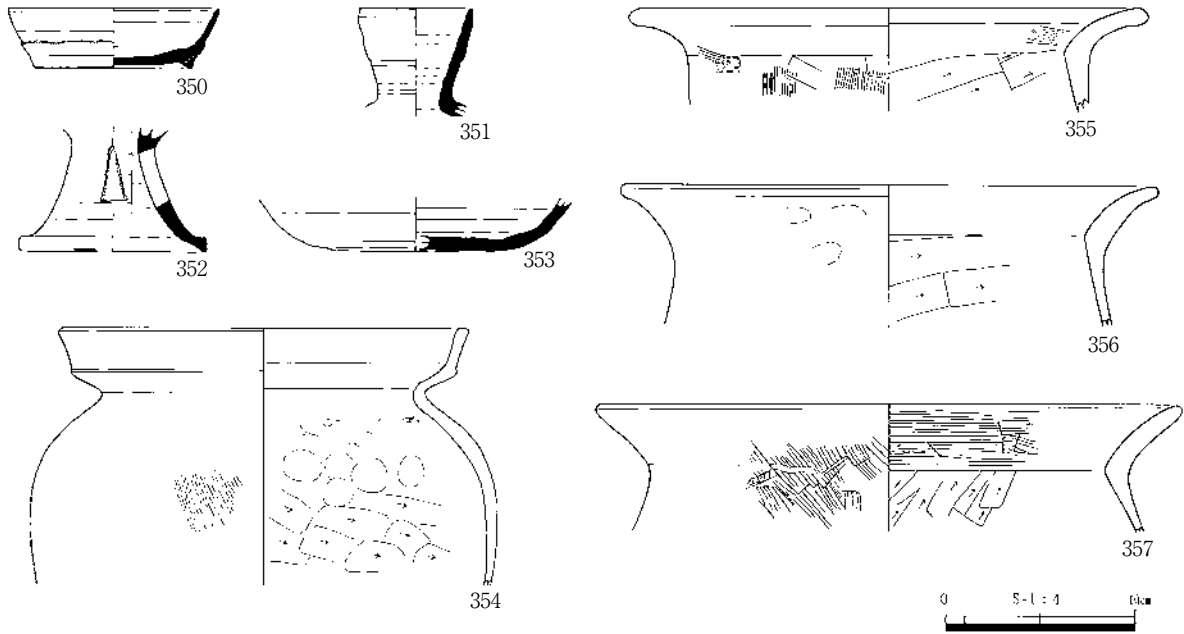
第Ⅳ-2、Ⅳ-3層出土遺物は調査時に両層にまたがって取り上げた遺物であり、弥生時代を主として古墳時代から中世の遺物が続く。358は外反した口縁端部が幅狭く凹線文が1条めぐっており、肩部



第111図 6区丘陵裾部第Ⅳ-3層出土遺物(1)

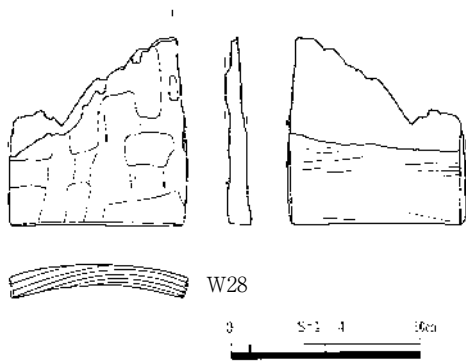


第112図 6区丘陵裾部第IV-3層出土遺物(2)



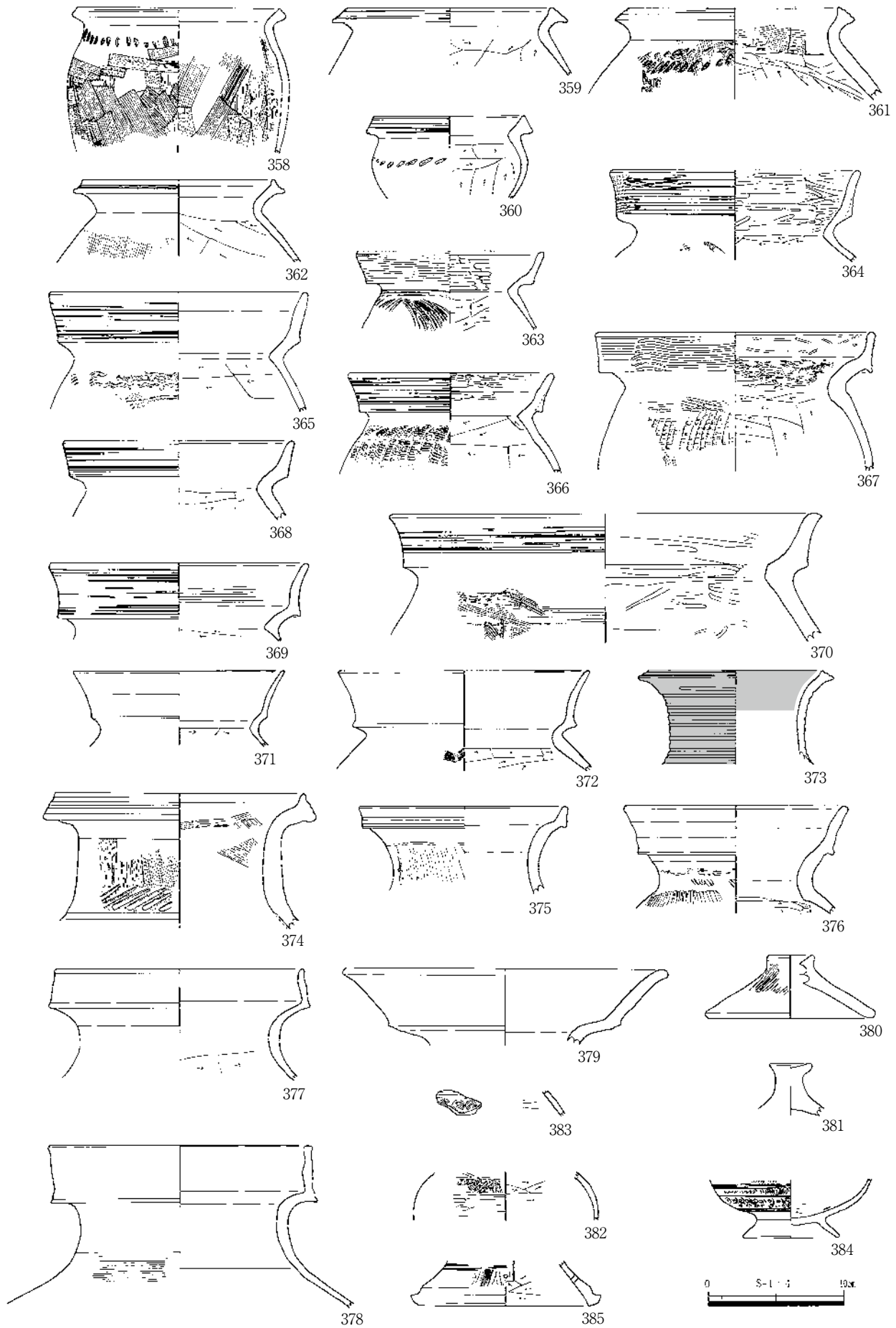
第113図 6区丘陵裾部第Ⅳ-3層出土遺物(3)

にはハケ状工具による刺突文を施す甕である。体部内面上半はハケが残ることから弥生時代中期後葉に位置付けられよう。359、361～362は口縁部の端部が上下に拡張して面を形成し、3条の凹線文を施している甕である。361は頸部内面にハケを残す。以上は弥生時代後期前葉に相当しよう。360は複合口縁の小型甕で、口縁部に9条の平行沈線がめぐっており、体部にはヘラ状工具の刻みが施される。363～370は口縁部に多条平行沈線が施文される甕であり、肩部に平行沈線や波状文、貝殻腹縁によ

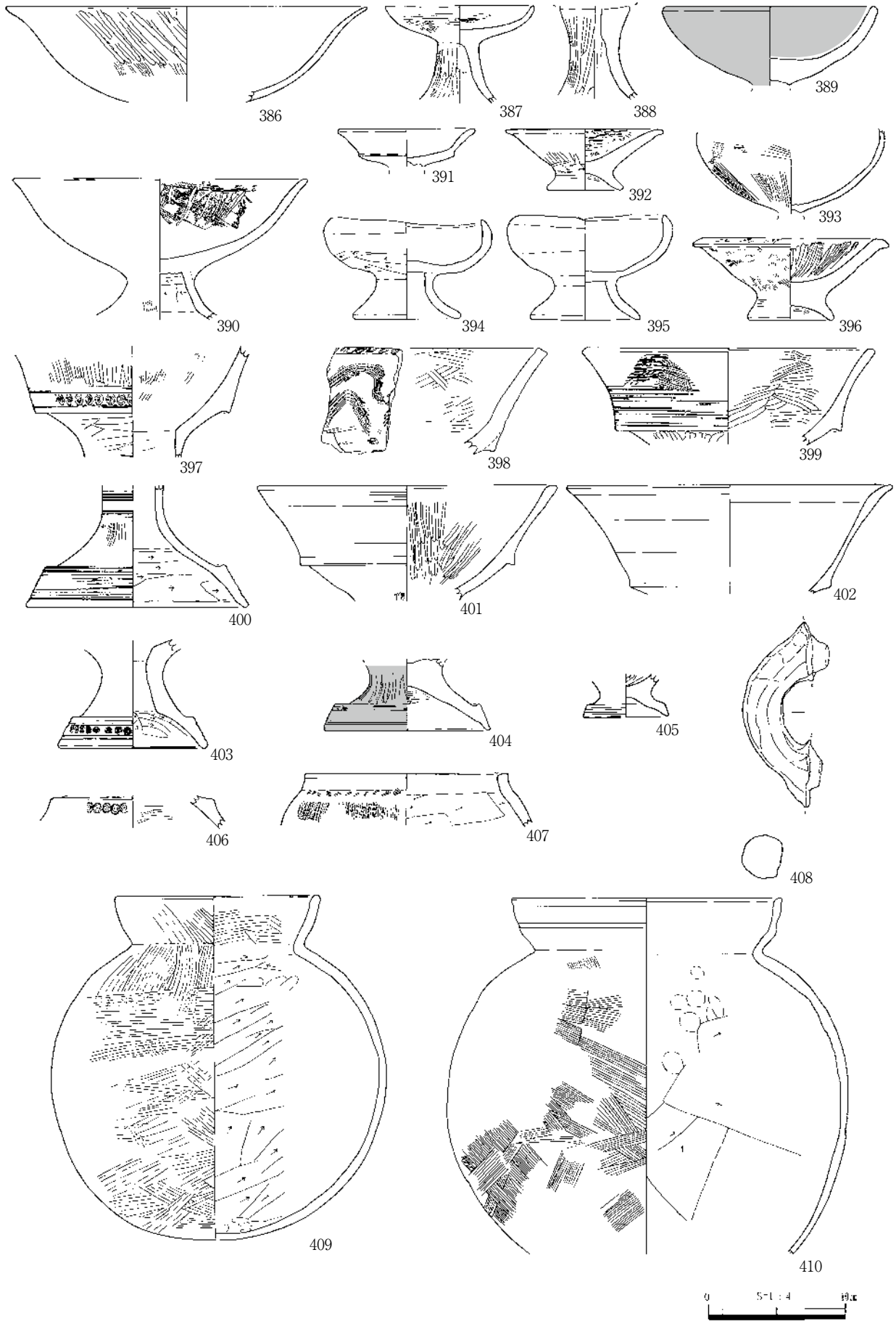


第114図 6区丘陵裾部第IV-3層出土遺物(4)

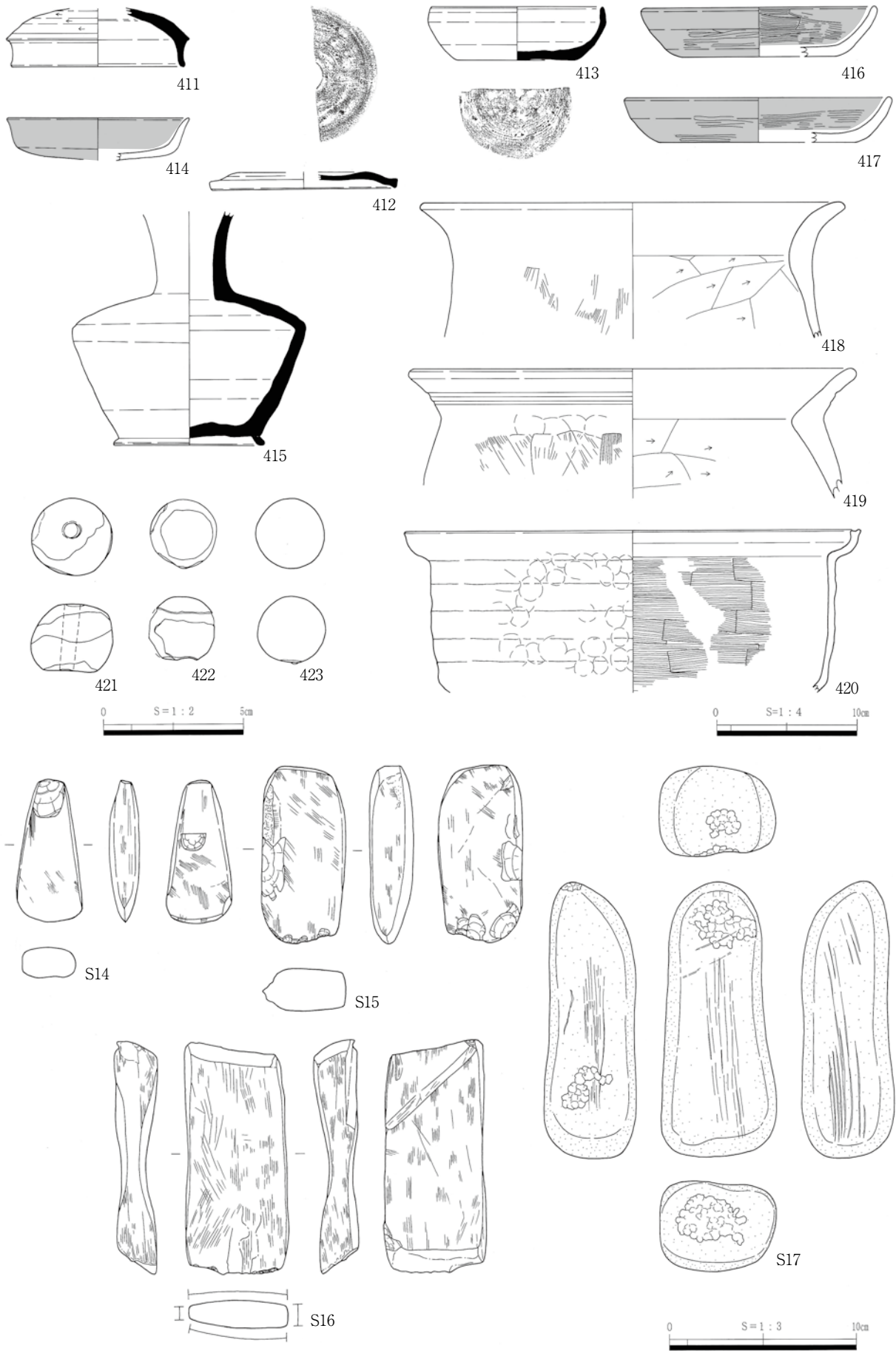
の凹線文がめぐり、頸部にハケ状工具による刺突文、肩部に凹線文が施文される。以上は弥生時代中期後葉に相当しよう。375は直立した口縁部に2条の凹線文がめぐり、頸部にタテミガキが施される。弥生時代後期前葉～中葉に相当しようか。376～378は古墳時代の土師器壺である。376は口縁部が外傾して、板状工具によるナデが施される。377・378は受け口状口縁を持ち、肩部が大きく張る。379は外反する複合口縁を持っている。以上は、天神川編年Ⅱ～Ⅲ期に比定されよう。380と381は弥生土器の蓋である。381はつまみ部と天井部の間が長い。382～384は台付装飾壺である。382と384は体部が湾曲し、連続渦文や渦文が平行沈線間に充填される。383はソロバン玉状の器形をなす破片である。385は台付鉢の脚部であり、平行沈線による区画内に穿孔がなされる。第IV-5層出土542に類例がある。386～396は弥生土器と土師器の高坏及び低脚坏である。386と390は器壁が薄く、坏部下方が緩やかに湾曲して口縁が外反する。弥生時代終末期から古墳時代前期前葉に位置付けられようか。387は坏部の器高が低く、湾曲しながら外傾して立ち上がる。391は坏部下方に稜を形成し、口縁部が外反する小型高坏になろうか。389と393は湾曲した坏部を有する高坏である。389は器面の内外面に赤色塗彩が施される。394と395は内湾した坏部をもつ高坏で、器面はヘラ状工具による粗いナデが施される。天神川編年編年Ⅹ期に比定されよう。392と396は低脚坏と想定される。坏部と脚部内外面は丁寧にミガキが施される。脚部が「ハ」字状に開き、底径も大きいため低脚坏と判断したが、蓋の可能性も否定しない。397～403、406は器台である。397、403及び406は受け部と脚台部で平行沈線間に渦文を施文する。399、400は多条平行沈線を受け部と脚台部にめぐっている。以上は弥生時代後期後葉に相当しよう。401と402は終末期の鼓形器台であろう。404と405は台付甕か壺の脚台部で脚裾に平行沈線を施文する。後期中葉から後葉に比定されよう。407は口縁下端に刺突を施す無頸壺である。408は甑形土器の把手。409と410は土師器の甕である。409は口縁部がやや膨らみをもって外傾し、体部は球形である。410は複合口縁が退化しながらもその痕跡を残す。天神川編年Ⅴ期に相当しようか。411は須恵器坏蓋であり、天井部と天井端部の境界に明瞭な稜を有し、口縁が直立して立ち上がる。陶邑編年MT15型式に比定されよう。412は須恵器坏蓋で、器高が低く、天井部周縁がわずかに凹む。8世紀中頃から後葉に相当しよう。413は須恵器坏であり、体部がやや内湾気味に立ち上り、底部は回転糸切り痕を残す。7世紀末から8世紀と考えられる。415は肩部が鋭角的に張る須恵器長頸壺である。8世紀中頃の特徴を示す。416と417は土師器坏であり、器高が低く体部が外反する。外面にミガキを施し、内外面赤色塗彩がなされている。7世紀末から8世紀中頃に位置付けられよう。418と419は口頸部が「く」字状に屈曲して口縁部が外反する土師器甕である。420は瓦質土器の鍋である。口縁部が受け口状を呈し、体部が深く、外面には輪積痕と指頭圧痕、内面にはハケを残す。13～14世紀の所産であろう。421～423は土玉である。421は



第115図 6区丘陵裾部第IV-2・3層出土遺物(1)



第116図 6区丘陵裾部第Ⅳ-2・3層出土遺物(2)

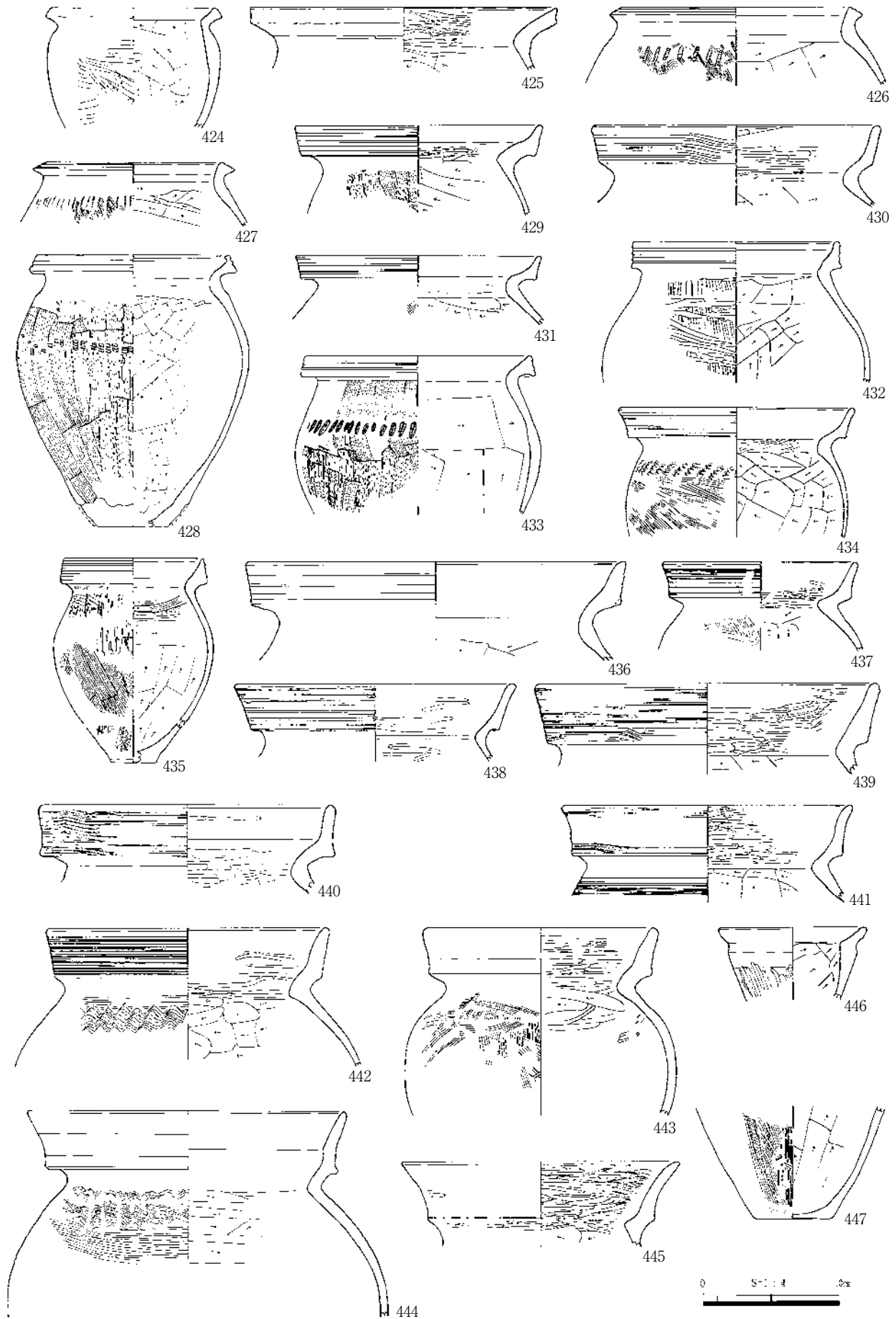


第117図 6区丘陵裾部第Ⅳ-2・3層出土遺物(3)

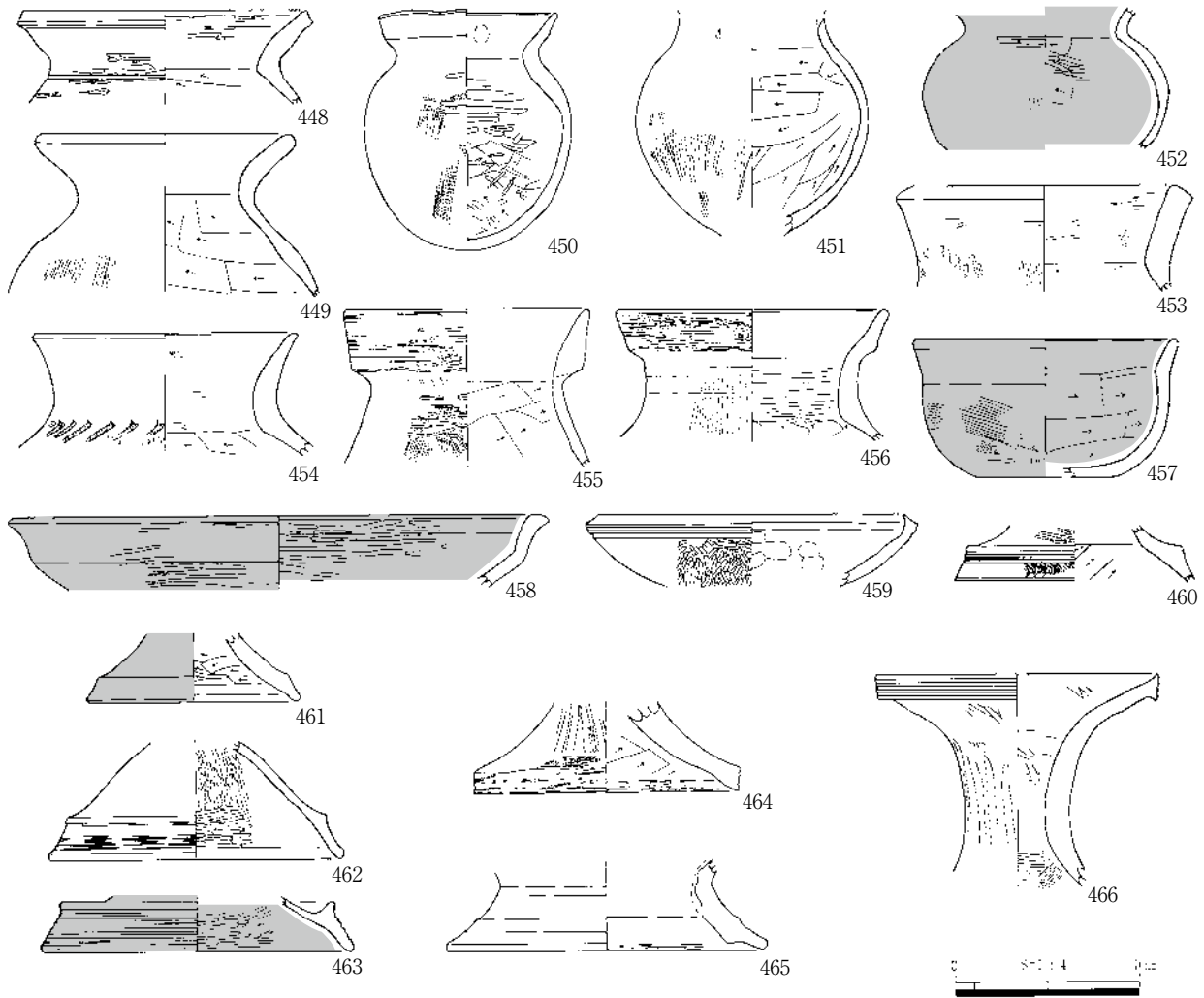
穿孔しているが、422と423は未穿孔である。S14とS15は撥形、短冊形の磨製石斧である。S16は短冊形の砥石で砥面は4箇所確認される。S17は棒状礫を素材とした敲石で、表面と両側面に線状痕が残っている。

(6) 第IV-4層出土遺物(第118～121図、表26～29・54・55・60、PL.58・61・65～70・75・76・79)

第IV-4層では弥生時代後期前葉から古墳時代前期前葉の遺物が認められる。第118～120図に土器、土製品、第121図に石器及び木製品を掲載する。甕424と425は口頸部が「く」字状に屈曲して口縁部が外反し、口縁端部をナデ付ける。口縁内面調整は424はナデ、425はミガキ、体部内面はいずれもヘラケズリが行われている。このことから、両者は後期前葉に相当すると考えられる。甕426と427は口縁端部がやや拡張して面を形成し、2条の凹線文を施している。肩部には426がハケ状工具、427が貝殻腹縁による刺突文をめぐらせている。以上は後期前葉に比定されよう。429～436は後期中葉に相当する甕をまとめている。口縁部が複合口縁となり、外傾するもの(429、434、436)、内傾するもの(428、435)、直立するもの(432)が認められる。口縁帯には2～9条の平行沈線が施文され、肩部から体部にハケ状工具による刺突文(428、433)、貝殻腹縁による刺突文(434)が施される。437～443は後期後葉に相当する甕をまとめた。口縁帯が拡張し、437～442は多条平行沈線が施文される。口縁帯は多条平行沈線がナデ消されるもの(441)や沈線が施文されずナデ調整のみ(443)などがみられる。肩部には平行沈線(441)や波状文(442)がめぐるのがめぐるものがある。444と445は口縁部にナデを施し、やや器壁が薄くなる甕で、口縁下端が外側に摘み出され稜を形成しており、444は肩部には波状文が施文されている。いずれも終末期前半のものと考えられる。446は口縁が外反し、体部が底部から直線的に立ち上がる小型甕である。447は甕か壺の底部と考えられる。448～456は壺をまとめている。448～454は単純口縁の壺であり、448と453は口縁端部をナデてわずかに凹ませている。454は肩部にハケ状工具の刺突文がめぐらされる。455と456は複合口縁壺であり、口縁帯に多条平行沈線がめぐっている。以上は、後期前葉から後葉に相当しよう。457は内外面赤色塗彩がなされた鉢である。口縁部がわずかに外反し、体部は直線的に立ち上がる。458～464は高坏である。458は坏部の中位に稜を形成して口縁が外反し、内外面赤色塗彩がなされる。459は坏部が大きく広がり、口縁直下に2条の凹線文がめぐり、端部が内折している。460～465は高坏脚部及び台付甕か壺の脚部であり、脚裾に平行沈線や凹線文が施文されるもの(462～464)、平行沈線間に渦文が連続的に充填されるもの(460)、ナデを施すもの(461)が認められる。466は脚柱が長い器台である。受け部には3条の平行沈線がめぐっている。以上は、後期中葉から後葉に相当しよう。第120図467～482は器台である。467～470、477及び479～480は器台の受け部及び脚台部で、多条平行沈線が施文されている。471は多条平行沈線下に渦文(スタンプ文)が施文される。472～475は受け部下端に2～5条の平行沈線をめぐらせ、その間に渦文を充填している。478は器台脚柱部で、10条の凹線文が施文される。以上は、後期中葉から後葉に相当しよう。481は灰白色を呈し、481と482は器壁が薄い鼓形器台である。いずれも受け部が外反して立ち上がるが、482は受け部端部が外折している。また、受け部と脚台部中心に径1cmの焼成後穿孔がなされている。481は終末期、482は古墳時代前期前葉であろう。483～487は台付装飾壺と装飾壺をまとめている。483と487は複合口縁を有し、体部がソロバン玉状に中心部が尖る。そこに2条の突帯を設け、連続渦文を充填する。また上下下段にも細平行沈線を引いて貝殻腹縁による羽状文が施文される。484と485も同型と思われる。486は肩部が丸みを帯び、羽状文や渦文が施文される。



第118図 6区丘陵裾部Ⅳ-4層出土遺物(1)

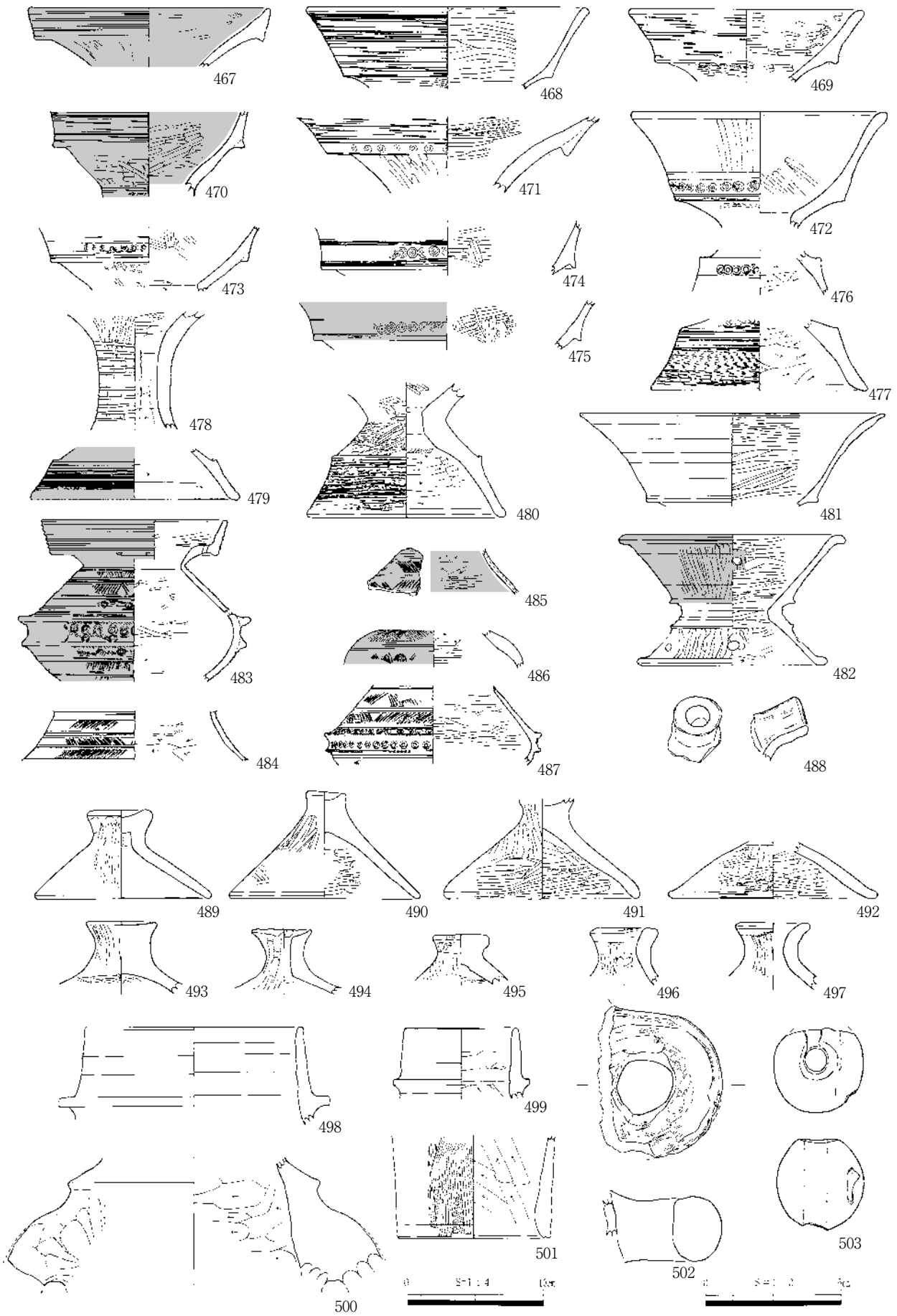


第119図 6区丘陵裾部第IV-4層出土遺物(2)

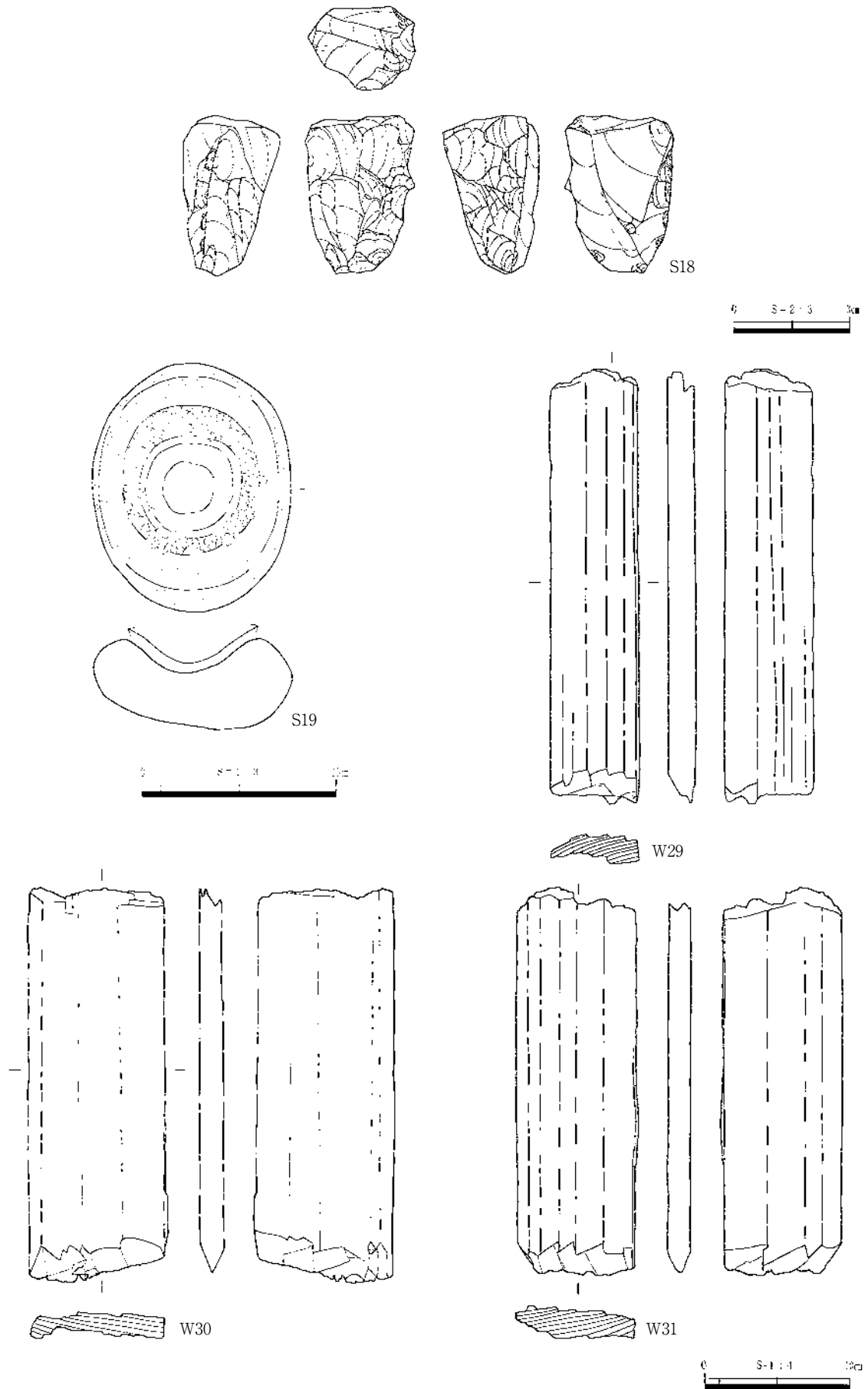
488は注口土器の注口部。489～497は蓋である。つまみ部天井が凹むもの(489～491、494)、平坦になるもの(493、495)、つまみ部から天井部にかけて貫通するもの(494、496、497)がある。498～502は甑形土器の口縁部と体部裾である。502はヘラナデ後、ハケを施す甑形土器の把手と考える。503は土玉で、1/4ほど欠損している。S18は赤瑪瑙製の剥片である。S19はデイサイト製の凹石で、中心部が使用により深く窪んでいる。W29～31は板状木製品である。器面整形がなされておらず、使用目的は不明であるが、他の類例から礎板の可能性が想定される。

(7) 第IV-5層出土遺物(第122～125図、表29～31、PL.70～74)

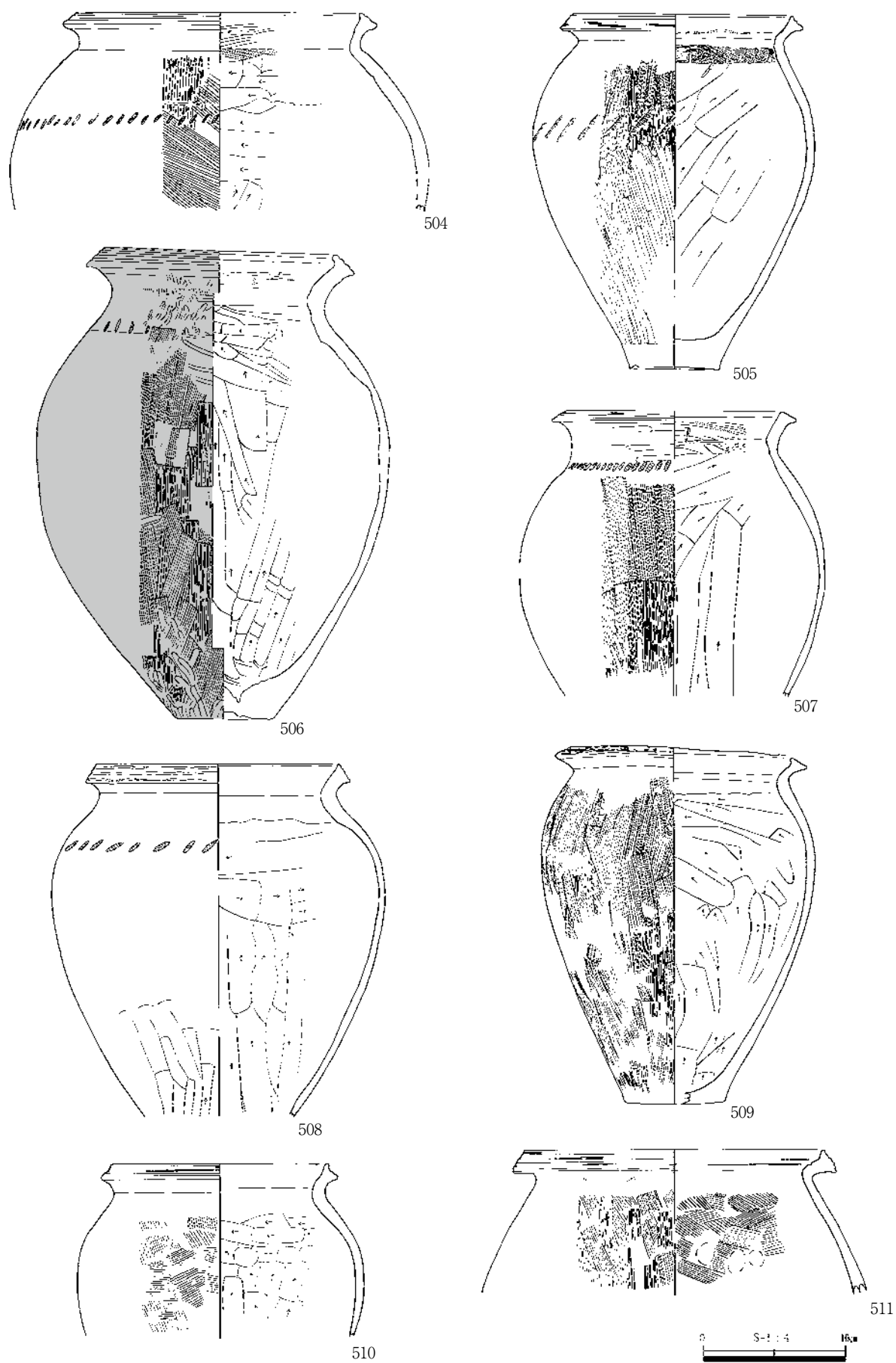
第IV-5層では弥生時代中期後葉～後期後葉の遺物が認められる。第122～123図に甕をまとめた。甕504～516は口縁端部が上下に拡張して面を形成し、2～5条の凹線文を施している。体部外面にはハケ及び体部下半にミガキを施し、内面下半はハケ及びヘラケズリ、口頸部から体部上半にハケを施す504、505及び511～513が確認できる。肩部にはハケ状工具による刺突文がめぐる504、505、507及び508がある。516は体部調整にタタキが明瞭の確認できる甕である。肩部に斜位のタタキを行い、その後ハケとミガキを施しており、体部内面の下半はヘラケズリ、上半はハケと指頭圧痕が確認される。以上は、中期後葉の特徴を示している。518と519は複合口縁化し、平行沈線を施文する後期中葉の甕である。520～522は口縁部に多条平行沈線をめぐらせる後期後葉の甕であり、521は肩部に貝殻腹縁による刺突文が施される。523は口縁部がやや反り返り、下端が外側に稜をなしている。口縁



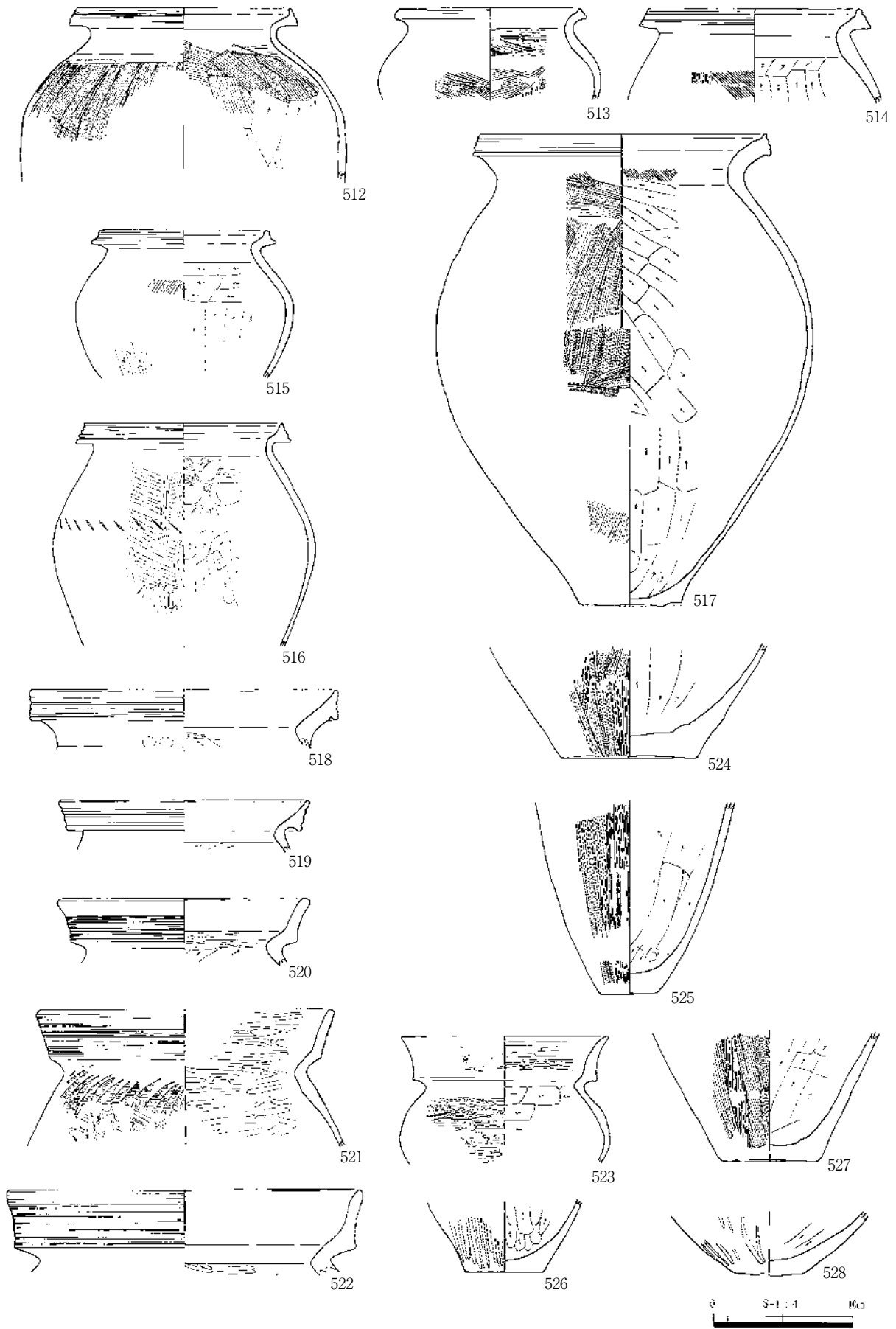
第120図 6区丘陵裾部第Ⅳ-4層出土遺物(3)



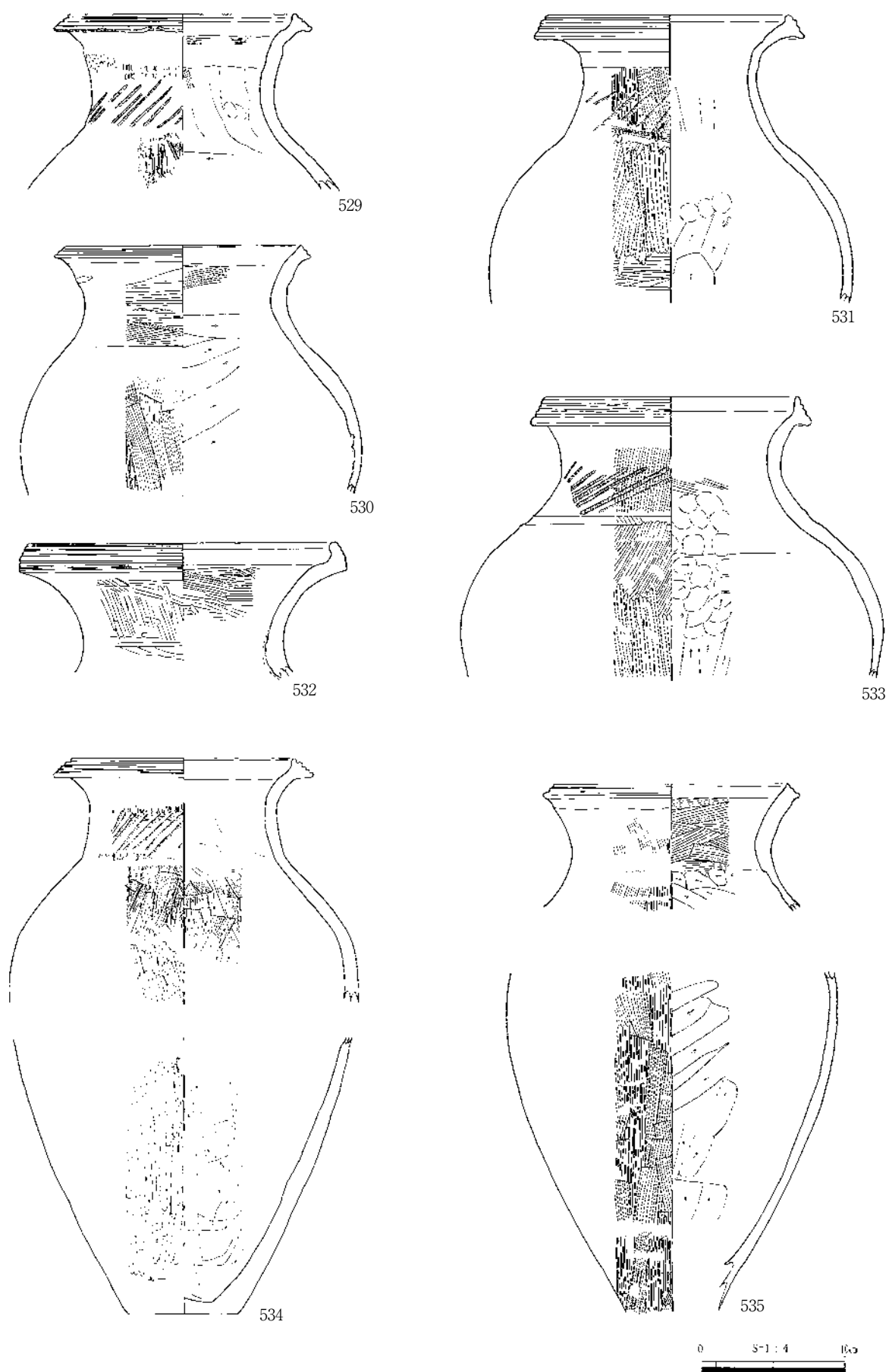
第121図 6区丘陵裾部第IV-4層出土遺物(4)



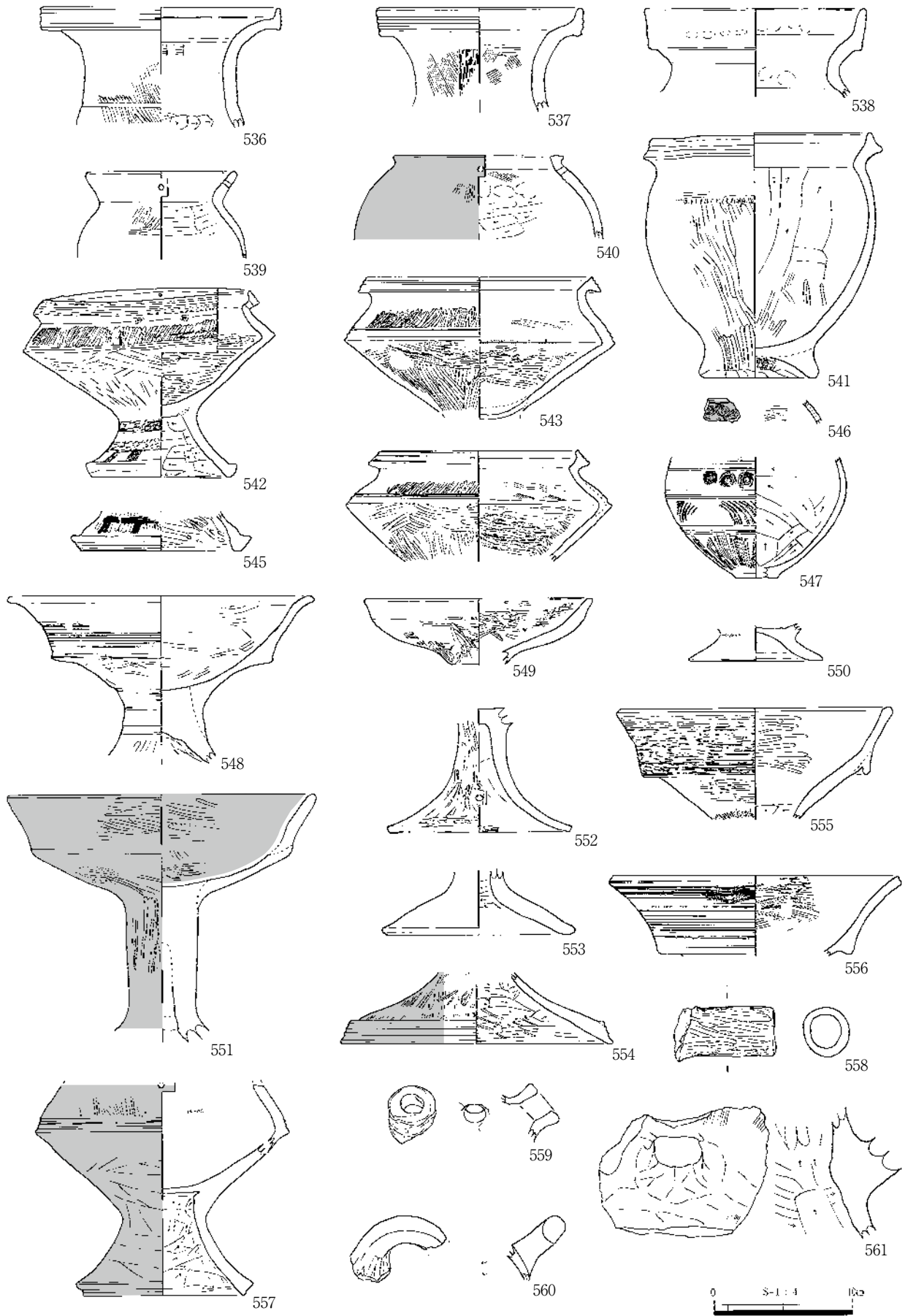
第122図 6区丘陵裾部第IV-5層出土遺物(1)



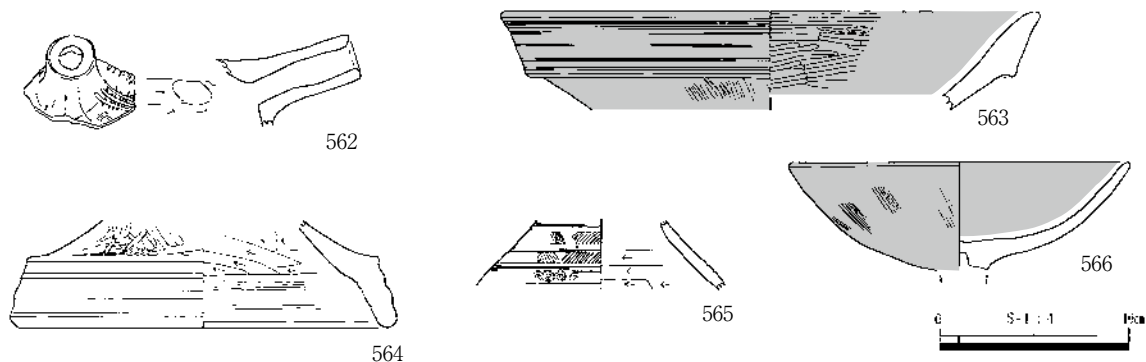
第123図 6区丘陵裾部第IV-5層出土遺物(2)



第124図 6区丘陵裾部Ⅳ-5層出土遺物(3)



第125図 6区丘陵裾部第Ⅳ-5層出土遺物(4)



第126図 6区丘陵裾部層位不明・攪乱出土遺物

部は内外面丁寧なミガキを施し、肩部には波状文が施文される。524～528は甕か壺の底部である。528は丸底であるが、それ以外は平底となっている。529～540は壺である。口縁端部は上下に拡張するもの(529、531、533及び534)、上方へ拡張するもの(532)、上下方に少し摘まみ上げられるが、ほとんど拡張しないもの(530、535)、L字形に屈曲して直立するもの(536～538)に分けられる。いずれも口縁端部に2～5条の凹線を施文する。頸部にはハケ状工具による刺突文を施文する529、531、533及び534があり、器面調整は、体部外面にハケ後ミガキを施すものが一般的だが、ハケのみの530と535も認められる。内面は頸部から体部上半にかけてハケや指頭圧痕を残している533～535がある。以上は、中期後葉の特徴を示している。536と537は後期中葉の壺と考えられ、前者は頸部に1条の凹線文がめぐり、538は複合口縁を有し、口縁部内外面に指頭圧痕を残している。539は口縁下に穿孔がある単純口縁の壺。540も口縁直下に円孔がみられる無頸壺であり、内外面赤色塗彩がなされている。541は台付甕で、口縁部に2条の凹線文があり、体部に刺突文を施文し、体部下半から脚部は縦方向の丁寧なミガキがなされる。542～544は体部がソロバン玉をした台付鉢である。口縁部に3～4条、体部屈曲部の直上に1～3条の凹線文をめぐらせる。器面調整は、体部上半は意匠的な縦方向の連続的なミガキを施す。脚部には縦位と横位の沈線文を施文し、545の脚裾には凹線文が2条めぐっている。541～544は後期前葉に相当しよう。546と547は装飾壺で、器面を数条の沈線で多段区画し、その間隙を渦文(スタンプ文)や貝殻腹縁による羽状文を充填する。548～554は高坏である。坏部下方で屈曲して口縁が外反し、多条平行沈線文が施文される548、ミガキが施される551、坏部の体部から口縁部が緩やかに立ち上がる549、ソロバン玉状の器形を呈し、体部の屈曲部に凹線文をめぐらす557がある。557は外面には赤色塗彩痕が良好に残っている。550と552～554は脚部である。557は後期前葉、その他は後期前葉から中葉と考えられる。555と556は多条平行沈線が施文された器台受け部であり、後期後葉に帰属しよう。558は注口土器の注口部、559と560は水差形土器の把手及び注口部と考えられる。561は甑形土器の体部で把手の接合痕が認められる。内面調整はヘラによる粗いナデである。

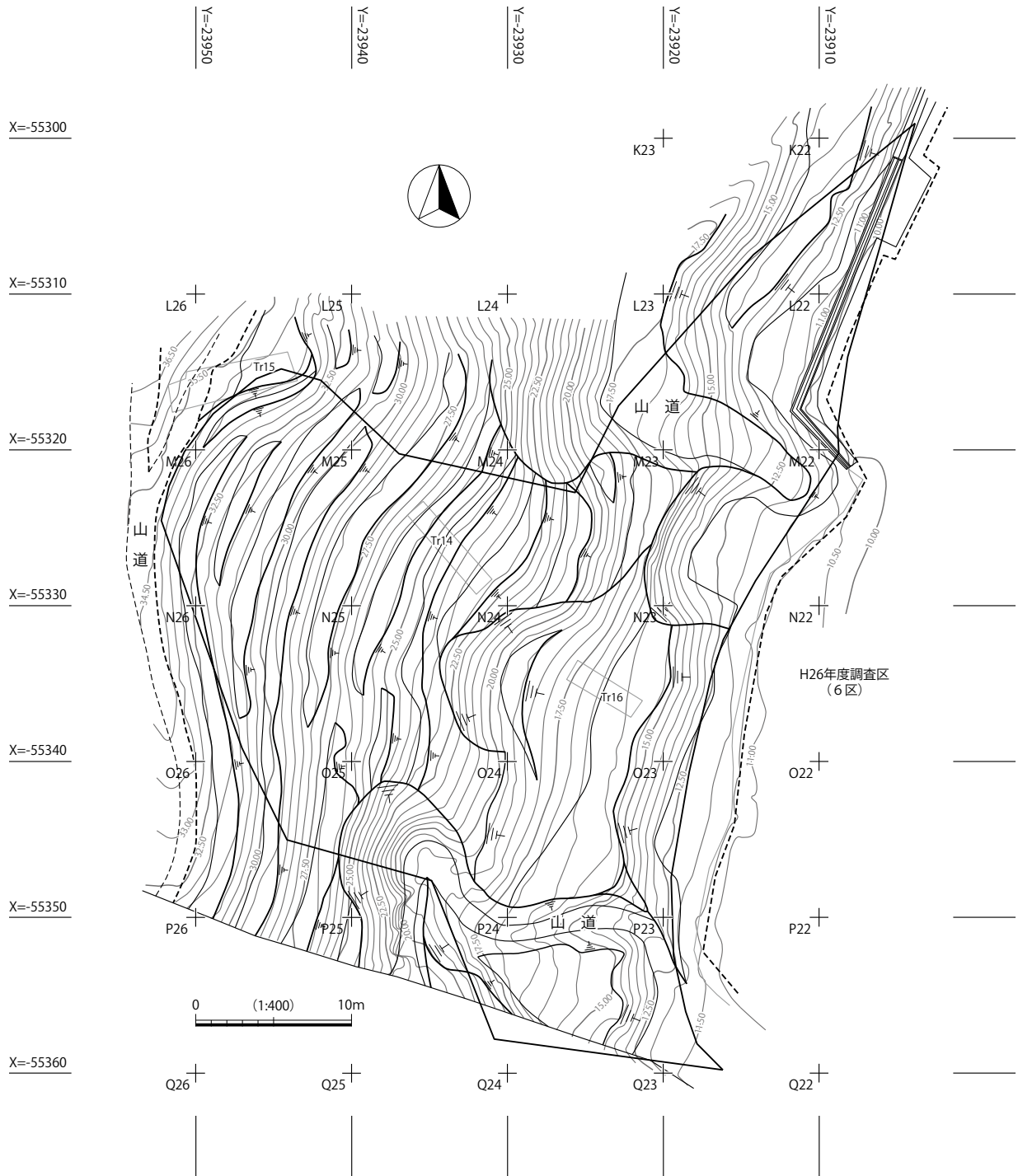
(8) 層位不明・攪乱出土遺物(第126図、表31、PL.75)

第126図に層位不明と攪乱出土遺物を掲載している。562は弥生土器の注口土器の注口部であり、注口基部の両側に3条単位の沈線が施される。563と564は弥生土器の器台である。563は受け部の口縁帯に多条平行沈線が施文され、564は脚台部裾に3条の凹線文がめぐっている。565は台付装飾壺の体部であり、3条単位の沈線間に羽状文や渦文(スタンプ文)を施文する。以上は弥生時代後期前葉から後葉に相当する。566は土師器高坏の坏部で内外面赤色塗彩がなされている。

第5章 7区の調査成果

第1節 立地と基本層序

7区に堆積する地層は、丘陵斜面下部から丘陵裾部にかけて、後世の造成や整地等により大きく改変を受けており、部分的に堆積する地層の関係性を把握することは難しい。ここでは、調査区内に堆積する各地層を粒度、堆積構造、色調、含まれる遺物の時期などにより分類し、6区の地層との関係等から、基本層序を設定した（第127～133図、PL.80～82）。



第127図 7区調査前地形測量図

第Ⅰ層：にぶい黄褐色のシルトを主体とする数層の単層からなる。混土ないしブロック土を含む地層である。丘陵裾を切って造成された比較的平坦な部分と7区南端部の現況の山道周辺に堆積する。近現代の遺構(攪乱)埋土も第Ⅰ層として扱う。現代以前の遺物を局所的に含む。〔近世以降現代まで、丘陵裾部の表土及び攪乱埋土〕

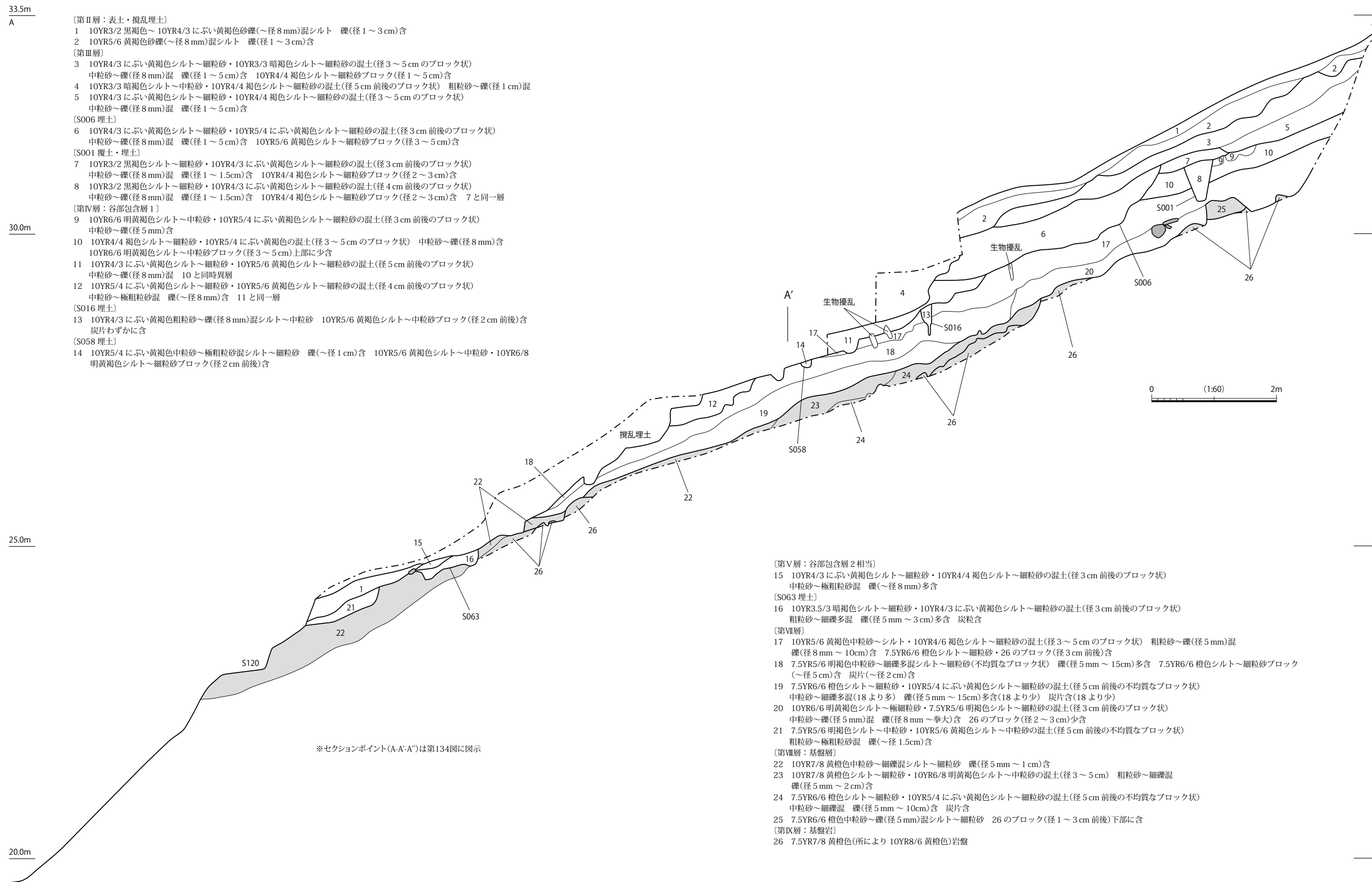
第Ⅱ層：黒褐色ないし黄褐色の礫含む砂混シルトを主体とする数層の単層からなる。丘陵斜面に堆積する。近世及び近現代の攪乱埋土も第Ⅱ層として扱う。近代以前の遺物を局所的に含み、量的には第Ⅰ層出土遺物よりも少ない。〔近世以降現代まで、丘陵部の表土及び攪乱埋土〕

第Ⅲ層：にぶい黄褐色ないし褐色の中粒砂から礫混シルトから細粒砂の混土を主体とする数層の単層からなる。7区西部の丘陵斜面のM24～25グリッドとN24～25グリッド北部付近の第Ⅱ層下位に堆積する。斜面が急な部分や後世の造成を受けている部分では残っていない。7区南部のO23、P23グリッド付近の第Ⅱ層下位に堆積する褐色砂混シルト主体の層(調査時に「南部包含層」と呼称)と7区北西部のL25グリッド付近の第Ⅱ層下位に堆積する黒褐色シルトから細粒砂、褐色シルトから細粒砂の混土(調査時に「包含層1」と呼称)も第Ⅲ層に相当する。弥生時代後期中葉から後葉、古墳時代前期前葉までの土器を含む。第Ⅲ層までを除去した面は第1遺構面。〔古墳時代前期以降、人為を含む堆積層〕

第Ⅳ層：にぶい黄褐色ないし明黄褐色のシルトから細粒砂の混土を主体とする数層の単層からなる(第Ⅳ層上部、調査時に「谷部包含層1上」と呼称)。主に7区西部のM25グリッドとその周辺で確認できる。谷部包含層1上の下位には、部分的に谷部包含層1上より砂勝ちのにぶい黄褐色シルトから細粒砂の混土を主体とする地層が丘陵に直交する形で帯状に堆積し、さらにその範囲内で局所的に黄褐色シルトから細粒砂ブロック主体の地層が堆積する(第Ⅳ層下部、調査時に「谷部包含層1下」と呼称)。弥生時代後期中葉から古墳時代前期前葉までの遺物を含む。第Ⅳ層までを除去した面は第2遺構面。〔古墳時代前期、人為を含む堆積層〕

第Ⅴ層：黒褐色ないし黄褐色のシルト～細粒砂の混土を主体とする数層の単層からなる(第Ⅴ層上部、調査時に「谷部包含層2上」と呼称)。7区西部のM25グリッド南部を中心としてその周辺の第Ⅳ層と第Ⅶ層の間に堆積し、第Ⅳ層の堆積により切られることが断面で観察できる。谷部包含層2上の下位には、局所的に溝状に窪んだ部分があり、黄褐色シルトから細粒砂ブロックを含む褐色ないしにぶい黄褐色シルトから極細粒砂を主体とする地層が堆積する(第Ⅴ層下部、調査時に「谷部包含層2下」と呼称)。弥生時代後期中葉から弥生時代終末期までの遺物を含む。第Ⅴ層までを除去した面は第3遺構面。〔弥生時代終末期、人為を含む堆積層〕

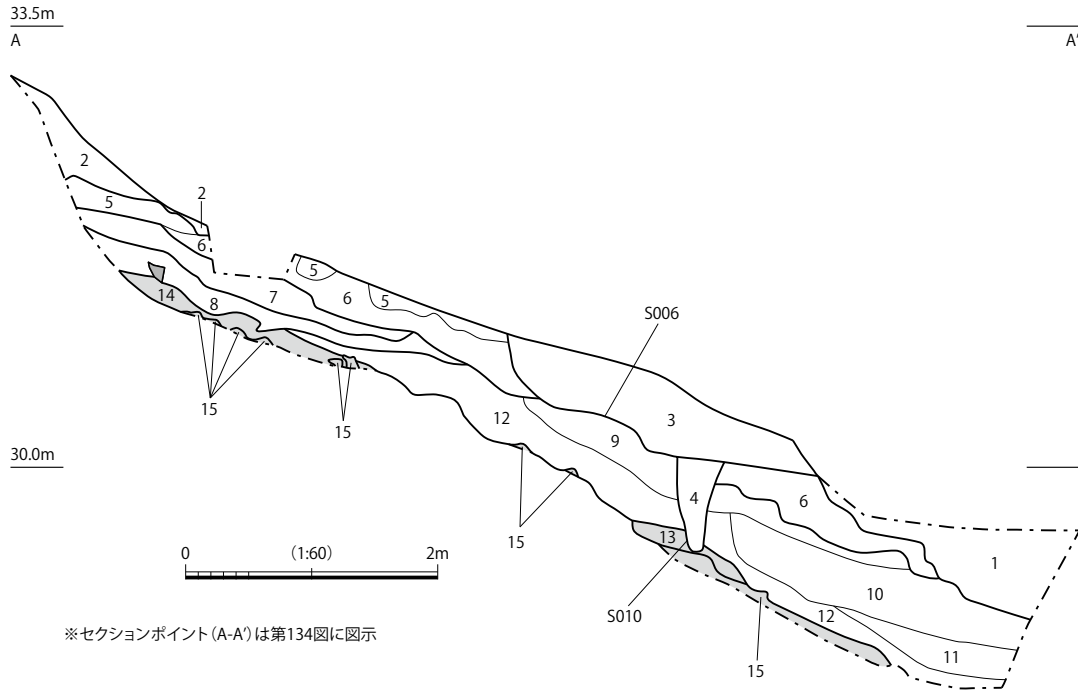
第Ⅵ層：黒褐色ないし黒色の砂礫混シルトから粘土を主体とする数層の単層からなる。丘陵側から東側に延びる第Ⅷ層と7区南端部に堆積するⅧ層の間にある窪地に堆積したものである。7区では主に南東部のP22～23グリッド付近と東端部のM21グリッドとM22グリッドの境目から東側で確認でき、隣接する6区及び8区でも丘陵裾部に堆積することが確認できる。見た目黒色のシルトから粘土は、クロボク由来のものと見られる。層中に人工遺物や人為的な遺構を含まない。間に挟む砂の薄層や葉層の互層が確認されることから、堆積過程で砂を堆積させる局所的な水の流れがあったと考えられる。隣接する6区及び8区の丘陵裾部で、弥生時代後期後葉の遺物や遺構群が帰属する層が、本層の上位に堆積することから、弥生時代後期後葉よりは以前の堆積であることがわかる。確認のために掘削したトレンチ部分で、遺物の出土や遺構の存在が確認されなかったため、本層が堆積する部分で



第128図 7区中央部東西トレンチ断面図

は、第Ⅶ層上面を最終遺構検出面とした。〔弥生時代後期後葉以前、クロボク由来の堆積層〕

第Ⅶ層：橙色、明褐色のシルトから細粒砂を主体とする複数の単層からなる。不均質なブロック状で、局所的に大ぶりの礫や基盤岩（Ⅸ層）のブロックを含む地層である。東西トレンチを設定したライン上を中心に幅15mぐらいの花崗岩を基盤とする谷状の凹地があり、この部分に堆積する。調査区西部のM25グリッド、M24グリッド西部、N24グリッド北西端部、N25グリッド北部で確認できる。トレンチ断面の観察から、第Ⅶ層は下位のⅧ層を削り込んで堆積することを確認した。当初、第Ⅶ層以下は基盤層とみなしていたが、炭片や炭粒の一定量の混じりが見られたため基盤岩までの地層の堆積を確認するために設定した東西トレンチの断面で遺構の存在を確認し、遺構が確認できた部分を中



※セクションポイント(A-A')は第134図に図示

〔第Ⅲ層〕

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト～中粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土(径5cm前後のブロック状) 粗粒砂～礫(径1cm)混
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 中粒砂～礫(径8mm)混
礫(径1～5cm)含

〔S006 段状遺構埋土〕

- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 中粒砂～礫(径8mm)混
礫(径1～5cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径3～5cm)含

〔S010 ビット埋土〕

- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～中粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 粗粒砂～礫(径1cm)混

〔第Ⅳ層：谷部包含層1〕

- 5 10YR6/6 明黄褐色シルト～中粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 中粒砂～礫(径5mm)含
- 6 10YR4/4 褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 中粒砂～礫(径8mm)含
10YR6/6 明黄褐色シルト～中粒砂ブロック(径3～5cm)上部に少含

〔第Ⅴ層：谷部包含層2〕

- 7 10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 中粒砂～礫(径8mm)多混
礫(径1～5cm)多含

〔S029 溝埋土〕

- 8 10YR4.5/4 褐色シルト～中粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状)
粗粒砂～礫(径8mm)混 礫(径1～20cm、垂角)局所的に多含

〔第Ⅶ層〕

- 9 10YR5/6 黄褐色中粒砂～シルト・10YR4/6 褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 粗粒砂～礫(径5mm)混
礫(径8mm～10cm)含 7.5YR6/6 橙色シルト～細粒砂・27のブロック(径3cm前後)含
- 10 7.5YR5/6 明褐色中粒砂～細粒砂多混シルト～細粒砂(不均質なブロック状) 礫(径5mm～15cm)多含 7.5YR6/6 橙色シルト～細粒砂ブロック(径5cm)含
炭片(～径2cm)含
- 11 7.5YR6/6 橙色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径5cm前後の不均質なブロック状) 中粒砂～細礫多混(10より多)
礫(径5mm～15cm)多含(10より少) 炭片含(10より少)
- 12 10YR6/6 明黄褐色シルト～極細粒砂・7.5YR5/6 明褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 中粒砂～礫(径5mm)混
礫(径8mm～拳大)含 15のブロック(径2～3cm)少含

〔第Ⅷ層：基盤層〕

- 13 7.5YR6/6 橙色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径5cm前後の不均質なブロック状) 中粒砂～細礫混
礫(径5mm～10cm)含 炭片含

- 14 7.5YR6/6 橙色中粒砂～礫(径5mm)混シルト～細粒砂 15のブロック(径1～3cm前後)下部に含

〔第Ⅸ層：基盤岩〕

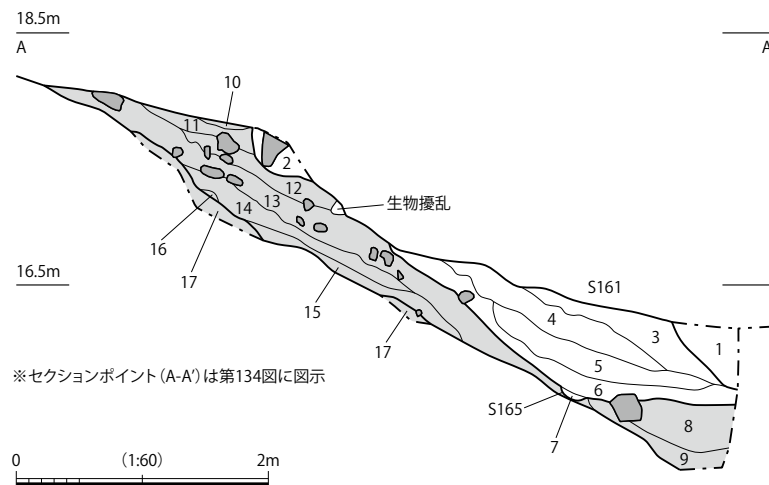
- 15 7.5YR7/8 黄褐色(所により10YR8/6 黄褐色)岩盤

第129図 7区中央部東西トレンチ北壁断面図

第5章 7区の調査成果

心に第Ⅶ層を掘削して遺構検出を行なった。第Ⅶ層の帰属時期は、第Ⅶ層を除去した第Ⅷ層上面で検出したS081溝埋土から縄文時代後期前葉の土器片が出土していることと、第Ⅶ層上面で検出した遺構のうち最も古いものが弥生時代後期後葉に帰属することから、縄文時代後期前葉以降弥生時代後期後葉までに比定できる。第Ⅶ層までを除去した面は第4遺構面。〔縄文時代後期前葉以降弥生時代後期後葉までの堆積物〕

第Ⅷ層：第Ⅶ層と色調、粒度、堆積構造はほとんど変わらないが、炭片をほとんど含まず、第Ⅶ層より砂勝ちで第Ⅶ層より明度が高い。局所的に、暗褐色シルトから細粒砂の小ブロックを層状に含む。東西トレンチを設定したライン上を中心に幅5mないし15mの範囲で確認できる。第Ⅶ層と同じく花崗岩を基盤とする谷状の凹地に堆積する。丘陵裾部の23ライン以東では、第Ⅷ層中に砂を主体とする互層や基盤岩（第Ⅸ層）の大ぶりのブロックを含む砂泥の堆積が確認できたが、これらも第Ⅷ層（第Ⅷ層下部と呼称）として扱う。これらは丘陵部の谷状の凹地が形成された時に生じた堆積物と推定できる。人工遺物、人為的な遺構を含まない。第Ⅷ層の帰属時期は、第Ⅷ層上面で検出したS081溝埋土から縄文時代後期前葉の土器が出土していることから、縄文時代後期前葉までに比定できる。〔基盤層、縄文時代後期前葉までの堆積物〕



〔第Ⅱ層：表土・攪乱埋土〕

1 10YR4.5/4 褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト～極細粒砂 礫(～径2cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径10cm)含 根痕 [S135 閉塞石を伴う穴埋土]

2 10YR5/6 黄褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト～極細粒砂 礫(～径4cm)含 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径3cm)含 [S161 埋土上層]

3 10YR6/8 明黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(～径8mm)含

4 10YR6/8 明黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(～径8mm)含 7.5YR6/8 橙色風化岩盤ブロック(径1～2cm)含 3よりしまり弱

5 10YR6/8 明黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(～径8mm)含 7.5YR6/8 橙色風化岩盤ブロック(径1～2cm)多含 4よりしまり弱

[S161 埋土下層]

6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂多混 [S165 埋土]

7 7.5YR4/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂の混土(～径3cmのブロック状) 礫(～径8mm)含

〔第Ⅷ層：基盤層〕

8 10YR6/7 明黄褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂 極粗粒砂～礫(径5mm)・礫(径1cm～卵大)少含

9 10YR6.5/6 明黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径5mm、径1～3cm少)含

10 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径1cm)含

11 10YR5.5/6 黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径1cm)含

12 7.5YR5/6 明褐色粗粒砂～極粗粒砂多混シルト～中粒砂 礫(～卵大)多含 9・10より砂勝ち

13 7.5YR5/5 明褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(～拳大)含 炭粒少含

14 7.5YR6/6 橙色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～卵大、拳大少)含 炭粒・炭粉含 上位層よりしまる

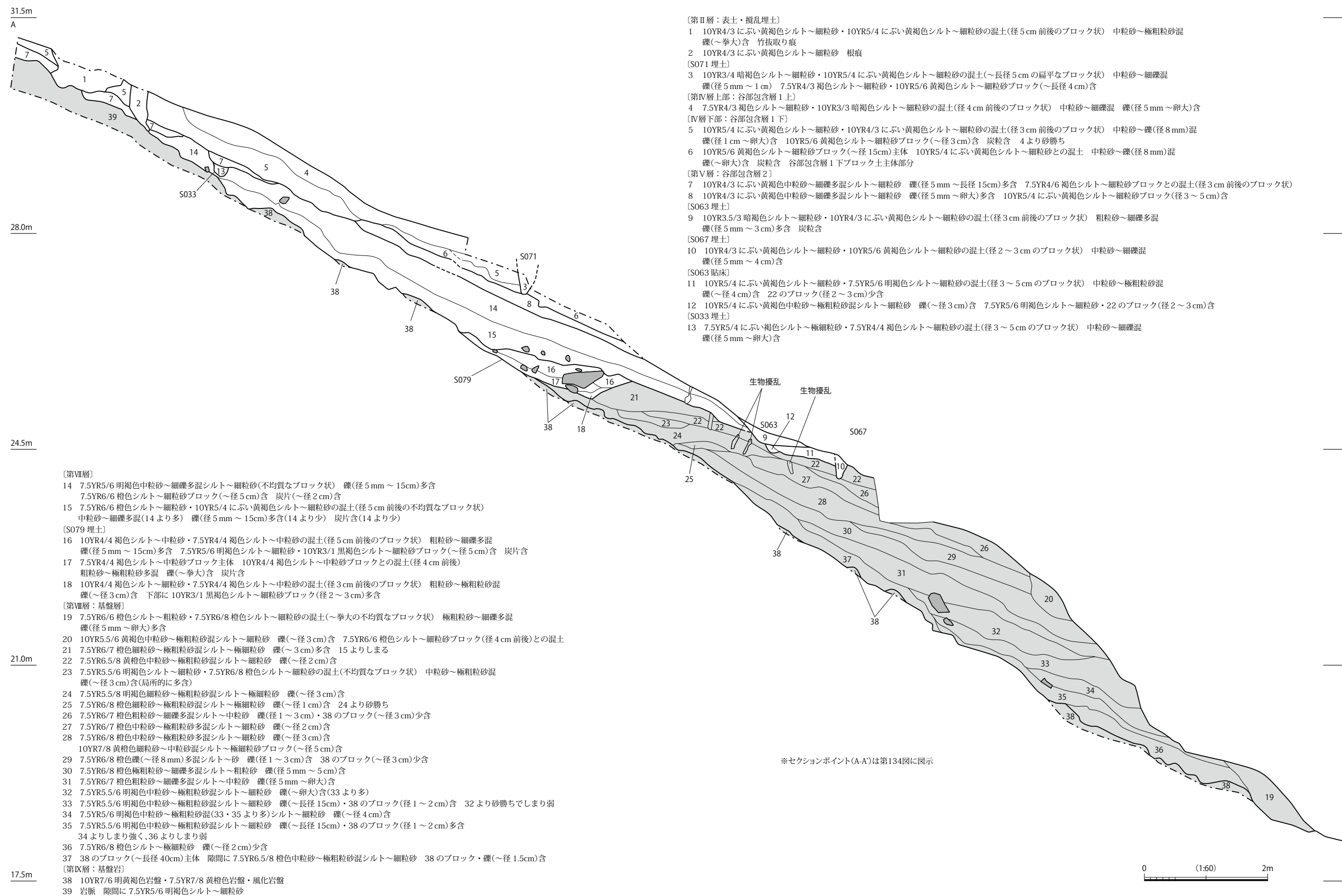
15 7.5YR6/7 橙色細粒砂～極粗粒砂混シルト～極細粒砂 礫(～径1cm)含 17のブロック(～径3cm)含

16 7.5YR6/8 橙色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～細礫含

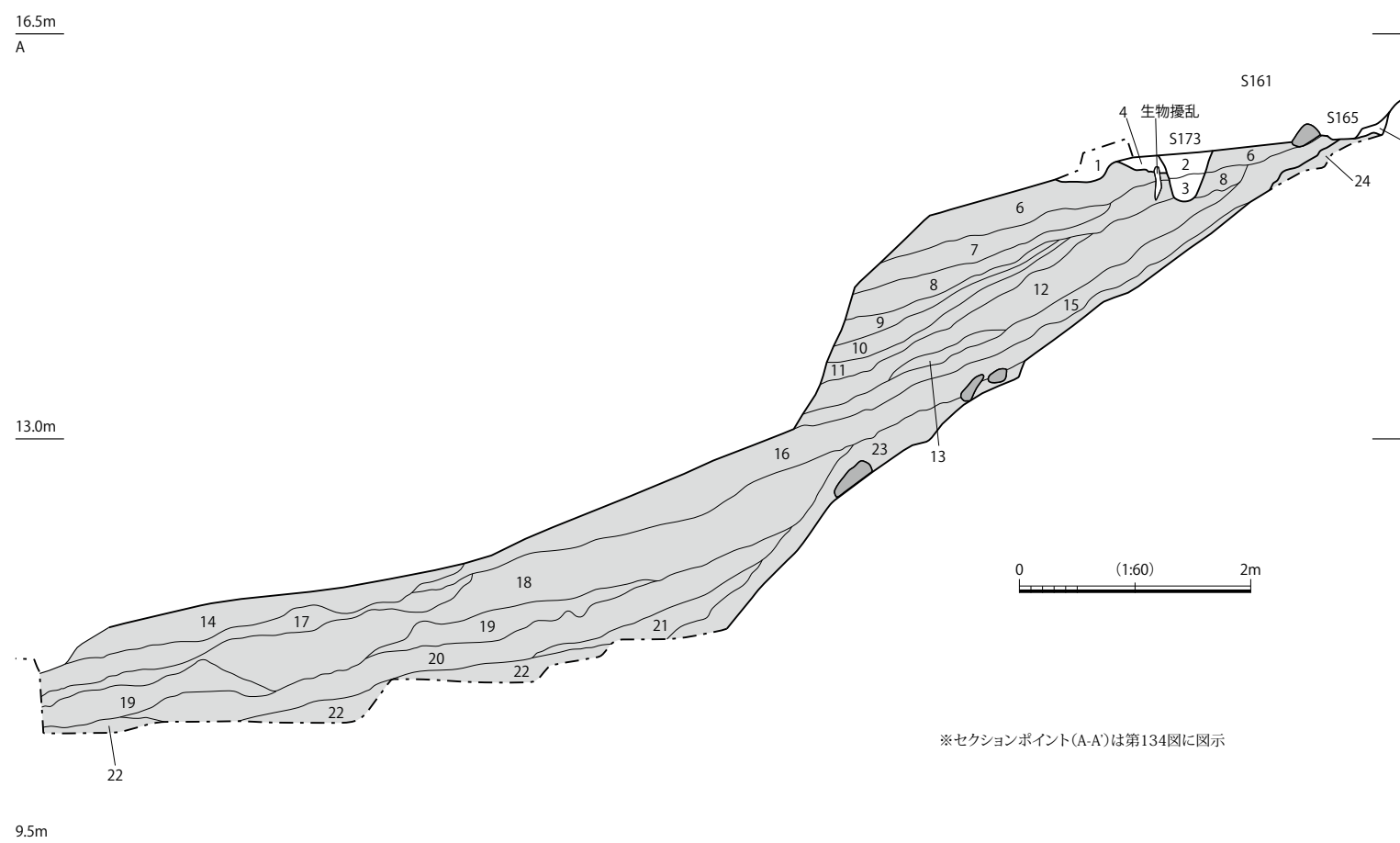
〔第Ⅸ層：基盤岩〕

17 7.5YR7/8 黄橙色岩盤

第130図 7区東西トレンチ断面図(1)



第131図 7区東西トレンチ断面図(2)



※セクションポイント(A-A')は第134図に図示

〔第II層：表土・攪乱埋土〕

- 1 10YR4.5/4 褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト～極細粒砂 礫(～径2cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径10cm)含 根痕
- [S173埋土]
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂 極粗粒砂～礫(径1cm)含
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～礫(径1cm)含 礫(径1.5cm～4cm)少含 10YR7/8 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径2cm)含 炭粒少含
- [S161貼床]
- 4 10YR5/3.5 にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～礫(径1cm)含 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2cm前後)少含
- 5 10YR7/8 黄褐色シルト～極細粒砂・10YR6/6 明黄褐色シルト～極細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～細礫含 24のブロック(～径3cm)主に下部に含

〔第VIII層上部：基盤層〕

- 6 10YR6/7 明黄褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂 極粗粒砂～礫(径5mm)含 礫(径1cm～卵大)少含
- 7 10YR6.5/8 明黄褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂 極粗粒砂～礫(径5mm)含 礫(径1～3cm)・24のブロック少含 6より泥勝ち
- 8 10YR6.5/6 明黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径5mm・径1～3cm少)含
- 9 10YR6/6 明黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径5mm・径1cm～卵大少)含
- 10 10YR6.5/8 明黄褐色中粒砂～細礫混シルト～細粒砂 礫(径5mm～1.5cm)多含 9・11より砂勝ち
- 11 7.5YR6/6 橙色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(径5mm)含 礫・24のブロック(径1～3cm)少含 10YR5/6 黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂ブロック(径3cm前後)局所的に含
- 12 10YR6/7 明黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径1cm)含 礫(径2cm～拳大)上部の局所的に多含 11より砂勝ち
- 13 10YR5/6 黄褐色細粒砂～中粒砂混シルト～極細粒砂 粗粒砂～極粗粒砂含 礫(～径3cm)少含 12より泥勝ち

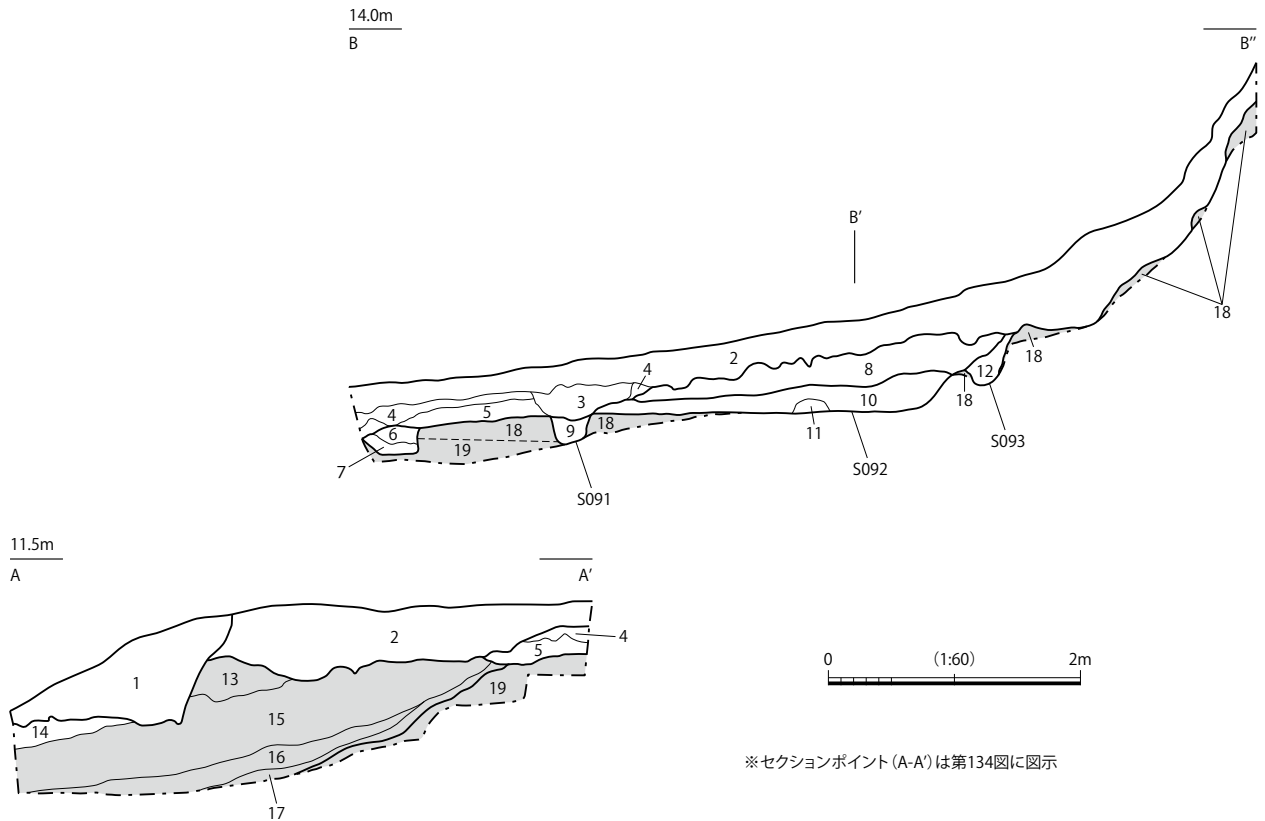
〔第VIII層下部：基盤層〕

- 14 10YR5/4 にぶい黄褐色礫(～径8mm)混極粗粒砂～中粒砂・10YR6/8 明黄褐色細粒砂～シルトの互層(厚さ2～5cm) 最上部は10YR6.5/8 明黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm多・径1cm～拳大少)含 酸化鉄分沈着(しみ状)
- 15 7.5YR6/8 橙色粗粒砂～細礫多混シルト～中粒砂 礫・24のブロック(径5mm～卵大)多含
- 16 10YR6/8 明黄褐色粗粒砂～細礫多混シルト～中粒砂 礫・24のブロック(径5mm～卵大)含
- 17 10YR7/6 明黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(細礫・径5mm～卵大少)含 酸化マンガン(斑状・しみ状)・酸化鉄分(層状)沈着
- 18 10YR7/6 明黄褐色粗粒砂～礫(径8mm)混粗粒砂～中粒砂・10YR5.5/8 黄褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂の混土(不均質なブロック状) 局所的に礫(径1cm～拳大)多含
- 19 10YR7/6 明黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂・10YR5/6 黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂の混土(不均質なブロック状) 礫(細礫・径5mm～卵大少)含 酸化マンガン(しみ状)・酸化鉄分(層状)沈着
- 20 10YR6/7 明黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm・径1cm～拳大少)含 24のブロック(径1～3cm)少含
- 21 10YR6/6 明黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm・径1cm～拳大少)含 24のブロック(～径1cm)少含
- 22 10YR7/4 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm・径1～2cm少)含 24のブロック(～径1～2cm)少含
- 23 10YR6/8 明黄褐色中粒砂～礫(径1cm)多混シルト～細粒砂 礫・24のブロック(径1.5～長径40cm)少含

〔第IX層：基盤岩〕

- 24 10YR8/4 浅黄褐色岩盤・10YR7/8 黄褐色風化岩盤

第132図 7区東西トレンチ断面図(3)



- 〔第I層：表土・攪乱埋土〕
- 1 平成26年度調査区(6区)埋土
 - 2 表土
 - 3 10YR4/4 褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含〔攪乱埋土〕
 - 4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径1cm)少含 炭粒少含〔近現代造成土〕
 - 5 10YR4/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)少含〔近現代造成土〕
 - 6 10YR6/4 にぶい黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含 礫(径5cm程度)1個含〔近現代造成土〕
 - 7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径5mm)わずかに含
 - 8 10YR6/4 にぶい黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含〔近代溝埋土〕
 - 9 10YR4/4 にぶい黄褐色細粒砂混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含 包含する砂粒はラミナを形成するほどではない〔近代溝埋土〕
 - 〔S092 段状遺構埋土上層：盛土(新段階)〕
 - 8 10YR6/6 明黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径3cm)多含 10YR8/4 浅黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径2cm)含
 - 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック(～径8cm、～径2cm主体)含
 - 〔S091 溝埋土〕
 - 9 礫(径5cm前後)主体 隙間に 10YR4/4 褐色シルト・10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含
 - 〔S092 段状遺構埋土下層：盛土(旧段階)〕
 - 10 10YR6/6 明黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)多含 10YR8/4 浅黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径5cm～径2cm主体)多含
 - 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック(～径10cm、～径2cm主体)多含
 - 〔暗渠埋土(盛土旧段階に伴う)〕
 - 11 10YR5/6 黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)含 礫(～径5cm程度)多含
 - 〔S093 溝埋土〕
 - 12 10YR6/3 にぶい黄褐色中粒砂混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)少含 10YR8/3 浅黄褐色シルトブロック(～径3cm)含
 - 10YR5/2 灰黄褐色シルト～中粒砂ブロック(～径5cm)少含
 - 〔第VI層：丘陵裾部基盤層〕
 - 13 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細礫 10YR2/2 黒褐色シルトブロック(～径2cm)わずかに含 鉄分沈着
 - 14 10YR3/2 黒褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径1cm)わずかに含
 - 15 10YR2/1 黒色細礫～礫(径5～7mm)混シルト～粘土 礫(径5cm程度)少含 いずれも岩盤由来の風化が進行した礫
 - 16 10YR3/2 黒褐色細粒砂混シルト～粘土 礫(径5mm程度)少含
 - 17 7.5YR4/3 褐色細礫混シルト 16層と19層との中間層
 - 〔第VIII層：丘陵裾部基盤層〕
 - 18 10YR6/8 明黄褐色細礫混シルトと7.5YR6/4 にぶい橙色シルト～細粒砂との混土
 - 19 10YR6/6 明黄褐色細礫混シルト

第133図 7区南東部壁土層断面図

第IX層：花崗岩を主体とする岩盤、風化岩盤。岩体であり、層をなす堆積物ではないが、記載の便宜上、第IX層という名称を付した。〔基盤岩〕

第2節 検出した遺構

1 調査の概要

7区は、主に丘陵斜面に位置し、東端部が丘陵裾部に掛かる。4面の遺構検出面で遺構の検出を行った。その結果、丘陵部から丘陵裾部にかけて、主に弥生時代後期中葉から古墳時代前期前葉の遺構群を検出し、丘陵斜面下部から丘陵裾部にかけては、主に中世後期以降の遺構群を検出した。

弥生時代後期中葉から古墳時代前期の遺構群は、段状遺構、袋状土坑、ピット群及び溝で、出土遺物のうち、この時期のものが大半を占め、遺構や遺物の種類から居住域に伴うものと考えられる。

中世後期の遺構群は、土壙墓、地下式坑、埋蔵銭を伴うピット、土坑、土壙墓やピットを伴う段状遺構で、埋蔵銭を除き全体的に出土遺物量は少なく、墓域を含めた非日常的な土地利用を窺わせるものである。

2 第1遺構面（第134図、PL.80）

第1遺構面は第Ⅲ層までを除去して検出した遺構面で、7区全体で遺構検出を行った。検出した遺構は、道路遺構2条、段状遺構11基、地下式坑7基、竪穴状遺構1基、袋状土坑3基、土壙墓4基、土坑29基、ピット38基（うち埋蔵銭を伴うピット1基）、溝4条である。第1遺構面検出遺構は、場所により基盤となる層が異なり、遺構の帰属時期を明確に比定できる出土遺物も乏しいため、同一検出上で複数時期の遺構を同時に検出している可能性が高い。

以下に遺構種別ごとに記載するが、段状遺構に伴う土壙墓、土坑、ピット、溝については、その段状遺構の中に記載する。

（1）道路遺構

S104（第134・135・136図、表59、PL.83・84）

L22～23、M22グリッドに亘り検出された、斜面地に位置する遺構である。急峻な斜面を断面V字様に切通しとした状況が窺え、埋土中及び掘方底面において硬化面が帯状に検出されたことから、本遺構は斜面地を昇降するために設けられた道路遺構と判断した。検出範囲における走向は概ね東西方向で西側（斜面上位側）は調査区外へと延びているが、掘方を確認すると調査区境にてやや北側へ曲がる様子が見て取れる。その延長線上に少し斜面を昇ると、斜面中途に造成された平坦地へと達し、本遺構はそこに接続していた可能性が高い。一方の東側（斜面下位側）は、L22、M22グリッドにおいて掘方が不明瞭となるが、斜面の流失に起因するものと理解される。

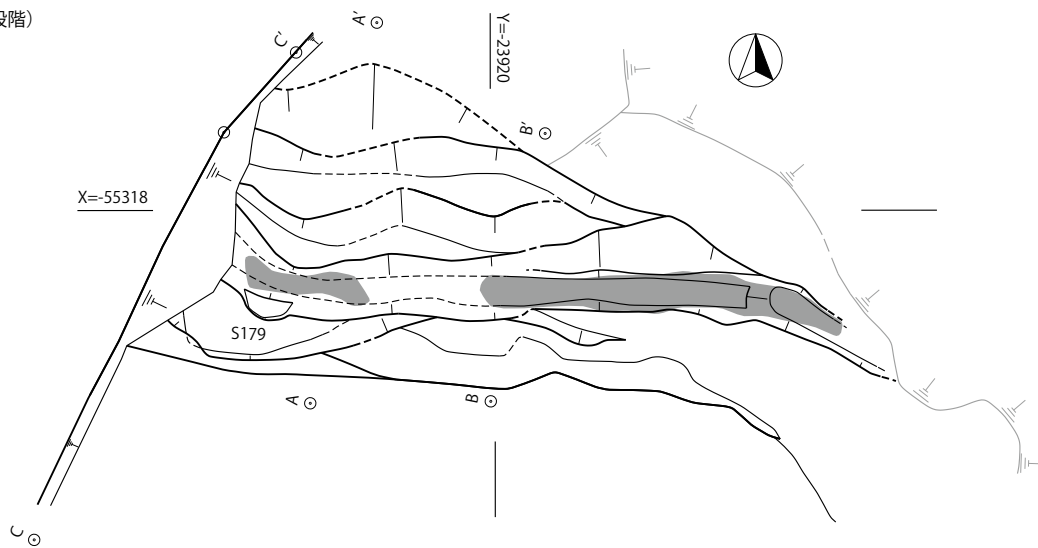
本遺構と重複関係にある遺構は、S138地下式坑、S159土坑、S160土坑、S177土坑があり、いずれも本遺構掘方がこれらを掘り込み、最も後出することが判明した。なお、S179土坑は土層断面の所見から本遺構機能時に営まれた遺構と想定しているため、本項中にて詳細を述べることにする。

調査の結果、埋土の堆積状況や硬化面のあり方から、本遺構は少なくとも3段階に亘る変遷を辿ると考えた。断面図A-A' セクションでその概要を説明すると、まず、掘方最下面（14層下）に硬化面が帯状に確認され、機能面であることが想定できる（1段階）。次いで14層堆積後、その上面において硬化面、造成土と思しき堆積を面的に確認したことから、もう一段階を設定した（2段階）。さらには、溝状に延びる掘り込み埋土中（5～8層）に硬化面が認められることから、3段階目として把握した。

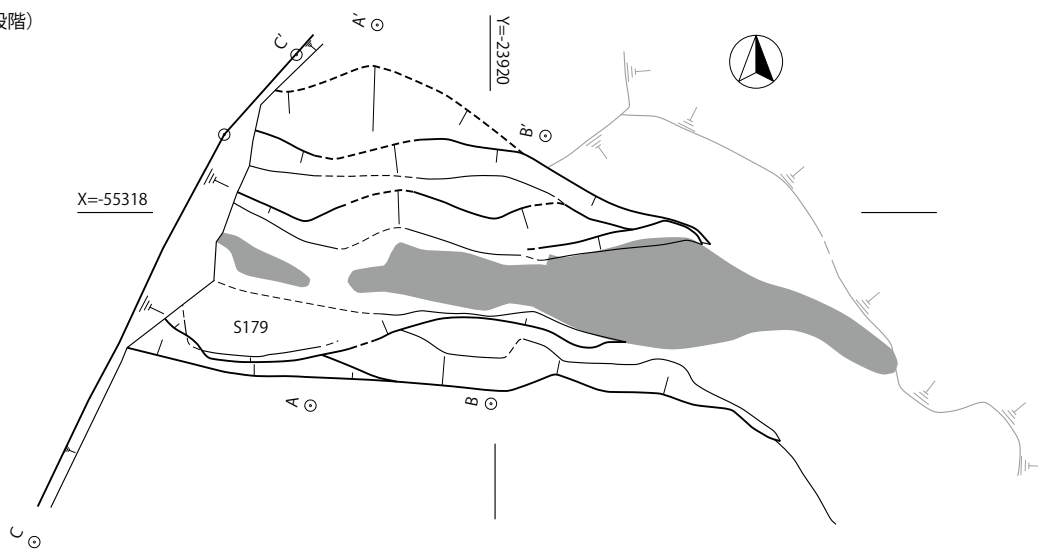


第134図 7区第1遺構面遺構配置図

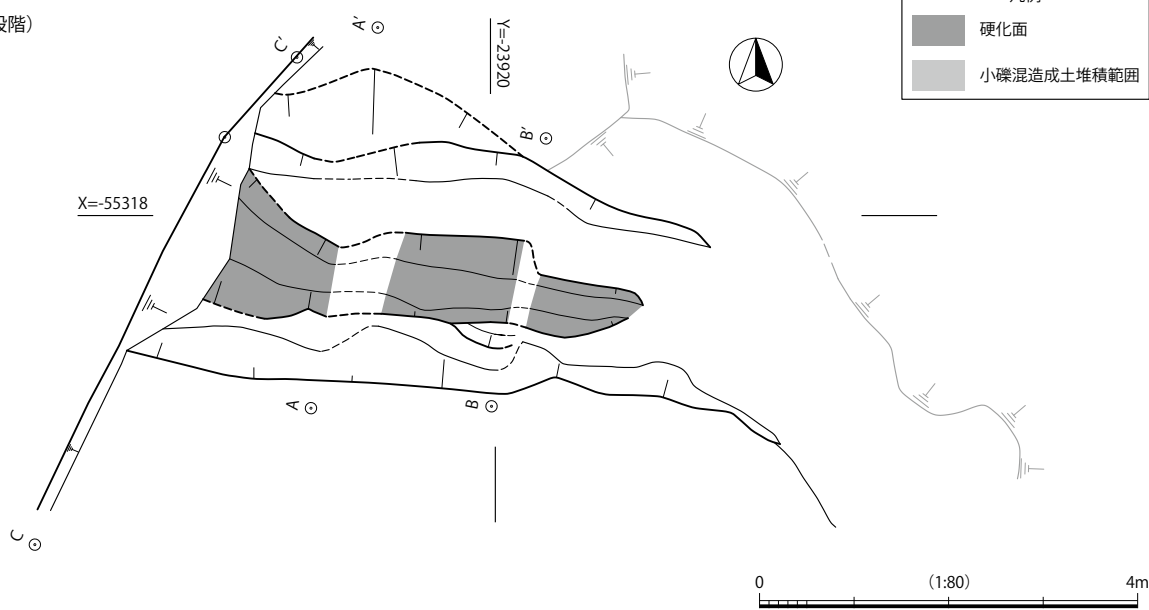
S104(第1段階)



S104(第2段階)

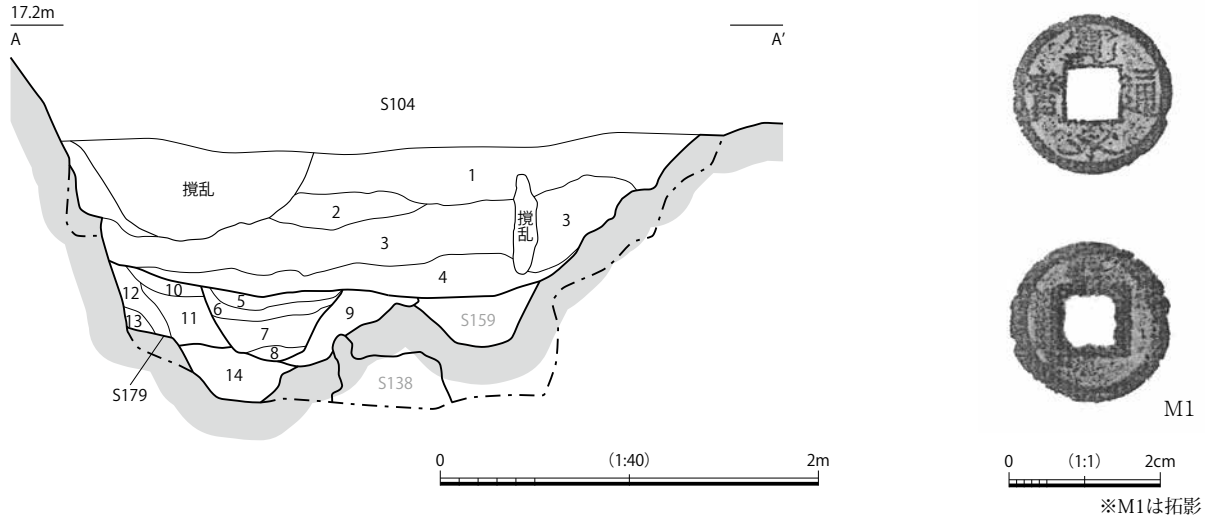


S104(第3段階)



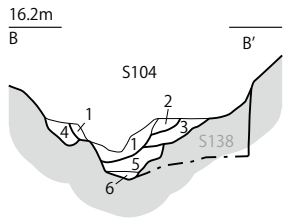
第135図 S104道路遺構平面図(第1～3段階)

第5章 7区の調査成果



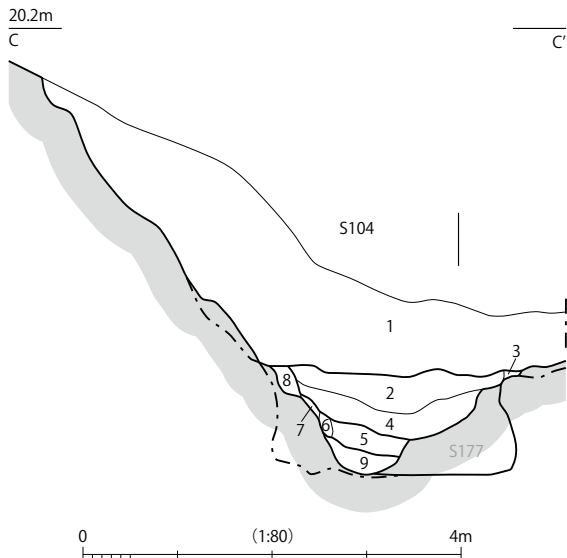
S104・S179 A-A'

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径3cm)少含 炭粒少含 土壌化進行 ややゆるい [S104]
- 2 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)含[S104]
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径3cm、～径1cm 主体)少含 炭粒少含 [S104]
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)含 炭粒少含 [S104]
- 5 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 7.5YR6/2 灰褐色～7.5YR7/2 明褐色灰色シルトブロック(～径5cm)横位帯状に多含 ややしまる [S104]
- 6 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 7.5YR6/2 灰褐色～7.5YR7/2 明褐色灰色シルトブロック(～径1cm)少含 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 [S104]
- 7 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 7.5YR6/2 灰褐色～7.5YR7/2 明褐色灰色シルトブロック(～径5cm)横位帯状に多含 しまる [S104]
- 8 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 7.5YR6/2 灰褐色～7.5YR7/2 明褐色灰色シルトブロック(～径3cm)少含 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 [S104]
- 9 10YR6/4 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色～10YR6/6 黄褐色シルトブロック(～径2cm)含 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含 [S104]
- 10 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径10cm、～径3cm 主体)少含 [S179]
- 11 10YR5/4 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径5cm、～径2cm 主体)少含 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック(～径10cm、～径3cm 主体)含 [S179]
- 12 10YR5/3 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック(～径4cm)少含 ややゆるい [S179]
- 13 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径1cm)少含 [S179]
- 14 10YR5/3 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径10cm、～径2cm 主体)含 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含 [S104]



S104 B-B'

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径3cm)少含 7.5YR6/2 灰褐色～7.5YR7/2 明褐色灰色シルトブロック(～径2cm)少含[3段階]
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/8 黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)少含[3段階]
- 3 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径1cm)少含 炭粒少含[2段階]
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色～10YR7/4 にぶい黄褐色シルトブロック(～径5cm～径1cm 主体)少含[2段階]
- 5 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色～10YR7/8 黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径1cm)少含 [1段階]
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)わずかに含 7.5YR6/2 灰褐色～7.5YR7/2 明褐色灰色シルトブロック(～径3cm)多含 ややしまる[1段階]



S104 C-C'

- 1 表土
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径5cm、～径2cm 主体)少含 炭粒少含 土壌化進行 ややゆるい
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)含
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径3cm、～径1cm 主体)含 7.5YR6/2 灰褐色～7.5YR7/2 明褐色灰色シルト～細粒砂ブロック(～径2cm)少含
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)少含 7.5YR6/2 灰褐色～7.5YR7/2 明褐色灰色シルト～細粒砂ブロック(～径3cm)少含
- 6 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含
- 7 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 ややゆるい
- 8 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)含
- 9 10YR5/3 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 7.5YR6/2 灰褐色～7.5YR7/2 明褐色灰色シルト～細粒砂ブロック(～径3cm)・10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 炭粒少含

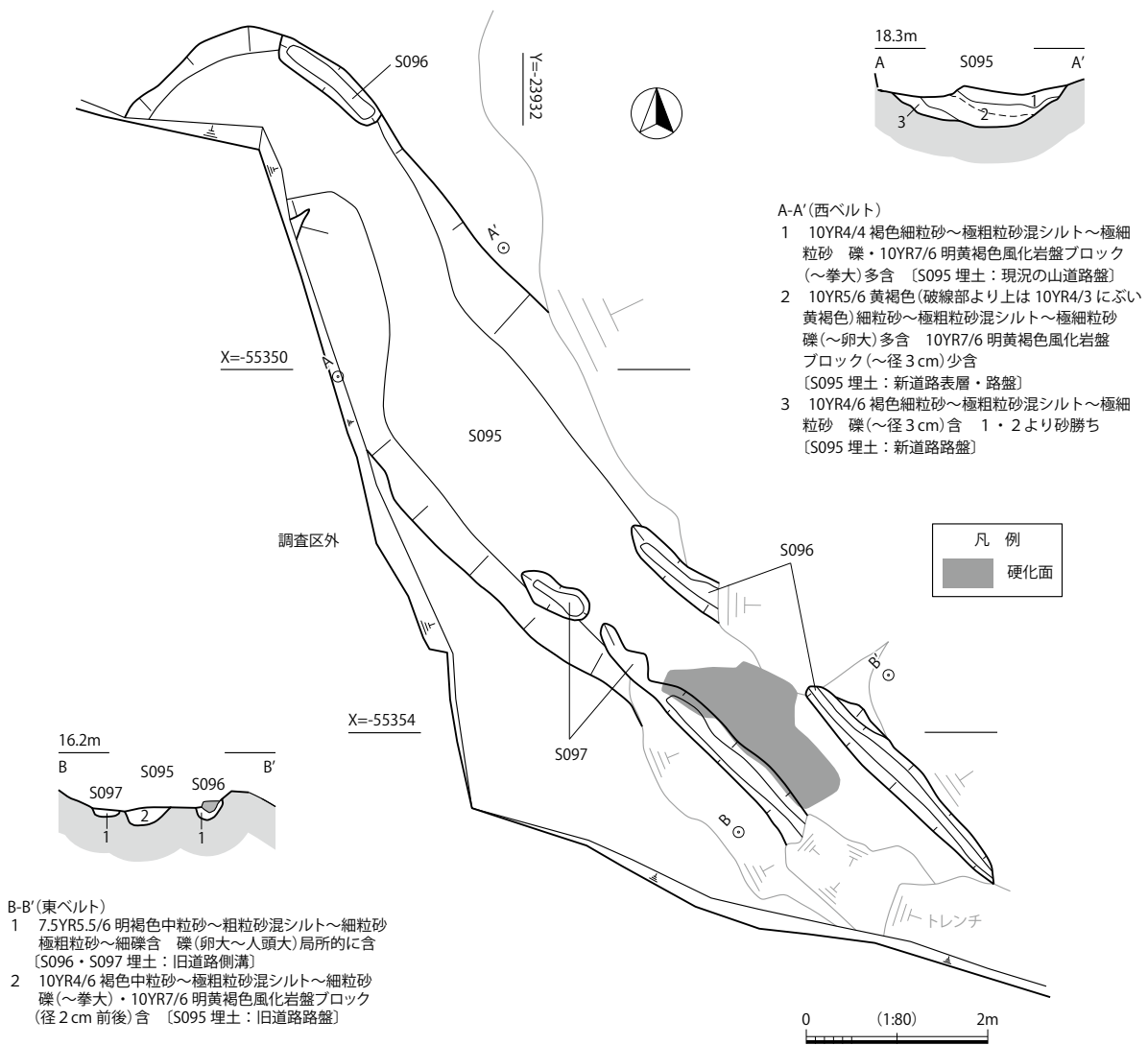
第136図 S104道路遺構断面図及び出土遺物

以降の堆積からは硬化面は認められず、道路としての使用が終わった後、切通しが埋没していった状況が窺える（1～4層）。

硬化面のあり方から、基本的には各段階とも路面幅は狭いと想定できる。切通しへの土砂の流入、時には人為による補修が行われた結果、路面標高は徐々に上がっていくが、硬化面の状況に大きな変化は見受けられないため、断面V字形の切通し底面付近における幅狭な範囲を路面とする小路として本遺構は復元できる。なお、検出された切通し全体の規模は、最大幅が3.32m、深さが最大で4.18mとなる。以下、各段階の詳細を述べる。

1段階 切通し壁面は若干の段を持ちつつ掘削され、最も掘方が幅狭となる最下面は細い溝状を呈する。溝はほぼ東西方向を指向し、幅は0.4～0.64m、深さは最大で0.29mを測り、断面形は逆台形に近く、底面を中心に基盤層が帯状に硬化する。その幅は最大で0.38mである。

2段階 上述したが、1段階路面をなす溝埋没後の機能段階に該当する。ここでも、帯状に延びる硬化面を確認した。硬化面は、1段階と比較して断続的ながら範囲、規模共に近似し、幅は最大で0.56mを測る。また、平面図に示したとおり東側（斜面下位）を中心とした範囲において、小礫を多く包含する堆積の広がりを確認した。小礫は基盤層由来だが、他の堆積と比較すると包含量が図抜けて多い



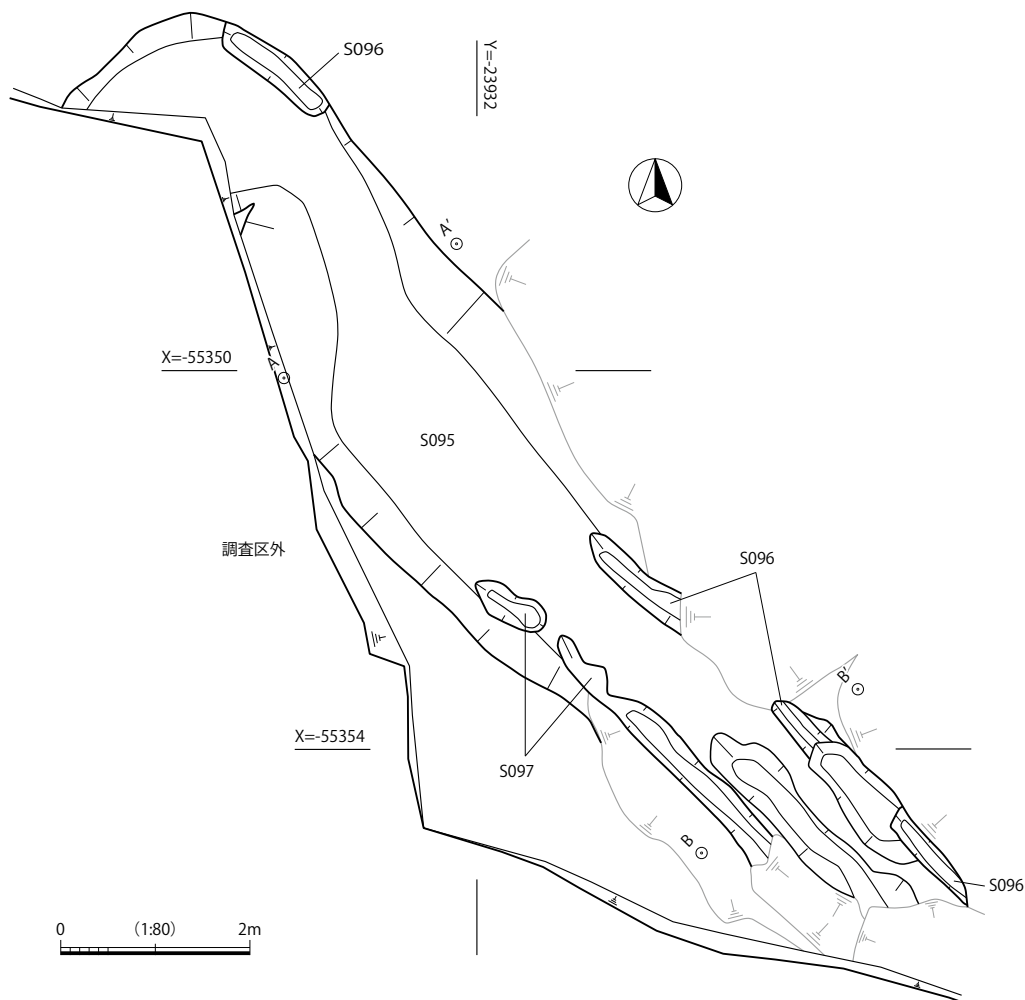
第137図 S095道路遺構路面平面・断面図

ため、意図的な混入の可能性が高い。小礫の大きさは径0.05m以下が多数を占める。この堆積は硬化面に連続して広がっており、路面の補強ないし補修に用いられた可能性が高い。

3段階 2段階以降、一定の堆積が進行した後（A-A' セクション：9層、B-B' セクション：3・4層）、それらを掘り込む溝状の落ち込みが確認された。A-A' セクションの5～8層、B-B' セクションにおいては1・2層が該当する。その溝埋土を細かく観察すると、基盤層由来土をブロック状に多く包含した堆積が横位帯状に連続的に確認できる箇所がある。当該堆積は比較的しまりが強く、路面としての使用、補修の峻別は困難ながら、道路として繰り返し使用されたことに起因する堆積と判断した。幅狭な路面という点においては、前段階のあり方を踏襲している。溝の幅は0.94～1.14m程度、深さは0.37mである。東側で溝が収束するのは、本遺構の遺存状況不良によるものである。

S179土坑は、切通し掘方の南西側にはほぼ接する形で確認された。当初、道路遺構埋土の一部として認識していたが、調査区境界付近において切通し掘方ラインとの非連続性が窺える箇所があったことから、土坑として報告することとした。そうした調査過程上の問題もあり平面形の把握は断片的で不十分となったが、楕円形もしくは長方形に近い形態を採ると想定する。平面規模は不明だが、底面の長軸は1.4m程度と推測する。

A-A' セクションにみるように、本遺構埋土（10～13層）は既述した3段階路面と推定する溝埋土に切られており、2段階、3段階間の路面の具体的な状況は不明ながら、2段階路面の埋没後、



第138図 S095道路遺構掘方平面図

3段階路面が形成される前にS179土坑は営まれたと理解される。道端に掘削された土坑と位置付けられようが、出土遺物が皆無なこともあり詳細は不明である。

以上、本遺構変遷の概要を述べた。出土遺物は土器片が少数出土したがいずれも土師器、須恵器であり、帰属時期を示す資料ではない。一方、出土位置の詳細は不明ながら埋土中より銭貨（M1）1点の出土があり、その銭種は寛永通寶であった。背文字が存在し不明瞭だが、「元」字の可能性を考える。また、銭径は21.66～21.68mm、銭厚0.8～0.85mmと小型、軽量の範疇に入り、書体の特徴からもいわゆる新寛永と考えられる。新寛永のうち本資料は寛永通寶3期に該当し、その鑄造時期は元禄10年（1697）から延享4年（1747）、明和4年（1767）から天明元年（1781）と、17世紀末から18世紀後半にかけて断続的に鑄銭されている（永井1998）。

よって、本遺構の帰属時期は少なくともそれ以降に求められる。既述のとおり重複関係にある遺構の中にS138地下式坑があり、本遺構が後出することが判明しているが、地下式坑の帰属時期については中世後期と推定しており、上述した出土銭貨からの年代観に対して矛盾しない。

S095（第134・137・138図、PL.85・86）

7区南端部のO24、P23～24グリッドで検出した切通しの道路遺構である。S098地下式坑、S147地下式坑、S153地下式坑を切り、S155土坑や現況の山道に切られる。丘陵裾部の南東側から丘陵部の北西方向に延び、つづら折れに南西方向に方向を変える部分までを検出した。規模は検出長13.0m、切通しの幅2.08～2.51m、側溝間の路面の幅は0.75～0.97m、検出面から路面までの最大深さ約0.8mである。

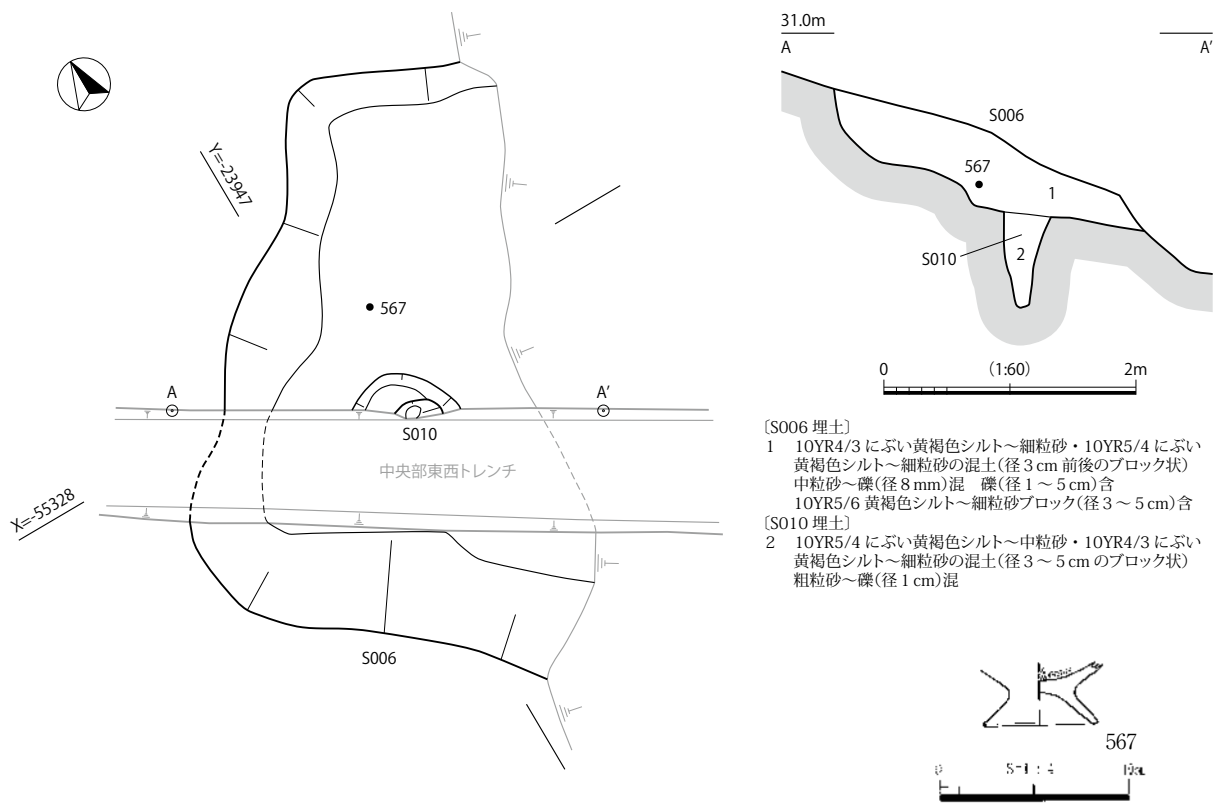
第137図で示したように、本遺構は丘陵部を溝状に切通し、切通した底面の一部に褐色土と基盤層のブロック土からなる路盤を敷設し、底面の両脇に部分的に側溝（S096溝、S097溝）を設けている。

南東－北西方向に延びる部分の丘陵裾部側では、ブロック土からなる路盤や側溝が残るが、丘陵側ではわずかに側溝が残るのみで、ブロック土からなる路盤はなく、卵大までの礫を多く含む黄褐色と褐色土が堆積する。これは、丘陵側にもあった路盤や側溝（以下、S095旧道路路盤と呼称）が削られ、新しく路盤が敷設されたことを示す（以下、S095新道路路盤と呼称）。旧道路路盤の土、側溝埋土及び新道路路盤の土は第137図で示した通りである。路盤の土、側溝埋土からの出土遺物はない。

遺構の帰属時期は、地下式坑を切ることから中世後期以降に比定でき、新道路路盤の上位に堆積する現況の山道の路盤から近代までの陶磁器・瓦・五輪塔が出土していることから近代までの間の概ね近世に比定できる。

ちなみに、本遺構は現況の山道とほぼ重なるが、丘陵裾部側では南東－北西方向に延びず、Pライン上を東西方向に延びる。このこととPラインより南側でブロック土からなる路盤や側溝が残ることから、S095旧道路がS095新道路に付け替えられ、現況の山道に踏襲されていることを示している。

さらに、現況の山道は7区南西側でさらにつづら折れになり北西方向に方向を変えて延び、7区の西側を通り北方向に延びる。この山道は、現況の地図で確認できる7区北西側にある南北約24m、東西約12.5mの平坦面の南東部に至り終わっている。都市計画図では、この平坦面に墓地であることを示す地図記号が表示されている。さらに、現況の地図では、この平坦面の東側に南北12.5m、東西5.5mの平坦面があるのが確認でき、この平坦面にも何らかの施設があったと考えられる。S095はこれらの平坦面に至るための道路と考えられる。



第139図 S006段状遺構平面・断面図及び出土遺物

(2) 段状遺構及びそれに伴う土坑・土墳墓・ピット

S006 (第128・129・134・139図、表10・31、PL.86・116)

7区西部のM25グリッド、N25グリッドで検出した。東側は後世の造成により切られるため、全容は不明である。検出部分の平面形状は概ね方形で、長さ4.65m、幅3.28m、検出面からの床面までの最大深さ1.84mである。検出部分の中央部南寄りの床面は窪んでいて、その窪みの東端でピット1基(S010)を検出した。S006段状遺構、S010ピットの埋土は、いずれも混土からなる単層で埋め戻された土であることがわかる。

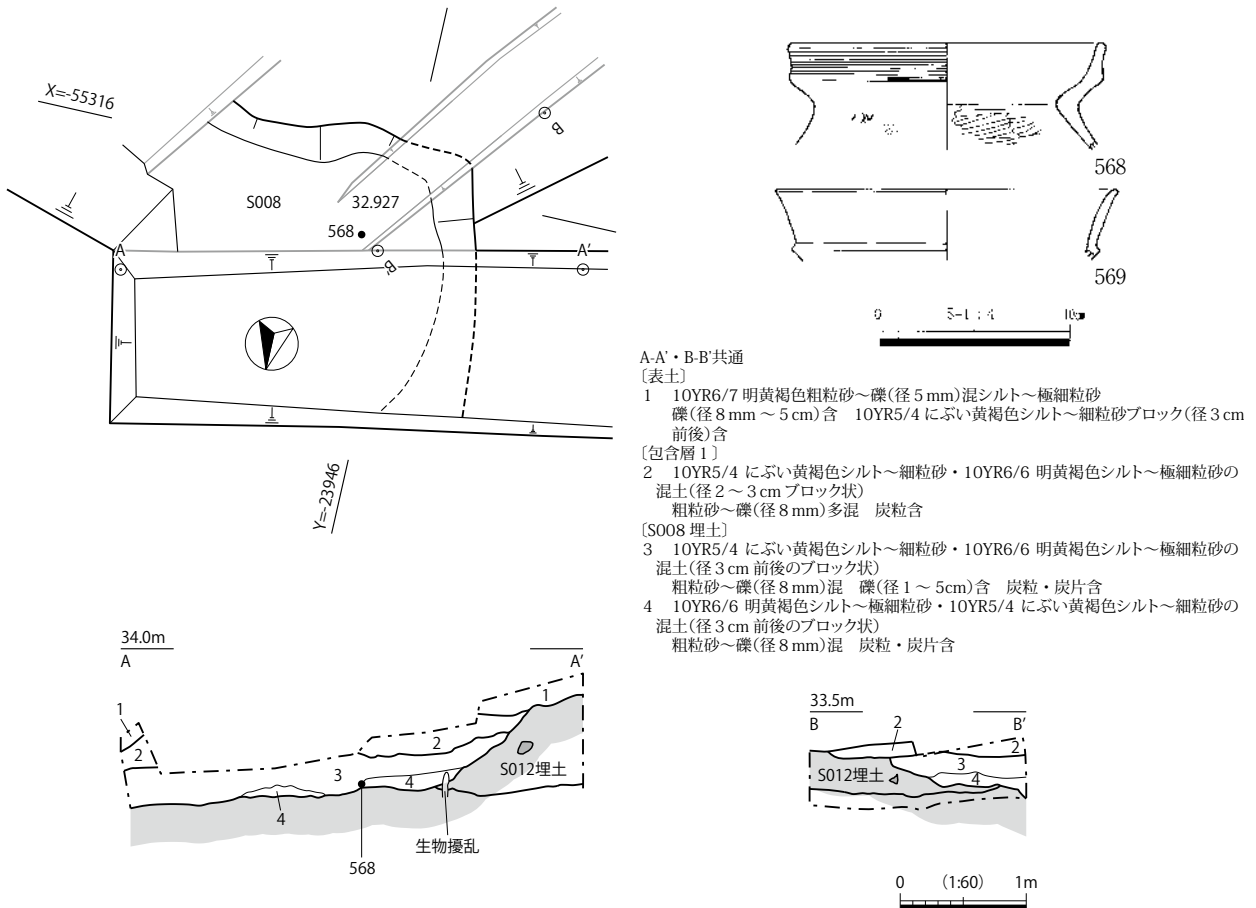
出土遺物は弥生土器、土師器の破片で、そのうち床面近くの埋土最下部から出土した土師器低脚坏(567)を図化した。色調は灰白色を呈し、器壁がやや薄手、坏部内面は丁寧なミガキが施されている。古墳時代前期前葉の特徴を示す。

遺構の帰属時期は、出土遺物と層位から古墳時代前期前葉と考えられる。

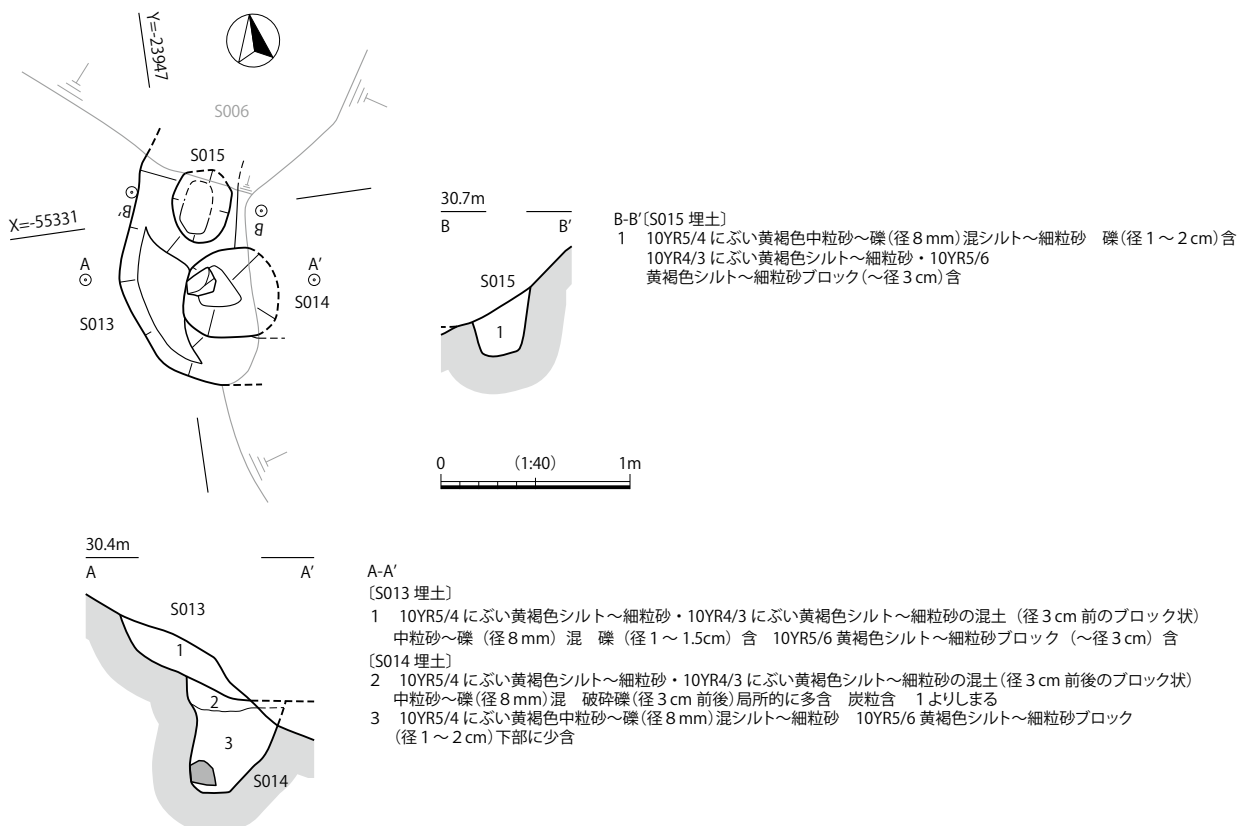
S008 (第134・140図、表31、PL.86・116)

7区北西端部のL25グリッドで検出した。S012段状遺構を切る。北側は試掘トレンチで切られ、東側は調査区外に至るため全容は不明である。試掘トレンチの壁面でS008段状遺構の埋土を確認でき、平面的に検出した部分と試掘トレンチの壁面で確認した埋土から復元できる平面形状、断面形状から、北東側に延びる段状遺構であることがわかる。平面的に検出した部分の規模は、東西2.58m、南北1.2m、深さ0.78mで試掘トレンチの壁面で確認した埋土の存在から、さらに北側に1.4m以上延びることがわかる。

埋土は細かくは2層に分けられ、構成する土が同じであることから一気に埋め戻された土であることがわかる。



第140図 S008段状遺構平面・断面図及び出土遺物



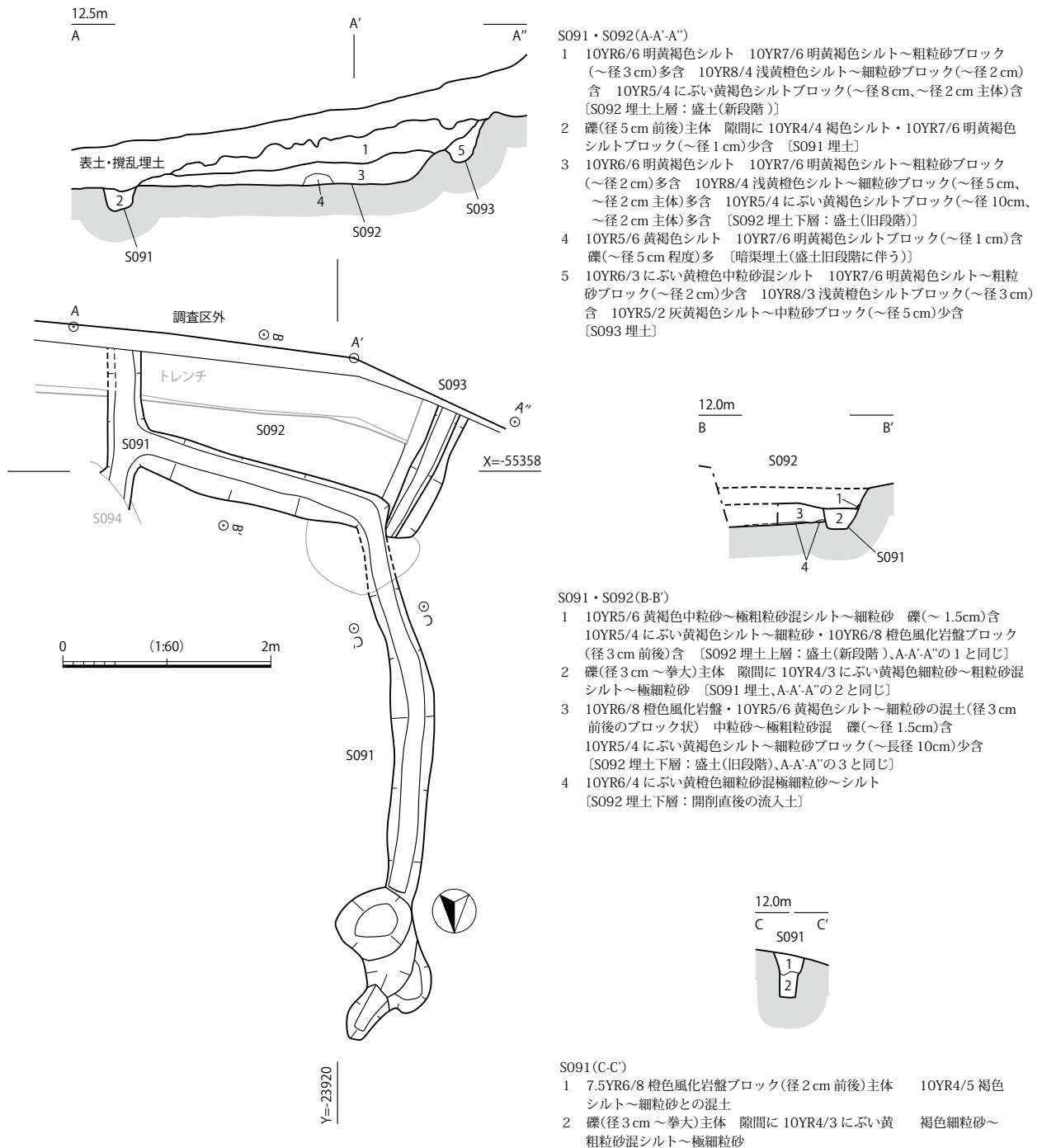
第141図 S013段状遺構平面・断面図

埋土下部から床面にかけて、弥生土器甕の口縁部から体部にかけての破片が出土している。そのうち床面近くの埋土下部から出土した弥生土器甕2点(568、569)を図化した。568は口縁部に5条の平行沈線を施文し、体部にハケを施す後期中葉の甕である。569は、口縁部内外ヨコナデを施し、器壁が薄手となることから終末期の甕の特徴を示す。

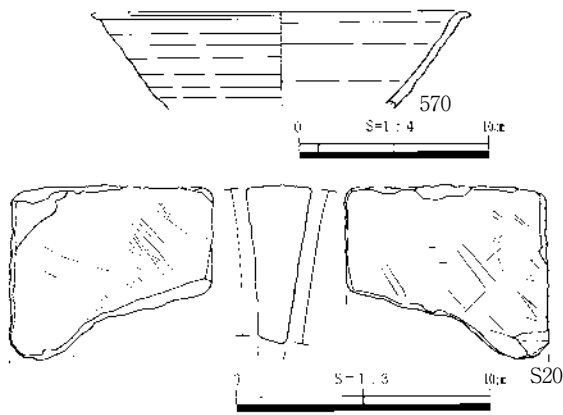
遺構の帰属時期は、出土遺物からは弥生時代終末期以降に比定でき、S008段状遺構の近くで検出した古墳時代前期のS002袋状土坑が、S008段状遺構と同じく古墳時代前期前葉のS012段状遺構を切ることから、古墳時代前期前葉と考えられる。

S013 (第134・141図、表9、PL.86)

7区西部のN25グリッドで検出した。北側がS006段状遺構に切られ、東側が後世の造成により切



第142図 S092段状遺構・S091溝平面・断面図



第143図 S091溝出土遺物

られるため全容は不明である。南西隅とその周辺だけが残存する。平面、断面の形状から段状遺構と判断した。検出規模は、南北長1.26m、東西幅0.83m、検出面から床面までの最大深さ0.45mである。掘方法面から床面にかけてピット2基（S014、S015）を検出した。出土遺物は、非掲載であるがS013段状遺構埋土から出土した弥生土器とみられる壺か甕の体部片である。

遺構の帰属時期は、S006段状遺構に切られることと層位から、古墳時代前期前葉に比定できる。

S091・S092・S093（第133・134・142・143図、表31・55、PL.86・87）

7区南東部のP22～23グリッドで検出した。S092段状遺構の検出規模は、東西長3.45m、南北幅1.82m、検出面から掘方底面までの最大深さ0.72mである。南側は調査区外に至るため全容は不明である。S092段状遺構の西壁は段になっており、幅0.2m前後の壁溝（S093溝）を検出した。また暗渠（S091溝）とは一体の遺構である。S091溝は、S092段状遺構の北西側で南北方向に延び、S092段状遺構の北西端から北壁に沿って延び、さらに東端部で丁字になり南北方向に延びる。S091溝の検出部分での総延長9.07m、幅0.29～0.47mである。北端に近い部分には拳大ないし人頭大の角礫で充填された丸い穴が掘られている。

埋土からの出土遺物は、S091溝北端に近い丸い穴から出土した在地系と推定される陶器の鉢（570）とS091から出土した砥石（S20）である。570は口縁端部が外折し、外面はロクロ成形による凹凸が顕著である。S20は板状礫の表裏面を研面とし、擦痕がみられる。遺構の帰属時期は、出土遺物と暗渠の構造から近世後半に比定できる。

S092段状遺構、S091溝、S093溝については、平面、断面の観察から、次のような過程を復元できる。

- (1) 基盤層を削り段状に土地を整形する。その際、西壁沿いを段状に削り残し、壁溝（S093溝）を設ける。
- (2) 西壁沿いの段の高さまで削った基盤層ブロックを主体とする土（旧段階盛土）で埋め、北壁沿いを溝状に掘り、暗渠を設ける。
- (3) (2)の段階で機能した後、段状に整形した残りの部分は埋められ、段としての機能はなくなり、埋められた土自体が新たな造成土（新段階盛土）として機能する。

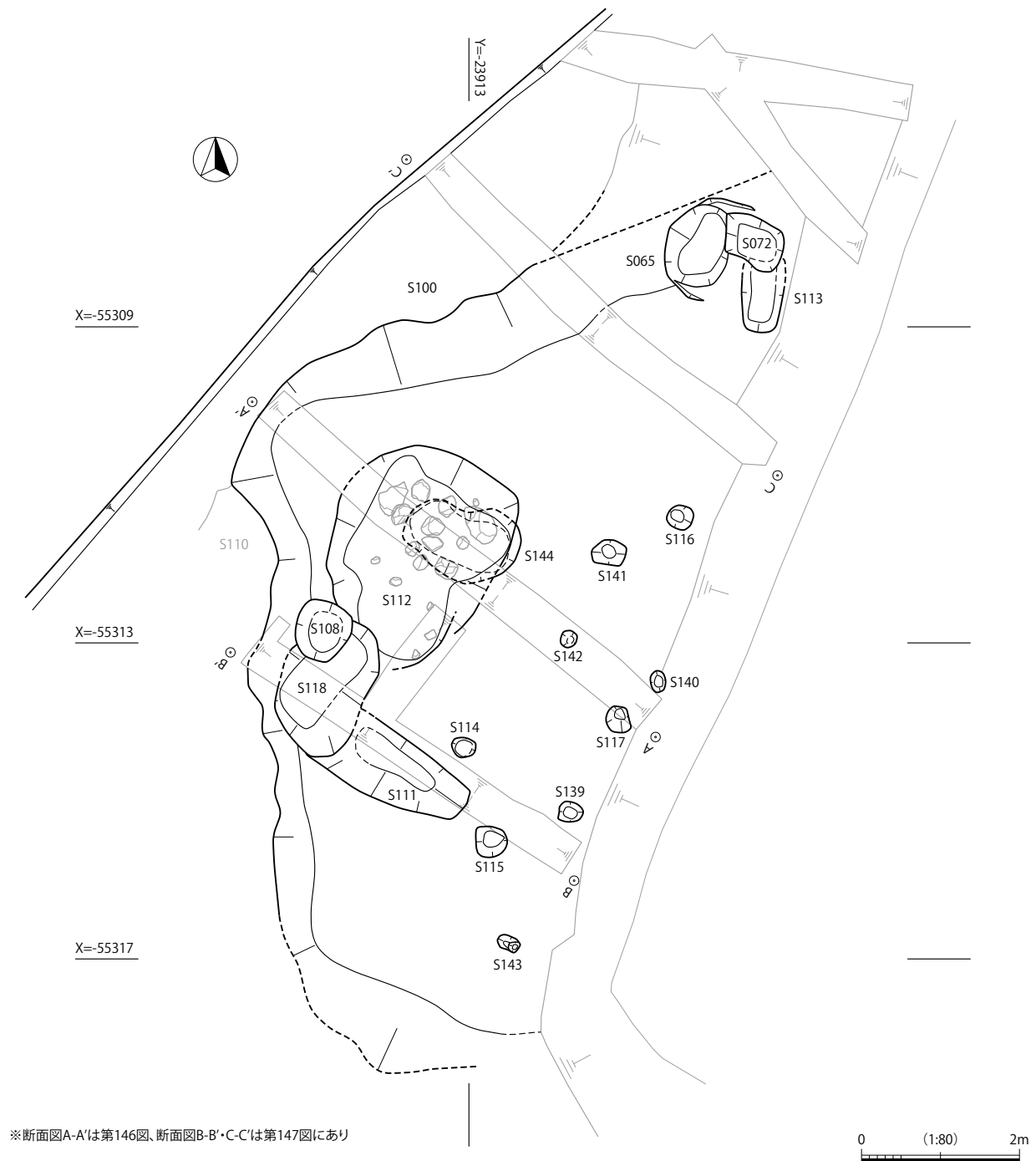
南側に隣接する8区の調査で、S091溝とS093溝の延長上に暗渠（S350）が検出されている。S091溝の延長上で検出された8区S350溝は、底面の標高は8区側にわずかに低くなる形で近似しているが、壁面の観察から、層位的に異なる暗渠であることが確認でき、S091溝は8区に至るまでになくなっていないか、7区と8区の間で未調査部分で東側に曲がっていると考えられる。S093溝の延長上で検出された8区の暗渠（S350溝）は、S093溝より底面の標高が0.75m低く、暗渠ではないS093溝とは同一の遺構ではない。ただ、8区の暗渠（S350）の東側に堆積する明黄褐色土とその下位のシルトの薄層は、S092段状遺構の埋土（第142図B-B'の3～4層）に対照でき、S093溝と8区の暗渠（S350溝）は、S092段状遺構の造成範囲の西端に伴う同時期の遺構であると考えられる。8区の暗渠（S350溝）も7区に至るまでになくなっていないか、7区と8区の間で未調査部分で東側に曲がっ

ていると考えることができる。

S092段状遺構、S091溝、S093溝は、S092段状遺構を北西端として、南東側には現況の宅地があり、その前身となる近世の屋敷地造成に伴うものと考えられる。浸み出す水を溜める穴を掘り、暗渠を設けていることから、単なる造成ではなく、丘陵側から浸み出す水の排水を兼ねて行われたものと考えられる。

S100とこれに伴う遺構群 (第134・144～152図、表10、PL.88～91)

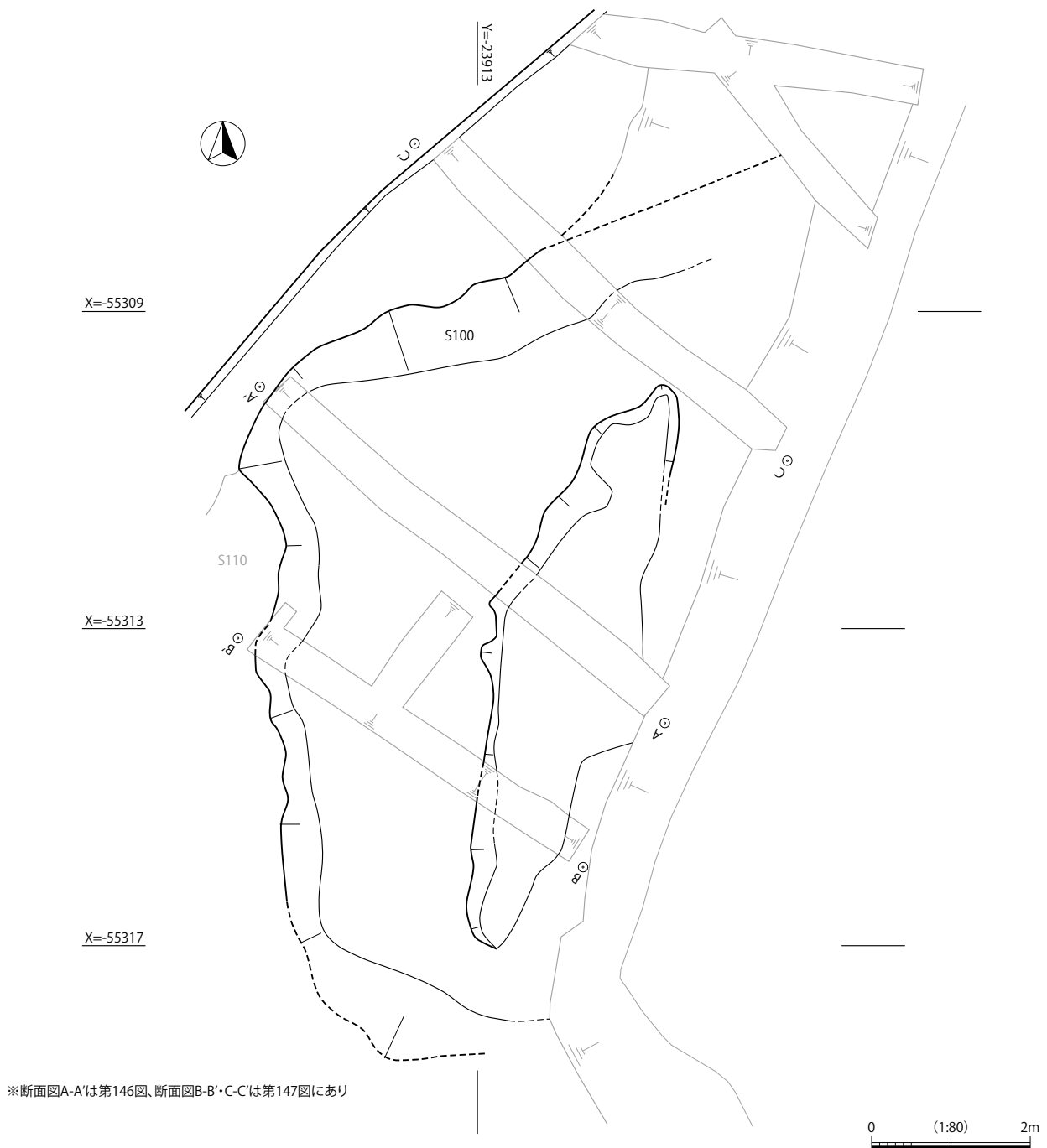
S100段状遺構は、K21～22及びL21～22グリッドに亘り、調査区北側の斜面地に位置する遺構である。表土直下の基盤層において検出した。斜面地を断面L字状に比較的大規模に掘削し、平坦面を造成する。本遺構は後世の改変により概ね東半分、すなわち斜面下位側を失っているが、掘方の平面



第144図 S100段状遺構平面図

形は遺存範囲から勘案すると歪な方形を指向する。掘方の南西側は基盤層である岩盤の風化、樹木根による攪乱の進行により掘方の把握を十分に行えていないが、検出面における規模は、一辺8m程度と想定でき、底面では一辺6.5m程度の規模と考えられる。検出面からの深さは、遺存状況の良い斜面上位側で1.55mを測る（第146図）。本遺構と掘方が重複する遺構としては、西側におけるS110段状遺構、南西側におけるS189段状遺構、S145地下式坑があるが、いずれも本遺構がそれらを掘り込んでおり、これら一連の遺構群の中では本遺構が最も後出することが判明した。

本遺構の底面は厳密には平坦面をなさず、元来の地形の傾斜方向（北西～南東方向）に緩く傾斜する。傾斜により標高がやや低くなった南東側には、貼床と思われる堆積（第146図A-A'セクション35層、B-B'セクション10層、平面的な堆積状況については第145図）を確認したが、底面を平坦に

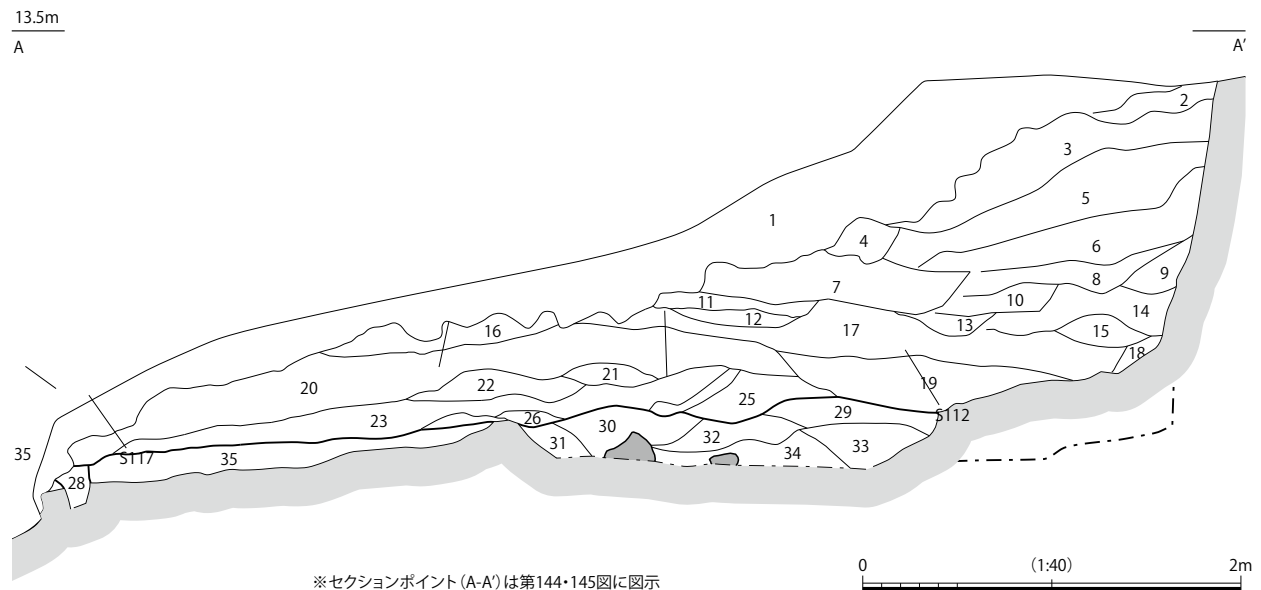


第145図 S100段状遺構掘方平面図

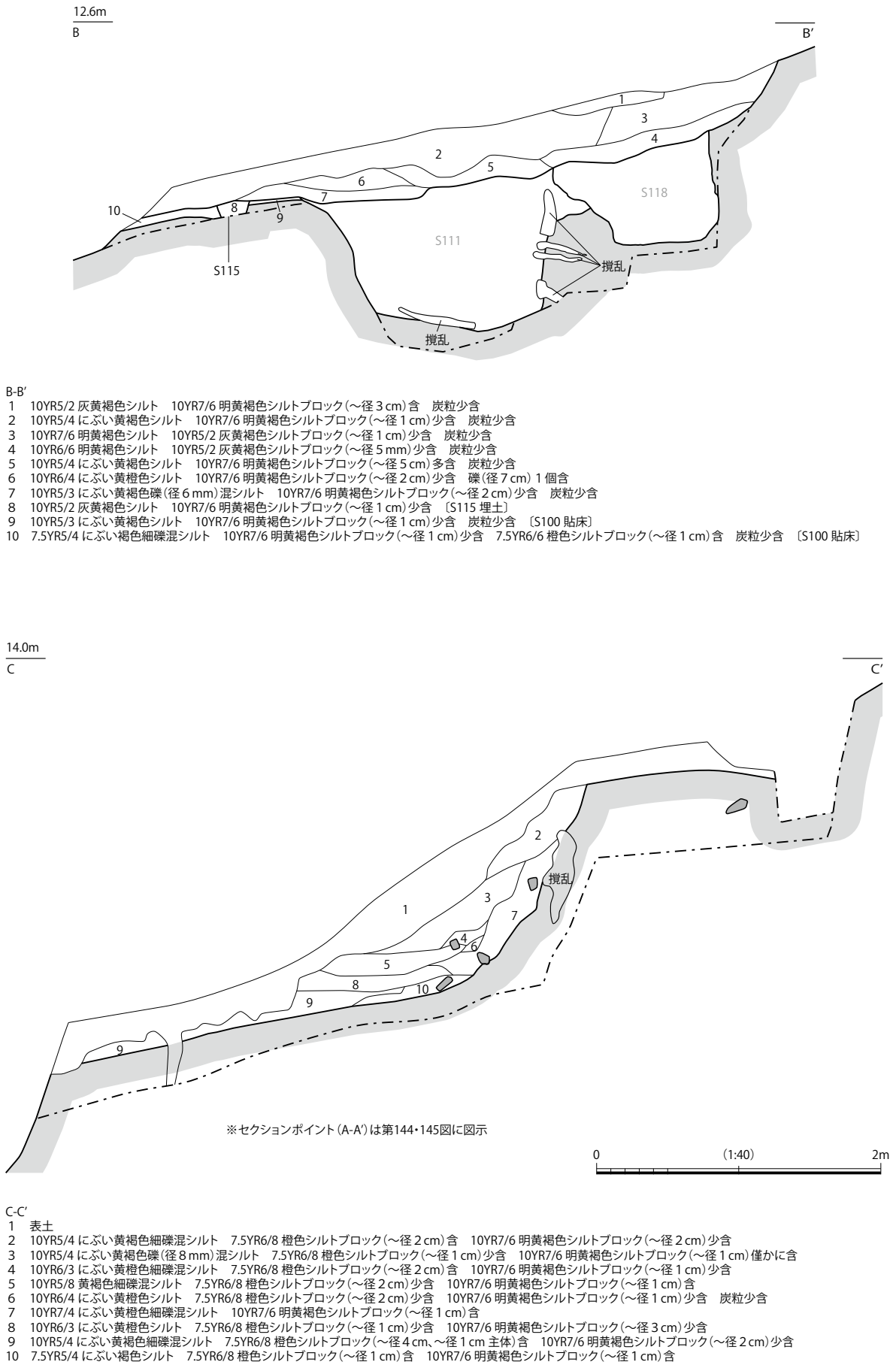
第5章 7区の調査成果

することに拘泥する意識は窺えない。底面においては土坑、ピットを複数基確認した（第144図）。土層断面の所見ではいずれも本遺構底面ないし貼床想定層から掘り込まれていること、さらには本遺構掘方が深く基盤層を掘削する特徴を持つことから、これらの遺構は本遺構と重複関係にあるのではなく、帰属する蓋然性が高いと判断した。ただ、北東側に近接して所在するS075地下式坑近辺の遺構群については本遺構の遺存状況が不良であるため、帰属の判断は掘方範囲の推定に基づいて行っており厳密なものではない。

本遺構底面で検出した遺構は、斜面上位寄り（北西側）に土坑が主に分布し、南東側ではピットが一定数分布する。土坑は、平面形が楕円形、隅丸長方形状を呈するものが主体となるが、規模的には多様である。また、多くが重複関係を持ち分布が集中する傾向にある。平面形が楕円形状の一群においては、出土遺物（銭貨）から土壙墓と判断できるS105と形態、規模共に近似するものがあるが、



第146図 S100段状遺構断面図(1)



第147図 S100段状遺構断面図(2)

出土遺物が皆無であり判然としない。ピット群は、直径が0.2～0.4m程度と小規模であるが、しっかりと掘方をもつものもあり、建物の存在を示唆する。しかし東側の状況が不明なこともあり、調査範囲において明確に建物と判断できる配置状況にはない。これらのうち、主要な遺構の詳細については後述する。

本遺構の埋土は基盤層由来土を主体とする堆積が多くを占め、人為的な埋め戻しが想定される。また、出土遺物は僅少で、帰属時期を窺えるものはない。具体的には古墳時代後期の須恵器片、不明鉄製品等があるが、二次的な出土状況に止まっている。このように判断材料が非常に乏しいが、重複する遺構の中にS145地下式坑があることから、大雑把ではあるが中世後期以降に帰属する可能性が高いと想定している。

以下、底面において検出した主要な遺構の詳細について述べる。

S113 (第134・144・148図、PL.89)

K21グリッドに位置する土壙墓である。平面形は、南北方向に長い隅丸長形状を呈するが、北側の掘方が不明瞭で把握できていない。当該箇所ではS072土坑と掘方を接していた可能性が高いが先後関係は不明である。

検出面における規模は、長軸が遺存範囲で0.72m、短軸は0.53mを測る。底面は水平とは言えず、やや傾斜するが、掘方の断面形は逆台形を呈しており、深さは最大で0.28mである。埋土は、基盤層由来土を主体とし、基盤層との峻別が困難な箇所があった。

本遺構は、後で記載する六道銭と判断できる5枚の銭貨が出土したS105土壙墓と同様な掘方の形態的特徴を有することと、同じ南北方向に近い長軸を持つことから、土壙墓である蓋然性が高いと判断した。

埋土からの出土遺物はなく遺構の帰属時期は明確にできないが、S105土壙墓の年代観やS145地下式坑との先後関係を援用し、中世後期以降と推定しておく。

S065 (第134・144・148図、PL.89)

K21～22グリッドに位置する、平面形が楕円形状を呈する土坑である。掘方の東側は斜面下位に該当するためか不明瞭となる。底面が段掘り状を呈していたか、もしくは複数の遺構が重複する状況を示している可能性が考えられるが、判然としないためここでは一つの遺構として扱う。東側ではS072土坑と掘方を接し、掘り込まれている。

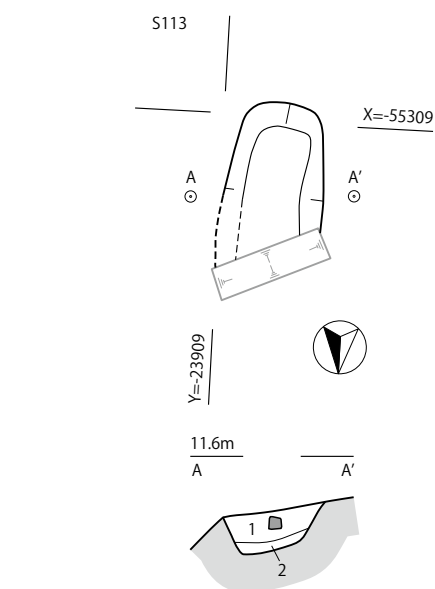
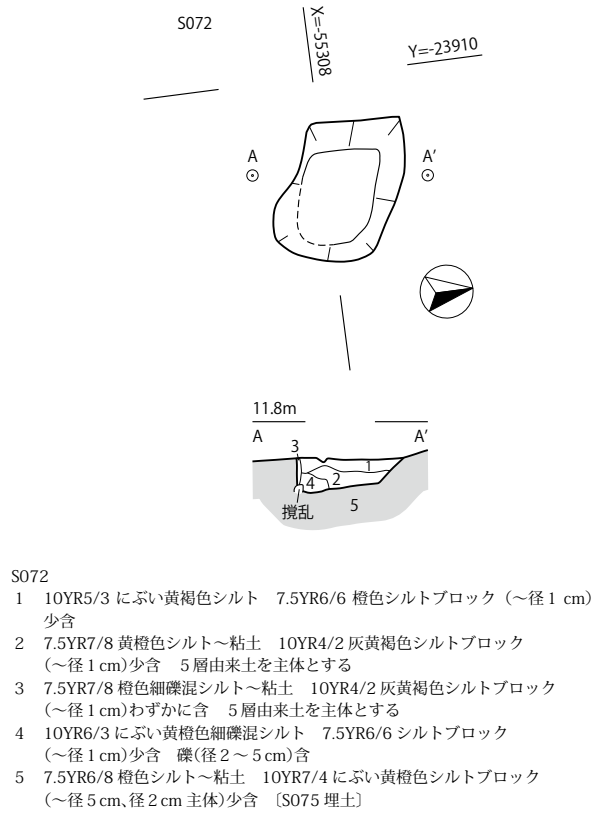
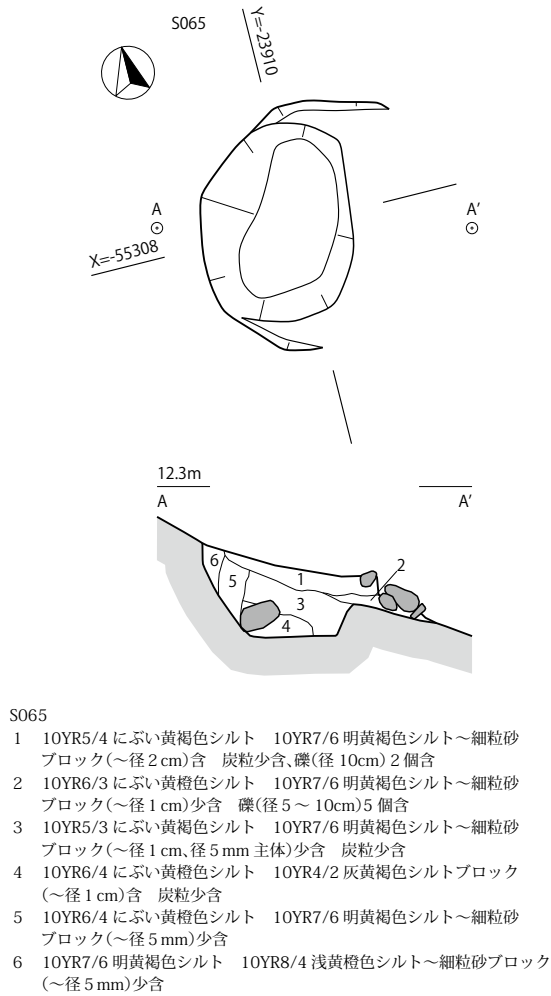
検出面における規模は、長軸1.33m、短軸0.82m、深さは最大で0.39mである。掘方の断面形は逆台形を呈し、底面は概ね平坦で幅0.5m程度を測る。埋土は、基盤層由来土をブロック状に多く含む堆積が主体となり、人為的な埋め戻しが想定される。また、径0.05～0.1m大の基盤層由来の礫を一定数含み、とりわけS072土坑との重複箇所でも多く検出した。ただ、出土状況から意識的な所作によるものとは考え難く、埋没過程において混入したものと判断した。

出土遺物は、埋土中より土器細片が数点出土したが時期比定可能なものはなく、本遺構の帰属時期は不明である。

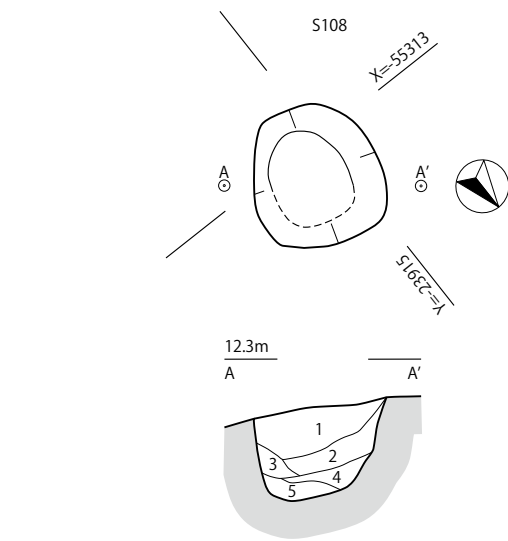
S072 (第134・144・148図、PL.89)

K21グリッドに位置する土坑で、平面形は歪な隅丸長形状を呈する。掘方の西側ではS065土坑と重複し、本遺構が掘り込んでいる。

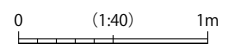
検出面における規模は、長軸0.75m、短軸0.59m、深さは最大で0.2mを測る。掘方の断面形は不整



- S113
- 10YR6/6 明黄褐色シルト～細礫 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック(～径5cm)少含 炭粒少含
 - 10YR6/2 灰黄褐色細礫混シルト 10YR6/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)含



- S108
- 10YR5/2 灰黄褐色シルト
10YR7/8 黄褐色シルトブロック(～径10cm)少含 炭粒少含
 - 10YR5/2 灰黄褐色細礫混シルト
10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径5cm)含 炭粒少含
 - 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト
10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含 炭粒少含
 - 10YR6/6 明黄褐色細礫混シルト
10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含 炭粒少含
 - 10YR7/6 明黄褐色シルト～細礫
10YR6/3 にぶい黄褐色シルトブロック(～径2cm)わずかに含



第148図 S100段状遺構に伴う遺構平面・断面図(1)

な逆台形状で、底面は概ね平坦である。埋土は基盤層由来土をブロック状に多く含む堆積を主体とし、S065土坑との重複箇所においては、基盤層由来の礫（0.05～0.1m大）を含む。ただ、これらは埋土上層を中心に包含するもので、埋没時における混入の可能性が高い。

出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

S108（第134・144・148図、PL.89）

L22グリッドに位置する、平面形が円形の土坑である。S112土坑及びS118土坑と掘方が重複するが、いずれも本遺構が掘り込んでおり、S100段状遺構底面検出の近接する土坑群では最も新相を示す。

検出面における規模は、長軸0.76m、短軸0.69m、深さは最大で0.55mである。底面は平坦ではなくやや傾斜しているが、掘方はしっかりとしている。埋土は基盤層由来土がブロック状に多く混じり、人為的な埋没と考えられる。

遺物は土器片が少数出土したが、帰属時期を比定できるものはなく、本遺構の時期は不明である。

S111（第134・144・149図、PL.90）

L22グリッドに所在する土坑である。平面形は隅丸長形状を呈するが、長辺の両側においては幅が異なり、掘方の北西側が対する南東側よりも広がっている。また、北西側でS118土坑と重複し、掘り込まれている。

検出面における規模は、長軸が2.04m、短軸は北西側の最大値で0.89m、一方の南東側では0.45m程度となり、深さは最大で1.14mを測る。掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面は検出面に対しかなり窄まる形態をとる。底面は、明瞭な平坦面を持たず側面と底面との境界が曖昧となり、平面形も不整な楕円形状を呈し、検出面における平面形と比較してかなり崩れたものとなっている。底面規模は、長軸は復元長で1.05m、短軸は最大で0.38mである。埋土は、全般に基盤層由来土をブロック状に多く含み、人為的な埋め戻しが想定される。

本遺構はその平面形態から土壙墓の可能性を考えたが、出土遺物は僅少で性格、帰属時期ともに判然としない。

S112（第134・144・150図、表31、PL.90・116）

L22グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、近接して分布するS108土坑、S118土坑及びS144土坑と掘方が重なっている。重複箇所の土層断面の所見から、S118土坑やS144土坑より後出し、S108土坑より前に営まれたことが判明した。

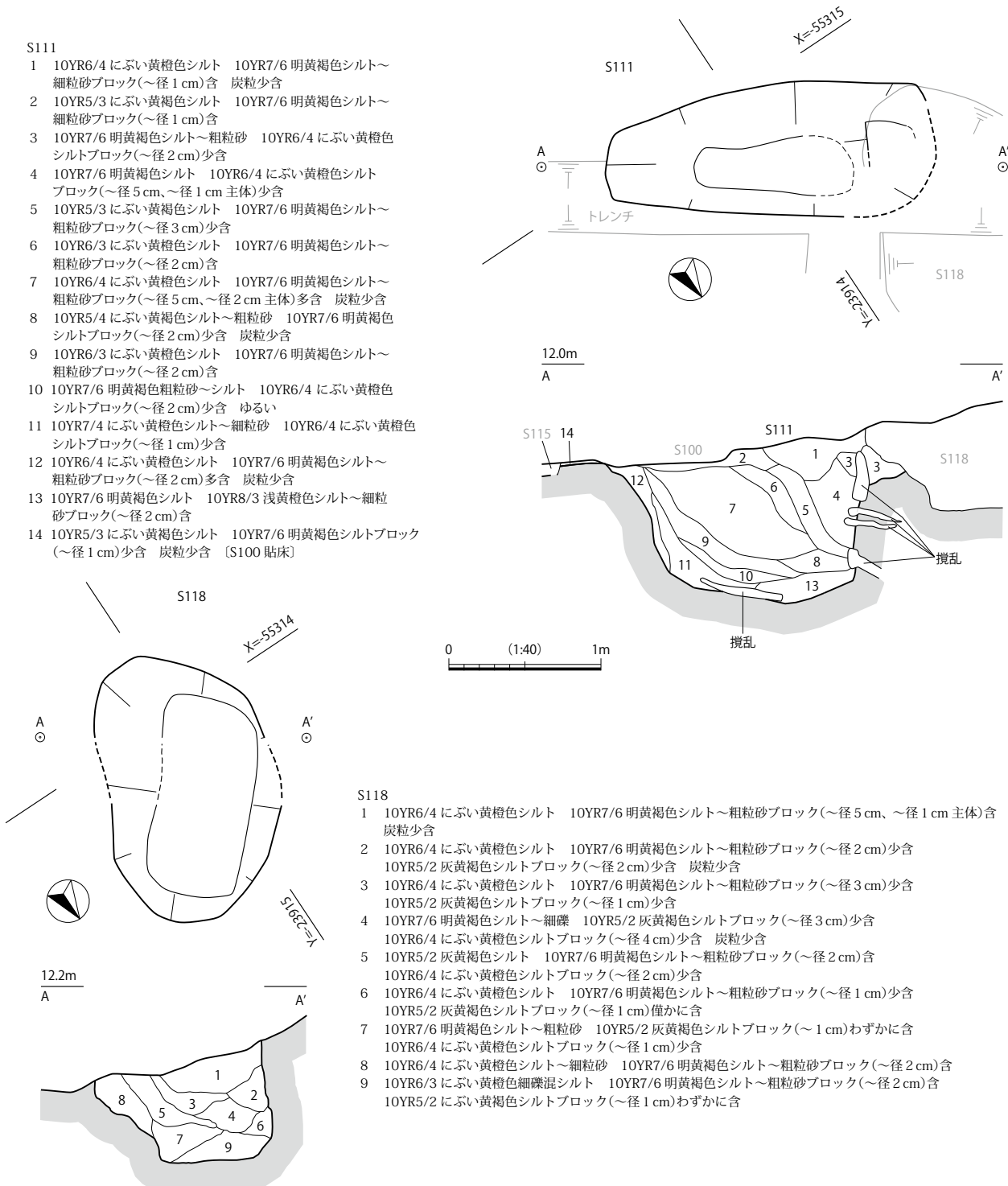
検出面における規模は、長軸が3.15m、短軸が2.21mを測り、S100段状遺構底面にて検出した遺構の中では最も大きい。底面は概ね平坦だが、平面形態は不整な度合いが高くなる。深さは最大で0.47mである。埋土は基盤層由来土をブロック状に多く含む堆積が主となる。また、拳大から人頭大程度の礫がまとまって検出された。図中に礫の分布状況を示したが、平面的には明確な規則性は見出せず、垂直分布的にも底面直上にあるものは、ごく一部でばらつきがあり埋積時の混入である可能性が高い。遺構の性格は不明である。

埋土からは土器細片が少数出土し、そのうち図化が可能な土師器皿1点（571）を図化した。底部から口縁部にかけて直線的に外反しながら立ち上がり、底部には回転糸切り痕を残す。体部には帯状に油煤が付着しており、灯明皿として用いられたと考えられる。遺構の帰属時期についてはこの遺物のみでは詳細不明だが、中世後期以降に比定するS100段状遺構の年代観とは矛盾しない。

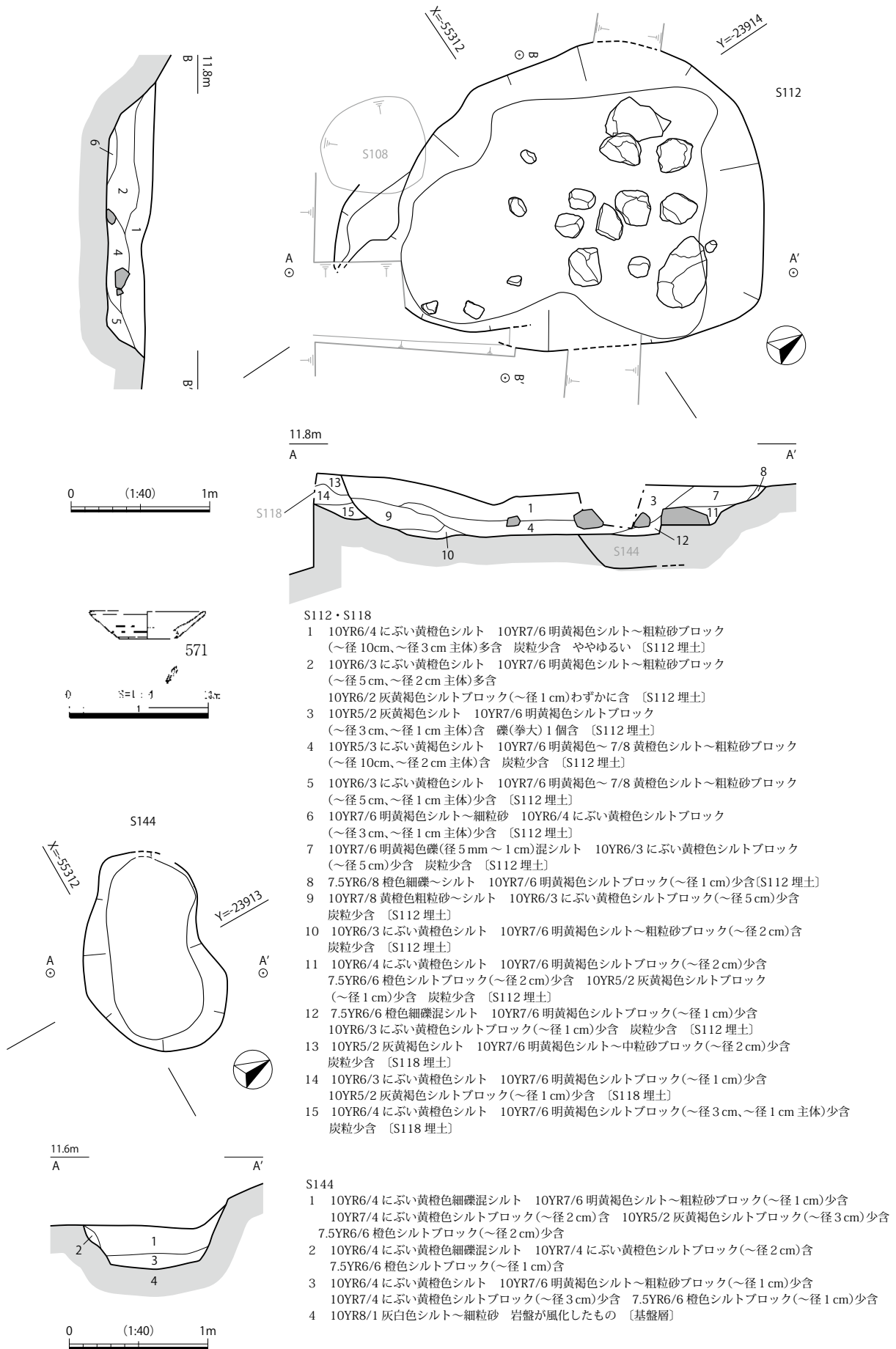
S118 (第134・144・149図、PL.90)

L22グリッドに位置する土坑で、平面形は不整な楕円形を呈する。S108土坑、S111土坑、S112土坑及びS144土坑と一連の土坑群を形成し、S108土坑、S111土坑、S112土坑と掘方が重なる。切り合い関係からS111土坑より後出し、S108土坑やS112土坑よりも古い時期に帰属することを確認した。

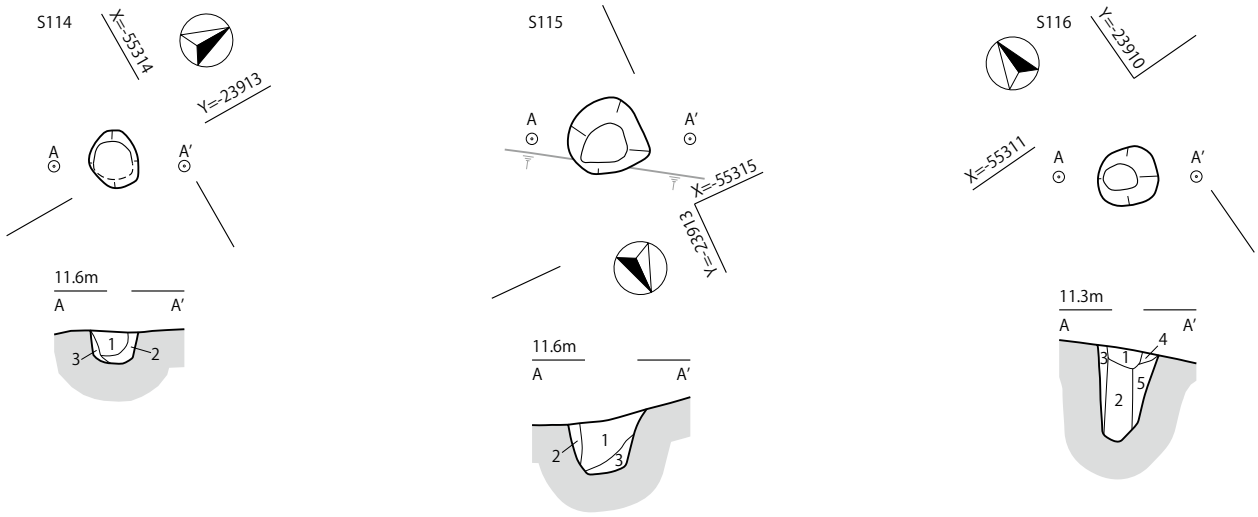
検出面における規模は、長軸が1.59m、短軸が1.12mを測り、深さは最大で0.79mである。底面は概ね平坦で、平面形は隅丸長形状を呈し比較的整っている。底面規模は、長軸が1.3m、短軸が0.61mである。埋土は、他の土坑と同様に基盤層由来土をブロック状に多く含む堆積が主となる。出土遺物



第149図 S100段状遺構に伴う遺構平面・断面図(2)



第150図 S100段状遺構に伴う遺構平面・断面図(3)及び出土遺物



S114

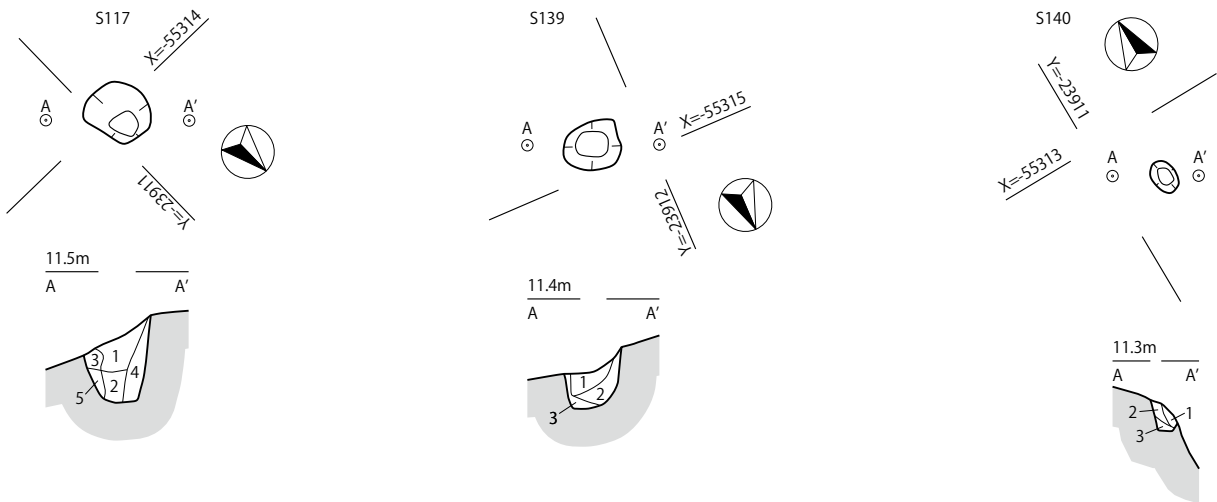
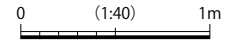
- 1 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/4 にぶい黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含
- 2 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/4 にぶい黄褐色～10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径3cm)多含
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)多含

S115

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含 炭粒少含
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径3cm、～径1cm 主体)含
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～粗粒砂 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)含 10YR4/2 灰黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含

S116

- 1 10YR6/3 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 炭粒少含
- 2 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 炭粒少含
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/8 黄褐色シルトブロック(～径2cm)含
- 4 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/8 黄褐色シルトブロック(～径3cm)多含
- 5 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)含 炭粒少含



S117

- 1 10YR5/2 灰黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径3cm)少含 炭粒少含
- 2 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト～粗粒砂 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含 炭粒少含 ややしまる
- 3 10YR5/2 灰黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径5cm)多含
- 4 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含
- 5 10YR6/4 にぶい黄褐色粗粒砂～シルト 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 ややしまる

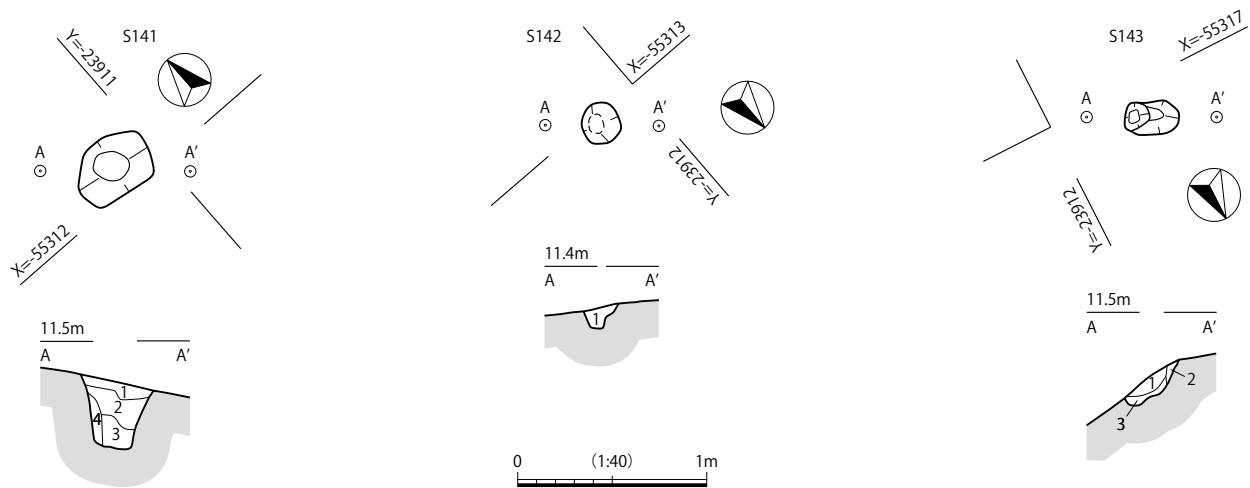
S139

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)僅かに含 炭粒少含
- 2 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色～7/8 黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 炭粒少含
- 3 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色～7/8 黄褐色シルトブロック(～径5cm)少含

S140

- 1 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径3cm)少含 10YR4/2 灰黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)わずかに含
- 3 10YR7/8 黄褐色シルト～粗粒砂 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック(～径1cm)わずかに含

第151図 S100段状遺構に伴う遺構平面・断面図(4)



- S141
 1 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 10YR4/2 灰黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含 炭粒少含
 2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)含 炭粒少含
 3 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含
 4 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含
- S142
 1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 炭粒少含
- S143
 1 10YR5/3 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径5mm)少含 炭粒少含
 2 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含
 3 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色～7/8 黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)含 炭粒少含

第152図 S100段状遺構に伴う遺構平面・断面図(5)

は皆無で帰属時期、性格共に明確な判断材料に欠ける。

S144 (第144・150図、PL.90)

L22グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、S112土坑と掘方のほとんどが重複し、掘り込まれている。

検出面における規模は、長軸が1.43m、短軸が1.03m、深さは0.51mである。掘方の断面形は逆台形を呈し、底面は概ね平坦である。底面の平面形はやや崩れているが比較的整った楕円形で、規模は長軸が1.32m、短軸は0.65mである。埋土は、基盤層由来土がブロック状に混じる堆積から成り、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

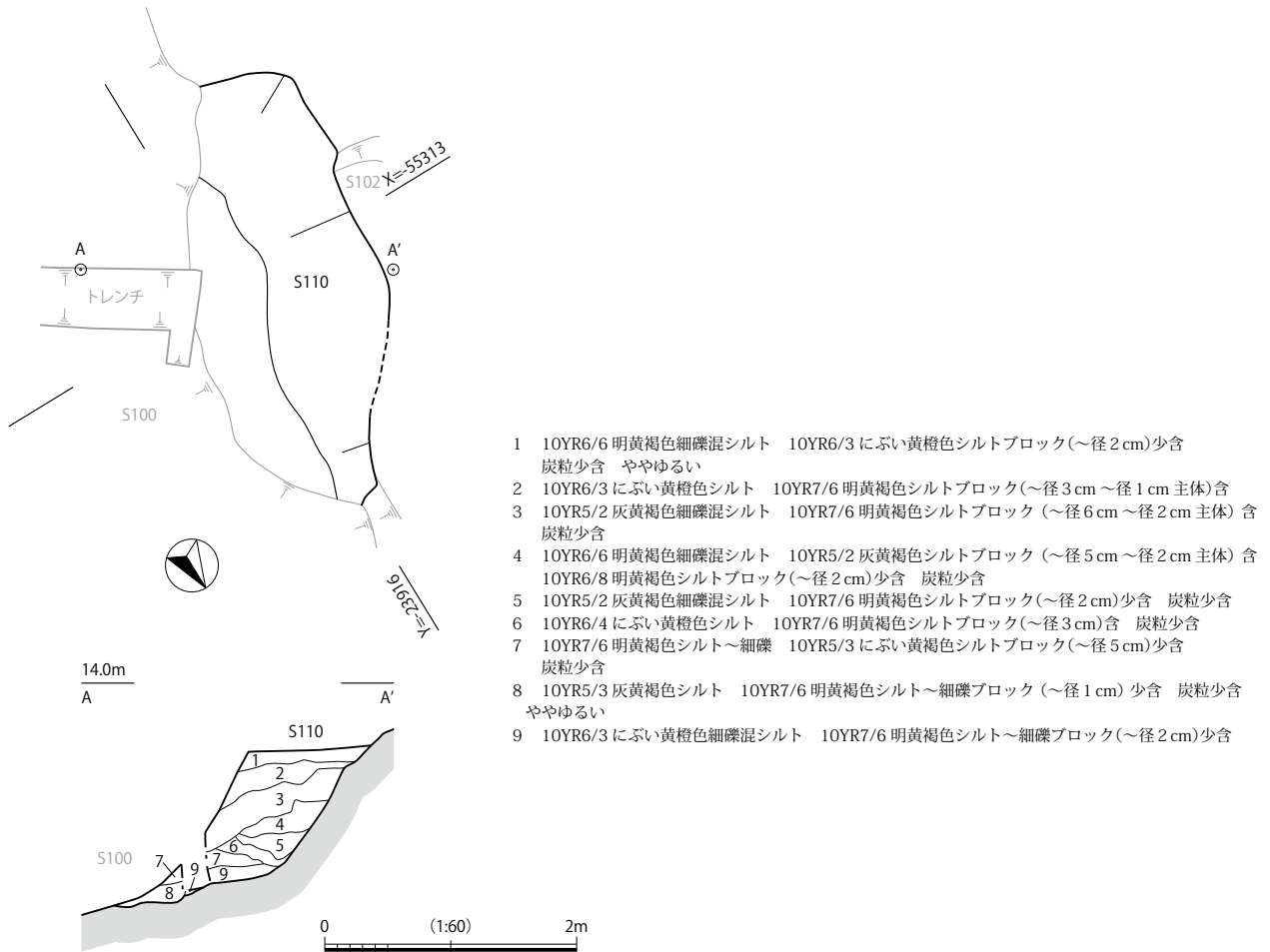
出土遺物は皆無で、帰属時期は不明である。本遺構は規模や平面形態からみると、土壙墓の可能性を示唆するものであるが、判然としない。

S100に伴うピット群 (第134・144・151・152図、表10、PL.90)

S100段状遺構の床面で検出したピットは、S114～S117、S139～S143の9基である。グリッド、規模、出土遺物等は表10に示した通りで、すべてL22グリッドで検出し、埋土からの出土遺物はない。このうちS116及びS117ピットには柱痕跡が見出せ、他のピットにも柱を抜き取ったような痕跡が認められる。直線上に並ぶものもあるが、積極的に建物や塀等を復元できない。しかし、S100段状遺構の東側が近世以降の屋敷地造成で失われていることを踏まえると、東側に展開する建物があった可能性が高い。

S110 (第134・153図、PL.91)

7区北東部のL22グリッドで検出した。S105土壙墓を切り、S102土坑に切られる。東側がS100段状遺構・後世の土地造成により大きく切られるため全容は不明である。検出規模は、南北長3.56m、東



第153図 S110段状遺構平面・断面図

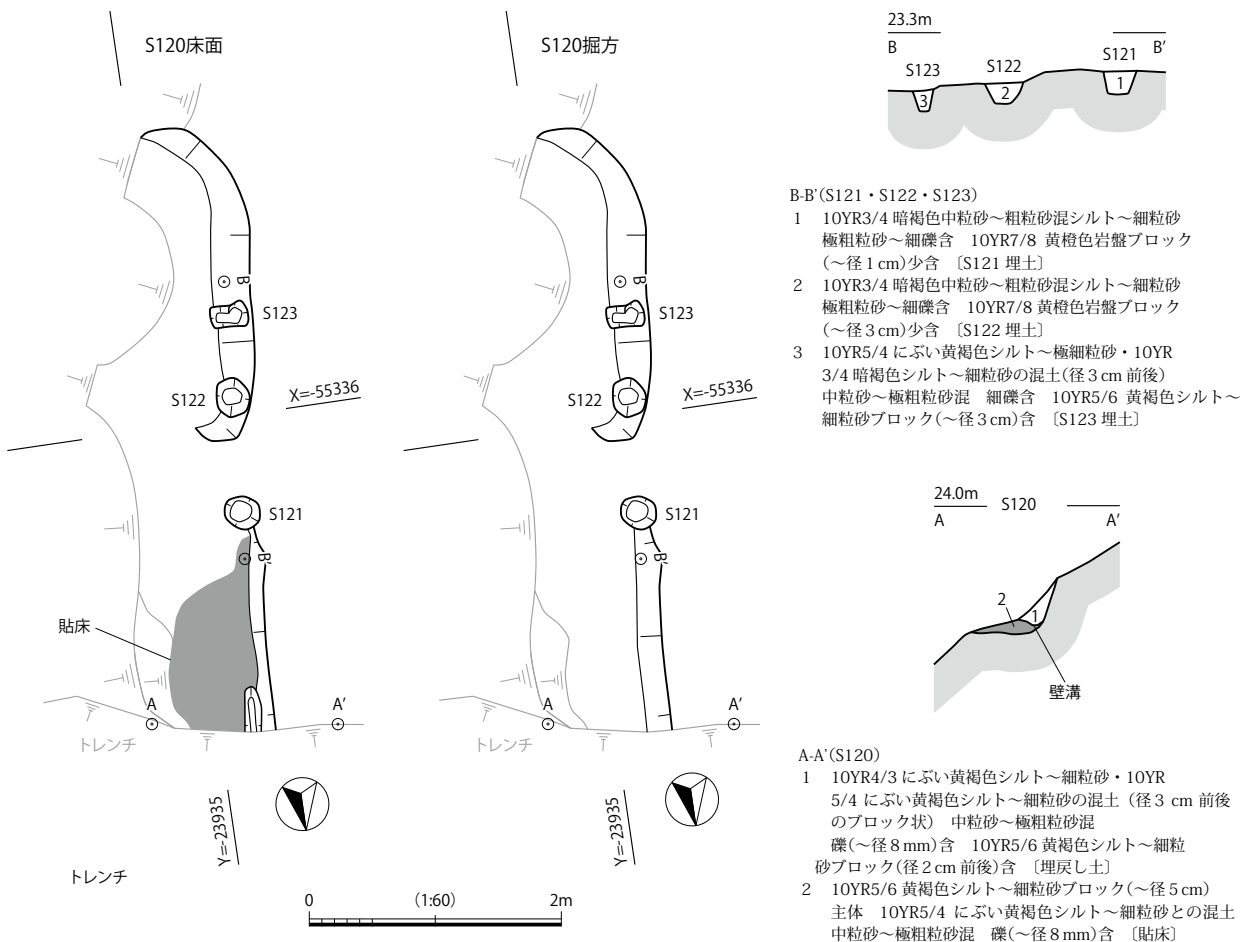
西幅1.59m、検出面から床面までの最大深さ1.29mである。

埋土は第153図の通りである。埋土からの出土遺物は、弥生土器と見られる土器の破片である。遺構の帰属時期は、S105土壙墓を切りS100段状遺構に切られることから、中世後期以降に比定できる。

S120 (第134・154図、表10、PL.91)

7区中央部のN24グリッドで検出した。東側が後世の造成等により切られるため全容は不明である。北側は中央部東西トレンチより北側では検出されず、平面的には西壁と南西端を検出した。残存する西壁、南西隅の形状からは、方形を指向して造成されたと考えられる。検出規模は、南北長4.85m、東西幅1.5m、貼床面までの最大深さ0.33mである。西壁沿いの掘方法面でピット3基(S121～S123)を検出し、貼床が残る西壁沿いの北部で壁溝を検出した。S121～S123ピットを検出したグリッド、規模等は表10に示した。

S120段状遺構の埋土は大きくは、基盤層のブロックを主体とする貼床と基盤層のブロックを含む埋戻し土の2つに分けられる。いずれの遺構からも出土遺物はない。遺構の帰属時期は不明である。



第154図 S120段状遺構平面・断面図

S161 (第130・132・134・155～157・375図、表10・69・70、PL.91・92)

7区中央部東寄りのN23及びO23グリッドで検出した。東側が後世の造成等により切られるため全容は不明であるが、残存する北西隅や南西隅の形状からは、方形ないし多角形を指向して造成されたと考えられる。

検出規模は、掘方が南北長9.5m、東西幅4.65m、床面が南北長6.94m、東西幅3.14m、床面までの最大深さ1.66mである。西壁沿いおよび北西隅、南西隅で壁溝(S165溝)を検出した。部分的に基盤層のブロックを含むにぶい黄褐色土からなる貼床を検出したが、上面での遺構検出が難しかったことから、一部の遺構は貼床をほぼ除去した掘方の床面で検出した。その結果、土坑1基(S172)、ピット14基(S162～S164、S166～S171、S173～S174新、S174旧、S175、S176)を検出した。

ピット14基を検出したグリッド、規模、出土遺物等は表10に示した。ピットからの出土遺物は、S166ピット埋土下部から出土した炭化木材1点である。

S172土坑は、S161段状遺構床面北端のN23グリッドで検出した土坑で、平面形状は長円形で、長軸0.66m、短軸0.57m、床面からの最大深さ0.39mである。

S161段状遺構、S165溝、S172土坑、ピット14基の埋土については、S161段状遺構の貼床面より上位の埋土は、基盤層のブロックを含む明黄褐色土からなる上層と、粗粒の砂を多く含むにぶい黄褐色土と黄褐色土の混土からなる下層に分けられる。上記炭化木材以外の出土遺物は、S161段状遺構埋



A-A'・B-B'・C-C'共通

[S161 埋土上層]

- 1 10YR6/8 明黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(～径8mm)含
- 2 10YR6/8 明黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(～径8mm)含
7.5YR6/8 橙色風化岩盤ブロック(径1～2cm)含 2よりしまり弱
- 3 10YR6/8 明黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(～径8mm)含
7.5YR6/8 橙色風化岩盤ブロック(径1～2cm)多含 3よりしまり弱

[S161 埋土下層]

- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂多混

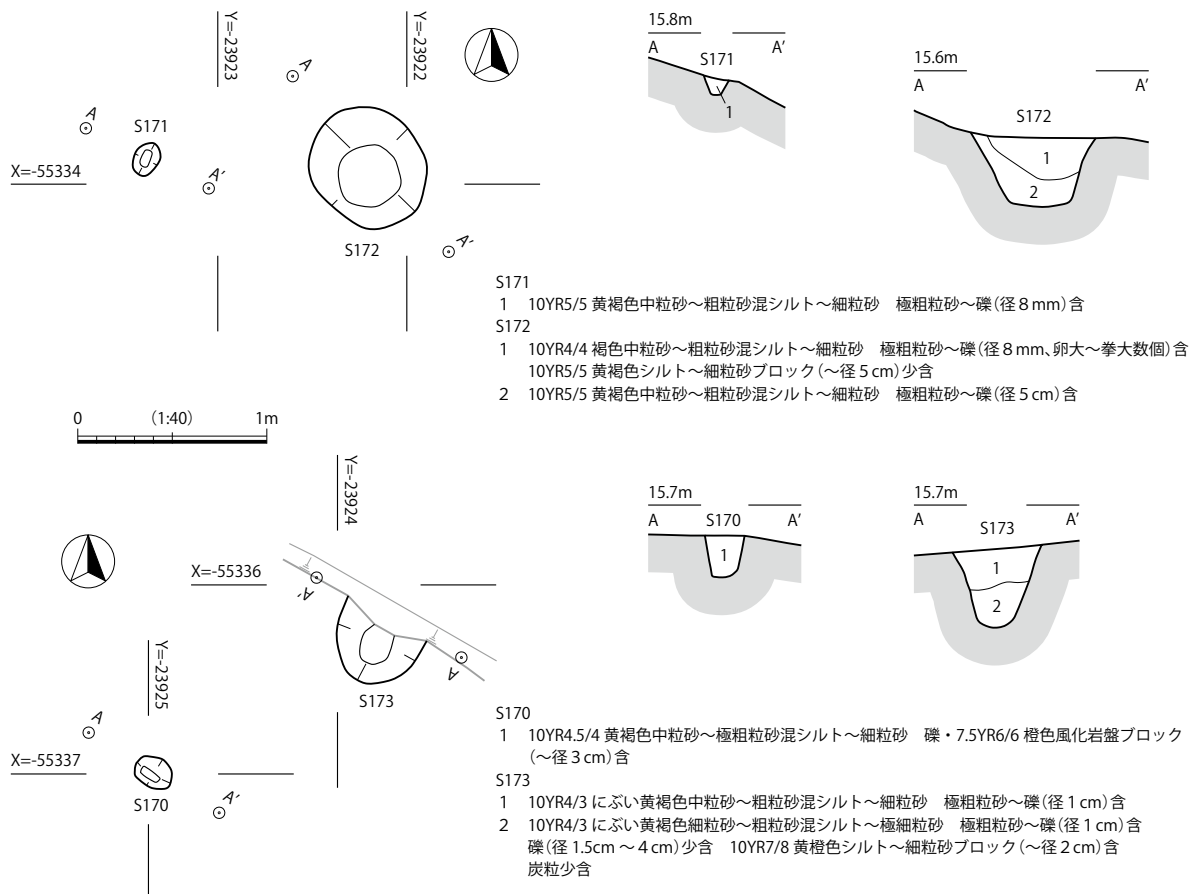
[S165 埋土]

- 5 7.5YR4/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径3cm)少含(所により混土)
- 6 10YR4/4 褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm)含
7.5YR6/6 橙色風化岩盤ブロック(～径3cm)含

[S166 埋土]

- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm)含 7.5YR6/6 橙色風化岩盤ブロック(～径3cm)との混土
炭塊(～1辺2cm以上)含

第155図 S161段状遺構平面・断面図



第156図 S161段状遺構に伴う遺構平面・断面図(1)

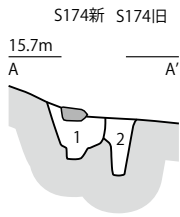
土下層から出土した器種不明の須恵器の破片1点である。

S166ピット埋土下部から出土した炭化木材の放射性炭素年代測定を行ない、 355 ± 20 yrBP、 2σ 暦年代範囲で1460-1527 cal AD (46.5%)、1555-1634 cal AD (48.9%) の結果を得た(第7章第5節参照)。遺構の帰属時期は、この分析結果から、中世後期に比定できる。

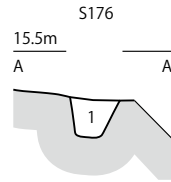
S178 (第134・158～160、表10・31・32・54、PL.92・93・116・117)

7区南東部のO23及びP23グリッドで検出した。S158土坑、S149竪穴状遺構、S155土坑に切られる。東側と床面の一部が後世の造成等により切られるため、全容は不明である。検出規模は南北長10.8m、東西幅3.8m、貼床面までの最大深さ1.55mである。

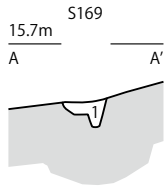
床面で土坑1基(S209)、ピット2基(S190、S205)を検出し、貼床を除去した掘方の底面からピット2基(S206、S207)を検出した。S209土坑は、本遺構床面のO23グリッドで検出した穴で、東側が近世以降の土地造成により切られるため全容は不明で、残る部分の平面形状も不整形である。第158図で示した平面形状は、実際には貼床をある程度除去した段階で検出したもので、実際にはもう少し広く、平面的に検出した部分から外側のトレンチの壁断面でも埋土を確認している。検出規模は、南北1.1m、東西0.96m、検出面からの最大深さ0.26mである。埋土に炭粒、炭片、灰ブロックを多く含み、ブロック土を混入している部分やマーブル状の葉層が入っている部分が確認できる。S209土坑の埋土は、その下位のS178段状遺構貼床と類似することや平面形状が不整であることから、土坑ではなくS178段状遺構貼床を構成する層の1つである可能性がある。貼床は床面の全体にはない。S209土坑埋土からの出土遺物は、酸化焼成の土器細片10点である。



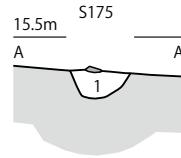
- S174新 S174旧
- 1 10YR4/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm、卵大・拳大各1個)含
下部に10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径3cm)多含
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂の混土(～径5cmのブロック状) 中粒砂～極粗砂 混 礫(～径8mm)含



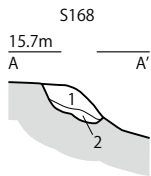
- S176
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径8mm)含



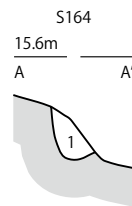
- S169
- 1 10YR4/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(径8mm)含



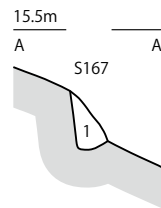
- S175
- 1 10YR4/4 褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm、卵大1個)含
10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～長径5cm)少含



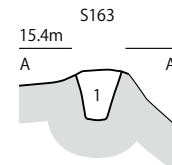
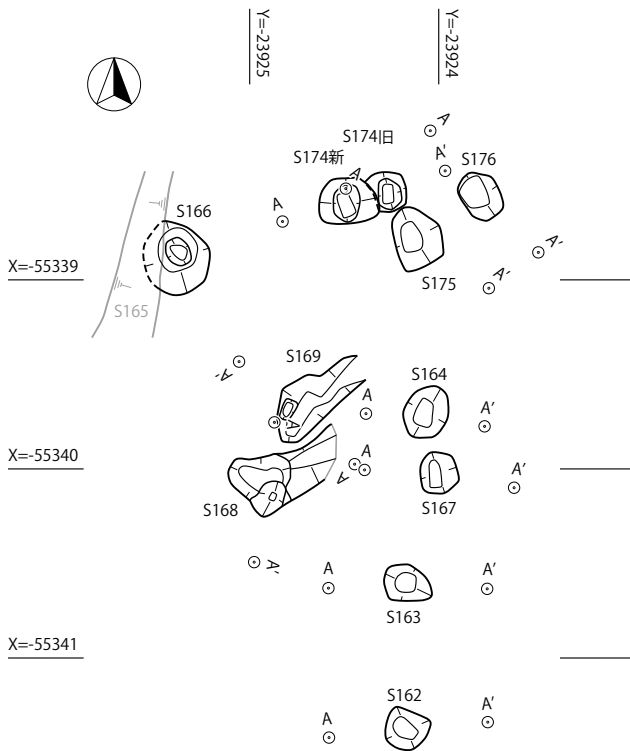
- S168
- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂 混 礫(～径8mm)含
7.5YR6/6 橙色風化岩盤ブロック(～径3cm)含
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm)含
7.5YR6/6 橙色風化岩盤ブロック(～径3cm)含



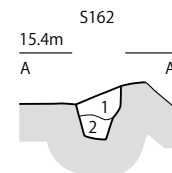
- S164
- 1 10YR4/4 褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(～径5cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混細礫含
7.5YR6/6 橙色風化岩盤ブロック(～径3cm)下部に含



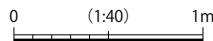
- S167
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～長径1.5cm)含
10YR4/4 褐色シルト～細粒砂ブロック(～径5cm)含・7.5YR6/6 橙色風化岩盤ブロック(～径2cm)少含



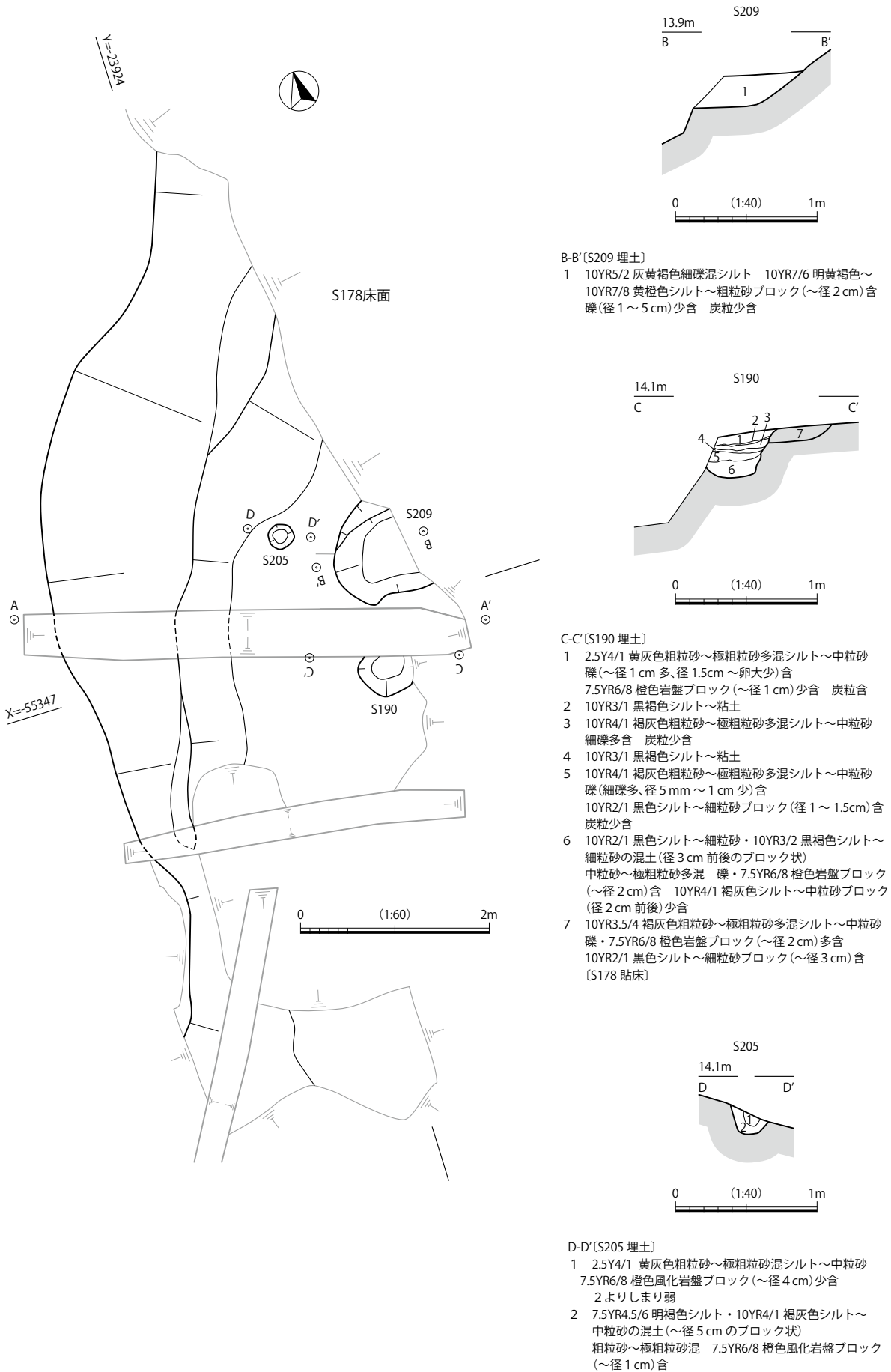
- S163
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～長径1.5cm)含
10YR4/4 褐色シルト～細粒砂ブロック(～径5cm)含



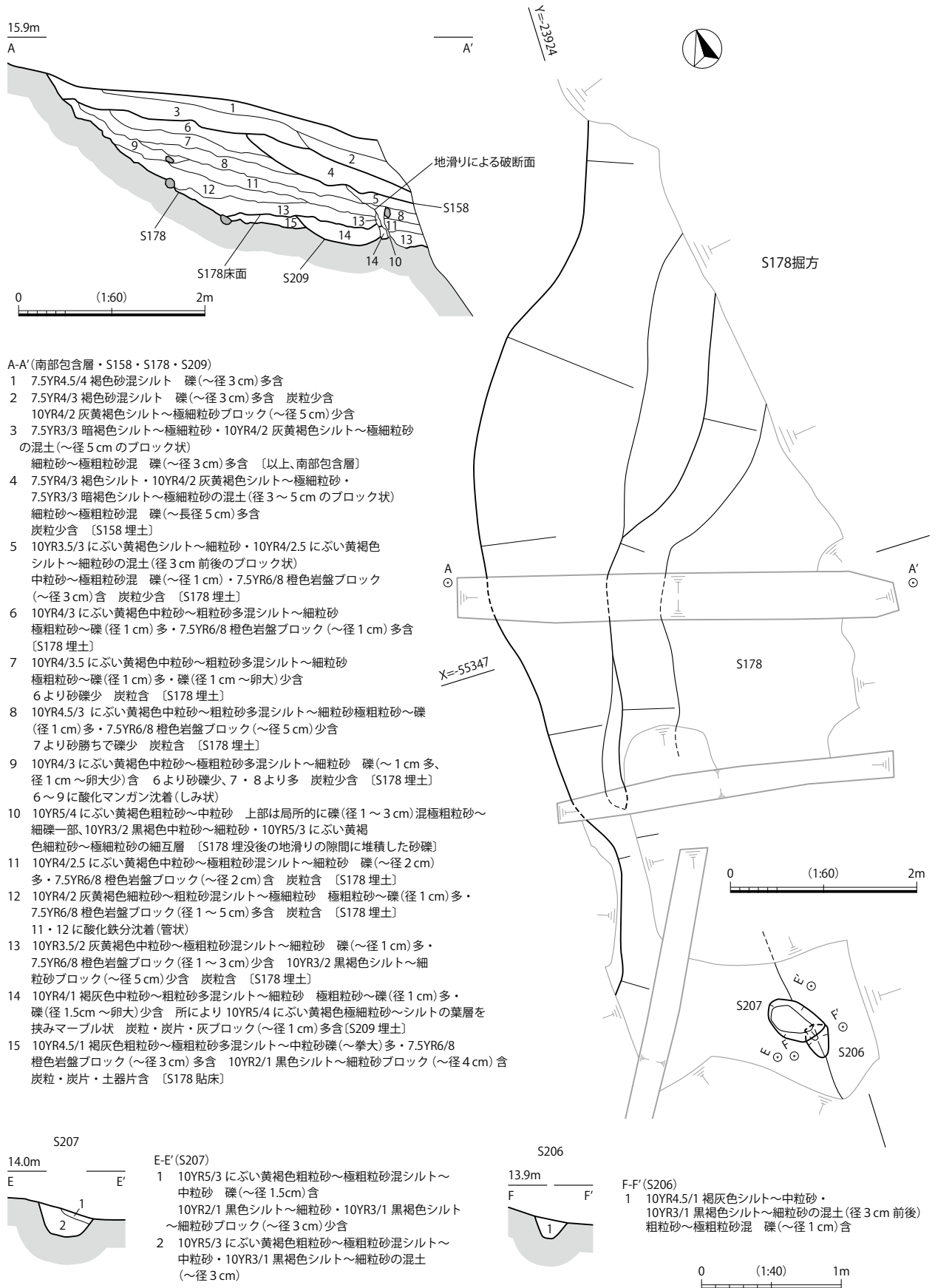
- S162
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土(～径5cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 細礫含
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 7.5YR6/6 橙色風化岩盤ブロック(～径5cm)との混土



第157図 S161段状遺構に伴う遺構平面・断面図(2)



第158図 S178段状遺構平面・断面図

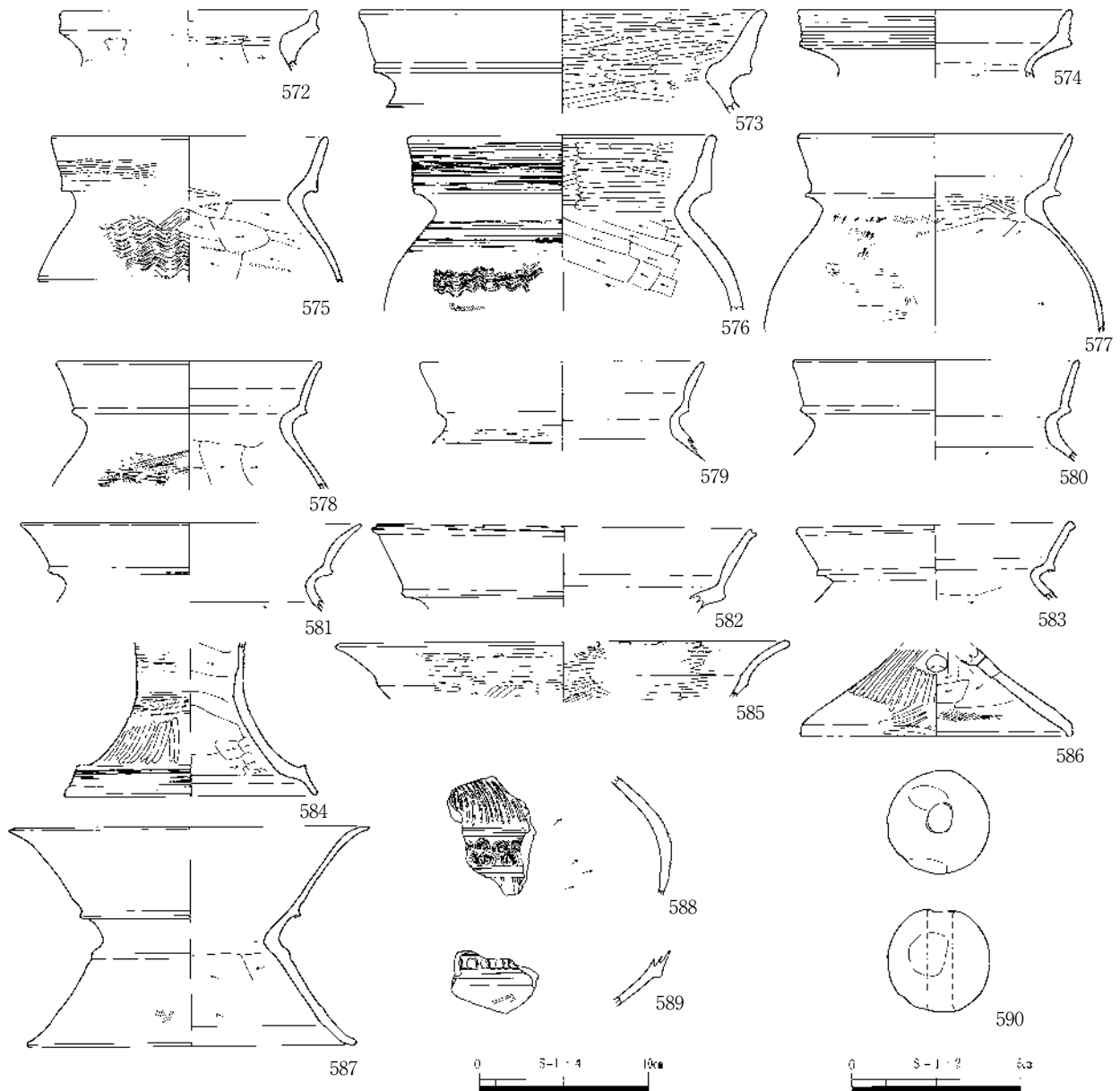


第159図 S178段状遺構掘方平面・断面図

床面で検出したS190ピット、S205ピットと掘方底面で検出したS206及びS207ピットを検出したグリッド、規模等は表10に示した。ピット埋土からの出土遺物はない。

S178段状遺構、S209土坑、S190及びS205ピットの埋土については、第158～159図に示した。中央部に東西方向で設定したトレンチの壁断面で確認したS178段状遺構の埋土は、大きく5つに分けられる。下位から、(1)S178段状遺構貼床、(2)S209土坑埋土、(3)S178段状遺構廃絶時の埋戻し土、(4)S178段状遺構を一定の所まで埋め戻した面で掘られたS158土坑埋土、(5)S178に伴う窪みを最終的に埋め戻した土で、古墳時代前期前葉までの遺物を含む南部包含層の5つである。(3)とその下位層に断層が確認でき、(3)が堆積した後、土坑(S158)が掘られるまでの間に、小規模な円弧すべりがあったと考えられる。

出土遺物は、主に(3)から出土した弥生時代後期中葉以降の弥生土器、古墳時代前期前葉の土師器、土製品である。このうち、19点(572～590)を図化した。572は外反後直立して立ち上がる幅狭の口縁を有した甕である。574は口縁幅が短く、ヨコナデ及び平行沈線が施される甕である。後期中



第160図 S178段状遺構出土遺物

葉に比定される。573は器壁が厚く、口縁部外面がヨコナデ、内面は丁寧なミガキが施される甕である。後期後葉の特徴を示す。575、576は口縁部に多条平行沈線と肩部に波状文や多条沈線文を施文する甕であり、後期後葉に相当しよう。577～581、583は器壁が薄手となり、総じて口縁端部が明瞭な面とならずにやや丸みを帯び、口縁部をヨコナデ、体部にハケが施される甕である。582はやや外反した口縁をもつ壺である。以上は弥生時代終末期から古墳時代前期前葉に比定される。585は屈曲部に稜をもって外反しながら立ち上がる高坏の坏部。586は円形透かし孔をもった高坏の脚部である。584は器台の脚台部で、脚柱部に6条の平行沈線が2段、脚台部に同じく6条の平行沈線が施される。588は貝殻腹縁による刺突文と同心円状のスタンプ文が施される装飾壺の体部、589は同心円状のスタンプ文が施された器台の受け部片であり、後期後葉の特徴を示す。587は橙から浅黄橙色の色調を呈し、薄手の器壁を有する鼓形器台である。弥生時代終末期から古墳時代前期前葉に比定されるよう。590は土玉である。貫通孔を有し、上部の孔縁には粘土が突出したまま未調整である。表面はナデを施し、一部指頭圧痕を残す。

これらの土器は、一定のまとまりをもって出土しているが、時期に幅があることから、埋め戻す際に周辺の土に混じっていた古い時期の土器を混入させていると考えられる。

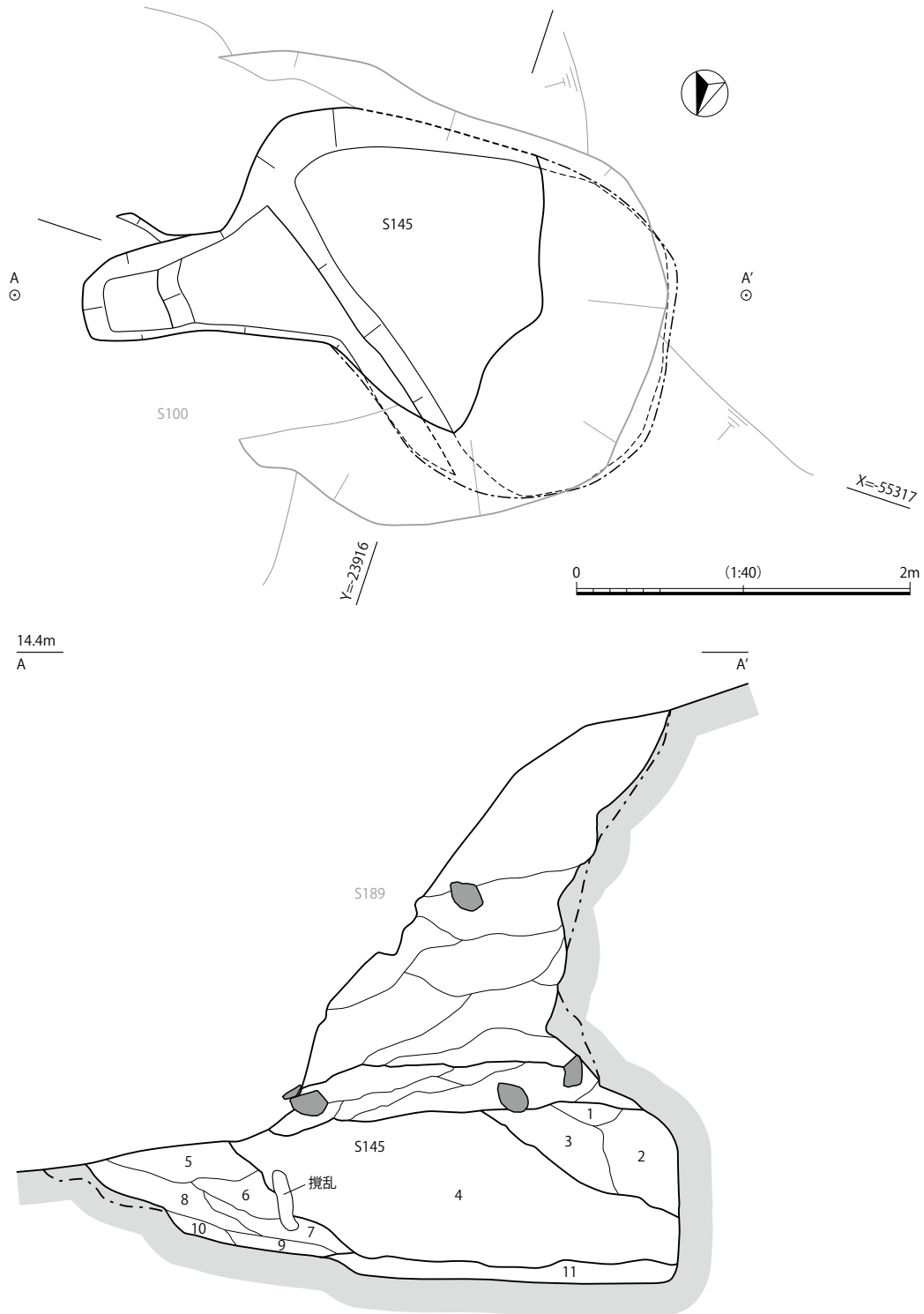
遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代終末期から古墳時代前期に比定できる。

S188 (第134・161図、PL.93)

7区南東部のP23グリッドで検出した。S155土坑、S096道路状遺構側溝、S147地下式坑竪坑、S149竪穴状遺構、S210土坑により周りを切られるため全容は不明である。わずかに残る平面、断面の形状から段状遺構と判断した。検出規模は、南北長3.10m、東西幅1.96m、検出面から床面までの最大

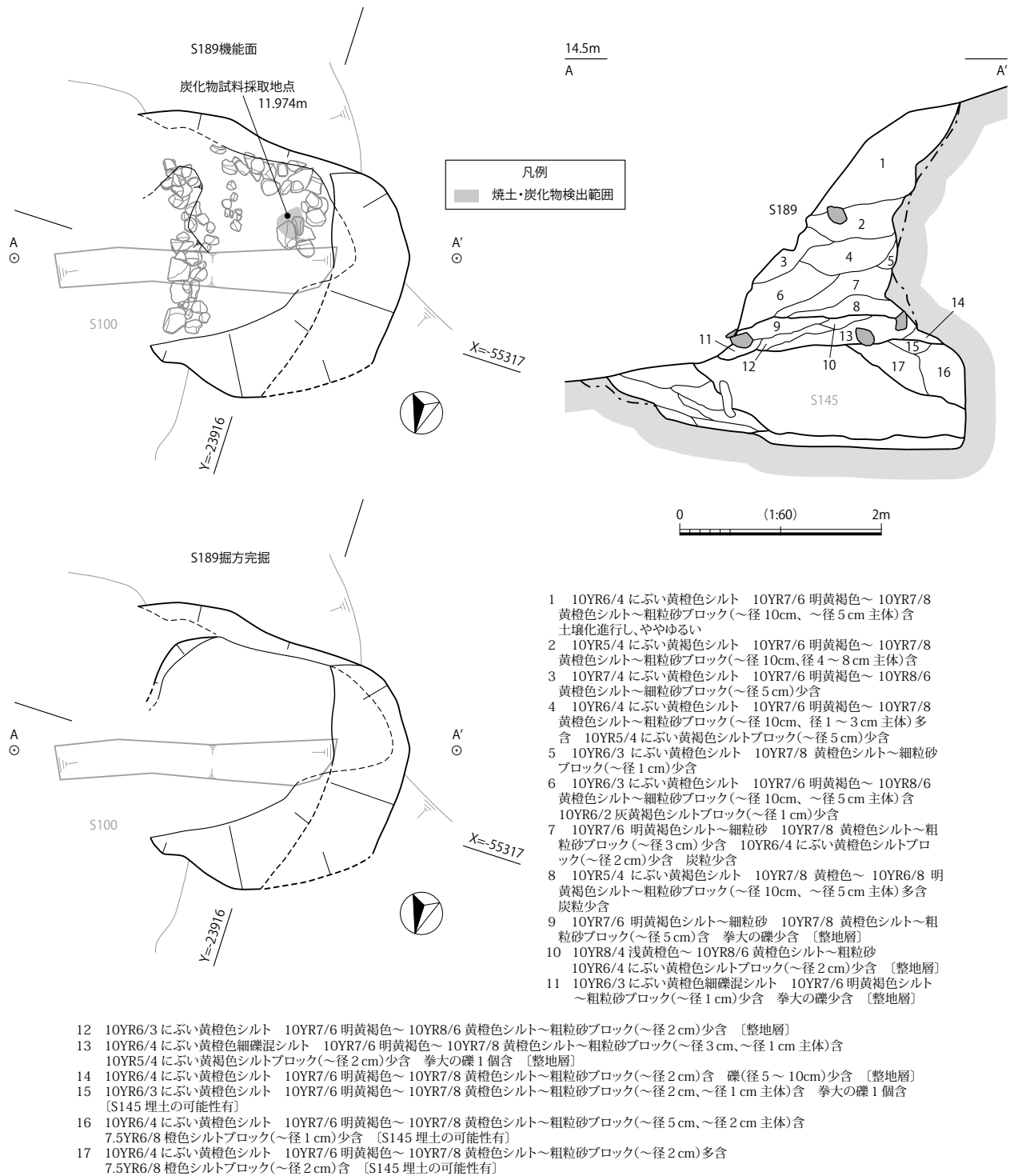


第161図 S188段状遺構平面・断面図



- 1 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色～10YR7/8 黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm、～径1cm 主体)含 拳大の礫1個含
- 2 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色～10YR7/8 黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径5cm、～径2cm 主体)含
7.5YR6/8 橙色シルトブロック(～径1cm)少含
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色～10YR7/8 黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)多含 7.5YR6/8 橙色シルトブロック(～径2cm)含
- 4 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂・10YR7/8 黄褐色シルト～粗粒砂の混土 礫(基盤層由来、径5～10cm)含 S145 天井部崩落土と想定
- 5 10YR6/3 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)少含
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色礫(径5mm～2cm)混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径1cm)少含 ややゆるい
- 7 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂 10YR7/8 黄褐色シルト～細礫ブロック(～径3cm)含 10YR6/4 にぶい黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含
- 8 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径3cm)多含 7.5YR6/8 橙色シルトブロック(～径2cm)少含
- 9 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)含
- 10 10YR5/4 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径1cm)含
- 11 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)含 10YR7/8 シルト～細礫ブロック(～径5cm、～径2cm 主体)含
礫(径5～10cm)少含 S145 機能時の堆積か

第162図 S145地下式坑平面・断面図



第163図 S189段状遺構平面・断面図

深さ0.87mである。

埋土は、ブロック土を含むにぶい黄褐色細礫混シルトを主体とするが、最下層の4層のみ灰黄褐色礫混シルトで、3層が壁溝状に4層を切る状態を観察できる。このことから、4層が貼床で3層が壁溝埋土、1～2層が掘方埋土である可能性がある。埋土からの出土遺物はない。

遺構の帰属時期は、S149竪穴状遺構に切られることから中世後期以前に比定できるが、詳らかにできない。

S189及びS145 (第134・162・163図、表69・70PL.93・94)

L22グリッドにおける斜面地に位置する。S145地下式坑に関しては、天井部を失っているものの掘方形態から、竪坑と断面形がドーム状を呈する地下室を有しており地下式坑と評価する。一方、S189段状遺構はほぼS145地下式坑直上に営まれた遺構で、平面的な規模は小さく疑問点が残るが、斜面を断面「L」字上に掘削している点を重視し、ここでは段状遺構として報告する。

土層断面の所見から、S145地下式坑の天井部崩落、埋没後にS189段状遺構が構築されている。両遺構掘方は平面的にほぼ重なることから、互いの関連性が窺えるが具体的には判然としない。以下、各遺構の詳細を述べる。

S145 (第134・162図、PL.94)

既述したとおり天井部が崩落しているが、掘方平面形から「竪坑」「竪坑と地下室との連結部」「地下室」の各部位が確認できることから、地下式坑と判断した。竪坑は、地下室からみて東側より掘り込まれ、そこから概ね西方向、すなわち斜面に向かって連結部が延び、地下室に達しており、地下室は丘陵斜面裾を横位から穿つ形で構築されている。竪坑は、地下室の中心軸よりも南側にずれた位置に連結する。

竪坑掘方は、S100段状遺構の造成により大きく掘削され、遺存状況は不良である。平面形は隅丸形状を呈し、検出面における規模は、短軸は0.53m、長軸は失われており不明である。底面は長軸が0.37m、短軸が0.34mを測り、地下室方向へと緩傾斜しており、深さは0.17～0.39mとなる。

竪坑と地下室との連結部は、竪坑底面から緩い段(2段)を伴いつつ傾斜して延び、地下室へと至る。平面形は地下室方向へ幅が広がる形態を示し、検出面における幅は0.56m、地下室との境界では0.94m、底面においては0.37～0.91mとなる。竪坑側から数えて2つ目の段は平面的にみると明らかに地下室内に入っているが、ここでは構造上の所見を重視し当該箇所の上端までを連結部とする。

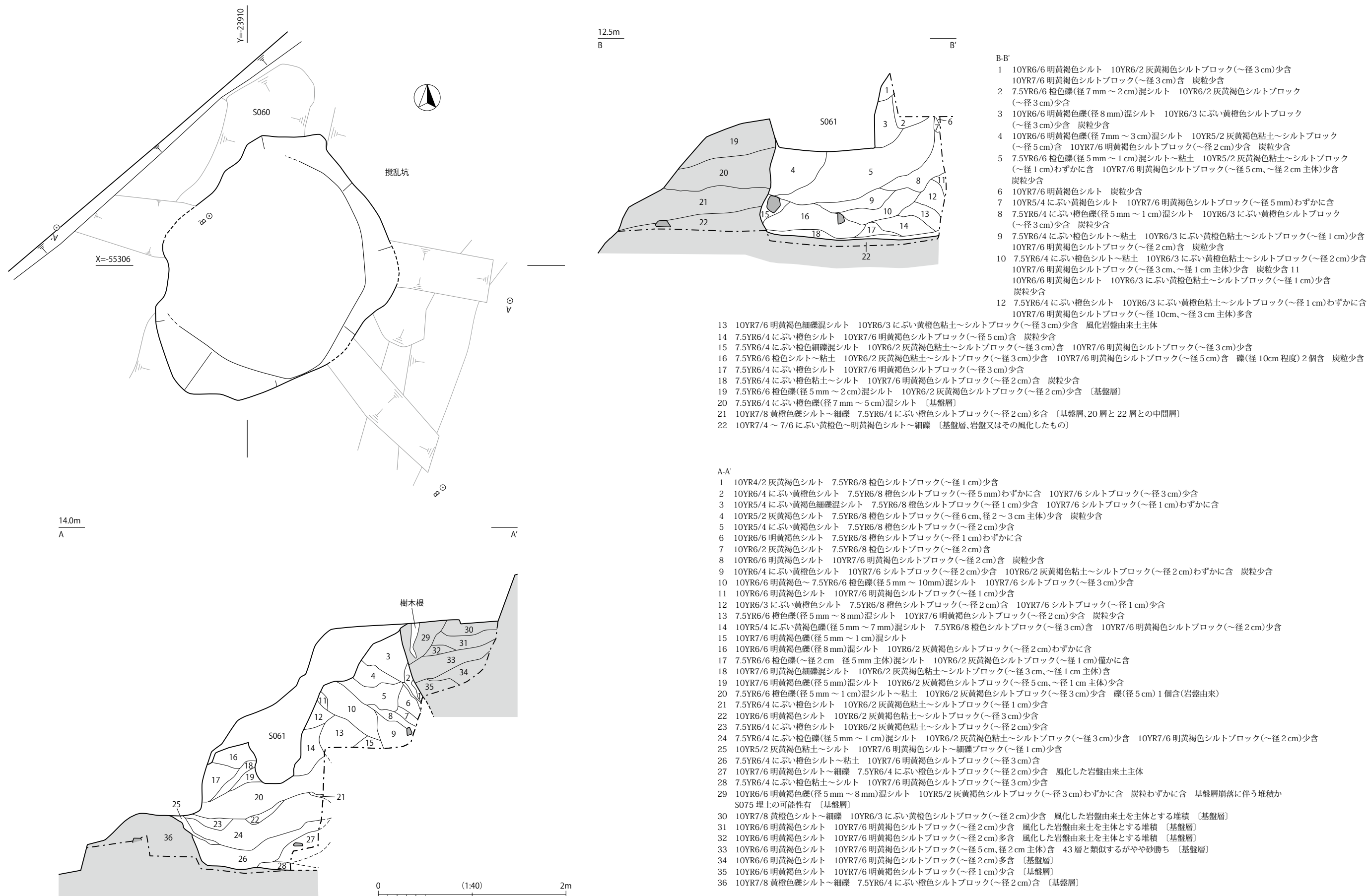
地下室の平面形は歪な楕円形状を呈し、竪坑～連結部の軸とは合致しない。地下室の平面形は南側壁でつぶれたような形態を採り、一方では北側及び北西側へ袋状に広がるように掘削される。このような歪な形態となった理由として、南側壁は硬い岩盤が比較的広範囲に露出しており、南側へ地下室を拡大することが出来なかった可能性が指摘できる。その分、北西側から北側へ掘り広げることで地下室の広さを確保した可能性が高い。掘方の規模は最大で長軸2.91m、短軸1.96mである。底面における規模は、長軸が2.58m、短軸が1.65mを測り、概ね平坦である。

埋土は11層に分層した。このうち、4層は基盤層である風化岩盤由来の堆積で、崩落した天井部の可能性が高い。1～3層については天井部崩落に伴う堆積の可能性もあるが、本遺構の上に構築されたS189段状遺構の床面整地に伴う可能性がある。詳細は後述する。その他の堆積は、11層が地下室開口時、5～10層は竪坑が埋没した際の堆積と理解でき、その後に天井部が崩落したと復元される。

出土遺物は僅少で、須恵器の甕片が1点出土したのみである。帰属時期比定の参考となる出土資料は無いが、中世前期帰属の可能性を持つS189段状遺構の年代観から中世前期以前帰属と推定される。

S189 (第134・163・375図、表69・70、PL.93・94)

既述のとおりS145地下式坑埋没後に営まれる。斜面を大きく掘削し、概ね平坦な機能面を造成するものである。掘方の平面形は楕円形を半裁したような形状で、検出規模は長軸が2.78m、短軸が2.62m、深さは最大で2.53mである。本遺構埋没後、S100段状遺構により掘方の一部が掘削を受けたと考えられるが、遺構が大きく損なわれた状況には至っていない。



第164図 S075地下式坑平面・断面図

本遺構埋土のうち、最下層を構成する9～14層の上面において、直径0.25m程度の範囲に亘り、被熱痕跡及び炭化物や焼土を検出した（平面図上）。そこから当該面が本遺構の機能面、すなわち床面であると判断し、9～14層は整地に伴う堆積の可能性を考えた。また、同層中においては礫を多数検出し、平面図上に示したのは、その配置状況である。礫はいずれも基盤層由来のもので、拳大程度が主体となるが大きさは均一性を欠く。礫群は、平面「コ」字上に近い状態で帯状に配されるが、その手法は非常に粗雑であり、何らかの構造物を指向したとは考え難い。したがって礫群は床面の安定、強化に供されたと想定している。また、上述した整地層よりも下位に堆積する15～17層については、先行する遺構であるS145地下式坑埋土（地下式坑天井部の崩落土）の可能性が考えられるが、本遺構床面整地の際、間隙に入れられた可能性も指摘でき、いずれとは判断し難い。

床面の平面形は掘方と同様、半裁した楕円形状を示し、奥側（西側）がやや狭まる形状を採る。底面規模は、長軸2.29m、短軸2.09mを測る。被熱痕跡範囲は奥側のほぼ中央に認められる。

上述したように被熱痕跡範囲中においては、焼土、炭化物を伴っており、当該箇所では火を焚いたことは明白である。そこで、検出した炭化物の一部を試料として採取し放射性炭素年代測定を実施したところ、 830 ± 20 yrBP、 2σ 暦年代範囲で1170-1258 cal AD (95.4%)の結果を得た（第7章第5節参照）。

本遺構からの出土遺物は皆無であり、具体的な機能など詳細は不明であるが、上記分析結果と遺構の切り合いより中世前期帰属の遺構と考えておきたい。

(3) 地下式坑

S075（第134・164図、PL.94・95）

K21～22グリッドの丘陵裾部に位置する大型の土坑で、平面形はやや不整な楕円形を呈する。S061土墳墓、S076土坑と掘方が重複するが、いずれも本遺構が掘り込まれており先行する。

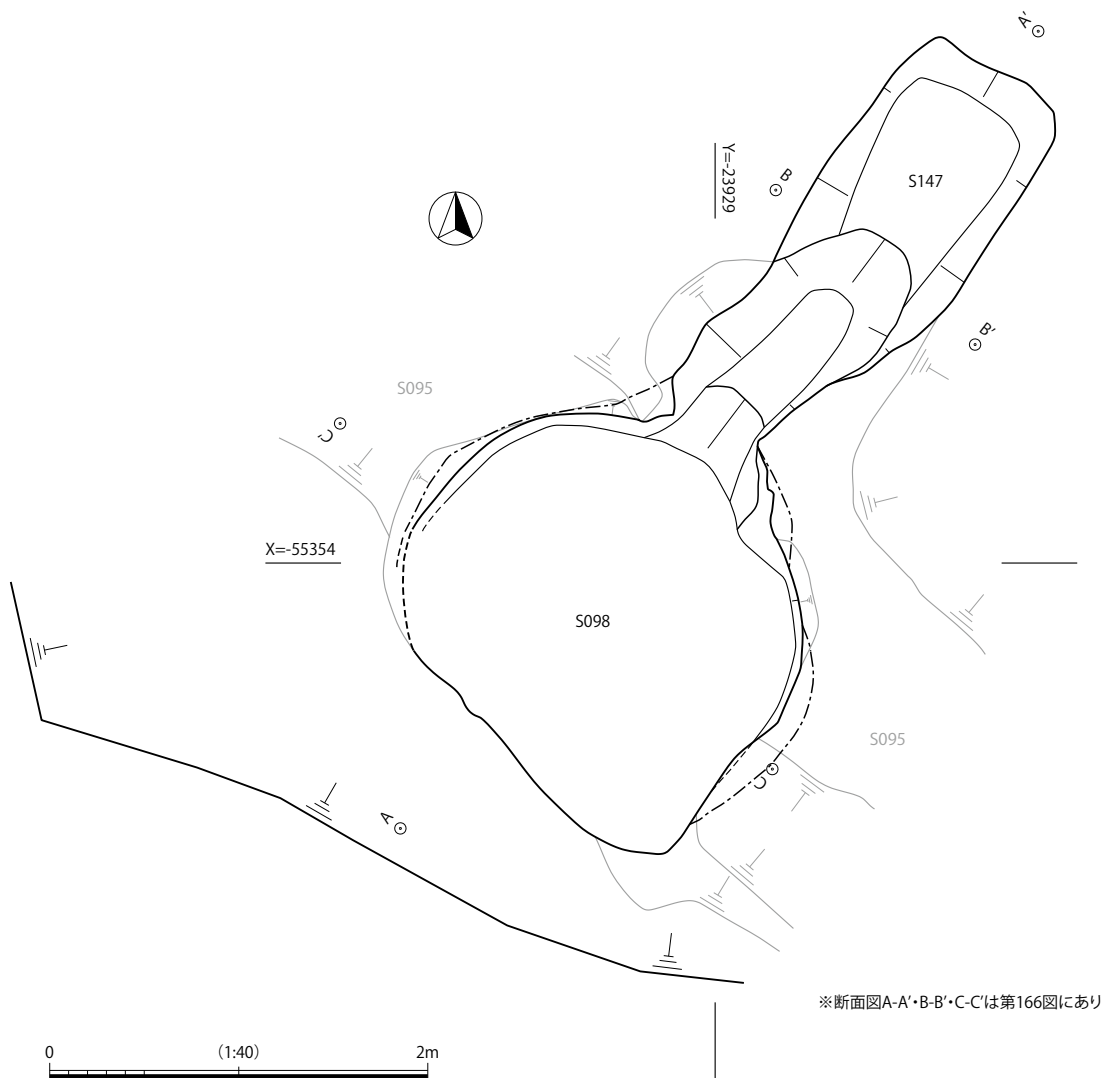
検出面における規模は、長軸が3.09m、短軸が2.31m、深さは最大で2.35mを測る。掘方の断面形については、斜面上位側（北西側）に底面へ向けて広がる袋状を呈する点に特徴がある。当該側は調査区際であり、かなりの深さを有するため作業安全面を考慮し完掘を途中で断念した。底面は平坦で、平面形は北西から南東方向に長軸を採る楕円形と想定され、掘方上端とは異なる軸方向となる。底面規模は短軸が2.22mである。埋土は基盤層由来土を主体とする堆積が多数を占め、基盤層との峻別が困難な箇所がある。底面には基盤層に由来しない明黄褐色シルトブロックを含むにぶい橙色粘土～シルトの薄い堆積（A-A' セクション18層、B-B' セクション28層）が確認できる。

上述した規模や掘方の形態的特徴から勘案し、本遺構を地下式坑における地下室と判断した。すなわち、斜面下位側（東側）に現存しないが堅坑や連結部が位置し、斜面上位側へ地下室を掘り広げ、構築する想定である。埋土最下層であるにぶい橙色粘土～シルトの薄い堆積は、機能時に堆積したものと考えられる。

本遺構からの出土遺物は、土器細片が少数出土したに止まり、詳細な帰属時期については不明である。

S098・147（第134・165・166、PL.95・96）

調査区南端部のP23～24グリッドで検出した。全体的に後世の道路の造成等により削られ、天井部は崩落している。堅坑にS147、地下室にS098の遺構番号を付けて調査を行なった。S147堅坑の平面形状は長方形で、長軸2.33m、短軸0.57～0.95m、検出面からの最大深さ1.38mである。S098地下室については、調査区の壁面に近く崩落の危険があったため、奥壁を完掘しておらず、床面の約2/3



第165図 S098・147地下式坑平面図

を検出した。そのため地下室の平面形状は詳らかではないが、検出した部分から横長の長円形と推定できる。

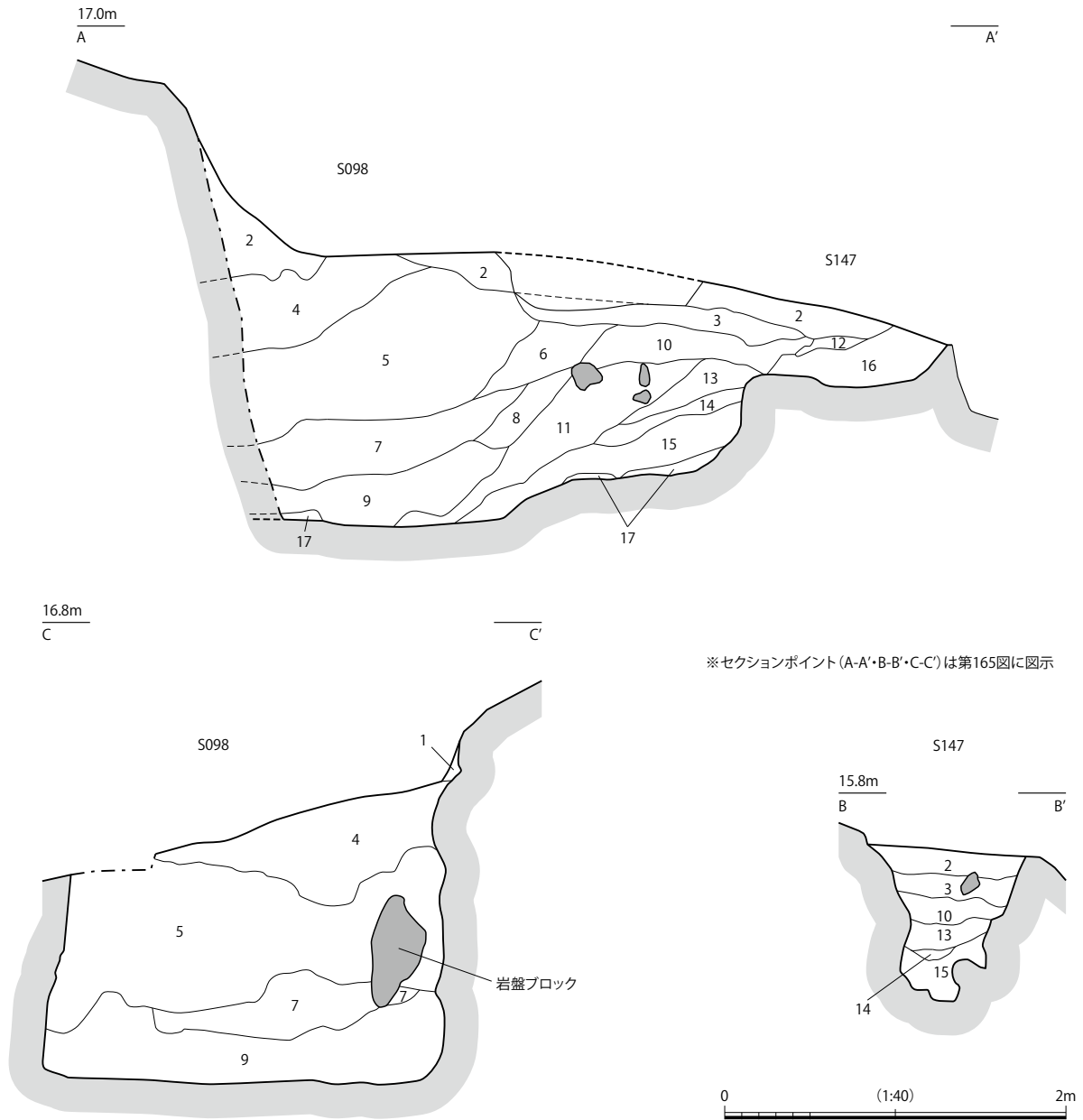
規模は、長軸2.34m、短軸2.08m以上、現況での最大高さ1.5mである。竪坑から地下室に至る主軸はS-36°48'-Wである。天井部は崩落していて、その形状は詳らかではないが残存する壁面が上部にいくほど内側に傾くことから、ドーム状であったと推定できる。竪坑の底は1段階段状になっており、下の段の底からスロープ状に地下室に至る。

埋土は竪坑と竪坑に近い地下室に混土を主体とする土が堆積し、地下室に基盤層の大ぶりなブロックを多く含む土が堆積する。前者が埋戻しによる堆積で後者は天井部の崩落による堆積と考えられる。底面には小ぶりな風化岩盤ブロックを少量含むシルト～細粒砂が最下部に薄く堆積するが、これは機能時に堆積したものと考えられる。出土遺物はない。

帰属時期は地下式坑の検出事例から、中世後期と推定できる。

S135 (第134・167・168図、PL.82・96・97)

7区中央部のN23～24グリッドで検出した。表土掘削中に竪坑を検出し、竪坑の1.77m東側で長さ1.3m、幅0.75mの石を検出した。竪坑の平面形状は楕円形で、長軸1.1m、短軸0.86m、検出面からの最大深さ1.38mである。竪坑の底面は、高さ0.42m、幅0.60m、奥行0.22mの大きさに北側に挟られて



※セクションポイント(A-A'・B-B'・C-C')は第165図に図示

S098・S147(A-A'・B-B'・C-C' 共通)

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色細礫混シルト～砂 10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～卵大)との混土
 - 2 7.5YR5/4 にぶい褐色細粒砂～極粗粒砂多混シルト～極粗粒砂 礫・10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～卵大)含 炭粒少含
 - 3 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト～極粗粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状) 細粒砂～極粗粒砂混 礫(拳大)・10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～径3cm)含
 - 4 10YR6/6 明黄褐色シルト～極粗粒砂・10YR6/4 にぶい黄褐色シルト～極粗粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック主体(～人頭大)ブロックの隙間に10YR4/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm)・10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～拳大)含
 - 5 10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～人頭大)主体 ブロックの隙間は空洞で、部分的に10YR5/6 黄褐色シルト～砂を挟む
 - 6 10YR5/6 明黄褐色粗粒砂～極粗粒砂多混シルト～中粒砂 10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～径3cm)少含
 - 7 10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～長径15cm)主体 ブロックの隙間に10YR5/6 黄褐色シルト～砂
 - 8 10YR5/5 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径2cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～砂ブロック(～径7cm)わずかに含
 - 9 10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～長径50cm)主体 ブロックの隙間に10YR4/5 褐色シルト～細粒砂
 - 10 10YR4/5 褐色シルト～細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径3cm)・10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～径2cm)含 炭粒含
 - 11 10YR4.5/4 にぶい黄褐色粗粒砂～極粗粒砂多混シルト～中粒砂 礫(～拳大)少含
 - 12 10YR6/6 明黄褐色シルト～中粒砂 礫(～径3cm)含 10YR7/8 黄褐色岩盤・10YR2/2 黒褐色シルトブロック(～径1cm)との混土
 - 13 10YR4/4 褐色シルト～細粒砂・10YR4/5 褐色シルト～細粒砂の混土(～径3cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径1cm)含 10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～径5cm)含
 - 14 10YR4/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径1cm)・10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～径5cm)少含
 - 15 10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～砂の混土(～径3cm 前後のブロック状) 10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～径3cm)多含
 - 16 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状) 細礫多混 礫・10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(径1～2cm)多含 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2cm 前後)多含
 - 17 7.5YR4/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～径2cm)少含 泥勝ち
- ※S147 北西隅に10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～径1.5cm)多混シルト～砂が堆積

第166図 S098・147地下式坑断面図

いる。

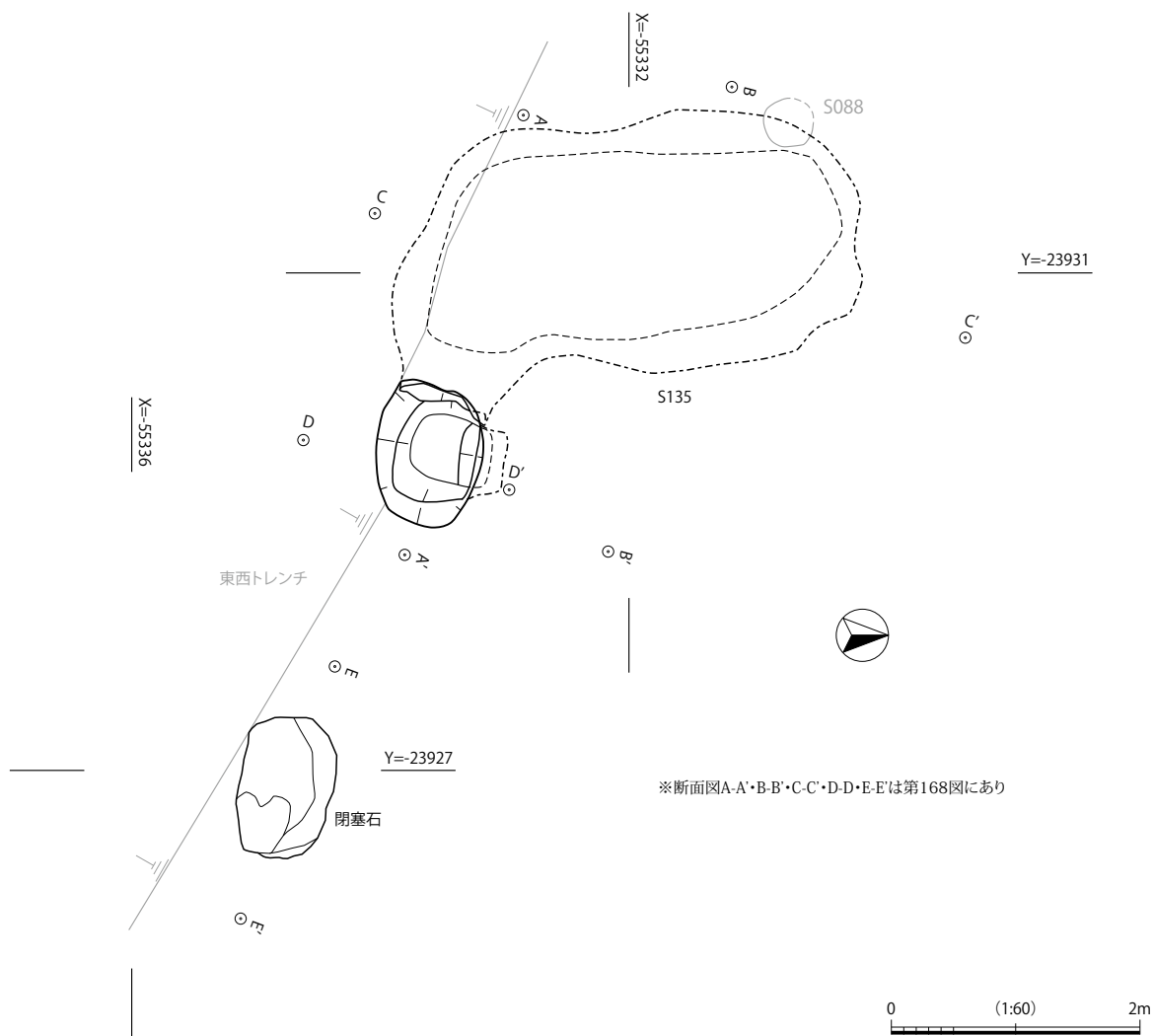
地下室の平面形状は横長の隅丸方形ないし長円形で、長軸3.68m、短軸1.95m、現況での最大高さ1.86mである。地下室の長軸はN-5°30'-Wである。天井部は現況ではドーム状であるが、風化により表面部分が剥離し落下しているため本来の形状ではなく、地下室の最大高さも現況よりは若干低かったと考えられる。

地下室に対して竪坑は南東側にあり、竪坑から地下室に至る軸はN-74.9°-Wで、地下室の主軸から20.7°南に振っている。竪坑と地下室の底面の標高はほとんど同じであるが、断面形状は靴底状で、竪坑の底から0.42m高くなり、そこからスロープ状に地下室に至る。

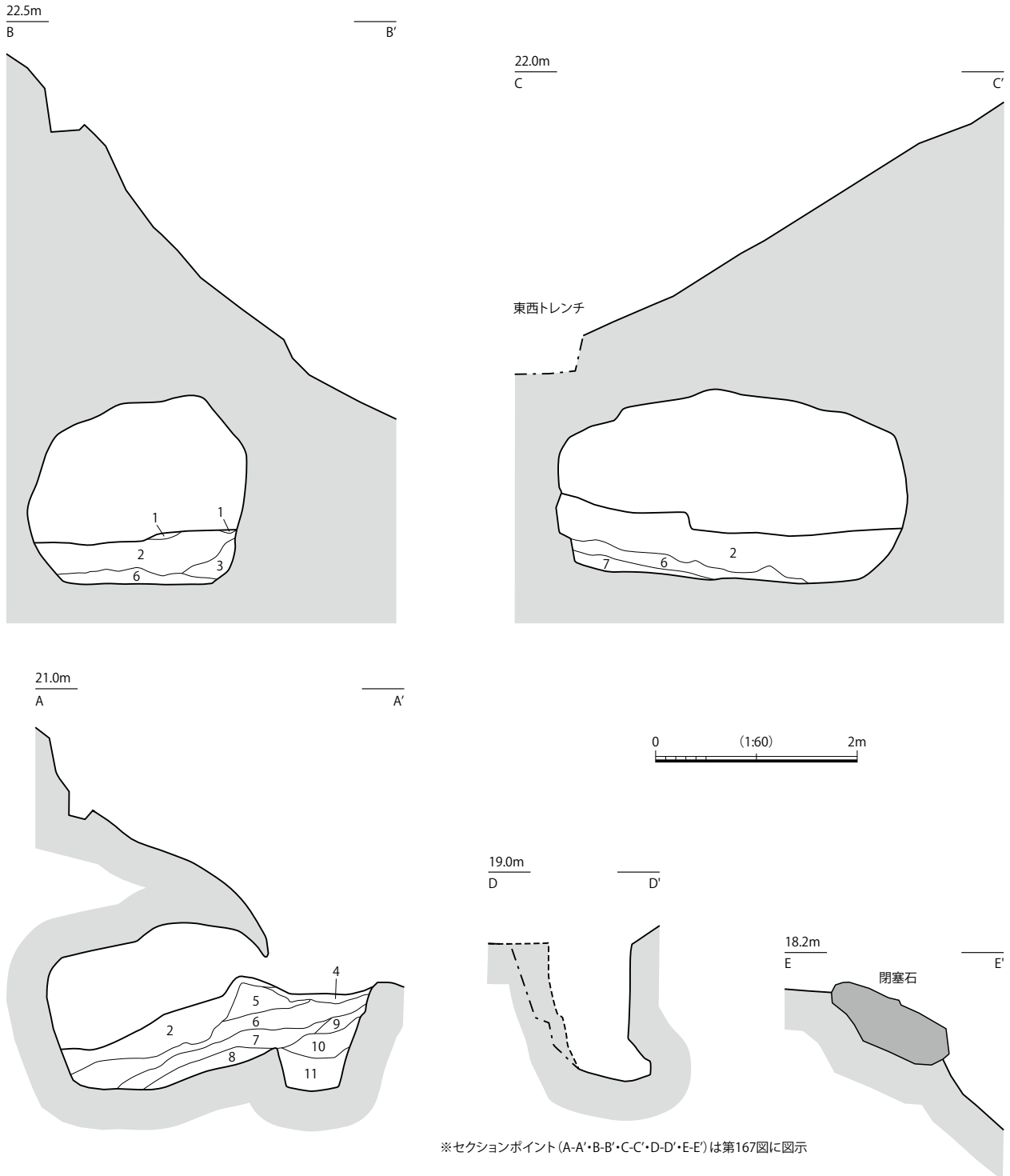
埋土は風化により剥離して落下した天井部の岩盤ブロックを主体とする上層が地下室内全体に堆積し、その下位に廃絶時の埋戻し土と考えられる岩盤ブロックを含む中粒砂～シルト、細粒砂～シルトが竪坑に近い部分に多く堆積する。竪坑から遠い地下室北部では上層のみが堆積する。

埋土からは弥生土器と見られる土器片が2点、埋土の最下層からイシガイ科のものと同定できる貝殻2枚（1匹のものかどうかは不明）が出土している。帰属時期は地下式坑の検出事例から、中世後期と推定できる。

竪坑の東側で検出した石については、竪坑検出時に竪坑の東側の縁に数cm幅で土が堆積し、その中が石と同じ幅で窪んでいたことから、本来はその窪みに石が置かれていたと考えられる。このことか



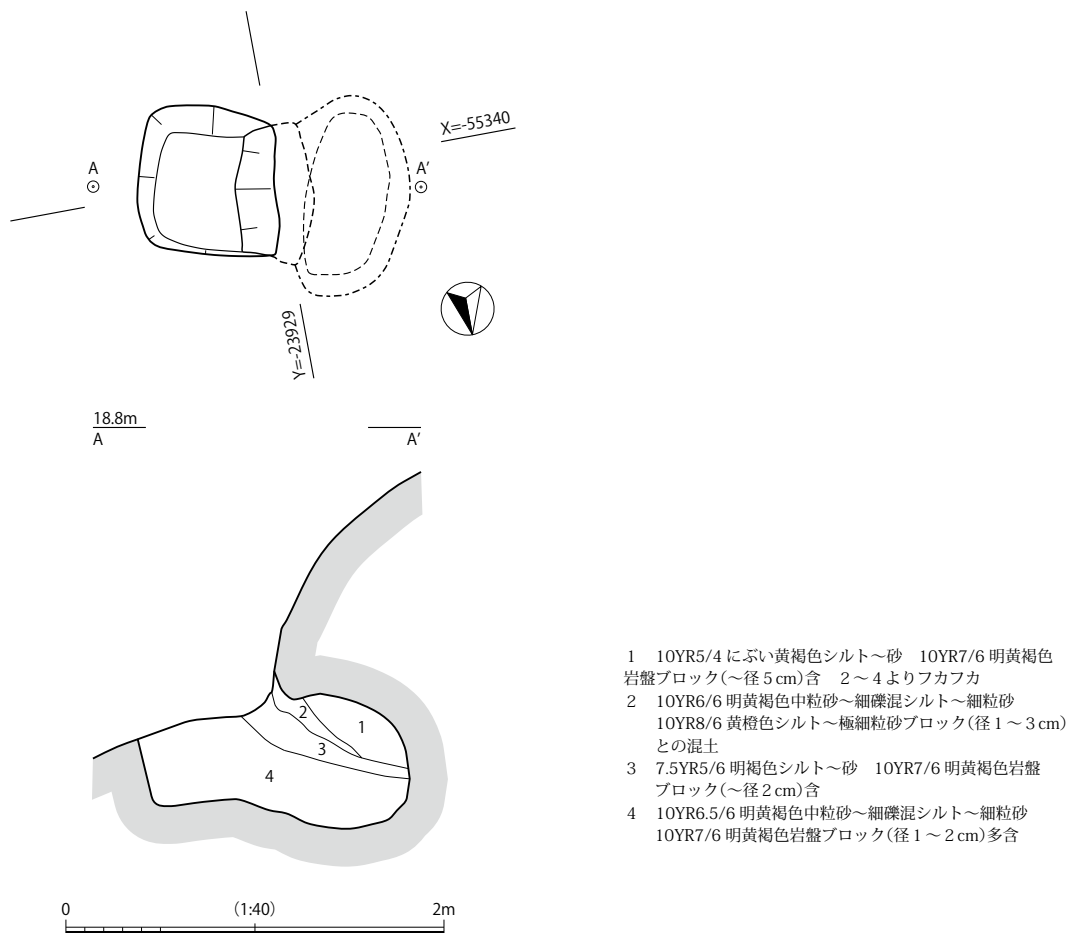
第167図 S135地下式坑平面図



A-A'・B-B'・C-C'共通

- 1 10YR5/6 黄褐色極粗粒砂～細礫混シルト～細粒砂
- 2 10YR8/6 黄褐色(7.5YR7/8 黄褐色)岩盤ブロック(人頭大前後、～長径 50cm)主体 ブロックの隙間に 7.5YR6/6 橙色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂
- 3 7.5YR6/6 橙色中粒砂～極粗粒砂混橙色シルト～細粒砂 10YR8/6 黄褐色岩盤ブロック(～拳大)含
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR7/6 明黄褐色シルト～極細粒砂の混土(～径 5 cm のブロック状) 中粒砂～細礫混 礫(径 3～5 cm)少含
- 5 10YR5/5 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径 8 mm 含) 7.5YR6/8 橙色シルト～極細粒砂ブロック(～径 2 cm)含
- 6 7.5YR6/6 橙色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(～径 1 cm)含 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR8/6 黄褐色岩盤ブロック(～長径 10cm)含
- 7 7.5YR5.5/6 明褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 10YR8/6 黄褐色岩盤ブロック(～卵大)少含
- 8 10YR6/7 明黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径 8 mm)含 10YR8/6 黄褐色岩盤ブロック(径 2～3 cm)含 5～8 は 9～11 よりしまり弱
- 9 7.5YR5/8 明褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径 8 mm)含 10YR8/6 黄褐色岩盤ブロック(径 1.5cm 前後)少含
- 10 7.5YR6/8 橙色極粗粒砂多混シルト～粗粒砂 礫(～径 8 mm)多含 7.5YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(径 1.5cm 前後)少含
- 11 7.5YR6.5/7 橙色極粗粒砂多混シルト～粗粒砂 礫(～径 8 mm)多含 7.5YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(径 1.5cm 前後)多含

第168図 S135地下式坑断面図



第169図 S137地下式坑平面・断面図

ら、この石は竪坑の閉塞石と判断できる。

S137 (第134・169図、PL.97)

調査区中央部の南寄り、S135地下式坑の南側に当たるN23及びO23グリッドで検出した。竪坑の上部は後の造成により削られているが、下部に近い部分は残存している。竪坑の平面形状は方形で、長軸0.78m、短軸0.72m、検出面からの最大深さ0.71mである。地下室の平面形状は横長の楕円形に近く、長軸1.06m、短軸0.71m、現況での最大高さ0.71mである。竪坑から地下室に至る主軸はN-74.8° -Wで、S135地下式坑の軸とほぼ同じである。竪坑の底は平らで、底からスロープ状に地下室に至る。

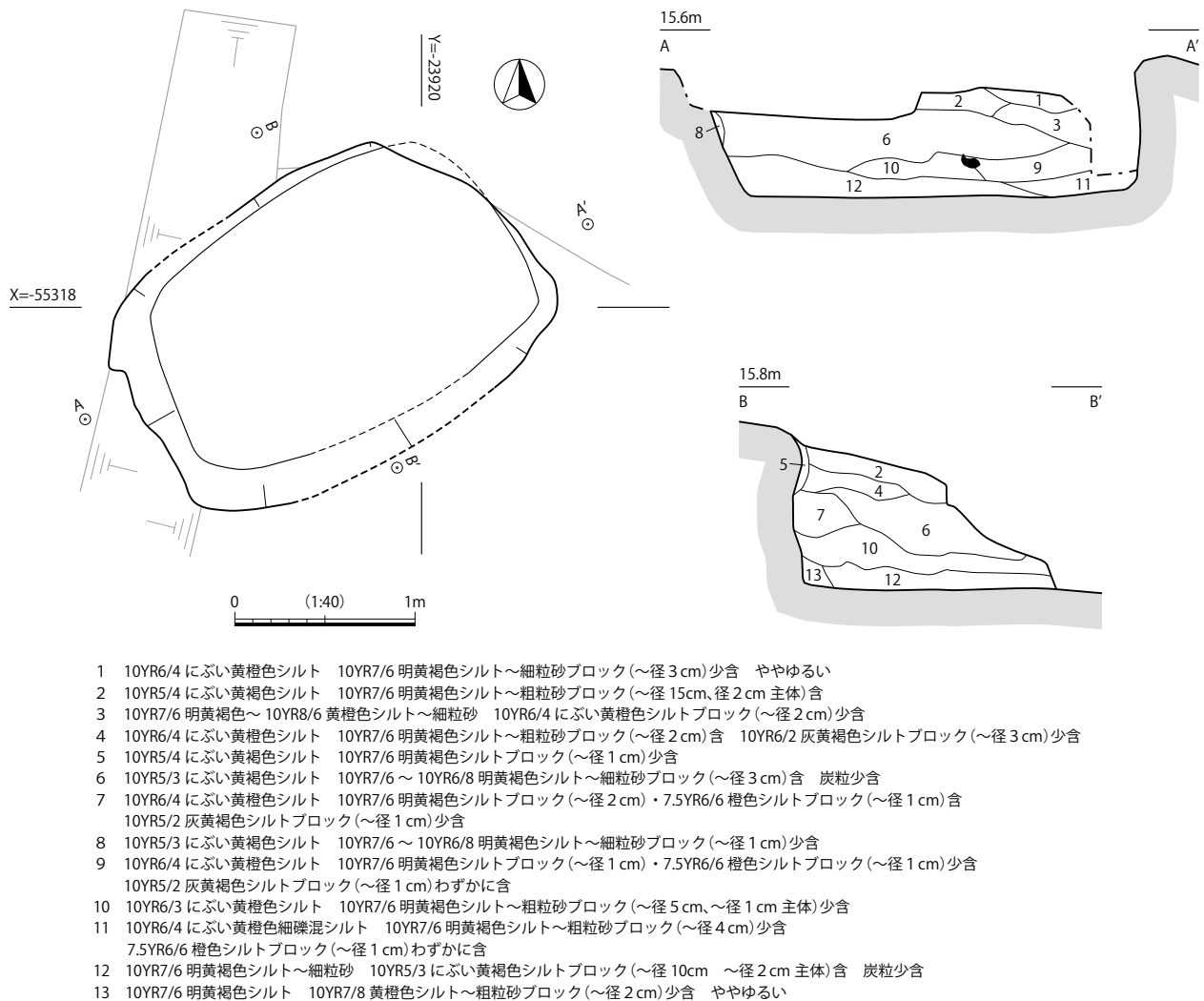
埋土はフカフカで基盤層の大ぶりなブロックを含む上層と、基盤層の小ぶりなブロックを含むかブロック土との混土をなす3層の単層からなる下層に大別できる。堆積状況から下層が一連の埋戻しにより堆積した土で、上層が埋戻し後に天井部が剥離し落下して堆積した土と考えられる。埋土からの出土遺物はない。帰属時期は地下式坑の検出事例から、中世後期と推定できる。

S137地下式坑の地下室は、本遺跡で検出された他の地下式坑や一般的な地下式坑と比べてかなり小型である。S137地下式坑の南西側に南東 - 北西方向に延びる硬質な岩脈が貫入していることから、硬いために掘り進めることを諦めたため、未完成となったと考えられる。

S138 (第134・170図、PL.97)

L22～23グリッドにおける斜面地に位置する。平面形が隅丸長形状を呈する、比較的大型の土坑である。掘方は後出するS104道路遺構により大きく掘削され、その半分以上を失っている。

本遺構の検出面における規模は、長軸2.27m、短軸1.57m、深さは最大で0.85mを測る。底面は概ね



第170図 S138地下式坑平面・断面図

平坦で、平面形は検出面と同様に比較的整った隅丸長方形状を呈し、長軸が2.12m、短軸が1.37mを測る。掘方壁面の断面形は一樣ではないが、やや丸みを持ちつつ垂直に近い状態で立ち上がる箇所が多く、一部はややオーバーハング気味となる。

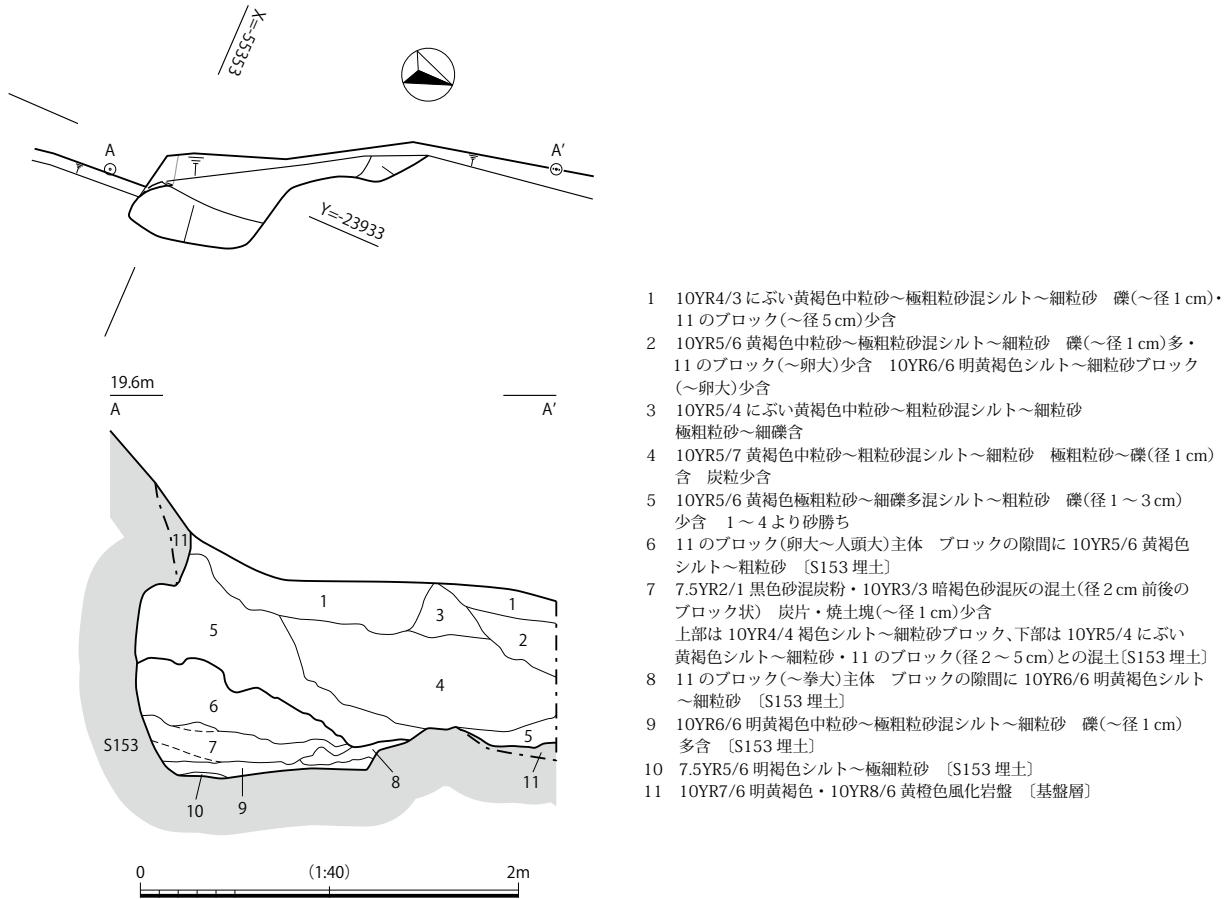
以上のような掘方の規模や平面形、断面形態が丸みもちドーム状に復元できる可能性を勘案したため、本遺構は地下式坑における「地下室」に該当すると判断し、地下式坑として報告することとした。

竪坑と、竪坑・地下室連結部は全く遺存していないが、本遺構の位置する斜面の傾斜と掘方平面形から、竪坑は、南東側の長辺に接続していた蓋然性が高い。埋土は基盤層由来土をブロック状に含む堆積が主体となり、天井部崩落を窺わせるような堆積は認められなかったが、人為的な埋め戻しを想起させる。

出土遺物は埋土中より弥生土器と考えられる破片が数点出土したが、遺存状態や出土層位から本遺構に伴う遺物とは積極的に評価できず、帰属時期を示す資料ではないと判断した。このように、出土遺物からの時期比定は困難だが、地下式坑における他事例の年代観を参照し、中世後期帰属の可能性を考えておきたい。

S153 (第134・171図、PL.98)

調査区南端部のP24グリッドで検出した。北側がS095道路遺構により切られ南側は調査区外に至る



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径1cm)・11のブロック(～径5cm)少含
- 2 10YR5/6 黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径1cm)多・11のブロック(～卵大)少含 10YR6/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～卵大)少含
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂 極粗粒砂～細礫含
- 4 10YR5/7 黄褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂 極粗粒砂～礫(径1cm)含 炭粒少含
- 5 10YR5/6 黄褐色極粗粒砂～細礫多混シルト～粗粒砂 礫(径1～3cm)少含 1～4より砂勝ち
- 6 11のブロック(卵大～人頭大)主体 ブロックの隙間に10YR5/6 黄褐色シルト～粗粒砂 [S153埋土]
- 7 7.5YR2/1 黒色砂混炭粉・10YR3/3 暗褐色砂混灰の混土(径2cm前後のブロック状) 炭片・焼土塊(～径1cm)少含 上部は10YR4/4 褐色シルト～細粒砂ブロック、下部は10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・11のブロック(径2～5cm)との混土(S153埋土)
- 8 11のブロック(～拳大)主体 ブロックの隙間に10YR6/6 明黄褐色シルト～細粒砂 [S153埋土]
- 9 10YR6/6 明黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径1cm)多含 [S153埋土]
- 10 7.5YR5/6 明褐色シルト～極細粒砂 [S153埋土]
- 11 10YR7/6 明黄褐色・10YR8/6 黄橙色風化岩盤 [基盤層]

第171図 S153地下式坑平面・断面図

ため、平面的にはほとんど検出できなかったものの、調査区南壁でドーム状に残る地下室の天井部の一部が確認できたため、地下式坑と判断した。

検出範囲が狭いために主軸は不明で、検出長1.62m、検出幅0.55m、南壁壁面で確認できる地下室の残存高は1.03mである。南壁壁面で確認できる地下室の断面形状や埋土から、天井部は一部を残し崩落していることが確認できる。天井部崩落までの埋土は崩落時に堆積したと考えられるブロック土を主体とする上層と、機能時に堆積したと考えられる細粒砂～シルトからなる下層の二つに大別できる。

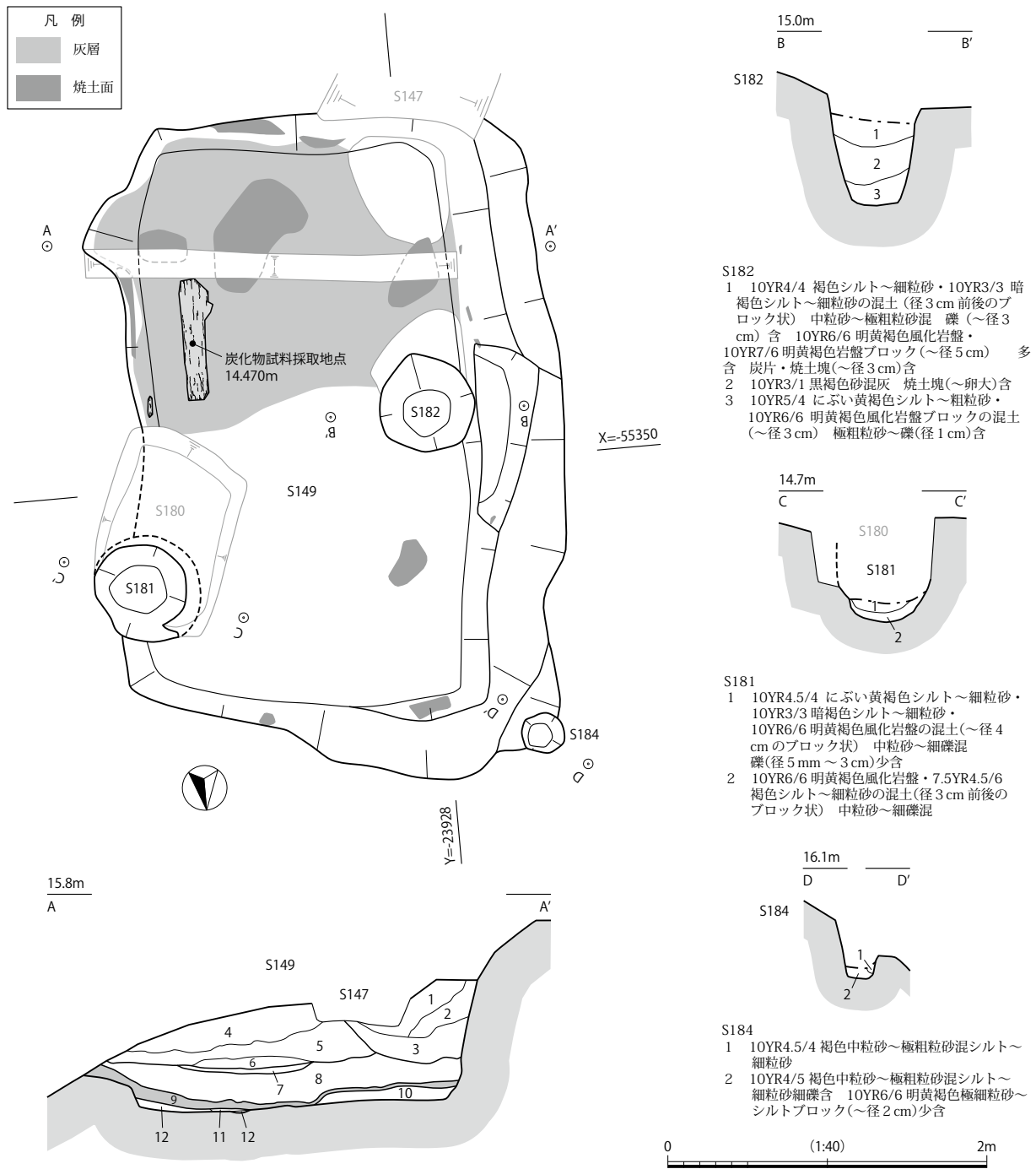
出土遺物はない。遺構の帰属時期は、地下式坑の検出事例から、中世後期と推定できる。

(4) 竪穴状遺構

S149 (第134・172・375図、表10・69・70、PL.98・99)

7区南部のO23及びP23グリッドで検出した。S098地下式坑、S147地下式坑、S148土壙墓、S180土壙墓に切られ、S178段状遺構を切る。全体の形状としては竪穴建物のように、平面形状は南北に長い長方形、壁の勾配は垂直に近い。東壁の南寄りの一部は外側に突出し、この部分だけ壁の勾配が緩い。規模は、長辺4.2m、短辺2.95m、検出面からの最大深さ1.27mである。長軸はN-2.2°-Wで、ほぼ南北方向である。

埋土は、埋土下部の床面近くに堆積する灰を主体とし炭片を含む層（以下、灰層と呼ぶ）が特徴的である。第172図の平面図では南部に堆積する灰層のみ図示しているが、これは掘方の北部に現生の木の根があり、これを表土掘削時に抜き取ったため埋土がほとんど残らなかったことによるもので、



- S149
- 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径1cm)・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(～径5cm)多含 炭粒含 [S149 埋没後の再掘削部分埋土]
 - 10YR4/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径3cm)含 炭粒少含 [S149 埋没後の再掘削部分埋土]
 - 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～粗粒砂 礫(～径1cm)・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(～径3cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂ブロック(～径3cm)含 炭粒含 [S149 埋没後の再掘削部分埋土]
 - 10YR4.5/4 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径3cm)・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(～径5cm)多含 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂ブロック(～径5cm)少含 [上部埋戻し土]
 - 10YR4.5/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm)含 4より砂勝ち 10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(～長径10cm)多含(4より多) [上部埋戻し土]
 - 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径5cm)含 4より泥勝ち 10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(～径5cm)多含(4より多) 炭粒少含 [上部埋戻し土]
 - 7.5YR5/6 明褐色粗粒砂～極細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂の細互層 [下部埋戻し直後の水による堆積土]
 - 7.5YR4/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm)含 10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径2cm 前後、～径5cm)局所的に含 9のブロック・炭粒・焼土塊(～径3cm)含 [焼失時直後の下部埋戻し土]
 - 10YR1.7/1 黒色灰 東べりは7.5YR3/1 黒褐色粗粒砂～中粒砂混シルト～極細粒砂・灰の混土に焼土塊(～径3cm)含 [焼失時の灰層]
 - 10YR4/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径3cm)含 8より砂勝ちでボンボン 10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(～径1.5cm)含 [焼失時直前の堆積土]
 - 2.5Y4/6 オリーブ褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂 上面は焼土面 [焼失時直前の堆積土]
 - 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂混シルト～極細粒砂の葉層・薄層(～厚さ1.5cm)・10YR6/4 にぶい黄褐色細粒砂～極細粒砂の葉層の互層 上面は焼土面 [機能時の水による堆積土]

第172図 S149 縦穴状遺構平面・断面図

床面検出時にはS180土壙墓部分を除く北部の床面近くに残る灰層を確認している。このことから灰層は、床面近くの全体に堆積していたと考えられる。また、灰層を除去した面で床面や壁面の一部が火を受けて赤くなっている部分（以下、焼土面と呼ぶ）を確認した。

灰層からは板状、小さな丸木状の炭化した木材が各1点出土していて、灰層より上位の埋土からは弥生土器・土師器の甕の破片が少量出土している。

灰層や灰層から出土した炭化木材と焼土面の存在から以下のことがわかる。(1) 灰層除去面に焼土面が存在することは、灰層の灰や炭片が外部から搬入されたものではなく、現地で焼失した結果残ったものであることを示す、(2) 灰や炭片や炭化木材の存在は、S149竪穴状遺構には植物による上部構造を伴っていたことを示す、(3) 灰や炭片が主体で炭化木材が2点しかないことは、焼失直後に炭化木材の多くが取り除かれたか、草本の植物を主体とする上部構造を伴うものであった可能性を示す。

S149竪穴状遺構に伴う遺構として、西壁際の中央部にS182土坑が掘られている。また、本遺構を切るS180土壙墓の底面で検出したS181ピットも底に近い部分しか残っていなかったが、残存部分の形状や規模が近く、底面の標高もほぼ同じであることから、本遺構に伴い東壁際に掘られた土坑と判断した。北西角で検出したS184土坑も、位置的に本遺構に伴うピットと判断した。このうちS182土坑については、第172図の断面図のように灰によって充填されていることから、灰穴炉としての機能が考えられる。本遺構は上部構造を伴っていたと考えられることや灰穴炉と推定できるピットを伴うことから、柱穴を伴わない建物跡である可能性が高い。

灰層から出土した板状の炭化木材の放射性炭素年代測定を行ない、 370 ± 20 yrBP、 2σ 暦年代範囲で1452-1523 cal AD (62.2%)、1574-1627 cal AD (33.2%) の結果を得た（第7章第5節参照）。遺構の帰属時期は、この年代測定の結果と遺構の切り合いから中世後期に比定できる。

(5) 袋状土坑

検出した土坑のうち、口が狭く底が広がる形態を持つ土坑を袋状土坑として記載する。

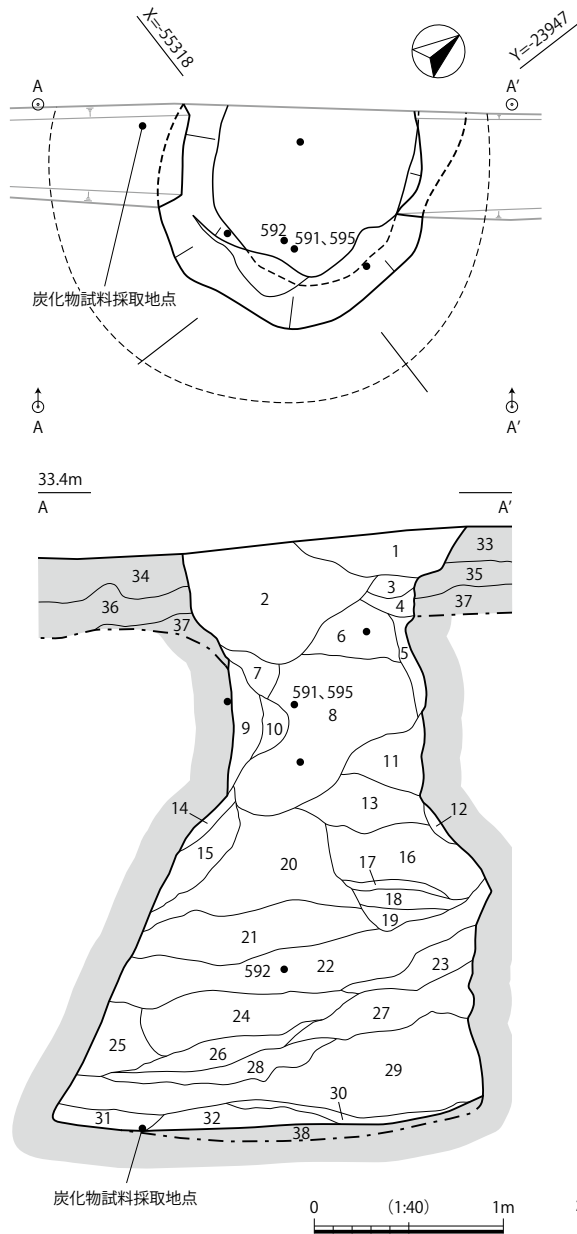
S002 (第134・173・174・375図、表32・69・70、PL.99・118)

7区北西部のL25グリッドで検出した。北西側が調査範囲外に至るため全容は不明であるが、平面形状はほぼ円形と考えられる。検出面での規模が直径1.45m前後、底面での規模が直径2.3m前後、断面上で確認できる深さ3.2mである。断面形状は三角フラスコ形である。

埋土は、埋戻し土であるブロック土を含む土や混土が堆積し、一部、壁面崩落に伴う基盤層のブロックを主体とする堆積が確認できる。底面で遺構の機能時に伴う遺物の出土はなく、埋戻し土から残りの良い土師器や比較的細かく摩耗している弥生土器の破片が出土している。出土状況から土師器は埋戻しに際して廃棄したもので、弥生土器は埋戻し土に元から混入していたものと考えられる。

このうち土師器4点(591～592、594～595)を図化した。器壁が薄手で、口縁端部が明瞭な面をなす591～592と、やや丸みを帯びる593がみられる。592～593は肩部に櫛状工具による平行沈線が施されており、それに加え592は波状文が施されている。594は受け口状の口縁を有する壺であり、頸部はハケ調整である。595はタテ方向のミガキ調整が施された高坏の脚部である。

S002袋状土坑底面近くの埋土最下部から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行ない、 1860 ± 20 yrBP、 2σ 暦年代範囲で84-220 cal AD (95.4%) の結果を得た（第7章第5節参照）。遺構の帰属時期は、この年代測定の結果からは、弥生時代後期ないし終末期であるが出土遺物と帰属する層位か

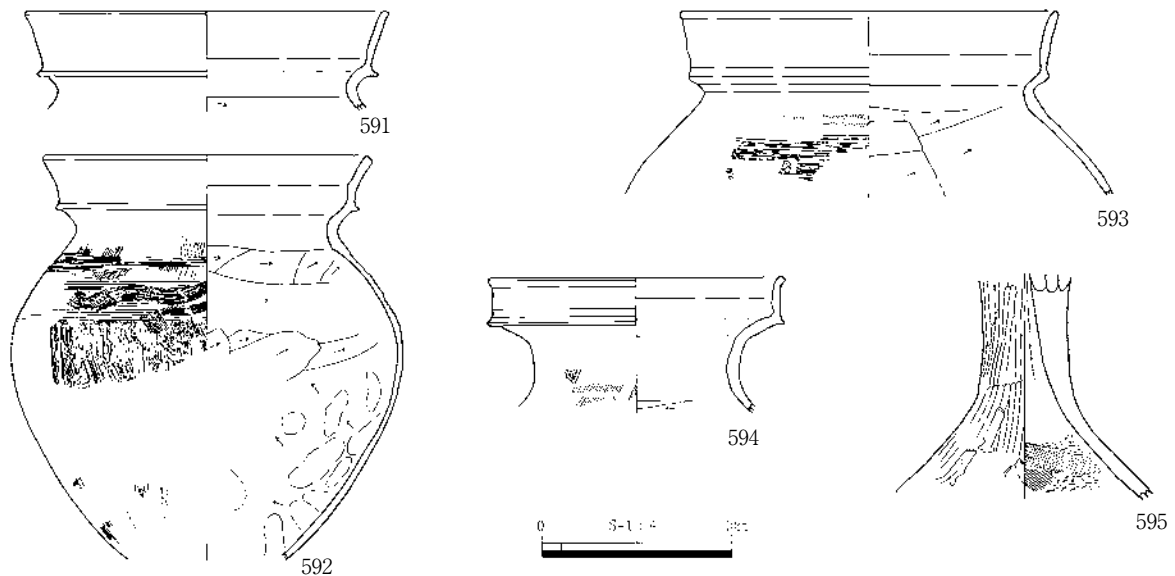


※ ●は点上げ遺物出土地点、番号は遺物掲載番号
断面図に示した位置は、立面基準点 A-A'からの見通し

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック (～径2cm)含 炭粒少含
- 2 10YR4/4 褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック (～径5cm、～径2cm主体)含 炭粒少含
- 3 10YR5/6 黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック (～径1cm)含
- 4 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトブロック (～径2cm)少含
- 5 10YR8/4 浅黄褐色シルト～細粒砂 10YR6/4 にぶい黄褐色シルトブロック (～径3cm)含
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック (～径1cm)少含
- 7 10YR6/6 明黄褐色シルト～細粒砂 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径10cm)少含
- 8 10YR5/2 灰黄褐色シルト 7.5YR5/4 にぶい褐色シルトブロック(～径3cm)含 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径3cm)少含 炭粒少含
- 9 2.5Y8/4 淡黄色シルト～細粒砂 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトブロック (～径5cm)少含 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径2cm)少含
- 10 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトブロック (～径1cm)少含
- 11 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック (～径5cm)少含
- 12 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック (～径1cm)含
- 13 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 7.5YR6/6 橙色シルトブロック (～径2cm)少含 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径5cm)少含 炭粒少含
- 14 10YR6/6 明黄褐色シルト～細粒砂 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径1cm)少含 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含
- 15 2.5Y8/6 黄色シルト～細粒砂 10YR6/4 にぶい黄褐色シルトブロック (～径3cm)少含 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径1cm)少含
- 16 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック (～径3cm)少含 10YR6/4 にぶい黄褐色シルトブロック(～径5cm)少含
- 17 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック (～径1cm)少含 炭粒少含
- 18 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂 10YR6/4 にぶい黄褐色シルトブロック (～径1cm)少含
- 19 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック (～径5cm)少含 炭粒少含
- 20 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 7.5YR6/6 橙色シルトブロック(～径3cm)少含 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)少含 炭粒少含
- 21 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 7.5YR6/6 橙色シルトブロック(～径2cm)含 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)含 炭粒含

- 22 2.5Y5/6 黄褐色シルト 10YR5/1 褐灰色炭粒混シルトブロック(～径3cm)含 7.5YR6/6 橙色シルトブロック(～径2cm)含
両者が横位 帯状にまとまって堆積
- 23 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)少含 炭粒含
- 24 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径1cm)含 7.5YR6/6 橙色シルトブロック(～径1cm)含
炭粒含
- 25 10YR4/1 褐灰色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径1cm)少含 炭粒・炭化物(径2cm程度)含 ゆるい
- 26 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)少含 炭粒、炭化物(径2cm程度)少含
- 27 10YR4/1 褐灰色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径2cm)含
10YR6/3 にぶい黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 炭粒含
- 28 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色～10YR7/8 黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径1cm)少含
- 29 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂 10YR6/4 にぶい黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 掘方壁面崩落に由来する堆積か
- 30 10YR4/1 褐灰色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径1cm)少含 炭粒、炭化物(径2cm程度)含
- 31 10YR4/1 褐灰色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径1cm)少含 炭粒、炭化物(径2～4cm程度)含
- 32 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト 10YR7/6 明黄褐色～10YR7/8 黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含 炭化物(径2cm程度)僅かに含
- 33 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)含 炭粒少含
- 34 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)少含 炭粒少含
- 35 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)多含 33層と37層との漸移層
- 36 7.5YR6/6 橙色シルト～細粒砂 [基盤層]
- 37 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂と2.5Y8/6黄色シルトの混土 [基盤層]
- 38 10YR7/8 明黄褐色シルト～中粒砂 [基盤層]

第173図 S002袋状土坑平面・断面図



第174図 S002袋状土坑出土遺物

ら、古墳時代前期前葉に比定できる。したがってこの炭化物は、弥生土器と同様に埋戻し土に元から混入していたものと考えられる。

S107 (第134・175図、表32、PL.100・118)

L22～23グリッドの斜面中途に認められる平坦地に位置する。平面形は円形で、検出面における規模は直径が1.79～1.9m、深さは最大で0.61mを測る。掘方の一部をS106土坑と接するが、先後関係は不明である。掘方の断面形は概ね長形状を呈するが、一部壁面がオーバーハング気味となる箇所がある。底面はほぼ平坦で、埋土は基盤層由来土をブロック状に含む堆積が主体となり、人為的な埋め戻しを想定する。遺構の規模や形態的特徴から袋状土坑と判断した。

埋土からの出土遺物は土器細片を主体とするが、そのうち最も残りの良い弥生土器高坏(596)を図化した。596の脚柱部の外面は縦方向のミガキ、内面はナデ調を施している。

遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代後期に比定できる。

S198 (第134・175図、表10・32、PL.100・118)

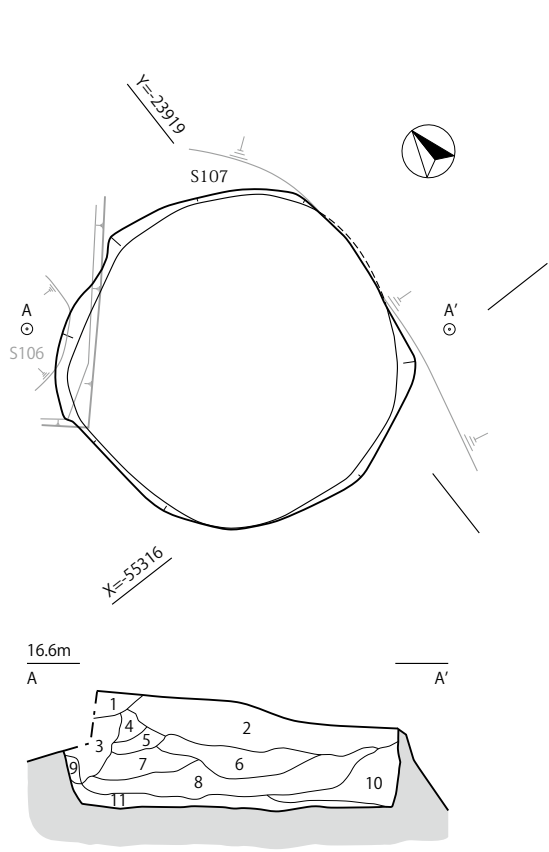
7区東端部のM21～22グリッドで検出した。S202～S203ピットに切られる。S212～S213ピットは本遺構の埋土掘削後に、その底面で検出したが、埋土掘削中にその存在を確認しており、本来は埋土を切る遺構であることがわかる。

本遺構の上部が後の土地造成により削られ、底に近い下部のみが残る。検出部分での平面形状は楕円形に近く、規模は長軸1.79m、短軸1.55m、検出面からの最大深さ0.53mである。

埋土は大きくは3つに分けられる。下位から(1)基盤層のブロックを主体とする機能時の崩落土、(2)砂がちの混土からなる埋戻し土、(3)泥がちの混土からなる埋戻し土で、(2)と(3)、(3)中に、卵大までの基盤層のブロックを主体とする埋戻しの過程に堆積した崩落土を挟む。底面から埋土下部にかけて、卵大から径約0.5mまでの礫を含む。埋土の堆積状況と礫の出土状況から、礫は(2)を伴う埋戻しの初めの段階で土とともに入れられたものと考えられる。

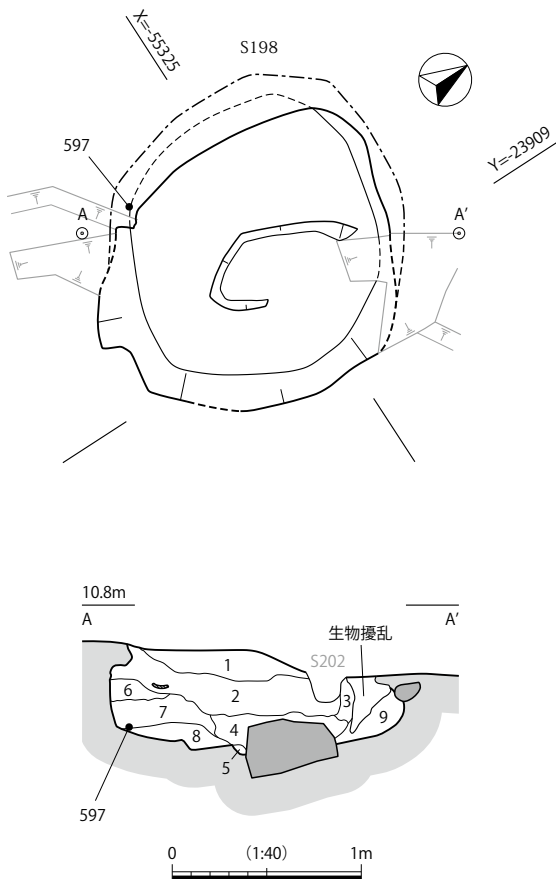
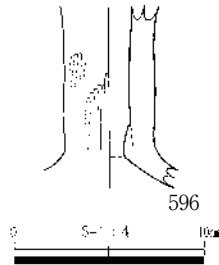
出土遺物は弥生土器の破片で、そのうち埋土下部から出土した弥生土器甕(597)を図化した。口縁部が大きく外反し、多条平行沈線がめぐる。口縁内面は横方向のミガキ、体部はヘラケズリである。

遺構の帰属時期は出土遺物から、弥生時代後期後葉に比定できる。



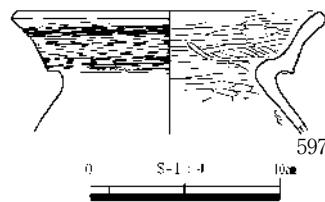
S107

- 1 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/8 黄褐色シルトブロック(～径3 cm)少含
炭粒少含
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/8 黄褐色シルトブロック(～径2 cm)少含
炭粒含
- 3 10YR7/8 黄褐色シルト 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック(～径2 cm)少含
ややゆるい 風化岩盤由来土を主体とする堆積
- 4 10YR6/6 明黄褐色シルト 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック(～径5 mm)少含
風化岩盤由来土を主体とする堆積
- 5 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径5 mm)
わずかに含
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック
(～径10cm、～径1 cm 主体)少含 7.5YR6/8 橙色シルトブロック(～径2 cm)少含
炭粒少含
- 7 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 7.5YR6/8 橙色シルトブロック(～径1 cm)少含
炭粒少含
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 7.5YR6/8 橙色シルトブロック(～径1 cm)少含
炭粒少含
- 9 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2 cm)含
ややゆるい
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 7.5YR6/8 橙色シルトブロック(～径5 mm)少含
10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径5 mm)少含 炭粒少含
- 11 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト 7.5YR6/8 橙色シルトブロック(～径5 mm)少含
10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径4 cm、～径1 cm 主体)少含



S198

- 1 10YR4.5/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂の
混土 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径1 cm)・10YR6/8 明黄褐色岩盤ブロック
(～径1.5cm)含 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径5 cm)含み、
破線部より南側では主体 炭片・炭粒含 [埋土上部]
- 2 10YR4.5/2 灰黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～礫(～径8 mm・
径2 cm 前後)少含 10YR6/8 明黄褐色岩盤ブロック(径2 cm 前後)少含
10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径5 cm)含 炭片・炭粒含
[埋土上部]
- 3 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルトブロック(～卵大)主体
隙間に 10YR4/2 灰褐色シルト～極細粒砂 [埋戻し時の崩落土]
- 4 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂・10YR4.5/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂の混土
(径3 cm 前後のブロック状) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径8 mm)含・
10YR6/8 明黄褐色岩盤ブロック(～径1 cm)少含 炭片・炭粒含 [埋土上部]
- 5 10YR6/8 明黄褐色岩盤ブロック・10YR4/2 灰黄褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト～
極細粒砂の混土(～長径3 cm までのブロック状) 炭粒少含 [埋土上部]
- 6 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルトブロック(～卵大)主体
隙間に 10YR4/2 灰褐色シルト～極細粒砂 10YR6/8 明黄褐色岩盤ブロック
(～長径3 cm)少含 [埋戻し時の崩落土]
- 7 10YR5/2.5 灰黄褐色細粒砂～粗粒砂多混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～礫(径8 mm)含
2・4より砂勝ち 10YR6/6 明黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂ブロック(径
1.5～4 cm)少含 炭片・炭粒含 [埋土下部]
- 8 10YR5/2.5 灰黄褐色シルト～極細粒砂・10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂の混土
(～径5 cmのブロック状) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～細礫・礫(径1～3 cm)
多含 10YR6/6 明黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂ブロック(～径1.5cm)
多含 炭粒含 [埋土下部]
- 9 10YR6/6 明黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂ブロック主体
隙間に 10YR5/5 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂 [機能時の崩落土]



第175図 S107・198袋状土坑平面・断面図及び出土遺物

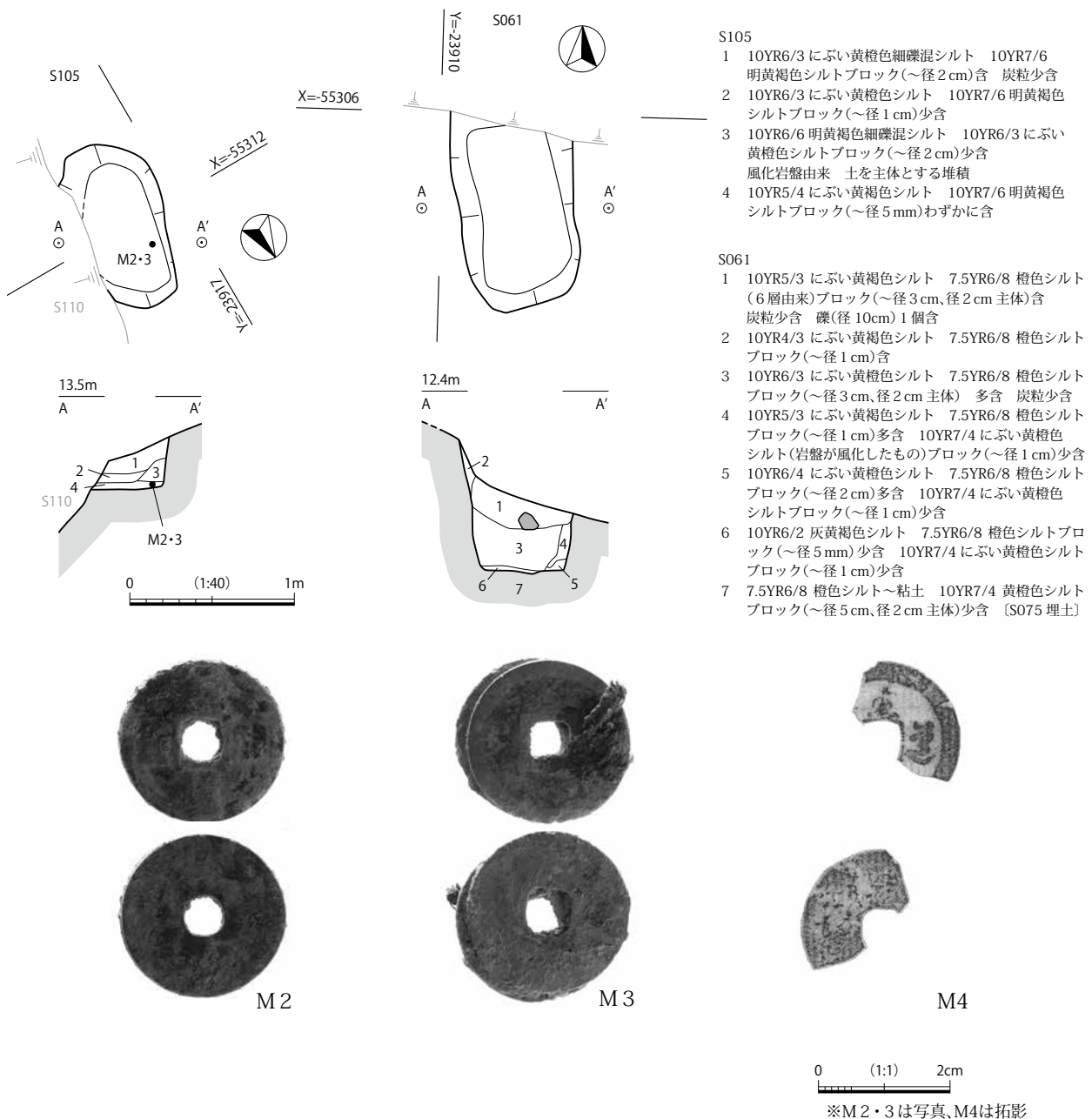
(6) 土壙墓

六道銭と判断できる5枚の銭貨が出土した土坑1基(S105)と、S105土坑と類似する掘方の形状的特徴(平面形、断面形)を持ち、かつS105土坑と同じ南北方向に近い長軸を持つ土坑4基(S061、S109、S113、S180)を土壙墓と判断した。S113土壙墓については、S100段状遺構に伴う遺構として記載しているので、以下にS105土壙墓、S109土壙墓、S061土壙墓、S180土壙墓について記載する。

S061 (第134・176図、PL.100)

7区北東部のK21グリッドで検出した。S075地下式坑を切る。平面形状は隅丸の長方形で、検出規模は長軸1.25m、短軸0.78m、最大深さ0.65mである。長軸はN-12.7°-Wである。

埋土は、ブロック土を多く含むにぶい黄褐色ないしにぶい黄橙色土を主体とする。埋土から酸化焼成の土器、須恵器の破片が出土しているが、二次的な出土状況に止まる。遺構の帰属時期は、出土遺物からは詳らかにできないがS075地下式坑を切ることから、中世後期以降と推定できる。



第176図 S105・061土壙墓平面・断面図及びS105土壙墓出土遺物

S105 (第134・176図、表10・59、PL.101)

L22グリッドにおける斜面地に位置し、掘方の平面形は隅丸の長方形を呈する。S110段状遺構とS102土坑と掘方が重なり土層断面の所見等から、最も先行することが判明している。

掘方東側がS110段状遺構により大きく掘り込まれているが、検出面における規模は、長軸が1.07m、短軸が最大で0.54m、深さが0.32mである。長軸はN-11.5°-Eである。掘方の遺存状況は全般に不良ながら、断面形は逆台形状を呈し底面はほぼ平坦で、比較的しっかりと掘り込まれる。埋土は、基盤層である風化岩盤由来土をブロック状に含む堆積が主体となる。

遺物は、底面直上で銭貨5枚(M 2～3)が出土し、埋土下層から銭貨1枚が出土した。銭貨はいずれも銅銭である。床面直上で出土した5枚は、重なり互いに固着した状態で出土した。未剥離の状態で表面、すなわち銭文が判読可能なのは一枚である。銭種は北宋銭「元祐通寶(初鑄1086年)」の篆書である。また、遺存状況は不良だが麻紐の可能性のある繊維質が銭貨表面に付着しており、これらの銭貨は紐で結わえてあったと想定される。埋土下層から出土した1枚(第176図M 4)は、「至道元宝(初鑄995年)」の草書である。

出土した銭貨は、床面直上で出土した5枚と埋土下層から出土した1枚で6枚となり、「六道銭」を構成すると考えることもできるが、埋土下層から出土した1枚と床面直上で出土した5枚との直接的な関係は調査時に確認できなかった。床面直上で出土した5枚のみが紐で結わえられていたと考えても、いわゆる「六道銭」の範疇にあると推察され、掘方の形態的特徴も勘案すれば本遺構は土壙墓と考える。

銭文が判読できたのは2枚であるが、帰属時期が想定される理由として、渡来銭(北宋銭)であること、調査地内の土器相も併せて考えると、S088ピット(埋蔵銭)や銭貨10枚が出土したS125土坑と近似していたので、大雑把ながら中世後期帰属と考えておきたい。

S109 (第134・177図、PL.101)

L23グリッドに位置する。斜面中途に所在する狭い平坦面上にて検出した。本遺構は調査区境界に位置するため、掘方の半分程度が調査区外となる。平面形は方形ないし長方形で検出面における規模は、長軸が1.05m、短軸0.92m、深さは最大で0.5mを測る。長軸はほぼ南北方向である。上記形態的特徴などから、本遺構は土壙墓と判断した。掘方の断面形は長形状を呈し、しっかりと掘り込まれる。埋土は基盤層由来土をブロック状に含む堆積が主体となる。

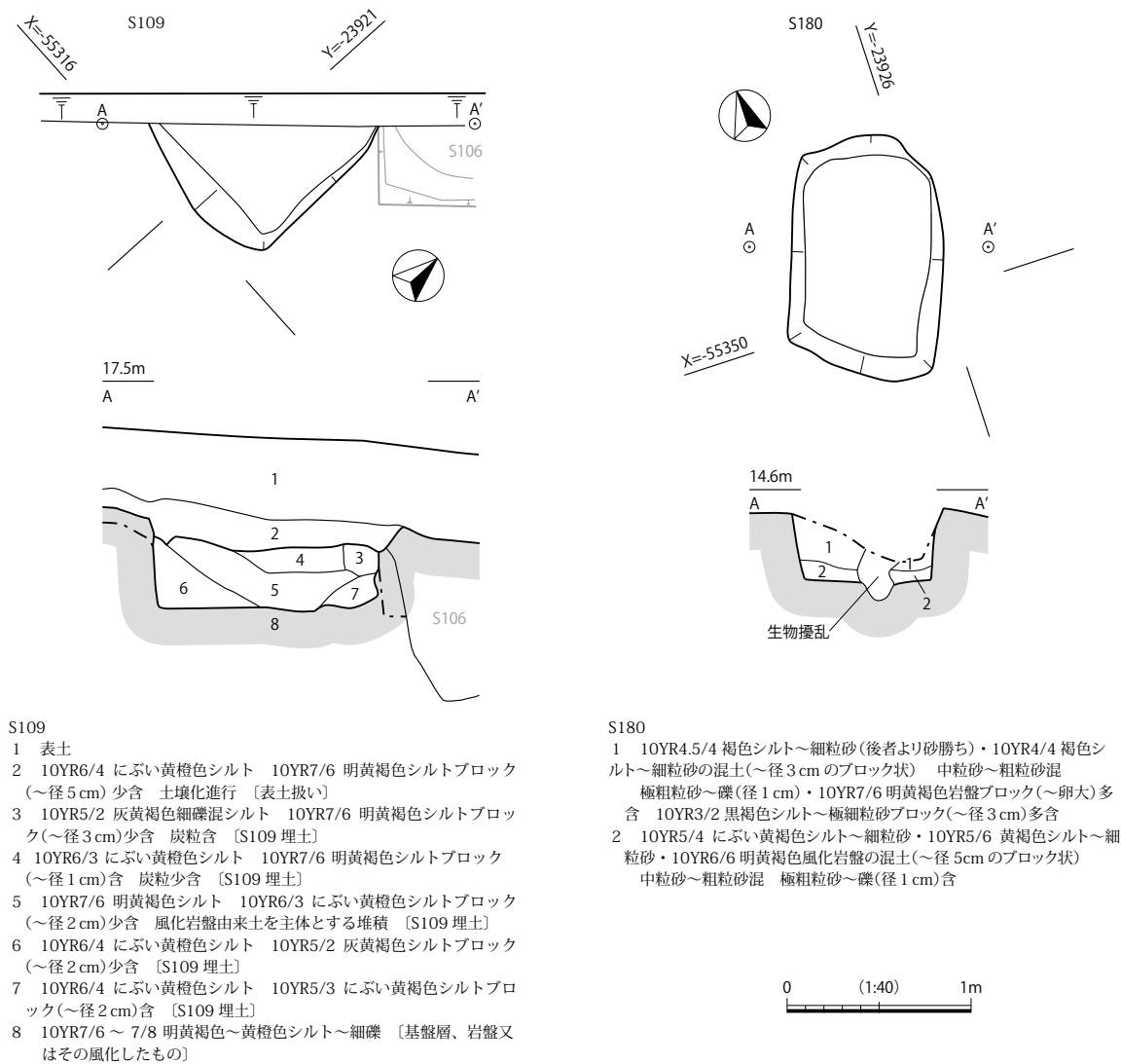
本遺構からの出土遺物は皆無であるが、帰属時期は六道銭を伴うS105土壙墓の年代観を援用し、中世後期帰属の可能性を考える。

S180 (第134・177図、PL.101)

7区南部のO23及びP23グリッドで検出した。S149竪穴状遺構とこれに伴うS181土坑を切る。平面形状は隅丸の長方形で、検出規模は長軸1.3m、短軸0.83m、最大深さ0.42mである。長軸はN-20.1°-Wである。

埋土は、基盤層のブロックを含む褐色土からなる上層と、黄褐色土と基盤層のブロックの混土からなる下層に分けられ、下層は0.1m弱の厚さで水平に堆積する。埋土から酸化焼成の土器の体部とみられる破片が出土している。

遺構の帰属時期は出土遺物からは詳らかにできないが、切り合い関係を持つ遺構の中で最も新しいことや土壙墓と判断したことから、中世後期と推定できる。



第177図 S109・180土壌墓平面・断面図

(7) 土坑

S009 (第134・178図、PL.102)

7区北西部のL25グリッドで検出した。トレンチ掘削により東側が切られたため全容は不明であるが、残存部分の形状から円形の穴であると推定できる。検出規模は、南北0.5m、東西0.39m、検出面からの最大深さ0.28mである。浅い穴の底に小さな穴が掘られている。

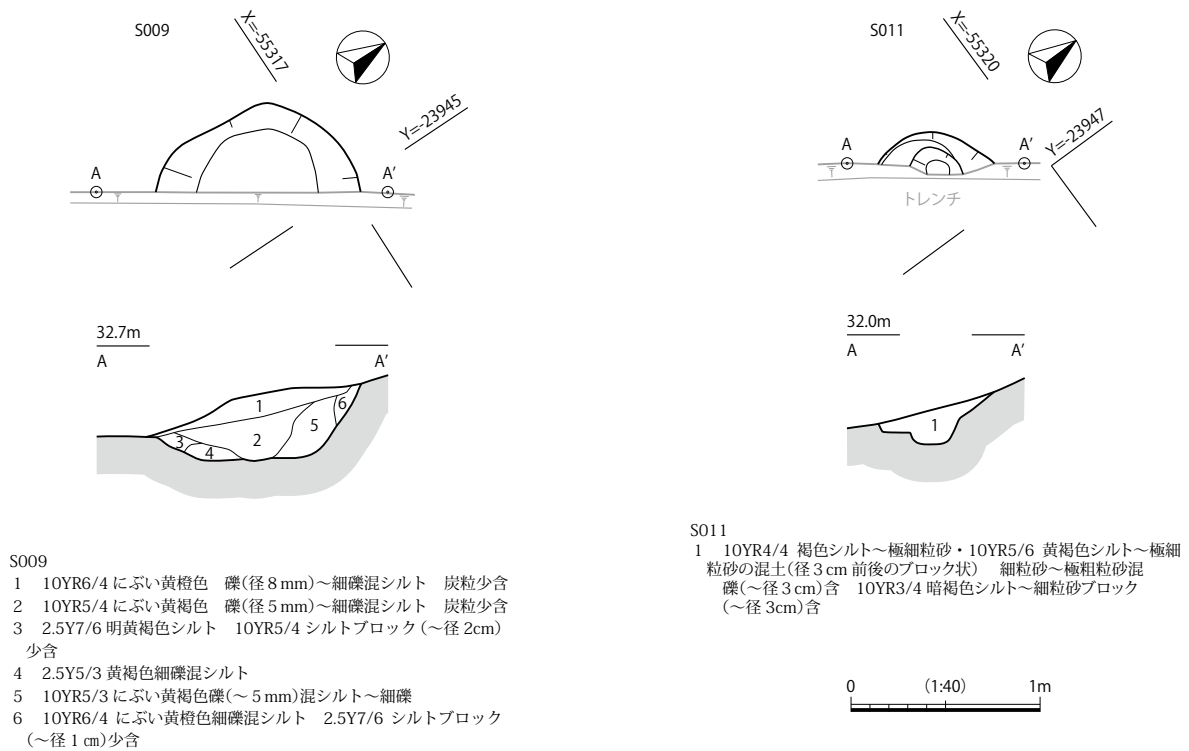
埋土は混土からなる。埋土からの出土遺物は、酸化焼成の土器細片1点である。

遺構の帰属時期は、第Ⅲ層 (包含層1) を除去した第Ⅴ層 (谷部包含層2) 上面で検出した遺構であることから、概ね古墳時代前期に比定できる。

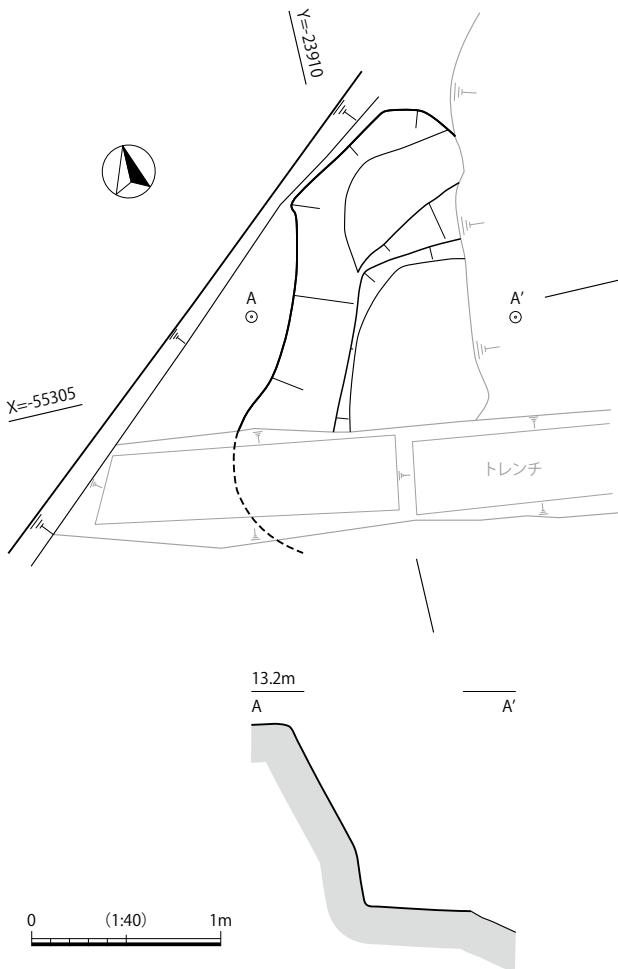
S011 (第134・178図、PL.102)

7区北西部のM25グリッドで検出した。トレンチ掘削により東側が切られたため全容は不明であるが、残存部分の形状から円形の穴であると推定できる。検出規模は、南北0.95m、東西0.73m、検出面からの最大深さ0.4mである。埋土からの出土遺物はない。

遺構の帰属時期は、第Ⅲ層 (包含層1) を除去した第Ⅶ層上面で検出した遺構であることから、古墳時代前期以前に比定できるが、詳らかにできない。



第178図 S009・011土坑平面・断面図



第179図 S060土坑平面・断面図

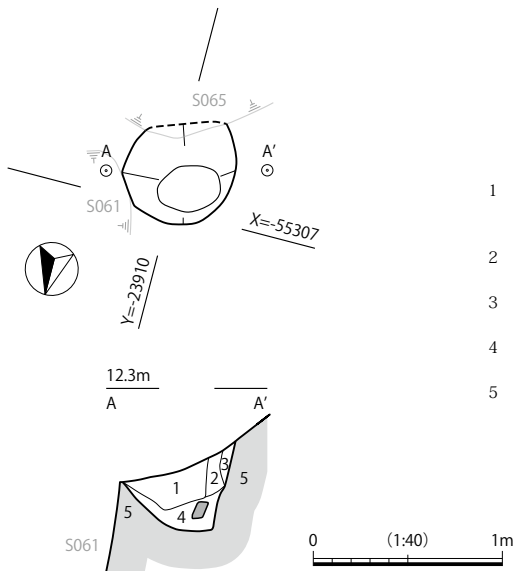
S060 (第134・179図)

7区北東端部のK21～22グリッドで検出した。S075地下式坑を切る。東側が攪乱坑により切られるため、掘方の全容は不明である。検出規模は、東西幅1.48m、南北長1.7m、検出面からの最大深さ0.98mである。S060土坑は当初、S075地下式坑の一部と認識し掘り進めたため断面記録を取ることができず、埋土の堆積状況は不明である。

埋土からの出土遺物は、酸化焼成の土器細片である。遺構の帰属時期は、S075地下式坑を切ることから、中世後期以降に比定できるが詳らかにできない。

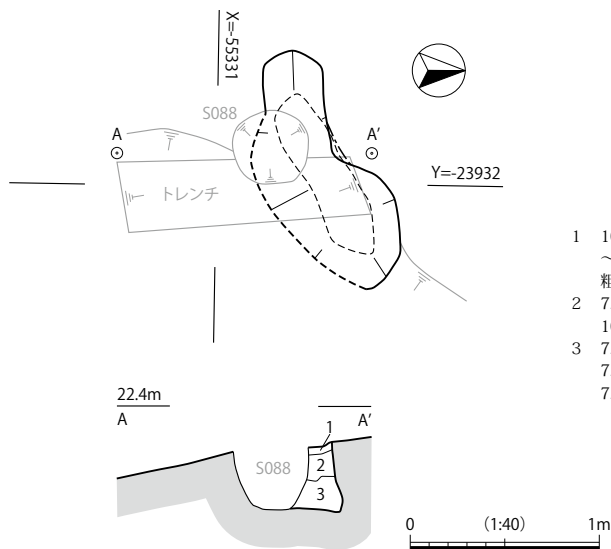
S076 (第134・180図、PL.102)

7区北東部のK21～22グリッドで検出した。S075地下式坑を切り、S065土坑に切られる。平面形状は、ほぼ円形である。検出規模は、長軸0.65m、短軸0.56m、検出面からの最大深さ0.48mである。埋土は黄橙色シルトを主体とし、含まれる橙色シルトブロックの多寡などによりいくつかに分けられる。



- 1 10YR6/3 にぶい黄橙色礫(～径1cm)混シルト 7.5YR6/8 橙色シルト(5層由来)ブロック(～径3cm, 径1cm 主体)含 10YR7/4 にぶい黄橙色シルト(岩盤が風化したもの)ブロック(～径1cm)少含 炭粒少含
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト 7.5YR6/8 橙色シルトブロック(～径2cm)少含 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック(～径1cm)少含 炭粒少含
- 3 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト 7.5YR6/8 橙色シルトブロック(～径1cm)多含 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック(～径1cm)少含 炭粒少含
- 4 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト 7.5YR6/8 橙色シルトブロック(～径2cm)含 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック(～径1cm)少含 炭粒少含
- 5 7.5YR6/8 橙色シルト～粘土 10YR7/4 にぶい黄橙色シルトブロック(～径5cm, 径2cm 主体)少含 [S075 埋土]

第180図 S076土坑平面・断面図



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状)粗粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm)含
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～細粒砂 粗粒砂～極粗粒砂混 細礫含 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径1cm 前後)含
- 3 7.5YR5/6 明褐色シルト～細粒砂ブロック主体(～径7cm) 7.5YR3/3 暗褐色シルト～細粒砂との混土 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径5mm)含 7.5YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径3cm)含

第181図 S089土坑平面・断面図

埋土からの出土遺物は、酸化焼成の土器細片1点である。遺構の帰属時期は遺構の切り合いから、中世後期以降に比定できる。

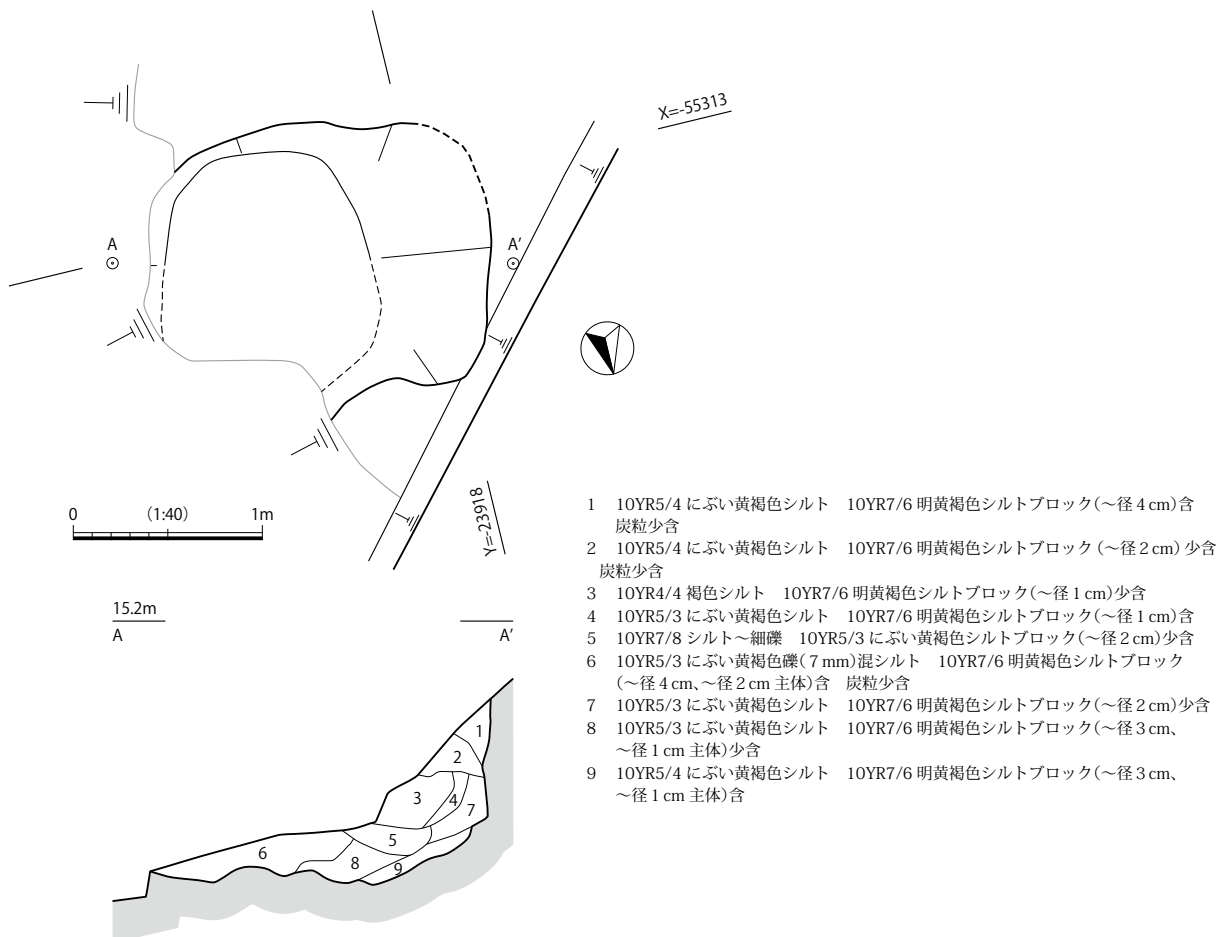
S089 (第134・181図)

7区中央部北寄りのN24グリッドで検出した。S088ピット(埋蔵銭)に切られる。平面形状は細長の不整形で、長軸1.33m、短軸0.29～0.54m、検出面からの最大深さ0.37mである。埋土は、箱形の断面形状の掘方に埋戻し土である混土あるいはブロック土を含む土が水平に堆積する。

埋土からの出土遺物はない。遺構の帰属時期は、S088ピットに切られることから中世後期以前に比定できるが詳らかにできない。

S102 (第134・182図、PL.102)

L22グリッドの斜面地に位置する大型の土坑で、平面形はやや歪な楕円形状を呈する。掘方の東側は後世の攪乱及び斜面地による流失が想定され、遺存状況が悪い。本遺構は、S110段状遺構、S105土壙墓と掘方が重複する。S110段状遺構に対しては土層断面の所見から、本遺構がS110段状遺構の



第182図 S102土坑平面・断面図

埋土を掘り込むことを確認した。S105土壇墓との先後関係については、土層断面での確認は果たせなかったが、S105土壇墓はS110段状遺構とも切り合っており、S110段状遺構より先行することが判明しているため、これらのうちでは、本遺構が最も後出する。

検出面における規模は、長軸が1.81m、短軸が1.58m、深さが最大で0.97mである。底面は概ね平坦を指向するが、細かい凹凸が見られやや不整である。埋土は、基盤層由来土をブロック状に包含する堆積や基盤層由来土を主体とする堆積からなる。

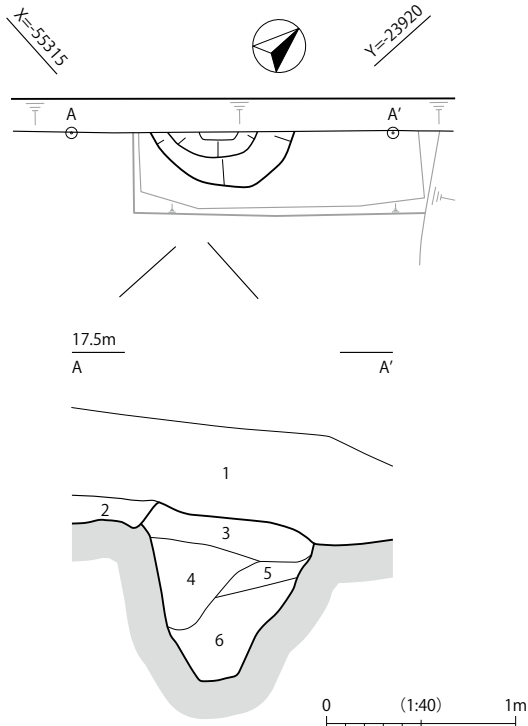
遺物は土器片が僅かに出土したものの細片であり、帰属時期ははっきりしない。また、かなり大きな掘方を持つものの、形態的な特徴から機能を推し量るのは難しい。

S106 (第183図、PL.103)

L22・23グリッド、斜面中途に認められる平坦地に位置する。当該範囲は人為的に造成された可能性が考えられるが、一部調査区外となり全体像が把握し難いこと、表土直下に基盤層が露出し出土遺物も僅少であることから、詳細は不明である。

本遺構掘方の半分以上は調査区外となるため全体像は不明だが、平面形は円形ないし楕円形を呈するとみられる。検出面における規模は、最大長が0.77m、深さは最大で0.95mを測る。掘方の断面形は底面が窄まる逆台形である。

埋土は4層に分層でき、いずれも基盤層由来土をブロック状に含む堆積からなる。本遺構における出土遺物は皆無であり、帰属時期や機能については不明である。



- 1 表土
- 2 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径5cm)少含
土壌化進行、表土扱い
- 3 10YR5/6 黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 炭粒少含
- 4 10YR5/2 灰黄褐色シルト 7.5YR7/8 黄褐色シルト～細礫ブロック(径10cm)少含
10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径2cm)含 炭粒少含
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)含
炭粒少含
- 6 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)含
炭粒少含

第183図 S106土坑平面・断面図

S126 (第134・184図、表10、PL.103)

7区中央部西寄りのN24グリッドで検出した。東側が後の土地改変と攪乱により切られるため、全容は不明である。土坑の底でピット1基を検出した。土坑の検出規模は、南北軸1.2m、東西軸0.64m、検出面から土坑の底までの最大深さ0.27mで、S131ピットは長軸0.15m、短軸0.14m、土坑の底からの深さ0.14mである。

土坑とピットの埋土は、それぞれ混土からなる。埋土からの出土遺物はない。遺構の帰属時期は、第V層（谷部包含層2）上面で検出した遺構であることから、弥生時代終末期以降に比定できるが詳らかにできない。

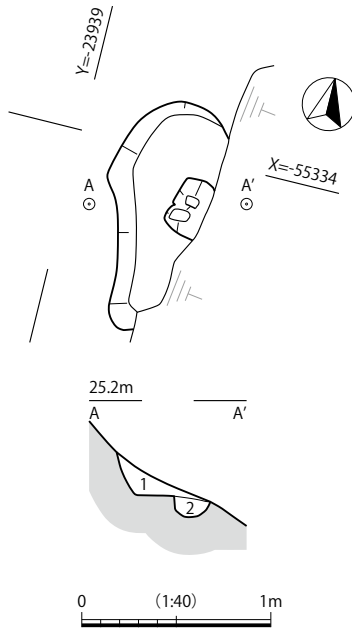
S136 (第134・185図)

7区中央部のN23グリッドで検出した。平面形状は不整な楕円形で、検出規模は、長軸0.61m、短軸0.47m、検出面からの最大深さ0.45mである。埋土は上下2層に分けられ、出土遺物はない。平断面の形状や埋土の堆積状況はS125土坑と似る。

遺構の帰属時期は不明である。

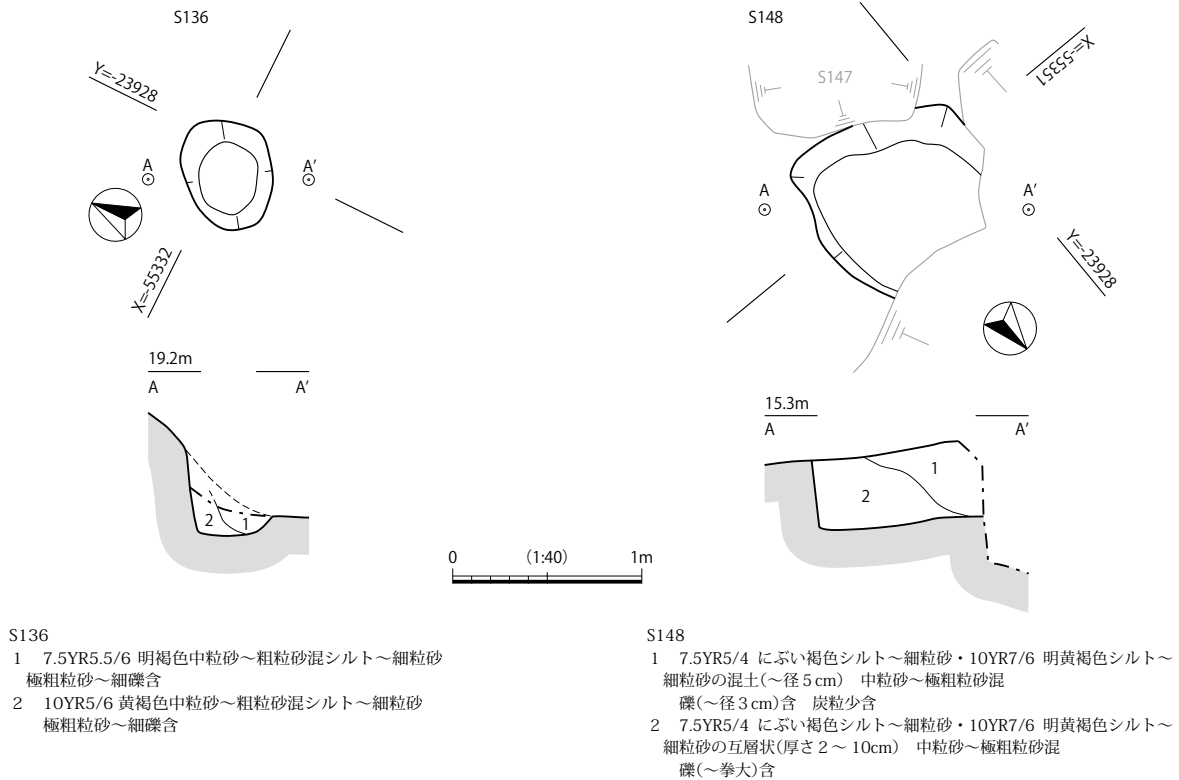
S148 (第134・185図、PL.103)

7区南部のP23グリッドで検出した。S149堅穴状遺構埋土を切り、S098及びS147地下式坑の堅坑に切られる。北側が



- 1 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混礫(～径1cm)含 10YR5/8 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径2cm前後)少含
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径4cm)主体 中粒砂～極粗粒砂混 細礫含 10YR5/8 黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径3cm)含

第184図 S126土坑平面・断面図



第185図 S136・148土坑平面・断面図

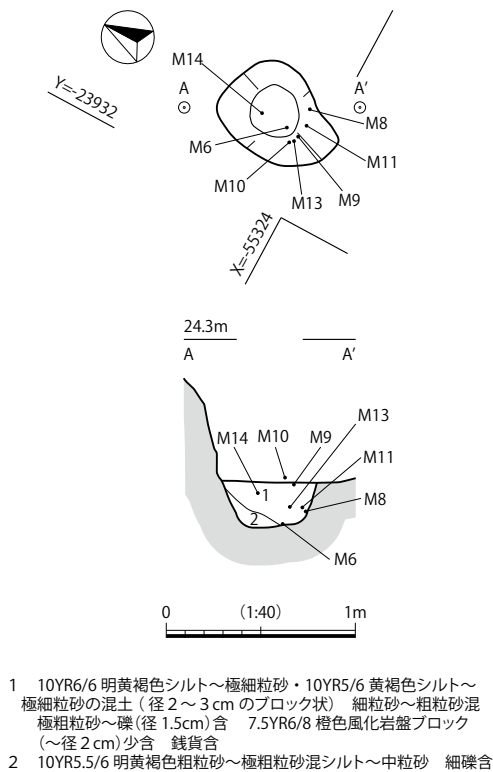
表土掘削時に現生の木の根を抜き取った時の穴で切られるため全容は不明であるが、残存する部分からは、南北方向に主軸を持つ長方形に近い平面形状と推定できる。検出規模は、東西軸0.97m、南北軸0.92m、検出面からの最大深さ0.47mである。

埋土は、にぶい褐色土と明黄褐色土のブロックが互層状に堆積する下層と、これを切り堆積するにぶい褐色土と明黄褐色土の混土からなる。埋土からの出土遺物は、弥生土器と見られる壺か甕の体部細片1点である。

遺構の帰属時期は、遺構の切り合いから中世後期に比定できる。推定される平面形状や主軸、残存する断面形状及び帰属時期からは、土墳墓である可能性を否定できない。

S125 (第134・186・187図、写真7、PL.103)

7区中央部北寄りのM24グリッドで検出した。埋蔵銭を伴うS088ピットから北側に約7mの位置で検出した穴である。平面形状は不整な楕円形で、長軸0.62m、短軸0.45m、検出面からの最大

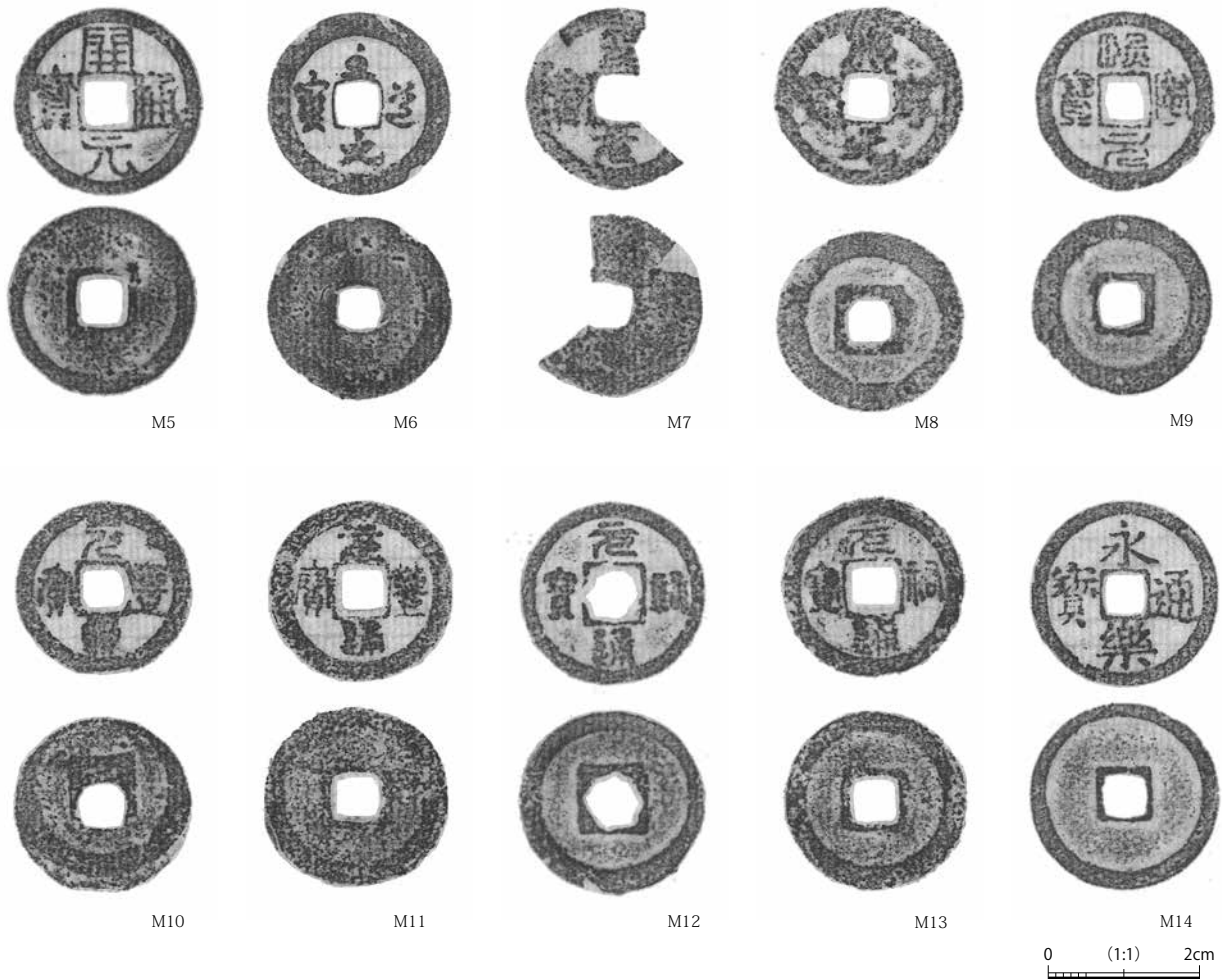


第186図 S125土坑平面・断面図

深さ0.39mである。平面形状について細かく見ると、直径0.5m前後の円形で、南側に拡張するような形状である。

埋土は、上下2層に分けられる。上層は基盤層のブロックを少量含む混土からなり、埋め戻しによる土と考えられ、下層は混土でもなくブロック土も含まないことや丘陵斜面の高い側に堆積が多いことから、埋め戻されるまでに上位から堆積した土と考えられる。

埋土からの出土遺物は銭貨10枚で、すべて埋土上層からの出土である。出土状況については1箇所ですべて出土したのではなくバラバラで、銭の向きも様々である。このような銭貨の出土状況か



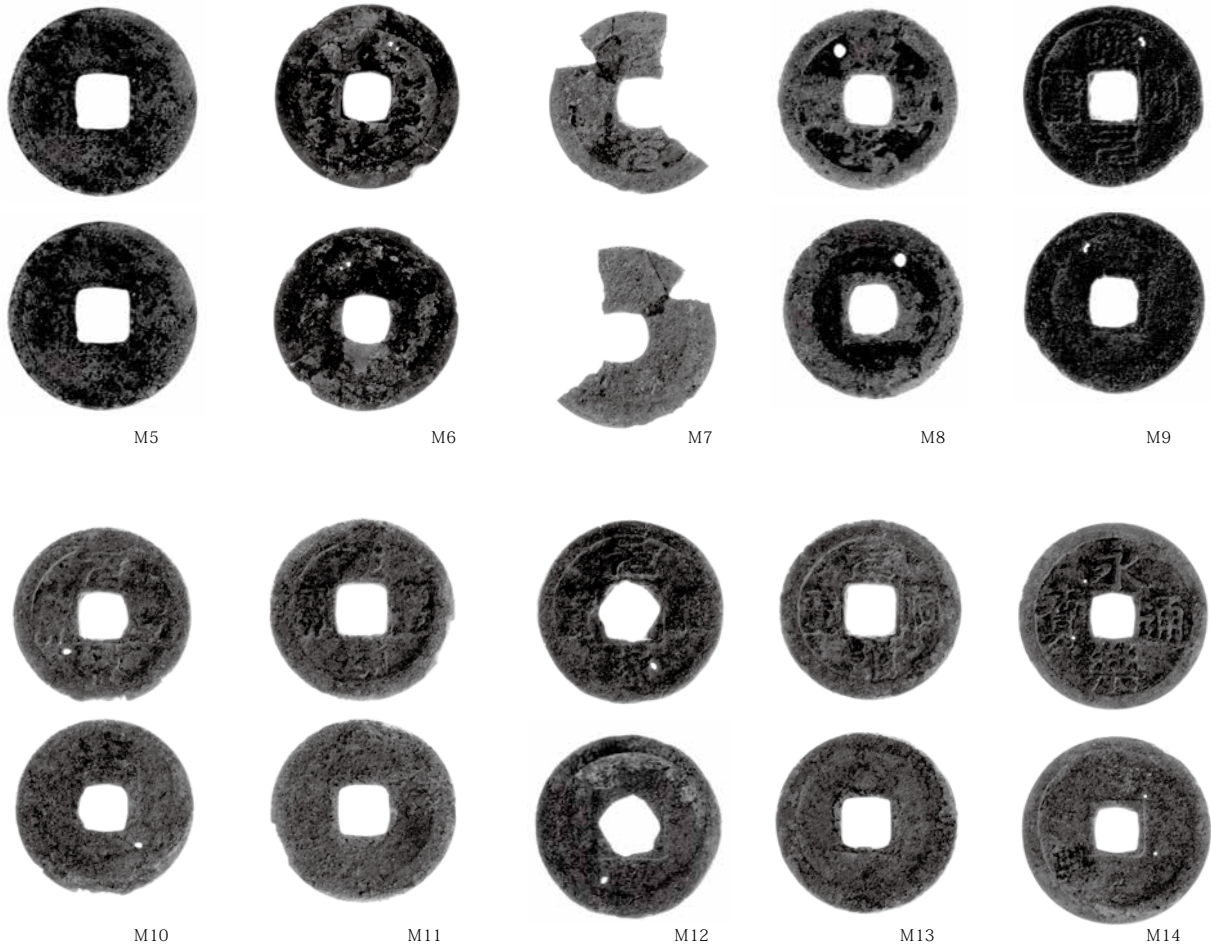
掲載番号	挿図番号	銭種番号	取上番号	地区 グリッド	遺構 層位	銭貨名				国名	初鑄年	銭径 (A/mm)	銭径 (B/mm)	内径 (A'/mm)	内径 (B'/mm)
						名	価値	書体	背文字						
M5	187	6-b	207	7区 M24	S125土坑 埋土上層	開元通寶		篆書		唐	621	25.19	25.24	20.73	20.62
M6	187	11-c	210	7区 M24	S125土坑 埋土上層	至道元寶		草書		北宋	995	24.59	24.56	18.10	18.29
M7	187	32-b	214	7区 M24	S125土坑 埋土上層	聖宋元寶		篆書		北宋	1101	24.39	—	18.36	—
M8	187	27-a	213	7区 M24	S125土坑 埋土上層	熙寧元寶		真書		北宋	1068	24.00	24.02	17.58	17.82
M9	187	27-b	206	7区 M24	S125土坑 埋土上層	熙寧元寶		篆書		北宋	1068	24.29	23.87	19.54	19.23
M10	187	28-c	205	7区 M24	S125土坑 埋土上層	元豊通寶		篆書		北宋	1078	—	23.71	18.50	18.24
M11	187	28-c	211	7区 M24	S125土坑 埋土上層	元豊通寶		篆書		北宋	1078	24.45	24.85	18.79	18.89
M12	187	29-b	207	7区 M24	S125土坑 埋土上層	元祐通寶		篆書		北宋	1086	24.61	24.72	20.26	20.15
M13	187	29-b	208	7区 M24	S125土坑 埋土上層	元祐通寶		篆書		北宋	1086	24.19	24.25	18.91	18.83
M14	187	54	212	7区 M24	S125土坑 埋土上層	永樂通寶				明	1408	25.04	25.18	20.51	20.61

第187図 S125土坑出土銭貨拓影及び計測表

ら上層の埋め戻しが行われた時点で、埋め戻し土の中に銭貨が混入していたと考えられる。銭種の内訳は第187図に示した通りで、最古銭が開元通宝(初鑄621年)、最新銭は永楽通宝(初鑄1408年)である。

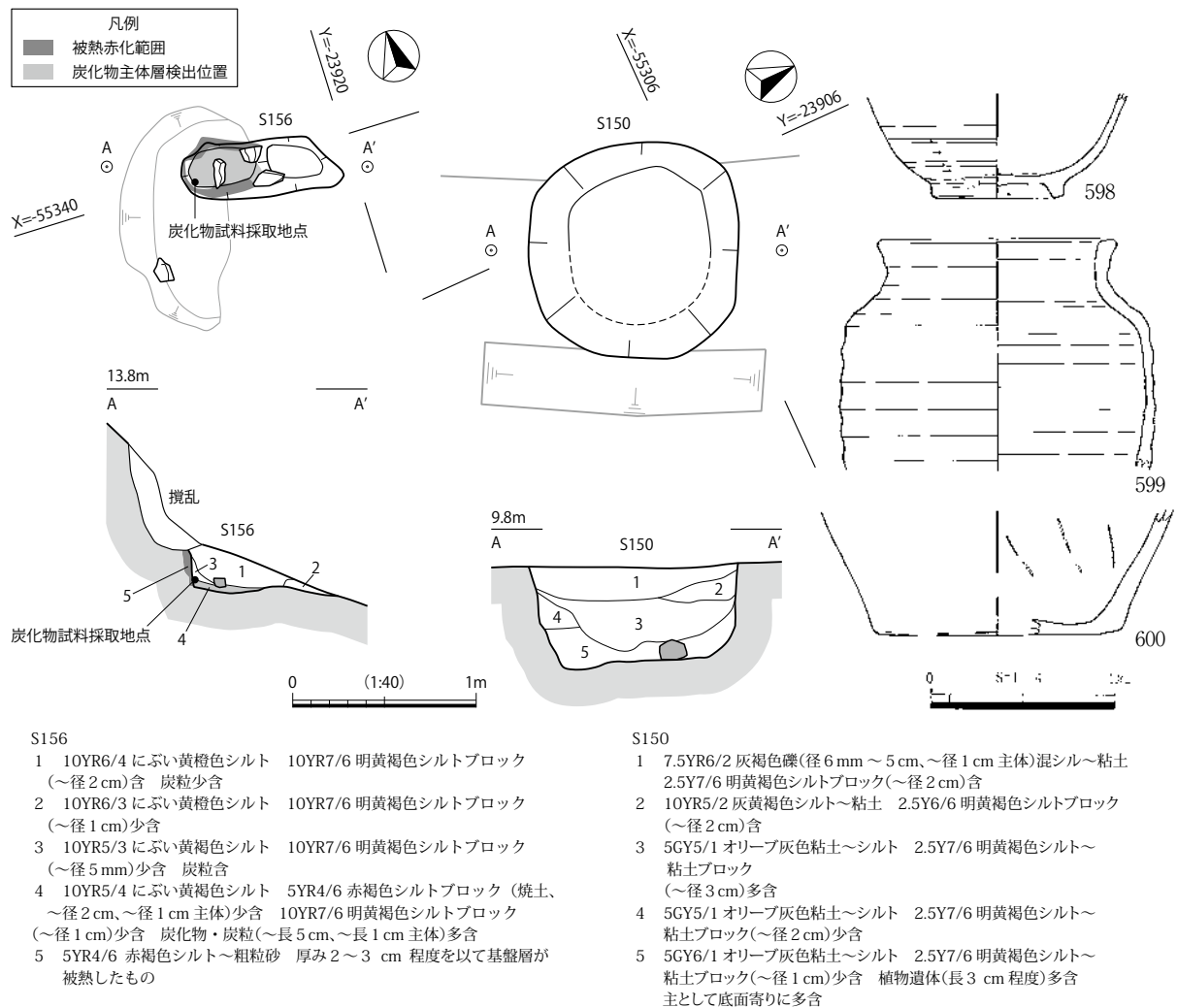
銭の遺存状況は良好だが、銭自体は、孔が開いているものや、孔が方形でないものがある。また、銭のうち1枚(M11)には、圧迫された縫った藁が付いており、縞であった可能性がある。他の1枚(M10)には他の銭の緑錆が付着している。この状況から、出土した銭は、埋戻し土に混入する以前には縞銭の状態であることが窺える。

遺構の帰属時期は、出土遺物から中世後期に比定でき、銭種の内訳がS088ピット(埋蔵銭)と類



内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
7.93	8.15	7.04	6.85	1.15 ~ 1.20	1.20	1.15	1.20	1.15	2.59	
7.28	7.00	3.13	3.17	0.80 ~ 1.00	1.00	0.90	0.85	0.80	1.88	
7.62	—	6.34	—	1.05 ~ 1.20	1.05	—	1.10	1.20	1.43	
7.44	7.18	6.32	6.07	0.95 ~ 1.05	1.02	0.95	1.05	1.00	2.68	
8.12	7.50	6.21	6.19	1.20 ~ 1.45	1.20	1.25	1.40	1.45	2.99	
7.45	7.80	5.91	6.22	1.25 ~ 1.35	1.35	1.35	1.25	1.30	2.96	背面他銭文錆写
7.96	7.68	6.61	6.63	1.05 ~ 1.20	1.10	1.20	1.05	1.10	2.67	ワラ付着
8.84	9.25	7.75	7.50	1.10 ~ 1.20	1.20	1.05	1.10	1.15	2.39	
8.23	8.19	6.39	6.33	1.60 ~ 1.70	1.70	1.60	1.60	1.60	4.14	
6.94	7.21	5.62	5.69	1.20 ~ 1.50	1.50	1.50	1.20	1.20	2.95	

写真7 S125土坑出土銭貨写真及び計測表



第188図 S150・156土坑平面・断面図及び出土遺物

似することから、時期的に大きな開きはないと考える。

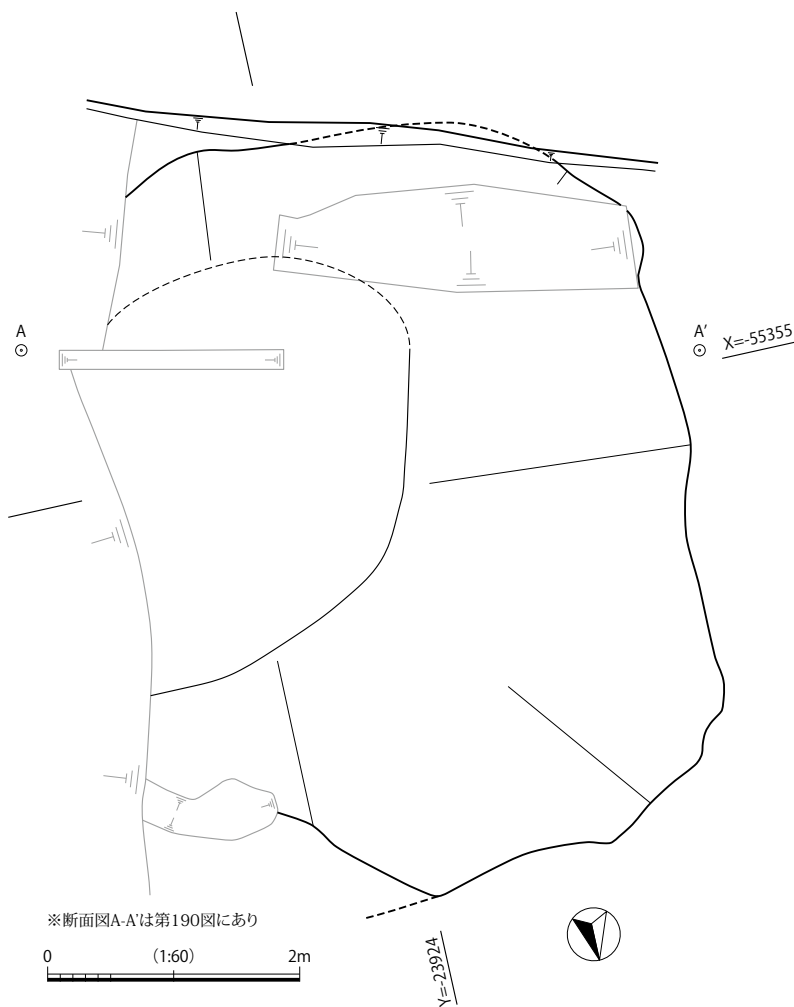
本遺構は銭貨が10枚出土し、S088ピット（埋蔵銭）、S105土壙墓と共に銭貨を伴う数少ない遺構であることに加え、S088ピット（埋蔵銭）の程近くに位置することから注目される。掘方の規模はS088ピット（埋蔵銭）より一回り大きいものの近似し、上述のように銭貨の出土状況は埋め戻しに際しての偶発的な混入を強く印象付ける。

以上の調査所見を踏まえ、根拠は薄弱ながら想像を逞しくすれば、本土坑にはS088ピット（埋蔵銭）と同様に埋蔵銭が収められていたが、掘り出された際に、容器から漏れ出した銭貨が土坑埋め戻し時に混入した可能性を指摘しておきたい。

S150 (第134・188図、表32、PL.103・116・118)

7区北東端部のK21グリッドで検出した。ほぼ円形の穴で、検出規模は、長軸1.28m、短軸1.22m、検出面からの最大深さ0.58mである。埋土は、ブロック土を含む粘質土からなり、底面には植物遺体を主体とする薄層が堆積する。

埋土からの出土遺物は、弥生土器、土師器、国産陶器の破片で時期幅が広い。このうち3点（598～600）を図化した。598は在地系と推定される高台付碗であり、体部は内外面施釉、削り出し高台は露胎となっている。19世紀頃に比定されようか。599は越前焼の壺であり、口縁端部が太くなる特



第189図 S155土坑平面図

徴を示すことから、17世紀前半の所産と考えられよう。600は同じく越前焼の甕底部であり16世紀頃と推定される。遺構の帰属時期は、出土遺物から近世以降に比定できる。

S155 (第134・189・190図、PL.104)

7区南東部のP23グリッドで検出した。S095道路遺構の旧道路を切り、現況の山道の路盤により切られる。東側は後世の造成により削られ、南側は一部が調査区外に至るため全容は不明であるが、東側に開く円形ないし隅丸方形の大きな穴と推定できる。残存規模は、南北軸6.2m、東西軸0.48m、検出面からの最大深さ2.25mである。

埋土は大きくは上下2層に分けられる。上層は、埋戻し土を主体としながらも、局所的に雨水等により流入したと推定できる土を挟み、最終的に埋め戻されるまでの間に、何度か部分的に掘り返されたりしている

様子が確認できる。下層は現地調査時に第Ⅵ層を切ることを観察したので、本遺構の埋土として掘り下げたが、実際の埋土は上層部分だけで、本遺構が掘られる以前に部分的に第Ⅵ層を切り堆積する土ある可能性がある。

出土遺物はない。遺構の帰属時期は、S095道路遺構の旧路盤を切ることから近世以降に比定でき、現況の山道の路盤に切られることから近代までに比定できる。

本遺構はS095道路遺構の旧道路から新道路に付け替えられるまでの間に、丘陵部の斜面を切って掘られ埋められていることから、新道路への付け替えに伴うものと考えられるが、その目的はわからない。

S156 (第134・188・375、表69・70、PL.104)

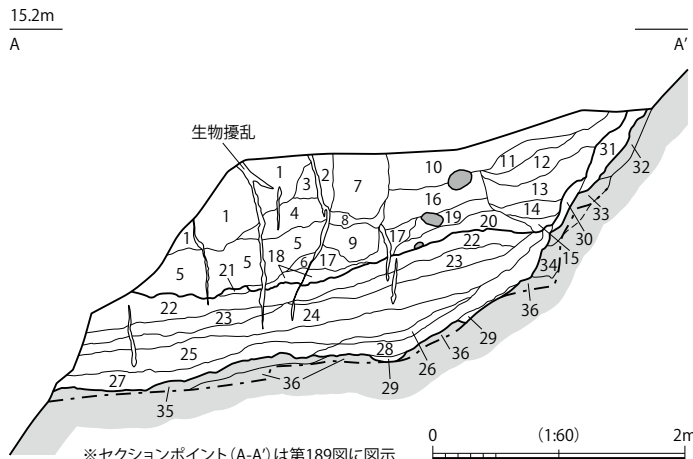
7区東部のN23及びO23グリッドで検出した。不整な長円形の穴で、検出規模は、長軸0.8m、短軸0.32m、検出面からの最大深さ0.27mであるが、上部が後世の造成により削られているため本来の構造は不明である。

埋土は、ブロック土を含む埋戻し土である。掘方の西半分の壁面は被熱により赤褐色に変色しており、また、掘方の底には炭片や炭粒が多く堆積することから、遺構内で火が焚かれたことがわかる。埋土から長径0.18mまでの礫が3個出土しているが、被熱はしておらず、埋戻しの際に投げ入れられたものと考えられる。埋土からの人工遺物の出土はない。

掘方の底に堆積する炭化物の放射性炭素年代測定を行ない、 $155 \pm 15\text{yrBP}$ 、 2σ 暦年代範囲で1668-1694 cal AD (15.6%)、1727-1782 cal AD (45.1%)、1797-1813 cal AD (10.7%) の結果を得た (第7章第5節参照)。遺構の帰属時期は、この年代測定の結果から、近世後期に比定できる。

S158 (第134・191図、PL.105)

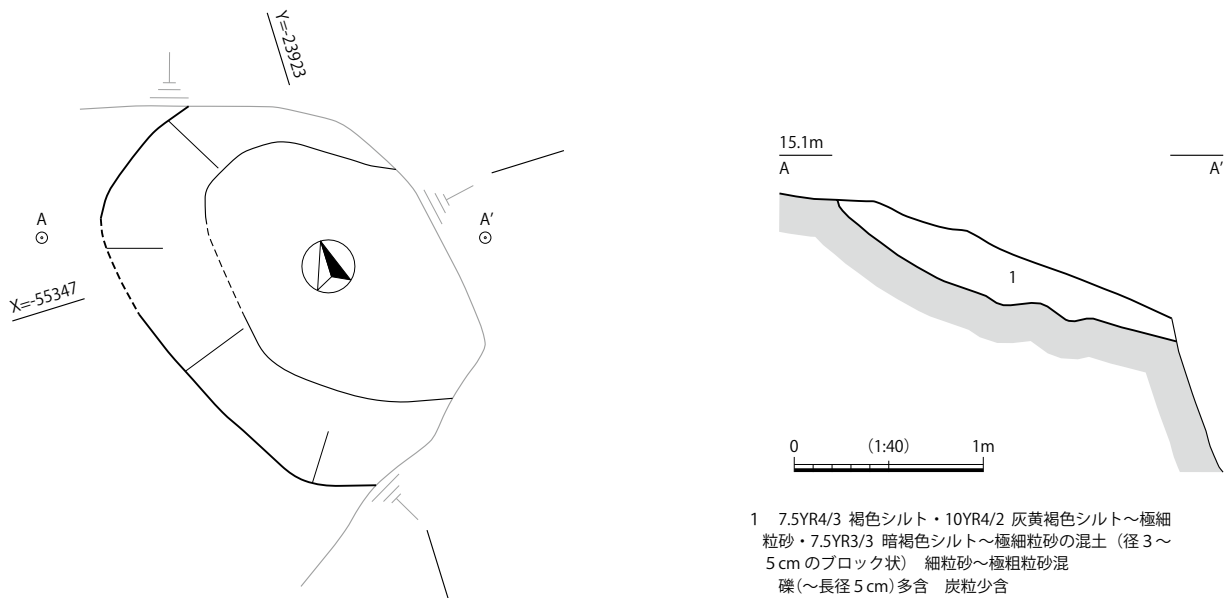
7区南東部のO23グリッドで検出した。北側が表土掘削時の木根採取痕、東側が後世の造成により切られるため、平面形状を含む全容は不明である。残存部分の長さ2.2m、幅1.55m、検出面からの最大深さ0.75mである。埋土は、径5cmまでの礫を多く含むブロック土からなる単層で、埋戻し土と考えられる。



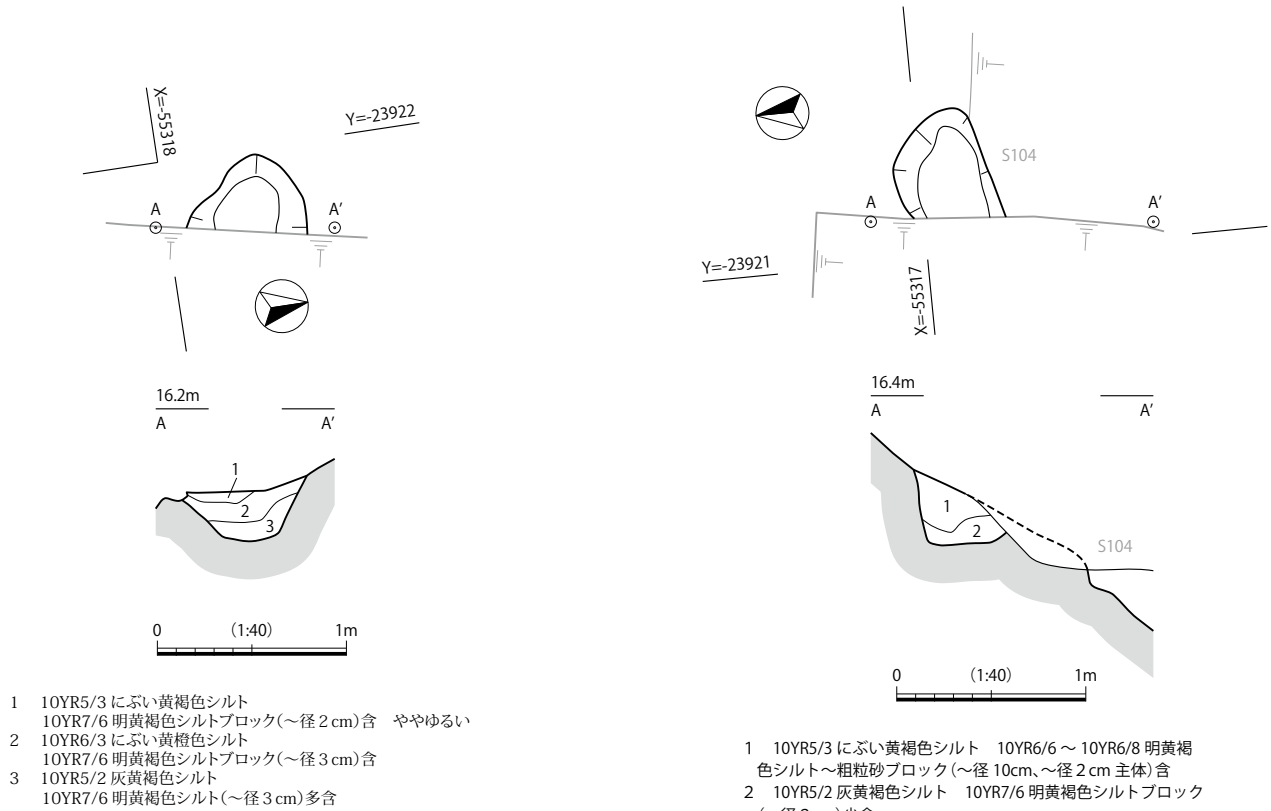
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト～極細粒砂・10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂の混土(径4cm 前後のブロック状) 細粒砂～細礫混礫・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径1cm～卵大)含
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂 極粗粒砂～礫(径1cm)含
- 3 10YR3.5/3 黒褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～礫(径1cm)含 4より砂勝ち
- 4 10YR3/3 暗褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～礫(径1cm)含 礫(径1～2cm)含 3より泥勝ち 1～4に酸化鉄分(管状)・酸化マンガン(斑状)沈着
- 5 10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂・10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂の混土(～径5cmのブロック状) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径1cm)含 礫(径1～5cm)少含 下部は10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂主体 酸化マンガン(斑状)・酸化鉄分(管状)沈着
- 6 10YR4/1 褐灰色粘土～シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂混シルト・10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色極粗粒砂混シルト～粗粒砂の薄層(～厚さ3cm) 層界に酸化鉄分(層状)沈着
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色極粗粒砂～細礫混シルト～粗粒砂 礫・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径5mm～5cm)含 下部は10YR3/3 暗褐色粗粒砂～中粒砂混シルト～細粒砂ブロック(～径5cm)との混土 酸化マンガン(斑状)・酸化鉄分(管状)多沈着
- 8 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(～径1cm)含
- 9 10YR2.5/1 黒褐色細粒砂～中粒砂混シルト～極細粒砂 粗粒砂～礫(径1cm)含 礫(径1.5～5cm)少含 下部は10YR4/2 灰黄褐色細粒砂～中粒砂混シルト～極細粒砂ブロック(～径5cm)との混土

- 10 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂・10YR5/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂の混土(径4cm 前後のブロック状) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径1cm)含 礫・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径2～5cm)少含 酸化鉄分(管状)・酸化マンガン(斑状)沈着
- 11 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～礫(～径1cm)含 礫・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径3～5cm)少含 酸化鉄分(管状)・酸化マンガン(斑状)沈着
- 12 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～礫(～径1cm)含 礫・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径3～5cm)少含 酸化鉄分(管状)・酸化マンガン(斑状)沈着 11より砂勝ち
- 13 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂・10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂の混土(～径5cmのブロック状) 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(～径1cm)含 礫・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径2cm～卵大)少含 酸化鉄分(管状)・酸化マンガン(斑状)沈着
- 14 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂の混土(～径5cmのブロック状) 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(～径1cm)含 礫・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径1.5～3cm)少含 10YR4.5/1 褐灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト～極細粒砂ブロック(～径6cm)含 酸化鉄分(管状)・酸化マンガン(斑状)沈着
- 15 10YR3.5/2 黒褐色シルト～極細粒砂・10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂の混土(径4cm 前後のブロック状) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径1.5cm)含 酸化鉄分(しみ状)沈着
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂・10YR5/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂の混土(径4cm 前後のブロック状) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径1cm)含 礫・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径2～5cm)少含 酸化鉄分(管状)・酸化マンガン(斑状)沈着
- 17 10YR4/3.5 にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂混シルト～極細粒砂 粗粒砂～礫(径1cm)含 礫・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径2cm～拳大)少含 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂・10YR2.5/1 黒褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径5cm)との混土 酸化鉄分(管状)・酸化マンガン(斑状)少し沈着
- 18 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂・10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂・10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径1～2cm)少含 酸化鉄分(管状)・酸化マンガン(斑状)沈着
- 19 10YR5/3 にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂 極粗粒砂～礫(径8mm)含 10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径1～2cm)少含 酸化マンガン(斑状)沈着
- 20 10YR5/2 灰黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径1cm・径2cm～卵大)少含 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト～極細粒砂ブロック(卵大～拳大)局所的に含 上部に酸化鉄分(しみ状)沈着
- 21 10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂・10YR2.5/1 黒色シルト～極細粒砂の混土(～径3cmのブロック状) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径5mm)含 酸化鉄分(管状)少し沈着
- 22 10YR2.5/1 黒色シルト～極細粒砂・10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂の混土(～径3cmのブロック状) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径1cm)含 10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径2cm～卵大)少含 酸化鉄分(管状)少し沈着
- 23 10YR3/2 黒褐色細粒砂～中粒砂混シルト～極細粒砂 粗粒砂～細礫含 礫(径5mm～3cm)少含 22・24より砂勝ち 酸化鉄分(管状)少し沈着
- 24 10YR3/1.5 黒褐色細粒砂～中粒砂混シルト～極細粒砂 粗粒砂～細礫含 礫(径5mm～卵大)少含 10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(～径2cm)含 酸化鉄分(管状)少し沈着
- 25 10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂・10YR3.5/1 黒褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状) 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～細礫含 礫・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック多(径5mm～5cm)含 酸化鉄分(管状)少し沈着
- 26 10YR4/2 灰黄褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂 極粗粒砂～細礫含 礫(径1～3cm)少含 酸化鉄分(管状)少し沈着
- 27 10YR3/1 黒褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～細礫含 礫(径1～3cm)少含 炭粒含 酸化鉄分(管状)少し沈着
- 28 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂～中粒砂混シルト～極細粒砂 粗粒砂～細礫含 10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(～径5cm)主に斜面部に含 酸化マンガン(斑状)密・酸化鉄分(しみ状)主に斜面部に沈着
- 29 10YR5/4 にぶい黄褐色礫(～径5mm)混砂～シルト 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径3cm)局所的に含
- 30 10YR5/6 黄褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～礫(径5mm)含 10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(～径1cm)含
- 31 10YR5.5/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂・10YR4/4 褐色中粒砂～シルト・10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂の混土(～径5cmのブロック状) 粗粒砂～細礫混 礫・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(径1cm～卵大)少含 酸化鉄分(しみ状)・酸化マンガン(斑状)沈着
- 32 10YR4/6 褐色シルト～粗粒砂・10YR4/1 褐灰色シルト～極細粒砂の混土(～径5cmのブロック状) 極粗粒砂～細礫混 礫(径1～3cm)少含 10YR3/2 褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径5cm)少含 [基盤層]
- 33 10YR3/3 暗褐色細粒砂～中粒砂混シルト～極細粒砂 粗粒砂～細礫含 10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(～径5cm)含 酸化マンガン(斑状)沈着 [基盤層]
- 34 10YR5/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂 10YR 7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径10cm)含 [基盤層、35と同一層]
- 35 10YR5/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂 [基盤層、36の土壌化層]
- 36 10YR 7/6 明黄褐色シルト～極細粒砂 [基盤層]

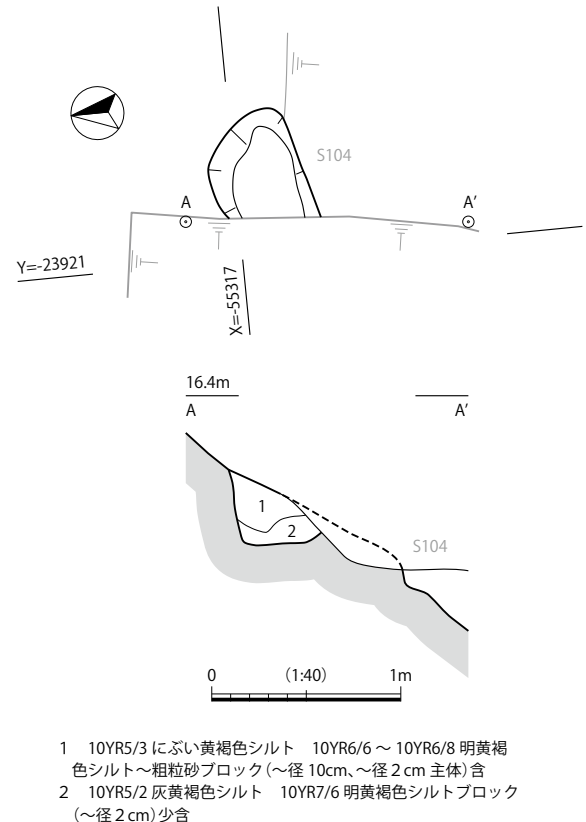
第190図 S155土坑断面図



第191図 S158土坑平面・断面図



第192図 S159土坑平面・断面図



第193図 S160土坑平面・断面図

出土遺物は、埋土から出土した弥生土器の破片である。遺構の帰属時期は、層位から古墳時代前期に比定できる。

S159（第159・192図、PL.105）

L23グリッドに位置する。道路遺構S104調査に伴い設定した土層確認トレンチ掘削により、掘方の半分程度を失う。平面形はやや不整な円形ないし楕円形と考えられ、検出面における規模は暫定的な長軸が0.65m、短軸が0.41m以上、深さは最大で0.35mである。本遺構は、掘方の一部を切通し状のS104道路遺構に掘削されているが、本遺構が道路遺構の切通し掘削より前に営まれたとした場合、相

当な深さを想定しなければならなくなり（A-A' セクションを参照）、本遺構の平面規模からは考え難い。

したがって、本土坑は道路遺構の切通し形成後、機能時に掘削された可能性が高い。そこから子細を見ていくと道路遺構変遷過程のうち、2段階路面埋没に伴う堆積に本遺構掘方は切られていることから、道路遺構機能時における1～2段階のいずれか、もしくは3段階路面形成より前に営まれた可能性が指摘できる。

本遺構からの出土遺物は皆無で、掘方の半分程度を失っていることもあり、機能や帰属時期の推定は困難である。ただ、上述したように道路遺構機能時に営まれた可能性が高いため、そこから近世、17世紀後半以降の帰属が想定される。

S160（第134・193図、PL.105）

L23グリッドの斜面地に位置する。土層断面確認のため設定したトレンチにより、掘方の半分弱を失う。他遺構との重複関係については、切通し状を呈するS104道路遺構により掘方を大きく掘削され、地下式坑と推定するS138とも掘方が重なり、後出することが土層断面から明らかとなっている。

平面形は楕円形状を呈すると考えられ、検出面における規模は長軸が0.58m以上、短軸が0.51m、深さは最大で0.39mである。底面は概ね平坦で掘方の断面形は逆台形に近く、平面形はやや不整ながら比較的しっかりと掘り込まれている。ただ、S159土坑と同様、道路遺構の切通し掘削以前に営まれたと仮定すれば、相応の深さが必要となることから、道路遺構機能時におけるいずれかの段階に帰属する可能性はある。

出土遺物は土器片が1点出土したのみで、帰属時期、機能の推定は難しい。

S177（第134・194図、PL.105）

L23グリッドの調査区境に位置する大型の土坑である。平面形は円形ないし楕円形を呈すると思われるが、掘方の半分以上が調査区外となるため定かではない。また、後出するS104道路遺構に掘方を大きく掘削されている。検出した規模は、最大長が2.35m、深さは最大で1.02mを測る。

底面はほぼ平坦で、遺存状況の比較的良好な北側壁面はやや丸みを持ちながら、ほぼ垂直に立ち上がる。埋土は基盤層由来土をブロック状に含む堆積からなる。

出土遺物は皆無で、帰属時期を推し量るのは困難である。切通し状の道路遺構に大きく掘削されているにも関わらず、遺存状況をみるとかなり大規模な土坑であったことが窺える。また、掘方の断面形も考慮に入れ調査区内の他遺構を参照すると、袋状土坑もしくは地下式坑が候補として挙げられよう。ただ、本遺構の検出範囲は半分以下に止まり、明確に判断することは難しい。

S183（第134・195図、PL.105）

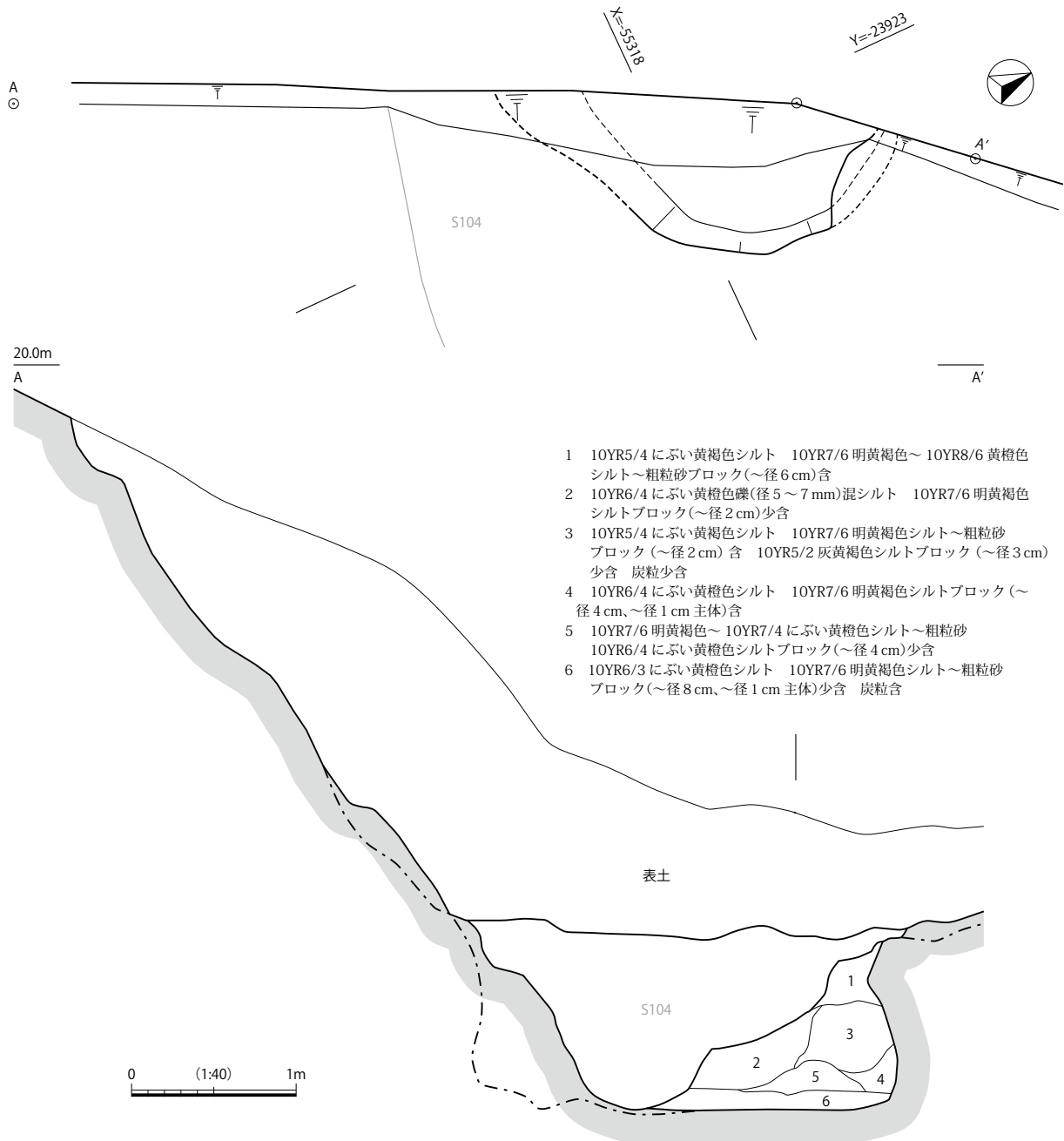
7区南部のP23グリッドで検出した。S155土坑に切られるため、上部の構造は不明で、残存部分では不整な長円形の穴である。検出規模は、長軸1.45m、短軸1.14m、検出面からの最大深さ1.03mである。埋土からの出土遺物はない。

遺構の帰属時期は、S155土坑に切られることから近代以前に比定できるが、詳らかにはできない。

S201（第134・196図、PL.106）

7区東端部のM21グリッドで検出した。S208ピット、S211溝を切る。平面形状は長円形で、検出規模は、長軸0.66m、短軸0.51m、検出面からの最大深さ0.24mである。埋土は混土からなる。

埋土からの出土遺物はない。位置的には柱痕を伴うS208ピットの柱抜取りのために掘られた穴と



第194図 S177土坑平面・断面図

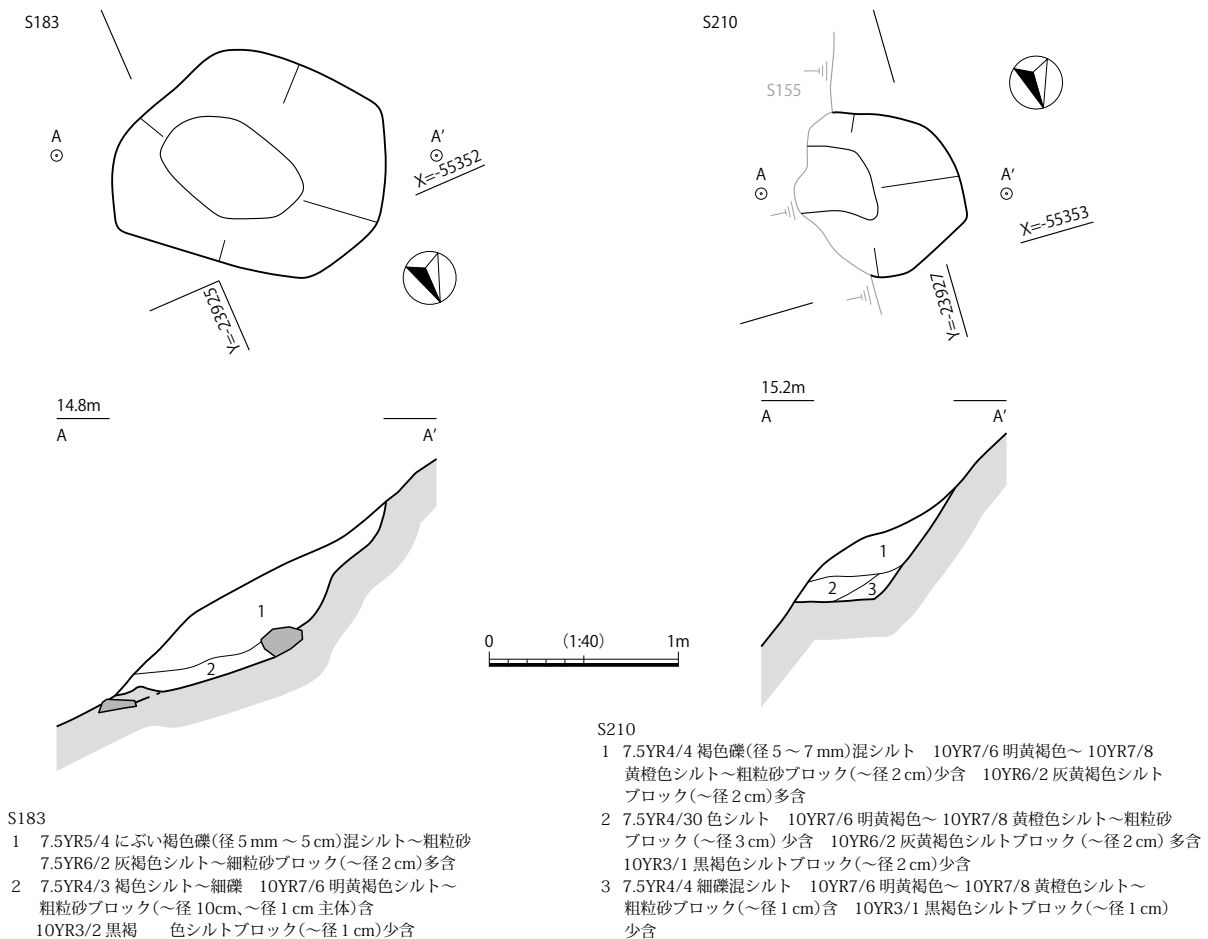
も考えられるが、S208ピット自体に柱を抜き取った痕跡が認められないことから、単独の土坑と判断した。

遺構の帰属時期は、第Ⅵ層上面で検出したことから、弥生時代後期後葉以降であることはわかるが、詳らかにできない。

S210 (第134・195図、PL.106)

7区南部のP23グリッドで検出した。S155土坑に東側が切られたため、全容は不明であるが、残存部分の形状から、不整な楕円形ないし長円形の穴と考えられる。検出規模は、長軸0.88m、短軸0.86m、検出面からの最大深さ0.6mである。

埋土からの出土遺物はない。遺構の帰属時期は、S155土坑に切られることから近代以前に比定できるが、詳らかにできない。



第195図 S183・210土坑平面・断面図

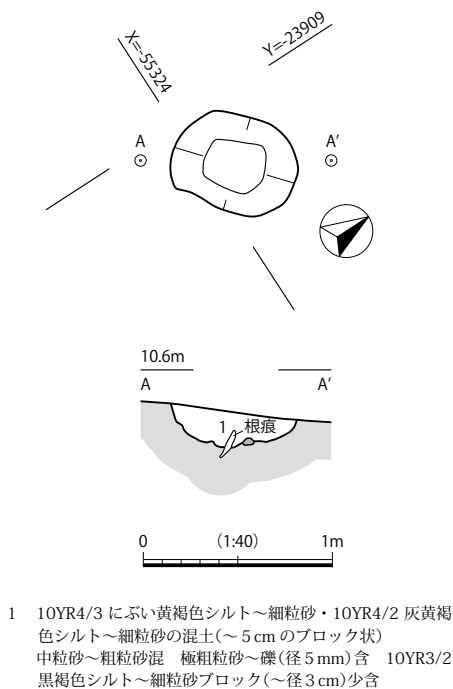
(8) 溝

S090 (第134・197図、PL.109)

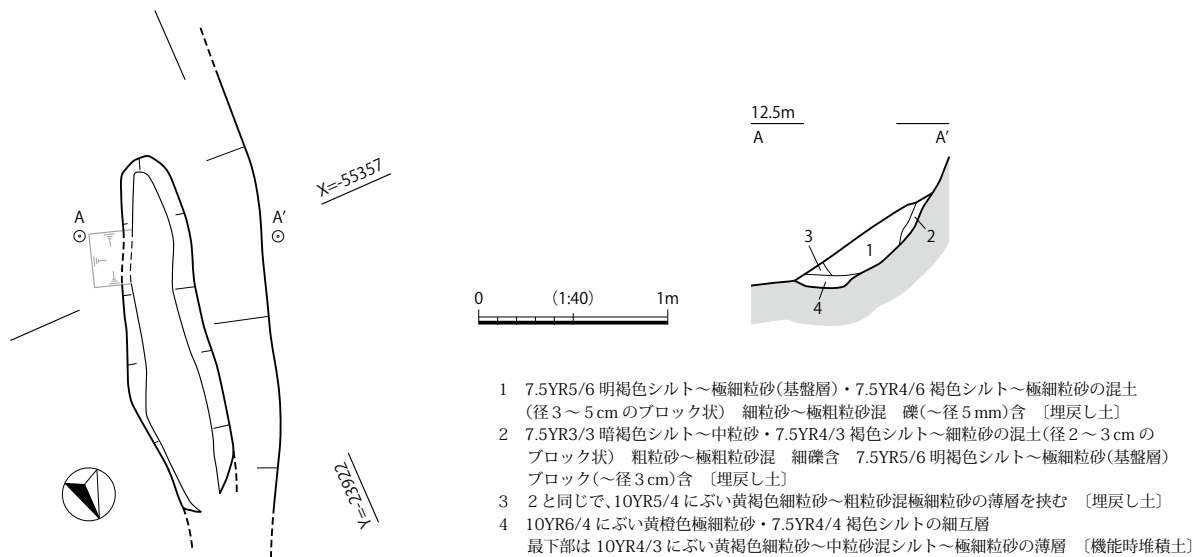
7区南東部のP23グリッドで検出した。ほぼ南北方向に延びる溝で、溝の検出規模は、長さ1.93m、幅0.26~0.48m、検出面からの最大深さ0.08mである。この溝に沿って、長さ2.3mの範囲で、丘陵側斜面を整形した痕跡を検出した。溝埋土と斜面整形部分の埋土は、溝の機能時に堆積した極細粒砂とシルトの細互層、混土主体の斜面整形部分の埋戻し土からなる。

溝及び斜面整形部分の埋土からの出土遺物はない。遺構の帰属時期は明確にできないが、埋土最下層の砂とシルトの細互層は、溝を平面的に検出した部分の北側にも断続的に残っており、S091溝に切られることを確認している。このことから、S091溝を伴うS092段状遺構の構築よりは古いことがわかる。

本遺構は、近世の一時期の土地造成に伴い段状に整形した斜面と、その裾に掘られた排水溝と推定される。

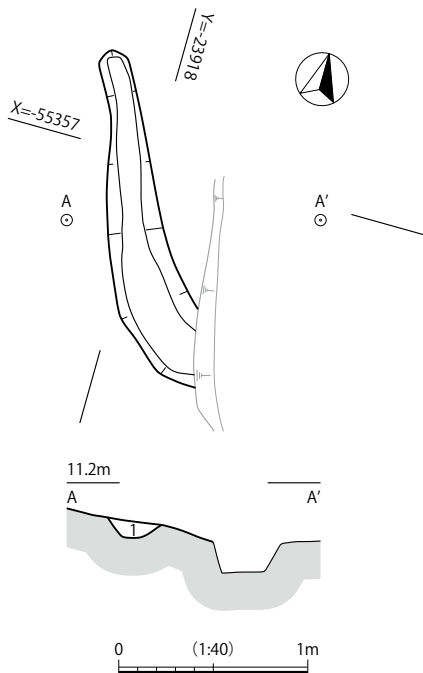


第196図 S201土坑平面・断面図



- 1 7.5YR5/6 明褐色シルト～極細粒砂(基盤層)・7.5YR4/6 褐色シルト～極細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 細粒砂～極粗粒砂混 礫(径5mm)含 (埋戻し土)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色シルト～中粒砂・7.5YR4/3 褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 粗粒砂～極粗粒砂混 細礫含 7.5YR5/6 明褐色シルト～極細粒砂(基盤層)ブロック(径3cm)含 (埋戻し土)
- 3 2と同じで、10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂混極細粒砂の薄層を挟む (埋戻し土)
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色極細粒砂・7.5YR4/4 褐色シルトの細互層
最下部は 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂混シルト～極細粒砂の薄層 (機能時堆積土)

第197図 S090溝平面・断面図



- 1 7.5YR3/2 黒褐色中粒砂～粗粒砂混シルト～細粒砂 極粗粒砂～礫(径8mm)含
7.5YR5/6 明褐色シルト～極細粒砂(基盤層)ブロック(径2cm前後)含 炭粒・炭片含

第198図 S094溝平面・断面図

S094 (第134・198図)

7区南東部のP22グリッドで検出した。S091溝を切り、近代の遺物を含む溝に切られる。北西-南東方向にやや屈曲して延びる溝で、検出規模は、長さ1.72m、幅0.16～0.37m、検出面からの最大深さ0.11mである。埋土は、基盤層のブロックを含む黒褐色土からなる。埋土からの出土遺物はない。

遺構の帰属時期は、S091溝を切り近代溝に切られることから、近世以降近代までに比定できるが、詳らかにできない。

S197 (第134・199図)

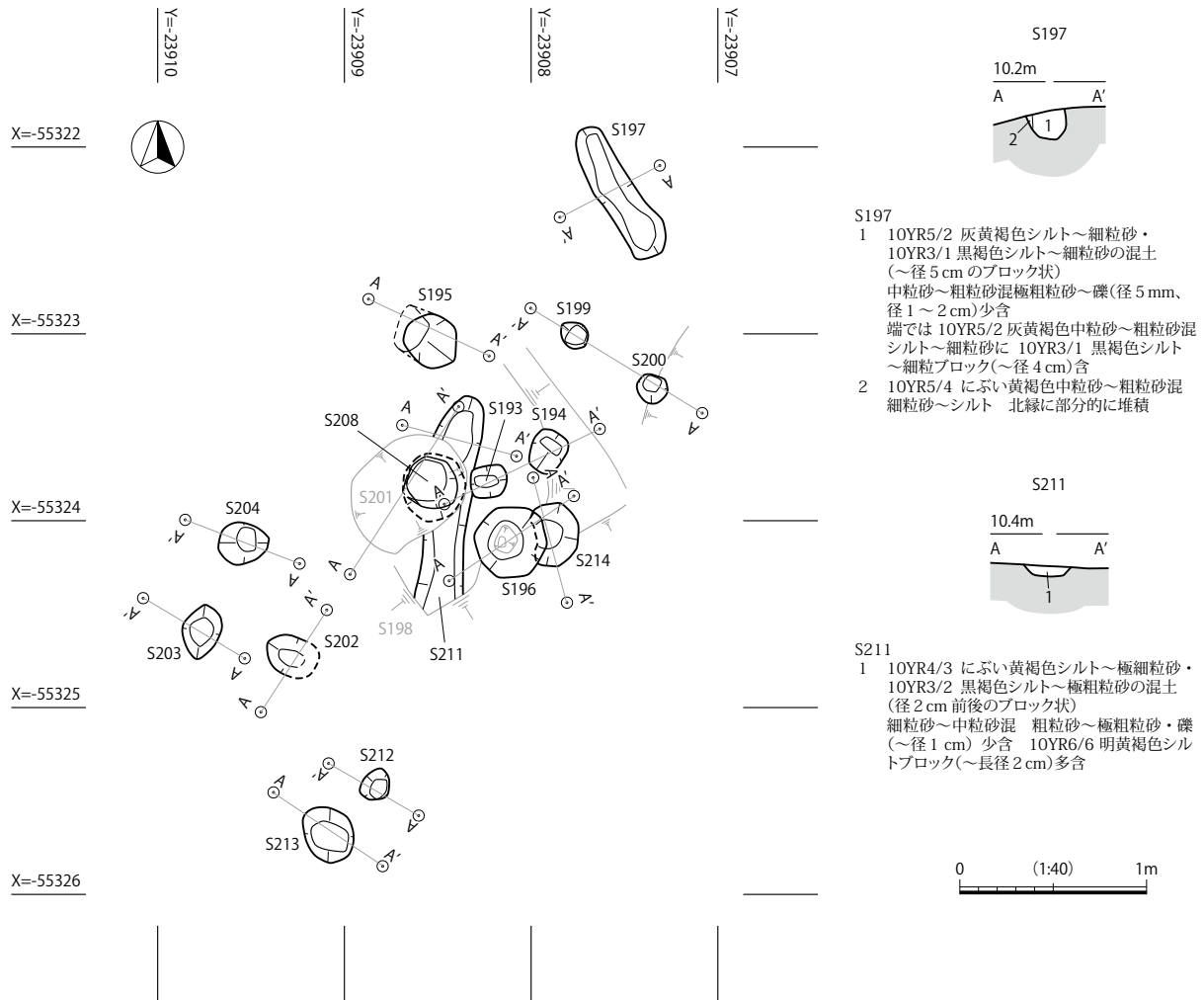
7区東端部のM21グリッドで検出した。北西-南東方向に延びる小溝で、検出規模は、長さ0.78m、幅0.2m、検出面からの最大深さ0.17mである。埋土は、混土を主体とする。埋土からの出土遺物はない。

遺構の帰属時期は、層位から弥生時代後期後葉以降に比定できるが、詳らかにできない。

S211 (第134・199図)

7区東端部のM21グリッドで検出した。S198袋状土坑、S201土坑、S193及びS208ピットに切られ、切り合い関係を持つすべての遺構の中で最も古い。ほぼ南北方向に延びる小溝で、検出規模は、長さ1.2m、幅0.22～0.26m、検出面からの最大深さ0.07mである。埋土は、混土を主体とする。埋土からの出土遺物は、弥生土器と見られる土器細片1点である。

遺構の帰属時期はS198袋状土坑に切られることから、弥生時代後期後葉以前であり、隣接する6区で検出した弥生時代後期後葉の段状遺構、ピット群と関連する可能性がある。



第199図 7区東端部溝・ピット群平面図及び溝断面図

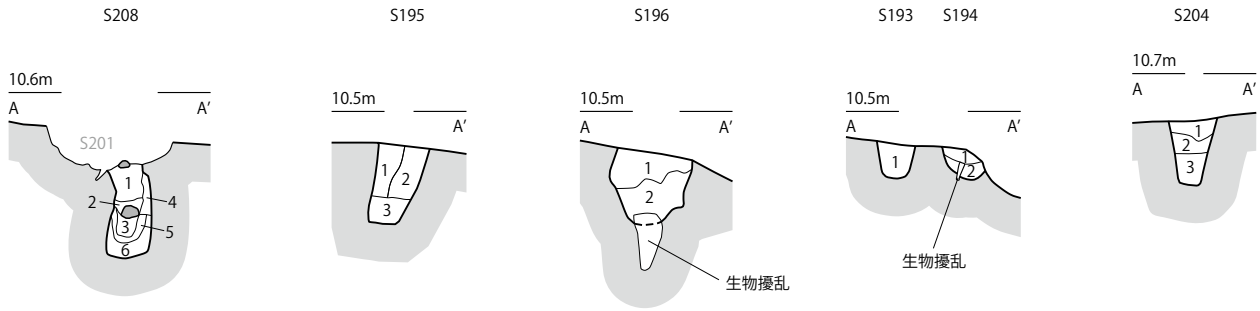
(9) ピット群 (第134・199～203図、表9・10、PL.109・110)

第1遺構面で検出したピットは、段状遺構等に伴うものを除くとS001、S004～S005、S007、S050～S054、S071、S088、S119、S124、S127～S131、S146、S185～S187、S191～S196、S199、S200、S202～S204、S208、S212～S214ピットの37基で、場所により帰属する層位が異なる。

グリッド、規模や出土遺物等を表9～10に示した。出土遺物は、S088ピットから出土した埋蔵銭に伴う備前焼壺、銭貨以外は、弥生土器を含む酸化焼成の土器細片で図化できるものはなく、時期がわかるものもない。

ピットの中には柱痕が残るものや、柱を抜き取った痕跡が残るものがあり、これらのピットは、建物あるいは塀を構成していたもので、居住域に伴うピットも含まれると考えられる。

第1遺構面で検出したピットの帰属時期は、詳らかにできないが、第II層ないし第III層を除去して検出したもののうち、第IV層上面で検出したものは古墳時代前期、第V層上面で検出したものは弥生時代終末期以降、第VI層ないし第VII層上面で検出したものは弥生時代後期後葉以降にそれぞれ比定でき、中世後半を下限と考えて大過ない。丘陵裾部の第I層を除去した第VIII層上面で検出したものは、近世以降に比定できる。



S195

- 1 10YR4/1 褐灰色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(～径5mm)含 炭粒含
- 2 10YR6/6 明黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径7cm)主体 ブロックの隙間に 10YR4/1 褐灰色シルト～中粒砂 10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂ブロック(～径3cm)少含 炭粒少含
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂 10YR6/6 明黄褐色シルト～極細粒砂・10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂ブロック(～径3cm)含

S196

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト～極細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂の混土(径4cm前後) 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～細礫含 炭粒含
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm前後、～径5cm主体) 10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm前後)含

S193

- 1 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR4/2 灰黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含

S194

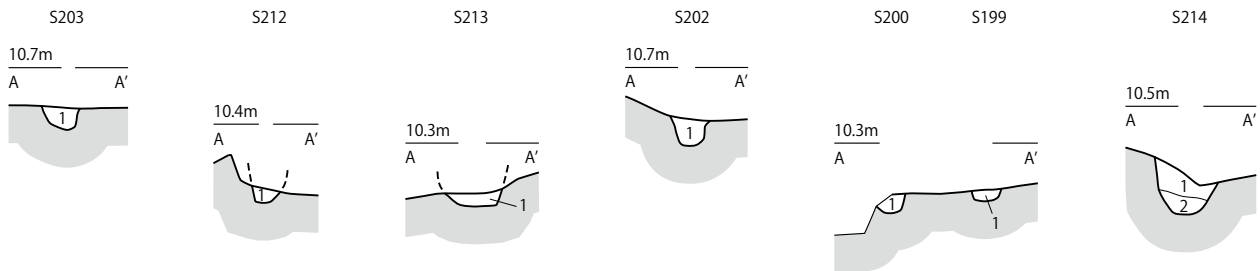
- 1 10YR5/2 灰黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 炭粒少含
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径5mm)わずかに含

S204

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～礫(径8mm)含 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルト・7.5YR4/3 褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径3cm)含 炭粒少含
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～礫(径8mm)含 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルトブロック(～径1.5cm)少含
- 3 10YR6/3 にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～細礫含 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルトブロック(～径2cm)含

S208

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細粒砂・10YR3/1 黒褐色シルト～細粒砂の混土(～径5cmのブロック状) 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径1cm・卵大1個)含 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルトブロック(～長径3cm)含
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂～細礫少混シルト～細粒砂 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルトブロック(～径1.5cm)含 礫(～拳大)1個含
- 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細粒砂・10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～粗粒砂混 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルトブロック(～径1cm)含
- 4 10YR3/1 黒褐色シルト～極細粒砂・10YR4/2 灰黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 中粒砂～粗粒砂混 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルトブロック(～径1.5cm)含
- 5 10YR3/1 黒褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルトブロック(～径3cm)含
- 6 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色砂混シルトの混土(径2cm前後のブロック状) 礫(長径15cm1個)含



S203

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂・10YR6/6 明黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルトの混土(～径3cmのブロック状) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径8mm)含 炭粒少含

S212

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径1cm)少含 炭粒少含

S213

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～粘土 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径1cm)少含 炭粒少含

S202

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/2 灰黄褐色シルト～細粒砂の混土(～長径3cmのブロック状) 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径5mm)・礫(径1～3cm)少含

S199

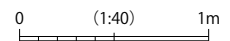
- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂・10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂の混土(径2cm前後のブロック状) 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～細礫含

S200

- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂・10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂の混土(径2cm前後のブロック状) 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～細礫含 礫(径1～3cm)少含 炭粒含

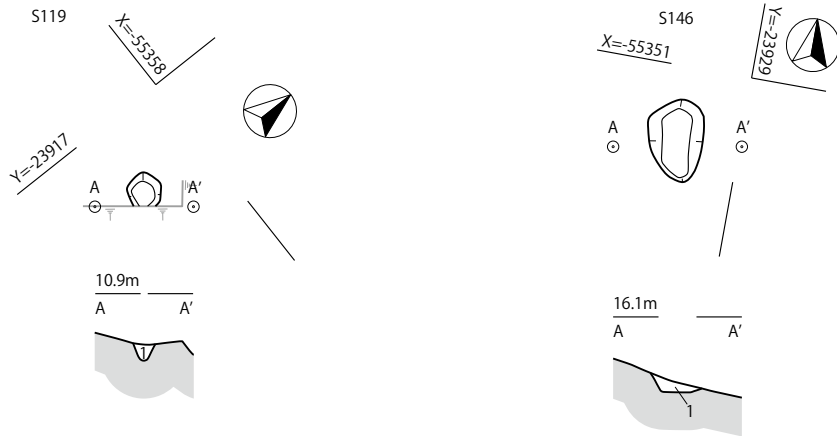
S214

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径3cm)少含
- 2 10YR3/3 暗褐色細粒砂混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径1cm)少含



第200図 7区東端部ピット群断面図

第5章 7区の調査成果

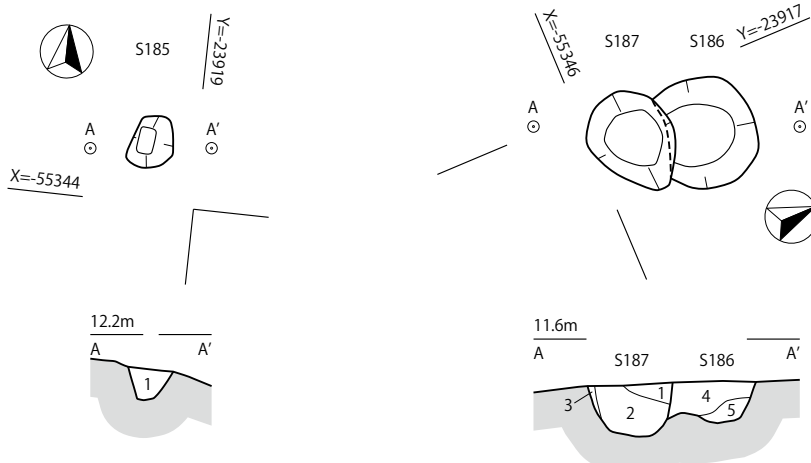


S119

- 1 10YR2/1 黒色シルト・10YR4/2 灰黄褐色シルト～極細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径8mm)含

S146

- 1 10YR4.5/4 褐色シルト～極細粒砂・10YR7/6 明黄褐色極細粒砂～シルトの混土(径2～3cmのブロック状) 細粒砂～粗粒砂混礫(～長径5cm)少含



S185

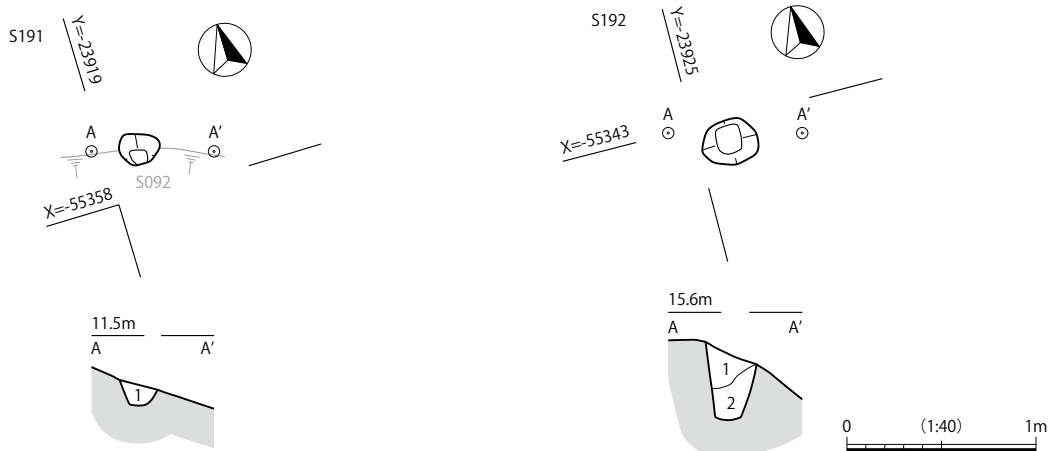
- 1 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト(～径1cm)少含
2 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含 炭粒少含

S186

- 4 7.5YR5/2 灰褐色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径5cm、～径2cm 主体)含
5 7.5YR5/1 褐灰色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径2cm)含 炭粒少含

S187

- 1 7.5YR5/2 灰褐色礫(径5～7mm)混シルト 10YR7/6 明黄褐色粗粒砂ブロック(～径2cm)少含 鉄分沈着
2 7.5YR4/1 褐灰色細礫混シルト 10YR7/6 明黄褐色シルト～粗粒砂ブロック(～径5cm、～径2cm 主体)少含 鉄分沈着
3 7.5YR6/2 灰褐色シルト～粘土 10YR7/6 明黄褐色シルトブロック(～径1cm)少含



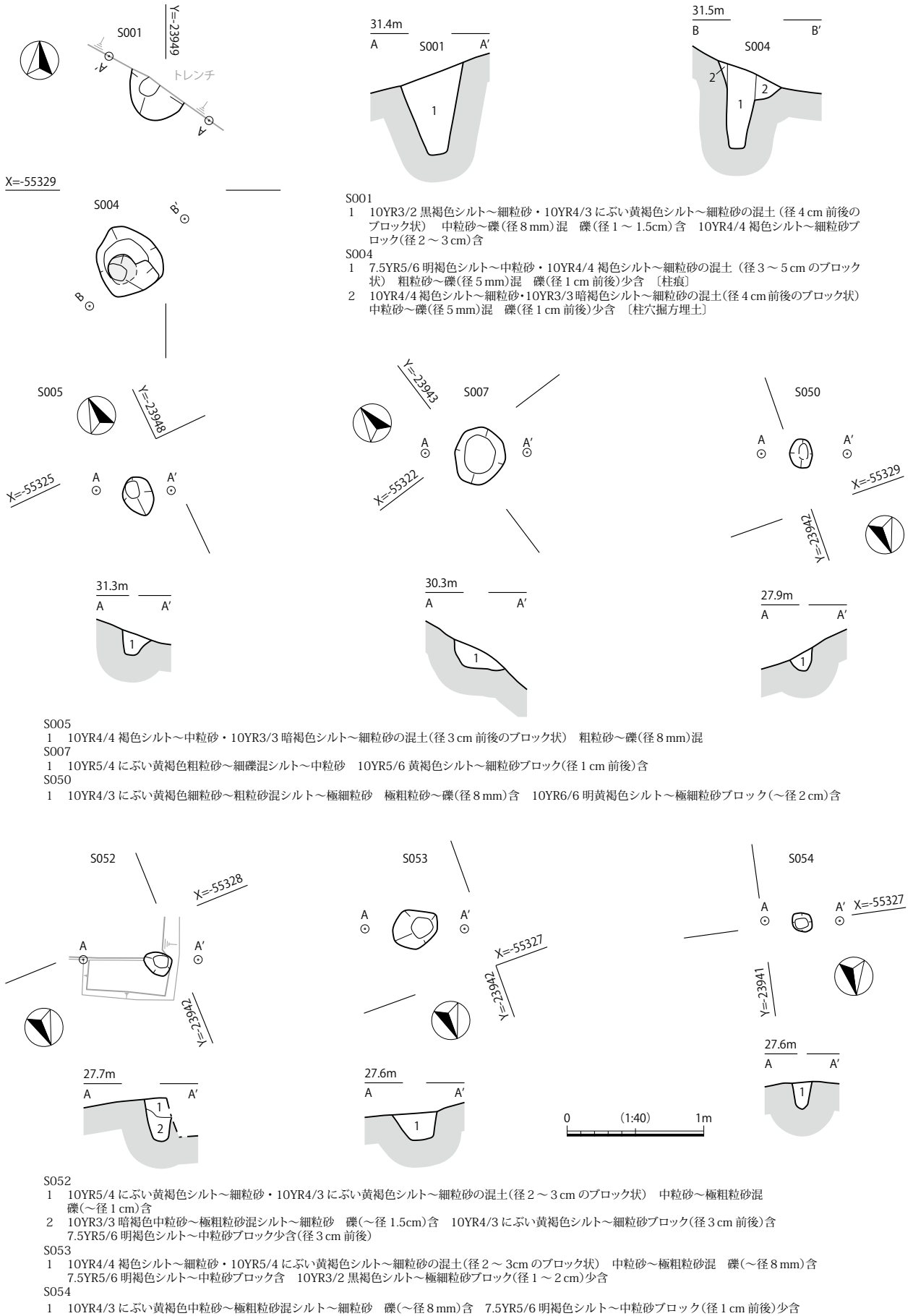
S191

- 1 10YR2/1 黒色シルト・10YR4/1 褐灰色シルト～極細粒砂・10YR4/5 褐色シルト～極細粒砂の混土(～径3cmのブロック状)

S192

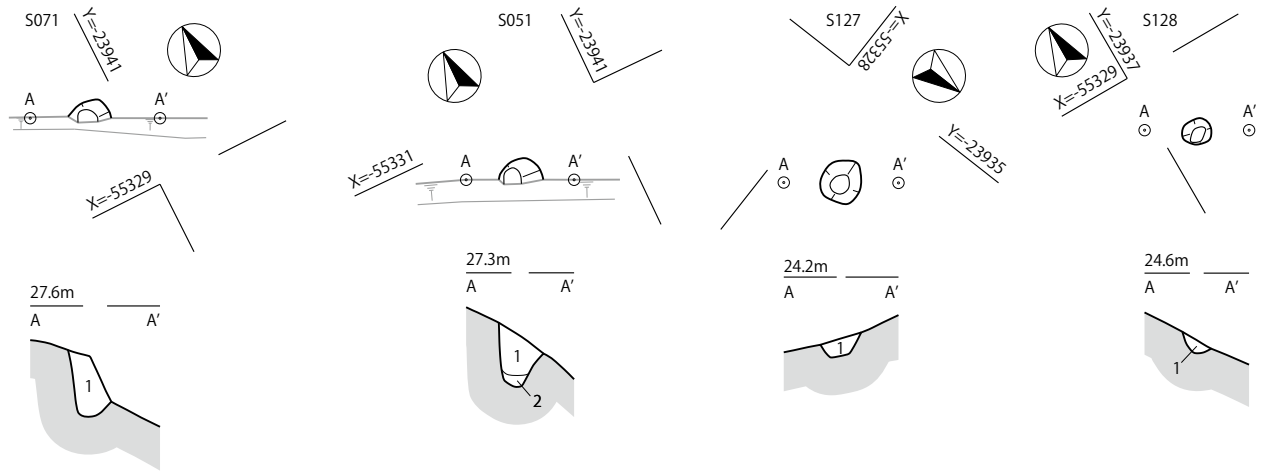
- 1 10YR4/4 褐色細粒砂～粗粒砂混シルト～極細粒砂 極粗粒砂～細礫混 10YR6/6 明黄褐色岩盤ブロック(～径3cm)多含 炭粒少含
2 10YR3/3 暗褐色シルト～極細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～極細粒砂の混土(～径5cm) 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～細礫含
10YR6/6 明黄褐色岩盤ブロック(径1cm 前後)多含 炭粒少含

第201図 S119・146・185～187・191・192ピット平面・断面図



第202図 S001・004・005・007・050～054ピット平面・断面図

第5章 7区の調査成果



S071

- 10YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(～長径5cmの扁平なブロック状) 中粒砂～細礫混 礫(径5mm～1cm)含 7.5YR4/3 褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～長径4cm)含

S051

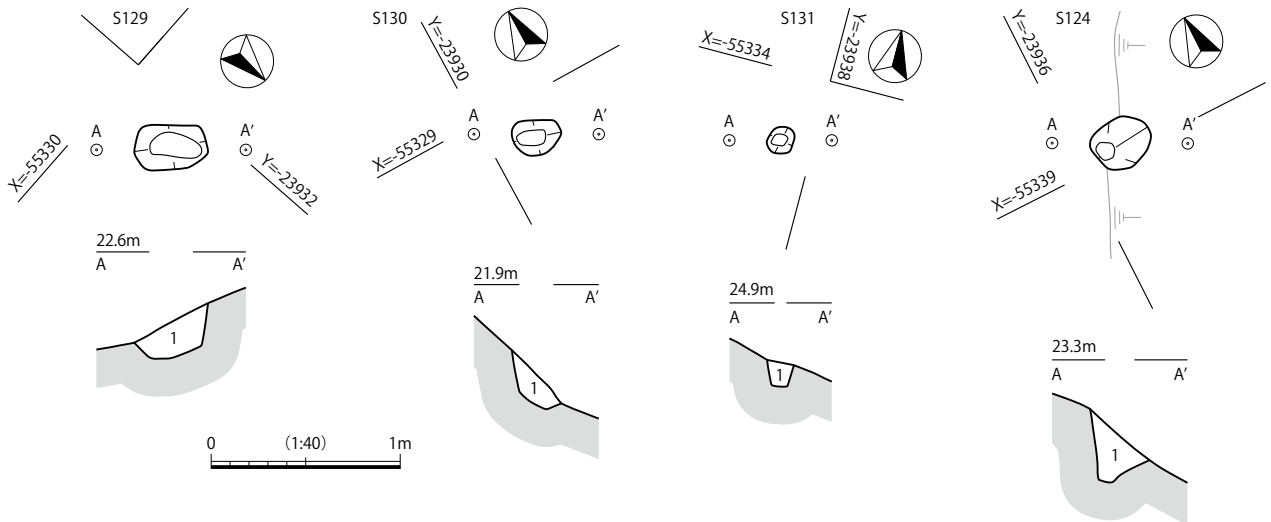
- 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径2cm)含
- 10YR5/6 黄褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト～極細粒砂 礫(～長径2cm)含 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2～3cm)含 炭片少含

S127

- 10YR5.5/6 明黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径5mm)含

S128

- 10YR6/4 明黄褐色シルト～極細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径1cm)含



S129

- 10YR4.5/4 褐色シルト・10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径8mm)含

S130

- 7.5YR4.5/6 明褐色シルト～粗粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 極粗粒砂混 細礫含

S131

- 10YR4/6 褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2cm前後のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 細礫含

S124

- 10YR4/4 褐色シルト～細粒砂・10YR4/6 褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm)含 10YR7/8 黄褐色岩盤ブロック(～長径7cm)少含

第203図 S051・071・124・127～131ピット平面・断面図

(10) S088 (第134・204・205図、表33・55・77～82、写真8～11・38・39、PL.106～109・119)

S088は遺構種別としてはピットであるが、多数の銭貨を埋蔵するために掘られたことが明確なため、他のピットから切り離して記載する。

本遺構は7区中央部のN24グリッドに位置する。ピットを掘削し、そこに備前焼壺を据え容器とし、多数の銭貨を埋蔵する遺構である。ピットの平面形状はほぼ円形で、直径0.4m前後、検出面からの深さ0.42mである。掘方は壺よりも少し大きく、壺を据えた後にその隙間に埋めた土が堆積する。

本遺構は、重機による表土掘削時に不時発見した。そのため、重機のバケットにより容器の上部が破損し、収められていた銭貨のうち969枚が容器外に散乱した。これらを発見した時点で周辺の表土掘削を人力による掘削に切り替え、重機による破壊を免れた部分の検出を行った。併せて、周辺における表土掘削の排土を篩に掛け、散乱したすべての銭貨と、容器の蓋として使われたと推定できる平石（以下、「蓋石」と記載する）の破片を回収した。

埋蔵銭を検出した時点で土層観察用のベルトを残し、周辺に堆積する地層との関係を確認した。その結果、第204図の断面図A-A' 3層は、第Ⅶ層から漸移的に土壤化している層で当時の地表に近いと考えられ、本ピットは3層を切って掘られたことが確認できた。また、3層の上位に堆積する2層は基本層序の第Ⅱ層で、3層を切る形で堆積することが確認できた。

銭貨を収めた容器は、備前焼の四耳壺601である。ほぼピット掘方に接して据えられていた。器形の特徴としては、頸部が開き、口縁部を玉縁状に拡張しない点が挙げられる。ただし口縁端部下には浅い凹線が一条巡っており、玉縁への意識が遺存した形態を採る。胴部については、肩がやや張っている点が指摘できる。以上の特徴は、備前市教育委員会による編年案（備前市教育委員会2012）を参照すると、口頸部がVA（16世紀前半～後半）、胴部がIVB（15世紀中頃～16世紀初頭）に認められる。属性としては口頸部の特徴を重視するが、胴部形態にやや古い特徴を残すことを勘案して、本資料の帰属時期を16世紀前半と推定する。

回収した蓋石の破片は3片で、互いに接合したが一部が欠けた状態となり、完全な復元は果たせなかった。ただし当該破面は新鮮でないことから、既に4片以上に割れており、3片を残し失われていたと考えられる。また、蓋石を備前焼壺の口縁部径と比較したところ、一部欠損を差し引いても容器



写真8 埋蔵銭検出状況(東から)

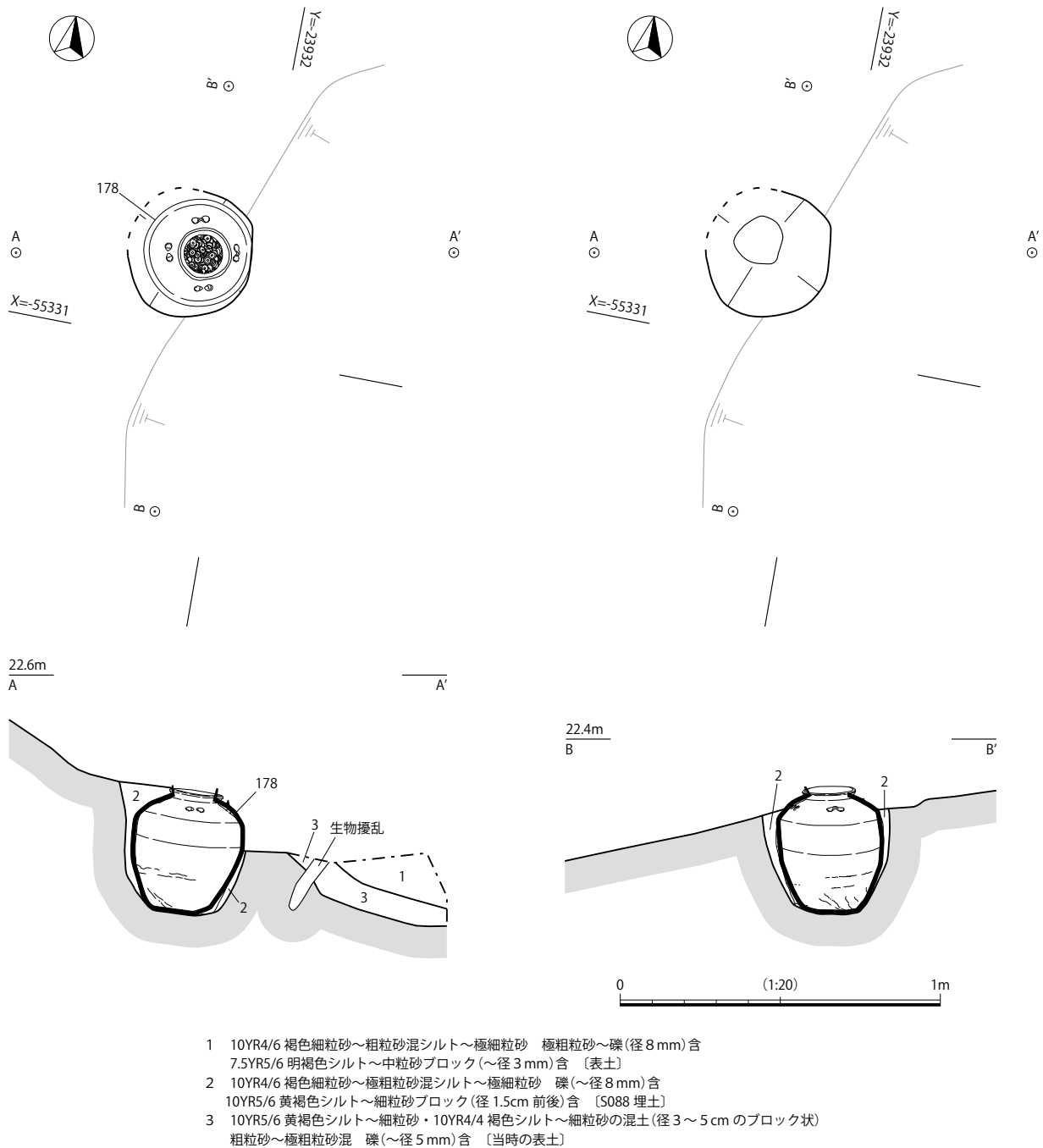


写真9 埋蔵銭掘削後状況(俯瞰：上が西)

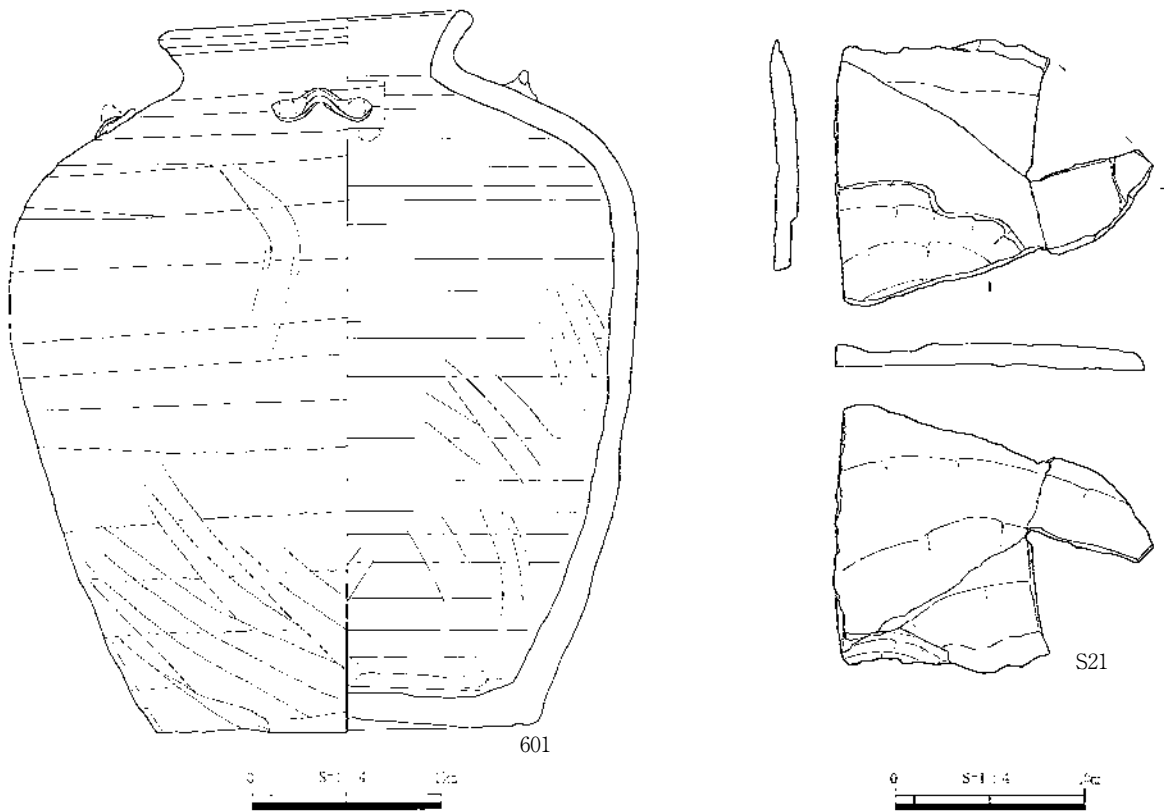
の口の半分強程度しか被覆できず、蓋石は複数枚あった可能性が高い。

銭貨は、バラの状態ですべての壺の頸部下まで一杯に詰められていた。ただし、藁で作られた縞の一部が依存し（写真10）、一定枚数が連なった状態で錆により固着していることから（写真11）、元々は縞状態であったものを解き、容器に納めたと考えられる。集計の結果、銭貨の総数は15,523枚を数える。一縞を97枚と仮定し計算すると、160縞（16貫文）となりその誤差は僅か3枚である。そのうち、錆による固着状況といった銭貨の出土状況保存のため77枚を未調査として残し、銭種分類は15,446枚について実施した。

その結果、銭種は55種で、最古銭は開元通寶（初鑄621年）、最新銭は永樂通寶（初鑄1408年）となった。全般に銭貨の遺存状態は良好で、銭文が判読できない不明銭は皆無で、模鑄銭も検出されなかつ



第204図 S088ピット(埋蔵銭)平面・断面図



第205図 S088ピット(埋蔵銭)出土遺物



写真10 緇遺存状況



写真11 容器内における銭貨の状況

た。このことから本資料は粗悪銭を含まず、良質な銭貨すなわち「精銭」からなる埋蔵銭である可能性が指摘できる。そこには悪銭を選び排除する、撰銭行為が介在した可能性が考えられる。

最新銭の初鋳年を元にした時期区分（永井2002）では、永樂通寶を最新銭とするグループは第4期に該当し、想定される埋蔵時期は15世紀第1四半期から中頃となる。一方、既述したように容器である備前焼四耳壺の帰属時期は16世紀前半に比定され、両者の年代観にはかなりの開きが存在する。その要因についても、撰銭行為によって省かれた銭貨の影響を想定している。

以上から本遺構の帰属時期は、新相を示す容器の年代観を重視して16世紀前半と考える。なお、埋蔵銭を構成する銭貨の内容及び評価の詳細については、第4節及び第8章第2節で記載する。

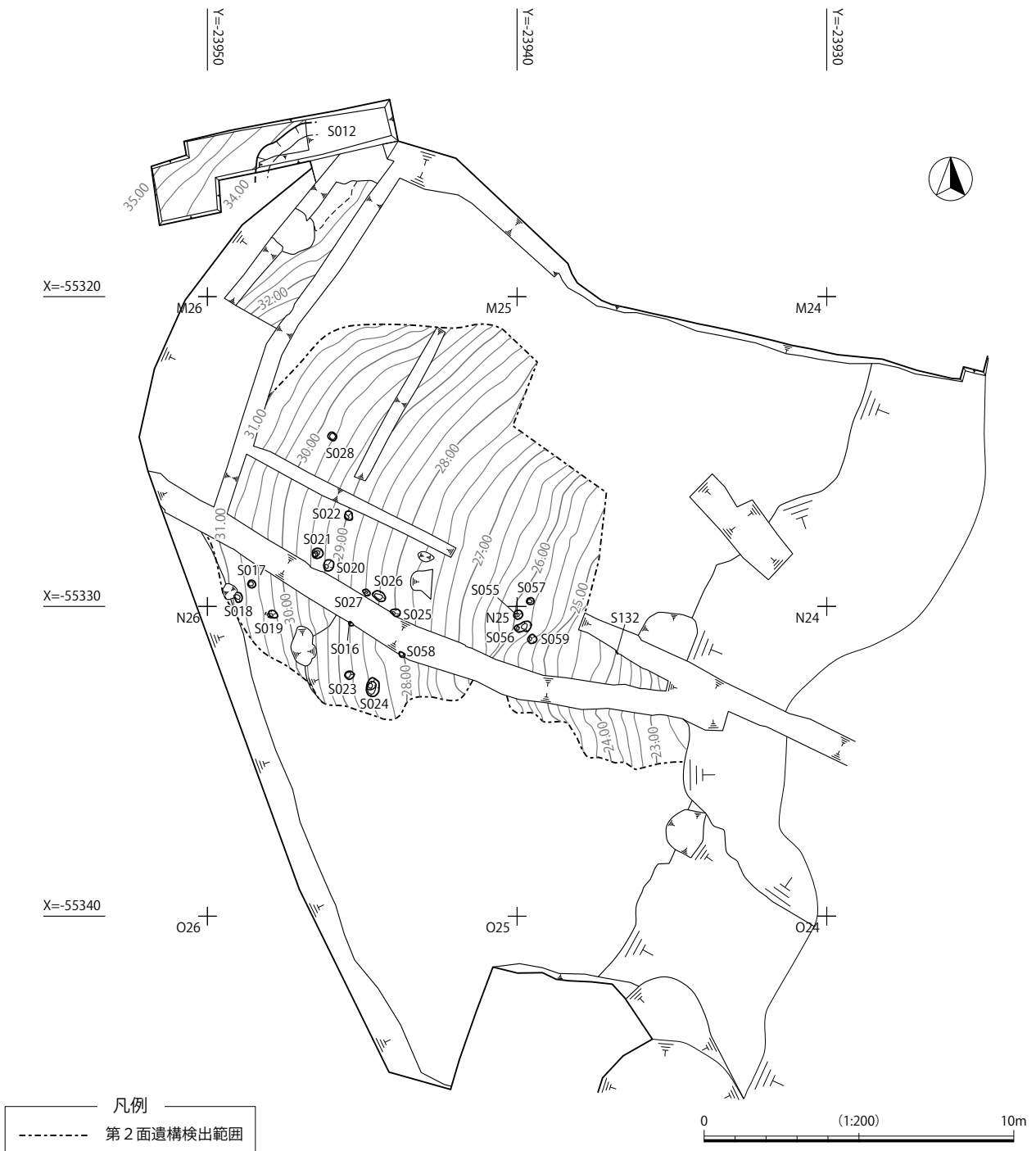
3 第2遺構面（第206図、PL.111）

第2遺構面は、第IV層（谷部包含層1）を除去した面で、検出範囲は7区西部から北西部にかけて第IV層が堆積する部分を中心とする。検出遺構はピット19基である。7区北西端部では、第III層を除去した面で検出した遺構（S008段状遺構、S002袋状土坑）に切られる段状遺構1箇所（S012段状遺構）も、便宜的に第2遺構面で扱う。

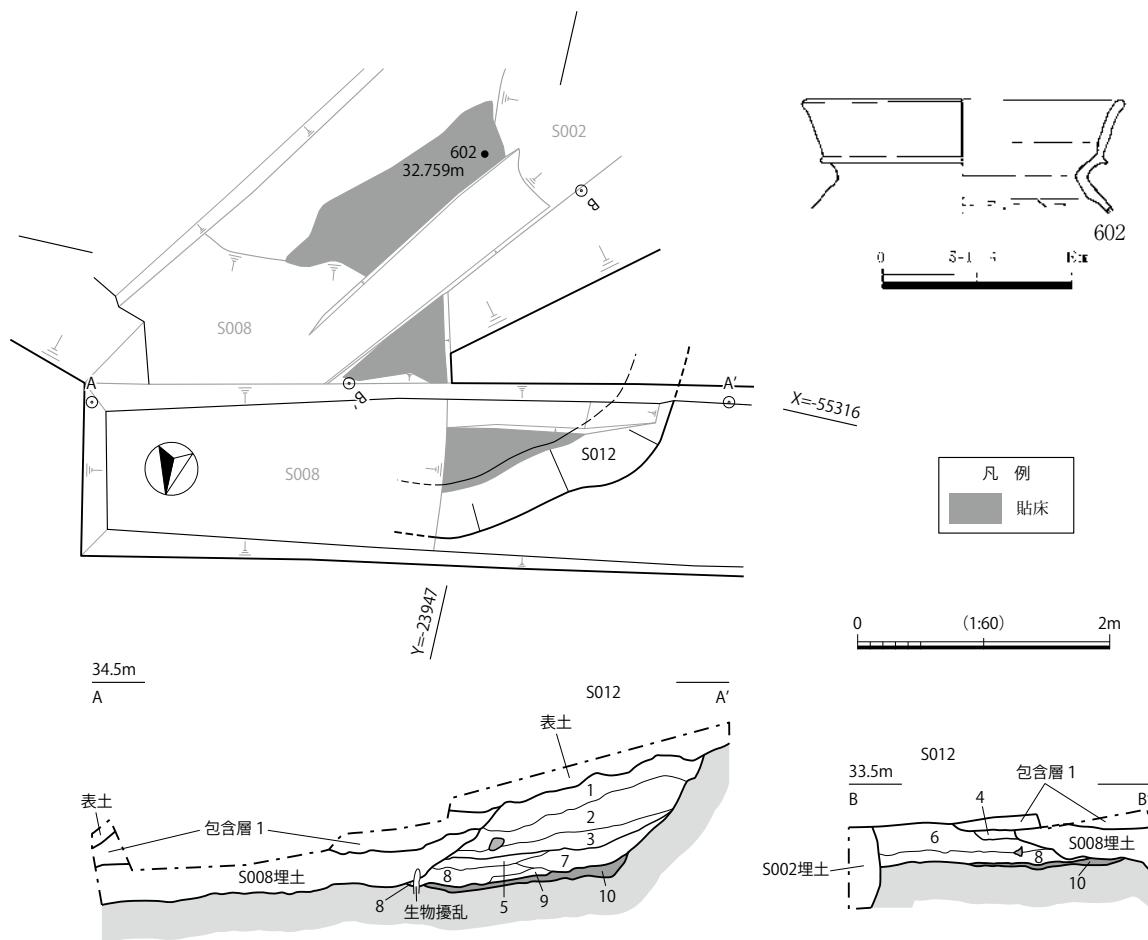
（1）段状遺構

S012（第206・207図、表33、PL.110・116）

7区北西端部のL25グリッドで検出した。S008段状遺構、S002袋状土坑に切られる。合わせて、西側が調査区外に至り、南東側が斜面で切られるため全容は不明である。平面的には掘方の北西隅部分



第206図 7区第2遺構面遺構配置図



A-A'・B-B'共通

[S012 埋土上層]

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混礫(～径1.5cm)含 10YR6/6 明黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径2～3cm)含 炭粒含
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混礫(～拳大)含 10YR6/6 明黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径2～3cm)含 炭粒含
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR6/6 明黄褐色シルト～極細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混礫(～径1.5cm)含 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2～3cm)含 炭粒含
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～細粒混シルト～細粒砂 礫(径5mm～2cm)含 10YR6/6 明黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径2cm前後)含 炭粒少含 3と同一層

[S012 埋土下層]

- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径1cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂・10YR6/6 明黄褐色シルト～細粒砂を層状(～厚さ2cm)に含
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR6/6 明黄褐色シルト～極細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混礫(～径1.5cm)含 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2～3cm)含 炭粒含 5相当層
- 7 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混礫(～径1.5cm)含 10YR6/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2cm前後)含 5・8よりしまり弱
- 8 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径1cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂・10YR6/6 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2cm前後)含
- 9 10YR7/6 明黄褐色極粗粒砂～中粒砂混細粒砂～シルト 7.5YR7/8 黄褐色砂～シルトブロック(径2～4cm)含

[S012 貼床]

- 10 7.5YR6/6 橙色シルト～細粒砂・10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2cm前後のブロック状、厚さ2cmまでの層状) 中粒砂～極粗粒砂混 10YR7/6 明黄褐色岩盤の扁平なブロック(～長径6cm)少含 炭粒少含

第207図 S012段状遺構平面・断面図及び出土遺物

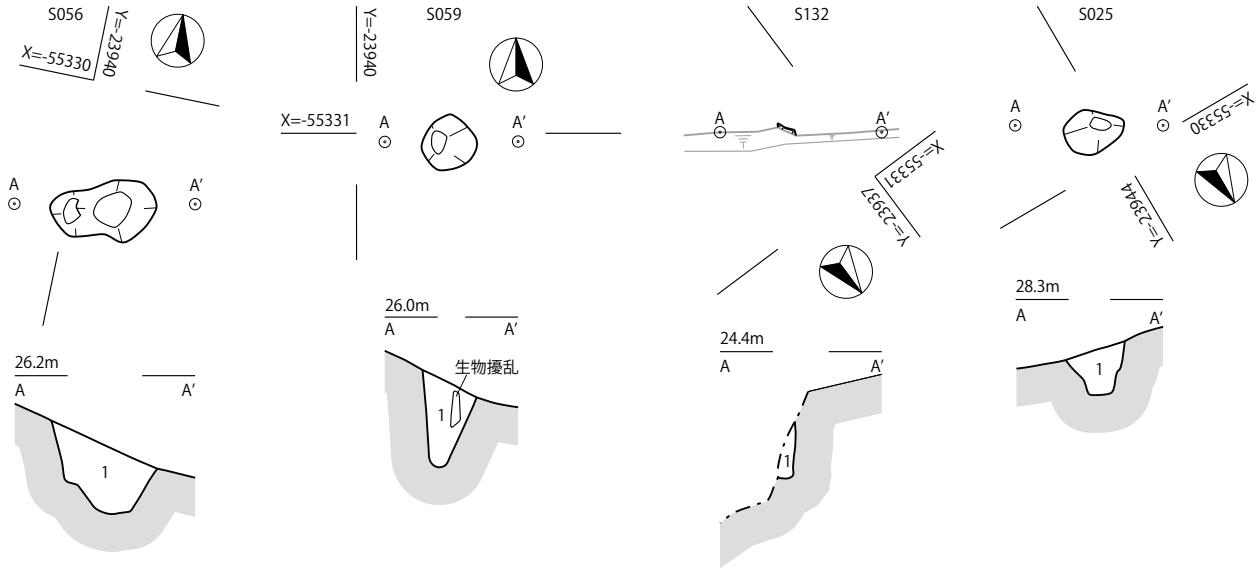
と部分的に残存する貼床を検出した。平面的に検出できた規模は南北長3.48m、東西幅3.27mで、壁断面で確認できる深さは1.1mである。埋土は、大きくは3つに分けられる。下位から(1)貼床、(2)基盤層のブロックを層状に含む埋戻し土、(3)ブロック土を含む埋戻し土である。出土遺物は、(2)と(3)の境目と貼床直上で出土した土師器甕を主体とする破片数点である。そのうち貼床直上で出土した甕1点(602)を図化した。602はS012段状遺構を切るS002袋状土坑の埋土上部から出土した破片と接合する。口縁部は外反し、端部はやや丸みを帯び、下端がつまみ出される。

遺構の帰属時期は、出土遺物と古墳時代前期に帰属するS002袋状土坑に切られることから、古墳

時代前期以降に比定でき、S008段状遺構、S002袋状土坑とは大きな時期差はないと考える。

(2) ピット群 (第206・208～210・379図、表9・10、PL.111)

第2遺構面で検出したピットは、S016～S028、S055～S059及びS132の19基で、第IV層を除去した第V層上面あるいは第VII層上面で検出したものがほとんどで、一部第II～III層を除去した第VII層上



S056

1 10YR4/4 褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径3cm)含 土器細片含

S059

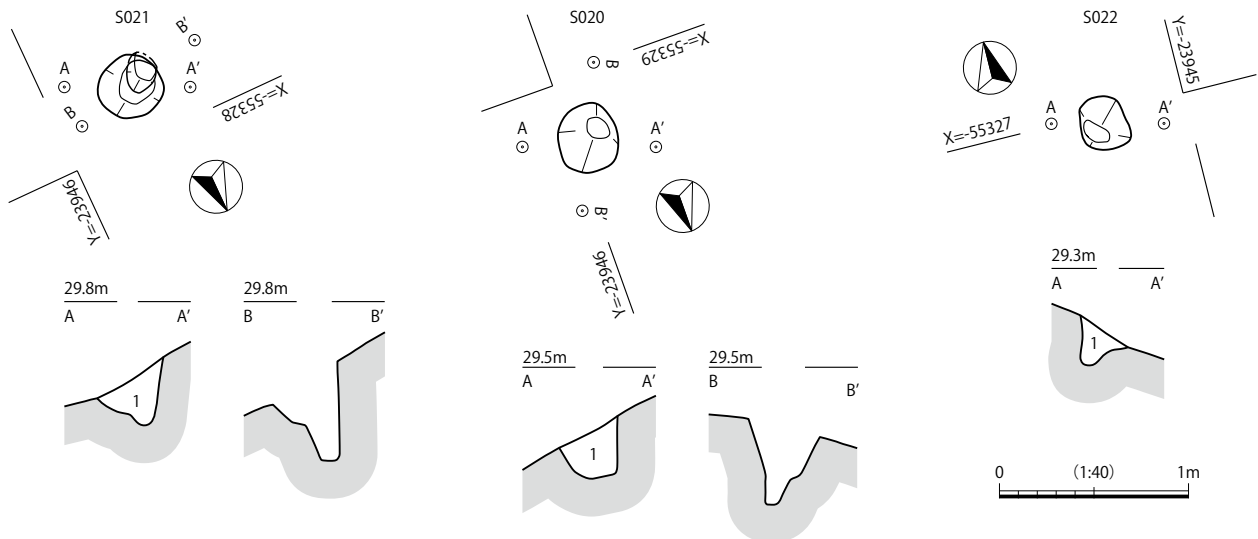
1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cm のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm)含 7.5YR5/6 明褐色シルト～中粒砂ブロック(径3cm 前後)含

S132

1 10YR6/6 明黄褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト～極細粒砂 礫(～径8mm)含

S025

1 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～細粒混シルト～細粒砂 礫(径5mm～1cm)含
10YR3/3 暗褐色シルト～細粒砂ブロック(径3～5cm)を上部に 7.5YR6/6 橙色シルト～細粒砂ブロック(径2cm 前後)を下部に含



S021

1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～中粒砂の混土(～径5cm のブロック状) 粗粒砂～礫(径8mm)混

S020

1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土(～径5cm のブロック状) 粗粒砂～礫(径8mm)混
10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂ブロック(～径5cm)含

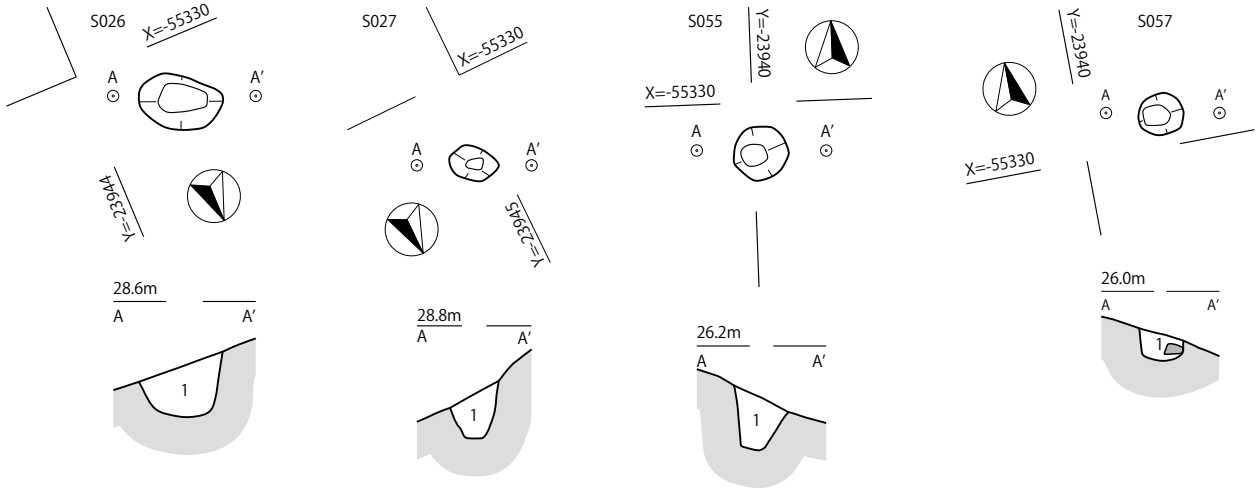
S022

1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～中粒砂の混土(～径5cm のブロック状) 粗粒砂～礫(径8mm)混
10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂ブロック(～径3cm)下部に含

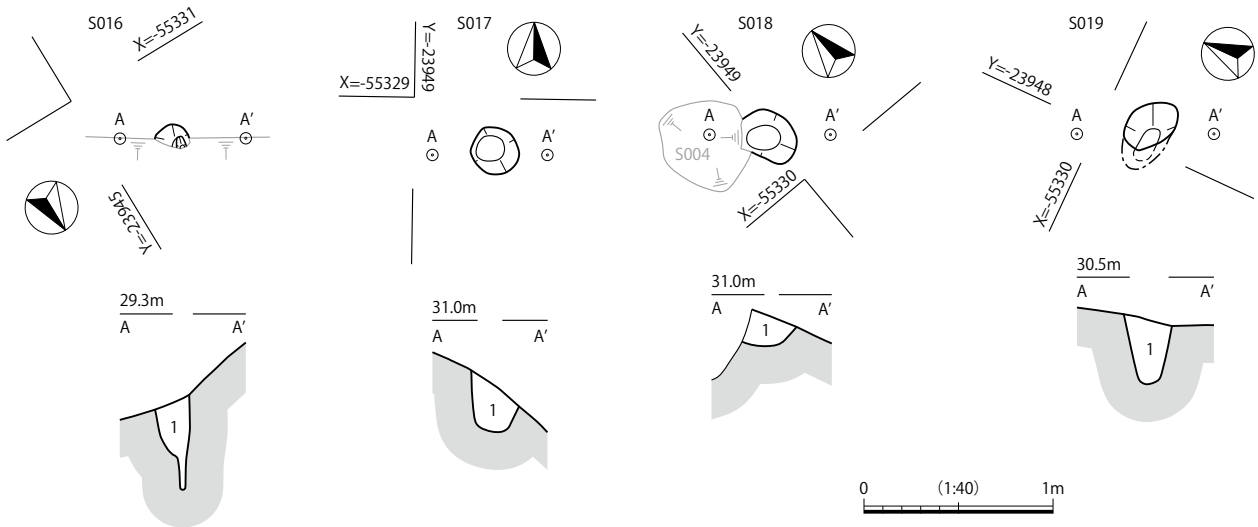
第208図 S020～022・025・056・059・132ピット平面・断面図

面で検出したものである。グリッド、規模及び出土遺物等を表9～10に示した。出土遺物は土器の細片で図化できるものではなく、時期がわかるものは、S059ピット埋土から出土した弥生時代後期後葉の甕口縁部だけである。

ピットの中には柱痕が残るものや、柱を抜き取った痕跡が残るものがあり、これらのピットは建物あるいは塀を構成していたものと考えられる。これらのピットは、被覆する第IV層から出土した当該時期の土器が、煮炊具である甕を主体とすることと合わせ、居住域であったことを示している。

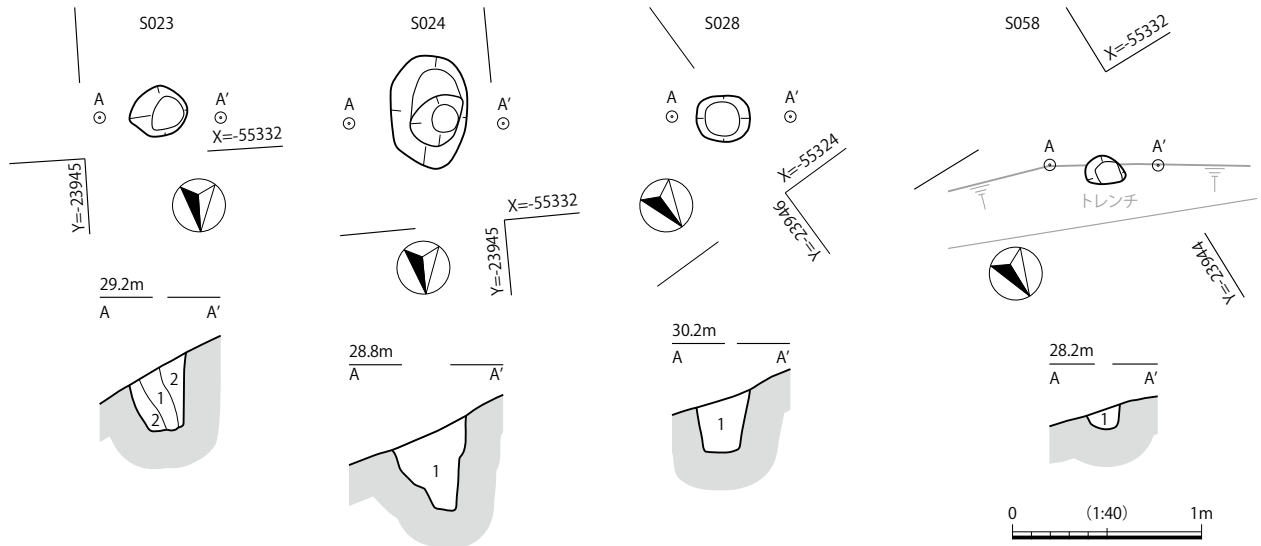


- S026
 1 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～礫(径8mm)混シルト～細粒砂 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2～3cm)含
 下部は 10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂ブロック主体
- S027
 1 10YR5/4 にぶい黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(～径8mm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂ブロック(径1cm前後)含
- S055
 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm)含
 10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂ブロック(径2cm前後)少含
- S057
 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～礫(～径8mm)混
 礫(拳大)1個含



- S016
 1 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂～礫(径8mm)混シルト～中粒砂 10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂ブロック(径2cm前後)含 炭片わずかに含
- S017
 1 10YR4/4 褐色シルト～中粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 粗粒砂～礫(径5mm)混
 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～中粒砂ブロック(径3～5cm)含
- S018
 1 10YR4/4 褐色粗粒砂～細礫混シルト～中粒砂
 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～中粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂ブロック(径2～4cm)含
- S019
 1 10YR4/4 褐色極粗粒砂～礫(径5mm)混シルト～粗粒砂 10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂ブロック(径2～3cm)含

第209図 S016～019・026・027・055・057ピット平面・断面図



- S023
 1 10YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～中粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 粗粒砂～礫(径5mm)混 炭粒少含
 2 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂～細礫混シルト～中粒砂 7.5YR6/6 橙色シルト～細粒砂ブロック(径2～3cm)少含
- S024
 1 10YR4/4 褐色シルト～細粒砂・10YR3/3 暗褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂の混土(径1cm～長径8cmのブロック状) 褐色土は硬くしまる
- S028
 1 10YR4/4 褐色シルト～中粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 粗粒砂～細礫混 礫(径5mm～1cm)含
- S058
 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径1cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂・10YR6/8 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2cm前後)含

第210図 S023・024・028・058ピット平面・断面図

第2遺構面で検出したピットの帰属時期は、層位から、第IV層除去面で検出したものは古墳時代前期以前に比定でき、そのうち第V層上面で検出したものは弥生時代終末期を上限とする。第II～III層除去面で検出したものは明確に比定できないが、第1遺構面検出遺構との関連から、中世後半を下限と考えて大過ない。

4 第3遺構面 (第211・378図、PL.111・113)

第3遺構面は、第V層(谷部包含層2)を除去した第VII層上面で、検出範囲は7区西部から北西部にかけて第V層が堆積する部分を中心とする。検出遺構は、段状遺構1基、土坑2基、ピット19基、溝2条である。

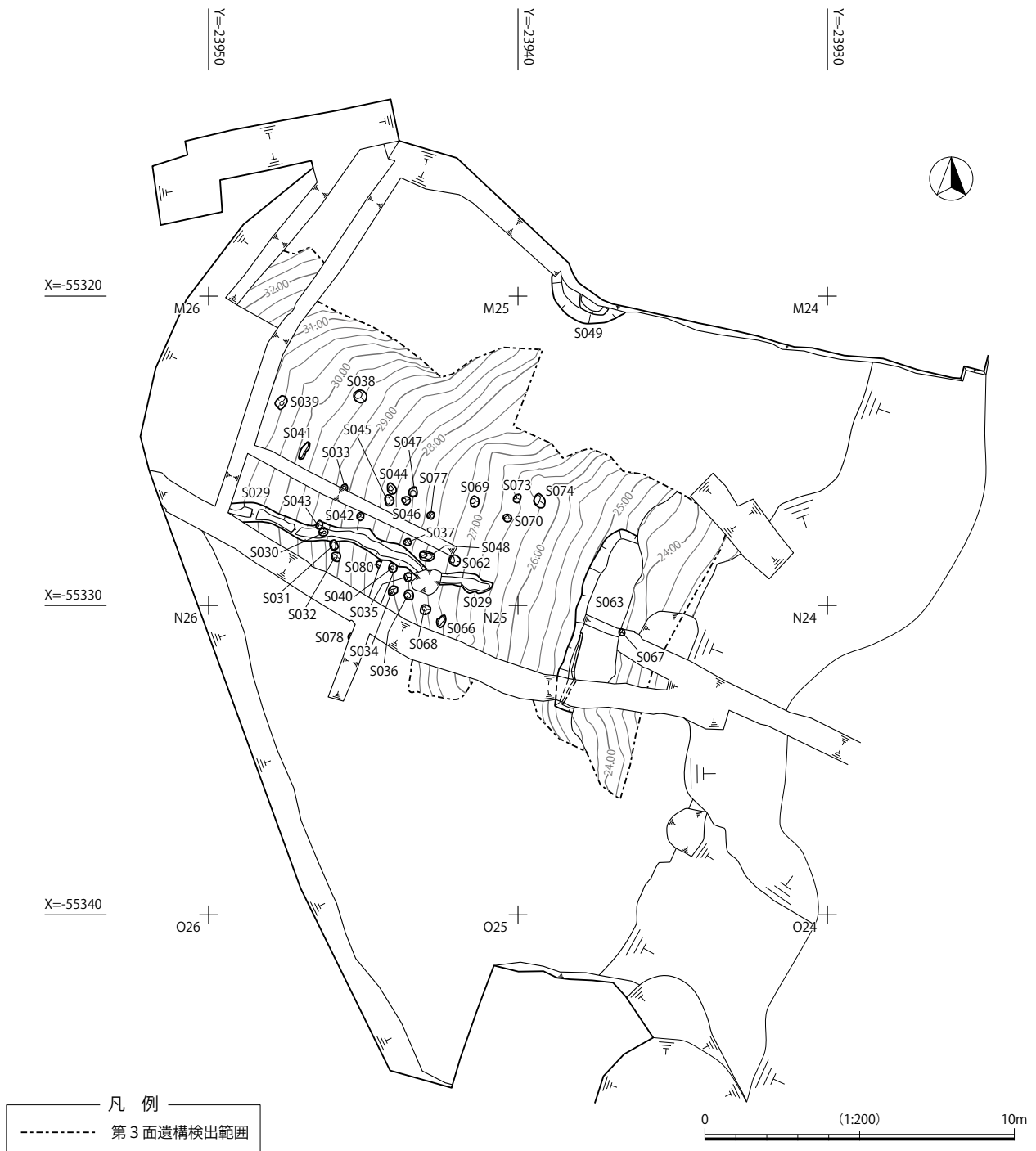
(1) 段状遺構

S063 (第211・212・378図、表33、PL.112・116)

7区中央部M24及びN24グリッドで検出した。東側が後世の造成により切られるため全容は不明であるが、残存する北西隅や南西隅の形状からは、方形を指向して造成されたと考えられる。検出規模は、南北長6.13m、東西幅1.8m、貼床面までの最大深さ0.5mである。西壁沿いの南部で壁溝(S064溝)を検出し、床面でピット1基(S067ピット)を検出した。

S067ピットは貼床面からは0.5mの深さがあり、柱穴である可能性が高い。S063段状遺構埋土は、大きくは貼床と埋戻し土の2つに分けられる。

出土遺物は、貼床直上に限りなく近い埋戻し土の最下部から出土した弥生土器甕(603)を含む弥生土器の破片である。603は口縁部が湾曲し、3条の凹線文がめぐっている。遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代後期中葉に比定できる。



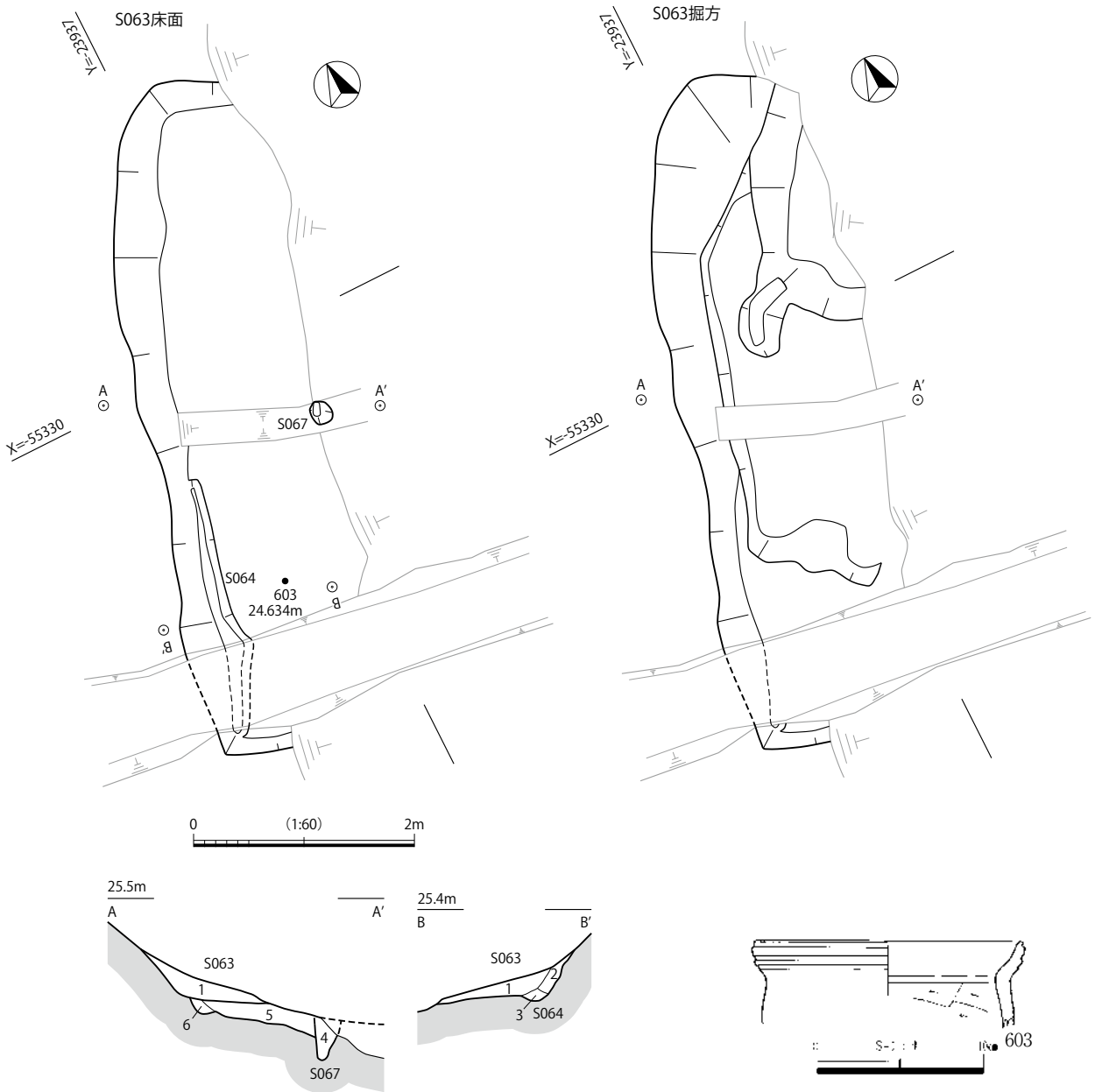
第211図 7区第3遺構面遺構配置図

(2) 土坑

S049 (第211・213・378図、PL.112)

7区北部L24及びM24グリッドで検出した。北側は調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分の形状からは、円形を指向して掘られた丸い穴と推定できる。東の低地側に開くことから段状遺構である可能性もあるが底面が凸凹しており、積極的には認め難いため、ここでは土坑として扱う。

検出規模は、東西2.76m、南北1.62m、検出面からの最大深さ1.52mである。埋土は、褐色ないし明黄褐色のマサ土である。全体として締まりが弱い。埋土からの出土遺物はない。遺構の帰属時期は不明である。



A-A'(S063・S067)・B-B'(S063・S064)共通

[S063 埋土]

- 1 10YR3.5/3 暗褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状) 粗粒砂～細礫多混 礫(径5mm～3cm)多含 炭粒含
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状)中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径3cm)含

[S064 埋土]

- 3 10YR5/64 褐色シルト～細粒砂・10YR5/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cm) 細粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm)含
- 10YR5/6 黄褐色風化岩盤ブロック(径2cm 前後)含

[S067 埋土]

- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～細礫混 礫(径5mm～4cm)含

[S063 貼床]

- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・7.5YR5/6 明褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混
- 礫(～径4cm)含 7.5YR6.5/8 黄橙色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂ブロック(径2～3cm)少含

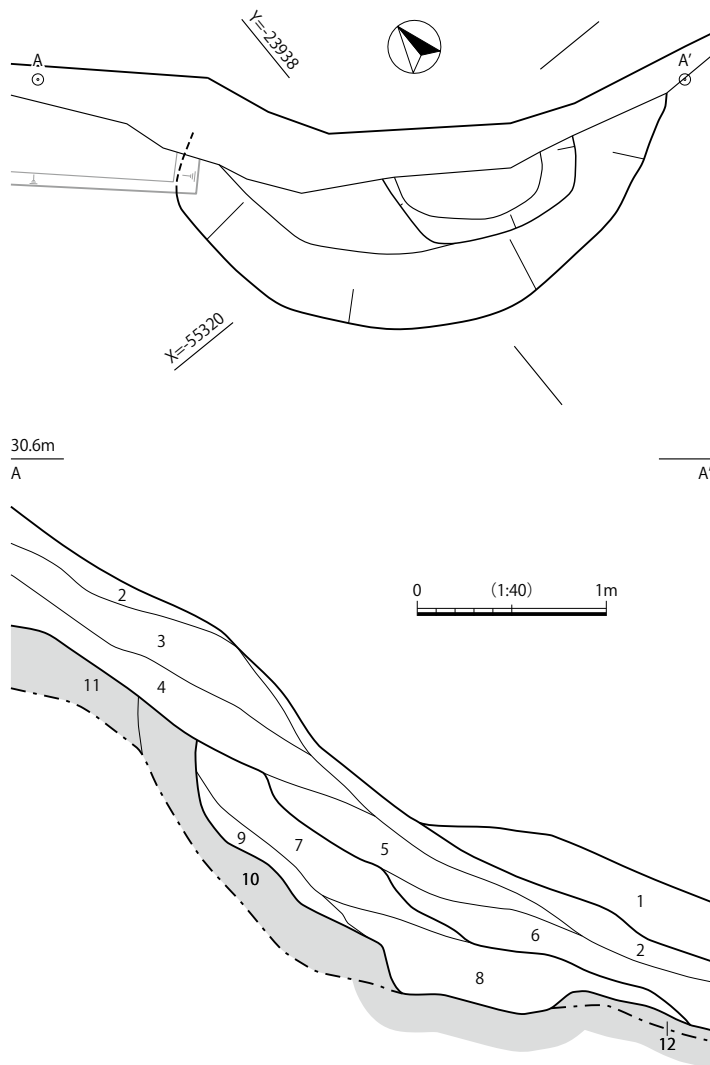
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径3cm)含 7.5YR5/6 明褐色シルト～細粒砂・7.5YR6.5/8 黄橙色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂ブロック(径2～3cm)含

第212図 S063段状遺構平面・断面図及び出土遺物

(3) 溝

S029 (第211・214・378図、PL.113)

7区西部M25グリッドで検出した。西側は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分では、丘陵の等高線にほぼ直交し、西北西－東南東方向にわずかに蛇行して延びる。検出規模は長さ9.13m、幅0.35～0.65m、深さ0.2mである。第V層を除去した第VII層上面で検出したS030ピット、S031ピット、



- 〔排土〕
- 1 10YR5/6 黄褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト～極細粒砂 礫(～径8mm)含
- 〔表土〕
- 2 10YR3/2 黒褐色～ 10YR3/3 暗褐色・10YR5.5/6 黄褐色シルト～極細粒砂 細粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径1cm)含
 - 3 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト～極細粒砂 礫(～径3cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径2cm前後)含
 - 4 10YR5/4 にぶい黄褐色～ 10YR4/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径1cm)含
 - 5 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径1～2cm)含
 - 6 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径8mm)含 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径1～2cm)含
- 〔S049 埋土〕
- 7 10YR4.5/4 褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂 礫(～径2cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(～径2cm)含
 - 8 10YR5/4 にぶい黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルト～中粒砂 礫(～径2cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径4cm)含 10YR6/8 明黄褐色風化岩盤ブロック(～径10cm)主に下部に多含
 - 9 10YR5/5 黄0色粗粒砂～細礫混シルト～中粒砂 礫(径5mm～3cm)含 10YR6/8 明黄褐色風化岩盤・10YR7/6 明黄褐色岩盤ブロック(～径3cm)含
- 〔IX層：基盤岩、風化岩盤由来〕
- 10 10YR6/8 明黄褐色礫(～径1cm)混砂～シルト
 - 11 10YR6/6 明黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混中粒砂～シルト 礫(～径8mm)含
- 〔IX層：基盤岩〕
- 12 10YR7/6 明黄褐色岩盤

第213図 S049土坑平面・断面図

S040ピット及びS043ピットに切られる。埋土からの出土遺物はない。帰属時期は、ピットとの切り合いや層位から、弥生時代後期後葉から終末期に比定できる。

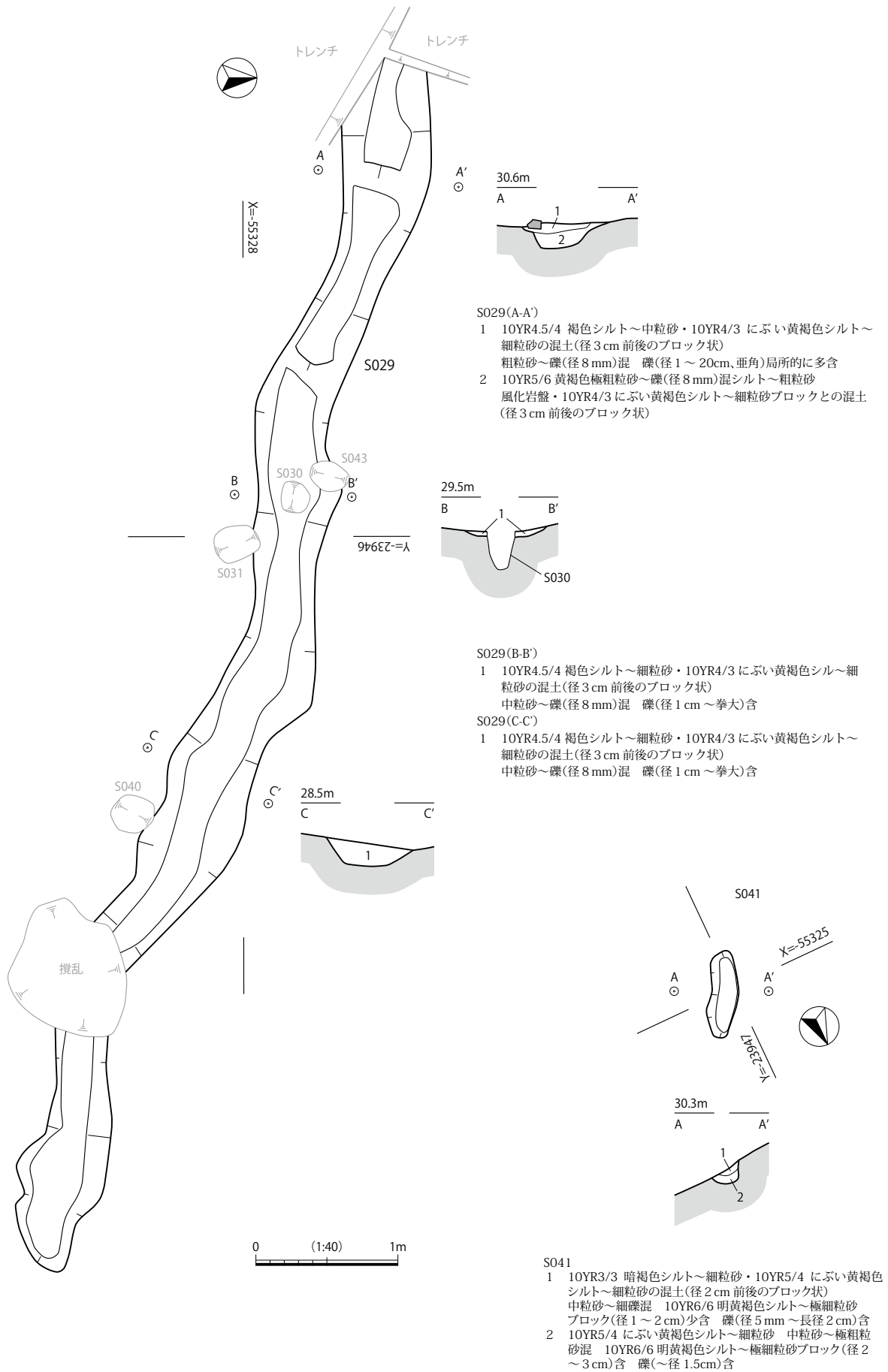
S041 (第211・214・378図)

7区西部M25グリッドで検出した。長さ0.62m、幅0.19m、検出面からの深さ0.17mである。埋土からの出土遺物はない。帰属時期は、第IV層を除去した第VII層上面で検出したことから、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉に比定できるが、上限時期は詳らかにできない。

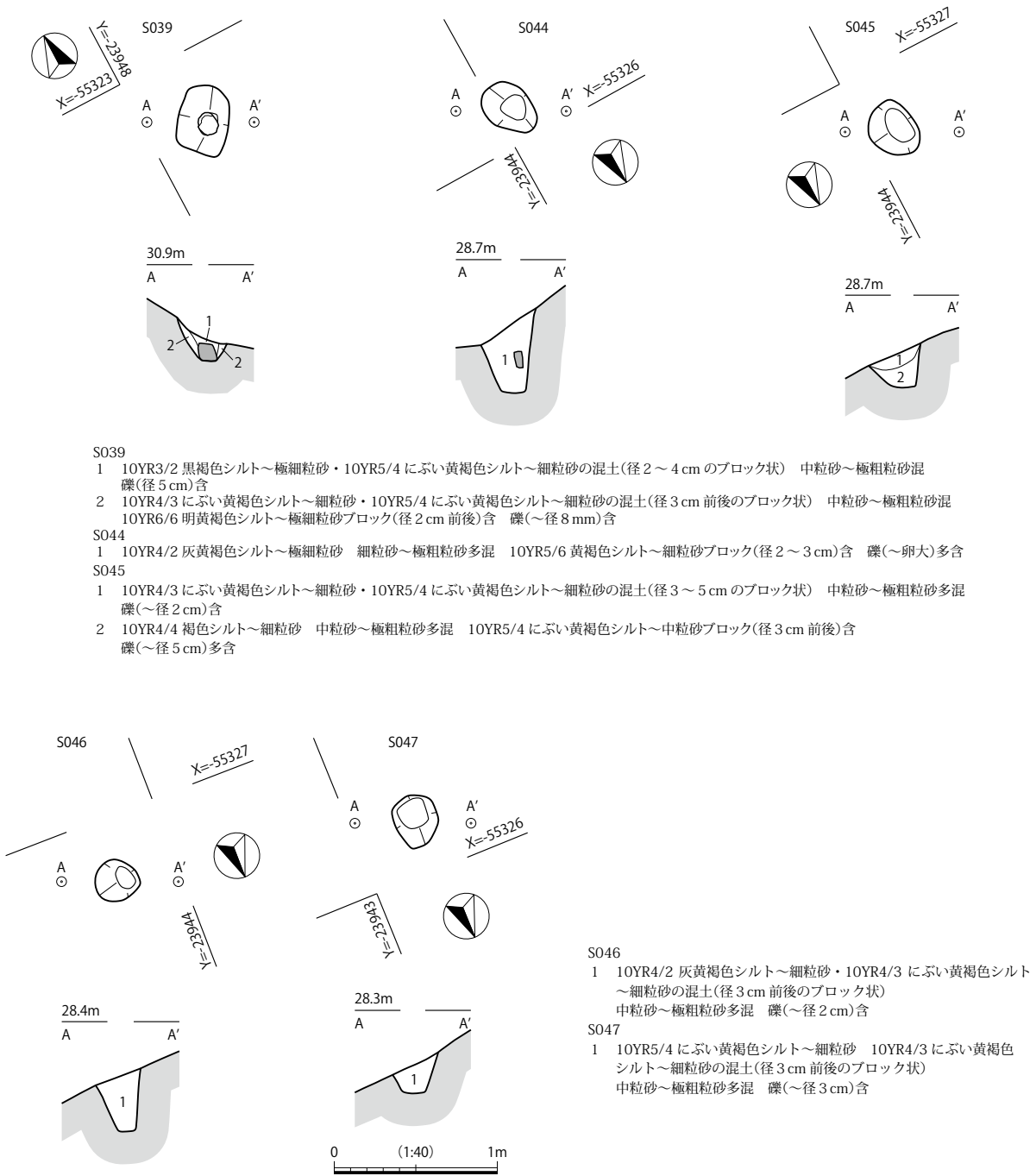
丘陵側の壁の立ち上がりが垂直に近いことと、軸が等高線とほぼ平行すること、また、丘陵部斜面で検出した遺構種別の傾向から、段状遺構の壁から壁溝にかけての一部であると推定できるが断定はできない。

(4) ピット群 (第211・215～218・378・379図、表9・10、PL.113)

第3遺構面で検出したピットは、段状遺構等に伴うものを除くと、S030～S040、S042～S048、S062、S066、S068～S070、S073～074、S077～078及びS080ピットの28基で、第IV層ないし第V層を除去した第VII層上面で検出した。グリッド、規模や出土遺物等を表9～10に示した。出土遺物は土器の細片で図化できるものはない。ピットの中には根石や柱痕が残るものや、柱を抜き取ったと推定できるものがあり、建物あるいは塀を構成していたものと考えられる。しかし、建物や塀を復元で



第214図 S029・041溝平面・断面図

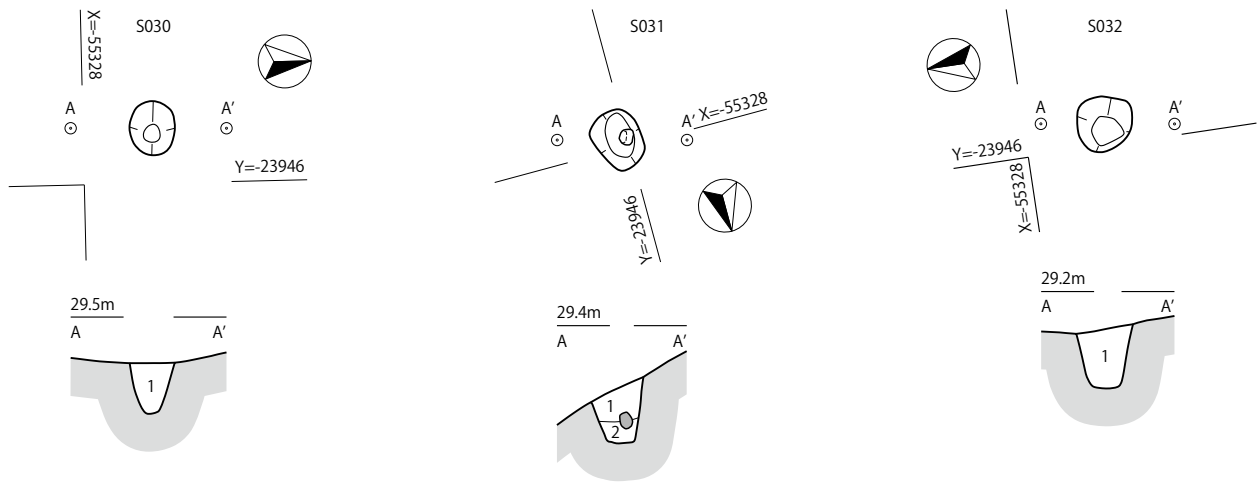


第215図 S039・044～047ピット平面・断面図

きる規則的な並びは確認できなかった。

第3遺構面で検出したピットの帰属時期は、層位から第IV層除去面で検出したものが弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉、第V層除去面で検出したものが弥生時代後期後葉から終末期に比定できる。第3遺構面で検出したピットは、埋土と遺構の基盤層である第Ⅷ層が類似しており、いくつかはトレンチなどの断面で認識し検出することができた。このことから、すべてのピットを平面的に検出しきれていない可能性が高い。建物や塀を復元できる並びを確認できなかったのは、このことによるものと考えられる。しかし、これらのピットは建物や塀を構成していたと考えられることや、被覆する第V層から出土した土器が煮炊具である甕を主体とすることと合わせ、居住域であったことを示している。

第5章 7区の調査成果



S030

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色粗粒砂～細礫混シルト～中粒砂 10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm前後)含
礫・風化岩盤(径5mm～1cm)含

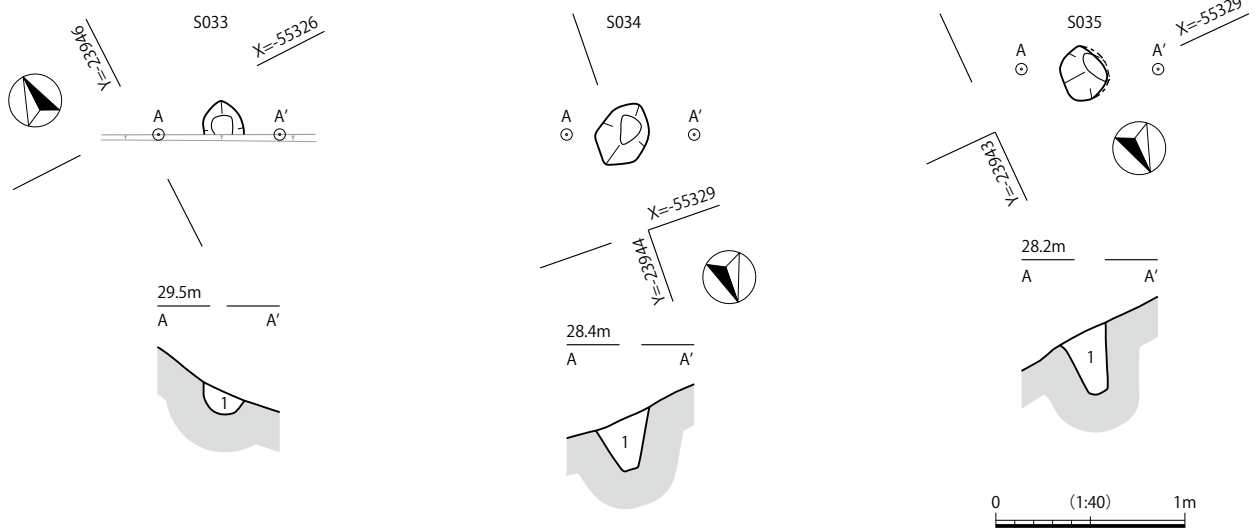
S031

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～中粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 粗粒砂～細礫混
礫(径5mm～2cm)含

- 2 10YR5/6 黄褐色極粗粒砂～細礫混シルト～粗粒砂 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～中粒砂ブロック(径2～3cm)含 1よりボンボン

S032

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～中粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状)
粗粒砂～礫(～径8mm)混 最上部に礫1個(15×10×4cm)含



S033

- 1 7.5YR5/4 にぶい褐色シルト～極細粒砂・7.5YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状)
中粒砂～細礫混 礫(径5mm～卵大)含

S034

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmの
ブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径2cm前後)含
礫(～径8mm)含

S035

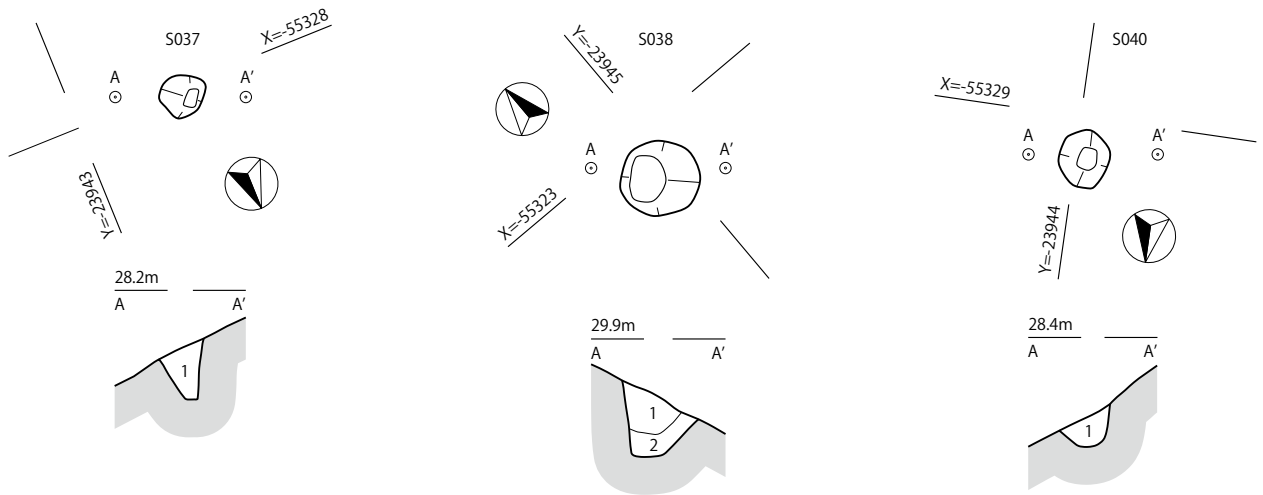
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～
細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm)含

S036

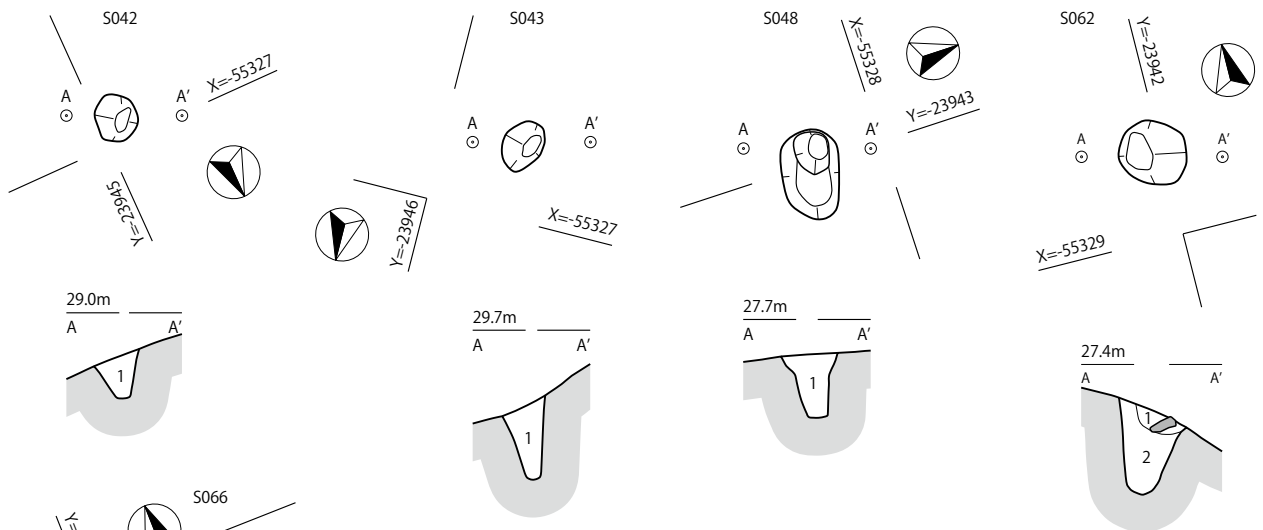
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状)
中粒砂～細礫混 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2cm前後)含
礫(径5mm～拳大)含 炭粒含

- 2 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状)
中粒砂～細礫混 礫(径5mm～3cm)含 1よりボンボン

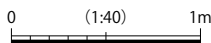
第216図 S030～036ピット平面・断面図



- S037
 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～細礫混 礫(径5mm～3cm)含
- S038
 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2～3cm)少含 礫(～径8mm)含
 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2～3cm)局所的に含 礫(～径8mm)含
- S040
 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～5cmのブロック状) 中粒砂～細礫混 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm)少含 礫(径5mm～1cm)含

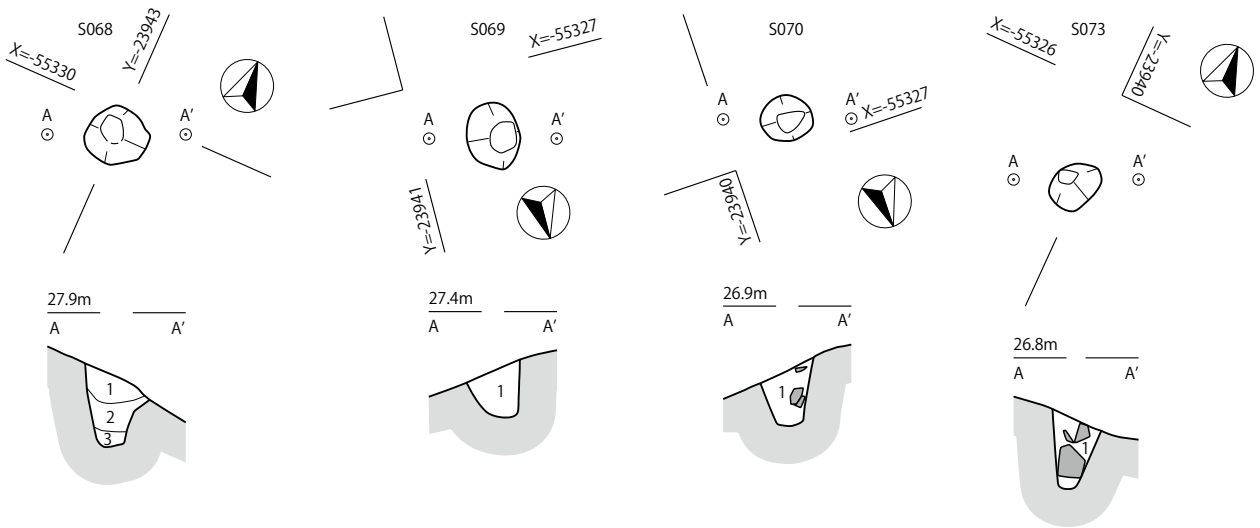


- S042
 1 10YR3.5/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(～径3cmのブロック状) 中粒砂～細礫混 礫(径5mm～1.5cm)含
- S043
 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～中粒砂 粗粒砂～細礫混 10YR3/2 黒褐色シルト～細粒砂ブロック(径3cm前後)含 礫・風化岩盤(径5mm～1cm)含
- S048
 1 10YR4/4 褐色シルト～細粒砂 中粒砂～細礫混 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径3cm)含 礫(径5mm～1cm)多
- S062
 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂 中粒砂～極粗粒砂混 礫(径5mm～1cm, 拳大1個)含 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径1～2cm)含 炭粒含
 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂と10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～1cm)含 下部に10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック(～径4cm)含
- S066
 1 10YR4/4 褐色シルト～細粒砂・10YR3/3 暗褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～細礫混 礫(径5mm～長径4cm)含 最下部は10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロック主体



第217図 S037・038・040・042・043・048・062・066ピット平面・断面図

第5章 7区の調査成果



S068

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～細粒混礫(径5mm～1cm)含
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂 細粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm)含 10YR6/8 明黄褐色シルト～細粒砂・10YR3/3 暗褐色シルト～細粒砂ブロック(径2cm 前後)含
- 3 10YR6/8 明黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2cm 前後)主体 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂との混土 中粒砂～極粗粒砂混礫(～径8mm)含

S069

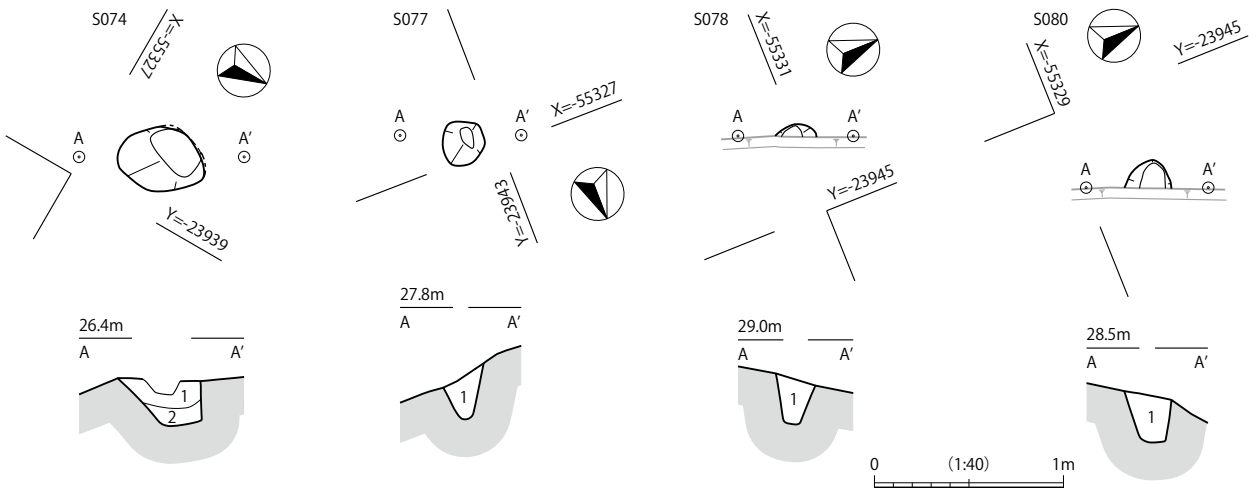
- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径2cm)含 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂ブロック(径3～5cm)含 炭粒少含

S070

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～細粒砂の混土 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm, 卵大～拳大数個)含

S073

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト～極細粒砂・10YR4.5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混礫(～径1.5cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径1cm 前後)含



S074

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混礫(～径4cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径2cm)含
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径4cm)含 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径2～3cm)含

S077

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm 前後のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混礫(～径3cm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径1～2cm)含 炭粒少含

S078

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 粗粒砂～細粒混礫(径5～8mm)含 10YR6/8 明黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径1cm 前後)わずかに含 炭粒含

S080

- 1 10YR6/6 明黄褐色シルト～細粒砂・7.5YR5/6 明褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 粗粒砂～細粒混 礫(径5mm～1cm)含

第218図 S068～070・073・074・077・078・080ピット平面・断面図

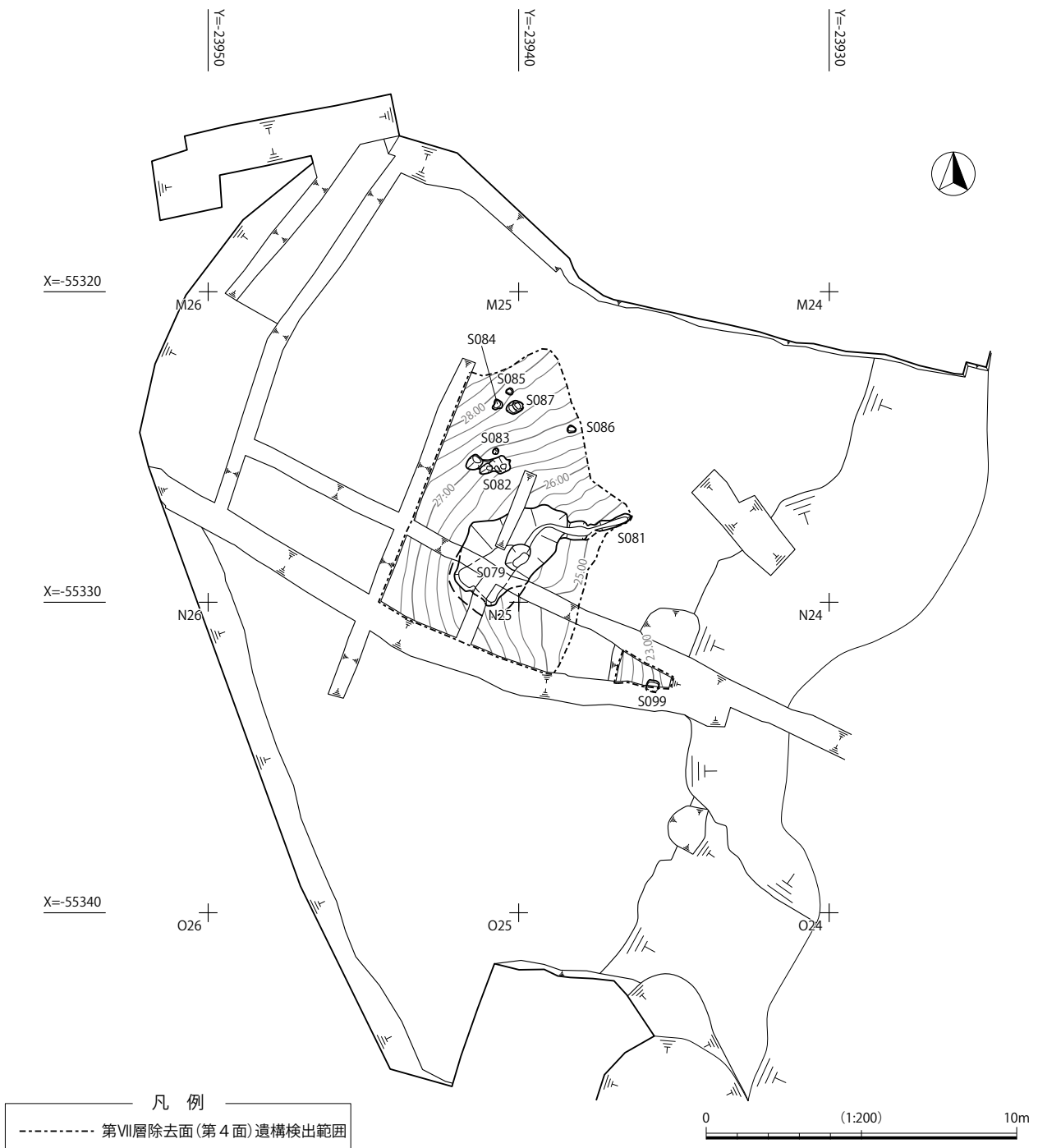
5 第4遺構面（第219図、PL.115）

第4遺構面は、7区西部の風化岩盤上の谷状の凹地に堆積する第Ⅶ層を除去した第Ⅷ層上面である。基盤岩までの堆積と遺物や遺構の有無を確認するために設定した東西中央トレンチ及び東西トレンチの断面で遺構の切り込みを確認し、その部分を拡張して遺構の平面的検出を行なった。検出遺構は、土坑2基、ピット6基、溝1条である。

（1）溝を伴う土坑

S079・S081（第219～221図、表33、PL.81・114～116）

7区西部のM24～25及びN25グリッドで検出した。S079土坑は平面形状が不整な卵形で、この北東端部からS081溝が東側に延びる。検出規模は、長軸3.90m、最大幅2.60m、検出面からの最大深さ0.87



第219図 7区第4遺構面遺構配置図

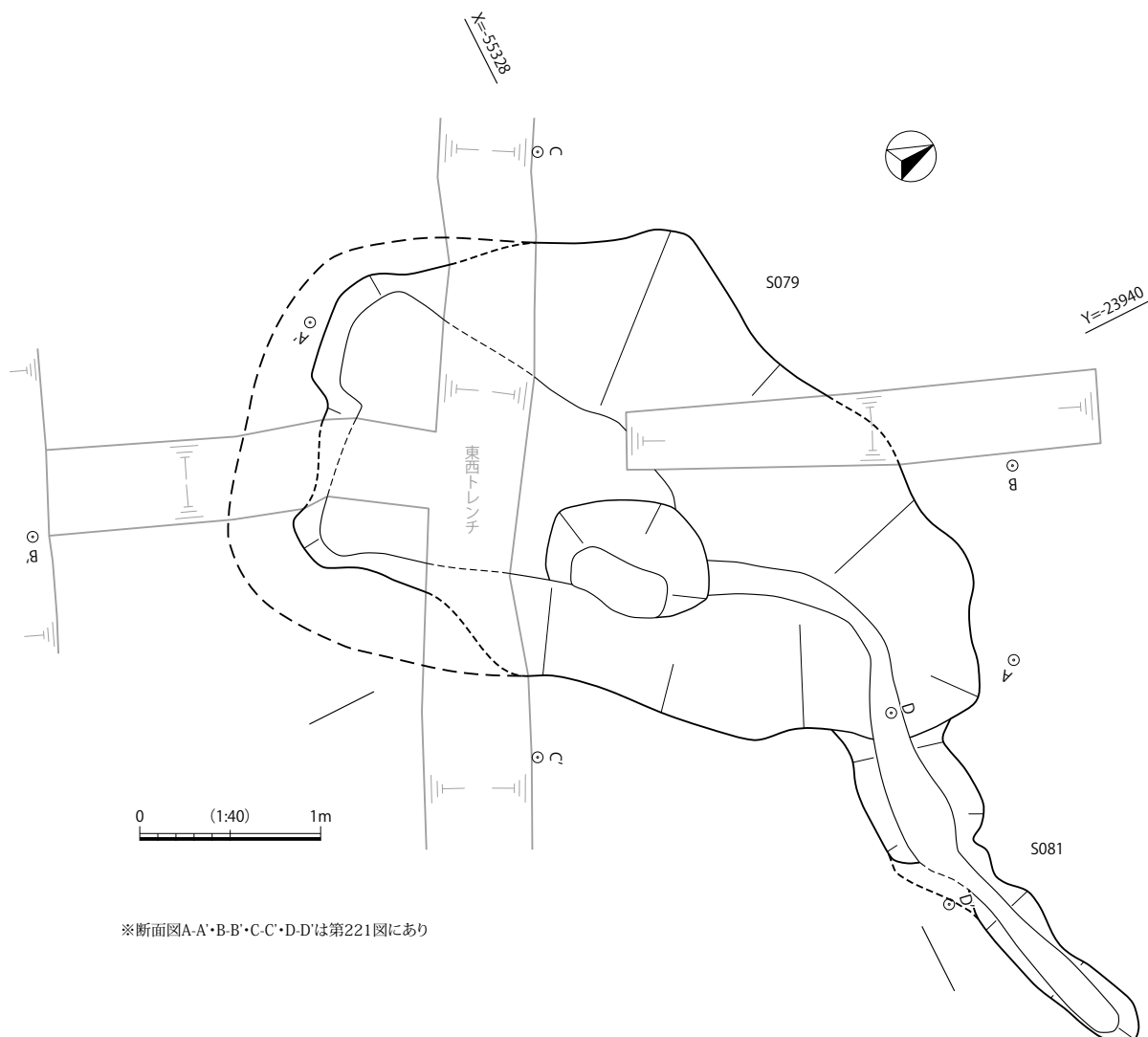
mである。東西トレンチを挟み南側では、第Ⅶ層を崩積土とする斜面浸食により削られていて、本来の規模は現況よりは大きいと考えられる。北東側は浅くなり、S081溝が接続している。S081溝の検出規模は長さ2.24m、幅0.26～0.60mで、検出面からの最大深さ0.16mである。

S079土坑の埋土は、混土あるいはブロック土を含む土からなる数層に分けられ、卵大～径約0.7mまでの礫と炭片を含む。堆積状況から、埋戻しにより堆積したもので、礫は埋戻しの際に土とともに入れられたものと考えられる。また、S081溝の埋土はブロック土を含み、径0.15mまでの大ぶりの礫と炭粒を含む点で、S079土坑の埋土と類似し、一連の埋戻しによる土と考えられる。

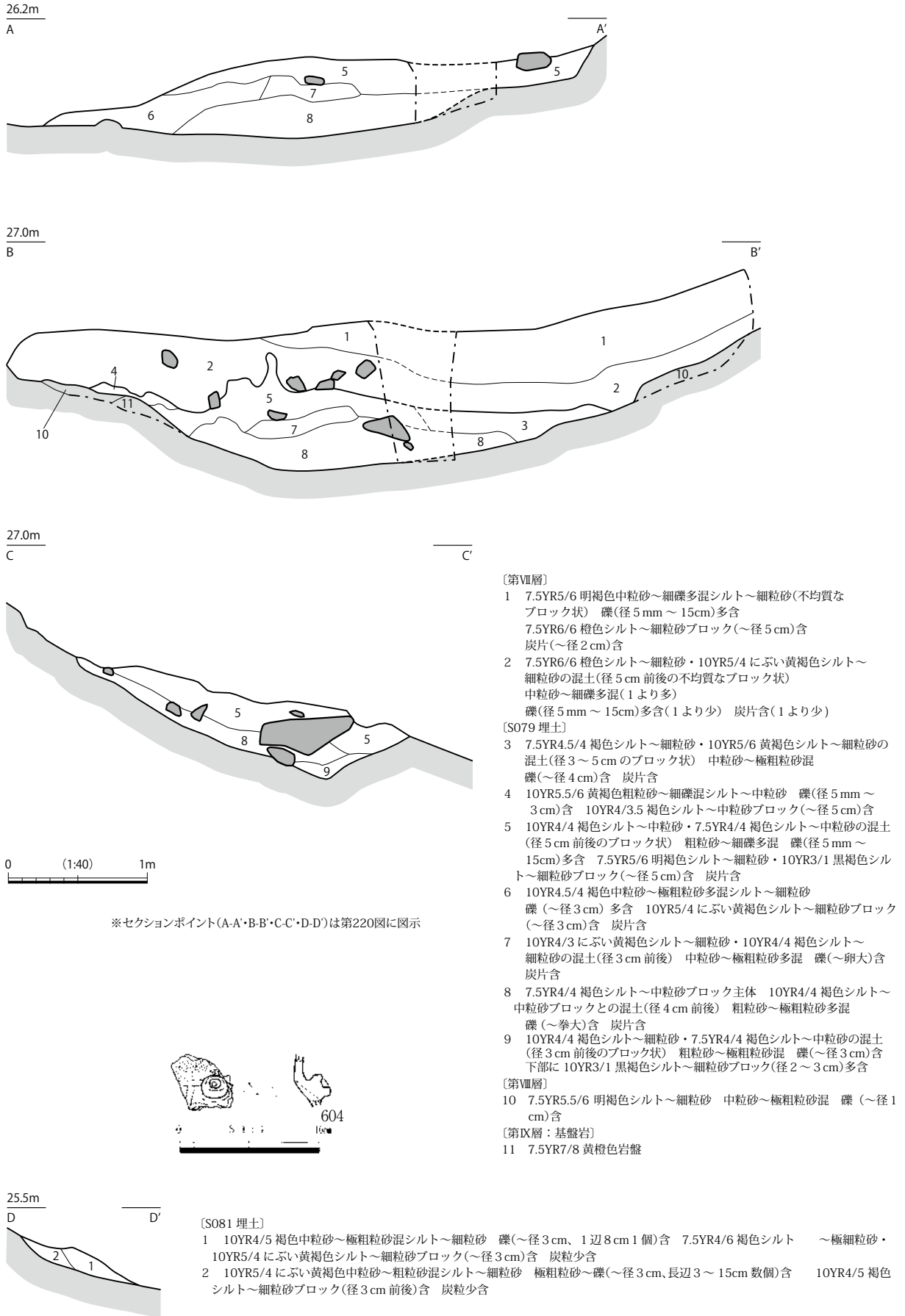
出土遺物は、S081溝埋土から出土した縄文土器片（604）のみである。頸部は条線、体部に円形の浮文が施されていることから布勢式新相の特徴を持つ。604は全く摩耗しておらず、遺構が埋められた時期に限りなく近いものと推定できる。

遺構の帰属時期は層位から、縄文時代後期前葉から弥生時代後期後葉までの間に比定できるが、出土遺物の所見から限りなく縄文時代後期前葉に近いと推定できる。

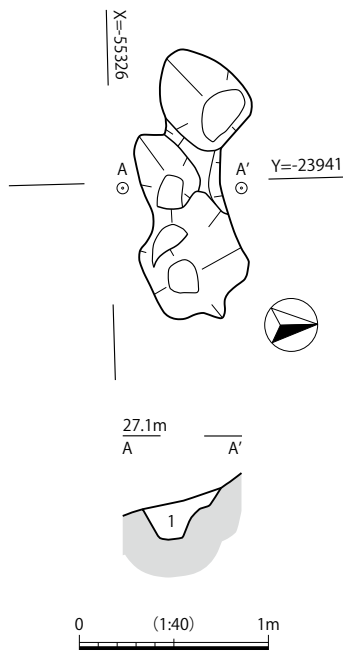
S079土坑、S081溝に関して、基盤層との関係から一つの可能性を示しておく。東西トレンチ断面図（第131図）で見ると断面図の16層～18層までがS079土坑の埋土で、21層以下が基盤層である。S079土坑の底面が、21～22層の下面にそのまま連続しており、かつ、21～22層が23層以下を切るよ



第220図 S079土坑・S081溝平面図



第221図 S079土坑・S081溝断面図及びS081溝出土遺物



1 7.5YR5/6 明褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂の混土(～径5cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径1.5cm、卵大2個)含 2.5Y7/6 明黄褐色シルトブロック(径2cm 前後)含

第222図 S082土坑平面・断面図

うに堆積していることから、S079土坑、S081溝は、21層～22層を伴う地すべりにより、すべり面との間に形成された窪みである可能性がある。仮に、S079土坑、S081溝の形成が人為によるものでなかったとしても、人為的な埋戻しにより埋土が堆積していることから、当該時期の人々の活動があったことは否定できない。

(2) 土坑

S082 (第219・222図、PL.115)

7区西部のM25グリッドで検出した。平面形状は細長い不整形で、3基以上のピットの集合体のような形をしており、形状的には複数のピットの可能性があるが、平面的に切り合いを確認されなかったことから、土坑として扱い記載する。規模は、長軸1.45m、短軸0.58m、検出面からの最大深さ0.47mである。埋土は、卵大までの礫を含む混土からなる。埋土からの出土遺物はない。遺構の帰属時期は、層位から弥生時代後期後葉以前に比定できるが、詳らかにはできない。

(3) ピット (第219・223図、表10、PL.115)

第4遺構面で検出したピットは、S083～S087及びS099ピットの6基である。すべてのピットは、第Ⅶ層を除去した第Ⅷ層上面で検出した。S099ピットについては以下に記載し、S083～S087ピットについては第223図に図示し、グリッド、規模や出土遺物等を表10に示した。S099ピットを除き、7区北東部のM24グリッドとM25グリッドの境付近に一定の密度で分布する。第4遺構面で検出したピットの帰属時期は、層位から弥生時代後期後葉以前に比定できるが詳らかにはできない。

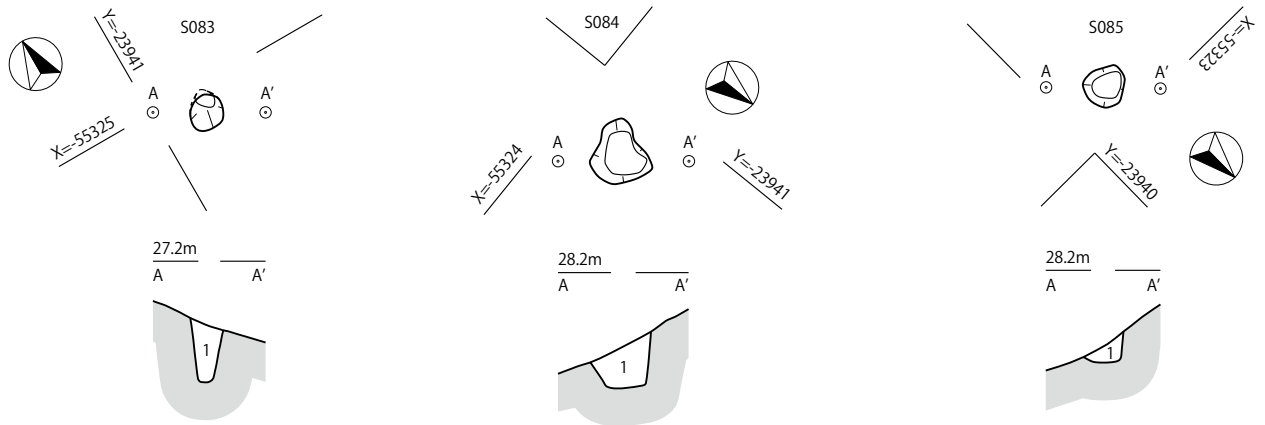
S099 (第219・223図、PL.115)

7区中央部南東寄りのN24グリッドで検出した。東西中央トレンチの断面で、第Ⅷ層を切り第Ⅶ層に覆われた箱形の断面形状の黒褐色土を確認したため、周辺の第Ⅶ層を除去し平面的に検出した。埋土は縁に基盤層由来のブロック土が堆積し、その中に黒褐色土が堆積する。トレンチ掘削により南側が切られたため全容は不詳であるが、残存部分の規模は東西0.39m、南北0.17m、検出面からの深さ0.60mである。残存する部分からは掘方の平面形状が隅丸方形で、黒褐色土の平面形状は円形と考えられる。黒褐色土の平面及び断面形状と縁の基盤層由来のブロック土の堆積から、黒褐色土が堆積する部分は柱痕である可能性がある。

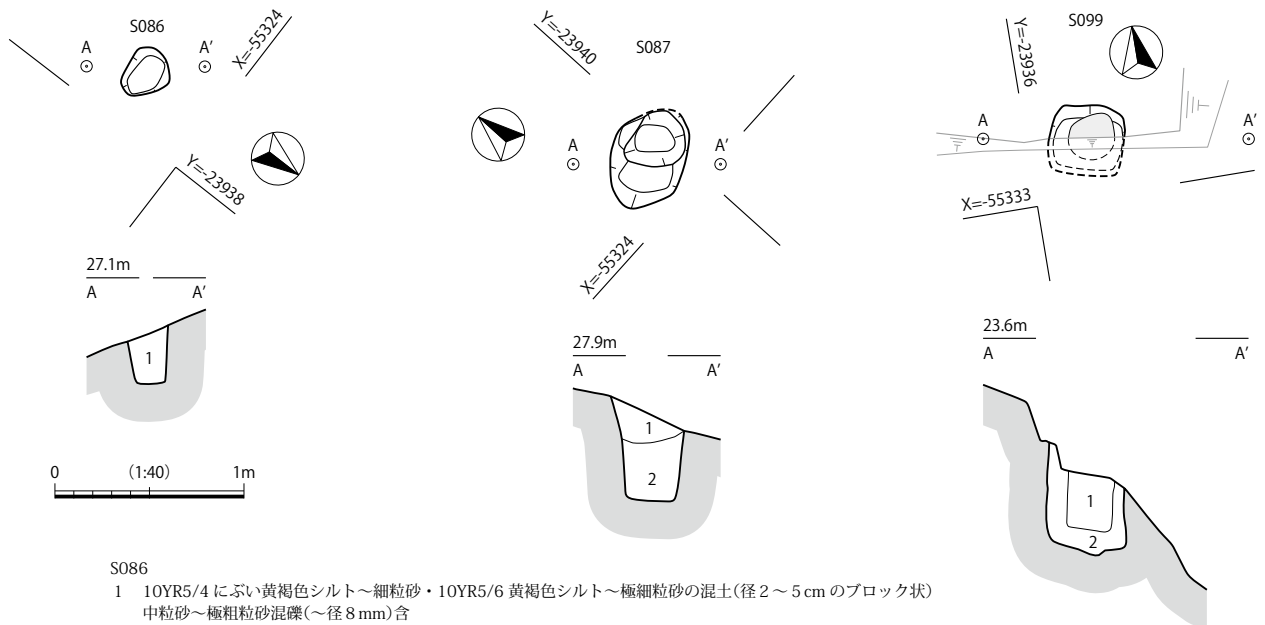
埋土からの出土遺物はない。遺構の帰属時期は、層位から弥生時代後期後葉以前に比定できるが、詳らかにはできない。

第3節 遺構に伴わない出土遺物

遺構埋土からの出土遺物については各遺構の記載部分に記した。今回の調査では、遺構に伴わない出土遺物も一定量出土している。以下にそのあらましを記す。



- S083
 1 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト～極細粒砂 細礫含 10YR8/6 黄褐色シルト(基盤層由来)ブロック(～径2cm)含
- S084
 1 10YR4/4 褐色シルト～極細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径2cm)少含
- S085
 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR4/4 褐色シルト～極細粒砂の混土(径2cm前後) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径5mm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(～径1.5cm)含



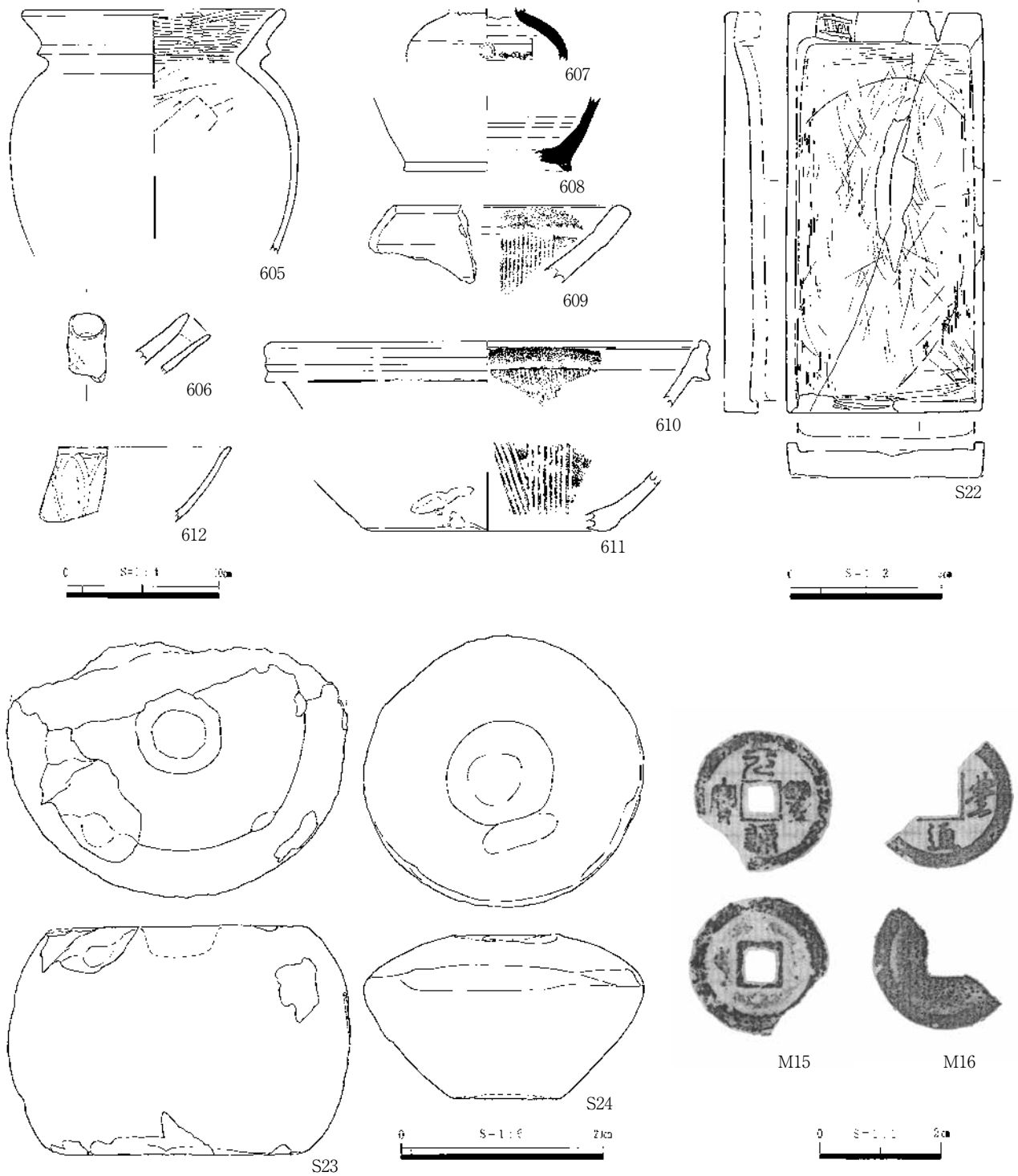
- S086
 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂の混土(径2～5cmのブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混礫(～径8mm)含
- S087
 1 10YR5/5 黄褐色シルト～細粒砂 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径8mm)含 10YR5/6 黄褐色シルト～極細粒砂・7.5YR8/6 浅黄褐色風化岩盤ブロック(～径3cm)少含 炭片含
 2 10YR6/6 明黄褐色シルト～極細粒砂・10YR5/5 黄褐色シルト～細粒砂の混土(径3cm前後のブロック状) 中粒砂～極粗粒砂混 礫(～径4cm)含 炭粒含
- S099
 1 10YR3/2 黒褐色砂混シルト 礫(～径2cm)含
 2 10YR7/6 明黄褐色中粒砂～極粗粒砂混シルト～細粒砂(ブロック状) 礫(～径3cm)含 縁に酸化マンガン沈着(葉層状)

第223図 S083～087・099ピット平面・断面図

(1) 第I層・II層出土遺物(第224図、表33・55・59、PL.119・121・122)

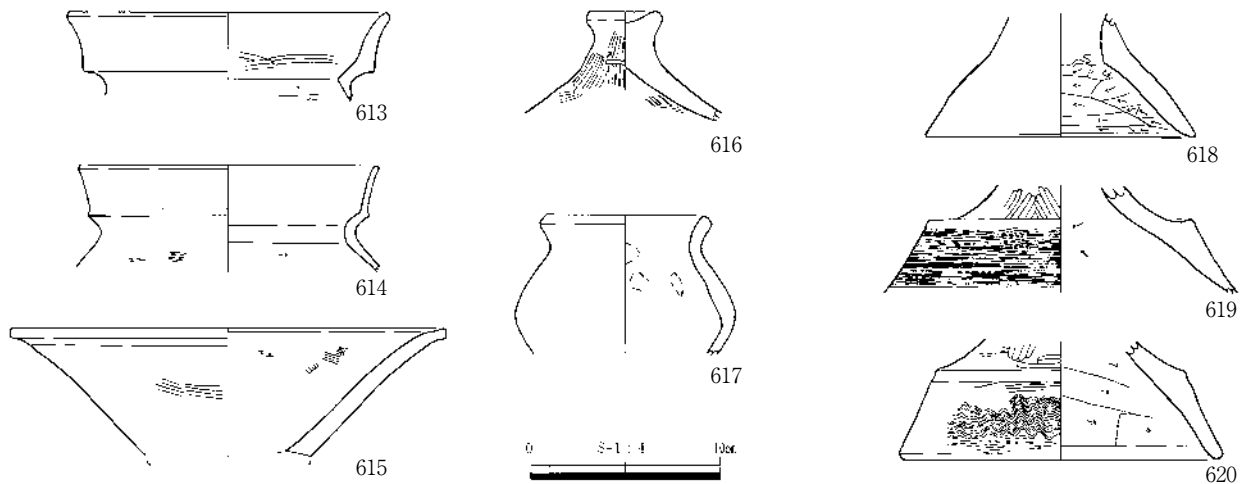
攪乱埋土を含む第I層からの出土遺物は近世以降の陶磁器が主で、他に弥生土器、土師器、須恵器、国産陶器(備前、瀬戸美濃)及び石製品(硯、五輪塔水輪)である。近世以降の陶磁器は局所的に出土し、近隣から廃棄されたと考えられる。第II層からの出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、青磁、土製品(土錘)、石製品(五輪塔水輪)及び銭貨である。このうち、圧倒的多数を占める遺物は弥生時代後期後葉ないし終末期の土器片で、下位の第III層ないし第V層に由来する遺物と考えられる。

第I層から出土した4点(605、607、S22～23)、第II層から出土した9点(606、608～612、



第224図 7区第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物

S24、M15～16) を掲載した。605はヨコナデされた外反する口縁を有する甕、606は注口土器の注口部片で、いずれも弥生時代後期後葉に比定されよう。607は円形孔を持ち、波状文が施される須恵器壺、608は高台付の須恵器壺底部である。612は明瞭な鍔連弁文を有する龍泉窯系青磁碗であり、13世紀初頭から前半の所産と考えられる。609及び611は越前焼播鉢と考えられ、後者は8本単位の太い播目を持ち、いずれも16世紀頃に比定される。610は口縁外面に2条の凹線、内面に1条の凹線が施される関西系の播鉢であり、18世紀後葉頃と推定される。S22は長さ13.1cm、幅6.5cmの長方形の硯である。S23～24はともに安山岩製の五輪塔水輪である。前者は、体部中央に最大径を有するが、後者は体



第225図 7区第Ⅲ層出土遺物

部上半に最大径をもつ。上面は風輪を嵌め込むための窪みがみられるが、S23は碗状に深く、S24は皿状に浅い。M15～16は銭貨で、銭種はともに元豊通宝（北宋、初鑄1078年）である。

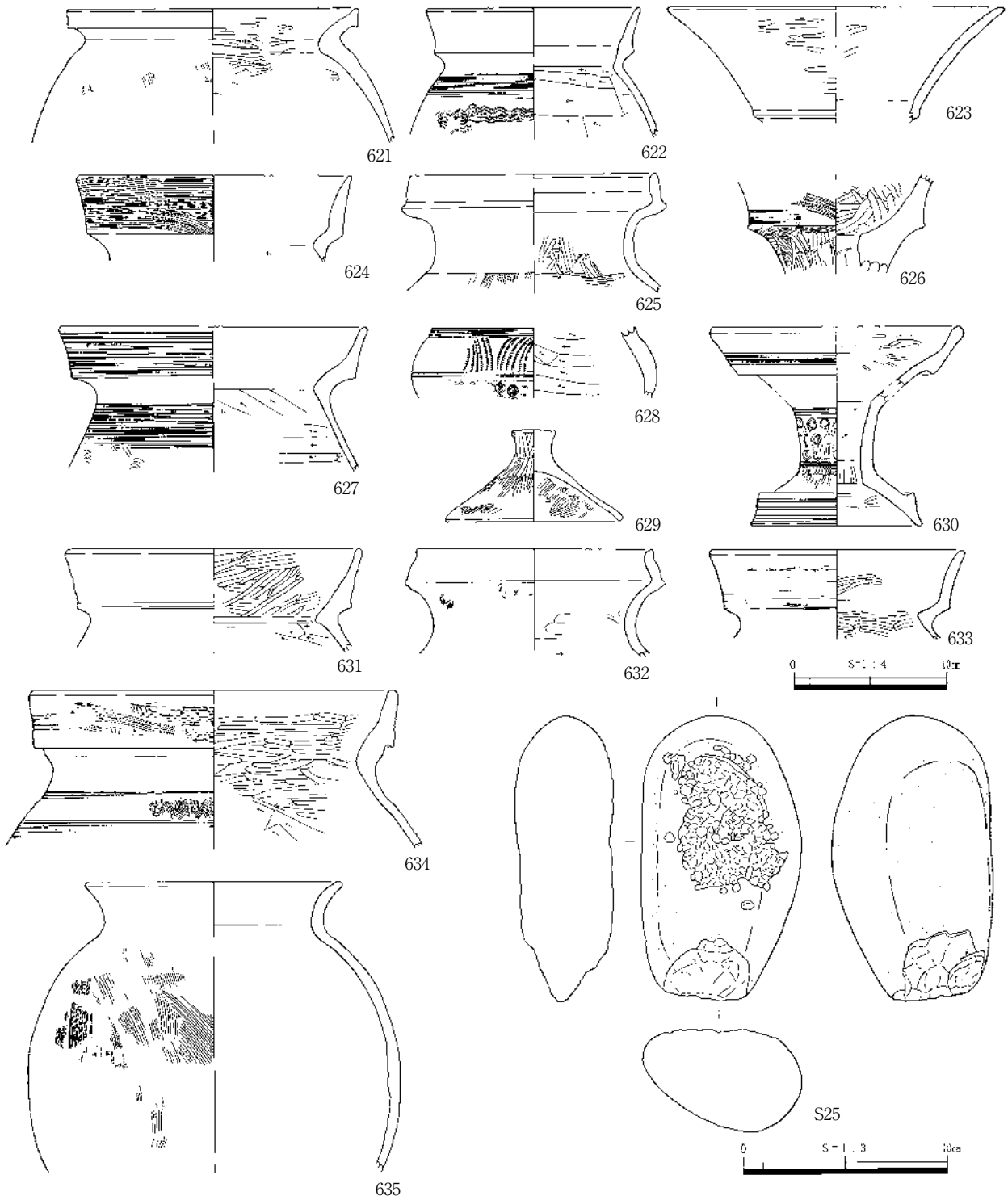
(2) 第Ⅲ層出土遺物（第225図、表33、PL.120）

第Ⅲ層は、7区西部の丘陵斜面の第Ⅱ層下位と、7区南部のO23及びP23グリッド付近の第Ⅱ層下位に堆積する層である。7区西部の丘陵斜面では第Ⅲ層までを重機による表土掘削の対象としたが、遺物の出土が目立った時点で重機による表土掘削を止め、「包含層1」と呼称し、人力で掘削しながら遺物を取り上げた。また7区南部では、第Ⅱ層を表土掘削した後、一定の範囲で堆積する層に確認用のトレンチを入れ、段状遺構埋土の上位に堆積する層を「南部包含層」と呼称し、遺物を取り上げた。包含層1からは弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉までの土器が出土し、南部包含層からは弥生時代後期中葉から古墳時代前期前葉までの土器が出土している。第Ⅲ層から出土した遺物のうち、南部包含層出土の3点（613～615）、包含層1出土の5点（616～620）を掲載した。613～614は弥生時代終末期の甕である。口縁部端部は丸みを帯び、下端部は外側にあまり突出しない。615は土師器高坏の坏部で内外面にハケを残す。616は内外面にミガキがみられる弥生土器蓋、617は風化のため調整が不明瞭な弥生土器の小型壺、618～620は器台の脚台部である。619は脚台部に多条平行沈線がめぐり、620は波状文が施されている。616～620は弥生時代後期後葉に比定されよう。

(3) 第Ⅳ層出土遺物（第226図、表33・34・55、PL.120～122）

第Ⅳ層は、7区西部の第Ⅴ層を切り、これを覆うように堆積する層である。第Ⅳ層は、第Ⅳ層上部、第Ⅳ層下部の2つに分けられ、調査時には「谷部包含層1上」「谷部包含層1下」と呼称し、掘削および遺物の取上げを行なった。第Ⅳ層からは弥生時代後期中葉から古墳時代前期前葉までの土器、石器（敲石、研磨された石片）が出土している。

第Ⅳ層から出土した遺物のうち、第Ⅳ層上部（谷部包含層1）上から出土した13点（621～623、625～631、633～634、S25）と、第Ⅳ層下部（谷部包含層1下）から出土した3点（624、632、635）を掲載した。621は外反した幅狭の口縁部を有する甕である。口縁端部がナデによりわずかに凹み、体部に最大径をもつ。弥生時代後期前葉に比定されよう。622、627、631、633、634は甕である。627、633、634は口縁部に多条平行沈線がめぐり、622、631はヨコナデがみられる。622、627、634は肩部に平行沈線や波状文が施されている。626、630は受け部と脚台部に多条平行沈線がめぐる器台で



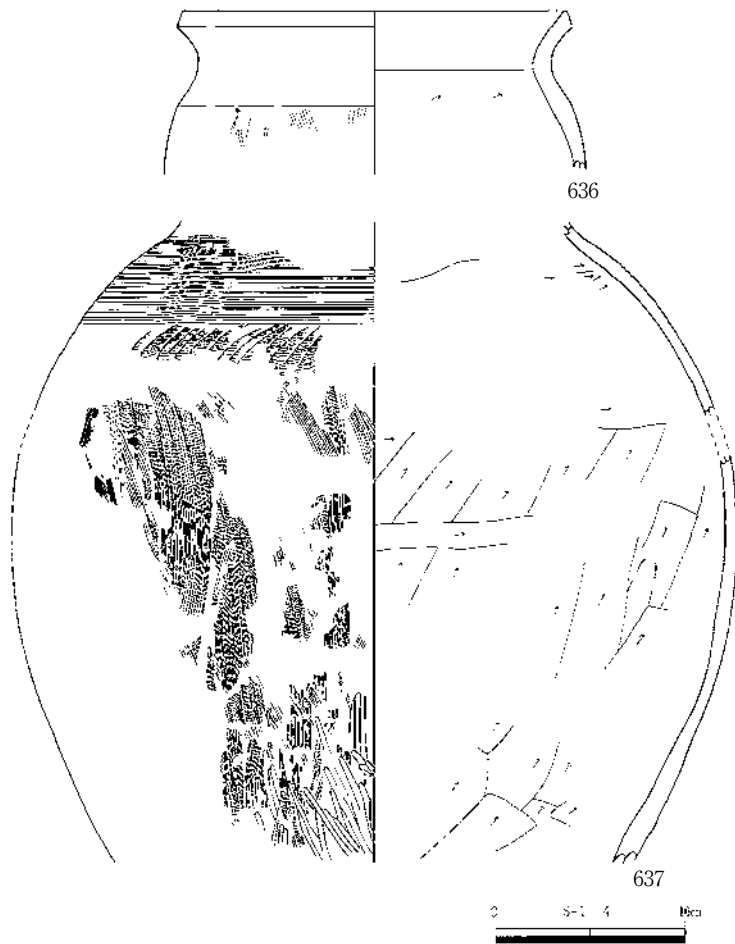
第226図 7区第IV層出土遺物

あり、後者は脚柱部に同心円状のスタンプ文が3列にわたり施されている。628は貝殻腹縁による刺突文と同心円状スタンプ文が施文される装飾壺である。629は内外面丁寧なミガキがみられ、つまみ部上面がほぼ平坦となる蓋である。以上は、弥生時代後期後葉に比定される。625は受け口状の口縁部を有する壺で、口縁部はヨコナデ、頸部はハケを施す。623は内外面ミガキが施される鼓形器台の受け部である。623及び625は古墳時代前期前葉の特徴を示す。S25は安山岩製の敲石であり、上面中心部に敲打痕、下部に打撃による剥離痕を有している。624は多条平行沈線がめぐる弥生時代後期後

葉の甕、635は単純口縁で体部が大きく張る古墳時代前期前葉の甕である。632は受け口状の口縁で、頸部はハケメが観察される。古墳時代前期前葉の特徴を示す。

(4) 第V層出土遺物(第227図、表34、PL.122)

第V層は、7区西部の第VII層の上位に堆積する層で、第IV層の堆積により切られる。第V層は、第V層上部、第V層下部の2つに分けられ、調査時に「谷部包含層2上」「谷部包含層2下」と呼称し、掘削した。その結果、谷部包含層2上から遺物が出土し、谷部包含層2下から遺物は出土しなかった。第V層からの出土遺物は、量的には第IV層出土遺物より少ない。弥生時代後期後葉の土器を主体として、弥生時代後期中葉から弥生時代終末期までの土器が出土した。



第227図 7区第V層出土遺物

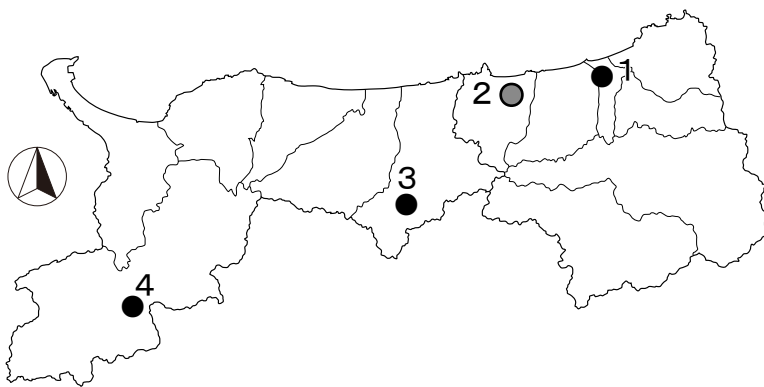
第V層上部(谷部包含層2上)から出土した遺物のうち2点(636、637)を掲載した。いずれも、第V層上部から出土したのは一部の破片で、上位の第IV層から出土した破片と接合した。このことから、第V層が第IV層の堆積により切られていることが確認できる。636は口縁部が外反し、幅狭の端部にナデが施される甕で、体部が最大径となっている。637は肩部に多条平行沈線と貝殻腹縁の刺突文が施される壺である。いずれも体部上半までヘラケズリが及んでいる。弥生時代後期前葉に比定されよう。

第4節 下坂本清合遺跡出土埋蔵銭の内容

本章第2節にて概要を述べたとおり、下坂本清合遺跡では、7区において埋蔵銭（S088）を検出した。本事例は、鳥取県内では4例目の発見であり（第228図、表1）、発掘調査による出土は初となる。本節では、銭種分類をはじめとした銭貨調査結果の詳細を述べる。

1 銭種分類の結果（第229・230・233～245図、表2・77～82、写真12～24・38・39）

錆で固着した銭貨を一枚一枚剥離し調査、集計を行い、容器である備前焼四耳壺に満載されていた銭貨の総枚数は、15,523枚と判明した。そのうち、銭種分類を実施したのは15,446枚である。分類調査の結果、最古銭が唐の開元通寶（初鑄621年）、最新銭が明の永樂通寶（初鑄1408年）となり、銭種は55種であった。国別では、国内鑄造とされる島銭「天元通寶」一枚を除き、全てが中国の各王朝銭である。表2が、その分類一覧である。特記する銭種としては上記島銭のほか、中国銭では、北宋の政和通寶、宣和通寶、南宋の建炎通寶において折二銭を検出した。いずれも法量比較等から中国における私鑄銭とみられるが⁽¹⁾、本銭に含めている。本資料において最も特記すべきは、中世日本鑄造の模鑄銭を含まないことであろう。本邦模鑄銭の存在は、中世都市である鎌倉、京都、堺、博多において相次いで発見された鑄型により実証された。出土した鑄型から、中世日本においては一度に複数の鑄放し銭を産出することができる「連鑄法」という共通の技法によることが判明している（嶋谷1994）。本資料に模鑄銭が含まれていない背景には、特定の銭種及び状態の銭貨を選んで排除する、撰銭行為が介在した可能性が考えられる。また、表2にみるように本資料中には、判読不能な不明銭、割れや欠け等が顕著な破損銭を含んでいないことも特徴として挙げられ、本埋蔵銭が当時の人々が認



第228図 鳥取県内出土の埋蔵銭分布

識するところの「良いお金」、すなわち「精銭」から成ることが指摘できよう。

図版として、個々の銭種から書体の異なるもの、背文や記号を有するもの等を基準とし、195点の代表銭を選定し、拓図、写真及び法量計測表を掲載した（第233～245図、写真12～24）。図版における、分類や表記等の詳細については、凡例を参照していただきたい。

表1 鳥取県内出土埋蔵銭一覧

番号	遺跡名 所在地	埋蔵枚数	最古銭	最新銭	時期区分 (永井 2002)	容器	備考
1	鳥取市西品治	819	開元通寶	嘉靖通寶	第8期	備前焼壺	
2	下坂本清合遺跡 鳥取市気高町下坂本	15523	開元通寶	永樂通寶	第4期	備前焼壺	本報告
3	倉吉市関金町関金宿	3332	開元通寶	洪武通寶	第3期	備前焼壺	模鑄銭を含む
4	日野郡日南町宮内	6883	開元通寶	嘉靖通寶	第9期	備前焼壺	ヴェトナムの後黎（前期）銭を含む

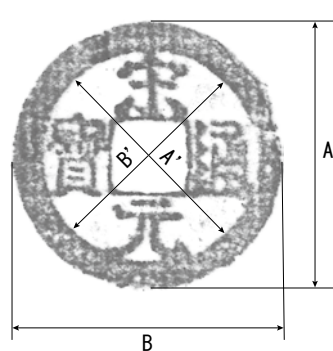
※1・3・4引用文献：出土銭貨研究会中国ブロック大会事務局 2004『山陰の出土銭貨』

凡 例

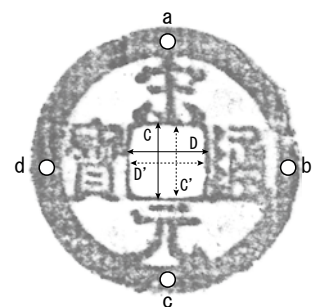
- 1 出土銭貨一覧表(表2)の配列は、国(王朝)別、発行順とした。書体が複数ある銭種については、書体毎に分類し、それぞれの書体における枚数を記載した。表右端には銭種毎の総枚数を示した。
- 2 分類した銭種名称の表記については、永井久美男2002『新版 中世出土銭の分類図版』に従った。
- 3 各銭種の初鑄年は、永井久美男2002『新版 中世出土銭の分類図版』所収の「第3表 中世の出土銭一覧」に依った。
- 4 銭貨の分類は、小平銭(一文銭)と折二銭(二文銭)に区分した。
- 5 書体を複数有する銭種については、銭種番号末尾にアルファベット小文字を付して区別した。
【例】11 至道元寶 真書：11a 行書：11b 草書：11c
- 6 銭種分類に際しては、中世日本鑄造の模鑄銭抽出を念頭において行ったが、本資料においては検出されなかったため、表2に「模鑄銭」欄は設けていない。
- 7 容器内において、特定の銭種が数的に偏る可能性を想定し、第229図のように容器の上半(上層)、下半(下層)に分けて集計した。結果からは特に顕著な傾向は見出せなかったが、情報として呈示する。
- 8 未剥離・未判読銭(77枚)は、藁でできた緇の一部が遺存していること、錆による固着状況(出土状況)を保存するため、銭種分類は実施せず残した。
- 9 それぞれの銭種からは、書体や書風の違い、背文、記号の有無や種類等により、代表銭195点を選び、拓図と写真をそれぞれ頁見開きで掲載し、下段には法量等を記載した計測表を付した。
- 10 銭貨の拓図は、全て原寸(1/1)で示した。
- 11 同一銭種・書体内におけるバリエーションについては、「-i」「-ii」のように、ハイフン+ローマ数字(小文字)で示した。
【例】紹聖元寶 行書 背下月：30a-iii 紹聖元寶 行書 背下星：30a-iv
- 12 計測表に記載した各法量の測点は、第230図の通りである。
- 13 法量計測に際しては、デジタルノギス、ダイヤルキャリパーを使用し、量目は電子秤を用いた。



第229図 銭種分類における上・下層



A・B : 銭径 (mm)
A'・B' : 内径 (mm)



C : 内郭外縦 (mm)
D : 内郭外横 (mm)
C' : 内郭内縦 (mm)
D' : 内郭内横 (mm)
a~d : 銭厚 (mm)

第230図 銭貨の各部測点

表2 S088埋蔵銭出土銭貨一覧

銭種番号	銭名	書体	国名	初鋳年	壺外出土	上層	下層	小計	銭種別総計	銭種番号	銭名	書体	国名	初鋳年	壺外出土	上層	下層	小計	銭種別総計
1	開元通寶	-	唐	621	0	309	383	692	692	27a	熙寧元寶	真	北宋	1068	0	390	309	699	1338
2	貞元重寶	-	唐	758	0	14	20	34	34	27b		篆	北宋	1068	0	316	323	639	
3	開元通寶 紀地銭	-	唐	845	0	4	3	7	7	28a	元豊通寶	隸	北宋	1078	0	1	0	1	2160
4	貞徳元寶	-	前蜀	919	0	1	0	1	1	28b		行	北宋	1078	0	452	711	1163	
5	周通元寶	-	後周	955	0	0	3	3	3	28c		篆	北宋	1078	1	484	511	996	
6	唐國通寶	篆	南唐	959	0	1	3	4	4	29a	元祐通寶	行	北宋	1086	0	414	424	838	1627
7a	開元通寶	真	南唐	960	0	2	3	5	16	29b		篆	北宋	1086	0	430	359	789	
7b		篆	南唐	960	0	4	7	11		30a	紹聖元寶	行	北宋	1094	0	207	219	426	793
8	宋通元寶	-	北宋	960	0	25	37	62	62	30b		篆	北宋	1094	0	190	177	367	
9	太平通寶	-	北宋	976	0	53	72	125	125	31a	元符通寶	行	北宋	1098	0	70	58	128	275
10a	淳化元寶	真	北宋	990	0	34	26	60	156	31b		篆	北宋	1098	0	71	76	147	
10b		行	北宋	990	0	23	16	39		32a	聖宗元寶	行	北宋	1101	1	141	150	292	593
10c		草	北宋	990	0	23	34	57		32b		篆	北宋	1101	0	154	147	301	
11a	至道元寶	真	北宋	995	1	45	50	96	249	33	大觀通寶	-	北宋	1107	0	15	23	38	38
11b		行	北宋	995	0	43	29	72		34a	政和通寶	隸	北宋	1111	0	91	113	204	378
11c		草	北宋	995	0	43	38	81		34b		篆	北宋	1111	0	74	100	174	
12	咸平元寶	-	北宋	998	0	160	139	299	299	35	政和通寶 折二	隸	北宋	1111	0	0	1	1	1
13	景德元寶	-	北宋	1004	0	185	201	386	386	36a	宣和通寶	隸	北宋	1119	0	6	8	14	32
14	祥符元寶	-	北宋	1008	0	218	233	451	451	36b		篆	北宋	1119	0	7	11	18	
15	祥符通寶	-	北宋	1008	1	154	150	305	305	37	宣和通寶 折二	篆	北宋	1119	0	0	1	1	1
16	天禧通寶	-	北宋	1017	0	205	231	436	436	38	建炎通寶 折二	篆	南宋	1127	0	1	0	1	1
17a	天聖元寶	真	北宋	1023	0	246	263	509	887	39	淳熙元寶	真	南宋	1174	0	40	15	55	55
17b		篆	北宋	1023	0	184	194	378		40	紹熙元寶	-	南宋	1190	0	4	7	11	11
18a	明道元寶	真	北宋	1032	0	16	21	37	82	41	慶元通寶	-	南宋	1195	0	11	9	20	20
18b		篆	北宋	1032	0	16	29	45		42	嘉泰通寶	-	南宋	1201	0	3	1	4	4
19a	景祐元寶	真	北宋	1034	0	106	77	183	285	43	開禧通寶	-	南宋	1205	0	2	1	3	3
19b		篆	北宋	1034	0	50	52	102		44	嘉定通寶	-	南宋	1208	0	4	4	8	8
20a	皇宋通寶	真	北宋	1038	0	584	579	1163	2015	45	紹定通寶	-	南宋	1225	0	2	2	4	4
20b		篆	北宋	1038	0	419	433	852		46	嘉熙通寶	-	南宋	1237	0	0	1	1	1
21a	至和元寶	真	北宋	1054	0	55	63	118	201	47	淳祐元寶	-	南宋	1241	0	1	3	4	4
21b		篆	北宋	1054	0	34	49	83		48	皇宋元寶	-	南宋	1253	0	7	0	7	7
22a	至和通寶	真	北宋	1054	0	19	15	34	75	49	景定元寶	-	南宋	1260	0	2	1	3	3
22b		篆	北宋	1054	0	23	18	41		50	咸淳元寶	-	南宋	1265	0	1	1	2	2
23a	嘉祐元寶	真	北宋	1056	0	49	46	95	160	51	正隆元寶	-	金	1157	0	5	7	12	12
23b		篆	北宋	1056	0	33	32	65		52	大定通寶	-	金	1178	0	1	0	1	1
24a	嘉祐通寶	真	北宋	1056	0	138	108	246	448	53	洪武通寶	-	明	1368	0	2	0	2	2
24b		篆	北宋	1056	0	100	102	202		54	永樂通寶	-	明	1408	0	63	225	288	288
25a	治平元寶	真	北宋	1064	0	89	102	191	354	55	天元通寶	-	日本	14世紀代	0	1	0	1	1
25b		篆	北宋	1064	0	87	76	163		調査済資料合計					4	7479	7963	15446	15446
26a	治平通寶	真	北宋	1064	0	8	12	20	50	未剥離・未判読資料					0	0	77	77	77
26b		篆	北宋	1064	0	14	16	30		総計									15523

2 出土銭貨の内容（第231・232図、表3～5）

既述したように、下坂本清合遺跡出土埋蔵銭（S088）における銭貨の内容は、最古銭が開元通寶（初鑄621年）、最新銭が永樂通寶（初鑄1408年）で、総数は15,523枚（未判読の付着銭77枚を含む）である。鳥取県内では、最多数枚の事例となった。本項では、分類により判明した銭種の組成的な観点を主体に、詳細を述べる。

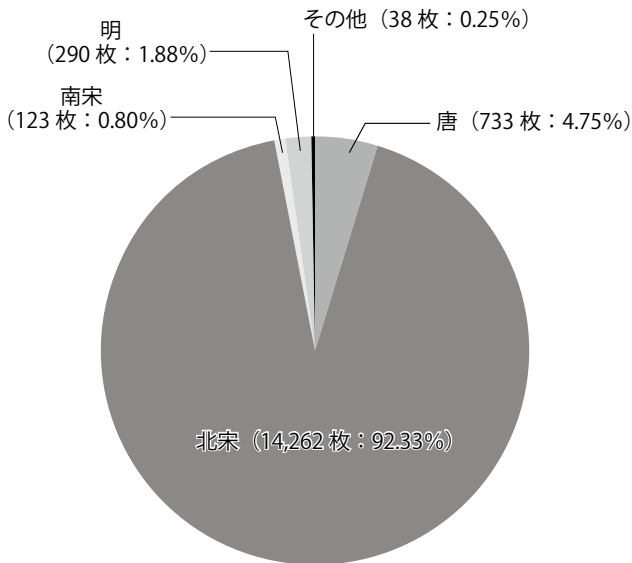
銭種は55種類を数え、分類を実施した15,446枚のうち、国内鑄造とされる島銭「天元通寶」1枚を除き、全てが中国の各王朝銭となった。王朝別に見ると（表3、第231図）、北宋銭が14,262枚と圧倒的多数を占め、これだけで全体の92.33%となる。開元通寶などの唐銭が733枚でこれに続き、最新銭の永樂通寶を含む明銭が290枚、南宋銭が123枚となり、これらを加えると全体の99.75%に

表4 銭種別枚数及び順位

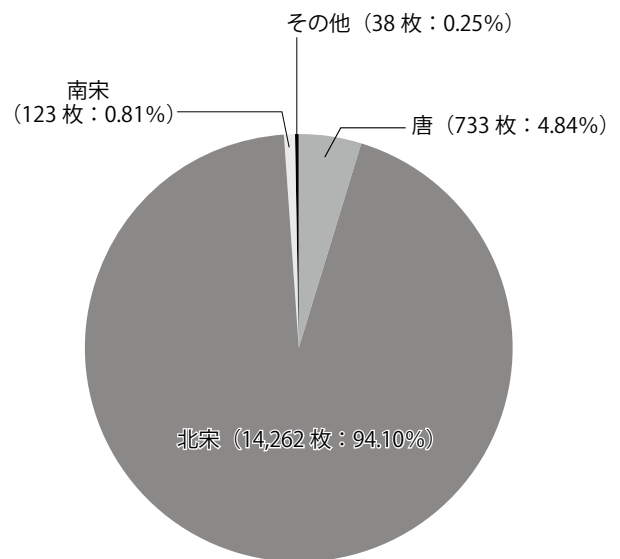
順位	銭種名	王朝名	初鑄年	枚数	比率（%）
1	元豊通寶	北宋	1078	2160	13.98
2	皇宋通寶	北宋	1038	2015	13.05
3	元祐通寶	北宋	1086	1627	10.53
4	熙寧元寶	北宋	1068	1338	8.66
5	天聖元寶	北宋	1023	887	5.74
6	紹聖元寶	北宋	1094	793	5.13
7	開元通寶	唐	621	692	4.48
8	聖宋元寶	北宋	1101	593	3.84
9	祥符元寶	北宋	1008	451	2.92
10	嘉祐通寶	北宋	1056	448	2.90
11	天禧通寶	北宋	1017	436	2.82
12	景德元寶	北宋	1004	386	2.50
13	政和通寶	北宋	1111	378	2.45
14	治平元寶	北宋	1064	354	2.29
15	祥符通寶	北宋	1008	305	1.97
16	咸平元寶	北宋	998	299	1.94
17	永樂通寶	明	1408	288	1.86
18	景祐元寶	北宋	1034	285	1.85
19	元符通寶	北宋	1098	275	1.78
20	至道元寶	北宋	995	249	1.61
小計（上位20種）				14259	92.32
その他の銭種				1187	7.68
小計（調査枚数）				15446	100.00
未判読				77	
合計				15523	

表3 王朝・国別銭種及び枚数

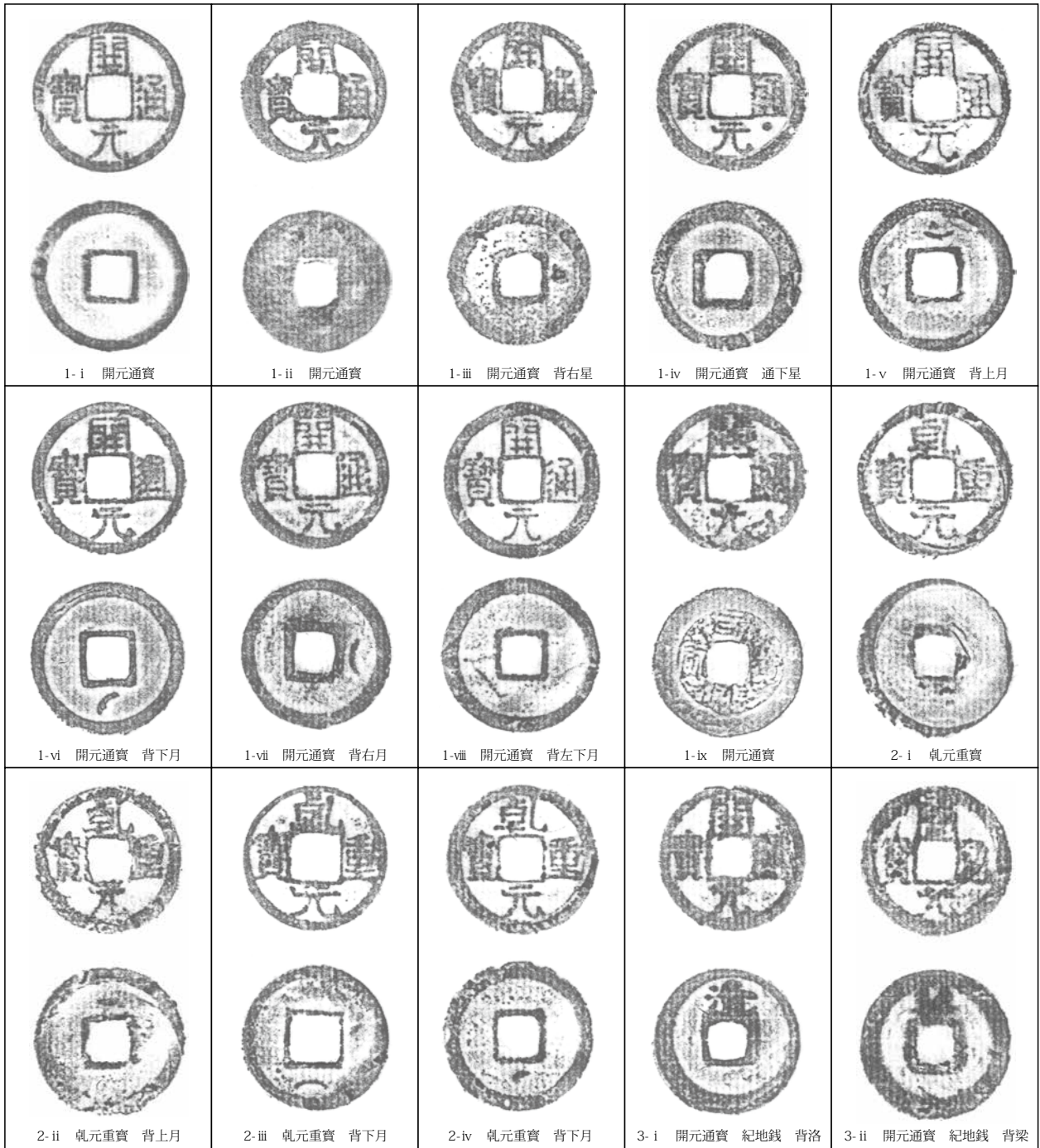
王朝/国名	検出枚数	銭種数	比率 (枚数：%)
唐	733	3	4.75
前蜀	1	1	0.01
南唐	20	2	0.13
後周	3	1	0.02
北宋	14262	30	92.33
南宋	123	13	0.80
金	13	2	0.08
明	290	2	1.88
日本	1	1	0.01
小計	15446	55	100.0
未判読	77		
合計	15523		



第231図 王朝別銭貨枚数の比率

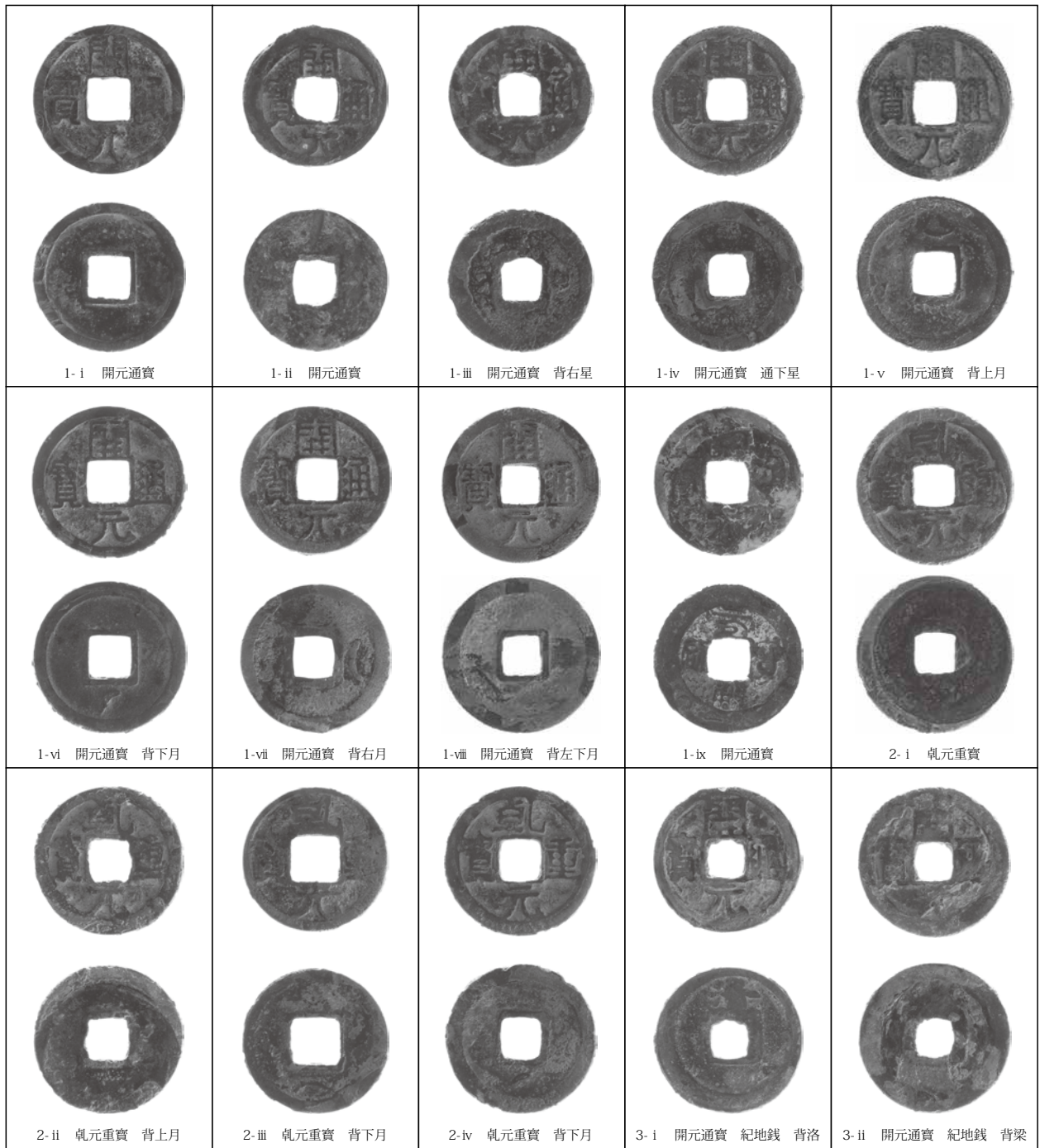


第232図 王朝別銭貨枚数の比率(明銭を除く)
















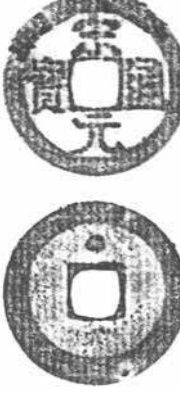

番号	錢貨名			国名	初鑄年	錢径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
1- i	開元通寶		無背	唐	621	24.45	24.63	20.46	20.85
1- ii	開元通寶		無背	唐	621	22.81	23.64	18.76	18.76
1- iii	開元通寶		背右星	唐	621	23.04	23.36	18.83	18.52
1- iv	開元通寶		通下星	唐	621	24.61	24.53	19.83	19.29
1- v	開元通寶		背上月	唐	621	25.31	25.35	20.69	20.58
1- vi	開元通寶		背下月	唐	621	24.76	24.81	20.53	20.70
1- vii	開元通寶		背右月	唐	621	24.33	24.39	19.65	20.39
1- viii	開元通寶		背左下月	唐	621	25.52	25.66	20.16	19.48
1- ix	開元通寶			唐	621	24.23	24.21	20.51	20.72
2- i	乾元重寶		無背	唐	758	25.86	25.45	20.88	20.49
2- ii	乾元重寶		背上月	唐	758	23.71	24.34	19.74	19.95
2- iii	乾元重寶		背下月	唐	758	23.64	23.19	20.45	20.45
2- iv	乾元重寶		背下月	唐	758	24.35	24.67	19.97	19.60
3- i	開元通寶 紀地錢		背洛	唐	845	23.87	23.93	19.70	20.02
3- ii	開元通寶 紀地錢		背梁	唐	845	24.47	24.61	19.15	18.59

第233図 代表錢拓影及び計測表(1)

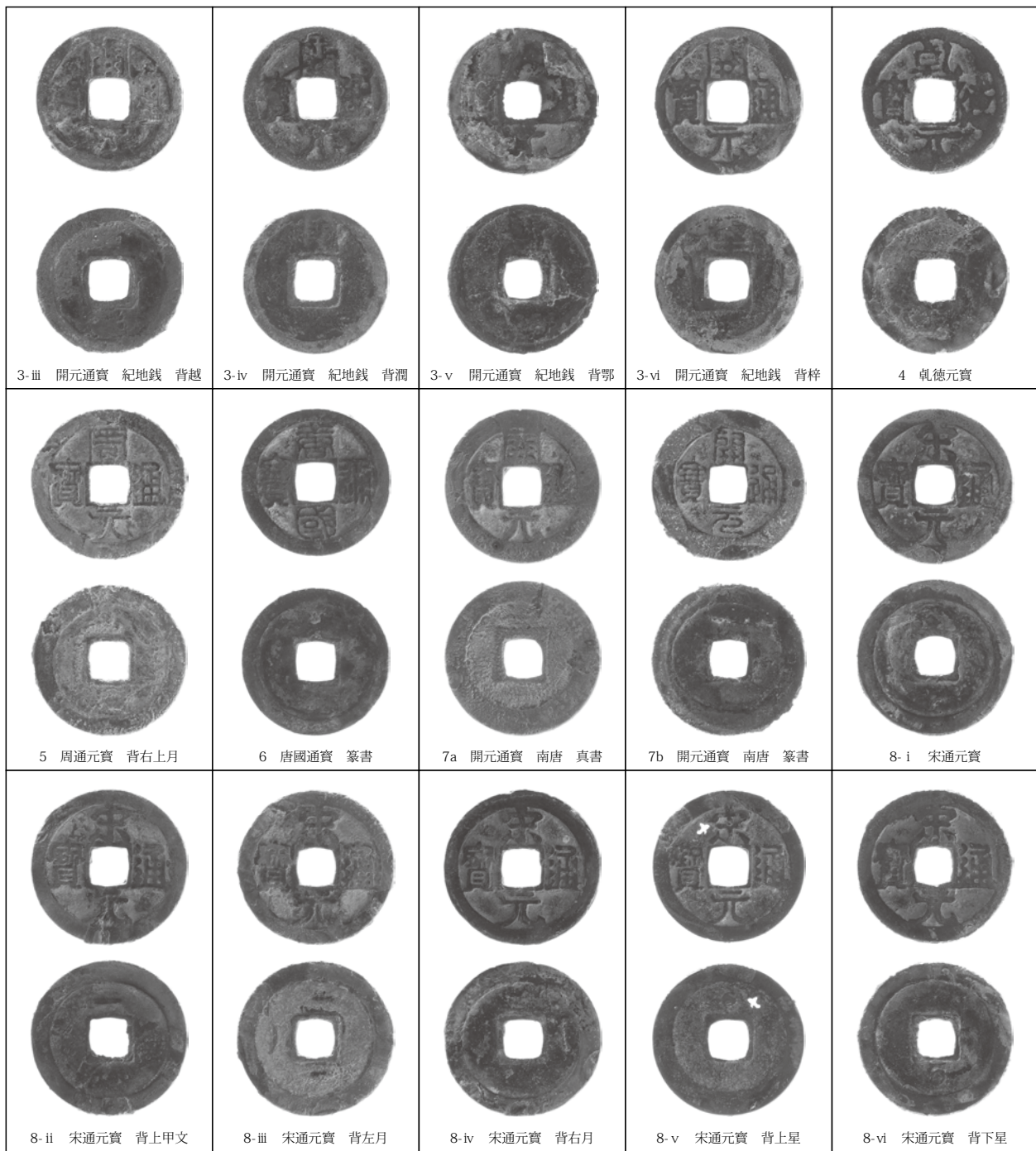


内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚詳細 (mm)				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
8.26	8.00	6.29	6.49	1.55 ~ 1.70	1.55	1.70	1.60	1.70	3.46	
8.27	8.33	6.45	6.75	0.85 ~ 1.05	1.05	1.05	1.00	0.85	2.51	小様薄肉、夷緩している
8.45	8.40	6.61	6.13	1.30 ~ 1.40	1.30	1.35	1.40	1.30	3.13	
7.93	8.17	6.30	6.21	1.55 ~ 1.75	1.55	1.55	1.60	1.75	4.38	
8.29	8.24	6.65	6.52	1.50 ~ 1.75	1.75	1.75	1.65	1.50	4.07	
8.46	8.47	6.46	6.51	1.20 ~ 1.35	1.35	1.30	1.20	1.25	3.64	
8.29	7.68	6.58	6.29	1.40 ~ 1.50	1.40	1.45	1.40	1.50	3.78	
7.96	8.76	5.83	5.85	1.65 ~ 1.85	1.65	1.75	1.85	1.75	4.62	
8.76	8.33	6.41	6.72	1.00 ~ 1.15	1.05	1.05	1.15	1.00	2.55	背に他銭文(元祐通寶)が鑄付
7.85	8.14	6.10	6.23	1.50 ~ 1.70	1.50	1.65	1.70	1.50	3.87	
8.80	8.80	6.46	6.31	1.15 ~ 1.40	1.25	1.15	1.40	1.15	2.66	
9.37	9.65	7.20	7.67	0.95 ~ 1.25	1.00	0.95	1.10	1.25	2.22	広穿
8.06	8.15	6.57	6.37	1.20 ~ 1.30	1.25	1.20	1.25	1.30	2.86	
8.38	7.73	5.66	5.68	1.10 ~ 1.30	1.20	1.30	1.25	1.10	3.32	
8.32	8.23	5.88	5.87	1.45 ~ 1.55	1.45	1.50	1.55	1.45	4.16	

写真12 代表銭写真及び計測表(1)

									
3-iii 開元通寶 紀地錢 背越	3-iv 開元通寶 紀地錢 背潤	3-v 開元通寶 紀地錢 背鄂	3-vi 開元通寶 紀地錢 背梓	4 軋德元寶					
									
5 周通元寶 背右上月	6 唐國通寶 篆書	7a 開元通寶 南唐 真書	7b 開元通寶 南唐 篆書	8-i 宋通元寶					
									
8-ii 宋通元寶 背上甲文	8-iii 宋通元寶 背左月	8-iv 宋通元寶 背右月	8-v 宋通元寶 背上星	8-vi 宋通元寶 背下星					
番号	錢貨名			国名	初鑄年	錢径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
3-iii	開元通寶 紀地錢		背越	唐	845	23.72	23.56	19.51	18.78
3-iv	開元通寶 紀地錢		背潤	唐	845	23.59	23.69	19.84	19.87
3-v	開元通寶 紀地錢		背鄂	唐	845	24.27	24.20	19.91	20.77
3-vi	開元通寶 紀地錢		背梓	唐	845	24.27	23.98	18.87	19.45
4	軋德元寶			前蜀	919	23.99	23.82	18.66	18.99
5	周通元寶		背右上月	後周	955	24.53	25.12	18.64	18.29
6	唐國通寶	篆書		南唐	959	24.03	24.13	18.44	18.57
7a	開元通寶	真書		南唐	960	25.25	25.33	18.53	17.72
7b	開元通寶	篆書		南唐	960	24.97	24.96	17.14	17.12
8-i	宋通元寶		無背	北宋	960	25.40	25.26	19.78	19.50
8-ii	宋通元寶		背上甲文	北宋	960	25.42	25.31	19.94	19.15
8-iii	宋通元寶		背左月	北宋	960	25.15	25.41	19.35	19.53
8-iv	宋通元寶		背右月	北宋	960	25.36	25.46	19.36	19.40
8-v	宋通元寶		背上星	北宋	960	24.72	24.76	18.38	18.79
8-vi	宋通元寶		背下星	北宋	960	25.10	25.09	19.46	19.39

第234図 代表錢拓影及び計測表(2)

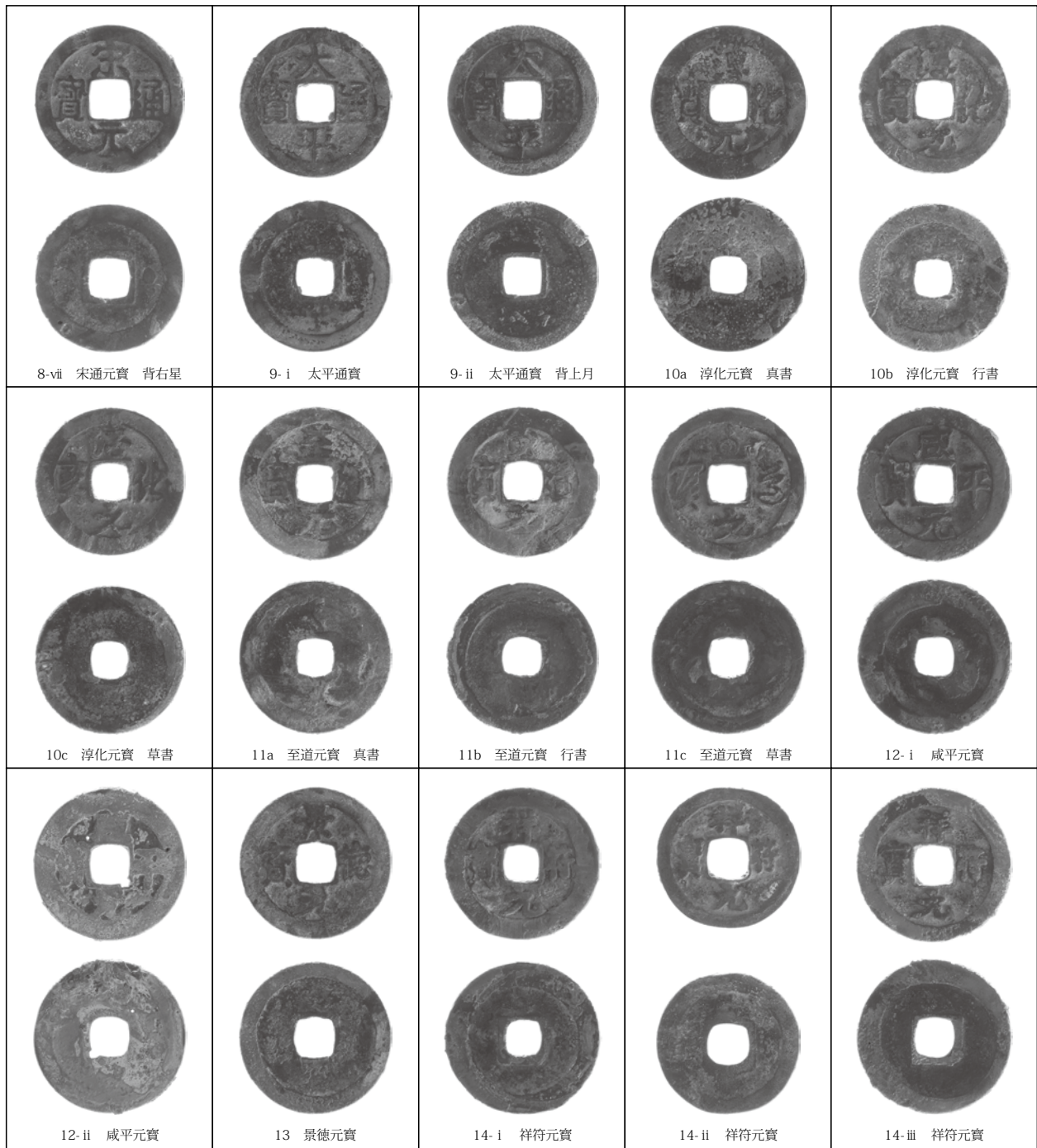


内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
8.12	8.11	6.21	6.22	1.15 ~ 1.30	1.30	1.15	1.20	1.30	3.33	
7.99	8.01	6.32	6.41	1.25 ~ 1.50	1.50	1.25	1.25	1.50	3.47	
7.47	7.50	5.88	5.85	1.30 ~ 1.40	1.40	1.40	1.35	1.30	3.80	
7.76	7.86	6.29	6.34	0.95 ~ 1.15	1.15	0.95	0.95	0.95	2.62	薄肉
8.24	7.60	6.60	6.33	1.00 ~ 1.35	1.00	1.35	1.35	1.00	3.09	
7.33	7.85	5.86	5.95	1.10 ~ 1.30	1.30	1.10	1.25	1.25	2.68	
7.38	7.59	5.99	6.12	1.10 ~ 1.15	1.15	1.15	1.10	1.15	2.87	
7.33	7.47	5.86	5.89	1.20 ~ 1.30	1.25	1.25	1.30	1.20	3.57	
7.08	6.80	5.55	5.71	1.00 ~ 1.20	1.15	1.20	1.05	1.00	3.04	
7.81	8.29	5.90	6.16	1.15 ~ 1.20	1.15	1.15	1.20	1.15	3.00	
8.13	7.63	6.03	5.57	1.10 ~ 1.25	1.25	1.10	1.25	1.20	3.31	
8.04	7.36	5.87	5.91	1.15 ~ 1.25	1.25	1.25	1.25	1.15	3.15	
7.60	7.52	5.79	6.00	1.20 ~ 1.30	1.20	1.30	1.30	1.15	3.50	
7.11	7.28	5.96	6.25	1.15 ~ 1.20	1.20	1.15	1.15	1.20	3.30	
7.72	7.18	5.71	5.75	1.05 ~ 1.25	1.15	1.25	1.15	1.05	3.29	

写真13 代表銭写真及び計測表(2)

8-vii 宋通元寶 背右星	9-i 太平通寶	9-ii 太平通寶 背上月	10a 淳化元寶 真書	10b 淳化元寶 行書					
10c 淳化元寶 草書	11a 至道元寶 真書	11b 至道元寶 行書	11c 至道元寶 篆書	12-i 咸平元寶					
12-ii 咸平元寶	13 景德元寶	14-i 祥符元寶	14-ii 祥符元寶	14-iii 祥符元寶					
番号	錢貨名			国名	初鑄年	錢径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
8-vii	宋通元寶		背右星	北宋	960	24.13	24.19	18.89	18.35
9-i	太平通寶		無背	北宋	976	24.73	24.59	18.58	18.49
9-ii	太平通寶		背上月	北宋	976	24.53	24.57	18.61	18.97
10a	淳化元寶	真書		北宋	990	25.10	25.20	17.70	17.66
10b	淳化元寶	行書		北宋	990	24.08	24.39	18.06	17.79
10c	淳化元寶	草書		北宋	990	24.25	24.28	17.79	17.72
11a	至道元寶	真書		北宋	995	25.06	24.77	18.49	17.96
11b	至道元寶	行書		北宋	995	24.65	24.58	16.98	17.41
11c	至道元寶	草書		北宋	995	25.06	24.88	19.66	19.49
12-i	咸平元寶			北宋	998	25.27	24.96	18.79	18.31
12-ii	咸平元寶			北宋	998	25.27	24.73	17.15	17.16
13	景德元寶			北宋	1004	24.71	24.74	17.55	18.14
14-i	祥符元寶			北宋	1008	24.94	25.21	17.67	17.56
14-ii	祥符元寶			北宋	1008	22.95	23.32	17.94	17.88
14-iii	祥符元寶			北宋	1008	25.34	25.29	18.79	18.97

第235図 代表錢拓影及び計測表(3)

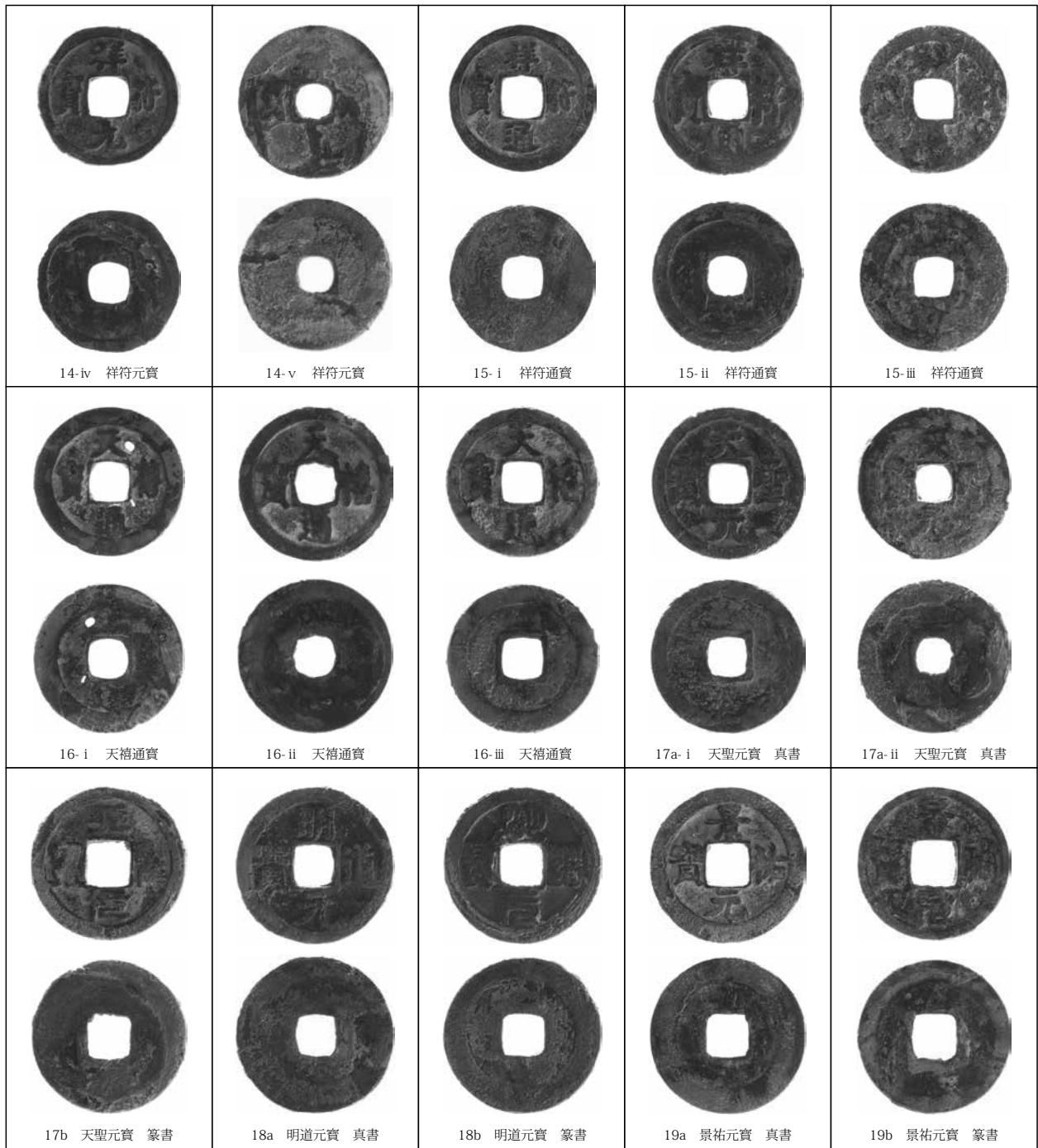


内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
7.58	7.75	6.05	6.19	1.15 ~ 1.30	1.30	1.30	1.15	1.30	3.48	
7.48	7.43	5.64	5.66	1.30 ~ 1.40	1.40	1.30	1.30	1.35	3.64	
7.30	7.62	5.64	5.86	1.00 ~ 1.30	1.20	1.30	1.20	1.00	2.94	
7.43	6.89	5.50	5.71	1.20 ~ 1.30	1.20	1.25	1.20	1.30	4.03	
7.16	7.19	5.54	5.74	1.20 ~ 1.30	1.30	1.20	1.20	1.25	3.45	
7.58	7.29	5.42	5.71	1.20 ~ 1.30	1.25	1.25	1.20	1.30	3.67	
7.35	6.96	5.43	5.46	1.15 ~ 1.30	1.30	1.15	1.20	1.15	3.57	昂元
7.62	7.57	5.74	5.97	1.05 ~ 1.35	1.10	1.05	1.20	1.35	3.53	
7.16	7.82	5.80	6.04	1.10 ~ 1.25	1.20	1.20	1.25	1.10	3.13	
7.39	7.98	5.73	5.76	1.35 ~ 1.40	1.35	1.40	1.35	1.35	3.58	
7.93	7.98	6.02	6.04	1.30 ~ 1.35	1.35	1.35	1.30	1.30	3.82	潤縁
7.47	7.68	5.84	6.20	1.10 ~ 1.20	1.10	1.15	1.20	1.10	2.96	
7.23	7.02	5.20	5.38	1.15 ~ 1.25	1.15	1.25	1.20	1.25	3.45	
7.48	7.55	6.15	6.09	0.95 ~ 1.10	1.10	1.00	0.95	1.00	2.62	薄肉、夷緩している
7.25	7.24	5.56	5.67	1.35 ~ 1.60	1.60	1.45	1.35	1.45	3.91	

写真14 代表銭写真及び計測表(3)

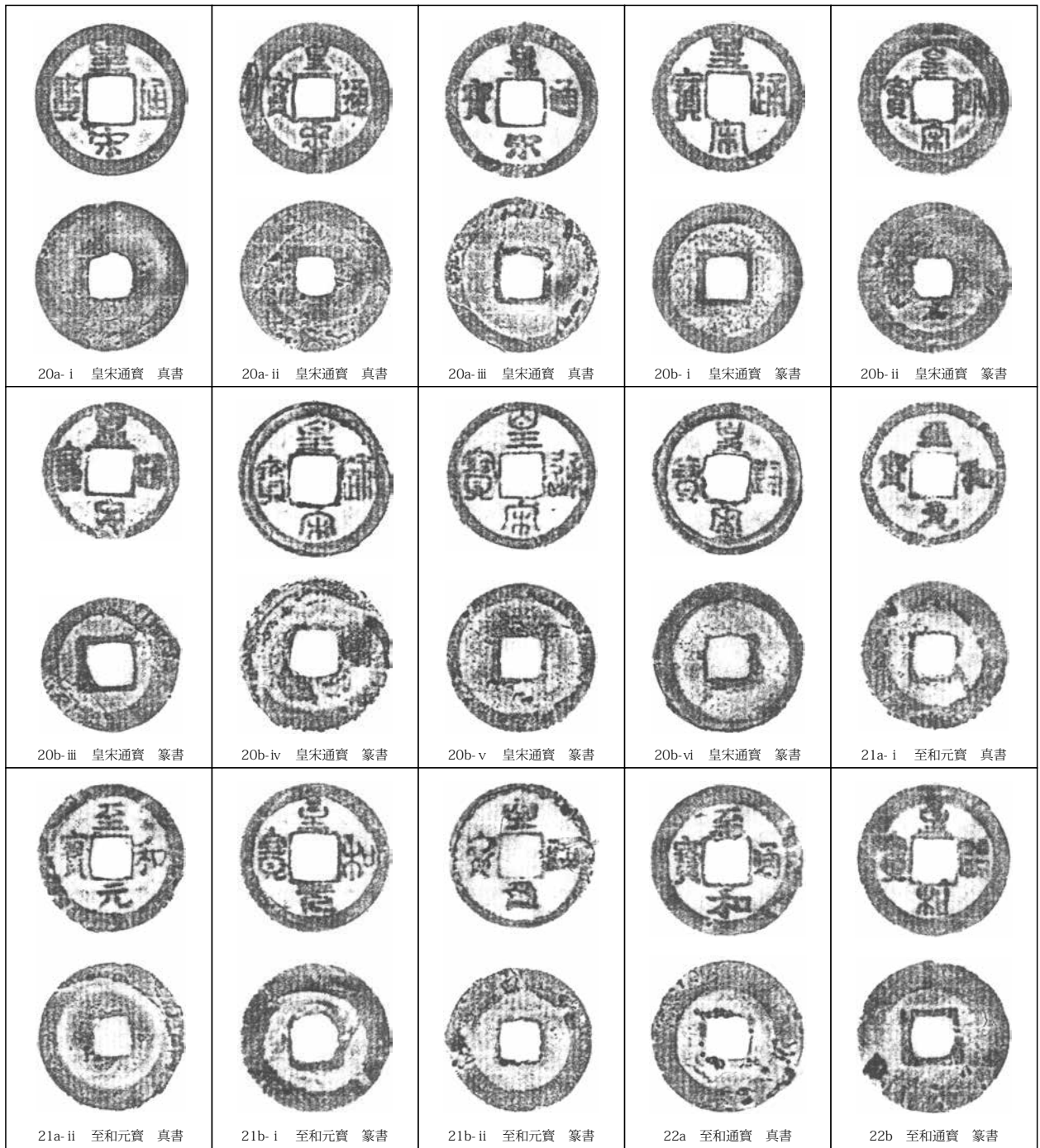
14-iv 祥符元寶	14-v 祥符元寶	15-i 祥符通寶	15-ii 祥符通寶	15-iii 祥符通寶					
16-i 天禧通寶	16-ii 天禧通寶	16-iii 天禧通寶	17a-i 天聖元寶 真書	17a-ii 天聖元寶 真書					
17b 天聖元寶 篆書	18a 明道元寶 真書	18b 明道元寶 篆書	19a 景祐元寶 真書	19b 景祐元寶 篆書					
番号	錢貨名			国名	初鑄年	錢径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
14-iv	祥符元寶			北宋	1008	23.12	23.06	19.12	18.88
14-v	祥符元寶			北宋	1008	25.03	24.99	18.01	17.85
15-i	祥符通寶			北宋	1008	23.97	23.73	19.30	19.12
15-ii	祥符通寶			北宋	1008	24.62	24.50	19.06	18.76
15-iii	祥符通寶			北宋	1008	24.22	24.09	18.53	18.43
16-i	天禧通寶			北宋	1017	24.43	24.48	17.80	17.38
16-ii	天禧通寶			北宋	1017	25.27	25.14	19.69	20.11
16-iii	天禧通寶			北宋	1017	24.49	24.91	19.65	19.74
17a-i	天聖元寶	真書		北宋	1023	24.98	24.92	20.05	19.88
17a-ii	天聖元寶	真書		北宋	1023	24.95	24.94	18.38	18.01
17b	天聖元寶	篆書		北宋	1023	25.16	25.08	19.73	19.71
18a	明道元寶	真書		北宋	1032	25.67	25.70	19.76	20.41
18b	明道元寶	篆書		北宋	1032	25.70	25.61	19.88	20.16
19a	景祐元寶	真書		北宋	1034	25.47	25.28	19.08	19.06
19b	景祐元寶	篆書		北宋	1034	25.12	25.01	20.99	20.85

第236図 代表錢拓影及び計測表(4)



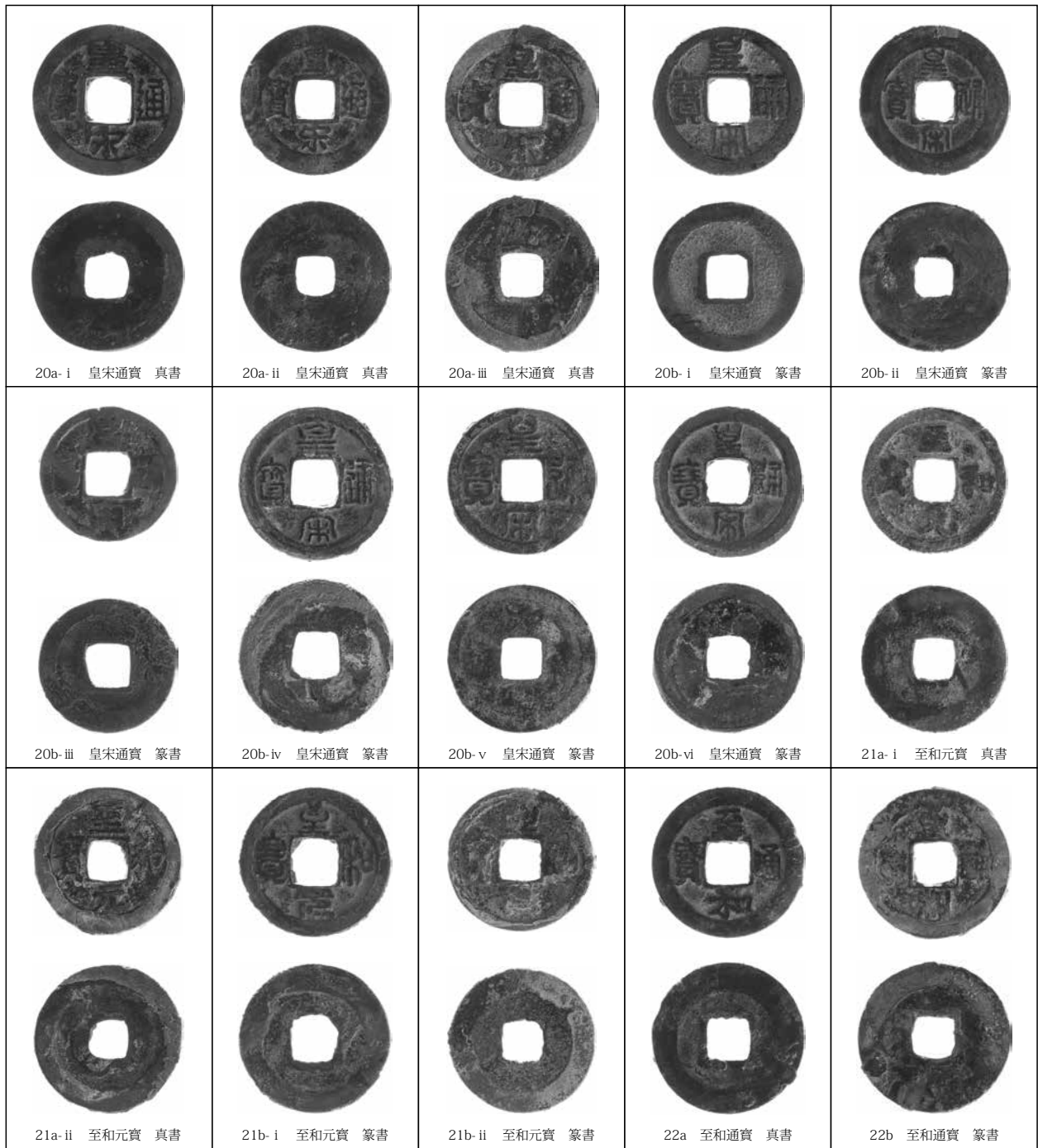
内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
7.60	7.48	6.19	6.30	1.10 ~ 1.25	1.25	1.10	1.15	1.25	2.91	若干の磨輪を経た可能性有
7.45	7.54	5.32	5.48	1.15 ~ 1.30	1.15	1.30	1.25	1.30	3.81	
7.55	7.82	6.25	6.32	1.00 ~ 1.10	1.10	1.00	1.10	1.10	2.57	薄肉、夷縷している
7.85	7.60	5.99	5.77	1.05 ~ 1.20	1.15	1.05	1.20	1.20	3.39	
7.52	7.83	6.11	6.19	1.20 ~ 1.25	1.20	1.20	1.25	1.20	3.05	若干赤銅色系を呈する
6.88	7.23	6.13	6.17	1.30 ~ 1.40	1.30	1.35	1.30	1.40	3.50	
8.10	8.06	6.16	6.02	0.95 ~ 1.00	0.95	1.00	1.00	1.00	3.18	薄肉、夷縷している
7.74	7.53	6.32	6.32	1.30 ~ 1.35	1.30	1.30	1.30	1.35	3.39	
7.85	8.22	5.80	5.90	1.30 ~ 1.35	1.30	1.35	1.35	1.30	3.75	
7.28	7.22	5.09	5.45	1.15 ~ 1.40	1.40	1.15	1.30	1.30	3.74	潤縁小字、狭穿
8.40	8.49	6.86	6.36	1.40 ~ 1.45	1.40	1.45	1.45	1.45	3.86	
8.06	7.82	6.05	5.99	1.05 ~ 1.20	1.10	1.05	1.10	1.20	3.35	夷縷している
8.21	7.99	6.35	6.45	1.15 ~ 1.25	1.15	1.20	1.25	1.20	3.70	
7.93	7.74	6.50	6.52	1.05 ~ 1.15	1.15	1.05	1.15	1.15	3.38	
9.10	8.80	6.93	6.77	1.05 ~ 1.20	1.05	1.20	1.20	1.10	3.17	

写真15 代表銭写真及び計測表(4)


















番号	銭貨名			国名	初鑄年	銭径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
20a- i	皇宋通寶	真書		北宋	1038	24.79	24.71	19.29	18.49
20a- ii	皇宋通寶	真書		北宋	1038	24.62	24.43	16.89	17.23
20a- iii	皇宋通寶	真書		北宋	1038	25.60	24.97	19.30	20.06
20b- i	皇宋通寶	篆書		北宋	1038	24.59	24.52	19.32	18.94
20b- ii	皇宋通寶	篆書		北宋	1038	24.63	24.56	16.88	17.36
20b- iii	皇宋通寶	篆書		北宋	1038	22.19	22.46	18.16	18.16
20b- iv	皇宋通寶	篆書		北宋	1038	24.91	25.07	19.63	19.63
20b- v	皇宋通寶	篆書		北宋	1038	24.12	24.21	20.10	19.81
20b- vi	皇宋通寶	篆書		北宋	1038	24.45	24.43	18.68	19.22
21a- i	至和元寶	真書		北宋	1054	24.10	23.66	19.36	19.07
21a- ii	至和元寶	真書		北宋	1054	24.30	24.25	18.88	17.95
21b- i	至和元寶	篆書		北宋	1054	24.47	24.63	18.47	18.44
21b- ii	至和元寶	篆書		北宋	1054	23.65	23.95	19.88	19.56
22a	至和通寶	真書		北宋	1054	24.60	24.65	17.69	18.10
22b	至和通寶	篆書		北宋	1054	24.80	24.80	17.83	17.75

第237図 代表銭拓影及び計測表(5)

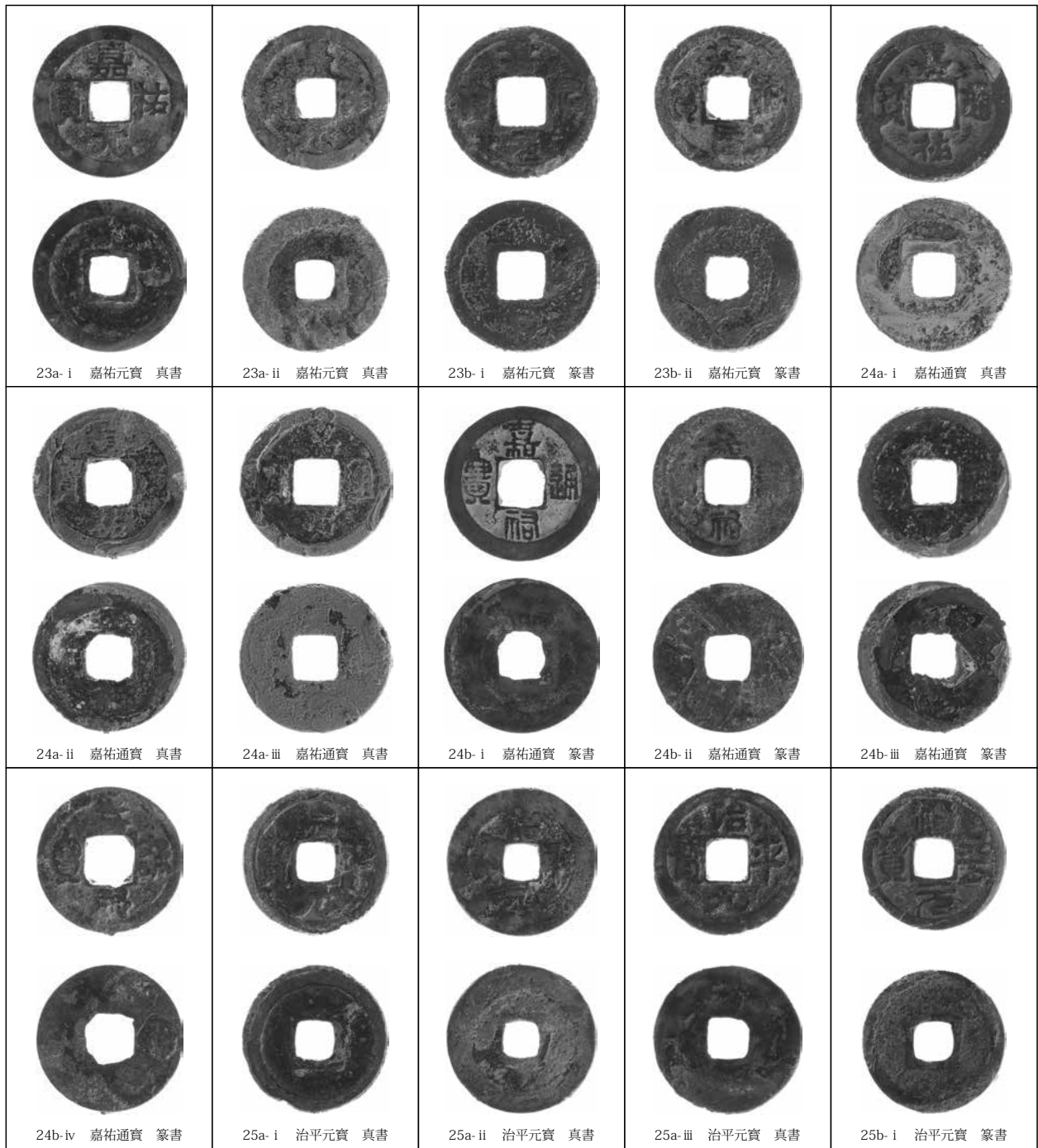


内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
9.25	8.75	7.18	6.86	1.20 ~ 1.40	1.35	1.20	1.25	1.40	4.10	夷緩している
8.25	7.76	6.07	6.11	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	3.34	潤縁小字、夷緩している
8.34	8.64	6.78	6.76	0.85 ~ 1.15	1.00	1.15	1.10	0.85	2.47	薄肉
7.90	7.69	6.63	6.45	1.25 ~ 1.35	1.35	1.30	1.25	1.35	3.41	
7.82	7.94	5.86	5.91	1.05 ~ 1.15	1.15	1.15	1.05	1.05	3.39	潤縁小字、夷緩している
8.35	7.97	6.75	6.96	1.10 ~ 1.15	1.10	1.10	1.10	1.15	2.47	小様
9.40	8.91	7.06	7.18	0.85 ~ 1.15	1.15	1.10	0.85	1.15	2.84	薄肉
7.84	8.14	6.48	6.38	1.35 ~ 1.45	1.40	1.35	1.40	1.45	3.74	
8.76	8.47	6.69	6.73	1.05 ~ 1.10	1.10	1.05	1.10	1.05	2.53	
8.03	7.76	6.47	6.47	1.00 ~ 1.25	1.00	1.00	1.20	1.25	2.82	
7.77	7.88	5.79	6.03	1.30 ~ 1.50	1.50	1.35	1.30	1.40	3.98	
9.15	8.85	7.35	7.10	1.05 ~ 1.20	1.20	1.05	1.15	1.20	3.16	広穿
7.86	8.10	6.18	6.30	1.50 ~ 1.80	1.65	1.75	1.50	1.80	3.61	
8.64	8.58	6.58	6.79	1.10 ~ 1.30	1.10	1.20	1.30	1.15	3.66	
8.65	8.25	6.30	6.36	1.10 ~ 1.30	1.10	1.30	1.10	1.10	3.33	

写真16 代表銭写真及び計測表(5)
















									
23a- i 嘉祐元寶 真書	23a- ii 嘉祐元寶 真書	23b- i 嘉祐元寶 篆書	23b- ii 嘉祐元寶 篆書	24a- i 嘉祐通寶 真書					
									
24a- ii 嘉祐通寶 真書	24a- iii 嘉祐通寶 真書	24b- i 嘉祐通寶 篆書	24b- ii 嘉祐通寶 篆書	24b- iii 嘉祐通寶 篆書					
									
24b- iv 嘉祐通寶 篆書	25a- i 治平元寶 真書	25a- ii 治平元寶 真書	25a- iii 治平元寶 真書	25b- i 治平元寶 篆書					
番号	錢貨名			国名	初鑄年	錢径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
23a- i	嘉祐元寶	真書		北宋	1056	24.95	24.99	19.05	18.88
23a- ii	嘉祐元寶	真書		北宋	1056	23.67	23.84	18.02	18.01
23b- i	嘉祐元寶	篆書		北宋	1056	24.85	25.14	20.76	20.47
23b- ii	嘉祐元寶	篆書		北宋	1056	23.74	23.85	19.01	18.54
24a- i	嘉祐通寶	真書		北宋	1056	25.54	25.26	19.02	18.61
24a- ii	嘉祐通寶	真書		北宋	1056	24.59	24.89	18.79	18.50
24a- iii	嘉祐通寶	真書		北宋	1056	24.31	24.77	18.76	18.85
24b- i	嘉祐通寶	篆書		北宋	1056	25.37	25.29	19.46	18.89
24b- ii	嘉祐通寶	篆書		北宋	1056	24.44	24.49	19.35	19.39
24b- iii	嘉祐通寶	篆書		北宋	1056	24.70	24.82	19.29	19.60
24b- iv	嘉祐通寶	篆書		北宋	1056	23.93	23.68	19.09	19.08
25a- i	治平元寶	真書		北宋	1064	24.23	23.75	18.57	18.94
25a- ii	治平元寶	真書		北宋	1064	24.40	24.22	16.11	16.10
25a- iii	治平元寶	真書		北宋	1064	24.26	24.16	16.77	18.63
25b- i	治平元寶	篆書		北宋	1064	23.55	23.36	19.50	19.06

第238図 代表錢拓影及び計測表(6)

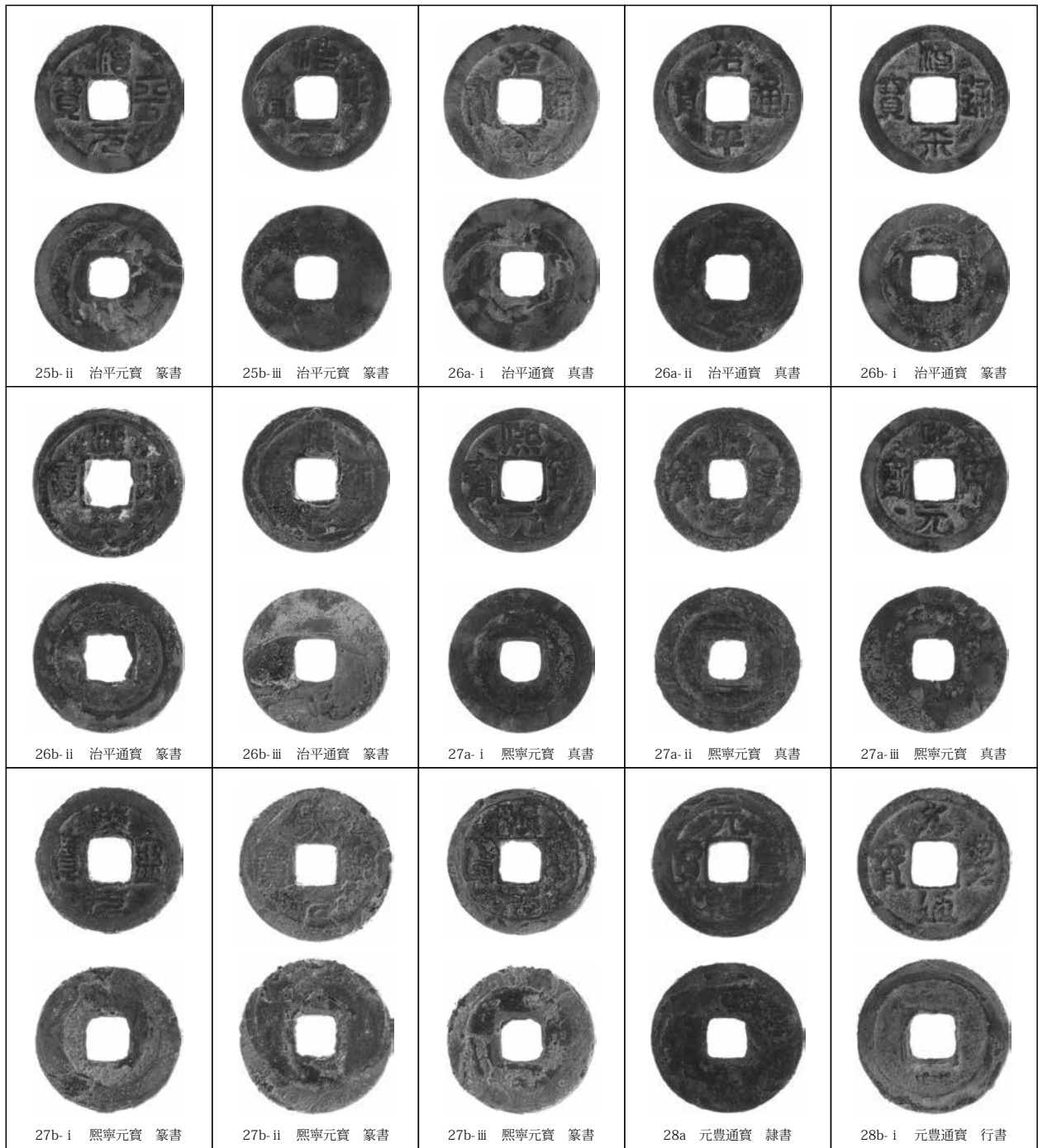


内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
7.61	7.73	5.89	6.15	1.05 ~ 1.15	1.15	1.15	1.05	1.05	3.20	
7.92	7.56	5.96	5.97	1.35 ~ 1.50	1.45	1.35	1.40	1.50	3.71	小様
9.81	9.39	7.50	7.57	1.20 ~ 1.50	1.20	1.30	1.30	1.50	3.05	広穿
8.59	8.25	6.59	6.60	1.40 ~ 1.50	1.40	1.50	1.45	1.40	3.27	小様
8.57	7.94	6.82	6.75	0.95 ~ 1.30	1.15	0.95	1.20	1.30	3.23	
8.45	8.73	6.94	7.20	1.50 ~ 1.70	1.55	1.50	1.55	1.70	3.72	
8.75	8.84	6.71	7.02	1.30 ~ 1.70	1.60	1.45	1.30	1.70	3.24	縮字、夷縵している
8.61	8.71	7.56	7.40	0.90 ~ 1.00	0.90	0.90	0.95	1.00	3.14	薄肉、夷縵している
8.83	8.70	6.87	7.15	1.10 ~ 1.40	1.25	1.40	1.15	1.10	3.30	夷縵している
8.40	8.84	6.59	7.01	1.25 ~ 1.70	1.35	1.70	1.30	1.25	3.34	
9.37	9.48	7.12	7.78	0.95 ~ 1.40	1.00	0.95	1.25	1.40	2.82	広穿、夷縵している
8.16	7.29	6.02	6.03	1.40 ~ 1.50	1.45	1.40	1.50	1.50	3.62	
6.86	7.34	5.65	5.51	1.35 ~ 1.50	1.50	1.40	1.35	1.45	4.41	潤縁狭穿
7.90	8.28	6.43	6.48	1.10 ~ 1.25	1.10	1.20	1.10	1.25	3.33	夷縵している
7.87	7.86	5.97	6.06	1.35 ~ 1.65	1.60	1.65	1.40	1.35	3.48	小様

写真17 代表銭写真及び計測表(6)

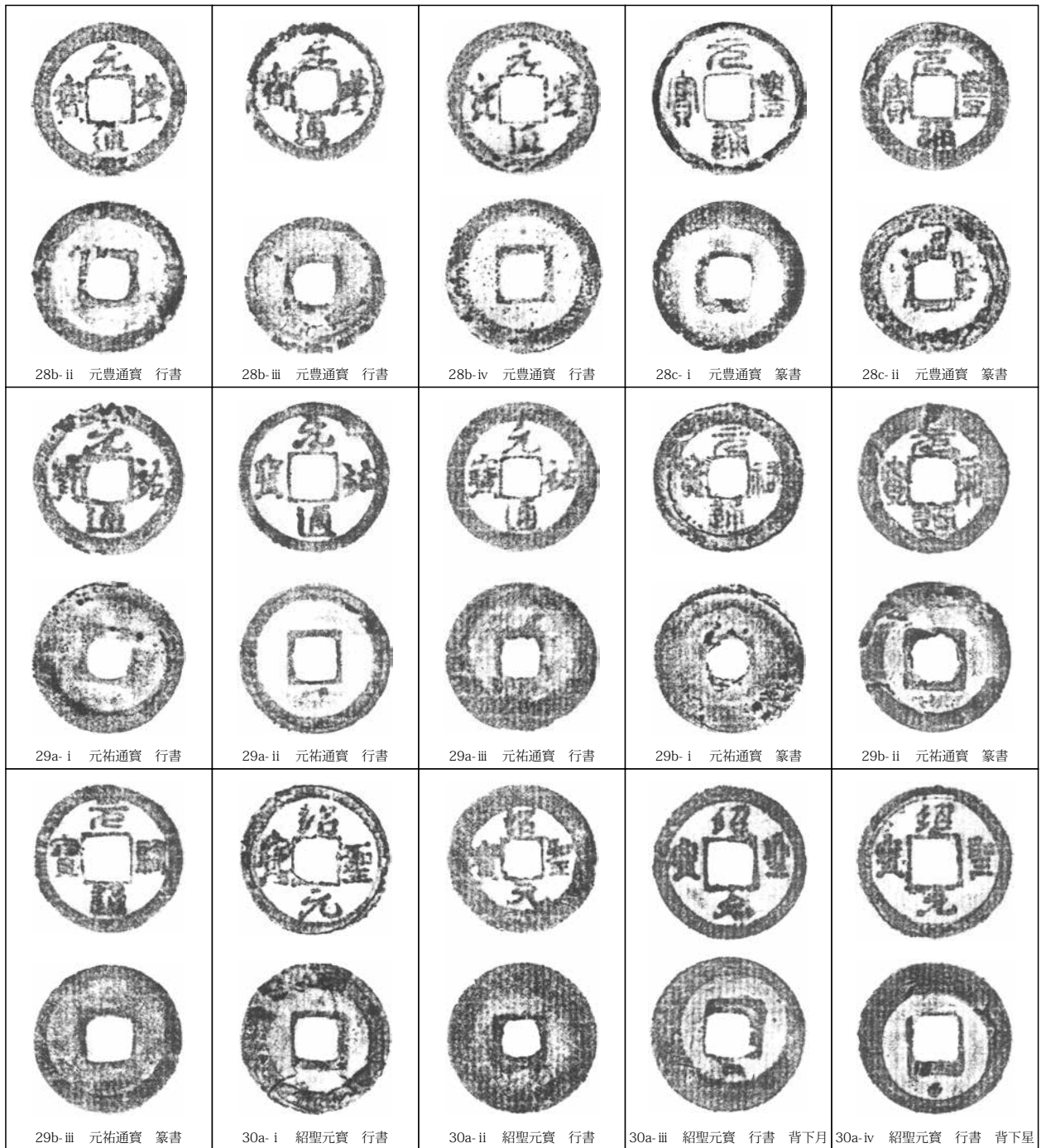
									
25b-ii 治平元寶 篆書	25b-iii 治平元寶 篆書	26a-i 治平通寶 真書	26a-ii 治平通寶 真書	26b-i 治平通寶 篆書					
									
26b-ii 治平通寶 篆書	26b-iii 治平通寶 篆書	27a-i 熙寧元寶 真書	27a-ii 熙寧元寶 真書	27a-iii 熙寧元寶 真書					
									
27b-i 熙寧元寶 篆書	27b-ii 熙寧元寶 篆書	27b-iii 熙寧元寶 篆書	28a 元豐通寶 隸書	28b-i 元豐通寶 行書					
番号	錢貨名			国名	初鑄年	錢径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
25b-ii	治平元寶	篆書		北宋	1064	24.36	24.23	18.31	18.85
25b-iii	治平元寶	篆書		北宋	1064	24.05	24.23	19.28	19.17
26a-i	治平通寶	真書		北宋	1064	25.22	25.12	18.57	19.08
26a-ii	治平通寶	真書		北宋	1064	24.26	24.24	18.79	18.37
26b-i	治平通寶	篆書		北宋	1064	24.32	24.38	18.56	18.72
26b-ii	治平通寶	篆書		北宋	1064	24.70	24.58	18.87	18.74
26b-iii	治平通寶	篆書		北宋	1064	23.72	23.61	18.31	18.38
27a-i	熙寧元寶	真書		北宋	1068	23.84	23.70	19.29	18.60
27a-ii	熙寧元寶	真書		北宋	1068	23.84	23.85	18.43	18.23
27a-iii	熙寧元寶	真書		北宋	1068	23.90	23.98	18.06	18.64
27b-i	熙寧元寶	篆書		北宋	1068	24.05	23.92	18.87	19.07
27b-ii	熙寧元寶	篆書		北宋	1068	25.50	25.07	20.63	19.91
27b-iii	熙寧元寶	篆書		北宋	1068	24.03	24.16	19.17	19.02
28a	元豐通寶	隸書		北宋	1078	24.97	25.17	18.23	18.13
28b-i	元豐通寶	行書		北宋	1078	25.31	25.02	20.71	20.41

第239図 代表錢拓影及び計測表(7)



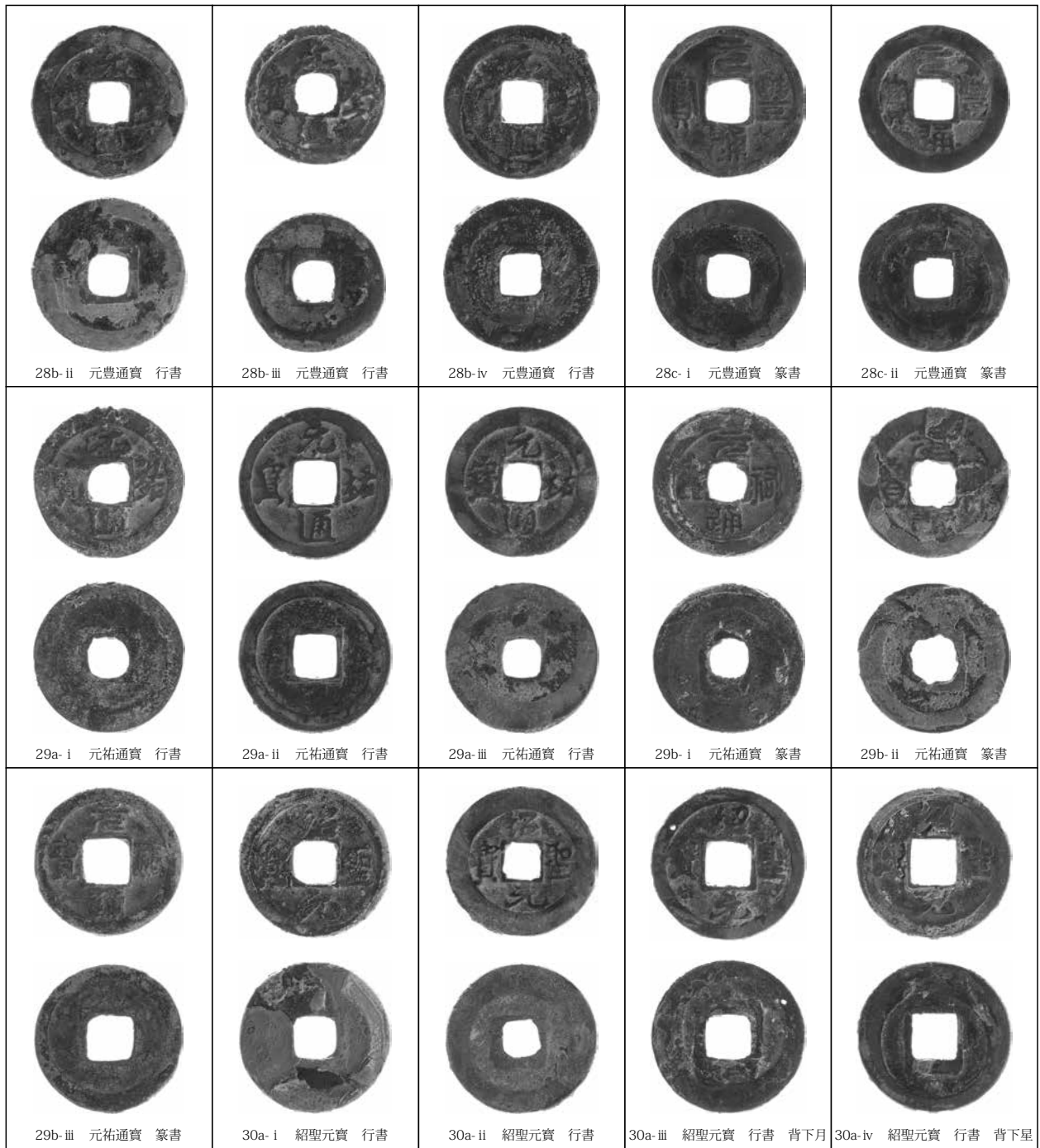
内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
8.03	7.96	6.11	6.31	1.00 ~ 1.40	1.20	1.40	1.25	1.00	3.26	
8.22	8.05	6.48	6.54	1.15 ~ 1.20	1.20	1.20	1.20	1.15	3.21	夷緩している
8.29	8.16	6.76	6.69	1.20 ~ 1.40	1.20	1.40	1.30	1.35	3.82	
8.39	8.00	6.89	6.66	1.10 ~ 1.25	1.25	1.10	1.20	1.20	3.43	
8.25	8.44	7.03	7.10	1.10 ~ 1.15	1.10	1.10	1.15	1.10	3.12	広穿
9.04	8.94	6.99	6.63	1.25 ~ 1.35	1.35	1.25	1.30	1.35	3.93	
8.03	7.93	6.28	6.30	1.25 ~ 1.50	1.25	1.35	1.50	1.45	3.57	
7.66	7.75	6.12	6.37	1.20 ~ 1.35	1.25	1.20	1.30	1.35	3.52	潤字楷元
7.49	7.34	5.59	5.54	1.25 ~ 1.35	1.25	1.25	1.35	1.25	3.62	狭穿
8.07	7.94	6.35	6.33	1.10 ~ 1.35	1.25	1.35	1.15	1.10	3.38	
8.78	8.59	6.75	6.68	1.15 ~ 1.20	1.20	1.20	1.15	1.20	2.91	
8.36	7.96	6.11	6.20	1.20 ~ 1.45	1.40	1.45	1.30	1.20	3.96	
7.88	7.83	6.13	5.97	1.40 ~ 1.50	1.45	1.40	1.45	1.50	3.69	鈍熙寧
8.27	7.74	6.09	6.13	1.00 ~ 1.20	1.20	1.15	1.00	1.00	3.40	薄肉
8.15	8.65	6.79	7.12	1.10 ~ 1.35	1.35	1.10	1.25	1.20	3.08	細縁

写真18 代表銭写真及び計測表(7)


















番号	錢貨名			国名	初鑄年	錢径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
28b- ii	元豊通寶	行書		北宋	1078	25.21	25.37	18.07	18.61
28b- iii	元豊通寶	行書		北宋	1078	22.56	22.81	17.82	17.49
28b- iv	元豊通寶	行書		北宋	1078	25.27	25.28	18.48	18.36
28c- i	元豊通寶	篆書		北宋	1078	24.94	24.99	20.44	20.26
28c- ii	元豊通寶	篆書		北宋	1078	24.15	24.50	18.08	17.20
29a- i	元祐通寶	行書		北宋	1086	24.61	24.39	17.96	18.10
29a- ii	元祐通寶	行書		北宋	1086	24.96	24.87	19.73	20.04
29a- iii	元祐通寶	行書		北宋	1086	24.55	24.80	17.47	17.80
29b- i	元祐通寶	篆書		北宋	1086	24.44	24.51	16.48	16.92
29b- ii	元祐通寶	篆書		北宋	1086	24.67	24.84	17.20	17.45
29b- iii	元祐通寶	篆書		北宋	1086	24.46	24.11	18.45	19.24
30a- i	紹聖元寶	行書	無背	北宋	1094	24.60	24.65	20.09	18.88
30a- ii	紹聖元寶	行書	無背	北宋	1094	24.53	24.76	16.79	16.77
30a- iii	紹聖元寶	行書	背下月	北宋	1094	24.98	25.17	19.68	19.21
30a- iv	紹聖元寶	行書	背下星	北宋	1094	24.88	25.08	19.81	19.85

第240図 代表錢拓影及び計測表(8)



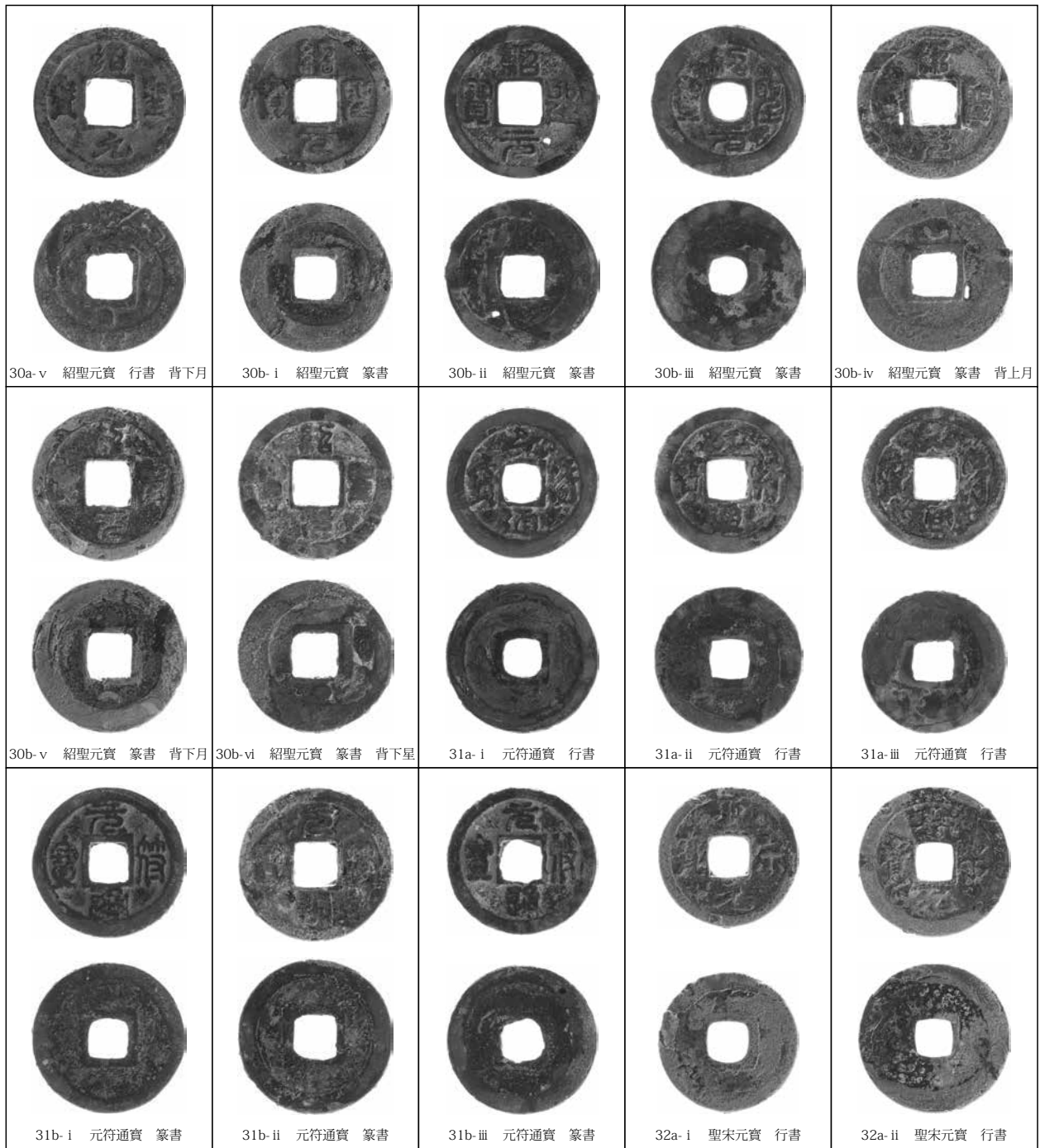
内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
8.12	8.32	6.27	6.30	1.20 ~ 1.35	1.35	1.25	1.35	1.20	3.23	
7.70	8.39	6.33	6.49	1.10 ~ 1.30	1.30	1.10	1.20	1.20	2.85	小様
8.18	8.02	6.32	6.38	1.15 ~ 1.25	1.20	1.15	1.15	1.25	3.44	
8.62	8.40	6.67	6.81	1.15 ~ 1.25	1.20	1.15	1.15	1.25	3.01	細縁
7.84	8.16	6.07	6.24	0.95 ~ 1.05	1.00	1.00	0.95	1.05	2.70	薄肉
7.76	8.56	6.10	6.35	1.00 ~ 1.05	1.00	1.00	1.00	1.05	2.81	薄肉
8.32	8.51	6.37	6.76	1.20 ~ 1.30	1.25	1.25	1.30	1.20	3.66	
7.14	7.41	5.88	5.89	1.05 ~ 1.15	1.15	1.15	1.05	1.15	3.22	狭穿
7.17	7.31	5.91	5.99	1.00 ~ 1.10	1.10	1.00	1.00	1.00	3.11	狭穿、夷縵している
8.27	8.46	6.64	6.93	1.25 ~ 1.35	1.25	1.30	1.35	1.25	3.76	
8.18	8.66	6.96	7.11	1.15 ~ 1.25	1.20	1.25	1.15	1.15	3.30	
8.38	8.11	6.50	6.52	1.30 ~ 1.45	1.35	1.45	1.35	1.30	3.30	
6.80	7.21	5.47	5.38	1.15 ~ 1.25	1.20	1.20	1.25	1.15	3.47	潤縁小字、狭穿
8.50	8.79	6.91	7.04	1.15 ~ 1.25	1.15	1.15	1.25	1.20	3.50	
9.15	8.95	7.05	7.02	0.95 ~ 1.00	1.00	0.95	1.00	1.00	2.66	薄肉広穿

写真19 代表銭写真及び計測表(8)

				
30a-v 紹聖元寶 行書 背下星	30b-i 紹聖元寶 篆書	30b-ii 紹聖元寶 篆書	30b-iii 紹聖元寶 篆書	30b-iv 紹聖元寶 篆書 背上月
				
30b-v 紹聖元寶 篆書 背下月	30b-vi 紹聖元寶 篆書 背下星	31a-i 元符通寶 行書	31a-ii 元符通寶 行書	31a-iii 元符通寶 行書
				
31b-i 元符通寶 篆書	31b-ii 元符通寶 篆書	31b-iii 元符通寶 篆書	32a-i 聖宋元寶 行書	32a-ii 聖宋元寶 行書

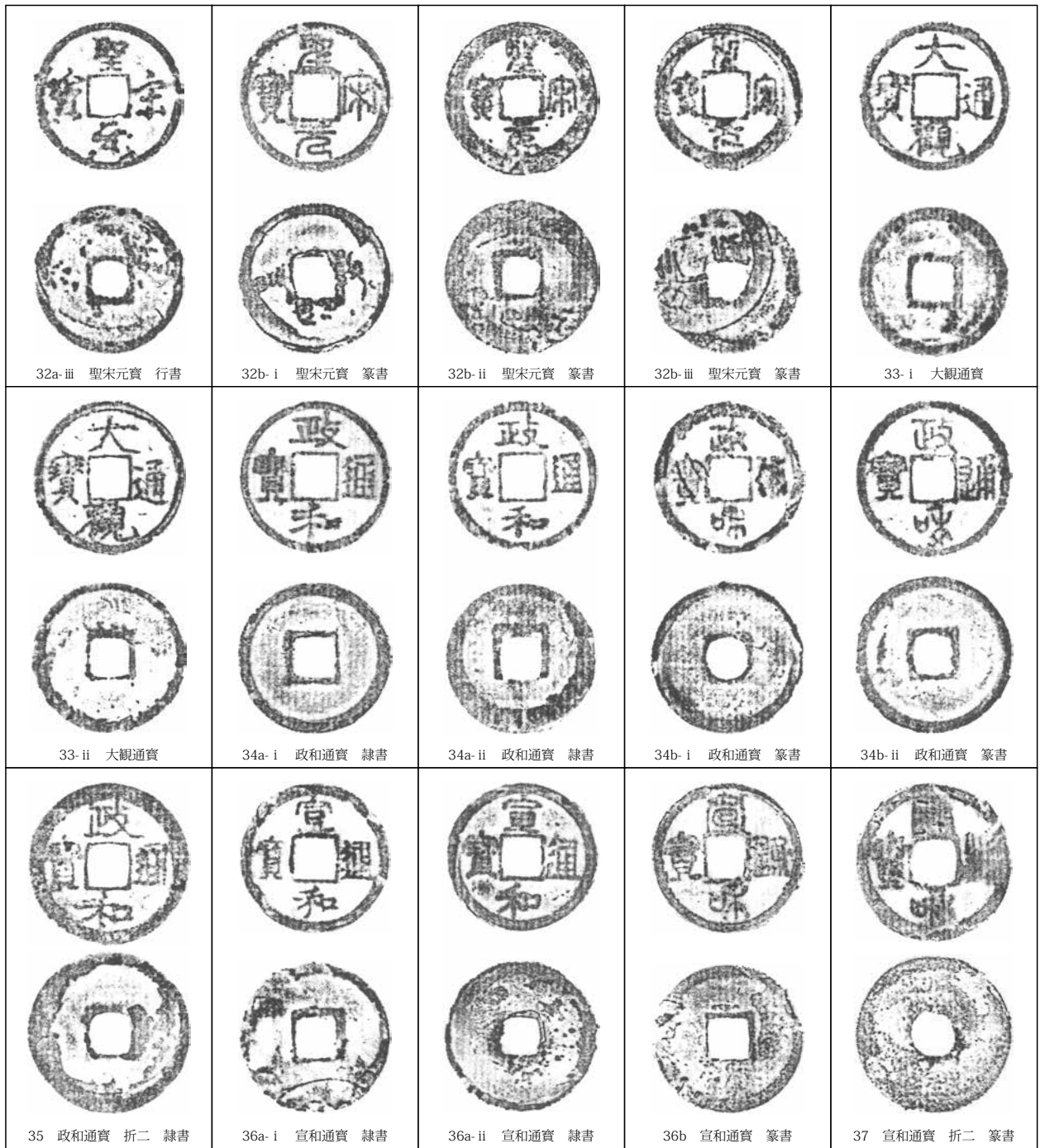
番号	錢貨名			国名	初鑄年	錢径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
30a-v	紹聖元寶	行書	背下星	北宋	1094	24.75	24.74	19.90	19.45
30b-i	紹聖元寶	篆書		北宋	1094	24.22	24.72	19.93	19.36
30b-ii	紹聖元寶	篆書		北宋	1094	25.08	24.99	19.84	19.59
30b-iii	紹聖元寶	篆書		北宋	1094	24.93	24.77	18.34	17.76
30b-iv	紹聖元寶	篆書	背上月	北宋	1094	25.21	25.20	19.70	19.73
30b-v	紹聖元寶	篆書	背下月	北宋	1094	25.15	25.05	19.34	19.70
30b-vi	紹聖元寶	篆書	背下星	北宋	1094	25.12	25.13	19.29	19.64
31a-i	元符通寶	行書		北宋	1098	24.81	24.77	17.57	17.81
31a-ii	元符通寶	行書		北宋	1098	23.99	24.09	18.26	18.36
31a-iii	元符通寶	行書		北宋	1098	23.44	23.45	18.75	18.75
31b-i	元符通寶	篆書		北宋	1098	24.68	24.79	19.15	19.37
31b-ii	元符通寶	篆書		北宋	1098	25.13	25.02	19.91	20.03
31b-iii	元符通寶	篆書		北宋	1098	24.18	24.42	19.23	19.28
32a-i	聖宋元寶	行書		北宋	1101	22.89	22.73	18.43	18.45
32a-ii	聖宋元寶	行書		北宋	1101	24.61	24.60	19.04	18.29

第241図 代表錢拓影及び計測表(9)



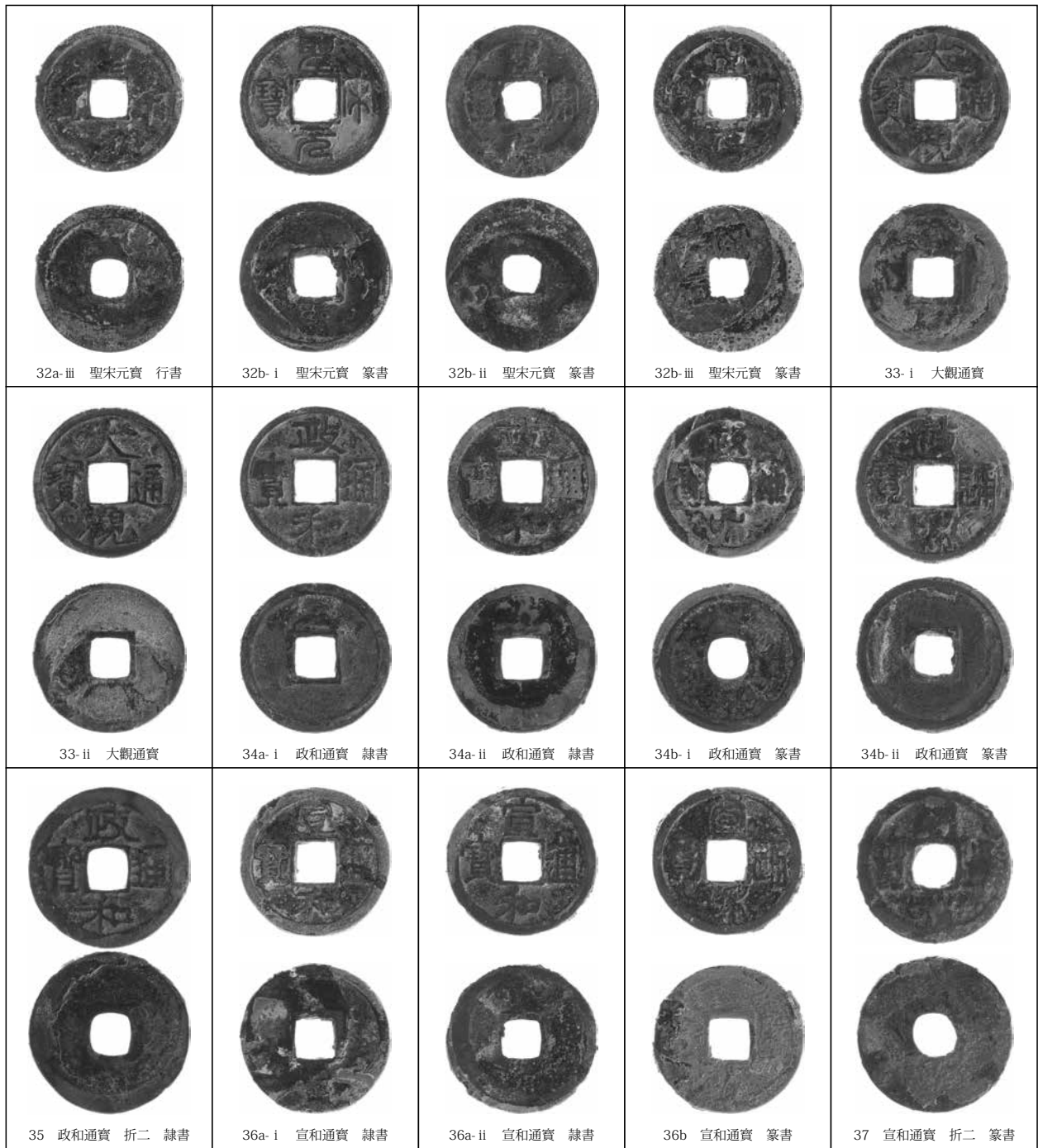
内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
8.94	9.06	7.11	7.17	1.25 ~ 1.50	1.50	1.25	1.30	1.25	3.42	広穿
7.93	7.92	6.59	6.46	1.20 ~ 1.45	1.40	1.30	1.20	1.45	3.34	
8.20	8.25	6.59	6.80	1.10 ~ 1.15	1.15	1.15	1.10	1.10	3.12	
7.82	7.85	5.65	5.78	0.95 ~ 1.20	1.00	1.20	1.10	0.95	3.30	潤縁、薄肉狭穿、夷緩している
8.59	8.97	6.43	7.09	1.35 ~ 1.60	1.60	1.40	1.35	1.35	3.72	
8.76	9.20	6.80	6.95	1.35 ~ 1.60	1.35	1.45	1.60	1.55	3.90	
8.96	9.02	6.71	7.09	1.25 ~ 1.30	1.30	1.25	1.25	1.30	3.56	
8.22	7.85	5.85	5.80	1.05 ~ 1.15	1.15	1.10	1.05	1.10	3.13	尖頭元
7.75	8.18	5.84	6.07	1.15 ~ 1.30	1.25	1.30	1.25	1.15	3.45	
8.47	7.60	6.00	6.07	1.15 ~ 1.25	1.20	1.15	1.25	1.15	3.09	夷緩している
8.56	8.30	6.13	6.02	1.10 ~ 1.20	1.20	1.10	1.10	1.20	3.49	
8.46	8.68	6.64	6.68	1.10 ~ 1.30	1.10	1.25	1.25	1.30	3.63	
7.83	8.26	6.10	6.37	1.40 ~ 1.50	1.50	1.45	1.40	1.50	4.06	
7.57	7.46	6.16	6.22	1.30 ~ 1.50	1.50	1.30	1.45	1.40	2.88	小様
7.59	7.39	5.69	5.73	1.30 ~ 1.50	1.40	1.30	1.50	1.40	4.05	

写真20 代表銭写真及び計測表(9)


















番号	銭貨名			国名	初铸年	銭径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
32a- iii	聖宋元寶	行書		北宋	1101	24.12	24.23	20.25	20.53
32b- i	聖宋元寶	篆書		北宋	1101	24.65	24.66	20.75	21.01
32b- ii	聖宋元寶	篆書		北宋	1101	25.18	24.79	17.88	17.50
32b- iii	聖宋元寶	篆書		北宋	1101	24.07	24.50	18.47	17.93
33- i	大觀通寶			北宋	1107	24.38	24.49	20.46	20.35
33- ii	大觀通寶			北宋	1107	24.77	24.89	21.06	20.91
34a- i	政和通寶	隸書		北宋	1111	24.57	24.50	21.31	20.84
34a- ii	政和通寶	隸書		北宋	1111	24.47	24.27	20.78	20.73
34b- i	政和通寶	篆書		北宋	1111	24.61	24.78	20.32	20.08
34b- ii	政和通寶	篆書		北宋	1111	25.58	25.70	21.35	21.53
35	政和通寶 折二	隸書		北宋	1111	26.51	26.19	20.95	20.22
36a- i	宣和通寶	隸書		北宋	1119	24.50	24.25	19.75	20.40
36a- ii	宣和通寶	隸書		北宋	1119	24.34	24.69	19.80	20.25
36b	宣和通寶	篆書		北宋	1119	24.25	24.68	20.80	20.52
37	宣和通寶 折二	篆書		北宋	1119	25.70	25.26	20.29	20.04

第242図 代表銭拓影及び計測表(10)

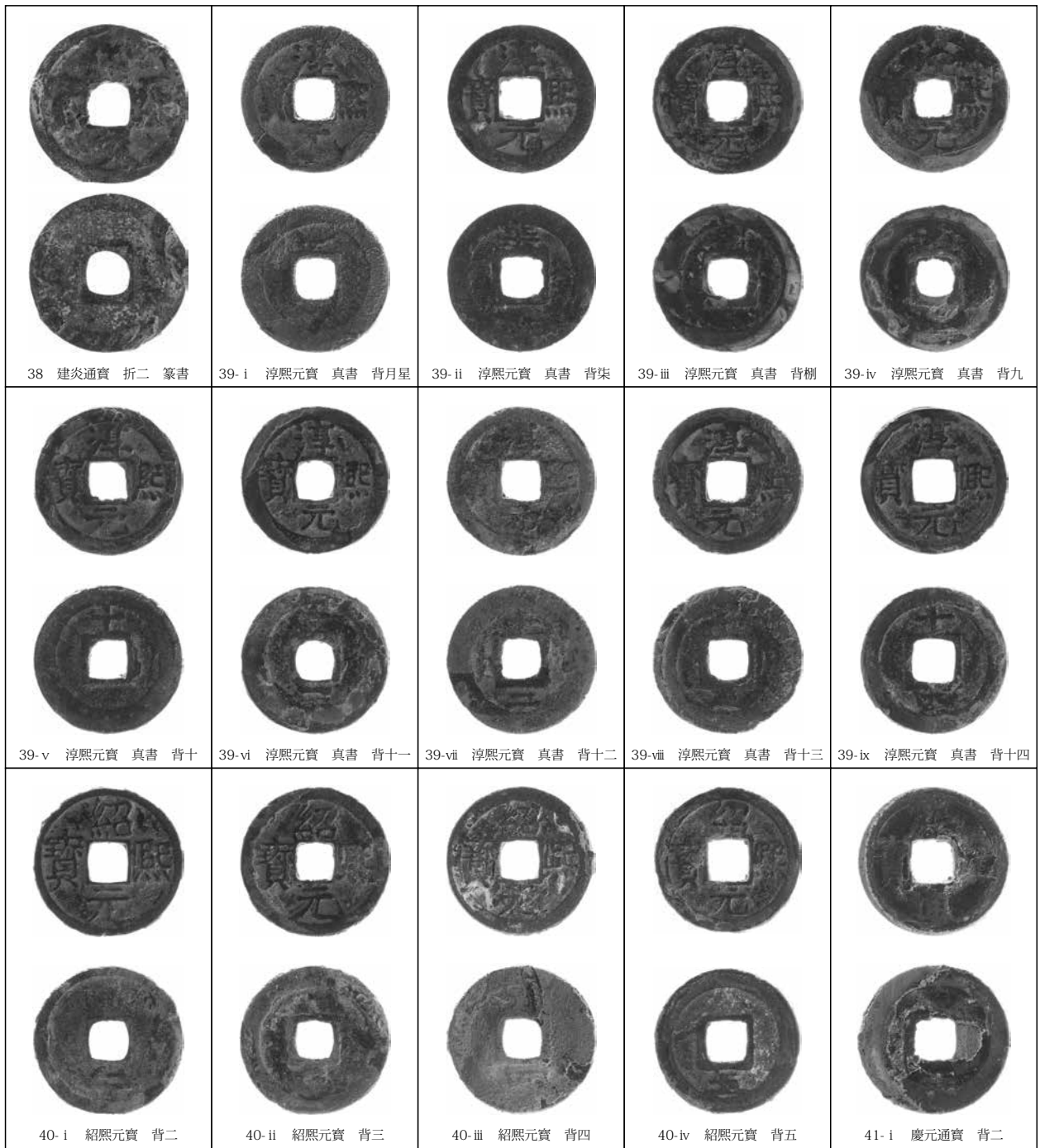


内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
7.48	7.13	5.81	5.86	1.30 ~ 1.55	1.40	1.55	1.30	1.35	3.33	狭穿
8.43	8.35	6.40	6.43	1.20 ~ 1.45	1.20	1.40	1.45	1.30	2.97	
7.74	7.59	5.50	5.55	1.10 ~ 1.20	1.10	1.15	1.15	1.20	3.61	潤縁狭穿、夷縷している
8.26	8.04	6.03	5.86	1.30 ~ 1.55	1.30	1.30	1.40	1.55	3.66	
7.97	8.13	5.88	6.22	1.30 ~ 1.35	1.35	1.35	1.30	1.35	3.56	
7.69	7.34	6.17	6.14	1.25 ~ 1.35	1.30	1.35	1.25	1.30	2.99	
8.19	7.86	6.47	6.38	1.30 ~ 1.40	1.40	1.30	1.35	1.30	3.40	
8.39	8.44	6.51	6.44	1.25 ~ 1.40	1.25	1.30	1.35	1.40	3.33	
7.81	7.64	6.02	6.12	1.30 ~ 1.50	1.50	1.50	1.30	1.35	3.02	
7.83	7.95	5.82	6.10	1.25 ~ 1.40	1.35	1.25	1.25	1.40	3.22	
7.97	7.91	6.60	6.27	0.90 ~ 1.15	1.15	1.05	0.95	0.90	3.06	薄肉、中国私鑄銭と推定
7.94	8.14	6.10	6.05	1.20 ~ 1.65	1.20	1.25	1.65	1.45	2.73	
8.04	7.89	6.15	6.03	1.05 ~ 1.20	1.05	1.15	1.20	1.10	3.11	
8.17	8.37	6.32	6.26	1.10 ~ 1.30	1.25	1.30	1.10	1.10	2.69	
8.28	8.44	6.60	6.58	1.15 ~ 1.40	1.35	1.40	1.25	1.15	3.79	銭文やや大、中国私鑄銭と推定

写真21 代表銭写真及び計測表(10)

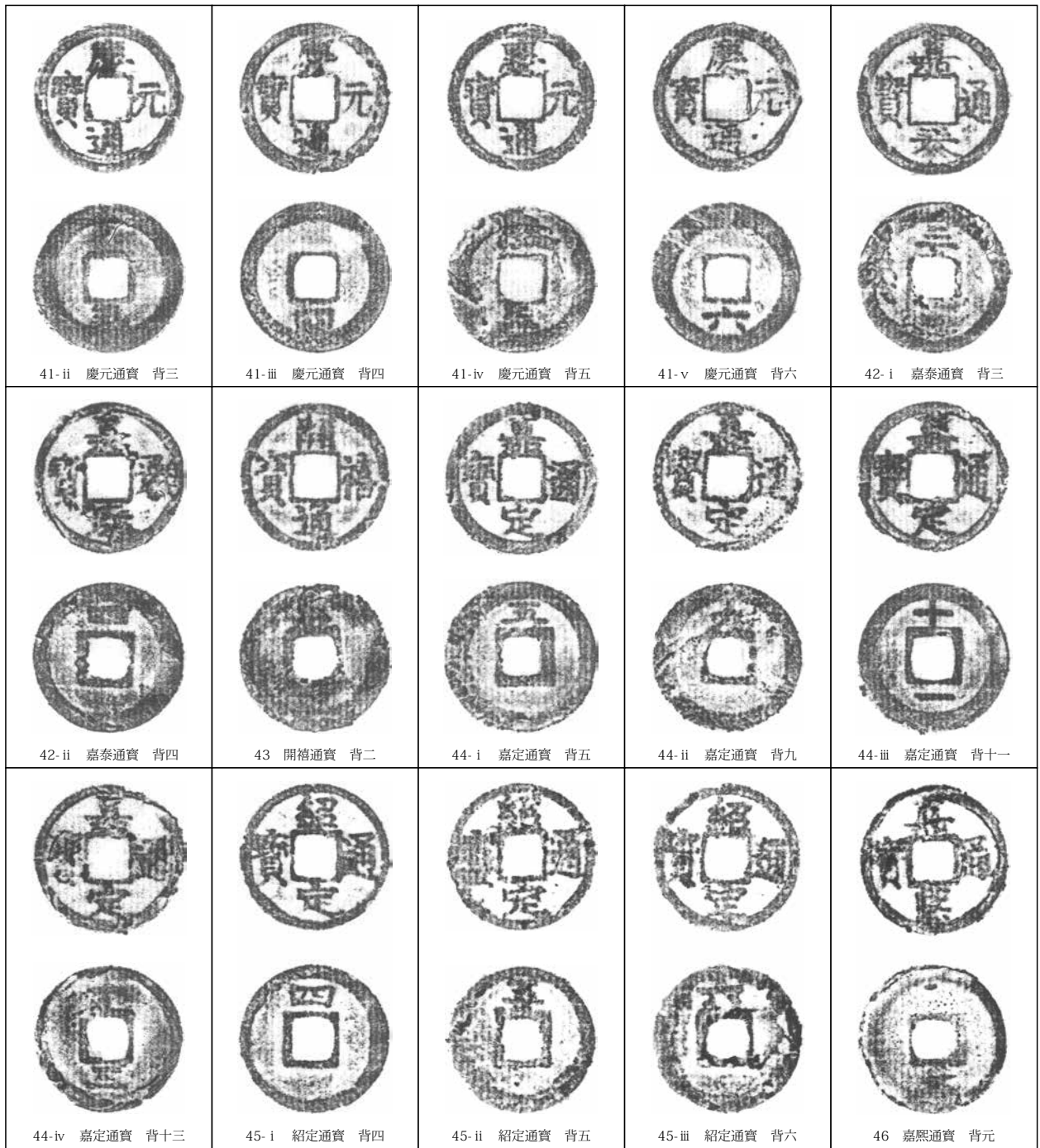
									
38 建炎通寶 折二 篆書	39-i 淳熙元寶 真書 背月星	39-ii 淳熙元寶 真書 背柴	39-iii 淳熙元寶 真書 背捌	39-iv 淳熙元寶 真書 背九					
									
39-v 淳熙元寶 真書 背十	39-vi 淳熙元寶 真書 背十一	39-vii 淳熙元寶 真書 背十二	39-viii 淳熙元寶 真書 背十三	39-ix 淳熙元寶 真書 背十四					
									
40-i 紹熙元寶 背二	40-ii 紹熙元寶 背三	40-iii 紹熙元寶 背四	40-iv 紹熙元寶 背五	41-i 慶元通寶 背二					
番号	錢貨名			国名	初鑄年	錢径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
38	建炎通寶 折二	篆書		南宋	1127	26.01	25.68	22.03	21.25
39-i	淳熙元寶	真書	背月星	南宋	1174	24.11	24.09	18.51	17.72
39-ii	淳熙元寶	真書	背柴	南宋	1174	24.15	24.05	18.32	18.49
39-iii	淳熙元寶	真書	背捌	南宋	1174	24.35	24.33	17.70	17.91
39-iv	淳熙元寶	真書	背九	南宋	1174	23.98	24.33	18.33	18.53
39-v	淳熙元寶	真書	背十	南宋	1174	24.18	24.00	18.35	18.97
39-vi	淳熙元寶	真書	背十一	南宋	1174	23.77	24.15	18.22	18.68
39-vii	淳熙元寶	真書	背十二	南宋	1174	24.23	24.33	19.19	18.85
39-viii	淳熙元寶	真書	背十三	南宋	1174	23.98	24.31	18.95	18.96
39-ix	淳熙元寶	真書	背十四	南宋	1174	24.07	23.89	20.08	19.31
40-i	紹熙元寶		背二	南宋	1190	24.18	24.37	21.19	21.17
40-ii	紹熙元寶		背三	南宋	1190	24.43	24.36	20.39	20.31
40-iii	紹熙元寶		背四	南宋	1190	24.28	24.18	18.71	19.02
40-iv	紹熙元寶		背五	南宋	1190	23.66	23.84	19.33	19.47
41-i	慶元通寶		背二	南宋	1195	24.35	24.64	19.39	19.87

第243図 代表錢拓影及び計測表(11)



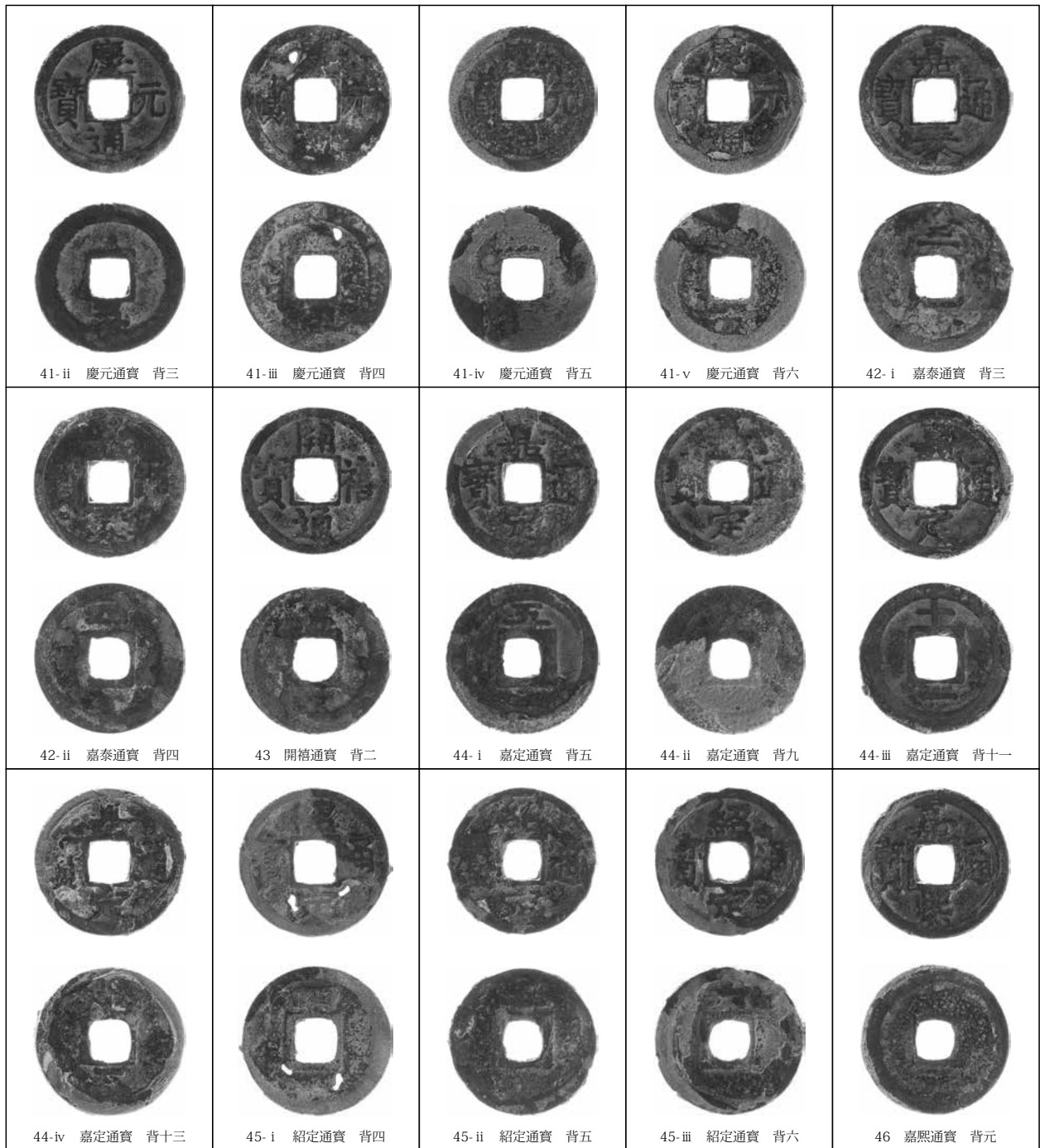
内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
8.37	8.38	7.23	6.29	1.00 ~ 1.35	1.00	1.15	1.25	1.35	3.42	中国私鑄銭と推定
7.87	7.49	5.90	6.26	1.20 ~ 1.40	1.30	1.20	1.40	1.40	3.12	
8.44	8.04	6.43	6.44	1.10 ~ 1.20	1.10	1.15	1.20	1.10	3.58	
8.54	8.50	6.01	6.39	1.05 ~ 1.10	1.10	1.10	1.05	1.10	2.76	
7.31	7.67	5.16	5.91	1.05 ~ 1.20	1.10	1.20	1.15	1.05	2.61	
7.89	7.89	5.90	5.90	1.20 ~ 1.50	1.40	1.50	1.40	1.20	3.57	
7.66	7.24	6.41	5.75	1.20 ~ 1.40	1.40	1.20	1.20	1.20	3.48	
7.62	7.63	5.66	6.27	1.10 ~ 1.55	1.10	1.45	1.35	1.55	3.33	
8.11	9.11	6.06	6.50	1.20 ~ 1.50	1.30	1.30	1.20	1.50	3.38	
8.22	8.34	7.02	7.01	1.30 ~ 1.40	1.30	1.30	1.40	1.40	3.38	
7.54	7.49	6.00	6.00	1.45 ~ 1.50	1.45	1.50	1.50	1.50	3.40	
6.59	6.74	6.23	6.22	1.30 ~ 1.55	1.30	1.40	1.55	1.40	3.38	
7.65	7.72	6.06	6.06	1.40 ~ 1.55	1.40	1.50	1.55	1.55	3.78	
8.19	7.66	6.45	6.45	1.20 ~ 1.35	1.20	1.35	1.30	1.25	3.25	
7.59	7.64	6.76	6.34	1.10 ~ 1.25	1.10	1.25	1.20	1.15	2.97	

写真22 代表銭写真及び計測表(11)



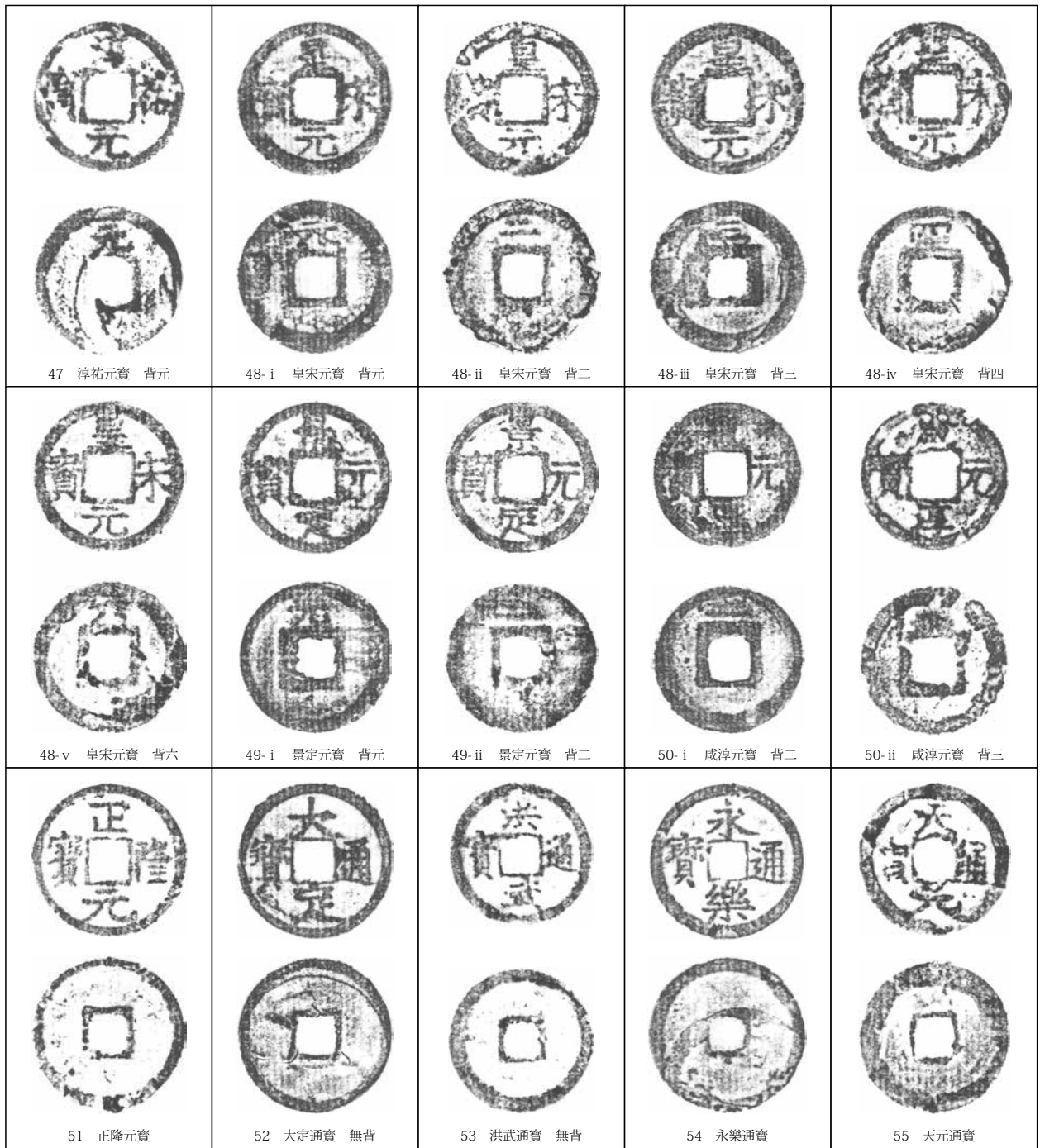
番号	錢貨名			国名	初鑄年	錢径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
41- ii	慶元通寶		背三	南宋	1195	24.30	24.22	19.60	19.61
41- iii	慶元通寶		背四	南宋	1195	24.23	24.02	19.84	19.22
41- iv	慶元通寶		背五	南宋	1195	23.89	24.12	20.12	19.28
41- v	慶元通寶		背六	南宋	1195	24.47	24.59	20.13	19.25
42- i	嘉泰通寶		背三	南宋	1201	24.50	25.13	20.76	20.79
42- ii	嘉泰通寶		背四	南宋	1201	24.51	24.44	20.55	20.88
43	開禧通寶		背二	南宋	1205	24.11	24.25	20.67	20.35
44- i	嘉定通寶		背五	南宋	1208	24.84	24.85	19.96	20.64
44- ii	嘉定通寶		背九	南宋	1208	24.38	24.25	21.31	21.55
44- iii	嘉定通寶		背十一	南宋	1208	24.57	24.84	20.68	20.35
44- iv	嘉定通寶		背十三	南宋	1208	24.16	24.16	20.49	20.91
45- i	紹定通寶		背四	南宋	1225	24.28	24.31	21.26	20.67
45- ii	紹定通寶		背五	南宋	1225	24.00	23.71	20.69	20.54
45- iii	紹定通寶		背六	南宋	1225	24.23	24.35	20.62	19.94
46	嘉熙通寶		背元	南宋	1237	24.56	24.17	21.02	20.21

第244図 代表錢拓影及び計測表(12)



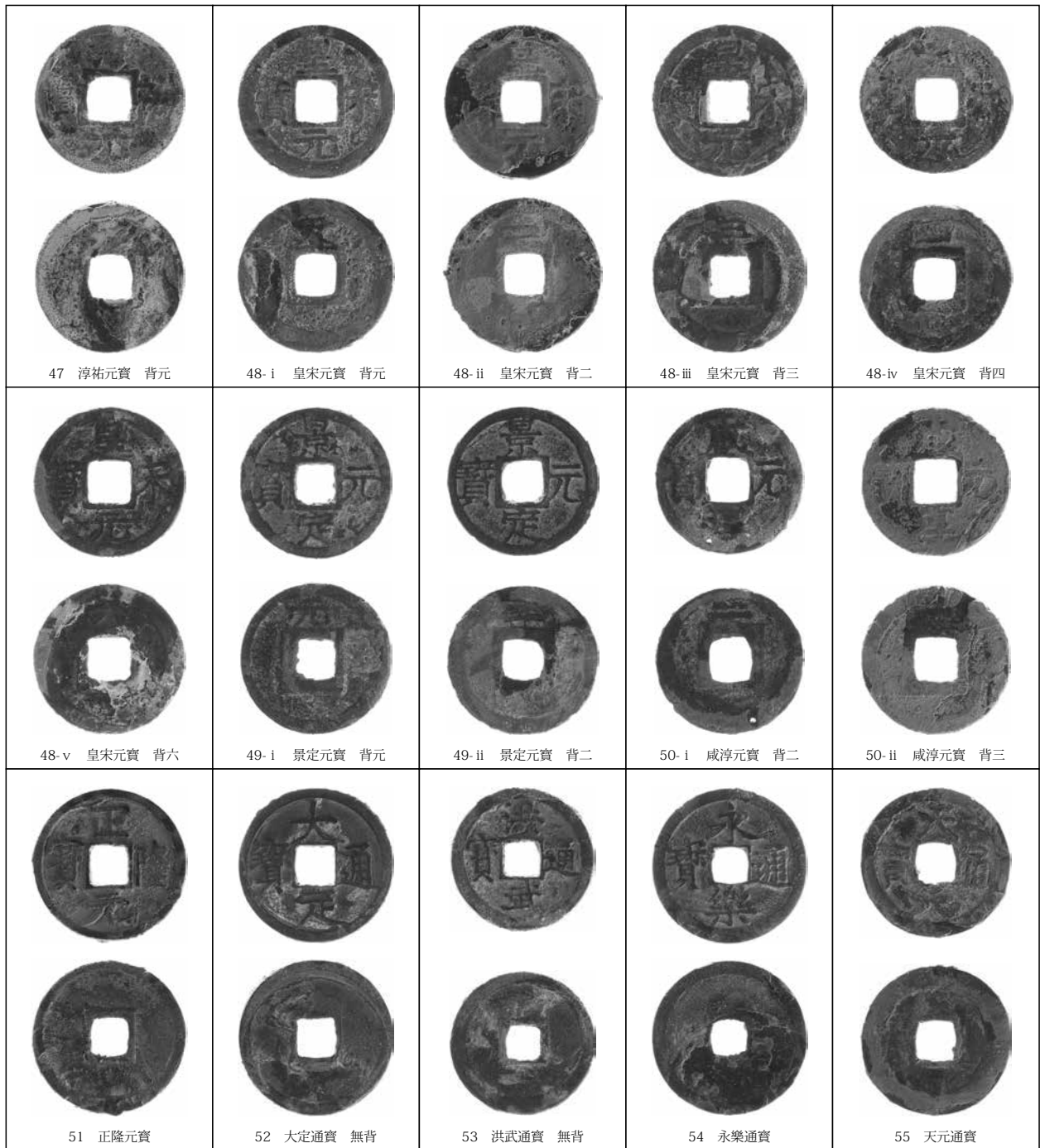
内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
7.41	7.51	5.79	5.78	1.15 ~ 1.30	1.20	1.30	1.20	1.15	3.40	狭穿
7.93	7.93	5.69	6.01	1.10 ~ 1.40	1.10	1.20	1.40	1.20	3.41	
7.87	8.13	6.16	6.47	1.10 ~ 1.25	1.20	1.25	1.10	1.10	3.03	夷緩している
7.41	7.68	6.35	6.35	1.10 ~ 1.50	1.10	1.50	1.20	1.30	3.32	
7.84	8.18	6.47	6.24	0.90 ~ 1.40	0.90	1.20	1.40	1.30	3.16	
8.51	8.24	5.88	5.96	1.30	1.30	1.30	1.30	1.30	3.63	
8.48	8.46	6.56	6.58	1.00 ~ 1.20	1.00	1.20	1.10	1.00	2.68	薄肉、夷緩している
6.80	7.46	5.78	5.81	1.20 ~ 1.50	1.50	1.30	1.20	1.20	3.91	
7.94	8.10	6.15	5.97	1.10 ~ 1.60	1.10	1.20	1.60	1.20	3.58	
8.64	7.87	6.75	5.71	1.30 ~ 1.40	1.30	1.40	1.30	1.35	3.47	
8.59	8.78	6.17	5.99	1.30 ~ 1.50	1.50	1.30	1.30	1.50	3.41	
8.45	8.14	6.14	6.25	1.10 ~ 1.30	1.10	1.10	1.10	1.30	2.72	
7.32	7.05	5.14	5.24	1.15 ~ 1.35	1.30	1.15	1.30	1.35	3.53	狭穿
7.62	7.42	5.81	5.76	1.20 ~ 1.40	1.30	1.30	1.20	1.40	3.54	
8.25	8.78	5.94	5.79	1.30 ~ 1.55	1.30	1.30	1.50	1.55	4.06	

写真23 代表銭写真及び計測表(12)



番号	錢貨名			国名	初鑄年	錢径		内径	
	名称	書体	背文字等			(A/mm)	(B/mm)	(A'/mm)	(B'/mm)
47	淳祐元寶		背元	南宋	1241	24.70	24.30	20.92	20.75
48- i	皇宋元寶		背元	南宋	1253	25.22	25.33	19.58	19.20
48- ii	皇宋元寶		背二	南宋	1253	25.19	25.05	18.82	18.62
48- iii	皇宋元寶		背三	南宋	1253	24.86	24.83	19.18	20.09
48- iv	皇宋元寶		背四	南宋	1253	24.28	24.85	20.07	19.98
48- v	皇宋元寶		背六	南宋	1253	24.61	24.68	20.15	19.65
49- i	景定元寶		背元	南宋	1260	24.79	24.60	20.47	19.89
49- ii	景定元寶		背二	南宋	1260	24.31	24.60	20.21	20.26
50- i	咸淳元寶		背二	南宋	1265	23.97	24.13	19.81	19.04
50- ii	咸淳元寶		背三	南宋	1265	24.24	24.03	19.84	18.99
51	正隆元寶			金	1157	24.92	25.25	20.72	20.94
52	大定通寶		無背	金	1178	25.41	25.16	21.08	21.20
53	洪武通寶		無背	明	1368	23.49	23.54	18.84	18.73
54	永樂通寶			明	1408	25.30	25.04	20.26	20.13
55	天元通寶			中世日本	14世紀代	24.38	24.29	19.66	19.04

第245図 代表錢拓影及び計測表(13)



内郭外縦 (C/mm)	内郭外横 (D/mm)	内郭内縦 (C/mm)	内郭内横 (D/mm)	銭厚 (mm)	銭厚 (mm) 詳細				量目 (g)	備考
					a	b	c	d		
9.45	9.53	6.30	6.31	1.35 ~ 1.55	1.50	1.35	1.35	1.55	3.34	
8.34	8.85	6.20	6.37	1.25 ~ 1.45	1.25	1.30	1.45	1.40	3.91	
8.42	8.82	6.37	6.29	1.40 ~ 1.80	1.40	1.70	1.80	1.45	4.22	
8.72	8.54	6.07	6.08	1.10 ~ 1.20	1.15	1.20	1.10	1.20	3.45	
9.37	9.61	6.42	6.50	1.40 ~ 1.85	1.55	1.50	1.40	1.85	3.60	
8.70	8.67	6.55	6.56	0.95 ~ 1.05	0.95	1.00	1.00	1.05	2.28	薄肉
8.53	8.68	5.81	5.94	1.15 ~ 1.20	1.15	1.20	1.15	1.20	3.54	
8.60	8.95	6.21	6.33	1.00 ~ 1.10	1.00	1.05	1.05	1.10	3.15	薄肉
8.84	9.11	6.76	6.66	0.95 ~ 1.10	1.05	0.95	1.10	1.00	3.14	薄肉
8.73	8.77	6.73	6.70	1.35 ~ 1.50	1.35	1.35	1.50	1.45	3.26	
7.83	7.78	5.69	5.82	1.50 ~ 1.75	1.55	1.75	1.70	1.50	3.66	
7.46	7.70	5.94	5.99	1.25 ~ 1.45	1.25	1.30	1.30	1.45	3.74	
7.22	7.23	5.21	5.23	1.70 ~ 1.80	1.80	1.70	1.80	1.70	4.23	小ぶり、厚肉
7.05	6.80	5.50	5.38	1.20 ~ 1.55	1.45	1.20	1.50	1.55	4.00	
7.58	7.73	6.03	6.10	1.15 ~ 1.40	1.40	1.15	1.20	1.20	3.26	

写真24 代表銭写真及び計測表 (13)

達する。そして残る0.25% (38枚)には、前蜀、南唐、後周の五大十国時代の諸銭 (24枚)、金王朝の諸銭 (13枚)と、上述した中世日本鑄造の島銭 (1枚)が加わる構成となる。最新銭の初鑄年による時期区分 (表5)では、第4期に該当する。ただし、既述したように、容器である備前焼四耳壺の年代観 (16世紀前半)とは大きな開きがあり、本事例においては最新銭による時期区分は実際の帰属時期を反映していないと考えている。

銭種別に見ると (表4)、上位は、当然ながら大多数を占める北宋の諸銭が並ぶ。その中に唐の開元通寶が7位に入り、明銭は永樂通寶が17位に入るものの、全体での比率では1.86%に過ぎない。また、洪武通寶の検出は2枚のみで、明銭の占める割合が低いのが特徴と言える。王朝、国別銭貨枚数比率の詳細については、他事例との比較等、第8章第2節で後述する。

前項で触れたとおり、出土銭のほぼ全体を調査した結果、本埋蔵銭中には渡来銭を本邦において鑄写した模鑄銭を含まないことが判明した。また、割れ、欠けといった破損資料は数点に止まり、そのほとんどが調査に際し、鑄で固着した銭貨を剥離する作業中二次的に破損したもので、基本的には破損銭も本埋蔵銭には含まれていなかったと判断できる。さらに、調査した全ての銭貨において銭文が判読でき、不明銭が皆無であった点は特筆に値しよう。以上のように、本資料の分類調査を経た所見では、銭貨は非常に良好な遺存状況であるとともに、模鑄銭や無文銭に代表される低品位銭貨、いわゆる「悪銭」とは一線を画した良質な銭貨、すなわち「精銭」からなる埋蔵銭であると想定される。

【註】

(1) 中国の私鑄銭は、折二銭や当十銭など大型銭に多く見られ、模鑄銭との比較では製作、銅質の違いはあるものの識別は難しく、小平銭にも混在するという (永井2001)。本埋蔵銭にて検出した折二銭は銭径が26mm前後を測り、銭文もやや大きい。ただ、原形と比較すると明らかに銭径が小さく、鑄写した私鑄銭と考えられる。

【参考文献】

嶋谷和彦1994「堺出土銭鑄型と中世前期の模鑄銭生産」『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会
 永井久美男2001「模鑄銭の全国的様相」『中世の出土模鑄銭』東北中世考古学叢書1 東北中世考古学会
 永井久美男2002『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
 備前市教育委員会2012『医王山東麓窯跡群発掘調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告9

表5 最新銭による時期区分 (永井2002を一部改変、転載)

名称	国名	最新銭	初鑄年	時期区分
第1期	南宋	●淳祐元寶	1241	13世紀第2四半期～14世紀第1四半期 ※出土枚数が5,000枚以下の場合は14世紀第2四半期以降に下る可能性がある。
		皇宋元寶	1253	
		開慶通寶	1259	
		景定元寶	1260	
		●咸淳元寶	1265	
第2期	元	●至大通寶	1310	14世紀第1四半期～同第3四半期
		至正通寶	1350	
第3期	明	●大中通寶	1361	14世紀第1四半期～15世紀第1四半期 ※最新銭が大中通寶の場合は1370年前後に埋蔵された可能性が高い。
		●洪武通寶	1368	
第4期	明	●永樂通寶	1408	15世紀第1四半期
第5期	朝鮮	●朝鮮通寶	1423	15世紀第2四半期 ※宣徳通寶の検出率は6期の平均が1/237であるため、最新銭が朝鮮通寶の場合は1430年前後に埋蔵された可能性が高い。
第6期	明	●宣徳通寶	1433	15世紀第2四半期～16世紀第3四半期 (1560年代) ※ヴェトナムの後黎 (前期) 銭と莫銭を含まない。
第7期	琉球	●大世通寶	1454	15世紀第3四半期～16世紀第3四半期 (1560年代) ※ヴェトナムの後黎 (前期) 銭と莫銭を含まない。
第8期	明	●世高通寶	1461	16世紀第1四半期～16世紀第3四半期 (1560年代) ※ヴェトナムの後黎 (前期) 銭と莫銭を含まない。
		●弘治通寶	1503	
		●嘉靖通寶	1527	
第9期	後黎	紹平通寶	1434	16世紀第3四半期 (1560年代) ～17世紀第1四半期 (慶長年間) ※ヴェトナムの後黎 (前期) 銭や莫銭を含む。
		大和通寶	1443	
		延寧通寶	1454	
		光順通寶	1460	
		洪徳通寶	1470	
		景統通寶	1498	
		●洪順通寶	1509	
	莫	●大正通寶	1530	
		●廣和通寶	1541	
第10期	日本	●慶長通寶	(1596～1615)	慶長年間～寛永13年 (1636)

●印は時期決定銭

第6章 8区の調査成果

第1節 立地と基本層序

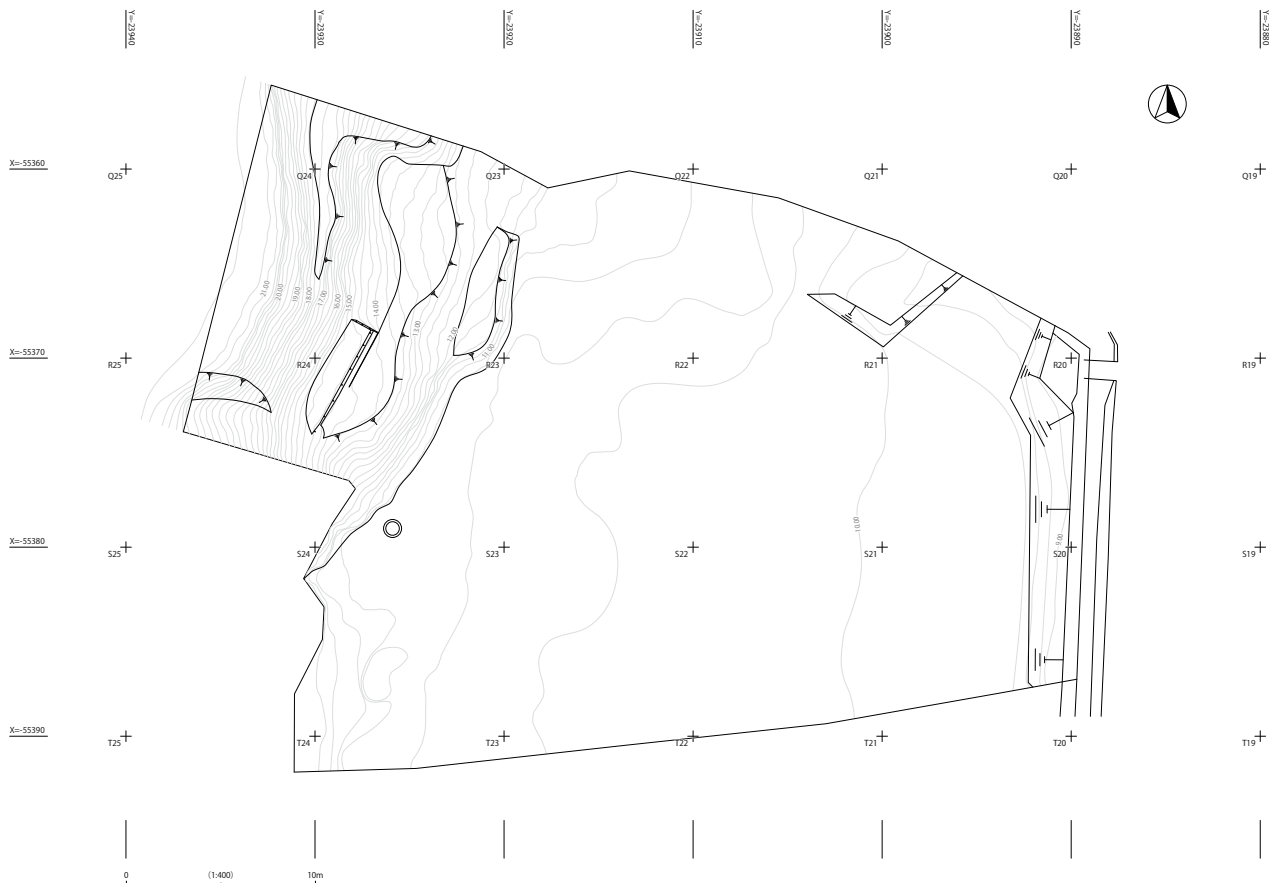
8区は地形の特徴から、西側の丘陵斜面部（エリア3）、中心部の平坦部（エリア2）、東側の低地部（エリア1）に分かれる。最も地形や土層の堆積状況の特色を示すのは、調査地内を横断する北壁と南壁であり、調査区北壁は丘陵斜面部、平坦部及び低地部を通して、南壁は調査区の形状から丘陵斜面部と平坦部と低地部を分割して記録した。また、丘陵斜面部中央の斜面上方（トレンチ5：B-B'）と下方（トレンチ5：A-A'）についても土層図を作成している。なお、丘陵斜面部南壁は北壁と層序が類似しているため説明は省略する。

調査地東半部では、S20～21グリッド内に横断する暗渠壁面を利用して、土層観察用のトレンチ11を設定し記録を行っている。堆積状況は北壁と南壁に類似するため、土層図のみ図示する。

丘陵斜面部西壁(Q24、R24グリッド)は急勾配のため、部分的な記録(C-C')に留めた。西壁南半(S23グリッド)は急傾斜地崩壊危険箇所対策のコンクリート擁壁があり土層堆積の記録はない。

調査地内を縦断する低地部の東壁（R20、S20グリッド）は、調査区外を縦走する水路沿いの擁壁工事のため、造成土が基盤層まで達しており、記録は行ったがここでは図示しない。

土層堆積の全体的な特色として、本調査地のうち平坦部は調査前に民家が建っており、そのため調査区中央部の平坦部南半が著しい削平や攪乱を受け、遺物包含層の残存が不良である。逆に中世以降



第246図 8区調査前地形測量図

現代に至るまで断続的に東側の低地部へ盛土している状況が南北壁面から確認できている。

(1) 丘陵斜面部（トレンチ5）の土層堆積（第247・248図、PL.124・147～148・150）

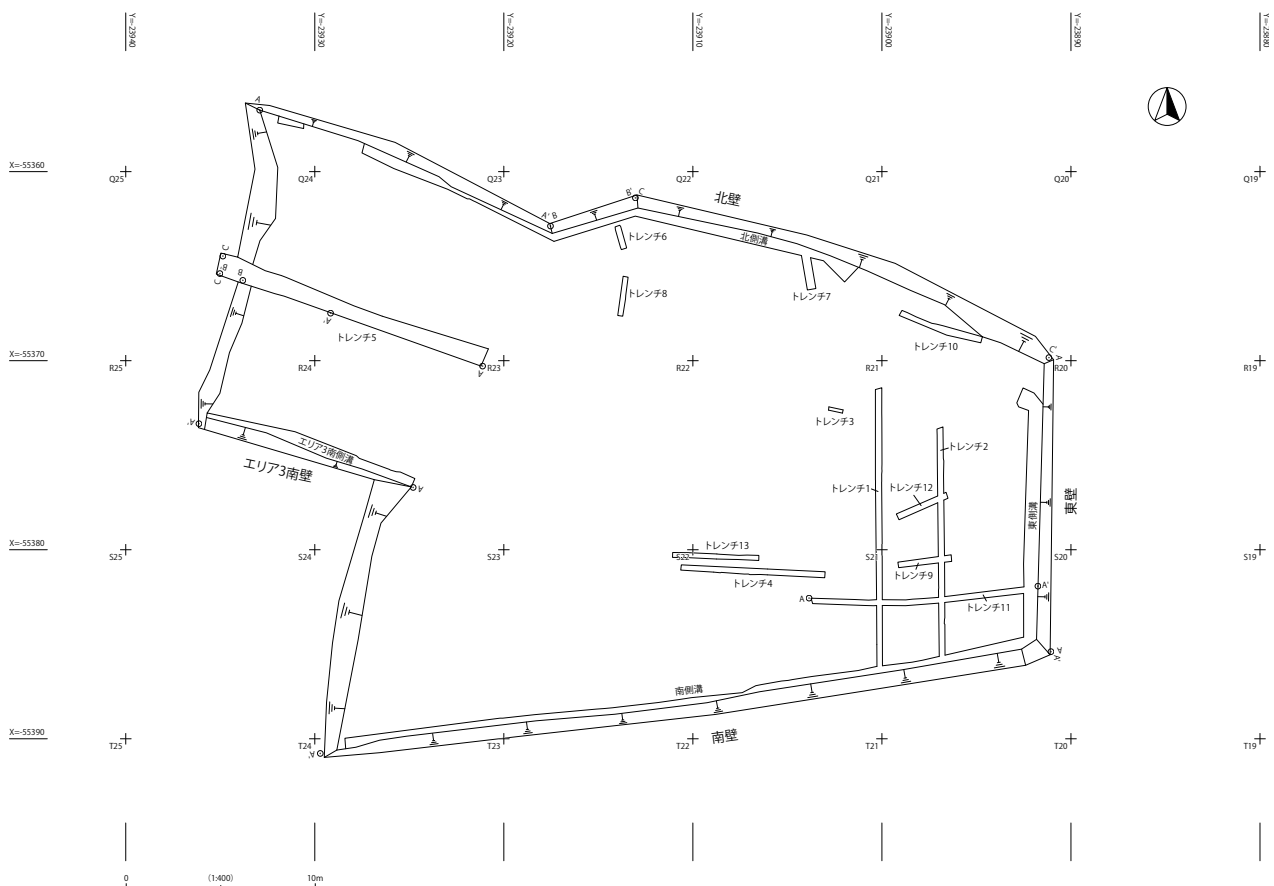
トレンチ5は、調査区西端中心部に1.2m×0.8mの規模で設定した土層観察用のトレンチである。上から1層が表土、2～3層が黄褐色細粒砂から中粒砂を基調として地山ブロックを含む混合土である近世以降の造成土、4層が黒褐色細粒砂で地山ブロックを含む古代以降の旧表土、5層が黄褐色細粒砂から中粒砂でしまりが強い古代以降の遺物包含層、6層が弥生時代以降と推定される旧表土、7層が明黄褐色粘土の基盤層である。

このうち2～3層は調査区外の斜面上方平坦部を造成する際の盛土層と考えられ、層厚は約1mと非常に厚い。この西側平坦部の表土である1層からは石製五輪塔（水輪）や近世陶磁器が出土しており、2～3層は墓地造成時の盛土層の可能性が高い。4～5層は古代以降の遺物包含層で、出土点数は少ないものの弥生土器や古式土師器、古墳時代後期から古代にかけての須恵器が出土した。

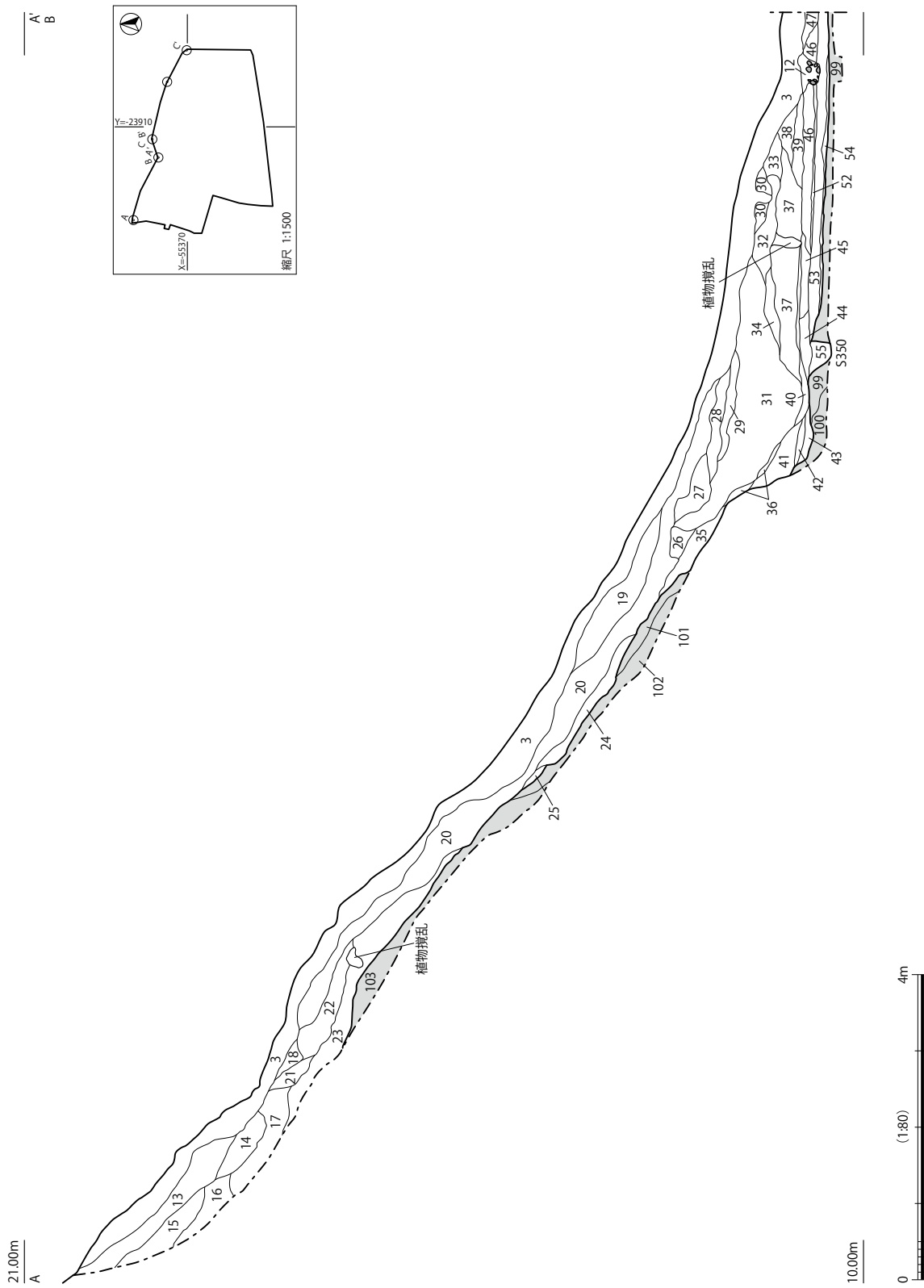
(2) 丘陵斜面部北壁の土層堆積（第247・249～251図、PL.124・126・148）

調査前の斜面部は標高10.5～19.8mで中腹の傾斜がきつく、斜面下部ほど緩くなっていた。これは斜面下方に上部からの崩落土が厚く堆積していたことによる。斜面全体に表土の3層が0.2～0.4mの厚さで堆積し、その下層に花崗岩を基盤とする拳大の礫が混入した地山崩落土の13～29層が層厚0.2～0.6mで堆積する。表土及び崩落土中には、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入陶磁器（青磁碗）及び鉄滓等の弥生時代から室町時代後期にかけての複数時期の遺物が出土した。

斜面上部の標高18～19mでは、S301～S304ピットが検出された。このうちS303ピット底面から



第247図 8区トレンチ配置図及び土層断面記録位置



第249図 8区北壁土層断面図(1)

は弥生土器の細片が出土している。斜面中腹では基盤層が平面馬蹄形に窪む箇所が複数みられたが、遺構ではなく斜面崩落による地滑り地形と考えられる。斜面下部から平坦部にかけては、表土の3層以下、近代と現代造成土31層と近世以降の斜面崩落土30～39層が0.5～1.2mと厚く堆積し、その下部に近世造成土45層、46層及び53層、近世の旧表土である52、54層が続き、表土下約1.8mで基盤層99層に至る。99層上面でS348とS407土坑、S350溝を検出している。S407土坑からは近世後半の陶磁器が出土した。

斜面下部の堆積状況を概観すると、99～100層の基盤層をL字状に掘削し平坦面を確保し、斜面裾に沿ってS350溝が構築される。その後、近世の表土と考えられる54層の灰黄褐色シルトが堆積した。斜面上方からの崩落土及び流土53層を用いて造成し、一定期間が経過して52層の灰黄褐色シルトが堆積。再度、崩落土と流土である44～46層灰黄褐色から明黄褐色シルトを整地したところで、斜面中腹から大規模な斜面崩壊によって斜面裾が広範囲に埋没し、結果的に斜面裾が東に4m程寄った緩斜面の地形が形成という経過を辿る。

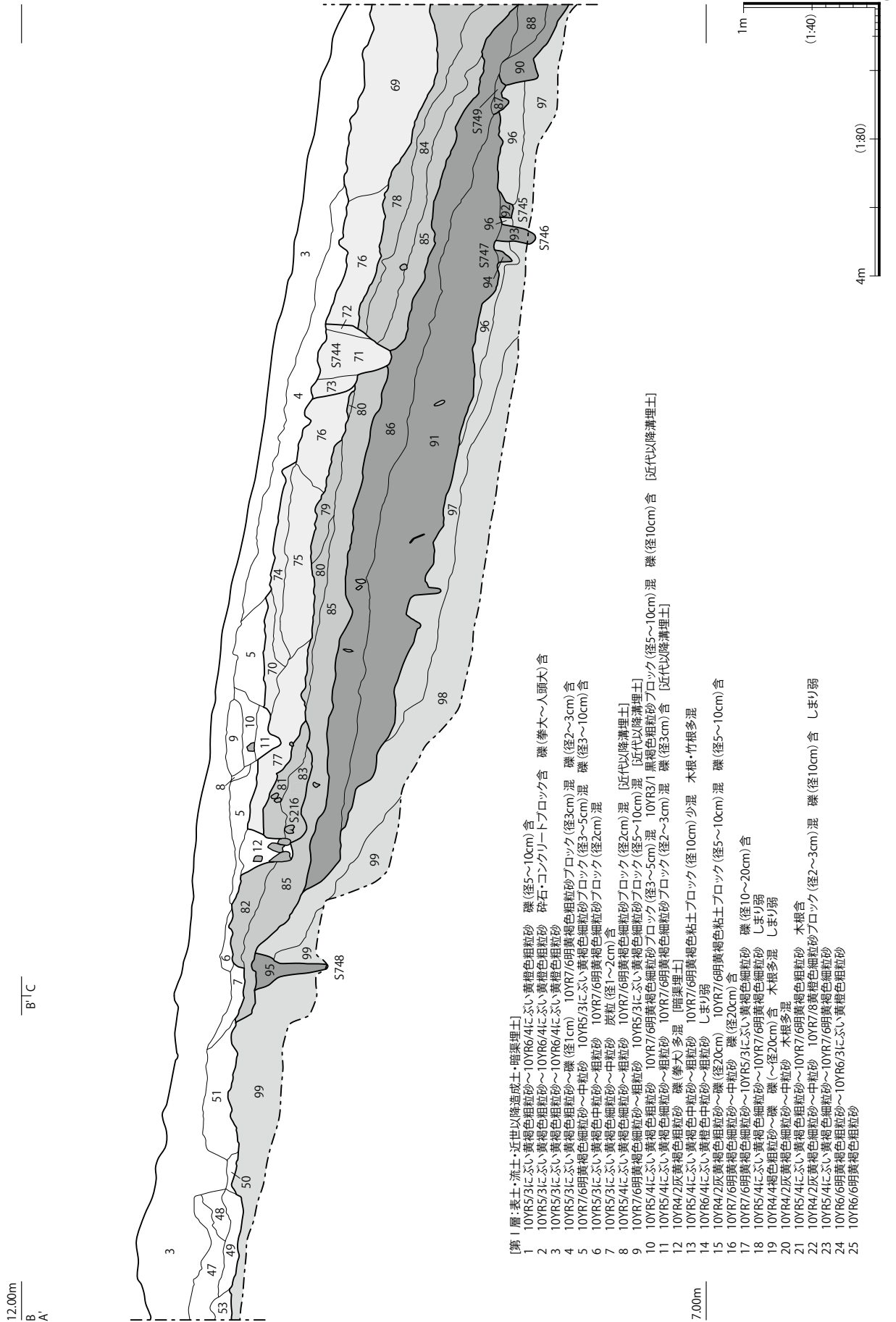
(3) 平坦部・低地部北壁の土層堆積 (第247・249～251・373・374図、表67・68、写真32・33、PL.124・126～127)

調査地北辺(6～7区)は、道路工事が調査と同時進行で行われることになったため、重機による第I層除去後、安全勾配を取りながら幅0.6mの排水溝を掘削した。

第I層(1～55層)は地点により層の微細な差や層厚の差はあるものの、ほぼ調査区全体に広がり、基本的に現代の表土や造成土である。北壁においては西側が薄く3～7層の黄褐色粗粒砂を基本とする表土、客土が約0.2～0.3m、東端は擁壁工事の造成土1～2層が堆積するため厚さ1.6mとなる。部分的であるが12層のような石詰暗渠なども認められる。第I層下面を第1遺構面として調査した。

第II層(56～65層)は中近世の遺物包含層である。低地部にあたる調査区東端から西へ3.5m(Y=-23,900)付近まで堆積するが、それより以西は認められなかった。基盤層の黄褐色と黄橙色粗粒砂ブロック土(56～62層)を主体とし、拳大の礫を多く包含する。調査地は中央平坦部と東部低地部との境に比高差1m程度の段落ちが南北方向(Y=-23,900～Y=-23,897ライン)にみられ、それを埋めるような堆積となっている。第II層下部では自然木や礫を含むS315溝(63～65層)やS533杭列が確認された。第II層上面は概ね水平となっており、調査地西半に堆積する第III層の高さに揃えるための造成土として捉えることができる。調査において第II層を1～3層に細分し、出土遺物もこれに従って分類した。出土遺物は中世後半のほか近世に至る国産陶磁器も出土している。第II層に及ばない中央部段落ち東側(Y=-23,895～-23,900)では、第1遺構面として調査したS227、S229及びS243水田・畦畔を掘り下げた面で遺構検出を行っており、これを第1～2遺構面として調査した。また第III層下面を第1～3遺構面として調査を行い、S727溝を検出している。

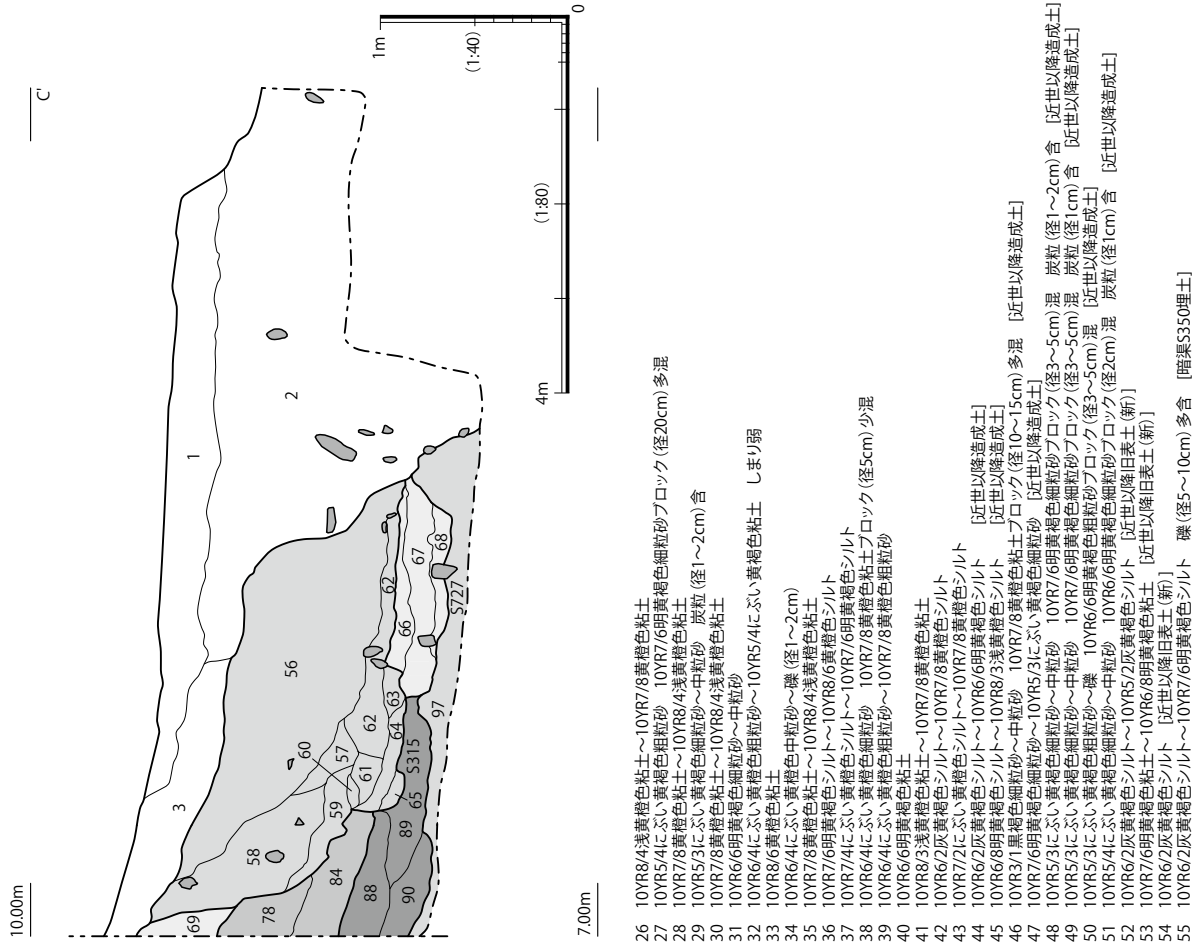
第III層(66～77層)は古代から中世の遺物包含層である。調査区東半部に堆積し、東端部から西へ3.5m程の段落ち部で収束する。第III層は丘陵斜面部と平坦部の境(Y=-23,913付近)から平坦部と低地部の境(Y=-23,898付近)まで層厚0.1～0.4mで堆積する。調査時において第III層を1～5層に細分し、平坦部の第II層下で堆積している土層を第III-1～2層として、調査地東部の段落ち下で検出されたS727溝の埋土を第III-3～5層とし、出土遺物もこれに従って分類した。出土遺物は古代須恵器や瓦質土器の鍋や羽釜、輸入陶磁器、硯、五輪塔など中世の遺物を主体としている。第III層のうち74～75層は灰黄褐色細粒砂内に浅黄橙粗粒砂のラミナが介在し、酸化鉄分が固着していることから、



- [第 1層: 土・流土・近世以降造成土・暗埋埋土]
- 1 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～10YR6/4にぶい黄褐色粗粒砂 礫(径5～10cm) 含
 - 2 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～10YR6/4にぶい黄褐色粗粒砂 砕石・コンクリートブロック 含 礫(拳大～人頭大) 含
 - 3 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～10YR6/4にぶい黄褐色粗粒砂
 - 4 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～礫(径1cm) 10YR7/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径3～5cm) 混 礫(径2～3cm) 含
 - 5 10YR7/6明黄褐色粗粒砂～中粒砂 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂ブロック(径3～5cm) 混 礫(径3～10cm) 含
 - 6 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～中粒砂 10YR7/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm) 混
 - 7 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～中粒砂 炭粒(径1～2cm) 含
 - 8 10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂～中粒砂 10YR7/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm) 混 [近代以降埋土]
 - 9 10YR7/6明黄褐色粗粒砂～粗粒砂 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂ブロック(径5～10cm) 混 [近代以降埋土]
 - 10 10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂～中粒砂 10YR7/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径3～5cm) 混 10YR3/1 黄褐色粗粒砂ブロック(径5～10cm) 混 礫(径10cm) 含 [近代以降埋土]
 - 11 10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂～中粒砂 10YR7/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径2～3cm) 混 礫(径3cm) 含 [近代以降埋土]
 - 12 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂 礫(拳大) 多混 [暗埋埋土]
 - 13 10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂～中粒砂 10YR7/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径10cm) 少混 木根・竹根多混
 - 14 10YR6/4にぶい黄褐色粗粒砂～粗粒砂 しまり弱
 - 15 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～礫(径20cm) 10YR7/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径5～10cm) 混 礫(径5～10cm) 含
 - 16 10YR7/6明黄褐色粗粒砂～中粒砂 礫(径20cm) 含
 - 17 10YR7/6明黄褐色粗粒砂～10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂 礫(径10～20cm) 含
 - 18 10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂～10YR7/6明黄褐色粗粒砂 しまり弱
 - 19 10YR4/4褐色粗粒砂～礫 礫(～径20cm) 含 木根多混
 - 20 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～中粒砂 木根多混
 - 21 10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂～10YR7/6明黄褐色粗粒砂 木根含
 - 22 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～中粒砂 10YR7/8黄褐色粗粒砂ブロック(径2～3cm) 混 礫(径10cm) 含 しまり弱
 - 23 10YR5/4にぶい黄褐色粗粒砂～10YR7/6明黄褐色粗粒砂
 - 24 10YR6/6明黄褐色粗粒砂～10YR6/3にぶい黄褐色粗粒砂
 - 25 10YR6/6明黄褐色粗粒砂

第250図 8区北壁土層断面図(2)

- 【第II層：中世包含層・遺構埋土】
- 56 10YR5/2灰草褐色細粒砂～粗粒砂 10YR6/6明黄褐色細粒砂～粗粒砂 [中近世造成土 第II - 1層]
 - 57 10YR6/8明黄褐色細粒砂～粗粒砂 偽礫(径1cm) 含 炭粒(径1cm) [中世造成土 第II - 2・3層]
 - 58 10YR8/8黄褐色粗粒砂～10YR6/4にぶい黄褐色粗粒砂 偽礫(径1～2cm) 含 礫(径10～20cm) 多含 [中世造成土 第II - 2・3層]
 - 59 10YR7/8黄褐色細粒砂～粗粒砂 偽礫(径1cm) 含 [中世造成土 第II - 2・3層]
 - 60 10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂 10YR7/8黄褐色細粒砂ブロック(径2～3cm) 混 炭粒(径1cm) 含 [中世造成土 第II - 2・3層]
 - 61 10YR7/8黄褐色細粒砂～粗粒砂 偽礫(径1cm) 含 [中世造成土 第II - 2・3層]
 - 62 10YR5/2灰草褐色細粒砂～粗粒砂～10YR6/6明黄褐色細粒砂～粗粒砂 [第II - 3層]
 - 63 10YR5/2灰黄褐色シルト～5Y7/4浅黄褐色粗粒砂 [S315埋土]
 - 64 2.5Y8/6黄褐色シルト
 - 65 10YR5/2灰黄褐色シルトブロック(径3～5cm)～10Y7/1明緑灰色シルトブロック(径3cm) 混 [S315埋土]
 - 66 10Y7/2灰白色シルト 10Y3/2オリーブ黒色シルトラミナ状堆積 [S315埋土]
 - 67 10Y7/2灰白色シルト 10Y3/2オリーブ黒色シルトラミナ状堆積 炭粒(径1cm) 含 [第III - 3・4層]
 - 68 10YR6/2灰草褐色粗粒砂～礫(径0.5cm) 偽礫(径5～10cm) 含 [第III - 3・4層]
 - 69 10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂(径2～3cm) 混 礫(径20cm) 多混 土器多混 [S727埋土 第III - 5層砂礫層]
 - 70 10YR5/2灰草褐色細粒砂 10YR7/6明黄褐色細粒砂ブロック(径2～3cm) 混 炭粒(径1cm) 含 [第III - 1層]
 - 71 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂～礫(径1cm) 炭粒(径1～2cm) 含 [S744埋土]
 - 72 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂～礫(径1cm) 炭粒(径1cm) 含 [S744埋土]
 - 73 10YR6/2灰草褐色細粒砂～中粒砂 炭粒(径1cm) 炭粒(径1cm) 含 [S744埋土]
 - 74 10YR6/2灰草褐色細粒砂～中粒砂 炭粒(径1cm) 炭粒(径1cm) 含 [S744埋土]
 - 75 10YR7/6明黄褐色細粒砂ブロック(径2～3cm) 混 炭粒(径1cm) 含 酸化鉄分沈着 [第III - 1・2層]
 - 76 10YR6/2灰草褐色細粒砂～粗粒砂～10YR5/1褐灰色粗粒砂 炭粒(径1cm) ラミナ状混 酸化鉄分沈着 灰成堆積 第III - 1・2層]
 - 77 10YR6/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂 炭粒(径1～2cm) 含 酸化鉄分沈着 [第III - 1・2層]
 - 78 10YR5/2灰黄褐色細粒砂～中粒砂 10YR7/6明黄褐色細粒砂ブロック(径2cm) 混 炭粒(径1cm) 含 [第III - 1・2層]
 - 79 10YR5/2灰黄褐色細粒砂～礫(径1～2cm) 含 酸化鉄分沈着 [第IV - 1層]
 - 80 10YR5/2灰黄褐色細粒砂～礫(径1～2cm) 含 炭粒(径1～2cm) 含 酸化鉄分沈着 しまり強 [第IV - 1層]
 - 81 10YR5/2灰黄褐色細粒砂～中粒砂 偽礫(径1～2cm) 含 炭粒(径1～2cm) 含 [第IV - 1層]
 - 82 10YR4/2灰草褐色細粒砂～粗粒砂(径1～2cm) 少混 礫(径5～10cm) 含 炭粒(径2cm) 多含 [第IV - 1層]
 - 83 10YR3/1黒褐色細粒砂～粗粒砂 偽礫(径1cm) 含 炭粒(径1cm) 多含 礫(径5～10cm) 含 土器多混 [第IV - 1層]
 - 84 10YR3/1黒褐色細粒砂～粗粒砂 偽礫(径1cm) 含 炭粒(径1cm) 多含 礫(径5～10cm) 含 土器多混 [S216埋土]
 - 85 10YR3/1黒褐色細粒砂～粗粒砂 偽礫(径1～2cm) 含 炭粒(径1cm) 含 酸化鉄分沈着
 - 86 10YR3/1黒褐色細粒砂～粗粒砂 偽礫(径1～2cm) 含 礫(径5～10cm) 含 炭粒(径2～5cm) 多含
 - 87 10YR4/1褐灰色細粒砂～中粒砂 炭粒(径1～2cm) 含 [S749埋土]
 - 88 10YR5/2灰黄褐色シルト～細粒砂 礫(径3～5cm) 含 炭粒(径1cm) 含 酸化鉄分沈着
 - 89 10Y7/2灰白色シルト 10Y3/2オリーブ黒色シルトラミナ状堆積 草木の植物遺体層 炭粒 炭粒(径5cm) 含
 - 90 10YR1/7/1黒色シルト 10Y7/2灰白色シルト 炭粒(径2～3cm) 含
 - 91 10YR1/7/1黒色細粒砂～10YR3/1黒褐色細粒砂 偽礫(径1～2cm) 多含 炭粒(径2～3cm) 多含 礫(径5～10cm) 含
 - 92 10YR1/7/1黒色シルト 10Y7/1明緑灰色シルトブロック(径2～3cm) 混 炭粒(径1cm) 含 [S745埋土]
 - 93 10YR1/7/1黒色シルト 10Y7/1明緑灰色シルトブロック(径1～2cm) 混 炭粒(径1cm) 含 [S746埋土]
 - 94 10YR1/7/1黒色シルト 偽礫(径1cm) 少混 炭粒(径1cm) 含 [S747埋土]
 - 95 10YR1/7/1黒褐色粗粒砂～礫(径1～2cm) 10YR7/6明黄褐色粘土ブロック(径3～5cm) 混 炭粒(径1cm) 含 [S748埋土]
 - 96 10Y7/2灰白色シルト～10Y7/1明緑灰色シルト～礫(径1～2cm) 含
 - 97 10YR1/7/1黒色シルト～10YR7/3にぶい黄褐色シルト 偽礫(径1～2cm) 含
 - 98 10YR1/7/1黒色シルト～中粒砂 含
 - 99 10YR7/8黄褐色粘土～10YR7/2にぶい黄褐色粘土
 - 100 10YR7/2にぶい黄褐色粘土
 - 101 10YR7/4にぶい黄褐色細粒砂～10YR8/4浅黄褐色粘土
 - 102 10YR7/6明黄褐色シルト～粘土～10YR8/4浅黄褐色シルト～粘土
 - 103 10YR7/6明黄褐色細粒砂～シルト



第251図 8区北壁土層断面図(3)

水成堆積層の可能性がある。この第Ⅲ層下面を第3遺構面として調査を行った。

第Ⅳ層（78～85層）は弥生時代終末期から古墳時代前期の遺物包含層である。調査区東半部に堆積し、東端部から西へ3.5m程の段落ち部で収束する。第Ⅳ層は丘陵斜面部と平坦部の境（ $Y=-23,913$ 付近）から平坦部と低地部の境（ $Y=-23,898$ 付近）まで旧地形に沿うように層厚0.1～0.6mで安定的に堆積する。北壁沿いで検出したS216土器廃棄土坑はこの第Ⅳ層に帰属する。第Ⅳ層の特色として、灰黄褐色から黒褐色細粒砂を基本として偽礫や炭粒を多く含んでいる。出土遺物は弥生時代後期から終末期から古墳時代前期の土器を主体とする。この第Ⅳ層下面を第4遺構面として調査を行った。

第Ⅴ層（86～95層）は弥生時代後期の遺物包含層である。調査区東半部に堆積し、東端部から西へ3.5m程の段落ち部で収束する。丘陵斜面部と平坦部の境（ $Y=-23,913$ 付近）から平坦部と低地部の境（ $Y=-23,898$ 付近）まで旧地形に沿って西から東へ緩やかに傾斜しながら堆積する。層厚0.1～0.65mを測り、調査地内でも北半（ $X=-55,370$ 付近）を境に厚い。本層は黒褐色細粒砂からシルトを基調として偽礫や炭粒を多く含み、上層に比べ粘質に富む。出土遺物は弥生後期前葉から後葉の土器が多量に出土している。

サイズも比較的大きいものが目立ち、摩耗も少ないため、近在から流出したものと考えられる。この第Ⅴ層下面を最終遺構面である第5遺構面として調査を行った。

第Ⅵ層（96～103層）は基盤層である。灰白色シルトから黒色シルト（96～98層）が丘陵斜面部と平坦部の境（ $Y=-23,913$ 付近）から東に堆積し、西の丘陵側に堆積する黄橙色粘土を基調とする基盤層（99～100層）が丘陵斜面部と平坦部の境付近から96～98層下部に潜り込む。シルト層と粘土層はともに層厚は0.40m以上と推測される。

（4）平坦部・低地部南壁の土層堆積（第247・252・253・373～374図、表67・68、写真32、PL.124～125）

民地を境とした調査地南辺は幅1.5mの控えを取り、重機による第Ⅰ層除去後、安全勾配を取りながら幅0.6mの排水溝を掘削した。なお、調査終盤に南壁の図面記録後S21グリッド内で幅4.4m、高さ2.2mにわたり大雨の影響により壁面が一部崩落している。調査の行程上調査手順が逆になってしまったが、土層写真は崩落後のものであり、土層図には崩落ラインを入れている。

第Ⅰ層（1～28層）は地点により層の微細な差や層厚の差はあるものの、ほぼ調査区全体に広がり、基本的に現代の表土と造成土である。黄褐色粗粒砂を基本とする表土と造成土1～4層が、西側から中央部まで0.3～0.4m程度、東側では0.8～1m程度の厚さで堆積する。特に調査地の南寄りには宅地造成による削平が著しく、南壁西側（ $Y=-23,910$ ～ $-23,930$ ）では暗渠や攪乱（5～6層、21～22層及び28層）が顕著に認められる。

第Ⅱ層（29～40層）は中近世の遺物包含層である。低地部にあたる調査区東端から西へ5m（ $Y=-23,896$ ）付近まで堆積するが、それより以西は認められなかった。基盤層の黄褐色、黄橙色細粒砂及び粘土ブロック土（29～36層）を主体とし、拳大の礫を多く包含する。調査地は中央平坦部と東部低地部との境に比高差1m程度の段落ちが北西-南東方向（北壁 $Y=-23,900$ ～南壁 $Y=-23,897$ 付近）にみられるが、北壁同様それを埋めるような堆積となっている。第Ⅱ層下部では自然木や礫を含むS315溝（38～40層）やS533杭列が確認された。第Ⅱ層上面は概ね水平となっており、調査地東半に堆積する第Ⅳ層の高さにほぼ揃っているが、これは現代の造成で両層上面が削平されたためと考え



第252図 8区南壁土層断面図(1)

- [第I層:現代造成土・暗渠埋土]
- 1 10YR6/3にぶい黄褐色粗粒砂 マサ・礫(径20cm)含
 - 1' 10YR7/8黄褐色粗粒砂～10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂 砕石・礫(径10～20cm)含
 - 2 10YR6/2灰黄褐色粗粒砂～10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂
 - 3 10YR6/2灰黄褐色粗粒砂
 - 4 10YR7/6明黄褐色粗粒砂
 - 5 10YR1/7/1黒色シルト～10G/7/1明緑灰色シルト～10YR7/8黄褐色粘土 [暗渠埋土]
 - 6 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂 砕石多混 [暗渠埋土]
 - 7 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～中粒砂
 - 8 10YR6/8明黄褐色粗粒砂～10YR6/1褐灰色シルト
 - 9 10YR6/2灰黄褐色粗粒砂～10YR6/1褐灰色シルト
 - 10 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～10YR5/1褐灰色粗粒砂
 - 11 10YR7/6明黄褐色粗粒砂～10YR6/2灰黄褐色粗粒砂
 - 12 10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂～10YR7/6明黄褐色粗粒砂 礫(径3～10cm)含
 - 13 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂～10YR7/8黄褐色粗粒砂 礫(径3cm)含 瓦含
 - 14 10YR7/8黄褐色粘土～10YR3/1黒褐色粗粒砂 礫(径10～20cm)含
 - 15 10G/5/1緑灰色シルト～10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂
 - 16 10YR6/4にぶい黄褐色粗粒砂
 - 17 10YR6/2灰黄褐色粗粒砂
 - 18 10YR7/8黄褐色粗粒砂～10YR8/6黄褐色粗粒砂 礫(径20～30cm)含
 - 19 10YR7/6明黄褐色粘土～10YR8/3浅黄褐色粘土
 - 20 10YR7/8黄褐色粗粒砂
 - 21 10YR8/6黄褐色シルト～10YR5/3にぶい黄褐色粗粒砂 礫(径20cm)多含 [暗渠埋土]
 - 22 10YR8/8黄褐色シルト～10YR8/4浅黄褐色シルト 礫(径20cm)多含 [暗渠埋土]
 - 23 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂
 - 24 10YR8/6黄褐色シルト～10G/7/1明緑灰色シルト
 - 25 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂～10YR7/8黄褐色粗粒砂
 - 26 10G/2オリーブ灰色粗粒砂～10YR1/7/1黒色シルト
 - 27 10YR6/1褐灰色粗粒砂～粗粒砂 10YR7/8黄褐色粘土ブロック(径2cm)混 [近世以降ビット埋土]
 - 28 10YR3/1黒褐色粗粒砂 竹管含 [暗渠埋土]
- [第II層:中世包含層・遺構埋土]
- 29 10YR6/1褐灰色粗粒砂～10YR6/2灰黄褐色粗粒砂 10YR7/8黄褐色粘土ブロック(径3～5cm)混 炭粒(径1～2cm)含 [第II-1層]
 - 30 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂 10YR8/8黄褐色粘土ブロック混 [第II-1層]
 - 31 10YR8/6黄褐色粗粒砂～粗粒砂～10YR6/1褐灰色粗粒砂 礫(径2～5cm)含 [第II-2層]
 - 32 10YR7/6明黄褐色粗粒砂～10YR6/2灰黄褐色粗粒砂 炭粒(径1cm)含 [第II-2層]
 - 33 10YR7/8黄褐色粗粒砂～10YR5/1褐灰色粗粒砂 礫(径15～20cm)含 [第II-2層]
 - 34 10YR5/6黄褐色粗粒砂～中粒砂 10YR8/6黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 [第II-2層]
 - 35 10YR5/2灰黄褐色シルト [第II-2層]
 - 36 10YR6/2灰黄褐色粗粒砂～中粒砂 10YR6/8明黄褐色粘土ブロック(径5cm)混 礫(径10cm)含 [第II-2層]
 - 37 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂～粗粒砂 炭粒(径1cm)含 [第II-2・3層]
 - 38 10YR6/1褐灰色粗粒砂 10YR8/4浅黄褐色粗粒砂ブロック(径3cm)混 [S315埋土]
 - 39 10YR8/4浅黄褐色粗粒砂 [S315埋土]
 - 40 10YR8/4浅黄褐色粗粒砂～10YR3/1黒褐色粗粒砂 [S315埋土]
- [第III層:古代～中世包含層・遺構埋土]
- 41 10YR1/7/1黒色シルト 10YR8/6黄褐色粗粒砂ブロック(径1cm)混
 - 42 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂～10YR3/1黒褐色粗粒砂 炭粒(径1～2cm)含 [第III-1～3層]
 - 43 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂 礫(径10～20cm)含 炭粒(径1～2cm)含 [第III-1～3層]
 - 44 10YR6/2灰黄褐色粗粒砂 10YR8/4浅黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 礫(径20cm)多含 [第III-4層]
 - 45 10YR3/1黒褐色粗粒砂～中粒砂 礫(径20cm)含 炭粒(径1～2cm)含 [第III-4層]
 - 46 10G/7/1明緑灰色粗粒砂～10YR3/1黒褐色粗粒砂 礫(径2～5cm)多含 土器多含 [S727埋土 第III-5層砂礫層]
 - 47 10YR1/7/1黒色シルト [S727埋土 第III-5層砂礫層]
 - 48 10YR7/6明黄褐色粘土 10YR6/2灰黄褐色粗粒砂ブロック(径2～3cm)混 炭粒(径1cm)含 [S738埋土]
 - 49 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂～粗粒砂
- [第IV層:弥生～古墳包含層・遺構埋土]
- 50 10YR3/1黒褐色粗粒砂～礫(径1cm) 偽礫(径1～2cm)含 炭粒(径1cm)含 [第IV-1層]
 - 51 10YR6/2灰黄褐色粗粒砂～10YR3/1黒褐色粗粒砂 炭粒(径1cm)含 [第IV-1層]
 - 52 10YR3/1黒褐色中粒砂～粗粒砂 偽礫(径1～2cm)多含 炭粒(径2～3cm)含 酸化鉄分沈着 [第IV-1層]
 - 53 10YR3/1黒褐色粗粒砂～礫(径1cm) 偽礫(径1～2cm)含 炭粒(径1cm)含 [第IV-1・2層]
- [第V層:弥生包含層・遺構埋土]
- 54 10YR1/7/1黒色粗粒砂～中粒砂 礫(径20cm) 炭粒(径1～2cm)多含
 - 55 10YR6/6明黄褐色粗粒砂 炭粒(径1cm)含 [S743埋土]
 - 56 10YR3/1黒褐色粗粒砂 10YR6/6明黄褐色粘土ブロック(径5cm)混 炭粒(径1cm)含 [S741埋土]
 - 57 10YR3/1黒褐色粗粒砂～10YR6/3にぶい黄褐色粗粒砂 炭粒(径1cm)含 [S742埋土]
 - 58 10YR3/1黒褐色粗粒砂 10YR7/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径5cm)混 [S740埋土]
 - 59 10YR3/1黒褐色粗粒砂 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂ブロック(径5～10cm)混 炭粒(径1cm)含 [S412埋土]
 - 60 10YR7/6明黄褐色粘土 10YR3/1黒褐色粗粒砂ブロック(径10～20cm)混 [S739埋土]
 - 61 10YR3/1黒褐色粗粒砂 10YR7/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径3cm)混 炭粒(径1cm)含 [S739埋土]
- [第VI層:基盤層]
- 62 10G/6/1褐灰色シルト～粗粒砂 礫(径15～20cm)含
 - 63 10YR4/1褐灰色シルト～10YR3/1黒褐色シルト
 - 64 10G/7/1明緑灰色粗粒砂～礫 しまり強
 - 65 10YR7/4にぶい黄褐色粘土～10YR3/1黒褐色粘土
 - 66 10YR1/7/1黒色シルト 草木の植物遺体層 炭細粒・炭粒含
 - 67 10G/7/1明緑灰色シルト 10YR1/7/1黒色シルトブロック(径5～10cm)少混
 - 68 10YR1/7/1黒色シルト草木の植物遺体層 炭細粒・炭粒含
 - 69 10YR7/3にぶい黄褐色粘土
 - 70 10YR6/6明黄褐色粘土
 - 71 10YR6/4にぶい黄褐色粘土
 - 72 10YR7/8黄褐色粘土～10YR8/4浅黄褐色粘土
 - 73 10YR7/8黄褐色シルト～10YR8/4浅黄褐色シルト しまり弱

第253図 8区南壁土層断面図(2)

られる。調査において第Ⅱ層を1～3層に細分し、出土遺物もこれに従って分類した。

第Ⅲ層（41～49層）は古代から中世の遺物包含層である。調査区中央平坦部及び東端部に堆積するが、北壁に比べ堆積状況は不良である。これは、現代の宅地造成による削平を受けているためである。中央平坦部では $Y=-23,910$ を中心として約5.6mの長さで、層厚0.03～0.05m（R21～22、S21～22グリッド）とかなり残っている状況であった。当該範囲は宅地に伴う暗渠や攪乱が多いことから、第Ⅲ層上面での遺構検出ができず、下面の基盤層72～73層直上を第1遺構面として調査を行っている。一方、調査区東端から西へ5.8mの範囲、段落ち部に層厚0.1～1.1mで堆積している。段落ち部の41～45層は灰黄褐色細粒砂を基調として44層のように浅黄褐色細粒砂ブロックを含むことを特色としており、その多くが中世以降の低地部を埋めるための造成土と考えられる。

第Ⅳ層（50～53層）は弥生時代終末期から古墳時代前期の遺物包含層である。調査区東半部に堆積し、東端部から西へ5m程の段落ち部で収束する。調査地南半において第Ⅳ層は西半には宅地造成のため残存しておらず、中心部の段落ち（ $Y=-23,907$ 付近）から平坦部と低地部の境（ $Y=-23,898$ 付近）まで旧地形に沿うように層厚0.2～1mで安定的に堆積する。北壁に比べ土色はやや黒味が強く、黒褐色細粒砂から粗粒砂を基本として偽礫や炭粒を多く含んでいる。出土遺物は弥生時代後期から終末期から古墳時代前期の土器を主体し、第Ⅳ層中からも多くの土器が出土した。

第Ⅴ層（54～61層）は弥生時代後期の遺物包含層である。調査区東半部に堆積し、東端部から西へ6.8m程の段落ち部で収束する。第Ⅳ層と同じく調査区西半部では宅地造成により残存しておらず、東半部も北壁に比べ層厚は0.05～0.2mと薄い。第Ⅴ層は黒褐色細粒砂を基調として偽礫や炭粒を多く含み、上層に比べ粘質に富む。南壁でも出土遺物は弥生後期前葉から後葉の土器が多量に含まれていた。

第Ⅵ層（62～73層）は基盤層である。緑灰白色シルトから黒色シルト（62～68層）が中央平坦部の段落ち部から低地部に堆積し、西の丘陵側には黄橙色シルトから粘土を基調とする基盤層（69～73層）が堆積する。

第2節 検出した遺構

1 調査の概要

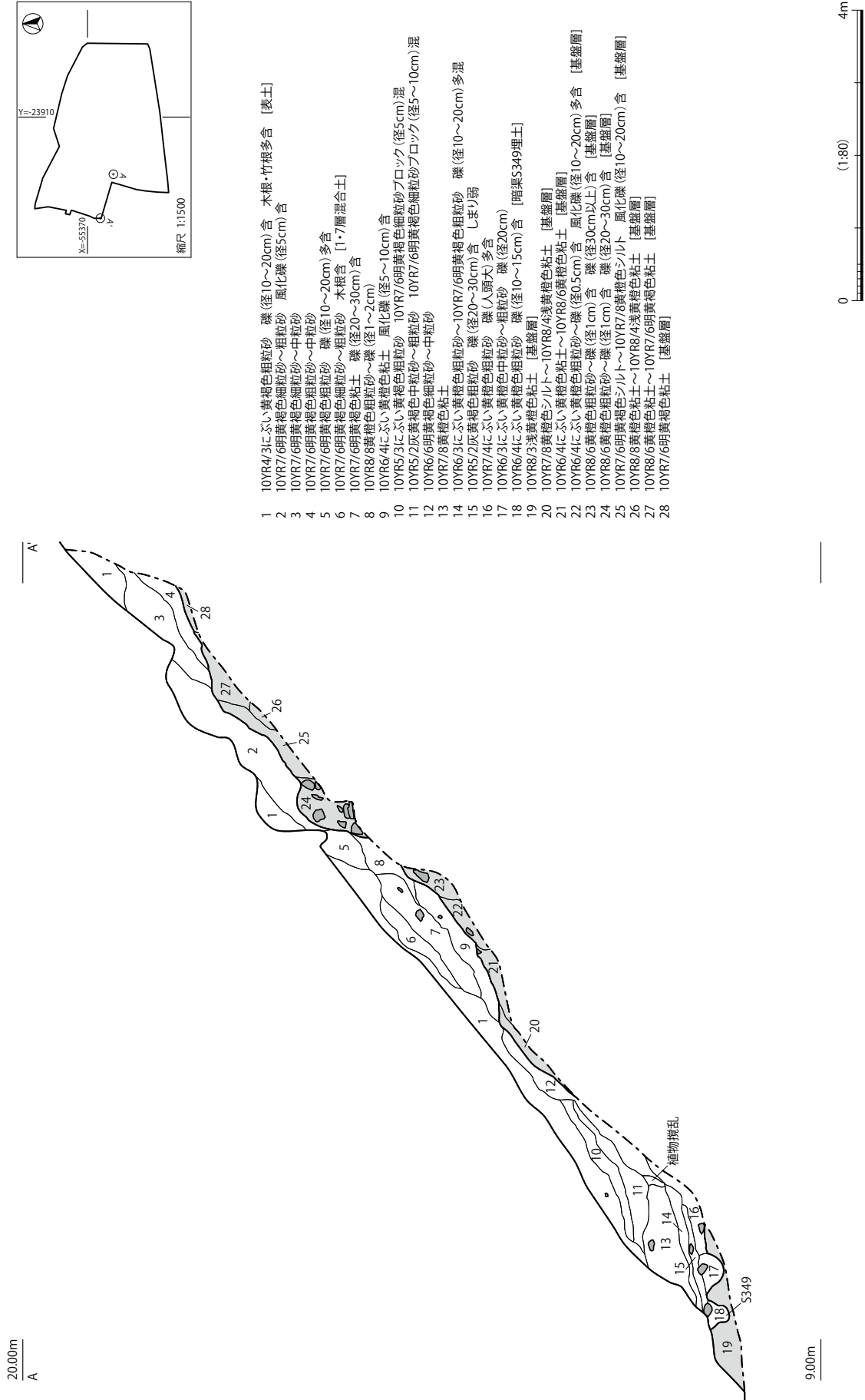
(1) 丘陵裾部（エリア1・2）

調査地は平成26年度に竪穴建物や掘立柱建物、布掘建物（以上、弥生時代から平安時代）、段状遺構や畑跡（中世から近世）等の複数時期の遺構が検出された7区丘陵裾部の南に隣接する。調査前の状況は民家で、近代から現代の造成によって原地形の改変が進んでいた。調査地東端部は、盛土による低地部の嵩上げによって本来の地形が比較的良好に残っている状況であった。平坦部の丘陵寄り西側は遺構面が1面、低地寄り東側は5面の調査である。

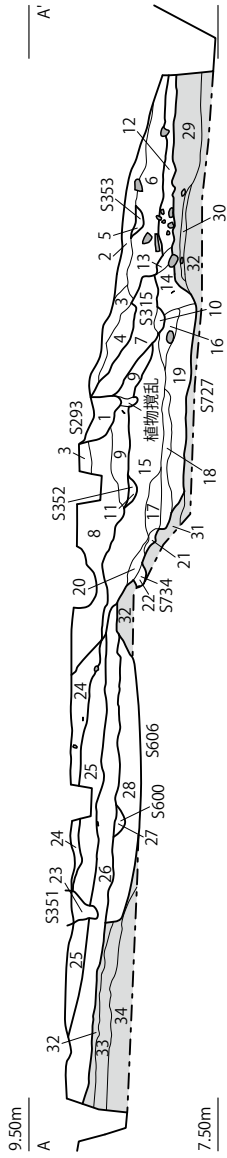
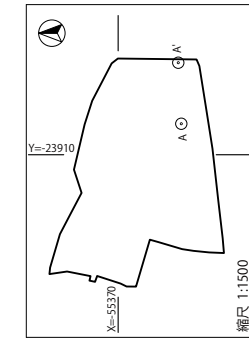
検出遺構は水田2筆、畦畔3条、溝25条、自然流路2条、段状遺構1基、掘立柱建物1棟、土坑66基、柱穴68基、ピット342基、杭列3条、焼土3基、炭化物集中部1基である。

(2) 丘陵斜面部（エリア3）

調査地は平成27年度に中世埋蔵銭や地下式土坑（中世後半から近世）、段状遺構（弥生時代後期から古代）等の複数時期の遺構が検出された7区丘陵斜面の南に隣接する。調査前の状況は山林で、特に斜面中腹から上方にかけては急傾斜で崖状を呈していた。一方、斜面裾から平坦部にかけては段状の平坦面と緩斜面が見られたため、当初は遺構の残りが良いものと思われたが、調査の進展に伴い、



第254図 8区丘陵斜面南部南壁土層断面図



- 【第II層：中近世包含層・遺構埋土】
- 1 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂 10YR5/6黄褐色粗粒砂ブロック(径5cm)混 炭粒(径1cm)含 [S293埋土]
 - 2 10YR5/4にふい黄褐色粗粒砂～礫(径1cm) 炭粒(径2cm)含 [第II - 1層]
 - 3 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～礫(径3cm) 10YR5/4にふい黄褐色粗粒砂ブロック(径3cm)混 炭粒(径1cm)多含 [第II - 1層]
 - 4 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～礫(径3cm) 10YR6/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径3cm)少混 偽礫(径1cm)多含 [第II - 1層]
 - 5 10YR5/4にふい黄褐色粗粒砂～礫(径1cm) 炭粒(径1cm)含 [S353埋土]
 - 6 10YR4/1褐灰色粗粒砂～礫(径2cm) 10YR5/4にふい黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 炭粒(径1cm)多含 [第II - 1層]
 - 7 10YR5/6黄褐色粗粒砂～礫(径1cm) 10YR6/4にふい黄褐色粗粒砂ラミナ状混 炭粒(径1cm)含 しまり強 [第II - 1層]
 - 8 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～礫(径2cm) 10YR5/4にふい黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 炭粒(径1cm)含 [第II - 1層]
 - 9 10YR4/1褐灰色細粒砂～中粒砂 礫(径1cm)含 [S315埋土]
 - 10 10YR3/1黒褐色細粒砂～粗粒砂 炭粒(径1cm)多含 [S315埋土]
- 【第III層：古代～中世包含層・遺構埋土】
- 11 10YR3/2黒褐色シルト～粗粒砂 礫(径3～5cm)含 炭粒(径1cm)含 [S352埋土]
 - 12 10YR4/1褐灰色粗粒砂～礫(径1cm) 10YR5/6黄褐色粗粒砂ブロック(径10cm)多混 炭粒(径1cm)含 [第III - 2～4層]
 - 13 5YR/6黄色シルト～10GY7/1明緑灰色シルト [第III - 2～4層]
 - 14 10YR6/2灰黄褐色粗粒砂～礫(径3～5cm)含 10GY5/1緑灰色シルト 礫(径3～10cm)含 炭粒(径1～2cm)含 折含 [第III - 2～4層]
 - 15 10YR3/1黒褐色細粒砂～粗粒砂 偽礫(径1～2cm)含 礫(径5～10cm)含 炭粒(径1～2cm)含 [第III - 2～3層]
 - 16 10GY5/1暗緑灰色シルト～10GY3/1暗緑灰色シルト 10YR8/6黄褐色シルトブロック(径3～5cm)混 [第III - 2～3層]
 - 17 10YR3/1黒褐色粗粒砂～礫(径1～3cm) 炭粒(径1cm)含 [第III - 2～3層]
 - 18 10GY5/1暗緑灰色シルト～10GY3/1暗緑灰色シルト 10YR8/6黄褐色シルトブロック(径3～5cm)混 [第III - 2～3層]
 - 19 10GY5/1暗緑灰色シルト～粗粒砂 10YR1/7/1黒色シルト～5Y6/8オリープ色粗粒砂ラミナ状混 礫(径5～10cm)多含 炭粒(1～3cm)含 [S727埋土 第III - 5層砂礫層]
 - 20 10YR3/1黒褐色粗粒砂～礫(径1～3cm) 炭粒(径1cm)含 [第III - 2～3層]
 - 21 10GY5/1暗緑灰色シルト～10GY3/1暗緑灰色シルト [第III - 2～3層]
 - 22 10YR1/7/1黒色シルト 炭粒(径1cm)含 [S734埋土]
 - 23 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～礫(径3cm) 10YR7/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径5cm)混 炭粒(径1cm)含 [S351埋土]
 - 24 10YR4/2灰黄褐色粗粒砂～礫(径2cm) 10YR6/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径10～20cm)混 偽礫(径1cm)多含 炭粒(径1cm)多含 [第III - 1層]
- 【第IV層：弥生～古墳包含層】
- 25 10YR3/1黒褐色粗粒砂～礫(径3cm) 偽礫(径1～3cm)多含 炭粒(径1cm)多含 酸化鉄分沈着 [第IV - 1・2層]
- 【第V層：弥生包含層・遺構埋土】
- 26 10YR1/7/1黒色粗粒砂(径1cm) 偽礫(径1～2cm)含 炭粒(径1～2cm)多含
 - 27 10YR1/7/1黒色シルト～粗粒砂 炭粒(径1cm)含 [S600埋土]
 - 28 10YR1/7/1黒色シルトS78/6黄色シルトブロック(径10～20cm)混 炭粒(径1～2cm)含 [S606埋土]
- 【第VI層：基盤層】
- 29 5YR/6黄色シルト～10GY4/1暗緑灰色シルト
 - 30 10YR2/1黒色シルト 草木の植物遺体層 炭細粒・炭粒含
 - 31 10YR2/1黒色粗粒砂～礫(径1～2cm)
 - 32 10GY7/1明緑灰色シルト～10GY8/1明緑灰色シルト
 - 33 10YR4/1褐灰色細粒砂～粗粒砂
 - 34 10YR3/2黒褐色シルト～細粒砂

第255図 8区トレンチ11土層断面図

この緩斜面と平坦面は近世の斜面裾の削平とその後の斜面崩壊により形成された地形で、原地形の形状を留めていないことが判明した。遺構面数は1面である。こうした状況により、今回検出した遺構は斜面上方でピット4基、斜面裾と平坦部で土坑2基、溝3条、杭列1条を検出するにとどまった。

2 第1遺構面

(1) 水田・畦畔

S224・225・227・229・243 (第256・258～260図、表34、PL.124・127・151・152)

R20～21、S20～21グリッド、調査区平坦部東端に位置する。南壁土層断面19層下面で畦畔を確認しており、それに区画された水田を2筆検出した。全体に残りが不良であるものの、畦畔は南北方向に1条、東西方向に2条認められた。調査区全域縦横に暗渠が掘削され、遺構面が損なわれている部分も多い。南北方向のS229畦畔の東側にも暗渠が認められ、畦畔の東側肩部が削られている。

畦畔は幅0.3～0.9m、残存高は0.05～0.13mを測る。検出した水田2筆を画する東西方向のS227畦畔は、西側が削平されているものの南北方向のS229畦畔に取り付く可能性が高い。なお、畦畔の南側は調査区外へ延びる可能性が高く、調査区北側と東側は攪乱により削平されており、遺存していない。S229畦畔は南北方向の畦畔であるが、南壁断面によれば薄く盛土がされている。これを境に西側には水田は検出されなかったため、耕作域と非耕作域を区別する主たる畦畔であった可能性が高い。

水田は東西方向に長軸をおく長方形で、検出規模はS224水田が東西9.72m、南北6.08m、S225水田が東西8.0m、南北8.36mを測る。このうちS225水田はS243畦畔で南北に区画されるが、S243畦畔はS229畦畔まで取り付かず、西半が削平されている。水田面の標高は8.9～9.1mを測る。水田耕作土は暗褐色細流砂で鉄分の沈着が顕著である。

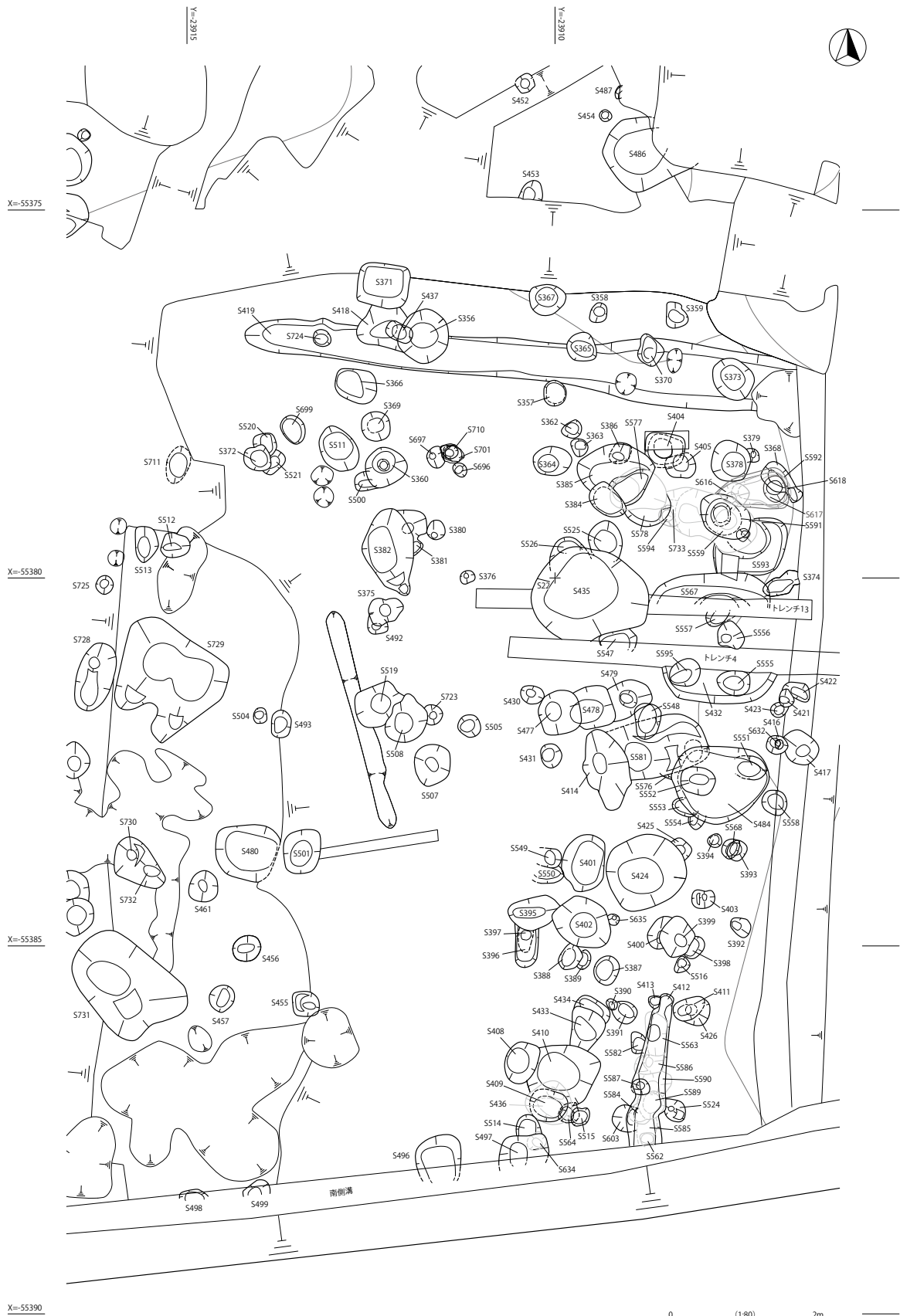
作土中から近世以降の陶磁器類がまとめて出土している。S224水田出土638～640は肥前系(唐津系)陶器皿である。638は灰釉施釉で底部高台脇に胎土目が付着する。豊付のみ露胎である。639は灰釉施釉の溝縁皿であり、体部は露胎となっている。底面には兜巾がみられ、内面見込には胎土目が付着する。以上は16世紀末の特徴を示す。640は無高台皿で見込に砂目が付着。底面には糸切り痕が残る。17世紀前葉に比定されよう。S225水田出土645～648は肥前系(唐津系)陶器の碗と皿である。645は灰釉施釉で見込釉輪状掻き取りされている。646はオリーブ施釉で見込中央が露胎、底部は碁笥底状を呈する。647は染付碗であり、ロクロ目が強い。以上の3点は17世紀後半に比定される。648は灰釉皿であり、体部から底部は露胎である。高台が低く高台内と見込に砂目が付着している。17世紀前葉の特徴を示す。S227畦畔からは肥前系陶器の碗641と皿642が出土している。641は内外面にぶい橙色の施釉であり、口縁端部が外反する。17世紀後半頃と考えられる。642は灰釉施釉で、やや厚みを帯びた器壁を持ち体部下半で段を有する。18世紀前葉頃と推定される。S243畦畔からは肥前系(唐津系)陶器の蛇の目状高台を持つ643が出土している。644は瀬戸美濃系の壺であろう。口縁端部が玉縁となり外反する。15世紀頃と推定する。

以上の出土遺物から、本遺構の帰属時期は近世以降と考えられる。

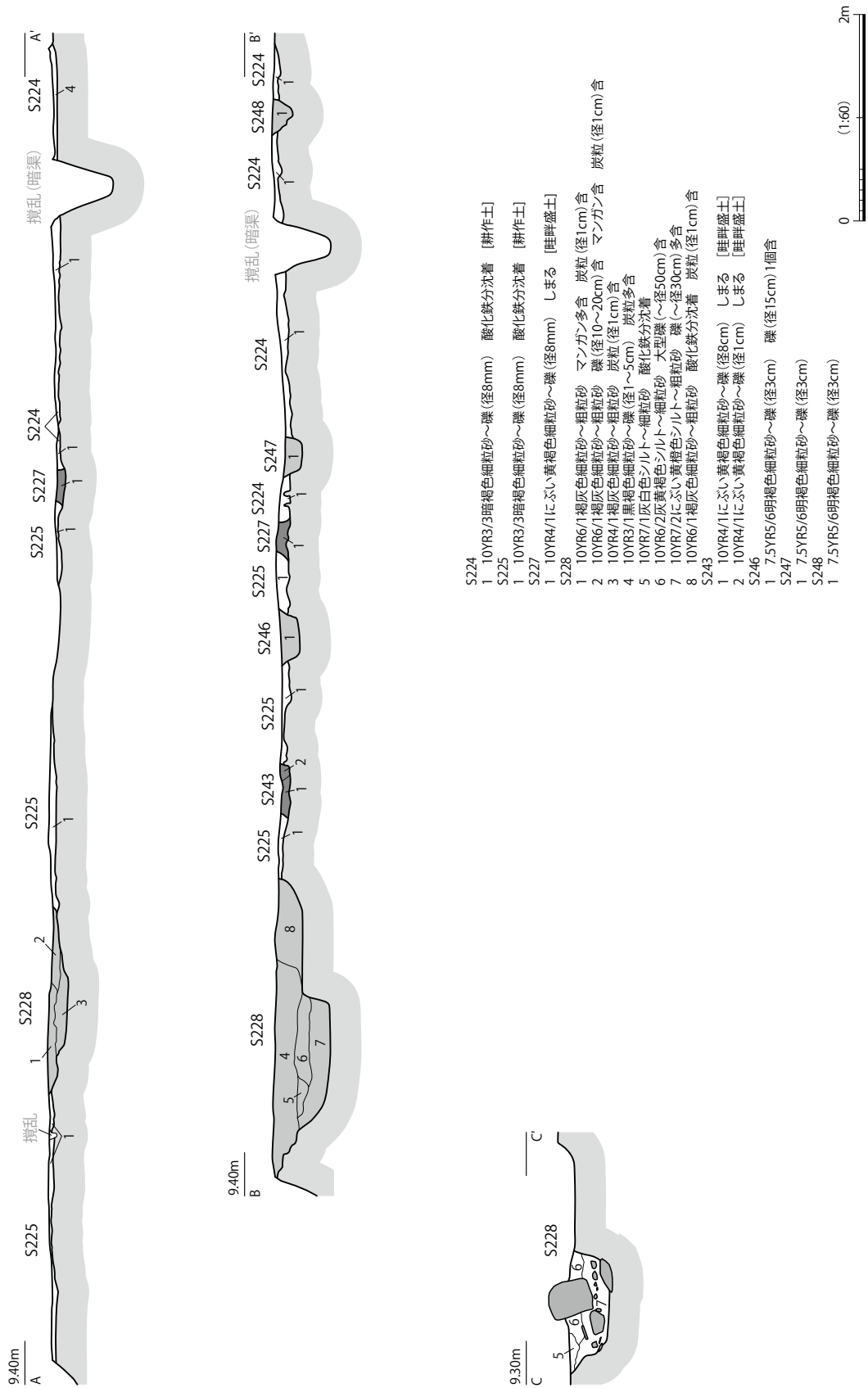
(2) 溝

S228 (第256・258～261図、表35・55・60、PL.127・151・181)

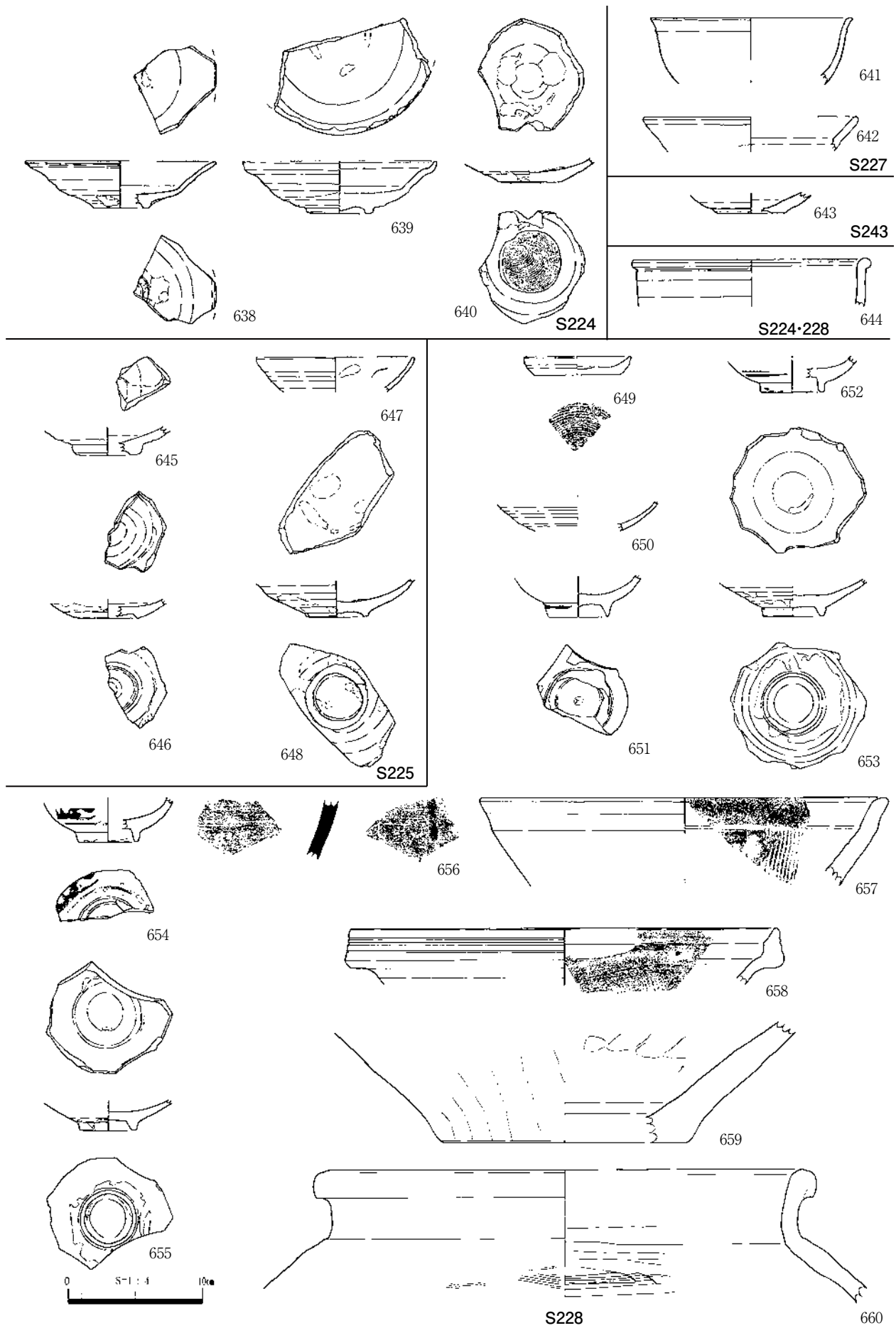
R20～21グリッド、調査区北東部に位置する東西方向に走行する自然流路である。S225水田の耕作土を掘り込むことから、S225水田より後出する。検出規模は長さ8.5m、幅0.4～2.9m、深さは検出面から最も残りの良い東側で0.55mを測る。遺構の幅が西側から東側に向かって広がるのは、西側



第257図 8区第1遺構面遺構集中部



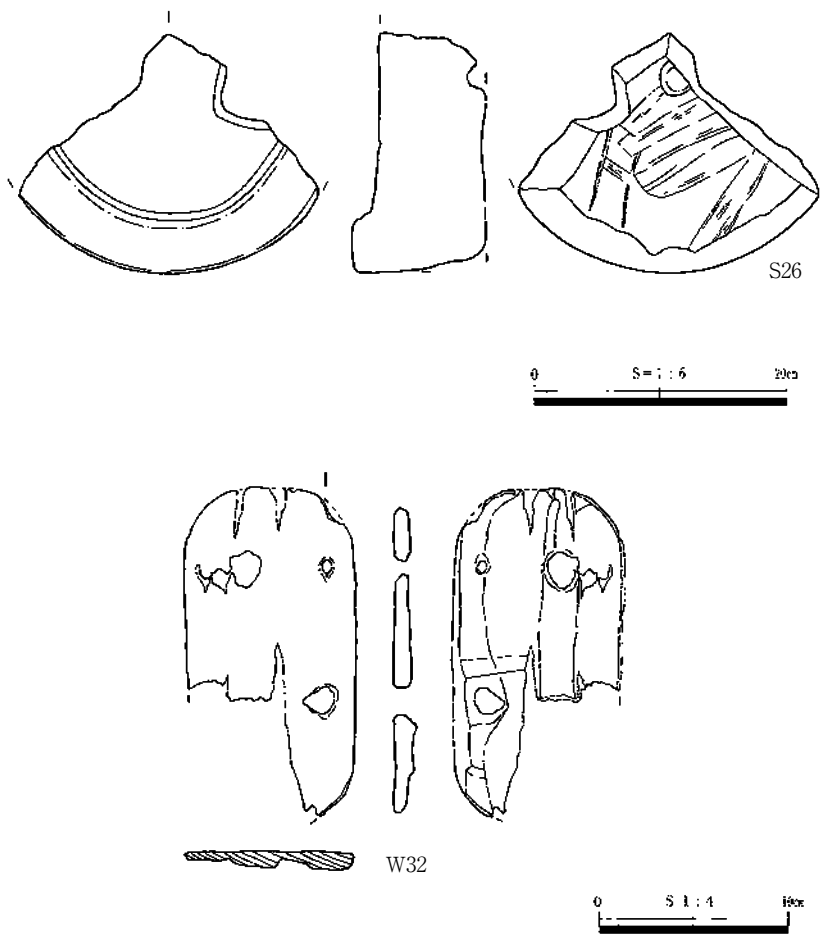
第259図 S228自然流路、S224・225・227・229・243畦畔、S246～248ピット断面図



第260図 S228自然流路(1)、S224・225水田、S227・243畦畔出土遺物

が近代以降の造成による削平を受けているためである。溝の断面形は皿状で南側の一部は長さ5.8m、幅1m程にわたり段状を呈する。埋土は細流砂からシルトが堆積し、径0.1～0.5mの大型礫を多く含んでいる。溝底面は西端から東端に向けて底面で約0.64mの傾斜をもって下がる。平面、断面形態が均質でなく、埋土中に大型礫を多く含む状況から、自然流路と考えられる。

S228自然流路からは肥前系（唐津系）陶器の碗と皿652～655、越前焼の大甕659、播鉢657、備前焼播鉢658、大甕660などが出土している。649は土師器小皿であり、立ち上がりが低く、回転糸切り痕を残す。13世紀後葉から14世紀頃と考えられる。650は青緑色の嬉野釉を持つ北部九州系の小碗。18世紀前半頃か。651、652及び654は北部九州と肥前系の染付碗、653と655は肥前系磁器の染付皿である。651は高台内が露胎、高台上に1条の圈線がめぐる。18世紀前葉頃と考えられる。652と654は陶胎染付碗で、波佐見焼と考えられる。653と655の染付皿は、いずれも見込は釉輪状掻き取り、砂目が付着する。652～655は17世紀後半に比定されよう。656は備前焼の甕体部片、658は有段の口縁に3条の沈線がめぐる備前焼播鉢、660は折り返し玉縁状の口縁を持つ備前焼大甕である。658は17世紀前半、660はやや古く14世紀前半から中頃に比定される。657の播鉢は焼成不良で、11本以上単位の播目を有する。15世紀末頃か。659は越前焼の大甕底部である。S26は安山岩製の石臼の上臼である。周囲に幅4cm、高さ1.5cmの縁が巡っており、物配り穴、軸受け、摺目溝がみられる。W32は差歯下駄である。台に歯を固定するためのホゾ穴がみられるが、遺存状態が不良のため、全体形状が不明瞭である。



第261図 S228自然流路出土遺物(2)

以上の出土遺物から、本遺構の帰属時期は近世以降と考えられる。

S244 (第256・262・263図、表35・55・60、PL.135・152・181・184)

Q21～22グリッドに位置し、調査区中央部北寄り第Ⅱ層下面で検出した東西方向の溝である。

遺構の東端は現代の擁壁により攪乱を受け検出できなかった。ほぼ同じ位置に走行を同じくするS245溝、S306溝があるが、重複関係からS245溝に先行し、S306溝より後出する。

検出規模は長さ9.2m、幅0.4～1.2m、深さは検出面から最も残りの良い東側で0.51mを測る。溝の断面形はU字形で底面がやや平坦となる。埋土は自然堆積と考えられ、溝底面は西端から東端に向

けて底面で約0.1mの傾斜をもって下がっている。底面に鉄分が固着している範囲が部分的に認められることから、一定期間雨水等が滞留していた可能性がある。残存状況が不良であり判然としないが、溝の走行が直線的であることから人為的に掘削された可能性が高く、屋敷地の区画溝の可能性を指摘しておきたい。

溝底面から箸と考えられる木製品（W33）及び埋土中から須恵器（661）と青磁碗（662）が出土している。W33は最大長23.4cm、最大幅0.7cmで、表面は面取りがなされ、軸中心部に比べ両端部がやや細身を帯びる。661は平行タタキ、青海波状当て具痕を有する須恵器甕片である。662は鎬連弁文を持つ龍泉窯系青磁碗であり、13世紀初頭から前半頃と考えられる。S27は砥面2面からなる砥石であり、側面側の擦痕が顕著である。以上の出土遺物により、本遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。

S245（第256・262図、PL.135）

Q21～22グリッドに位置し、調査区中央部北寄り第Ⅱ層下面で検出した北西－南東方向に走行する溝である。S244溝を切り、ほぼ東西方向に走行を指向する点で共通するが、S306溝との前後関係は判然としない。遺構の東端は現代の擁壁により攪乱を受けているため検出できなかった。

検出規模は、長さ6.7m、幅0.5～0.7m、深さ0.15～0.18mを測る。断面形はU字状を呈し、西端から東端に向けて約0.14mの傾斜をもって下がっている。埋土は下層が自然堆積によるもので、上層は地山ブロックを含む混合土が認められるため、機能停止後に埋め戻された可能性が高い。

溝の性格は、S244溝の規模や主軸が類似することから、調査区中心部の柱穴やピット群を区画する溝と考えられる。本遺構から時期の判明する遺物は出土しなかったが、S244溝の走行方向の類似性から、中世後期以降に機能していたものと考えられる。

S306（第256・262・263図、表57、PL.135・180）

Q22、R22グリッドに位置し、調査区中央部北寄りで検出した北西－南東方向及び北西－南東方向にL字状に屈曲する溝である。S244溝に切られる状況が確認されているが、遺構の東側は削平のため検出面が低く、深度もそれにしたがって浅くなり、わずか0.1m程しか残らない。南北辺の南端は攪乱により検出されなかったが、本来はさらに延伸していたものと推測される。

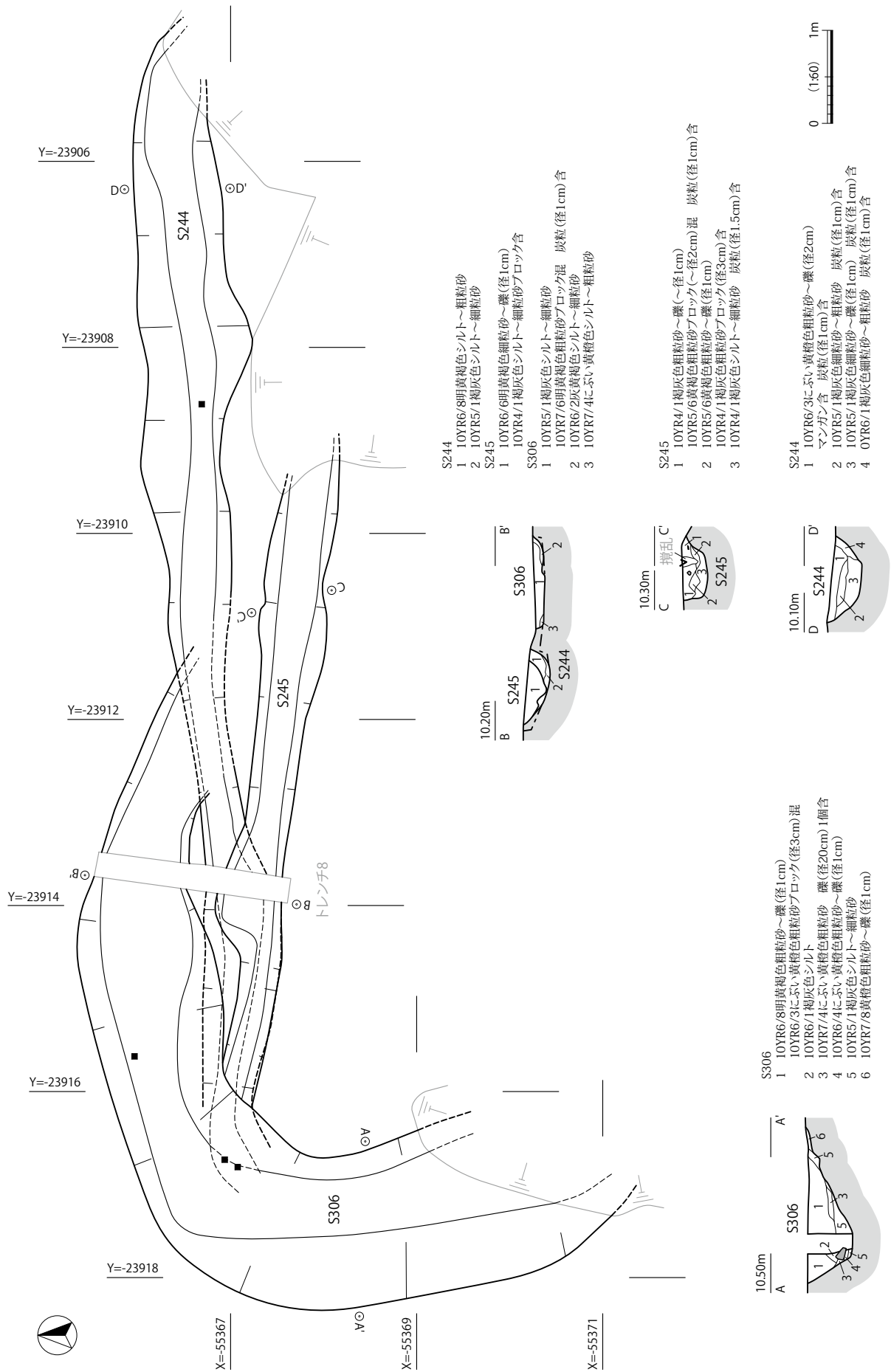
検出規模は東西辺が長さ5.6m、幅0.8～1.6m、深さ0.25m、南北辺は長さ3m、幅1.7m、深さ0.45mを測る。断面形は東西辺で浅い皿状、南北辺で逆台形状を呈し、その深度は南北辺が深いことから西側の丘陵斜面部を意識した構造となっている。

埋土は最上層に斜面基盤層由来のブロックが混入する。溝は緩やかなL字形を呈することから、調査区中心部の柱穴やピット群を区画する溝と考えられる。

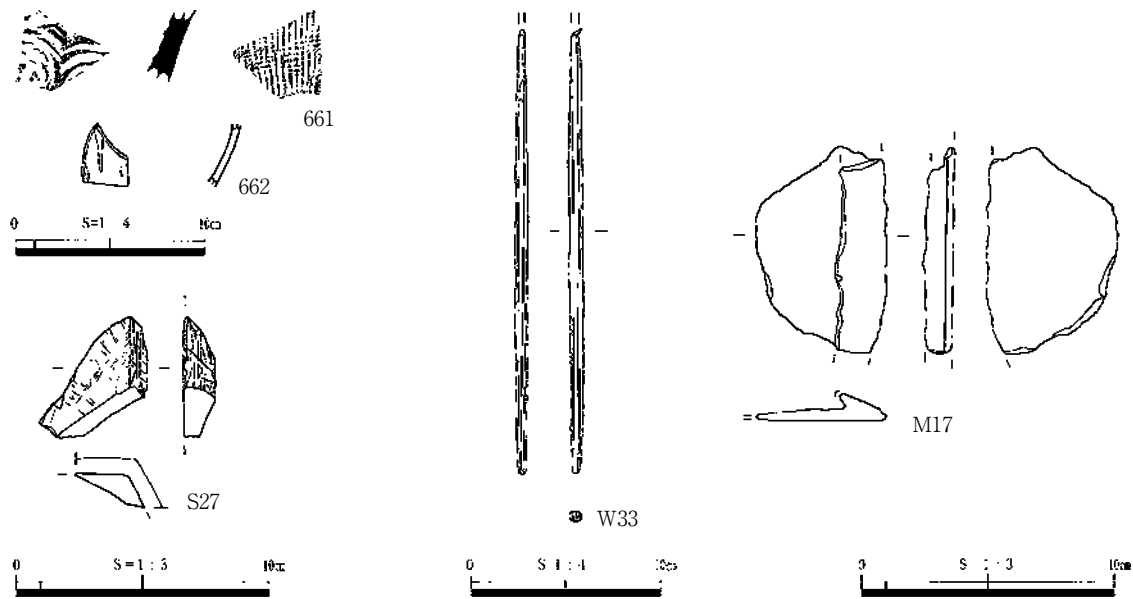
溝の下層から鉄製鋤鍬先M17が出土している。M17は折り返し部を有する鍬もしくは鋤の一部と推定される。本遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。

S349（第248・256・265・266図、表35・55、PL.149・152・153・181）

Q23、R23グリッド、丘陵斜面裾と平坦部の地山面及び近世以降造成土上で検出した。主軸を南西－北東方向にとり、残存長6.6m、幅0.3～0.7m、深さ0.35cmを測る石詰暗渠である。R23グリッドで幅1m程土橋状に途切れたあと、再度南側の調査区外に連続する。R23グリッド杭付近で、S350溝と交差しその上端を一部掘削していることから、本遺構が後出する。調査の都合上、暗渠北半部は近世造成土と同時に掘削したため図示できなかったが、溝の走行と調査区北壁の断面観察から北東方向へ延びていくことがわかり、本来の長さは16m以上に及ぶ。断面形は箱形で、内部には拳大から人頭大



第262図 S244・245・306溝平面・断面図



第263図 S244・306溝出土遺物

の礫を充填する。

暗渠からは弥生土器663や陶器664が出土した。663は外反する口縁部にヨコナデを施す弥生時代後期の甕、664は拵目が密に入り高台を有する須佐唐津焼。17世紀後半頃に相当しよう。S28は上面がわずかに窪む軽石製の砥石である。以上の出土遺物から、本遺構は近世後半に構築されたものと考えられる。

S412 (第256～257・264図)

S21グリッドに位置し、調査区中央部南よりで検出した南北方向に走行する溝である。S413とS524ピットを切る。遺構の南側は調査区外へ延びるため検出できなかった。検出規模は長さ2.1m、幅0.18～0.45m、深さ0.08～0.12mを測り、断面形はU字状を呈する。

埋土は黒褐色の細流砂とシルトが堆積している。本遺構の性格は不明である。本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から近世以降と想定する。

S419 (第256～257・264図)

R21～22グリッドに位置し、調査区中央部で検出した東西方向に走行する溝である。S356、S357、S365、S370、S373及びS418ピットに切られ、遺構の東側は削平のため検出できなかった。検出規模は長さ7.7m、幅0.3～0.9m、深さ0.05～0.07mを測る。断面形は皿状を呈する。

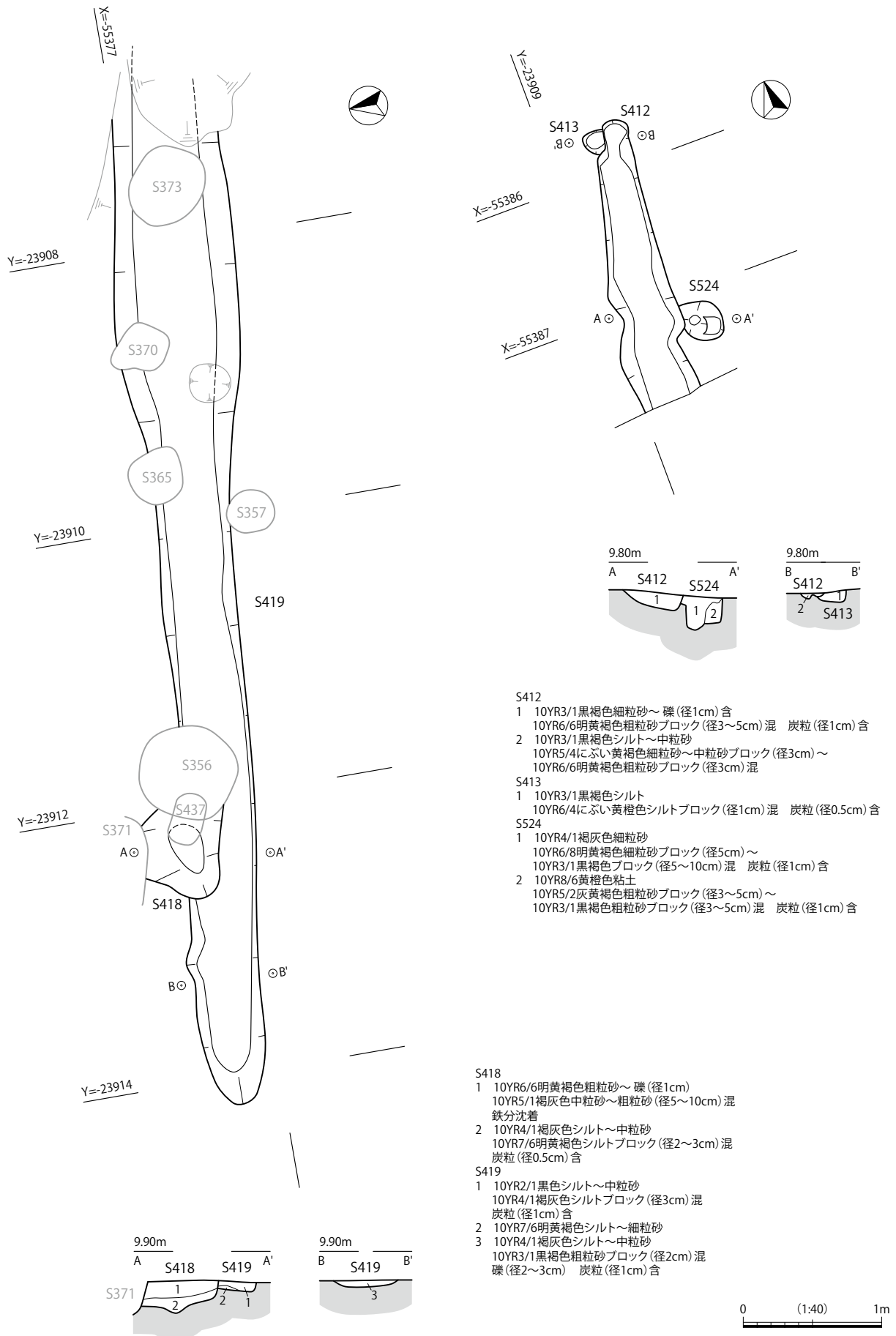
埋土は黒から灰褐色シルトが堆積している。遺構の性格は、東西方向に直線的に延び、柱穴やピット群を画するように位置していることから、これらを区画する溝の可能性はある。

出土遺物は、埋土中より土器細片が数点出土したが時期比定可能なものはなく、本遺構の帰属時期は埋土の特徴から近世以降と想定したい。

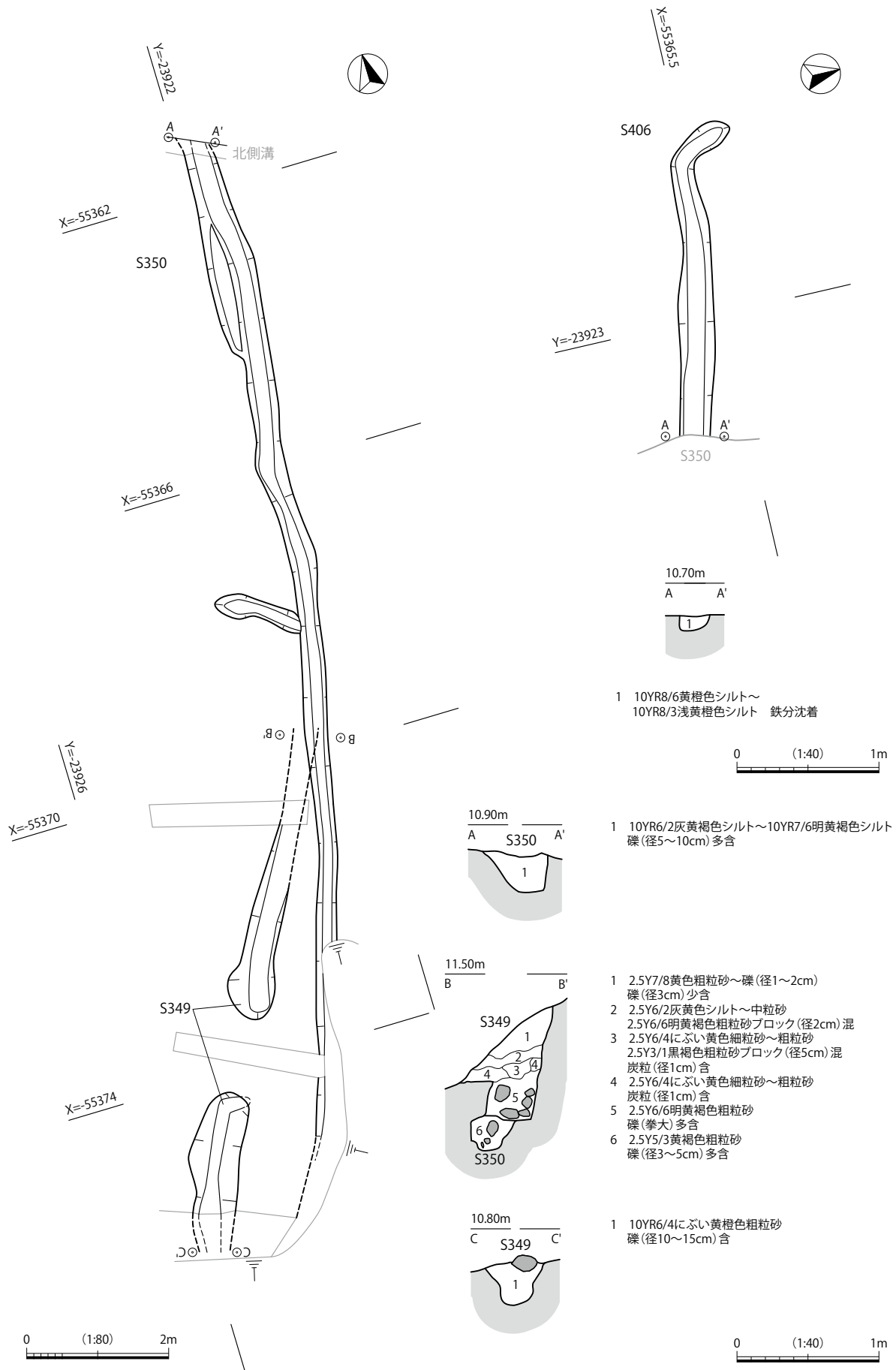
(6) 杭・杭列

S354 (第256・267・268図、表60・61、PL.149・184)

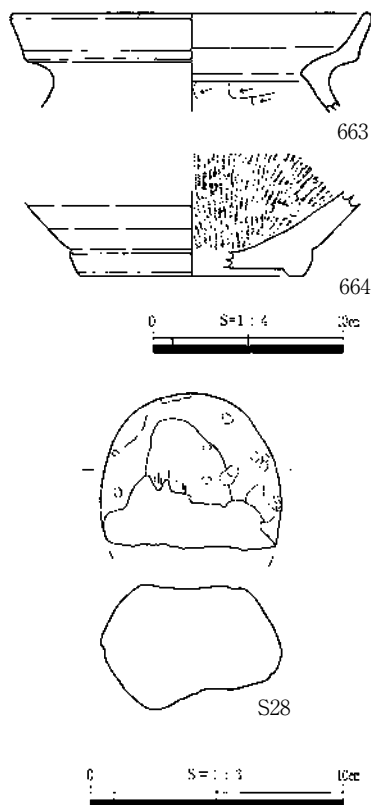
Q23、R23グリッド、丘陵斜面裾及び平坦部の地山面で検出した北東-南西方向の杭列である。S349溝にはほぼ平行し、幅0.2～0.5m程の間隔ではほぼ垂直に打ち込まれる。調査区内で杭は32本確認され、S349溝と同様に調査区南端付近で途切れた後、再度南側の調査区外に連続する。残存する杭はいず



第264図 S412・419溝、S413・418・524ピット平面・断面図



第265図 S349・350・406溝平面・断面図



第266図 S349・350溝出土遺物

れも自然木の先端を尖らせた丸杭を使用しており、最も残りの良いもので、長さ0.6m、径0.05mを測る。杭は検出面から最大で約0.6mの深さまで入念に打ち込まれる。重複関係からS349溝に先行するが、走行がほぼ平行していることから、近接した時期と考えられる。

杭列に伴う横板材等の痕跡は確認できなかったが、斜面裾に沿って深く打ち込まれており、本来的には横板材等を伴った土留施設の一部と想定される。なお、本遺構とS349溝に一部途切れる箇所がみられるが、ここに道状遺構等の特別な施設は認められなかった。

W34～45は杭である。32本の杭のうち12本の杭を図示した。いずれも針葉樹であり、芯持材の丸杭である。長さは14.7～52.8cm、径4.0～8.2cmであり、後述するS533杭列の杭と比較すると、小ぶりのものが多い。

S531 (第256・269図、表60)

R22グリッド、調査区南西寄りで検出した杭(W46)である。自然木の先端を尖らした丸杭であり、最大長29.7cm、最大幅13.3cmを測る。W46は針葉樹の芯持材である。帰属時期は不明。

(3) 土坑

S311 (第256・270図)

S20グリッド、調査区平坦部の東端で検出した土坑である。検出規模は長軸1.15m、短軸1.0m、深さは0.26mを測る。遺構の平面形は不整円形で、掘方の断面形はU字状を呈し、底面はやや起伏がある。

埋土は3層に分層され、基本的に地山ブロックなどを含む混合土であり、人頭大の礫も含まれるため人為的な埋め戻しの可能性が高い。

出土遺物は、埋土中より土器細片が数点出土したが時期比定可能なものはなく、本遺構の帰属時期については不明である。

S345 (第256・270図)

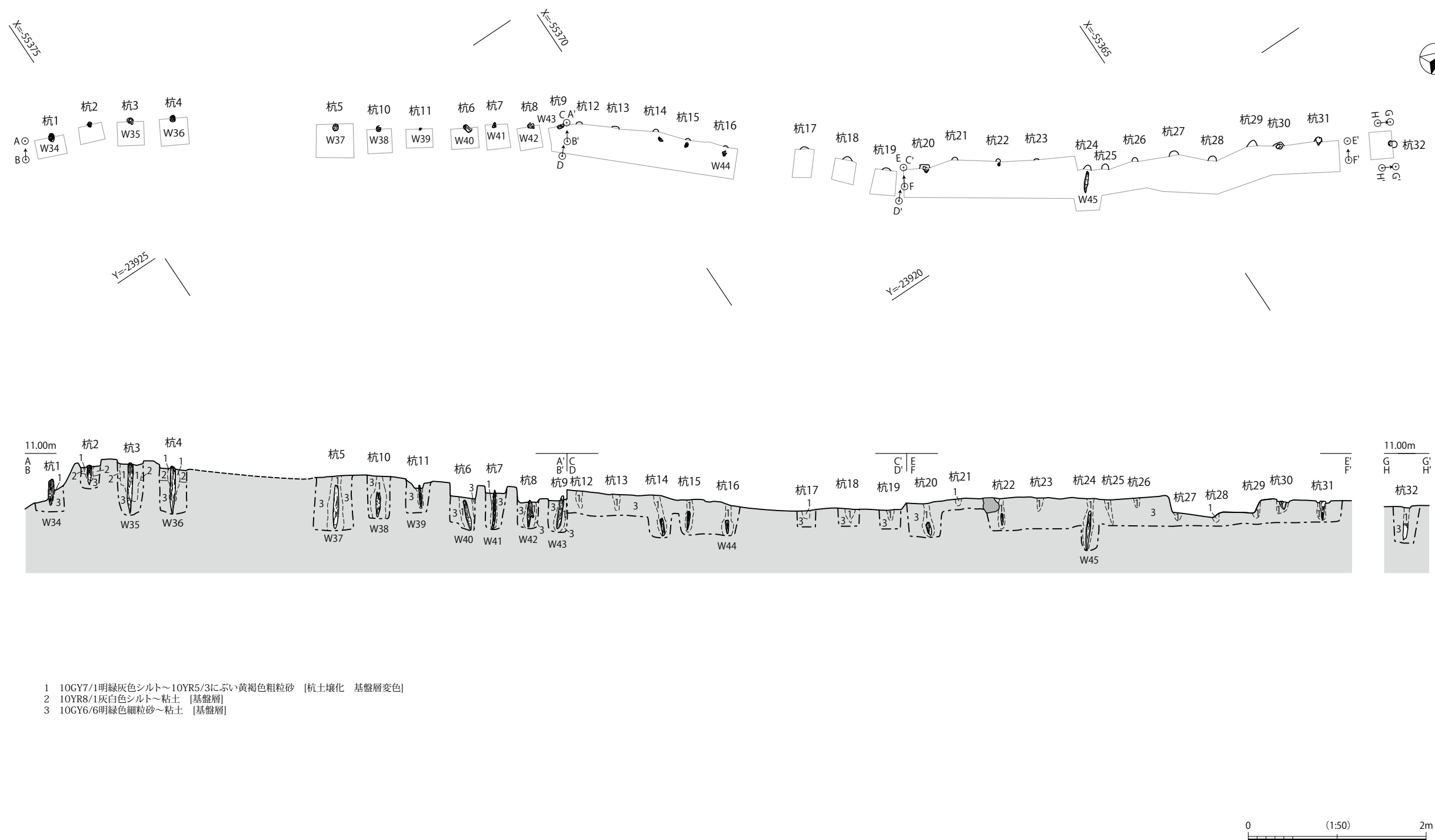
Q22グリッド、調査区中心部北寄りの平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸0.72m、短軸0.7m、深さは最大で0.39mを測る。遺構の平面形は不整円形で、掘方の断面形は箱形を呈し、底面はやや起伏がある。

埋土は3層に分層され、明黄褐色粗粒砂とシルト中に黒褐色粗粒砂から灰黄褐色粗粒砂ブロックが混じる。出土遺物は皆無で帰属時期、性格共に明確な判断材料に欠ける。

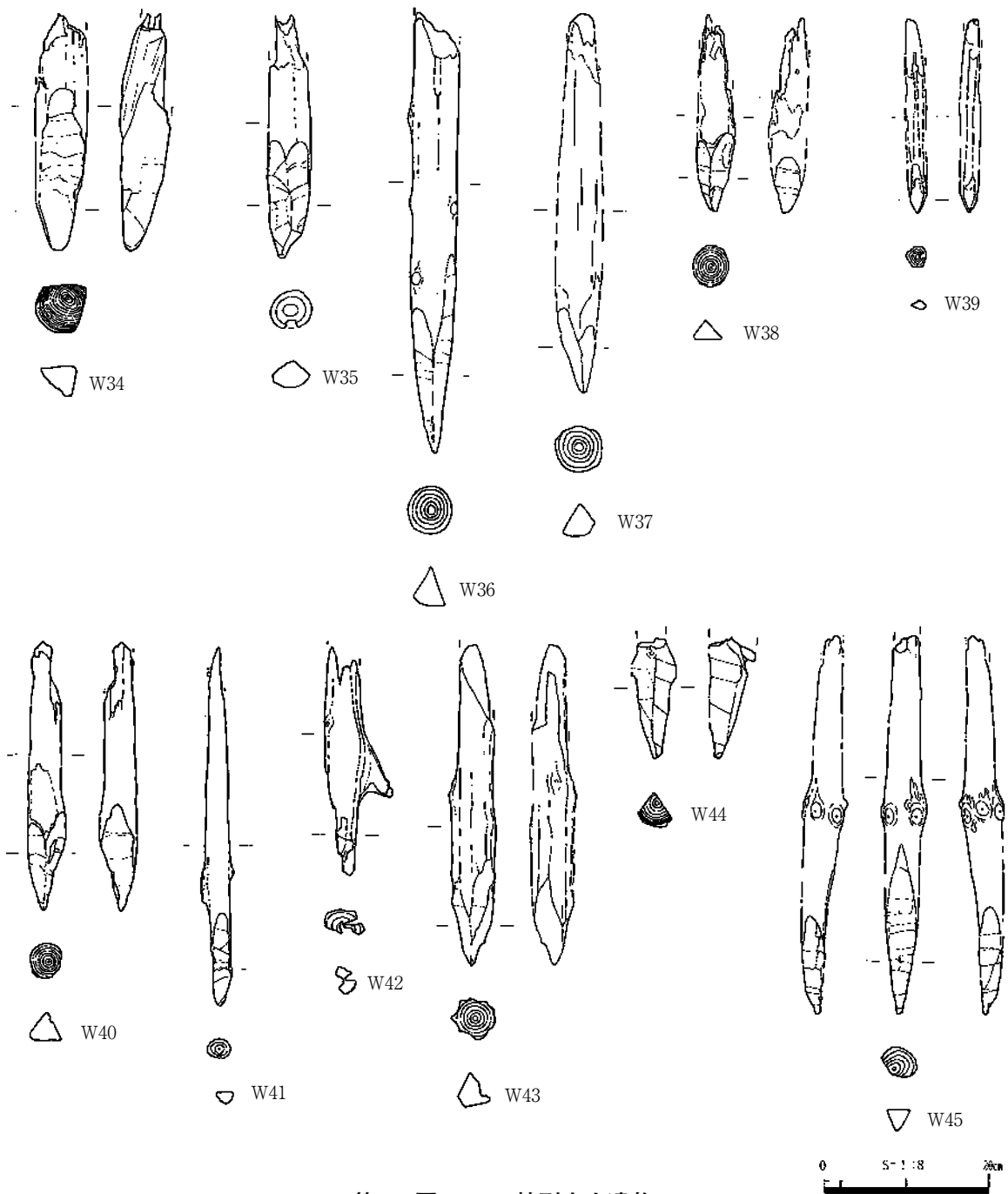
S346 (第256・270図)

Q22、R22グリッド、調査区中心部北寄りの平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸0.64m、短軸0.62m、深さは最大で0.13mを測る。遺構の平面形は不整円形で、掘方の断面形は皿状を呈し、底面はやや起伏がある。

埋土は単層で黒色粗粒砂ブロックを含む混合土であり、人為的な埋め戻しの可能性が高い。出土遺物は皆無で帰属時期、性格共に明確な判断材料に欠ける。



第267図 S354杭列平面・断面図



第268図 S354杭列出土遺物

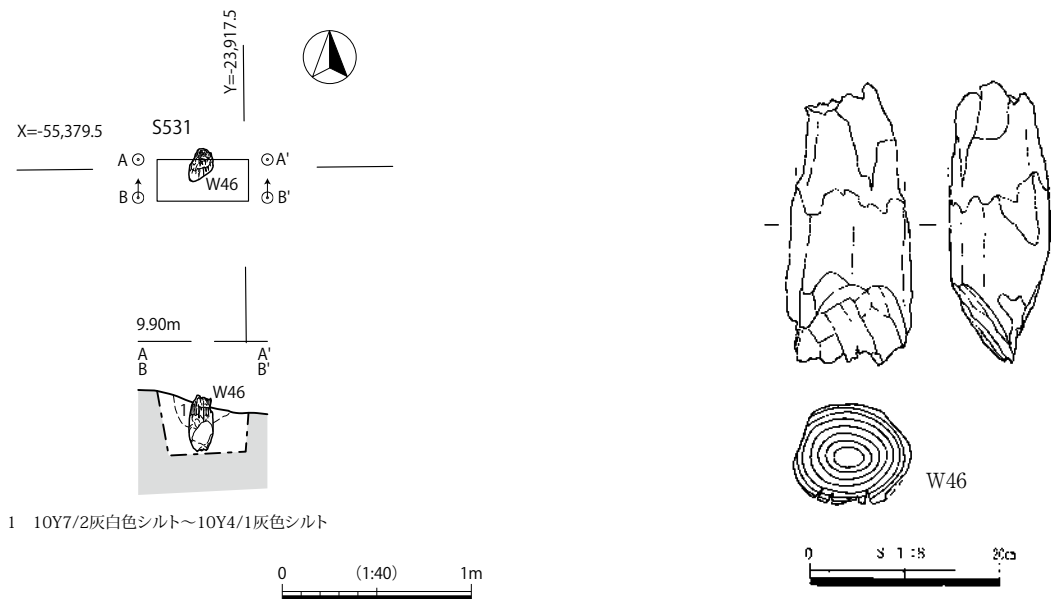
S348 (第256・270図、表35、PL.152)

R23グリッド、調査区南壁際の丘陵斜面裾の平坦面で検出した土坑である。調査区外に連続するため全形は不明であるが、検出規模は長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.7mを測る。底面は凹凸があり平坦ではない。

埋土は地山由来の礫を多く含む自然堆積層で、近世磁器が出土した。重複関係からS354杭列に先行する。肥前系磁器碗665は黒色粒を含んだ胎土を持ち、体部下半から底部は露胎である。本遺構の帰属時期は、出土遺物から近世以降と考えられる。

S356 (第257・271図、PL.128)

R22グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。S419溝を切る土坑で、検出規模は長軸0.75m、短軸0.68m、深さ0.27mを測る。平面形は円形を呈する。遺構の断面形はU字形を呈し、壁



1 10Y7/2灰白色シルト～10Y4/1灰色シルト

第269図 S531杭平面・断面図及び出土遺物

面が被熱により赤変している。遺構の底面に0.08mほどの粘土を貼ったところが焼成面となる。焼成面は硬化しているが、遺構の中位以上は被熱していない。

焼土の上面より炉壁が崩落した状況が確認され、これらは壁面中位の炉壁であった可能性が高く、廃絶時に炉壁を含む土で埋め戻されたものと考えられる。埋土中に鉄滓などの鍛冶関連遺物などは全く確認できず、鍛冶関連遺構の可能性は低い。

また、煙道などは検出されなかったことから、窯のような構造ではなく、露天の状態で何らかの焼成行為が行われたものと推察される。遺構から遺物は出土しなかったため、帰属時期は不明である。

S371 (第257・272図、表35、PL.128・153)

R22グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。S356土坑の北西に位置し、平面形が長方形を呈する。検出規模は長軸0.7m、短軸0.58m、深さ0.34mを測る。遺構の断面形は箱形を呈し、底面は平坦で壁面の立ち上がりは急勾配となる。

埋土は7層に分層されるが、灰黄褐色と灰白色シルトをベースとする上層と褐灰シルトをベースの下層に分かれる。遺構の性格は不明である。

出土遺物は666の高台付播鉢である。放射状に播目が施され、軟質焼成である。須佐唐津焼と考えられ17世紀後半頃のものであろう。したがって、本遺構の帰属時期は17世紀後半以降と考えられる。

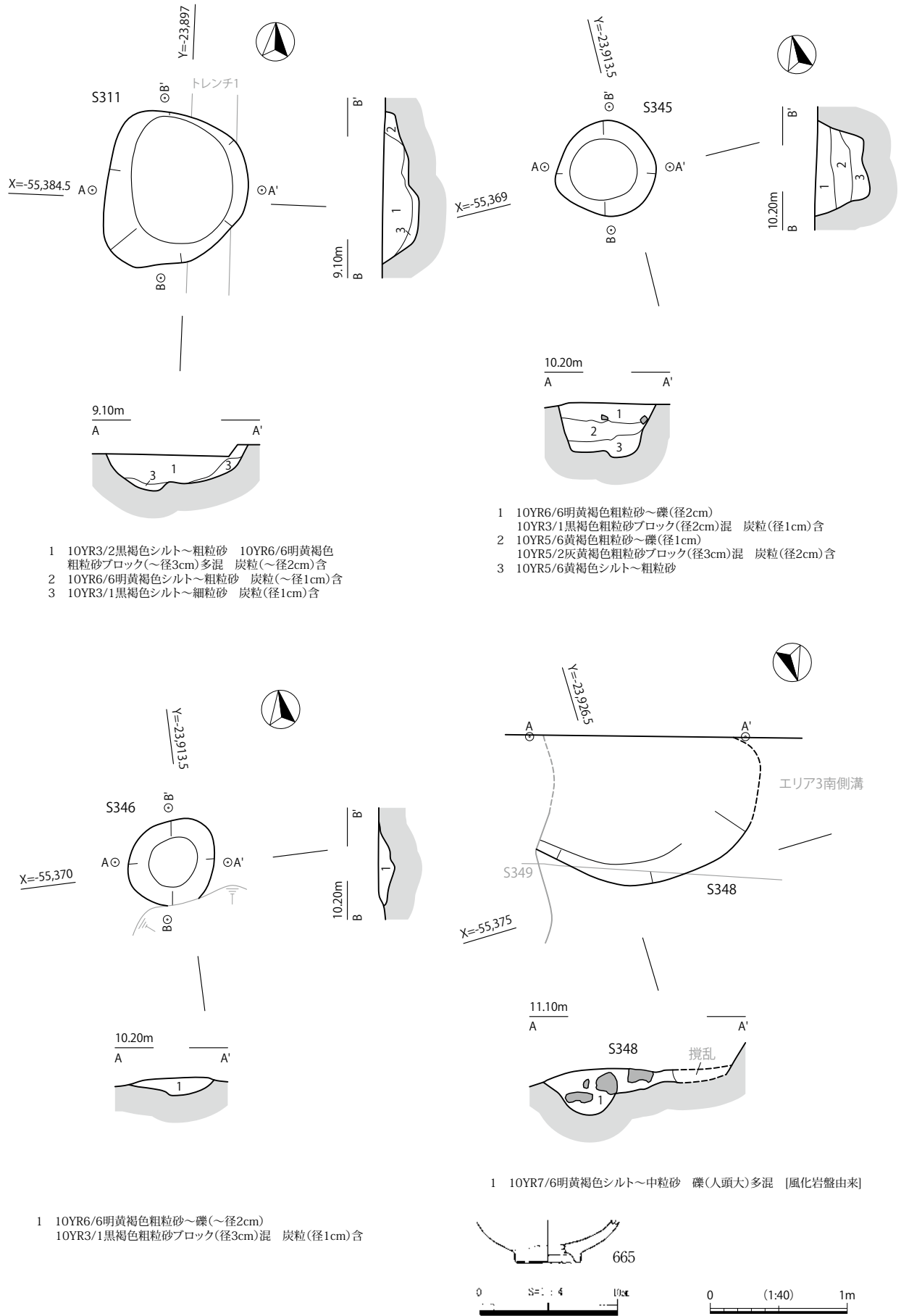
S385 (第257・272図、PL.128)

R21グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。南側をS384ピットに掘り込まれ、東側はS404柱穴を掘り込んでいる。平面形は東西方向に長軸をもつ不整楕円形で、検出規模は長軸1.00m、短軸は残存部で0.85m、深さは最大で0.33mを測る。遺構の断面形は逆台形を呈し、底面は南東部分に段状の平坦面を設ける。

埋土は5層に分層できるが、黒褐色から明黄褐色ブロックなどを含む混合土である。遺構の帰属時期は、埋土の特徴から近世以降と考えられる。

S407 (第256・272図)

Q22～23グリッド、調査区北端の平坦面で検出した平面円形の土坑で、直径1.1m、深さ約0.15m



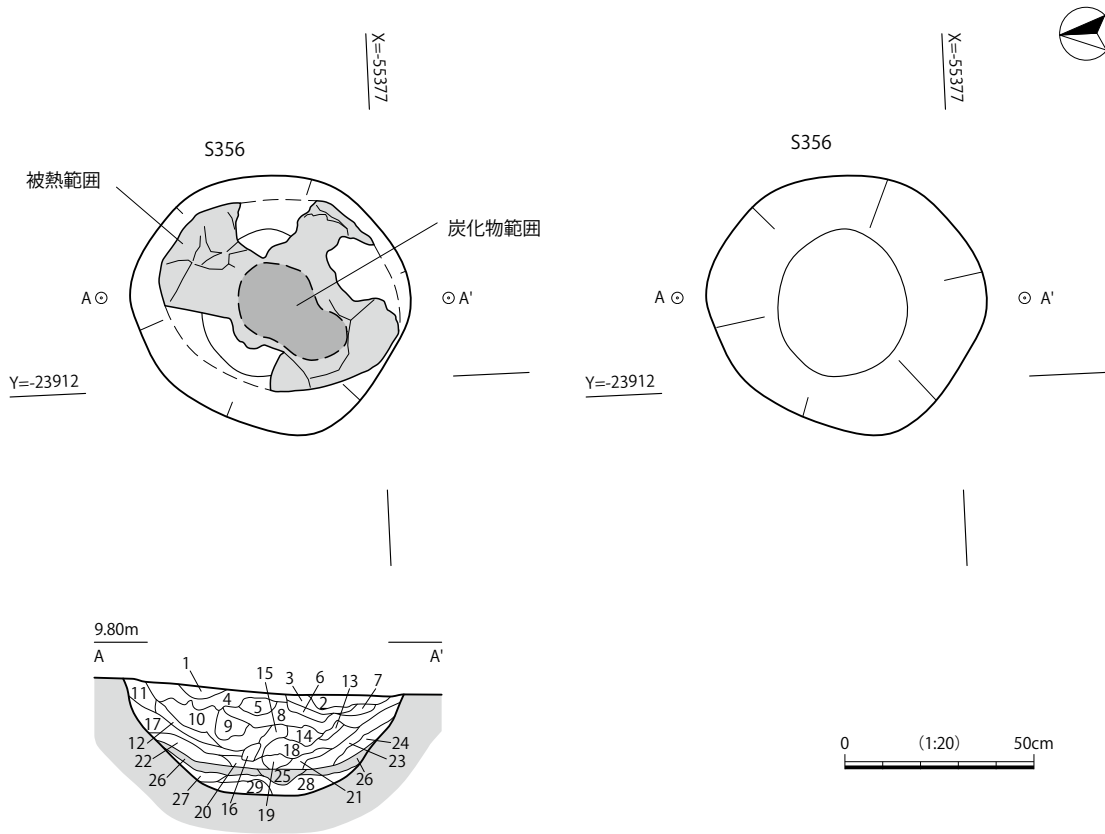
- 1 10YR3/2黒褐色シルト～粗粒砂 10YR6/6明黄褐色粗粒砂ブロック(～径3cm)多混 炭粒(～径2cm)含
- 2 10YR6/6明黄褐色シルト～粗粒砂 炭粒(～径1cm)含
- 3 10YR3/1黒褐色シルト～細粒砂 炭粒(径1cm)含

- 1 10YR6/6明黄褐色粗粒砂～礫(径2cm)
- 2 10YR3/1黒褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 炭粒(径1cm)含
- 3 10YR5/6黄褐色粗粒砂～礫(径1cm)
- 4 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂ブロック(径3cm)混 炭粒(径2cm)含
- 5 10YR5/6黄褐色シルト～粗粒砂

- 1 10YR7/6明黄褐色シルト～中粒砂 礫(人頭大)多混 [風化岩盤由来]

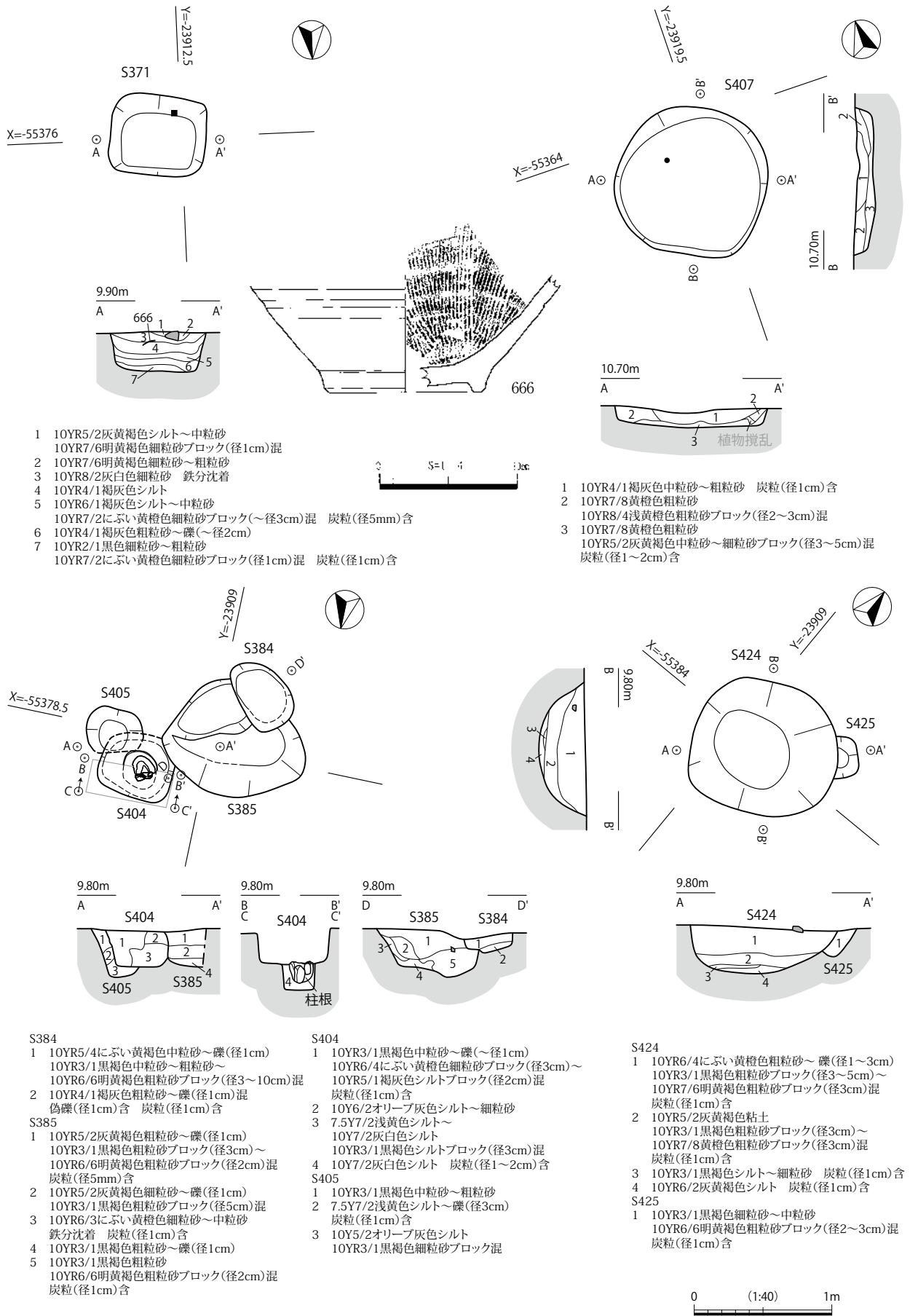
- 1 10YR6/6明黄褐色粗粒砂～礫(～径2cm)
- 2 10YR3/1黒褐色粗粒砂ブロック(径3cm)混 炭粒(径1cm)含

第270図 S311・345・346・348土坑平面・断面図及びS348土坑出土遺物



- | | | | | |
|----|------------------------------|----------------------------|----------------------------|--|
| 1 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂～中粒砂 (炉壁ブロック) | | | |
| 2 | 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 10YR5/6黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | |
| 3 | 10YR5/6黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 炭粒(径1cm)含 | |
| 4 | 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 10YR5/6黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | |
| 5 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂～中粒砂 (炉壁ブロック) | | | |
| 6 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂～中粒砂 (炉壁ブロック) | | | |
| 7 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂～中粒砂 (炉壁ブロック) | | | |
| 8 | 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 10YR5/6黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | |
| 9 | 10YR5/6黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 炭粒(径1cm)含 | |
| 10 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂～中粒砂 (炉壁ブロック) | | | |
| 11 | 10YR5/6黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 炭粒(径1cm)含 | |
| 12 | 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 10YR5/6黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | |
| 13 | 10YR5/6黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 炭粒(径1cm)含 | |
| 14 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂～中粒砂 (炉壁ブロック) | | | |
| 15 | 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 10YR5/6黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | |
| 16 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂～中粒砂 (炉壁ブロック) | | | |
| 17 | 10YR5/6黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 炭粒(径1cm)含 | |
| 18 | 10YR5/6黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 炭粒(径1cm)含 | |
| 19 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂～中粒砂 (炉壁ブロック) | | | |
| 20 | 10YR5/6黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 炭粒(径1cm)含 | |
| 21 | 10YR5/6黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 炭粒(径1cm)含 | |
| 22 | 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 10YR5/6黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | |
| 23 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂～中粒砂 (炉壁ブロック) | | | |
| 24 | 10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂～粗粒砂 | 10YR5/6黄褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | 5YR5/4にぶい赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)混 | |
| 25 | 5YR3/1黒褐色粘土 | | | |
| | 5YR5/6明赤褐色粗粒砂ブロック(径2cm)含 | 炭粒附着 | | |
| 26 | 5YR5/4にぶい赤褐色粘土 | 固くしまる [炉体] | | |
| 27 | 5YR5/8明赤褐色粗粒砂～中粒砂 | | | |
| | 5YR6/8橙色粗粒砂ブロック(径1cm)混 | | | |
| 28 | 5YR5/6明赤褐色粗粒砂 | | | |
| | 5YR6/8橙色粗粒砂ブロック(径1cm) | | | |
| | 5YR3/1黒褐色細粒砂 | | | |
| | 10Y8/2灰白色細粒砂ブロック(径1cm)含 | | | |
| 29 | 10Y4/1灰色シルト～中粒砂 | 炭粒(径0.5cm)含 | | |

第271図 S356土坑平面・断面図



第272図 S371・385・407・425土坑、S404柱穴、S384・405・424ピット平面・断面図及びS371土坑出土遺物

第6章 8区の調査成果

を測る。断面形は浅い箱状を呈する。埋土は炭化物を少量含む自然堆積層で、近世後半以降の陶磁器が出土した。重複関係からS354杭列、S349溝に先行する。帰属時期は、出土遺物から近世後半と考えられる。

S424 (第257・272図)

S21グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。S425ピットを切る土坑で、平面形は円形を呈する。遺構の断面形はU字形を呈し、検出規模は長軸1.08m、短軸1.0m、深さ0.36mを測る。

埋土は4層に分層できるが、上層の1～2層はブロック土を含む混合土である。遺物は弥生土器の細片が少量出土しているが、周囲からの流入と推定され、遺構の時期については不明である。

S427 (第256・273図、PL.128)

Q22グリッド、調査区中心部北壁際の平坦部で検出した土坑である。西側でS428とS466土坑と重複し、本遺構が掘り込んでいる。検出規模は直径0.88m、深さは最大で0.22mを測る。平面形は不整形円形。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり、底面が凹状を呈する。埋土は3層に分かれ、下層は黒褐色粗粒砂ブロックを含む混合土が認められる。

出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の甕細片が出土している。したがって、遺構の帰属時期は古墳時代前期以降と考えられる。

S428 (第256・273図)

Q22グリッド、調査区中心部北壁際の平坦部で検出した土坑である。東側でS427土坑に掘り込まれ、南側でS466土坑を本遺構が掘り込んでいる。検出規模は長軸0.74m、短軸0.54m、深さは0.05mを測る。平面形は不整形円形。断面形は浅い皿状を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は単層で灰黄褐色中粒砂と褐灰色粗粒砂が堆積する。遺構から遺物は出土しなかったため、本遺構の帰属時期は不明である。

S429 (第256・273図)

Q22グリッド、調査区中心部北壁際の平坦部で検出した土坑である。東側でS420ピットに掘り込まれ、中心部の一部が攪乱を受けていた。検出規模は長軸1.0m、短軸0.87m、深さは0.42mを測る。平面形は不整形円形。断面形はU字状を呈し、底面はやや凹状となっている。

埋土は4層に分層され、灰黄褐色や明黄褐色粗粒砂といった地山ブロックを含む。遺構から遺物は出土しなかったため、本遺構の帰属時期は不明である。

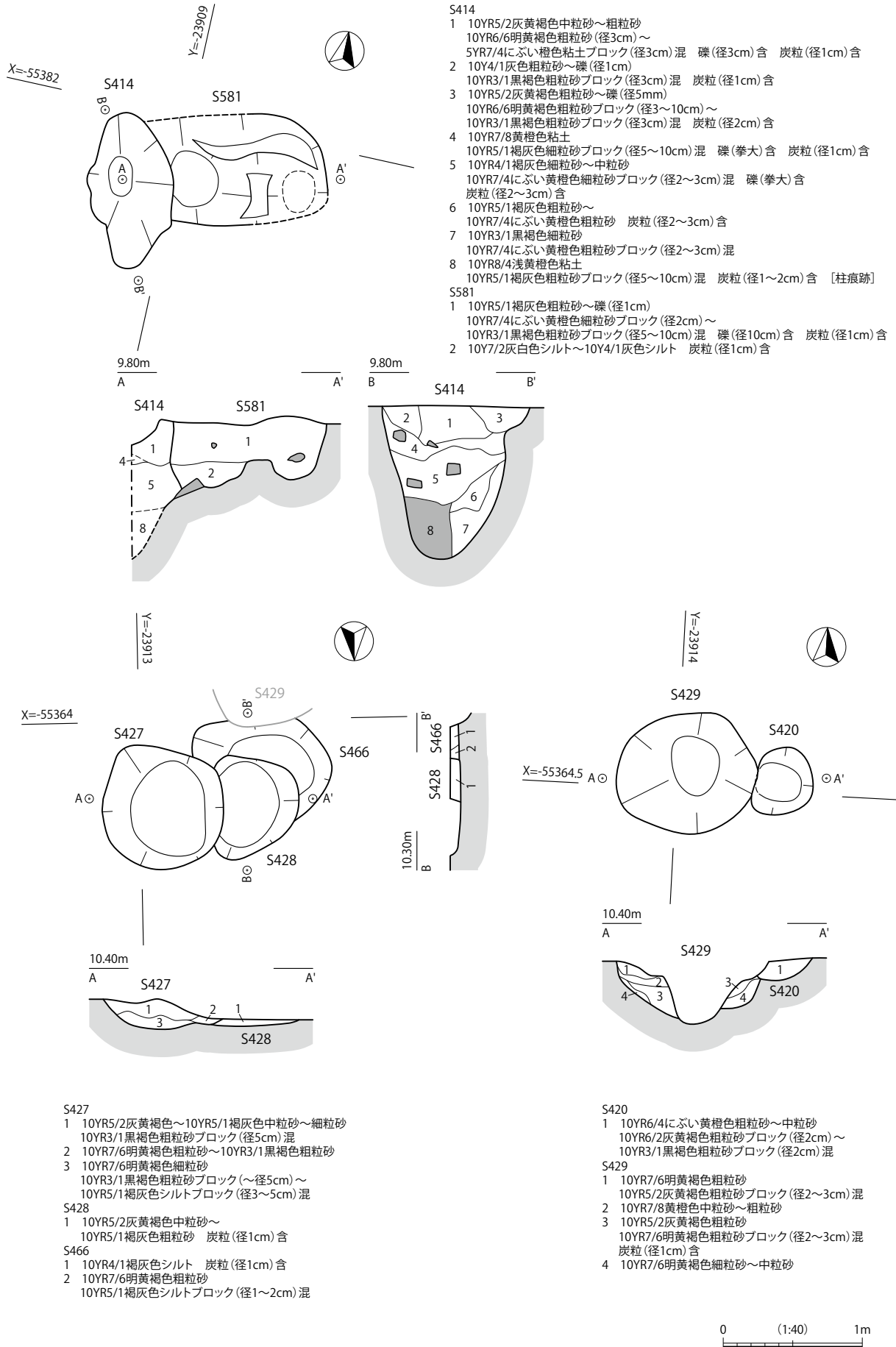
S432 (第256・257・274図、PL.129)

S21グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。土層観察用のトレンチ4を先行して掘削したため、北側の形状は不明であるが残存する平面形から、東西に長軸をもつ楕円形を呈するものと推定される。検出規模は長軸1.6m、短軸は残存部で0.46m、推定復元すると0.7m程度の規模になる。深さは0.21mを測る。遺構の断面形は浅いU字形を呈し、底面は平坦である。

埋土は3層に分層され、黒褐色と黄橙色ブロックなどを含む混合土である。遺構から遺物は出土しなかったため、本遺構の帰属時期については不明である。

S435 (第256・257・274図、PL.129)

R21～22、S21～22グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。S432土坑の北東に隣接S525、S526及びS547ピットを切る。遺構の平面形は不整形円形で、断面形は東側にテラス状の段を持ち、箱形を呈する。底面は平坦である。検出規模は長軸1.6m、短軸1.28m、深さ1.24mを測る。



第273図 S427～429・466・581土坑、S414柱穴、S420ピット平面・断面図

第6章 8区の調査成果

埋土は5層に分層されるが、黄褐色から黒褐色シルトブロックを含む混合土が認められる。さらに埋土中から人頭大の礫や板状礫が不規則に含まれていることから、人為的な埋め戻しの可能性が想定される。遺構から遺物は出土しなかったため、本遺構の帰属時期は不明である。

S466 (第256・273図)

Q22グリッド、調査区中心部北壁際の平坦部で検出した土坑である。北側でS427とS428土坑に掘り込まれている。平面形は不整楕円形。断面形は浅い皿状を呈し、底面は概ね平坦である。検出規模は長軸1.0m、短軸0.75m、深さは0.07mを測る。

埋土は2層で自然堆積と考えられる。遺構から遺物は出土しなかったため、本遺構の帰属時期は不明である。

S467 (第256・274図)

R22グリッド、調査区中心部北寄りの平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸0.85m、短軸0.8m、深さは0.25mを測る。遺構の平面形は不整円形で、断面形は箱形を呈し、底面は平坦である。

埋土は4層に分層され、下層に基盤層由来の混合土を含むが、埋没時における混入の可能性が高い。出土遺物は皆無で帰属時期、性格共に明確な判断材料に欠ける。

S480 (第256・257・274図)

S22グリッド、調査区の平坦部で検出した土坑である。東側の一部が攪乱により削平されている。検出規模は長軸0.85m、短軸0.76m、深さは最大で0.23mを測る。遺構の平面形は不整円形で、壁面が緩やかに立ち上がる。

埋土は3層に分層され、黄褐色から黒褐色のシルトブロックを含む混合土が認められる。出土遺物は皆無で帰属時期、性格共に明確な判断材料に欠ける。

S484 (第256・257・275図、PL.129)

S21グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。S553、S554及びS576ピットと重複し、掘り込んでいる。検出規模は長軸1.34m、短軸1.1m、深さ0.54mを測る。遺構の平面形は東西方向に長軸をもった不整楕円形を呈する。断面形は箱形を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は3層に分層されるが、いずれも黒褐色から黄褐色シルトブロックを含む混合土が認められる。遺構底面の西壁際でS552ピット、東壁際でS551ピットを検出しているが、埋土の特徴から、これらのピットを本遺構が掘り込んでいる状況が確認されている。

埋土から木片の細片が出土したのみで、遺構の時期が判別できる遺物は出土しなかったため、本遺構の帰属時期は不明である。

S486 (第256・257・275図)

R21グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。北東側の一部が攪乱によって削られているが、遺構の平面形は不整円形である。検出規模は長軸1.0m、短軸0.5m、深さ0.38mを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は3層に分層されるが、いずれも明黄褐色から灰黄褐色粗粒砂ブロックを含む混合土が認められる。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

S496 (第256・257・275図、PL.129)

S22グリッド、調査区中心部南壁際の平坦部で検出した土坑である。南側の一部が排水溝掘削により削平されたため全形は不明であるが、平面形は南北に主軸をもつ不整楕円形と推定される。断面形

は壁面が緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。検出規模は東西0.62m、南北0.52m、深さは最大で0.15mを測る。

埋土は単層で、明黄褐色から黒褐色ブロックを含む混合土が認められる。遺構の帰属時期は、埋土の特徴から近世以降と推測される。

S497 (第256・257・275図)

S22グリッド、調査区中心部南壁際の平坦部で検出した土坑である。検出規模は東西0.67m、南北0.3m、深さは最大で0.43mを測る。北側でS514ピットと重複し、本遺構が掘り込んでいる。南側の一部が排水溝掘削により削平されたため全形は不明であるが、不整円形と考えられる。断面形は壁面が急勾配に立ち上がり、底面が不明であるが箱形を呈するものと推定される。

埋土は2層に分かれ、明黄褐色から黒褐色ブロックを含む混合土が認められる。出土遺物は皆無で帰属時期、性格共に明確な判断材料に欠ける。

S517 (第256・276図)

R22グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑で、平面形は不整円形を呈する。断面形は逆台形状で、底面は概ね平坦である。検出規模は長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.19mを測る。

埋土は3層に分層されるが、上層では黒褐色シルトブロックを含む混合土が認められる。本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から近世と考えられる。

S522 (第256・276図)

Q22グリッド、調査区中心部北壁際の平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸1.0m、短軸0.9m、深さは最大で0.37mを測る。平面形は不整円形、断面形は東側が深く安定しない。

埋土は黄橙色細粒砂と褐灰色細粒砂の2層に分層される。出土遺物は皆無で帰属時期、性格共に明確な判断材料に欠ける。

S546 (第256・276図、表55、PL.181)

R22グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸1.02m、短軸0.76m、深さ0.38mを測る。平面形は歪な隅丸形状を呈する。断面形は箱形で、底面は平坦である。

埋土は4層に分層されるが、3層で層厚が薄い黒色シルト層を介在させることから、埋没まで一定期間の経過があったものと推測される。

出土遺物は、粘板岩製の砥石S29が出土している。埋土の特徴から近世後期以降と推定される。

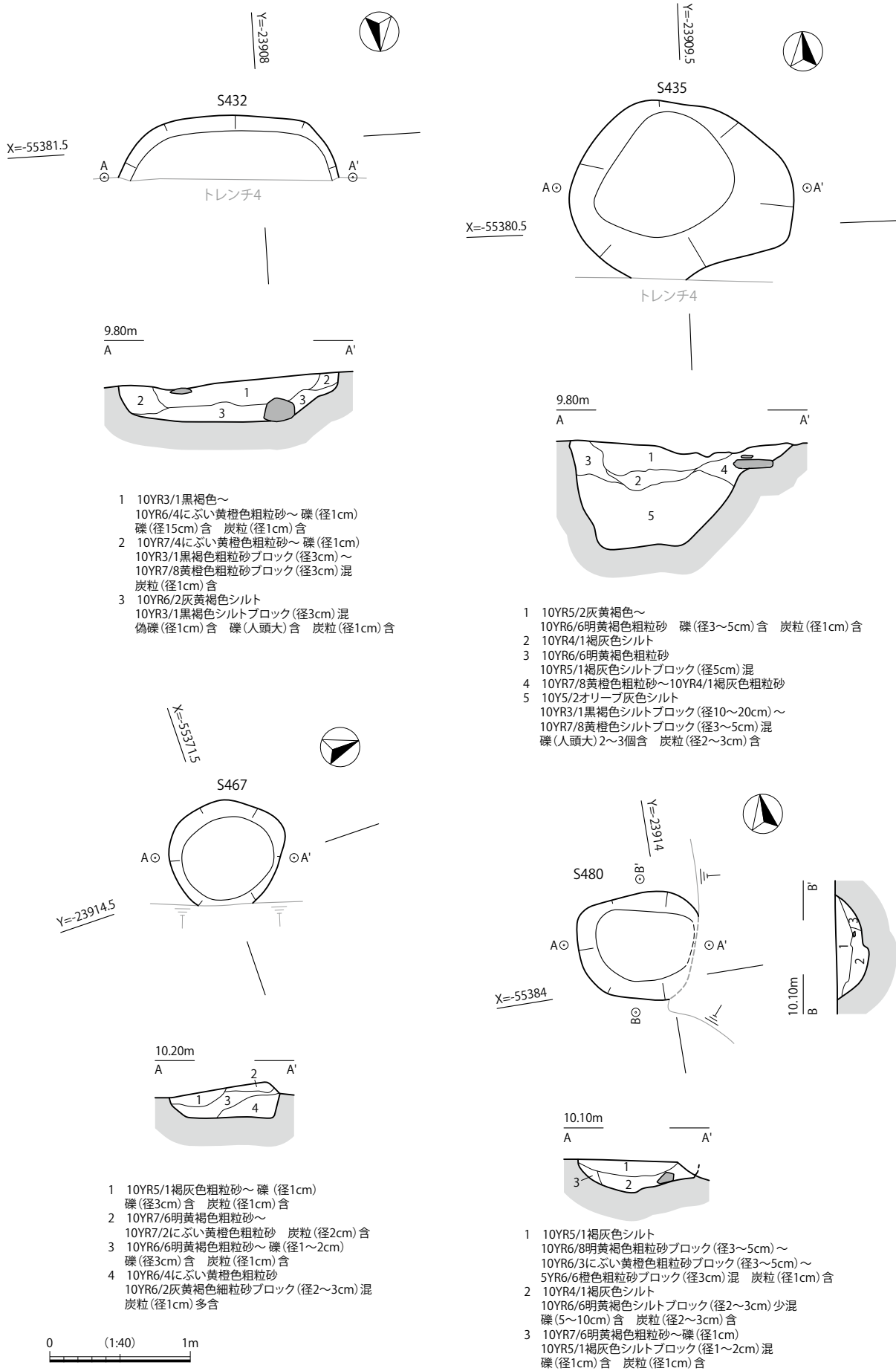
S567 (第256・257・276図)

R21・S21グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。土層観察用のトレンチ13を先行して掘削したため、南側の形状は不明であるが、残存する平面形から東西に長軸をもつ楕円形を呈するものと推定される。検出規模は長軸1.6m、短軸は残存部で0.45m、推定復元すると0.8m程度の規模になる。深さは0.36mを測る。遺構の断面形箱形を呈し、底面は概ね平坦である。底面中央部に直径0.58m、深さ0.23mのピット状の掘り込みがみられるが、別遺構の可能性もある。

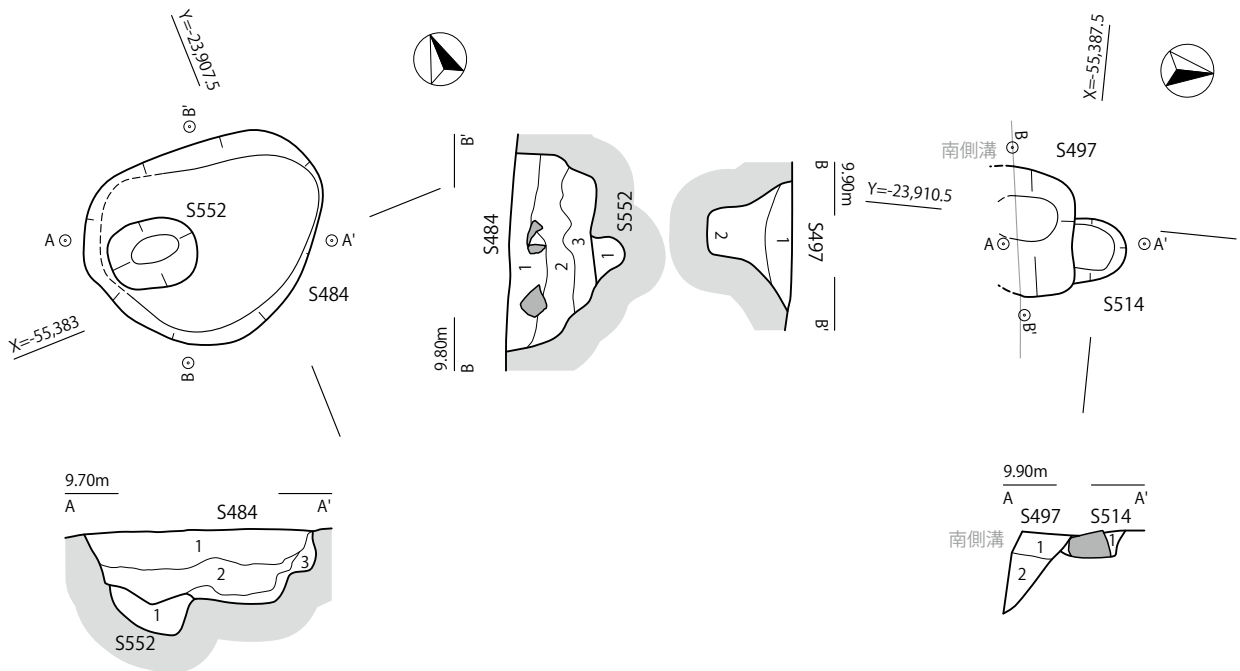
埋土は4層に分層できるが、上層は地山ブロックなどを含む混合土であり、径0.4m程の大型礫も含まれるため人為的な埋め戻しの可能性が高い。出土遺物は皆無で帰属時期、性格共に明確な判断材料に欠ける。

S581 (第256・257・273図)

S21グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。S414柱穴とS548ピットと重複し、い



第274図 S432・435・467・480土坑平面・断面図



S484

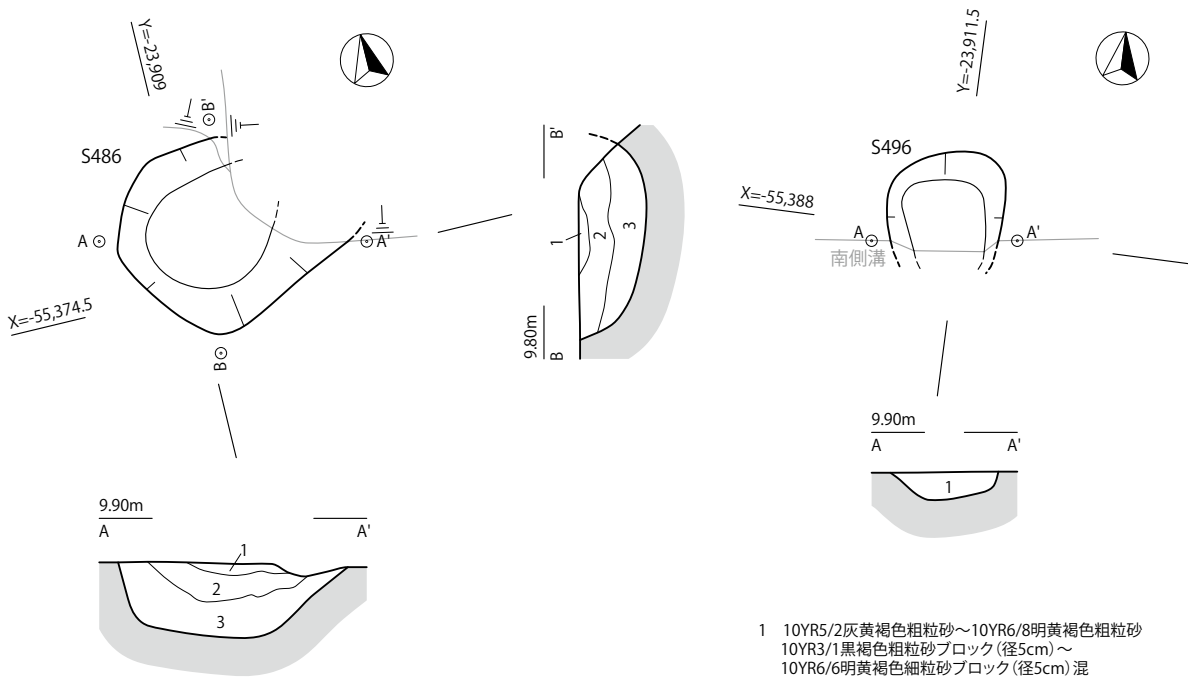
- 1 10YR5/3にぶい黄橙色粗粒砂
10YR6/8明黄褐色細粒砂ブロック(径5~10cm)~
10YR3/1黒褐色細粒砂ブロック(径3~5cm)~
10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂ブロック(径3~5cm)
5YR6/6橙色粘土ブロック(径2cm)混 炭粒(径1cm)含 礫(人頭大)含2個
 - 2 10YR5/2灰黄褐色細粒砂 10YR3/1黒褐色粗粒砂ブロック(径5cm)~
10YR6/6明黄褐色細粒砂ブロック(径3cm)混 炭粒(径1cm)含
 - 3 10Y4/1灰色粘土~10Y8/2灰白色粘土 炭粒(径1cm)含
- S552
- 1 10YR1.7/1黒色シルト
10YR8/4浅黄色シルトブロック(径2~3cm)混 炭粒(径1~2cm)含

S497

- 1 10YR3/1黒褐色粗粒砂~10YR7/6明黄褐色粗粒砂
偽礫(径1cm)含 炭粒(径1cm)含
- 2 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂
10YR3/1黒褐色粗粒砂ブロック(径3~5cm)~
10YR7/6明黄褐色粗粒砂ブロック(径3~5cm)混
炭粒(径1cm)含

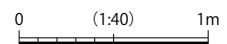
S514

- 1 10YR2/1黒色細粒砂 礫(人頭大)1個含 炭粒(径1cm)含



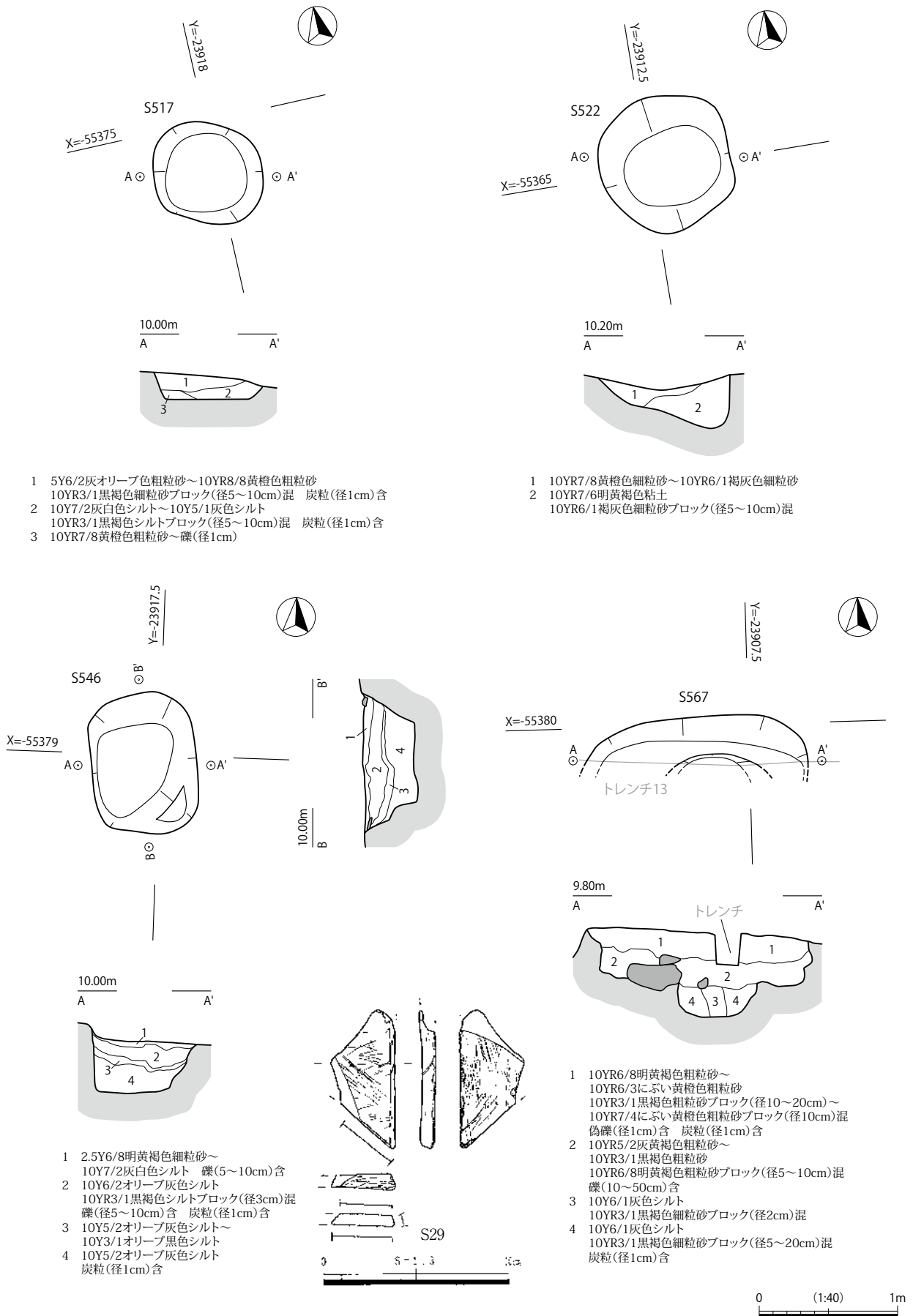
- 1 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂~ 礫(径2~3cm) 炭粒(径1cm)含
- 2 10YR2/1黒色粗粒砂
10YR5/2灰黄褐色粗粒砂ブロック(径3~5cm)~
10YR6/6明黄褐色ブロック(径2cm)混 礫(径3~5cm)含 炭粒(径1cm)含
- 3 10YR2/1黒色粗粒砂~ 礫(径2cm)
10YR5/2灰黄褐色粗粒砂ブロック(径5~10cm)~
10YR5/1褐色細粒砂ブロック(径3cm)混 礫(径3~5cm)多含 炭粒(径2cm)含

- 1 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂~10YR6/8明黄褐色粗粒砂
10YR3/1黒褐色粗粒砂ブロック(径5cm)~
10YR6/6明黄褐色細粒砂ブロック(径5cm)混
炭粒(径2~3cm)含



第275図 S484・486・496・497土坑、S514・552ピット平面・断面図

第6章 8区の調査成果



第276図 S517・522・546・567土坑平面・断面図及びS546土坑出土遺物

ずれも本遺構が掘り込こまれている。平面形は東西方向に長軸をもつ不整楕円形で、検出規模は長軸1.1m、短軸は0.8m、深さは最大で0.45mを測る。遺構の断面形は箱形を呈し、底面は東西に直径0.3mの円形状の底面、北側に幅0.15mの段状の平坦面を設ける。東側の円形の底面は、埋土では分層できなかつたが、別のピットが本遺構に先行して存在していた可能性がある。

埋土は2層に分層でき、黄橙色細粒砂ブロックを含む混合土である。本遺構は西側に隣接するS414柱穴の柱を据え付けるための穴であった可能性が想定される。

出土遺物はないが、隣接するS414柱穴と埋土が近似するため、中世後半から近世前半と考えられる。

S591 (第256・257・277図、表35、PL.129・153)

R21グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。ほぼ入れ子状にS559ピットに掘り込まれ、西側はS733ピットを掘り込んでいる。平面形は東西方向に長軸をもつ楕円形で、検出規模は長軸1.15m、短軸は残存部で0.7m、深さは最大で0.66mを測る。遺構の断面形はU字形を呈し、底面は丸みを帯びる。

埋土は5層に分層できるが、地山ブロックなどを含む混合土が堆積している。堀方の形状から柱穴の可能性が高いが、柱痕跡や根石などは確認されなかつた。

出土遺物は肥前系(唐津系)陶器皿667が出土している。口縁部が溝縁で、体部まで灰釉施釉であり、底部中心には兜巾が観察される。以上の特徴から17世紀前半の所産と考えられる。本遺構の帰属時期は、出土遺物から17世紀前半と考えられる。

S592 (第256・257・277図)

R21グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。北東側でS559ピットと重複し、本遺構が掘り込まれている。検出規模は長軸1.0m、短軸0.56m、深さは最大で0.12mを測る。平面形は不整楕円形で歪である。掘方断面形は皿状を呈し、底面はやや起伏があり安定しない。本来の掘り込み面はさらに上部と考えられるが、近世以降に削平されたものと想定される。

埋土は単層で地山ブロックを含む混合土が認められる。出土遺物は皆無で帰属時期、性格共に明確な判断材料に欠ける。

S698 (第256・277図、PL.129)

R22グリッド、調査区中心部の平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸1.0m、短軸0.73m、深さは最大で0.22mを測る。平面形は不整楕円形で歪である。掘方断面形は皿状を呈し、南側は明確な壁が確認できない。

埋土は2層で地山ブロックを含む混合土が堆積する。本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から近世と考えられる。

(4) 柱穴

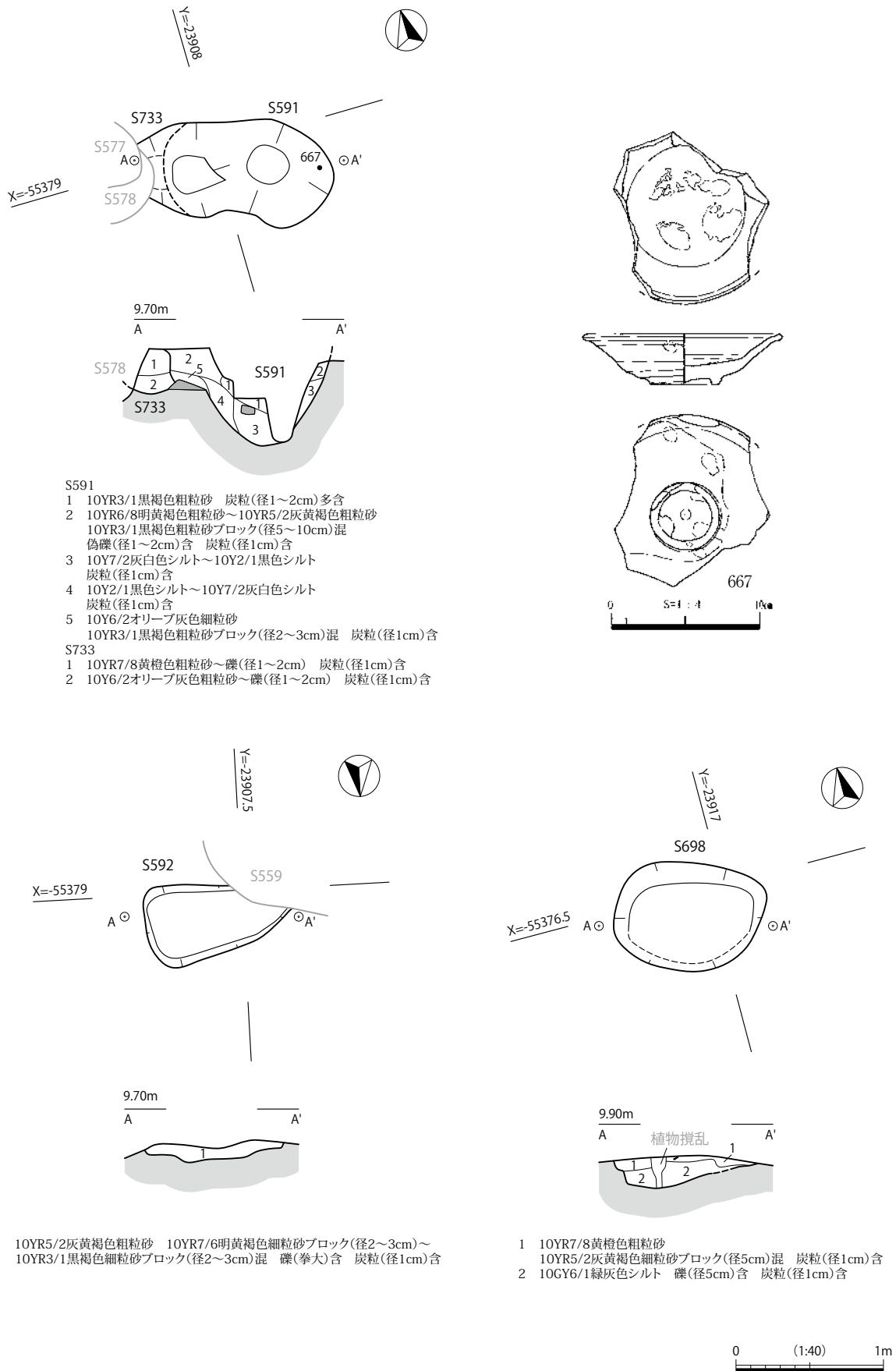
S309 (第256・278図)

R22グリッド、調査区中央平坦部の西寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.46m、短軸0.45m、深さ0.22mを測る。平面形は不整円形、掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面は概ね平坦である。埋土は2層に分かれ、中心部の1層は炭粒を含む灰黄褐色粗粒砂の柱痕跡である。出土遺物は皆無で帰属時期は不明である。

S364 (第256・257・278・286・375図、写真34、表61・69～72、PL.130・185)

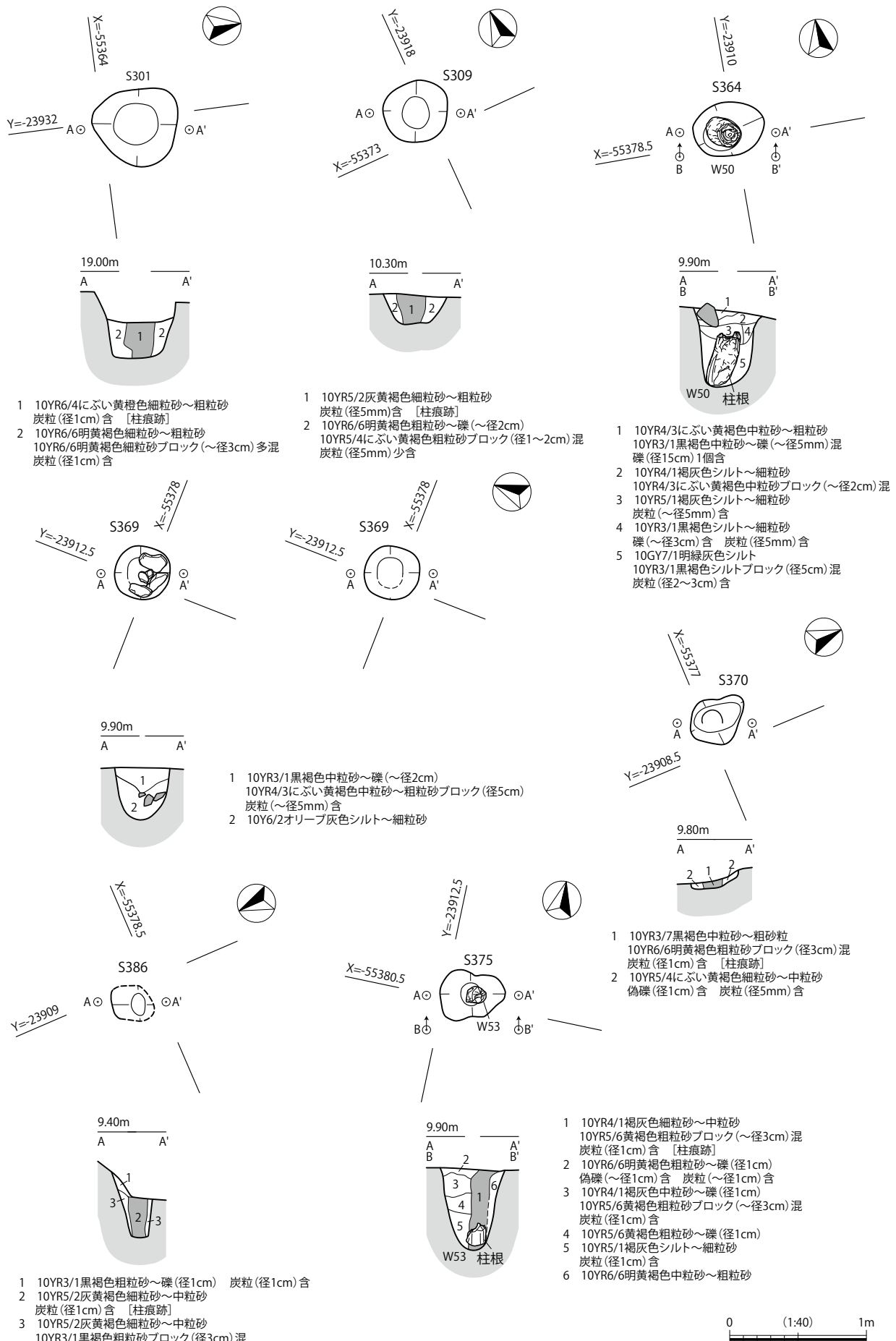
R21～22グリッド、調査区中央平坦部のピット群北東寄りで検出した柱穴である。検出規模は長

第6章 8区の調査成果



第277図 S591・592・698土坑、S733ピット平面・断面図及びS591土坑出土遺物

第2節 検出した遺構



第278図 S301・309・364・369・370・375・386柱穴平面・断面図

第6章 8区の調査成果

軸0.57m、短軸0.39m、深さは最大で0.56mを測る。平面形は不整楕円形で、掘方の断面形はU字状を呈する。中心部に最大長41.6cm、最大幅19.1cmのマツ属複雑管束亜属の柱根W50（詳細は第7章第6節参照）が残存していた。

埋土は5層に分かれ、上層はにぶい黄褐色中粒砂から褐灰色シルト、下層は明緑灰色シルトが堆積する。出土遺物は皆無である。柱根の年代測定結果は、暦年較正年代（ 2σ ）で1489～1604calADが得られている（詳細は第7章第5節参照）。

S369（第257・278図、PL.130）

R22グリッド、調査区中央平坦部のピット群北西寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.4m、短軸0.39m、深さ0.38mを測る。平面形は円形、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びる。

埋土は2層に分かれ、上層は黒褐色中粒砂、下層はオリーブ灰色シルトが堆積する。下層上面より長さ0.09～0.2m、厚さ0.03～0.08mの礫が柱穴の南側を囲むように出土した。根石の可能性が推測される。出土遺物は皆無で帰属時期は不明である。

S370（第257・278図）

R21グリッド、調査区中央平坦部のピット群北東寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.45m、短軸0.36m、深さ0.05mを測る。平面形は不整円形、掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面は北側が傾斜する。

埋土は2層に分かれ、中心部の1層は明黄褐色粗粒砂ブロックを含む黒褐色中粒砂の柱痕跡である。S419溝に掘り込まれており、本来の深さを留めていない。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

S386（第257・278図）

R21グリッド、調査区中央平坦部のピット群北東寄りで検出した柱穴である。S385土坑に掘り込まれている。検出規模は長軸0.3m、短軸0.25m、深さ0.45mを測る。平面形は不整楕円形、掘方の断面形は逆台形状を呈すし、底面は概ね平坦である。

埋土は3層に分かれ、中心部の2層は灰黄褐色細粒砂の柱痕跡である。出土遺物は皆無で帰属時期は不明である。

S375（第257・278・286・375図、写真37、表61・69～72、PL.130）

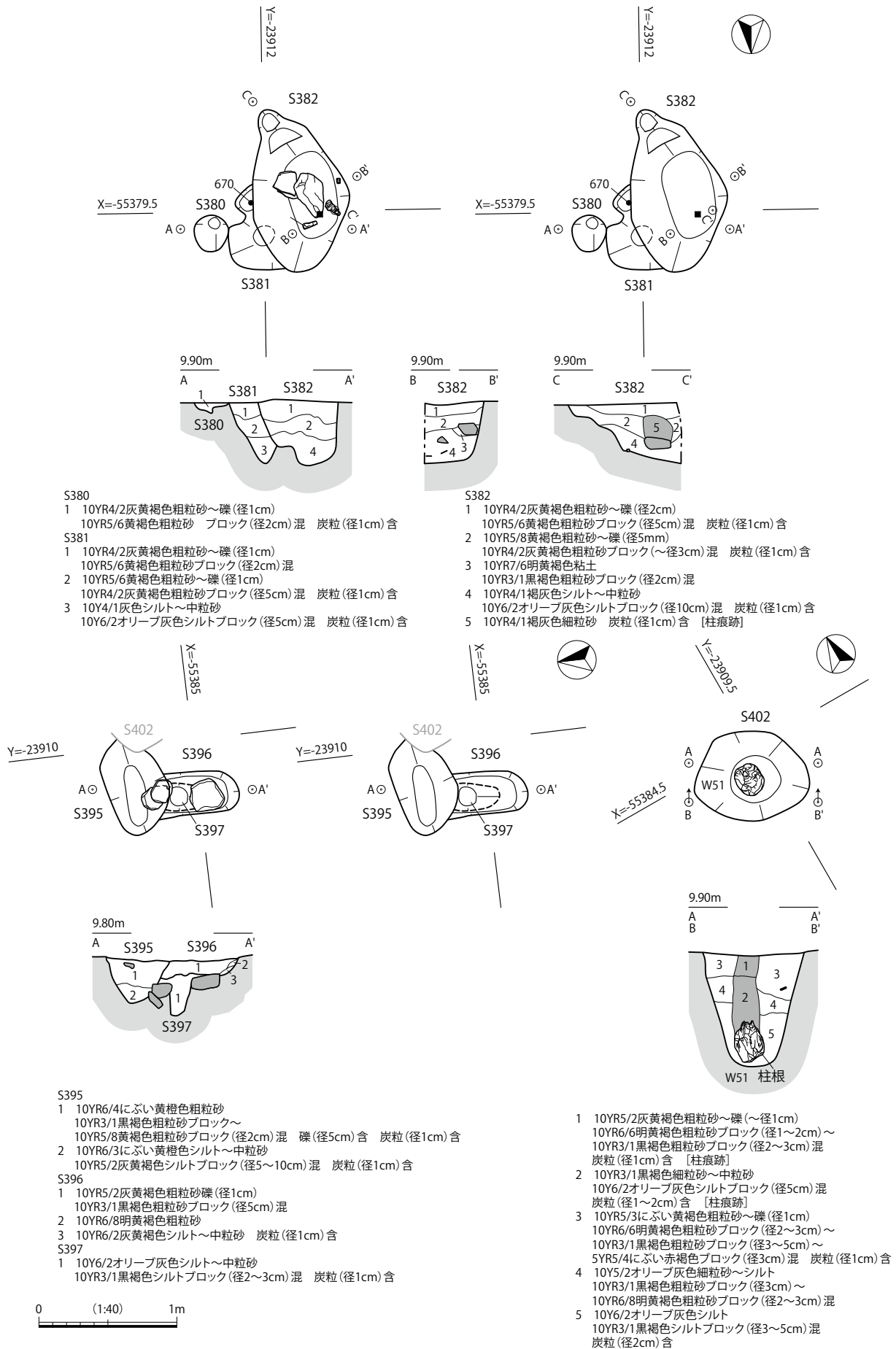
S22グリッド、調査区中央平坦部のピット群中央で検出した柱穴である。南西側でS492ピットを掘り込む。検出規模は長軸0.48m、短軸0.37m、深さは最大で0.59mを測る。平面形は不整楕円形で、掘方の断面形はU字状を呈する。中心部に最大長16.6cm、最大幅12.8cmのヤブツバキの柱根W53（詳細は第7章第6節参照）が残存していた。

埋土は褐灰色から黄褐色粗粒砂が互層に堆積し、柱根上部には黄褐色粗粒砂ブロックを含む褐灰色粗粒砂の柱痕跡が認められた。出土遺物は皆無である。柱根の年代測定結果は、暦年較正年代（ 2σ ）で1491～1603calADが得られている（詳細は第7章第5節参照）。

S382（第257・279図、PL.130）

R22グリッド、調査区中央平坦部のピット群北西で検出した柱穴である。北東側でS381ピットと重複し、掘り込んでいる。検出規模は長軸1.2m、短軸0.72m、深さ0.47mを測る。遺構の平面形は南北方向に長軸をもった不整楕円形を呈する。断面形は箱形を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は5層に分層されるが、いずれも黄褐色から黒褐色粗粒砂ブロックを含む混合土が互層に堆積



第279図 S382・397・402柱穴、S380・381・395・396ピット平面・断面図

第6章 8区の調査成果

し、中心部に褐灰色粗粒砂の柱痕跡が認められた。5層下面には礎盤石と考えられる長さ0.34m、厚さ0.09mの礫が設置されていた。本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から中世後半以降と推定される。

S397 (第256・257・279図、PL.130)

S22グリッド、調査区中央平坦部のピット群南東で検出した柱穴である。北側をS395ピット、上面をS396ピットと重複し、掘り込まれている。検出規模は長軸0.3m、短軸0.2m、深さ0.29mを測る。上部をS396ピットに掘り込まれているため、本来の形状は不明であるが、残存する平面形は南北方向に長軸をもった不整楕円形を呈する。断面形は南北側に段状の平坦面をもったU字状を呈し、底面は丸みを帯びる。

埋土は黒褐色シルトブロックが混じるオリーブ灰色シルトの単層で、南北の段状の平坦面には根石と考えられる長さ0.14～0.25m、厚さ0.1mの礫が設置されていた。出土遺物は皆無で帰属時期は不明である。

S402 (第256・257・279・286・375図、写真35、表61・69～72、PL.130・185)

S21グリッド、調査区中央平坦部のピット群南東で検出した柱穴である。北西側でS395ピット、東側でS635ピットを掘り込む。検出規模は長軸0.83m、短軸0.65m、深さは最大で0.8mを測る。平面形は東西方向に長軸をもつ不整楕円形で、掘方の断面形はU字状を呈する。中心部に最大長25.8cm、最大幅21.6cmのクリの柱根W51（詳細は第7章第6節参照）が残存していた。芯持材である。

埋土はにぶい黄褐色粗粒砂からオリーブ灰色シルトが互層に堆積し、柱根上部には灰黄褐色から黒褐色粗粒砂の柱痕跡が認められた。出土遺物は土器細片少数である。柱根の年代測定結果は、暦年較正年代（ 2σ ）で1646～1677calAD（41.5%）、1777～1799calAD（42.9%）が得られている（詳細は第7章第5節参照）。

S410 (第256・257・280・286図、表55、PL.130・181)

S21～22グリッド、調査区中央平坦部のピット群南壁際で検出した柱穴である。西側をS408ピット、南側をS409ピットに掘り込まれる。検出規模は長軸0.9m、短軸0.85m、深さ0.65mを測る。平面形は不整円形、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びる。

埋土は6層に分かれ、上層、中層に黒褐色から明黄褐色粗粒砂ブロックを含む混合土が、下層にオリーブ灰色粗粒砂からシルトが堆積する。下層には根石と考えられる長さ0.12～0.3m、厚さ0.28～0.37mの中型から大型礫が出土した。出土遺物はデイスイト製の凹石S30が1点出土している。本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から中世後半以降と考えられる。

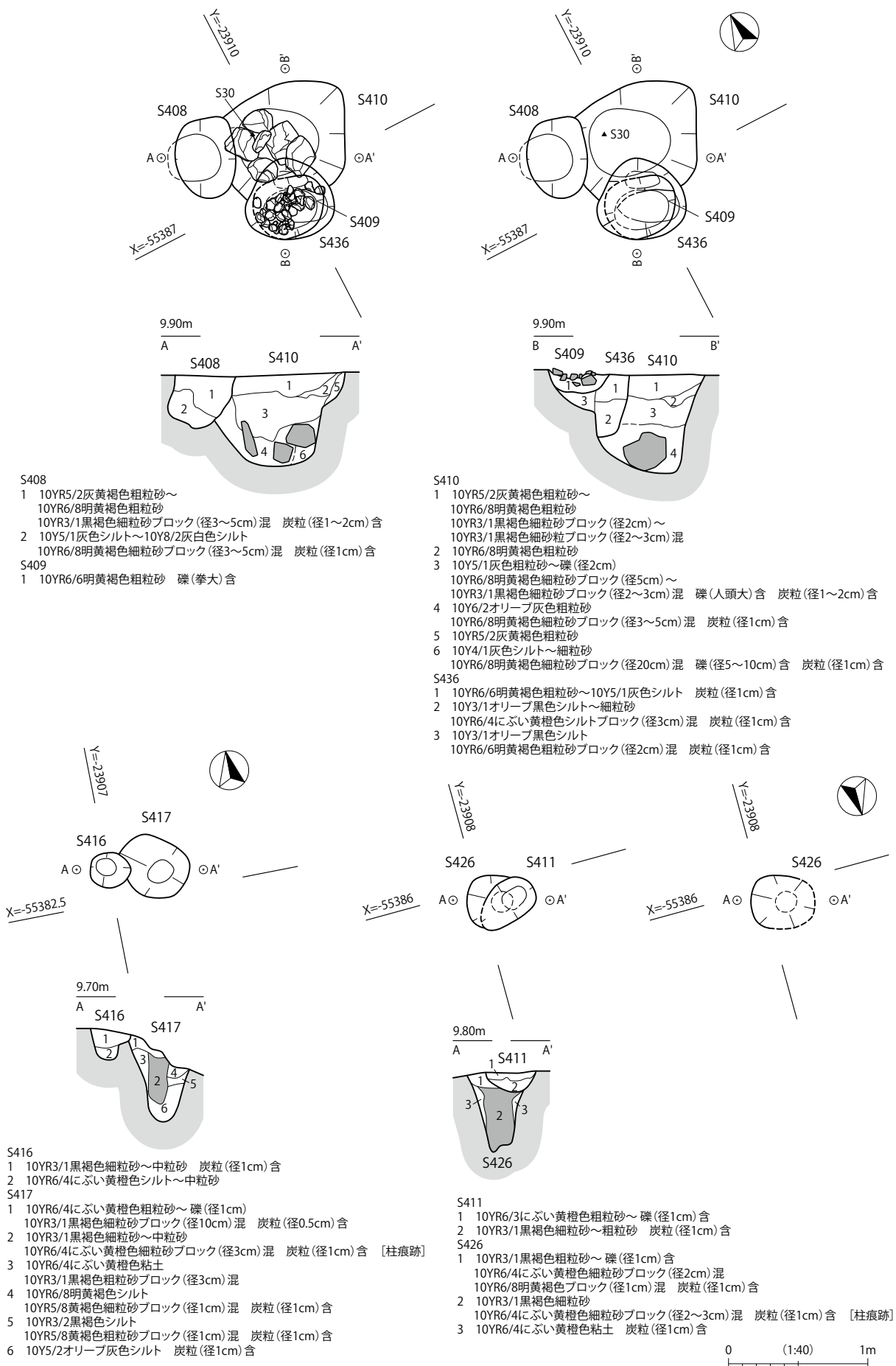
S414 (第256・257・273図、PL.131)

S21グリッド、調査区中央平坦部のピット群中央で検出した柱穴である。東側でS581土坑を掘り込む。検出規模は長軸1.12m、短軸0.6m、深さ1.1mを測る。平面形は不整楕円形、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びる。

埋土は8層に分かれ、明黄褐色から黒褐色粗粒砂ブロックや拳大の礫が混じる混合土が上・中層に堆積することから人為的な埋め戻しの可能性が高い。出土遺物は備前焼甕の小片が少量出土していることから、本遺構帰属時期は中世後半から近世前半と考えられる。

S417 (第256・257・280図)

S21グリッド、調査区中央平坦部のピット群東際で検出した柱穴である。西側でS416ピットと重複し、掘り込まれている。検出規模は長軸0.51m、短軸0.42m、深さ0.6mを測る。遺構の平面形は北西-



第280図 S410・417・426柱穴、S408・409・411・416・436ピット平面・断面図

南東方向に長軸をもった不整楕円形を呈する。掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びる。

埋土は6層に分層されるが、中心部に黒褐色細粒砂から中粒砂の柱痕跡が認められた。埋土から弥生土器の細片が出土している。本遺構の帰属時期は弥生時代以降と推定される。

S426 (第256・257・280図)

S21グリッド、調査区中央平坦部のピット群南東で検出した柱穴である。西側でS411ピットと重複し、掘り込まれている。検出規模は長軸0.46m、短軸0.38m、深さ0.57mを測る。遺構の平面形は東西方向に長軸をもった不整楕円形を呈する。掘方の断面形はU字状を呈し、底面は凹凸が見られる。

埋土は3層に分層されるが、中心部に黒褐色細粒砂の柱痕跡が認められた。埋土から弥生土器の細片が出土している。本遺構の帰属時期は弥生時代以降と推定される。

S438 (第256・281図)

Q22グリッド、調査区中央平坦部の北寄りで検出した柱穴である。北側でS245溝と重複し、掘り込まれている。検出規模は長軸0.32m、短軸0.25m、深さ0.18mを測る。遺構の平面形は東西方向に長軸をもつ不整楕円形を呈する。掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びている。

埋土は2層に分層されるが、中心部に灰白色シルトから中粒砂の柱痕跡が認められた。出土遺物は皆無で帰属時期は不明である。

S439 (第256・281図)

Q22グリッド、調査区中央平坦部の北寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.26m、短軸0.22m、深さ0.18mを測る。遺構の平面形は不整円形を呈する。掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びている。

埋土は2層に分層されるが、中心部に灰白色シルトから中粒砂の柱痕跡が認められた。出土遺物は皆無で帰属時期は不明である。

S447 (第256・281図、写真35、表69～72、PL.131)

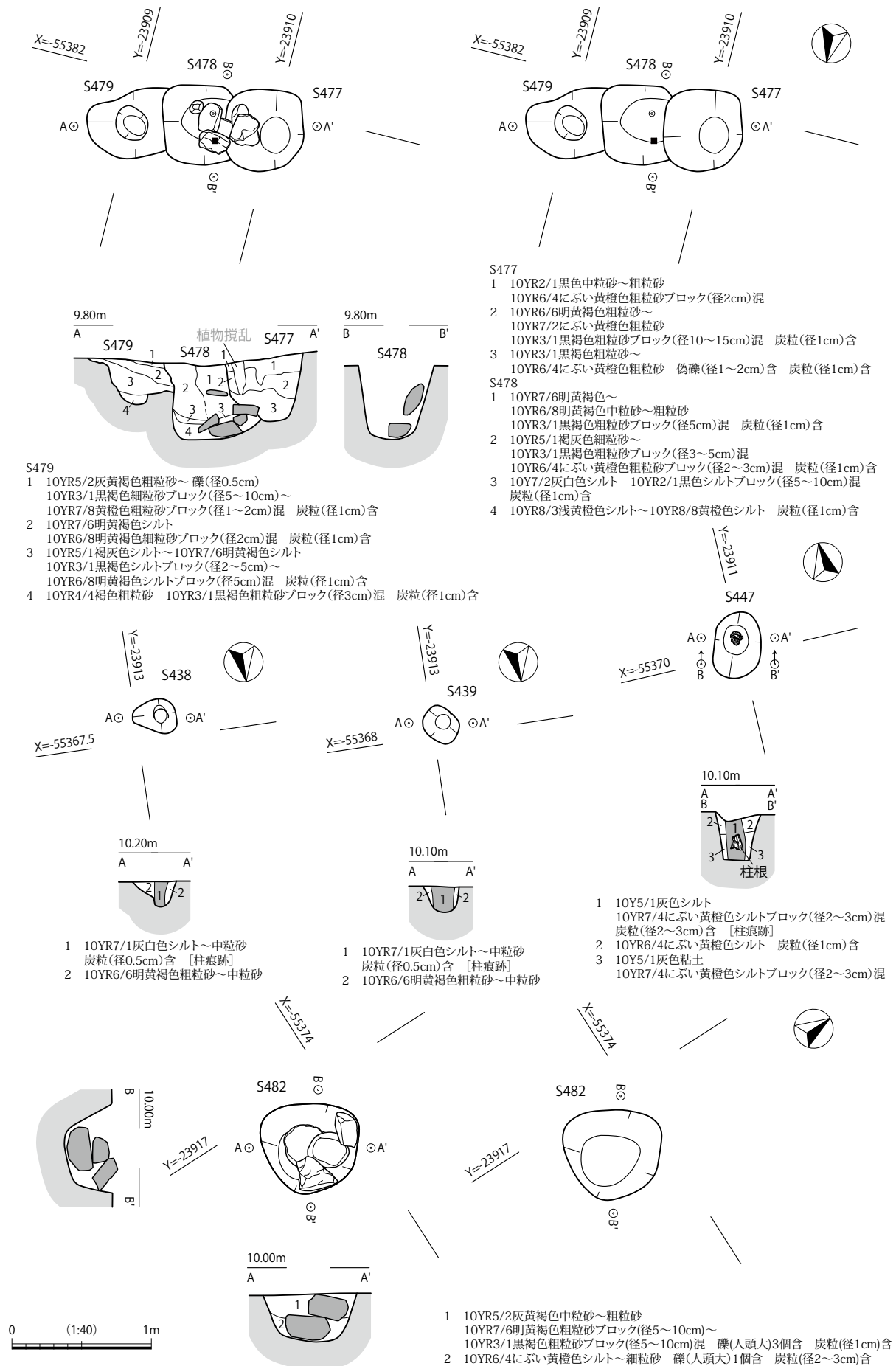
Q22、R22グリッド、調査区中央平坦部の北寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.47m、短軸0.34m、深さは最大で0.68mを測る。平面形は南北方向に長軸をもつ不整楕円形である。掘方の断面形はU字状を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は3層に分かれ、中心部ににぶい黄褐色シルトブロックが混じる灰色シルトの柱痕跡が認められた。そのなかに最大長0.11m、最大幅0.85mのスタジイの柱根（詳細は第7章第6節参照）が残存していた。出土遺物は皆無である。柱根の年代測定結果は、暦年較正年代（ 2σ ）で1474～1530calAD（34.3%）、1541～1635calAD（61.1%）が得られている（詳細は第7章第5節参照）。

S478 (第256・257・281図、PL.131)

S21グリッド、調査区中央平坦部のピット群中央で検出した柱穴である。西側でS477ピットに掘り込まれ、東側でS479ピットを掘り込む。検出規模は長軸0.63m、短軸0.57m、深さ0.53mを測る。平面形は不整楕円形、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は4層に分層され、黒褐色、明黄褐色粗粒砂及びシルトブロックを含む混合土が堆積する。下層には根石と考えられる長さ0.17～0.45m、厚さ0.08～0.2mの中型から大型礫が出土した。根石の上部から漆器細片1点が出土している。本遺構の帰属時期は、漆器片及び埋土の特徴から中世後半以降と考えられる。



第281図 S438・439・447・478・482柱穴、S477・479ピット平面・断面図

S482 (第256・281図、PL.129)

R22グリッド、調査区中央平坦部で検出した柱穴である。検出規模は長軸0.69m、短軸0.64m、深さ0.34mを測る。平面形は不整形円形、掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は2層に分層され、上層に明黄褐色から黒褐色粗粒砂ブロックが混じる灰黄褐色中粒砂、下層ににぶい黄橙色シルトが堆積する。底面中央には礎盤石と考えられる長さ0.32m、厚さ0.17mの大型礫があり、上層の東寄りに、長さ0.24～0.3m、厚さ0.1～0.16mの中型礫が3個出土した。根石であろうか。出土遺物は皆無である。帰属時期は埋土の特徴から中世後半以降と考えられる。

S483 (第256・282図、PL.129)

R22グリッド、調査区中央平坦部で検出した柱穴である。検出規模は長軸0.78m、短軸0.65m、深さ0.34mを測る。平面形は東西方向に長軸をとる不整形楕円形、掘方の断面形は逆台形状を呈するが、西側は緩やかに立ち上がる。

埋土は2層に分かれ、上層に黒褐色から明黄褐色粗粒砂ブロックが混じる明黄褐色粗粒砂、下層に明黄褐色中粒砂からにぶい黄橙色粗粒砂が堆積する。2層上面から長さ0.51m、厚さ0.05mの板状礫が出土している。根石であろうか。出土遺物は皆無であり、帰属時期は不明である。

S488 (第256・282図)

Q22グリッド、調査区中央平坦部の北寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.25m、短軸0.21m、深さ0.16mを測る。遺構の平面形は不整形円形を呈する。掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びている。

埋土は2層に分層され、中心部に灰黄褐色細粒砂から中粒砂の柱痕跡が認められた。出土遺物は皆無で帰属時期は不明である。

S507 (第256・257・282図、PL.131)

S22グリッド、調査区中央平坦部のピット群中央で検出した柱穴である。検出規模は長軸0.58m、短軸0.5m、深さ0.43mを測る。遺構の平面形は不整形円形を呈する。掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は3層に分層され、中心部ににぶい黄橙色細粒砂の柱痕跡が認められた。出土遺物は弥生時代後期と古墳時代前期の土器細片が出土していることから、帰属時期は古墳時代前期と考えられる。

S511 (第256・257・282・286図、表61、PL.131・185)

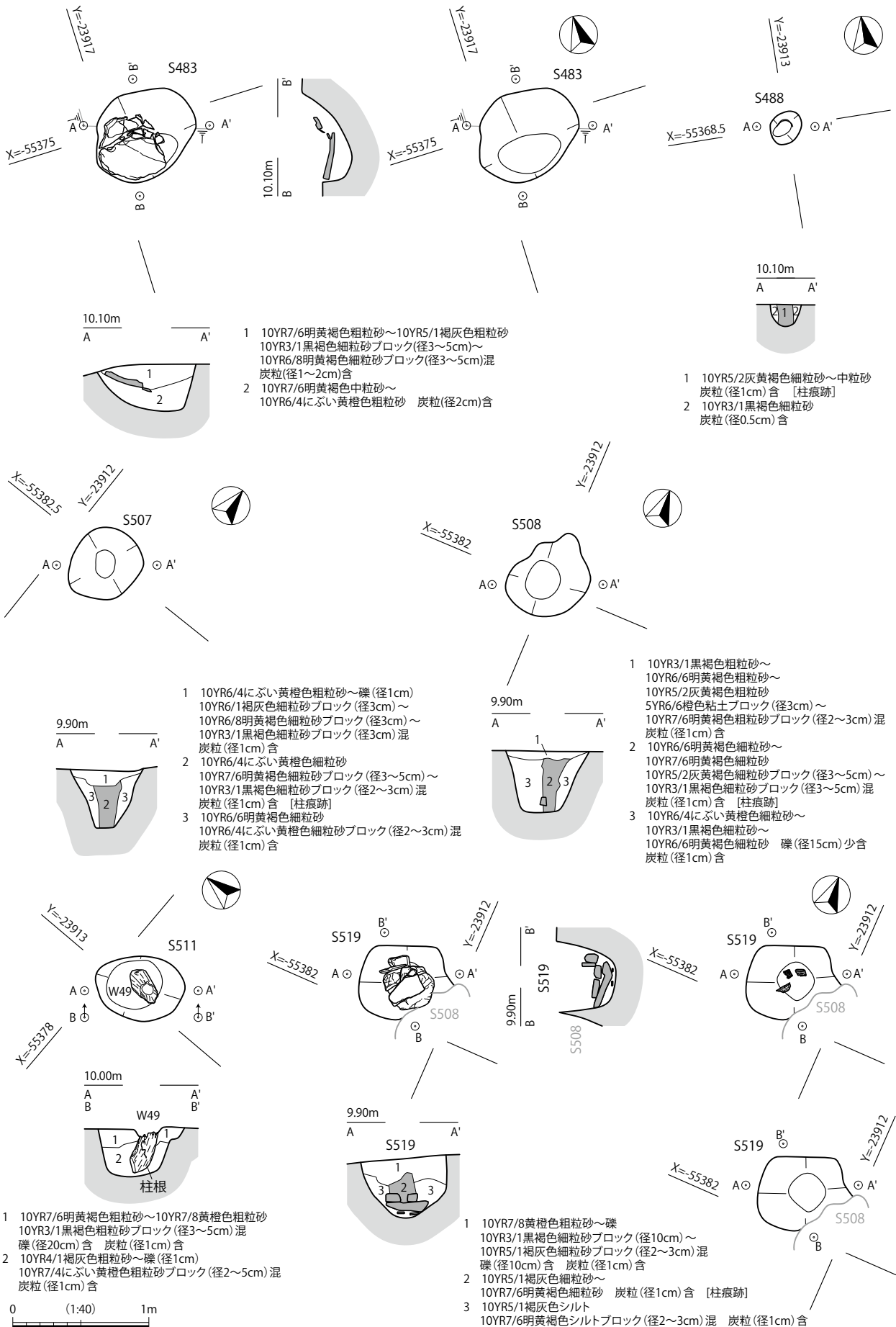
R22グリッド、調査区中央平坦部のピット群北西で検出した柱穴である。検出規模は長軸0.66m、短軸0.48m、深さは最大で0.35mを測る。平面形は北西－南東方向に長軸をもつ不整形楕円形である。掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面はやや丸みを帯びる。

埋土は黒褐色粗粒砂ブロックを含む明黄褐色粗粒砂とにぶい黄橙色ブロックが混じる褐灰色粗粒砂の2層に分層され、中心部に柱根W49が残存していた。W49は最大長42.7cm、最大幅15.1cmを測る芯持材である。帰属時期は埋土の特徴から中世後半以降と考えられる。

S519 (第256・257・282図、表69・70、PL.131)

S22グリッド、調査区中央平坦部のピット群中央で検出した柱穴である。東側でS508ピットと重複し、掘り込まれる。検出規模は長軸0.65m、短軸0.54m、深さ0.44mを測る。平面形は隅丸方形、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びる。

埋土は3層に分かれ、中心部に褐灰色細粒砂から明黄褐色細粒砂の柱痕跡が認められた。底面に



第282図 S483・488・507・508・511・519柱穴平面・断面図

第6章 8区の調査成果

は礎盤石と考えられる長さ0.31m、厚さ0.07mの円形の板状礫があり、その上部に根石と考えられる、長さ0.09～0.15m、厚さ0.03～0.07mの中型の板状礫が4個出土した。北側の礫は壁に沿うように縦方向に設置されていた。礎盤石の下部から長さ4.0～10.0cm、幅5.0cmの炭化材3点が出土している。

このうち1点の炭化材の年代測定結果は、暦年較正年代(2 σ)で1521～1576calAD(54.3%)、1626～1655calAD(40.1%)が得られている(詳細は第7章第5節参照)。その他の出土遺物は皆無である。

S525 (第256・257・283図、PL.131)

R21グリッド、調査区中央平坦部のピット群北東で検出した柱穴である。南側でS435土坑と重複し、掘り込まれている。検出規模は長軸0.47m、短軸0.42m、深さ0.65mを測る。遺構の平面形は南北方向に長軸をもつ不整楕円形を呈する。掘方の断面形は箱形を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は2層に分層され、中心部に炭粒を多く含む黒褐色細粒砂の柱痕跡が認められた。出土遺物は弥生土器の細片が出土していることから、帰属時期は弥生時代後期以降と考えられる。

S528 (第256・283・377図、写真34、表69～72、PL.132)

R21グリッド、調査区中央平坦部の北寄りで検出した柱穴である。南側を攪乱で削平されている。検出規模は長軸0.43m、短軸0.23m、深さ0.57mを測る。平面形は不整楕円形、掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は黄橙色系粘土ブロックを含む黒褐色粗粒砂と灰黄褐色粗粒砂の2層に分層され、前者は柱痕跡の可能性が高い。底面には径0.08～0.1mの小型礫3個と木片2点が出土した。木片は柱根の残痕と推定される。木片1点の樹種同定結果はスギであり(詳細は第7章第6節参照)、年代測定結果は、暦年較正年代(2 σ)で5～89calADが得られている(詳細は第7章第5節参照)。その他の出土遺物は弥生土器細片が出土している。

S548 (第256・257・283・286図、表61、PL.132・185)

S21グリッド、調査区中央平坦部のピット群中央東寄りで検出した柱穴である。南側でS581土坑を掘り込む。検出規模は長軸0.48m、短軸0.36m、深さは最大で0.25mを測る。平面形は南北方向に長軸をもつ不整楕円形で、掘方の断面形は箱形を呈する。中心部に最大長35.5cm、最大幅20.4cmの芯持材の柱根W47が残存していた。

埋土は柱根周囲に柱根が土壌化した灰白色粗粒砂の柱痕跡、掘方との間隙に灰色粗粒砂と明黄褐色粘土が充填されていた。出土遺物は土器細片少数及び柱根W47である。帰属時期は不明である。

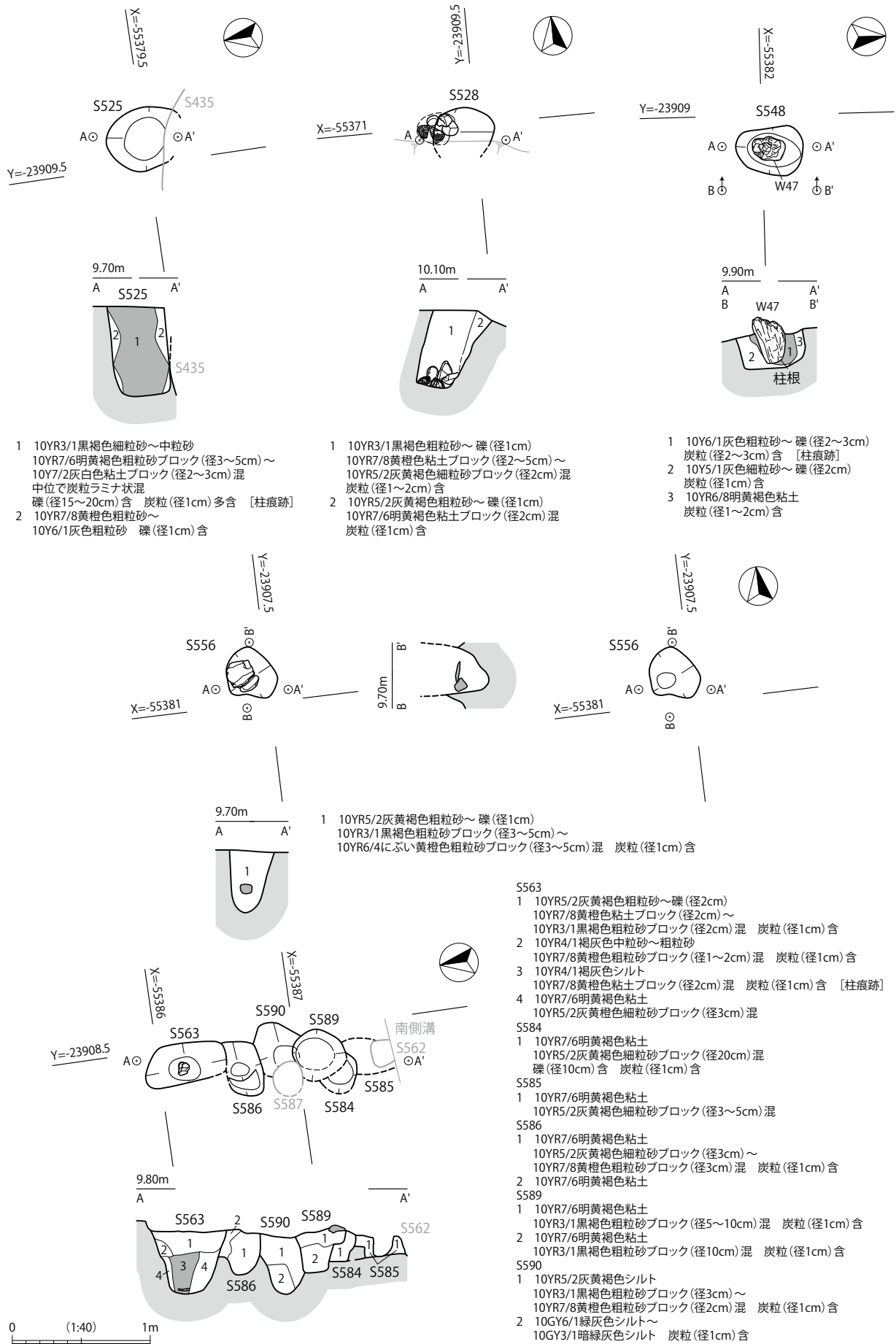
S556 (第256・257・283図、PL.132)

S21グリッド、調査区中央平坦部のピット群中央東寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.37m、短軸0.34m、深さ0.45mを測る。平面形は不整円形、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びる。

埋土は黒褐色粗粒砂からにぶい黄橙色粗粒砂ブロックが混じる灰黄褐色粗粒砂の単層である。底面から13cm上部で根石と考えられる長さ0.16～0.21m、厚さ0.02～0.09mの板状礫と亜角礫が出土した。出土遺物は皆無であり、帰属時期は不明である。

S563 (第256・257・283・376図、表69～72、PL.132)

S21グリッド、調査区中央平坦部のピット群南東で検出した柱穴である。上面をS412溝に掘り込まれ、溝底面で検出した。南側でS586ピットと重複し、本遺構が掘り込んでいる。検出規模は長軸0.58m、



第283図 S525・528・548・556・563柱穴、S584～586・589・590ピット平面・断面図

第6章 8区の調査成果

短軸0.30m、深さは最大で0.45mを測る。平面形は南北方向に長軸をもつ不整楕円形で、掘方の断面形はU字状を呈する。

埋土は4層に分層され、中心部に黄橙色粘土ブロックを含む褐灰色シルトの柱痕跡が確認された。柱痕跡である3層最下部で長さ9.5cm、厚さ1.5cmの礎板が出土している。樹種同定の結果クリ材であり、年代測定結果は、暦年較正年代(2 σ)で1522～1574calAD(46.9%)、1629～1660calAD(48.5%)が得られている(詳細は第7章第5～6節参照)。本遺構の帰属時期は中世後半である。

S569 (第256・284・286・376図、表61・69～72、PL.132)

S22グリッド、調査区平坦部の南西寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.51m、短軸0.43m、深さは0.35mを測る。平面形は不整円形で、掘方の断面形は逆台形状を呈する。

埋土の中心部では炭粒を多く含んだ灰色シルトの柱痕跡が確認された。柱痕跡である3層内で柱根W52が出土している。W52は最大長20.5cm、最大幅9.7cmを測る芯持材である。樹種同定の結果、クリ材であり、年代測定結果は、暦年較正年代(2 σ)で1762～1802calAD(46.2%)、1653～1681calAD(26.3%)が得られている(詳細は第7章第5節参照)。その他の遺物は出土していない。

S571 (第256・284・376図、表69～72、PL.132)

S22グリッド、調査区平坦部の南西寄りで検出した柱穴である。南東側でS570ピットと重複し、本遺構が掘り込まれている。検出規模は長軸0.62m、短軸0.37m、深さは0.14mを測る。平面形は南北方向に主軸をもつ不整楕円形で、掘方の断面形は逆台形状を呈する。

埋土の中心部で最大長9.0cm、最大幅13.0cmの柱根が出土しているが、残存状況は不良である。樹種同定の結果クリ材であり、年代測定結果は、暦年較正年代(2 σ)で1720～1780calAD(31.4%)が得られている(詳細は第7章第5節参照)。その他の遺物は出土していない。

S572 (第256・284図、PL.132)

S23グリッド、調査区平坦部の南西寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.45m、短軸0.41m、深さは0.41mを測る。平面形は不整円形で、掘方の断面形は箱形を呈する。

埋土の中心部で明黄褐色細粒砂ブロックの混じる灰色粘土の柱痕跡が確認されている。柱痕跡には最大長14.0cm、最大幅13.0cmの柱根が出土しているが、残存状況は不良である。出土遺物は皆無であり、帰属時期は不明である。

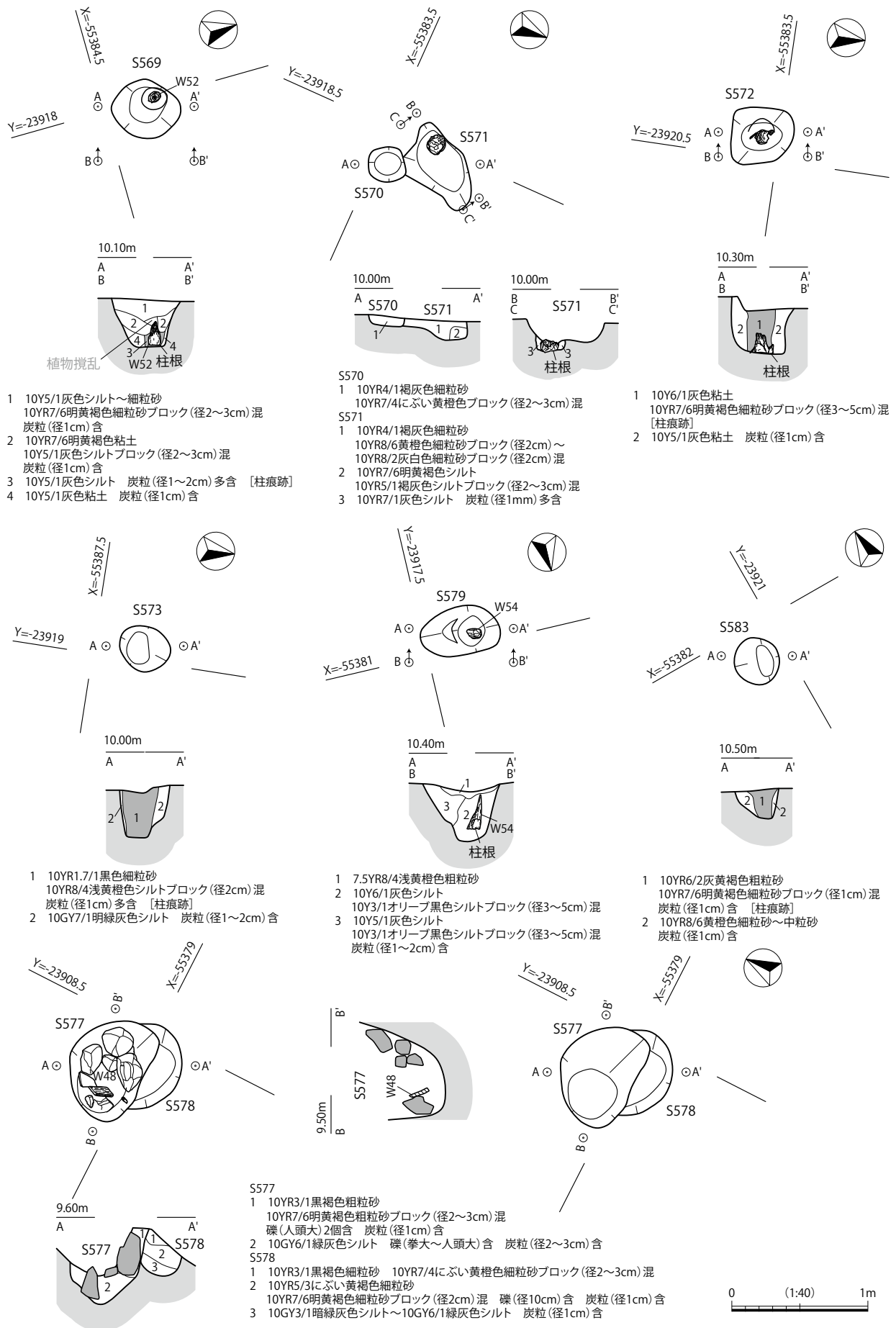
S573 (第256・284図、PL.133)

S22グリッド、調査区平坦部の南西寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.38m、短軸0.33m、深さは最大で0.37mを測る。平面形は不整円形で、掘方の断面形は逆台形状を呈する。埋土は2層に分層でき、中心部に浅黄橙色シルトブロックを含む黒色細粒砂の柱痕跡が確認された。出土遺物は皆無であり、帰属時期は不明である。

S577 (第256・257・284・286・377図、表69～72、PL.133)

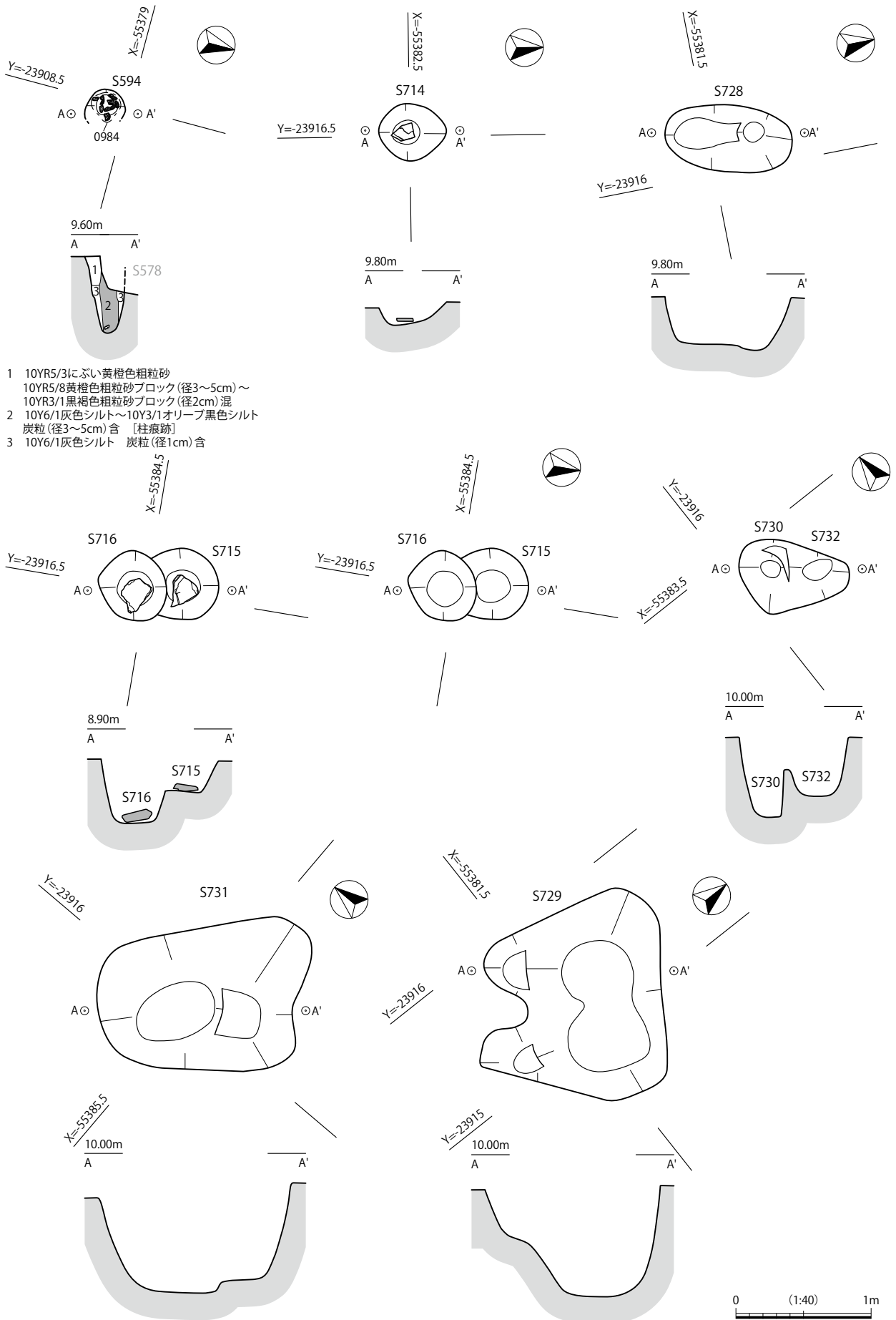
R21グリッド、調査区中央平坦部のピット群北東寄りで検出した柱穴である。S385土坑及びS384ピットの底面で検出し、南側でS578ピットを掘り込んでいる。検出規模は長軸0.76m、短軸0.57m、深さ0.55mを測る。平面形は不整楕円形、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びる。

埋土は上層の明黄褐色粗粒砂ブロックを含む黒褐色粗粒砂と下層の緑灰色シルトに分かれ、根石と考えられる長さ0.1～0.31m、厚さ0.05～0.17mの中型、大型礫が複数出土した。このうち最大の礫は、南壁に沿うように置かれていた。

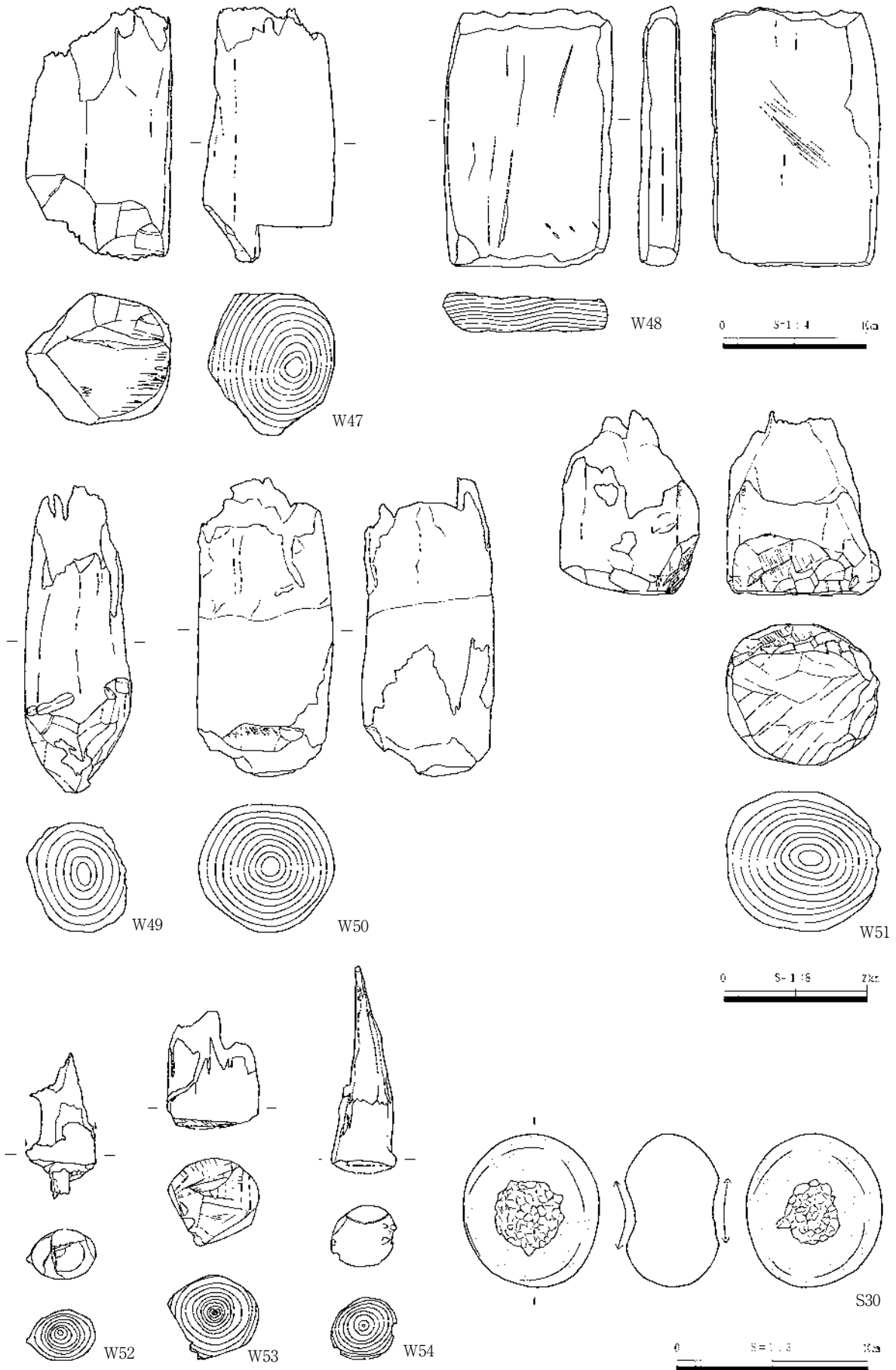


第284図 S569・571~573・577・579・583柱穴、S570・578ピット平面・断面図

第6章 8区の調査成果



第285図 S594・714~716・728~732柱穴平面・断面図



第286図 第1遺構面柱穴出土遺物

第6章 8区の調査成果

下層からは最大長18.1cm、最大幅11.8cm、最大厚3.0cmの礎板W48が出土している。樹種同定の結果はスギ材であり、年代測定結果は、暦年較正年代(2 σ)で1220～1271calADが得られている(詳細は第7章第5節参照)。その他の出土遺物は弥生土器の細片が少数出土しているが混入の可能性が高い。

S579 (第256・284・286・377図、表61・69～72、PL.133・185)

S22グリッド、調査区平坦部の西寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.59m、短軸0.35m、深さは0.42mを測る。平面形は東西方向に主軸をもつ不整楕円形で、掘方の断面形はU字状で東側に狭い段を有する。埋土の中心部の2層内で、柱根W54が床面から若干浮いた状態で出土している。

W54は最大長28.9cm、最大幅9.1cmを測る芯持材である。樹種同定の結果はクリ材であり、年代測定結果は、暦年較正年代(2 σ)で1729～1783calAD(48.3%)が得られている(詳細は第7章第5節参照)。その他の遺物は出土していない。

S583 (第256・284図)

S23グリッド、調査区平坦部の南西寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.35m、短軸0.33m、深さは最大で0.21mを測る。平面形は不整円形で、掘方の断面形は逆台形状を呈する。

埋土は2層に分かれ、中心部に明黄橙色細粒砂ブロックを含む灰黄褐色粗粒砂の柱痕跡が確認された。出土遺物は皆無であり、帰属時期は不明である。

(5) ピット

S230 (第256・287・288図、表35、PL.152)

Q21グリッド、調査区中央北部で検出した小穴である。南側でS244溝と重複し、掘り込まれている。検出規模は長軸0.58m、短軸0.58m、深さ0.36mを測る。遺構の平面形は不整円形を呈する。断面形は桶形である。埋土は4層に分層され、褐灰色粗粒砂から灰黄褐色粗粒砂が堆積している。

埋土から須恵器甕668が出土している。外面は平行タタキ、内面は車輪状当て具痕が残る。本遺構の帰属時期は古墳時代以降に比定される。

S367 (第256・257・287・288図、表35、PL.153)

R21～22グリッド、調査区中央部のピット群北側で検出した小穴である。検出規模は長軸0.5m、短軸0.42m、深さ0.30mを測る。遺構の平面形は不整円形を呈する。断面形は桶形である。

埋土は5層に分層され、黒褐色粗粒砂から褐灰色細粒砂が互層に堆積している。埋土から備前焼の小徳利669が出土している。本遺構の帰属時期は近世に比定される。

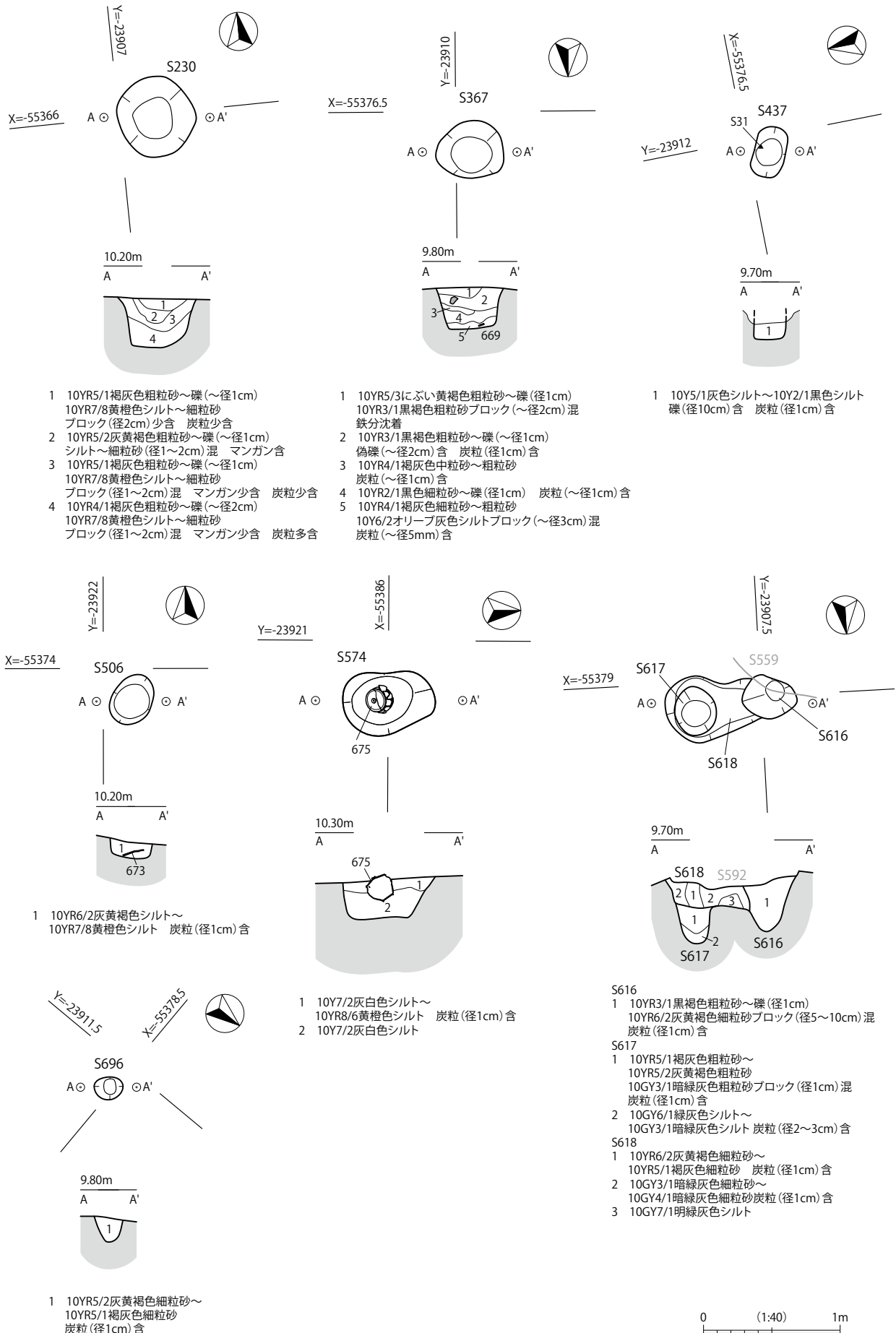
S381 (第256・257・279・288図、表35、PL.153)

R22グリッド、調査区中央平坦部のピット群北西で検出した小穴である。南西側でS382柱穴と重複し、掘り込まれている。検出規模は長軸0.42m、短軸0.26m、深さ0.44mを測る。遺構の平面形は南西方向に長軸をもった不整楕円形を呈する。断面形はU字形を呈し、底面は丸みを帯びる。

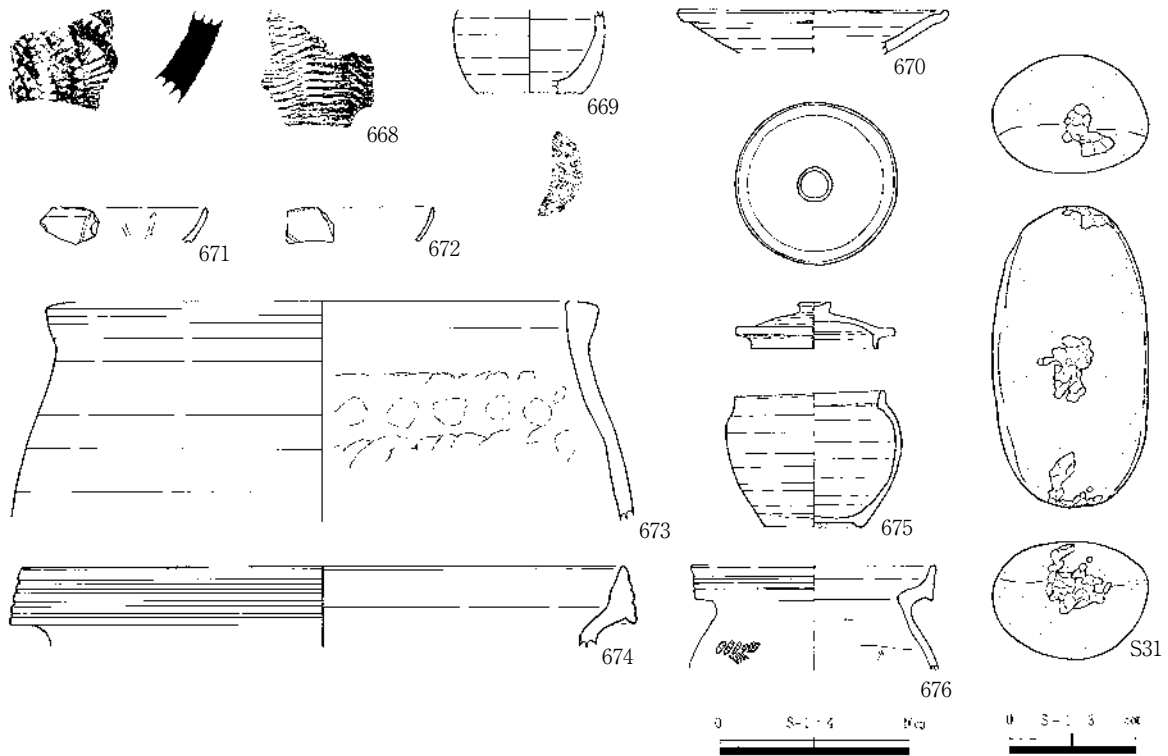
埋土は3層に分層され、黄褐色から黒褐色粗粒砂ブロックを含む混合土が互層に堆積している。埋土から肥前系(唐津系)陶器皿670が出土している。溝縁皿で陶土は赤みを帯びることから、17世紀前半と考えられる。本遺構の帰属時期は近世前半以降と推定される。

S396 (第256・257・279・288図、表35、PL.153)

S22グリッド、調査区中央平坦部のピット群南東で検出した小穴である。北側でS395ピットに掘り込まれる。検出規模は長軸0.52m、短軸0.28m、深さは最大で0.4mを測る。平面形は東西方向に長軸



第287図 S230・367・437・506・574・617・696ピット平面・断面図



第288図 第1遺構面ピット出土遺物

をもつ楕円形で、掘方中心部の断面形はU字状を呈する。

埋土は灰黄褐色から黒褐色粗粒砂が堆積している。出土遺物はヘラ描きの連弁文が施される龍泉窯系青磁碗671が出土している。本遺構の帰属時期は中世以降と推定される。

S436 (第256・257・280・288図、表35、PL.153)

S21～22グリッド、調査区中央平坦部のピット群南壁際で検出した小穴である。S410柱穴を南側で掘り込み、北側上部をS409ピットに掘り込まれている。検出規模は長軸0.64m、短軸0.58m、深さ0.46mを測る。平面形は不整円形、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びる。

埋土は3層に分かれ、明黄褐色粗粒砂ブロックを含む混合土が堆積する。出土遺物はヘラ描きの連弁文が施される龍泉窯系青磁碗672が出土している。本遺構の帰属時期は中世以降と考えられる。

S437 (第256・257・287・288図、表55、PL.181)

R22グリッド、調査区中央部のピット群北で検出した小穴である。S356とS418ピットに掘り込まれる。検出規模は長軸0.36m、短軸0.22m、深さ0.10mを測る。遺構の平面形は楕円形を呈し、掘方は桶形である。

埋土は単層で灰色から黒色シルトが堆積している。埋土中から安山岩製の敲石S31が出土している。楕円礫の上下端部と上面の中心部に敲打痕がみられる。本遺構の帰属時期は不明である。

S506 (第256・287・288図、表35、PL.133・153)

R23グリッド、調査区西部中央で検出した小穴である。検出規模は長軸0.38m、短軸0.30m、深さ0.12mを測る。遺構の平面形は楕円形を呈し、掘方は桶形である。

埋土は単層で灰黄褐色から黄橙色シルトが堆積している。埋土中から越前焼甕673が出土している。口縁端部が肥厚し、内面は輪積み痕や指頭圧痕が明瞭に残る。以上の特徴から本遺構の帰属時期は18

世紀前半頃と考えられる。

S574 (第256・287・288図、表35、PL.133・155)

S23グリッド、調査区平坦部の南西で検出した小穴である。検出規模は長軸0.33m、短軸0.23m、深さは最大で0.14mを測る。平面形は南北に長軸をとる不整楕円形で、掘方の断面形は逆台形状を呈する。

埋土は2層に分かれ、上層は灰白色から黄橙色シルト、下層は灰白色シルトが堆積する。上層には石見焼小壺675がほぼ完形で、南側に傾きを持って出土しているが、本来は正位に埋設したものが土圧によって傾いたものと考えられる。本遺構は、この675を埋設するためのものと推測される。帰属時期は、675から19世紀代と考えられる。

S617 (第256・257・287・288図、表35、PL.157)

R21グリッド、調査区中央部のピット群北東で検出した小穴である。S618ピットに掘り込まれる。検出規模は長軸0.34m、短軸0.28m、深さ0.28mを測る。遺構の平面形は不整円形を呈し、断面形は丸形である。埋土は褐灰色粗粒砂から暗緑灰色シルトが堆積している。

埋土から弥生土器壺674が出土している。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期前葉と考えられる。

S696 (第256・257・287・288図、表36、PL.157)

R22グリッド、調査区中央部のピット群北寄り検出した小穴である。検出規模は長軸0.22m、短軸0.18m、深さ0.18mを測る。遺構の平面形は不整円形を呈し、断面形は丸形である。

埋土は灰黄褐色細粒砂から褐灰色細粒砂が堆積している。埋土中から弥生土器甕676が出土している。口縁部に3条の平行沈線がめぐり、体部にハケ状工具の刺突文が施文される。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期前葉と考えられる。

S301・302・303・304 (第256・278図)

Q24グリッド、丘陵斜面上方、調査区西壁際の旧地表及び地山面で検出した平面円形や楕円形を呈する小穴群である。検出規模は長軸0.6m、短軸0.4～0.6m、深さは0.3～0.7mを測る。S301とS304には柱痕跡が認められる。S303ピット底面からは弥生土器が出土した。S301、S302及びS303は同一等高線上に南北方向に並んでおり、掘方底面のレベルも一致するため、塀あるいは柵等の施設の一部として組み合う可能性がある。帰属時期は、S303ピット底面の出土遺物及び埋土の類似性から弥生時代後期以降と想定したい。

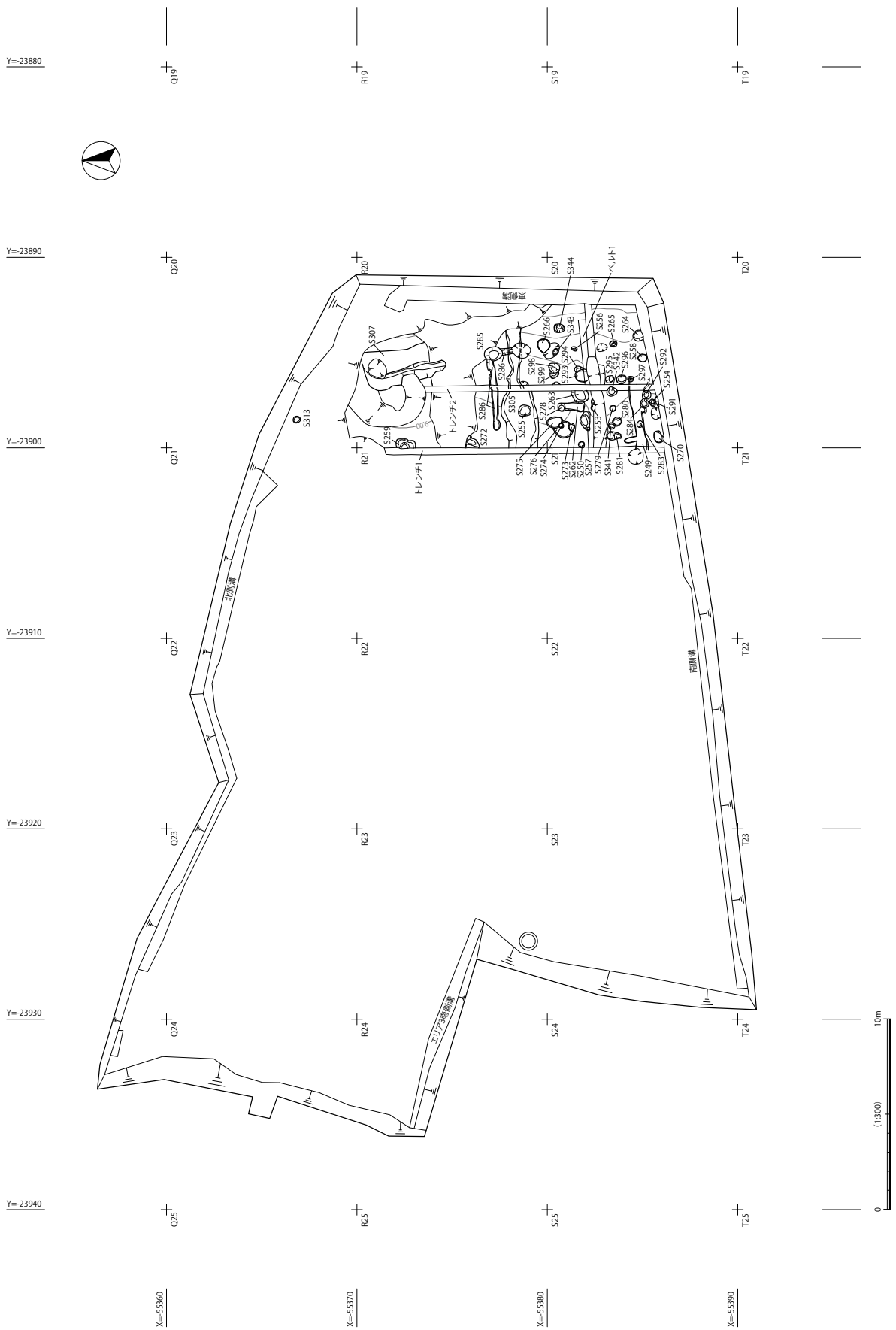
3 第1－2遺構面

(1) 段状遺構

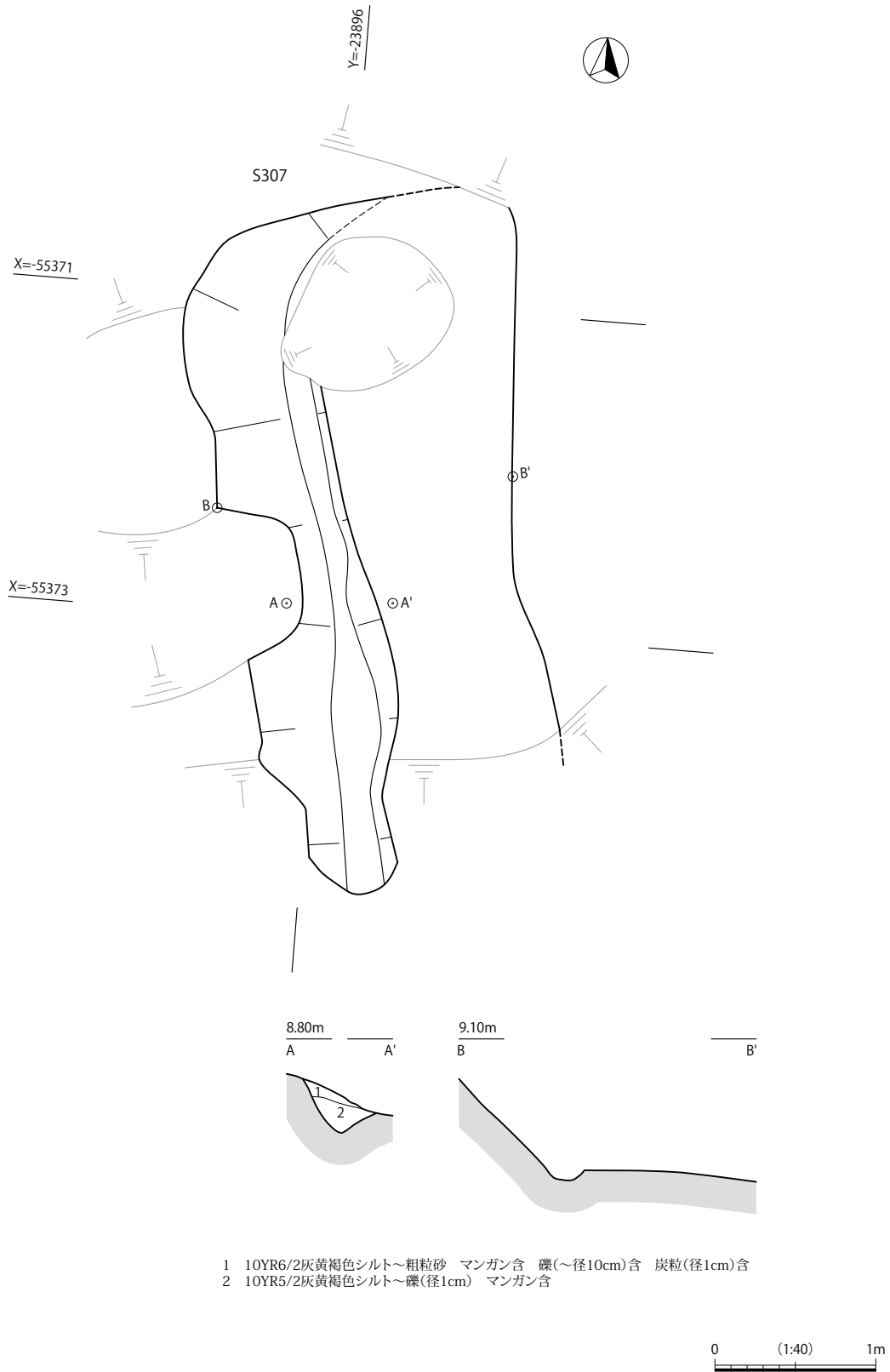
S307 (第289・290図)

R20グリッド、調査区北東部の第Ⅱ層下面で検出した遺構である。当初はS315溝の段差にほぼ一致し、主軸も揃うことにより同一遺構である可能性も考えたが、底面が平坦であり検出した西側辺に沿って小溝が認められることから、S315溝と区別して段状遺構として認識した。S315溝との前後関係は層位的には判然としないが、S315溝埋没後に本遺構が掘削された可能性が高い。

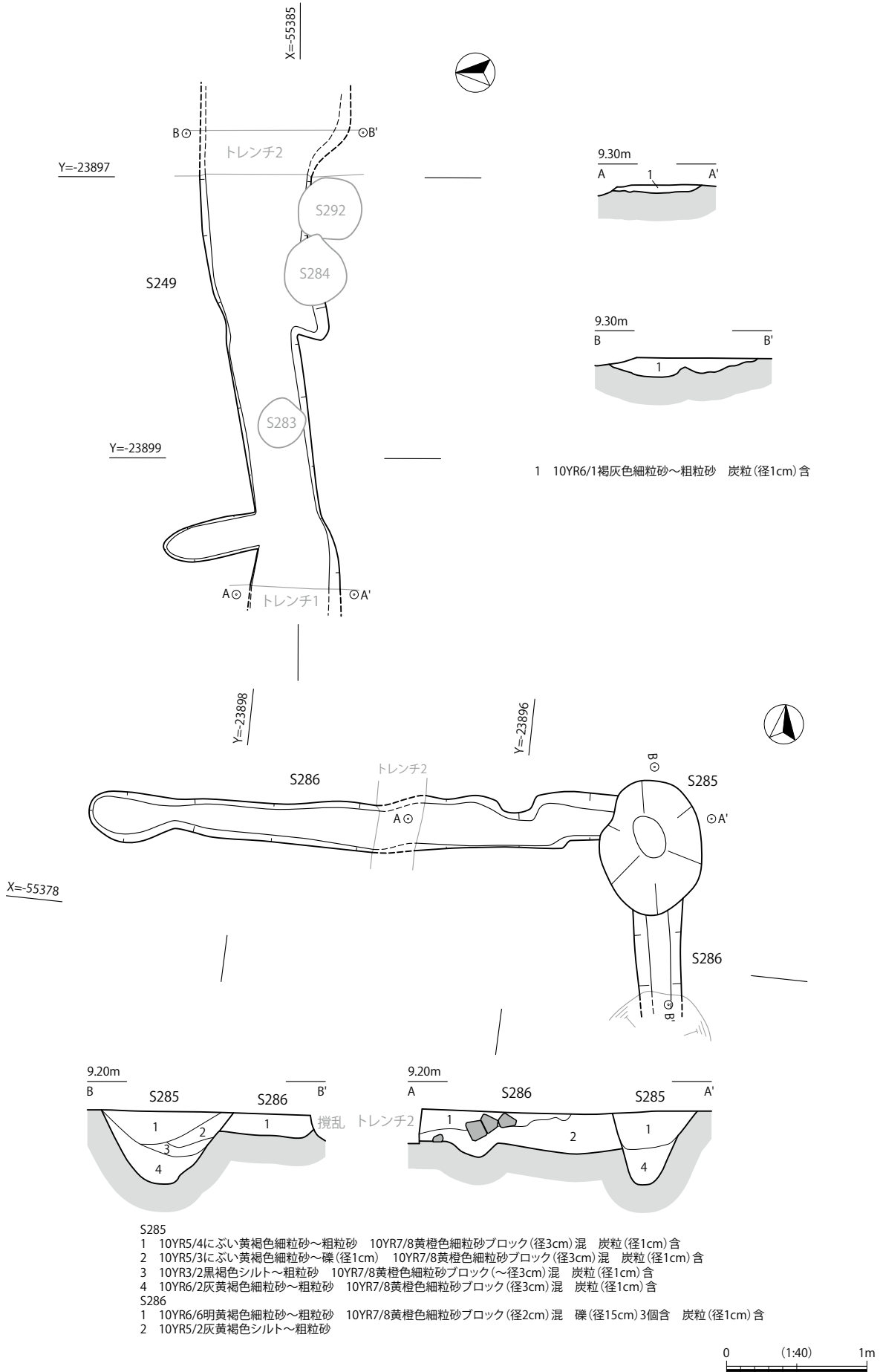
検出規模は長軸4.25m、短軸1.84m、検出面からの深さは0.48～0.59mを測る。平面形は主軸を南北にもつ長方形を呈し、遺構の東側は削平を受けている。西側壁際に沿って底面に小溝の溝幅は0.24



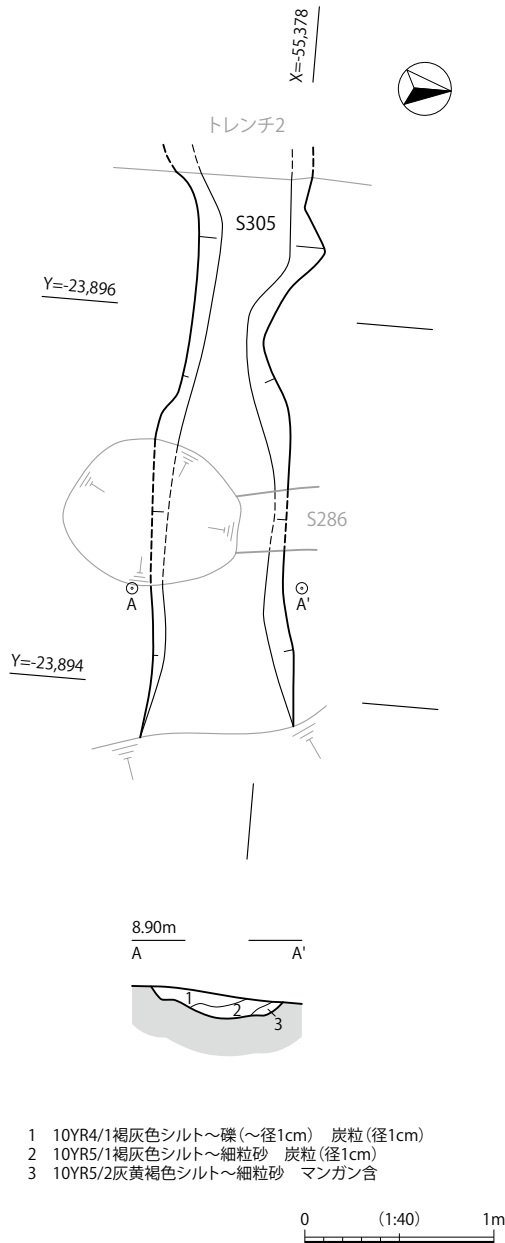
第289図 8区第1-2遺構面遺構配置図



第290図 S307段状遺構平面・断面図



第291図 S249・286溝、S285土坑平面・断面図



第292図 S305自然流路平面・断面図

S305 (第289・292図)

R20グリッド、調査区東部中央で検出した自然流路である。検出規模は長さ2.95m、幅0.4～0.8m、深さ0.13mで、西から東へ下降する。断面形は浅い皿状を呈する。

埋土はシルトが3層堆積し、短期間の自然流路と想定される。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

(3) 土坑

S285 (第289・291図)

R20グリッド、調査区東部中央で検出した土坑である。S286溝を掘り込んでいる。検出規模は、主軸0.9m、短軸0.7m、深さは0.52mを測る。掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びる。

埋土は地山ブロックを含む混合土が堆積し、柱痕跡などは認められなかった。出土遺物はなく帰属時期の詳細は不明であるが、埋土の特徴から近世以降の遺構と考えられる。

m、深さ0.16mを測り、断面形はU字形である。

出土遺物は皆無で帰属時期、性格共に明確な判断材料に欠ける。

(2) 溝

S249 (第289・291図)

S20グリッド、調査区南東部南壁際でS224水田の耕作土除去後に検出した遺構である。遺構の南側はS283、S284及びS292ピットによって掘り込まれている。検出規模は長さ3.75m、幅0.5～0.7m、深さ0.47～1.05mで、溝の底面は約0.06m、西から東へ下降する。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は砂の単層であり、短期間の自然流路と想定される。

出土遺物は皆無で具体的な帰属時期は不明であるが、他の遺構の重複関係から近世以降に埋没したものと考えられる。

S286 (第289・291図)

R20グリッド、調査区東部中央で検出した溝である。東に4mの位置で南へ折れ曲がり、平面形はL字状を呈する。屈曲部はS285土坑に掘り込まれ、南北軸の溝は屈曲部から1.3m南で攪乱によって削平されている。検出規模は、東西軸3.65m、南北軸0.55m、溝幅は0.34～0.4m、深さは0.18～0.28mを測る。溝の断面形はU字状を呈する。

埋土は地山ブロックを含む混合土が堆積し、径0.15m程の礫が含まれる。遺構の帰属時期は、埋土の特徴から近世以降の遺構と考えられる。

S257 (第289・293図)

S20グリッド、調査区東部中央で検出した土坑である。検出規模は長軸1.05m、短軸0.54m、深さは最大で0.34mを測る。平面形は東西方向に主軸をもつ不整楕円形で歪である。掘方断面形は東西両端に段を有する箱形である。埋土は黄橙色細粒砂ブロックを含む混合土が認められ、人為的な埋め戻しの可能性が高い。

出土遺物は弥生土器や須恵器の細片が少量出土しているが、埋め戻しの際の混入と思われる。帰属時期は埋土の特徴から、近世以降と考えられる。

S259 (第289・293図)

R20グリッド、調査区東部北寄りで検出した土坑である。検出規模は長軸1.0m、短軸0.52m、深さは最大で0.38mを測る。平面形は土層観察用のトレンチ1の掘削により遺構西側が不明であるが、南北方向に主軸をもつ不整楕円形と想定される。掘方の断面形はV字状を呈し、壁が直線的に立ち上がる。埋土は黄橙色細粒砂ブロックを含む混合土が認められる。

出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

S262 (第289・293・294図、表36・54、PL.152・179)

S20グリッド、調査区東部南寄りで検出した土坑である。北側でS278ピットに掘り込まれ、南東側でS263土坑を掘り込んでいる。検出規模は長軸1.02m、短軸0.5m、深さは最大で0.13mを測る。平面形は南北方向に主軸をもつ楕円形と想定される。掘方の断面形は逆台形を呈し、底面は概ね平坦である。埋土は黄橙色細粒砂ブロック等を含む混合土が認められる。

出土遺物は、陶器677、玩具である亀形土製品678が出土している。677は肥前系(唐津系)陶器皿あり、見込に灰色の圏線がめぐる。678は頭部や甲羅が精密に表現され、腹部は棒状工具による穿孔が認められる。寸法は最大長6.0cm、最大幅3.9cmを測る。本遺構の帰属時期は、出土遺物により近世後半と考えられる。

S263 (第289・293図)

S20グリッド、調査区東部南寄りで検出した土坑である。検出規模は長軸0.9m、短軸0.6m、深さは最大で0.2mを測る。平面形は遺構の東側が土層観察用のトレンチ2の掘削により不明であるが、歪な不整円形と想定される。掘方の断面形は逆台形を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は黄橙色細粒砂ブロック等を含む混合土が認められる。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

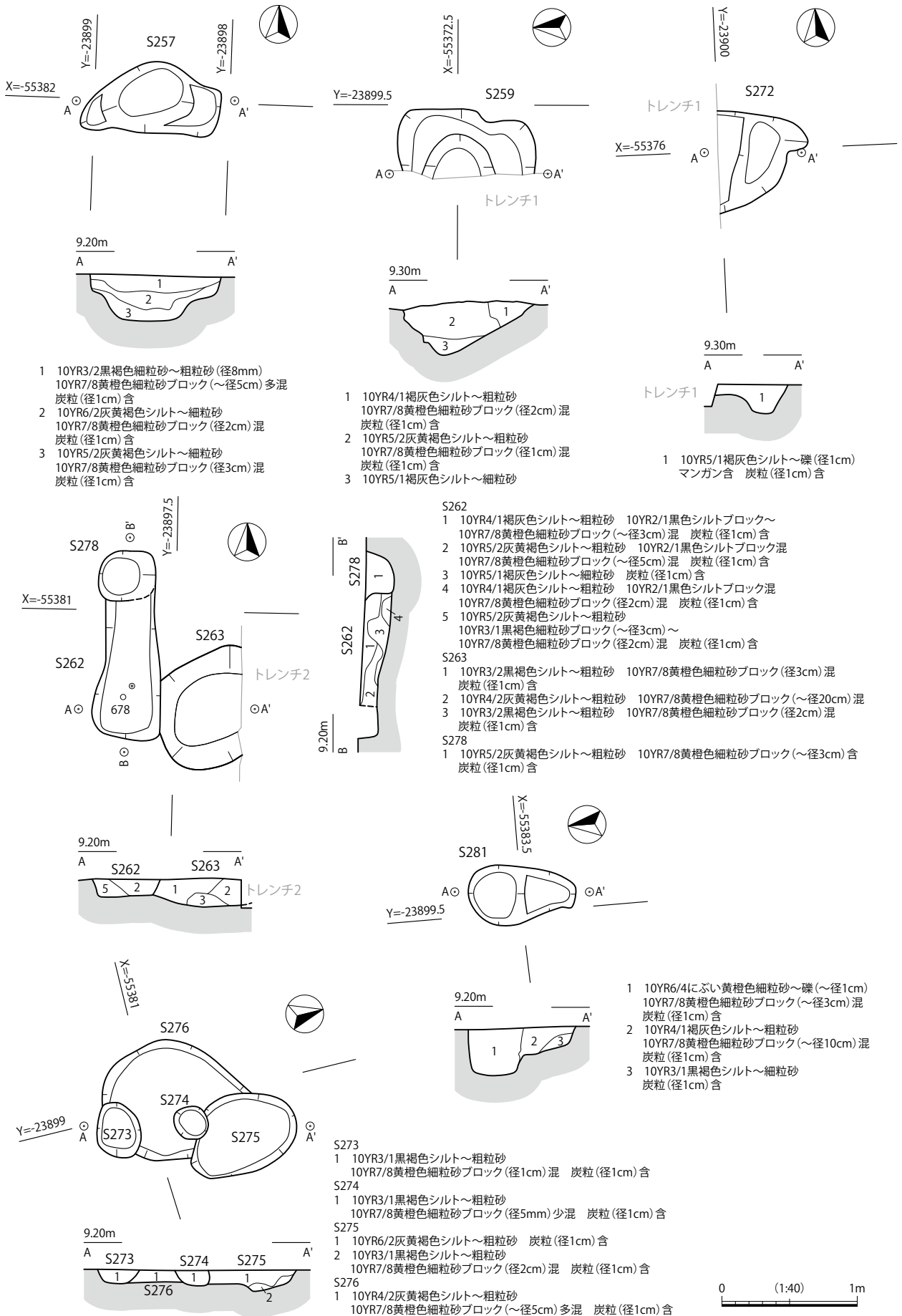
S272 (第289・293図)

R20グリッド、調査区東部中央で検出した土坑である。検出規模は長軸0.77m、短軸0.66m、深さは最大で0.22mを測る。平面形は遺構の西側が土層観察用のトレンチ1の掘削により不明であるが、歪な不整楕円形と想定される。掘方の断面形は西側に壇上の平坦面をもち、幅0.22mの狭い底面が認められる。

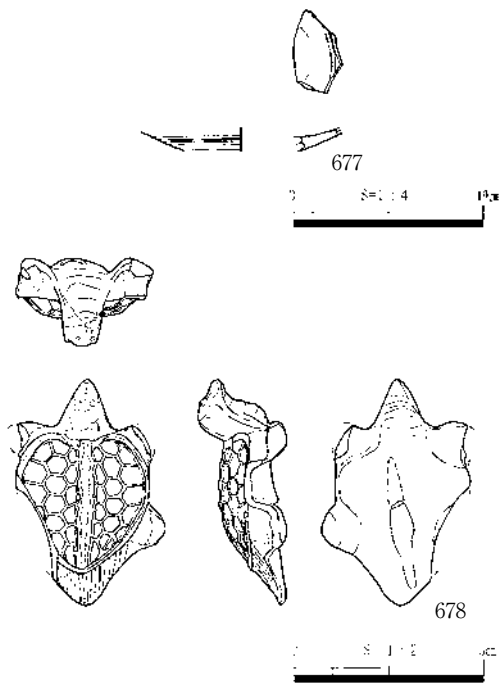
出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

S275 (第289・293図)

S20グリッド、調査区東部中央で検出した土坑である。南側でS276土坑を掘り込み、S274ピットに掘り込まれる。検出規模は長軸0.84m、短軸0.6m、深さは最大で0.16mを測る。平面形は南北方向に主軸をもつ不整楕円形である。掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面はやや凹凸がある。



第293図 S257・259・262・263・272・275・276・281土坑、S273・274・278ピット平面・断面図



第294図 S262土坑出土遺物

最大で0.34mを測る。平面形は南北方向に主軸をもつ不整楕円形である。掘方の断面形は箱形であり、南側に段を有する。底面は概ね平坦である。

埋土は黄橙色細粒砂ブロック等を含む混合土がベースとなる。出土遺物は弥生土器や須恵器の細片が少量出土しているが、いずれも混入と思われる。帰属時期は埋土の特徴から、近世以降と考えられる。

(4) 柱穴

S284 (第289・295図)

S20グリッド、調査区東部南壁際で検出した柱穴である。北側でS249溝、東側でS292柱穴を掘り込む。検出規模は長軸0.47m、短軸0.44m、深さ0.5mを測る。平面形は不整円形、掘方の断面形は箱形であり、底面は概ね平坦である。

埋土は柱痕跡と考えられる黄褐色細粒砂ブロックが混じる灰黄褐色シルトが中心部に堆積し、炭粒を多く含んでいた。出土遺物は弥生土器や須恵器の細片が少量出土しているが、帰属時期は埋土の特徴から近世以降と考えられる。

S292 (第289・295図)

S20グリッド、調査区東部南壁際で検出した柱穴である、西側でS284柱穴に掘り込まれる。検出規模は長軸0.45m、短軸0.43m、深さは最大で0.19mを測る。平面形は不整円形、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びる。

埋土は2層に分かれ、明黄褐色細粒砂ブロックを含んでいる。底面上に長軸0.33m、短軸0.23m、厚さ0.1mの礎盤石と考えられる板状礫が置かれていた。帰属時期は埋土の特徴から近世以降と考えられる。

S297 (第289・295図)

S20グリッド、調査区東部南寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.3m、短軸0.28m、深さは最大で0.22mを測る。平面形は不整円形、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びている。

埋土は黄橙色細粒砂ブロック等を含む混合土がベースとなる。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

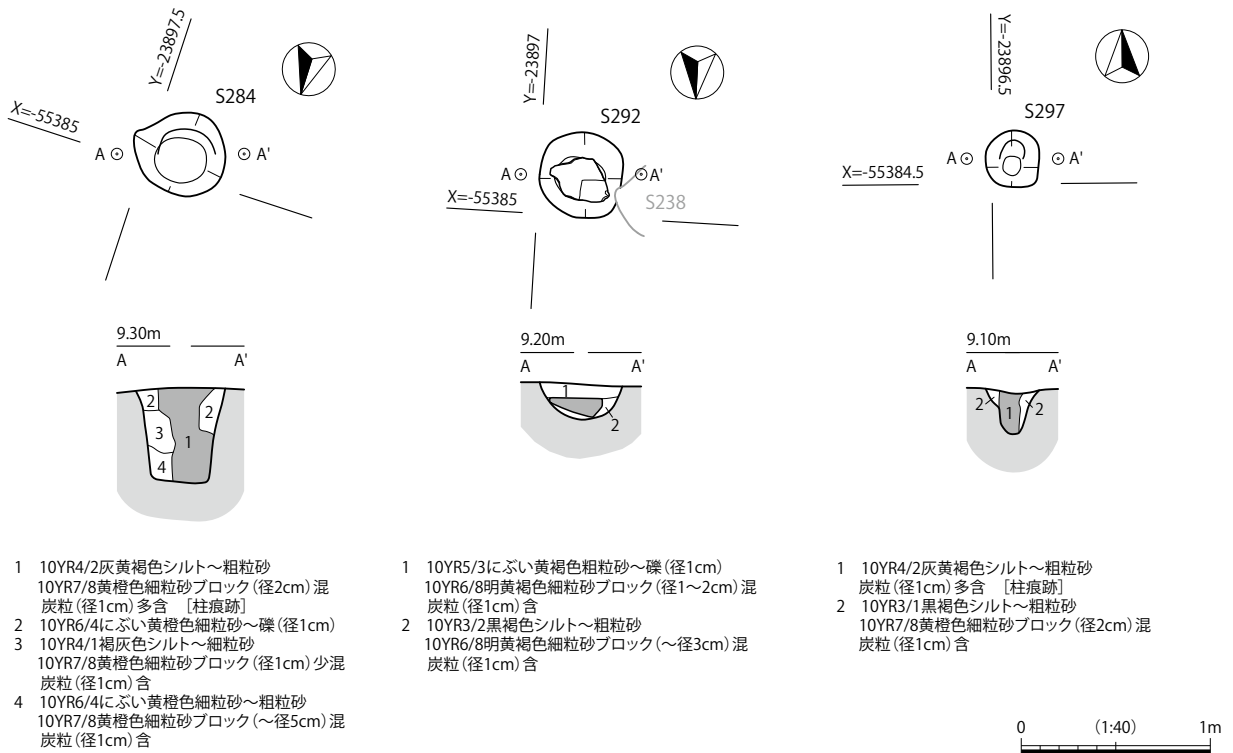
S276 (第289・293図)

S20グリッド、調査区東部中央で検出した土坑である。南側をS273ピット、北側をS275土坑、S274ピットに掘り込まれる。検出規模は長軸0.9m、短軸0.75m、深さは最大で0.1mを測る。平面形は北東-南西方向に主軸をもつ不整楕円形である。掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。

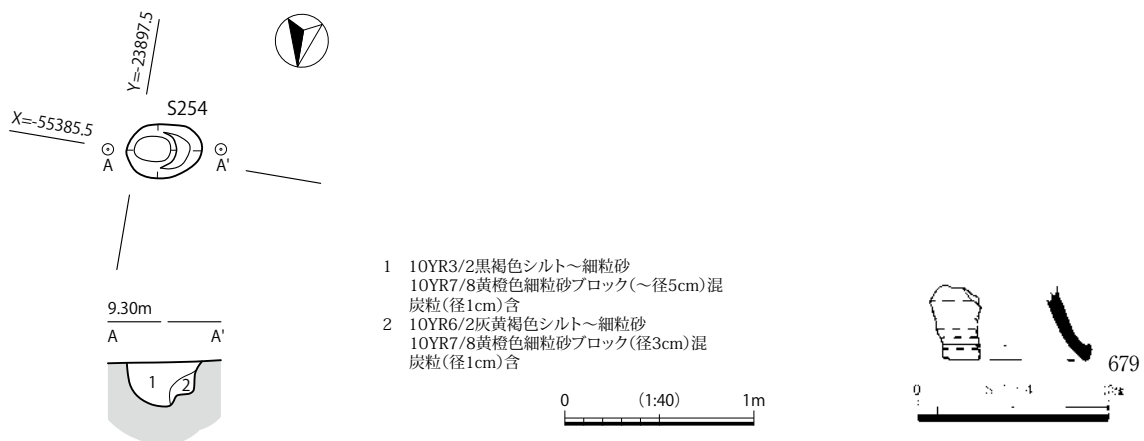
埋土は黄橙色細粒砂ブロックを含む混合土がベースとなる。本遺構の帰属時期は、埋土の特徴から近世以降と考えられる。

S281 (第289・293図)

S20グリッド、調査区東部中央で検出した土坑である。検出規模は長軸0.8m、短軸0.45m、深さは最大で0.34mを測る。平面形は南北方向に主軸をもつ不整楕円形である。掘方の断面形は箱形であり、南側に段を有する。底面は概ね平坦である。



第295図 S284・292・297柱穴平面・断面図



第296図 S254ピット平面・断面図及び出土遺物

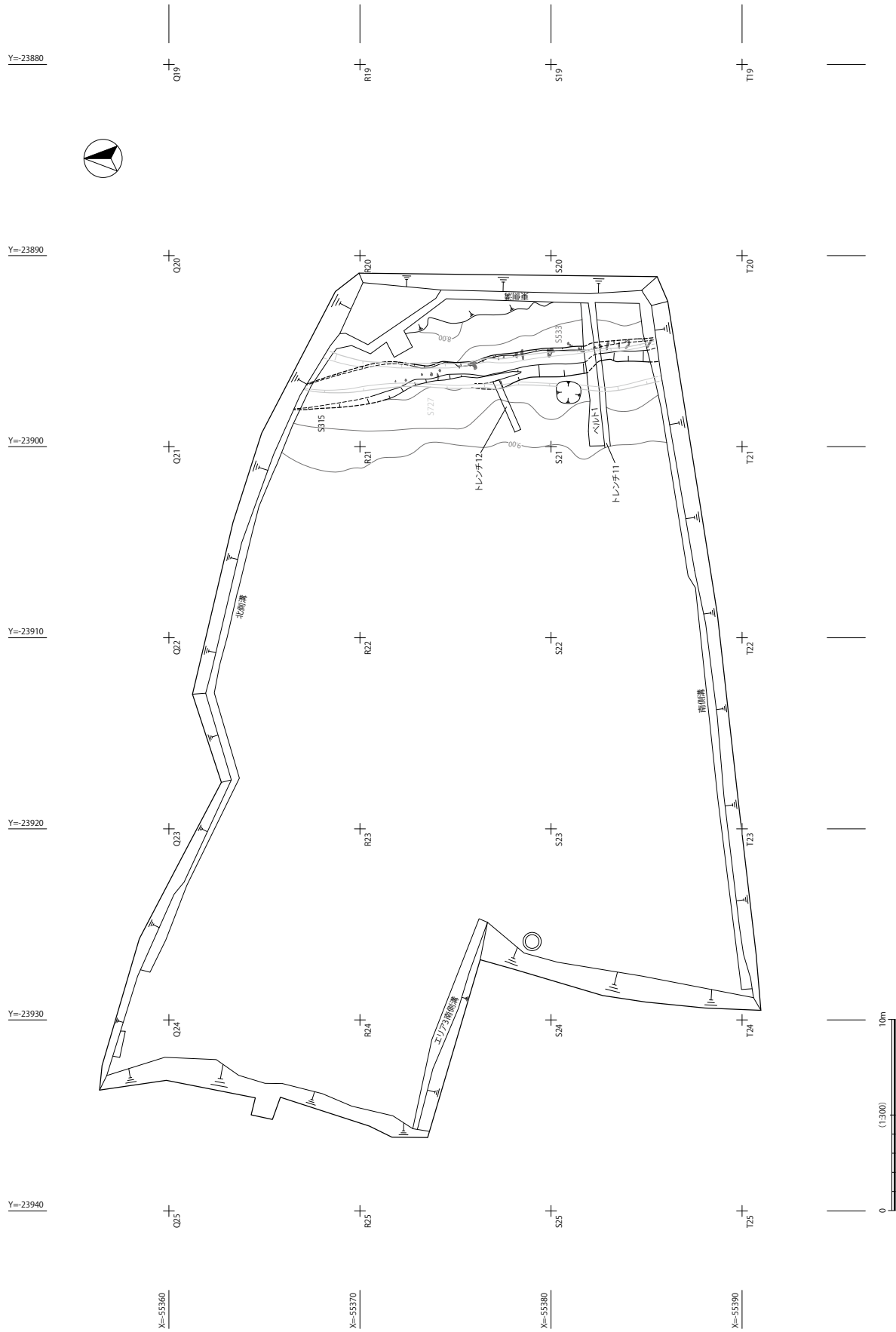
埋土は2層に分かれ、このうち1層は灰黄褐色シルトで炭粒を多く含む柱痕跡である。帰属時期は埋土の特徴から、近世以降と考えられる。

(5) ピット

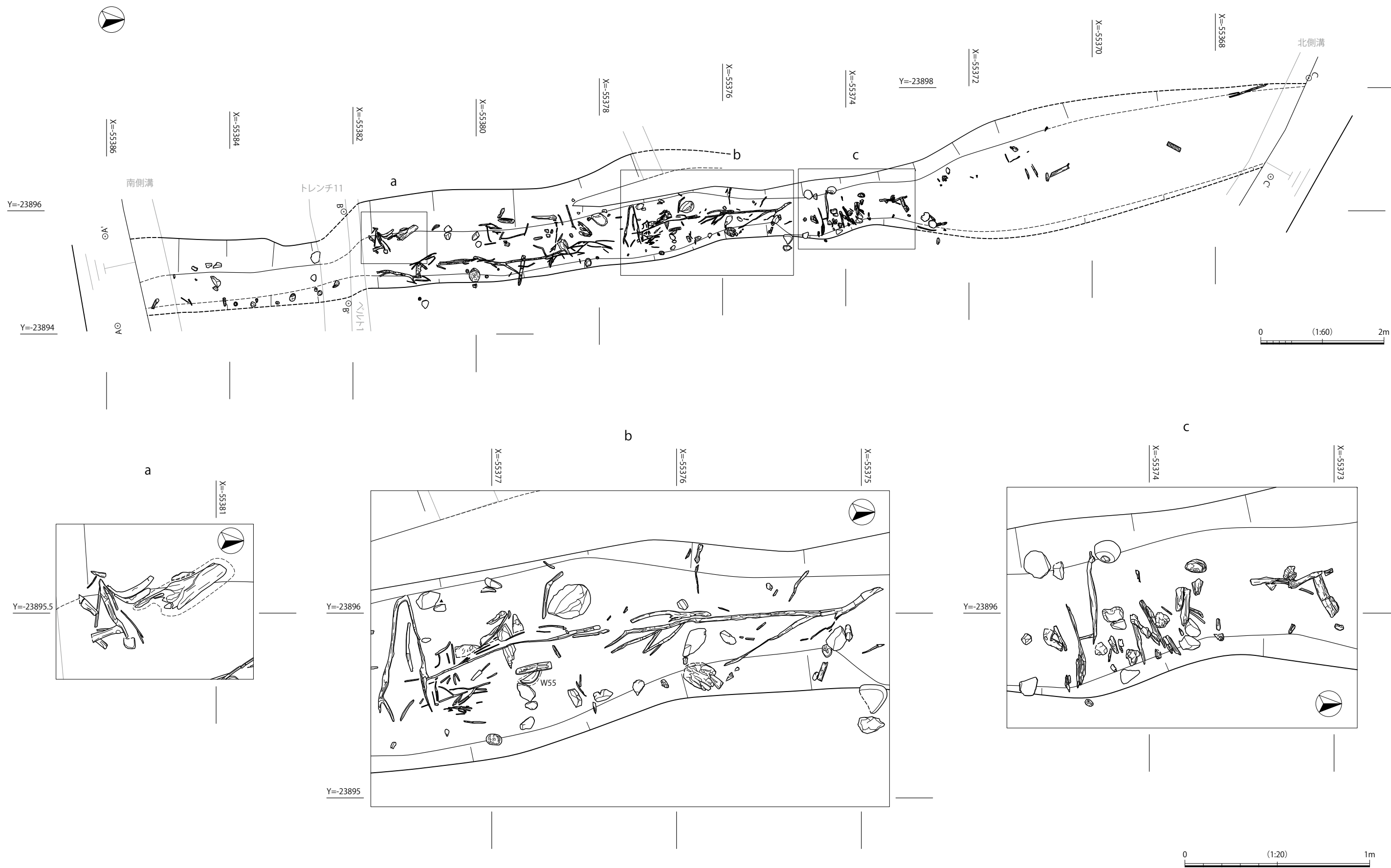
S254 (第289・296図、表36、PL.152)

S20グリッド、調査区東部南壁際で検出した小穴である。検出規模は長軸0.4m、短軸0.28m、深さ0.24mを測る。平面形は楕円形、掘方の断面形は西側にテラス面を設け、丸みを帯びる。

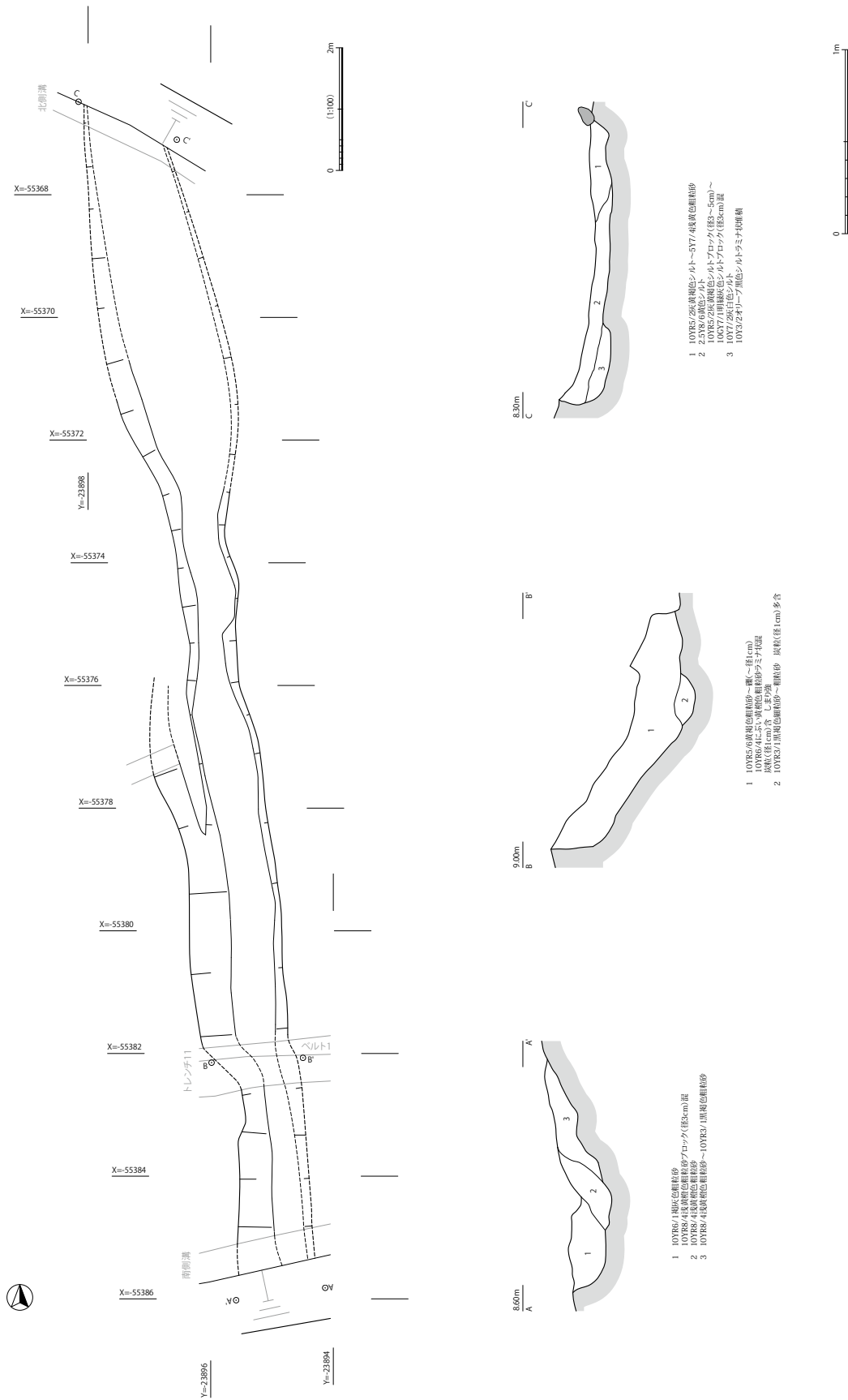
埋土は2層に分かれ、黄橙色細粒砂ブロックが混じるシルトが堆積する。出土遺物は須恵器高坏の脚部679が出土しているが混入であろう。本遺構の帰属時期は埋土の特徴から、近世以降と考えられる。



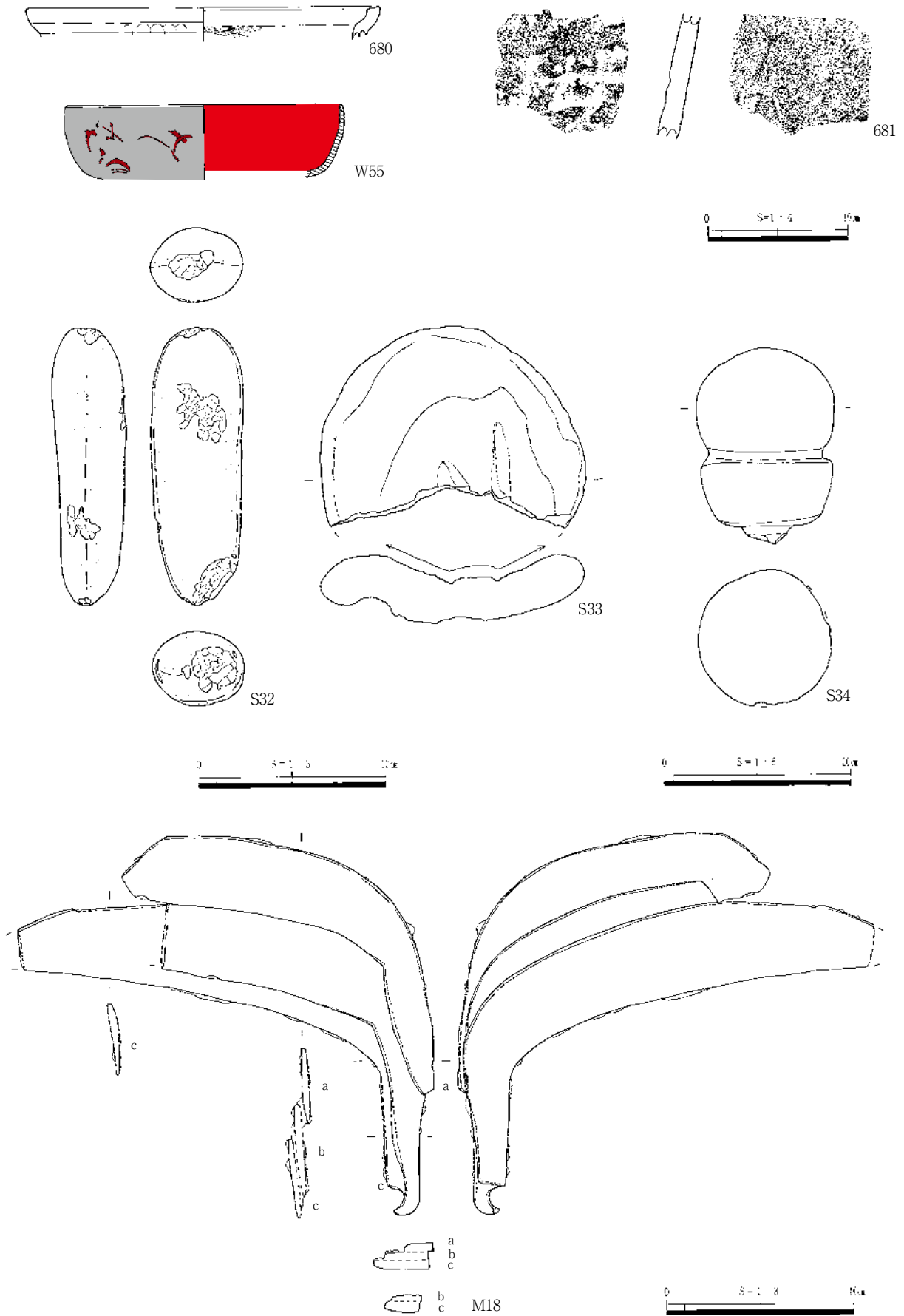
第297図 8区第1-3遺構面遺構配置図



第298図 S315溝遺物出土状況図



第299図 S315溝平面・断面図



第300図 S315溝出土遺物

4 第1-3遺構面

(1) 溝・杭列

S315 (第252・297～300図、表36・55・57・61、PL.136・137・152・180～182)

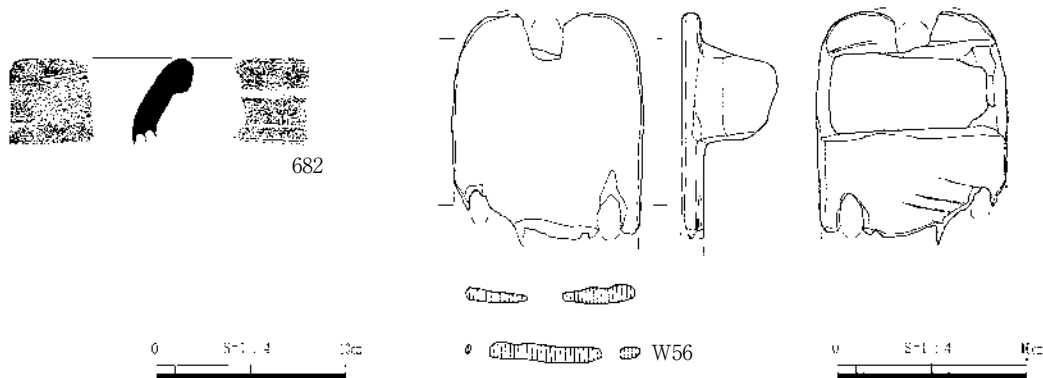
R20、S20グリッド、調査区東部段裾で検出した北西-南東方向に主軸をとる溝である。旧地形で西側から東側にかけて段差が見られるが、その段差沿いに走行する。長さ18.3m、幅0.8～2.0m、深さ0.1～0.78mを測り、さらに調査区外へ延びる。中央やや北寄りには上位からの攪乱のため肩が削られ、北端部は現在の擁壁により大きく削平を受けている。また、東側肩部も西側に比べ浅いが、これは壁の一部が流出したものと想定される。

埋土は3層に分層され、浅黄橙色粗粒砂がベースとして堆積する。B-Bラインの2層は有機物を多く含むシルトである。ここに溝に沿って長さ0.3～1.5mの多数の自然木や広葉樹の葉など植物遺体が多く含まれていた。このことから、流路として機能していたものが、その後人為的に埋め戻されたと考えられる。

出土遺物は、瓦質土器、瓷器、漆器碗、五輪塔及び鉄鎌などが認められる。680は瓦質鍋で口縁部が受け口状に外形して立ち上がる。焼成は不良である。681は瓷器系の甕体部片である。硬質で胎土に礫や長石を多く含む。越前焼の可能性を指摘しておきたい。W55は漆器碗である。内外面黒色、赤色による文様が描かれる。S32は安山岩製の敲石である。棒状礫を素材として、上下端部と上面及び側面に敲打痕が残っている。S33は安山岩製の石皿である。中心部の窪面には2条の浅い溝が認められる。S34は五輪塔の空風輪である。空輪先端は概ね丸みを帯び、中心部に浅い溝をめぐらして空輪と風輪を分けている。下面には火輪に嵌め込む突出部が造り出されている。M18は鉄鎌である。同じ方向にわずかに刃部をずらしながら3枚を重ねている。本来は分離すべきだが、錆化が進み固着してことからここでは分離しない状態で図示している。aは刀身切先部がわずかに欠損しているが、概ね刀身部から茎部残りは良い。bは刀身切先部が大幅に欠損しているものの、C字状の茎部返しは残りが良い。cは刀身切先部と茎部先端が欠損しているが、3本のなかで最大である。本遺構は、出土遺物から中世後半に機能していたものと考えられる。

S533 (第297・301～306・377図、表36・61・69～72、写真36、PL.138・153・185)

R20、S20グリッド、調査区東部段裾で検出した南北方向に主軸をとる杭列である。S315溝の掘削段階で検出した。S315溝の東壁にはほぼ沿うように、幅0.2～1.2m程度の間隔で打ち込まれている。残



第301図 S533杭列出土遺物(1)

第6章 8区の調査成果

存する杭はいずれも自然木の先端を尖らせた丸杭を使用しており、最も残りの良いもので長さ0.78m、径0.12mを測る。杭は検出面から最大で0.6m、深度の浅いもので0.05mと幅があり、全ての杭が同時期のものか明らかでない。遺存状況が良好な杭はいずれも根入れが深く、頭部が東側に大きく傾斜するもの、変形するものが出土した。恐らく当初から斜めに打ち込まれたのではなく、西側段裾部から受ける土圧の影響で傾斜・変形した可能性が高い。

今回の調査で35本の杭が確認されたが、このうち6本（杭No.2、5、13～15及び20）の樹種同定分析を実施した結果、クリ材3本、サクラ属2本、ケヤキ1本で広葉樹の使用が多いことが明らかとなった。また、杭No.5の年代測定結果は、暦年較正年代(2 σ)で1447～1519calADが得られている（詳細は第7章第5節参照）。概ねS315溝出土遺物の年代と整合する。

出土遺物は玉縁状の口縁を有する須恵器甕682及び連歯下駄W56が杭脇から出土している。杭は検出された35本のうち、残存状況が比較的良好でその特徴を良好に示している22本を掲載した。杭No.1～2、4～5、20及び35は最大径が約6～10cmの芯持材で、先端部の削り出しが甘い。杭No.7、14、16、18～19、22及び25～26は最大径が約6～8cmの芯持材で、先端部の削り出しが深く鋭い。杭No.13と23は先端の削り出しは浅いが、最大径約17～20cmの太い芯持材である。

本遺構はS315溝上層の分布範囲の東縁にほぼ一致するため、S315溝埋没後に行われた造成時の土留施設の一部と考えられ、帰属時期は中世後期である。

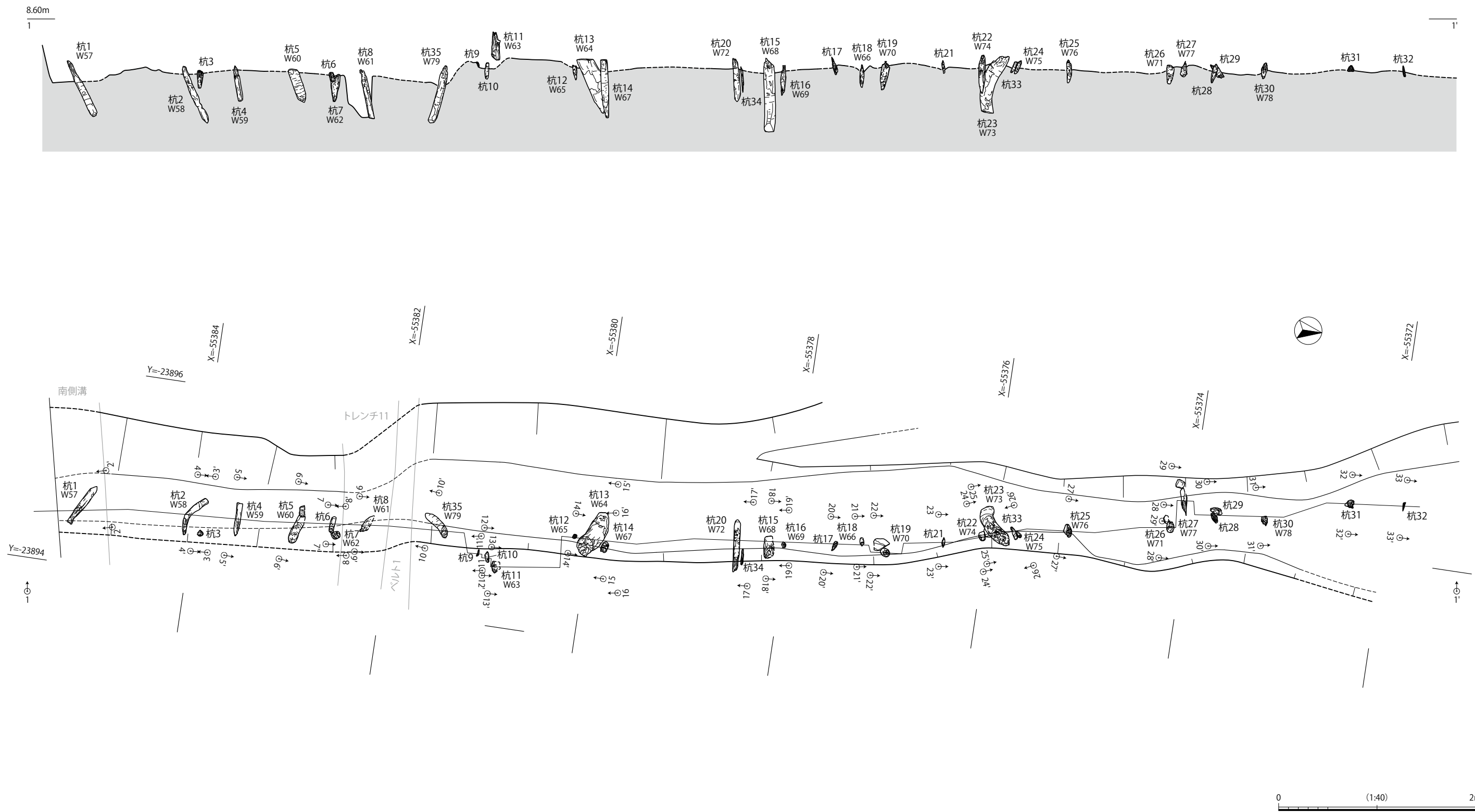
S727（第251～253・255・297・307～310図、表36・37・54・55・61、PL.139・153～155・181～182）

Q20、R20及びS20グリッド、調査区東部段裾で検出した南北方向に主軸をとる溝である。旧地形で西側から東側にかけて段差が見られるが、その段差よりやや東側に走行する。S315溝の下部で検出され、部分的に重なる。長さ19m、幅1.2～2.2m、深さは最大で0.25mを測り、さらに調査区外へ延びる。

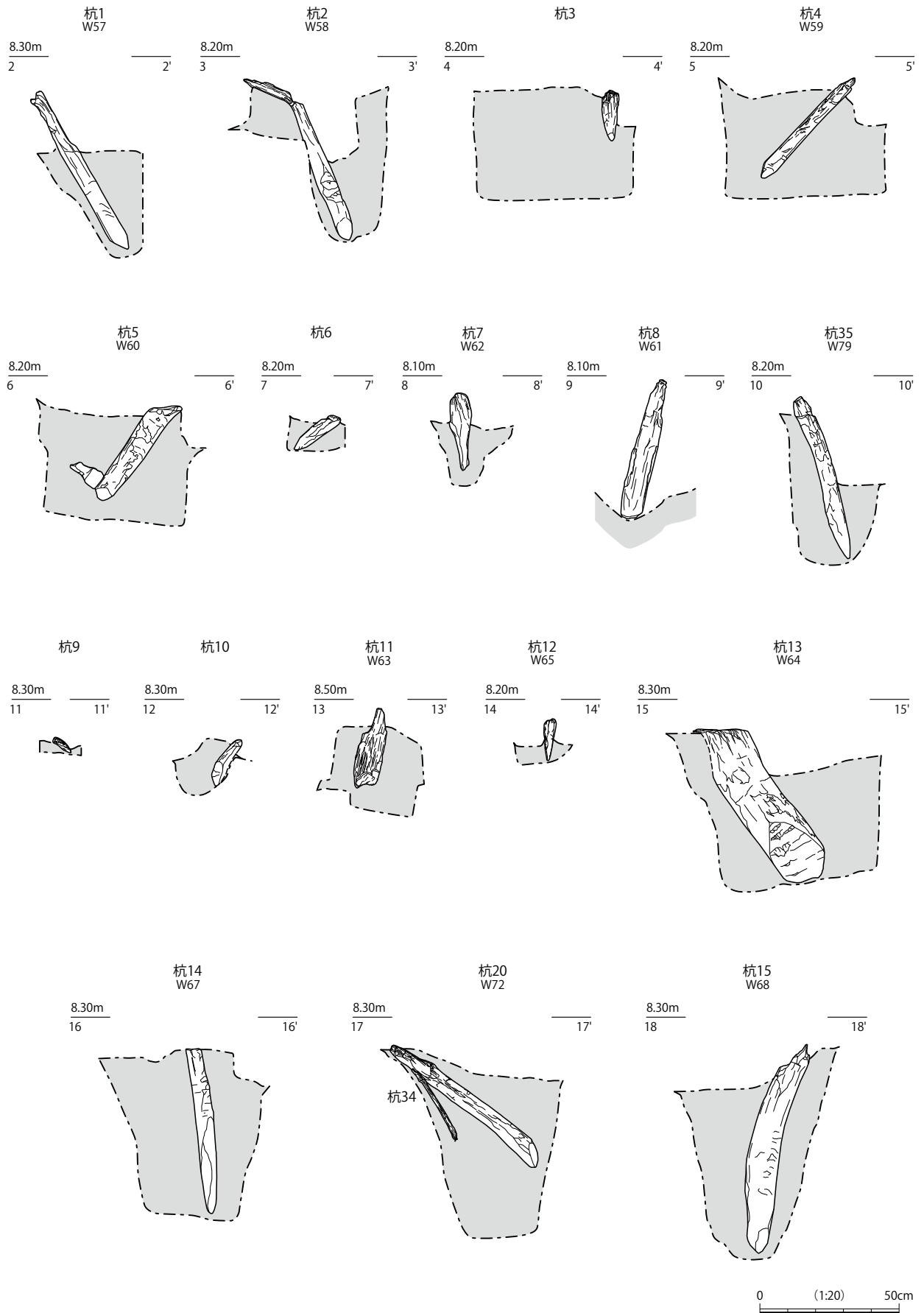
断面形は逆台形を呈する。底面の高さは北側と南側のレベルが大差なくほぼ平坦であるが、埋土の特徴から流水の痕跡が認められたため、非常に緩やかな勾配を持つものと考えられる。地形的には南から北に向けて緩やかに傾斜しており、本遺構の東側で溝に平行した現用水路が南から北へ流れていることを踏まえると、本遺構の流水方向は南から北と考えられる。

埋土は概ね上下2層に分けられ、下層はしまりが強く0.05～0.2m大の礫を多く含む砂礫層、上層は灰白色シルトとオリーブ黒色シルトの互層からなる自然堆積層である。溝底面と下層から出土した遺物は細片化して出土量が少ないのに対し、上層から出土した遺物は破片が大きく出土量も多い傾向がある。溝機能時には浚渫され維持管理されていたものと想定される。

出土遺物は弥生土器、古式土師器、甌形土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入陶磁器及び備前焼播鉢など弥生時代後期から室町時代後半に至るまで複数時期、多種多様の遺物が出土した。683と684は弥生土器の壺である。口縁部に5条の平行沈線がめぐり、頸部外面はナデ、683のみ一部ハケ、口縁内面はナデ、頸部はヘラケズリである。685は高坏脚台部。内外面ナデが施される。以上は弥生時代後期の特徴を示す。686は甌形土器体部から裾部である。外面がハケを施し、裾部はナデ消す。内面は横方向のヘラケズリである。古墳時代前期の特徴を示す。687は肩部にカキメ、体部に羽状文がめぐる須恵器甕の体部片である。688～705は須恵器甕をまとめている。688と689は甕口縁部であり、前者は直線的に外反し、後者は端部が玉縁となっている。690～694は甕の体部片であり、外面は平



第302図 S533杭列平面・見通図

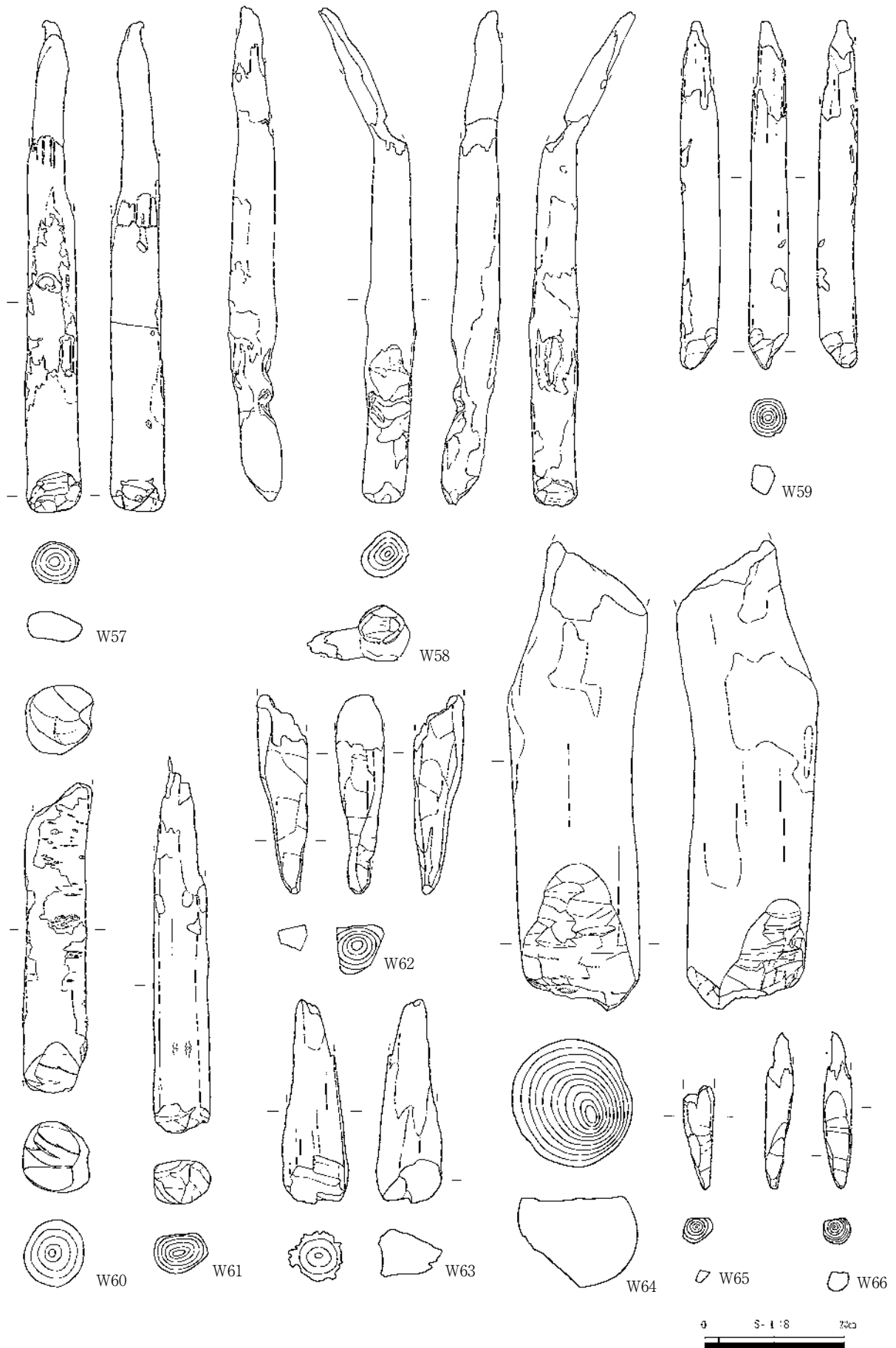


第303図 S533杭列立面図(1)

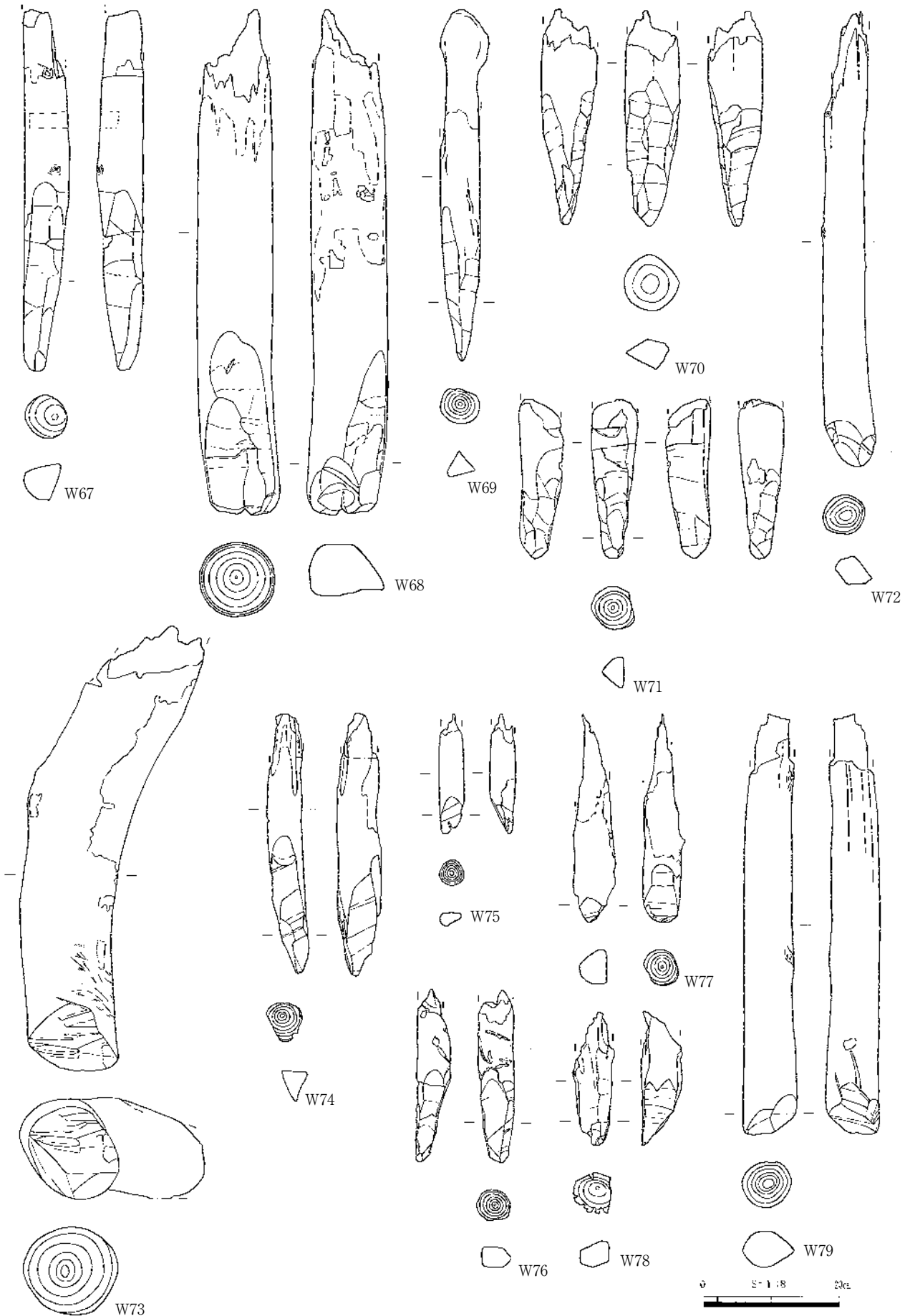
第6章 8区の調査成果



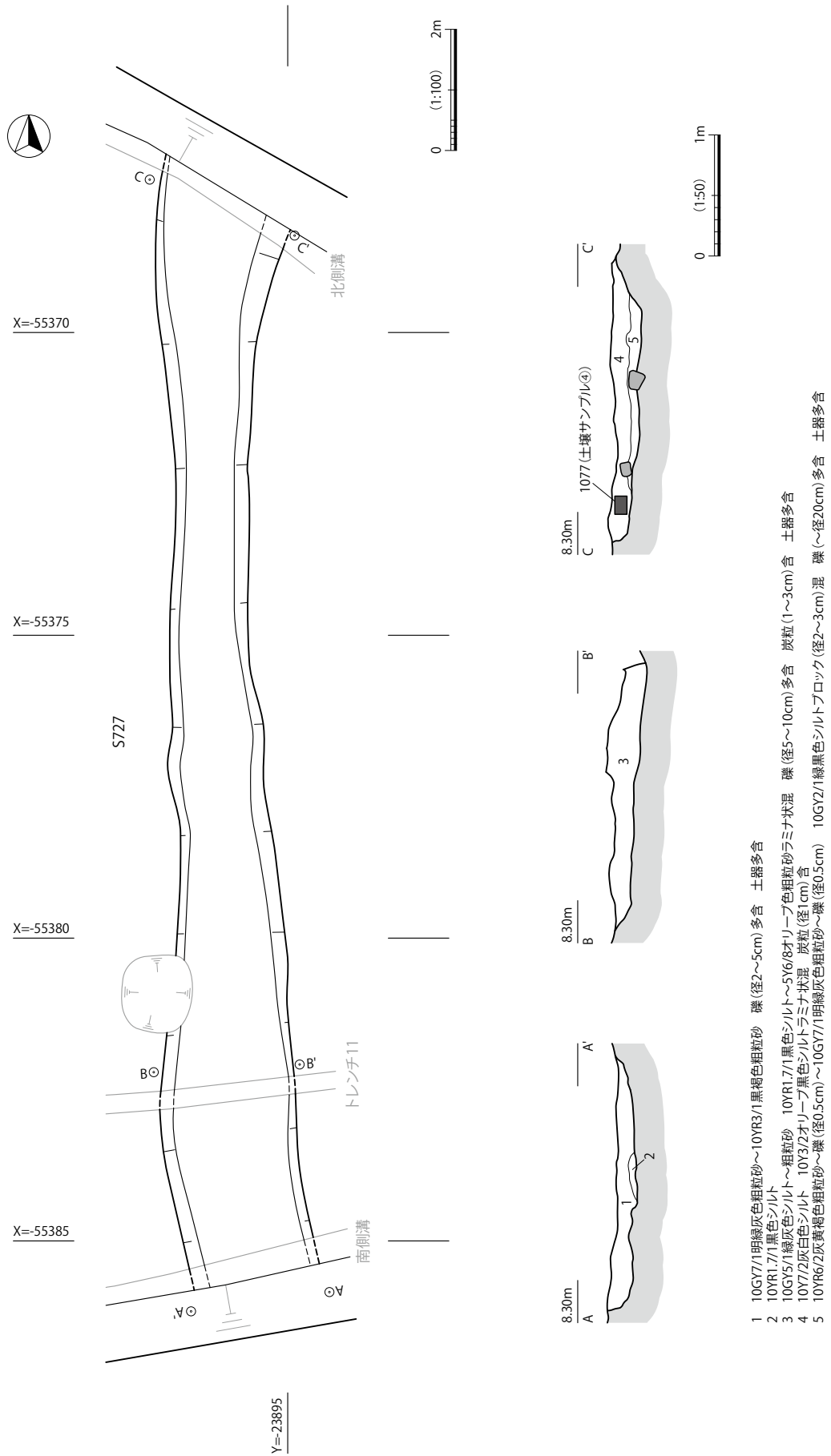
第304図 S533杭列立面図(2)



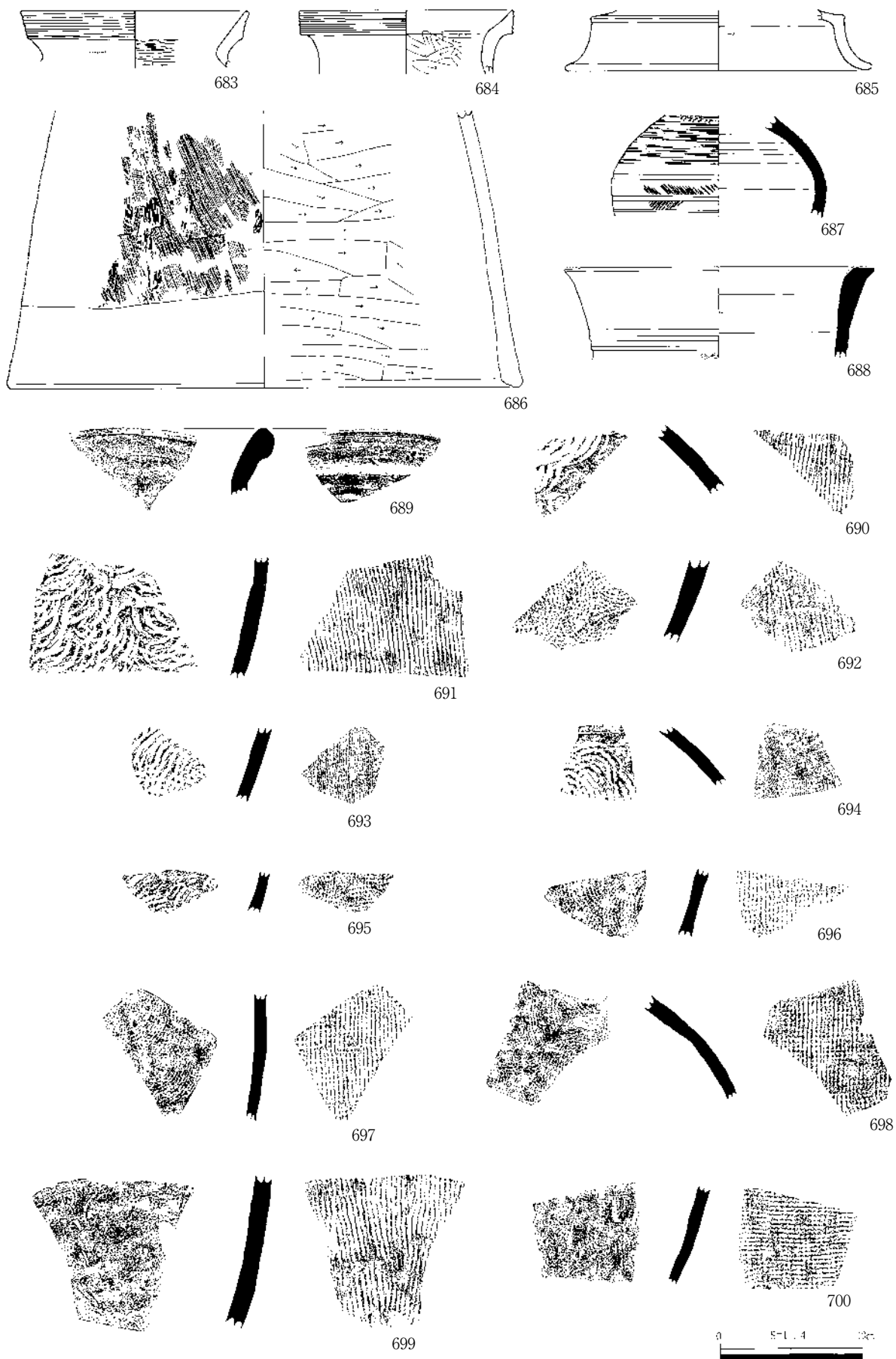
第305図 S533杭列出土遺物(2)



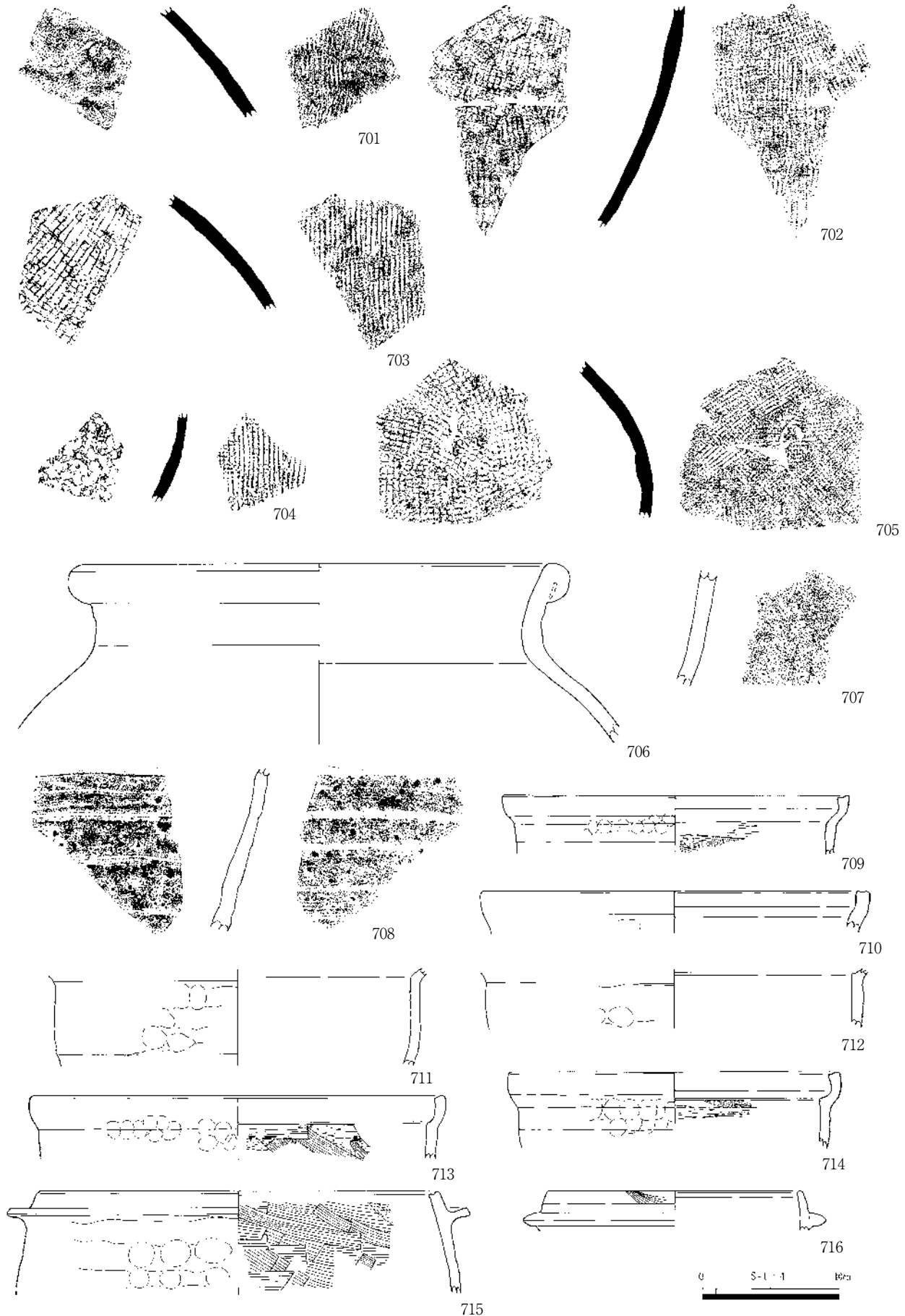
第306図 S533杭列出土遺物(3)



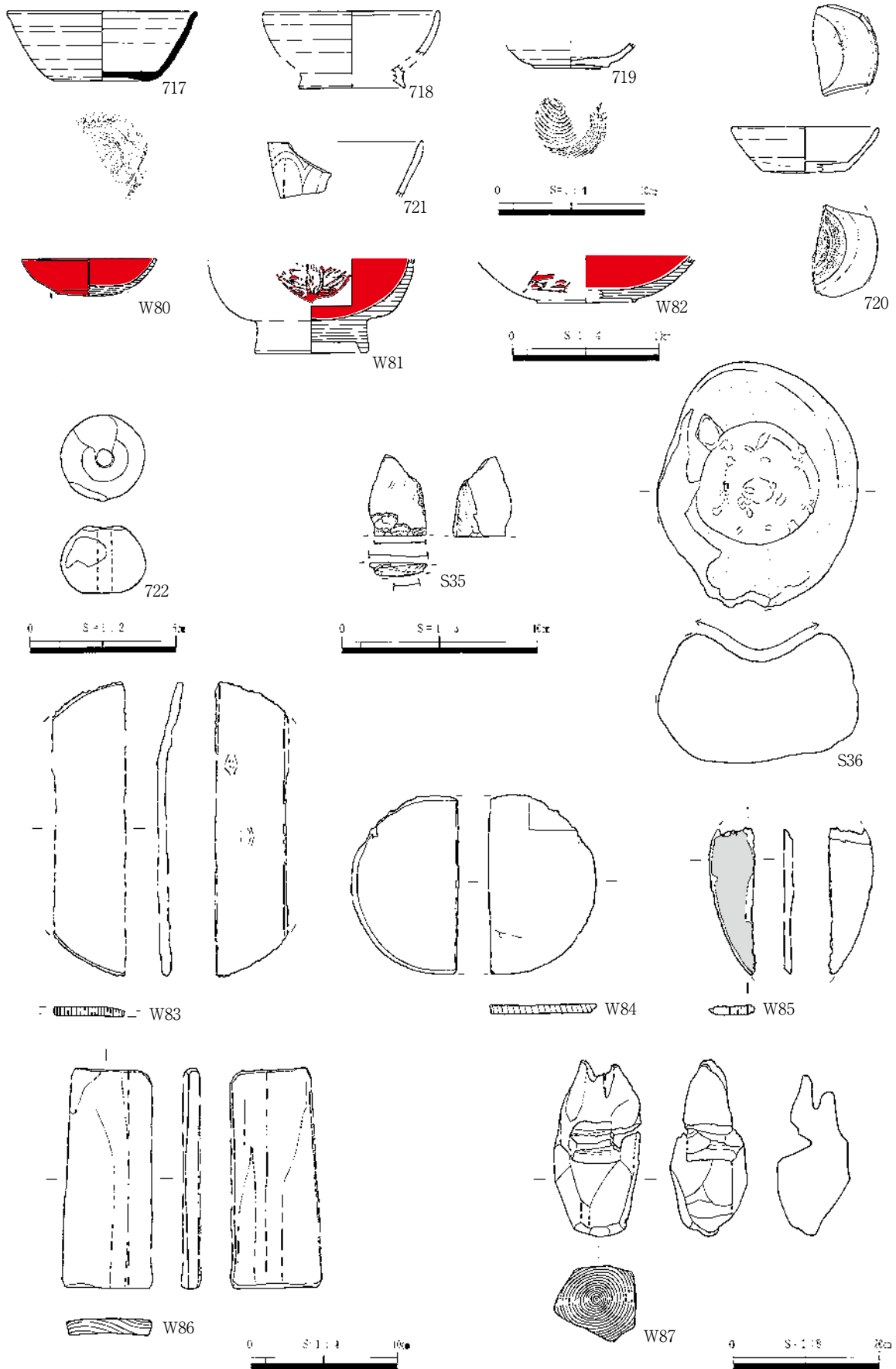
第307図 S727溝平面・断面図



第308図 S777溝出土遺物(1)



第309図 S727溝出土遺物(2)



第310図 S727溝出土遺物(3)

行タタキ、693のみハケ状工具による調整、他は内面はやや太い青海波状当て具痕がみられる。695、696及び698～701は外面平行タタキ、697は格子状タタキ、内面は細い青海波状当て具痕が観察される。699と702の内面当て具痕は部分的にナデ消している。702～705は内面もしくは外面に格子状タタキと当て具痕が残る。703と705は平安時代の特徴を示す。704は外面が格子タタキ、内面はカキメが残り、焼成が甘く軟質である。13世紀前後の亀山焼であろう。706～708は備前焼の大甕とその体部片である。706の口縁部は玉縁状を呈し、ナデを施すことから、14世紀前葉から中葉と考えられる。709～716は瓦質土器をまとめた。その多くが外面は輪積痕や指頭圧痕を残し、煤が顕著に付着する。内面はハケを残すもの709、713及び714と、ナデのもの710、711及び712に分かれる。709、713及び714は受け口が甘く、体部が直立気味な器形の鍋である。15～16世紀の特徴を示す。715と716は羽釜であり、715は口縁部が厚く、内傾が甘い。14～15世紀と考えられる。716は口縁部が短く、体部が直立気味となる器形であり、15～16世紀の所産と考える。717は回転台成形の須恵器坏である。体部から口縁にかけて直線的に外傾する。底部に回転糸切り痕が残る。718は土師器高台付坏で回転台成形。体部が湾曲して立ち上がる。719は平高台の土師器坏で回転糸切り痕が認められる。10～11世紀に位置付けられようか。720と721は貿易陶磁である。720は白磁小坏であり、大宰府Ⅸ1c類に該当しよう。13世紀中頃から14世紀初頭の特徴を示す。721は青磁碗で緩やかに内湾して立ち上がり、外面に鎬連弁文がみられることから大宰府碗Ⅰ類、13世紀初頭から前半頃と考えられる。W80～82は漆器皿と漆器碗である。W80は口縁端部及び底部は黒色、それ以外は赤色が塗られている。W81は高台付碗であり、外面は黒色塗彩がなされ、赤漆で文様が描かれる。内面は赤色塗彩である。W82は低い高台を持ち、大きく張る体部を持って立ち上がる。外面は黒色塗彩で赤色の文様が描かれ、内面は赤色塗彩となっている。722は土玉であり、ナデ調整が施される。S35は粘板岩製の砥石。砥面は3面観察される。S36は安山岩製の凹石であり、中心部に大きな凹みを有している。W83～85は柾目板材を用いた蓋板である。W86は板目材を用いた桶の未製品か。W87は杭であり先端の削り出しは甘い。芯持材である。

本遺構は古墳時代から室町時代後半までの遺物が出土しているが、近世の遺物は含まないため、時期幅はあるが中世に機能していたものと考えられる。

5 第2遺構面

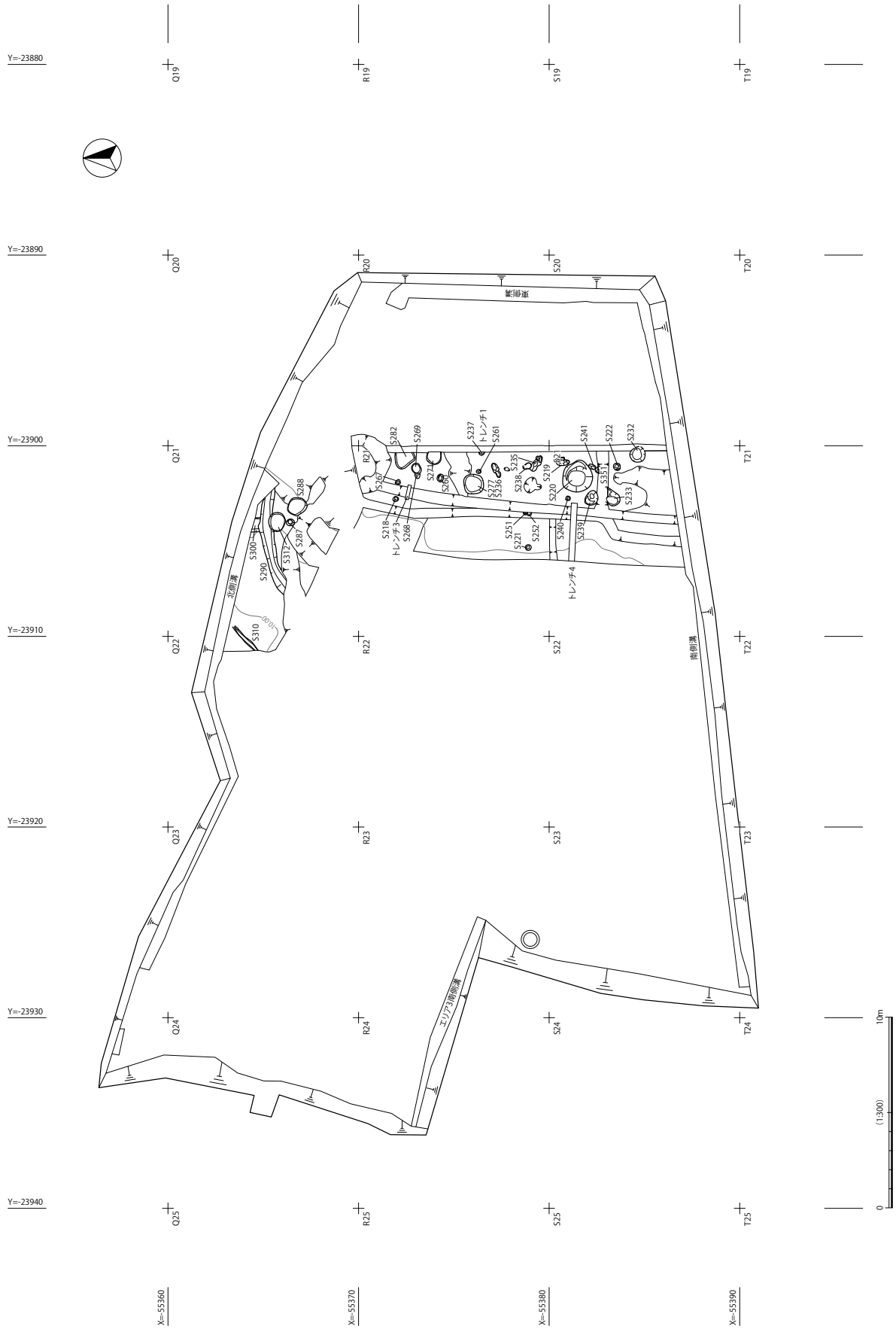
(1) 溝

S290 (第311・312図、表37、PL.134・152)

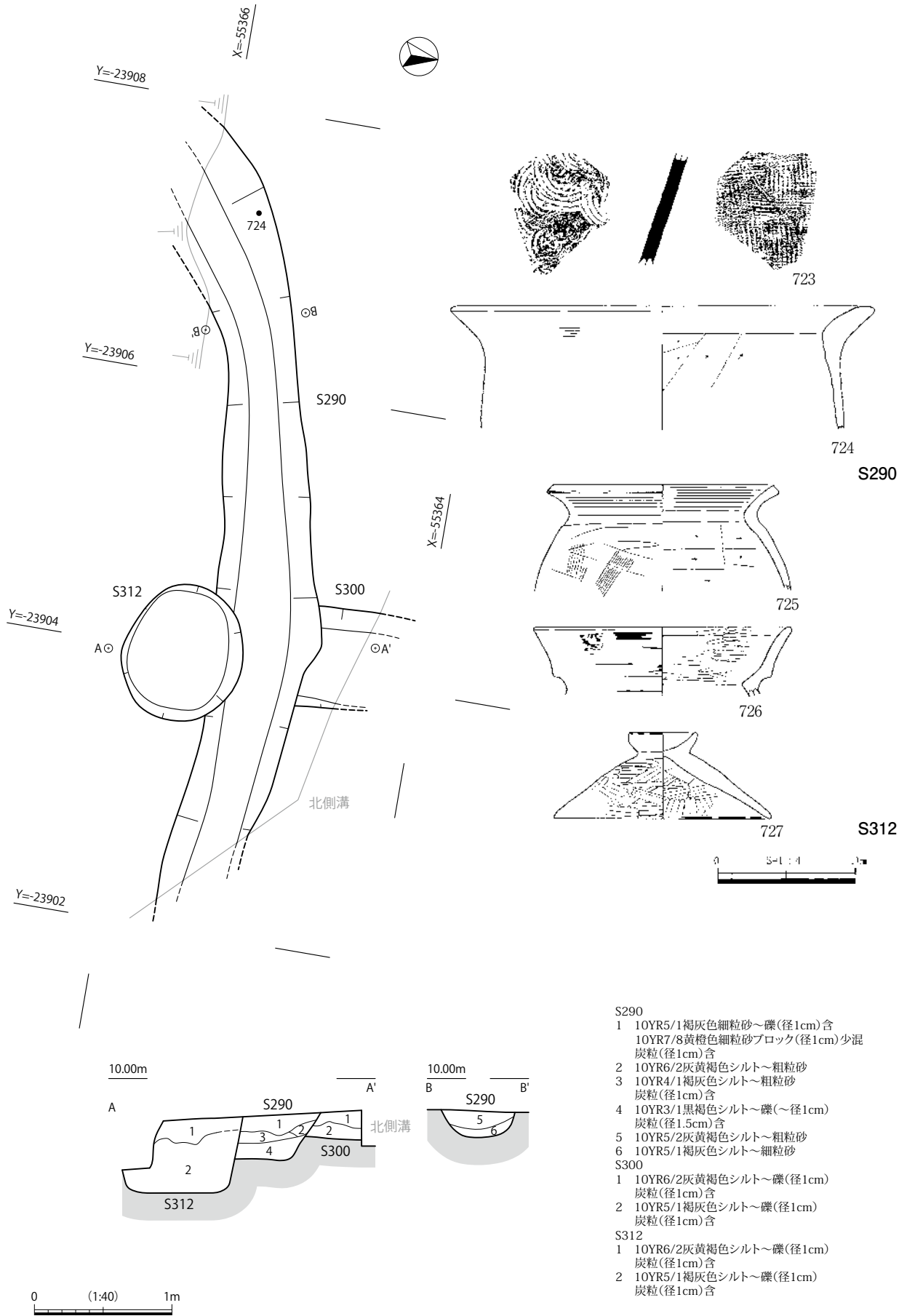
Q21グリッドに位置し、調査区中央部北壁際で検出した緩やかな弧状を呈する溝である。遺構の西側は攪乱により残っていない。東側も現代の擁壁により削平されているが、調査区外の東側へ延びる可能性が高い。S312土坑に南側を切られる。検出規模は長さ5m、幅0.5～0.7m、深さ0.21～0.32mで、溝の底面は西から東へ下降する。断面形はU字形を呈する。

埋土は6層に分層され、最上層の1層中に黄橙色細粒砂ブロックを含み、中層と下層はシルトが堆積する。

出土遺物は、古代に属する須恵器甕723、土師器甕724を図示した。723は外面に平行タタキ、内面に青海波状当て具痕がみられる。724は口縁部が「く」字状に外反し、体部が直線状に立ち上がる。本遺構の帰属時期は、出土遺物から古代以降に埋没したのと考えられる。

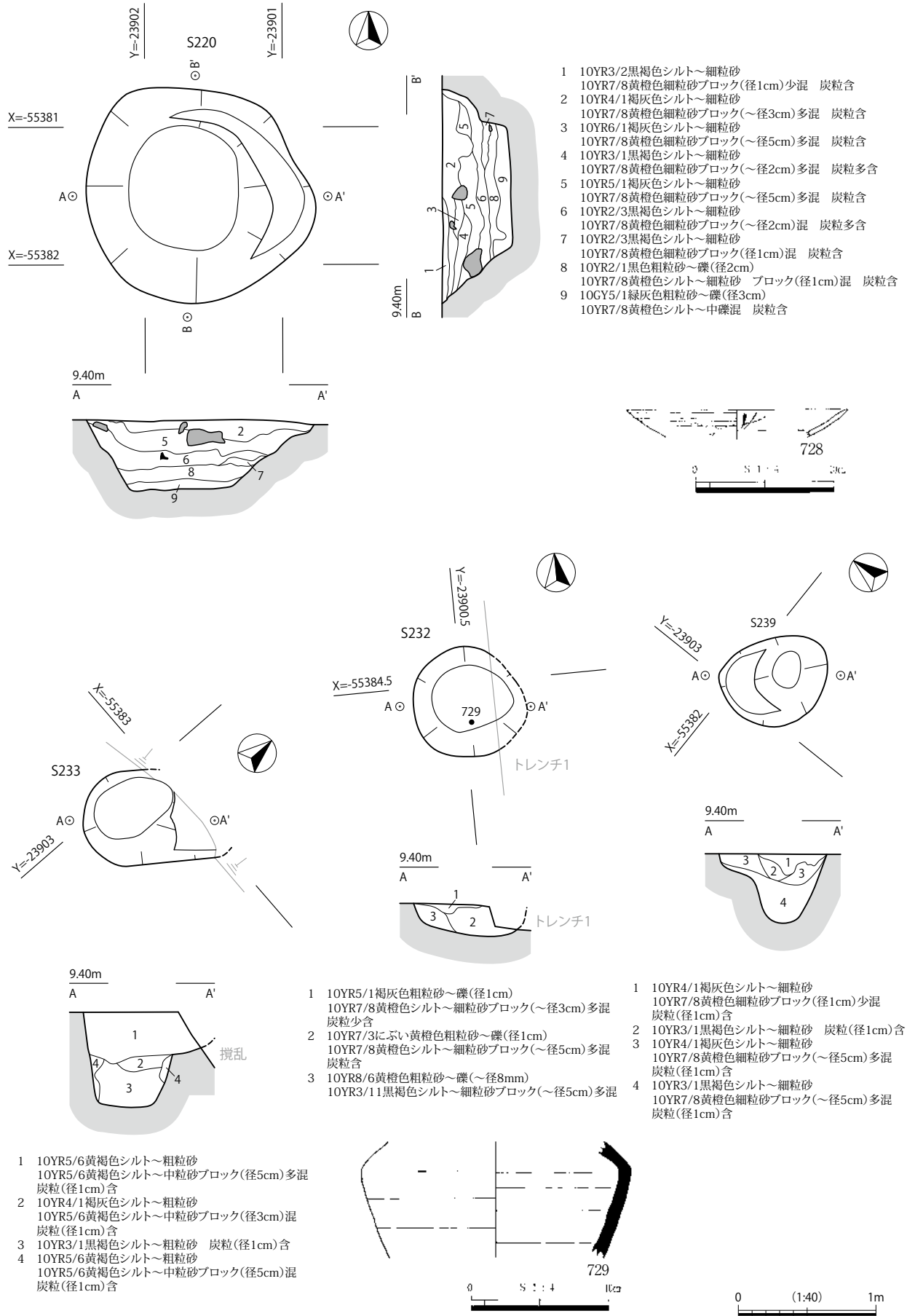


第311図 8区第2遺構面遺構配置図



第312図 S290・300溝、S312ピット平面・断面図及び出土遺物

第6章 8区の調査成果



第313図 S220・232・233・239土坑平面・断面図及びS220・232土坑出土遺物

(2) 土坑

S220 (第311・313図、表37、PL.134・151)

S21グリッド、調査区東部南寄りの平坦部で検出した土坑である。第2遺構面で検出したが、本来の掘り込み面はより上層の可能性が高い。検出規模は長軸1.65m、短軸1.56m、深さは0.49mを測る。平面形は不整円形。断面形は逆台形状を呈し、北東部に狭い段をもつ。底面は概ね平坦である。

埋土は9層に分層され、多くが黄橙色細粒砂ブロックを含む混合土が堆積する。堆積土中には拳大から人頭大の礫が含まれることから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

出土遺物は肥前系陶器の絵唐津皿728が1点出土している。17世紀後半の所産である。このことから遺構の帰属時期は近世以降であろう。

S232 (第311・313図、表37、PL.152)

S21グリッド、調査区東部南壁際の平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸0.8m、短軸0.6m、深さは最大で0.23mを測る。平面形は遺構の東側が土層観察用のトレンチ1の掘削により不明であるが、不整円形と想定される。断面形は椀形を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は3層に分層され、基本的に黄橙色シルト、細粒砂ブロックを含む混合土が堆積する。出土遺物は、肩が大きく張る須恵器壺729が1点である。遺構の帰属時期は古代以降と推定される。

S233 (第311・313図)

S21グリッド、調査区東部南寄りの平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸0.8m、短軸0.69m、深さは最大で0.7mを測る。平面形は遺構の北側が近代以降の攪乱を受け不明であるが、不整楕円形と想定される。断面形は北東側に段をもち、箱形を呈する。底面は概ね平坦である。

埋土は4層に分層され、基本的に黄褐色シルトブロックを含む混合土が堆積する。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

S239 (第311・313図)

S21グリッド、調査区東部南寄りの平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸0.8m、短軸0.64m、深さは最大で0.5mを測る。平面形は不整楕円形である。断面形は西側に段をもち、箱形を呈する。底面は丸みを帯びる。

埋土は4層に分層され、2層を除き黄橙色細粒砂ブロックを含む混合土である。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

S271 (第311・314図)

R21グリッド、調査区東部の平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸0.76m、短軸0.65m、深さは最大で0.13mを測る。平面形は遺構の東側がトレンチ1の掘削により不明であるが、不整円形と想定される。断面形は箱形を呈し、底面は概ね平坦である。

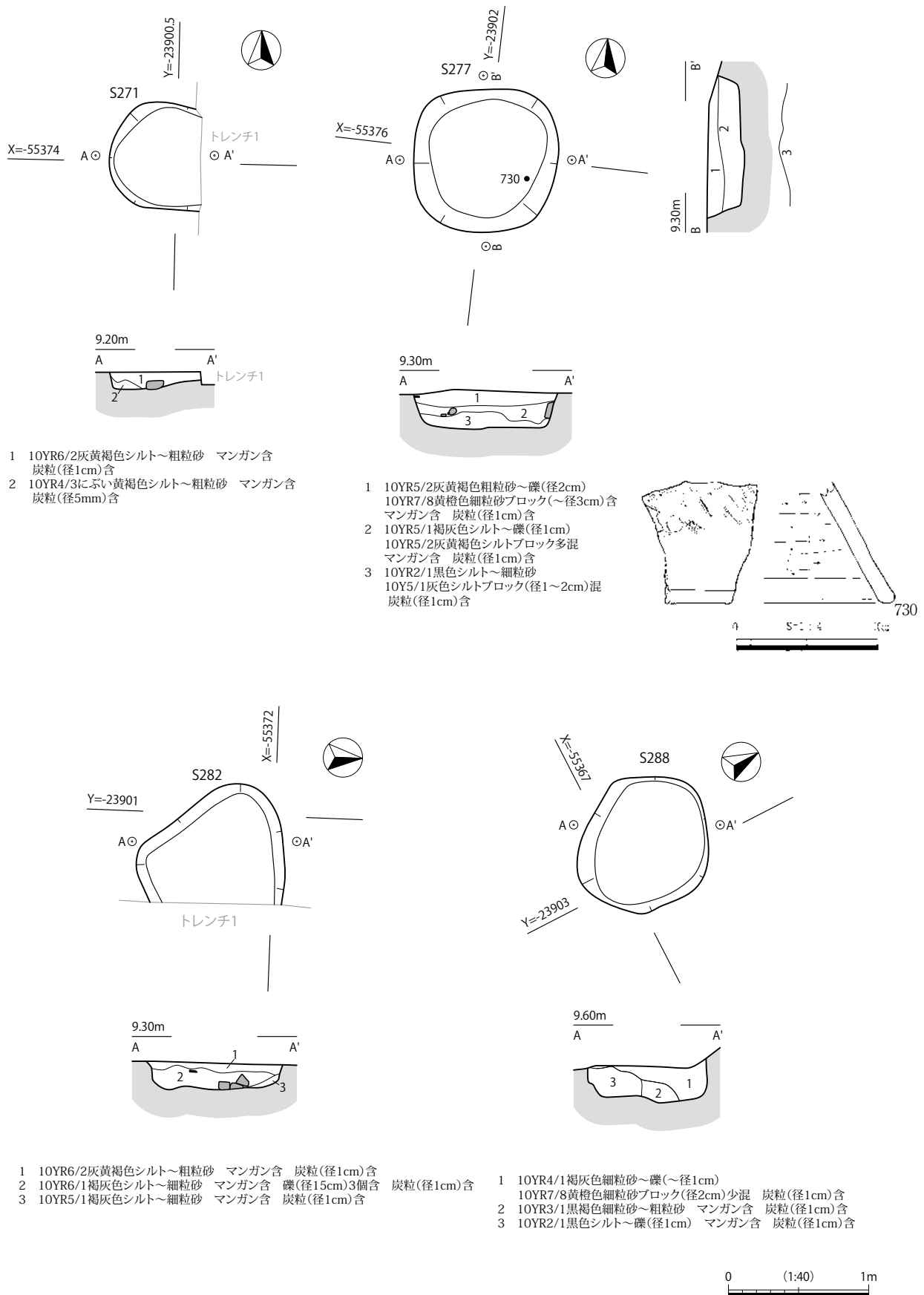
埋土は2層に分層され、上層の灰黄褐色シルトが主体に堆積する。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

S277 (第311・314図、表37、PL.152)

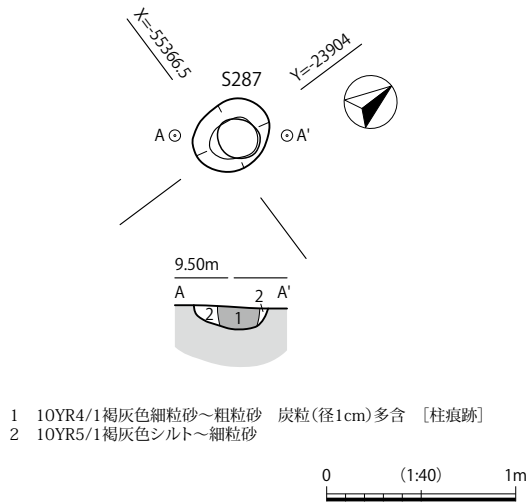
R21グリッド、調査区東部の平坦部で検出した土坑である。検出規模は直径1.02m、深さは最大で0.28mを測る。平面形は不整円形である。断面形は逆台形を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は3層に分層され、上層が黄褐色細粒砂ブロックを含む灰黄褐色粗粒砂、中層が褐灰色シルト、下層は黒色シルトが堆積する。出土遺物は甑形土器730である。外面はハケ、内面は横方向のケズリ

第6章 8区の調査成果



第314図 S271・277・282・288土坑平面・断面図及びS277土坑出土遺物



第315図 S287柱穴平面・断面図

が施された裾部片である。本遺構の帰属時期は古墳時代以降と考えられる。

S282 (第311・314図)

R21グリッド、調査区東部の平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸1.05m、短軸0.85m、深さは最大で0.2mを測る。平面形は遺構の東側がトレンチ1の掘削により不明であるが、不整形円形と想定される。断面形は箱形を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は3層に分層されるが、褐灰色シルトが主体とする。出土遺物は古墳時代前期土器や古代土師器、須恵器など土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は古代以降と推定される。

S288 (第311・314図)

Q21グリッド、調査区東部北寄りの平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸0.96m、短軸0.93m、深さは最大で0.26mを測る。平面形は不整形円形である。断面形は箱形を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は3層に分層され、上層は黄褐色細粒砂ブロックが混じる褐灰色細粒砂、中層が黒褐色細粒砂、下層が黒色シルトが堆積する。出土遺物は弥生土器や須恵器など土器細片少数に止まっているが、本遺構の帰属時期は古代以降と推定される。

(3) 柱穴

S287 (第311・315図)

Q21グリッド、調査区中央部北壁寄りの平坦部で検出した柱穴である。検出規模は長軸0.43m、短軸0.35m、深さは最大で0.12mを測る。平面形は不整形円形、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は丸みを帯びている。埋土は2層に分かれ、このうち1層は褐灰色細粒砂で炭粒を多く含む柱痕跡である。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

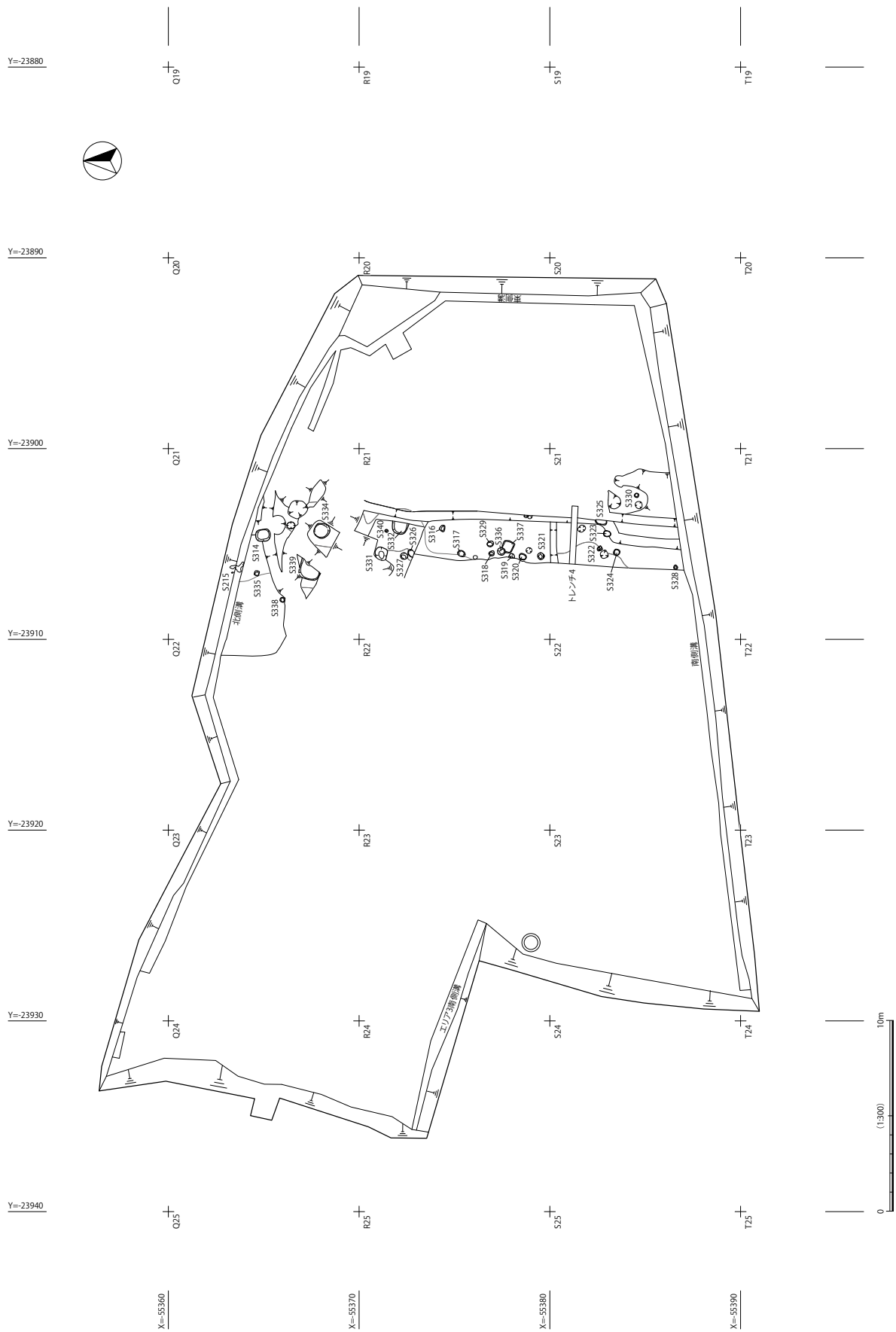
(4) ピット

S312 (第311・312図、表37、PL.152)

Q21グリッド、調査区中央北部で検出した小穴である。北側でS290溝を掘り込んでいる。検出規模は長軸0.98m、短軸0.95m、深さは0.52mを測る。平面形は不整形円形。掘方の断面形は逆台形状を呈する。

埋土は2層に分層され、灰黄褐色シルトから褐灰色シルトが堆積する。

出土遺物は弥生土器甕2点及び蓋1点を図示した。725は口縁が外反し、端部にナデを施す。体部内面は頸部までヘラケズリが及んでいる。726は拡張された口縁部に多条平行沈線がめぐり、部分的にナデ消されている。727はつまみ部が窪み、天井部が直線的に立ち上がる形態で、内外面とも丁寧にミガキがみられる。以上は、弥生時代後期前葉から後葉の特徴を示すが、下層に堆積する弥生包含層からの混入と考えられる。遺構の帰属時期はS290溝との重複関係より古代以降と推定される。



第316図 8区第3遺構面遺構配置図

6 第3遺構面

(1) 土坑

S314 (第316・317図、PL.140)

Q21グリッド、調査区中央北壁際の平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸0.77m、短軸0.6m、深さは0.3mを測る。平面形は不整形円形。断面形は逆台形状を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は4層に分層されるが、黄橙色粗粒砂とシルトの互層を形成している。出土遺物は皆無で帰属時期、性格共に明確な判断材料に欠ける。

S331 (第316・317図)

R21グリッド、調査区中央北寄りの平坦部で検出した土坑である。西側の一部が攪乱により削平されており、検出規模は長軸0.64m、短軸0.62m、深さは0.28mを測る。平面形は不整形楕円形。断面形は逆台形状を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は3層に分層されるが、基本的に褐色系粗粒砂が堆積している。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

S332 (第316・317図)

R21グリッド、調査区中央北寄りの平坦部で検出した土坑である。東側の一部が攪乱により削平されており、検出規模は長軸0.85m、短軸0.63m、深さは0.2mを測る。平面形は不整形楕円形。断面形は皿状を呈し、底面は緩やかに丸みを帯びる。

埋土は2層に分層されるが、上層は黒褐色粗粒砂ブロックを含む混合土である。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

S334 (第316・317図、PL.140)

Q21グリッド、調査区中央北寄りの平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸0.8m、短軸0.78m、深さは0.23mを測る。平面形は不整形円形。断面形は箱形を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は3層に分層されるが、基本的に暗褐色細粒砂ブロックを含む混合土である。出土遺物は皆無で、本遺構の帰属時期は不明である。

S339 (第316・317図、表37、PL.140・152)

Q21グリッド、調査区中央北寄りの平坦部で検出した土坑である。東側の一部が攪乱により削平されており、検出規模は長軸1.1m、短軸0.95m、深さは0.25mを測る。平面形は隅丸長方形。断面形は逆台形状を呈し、底面はやや凹凸が認められる。埋土は2層に分層されるが、いずれも黄褐色細粒砂ブロックを含む混合土である。

出土遺物は須恵器甕の体部片731と弥生土器甕732が出土している。731の外表面は平行タタキ、内表面は青海波状当て具痕が残る。732は外反する口縁部の外表面がヨコナデ、内表面に横方向のミガキが施される弥生時代後期後葉の甕である。本遺構の帰属時期は古代以降と考えられる。

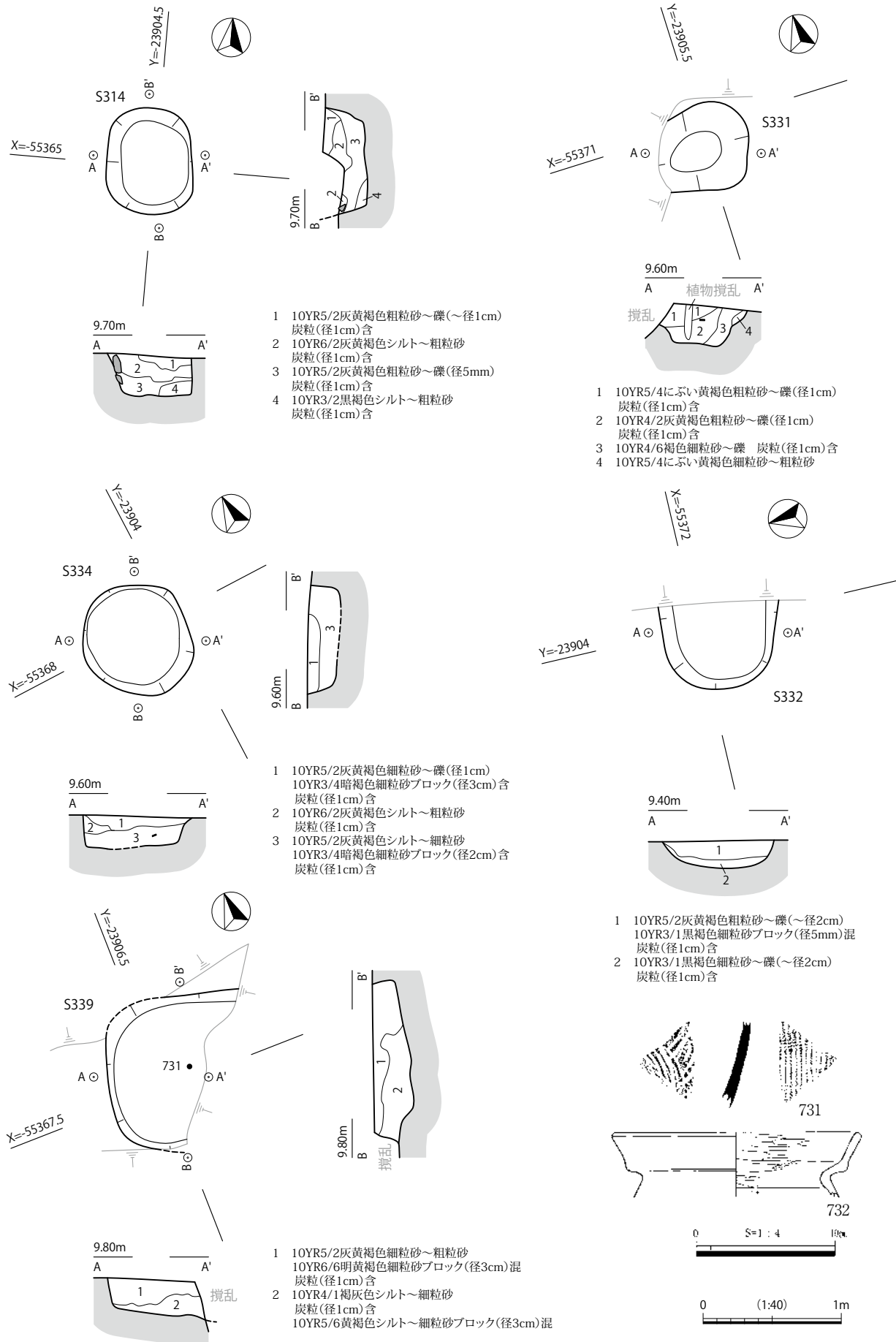
(2) 柱穴

S316 (第316・318図、表61、PL.140・186)

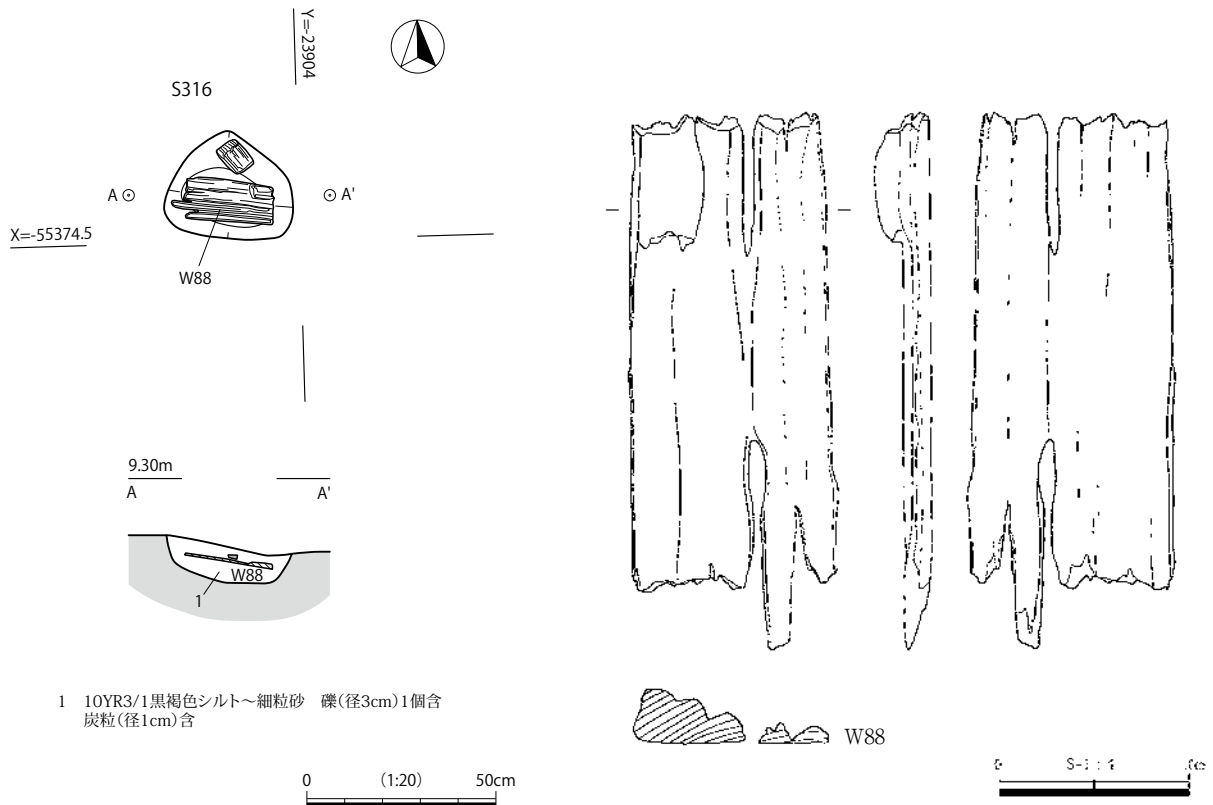
R21グリッド、調査区中央平坦部で検出した柱穴である。検出規模は長軸0.34m、短軸0.28m、深さは最大で0.1mを測る。平面形は不整形円形で北側がやや張り出す。掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面はやや丸みを帯びている。埋土は黒褐色シルトである。

埋土中には礎板と考えられる板材W88が出土した。最大長28.2cm、最大幅10.9cm、最大厚2.9cmを測

第6章 8区の調査成果



第317図 S314・331・332・334・339土坑平面・断面図及びS339土坑出土遺物



第318図 S316柱穴平面・断面図及び出土遺物

る。その他の出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

7 第4遺構面

(1) 溝

S473 (第319・320図)

S21グリッドに位置し、調査区中央部南壁際で検出した溝である。遺構の南側はさらに調査区外へ延びる。中央東側でS474ピットを掘り込む。検出規模は長さ2.4m、幅0.34～0.4m、深さ0.06mである。断面形はU字形を呈する。出土遺物は皆無で帰属時期、性格共に明確な判断材料に欠ける。

(2) 杭列

S475 (第319・321図)

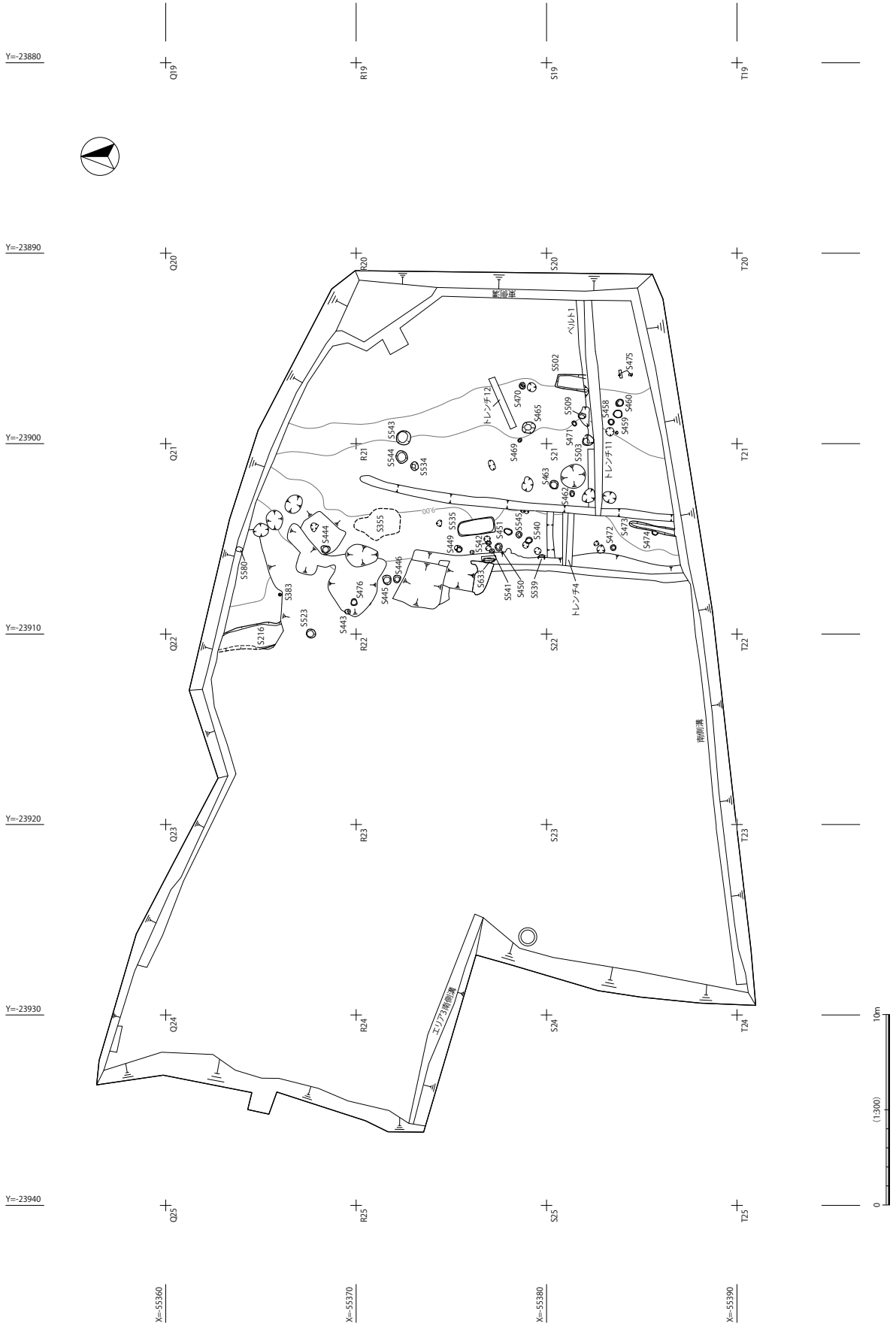
S20グリッド、調査区東部段裾の上面で検出した南北方向に主軸をとる杭列である。検出した杭は2本であり、幅1.2mの間隔で打ち込まれている。残存する杭はいずれも自然木の先端を尖らせた丸杭を使用しており、先端部のみ残存する状況である。長さ0.08～0.1m、径0.04～0.06mを測る。杭の深度は検出面から最大で0.8mである。

杭2は頭部が東側に大きく傾斜するが、恐らく当初から斜めに打ち込まれたのではなく、土圧の影響で傾斜や変形した可能性が高い。杭の機能は不明であり、帰属時期は中世後半以降と推定される。

(3) 土坑

S216 (第250・319・322～325図、表37・38・55、PL.141・155～157・181)

Q21～22グリッド、調査区中央北壁際の平坦部で検出した土坑である。北側は調査区外へ延び、

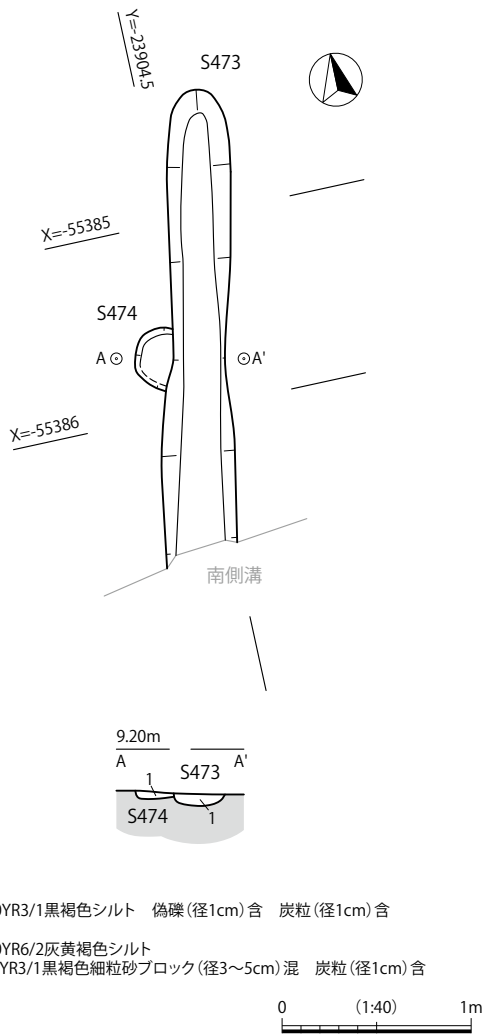


第319図 8区第4遺構面遺構配置図

南側及び西側は攪乱や暗渠により削平されている。検出規模は長軸3.28m、短軸1.34m、深さは最大で0.07mを測る。平面形は溝状を呈すが、遺構の検出状況から、南側は攪乱内でほぼ収束し、それ以上延びないものと推測される。断面形は皿状で、底面は概ね平坦である。

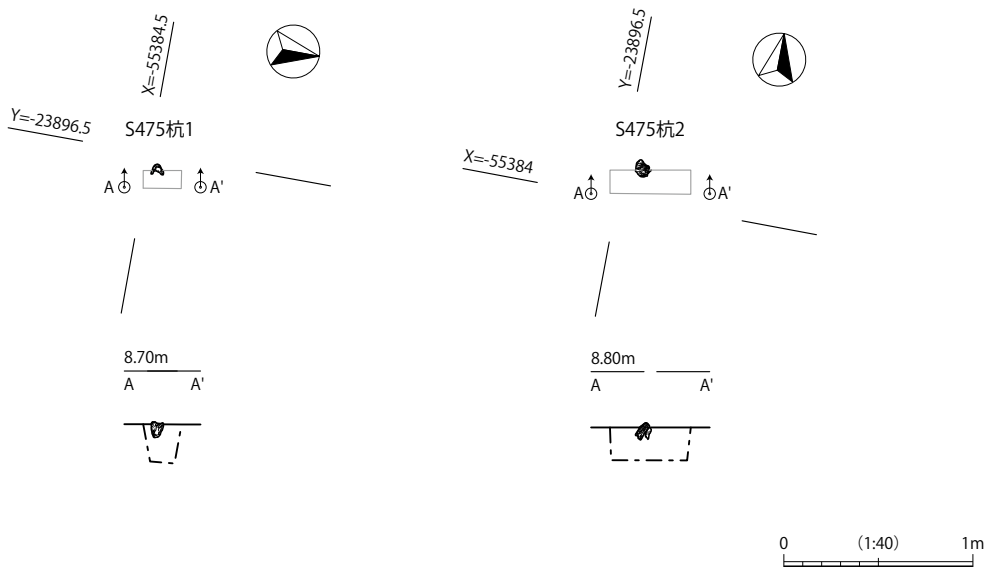
埋土は4層に分層され、堆積は薄い。埋土から細片化した土器や炭化物が多く出土しているが、遺物の密集度は北側ほど高い。出土遺物は弥生後期から終末期の甕、壺、器台、高坏、注口土器及び敲石が1点ある。出土した土器は細片化し、磨耗しているものが多いが、比較的まとまりをみせていることから、近在から2次廃棄された可能性が高い。

733～752は2層出土の甕である。口縁部がヨコナデで、体部にハケ状工具による波状文や平行沈線を施す733、745～747及び749～752がみられる。口縁端部は明瞭な平坦面を形成せずやや丸みを帯びる。754は口縁部に平行沈線5条がめぐる壺の口縁部破片。753は脚付無頸壺で外面にハケ、内面にヘラケズリ及び指頭圧痕が残る。755と756は鼓形器台で、756はやや厚手の造りとなっていることから、後期後葉に帰属する可能性がある。757は3層出土の甕片であり、肩部に波状文

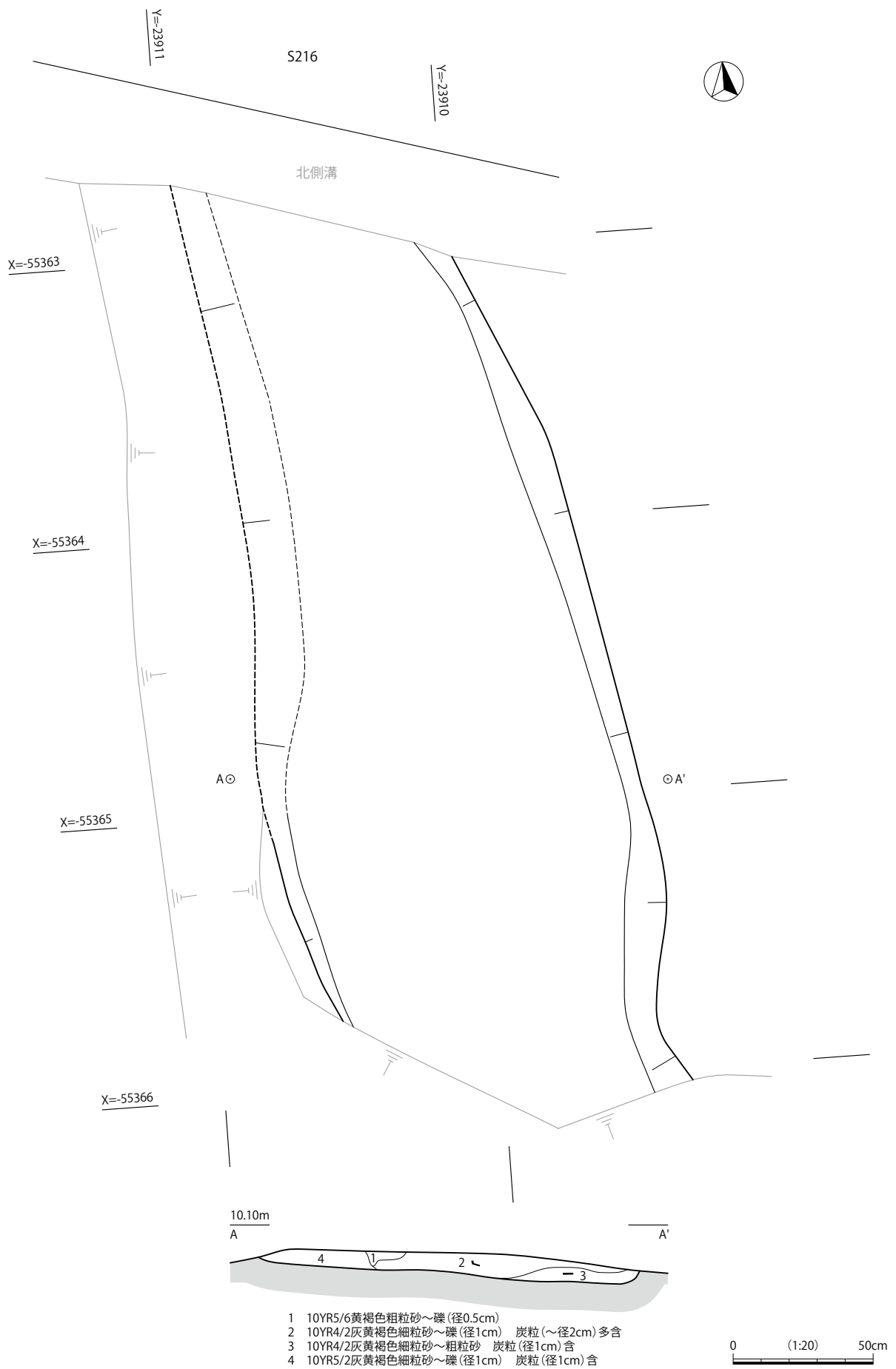


- S473
 1 10YR3/1黒褐色シルト 偽礫(径1cm)含 炭粒(径1cm)含
 S474
 1 10YR6/2灰黄褐色シルト
 10YR3/1黒褐色細粒砂ブロック(径3～5cm)混 炭粒(径1cm)含

第320図 S473溝・S474ピット平面・断面図



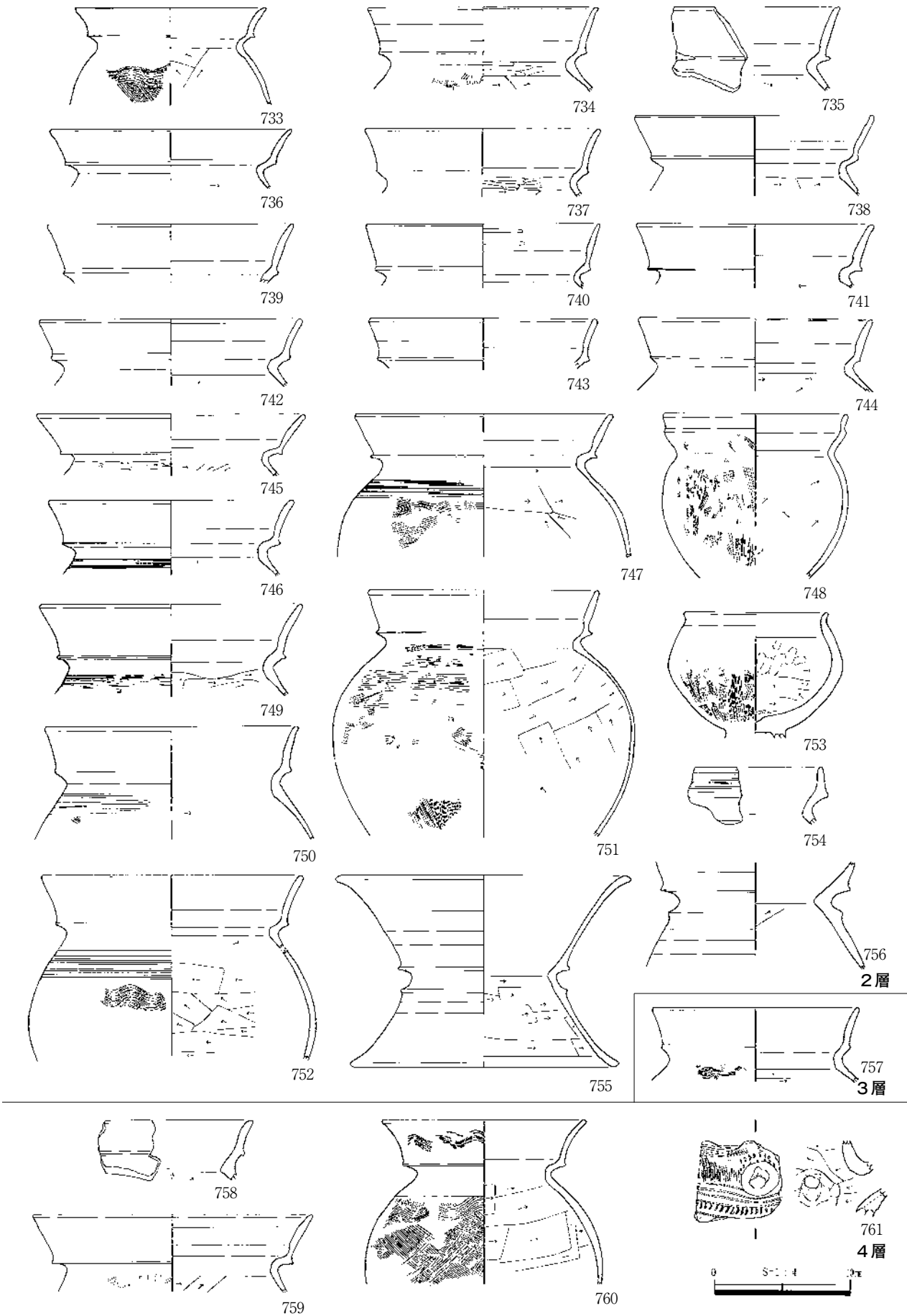
第321図 S475杭列平面・断面図



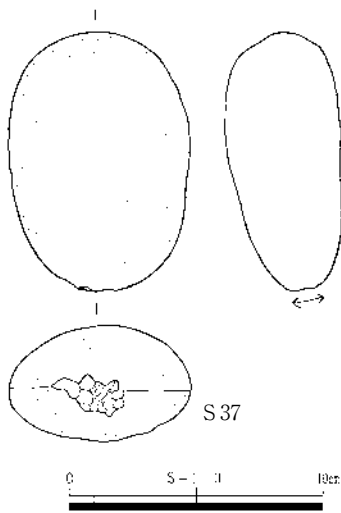
第322図 S216土坑平面・断面図



第323図 S216土坑遺物出土状況図



第324図 S216土坑出土遺物(1)



第325図 S216土坑出土遺物(2)

が認められる。758～760は甕であり、760は口縁部及び体部に波状文を施している。761は貝殻腹縁による刺突文を施した注口土器である。以上の遺物は754、756及び761を除き、弥生時代終末期に比定される。S37はデイサイト製の楕円礫を素材とした敲石であり、下部先端に敲打痕が残る。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代終末期と考えられる。

S502 (第319・326図)

S20グリッド、調査区東部南よりの平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸1.75m、短軸0.86m、深さは0.16mを測る。南側の一部がトレンチ11の掘削により削平されており、長軸の推定規模は2m程度であろう。平面形は長方形。断面形は皿状

を呈し、底面はやや凹凸がみられるが、掘り過ぎの可能性が高い。

埋土は2層に分層されるが、その大半を占める1層は黄橙色細粒砂ブロックを含む混合土である。

出土遺物は弥生土器、土師器及び瓦質土器などが出土していることから、本遺構の帰属時期は中世以降と推定される。

S535 (第319・326図、PL.142)

R21グリッド、調査区中央部の平坦部で検出した土坑である。検出規模は長軸1.95m、短軸0.82m、深さは0.15mを測る。平面形は長方形。断面形は箱状を呈し、底面は概ね平坦である。底面は慎重に精査を行ったが、木棺痕跡は確認できなかった。

埋土は黒褐色から灰褐色粗粒砂の2層に分層される。出土遺物は図示していないが、弥生土器細片が1点のみ出土している。本遺構の帰属時期は弥生時代後期と推定される。

S543 (第319・327図、PL.142)

R20グリッド、調査区東部北寄りの緩斜面で検出した土坑である。検出規模は直径0.75m、深さは最大で0.28mを測る。平面形は不整形円形。断面形は逆台形状を呈し、東側に向かって緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。

埋土は4層に分層される。出土遺物は弥生土器細片が数点出土している。本遺構の帰属時期は弥生時代後期と推定される。

S544 (第319・326図、PL.142)

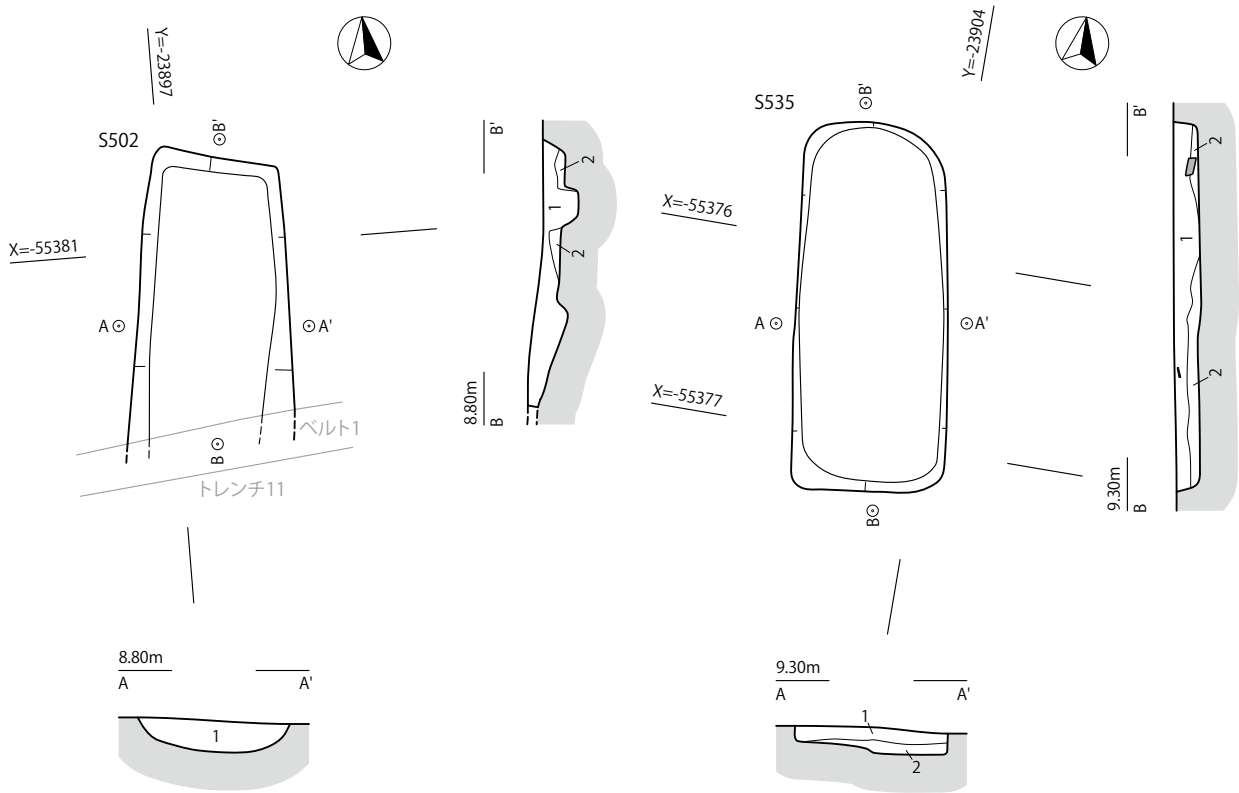
R21グリッド、調査区東部北寄りの緩斜面で検出した土坑である。検出規模は長軸0.65m、短軸0.62m、深さは0.17mを測る。平面形は不整形円形。断面形は逆台形状を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は黄褐色粗粒砂ブロックを含む混合土で、長さ0.2～0.25mの大型礫が不規則に4個含まれていることから、人為的に埋め戻された可能性が高い。出土遺物は弥生土器が数点出土している。本遺構の帰属時期は弥生時代後期と推定される。

(4) 柱穴

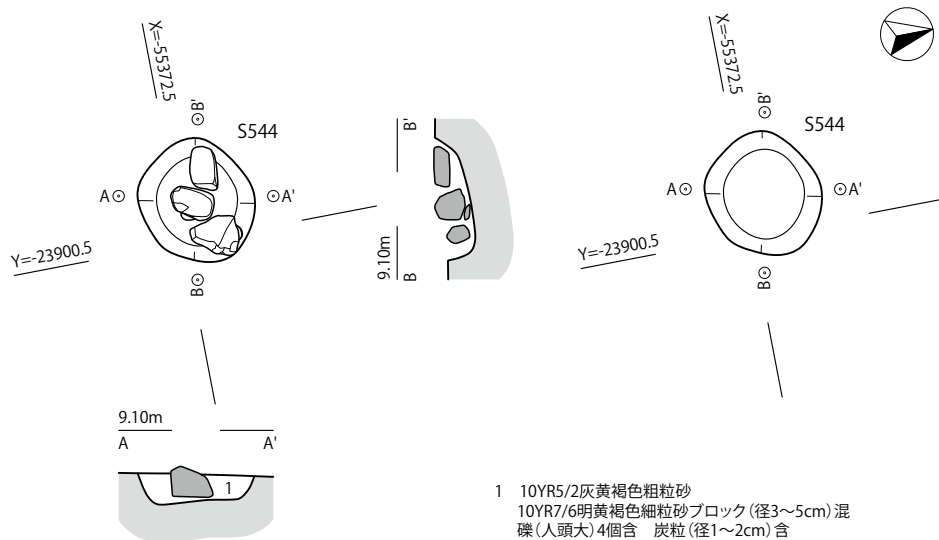
S443 (第319・328図)

Q21グリッド、調査区中央平坦部の北寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.29m、短軸0.23m、検出面からの深さは最大で0.45mを測る。平面形は不整形円形、掘方の断面形はU字状を呈し、底

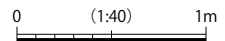


- 1 10YR8/2灰白色シルト～10YR4/1褐灰色細粒砂
10YR8/6黄褐色細粒砂ブロック(径5～10cm)少混
偽礫(径2～3cm)含 炭粒(径1cm)含
- 2 10YR3/1黒褐色細粒砂 炭粒(径1cm)含

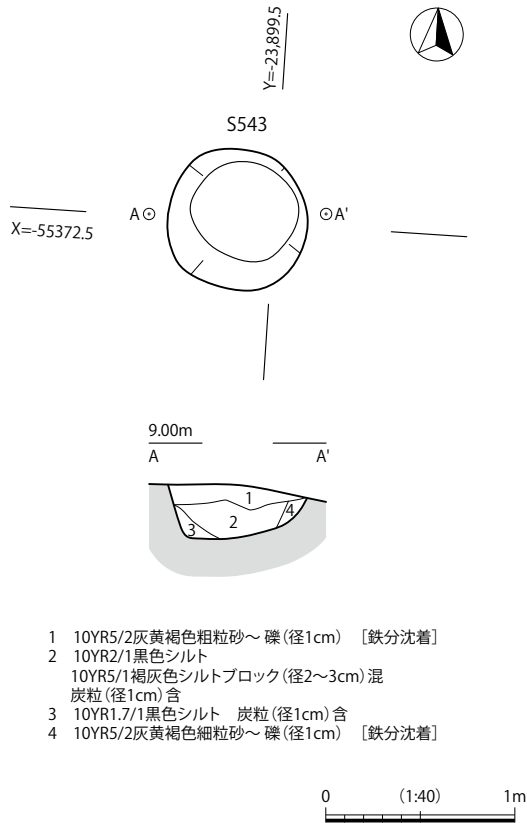
- 1 10YR3/1黒褐色粗粒砂～礫(径1～2cm)
炭粒(径1～2cm)含
- 2 10YR5/1褐灰色粗粒砂～10YR4/1褐灰色粗粒砂
偽礫(径1～2cm)含



- 1 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂
10YR7/6明黄褐色細粒砂ブロック(径3～5cm)混
礫(人頭大)4個含 炭粒(径1～2cm)含



第326図 S502・535・544土坑平面・断面図



- 1 10YR5/2灰黄褐色粗粒砂～礫(径1cm) [鉄分沈着]
- 2 10YR2/1黒色シルト
10YR5/1褐灰色シルトブロック(径2～3cm)混
炭粒(径1cm)含
- 3 10YR1.7/1黒色シルト 炭粒(径1cm)含
- 4 10YR5/2灰黄褐色細粒砂～礫(径1cm) [鉄分沈着]

第327図 S543土坑平面・断面図

埋土は柱痕跡である褐灰色シルトが堆積する。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

S523 (第319・328図、表61、PL.186)

Q21～22グリッド、調査区中央平坦部の北寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.49m、短軸0.46m、深さは最大で0.19mを測る。平面形は不整円形で、掘方の断面形は箱形で中心部が深い。埋土は柱痕跡であるにぶい黄橙色粘土ブロックを含む黒褐色粗粒砂が中心部に堆積する。埋土中には礎板と考えられる角材が1点(W89)出土した。W89は最大長25.7cm、最大幅6.2m、最大厚5.3cmを測る。表面及び側面の一部が炭化している。その他の出土遺物は皆無で帰属時期は不明である。

S633 (第319・328・377図、表61・69～72、PL.142・185)

R21グリッド、調査区中央平坦部の段落ち際で検出した柱穴である。検出規模は長軸0.62m、短軸0.25m、深さは最大で0.39mを測る。平面形は不整楕円形で、掘方の断面形は箱形で南壁は中位で開いて外側へ立ち上がる。中心部に最大長53.5cm、最大幅17.3cmのクリ材の柱根W90(詳細は第7章第6節参照)があり、底面に長さ0.1m、厚さ0.05mの小型の礎盤石が据えられている。また、柱根の南脇には径0.17m、厚さ0.15mの角礫が配置されている。

埋土は3層に分かれ、中層、下層に灰色シルトが堆積する。その他の出土遺物は皆無であるが、柱根の年代測定結果は、暦年較正年代(2σ)で1806～1894calADが得られている(詳細は第7章第5節参照)。

(5) 炭化物集中部

S355 (第319・329図、表38、PL.153)

面は丸みを帯びている。

埋土は中心部に柱痕跡である炭粒を多く含む灰黄褐色シルトが堆積する。出土遺物は弥生土器細片が数点出土している。本遺構の帰属時期は弥生時代後期と推定される。

S460 (第319・328図)

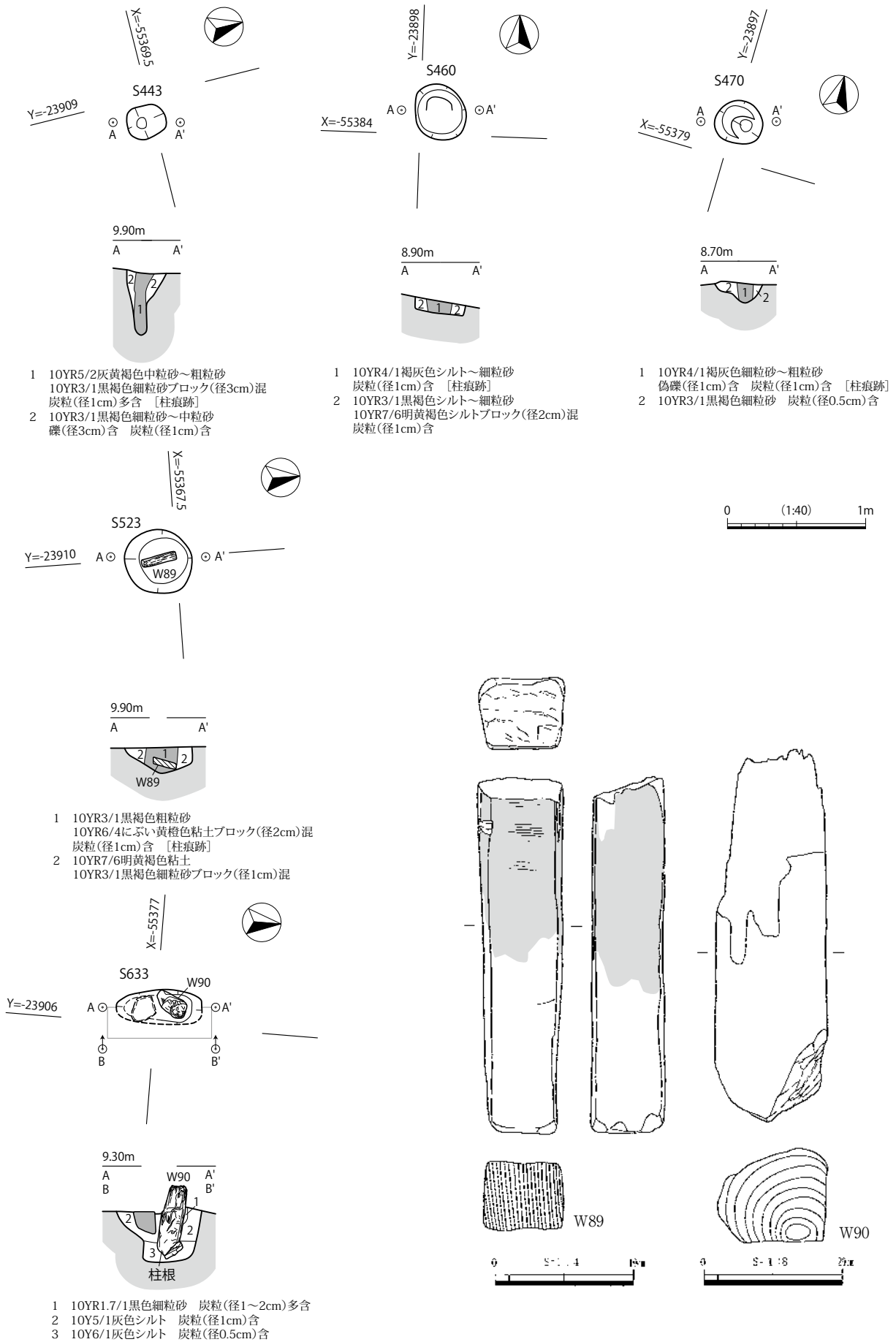
S20グリッド、調査区東部の南寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.4m、短軸0.37m、深さは0.09mを測る。平面形は不整円形、掘方の断面形は箱形を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は柱痕跡である褐灰色シルトが中心部に堆積する。出土遺物は土器細片少数に止まっており、本遺構の帰属時期は不明である。

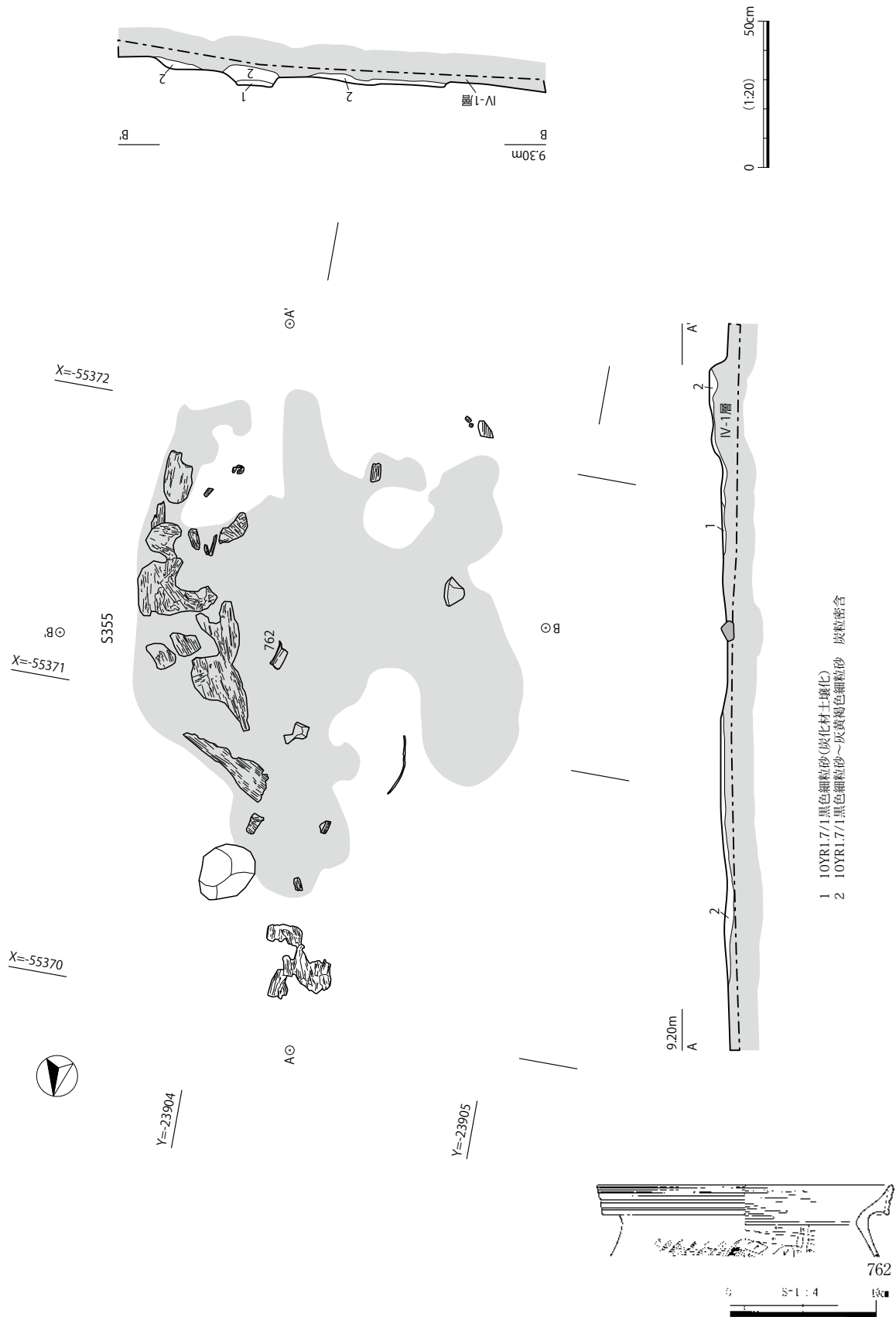
S470 (第319・328図)

R20グリッド、調査区東部中心部で検出した柱穴である。検出規模は長軸0.34m、短軸0.31m、深さは最大で0.14mを測る。平面形は不整円形、掘方の断面形はU字状となり、底面は西側が段状を呈し、中心部では柱当りが確認された。

第6章 8区の調査成果



第328図 S443・460・470・523・633柱穴平面・断面図及びS523・633柱穴出土遺物



第329図 S355炭化物集中部平面・断面図及び出土遺物

R21グリッド、調査区中央部北寄りの平坦面で検出した炭化物集中範囲である。検出規模は長軸2.12m、短軸1.34mで、なかでも東側が炭化物の残りが良い。炭化物は木目の観察できる材も認められるが、いずれも残存状況が不良で建築部材等の判断がつかなかった。

竪穴建物などの遺構に帰属する可能性を考慮し、周辺の精査を慎重に行ったが建物跡等は確認できず、下層でも伴う遺構は検出できなかった。また、炭化物集中範囲内や周囲には焼土も認められなかったことから、二次廃棄の可能性が高い。

出土遺物は弥生土器甕762が1点である。口縁部には5条の平行沈線がめぐり、肩部には貝殻腹縁による刺突文が施文される。本遺構の帰属時期は、出土した遺物から弥生時代後期中葉以降と考えられる。

8 第5遺構面

(1) 掘立柱建物

S750 (第330～332・376図、写真34、表62・69～72、PL.144・185)

Q21グリッド、調査区東部北寄りで検出した掘立柱建物である。南北1間(1.54m)、東西1間以上の東西棟になる可能性が高いが、検出面の東側が中世後期以降の造成により大幅に削平を受けているため、検出できた柱穴は2基のみである。

柱穴の平面は楕円形で、平面規模は北側のS656柱穴が長軸0.44m、短軸0.35m、深さ0.6m、南側のS707柱穴が長軸0.3m、短軸0.25m、深さ0.7mを測る。掘方は壁がほぼ直線的に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。柱穴には柱根が良好に残存し、S656柱穴の柱根W91が最大長62.2cm、最大幅11.8m、S707柱穴の柱根W92が最大長70.0cm、最大幅12.2cmを測る。柱表面は手斧による丁寧な面取り痕が残っている。それぞれ樹種同定分析を実施した結果、いずれもマキ属である。また、年代測定結果は、暦年較正年代(2σ)でW91が52～130calAD、W92では17～90calADが得られている(詳細は第7章第5～6節参照)。遺構の帰属時期は、柱根の年代測定結果から弥生時代中期と考えられる。

(2) 溝

S600 (第255・330・333・335図、表39、PL.144・158)

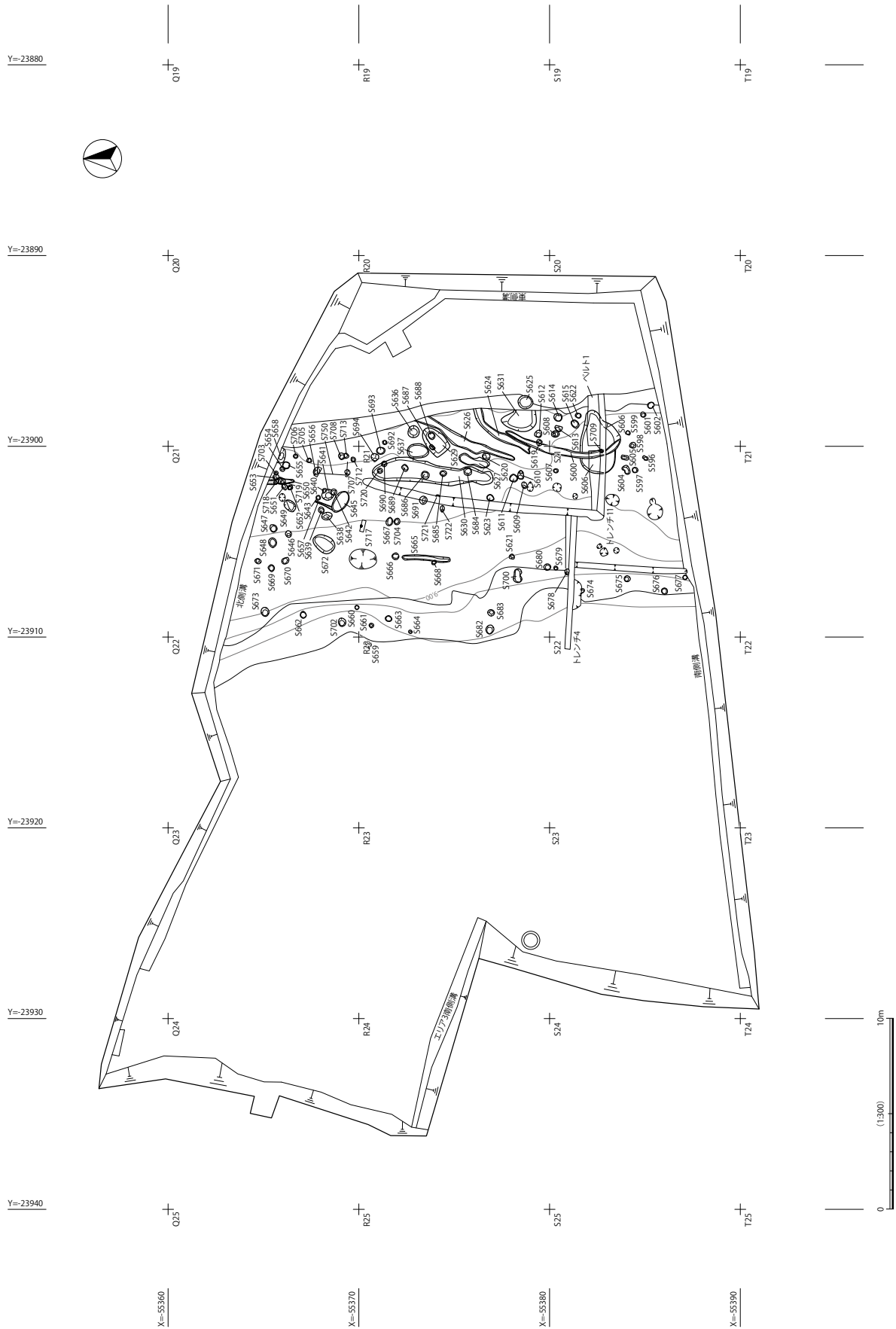
R20～21、S20～21グリッド、調査区東部南寄りで検出した緩やかな弧状を呈する溝である。ほぼ南北方向に走行し、遺構の南側でS606土坑を掘り込んでいる。検出規模は長さ6.0m、幅0.1～0.4m、深さ0.1mを測る。遺構の断面形は逆台形からU字形を呈する。埋土は単層で黒色シルトが堆積である。

出土遺物は弥生土器甕765が1点出土している。口縁部が外反し、端部が上方にわずかに摘まみ上げられる。口縁端部に1条の凹線文がめぐる。体部外面はヘラミガキで肩部にハケ状工具による刺突が施される。内面は口縁から体部上半がハケ、体部下半がヘラケズリである。弥生時代中期後葉の特徴を示す。本遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

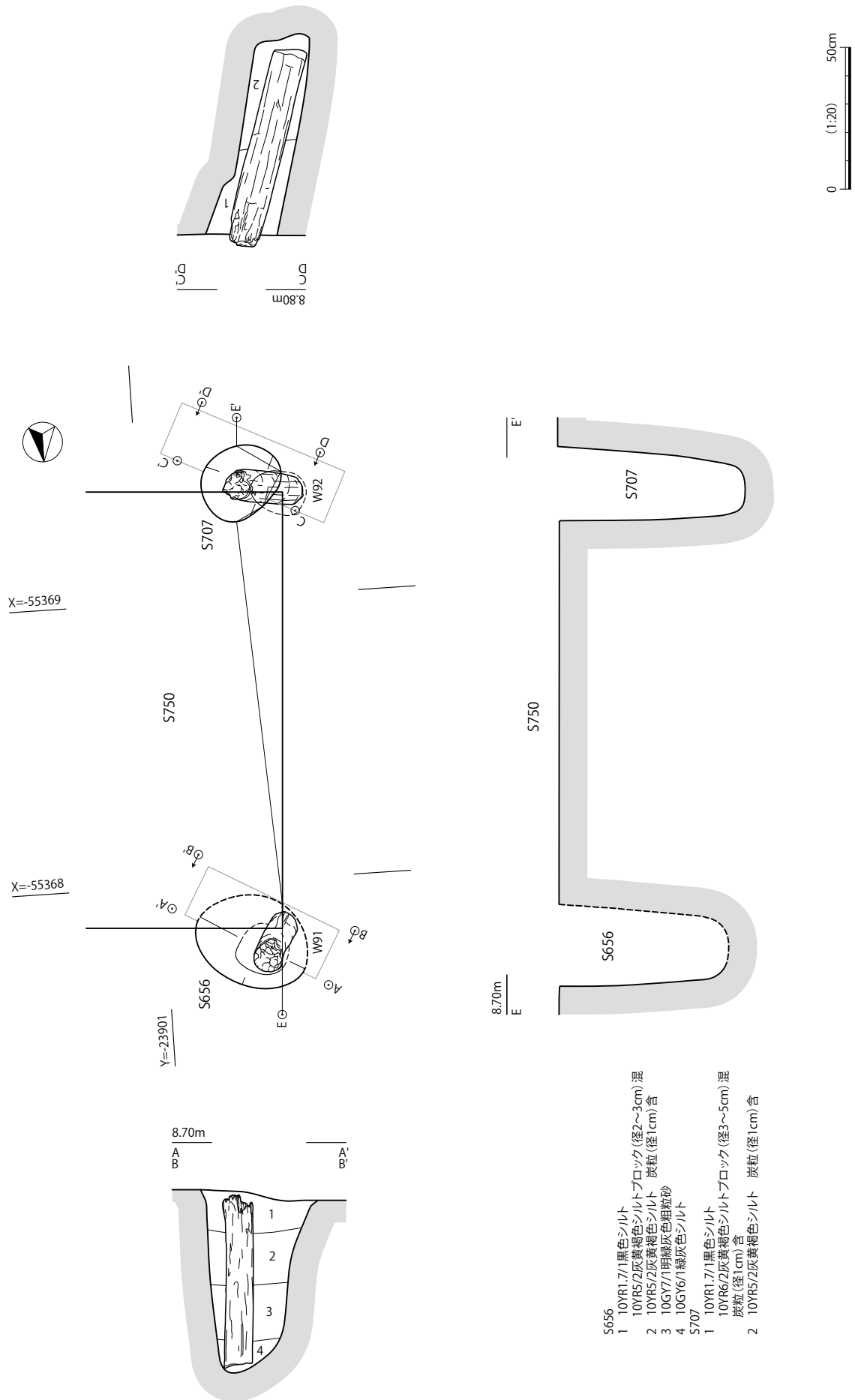
S624 (第330・334図、PL.144)

R20～21グリッド、調査区東部の中心部で検出した緩やかな弧状を呈する溝である。ほぼ南北方向に走行し、北側先端部は中世後半以降の造成により削平されている。検出規模は長さ3.6m、幅0.28～0.45m、深さ0.08mを測る。遺構の断面形はU字形を呈する。埋土は単層で黒色シルトが堆積である。

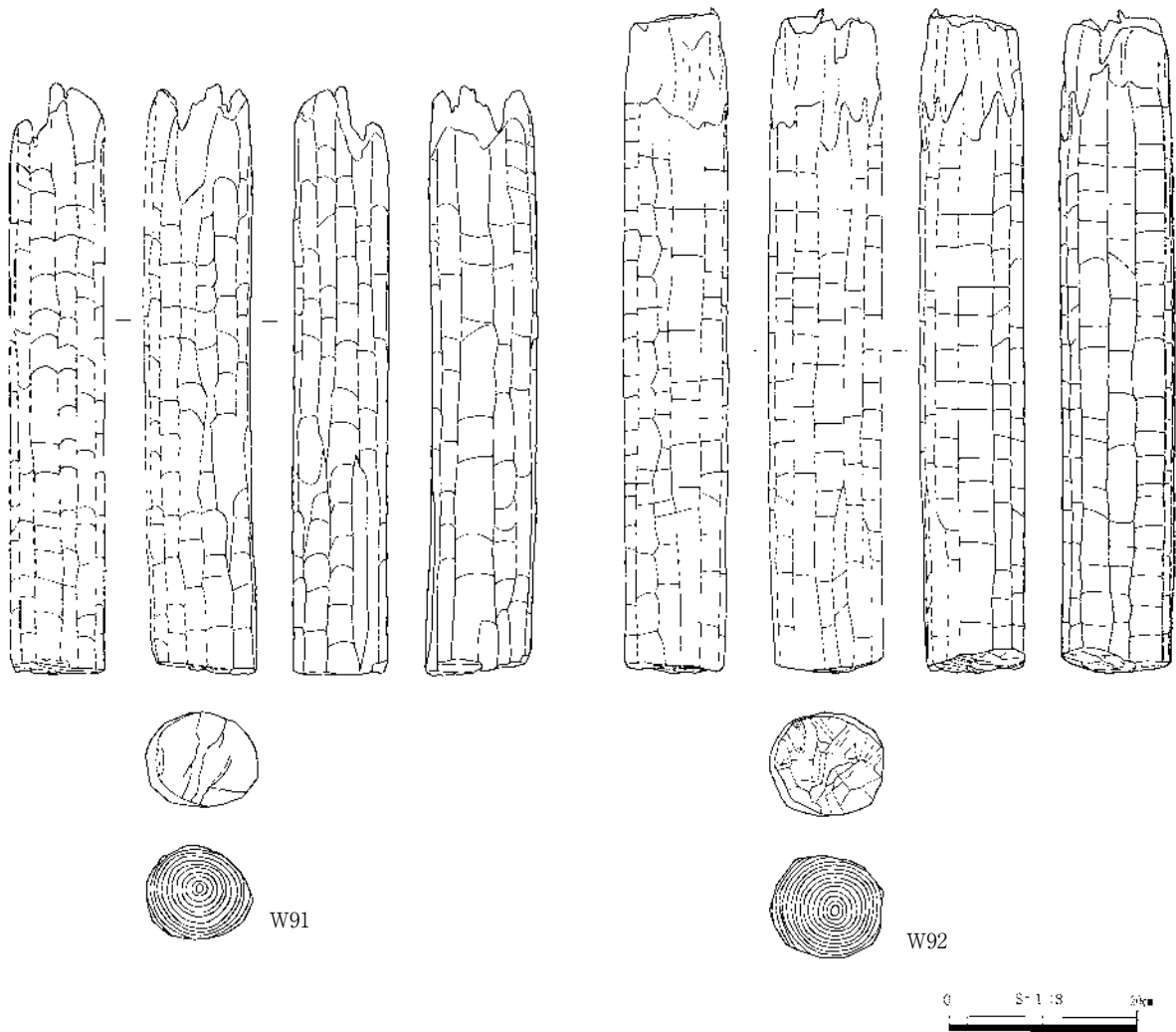
出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から帰属時期は弥生時代後期と推定する。



第330図 8区第5遺構面遺構配置図



第331図 S750掘立柱建物平面・断面図



第332図 S750掘立柱建物出土遺物

S626 (第330・334図、表38、PL.144・145・157)

R20～21グリッド、調査区東部の中心部で検出した溝である。北東-南西方向に走行し、北側は中世後半以降の造成により削平されている。検出規模は長さ5.65m、幅0.15～0.62m、深さ0.08mを測る。遺構の断面形はU字形を呈する。埋土は単層で黒色シルトが堆積である。

出土遺物は弥生後期中葉の器台763が出土している。受け部口縁帯に9条の平行沈線がめぐり、内外面ミガキ及び赤色塗彩がなされている。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代後期後葉と推定される。

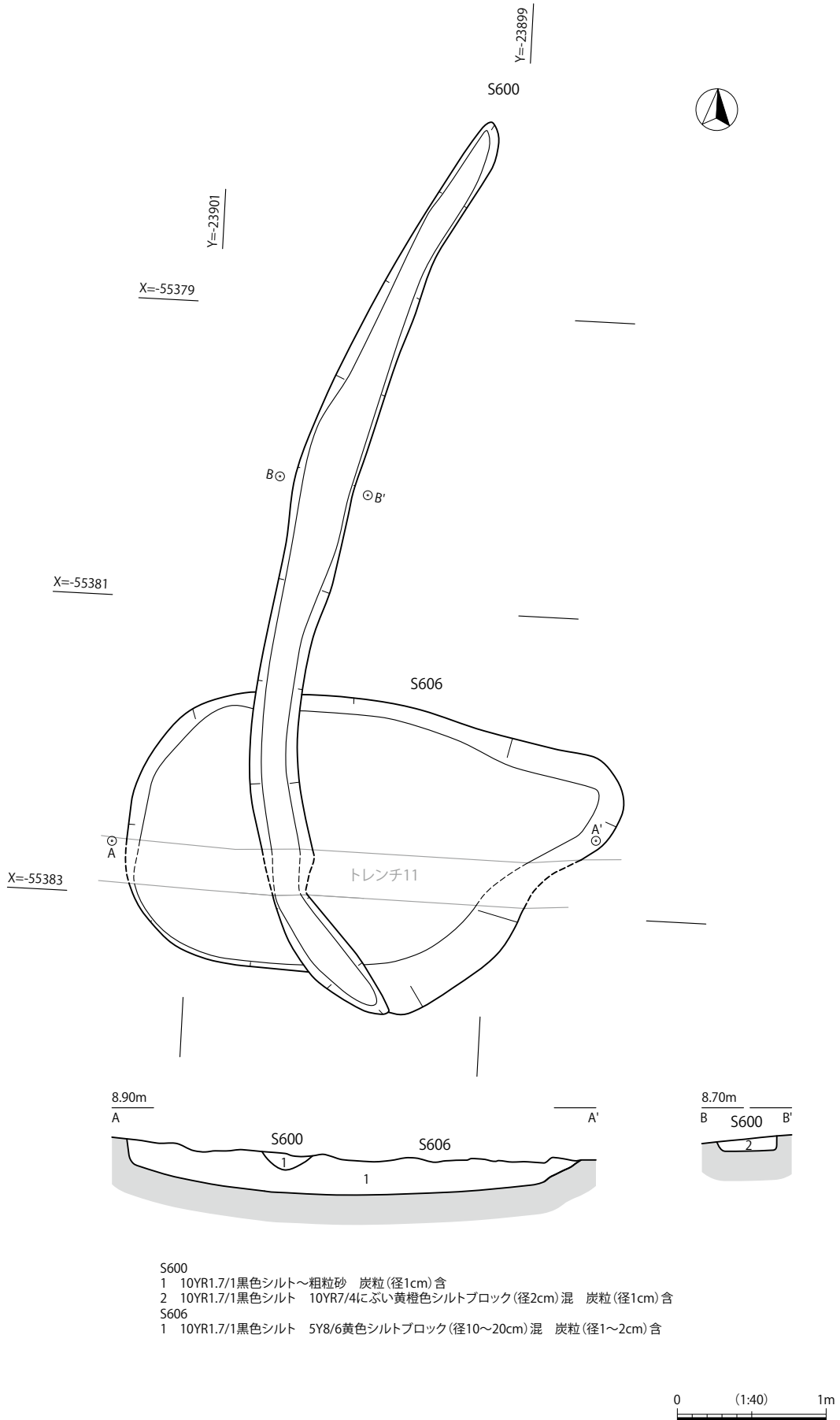
S627 (第330・334図、PL.145)

R21グリッド、調査区東部の中心部で検出した溝である。南北方向に走行している。検出規模は長さ1.64m、幅0.45～0.5m、深さ0.15mを測る。遺構の断面形は逆台形状を呈する。埋土は3層に分かれ、黒色から緑灰色シルトが堆積する。

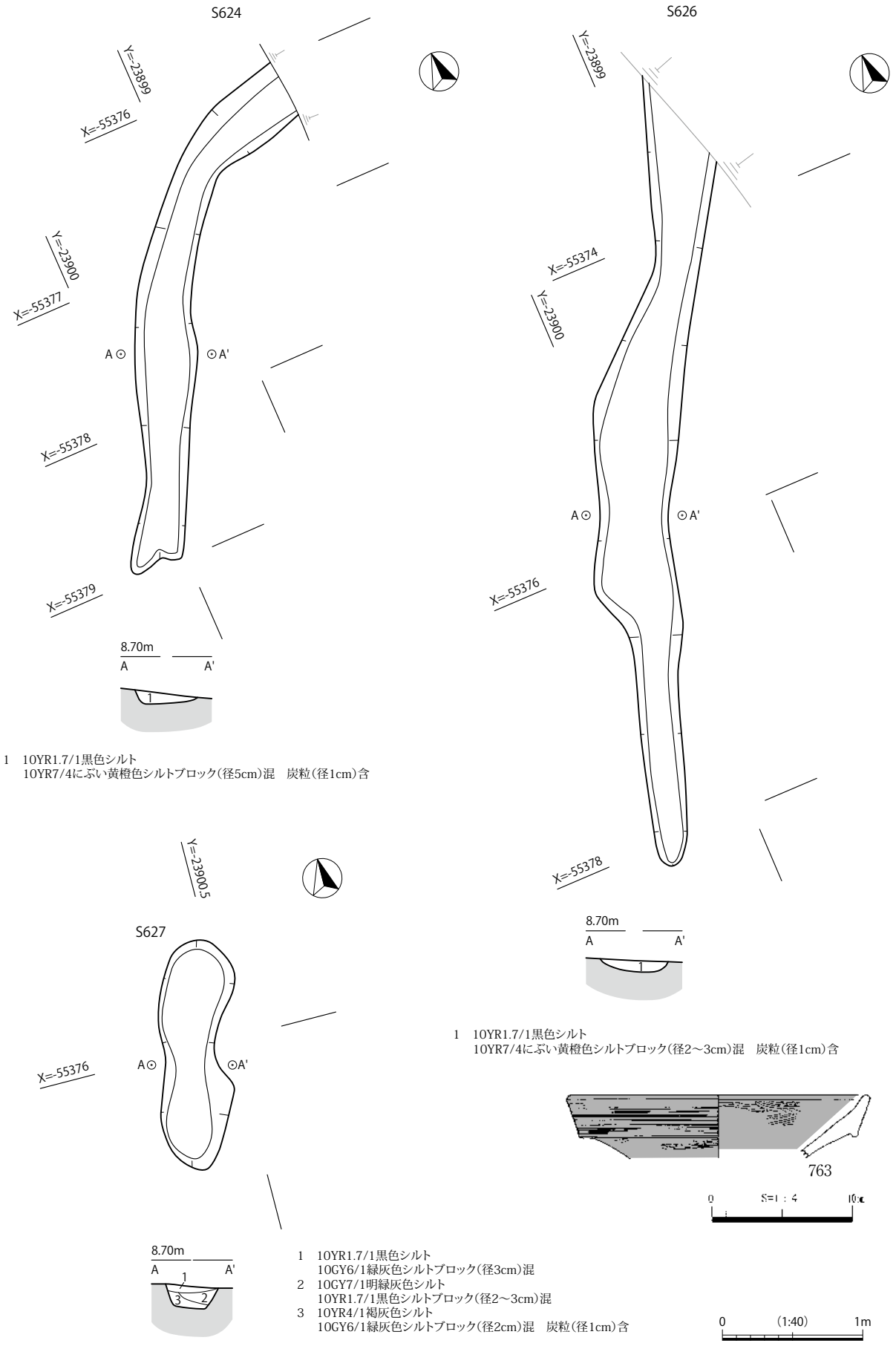
出土遺物は弥生後期の土器細片が出土している。本遺構の帰属時期は弥生時代後期と推定される。

S630 (第330・336図、表39、PL.145・157)

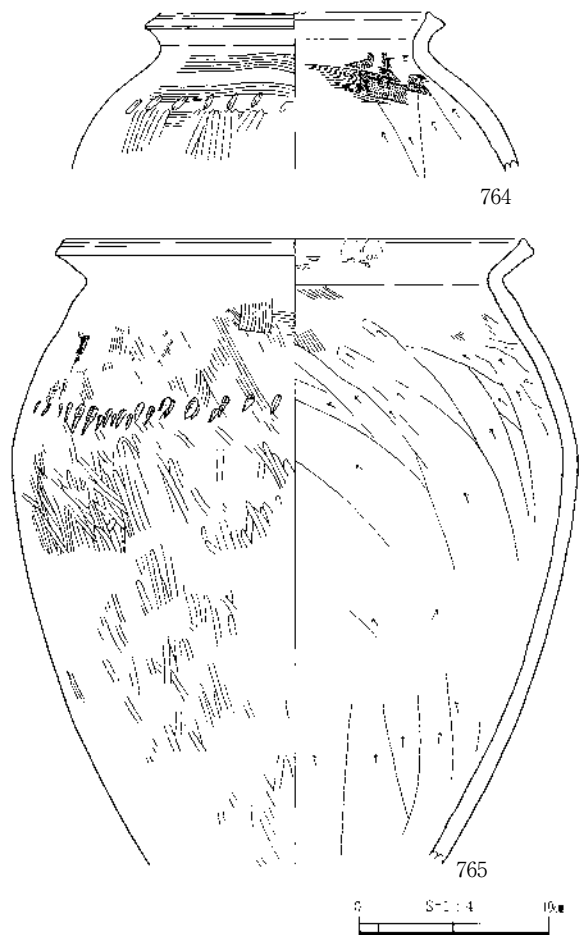
R21グリッド、調査区東部の中心部で検出した南北方向に走行する溝である。検出規模は長さ6.3m、幅0.5～1.2m、深さ0.15mを測る。遺構の断面形はU字形を呈する。埋土は2層に分かれ、黒色から



第333図 S600溝・S606土坑平面・断面図



第334図 S624・626・627溝平面・断面図及びS626溝出土遺物



第335図 S600溝・S606土坑出土遺物

ズリが観察される。弥生時代中期後葉の特徴を示す。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

S657 (第330・336図)

Q21グリッド、調査区東部の北壁寄りで見出した溝である。遺構の南側はS645土坑に掘り込まれる。検出規模は長さ0.95m、幅0.07～0.15m、深さ0.03mを測る。遺構の断面形は逆台形を呈する。埋土は単層であり、黒色から明緑灰色シルトが堆積する。出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から帰属時期は弥生時代後期と推定する。

S665 (第330・336図)

R21グリッド、調査区東部の中心部で見出した溝である。検出規模は長さ2.5m、幅0.25～0.3m、深さ0.06mを測る。遺構の断面形は皿状を呈する。埋土は単層であり、黒色から灰黄褐色シルトが堆積する。出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から帰属時期は弥生時代後期と推定する。

(3) 土坑

S606 (第255・330・333・335図、表39、PL.145)

S20～21グリッド、調査区東部南寄りで見出した土坑である。中心部をS600溝に掘り込まれている。検出規模は長軸3.3m、短軸2.1m、深さは最大で0.27mを測る。平面形は不整楕円形で東側が角状に張り出す。断面形は皿状で、底面は概ね平坦である。埋土は黒色シルトの単層である。

出土遺物は弥生中期後葉の甕764ほか数点出土している。764は口縁部が外反し、口縁端部上方をわ

明緑灰色シルトが堆積する。

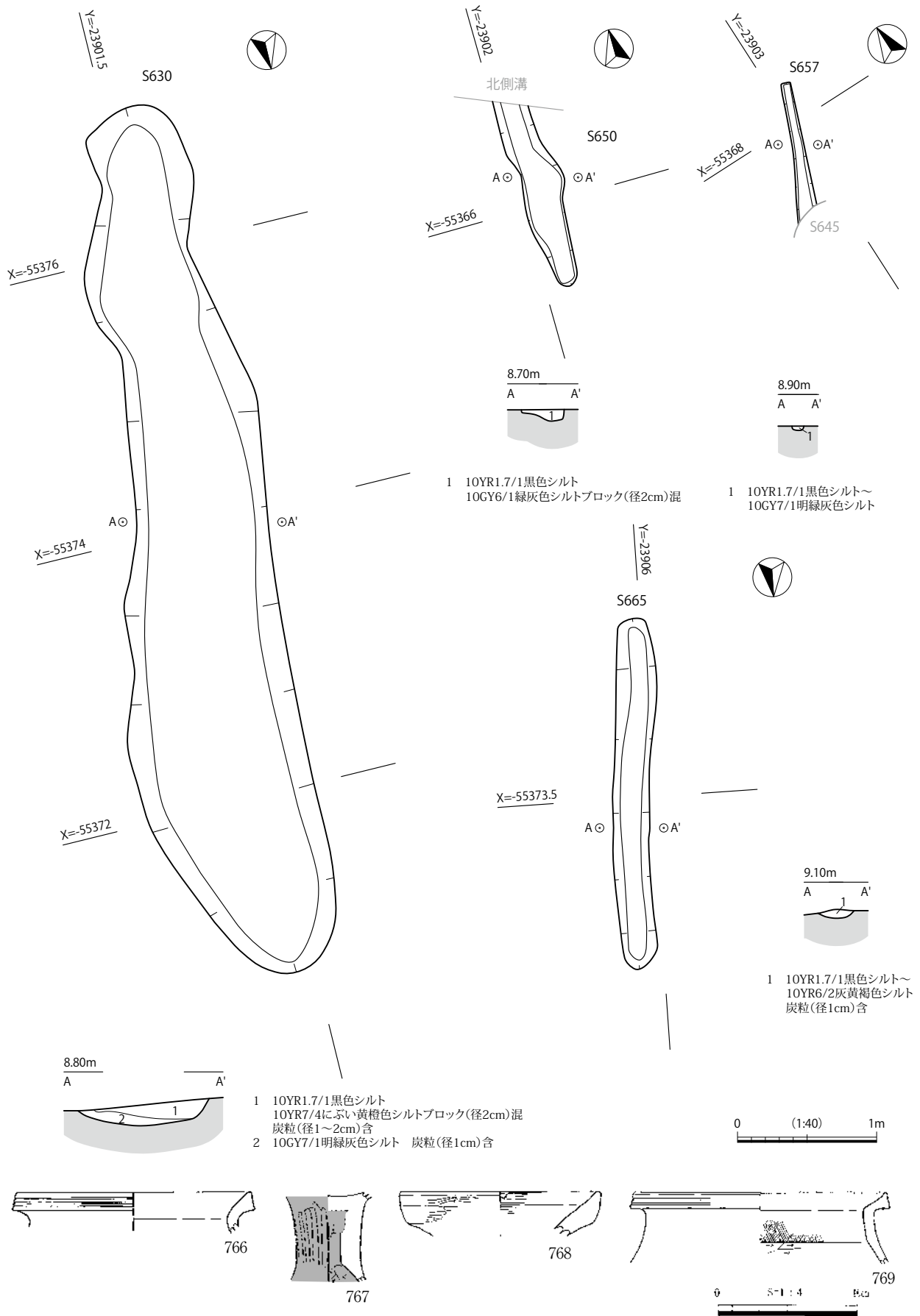
出土遺物は弥生土器甕766、高坏767、器台768が出土している。766は外反する口縁部に3条の凹線文がめぐる。767は高坏の脚柱部であり、外面は赤色塗彩がなされ縦方向のミガキ、内面はヘラケズリとシボリが観察される。768は受け部端部が屈曲して直線的に立ち上がる。内面の立ち上がりから器台と推定される。いずれも弥生時代中期後葉から後期前葉の特徴を示す。

本遺構の帰属時期は、出土遺物の特徴から弥生時代中期後葉から後期前葉に比定される。

S650 (第330・336図、表39、PL.157)

Q21グリッド、調査区東部の北壁際で見出した溝である。遺構の北側は調査区外へ延びるため、不明である。検出規模は長さ1.47m、幅0.15～0.27m、深さ0.08mを測る。遺構の断面形は逆台形を呈し、西壁が緩やかに立ち上がる。埋土は単層であり、黒色シルトが堆積する。

出土遺物は弥生土器の甕769が出土している。外反する口縁部は幅が比較的狭く、2条の凹線文がめぐる。体部内面は上半がハケ、下半はヘラケ



第336図 S630・650・657・665溝平面・断面図及びS630・650溝出土遺物

第6章 8区の調査成果

ずかに摘まみ上げる。端部はナデによりわずかに凹む。肩部は横方向のハケ及びヘラ状工具による刺突文がめぐり、体部外面は縦方向のミガキがなされる。体部内面上半がハケ、下半がヘラケズリである。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

S625 (第330・337図)

R20グリッド、調査区東部の段裾際で検出した土坑である。検出規模は長軸0.78m、短軸0.7m、深さは最大で0.2mを測る。平面形は不整円形を呈する。断面形は箱形で、底面は概ね平坦である。埋土は2層に分層され、灰色から黒色シルトブロックを含む混合土である。出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から帰属時期は弥生時代後期と推定する。

S629 (第330・337図、表39、PL.145・157)

R20・21グリッド、調査区東部の中心部で検出した土坑である。検出規模は長軸1.65m、短軸1.05m、深さは最大で0.28mを測る。平面形は不整楕円形である。断面形は皿状を呈し、底面は中心部に凹凸がみられ不安定である。埋土は4層に分かれ、黒色から明緑灰色シルトが堆積する。

出土遺物は弥生土器の甕770が出土している。口縁部に7条の平行沈線がめぐり、内面は横方向のミガキが施される。弥生時代後期中葉頃と考えられる。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代後期中葉頃と考えられる。

S631 (第330・337図)

R20グリッド、調査区東部の段裾際で検出した土坑である。検出規模は長軸1.83m、短軸1.12m、深さは最大で0.21mを測る。平面形は不整楕円形で北側が角状に延び、東側は中世後期以降の造成により削平されている。断面形は皿状を呈し、底面は概ね平坦である。埋土は単層であり、黒色シルトが堆積する。

出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から帰属時期は弥生時代後期と推定する。

S637 (第330・337図、PL.145)

R21グリッド、調査区東部の中心部で検出した土坑である。検出規模は長軸1.12m、短軸0.76m、深さは最大で0.16mを測る。平面形は不整楕円形である。断面形は皿状を呈し、底面はやや凹凸があり安定しない。埋土は2層に分かれ、黒色から明緑灰色シルトが堆積する。出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から帰属時期は弥生時代後期と推定する。

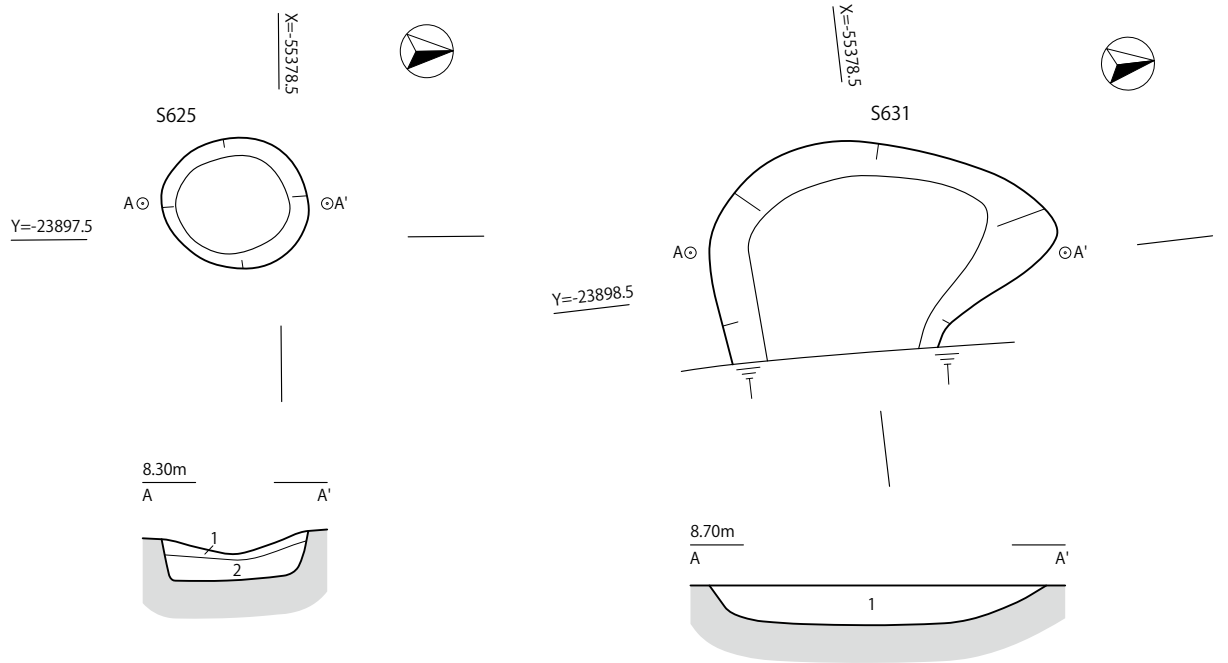
S645 (第330・338図、PL.145)

Q21グリッド、調査区東部の中心部で検出した土坑である。検出規模は長軸1.22m、短軸0.74m、深さは最大で0.08mを測る。平面形は楕円形である。断面形は皿状を呈し、底面は概ね平坦である。埋土は2層に分かれ、黒色シルトから明緑灰色細粒砂が堆積する。出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から帰属時期は弥生時代後期と推定する。

S649 (第330・338図)

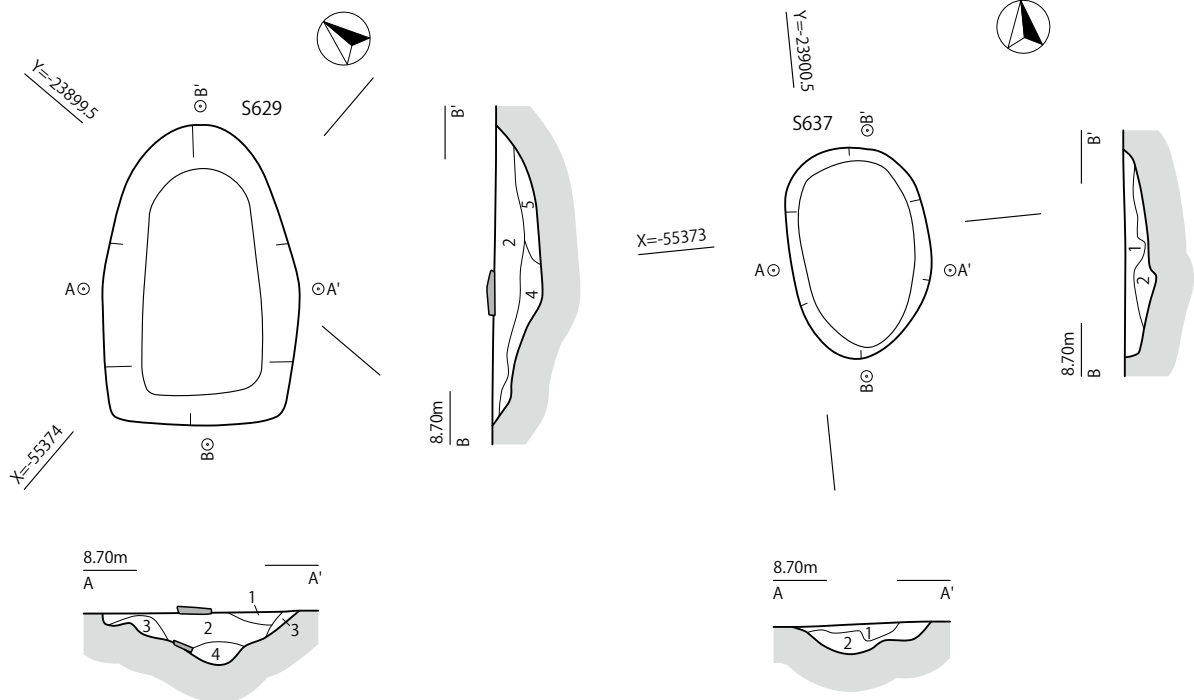
Q21グリッド、調査区東部北寄りで検出した土坑である。検出規模は長軸0.69m、短軸0.48m、深さは最大で0.15mを測る。平面形は不整楕円形である。断面形は逆台形状で、底面は西側がやや段状を呈する。

埋土は3層に分かれ、拳大の礫を含む黒色シルトから明緑灰色シルトが堆積する。出土遺物は弥生後期の土器細片が数点出土している。本遺構の帰属時期は弥生時代後期と推定される。



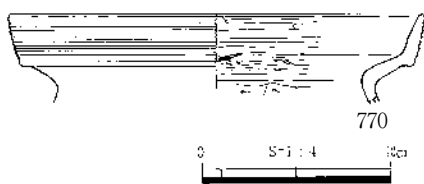
- 1 10YR1.7/1黒色シルト
- 10Y5/1灰色シルトブロック(径5~10cm)混 炭粒(径1cm)含
- 2 10YR5/2灰黄褐色シルト
- 10YR1.7/1黒色シルトブロック(径3~5cm)混 炭粒(径1cm)含

- 1 10YR1.7/1黒色シルト 10YR7/2にぶい黄褐色シルトブロック(径3~5cm)混 炭粒(径1cm)含



- 1 10YR1.7/1黒色シルト
- 2 10YR1.7/1黒色シルト~10GY7/1明緑灰色シルト
- 3 10YR1.7/1黒色シルト~10GY7/1明緑灰色シルト 炭粒(径1cm)含
- 4 10GY7/1明緑灰色シルト 炭粒(径1cm)含
- 5 10GY7/1明緑灰色シルト~10YR1.7/1黒色シルト 炭粒(径1~2cm)含

- 1 10YR1.7/1黒色シルト
- 10GY7/1明緑灰色シルトブロック(径3~5cm)混 炭粒(径1cm)含
- 2 10GY7/1明緑灰色シルト
- 10YR1.7/1黒色シルトブロック(径2~3cm)混 炭粒(径1cm)含

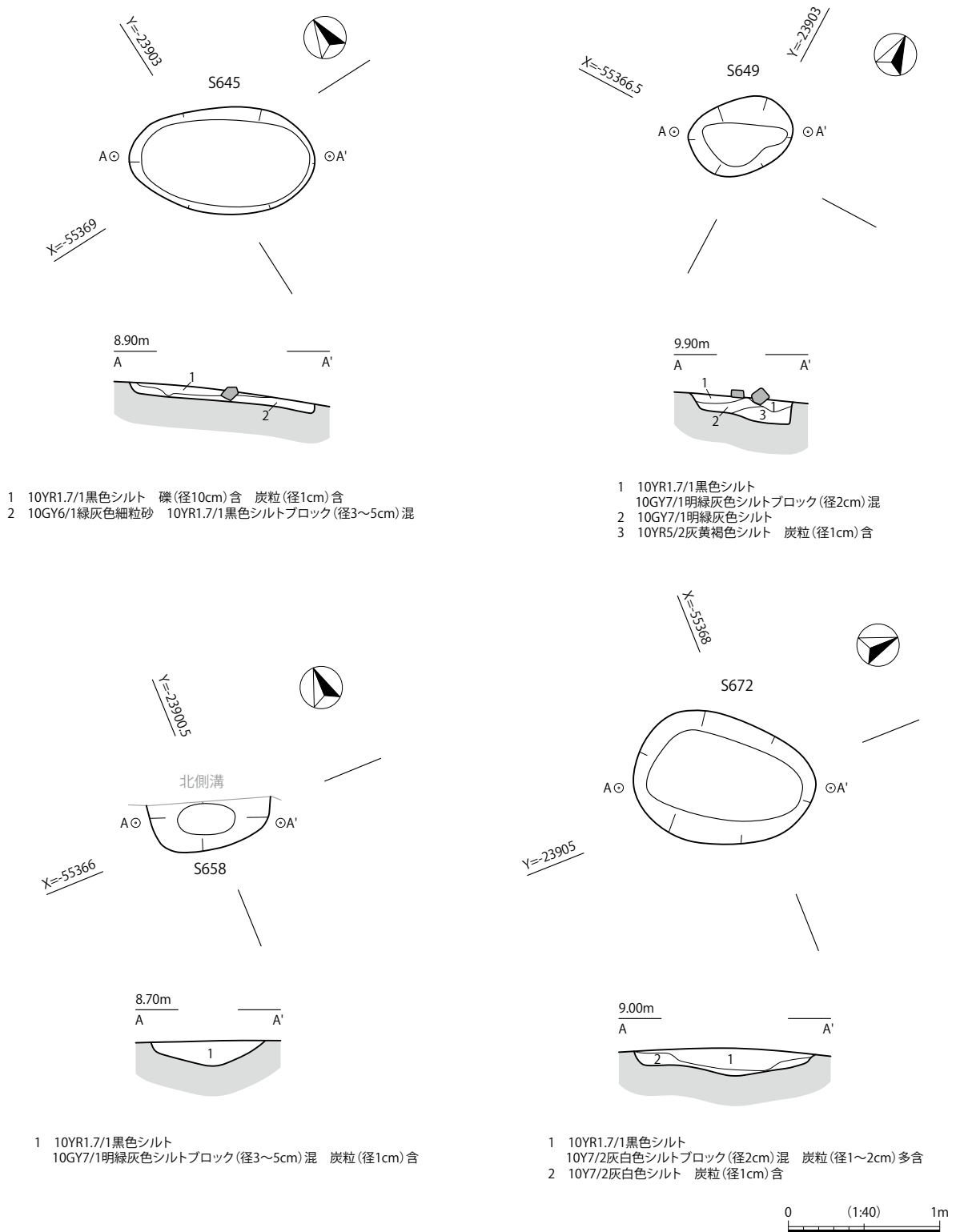


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
S-1 : 4

0 (1:40) 1m

第337図 S625・629・631・637土坑平面・断面図及びS629土坑出土遺物

第6章 8区の調査成果



第338図 S645・649・658・672土坑平面・断面図

S658 (第330・338図)

Q21グリッド、調査区東部の北壁際で検出した土坑である。検出規模は長軸0.88m、短軸0.33m、深さは最大で0.17mを測る。平面形は、北側が側溝により掘削され、全形が不明であるが不整楕円形を呈するものと推測される。断面形は皿状で、底面は中心部が深く、壁が緩やかに立ち上がる。

埋土は黒色シルトの単層である。出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から帰属時期は弥生時代後期と推定する。

S672 (第330・338図、PL.146)

Q21グリッド、調査区東部北寄りで検出した土坑である。検出規模は長軸1.13m、短軸0.85m、深さは最大で0.18mを測る。平面形は、不整楕円形を呈し、断面形は皿状である。

埋土は単層であり、黒色から灰白色シルトが堆積する。出土遺物は弥生後期の土器細片が数点出土している。本遺構の帰属時期は弥生時代後期と推定される。

(4) 柱穴**S596 (第330・339・340図、表62、PL.146・186)**

S21グリッド、調査区東部平坦部の南寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.31m、短軸0.17m、深さは0.17mを測る。平面形は不整楕円形、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は黒色シルトの単層であり、灰色シルトブロックが混じる。底面直上で柱の転用材と推定される礎板W93が1点出土した。W93は最大長17.1cm、幅11.9cm、最大厚4.9cmを測る。その他の出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から本遺構の帰属時期は弥生時代後期と推定される。

S608 (第330・339図)

S20グリッド、調査区東部の南寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.42m、短軸0.34m、深さは0.21mを測る。平面形は不整円形、掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は柱痕跡である黒褐色シルトが中心部に堆積する。出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から本遺構の帰属時期は弥生時代後期と推定される。

S620 (第330・339・340図、表62、PL.146・186)

R21グリッド、調査区東部中央で検出した柱穴である。検出規模は長軸0.4m、短軸0.34m、深さは0.14mを測る。平面形は不整楕円形、掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面は概ね平坦である。

埋土は黒色から灰色シルトの単層である。底面には礎板W94とその下部に据えられた礎盤石が出土した。W94は最大長30.8cm、最大幅5.7m、最大厚4.0cm、礎盤石は長さ0.14m、幅0.1m、厚さ0.04mを測る。出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から本遺構の帰属時期は弥生時代後期と推定される。

S647 (第330・339図)

Q21グリッド、調査区東部中央の北壁際で検出した柱穴である。検出規模は長軸0.42m、短軸0.35m、深さは0.17mを測る。平面形は不整楕円形、掘方の断面形は逆台形状を呈し、底面はやや丸みを帯びる。

埋土は2層に分かれ、黒色シルトを基本とする。底面には長さ0.22m、幅0.21m、厚さ0.1mの礎盤石が出土した。出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から本遺構の帰属時期は弥生時代後期と推定される。

S651 (第330・339・340図、表62、PL.146・185)

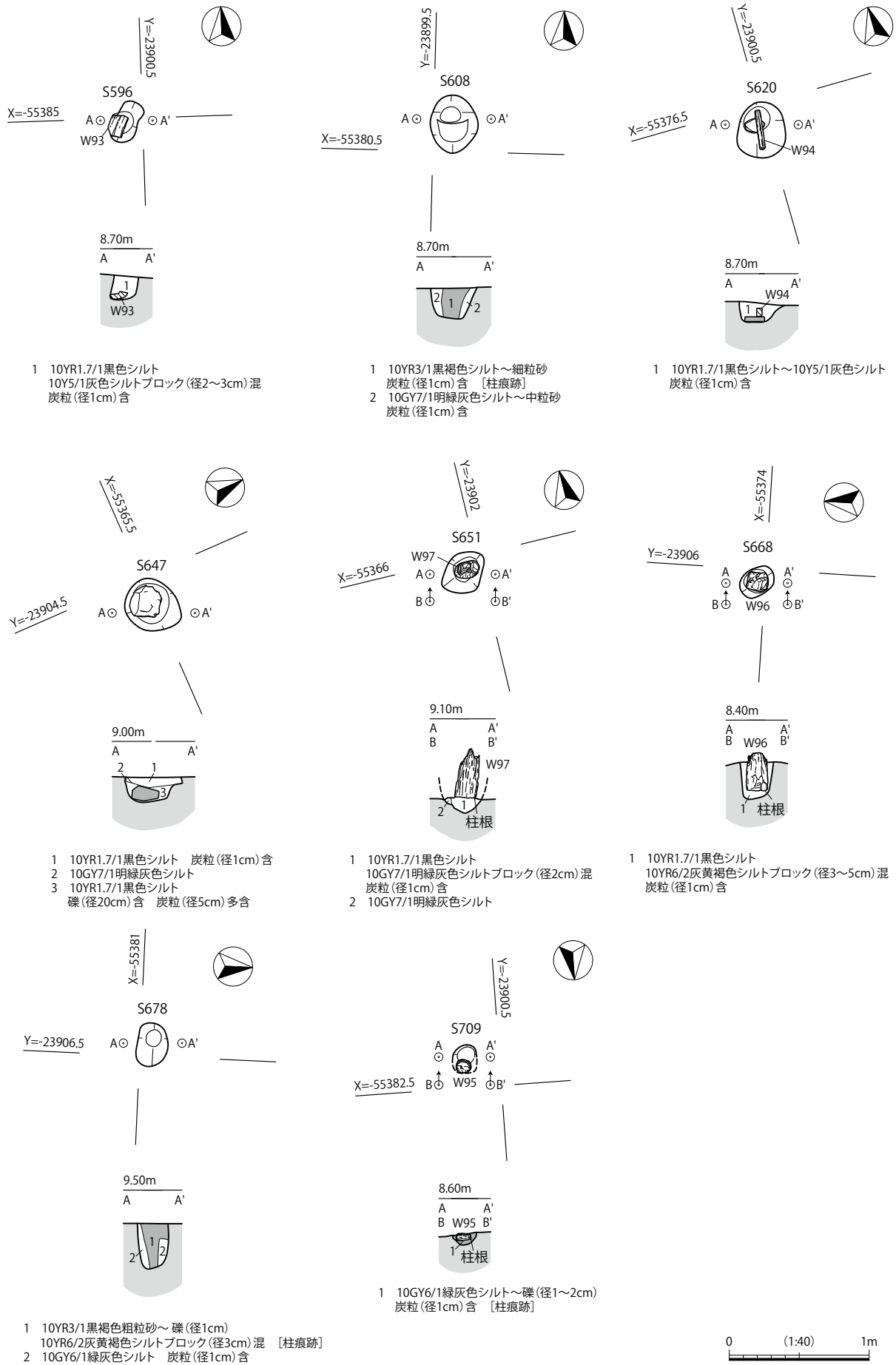
Q21グリッド、調査区東部の北壁際で検出した柱穴である。検出規模は長軸0.3m、短軸0.25m、深さは最大で0.11mを測る。平面形は不整円形で、掘方の断面形はU字状を呈する。中心部に最大長37.3cm、最大幅16.3cmの柱根W97が残存していたが、本来の掘り込み面はさらに上方である。柱根は芯去材で底面から12cm上方に溝が掘り込まれている。

埋土は2層に分かれるが、黒色シルトが主体となる。その他の出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から弥生時代後期から終末期と推定される。

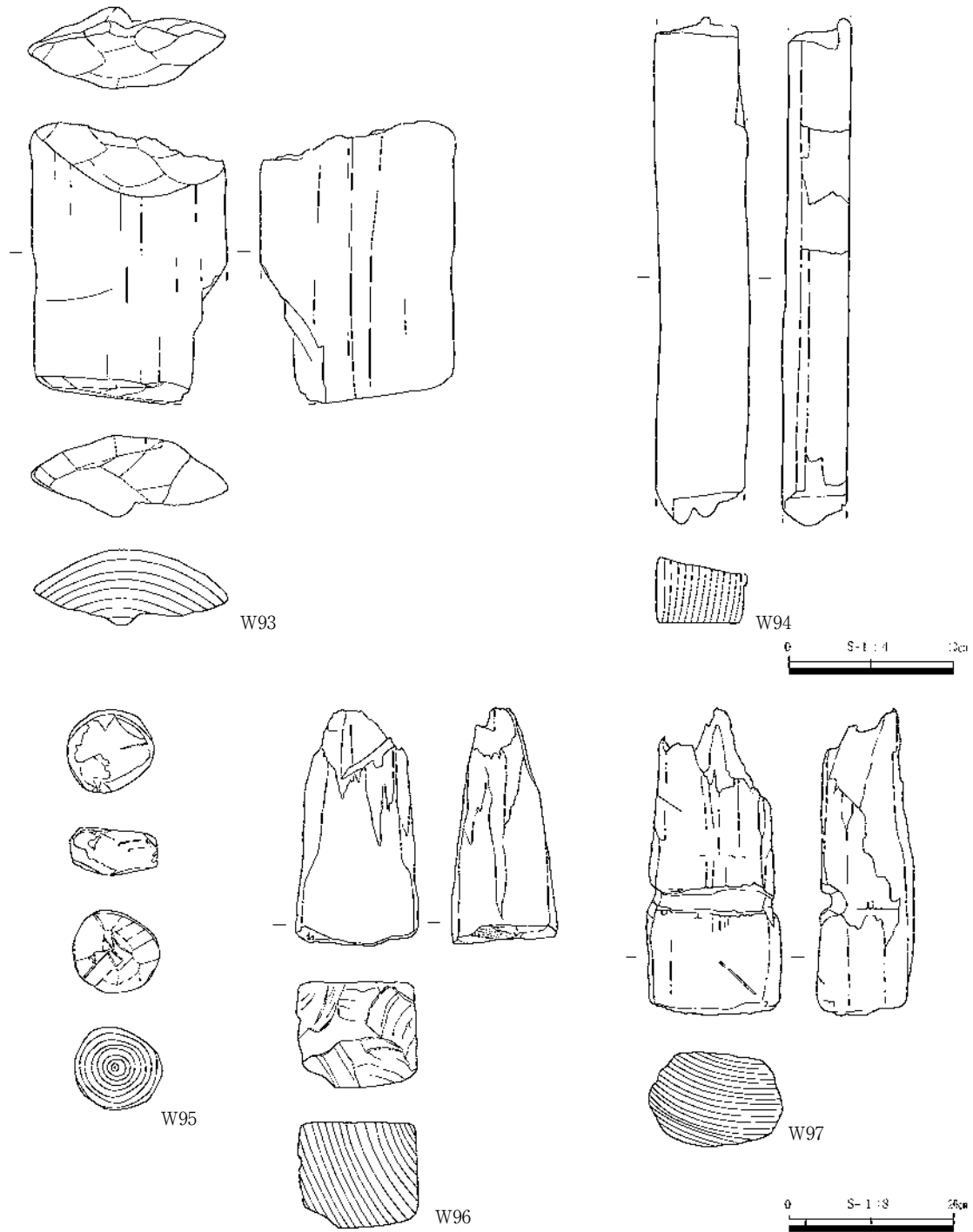
S668 (第330・339・340図、表62、PL.146)

R21グリッド、調査区東部中央で検出した柱穴である。検出規模は長軸0.26m、短軸0.19m、深さ

第6章 8区の調査成果



第339図 S596・608・620・647・651・668・678・709柱穴平面・断面図



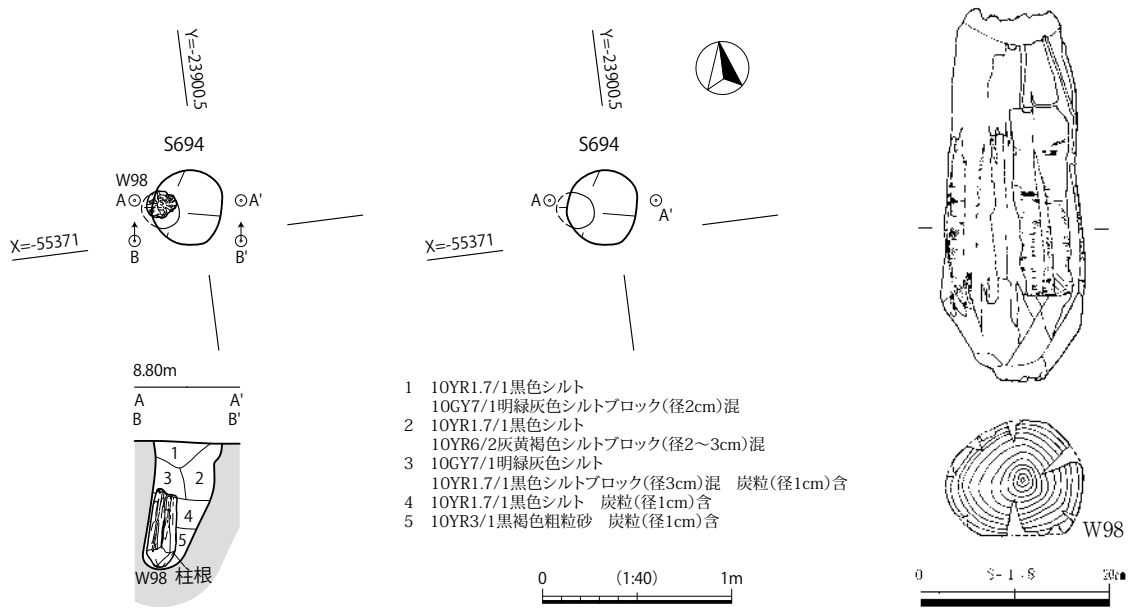
第340図 S596・620・651・668・709柱穴出土遺物

は最大で0.25mを測る。平面形は不整楕円形で、掘方の断面形はU字状を呈し、底面は概ね平坦である。中心部に最大長28.6cm、最大幅15.0cmの柱根W96が残存していた。

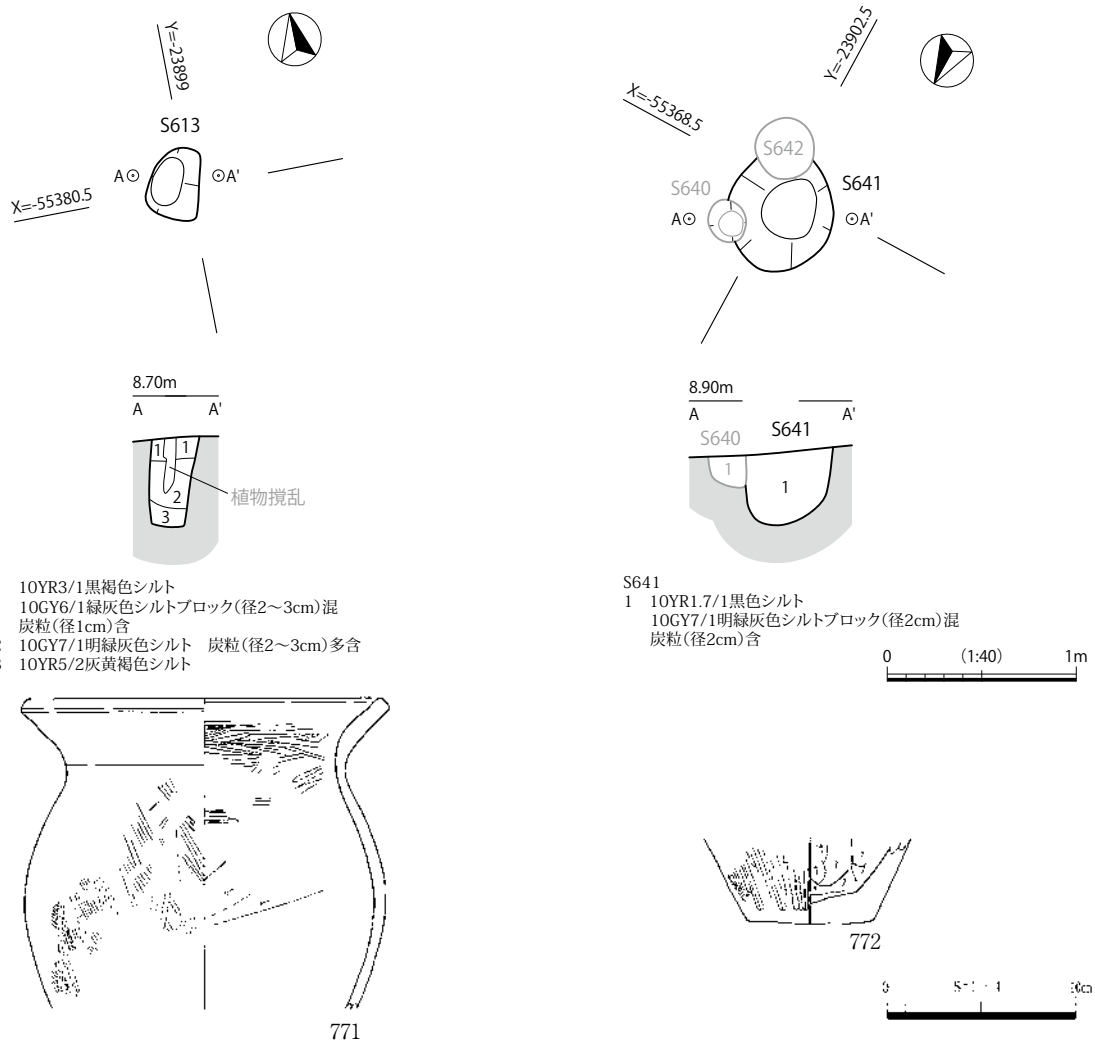
埋土は灰黄褐色シルトブロックが混じる黒色シルトの単層である。その他の出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から弥生時代後期と推定される。

S678 (第330・339図)

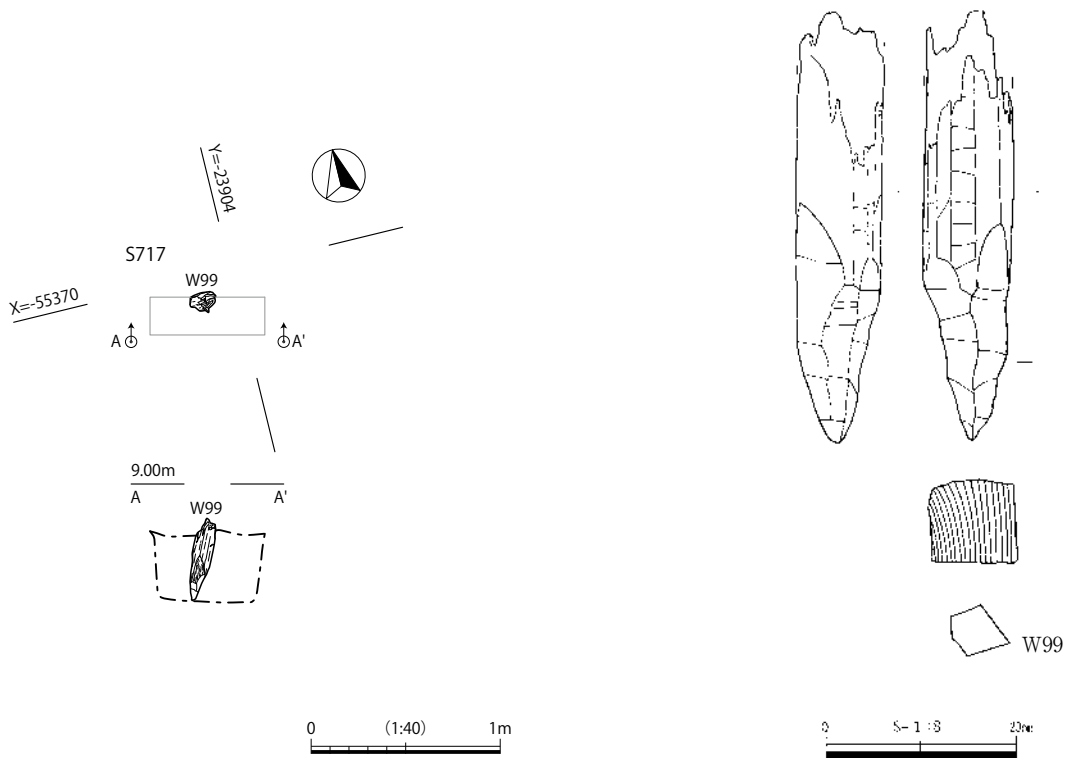
S21グリッド、調査区東部の南寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.3m、短軸0.23m、深さは0.33mを測る。平面形は不整楕円形、掘方の断面形はU字状を呈する。



第341図 S694柱穴平面・断面図及び出土遺物



第342図 S613・641ピット平面・断面図及び出土遺物



第343図 S717杭平面・断面図及び出土遺物

埋土は柱痕である黒褐色粗粒砂が中心部に堆積する。出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から本遺構の帰属時期は弥生時代後期と推定される。

S694 (第330・341・376図、写真37、表62・69～72、PL.146)

R21グリッド、調査区東部の北寄りで検出した柱穴である。検出規模は長軸0.39m、短軸0.34m、深さは最大で0.68mを測る。平面形は不整円形で、掘方の断面形はU字状を呈する。西壁沿いに最大長39.5cm、最大幅15.7cmのカエデ属の柱根W98（詳細は第7章第6節参照）が残存していた。

埋土は5層に分かれ、上中層は黒色から明緑灰色シルト、下層に黒褐色粗粒砂が堆積する。出土遺物は弥生土器細片が出土している。柱根の年代測定結果は、暦年較正年代（ 2σ ）で54～130calADが得られている（詳細は第7章第5節参照）。

S709 (第330・339・340図、表62、PL.158)

S21グリッド、調査区東部の南寄りのS606土坑底面で検出した柱穴である。S606土坑に掘り込まれている可能性が高い。検出規模は長軸0.2m、短軸0.17m、深さは最大で0.08mを測る。平面形は不整円形で、掘方の断面形はU字状を呈する。

中心部に最大長5.9cm、最大幅10.5cmの柱根W95が残存していた。埋土は緑灰色シルトの単層である。出土遺物は皆無であるが、埋土の特徴から弥生時代後期と推定される。

(5) ピット

S613 (第330・342図、PL.158)

S20グリッド、調査区南東部で検出した小穴である。検出規模は長軸0.38m、短軸0.28m、深さは0.48mを測る。平面形は不整楕円形、掘方の断面形は逆台形状を呈する。埋土は3層に分層され、黒褐色から緑灰色並びに灰黄褐色シルトが堆積する。

出土遺物は弥生土器甕1点(771)である。口縁が「く」字状に外反しナデ、体部にハケが施される。

内面の調整は頸部から体部上半がミガキ、体部下半はヘラケズリである。中期後葉の特徴を示す。

遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

S641 (第330・342図、表39、PL.157)

Q21グリッド、調査区中央北部で検出した小穴である。東側と南側をS640、S642ピットに掘り込まれる。検出規模は長軸0.58m、短軸0.56m、深さは0.36mを測る。平面形は不整円形、掘方の断面形は椀状を呈する。埋土は単層で、黒色シルトが堆積する。

出土遺物は弥生土器甕の底部片(772)1点である。外面は縦方向のミガキが施され、平底で器壁が厚い。遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

(6) 杭

S717 (第330・343図、表62、PL.146)

R21グリッド、調査区中央北寄りで検出した杭である。残存する杭W99は芯去材を利用した丸杭を使用している。最大長45.3cm、最大幅9.5cmを測る。杭の機能は不明であり、帰属時期は弥生時代後期以降と推定される。

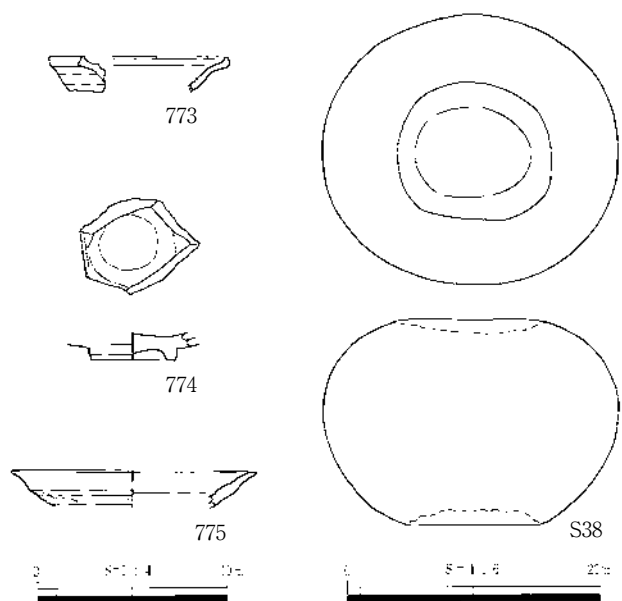
第3節 遺構に伴わない遺物

(1) 第I層出土遺物 (第344図、表39・55、PL.158・181)

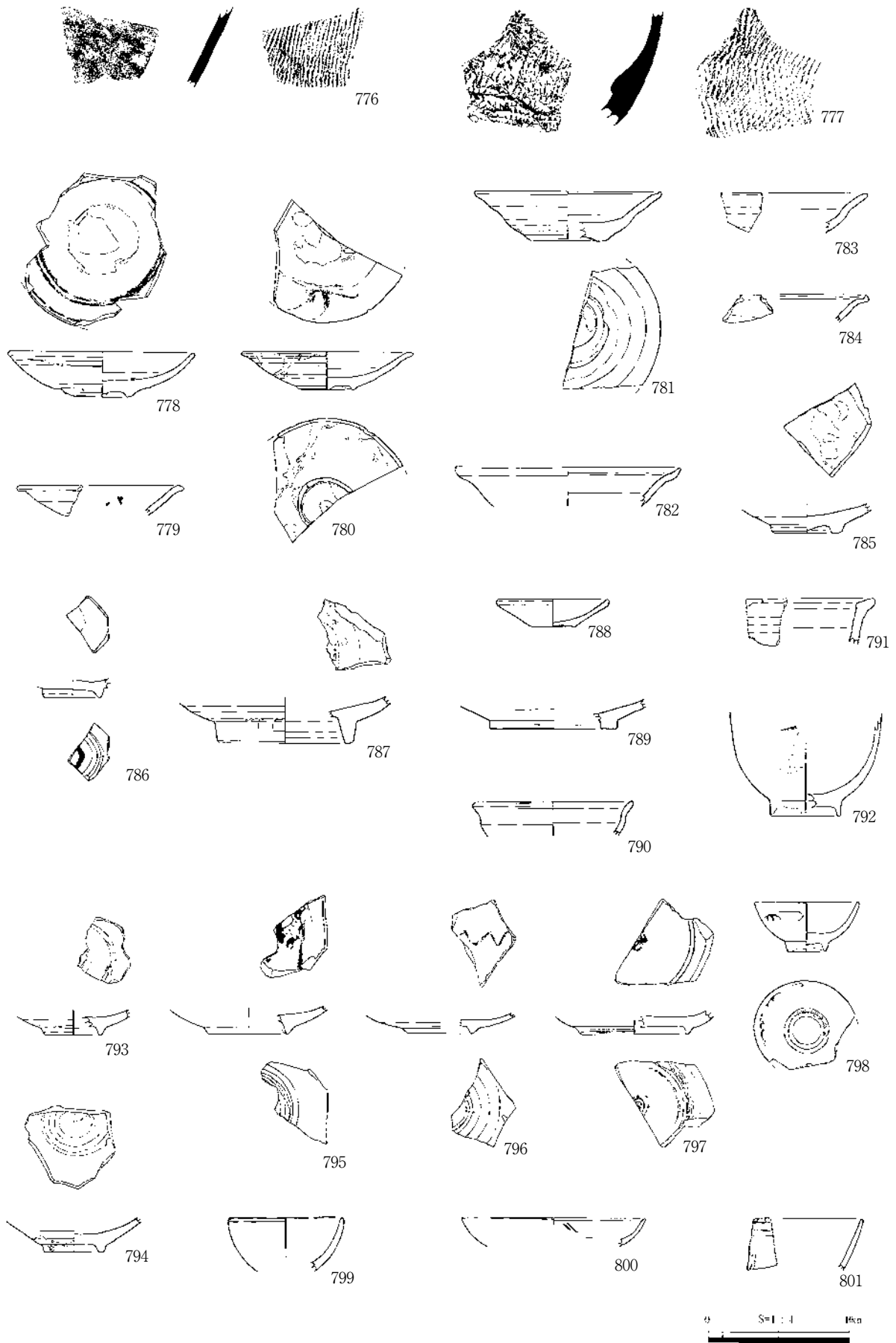
表土からなる第I層からの出土遺物は、近世以降の陶磁器が主である。ここでは陶磁器3点、五輪塔1点を掲載する。773は肥前系(唐津系)陶器の溝縁皿の口縁部片であり、内外面薄い灰釉施釉がみられる。17世紀前半の特徴を示す。774は肥前唐津系陶器の高台皿であり、見込に蛇の目釉剥ぎがなされ、中心部に砂目が付着する。17世紀後半頃と考えられる。775は口縁が直線的に外傾する肥前系(唐津系)陶器の皿。外面体部は銹釉となっている。同じく17世紀後半頃の所産と考えられる。S38は安山岩製の五輪塔水輪である。上下面に浅い窪が造り出されている。

(2) 第II-1層出土遺物 (第345・346図、表39・40・54・55・62、PL.158・159・164・180～182)

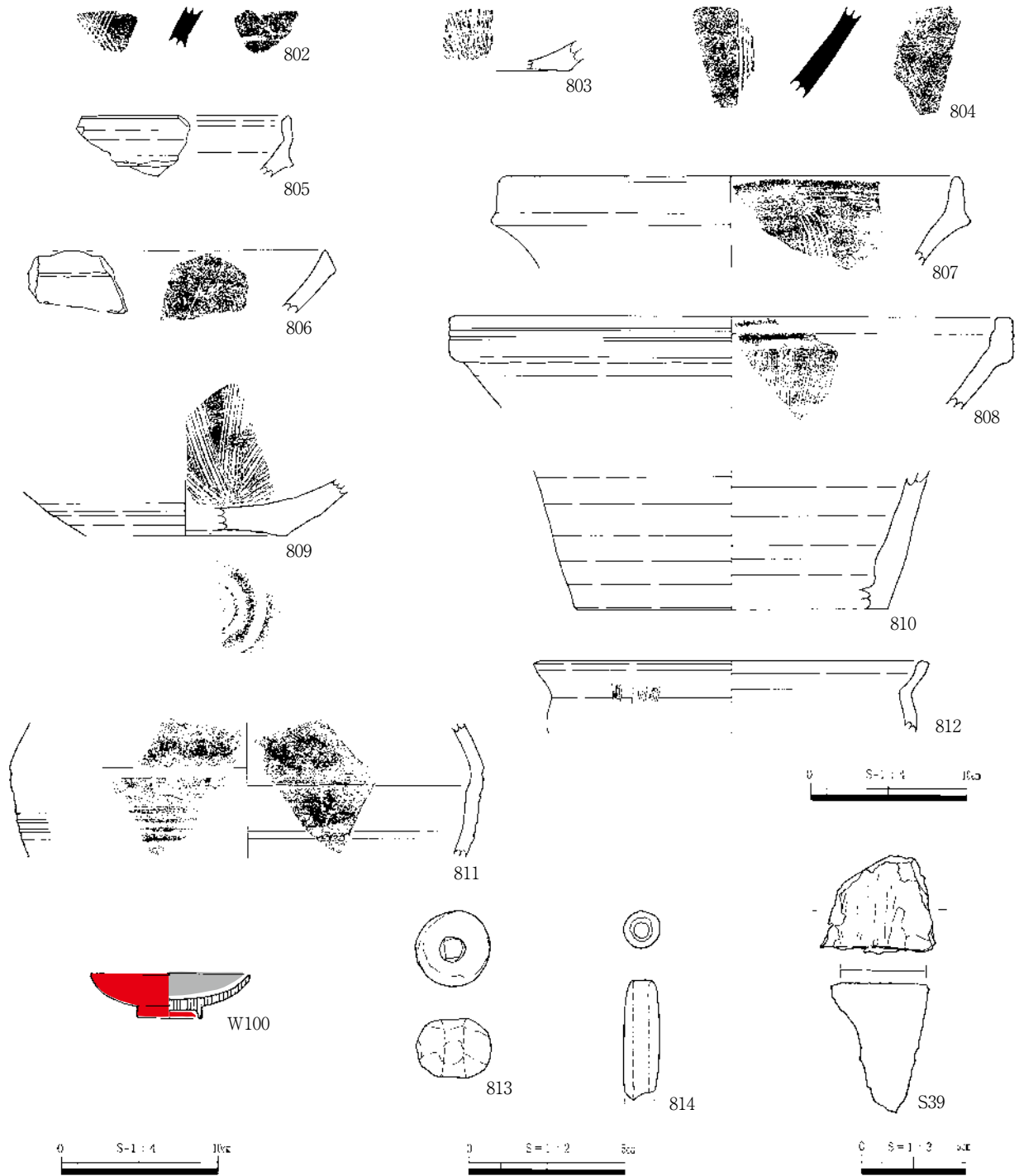
平地部の造成土である第II-1層(II層)の出土遺物は、中世から近世の陶磁器及び瓷器がみられ、16～17世紀の遺物が目立つ。776と777は須恵器甕の体部片である。いずれも外面は平行タタキであるが、内面調整は前者はナデ、後者は車輪状当て具痕が残る。778～780は肥前系(唐津系)陶器の絵唐津皿である。778は見込みに二重圈線がめぐり、環状に砂目が付着する。780は見込みに砂目が付着し、草花文がみられる。いずれも16世紀末頃の特徴を示す。781と782は肥前系(唐津系)陶器の溝縁皿である。781の高台内面には砂目が付着している。783～784は薄い灰色の胎土を持ち、体部下半でやや屈曲する肥前系(唐津系)陶器皿であり、784は溝縁皿である。785は赤い胎土を有し、底部に兜巾痕が観察され



第344図 8区第I層出土遺物



第345図 8区第Ⅱ-1層出土遺物(1)



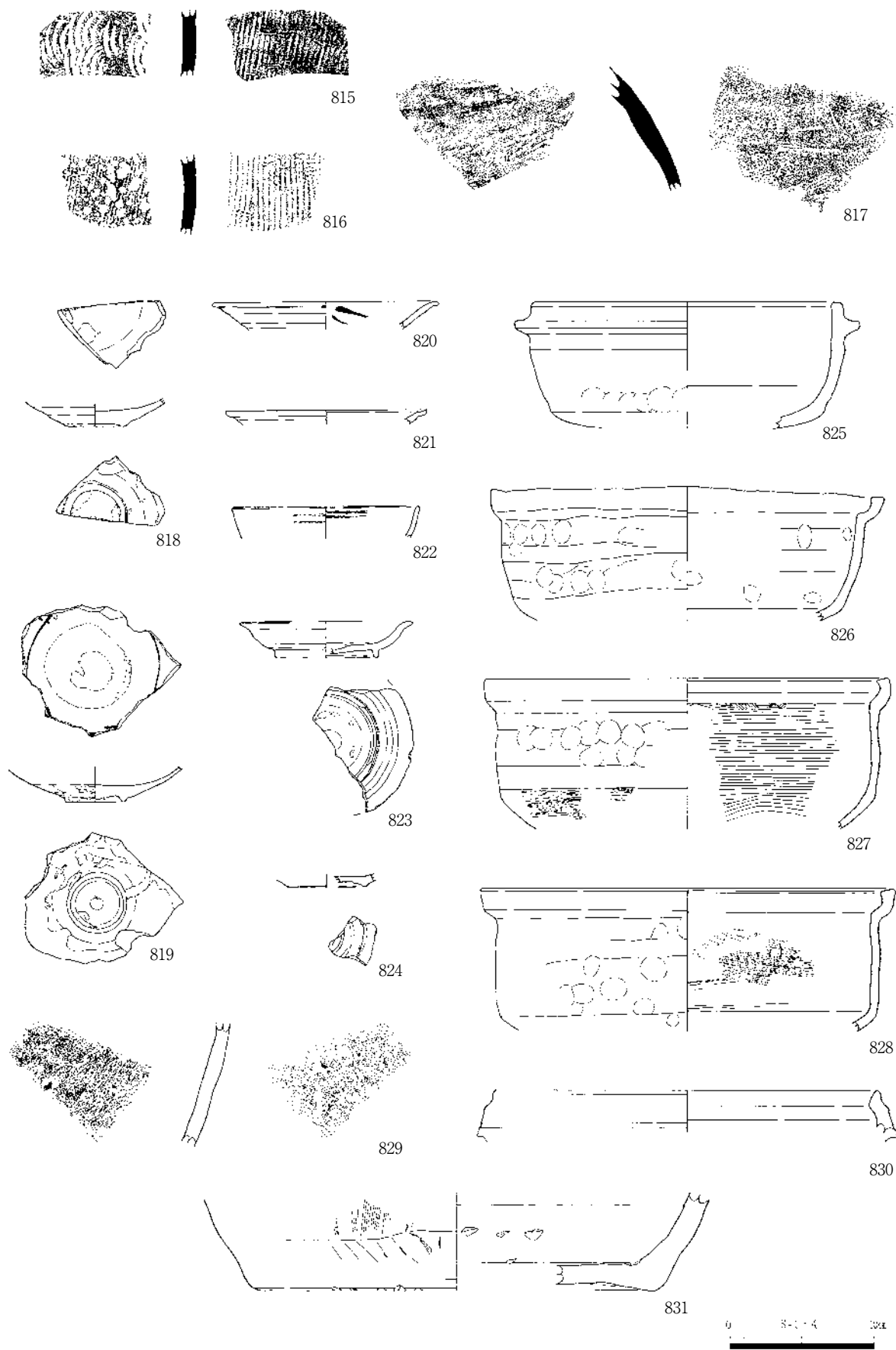
第346図 8区第Ⅱ-1層出土遺物(2)

る肥前系（唐津系）陶器の高台皿である。以上は、17世紀前半の所産と考える。786は灰釉で、見込は蛇の目剥ぎがなされている。肥前系陶器と考えられ18世紀前半か。787は肥前系（唐津系）陶器の大皿である。見込は蛇の目釉剥ぎで高台はやや尖り気味である。17世紀前半頃の特徴を示している。788は在地系陶器の灯明皿で、内面に灰釉施釉がみられる。789は在地系陶器の高台皿で、788ともに19世紀代と考えられる。791は肥前系（須佐唐津）陶器の鉢であり、18世紀前半の所産と指定される。790と792は瀬戸美濃系陶器である。790は瀬戸村段階の灯明皿もしくは小皿と考えられ、16世紀中頃と推定する。792は瀬戸美濃特有のもぐさ土の胎土が観察され、大窯第2段階の丸碗に比定されよう

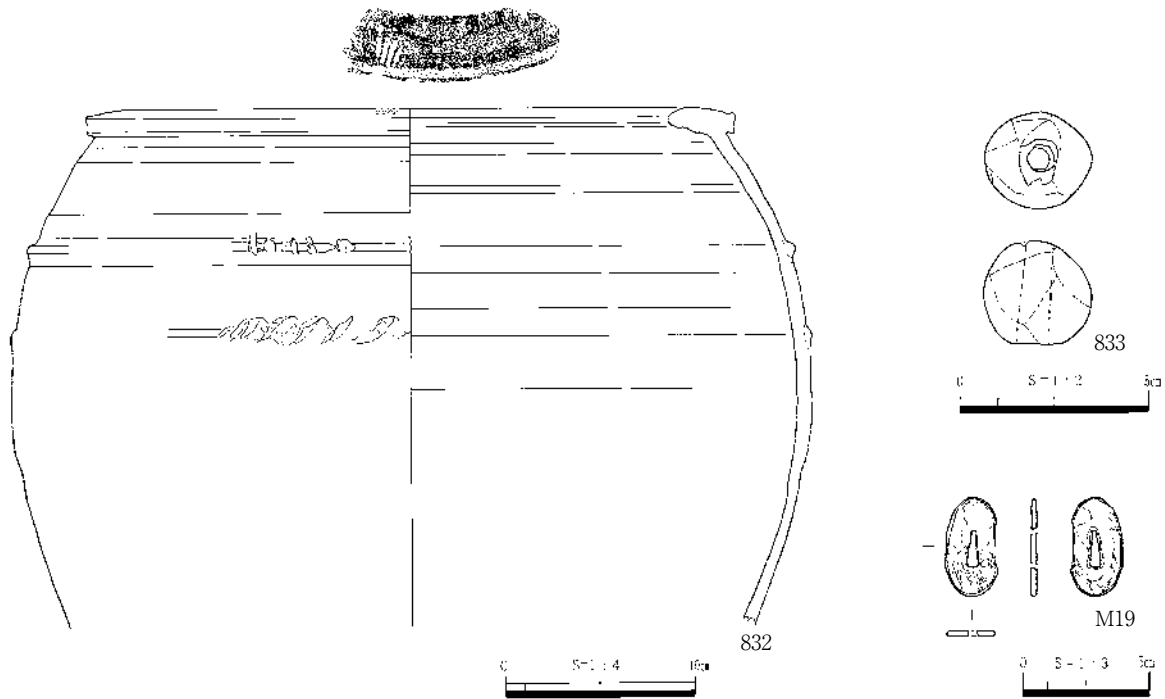
か。16世紀中頃と推測される。793～800は磁器をまとめている。793と794は肥前系の高台皿であり、見込は蛇の目釉剥ぎ、高台付近は露胎である。17世紀代であろう。795は肥前系磁器の染付皿の底部である。同じく17世紀後半頃と考えられる。796は網目文が描かれた肥前系磁器皿、18世紀前半か。797は五弁花の印判手がみられる肥前系磁器皿。801は北部九州系の陶胎染付碗の可能性もある。17世紀後半から18世紀初頭頃と考えられる。799は染付小坏である。表面が被熱しているため、発泡したような釉調である。16世紀後半から17世紀初頭頃の所産と推定される。798は染付の猪口で、笹文が描かれている。800は産地不明の陶胎染付皿。798と800は19世紀代であろう。802～809は播鉢をまとめている。802は瓦質播鉢で在地産と推測する。14～15世紀頃か。803と809は備前焼播鉢の体部から底部片。804は播目3本以上の備前焼の播鉢である。807は口縁部が「く」字状に屈曲し播目は5本である。14世紀中葉から15世紀中頃の特徴を示す。806と808は焼成が甘く胎土が赤味を帯びることを共通としていることから、関西系播鉢であろうか。前者の口縁端部は外剥ぎ状を呈し、後者は体部と口縁部の間で屈曲し口縁内面直下に幅広の凹線がめぐっている。808は17世紀後半頃と考えられる。810は備前焼壺の底部である。811は瓷器系の水屋甕の肩部片である。平行沈線と連続弧線が認められる。812は口縁部が「く」字状に屈曲し、体部がやや張る土師器の鍋である。頸部にわずかにハケメが残るが、全体としてナデが施される。W100は高台付の漆器皿である。外面は全体に赤漆、内面は黒漆が彩色される。813は土玉であり、表面はナデを施し、一部指頭圧痕が残る。814は下端が欠損した土錘であり、表面は丁寧なナデが施される。S39は安山岩製の砥石であり、砥面は1面。

(3) 第Ⅱ-2層出土遺物(第347・348図、表40・41・54・57、PL.158・159・161～164・180)

平地部の造成土である第Ⅱ-2層の出土遺物は、13～15世紀に帰属するものが目立ち、若干16～17世紀の陶磁器が混じる。815と817は須恵器甕の体部片である。815は外面に平行タタキ、内面に青海波状当て具痕が残る。817は外面にハケ後ナデ、内面はナデである。816は外面に細かな格子状タタキ、内面にカキメが残る。焼成も甘く胎土が軟質であることから亀山焼の特徴を示している。818は肥前系(唐津系)陶器の皿底部である。見込に胎土目が付着する。16世紀末頃と考えられる。820は口縁がやや外反する器形を持ち、鉄釉で絵付けされた肥前系(唐津系)陶器である。821は肥前系(唐津系)陶器の溝縁皿の口縁部片である。いずれも17世紀前半の特徴を示す。822は染付碗で呉須が薄く、化粧土が観察される。北部九州系で17世紀後半頃の所産か。819は肥前系磁器の染付皿である。見込に蛇の目釉剥ぎ、その外側に1条の圈線がめぐり。同じく17世紀後半の所産であろう。823と824は瀬戸美濃系陶器皿である。823は緑色施釉の折縁皿で、高台内に砂目が付着する。16世紀中頃と考えられる。824は緑色施釉の折縁皿もしくは丸皿の底部である。825～828は瓦質土器をまとめている。825は体部が角形の器形を呈する羽釜である。15世紀中頃から16世紀代と考えられる。826と827は受け口の鍋で、体部がやや深い。体部外面に輪積痕が残り、成形が粗い。13世紀後半から15世紀中頃に相当する。828は受け口鍋で体部が四角い。15世紀中頃から16世紀代と考えられる。829は越前焼の甕体部片であろう。830は「く」字状に屈曲した口縁に幅広の凹線がめぐり備前焼播鉢である。16世紀後半から17世紀初頭頃か。831は備前焼大甕の底部である。底面近くはヘラナデが認められる。832は体部に最大径をもち、内湾した幅広の折り返し口縁部を有する。体部には突帯がめぐり、指で刻みが加えられている。17世紀代の肥前系の甕であろうか。833は表面が面取りされた土玉。M19は切羽である。



第347図 8区第Ⅱ-2層出土遺物(1)

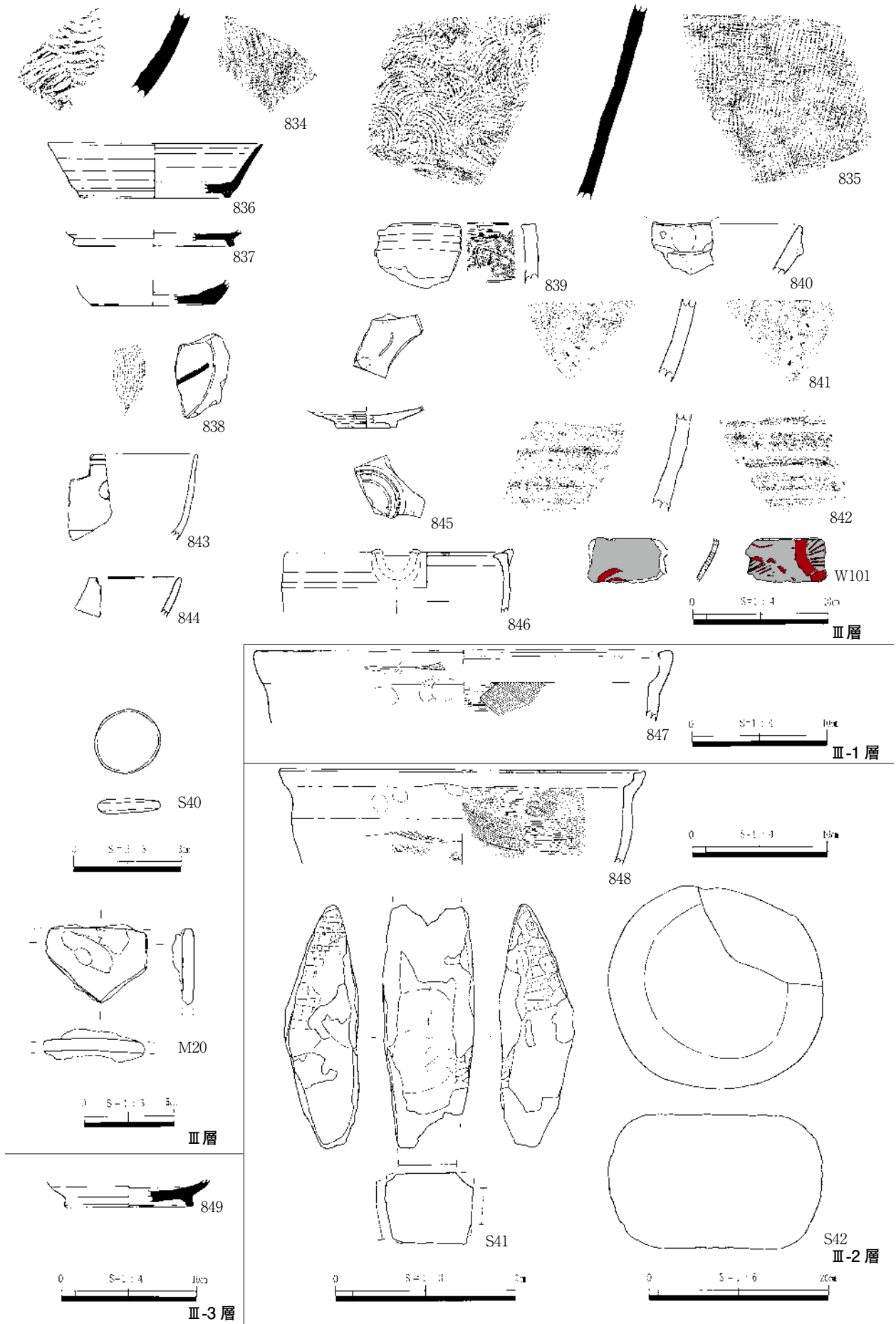


第348図 8区第Ⅱ-2層出土遺物(2)

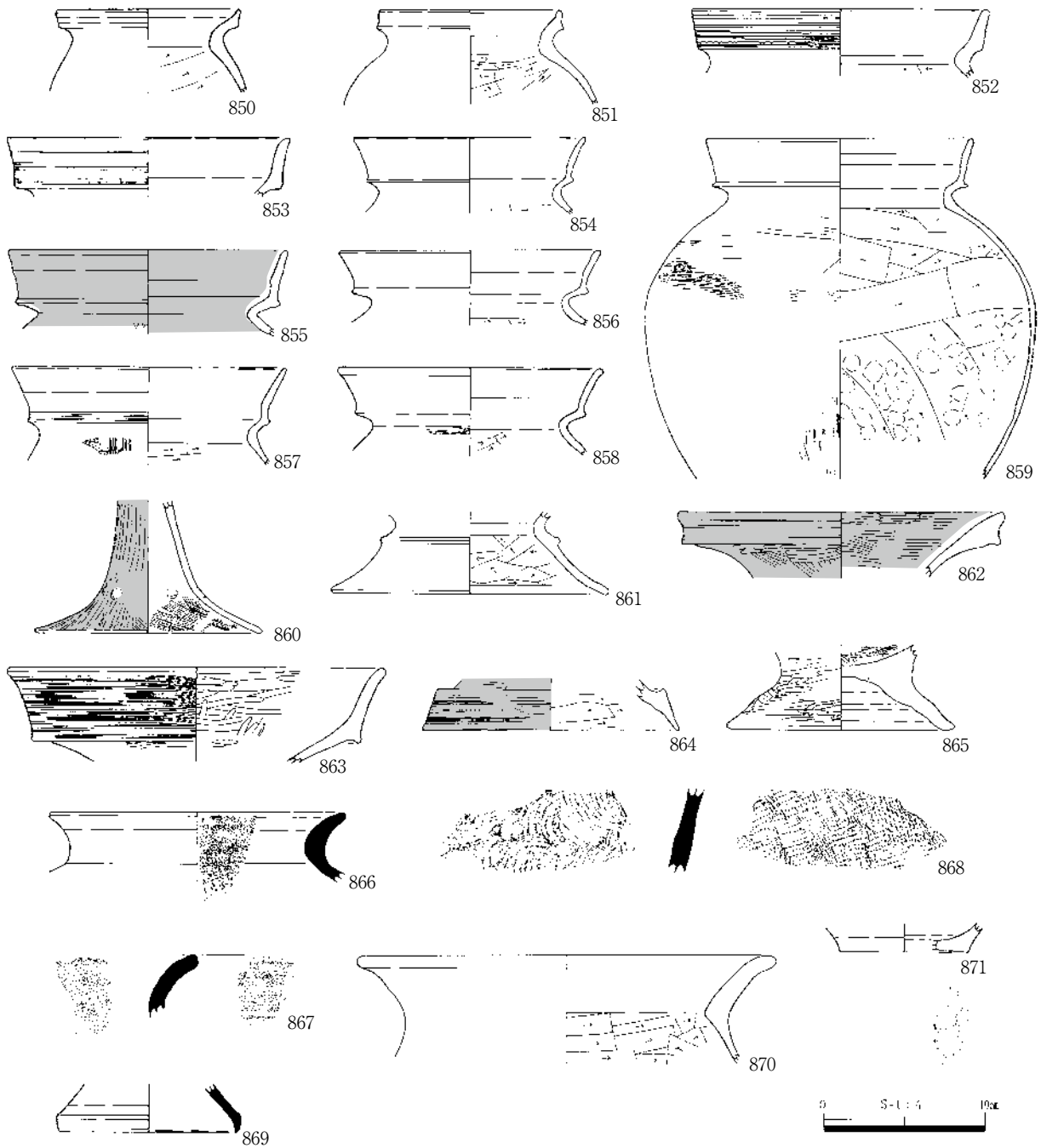
(4) 第Ⅲ・Ⅲ-1～3層出土遺物(第349図、表41・42・55～57・62、PL.159・161～164・180～182)

平地部の造成土である第Ⅲ層は第Ⅲ-1～4層の4層に細分される。第349図では第Ⅲ-1～3層出土遺物及び第Ⅲ-1～4層内での位置付けが不明なものを第Ⅲ層として図示している。遺物は第Ⅱ-2層の内容に近いが、古代の遺物が散見されてくる。

834と835は須恵器甕の体部片である。外面に平行タタキ、内面に青海波状当て具痕が認められる。836と837は須恵器の高台付坏、838は坏の底部である。836は体部から口縁部が外傾して立ち上がる器形で回転ナデである。837も同形であることから、両者は9世紀代に位置付けられよう。838は底部に回転糸切り痕を残し、墨書がみられる。839はやや内傾気味の口縁で、内面にハケを施す瓦質土器の鍋である。840は播鉢の口縁部の片口片で、口縁端部が外剥ぎ状を呈し、指頭圧痕が残る。備前焼の模倣品か。14世紀中頃から15世紀中頃の所産であろう。841と842は備前焼甕の体部片であり、器面に凹凸が多い。844は龍泉窯系の無文の青磁碗。843は肥前系磁器の染付碗。17世紀後半の所産であろう。845は肥前系(唐津系)陶器の皿であり、見込に胎土目が付着する。16世紀末に該当しよう。846は香炉と推定される磁器であるが、産地は不明。W101は漆器碗で、外面は黒漆の地に赤色の文様、内面は赤色漆が塗られている。S40は基石。M20は緩く湾曲した板状鉄製品である。鉄鍋体部片の可能性もある。847と848は瓦質土器の鍋。847は受け口が甘く、体部が直線的に立ち上がる。体部外面にナデや指頭圧痕、内面にハケをの残す。15～16世紀の所産である。848は受け口が甘く、体部が深い。内外面にハケメを残す。13世紀後葉から15世紀中葉に位置付けられようか。849は須恵器高台付坏である。高台内はナデ調整である。8世紀前半に相当しよう。S41は砂岩製の砥石で砥面は3面である。側面には約1cm幅の削り出した面が連続的に観察される。S42は角閃石安山岩製の五輪塔水輪であり、上下面に窪みでなく水平面が成形される。



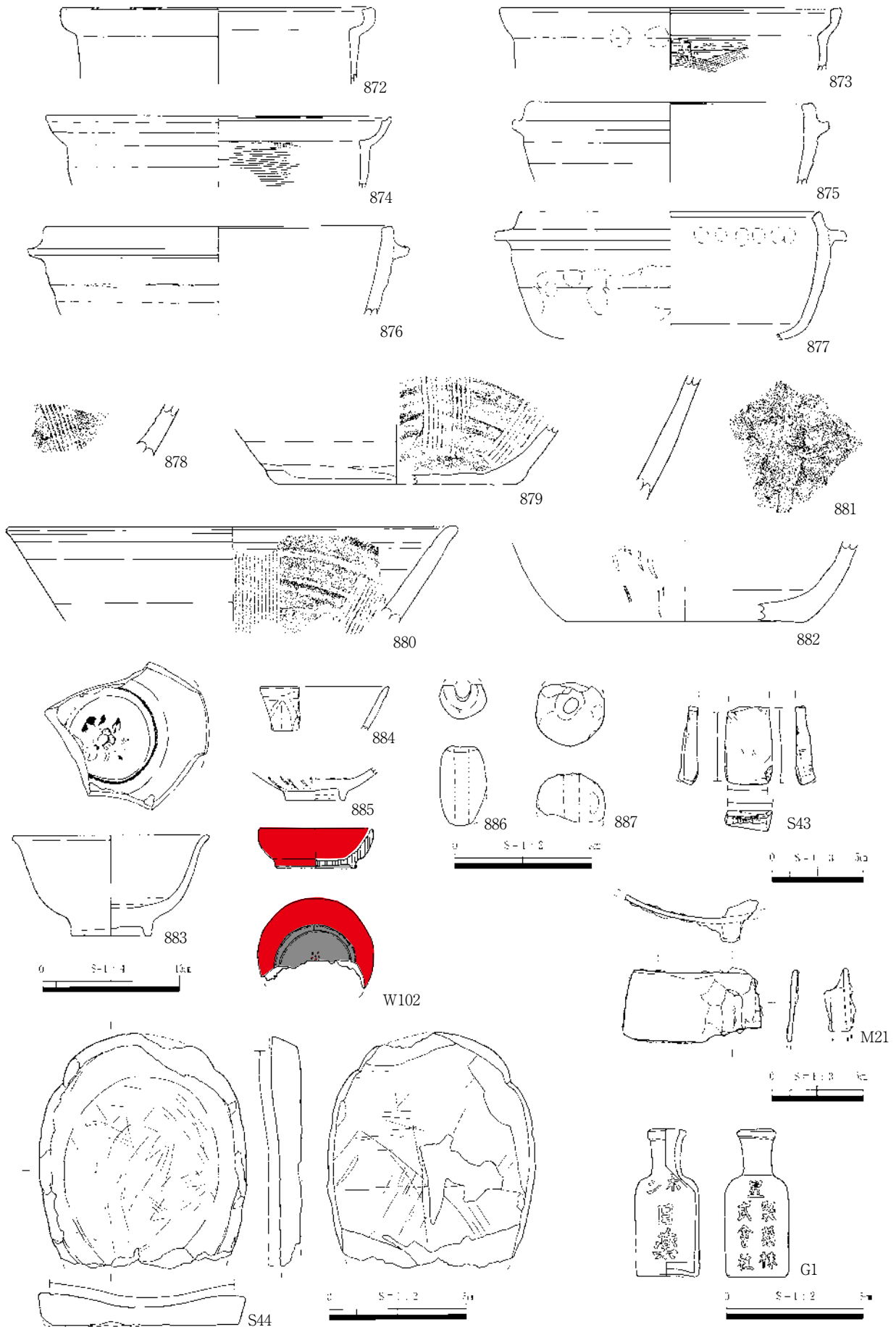
第349図 8区第Ⅲ・Ⅲ-1～3層出土遺物



第350図 8区第Ⅲ-4層出土遺物(1)

(5) 第Ⅲ-4層出土遺物(第350・351図、表42・43・54・56～58、PL.159～165・179～183)

第Ⅲ-4層出土遺物を第350～351図に掲載している。遺物は弥生時代から古代の遺物と中世の遺物がほぼ同量である。850と851は口縁部が外反後短く立ち上がり、ヨコナデにより浅く口縁部が凹む弥生土器の甕である。口縁内面はヨコナデ、肩部はヘラケズリである。弥生時代後期前葉に相当する。852と853は口縁部に多条平行沈線がめぐる弥生時代後期後葉の甕である。854～859は弥生時代終末期の甕をまとめている。口縁部はヨコナデ、肩部と体部外面にハケ、内面にヘラケズリが観察される。口縁端部は丸みを帯び、平坦面を形成していない。860は高坏脚部で外面は縦方向のミガキ、内面はハケが施される。外面は赤色塗彩がなされ円形透かし孔が認められる。861は鼓形器台の脚台部で、外面はヨコナデ、内面はヘラケズリである。862は弥生時代後期前葉の器台受け部であり、口縁



第351図 8区第Ⅲ-4層出土遺物(2)

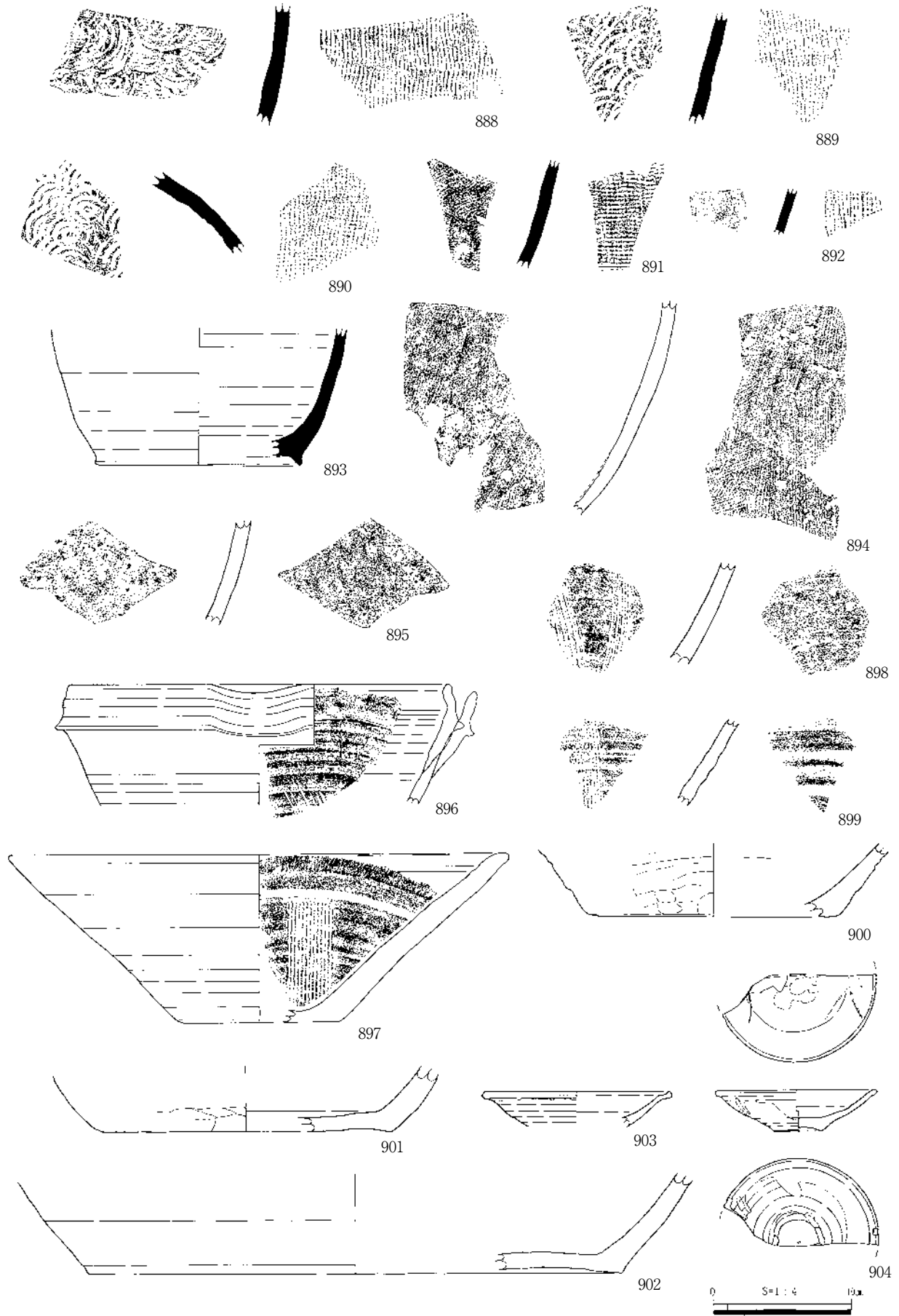
帯に3条の凹線文がめぐる。受け部内面は丁寧なミガキが認められる。863は多条平行沈線がめぐる器台受け部、864は脚台部である。弥生時代後期後葉に該当しよう。865は台付鉢か甕の脚部と考えられ、外面は丁寧なミガキが認められる。866と867は須恵器甕の口縁部である。866は頸部内面に格子状の当て具痕が認められ、平安時代の所産と考えられる。868は須恵器甕の体部片で、外面平行タタキ、内面に青海波状当て具痕が残る。869は須恵器高坏の脚部である。870は口縁部が「く」字状に屈曲する土師器甕、871は底部に回転糸切り痕を残す土師器坏である。870と871は平安時代の所産である。872～874は瓦質土器の鍋、875～877は瓦質土器の羽釜である。872は受け口がしっかりとした造りであり、内外面にナデが施される。873は受け口が甘く、内面にハケメが残る。874は受け口が大きく開き、体部が深い器形となり、内面はハケを残す。いずれも13世紀後半から15世紀中頃と考えられる。875と876は体部が深い器形で、外面は粗いナデ、内面は丁寧なナデが施される。14世紀から15世紀中頃に位置付けられる。877は口縁部が内傾し、体部が浅く底部との境界が明瞭である。内外面に指頭圧痕を多く残す。15～16世紀の所産である。878、879及び881は備前焼の播鉢及び甕の体部片である。878は播目が7本単位で細く、879は播目が10本単位で太い。880は体部から口縁部が直線的に外反する器形で、口縁内面直下に浅い凹線がめぐる。播目は12本単位で、しっかりとしている。15世紀末から16世紀代の所産と推定される。883～885は龍泉窯系の青磁碗である。883は体部が緩やかに立ち上がり、口縁部がやや外反する。見込にスタンプ文が施文される。高台内は鉄釉である。884は口縁部がやや外反し、体部には鎬連弁文が認められる。885も連弁文がみられ、高台内は鉄釉が観察される。884と885は13世紀前半に位置付けられる。882は石製鍋と推測される。石材は滑石ではない。886は土錘、887は土玉で、いずれも1/3ほど欠損している。S43は小型の砥石で砥面は4面確認できる。S44は楕円形の硯で、中央部が浅く窪む。M21は湾曲した薄い鉄板に直交して棒状の突起を有する不明鉄製品である。G 1は目薬瓶である。表面に「星製薬株式会社」、裏面に「ホシ 目薬」と銘がある。調査区北東部のコンクリート擁壁近くで出土していることから、混入であろう。

(6) 第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物 (第352図、表43、PL.158・160・161・163・164)

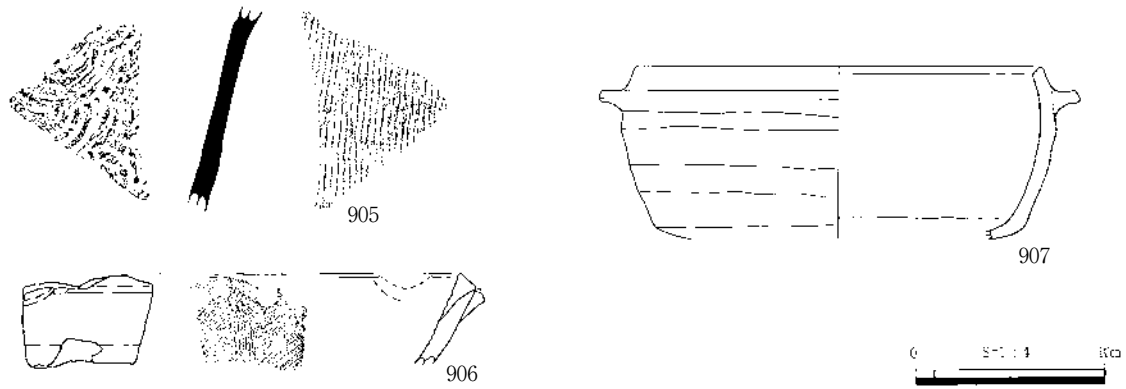
888～892は須恵器甕の体部片である。888～891は外面に平行タタキ、内面は青海波状当て具痕が残る。892の内面はナデである。893は須恵器高台付壺の体部下半である。894は越前焼の甕体部片であろうか。焼成が軟質であり、外面はハケ、内面はナデが施される。895は瓷器系の甕体部片である。胎土中には雲母や小礫を多く含んでいる。896～899は播鉢である。896は備前焼で口縁部が「く」字状に屈曲し、幅広である。6本単位の播目が認められる。15世紀後半から16世紀前半の特徴を示す。899は備前焼播鉢の体部片で8本単位の播目が残る。897と898は越前焼播鉢であり、898の焼成はやや軟質、5本単位の播目がみられる。897は体部から口縁部が直線的に開く器形となっており、内面口縁部直下に凹線がめぐる。播目は12本単位である。15世紀末から16世紀代の特徴を示す。900は瓦質の捏鉢である。体部は粗いナデ、指頭圧痕が残る。901は瓷器系甕の底部。ラミナ状の陶土の特徴がある。902は瓷器系の大甕の底部である。903と904は肥前系陶器である。904は肥前系の絵唐津皿で、16世紀末の特徴を示す。903は唐津系溝縁皿であり、17世紀の所産であろう。

(7) 第Ⅲ～Ⅳ層出土遺物 (第353図、表43、PL.160・162・163)

905は須恵器甕の体部片である。外面は平行タタキ、内面は青海波状当て具痕が残る。906は土師器播鉢である。口縁端部が外剥ぎ状を呈し、播目は6本単位となる。東播磨系の模倣と推測される。13世紀前後の特徴を示す。907は瓦質土器の羽釜である。口縁部が内傾し、体部も浅い。16世紀頃の所



第352図 8区第Ⅱ～Ⅲ層出土遺物



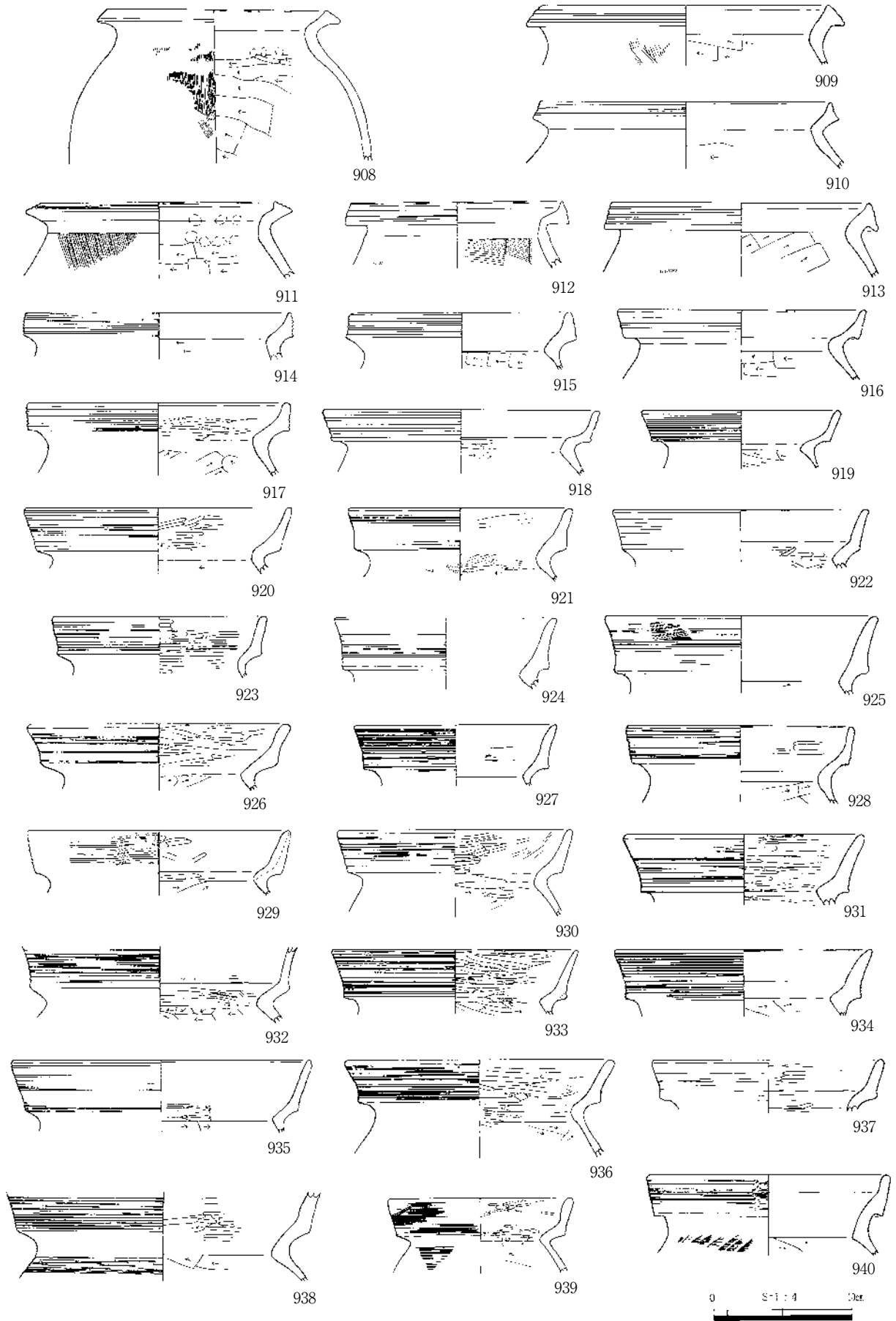
第353図 8区第Ⅲ～Ⅳ層出土遺物

産と考えられる。

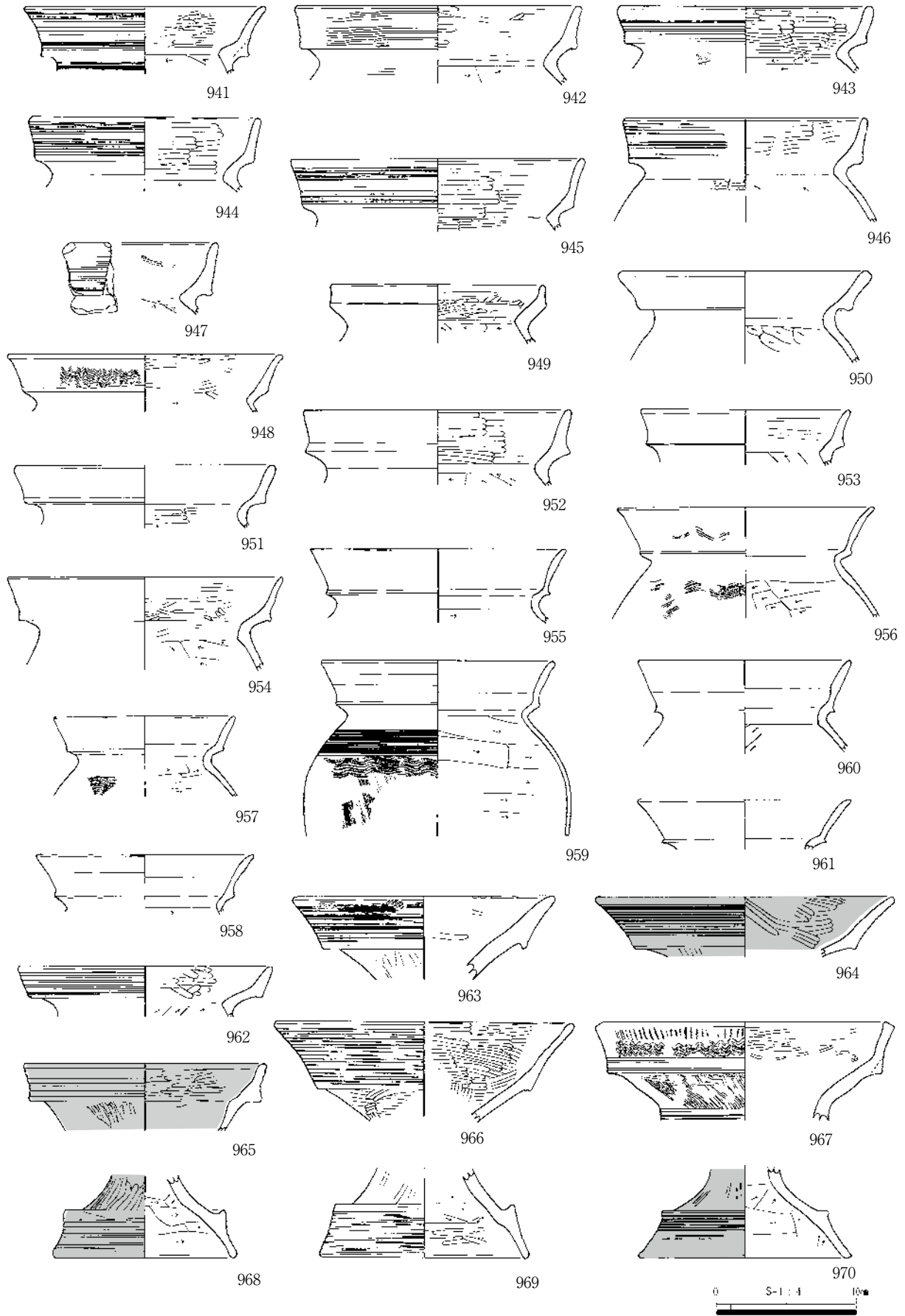
(8) 第Ⅳ-1層出土遺物(第354～356図、表44～46・54、PL.160・166～170・180)

第Ⅳ-1層出土遺物を第354～356図に図示している。このうち第Ⅳ層として取り上げた遺物はⅣ-1層に帰属するため、ここに含めている。遺物は弥生時代後期前葉から終末期にわたってみられるが、後期後葉が主体を占める。

908～961は甕をまとめている。909～911は外反する口縁部の端部が上下に肥厚して面を形成し、3条の凹線文を施している。内面のヘラケズリが頸部直下まで達していることから後期前葉の特徴を示す。912～918は口縁部が上方へ立ち上がり、直立もしくは若干外傾する。口縁には4条前後の平行沈線が施され、口縁内面はヨコナデもしくはミガキ、肩部はヘラケズリである。後期中葉の特徴を示す。919～947は口縁部が外反して幅広となり、平行沈線・多条平行沈線が施文される。921、927及び937のように平行沈線をナデ消したり、925や929のように複数回にわたって施文されるものが認められる。肩部に平行沈線がめぐり938、939、941及び946、貝殻腹縁による押引文を施す940がみられる。口縁内面は横方向にミガキを施すものが多い。950～953は口縁上端及び下端が摘み出され、外反して大きく反ることを特徴としている。口縁部はナデが施され、器壁は厚い。954～961は口縁部上端がさらに摘み出され外反し、器壁が薄くなる。口縁部はヨコナデが多いが、948と956は波状文が施されている。これらは終末期の特徴を示す。962と965は壺であり、口縁部に5～6条の平行沈線がめぐり。後期中葉に位置付けられよう。963、964及び966～970は器台である。受け部及び脚台部に多条平行沈線がめぐることから後期後葉と考える。967は受け部口縁帯に貝殻腹縁による波状文、刺突文及び平行沈線が施文され、脚柱部にも平行沈線がめぐり。971～977は高坏である。971は緩やかに湾曲する器形で、外面はミガキが施される。972は稜をなす屈曲部から外反して立ち上がる口縁部を有する。内外面に丁寧なミガキが施されている。974～976は「ハ」字状の器形を呈し、円形透かし孔が認められる高坏脚部である。973は脚柱部と脚台部に段を有し、縦方向に透かし孔が穿たれ、平行沈線がめぐっている。外面はミガキ、内面はハケが施されている。977は末広りの脚台部であり、外面ヨコナデ、内面ヘラケズリである。978は木の葉状の文様が描かれた絵画土器である。979は注口土器の体部片で、3～4条の沈線間に爪形文、貝殻腹縁による刺突文が施される。980は小型の装飾壺で平行沈線の間へラによる羽状文や同心円状のスタンプ文が描かれている。981と982は蓋である。981はつまみ部が扁平で外側に張り出す。982は筒状のつまみ部をもち、つまみ部中心部と天井



第354図 8区第Ⅳ-1層出土遺物(1)



第355図 8区第IV-1層出土遺物(2)

部が貫通している。983は湾曲した坏部を持つ高坏である。984が須恵器高坏の脚部で、方形透かし孔がみられる。985は土師器播鉢で産地は不明である。986は表面に指頭圧痕が残る土玉。

(9) 第Ⅳ-2層出土遺物(第357図、表46・47・56、PL.169・181)

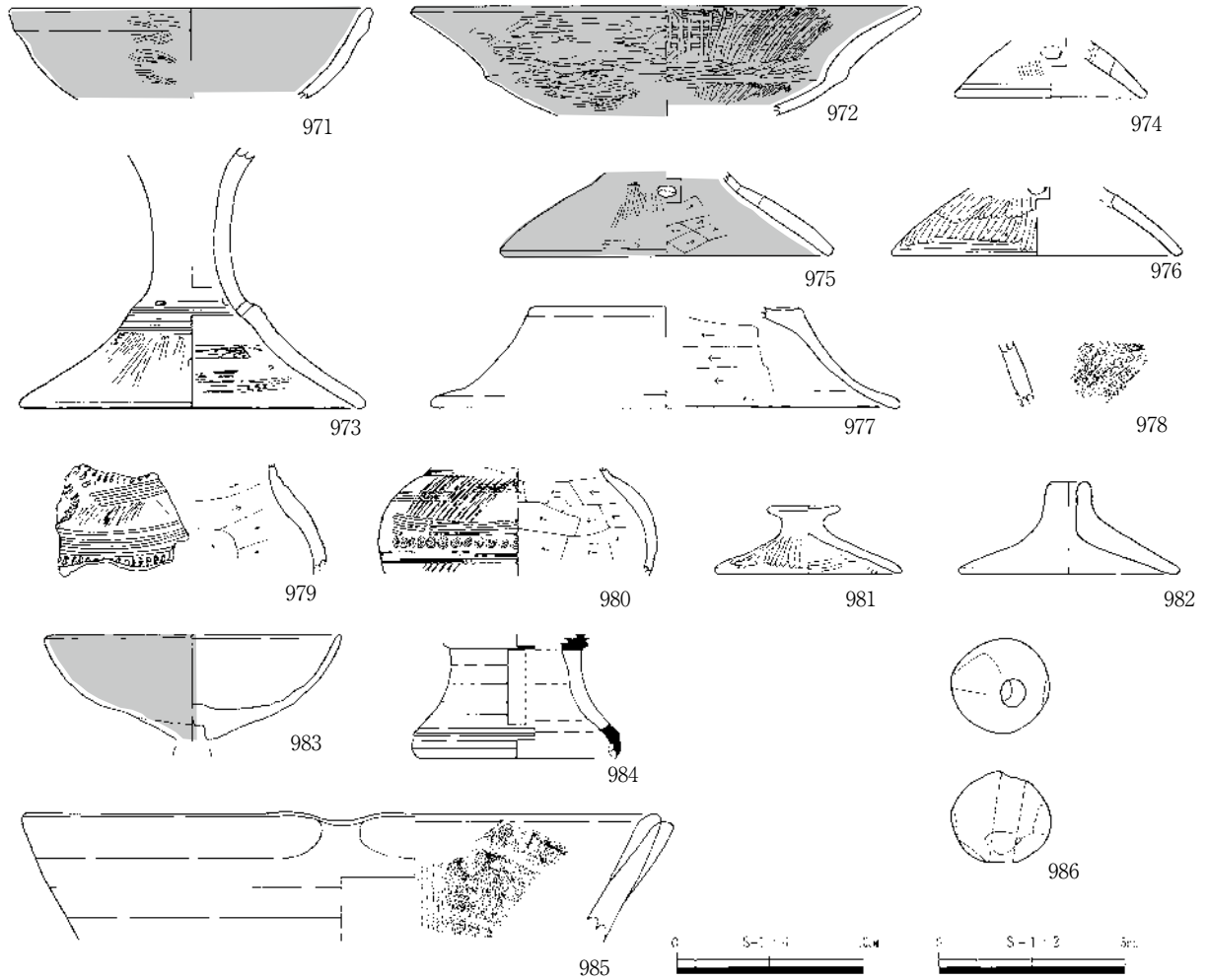
遺物は弥生時代後期中葉から後葉の土器である。987は口縁部が直立気味に甘く外反し、7条の凹線が施文される。988は直立した口縁部をもち、口縁下端が下方へ延びる。4条の凹線文がめぐる。991は外傾した口縁部に5条の平行沈線が施される。990～993は外傾した口縁部に多条平行沈線が施文されている。994は口縁部の平行沈線がナデ消されている。995は頸部が「く」字状に屈曲した単純口縁の壺で、内面は丁寧なミガキを施す。996は口縁から体部にかけて大きく内湾する鉢である。外面は横方向のミガキ、内面はヘラケズリである。S45は軽石製の砥石で、線状痕が残る。

(10) 第Ⅳ～Ⅴ層出土遺物(第358図、表47・54・56、PL.179～181)

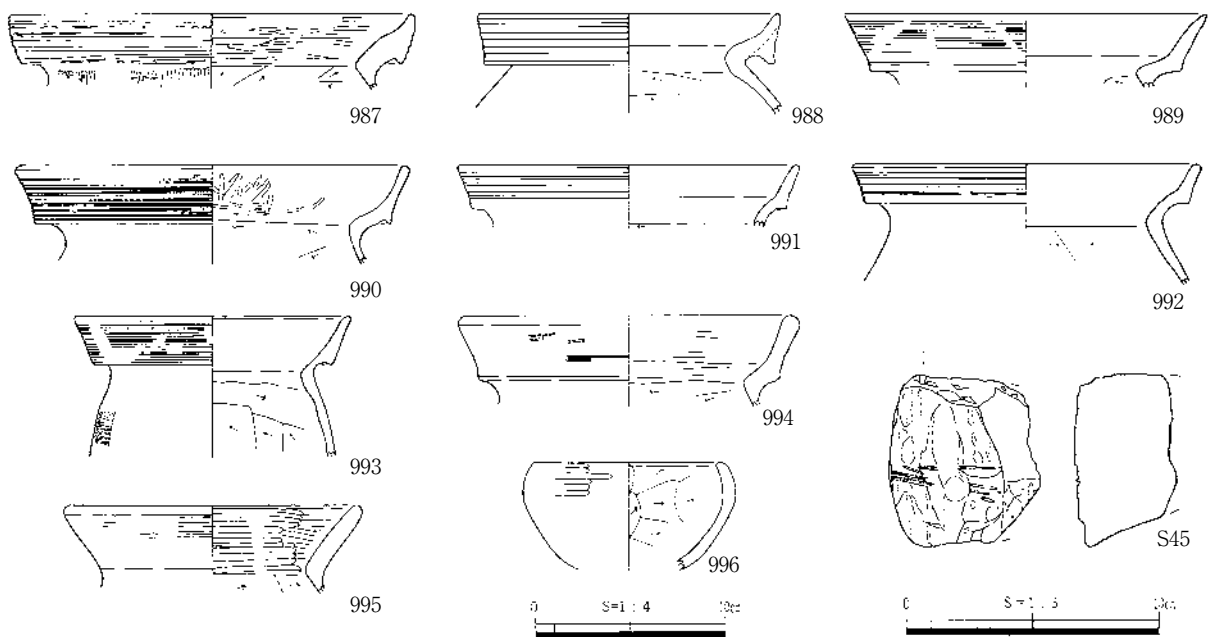
遺物は弥生時代中期後葉から後期後葉の土器と古代の土師器1点を掲載した。997は甕で外反する口縁部の端部が上下に肥厚して面を形成し、3条の凹線文を施している。体部内面上半はハケ後ナデを施す。甕998はやや直立気味の幅狭の口縁部に2条の凹線文がめぐる。体部内面上半はハケ及びナデが施されている。以上は中期後葉の特徴を示す。甕999と1000は直立した口縁部に凹線文と平行沈線が施文される。口縁直下の肩部内面はヘラケズリである。後期中葉に相当しよう。甕1001は拡張した口縁部に多条平行沈線がめぐり、口縁内面から頸部内面にかけて丁寧なミガキが施されている。1002も甕であり口縁部がヨコナデ、内面はミガキである。1003は口縁部に波状文、肩部上半に平行沈線が施文された甕。1004は体部上半に最大径をもち、大きく外反した単純口縁を有する壺。肩部に多条平行沈線と同心円状のスタンプ文が施されている。1005は受け部と脚台部に同心円状のスタンプ文が並列する器台である。脚柱部に7条の平行沈線がめぐり、坏部や脚台部とも縦方向の丁寧なミガキが施されている。1006は器台の脚台部。以上は後期後葉であろう。1007は弥生土器甕もしくは壺の底部で縦方向のハケが施される。須恵器1008は体部が湾曲して立ち上がる平高台付坏であり、底部に回転糸切り痕を残す。1009は表面が細かく面取りされた土玉。S46は楕円礫の片面に凹みを残す安山岩製の凹石である。

(11) 第Ⅴ層出土遺物(第359～367図、表47～54・62、PL.171～178・180・183～186)

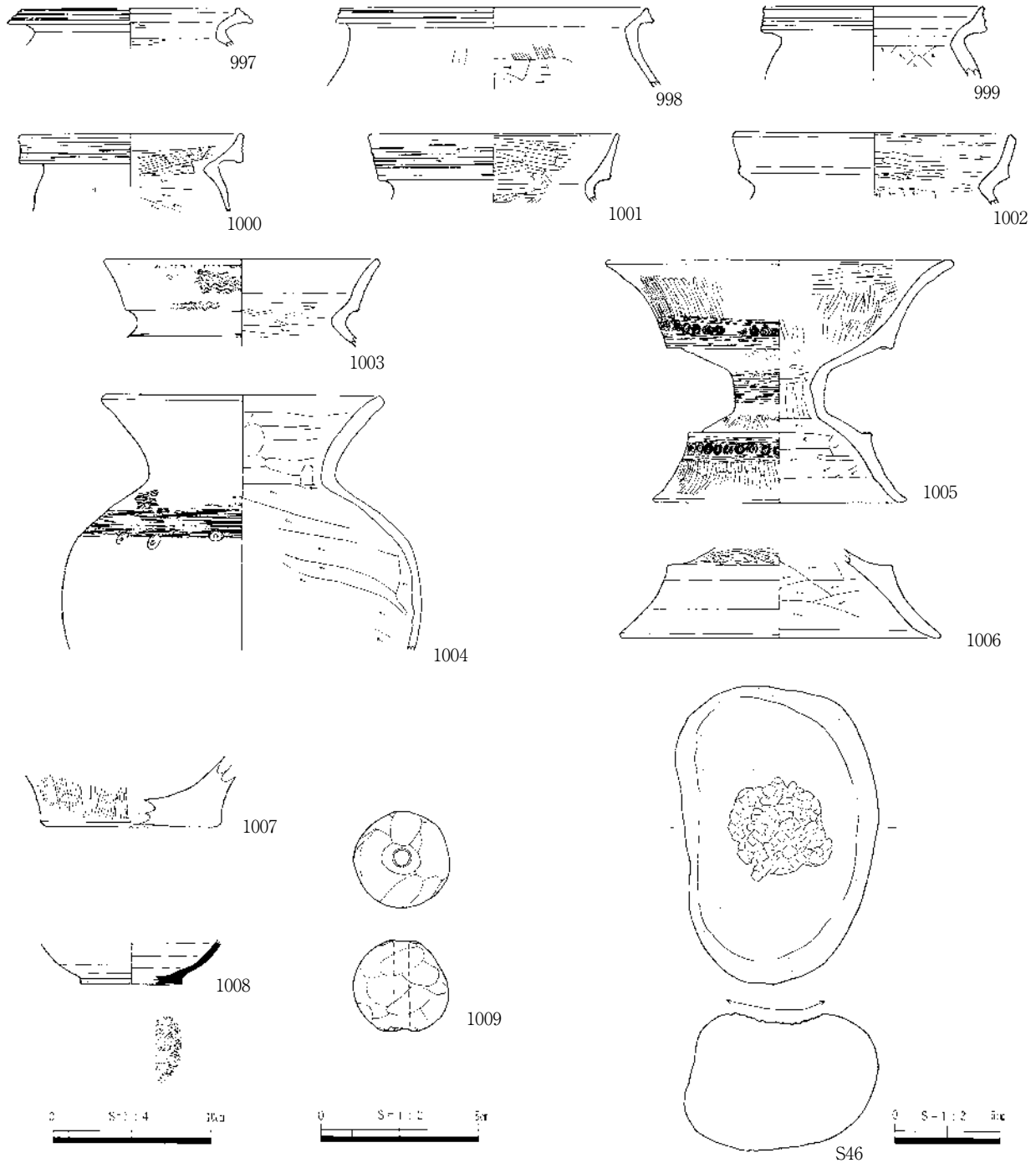
第Ⅴ層出土遺物を第359～367図に掲載している。遺物は弥生時代中期後葉から後期後葉の土器が認められるが、その主体は後期後葉である。1010～1021は中期後葉から後期前葉の甕をまとめている。1010と1011は口頸部が「く」字状に外反し、端部をナデ付けわずかに凹みが生じている。後者は口縁部内面下部にハケ調整を施している。1012、1013及び1015は口縁部が上下に肥厚せず、端部に1～3条の凹線文がめぐる。1012は口頸部内面にハケ調整を残している。1014、1016、1017及び1019～1021は口縁部の端部が上下に肥厚して面を形成し、2～4条の凹線文を施している。このうち1014、1016、1019及び1021は肩部や体部上半にハケやナデ、指頭圧痕が認められる。1016と1020の肩部にはハケ状工具による押引文や刺突文がめぐる。1018と1022は口縁端部がL字状に立ち上がり、前者は浅い凹線文が2条、後者はナデが施される。1018の肩部にはヘラ状工具による刺突文が施されている。1023～1042は口縁端部が上方へ立ち上がり直立、もしくはやや外反することを特徴としている。口縁部には3条以上の凹線文や平行沈線文がめぐり、肩から体部上半にヘラケズリが及ぶ。口縁内面はナデが多く、ミガキは1028や1033なども見られるが、口頸部にハケを施す1031も認められる。1043～1100は口縁部が直立もしくは外反し、上部へ拡張するものをまとめている。口縁部



第356図 8区第IV-1層出土遺物(3)



第357図 8区第IV-2層出土遺物



第358図 8区第Ⅳ～Ⅴ層出土遺物

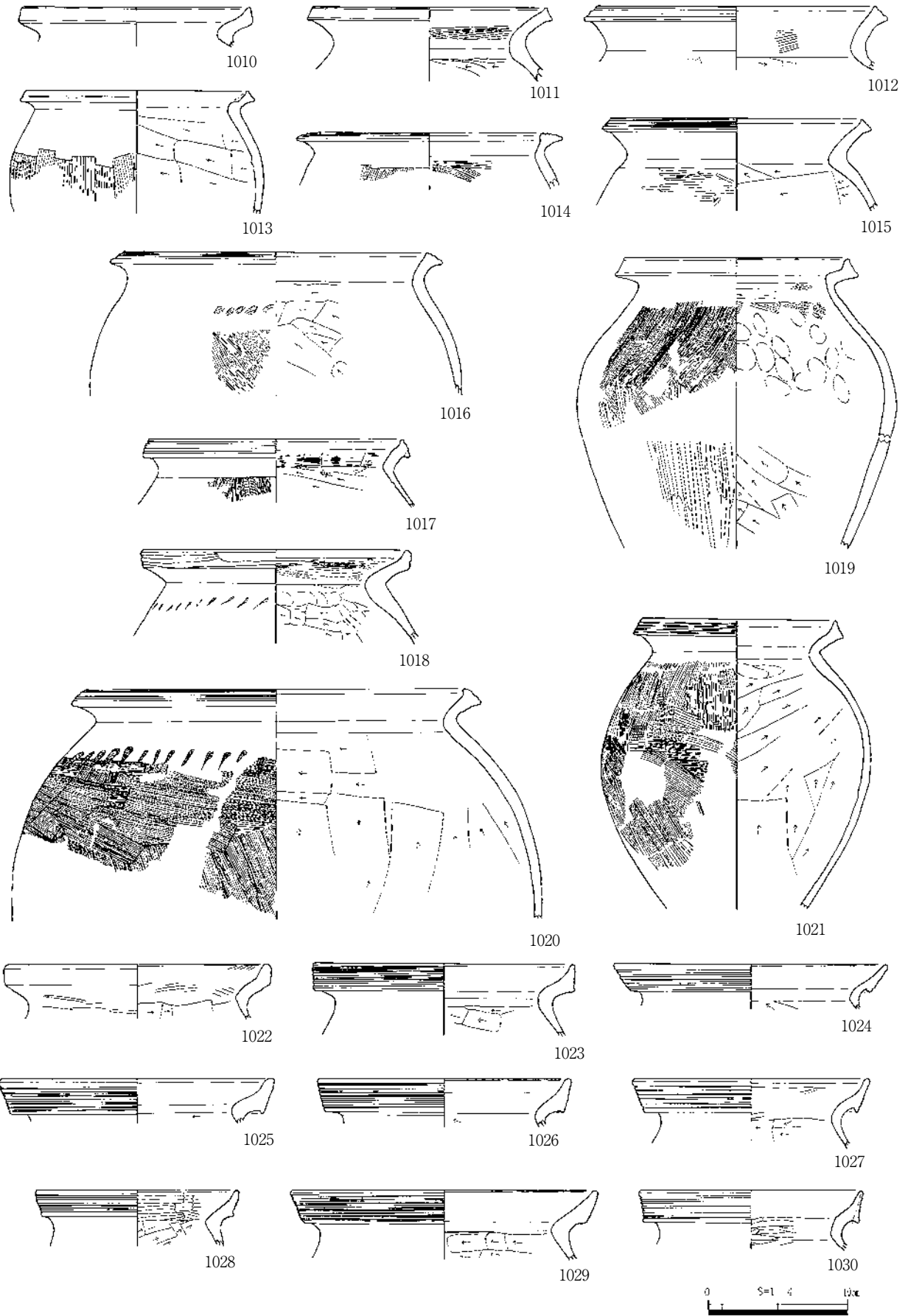
は多条平行沈線文がめぐり、内面には横方向のミガキが施されるものが多い。1044は口縁内面に稲粃圧痕が認められる。焼成前に胎土中に混入したものが、焼成後に弾けて圧痕が露出したものと考えられる。体部肩部に平行沈線や波状文が施される1086～1092、1094及び1099、貝殻腹縁による刺突文や押引文がめぐる1093、1096～1098及び1100が認められる。1102と1103は口縁部に波状文がみられる。1104～1113は口縁部がナデもしくは平行沈線がナデ消されたものである。1114～1116は終末期に位置付けられる甕である。器壁が薄くなり、口縁下端が摘み出されている。1117～1130は壺をまとめている。1117は外反した口縁に端部が拡張しない。頸部にハケがみられる。1118と1119は体部中央に最大径を持つ壺で有り、口縁部は外反した後短く立ち上がる。この境が不明瞭である。体部外面

はハケ後、ミガキが施されている。1120と1122は直立した頸部と口縁部に凹線文が施される。1122は頸部内面にハケ及び指頭圧痕が残る。1121、1123及び1124は外反もしくは直立する口縁に平行沈線や凹線文が施される。1125は口縁部が不明であるが体部に最大径を持つ器形で、体部外面が縦方向のミガキ、内面上半は指頭圧痕が認められる。1127～1130は単純口縁を持つ壺である。いずれも体部に最大径を持ち、1127、1128及び1130はハケを施している。1126と1129は頸部に紐孔と思われるものを持つ。1131～1136は壺もしくは甕の底部で、1131と1132は平底で器壁が厚い。1133～1136は丸底もしくは底径が小さく丸底に近い。1134は壺もしくは甕の台部である。やや上げ底となり、底面も丁寧なミガキがみられる。1137～1146は高坏及び器台である。1137は稜をなす屈曲部から外反して立ち上がる口縁部を有する。1138は屈曲部には明瞭な稜をなさず、外傾して立ち上がる。外面は赤色塗彩がなされる。1140は高坏坏部下半で、内外面丁寧なミガキが施される。1139、1141～1147は高坏もしくは器台の脚裾部である。1139は蓋の可能性も指摘される。1141～1145は脚裾部に数条の凹線文が施され、1143と1145は端部が拡張している。1147は小型の高坏脚部であろうか。裾直上に1条の沈線がめぐり、円形の透かし孔がみられる。1148～1151は小型の壺か甕の台部であろう。1149～1151は脚部から脚裾までやや外反し、端部が丸味を帯びるが、1148は端部がやや直立し、ナデにより端部が窪む。1152～1163は器台である。1152、1153、1155、1156及び1158～1160は受け部・脚台部に多条沈線を持ち、1154と1158はナデ消される。1157は脚柱部で縦方向に丁寧なミガキが施されている。1161と1162は受け部と脚台部に同心円状のスタンプ文がめぐっている。1163は受け部に波状文がめぐる。1164はソロバン玉状の器形をもつ台付鉢で、頸部に紐孔を有する。体部上半は縦方向のミガキを意匠のように丁寧に施す。1165は台付装飾壺の体部であり、羽状文や連続渦文が施文される。1166は壺の把手で、渦文が密に充填される。1167は壺の欠損した把手部であり、体部は丁寧なナデが施されている。1168と1169はミニチュア土器の甕と壺である。外面は粗いナデとヘラ状工具による面取りがなされる。1170～1174は蓋である。1175は甑形土器であり、外面体部はヘラケズリを残す。1176は縄文晩期の突帯文土器であり、断面三角状を呈する突帯部に摘み上げながら、刻みを施している。1177と1178は土玉であり、前者は面取りの痕跡を残している。

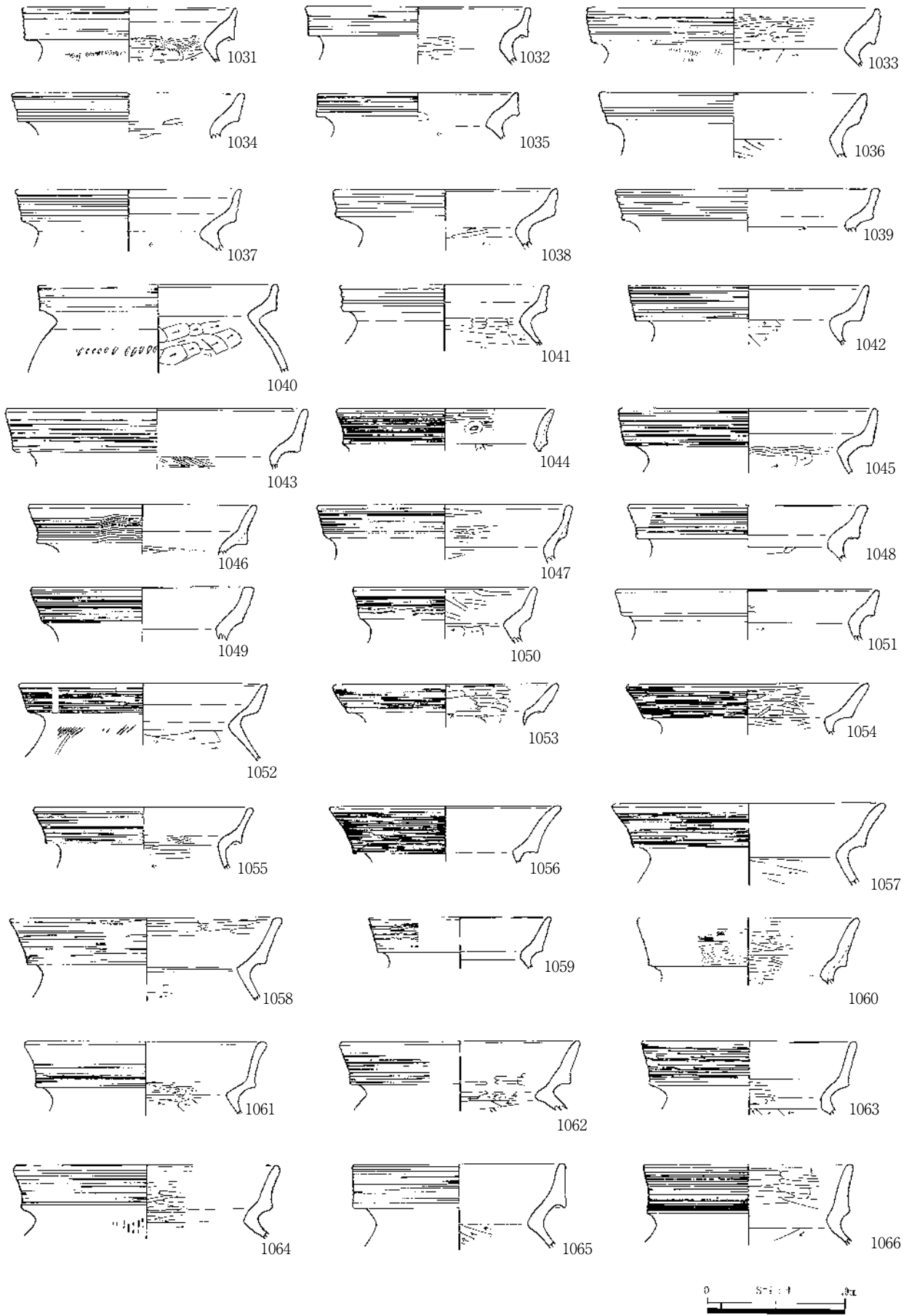
第365～367図は木製品である。W103は縦木取りの桶の未製品である。下方に段を有している。W104も同じく縦木取りで湾曲、下方は欠損している。桶であろうか。W105は厚さ1.2cmの板目材を用いた半円形の板状製品である。桶底板であろうか。W106～109はやや先端が先細りした棒状製品である。W107とW108は表面が部分的に炭化している。W110は柾目材の棒状製品であり、表面に加工痕が残っている。W111～114は角材と板材をまとめている。W111、W113及びW114は表面に加工痕を残し、平坦に仕上げられている。W112は板材で、表面の一部が炭化している。W117、W118及びW124は棒状製品で器種は不明であるが、W117とW118は面取りにより多角形となっている。W117は芯去材、W118は芯持材である。W119とW120は杭であろう。W121は容器等の素材となるものか。上下面に加工痕を残す。W122は柱等の建築部材と考えられる。芯去材である。W123は不明製品で、表面が一部炭化している。

(12) 斜面 (エリア3) 流土出土遺物 (第368図、表53、PL.158～161・164)

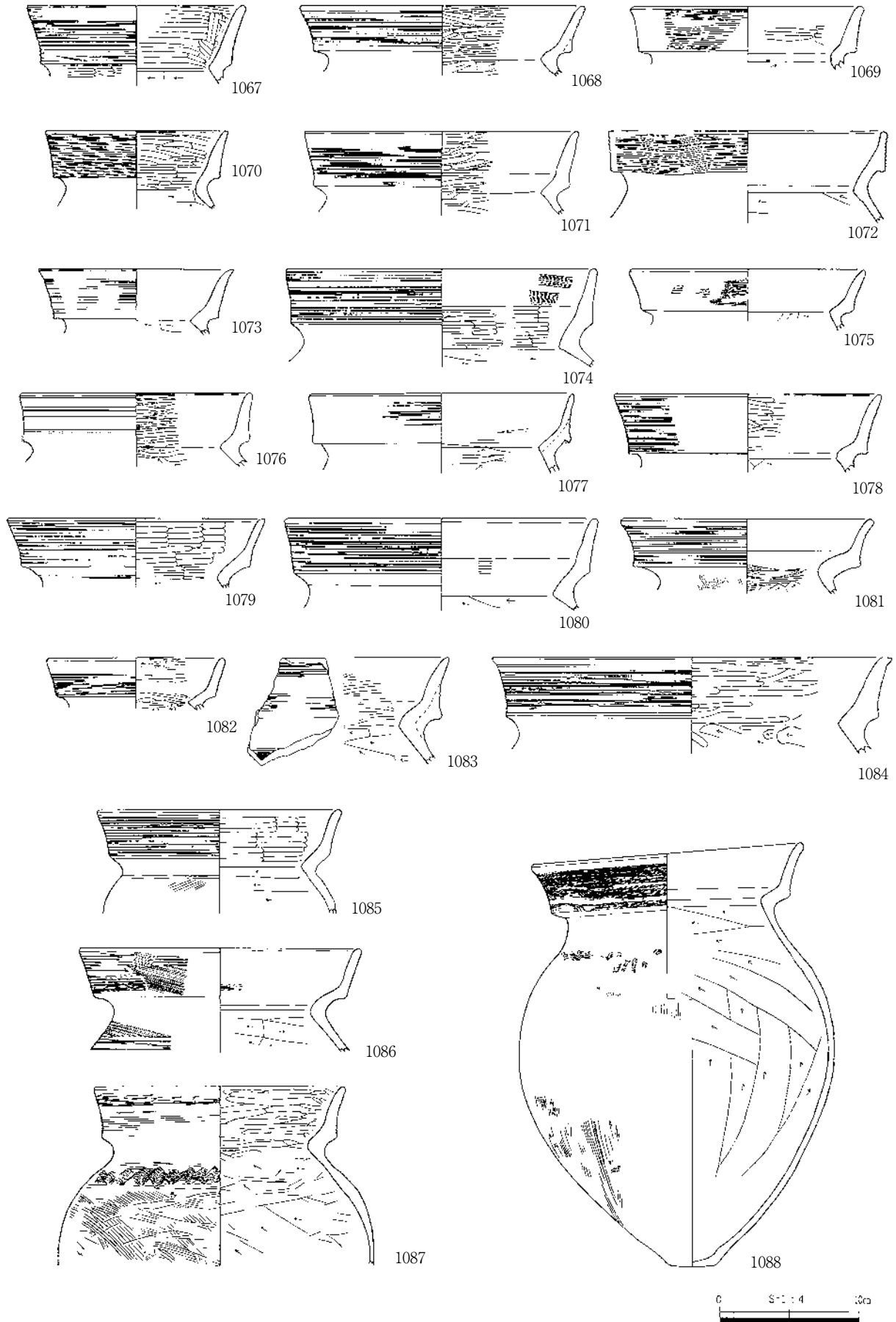
1179～1181は須恵器甕の体部片である。1179と1181の外面は平行タタキ、内面は青海波当て具痕が残る。1180の内面はナデを施している。1182と1184は瓷器系の甕体部片で、焼成は軟質である。外面はハケ、内面はナデを施す。1183は越前焼の甕片であり、内外面鉄釉である。1185は備前焼播鉢で



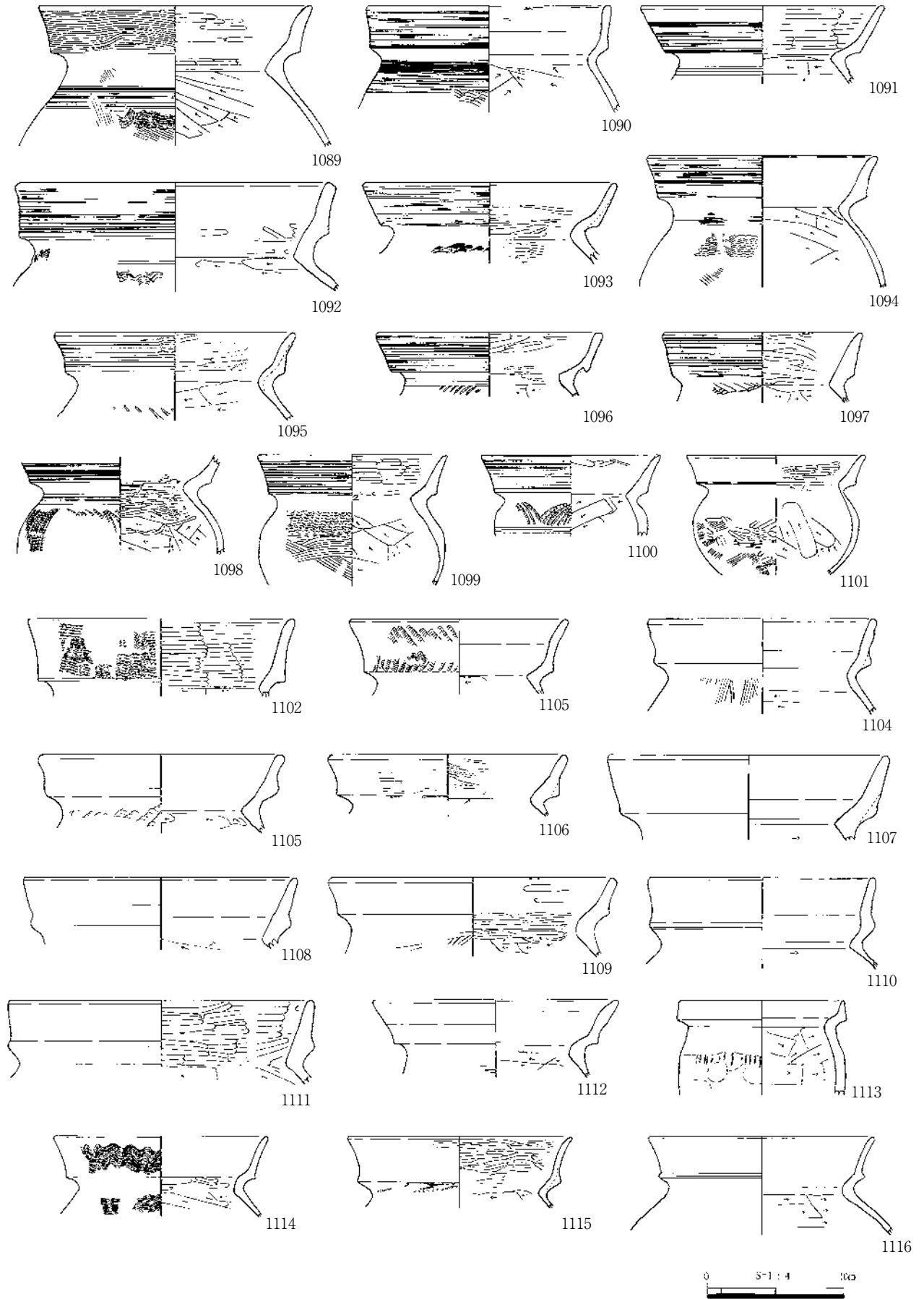
第359図 8区第V層出土遺物(1)



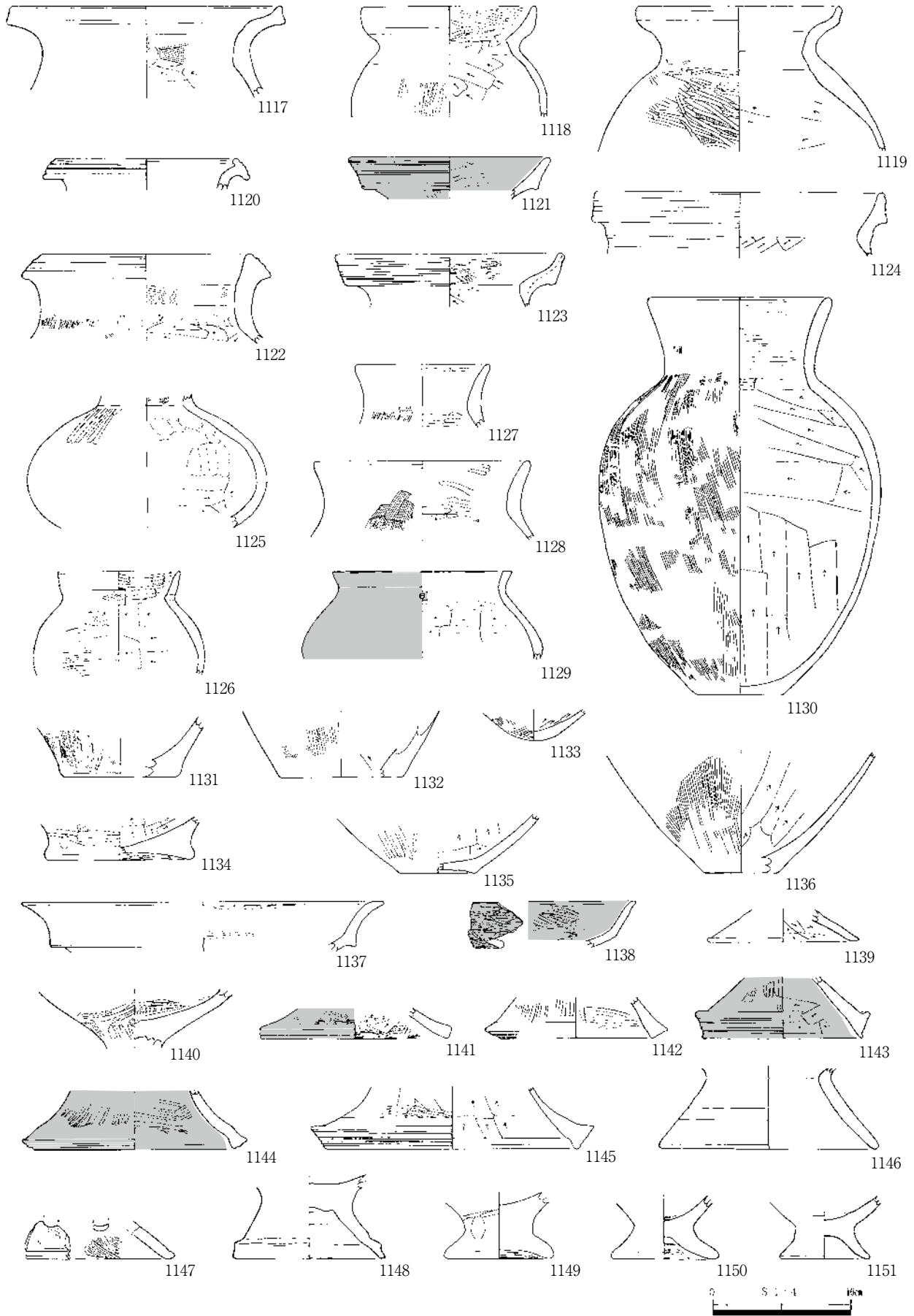
第360図 8区第V層出土遺物(2)



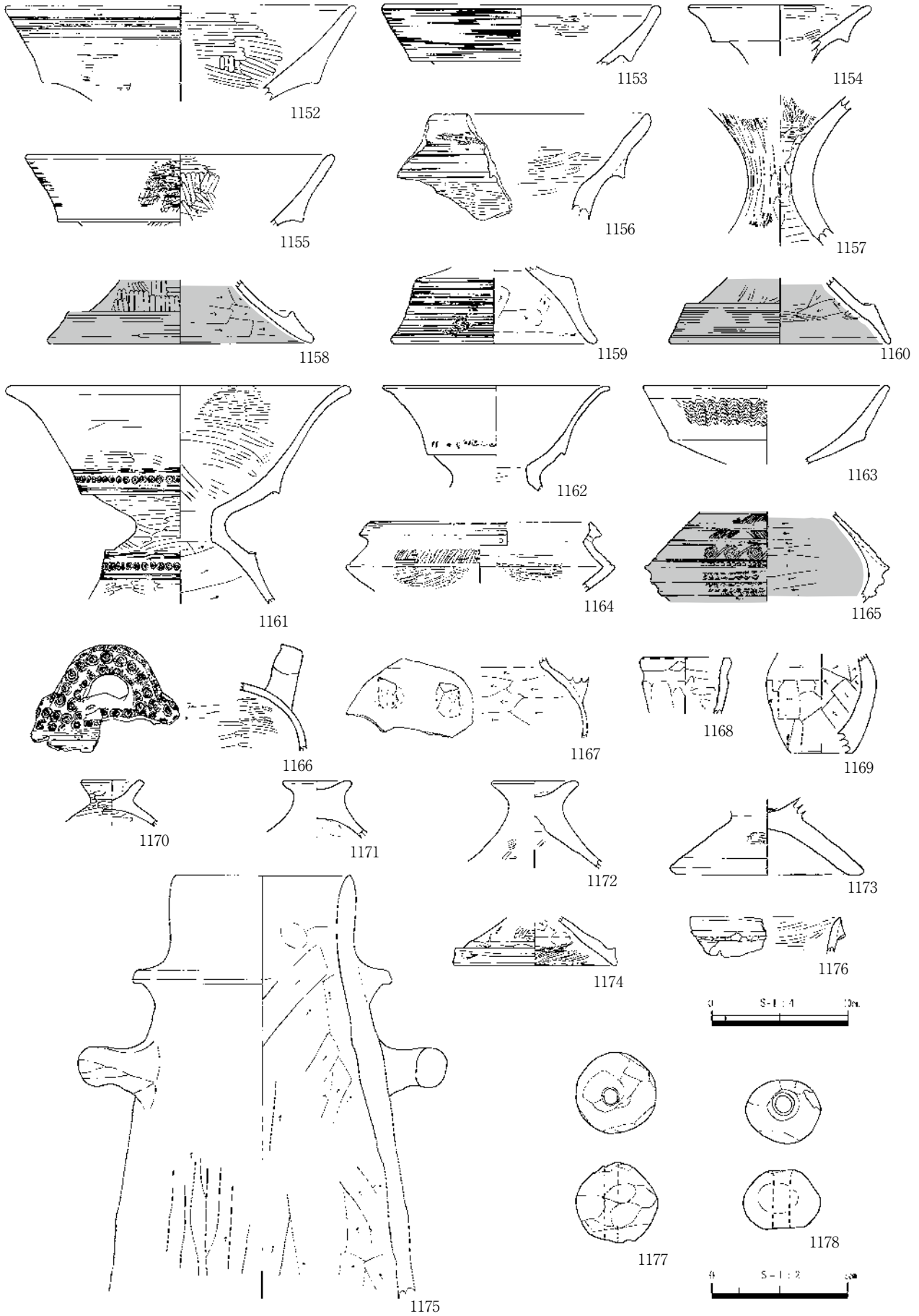
第361図 8区第V層出土遺物(3)



第362図 8区第V層出土遺物(4)



第363図 8区第V層出土遺物(5)



第364図 8区第V層出土遺物(6)

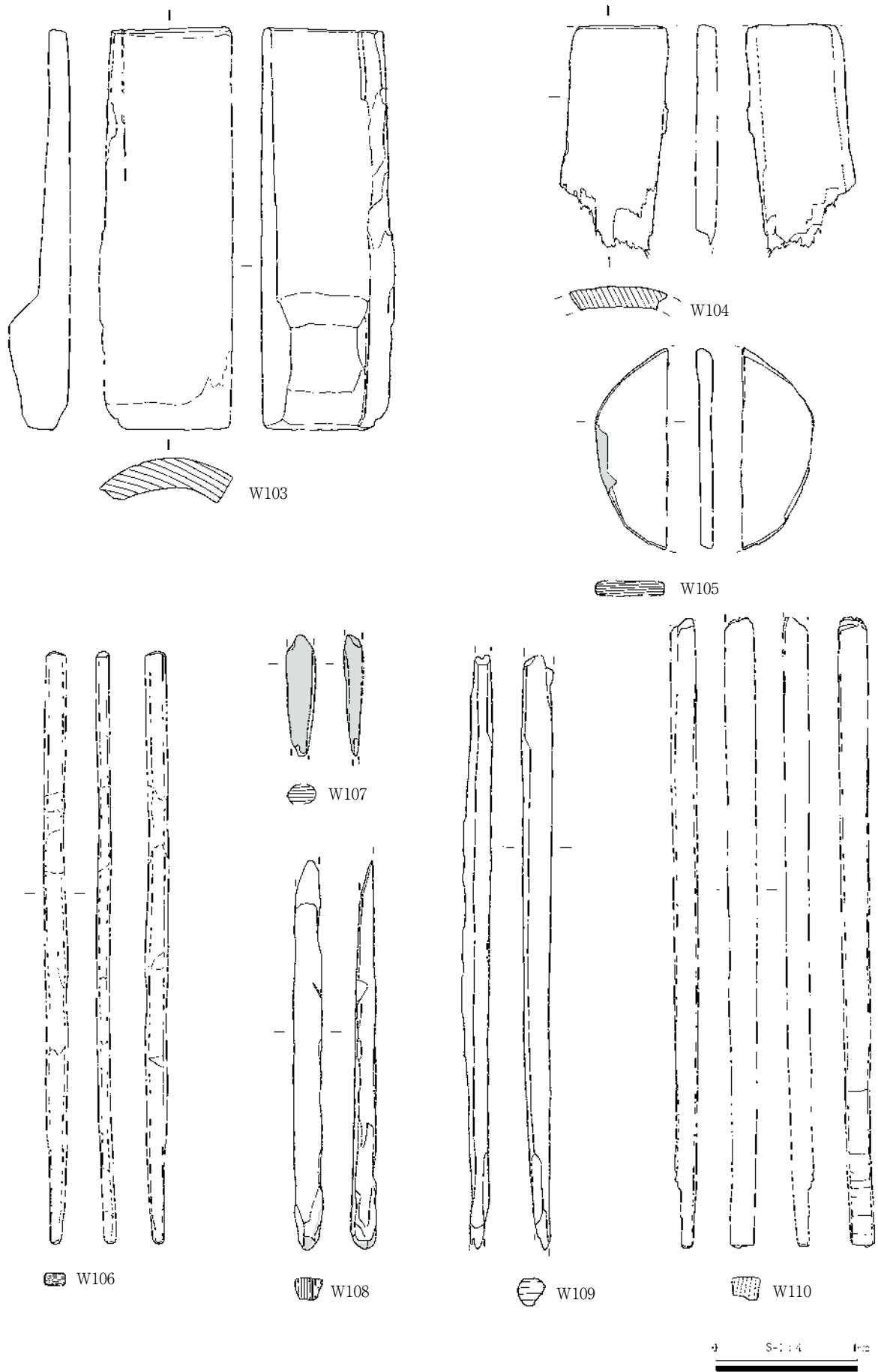
播目の単位がないことから近世の所産であろう。1186は手づくね成形の土師器皿である。底面はやや丸味を帯び、安定しない。17世紀前半の特徴を示す。1187は口縁部が内傾し、口縁端部が肥厚する越前焼の甕である。18世紀前半頃に比定される。1188と1189は肥前系（唐津系）陶器皿である。いずれも17世紀前半の特徴を示す。

(13) 層不明・廃土出土遺物（第369図、表53・54・56、PL.159・160・180・181）

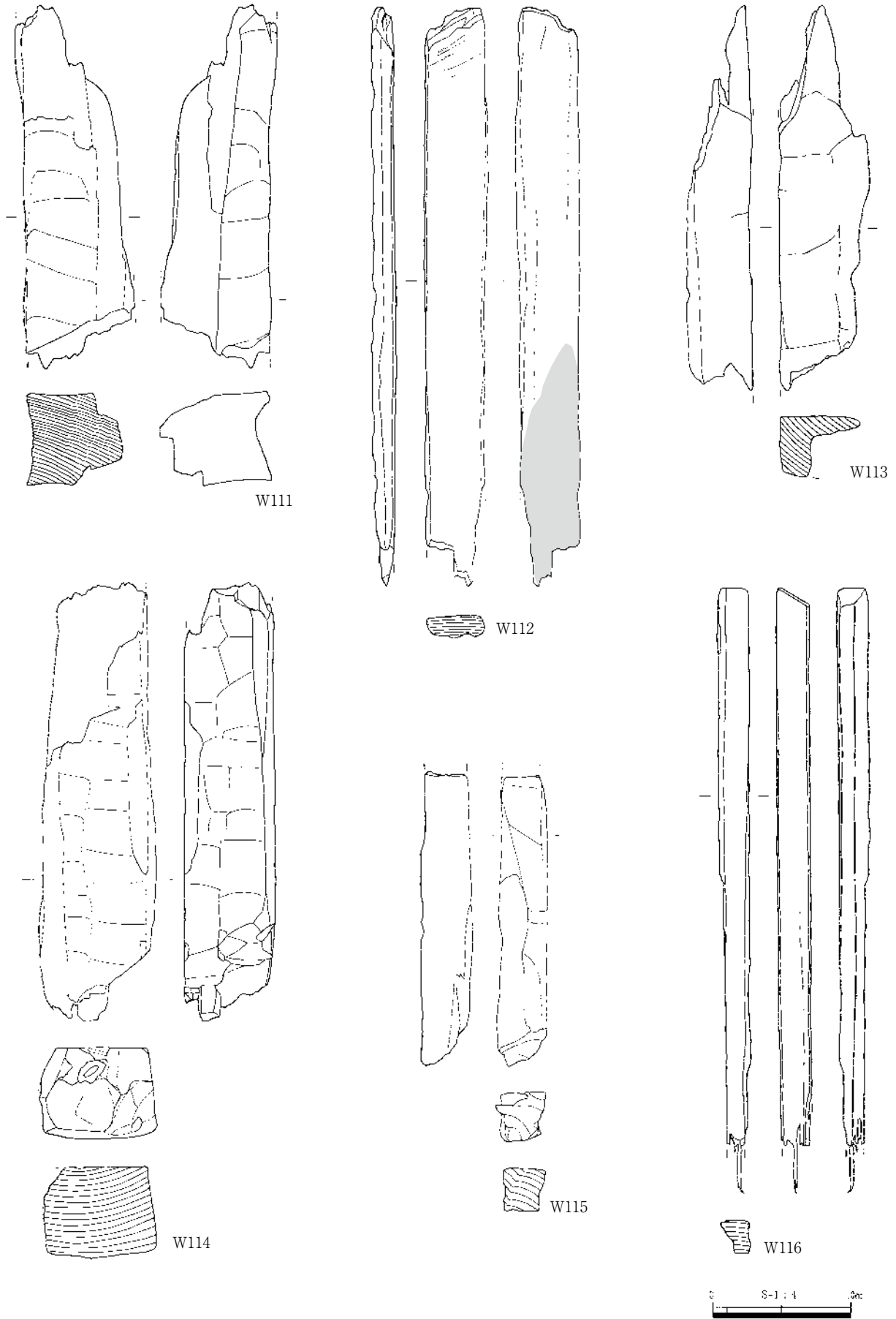
層不明及び廃土から出土した遺物を第369図にまとめている。1190は口縁部が外反し、ナデを施す弥生土器の甕である。口縁端部は丸味を帯び、口縁下端は摘まみ出される。弥生時代終末期の特徴を示す。1191は土師器の高坏であり、体部下方が稜をなして外傾しながら立ち上がる。1192は備前焼播鉢で、「く」字状口縁を呈し、口縁下端が摘まみ出されている。15世紀後半から16世紀前半の特徴を示す。1193は瀬戸美濃系陶器の小皿である。17～18世紀頃の所産である。1194は青白磁の合子蓋で、天井部に双鳥文が確認できる。11世紀後半から12世紀前半の所産であろう。1195は卵形を呈した土錘であり、半分は欠損している。表面は粗いナデを施す。S47は角閃石安山岩製の五輪塔空風輪。空輪天井は丸味を帯び、風輪下端に突出部を造り出している。S48は多孔質安山岩製の火輪で四隅は削り出しによって反っている。頂部は風輪を組み合わせるための凹みがみられる。

(14) 攪乱出土遺物（第370図、表53・54・56・62、PL.159・180・183）

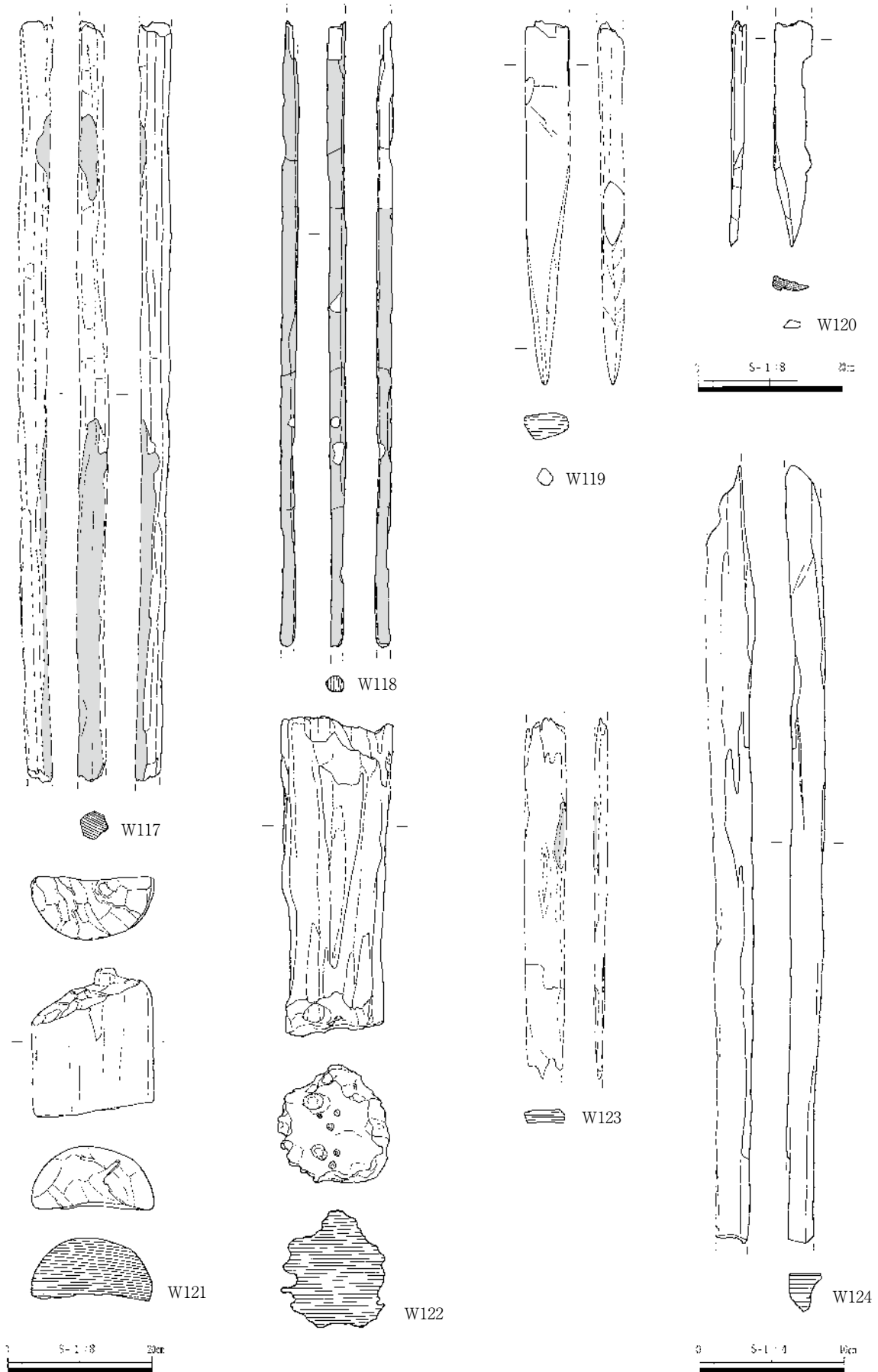
攪乱から出土した遺物を第370図に掲載している。1196は土師器坏であり、底部に回転糸切り痕を残す。在地産と考えられ、17世紀後半頃に比定される。1197は瓦質土器鍋で、受け口部が浅くね体部は深い。内外面ナデを施す。15～16世紀頃の特徴を示す。1198と1199は肥前系陶器皿である。1198は内外面灰釉を施しており、17世紀前半に相当しよう。1199は高台付の片口皿で、高台内に兜巾がみられる。17世紀後半頃か。1200は土玉であり、表面にわずかに指頭圧痕が残る。S49はアプライト製の砥石である、砥面は4面である。S50は撥形の砥石でアプライト製である。上部は欠損しているが、概ね残りが良く4面砥面が観察される。W125は桶の蓋板。W126は連歯下駄である。



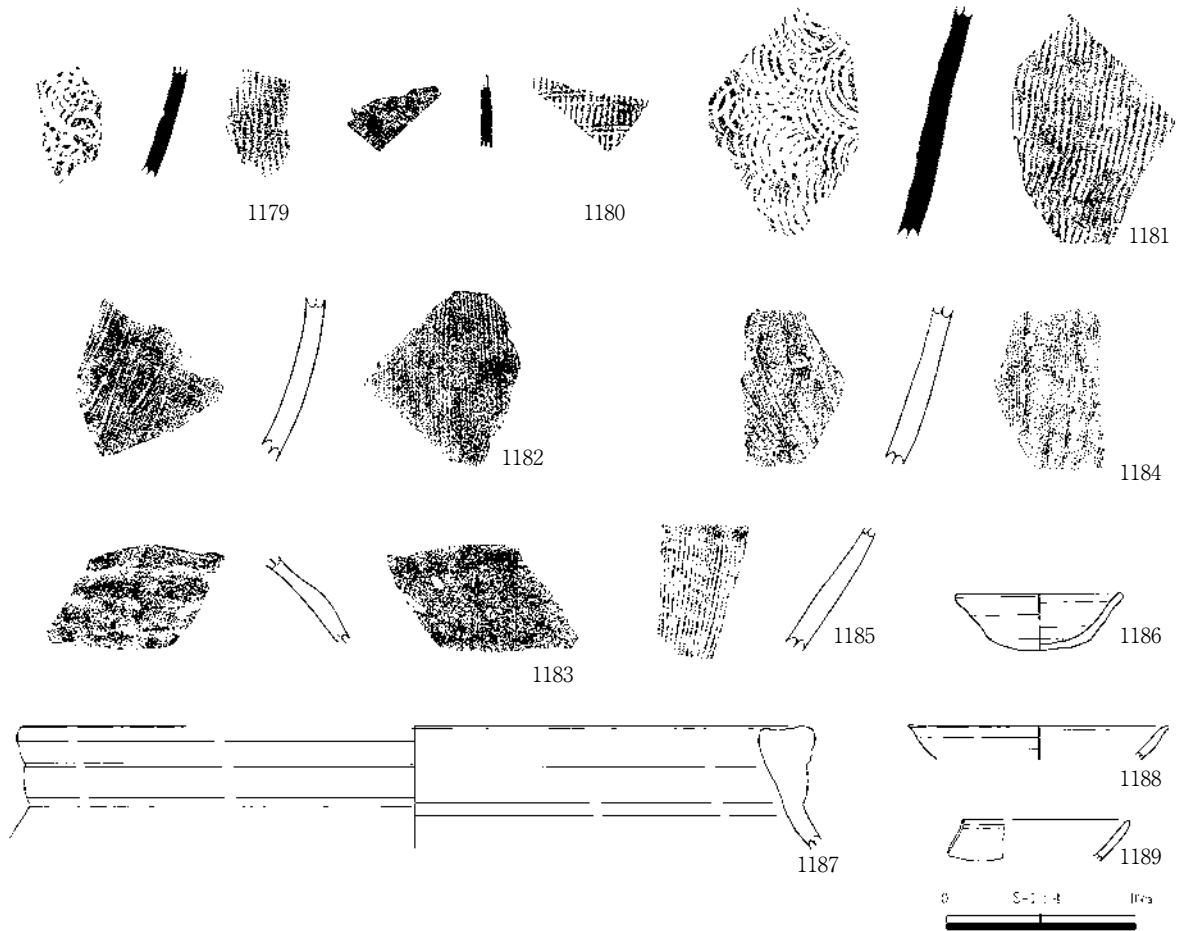
第365図 8区第V層出土遺物(7)



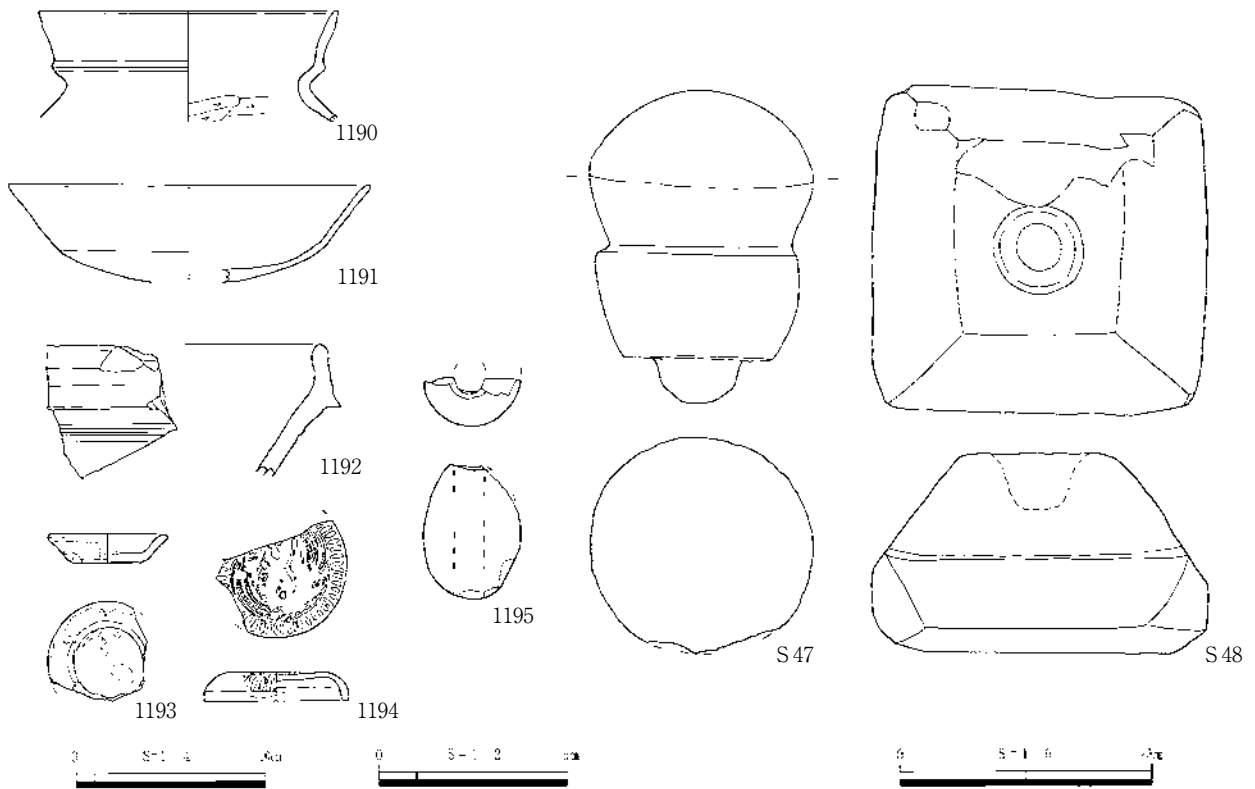
第366図 8区第V層出土遺物(8)



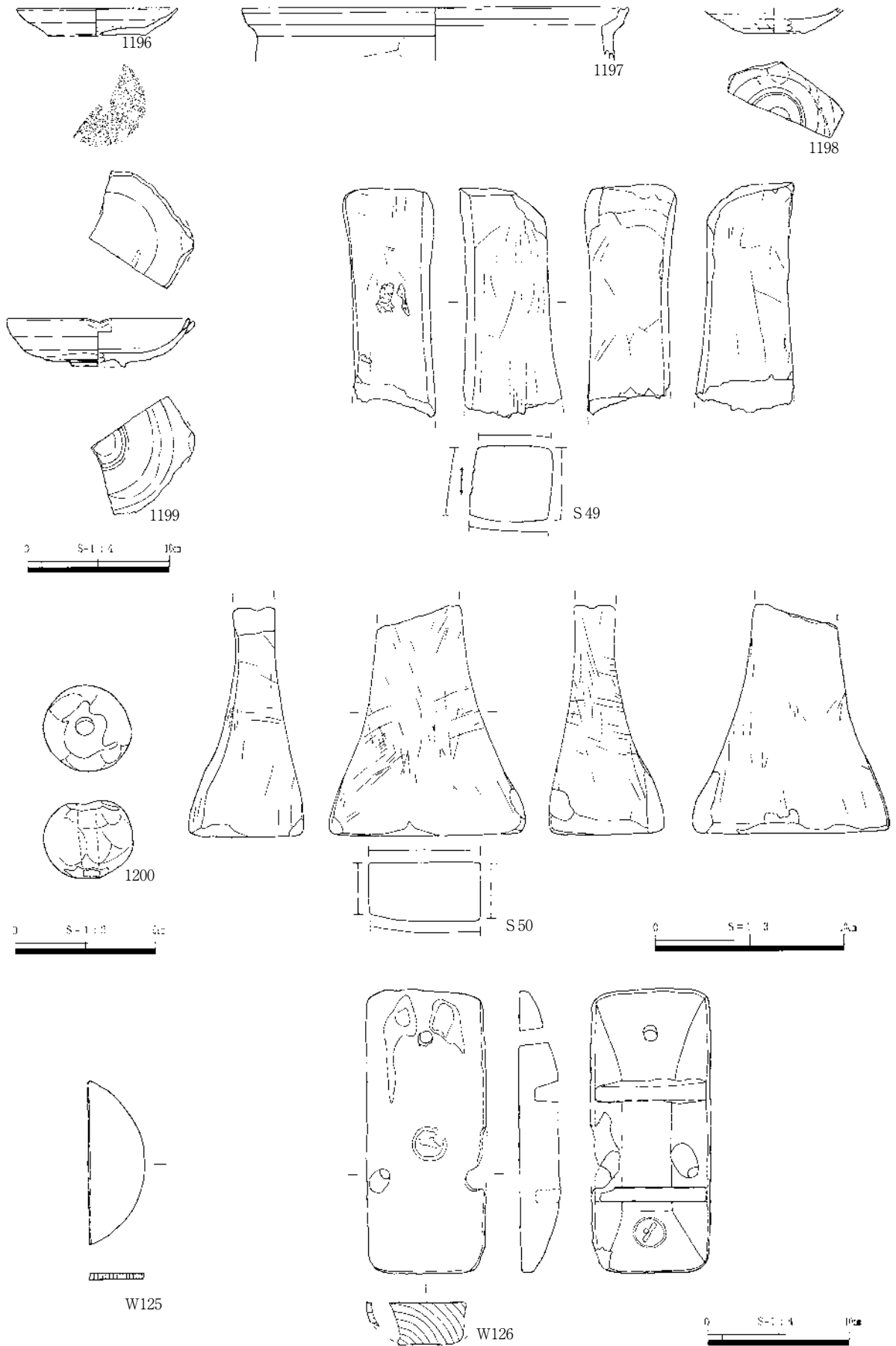
第367図 8区第V層出土遺物(9)



第368図 8区斜面流土出土遺物



第369図 8区層不明・廃土出土遺物



第370図 8区攪乱出土遺物

表6 ピット一覧表(1)

遺構番号	調査区	グリッド	規模(m)			備考
			長軸	短軸	深さ	
P1	6-1区	L20	0.34	0.32	0.20	第1面
P2	6-1区	L20	0.34	0.29	0.10	第1面
P3	6-1区	L20	0.22	0.21	0.06	第1面
P4	6-1区	L20	0.25	0.24	0.09	第1面
P5	6-1区	M20	0.28	0.26	0.13	第1面
P7	6-4区	N21	0.18	0.15	0.06	第1面
P8	6-4区	N21	△0.48	0.40	0.14	第1面
P9	6-4区	N21	0.33	0.32	0.12	第1面
P10	6-4区	M21	0.34	0.26	0.15	第1面
P12	6-4区	M22	0.54	0.51	0.66	第1面
P13	6-4区	M21	0.37	0.36	0.25	第1面
P14	6-4区	M21	0.27	0.20	0.16	第1面
P15	6-4区	N21	0.23	0.17	0.14	第1面
P16	6-4区	N21	0.16	0.16	0.07	第1面
P17	6-4区	N21	0.09	0.08	0.07	第1面
P18	6-4区	N21	0.21	0.20	0.11	第1面
P19	6-4区	N21	0.16	0.14	0.08	第1面
P20	6-4区	N21	0.11	0.10	0.12	第1面
P21	6-4区	N22	0.71	0.50	0.49	第1面
P22	6-4区	N22	0.37	0.24	0.17	第1面
P23	6-4区	N21	0.18	0.17	0.26	第1面
P24	6-4区	N21	0.19	0.18	0.29	第1面
P25	6-4区	N22	0.44	0.38	0.36	第1面
P26	6-4区	N22	△0.18	0.17	0.09	第1面
P27	6-4区	N22	0.54	0.48	0.44	第1面
P28	6-4区	N22	0.24	0.23	0.27	第1面
P29	6-4区	N21・22	0.36	0.33	0.11	第2面
P30	6-4区	N21・22	0.38	0.35	0.11	第2面
P31	6-4区	N21	0.24	0.20	0.14	第1面
P32	6-4区	N22	0.23	0.18	0.06	第1面
P33	6-4区	N22	0.38	0.34	0.12	第1面
P34	6-4区	N22	0.71	0.51	0.20	第1面
P35	6-4区	N22	0.30	0.28	0.06	第1面
P36	6-4区	P21	0.36	0.24	0.12	第2面
P37	6-4区	P21	0.42	0.32	0.15	第2面
P38	6-4区	P21	0.33	0.24	0.07	第2面
P39	6-4区	O22	0.35	0.31	0.14	第3面
P40	6-4区	P21	0.51	0.30	0.10	第2面
P41	6-4区	O22	0.31	0.28	0.30	第1面
P42	6-4区	O22	0.32	0.29	0.15	第3面
P43	6-4区	O22	0.74	0.34	0.21	第3面
P44	6-4区	O22	0.25	0.18	0.20	第3面
P45	6-4区	O22	0.49	0.39	0.45	第3面
P46	6-4区	O22	0.58	0.44	0.21	第1面
P47	6-4区	O22	0.42	0.41	0.11	第1面
P49	6-4区	O22	0.38	0.30	0.48	第3面
P50	6-4区	O22	0.75	0.49	0.34	第3面
P51	6-4区	O22	0.27	0.21	0.14	第3面
P52	6-4区	O22	0.24	0.19	0.05	第3面
P53	6-4区	P21	0.31	0.20	0.14	第2面
P54	6-4区	P21	0.18	0.17	0.18	第2面
P55	6-4区	P21	0.28	0.26	0.12	第2面
P56	6-4区	O22	0.19	0.16	0.09	第3面
P60	6-4区	P21	0.36	0.35	0.20	第2面
P61	6-4区	P21	0.23	0.19	0.11	第2面
P62	6-4区	M21	0.12	0.11	0.09	第2面
P63	6-4区	N21	0.32	0.27	0.31	第2面
P64	6-4区	N21	0.30	0.28	0.19	第2面
P65	6-4区	M21	0.24	0.22	0.20	第2面
P70	6-4区	N21	0.21	0.20	0.10	第2面
P71	6-4区	M21	0.29	0.22	0.20	第2面
P72	6-4区	N21	0.25	0.23	0.24	第2面
P74	6-4区	M21	0.26	0.22	0.07	第2面
P75	6-4区	O21	0.18	0.16	0.10	第1面
P76	6-4区	O21	0.20	0.18	0.09	第1面
P77	6-4区	O21	0.41	0.33	0.17	第1面
P78	6-4区	P21	0.18	0.16	0.14	第1面
P79	6-4区	P21	0.32	0.30	0.12	第1面
P80	6-4区	N21	0.21	0.20	0.08	第2面
P81	6-4区	N21	0.27	0.25	0.12	第2面
P83	6-1区	L21	0.36	0.19	0.19	第3面
P84	6-1区	L21	0.16	0.14	0.24	第3面
P85	6-1区	L21	0.12	0.09	0.16	第3面
P86	6-1区	L21	0.25	0.24	0.09	第3面
P87	6-1区	L21	0.26	0.23	0.25	第3面
P88	6-1区	K21	0.45	0.41	0.55	第3面
P89	6-1区	L21	0.27	0.23	0.26	第3面
P90	6-1区	L21	0.52	0.24	0.30	第3面
P92	6-1区	L21	0.27	0.23	0.26	第3面
P94	6-1区	L21	0.54	0.45	0.33	第3面
P98	6-1区	K21	0.27	0.21	0.44	第3面 弥生土器・壺
P99	6-4区	M21	0.34	0.33	0.12	第3面
P106	6-4区	M21	0.45	0.44	0.16	第3面
P107	6-4区	M21	0.31	0.29	0.10	第4面
P108	6-4区	M21	0.36	0.32	0.11	第4面
P109	6-4区	M21	0.29	0.26	0.14	第4面
P111	6-4区	M21	0.37	△0.29	0.15	第4面
P112	6-4区	M21	0.33	△0.21	0.24	第4面
P113	6-4区	M21	0.45	0.42	0.23	第4面
P114	6-4区	M21	0.35	0.30	0.18	第4面
P115	6-4区	M21	0.36	0.20	0.07	第4面
P116	6-4区	M21	0.17	0.16	0.08	第4面
P118	6-4区	M21	0.41	0.40	0.29	第4面
P119	6-4区	M21	0.47	0.37	0.14	第4面
P120	6-4区	M21	0.84	0.40	0.17	第4面
P122	6-4区	M21	0.17	0.16	0.05	第4面
P123	6-4区	M21	0.51	0.32	0.25	第4面
P124	6-4区	M21	0.46	0.28	0.26	第4面
P125	6-4区	M21	0.30	0.29	0.11	第4面
P126	6-4区	M21	0.42	0.41	0.22	第4面
P127	6-4区	M21	0.31	0.27	0.11	第4面
P128	6-4区	M21	0.40	0.29	0.16	第4面
P129	6-4区	M21	0.24	0.24	0.17	第4面
P130	6-4区	N21	0.23	0.20	0.06	第4面
P131	6-4区	N21	0.34	0.27	0.24	第4面
P132	6-4区	N21	△0.32	0.27	0.24	第4面
P135	6-4区	N21	0.59	0.29	0.27	第4面
P137	6-4区	N21	0.21	0.13	0.09	第4面
P141	6-4区	N21	0.27	0.24	0.08	第4面
P142	6-4区	N21	0.21	0.15	0.12	第4面
P143	6-4区	N21	0.19	0.17	0.15	第4面
P144	6-4区	N21	0.35	0.26	0.10	第4面
P145	6-4区	N21	0.29	0.22	0.16	第4面
P146	6-4区	N21	0.24	0.21	0.11	第4面
P147	6-4区	N21	△0.23	0.20	0.13	第4面
P148	6-4区	N21	0.23	0.14	0.11	第4面
P150	6-4区	N21	0.31	0.29	0.19	第4面
P151	6-4区	N21	0.32	0.27	0.20	第4面
P152	6-4区	N20	0.18	0.16	0.06	第4面
P153	6-4区	N20	0.43	0.32	0.24	第4面
P154	6-4区	N20	0.31	0.25	0.19	第4面
P155	6-4区	N20	0.32	0.24	0.25	第4面
P157	6-4区	N21	0.23	0.21	0.18	第4面
P158	6-1区	L21	0.25	0.21	0.10	第4面
P159	6-1区	L21	0.38	0.33	0.23	第4面
P160	6-1区	L21	0.24	0.22	0.18	第4面
P162	6-1区	K20	0.29	0.28	0.34	第4面
P163	6-1区	L20	0.22	0.20	0.21	第4面
P164	6-1区	L20	0.36	0.28	0.15	第4面
P165	6-1区	L20	0.42	0.38	0.09	第4面
P166	6-1区	L21	0.47	0.43	0.14	第4面
P168	6-1区	L20	0.36	0.33	0.30	第4面
P169	6-1区	L20	0.29	0.27	0.23	第4面
P170	6-1区	L20	0.24	0.22	0.17	第4面

表7 ピット一覧表(2)

遺構番号	調査区	グリッド	規模(m)			備考
			長軸	短軸	深さ	
P171	6-1区	L20	0.23	0.19	0.12	第4面
P172	6-1区	L20	0.16	0.14	0.11	第4面
P173	6-1区	L20	0.31	0.29	0.12	第4面
P174	6-1区	L20	0.39	0.32	0.41	第4面
P175	6-1区	L20	0.33	0.29	0.32	第4面
P176	6-1区	L20	0.22	0.19	0.09	第4面
P177	6-1区	L20	0.19	0.18	0.09	第4面
P178	6-1区	L20	0.27	0.25	0.15	第4面
P179	6-1区	L20	0.28	0.26	0.10	第4面
P180	6-1区	L20	0.26	0.22	0.08	第4面
P181	6-1区	L20	0.24	0.23	0.07	第4面
P182	6-1区	L20	0.24	0.21	0.09	第4面
P183	6-1区	L20	0.27	0.25	0.10	第4面
P184	6-1区	L20	0.48	0.41	0.33	第4面
P187	6-4区	N21	0.55	0.38	0.29	第5面
P189	6-4区	M21	0.24	0.21	0.10	第5面
P190	6-4区	M21	△0.13	0.13	0.07	第5面
P191	6-4区	M21	0.44	0.33	0.26	第5面
P192	6-4区	M21	0.44	0.36	0.07	第5面
P193	6-4区	M21	0.43	0.35	0.33	第5面
P194	6-4区	M21	0.23	0.22	0.10	第5面
P195	6-4区	M21	0.38	0.35	0.16	第5面
P196	6-4区	M21	0.37	△0.26	0.16	第5面
P197	6-4区	M21	0.45	0.41	0.13	第5面
P198	6-4区	M21	0.39	0.39	0.21	第5面
P199	6-4区	M21	0.28	0.25	0.19	第5面
P200	6-4区	M21	0.26	0.24	0.12	第5面
P201	6-4区	M21	0.21	0.20	0.15	第5面
P203	6-4区	M21	0.44	0.35	0.15	第5面
P204	6-4区	M21	0.34	0.30	0.16	第5面
P205	6-4区	M21	0.44	0.25	0.12	第5面
P206	6-4区	M21	0.26	0.22	0.07	第5面
P208	6-4区	M21	0.22	0.20	0.11	第5面
P209	6-4区	M21	0.25	0.23	0.09	第5面
P210	6-4区	M21	0.34	0.30	0.15	第5面
P211	6-4区	M21	0.28	0.22	0.09	第5面
P213	6-4区	M21	0.19	0.16	0.11	第5面
P214	6-4区	M21	0.13	0.11	0.09	第5面
P215	6-4区	M21	0.26	0.24	0.15	第5面
P216	6-4区	M21	0.35	0.28	0.39	第5面
P217	6-4区	M21	0.44	△0.32	0.16	第5面
P218	6-4区	M21	0.22	△0.21	0.14	第5面
P221	6-4区	M21	0.38	0.31	0.09	第5面
P222	6-4区	M21	0.43	0.33	0.17	第5面
P223	6-4区	M21	0.31	△0.24	0.13	第5面
P224	6-4区	M21	0.36	0.34	0.10	第5面
P227	6-4区	M20	0.49	△0.28	0.45	第5面
P229	6-4区	M20	0.22	0.19	0.20	第5面
P233	6-4区	M20	0.31	0.30	0.07	第5面
P234	6-4区	M20	0.36	0.27	0.59	第5面
P235	6-4区	M20	0.35	0.31	0.34	第5面
P236	6-4区	M20	0.33	0.31	0.43	第5面
P237	6-4区	M20	0.35	0.32	0.47	第5面
P239	6-4区	M20	0.47	0.45	0.35	第5面
P240	6-4区	M20	0.41	0.39	0.29	第5面
P242	6-4区	M20	0.34	△0.14	0.29	第5面
P243	6-4区	M20	0.39	0.36	0.35	第5面
P244	6-4区	M21	0.37	0.28	0.07	第5面
P245	6-4区	M21	0.46	0.33	0.22	第5面
P246	6-4区	M21	0.40	0.29	0.18	第5面
P247	6-4区	M21	0.37	0.34	0.13	第5面
P252	6-4区	M21	0.24	0.23	0.04	第5面
P253	6-4区	M21	0.20	0.19	0.09	第5面
P254	6-4区	M21	0.20	0.19	0.17	第5面
P257	6-4区	M21	0.51	0.45	0.26	第5面
P258	6-4区	M21	0.28	0.25	0.18	第5面
P259	6-4区	M21	0.47	△0.37	0.35	第5面
P260	6-1区	M21	△0.24	△0.23	0.08	第5面
P261	6-1区	M21	0.35	0.33	0.23	第5面
P262	6-4区	M21	0.29	0.25	0.28	第5面
P264	6-4区	M21	0.20	0.15	0.06	第5面
P265	6-4区	M21	0.45	0.39	0.39	第5面
P266	6-4区	M21	0.31	0.26	0.10	第5面
P270	6-4区	M20	0.34	0.16	0.12	第5面
P271	6-4区	M20	0.35	0.26	0.35	第5面
P272	6-4区	M20	0.42	0.40	0.45	第5面
P274	6-4区	M20	△0.4	0.35	0.24	第5面
P276	6-4区	M20	0.25	0.16	0.22	第5面
P277	6-4区	M20	0.32	0.28	0.09	第5面
P278	6-4区	M20	0.32	0.26	0.43	第5面
P279	6-4区	M20	0.41	△0.31	0.41	第5面
P282	6-4区	M20	0.43	0.33	0.51	第5面
P283	6-4区	M20	0.17	0.17	0.07	第5面
P284	6-4区	M20	0.34	0.33	0.43	第5面
P288	6-4区	M20	0.76	0.47	0.09	第5面
P289	6-4区	M21	0.27	0.21	0.08	第5面
P290	6-4区	M21	0.16	0.14	0.11	第5面
P291	6-4区	M21	0.29	0.24	0.14	第5面
P295	6-4区	M21	0.28	0.25	0.11	第5面
P296	6-4区	N21	0.24	0.23	0.15	第5面
P297	6-4区	N21	0.23	0.21	0.21	第5面
P298	6-1区	N21	0.29	0.24	0.22	第4面
P299	6-4区	N21	0.37	0.33	0.30	第5面
P304	6-1区	M21	0.26	0.22	0.12	第5面
P306	6-1区	M21	0.40	0.34	0.23	第5面
P307	6-1区	M20・M21	0.32	0.20	0.19	第5面
P308	6-1区	M20	0.23	0.14	0.20	第5面
P310	6-1区	M20	0.30	0.26	0.18	第5面
P311	6-1区	M20	0.37	0.34	0.46	第5面
P312	6-1区	M20	0.44	0.26	0.11	第5面
P314	6-1区	M20	0.19	0.19	0.17	第5面
P315	6-1区	M20	0.40	0.35	0.37	第5面
P316	6-1区	M20	0.52	0.44	0.37	第5面
P317	6-1区	M20	0.21	0.16	0.21	第5面
P318	6-1区	M21	0.32	0.19	0.22	第5面
P320	6-1区	M21	0.26	0.24	0.21	第5面
P321	6-1区	L21	0.39	0.31	0.15	第5面
P322	6-1区	L21	0.37	0.26	0.18	第5面
P323	6-1区	L20	0.23	△0.19	0.10	第5面
P324	6-1区	L21	0.21	0.20	0.23	第5面
P325	6-1区	L20	0.23	0.21	0.17	第5面
P326	6-1区	L20	0.24	0.16	0.17	第5面
P328	6-1区	L20	0.29	0.21	0.19	第5面
P329	6-1区	L20	0.33	0.20	0.26	第5面
P330	6-1区	L20	0.37	0.31	0.29	第5面
P331	6-1区	L20	0.22	0.20	0.22	第5面
P332	6-1区	L20	△0.4	△0.31	0.15	第5面
P333	6-1区	L20	0.61	0.33	0.27	第5面
P334	6-1区	L20	0.61	0.32	0.20	第5面
P335	6-1区	L20	0.19	0.15	0.26	第5面
P336	6-1区	M20	0.31	0.25	0.19	第5面
P337	6-1区	M20	0.33	△0.3	0.17	第5面
P341	6-1区	L20	0.44	0.30	0.10	第5面
P342	6-1区	L20	0.55	0.45	0.09	第5面
P343	6-1区	L20	0.22	0.13	0.07	第5面
P344	6-1区	L20	0.34	0.22	0.09	第5面
P347	6-1区	L20	0.27	0.22	0.24	第5面
P348	6-1区	L20	0.41	0.33	0.11	第5面
P349	6-1区	L20	0.34	0.32	0.27	第5面
P351	6-1区	L21	0.63	0.60	0.14	第5面
P352	6-1区	L20	0.66	0.43	0.21	第5面
P353	6-1区	L21	0.31	0.30	0.19	第5面
P354	6-1区	L21	0.18	0.16	0.08	第5面
P355	6-1区	L21	0.32	0.23	0.12	第5面

表8 ピット一覧表(3)

遺構番号	調査区	グリッド	規模(m)			備考
			長軸	短軸	深さ	
P356	6-1区	L21	0.24	0.21	0.18	第5面
P358	6-1区	L21	0.32	0.27	0.13	第5面
P359	6-1区	L21	0.28	△0.2	0.13	第5面
P360	6-1区	L21	0.20	△0.16	0.06	第5面
P361	6-1区	L21	0.30	0.27	0.22	第5面
P363	6-1区	L21	0.27	0.22	0.18	第5面
P364	6-1区	L21	0.30	0.27	0.21	第5面
P365	6-1区	L21	0.32	△0.21	0.22	第5面
P366	6-1区	L21	0.30	0.26	0.12	第5面
P367	6-1区	L20	0.44	0.31	0.17	第5面
P368	6-1区	L21	0.21	0.18	0.13	第5面
P371	6-1区	L21	0.43	0.33	0.15	第5面
P374	6-1区	L20	0.77	0.18	0.13	第5面
P376	6-1区	L20	0.40	0.37	0.37	第5面
P377	6-1区	L20	0.37	0.29	0.17	第5面
P378	6-1区	L20	0.43	0.41	0.21	第5面
P379	6-1区	L20	0.30	0.22	0.17	第5面
P380	6-1区	L20	0.23	0.23	0.07	第5面
P382	6-1区	L20	0.41	0.40	0.09	第5面
P383	6-1区	L20	0.47	0.40	0.29	第5面
P384	6-1区	L20	0.50	0.44	0.06	第5面
P385	6-1区	L20	0.50	0.46	0.04	第5面
P386	6-1区	L20	0.32	0.27	0.20	第5面
P389	6-1区	L20	0.64	0.37	0.24	第5面
P393	6-1区	L20	0.26	0.26	0.36	第5面
P394	6-1区	L20	0.25	0.24	0.22	第5面
P397	6-1区	L20	0.32	0.29	0.25	第5面
P398	6-1区	L20	0.26	0.24	0.08	第5面
P399	6-1区	L20	0.36	0.33	0.32	第5面
P400	6-1区	L20	0.29	0.29	0.17	第5面
P402	6-1区	L20	0.49	0.29	0.17	第5面
P405	6-1区	L20	0.32	0.19	0.13	第5面
P407	6-1区	L20	0.40	0.34	0.14	第5面
P408	6-1区	L20	0.50	0.49	0.19	第5面
P410	6-1区	L20	0.26	0.22	0.24	第5面

遺構番号	調査区	グリッド	規模(m)			備考
			長軸	短軸	深さ	
P413	6-1区	L21	0.24	0.23	0.26	第5面
P414	6-1区	L21	0.29	0.20	0.20	第5面
P415	6-1区	L21	0.27	△0.21	0.16	第5面
P416	6-1区	L21	0.43	△0.35	0.32	第5面
P417	6-1区	L21	0.19	0.19	0.24	第5面
P418	6-1区	L21	0.25	0.21	0.10	第5面
P419	6-1区	L21	0.36	0.32	0.05	第5面
P422	6-1区	L20	0.31	0.22	0.17	第5面
P425	6-1区	K20	0.80	0.51	0.10	第5面
P426	6-1区	K20	0.33	0.32	0.19	第5面
P427	6-1区	K20	0.45	0.41	0.14	第5面
P428	6-1区	K20	0.29	0.27	0.10	第5面
P429	6-1区	K20	0.40	0.34	0.20	第5面
P430	6-1区	K20	0.33	0.33	0.22	第5面
P433	6-1区	K20	0.18	0.17	0.15	第5面
P435	6-1区	K20	0.60	0.47	0.18	第5面
P436	6-1区	K20	0.39	0.38	0.22	第5面
P437	6-1区	K20	0.51	0.40	0.17	第5面
P438	6-1区	K20	0.46	0.40	0.16	第5面
P439	6-1区	K20	0.25	0.27	0.06	第5面
P440	6-1区	K20	0.52	0.34	0.14	第5面
P443	6-1区	K20	0.53	0.34	0.29	第5面
P446	6-1区	K20	0.56	0.50	0.11	第5面
P448	6-1区	K20	0.23	0.19	0.09	第5面
P449	6-1区	K20	0.26	0.21	0.09	第5面
P450	6-1区	K20	0.48	0.22	0.14	第5面
P452	6-1区	K20	0.24	0.20	0.12	第5面
P457	6-1区	J20	0.49	0.47	0.42	第5面
P458	6-1区	J20	0.21	0.19	0.28	第5面
P459	6-1区	J20	0.16	0.16	0.29	第5面
P460	6-1区	J20	△0.4	0.25	0.31	第5面
P463	6-1区	N21	0.34	0.32	0.24	第5面
P465	6-1区	M21	0.32	0.29	0.22	第5面
P467	6-1区	L21	1.12	0.12	0.11	第5面

表9 ピット一覧表(4)

遺構番号	調査区	グリッド	規模(m)			備考
			長軸	短軸	深さ	
S001	7区	M25	△0.45	△0.26	0.68	第1面
S004	7区	M25	0.51	0.46	0.64	第1面
S005	7区	M25	0.29	0.22	0.19	第1面
S007	7区	M25	0.42	0.37	0.23	第1面 土器片
S010	7区	M25	△0.38	△0.14	0.76	第1面
S014	7区	N25	△0.52	0.49	0.62	第1面
S015	7区	N25	△0.40	0.31	0.37	第1面
S016	7区	N25	△0.19	△0.12	0.5	第2面
S017	7区	M25	0.26	0.24	0.33	第2面
S018	7区	M25	△0.32	0.24	△0.19	第2面
S019	7区	N25	0.4	0.23	0.37	第2面
S020	7区	M25	0.37	0.32	0.46	第2面
S021	7区	M25	0.35	0.33	0.53	第2面
S022	7区	M25	0.28	0.25	0.26	第2面
S023	7区	N25	0.31	0.26	0.41	第2面
S024	7区	N25	0.6	0.4	0.51	第2面
S025	7区	N25	0.32	0.24	0.29	第2面
S026	7区	M25	0.42	0.29	0.35	第2面
S027	7区	M25	0.22	0.18	0.3	第2面
S028	7区	M25	0.28	0.25	0.33	第2面
S030	7区	M25	0.29	0.24	0.27	第3面
S031	7区	M25	0.31	0.25	0.35	第3面
S032	7区	M25	0.32	0.29	0.34	第3面
S033	7区	M25	△0.19	0.2	0.17	第3面
S034	7区	M25	0.36	0.26	0.34	第3面

遺構番号	調査区	グリッド	規模(m)			備考
			長軸	短軸	深さ	
S035	7区	M25	0.26	0.23	0.38	第3面
S036	7区	M25	0.3	0.29	0.31	第3面
S037	7区	M25	0.24	0.22	0.32	第3面
S038	7区	M25	0.4	0.39	0.41	第3面 土器片
S039	7区	M25	0.41	0.31	0.27	第3面
S040	7区	M25	0.31	0.28	0.23	第3面
S042	7区	M25	0.26	0.22	0.26	第3面
S043	7区	M25	0.28	0.21	0.26	第3面
S044	7区	M25	0.37	0.27	0.52	第3面
S045	7区	M25	0.35	0.28	0.28	第3面
S046	7区	M25	0.27	0.25	0.39	第3面
S047	7区	M25	0.33	0.29	0.25	第3面
S048	7区	M25	0.47	0.3	0.34	第3面
S050	7区	M25	0.21	0.16	0.17	第1面
S051	7区	N25	△0.24	△0.13	0.34	第1面
S052	7区	M25	△0.2	△0.16	△0.32	第1面 土器片
S053	7区	M25	0.35	0.28	0.21	第1面
S054	7区	M25	0.16	0.14	0.2	第1面
S055	7区	N24～25	0.29	0.28	0.34	第2面
S056	7区	N24～25	0.56	0.33	0.49	第2面 土器片
S057	7区	M24	0.24	0.21	0.17	第2面
S058	7区	N25	△0.21	△0.15	0.13	第2面
S059	7区	N24	0.28	0.27	0.51	第2面 弥生土器・甕
S062	7区	M25	0.43	0.28	0.52	第3面
S066	7区	N25	0.28	0.27	0.4	第3面

表10 ピット一覧表(5)

遺構番号	調査区	グリッド	規模(m)			備考
			長軸	短軸	深さ	
S068	7区	M・N25	0.32	0.3	0.44	第3面
S069	7区	M25	0.36	0.28	0.3	第3面
S070	7区	M25	0.28	0.24	0.35	第3面
S071	7区	M25	△0.23	△0.12	0.35	第1面
S073	7区	M24～25	0.29	0.22	0.42	第3面
S074	7区	M24	0.47	0.34	0.25	第3面
S077	7区	M25	0.24	0.22	0.3	第3面
S078	7区	N25	△0.22	△0.07	0.27	第3面
S080	7区	M25	△0.25	△0.15	0.28	第3面
S083	7区	M25	0.19	0.17	0.34	第4面
S084	7区	M25	0.34	0.33	0.3	第4面
S085	7区	M25	0.22	0.21	0.16	第4面
S086	7区	M24	0.27	0.24	0.31	第4面
S087	7区	M24・25	0.57	0.39	0.57	第4面
S088	7区	N24	0.41	0.4	0.42	第1面 備前焼・銭貨
S099	7区	N24	0.39	△0.17	0.6	第4面
S114	7区	L22	0.3	0.26	0.17	第1面
S115	7区	L22	0.44	0.42	0.35	第1面
S116	7区	L22	0.34	0.32	0.51	第1面
S117	7区	L22	0.33	0.29	0.46	第1面
S119	7区	P22	△0.18	0.18	0.1	第1面
S121	7区	N24	0.29	0.25	0.19	第1面
S122	7区	N24	0.3	0.26	0.17	第1面
S123	7区	N24	0.3	0.2	0.18	第1面
S124	7区	N24	0.31	0.27	0.39	第1面
S127	7区	M24	0.24	0.21	0.13	第1面
S128	7区	M24	0.16	0.13	0.11	第1面
S129	7区	M24	0.39	0.24	0.29	第1面
S130	7区	M23	0.26	0.19	0.31	第1面
S131	7区	N24	0.15	0.14	0.14	第1面
S132	7区	N24	0.11	△0.03	0.3	第2面
S139	7区	L22	0.3	0.26	0.33	第1面
S140	7区	L22	0.18	0.13	0.17	第1面
S141	7区	L22	0.43	0.31	0.4	第1面
S142	7区	L22	0.22	0.2	△0.13	第1面
S143	7区	L22	0.29	0.18	0.24	第1面
S146	7区	P23	0.44	0.29	0.1	第1面
S162	7区	O23	0.22	0.21	0.29	第1面
S163	7区	O23	0.27	0.21	0.27	第1面
S164	7区	N23	0.29	0.23	0.28	第1面
S166	7区	N23	0.39	0.35	0.41	第1面 炭化木材
S167	7区	N・O23	0.22	0.2	0.31	第1面
S170	7区	N23	0.21	0.16	0.23	第1面
S171	7区	N23	0.18	0.13	0.11	第1面
S173	7区	N23	△0.48	△0.36	0.44	第1面
S174旧	7区	N23	0.22	△0.21	0.31	第1面
S174新	7区	N23	0.32	0.24	0.3	第1面
S175	7区	N23	0.32	0.26	0.15	第1面
S176	7区	N23	0.26	0.2	0.22	第1面
S184	7区	O23	0.26	0.26	0.37	第1面
S185	7区	O22	0.3	0.23	0.18	第1面
S186	7区	O22	△0.62	0.6	0.22	第1面
S187	7区	O22	0.57	0.45	0.29	第1面 土器片
S190	7区	O23	△0.56	△0.55	0.35	第1面
S191	7区	P22	0.22	△0.16	0.14	第1面
S192	7区	O23	0.3	0.24	0.42	第1面
S193	7区	M21	0.2	0.17	0.2	第1面
S194	7区	M21	0.23	0.19	0.18	第1面 弥生土器
S195	7区	M21	0.38	0.27	0.43	第1面 弥生土器
S196	7区	M21	0.39	0.37	△0.4	第1面 土器片
S199	7区	M21	0.16	0.14	0.07	第1面
S200	7区	M21	0.16	0.16	0.1	第1面
S202	7区	M21	0.21	△0.18	0.15	第1面
S203	7区	M21	0.29	0.21	0.13	第1面
S204	7区	M21	0.26	0.23	0.36	第1面
S205	7区	O23	0.26	0.26	0.21	第1面
S206	7区	P23	△0.37	△0.26	0.16	第1面
S207	7区	P23	0.58	0.4	0.25	第1面
S208	7区	M21	0.36	0.33	△0.5	第1面
S212	7区	M21	0.17	0.15	△0.09	第1面
S213	7区	M21	0.32	0.26	△0.09	第1面
S214	7区	M21	0.34	0.25	0.3	第1面

表11 ピット一覧表(6)

遺構番号	調査区	グリッド	規模(m)			備考
			長軸	短軸	深さ	
S218	8区	R21	0.28	0.26	0.06	第2面
S219	8区	S21	0.77	0.48	0.2	第2面
S221	8区	R21	0.31	0.3	0.23	第2面
S222	8区	S21	0.39	0.36	0.19	第2面
S231	8区	S20	△0.65	0.49	0.17	第1面
S234	8区	S20	0.3	0.22	0.23	第1面
S235	8区	R21	0.92	0.38	0.2	第2面
S236	8区	R21	0.82	0.31	0.48	第2面
S237	8区	R21	△0.3	△0.17	0.11	第2面
S238	8区	R21	△0.45	△0.26	0.1	第2面
S240	8区	S21	0.25	0.24	0.18	第2面
S241	8区	S21	0.39	0.24	0.19	第2面
S242	8区	S20	0.34	0.31	0.16	第1面
S250	8区	S20	0.32	△0.32	△0.08	第1-2面
S251	8区	R21	0.19	△0.17	0.04	第2面
S252	8区	R21	△0.24	△0.22	0.21	第2面
S253	8区	S20	0.65	△0.21	0.24	第1-2面
S255	8区	R20	0.65	0.58	0.24	第1-2面
S256	8区	S20	0.29	0.21	0.21	第1-2面
S258	8区	S20	0.49	0.42	0.06	第1-2面
S260	8区	R21	0.4	0.33	0.21	第2面
S261	8区	R21	0.23	0.21	0.11	第2面
S264	8区	S20	0.56	△0.54	0.24	第1-2面
S265	8区	S20	0.38	0.32	0.16	第1-2面
S266	8区	R20・S20	0.73	0.69	0.08	第1-2面
S267	8区	R21	0.27	0.24	0.09	第2面
S268	8区	R21	△0.29	0.27	0.12	第2面
S269	8区	R21	0.58	0.5	0.13	第2面
S270	8区	S20	0.64	0.44	0.16	第1-2面
S279	8区	S20	0.34	0.33	0.18	第1-2面
S280	8区	S20	0.47	0.43	0.05	第1-2面
S283	8区	S20	0.33	0.32	0.35	第1-2面
S291	8区	S20	△0.55	△0.15	0.36	第1-2面
S293	8区	S20	△0.69	0.67	0.15	第1-2面
S294	8区	S20	△0.50	△0.33	0.17	第1-2面
S295	8区	S20	0.44	0.35	0.1	第1-2面
S296	8区	S20	0.53	0.46	0.21	第1-2面
S298	8区	S20	0.6	0.54	0.38	第1-2面
S299	8区	S20	0.45	△0.28	0.32	第1-2面
S308	8区	Q22	0.42	0.38	0.33	第1面
S313	8区	Q20	0.4	0.35	0.08	第1-2面
S317	8区	R21	0.41	0.3	0.14	第3面
S318	8区	R21	0.3	0.27	0.09	第3面
S319	8区	R21	0.31	△0.24	0.22	第3面
S320	8区	R21	0.37	0.31	0.05	第3面
S321	8区	R21	0.36	0.35	0.1	第3面
S322	8区	S21	0.28	0.26	0.27	第3面
S323	8区	S21	0.39	0.3	0.07	第3面

表12 ピット一覧表(7)

遺構番号	調査区	グリッド	規模(m)			備考
			長軸	短軸	深さ	
S324	8区	S21	0.35	0.33	0.09	第3面
S325	8区	S21	△0.6	△0.23	0.06	第3面
S326	8区	R21	△0.38	△0.33	0.07	第3面
S327	8区	R21	0.38	0.34	0.08	第3面
S328	8区	S21	0.24	0.21	0.22	第3面
S329	8区	R21	0.35	0.3	0.14	第3面
S330	8区	S21	0.24	0.23	0.18	第3面
S335	8区	Q21	0.31	0.29	0.12	第3面
S336	8区	R21	0.41	0.37	0.1	第3面
S337	8区	R21	0.69	△0.6	0.06	第3面
S338	8区	Q21	0.27	0.26	0.16	第3面
S340	8区	R21	0.18	0.15	0.06	第3面
S341	8区	S20	0.36	0.34	0.13	第1-2面
S342	8区	S20	0.55	0.49	0.16	第1-2面
S343	8区	S20	0.31	0.27	0.27	第1-2面
S344	8区	S20	0.54	0.44	0.22	第1-2面
S351	8区	S21	△0.34	△0.18	0.27	第2面
S357	8区	R21-R22	0.35	0.31	0.06	第1面
S358	8区	R21	0.28	0.23	0.15	第1面
S359	8区	R21	0.38	0.33	0.18	第1面
S360	8区	R22	0.57	0.55	0.24	第1面
S362	8区	R21	0.28	0.23	0.04	第1面
S363	8区	R21	0.24	0.22	0.11	第1面
S365	8区	R21	0.43	0.41	0.16	第1面
S366	8区	R22	0.6	0.47	0.36	第1面
S368	8区	R21	0.65	0.3	0.16	第1面
S372	8区	R22	0.4	0.36	0.18	第1面
S373	8区	R21	0.61	0.51	0.24	第1面
S374	8区	S21	△0.59	0.25	0.09	第1面
S376	8区	R22-S22	0.21	0.17	0.19	第1面
S378	8区	R21	0.56	0.55	0.49	第1面
S379	8区	R21	△0.23	△0.15	0.06	第1面
S383	8区	Q21	0.17	0.14	0.15	第4面
S387	8区	S21	0.4	0.33	0.32	第1面
S388	8区	S21	△0.36	0.28	0.09	第1面
S389	8区	S21	0.27	△0.12	0.07	第1面
S390	8区	S21	0.17	0.12	0.06	第1面
S391	8区	S21	△0.35	0.3	0.04	第1面
S392	8区	S21	0.29	0.23	0.37	第1面
S393	8区	S21	0.29	0.24	0.2	第1面
S394	8区	S21	0.19	0.19	0.09	第1面
S398	8区	S21	0.33	△0.19	0.19	第1面
S399	8区	S21	0.57	0.45	0.38	第1面
S400	8区	S21	△0.48	△0.15	0.31	第1面
S401	8区	S21	0.79	0.57	0.4	第1面
S403	8区	S21	0.32	0.24	0.18	第1面
S421	8区	S21	0.25	0.19	0.19	第1面
S422	8区	S21	0.38	0.22	0.23	第1面
S423	8区	S21	△0.25	0.19	0.1	第1面
S430	8区	S22	0.32	0.25	0.23	第1面
S431	8区	S21-S22	0.33	0.29	0.33	第1面
S433	8区	S21	△0.62	0.49	0.27	第1面
S434	8区	S21	0.5	△0.16	0.13	第1面
S440	8区	Q22	0.38	0.37	0.19	第1面
S441	8区	Q22	0.59	0.43	0.35	第1面
S442	8区	Q22	0.28	0.2	0.15	第1面
S444	8区	Q21	0.46	0.45	0.15	第4面
S445	8区	R21	0.5	0.47	0.17	第4面
S446	8区	R21	0.46	0.37	0.19	第4面
S448	8区	Q22	0.18	0.18	0.19	第1面
S449	8区	R21	0.28	0.27	0.14	第4面
S450	8区	R21	0.4	0.38	0.11	第4面
S451	8区	R21	0.45	0.31	0.08	第4面
S452	8区	R22	△0.28	0.28	0.16	第1面
S453	8区	R22	0.31	△0.28	0.21	第1面
S454	8区	R21	0.17	0.16	0.14	第1面
S455	8区	S22	0.42	0.37	0.19	第1面
S456	8区	S22	0.4	0.35	0.26	第1面
S457	8区	S22	0.38	0.34	0.21	第1面
S458	8区	S20	0.32	0.31	0.12	第4面
S459	8区	S20	0.47	0.4	0.07	第4面
S461	8区	S22	0.43	0.41	0.33	第1面
S462	8区	S21	0.31	0.24	0.37	第4面
S463	8区	S21	0.48	0.45	0.17	第4面
S464	8区	R22	0.61	0.33	0.43	第1面
S465	8区	R20	0.64	0.6	0.22	第4面
S468	8区	Q21	0.33	0.28	0.2	第1面
S469	8区	R20	0.23	0.18	0.28	第4面
S471	8区	S20	0.27	0.21	0.17	第4面
S472	8区	S21	0.31	0.28	0.17	第4面
S476	8区	Q21-R21	0.36	0.3	0.07	第4面
S481	8区	R22	0.17	0.16	0.25	第1面
S485	8区	R22	0.34	△0.24	0.09	第1面
S487	8区	R21	0.18	△0.06	0.17	第1面
S489	8区	Q22	0.49	0.48	0.11	第1面
S490	8区	Q22	△0.4	0.32	0.1	第1面
S491	8区	Q22	△0.26	0.21	0.13	第1面
S492	8区	S22	0.32	△0.12	0.21	第1面
S493	8区	S22	0.38	0.26	0.11	第1面
S494	8区	S22-S23	△0.51	0.41	0.11	第1面
S495	8区	S23	0.59	0.57	0.38	第1面
S498	8区	S22	△0.4	△0.1	0.28	第1面
S499	8区	S22	△0.37	△0.14	0.18	第1面
S500	8区	R22	△0.33	△0.28	△0.17	第1面
S501	8区	S22	0.66	0.55	0.32	第1面
S503	8区	S20-S21	0.6	△0.55	0.37	第4面
S504	8区	S22	0.22	0.2	0.11	第1面
S505	8区	S22	0.31	0.3	0.08	第1面
S509	8区	S20	0.39	0.29	0.13	第4面
S512	8区	R22	0.4	0.38	0.32	第1面
S513	8区	R22	0.49	0.31	0.14	第1面
S515	8区	S21	0.3	0.24	0.11	第1面
S516	8区	S21	0.24	0.18	0.16	第1面
S520	8区	R22	0.31	△0.22	0.15	第1面
S521	8区	R22	△0.35	△0.17	0.19	第1面
S526	8区	R21	△0.5	0.16	0.28	第1面
S527	8区	R21-R22	△0.25	0.26	0.45	第1面
S529	8区	Q22	△0.39	△0.39	0.3	第1面
S530	8区	R21	0.3	0.3	0.17	第1面
S532	8区	R22	0.51	0.38	0.23	第1面
S534	8区	R21	0.43	0.4	0.35	第4面
S537	8区	Q22-R22	0.53	△0.23	△0.31	第1面
S538	8区	R23	0.47	0.44	0.13	第1面
S539	8区	R21	0.35	△0.19	0.17	第4面
S540	8区	R21	0.32	△0.3	0.08	第4面
S541	8区	R21	0.25	△0.22	0.16	第4面
S542	8区	R21	0.3	△0.23	0.12	第4面
S545	8区	R21	0.35	0.32	0.14	第4面
S547	8区	S21	0.51	△0.16	0.24	第1面
S549	8区	S21-S22	0.26	△0.21	0.28	第1面
S550	8区	S21-S22	△0.31	△0.22	0.14	第1面
S551	8区	S21	0.32	△0.26	0.29	第1面
S553	8区	S21	△0.34	△0.14	0.15	第1面
S554	8区	S21	△0.22	△0.18	0.12	第1面
S555	8区	S21	0.46	0.34	0.21	第1面
S557	8区	S21	△0.3	△0.16	0.35	第1面
S558	8区	S21	0.37	0.34	0.26	第1面
S559	8区	R21	0.76	0.56	0.29	第1面
S560	8区	S23	0.44	0.35	0.43	第1面
S561	8区	S23	0.53	0.38	0.18	第1面
S562	8区	S21	△0.21	△0.21	0.19	第1面
S564	8区	S21	△0.32	△0.27	0.24	第1面
S565	8区	S22	0.58	0.48	0.25	第1面
S566	8区	S22	0.72	△0.66	0.18	第1面

表13 ピット一覧表(8)

遺構番号	調査区	グリッド	規模(m)			備考
			長軸	短軸	深さ	
S568	8区	S21	0.28	0.23	△0.28	第1面
S570	8区	S22	0.3	0.28	0.07	第1面
S575	8区	S22	0.31	0.25	0.18	第1面
S576	8区	S21	△0.14	△0.07	△0.27	第1面
S582	8区	S21	△0.3	△0.21	△0.21	第1面
S587	8区	S21	△0.26	△0.24	0.32	第1面
S593	8区	R21	△1.13	△0.72	△0.54	第1面
S595	8区	S21	0.44	0.36	0.33	第1面
S597	8区	S21	0.29	0.27	0.15	第5面
S598	8区	S20・S21	0.34	0.3	0.17	第5面
S599	8区	S20	0.24	0.24	0.11	第5面
S601	8区	S20	0.29	0.27	0.12	第5面
S602	8区	S20	0.35	0.31	0.29	第5面
S603	8区	S21	0.36	△0.21	0.25	第1面
S604	8区	S21	0.48	0.28	0.11	第5面
S605	8区	S21	0.4	0.22	0.12	第5面
S607	8区	S21	0.25	0.21	0.08	第5面
S609	8区	R21	0.35	0.27	0.32	第5面
S610	8区	R21	0.45	0.31	0.29	第5面
S611	8区	R21	0.42	0.4	0.16	第5面
S612	8区	R20	0.39	0.36	0.35	第5面
S614	8区	S20	0.44	0.4	0.31	第5面
S615	8区	S20	0.46	0.44	0.17	第5面
S619	8区	R20	0.32	△0.29	0.3	第5面
S621	8区	R21	0.28	0.25	0.09	第5面
S622	8区	S20	0.31	0.24	0.2	第5面
S623	8区	R21	0.39	0.33	0.12	第5面
S632	8区	S21	0.18	0.12	△0.14	第1面
S634	8区	S22	△0.27	0.22	△0.18	第1面
S635	8区	S21	0.17	△0.15	0.16	第1面
S636	8区	R20	0.62	0.58	0.17	第5面
S638	8区	Q21	0.55	0.4	0.27	第5面
S639	8区	Q21	0.34	0.29	0.16	第5面
S640	8区	Q21	0.23	0.2	0.17	第5面
S642	8区	Q21	0.32	0.31	0.24	第5面
S643	8区	Q21	0.25	0.24	0.12	第5面
S646	8区	Q21	0.36	0.32	0.13	第5面
S648	8区	Q21	0.51	0.41	0.07	第5面
S652	8区	Q21	0.27	0.25	0.16	第5面
S653	8区	Q21	0.31	0.31	0.29	第5面
S654	8区	Q21	0.26	△0.2	0.32	第5面
S655	8区	Q21	0.39	0.38	0.31	第5面
S659	8区	R22	0.33	0.33	0.23	第5面
S660	8区	Q21	0.23	0.22	0.06	第5面
S661	8区	R21	0.24	0.24	0.09	第5面
S662	8区	Q21	0.37	0.31	0.11	第5面
S663	8区	R21	0.35	0.3	0.17	第5面
S664	8区	R21	0.2	0.18	0.09	第5面
S666	8区	R21	0.36	0.36	0.31	第5面
S667	8区	R21	0.45	0.35	0.15	第5面
S669	8区	Q21	0.37	0.32	0.14	第5面
S671	8区	Q21	0.34	0.23	0.06	第5面
S673	8区	Q21	0.47	0.42	0.3	第5面
S674	8区	S21	△0.25	△0.16	0.12	第5面
S675	8区	S21	0.32	0.31	0.28	第5面
S676	8区	S21	0.34	0.32	0.19	第5面
S677	8区	S21	0.23	0.23	0.09	第5面
S679	8区	S21	0.21	0.19	0.17	第5面
S680	8区	R21・S21	0.37	0.34	0.18	第5面
S682	8区	R21	0.48	0.43	0.17	第5面
S683	8区	R21	0.36	0.33	0.13	第5面
S684	8区	R21	0.42	0.4	0.15	第5面
S685	8区	R21	0.36	0.31	0.08	第5面
S686	8区	R21	0.43	0.42	0.25	第5面
S687	8区	R21	0.3	0.2	0.14	第5面
S688	8区	R20	0.38	0.33	0.08	第5面
S689	8区	R21	0.36	0.28	0.28	第5面
S690	8区	R21	0.3	0.3	0.29	第5面
S691	8区	R21	0.42	0.4	0.37	第5面
S692	8区	R20	0.25	0.22	0.15	第5面
S693	8区	R21	0.45	0.37	0.12	第5面
S697	8区	R22	0.3	0.26	0.32	第1面
S699	8区	R22	0.4	0.3	0.15	第1面
S700	8区	R21	1.46	0.64	0.55	第5面
S702	8区	Q21	0.45	0.38	0.35	第5面
S703	8区	Q21	0.23	0.21	0.17	第5面
S704	8区	R21	0.35	0.3	0.08	第5面
S705	8区	Q21	0.28	0.24	0.27	第5面
S706	8区	Q21	0.25	0.23	0.24	第5面
S708	8区	Q21	0.36	0.3	0.24	第5面
S710	8区	R22	△0.21	△0.18	△0.2	第1面
S711	8区	R22	△0.52	△0.31	△0.15	第1面
S712	8区	Q21	0.27	0.23	0.2	第5面
S713	8区	Q21	0.26	△0.22	0.23	第5面
S718	8区	Q21	0.19	0.19	0.2	第5面
S719	8区	Q21	0.39	0.34	0.28	第5面
S720	8区	R21	0.28	0.27	0.32	第5面
S721	8区	R21	0.17	△0.05	0.09	第5面
S722	8区	R21	0.32	0.22	0.35	第5面
S723	8区	S22	△0.28	△0.28	△0.28	第1面
S724	8区	R22	0.26	0.23	0.26	第1面
S725	8区	S22	0.26	0.24	0.19	第1面
S726	8区	S22	0.25	0.19	0.25	第1面
S733	8区	R21	0.5	△0.06	0.3	第1面

※6・8区は非掲載ピット

表14 土器観察表(1)

掲載 番号	挿回 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
1	8	567	土師器 甕	4区 L10	IV層	※120	-	△3.5	外面：口縁～体部ナデ 内面：口縁～体部ナデ	密 良好	外面：褐灰～にぶい橙色 内面：橙色	
2	8	567	土師器 甕	4区 L10	IV層	※136	-	△3.7	外面：摩滅により不明瞭 内面：摩滅により不明瞭	密 良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
3	8	611	青磁 碗	4区 L10	IV層	-	-	△2.6	外面：体部施軸 内面：体部施軸・圏線1条	密 良好	施軸部：オリープ灰色 露胎部：オリープ灰・緑灰色	
5	12	470	弥生土器 甕	5区 L15	層位不明	※19.0	-	△5.6	外面：口縁部平行沈線10条、肩部ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄褐～灰黄褐色	
6	12	470	須恵器 壺	5区 L15	層位不明	※7.5	-	△2.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：黄灰色 内面：黄灰色	
7	27	39	瓦質土器 鍋	6-2区 L19	II層	※21.4	-	△4.4	外面：口縁部ココナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、体部ハケメ	密 良好	外面：黒～灰白色 内面：黄灰～黒褐色	外面煤付着
8	27	35	瓦質土器 鍋	6-2区 N19	II層	※34.0	-	△6.2	外面：口縁部ココナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、体部ハケメ	密 良好	外面：灰黄～黄灰色 内面：灰黄～黄灰～青黒色	外面煤付着
9	27	56	土師器 高台付環	6-2区 L19	III層	-	5.7	△1.5	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：体～底部回転ナデ	密 良好	外面：灰白～浅黄褐色 内面：灰白色	
10	27	51	土師器 環	6-2区 N19	III層	-	※5.8	△2.0	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：体～底部回転ナデ	密 良好	外面：明褐～にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
11	27	56	瓦質土器 羽釜	6-2区 L19	III層	※26.9	-	△11.0	外面：口縁部ココナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁～体部ハケメ	密 良好	外面：暗灰～黒色 内面：暗灰～褐灰色	外面煤付着
12	27	56	瀬戸美濃系 陶器 皿	6-2区 L19	III層	-	※6.0	△0.8	外面：底部露胎、胎土目付着 内面：底部蛇の目軸剥ぎ	密 良好	施軸部：オリープ～浅黄褐色 露胎部：灰白～明黄褐色	折線皿または丸皿の底部？
16	27	184	須恵器 環蓋	6-2区 L19	IV-2層	天井部 ※14.6	-	△1.7	外面：天井部回転系切り、天井部ナデ 内面：天井～天井部回転ナデ	密 良好	外面：灰白～黄灰色 内面：灰白色	
18	27	451	土師器 環	6-2区 M18	IV-4層	-	5.0	△1.5	外面：回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：暗黄褐色 内面：黄褐色	
19	27	412	土師器 高台付環	6-2区 L19	IV-4層	-	6.8	△2.7	外面：体部回転ナデ、高台内ヘラミガキ 内面：体～底部回転ナデ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
20	27	421	須恵器 壺	6-2区 L18	IV-4層	-	※6.8	△2.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰白色	
21	28	544	備前焼 罌鉢	6-3区 O20	II層	※29.4	-	△7.8	外面：口縁～体部ココナデ 内面：口縁部ココナデ、体部撞目	密 良好	外面：赤灰色 内面：灰赤色	
22	28	724	青磁 碗	6-3区 O19	III層	-	-	△2.8	外面：施軸・櫛描文 内面：施軸・圏線1条	密 良好	施軸部：灰オリープ色 露胎部：灰オリープ色	
23	28	649	青磁 碗	6-3区 O19	III層	-	※4.4	△1.6	外面：体部施軸、高台端部軸掻き取り・高台内施軸 内面：体～底部施軸	密 良好	施軸部：緑灰色 露胎部：灰色	龍泉窯
24	28	724	肥前系磁器 碗	6-3区 O19	III層	-	※4.4	△1.8	外面：体部施軸、底部無軸 内面：体～底部施軸	密 良好	施軸部：緑～暗青灰色 露胎部：灰オリープ色	
25	28	692・ 701	瓦質土器 鍋	6-3区 O19	III層	※24.7	-	△3.6	外面：口縁部ココナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、体部ハケメ	密 良好	外面：暗灰色 内面：灰色	外面煤付着
26	28	724	瓦質土器 鍋	6-3区 O19	III層	※29.8	-	△4.5	外面：口縁部ココナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、体部ハケメ	密 良好	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：灰色	外面煤付着
27	28	683・ 701	瓦質土器 鍋	6-3区 O19	III層	※34.0	-	△4.4	外面：口縁部ココナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁～体部ナデ	密 良好	外面：灰白～黄灰～黒色 内面：灰白～黄灰色	外面煤付着
29	28	837	土師器 柱状高台環	6-3区 N19	IV層	-	5.1	△2.5	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：体～底部回転ナデ	密 良好	外面：灰白～褐灰色 内面：明褐灰色	
30	28	854	土師器 高台付環	6-3区 N19	IV層	-	-	△2.2	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラナデ 内面：体～底部回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：灰黄褐色	
32	28	921	弥生土器 壺	6-3区 O19	V層	※17.4	-	△7.7	外面：口縁部凹線1条、頸部ハケメ後一部ヘラミガキ、 肩部ヘラ状工具による割突文 内面：口縁部ココナデ・ハケメ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
33	28	1039	須恵器 高台付壺	6-3区 N19	VI層	-	※9.0	△6.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰白色	
34	28	1039	土師器 環	6-3区 N19	VI層	-	※4.8	△1.5	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：体～底部回転ナデ	密 良好	外面：明褐灰色 内面：灰褐色	
35	28	1055	土師器 高台付環	6-3区 N19	VI層	-	-	△1.3	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：環部底面回転ナデ・ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：褐灰～にぶい褐色	
36	28	1100	土師器 環	6-3区 O19	VII層	-	※5.1	△3.0	外面：回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：浅黄橙～にぶい褐色 内面：にぶい黄褐色	
37	28	1100	土師器 環	6-3区 O19	VII層	-	※5.8	△1.5	外面：回転系切り 内面：回転ナデ	密 良好	外面：橙～黒褐色 内面：灰白～褐灰色	
38	28	642	青磁 香炉	6-3区 N20	IV～VII層	5.3	-	△4.0	外面：施軸、細連弁様の凹凸 内面：無軸	密 良好	施軸部：明オリープ灰～灰白色 露胎部：灰白色	
39	36	1000	弥生土器 甕	6-4区 O21	SS3	※20.0	-	△3.5	外面：口縁部多条平行沈線14条 内面：口縁部ココナデ	密 良好	外面：浅黄橙～褐色 内面：灰白色	

表15 土器観察表(2)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm)長さ(cm)	底径(cm)脚径(cm)	器高(cm)厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
40	36	1400	弥生土器 甕	6-4区 O21	SS 3	※19.4	-	△5.3	外面：口縁部平行沈線16条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙～浅橙色	
41	36	1408	弥生土器 高坏	6-4区 O21	SS 3	-	-	△6.5	外面：坏～脚柱部タテヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
42	36	1254	弥生土器 蓋	6-4区 O21	SS 3	-	つまみ部 3.6	△3.6	外面：つまみ部ヨコナデ、天井部ハケメ・ナデ 内面：つまみ部ヘラミガキ、天井部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄橙～明褐色 内面：灰白～浅黄橙色	天井部からの穿孔あり
43	36	1254	須恵器 坏蓋	6-4区 O21	SS 3 下層	天井部 ※14.4	-	△2.2	外面：回転ヘラケズリ・ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰～灰白～暗灰色 内面：灰色	
44	36	947	須恵器 坏蓋	6-4区 O21	SS 3	天井部 ※12.4	-	△1.5	外面：回転ヘラケズリ・ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
45	36	947	須恵器 高台付壺	6-4区 O21	SS 3	-	※9.1	△4.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
46	36	1290	須恵器 高台付皿	6-4区 O21	SS 3 ベルト整形	※14.6	※10.8	3.3	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転糸切り・高台貼り付け 内面：口縁～底部回転ナデ	密不良	外面：灰白色 内面：灰白色	
47	36	925・982	須恵器 高台付壺	6-4区 O21	SS 3	-	※13.6	△7.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
48	36	1254	土師器 小皿	6-4区 O21	SS 3	※8.1	※7.4	1.2	外面：口縁～体部ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁～底部ナデ	密良好	外面：浅黄橙～橙色 内面：浅黄橙～橙色	
49	40	957	瓦質土器 鍋	6-4区 O21	SE 1 下層	※21.8	-	△6.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ	密良好	外面：褐灰～灰色 内面：灰白～灰色	
50	43	162	弥生土器 器台	6-1区 K19	SS 1 上層	-	-	△4.0	外面：沈線5状・S字文(スタンプ文) 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい黄橙色 内面：橙色	
51	43	147・191	須恵器 坏身	6-1区 M20	SS 1 上層	※9.6	※6.4	4.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：明青灰色	
52	43	162	須恵器 蓋坏	6-1区 K19	SS 1 上層	※11.2	-	△3.3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰色	
53	43	162	須恵器 坏蓋	6-1区 K19	SS 1 上層	天井部 ※10.2	-	△3.5	外面：天井部回転ヘラケズリ、天井端部回転ナデ、屈曲部に段を持たない 内面：天井～天井端部回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰白色	
54	43	178・1277	須恵器 坏蓋	6-1区 K19	SS 1	天井部 17.6	つまみ部 5.2	2.9	外面：つまみ部内回転糸切り、天井～天井端部回転ナデ 内面：天井～天井端部回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰～灰オリーブ色	輪状つまみ
55	43	1275	須恵器 高坏	6-1区 K19	SS 1	-	※9.3	△5.6	外面：坏～脚部回転ナデ、脚部透かし孔(2箇所) 内面：坏部底面ナデ、脚部回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰白色	
56	43	1275	須恵器 高台坏	6-1区 K19	SS 1	-	※11.0	△1.7	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り・高台貼り付け 内面：底部ナデー研磨	密良好	外面：灰～灰オリーブ色 内面：灰色	転用硯
57	43	1275・1277	須恵器 甕	6-1区 K19	SS 1	-	-	△6.6	外面：口縁部欠損、頸部波状文 内面：口縁部～頸部回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
58	43	1277	須恵器 甕	6-1区 K19	SS 1	※18.8	-	△6.5	外面：口縁部回転ナデ、肩部平行タタキ 内面：口縁部回転ナデ、肩部同心円状当て具痕	密良好	外面：灰白～灰色 内面：灰色	
59	43	1423	土師器 坏	6-1区 K19	SS 1	13.9	-	△2.3	外面：ナデ、高台部欠損 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：明赤褐～灰白色 内面：明赤褐～灰白色	内外面赤色塗彩
60	43	1277	土師器 甕	6-1区 K19	SS 1	※30.2	-	△5.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：にぶい橙～褐灰色	
61	43	150	瓦質土器 鍋	6-1区 M20	SS 1 上層	-	-	△3.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁～体部ヨコナデ	密良好	外面：灰白～灰色 内面：灰白色	外面煤付者
62	43	1234	瓦質土器 鍋	6-1区 K19	SS 1 底面	-	-	△3.9	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁～体部ナデ	密良好	外面：暗灰～黒色 内面：暗灰色	外面煤付者
63	43	177	瓦質土器 羽釜	6-1区 L20	SS 1 上層	※27.5	-	△5.4	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ・指頭圧痕 内面：口縁～体部ヨコナデ	密良好	外面：暗灰色 内面：暗灰～黄灰色	外面煤付者
64	43	1233	瓦質土器 羽釜	6-1区 K19	SD1 下層	※18.4	-	△2.4	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ハケメ後ヨコナデ	密良好	外面：暗灰色 内面：暗灰色	
65	43	150	瓦質土器 鍋	6-1区 M20	SS 1 上層	-	-	△4.2	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：ハケメ後ナデ	密良好	外面：暗灰色 内面：灰色	外面煤付者
66	43	1277	瓦質土器 羽釜	6-1区 K19	SD1 下層	-	-	△2.3	外面：ヨコナデ 内面：ハケメ	密良好	外面：黒褐～黒色 内面：黒褐色	
67	43	150	陶器 香炉	6-1区 M20	SS 1 上層	-	※5.4	△2.6	外面：体部施釉、底部露胎 内面：底部無釉	密良好	施釉部：オリーブ黒 露胎部：灰黄～にぶい黄橙色	在地系
73	45	741	弥生土器 器台か壺	6-4区 P21	SB 3-P3	※19.4	-	△3.8	外面：口縁部平行沈線8条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
74	45	655	須恵器 坏	6-4区 P21	SB 3-P3	※12.3	-	△3.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰白色	
75	46	747	土師器 高坏	6-4区 P21	SB 4-P 2	-	※12.9	△2.1	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密良好	外面：橙～にぶい黄橙色 内面：橙～にぶい黄橙色	
76	46	754	弥生土器 甕か壺	6-4区 P21	SB 4-P 1	-	※6.2	△2.8	外面：ハケメ 内面：ナデ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	

表16 土器観察表(3)

掲載 番号	挿回 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
77	47	752・ 799・ 833・ 864・ 865	須恵器 坏	6-4区 M21	SD 5 下層	12.9	9.7	4.9	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：口縁～底部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
78	47	833	須恵器 坏	6-4区 M21	SD 5 下層	-	※9.2	△2.9	外面：体部回転ナデ、底面ナデ・ヘラ記号 内面：体部～底部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
79	47	719・ 833他	須恵器 甕	6-4区 M21	SD 5 下層	※18.0	-	26.3	外面：口縁部ナデ、体部平行タタキ 内面：口縁部ナデ、体部青海波状当て具痕	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	SX1と接合
80	47	1263	土師器 甕	6-4区 M21	SD 5	※20.6	-	△7.3	外面：口縁部ナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
81	47	1263	土師器 甕	6-4区 M21	SD 5	※20.2	-	△10.2	外面：口縁部ナデ・指頭圧痕、体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
82	47	1238・ 1263	土師器 甕	6-4区 M21	SD 5	※23.8	-	△11.9	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄橙～にぶい橙色 内面：浅黄橙～明褐色	
83	52	1099	須恵器 甕	6-4区 M21	SX 1	-	-	△3.5	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
84	52	927	須恵器 短頸壺	6-4区 M21	SX 1	※15.2	-	△5.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：オリーフ黒～灰白色 内面：オリーフ黒色	外面自然釉
85	52	1132・ 1136	須恵器 甕	6-4区 M21	SX 1	16.4	-	△12.2	外面：口縁部回転ナデ、体部平行タタキ 内面：口縁部回転ナデ、体部青海波状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰白色	外面自然釉
86	52	646・ 827・ 897・ 1015・ 1138	須恵器 短頸壺	6-4区 M21	SX 1	19.6	16.1	14.2	外面：口縁～体部回転ナデ、底部ナデ 内面：口縁～体部回転ナデ、底部ナデ	軟質 不良	外面：灰～暗灰～淡黄色 内面：灰白～黄灰～灰色	
87	52	801・ 880・ 914	土師器 坏	6-4区 M21	SX 1	※12.0	※8.0	3.6	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 良好	外面：浅黄橙～明赤褐色 内面：浅黄橙～明赤褐色	内外面赤色 塗彩
88	52	646・ 704・ 851・ 1008・ 1139他	土師器 甕	6-4区 M21	SX 1	※33.4	-	△5.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙～灰白色	外面煤付着
89	52	960・ 1008	土師器 甕	6-4区 N21	SX 1	※28.7	-	△6.5	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ・ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙～灰黄褐色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	
90	52	684・ 865・ 897・ 914・ 1031・ 1129・ 1135・ 1139	土師器 甕	6-4区 M21	SX 1	※29.5	-	△6.9	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ・ハケメ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付着
91	52	1129・ 1135	土師器 甕	6-4区 M21	SX 1	※30.3	-	△9.3	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：明黄褐～灰黄褐色 内面：にぶい黄橙～にぶい黄褐色	外面煤付着
92	52	639・ 684	土師器 甕	6-4区 M21	SX 1	※28.8	-	△8.5	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ハケメ	密 良好	外面：橙～黒色 内面：橙～浅黄褐色	外面煤付着
93	52	728・ 729・ 801・ 865・ 897	土師器 甕	6-4区 M21	SX 1	※30.2	-	△10.7	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ハケメ	密 良好	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：にぶい橙～褐灰色	外面煤付着
94	52	880	土師器 甕	6-4区 M21	SX 1	※26.6	-	△10.9	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄橙～灰褐色 内面：浅黄褐色	
95	52	866・ 867・ 868	土師器 甕	6-4区 M21	SX 1	※30.0	-	△8.9	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ・ハケメ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：橙色	
96	52	960・ 1133・ 1137	土師器 甕	6-4区 M21	SX 1	※29.0	-	△10.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙～黒褐色 内面：にぶい橙～黒褐色	
97	52	1127	土師器 甕	6-4区 M21	SX 1	※26.8	-	△15.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
98	55	930	土師器 甕	6-4区 N21	P73	※20.8	-	△7.1	外面：口縁部ナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
99	63	223	弥生土器 甕	6-1区 K21	SI 1 上層	※18.7	-	△23.5	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部 波状文、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～褐灰～黒色 内面：灰白～黒褐色	
100	63	397	弥生土器 甕	6-1区 K21	SI 1 上層	※17.9	-	△19.9	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部 波状文、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～明褐色 内面：灰白～橙色	被熱により 変形
101	63	223	弥生土器 甕	6-1区 K21	SI 1 上層	※16.2	-	△15.1	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部 波状文、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～明褐色 内面：灰白色	
102	63	348	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI 1 上層	13.4	-	22.0	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、体部 ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～明黄褐色 内面：灰白～浅黄褐色	

表17 土器観察表(4)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm) 長さ(cm)	底径(cm) 脚径(cm)	器高(cm) 厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
103	63	223	弥生土器 甕	6-1区 K21	SI1 上層	16.6	-	△9.8	外面：口縁端部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部平行沈線・ハケ状工具による刺突文・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：淡黄色 内面：淡黄色	
104	63	188	弥生土器 甕	6-1区 K20	SI1 上層	※18.8	-	△5.4	外面：口縁部多条平行沈線10条、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黒褐～にぶい橙色 内面：にぶい橙～灰褐色	外面煤付者
105	63	187・ 232	弥生土器 甕	6-1区 K21	SI1 上・下層	※19.1	-	△7.3	外面：口縁部多条平行沈線15条、体部平行沈線8条・ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：淡橙～褐灰色 内面：にぶい橙色	
106	63	853	弥生土器 甕	6-1区 K20	SI1 肩付近	※18.0	-	△3.2	外面：口縁部ヨコナデ、肩部摩滅により不明瞭 内面：口縁～肩部摩滅により不明瞭	密良好	外面：淡黄橙色 内面：淡黄橙色	
107	63	176・ 226	弥生土器 甕	6-1区 K21	SI1 下層	16.2	-	△16.0	外面：口縁端部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、体部ハケ状工具による刺突文・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～黒色 内面：灰白色	
108	63	234	弥生土器 甕	6-1区 K21	SI1 下層	※18.6	-	△5.4	外面：口縁部多条平行沈線16条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
109	63	238	弥生土器 甕	6-1区 K21	SI1 下層	※18.9	-	△7.4	外面：口縁部多条平行沈線11条、肩部平行沈線11条・波状文 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～灰褐色 内面：にぶい橙～にぶい褐色	
110	63	231	弥生土器 高坏	6-1区 K21	SI1 下層	16.6	-	△10.1	外面：坏部ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ナデ	密良好	外面：浅黄橙～褐灰色 内面：褐灰～にぶい橙色	
111	63	235	弥生土器 高坏	6-1区 K21	SI1 下層	-	※14.4	△5.1	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ、ハケメ後一部ナデ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	外面赤色塗彩
112	63	1054	弥生土器 器台	6-1区 K20	SI1 東西断ち割り	20.0	-	△6.2	外面：受け部多条平行沈線19条、脚柱部ヨコヘラミガキ 内面：受け部ハケメ後ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
113	63	502	弥生土器 蓋	6-1区 K20	SI1 炭化物上層	天井部 ※11.8	-	△2.4	外面：つまみ部欠損、天井～天井端部ヘラミガキ 内面：天井部ヘラミガキ・指頭圧痕、天井端部ヨコナデ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
114	63	1341-2	弥生土器 甕	6-1区 K20	SI1 床直上	※16.8	-	△5.4	外面：口縁部平行沈線9条、肩部刺突文・ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ・ナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：橙色 内面：橙色	
115	63	1341-1	弥生土器 甕	6-1区 K20	SI1 床直上	※16.5	-	△4.8	外面：口縁部ナデ、頭部ナデ 内面：口縁部ナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：淡黄色 内面：淡黄色	
116	63	871	弥生土器 甕	6-1区 K21	SI1 床直上	※13.9	-	△2.8	外面：口縁～頭部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ・ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄色 内面：灰黄色	
117	63	1341-2	弥生土器 甕	6-1区 K20	SI1 床直上	-	-	△3.3	外面：口縁～頭部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頭部ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付者
118	63	1482	弥生土器 器台	6-1区 K20	SI1 貼床下	-	-	△3.1	外面：受け部平行沈線8条、脚柱部ナデ 内面：受け部ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい橙～灰白色 内面：にぶい赤褐～褐灰色	
119	63	931	弥生土器 甕	6-1区 K20	SI1 南ベルト①	※18.4	-	△7.1	外面：口縁部ヨコナデ、体部タテハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～褐灰～黒色 内面：灰白～黒褐色	
120	63	932	弥生土器 甕	6-1区 K20	SI1 不明	※16.6	-	△6.0	外面：口縁端部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄色 内面：灰黄～黒色	
121	65	1595	弥生土器 甕	6-1区 K20・21	SI1-SK2	-	-	△3.6	外面：口縁部多条平行沈線18条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
122	65	1595	弥生土器 甕	6-1区 K20・21	SI1-SK2	※21.6	-	△4.8	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
123	65	1459	弥生土器 高坏	6-1区 K21	SI1-P2	※23.5	-	△3.7	外面：ヨコヘラミガキ 内面：ヨコヘラミガキ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
124	66	1046	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI2 床下	※12.6	-	△3.8	外面：口縁部平行沈線8条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付者
125	66	1004	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI2 床下	※25.0	-	△5.2	外面：口縁部平行沈線10条、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄橙～にぶい橙色 内面：浅黄橙～にぶい黄褐色	
126	66	1003	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI2 床下	※15.0	-	△4.3	外面：口縁部浅い平行沈線、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～黒色 内面：灰白色	外面煤付者
127	66	984・ 985	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI2 床下	※17.3	-	△4.3	外面：口縁部平行沈線5条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黒褐～褐色 内面：明褐灰～にぶい橙色	外面煤付者
128	66	1004	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI2 床下	※16.0	-	△6.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい褐～褐灰色 内面：褐灰～にぶい橙色	
129	66	1213	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI2 床下	-	-	△4.9	外面：口縁端部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～褐灰色 内面：灰白色	
130	66	984	弥生土器 壺	6-1区 L21	SI2 床下	※13.3	-	△4.1	外面：口縁部平行沈線6条、頭部ナデ 内面：口縁～頭部ヨコナデ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙・明褐灰色	
131	66	985	弥生土器 甕か壺	6-1区 L21	SI2 床下	-	※6.6	△4.6	外面：体部ハケメ・ナデ、底面ナデ 内面：体～底部摩滅により不明瞭	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
132	68	289	弥生土器 甕	6-1区 L20	SI3 上層	※15.2	-	△13.3	外面：口縁端部凹み、口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～浅黄褐色 内面：灰白～明褐灰色	

表18 土器観察表(5)

掲載 番号	挿回 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
133	68	259・ 276	土師器 鼓形器台	6-1区 L21	SI3 上層	※19.1	※16.8	10.4	外面：受け部～脚台部ヨコナデ 内面：受け部ナデ?、脚台部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～橙色 内面：灰白～橙色	
134	68	348	土師器 鼓形器台	6-1区 L21	SI3 上層	-	※15.2	△3.6	外面：脚台部ヨコナデ 内面：脚台部ヘラケズリ、脚端部ヨコナデ	密 良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
135	68	1047	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI3 床面	-	-	△5.1	外面：口縁部工具によるヨコナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	ふつう 良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
136	68	1034	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI3 床面	※23.0	-	△5.1	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部 ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
137	68	1047	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI3 床面	※8.5	-	△4.5	外面：口縁部ハケ状工具によるナデ、体部ナデ 内面：口縁～体部ヘラケズリ後ナデ	ふつう 良好	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	
138	68	1034	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI3 床面	-	-	△4.5	外面：口縁部平行沈線11条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：淡黄～にぶい黄橙色 内面：灰白色	
139	68	1047	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI3 床面	※21.8	-	△5.0	外面：口縁部平行沈線6条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	ふつう 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
140	68	1034	弥生土器 甕	6-1区 L21	SI3 床面	-	-	△3.4	外面：平行沈線16条 内面：ヨコナデ	ふつう 良好	外面：にぶい橙～にぶい褐色 内面：灰褐～褐色	外面煤付着
141	68	379	弥生土器 器台	6-1区 L21	SI3-P2	-	※15.5	△3.2	外面：平行沈線7条・ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～明褐灰色 内面：灰褐色	外面赤色塗 彩
143	70	993	須恵器 高台付壺	6-4区 N21	SD 8	-	-	△4.3	外面：体～底部回転ナデ 内面：体～底部回転ナデ	密 良好	外面：暗灰色 内面：灰色	
144	70	999	土師器 壺	6-4区 N21	SD 8	※13.6	-	△4.7	外面：口縁～体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁～体部ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
145	70	999	土師器 高坏	6-4区 N21	SD 8	※19.5	-	△5.3	外面：口縁～体部ハケメ後ナデ 内面：口縁～体部ナデ	密 良好	外面：浅黄橙～明赤褐色 内面：浅黄橙～明赤褐色	内外面赤色 塗彩
146	72	1407	弥生土器 裝飾壺	6-4区 N20	SS 2	-	-	△3.2	外面：沈線3条・渦文(スタンプ文)・沈線3条 内面：ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～赤色 内面：灰白～赤色	内外面赤色 塗彩
147	72	1399	弥生土器 甕	6-4区 N20	SS 2	※17.2	-	△4.9	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	密 良好	外面：黒～浅黄褐色 内面：灰白～浅黄褐色	外面煤付着
148	72	1407	弥生土器 高坏	6-4区 N20	SS 2	※13.0	-	△3.8	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	密 良好	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	
149	72	951	弥生土器 鼓形器台	6-4区 O20	SS 2 下層	-	-	△6.8	外面：受け～脚台部摩滅により不明瞭 内面：受け部摩滅により不明瞭、脚台部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
150	72	1407	弥生土器 器台	6-4区 N20	SS 2	-	※15.4	△3.7	外面：平行沈線6条以上・ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ・ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい褐～黄褐色	
151	72	926	須恵器 蓋	6-4区 N21	SS 2	天井部 ※12.4	-	4.2	外面：天井部回転ヘラケズリ、天井～天井部回転ナ デ 内面：天井～天井部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
152	72	919	須恵器 高台付坏	6-4区 N21	SS 2	-	※7.6	△2.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰色	
153	72	1033	須恵器 高台付坏	6-4区 M21	SS 2	-	※9.0	△1.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	軟質 不良	外面：灰白色 内面：灰白色	
154	72	982	須恵器 壺	6-4区 N21	SS 2 上層	-	※10.6	△3.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
155	72	919	須恵器 短頸壺	6-4区 N21	SS 2 上層	-	-	△9.7	外面：頸～体部回転ナデ、体部カキメ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
157	73	1161	弥生土器 甕	6-4区 P21	SD10	※16.0	-	△4.2	外面：口縁部平行沈線14条、頸部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、頸部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：褐色	外面煤付着
158	73	1161	弥生土器 器台	6-4区 P21	SD10	※27.6	-	△4.6	外面：口縁部平行沈線14条 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい橙～灰褐色 内面：褐色	
159	75	1325	弥生土器 甕	6-4区 N21	杭 1	※22.0	-	△3.9	外面：平行沈線10条 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：黒褐～にぶい橙色 内面：橙～黒色	外面煤付着
160	75	1324	弥生土器 甕	6-4区 M21	杭 2	※18.8	-	△3.1	外面：平行沈線4条 内面：ナデ	密 良好	外面：褐灰～黒褐色 内面：褐灰～灰褐色	
161	77	1307	弥生土器 甕	6-1区 K21	P93	※16.2	-	△4.4	外面：口縁部平行沈線8条、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケメ・ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙～褐色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
162	77	1300	弥生土器 裝飾壺	6-1区 K21	P95	-	-	△4.6	外面：ヘラ状工具による羽状文 内面：ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：にぶい褐色	
163	82	1575	弥生土器 台付鉢	6-4区 O20	SS 5	※14.2	-	△10.3	外面：口縁部ヨコナデ・穿孔2箇所1単位、体部ヘラ ミガキ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ・指頭圧痕	密 良好	外面：灰白～褐灰色 内面：明褐灰～褐灰色	台部欠損
164	83	1372	弥生土器 甕	6-4区 M21	SS 4 上段	※17.5	-	△3.2	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部指頭圧痕	密 良好	外面：明黄褐色 内面：浅黄橙～明黄褐色	
165	83	1379	弥生土器 甕	6-4区 M21	SS 4 上段	※17.0	-	△4.0	外面：口縁部凹線3条、肩部ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい橙～褐色	
166	83	1089	弥生土器 甕	6-4区 N21	SS 4 上段	※16.2	-	△7.4	外面：口縁部凹線4条、肩部ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：褐～明褐色 内面：明褐色	

表19 土器観察表(6)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm)長さ(cm)	底径(cm)脚径(cm)	器高(cm)厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
167	83	1384	弥生土器 甕	6-4区 N21	SS 4 上段	※12.8	-	△4.4	外面：口縁部平行沈線8条、肩部ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：にぶい橙～褐灰色	外面煤付者
168	83	1379	弥生土器 甕	6-4区 M21	SS 4 上段	※14.0	-	△4.1	外面：口縁部平行沈線5条、肩部ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：黒～黒褐色 内面：にぶい褐～暗褐色	
169	83	1372	弥生土器 甕	6-4区 M21	SS 4 上段	※17.0	-	△3.9	外面：口縁部平行沈線8条、肩部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付者
170	83	1090	弥生土器 甕	6-4区 M21	SS 4 上段	※20.4	-	△5.7	外面：口縁部平行沈線13条、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：橙色 内面：橙色	
171	83	1372	弥生土器 甕	6-4区 M21	SS 4 上段	※17.2	-	△6.7	外面：口縁部平行沈線11条、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：にぶい橙色 内面：橙色	外面煤付者
172	83	1379	弥生土器 甕	6-4区 M21	SS 4 上段	※17.8	-	△4.6	外面：口縁部平行沈線8条、肩部ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい橙色	外面煤付者
173	83	1379	弥生土器 甕	6-4区 M21	SS 4 上段	※16.0	-	△4.1	外面：口縁部平行沈線10条、頸部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい橙色	外面煤付者
174	83	1089	弥生土器 甕	6-4区 N21	SS 4 上段	※19.0	-	△6.6	外面：口縁部平行沈線8条、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：橙～にぶい褐色 内面：にぶい橙～にぶい褐色	
175	83	1379	弥生土器 甕	6-4区 M21	SS 4 上段	※15.8	-	△6.2	外面：口縁部平行沈線11条、肩部波状文 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：黒～にぶい黄褐色 内面：灰黄褐～黒褐色	
176	83	1384	弥生土器 甕	6-4区 N21	SS 4 上段	※11.7	-	△3.4	外面：口縁部平行沈線4条、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：黒褐～褐色 内面：灰褐～にぶい橙色	外面煤付者
177	83	1090	弥生土器 甕	6-4区 M21	SS 4 上段	※23.8	-	△5.7	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	
178	83	1384	弥生土器 甕	6-4区 N21	SS 4 上段	※20.3	-	△5.5	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：にぶい橙～灰褐色 内面：にぶい橙色	
179	83	1384	弥生土器 甕	6-4区 N21	SS 4 上段	※12.9	-	△5.8	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリによる刺突文、 体部ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、肩～体部ヘラケズリ	審 良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい橙色	外面煤付者
180	83	1384	弥生土器 甕	6-4区 N21	SS 4 上段	※18.4	-	△5.2	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：灰褐色 内面：にぶい橙～明赤褐色	
181	83	1607	弥生土器 台付甕	6-4区 N21	SS 4 上段	-	※15.2	△14.0	外面：体部ハケメ、脚部ヘラミガキ・平行沈線4条 内面：体部摩滅により不明瞭、脚部ヘラケズリ	審 良好	外面：灰白～にぶい黄褐色 内面：灰白～にぶい黄褐色	
182	84	1090	弥生土器 壺	6-4区 M21	SS 4 上段	※18.3	-	△7.0	外面：口縁部平行沈線3条、頸部ナデ・スタンプ文 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ	審 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
183	84	1245	弥生土器 壺	6-4区 N21	SS 4 上段	※14.0	-	△6.8	外面：口縁部凹線3条、頸部ナデ、肩部ハケメ 内面：口縁～頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：橙～明褐色 内面：橙～明褐色	
184	84	1384	弥生土器 壺	6-4区 N21	SS 4 上段	※14.8	-	△6.5	外面：口縁部平行沈線4条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ	審 良好	外面：にぶい黄橙～灰黄褐色 内面：にぶい橙色	
185	84	1090	弥生土器 壺	6-4区 M21	SS 4 上段	※16.2	-	△4.7	外面：口縁部平行沈線6条・波状文、頸部ハケメ 内面：口縁～頸部ハケメ後ヘラミガキ	審 良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
186	84	1384	弥生土器 器台	6-4区 N21	SS 4 上段	※25.7	-	△6.2	外面：棒状浮文2本・三角文(沈線3条1組) 内面：ヘラミガキ	審 良好	外面：褐灰～にぶい黄褐色 内面：灰黄褐～褐灰色	外来系?
187	84	1379	弥生土器 注口土器	6-4区 M21	SS 4 上段	-	-	△8.9	外面：把手～体部ヘラミガキ・ハケメ 内面：体部ヘラケズリ	審 良好	外面：灰白～黒色 内面：灰白～黄灰色	外面煤付者
188	84	1384・ 1394	弥生土器 器台	6-4区 N21	SS 4 上段	※13.0	-	△4.6	外面：口縁部平行沈線6条・ヘラミガキ 内面：受け部ヘラミガキ	審 良好	外面：赤褐～灰黄褐色 内面：にぶい褐色	内外面赤色 塗彩
189	84	1384	弥生土器 高坏	6-4区 N21	SS 4 上段	※18.6	-	△3.9	外面：坏部口縁～体部ナデ 内面：坏部口縁～体部ヘラミガキ	審 良好	外面：赤～にぶい橙色 内面：にぶい橙色	内外面赤色 塗彩
190	84	1245	弥生土器 高坏	6-4区 N21	SS 4 上段	-	※12.4	△3.3	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ナデ	審 良好	外面：明赤褐～灰白色 内面：明赤褐～灰白色	内外面赤色 塗彩
191	84	1384	弥生土器 器台	6-4区 N21	SS 4 上段	※21.0	※15.5	△19.2	外面：受け部口縁部平行沈線8条、脚柱部ヘラミガキ、 脚部ヘラミガキ・平行沈線9条 内面：受け部ヘラミガキ、脚柱部ヘラケズリ・シボリ、 脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ	審 良好	外面：灰白～浅黄褐色 内面：浅黄橙～橙～褐灰色	外面赤色 塗彩
192	84	1372	弥生土器 低脚坏	6-4区 M21	SS 4 上段	※8.4	※5.4	4.3	外面：坏部ヘラミガキ、脚部ナデ 内面：坏～脚部ナデ	審 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
193	84	1090	土器 低脚坏	6-4区 M21	SS 4 上段	-	-	△3.7	外面：坏～脚部摩滅により不明瞭 内面：坏部ハケメ後ヘラミガキ、脚部ナデ	審 良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
195	91	1605	弥生土器 器台	6-1区 K20	SB 5	-	-	△4.4	外面：受け部口縁部平行沈線14条 内面：受け部ヘラミガキ	審 良好	外面：にぶい橙～褐色 内面：にぶい黄褐色	外面赤色 塗彩
196	91	1471	弥生土器 甕	6-1区 K19	SB 5 北側布基礎	-	-	△2.7	外面：口縁部ハケケ工具によるナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：橙色 内面：褐色	
197	91	1471	弥生土器 器台	6-1区 K19	SB 5 北側布基礎	-	※15.2	△2.2	外面：平行沈線3条 内面：ヘラケズリ	審 良好	外面：黒褐～にぶい褐色 内面：黒色	
198	91	1471	弥生土器 甕	6-1区 K19	SB 5 北側布基礎	-	-	△4.7	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	ふつ 良好	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	外面体部煤 付者
199	91	1470	弥生土器 甕か壺	6-1区 K19	SB 5 南側布基礎	-	※5.0	△2.9	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	審 良好	内面：にぶい橙～黒色 外面：にぶい黄褐色	外面煤付者

表20 土器観察表(7)

掲載番号	押回番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm) 長さ(cm)	底径(cm) 脚径(cm)	器高(cm) 厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
200	94	1190	弥生土器 甕	6-4区 N21	SD11	※20.4	-	△6.4	外面：口縁部凹線4条、肩部ハケメ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ・指頭圧痕	密 良好	外面：にぶい橙～明褐色 内面：浅黄橙～にぶい橙色	
201	94	1203・ 1224・ 1225	弥生土器 甕	6-4区 P21	SD11	※15.4	-	△18.2	外面：口縁部平行沈線3条、体部ハケ状工具による刺突文・タテハケ・ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、体部ハケメ・指頭圧痕	密 良好	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：灰黄～灰色	
202	94	1108・ 1166	弥生土器 壺	6-4区 N21	SD11	19.8	-	△38.0	外面：口縁部凹線4条、頭部ハケメ後ヘラミガキ、肩部ハケ状工具による刺突文、肩～体部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ハケメ、頭部ハケメ後ヘラミガキ、体部ヘラケズリ後ハケメ・指頭圧痕	密 良好	外面：橙～黒褐色 内面：橙～黒色	
203	94	1230	弥生土器 壺	6-4区 N21	SD11	※17.8	-	△5.4	外面：口縁部平行沈線3条、頭部ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、頭部ヘラミガキ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
204	94	1080・ 1096	弥生土器 壺	6-4区 N21	SD11	※18.7	-	△9.4	外面：口縁部平行沈線5条、頭部ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、頭部ヘラミガキ	密 良好	外面：灰白～褐色 内面：浅黄橙～にぶい橙色	
205	94	1224・ 1225	弥生土器 甕か壺	6-4区 N21	SD11	-	※5.4	△6.1	外面：体部ヘラミガキ、底面ナデ 内面：体部～底部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐～にぶい黄褐色 内面：灰黄褐～褐色	
206	94	1195・ 1205・ 1224・ 1269・ 1289	弥生土器 甕か壺	6-4区 M・N21	SD11	-	※7.7	△24.9	外面：体部ハケメ、底面ハケメ 内面：体部～底部ヘラケズリ・指頭圧痕	密 良好	外面：にぶい橙～黒褐色 内面：橙～にぶい橙色	
207	95	1529	弥生土器 蓋	6-1区 L20	SK18	-	つまみ部 3.9	△3.2	外面：つまみ～天井部上端ナデ 内面：天井部上端ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙～褐色 内面：黒褐色	内
208	95	1529	弥生土器 甕	6-1区 L20	SK18	※17.8	-	△4.3	外面：口縁部平行沈線5条、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：暗褐～黒色 内面：にぶい橙～褐色	外面煤付着
209	97	1530	弥生土器 甕	6-1区 L20	SK19	※18.6	-	△4.5	外面：口縁部平行沈線7条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：黒褐～にぶい黄褐色 内面：橙～灰褐色	外面煤付着
210	97	1530	弥生土器 高坏	6-1区 L20	SK19	-	※14.8	△3.6	外面：脚部ナデ、脚部平行沈線3条 内面：脚部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：黒褐色	
211	98	1301	弥生土器 甕	6-1区 K21	杭6	-	-	△6.1	外面：口縁部平行沈線8条、体部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：黒褐色	
212	100	1445	弥生土器 甕	6-4区 M21	P117	※16.4	-	△5.9	外面：口縁部多条平行沈線17条、肩部平行沈線5条 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
213	100	1455	弥生土器 甕か壺	6-4区 M21	P121	-	4.9	△2.3	外面：体部ハケメ後ヘラミガキ、底面ナデ 内面：体～底部ヘラケズリ・ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：灰黄褐色	
214	100	1448	弥生土器 甕	6-4区 N21	P133	※17.2	-	△3.4	外面：口縁部平行沈線3条、頭部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頭部上半ヘラミガキ、頭部下半ヘラケズリ	密 良好	外面：黒褐～黒色 内面：灰褐～褐色	外面煤・炭化物
215	100	1466	弥生土器 器台	6-1区 L21	P161	-	-	4.2	外面：受け部口縁部平行沈線13条 内面：受け部ヘラミガキ	密 良好	外面：橙～にぶい黄褐色 内面：橙～にぶい黄褐色	内外面赤色塗彩
216	100	1520	弥生土器 甕	6-1区 L21	P167	18.5	-	△6.6	外面：口縁部平行沈線6条、肩部波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：褐色 内面：灰褐色	
217	100	1466	弥生土器 甕	6-1区 L21	P167	※17.8	-	△4.8	外面：口縁部平行沈線10条、頭部ヨコナデ 内面：口縁～頭部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰褐色 内面：灰黄褐色	外面煤付着
218	100	1520	弥生土器 甕	6-1区 L21	P167	※16.8	-	△5.0	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	外面煤付着
219	100	1467	弥生土器 壺	6-1区 K20	P185	※15.8	-	△3.4	外面：口縁部平行沈線5条、頭部ナデ 内面：口縁～頭部ヨコナデ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
220	103	1521	弥生土器 甕	6-4区 M21	P255	※18.6	-	△5.7	外面：口縁部平行沈線7条、肩部貝殻腹線による押引文 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄褐色	外面煤・炭化物付着
221	103	1555	弥生土器 高坏	6-1区 L20	P350	※25.0	-	△4.4	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
222	103	1556	弥生土器 甕	6-1区 L20	P372	-	-	△4.9	外面：凹線2条・ナデ 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	
223	103	1567	弥生土器 壺	6-1区 L20	P406	-	-	△4.6	外面：ハケメ・ヘラミガキ・ハケ状工具による刺突文 内面：ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい橙色	
224	103	1565	弥生土器 甕	6-1区 L20	P412	※25.0	-	△1.9	外面：凹線3条 内面：ヨコナデ	密 良好	外面：橙・灰褐色 内面：橙・にぶい褐色	
225	103	1571	弥生土器 甕か壺	6-1区 K20	P442	-	※6.8	△7.0	外面：体部ヘラミガキ、底面ナデ 内面：体～底部ヘラケズリ・指頭圧痕	密 良好	外面：にぶい黄褐～黒褐色 内面：橙～暗褐色	
226	105	118	弥生土器 甕	6-1区 J20	I層	※13.6	-	△5.8	外面：口縁部平行沈線5条、肩部貝殻腹線による刺突文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
227	105	118	弥生土器 甕	6-1区 J20	I層	※20.4	-	△4.7	外面：口縁部ヨコナデ・S字文(スタンプ文)・円文(スタンプ文) 内面：口縁部ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：灰黄色	
228	105	84	弥生土器 甕	6-1区 K20	I層	※19.8	-	△7.2	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	

表21 土器観察表(8)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
229	105	106	弥生土器 鼓形器台	6-1区 K20	I層	※22.8	-	△8.4	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ヘラミガキ	密 良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
230	105	64	弥生土器 鼓形器台	6-1区 K20	I層	※18.2	-	△5.9	外面：刺突文2列・ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：灰褐～橙色 内面：灰褐～橙色	
231	105	94	弥生土器 水差形土器	6-1区 L20	I層	-	-	△6.7	外面：把手ナデ 内面：把手ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄橙色	
232	105	643	弥生土器 裝飾壺	6-4区 P21	I層	※6.8	-	△5.1	外面：口縁部ナデ・穿孔、体部沈線2条1組を5段・ 半截竹管による爪形文 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～褐色 内面：灰白色	
233	105	509	弥生土器 台付鉢	6-4区 P22	I層	-	※12.6	△4.6	外面：脚部平行沈線5条1組を2段・円孔(6箇所)、 脚端部凹線2条 内面：脚部ヘラケズリ後一部ヘラミガキ	密 良好	外面：浅黄橙色 内面：灰白色	
234	105	58・61	土師器 高坏	6-1区 K20	I層	※15.4	-	△6.7	外面：摩滅により不明瞭 内面：摩滅により不明瞭	密 良好	外面：橙～にぶい褐色 内面：橙～にぶい褐色	内外面赤色 塗彩
235	105	123	土師器 高坏	6-1区 L20	I層	※15.7	-	△5.3	外面：ハケメ 内面：ヘラミガキ(放射状暗文)	密 良好	外面：橙～灰白色 内面：橙～浅黄褐色	内外面赤色 塗彩
236	105	93	土師器 高坏	6-1区 K19	I層	-	-	△3.7	外面：ハケメ 内面：ヘラミガキ(放射状暗文)	密 良好	外面：橙～にぶい褐色 内面：赤色	内外面赤色 塗彩
237	105	95	土師器 高坏	6-1区 K20	I層	-	-	△4.8	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ後ヘラミガキ	密 良好	外面：灰白～褐灰色 内面：灰白色	天 神 川 I 期?
238	105	58	土師器 高坏	6-1区 K20	I層	-	※14.7	△9.7	外面：脚柱～脚部ナデ・ハケメ 内面：脚柱部シボリ・ナデ、脚部指頭丘痕・ハケメ	密 良好	外面：明赤褐～淡褐色 内面：淡褐色	内外面赤色 塗彩
239	105	64	土師器 高坏	6-1区 K20	I層	-	10.7	△8.3	外面：脚柱部タテヘラミガキ、脚部摩滅により不明瞭 内面：脚柱部シボリ・脚部ハケメ	密 良好	外面：にぶい黄橙～褐色 内面：褐灰～にぶい黄褐色	内外面赤色 塗彩
240	105	483	土師器 高坏	6-4区 M20	I層	-	※8.7	△5.3	外面：ハケメ・ナデ 内面：ハケメ・ナデ・シボリ	密 良好	外面：灰白～明赤褐色 内面：灰白～明赤褐色	内外面赤色 塗彩
241	105	109	土師器 塊	6-1区 K20	I層	11.4	-	5.5	外面：ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：淡橙～褐色 内面：褐色	
242	105	99	土師器 甕	6-1区 M20	I層	※15.4	-	△4.9	外面：口縁～肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ	密 良好	外面：黒褐～灰褐色 内面：褐色	
243	105	64	土師器 甕	6-1区 K20	I層	※15.8	-	△12.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ・指頭 圧痕	密 良好	外面：浅黄橙～黒褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付着
244	105	481・ 493	土師器 甕	6-4区 M21	I層	※31.4	-	△12.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄橙～明褐灰色 内面：浅黄褐色	
245	105	95	土師器 甕	6-1区 K20	I層	※33.8	-	△7.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	密 良好	外面：にぶい褐～にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
246	105	61	土師器 甕	6-1区 K19	I層	※24.0	-	△7.7	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：褐灰～にぶい褐色 内面：灰褐～にぶい褐色	
247	105	481	土師器 甕	6-4区 M21	I層	※35.0	-	△7.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい橙～褐色	
248	105	466・ 481・ 493	土師器 甕	6-4区 M・N21	I層	23.8	-	△9.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：浅黄褐色	
249	105	98	土師器 甕	6-1区 K19	I層	※36.0	-	△7.1	外面：口縁～体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい赤褐～黒色 内面：にぶい赤褐色	外面煤付着
250	106	126	須恵器 坏身	6-1区 J19	I層	※14.0	-	△3.3	外面：口縁部回転ナデ、体部回転ヘラケズリ・ナデ 内面：口縁～体部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：褐灰色	
251	106	65・ 112・ 178他	須恵器 高台付坏	6-1区 J19・20	I層	※15.8	-	△4.7	外面：口縁～体部回転ナデ、底部ナデ・高台欠損 内面：口縁～底部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
252	106	98	須恵器 高台付坏	6-1区 K19	I層	※12.8	※9.6	4.4	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：口縁～底部回転ナデ	密 不良	外面：灰白色 内面：灰白色	
253	106	98	須恵器 高台付坏	6-1区 K19	I層	-	※7.4	△1.5	外面：回転ナデ、高台貼り付け後ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：暗灰色 内面：灰色	
254	106	101	須恵器 高台付坏	6-1区 K19	I層	-	8.1	△1.6	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：体～底部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
255	106	65	須恵器 高台付坏	6-1区 J20	I層	※13.4	8.6	5.2	外面：口縁～体部回転ナデ、底部ナデ 内面：口縁～底部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰白色	
256	106	54	須恵器 高台付坏	6-1区 K20	I層	-	7.5	△3.9	外面：体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：体～底部回転ナデ	密 良好	外面：オリブ灰～灰色 内面：灰色	
257	106	457	須恵器 蓋	6-4区 P21	I層	天井部 ※16.0	-	△2.0	外面：天井部回転系切り、天井部～天井端部回転ナデ 内面：天井～天井端部回転ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
258	106	112	須恵器 長頸壺	6-1区 J19	I層	※7.3	-	△5.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
259	106	101	須恵器 短頸壺	6-1区 K19	I層	※9.8	8.5	8.4	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：口縁～底部回転ナデ	密 良好	外面：青灰色 内面：青灰色	

表22 土器観察表(9)

掲載番号	採回番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm) 長さ(cm)	底径(cm) 脚径(cm)	器高(cm) 厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
260	106	65	須恵器高坏	6-1区J20	I層	-	9.3	△10.8	外面：坏部回転ナデ、脚部回転ナデ・台形透かし孔(1箇所) 内面：坏～脚部回転ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
261	106	103	須恵器高坏	6-1区J20	I層	-	-	△5.5	外面：坏部回転ナデ、脚部回転ナデ・台形透かし孔(1箇所) 内面：坏～脚部回転ナデ	密良好	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
262	106	101	須恵器横瓶	6-1区K19	I層	※9.4	-	△21.8	外面：口縁部回転ナデ、体部平行タタキ 内面：口縁部回転ナデ、体部青海波状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
263	106	678	土師器小皿	6-4区N20	I層	※8.0	※6.0	1.4	外面：口縁～体部ヨコナデ、底部回転系切り 内面：口縁～底部ヨコナデ	密良好	外面：灰白～褐灰色 内面：灰白色	
264	106	1	陶器仏花瓶	6-1区法面北寄)	I層	-	3.8	△5.0	外面：体部施釉、底部無釉 内面：体～底部施釉	密良好	施釉部：にぶい黄褐色 露胎部：灰黄褐色	
265	106	508	瓦質土器鍋	6-4区N21	I層	※20.2	-	△8.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部～体部ハケメ	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
266	106	579	備前焼播鉢	6-4区N20	I層	※22.8	※13.8	11.6	外面：口縁～体部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部播目9本1組	密良好	外面：赤褐～黄灰色 内面：赤褐～黄灰色	
272	108	168	弥生土器舞台	6-1区K19	II層・IV-1層	※17.7	-	△4.8	外面：受け部平行沈線3条・タテハラミガキ 内面：受け部摩滅により不明瞭	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
273	108	202	弥生土器高坏	6-1区K20	II層・IV-1層	※28.4	-	△5.6	外面：ナデ後ハラミガキ 内面：ナデ後ハラミガキ	密良好	外面：浅黄橙～明褐灰色 内面：浅黄褐色	
274	108	178	弥生土器鼓形器台	6-1区K20	II層・IV-1層	-	-	△8.7	外面：受け～脚台部ヨコナデ 内面：受け部ハラミガキ、脚柱～脚台部ナデ・ハラケズリ	密良好	外面：浅黄色 内面：浅黄色	
275	108	151	土師器壺	6-1区K21	II層・IV-1層	12.6	6.0	4.6	外面：口縁～底部ナデ 内面：口縁～底部ナデ	密良好	外面：赤色 内面：浅黄橙～赤色	内外面赤色塗彩
276	108	168	土師器甕	6-1区K19	II層・IV-1層	※19.2	-	△6.5	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハラケズリ	密良好	外面：橙色 内面：にぶい橙～橙色	
277	108	179	土師器甕	6-1区J19	II層・IV-1層	※31.7	-	△5.1	外面：口縁～体部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハラケズリ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
278	108	168	須恵器环蓋	6-1区K19	II層・IV-1層	天井部※10.6	-	△2.6	外面：天井部回転ハラケズリ、天井～天井端部回転ナデ 内面：天井～天井端部回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
279	108	743	須恵器高台付皿	6-4区N21	II層・III層	16.2	11.4	2.9	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：口縁～底部回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰白色	
280	108	178	土師器坏	6-1区K20	II層・IV-1層	※15.2	※10.3	3.6	外面：口縁～体部ヨコナデ、底面回転系切り 内面：口縁～底部ヨコナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	内外面赤色塗彩
281	108	746	須恵器高台付坏	6-4区N21	II層・III層	※13.8	※10.1	4.5	外面：口縁～体部回転ナデ、底面ナデ 内面：口縁～底部回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰白色	
282	108	168	須恵器甕	6-1区K19	II層・IV-1層	※9.0	-	△5.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
283	108	61・178	須恵器甕	6-1区K19・20	II層・IV-1層	※17.7	-	△17.5	外面：口縁部ナデ、体部平行タタキ 内面：口縁部ナデ、体部青海波状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：灰～にぶい赤褐色	
285	109	216	弥生土器高坏	6-1区L20	IV-2層	-	※15.8	△3.9	外面：ハラケズリ後ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：褐灰～にぶい黄褐色 内面：褐灰色	
286	109	217	土師器高坏	6-1区L20	IV-2層	※14.3	-	△5.9	外面：ハケメ 内面：ハケメ後ハラミガキ	密良好	外面：橙～にぶい黄褐色 内面：明赤褐色	内外面赤色塗彩
287	111	1479	弥生土器甕	6-4区O20	IV-3層	※13.4	-	△3.3	外面：口縁部凹線3条、肩部ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ハケメ・ハラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～灰褐色 内面：にぶい橙色	
288	111	272	弥生土器壺	6-1区K20	IV-3層	※21.2	-	△3.7	外面：平行沈線10条・円形浮文 内面：ナデ	密良好	外面：灰黄褐～灰白色 内面：灰黄褐色	
289	111	1479	弥生土器甕	6-4区O20	IV-3層	※15.2	-	△3.8	外面：口縁部凹線3条、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハラケズリ	密良好	外面：にぶい褐～黒色 内面：にぶい褐～褐灰色	外面煤付着
290	111	400	弥生土器甕	6-1区J19	IV-3層	※14.8	-	△8.6	外面：口縁部平行沈線8条、体部ナデ・ハラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付着
291	111	1022	弥生土器甕	6-1区L21	IV-3層	※17.2	-	△3.8	外面：口縁部平行沈線8条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐～浅黄褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付着、後期中葉
292	111	1393	弥生土器甕	6-4区O21	IV-3層	※17.4	-	△3.6	外面：口縁部凹線2条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい橙色	内外面赤色塗彩
293	111	1022	弥生土器甕	6-1区L21	IV-3層	※15.5	-	△3.9	外面：口縁部平行沈線9条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐～黒褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付着
294	111	393・1292	弥生土器甕	6-1区K19	IV-3層	※14.4	-	△10.4	外面：口縁部平行沈線・ナデ消し、体部ハケ状工具による押し文・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐～黒色 内面：にぶい黄褐～にぶい黄褐色	外面煤付着
295	111	346	弥生土器甕	6-1区K19	IV-3層	※20.7	-	△11.0	外面：口縁部平行沈線13条、肩部具殻腹線による刺突文・波状文 内面：口縁部ヨコナデ・ハラミガキ、肩部ハラケズリ	密良好	外面：灰白色 内面：にぶい橙色	

表23 土器観察表(10)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm) 長さ(cm)	底径(cm) 脚径(cm)	器高(cm) 厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
296	111	384	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-3層	※11.6	-	△8.4	外面：口縁部平行沈線9条、体部平行沈線6条・波状文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：浅黄褐色	
297	111	1393	弥生土器 甕	6-4区 O21	IV-3層	※13.4	-	△7.6	外面：口縁部平行沈線9条、肩部貝殻腹線による刺突文・ 平行沈線5条・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：灰白～黒色 内面：灰白～褐灰色	外面煤付者
298	111	400・ 406	弥生土器 甕	6-1区 J・K19	IV-3層	※18.2	-	△29.0	外面：口縁部平行沈線・ナデ消し、体部波状文・平行 沈線9条 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～黒褐色 内面：橙～明褐色～黒褐色	
299	111	1284	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-3層	※21.4	-	△10.0	外面：口縁部平行沈線16条、肩部貝殻腹線による刺突文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～灰黄褐色 内面：にぶい橙～灰褐色	
300	111	1283	弥生土器 甕	6-1区 J20	IV-3層	※21.0	-	△7.2	外面：口縁部平行沈線・ナデ消し、肩部波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白～にぶい黄褐色	
301	111	367	弥生土器 甕	6-1区 K19	IV-3層	※20.1	-	△9.4	外面：口縁部波状文、肩部平行沈線12条以上・波状文・ ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
302	111	393	弥生土器 壺	6-1区 K19	IV-3層	※15.6	-	△5.7	外面：口縁～頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
303	111	1292	弥生土器 甕	6-1区 K19	IV-3層	※18.5	-	△6.2	外面：口縁部平行沈線5条以上・ナデ消し、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
304	111	1282	弥生土器 甕	6-1区 L20	IV-3層	※14.8	-	△5.0	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
305	111	1393	弥生土器 甕	6-4区 O21	IV-3層	※15.4	-	△5.3	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付者
306	111	685	土師器 甕	6-1区 L21	IV-3層	※14.0	-	△7.3	外面：口縁部ヨコナデ、肩部波状文・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
307	111	458	弥生土器 甕	6-1区 J19	IV-3層	※14.2	-	△11.5	外面：口縁部ヨコナデ、体部多状平行沈線・波状文・ ハケメ・ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付者
308	111	306	弥生土器 甕	6-1区 L20	IV-3層	※22.0	-	△7.4	外面：口縁部ヨコナデ、肩部波状文・ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部摩擦により不明瞭	密良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
309	111	345	土師器 壺	6-1区 L20	IV-3層	※15.6	-	△7.2	外面：口縁部凹線2条、頸部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ後ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
310	111	373	土師器 壺	6-1区 J20	IV-3層	※14.2	-	△9.8	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：橙～浅黄褐色 内面：浅黄橙～灰白色	
311	111	84・ 367・ 393・ 411	弥生土器 壺	6-1区 K19	IV-3層	※28.3	-	△13.6	外面：口縁部平行沈線19条・波状文・竹管文、頸部ヘ ラミガキ 内面：口縁～頸部ヘラミガキ	密良好	外面：橙～浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
312	112	394	弥生土器 高坏	6-1区 J19	IV-3層	※21.6	-	△4.4	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：橙～にぶい褐色 内面：褐色	
313	112	419	土師器 高坏	6-1区 K20	IV-3層	※14.8	-	△6.5	外面：ハケメ 内面：摩擦により不明瞭	密良好	外面：淡褐色 内面：褐色	
314	112	64	土師器 高坏	6-1区 K20	IV-3層	※16.6	-	△5.2	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：ヘラミガキ(放射状暗文)	密良好	外面：赤色 内面：赤色	内外面赤色 塗彩
315	112	898	弥生土器 高坏	6-1区 L20	IV-3層	-	※11.9	△8.1	外面：摩擦により不明瞭 内面：摩擦により不明瞭	密良好	外面：褐色 内面：褐色	
316	112	382	弥生土器 高坏	6-1区 J20	IV-3層	-	※13.9	△5.6	外面：ハケメ・長方形透かし孔 内面：ハケメ・ナデ	密良好	外面：灰白～明褐色 内面：灰白～浅黄褐色	
317	112	327・ 346他	弥生土器 高坏	6-1区 K19	IV-3層	-	※17.6	△16.7	外面：ヘラミガキ・円形透かし孔 内面：ヘラケズリ後ナデ・ハケメ・シボリ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
318	112	393	弥生土器 高坏	6-1区 K19	IV-3層	-	※15.0	△4.0	外面：ハケメ後ナデ 内面：ヘラケズリ後ハケメ・ナデ	密良好	外面：灰白～浅黄褐色 内面：浅黄橙～灰黄褐色	
319	112	346	弥生土器 高坏	6-1区 K19	IV-3層	-	-	△9.5	外面：平行沈線4～5条・矢羽文 内面：シボリ・ナデ	密良好	外面：灰白～黄灰色 内面：灰白～黄灰色	
320	112	393	弥生土器 高坏	6-1区 K19	IV-3層	-	-	△8.4	外面：平行沈線9条・ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ナデ・シボリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	内外面赤色 塗彩
321	112	822	弥生土器 低脚坏	6-1区 K20	IV-3層	※7.5	※4.8	4.7	外面：坏～脚部ナデ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ナデ	密良好	外面：明褐～にぶい黄褐色 内面：灰黄褐～にぶい黄褐色	
322	112	700	弥生土器 低脚坏	6-1区 K19	IV-3層	-	-	△3.7	外面：坏部ヘラミガキ、脚部ナデ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ナデ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
323	112	399	弥生土器 高坏	6-1区 K19	IV-3層	-	※12.4	△6.6	外面：坏～脚部ハケメ後ヘラミガキ 内面：坏部ナデ、脚部ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：にぶい褐色	
324	112	346	弥生土器 器台	6-1区 K19	IV-3層	※18.5	-	△5.2	外面：平行沈線22条・竹管文 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：灰褐～にぶい褐色 内面：灰褐～にぶい褐色	
325	112	788	弥生土器 器台	6-1区 K19	IV-3層	-	-	△3.4	外面：ヘラミガキ・沈線2条・渦文(スタンプ文)・沈 線2条 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	

表24 土器観察表(11)

掲載 番号	挿回 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
326	112	916	弥生土器 器台	6-1区 K20	IV-3層	-	-	△4.8	外面:受け部ヘラミガキ・沈線4条・渦文(スタンプ文)・ 沈線4条、脚柱部ナデ 内面:受け部ヘラミガキ、脚柱部ナデ	密 良好	外面:にぶい黄橙色 内面:にぶい黄橙色	
327	112	394	弥生土器 器台	6-1区 J19	IV-3層	-	-	△3.8	外面:平行沈線2~3条・渦文(スタンプ文) 内面:ナデ	密 良好	外面:にぶい橙~橙色 内面:にぶい褐色	
328	112	1284・ 1493	弥生土器 器台	6-1区 K20	IV-3層	※16.4	-	△3.9	外面:受け部口縁帯渦文(スタンプ文)・ヘラミガキ 内面:受け部ヘラズリ後ナデ	密 良好	外面:にぶい橙色 内面:にぶい橙色	
329	112	382	弥生土器 器台	6-1区 J20	IV-3層	-	-	△3.9	外面:平行沈線2条・渦文(スタンプ文)・ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	密 良好	外面:橙色 内面:褐色	
330	112	874	弥生土器 器台	6-4区 O21	IV-3層	-	-	△9.4	外面:受け部平行沈線6条以上、脚柱部ヘラミガキ・ 沈線3~4条3段・ハケメ 内面:受け部ヘラミガキ、脚柱部ヘラズリ後ナデ	密 良好	外面:橙色 内面:褐色	
331	112	367	弥生土器 器台	6-1区 K19	IV-3層	-	※14.4	△3.6	外面:波状文 内面:ヘラズリ	密 良好	外面:にぶい橙色 内面:褐色	
332	112	789	弥生土器 器台	6-1区 L21	IV-3層	-	-	△5.1	外面:受け部ナデ・沈線5条・渦文(スタンプ文)・沈 線3条、脚柱部ナデ 内面:受け部~脚柱部ナデ?	密 良好	外面:灰白色 内面:灰白色	
333	112	1479	弥生土器 器台	6-4区 O20	IV-3層	-	※14.7	△3.5	外面:平行沈線8条 内面:ヘラズリ後ナデ消し	密 良好	外面:にぶい橙~浅黄橙色 内面:にぶい橙色	
334	112	399	弥生土器 器台	6-1区 K19	IV-3層	-	※17.6	△6.1	外面:平行沈線2条・渦文(スタンプ文)・ヘラミガキ 内面:ヘラズリ	密 良好	外面:橙~浅黄橙色 内面:橙~黒色	
335	112	1284	弥生土器 器台	6-1区 K20	IV-3層	-	※27.6	△8.1	外面:脚柱部ヘラミガキ、脚柱部平行沈線13条 内面:脚柱~脚柱部ヘラズリ・ナデ	密 良好	外面:にぶい黄橙色 内面:にぶい黄橙~浅黄橙色	
336	112	1024	弥生土器 器台	6-1区 K20	IV-3層	-	※28.1	△3.8	外面:摩滅により不明瞭 内面:ヘラズリ	密 良好	外面:浅黄橙~にぶい黄橙色 内面:橙~にぶい黄橙色	
337	112	1002	弥生土器 台付甕か壺	6-4区 L20	IV-3層	-	5.8	△3.4	外面:ナデ 内面:ナデ	密 良好	外面:褐色 内面:明褐色	
338	112	283	弥生土器 鼓形器台	6-1区 L20	IV-3層	※21.8	-	△7.6	外面:波状文・有段部刺突文 内面:摩滅により不明瞭	密 良好	外面:淡黄色 内面:にぶい黄橙~灰白色	
339	112	1015	弥生土器 鼓形器台	6-1区 K21	IV-3層	-	※15.8	△4.5	外面:脚柱~脚柱部ナデ 内面:脚柱~脚柱部ヘラズリ	密 良好	外面:褐色 内面:褐色	
340	112	1243	弥生土器 鼓形器台	6-1区 K20	IV-3層	-	※19.6	△5.6	外面:ヨコナデ 内面:ヘラズリ	密 良好	外面:淡黄褐色 内面:淡黄褐色	
341	112	400	弥生土器 無頸壺	6-1区 J19	IV-3層	※11.0	-	△9.1	外面:口縁~体部ヘラミガキ 内面:口縁部ヘラミガキ、体部ヘラズリ後ナデ	密 良好	外面:赤橙~褐色 内面:橙~にぶい褐色	内外面赤色 塗彩
342	112	1163	弥生土器 台付裝飾壺	6-1区 K20	IV-3層	-	-	△5.2	外面:平行沈線2~3条・矢羽文・S字文(スタンプ文)・ 渦文(スタンプ文) 内面:ナデ	密 良好	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	
343	112	367	弥生土器 台付裝飾壺	6-1区 K19	IV-3層	-	-	△4.4	外面:平行沈線2~3条・具殻腹縁による矢羽文 内面:ヘラズリ・ナデ	密 良好	外面:にぶい褐色 内面:にぶい橙~褐色	
344	112	788	弥生土器 甕か壺	6-1区 K19	IV-3層	-	※4.0	△3.3	外面:ナデ 内面:ヘラズリ	密 良好	外面:にぶい黄褐色 内面:灰白色	
345	112	700	弥生土器 壺	6-1区 K19	IV-3層	-	つまみ部 4.2	△4.0	外面:つまみ部ナデ、天井部指頭圧痕・ナデ 内面:つまみ部ナデ、天井部指頭圧痕	密 良好	外面:にぶい黄褐色 内面:黒色	
346	112	400	弥生土器 壺	6-1区 J19	IV-3層	-	つまみ部 2.7	△6.7	外面:つまみ~天井部ナデ・指頭圧痕 内面:天井部ナデ	密 良好	外面:灰褐~灰黄褐色 内面:にぶい褐色	
347	112	346	弥生土器 壺	6-1区 K19	IV-3層	天井部 ※12.0	つまみ部 3.3	6.7	外面:つまみ~天井部ナデ・指頭圧痕 内面:天井部ナデ・指頭圧痕	密 良好	外面:明黄褐色 内面:明黄褐色	
348	112	802	弥生土器 注口土器	6-1区 K21	IV-3層	-	-	△3.1	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	密 良好	外面:赤~にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	外面赤色塗 彩
349	112	1292	弥生土器 注口土器	6-1区 K19	IV-3層	-	-	△4.6	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	密 良好	外面:灰黄褐~にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	
350	113	400	須恵器 高台付坏	6-1区 J19	IV-3層	※11.0	※8.2	3.2	外面:口縁~体部回転ナデ、底部回転ヘラズリ後高 台貼り付け 内面:口縁~底部回転ナデ	密 良好	外面:灰色 内面:灰色	
351	113	346	須恵器 長頸壺	6-1区 K19	IV-3層	※5.8	-	△5.7	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	密 良好	外面:灰色 内面:灰色	
352	113	345・ 346	須恵器 高坏	6-1区 K19・ L20	IV-3層	-	9.6	△6.6	外面:脚部回転ナデ・三角状透かし孔(1箇所) 内面:脚部回転ナデ	密 良好	外面:灰色 内面:灰色	
353	113	350	須恵器 坏	6-1区 J19	IV-3層	-	※11.5	△3.0	外面:体~底部回転ナデ 内面:体~底部回転ナデ	密 良好	外面:灰白色 内面:灰白色	
354	113	345	土師器 甕	6-1区 L20	IV-3層	※21.0	-	△13.1	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ・ヘラズリ・指頭 圧痕	密 良好	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい黄褐色	外面煤付着
355	113	1015	土師器 甕	6-1区 K21	IV-3層	※25.8	-	△5.5	外面:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面:口縁部ハケメ後ナデ消し、体部ヘラズリ	密 良好	外面:にぶい橙~黒褐色 内面:浅黄橙~褐色	

表25 土器観察表(12)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm)長さ(cm)	底径(cm)脚径(cm)	器高(cm)厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
356	113	327	土師器 甕	6-1区 K19	IV-3層	※28.0	-	△7.5	外面：口縁～体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	外面煤付者
357	113	1015	土師器 甕	6-1区 K21	IV-3層	※30.0	-	△6.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい褐～褐色	外面煤付者
358	115	1080	弥生土器 甕	6-4区 N21	IV-2・3層	※14.7	-	△10.7	外面：口縁部凹線1条、肩部ハケ状工具による刺突文、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	密良好	外面：浅黄橙～黒褐色 内面：浅黄橙～橙色	外面煤付者
359	115	1080	弥生土器 甕	6-4区 N21	IV-2・3層	※15.2	-	△4.9	外面：口縁部凹線3条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄橙～橙色 内面：橙色	
360	115	1080	弥生土器 甕	6-4区 N21	IV-2・3層	※10.8	-	△6.1	外面：口縁部平行沈線9条、体部ヘラ状工具による刺突文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
361	115	1280・1288・1289	弥生土器 甕	6-4区 M・N21	IV-2・3層	※15.2	-	△6.8	外面：口縁部凹線3条、肩部ハケ状工具による刺突文・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～にぶい黄橙色 内面：にぶい橙～にぶい黄橙色	
362	115	1270	弥生土器 甕	6-4区 N21	IV-2・3層	※13.8	-	△6.1	外面：口縁部凹線3条、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄橙～黒褐色 内面：浅黄橙～灰黄褐色	外面煤付者
363	115	1080	弥生土器 甕	6-4区 N21	IV-2・3層	※13.0	-	△5.7	外面：口縁部平行沈線14条、肩部具殻腹線による刺突文 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄色 内面：灰黄色	
364	115	1223	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-2・3層	※18.0	-	△6.7	外面：口縁部平行沈線14条、肩部ハケ状工具による刺突文 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：明褐灰～黒色 内面：橙色	外面煤付者
365	115	1223	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-2・3層	※18.4	-	△8.9	外面：口縁部平行沈線15条、肩部波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄橙～灰白色 内面：灰白～にぶい黄橙色	
366	115	1261	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-2・3層	※14.8	-	△7.5	外面：口縁部平行沈線13条、肩部ハケ状工具による刺突文・ハケメ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙～褐灰色	外面煤付者
367	115	1223	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-2・3層	※20.1	-	△10.2	外面：口縁部平行沈線7条、肩部ハケ状工具による刺突文・ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙～褐色	
368	115	1268・1312	弥生土器 甕	6-4区 N21	IV-2・3層	※16.6	-	△5.9	外面：口縁部平行沈線9条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～褐色 内面：灰黄褐～褐色	外面煤付者
369	115	1223	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-2・3層	※18.7	-	△5.8	外面：口縁部平行沈線12条、肩部ナデ 内面：口縁部ハケ状工具によるヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：明褐灰～黒褐色 内面：褐色	外面煤付者
370	115	1223・1261	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-2・3層	※31.0	-	△9.5	外面：口縁部平行沈線13条、肩部波状文 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
371	115	889	弥生土器 甕	6-4区 N21	IV-2・3層	※15.5	-	△5.6	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：にぶい橙～褐色	
372	115	1247	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-2・3層	※18.2	-	△7.4	外面：口縁部ヨコナデ、肩部波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄橙色	
373	115	1043	弥生土器 壺	6-4区 N21	IV-2・3層	※12.8	-	△6.9	外面：口縁部凹線2条、頸部凹線12条 内面：口縁～頸部ヨコナデ	密良好	外面：浅黄橙～赤色 内面：浅黄橙～赤色	内外面赤色塗彩
374	115	1280	弥生土器 壺	6-4区 M21	IV-2・3層	※18.2	-	△9.4	外面：口縁部凹線3条、頸部ハケ状工具による刺突文・ハケメ、肩部凹線 内面：口縁～頸部ナデ・ハケメ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
375	115	1109・1207	弥生土器 壺	6-4区 P21	IV-2・3層	※14.9	-	△6.6	外面：口縁部凹線2条、頸部ヘラミガキ 内面：口縁～頸部ナデ	密良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
376	115	1207	土師器 壺	6-4区 P21	IV-2・3層	※16.0	-	△7.9	外面：口縁部ヨコナデ、頸～肩部ヘラミガキ 内面：口縁～頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白色 内面：褐灰～明褐灰色	
377	115	889	土師器 壺	6-4区 N21	IV-2・3層	※17.9	-	△8.2	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ 内面：口縁部～頸部ナデ・ヘラケズリ	密良好	外面：褐色 内面：浅黄橙色	
378	115	862・889・1035	土師器 壺	6-4区 N21	IV-2・3層	※18.5	-	△12.0	外面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ハケメ後ナデ 内面：口縁～頸部ナデ、肩部調整不明	密良好	外面：褐色 内面：橙～灰白色	
379	1150	887	土師器 壺	6-4区 M21	IV-2・3層	※23.2	-	△5.7	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白～褐灰色	
380	115	1261	弥生土器 蓋	6-4区 P21	IV-2・3層	天井部 ※12.0	つまみ部 3.2	4.6	外面：つまみ～天井部ナデ後ヘラミガキ 内面：つまみ～天井部ナデ	密良好	外面：浅黄橙～灰白～黒色 内面：灰白～にぶい褐色	
381	115	861	弥生土器 蓋	6-4区 M21	IV-2・3層	-	つまみ部 3.0	△3.9	外面：つまみ～天井部ナデ 内面：天井部ヘラケズリ	密良好	外面：黒褐～褐色 内面：黒褐色	
382	115	1247	弥生土器 台付裝飾壺	6-4区 P21	IV-2・3層	-	-	△3.6	外面：連続渦文(スタンプ文)・ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～褐灰色 内面：灰黄～褐灰色	
383	115	1080	弥生土器 台付裝飾壺	6-4区 N21	IV-2・3層	-	-	△1.8	外面：平行沈線2条・渦文(スタンプ文) 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：黒褐～黒色 内面：褐灰色	
384	115	1091	弥生土器 台付裝飾壺	6-4区 P21	IV-2・3層	-	※7.0	△4.3	外面：体部沈線3条・半裁竹管・渦文(スタンプ文)、底部ナデ 内面：体部ヘラミガキ、底部ナデ	密良好	外面：褐灰～灰白色 内面：褐灰～灰白色	

表26 土器観察表(13)

掲載番号	採回番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm) 長さ(cm)	底径(cm) 脚径(cm)	器高(cm) 厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
385	115	1261	弥生土器 台付鉢	6-4区 P21	IV-2・3層	-	※12.3	△3.3	外面：平行沈線5条・小孔・ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
386	116	870	弥生土器 高坏	6-4区 P21	IV-2・3層	※25.9	-	△6.9	外面：ヘラミガキ 内面：摩滅により不明瞭	密 良好	外面：浅黄橙～灰黄色 内面：にぶい黄橙色	
387	116	948	土師器 高坏	6-4区 O21	IV-2・3層	10.6	-	△7.1	外面：坏～脚部ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ナデ・シボリ	密 良好	外面：灰白～黒褐色 内面：灰白色	
388	116	1261	弥生土器 高坏	6-4区 P21	IV-2・3層	-	-	△6.8	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ・シボリ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：褐灰～にぶい橙色	
389	116	873	土師器 高坏	6-4区 M21	IV-2・3層	※15.1	-	△5.7	外面：ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：橙～淡赤橙色 内面：橙色	内外面赤色 塗彩
390	116	889	土師器 高坏	6-4区 N21	IV-2・3層	※21.1	-	△10.3	外面：坏部摩滅により不明瞭、脚部ハケメ 内面：坏部ハケメ・ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙～浅黄橙色 内面：明褐灰～にぶい橙色	
391	116	924	土師器 高坏	6-4区 M21	IV-2・3層	※9.4	-	△2.8	外面：ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙～明褐色	
392	116	1223	弥生土器 低脚坏	6-4区 P21	IV-2・3層	※10.6	5.2	4.5	外面：坏～脚部ナデ後ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ	密 良好	外面：橙～灰褐色 内面：橙～灰褐色	
393	116	1043	土師器 高坏	6-4区 N21	IV-2・3層	-	-	△6.1	外面：ハケメ 内面：ナデ	密 良好	外面：褐～黒色 内面：橙色	
394	116	1121・ 1221	土師器 高坏	6-4区 M21	IV-2・3層	10.9	7.1	7.4	外面：坏部ヘラ状工具によるナデ、脚部ヨコナデ 内面：坏～脚部ナデ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
395	116	1255	土師器 高坏	6-4区 M21	IV-2・3層	10.8	8.0	7.7	外面：坏部ヘラ状工具によるナデ、脚部ヨコナデ 内面：坏～脚部ナデ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
396	116	1223	弥生土器 低脚坏	6-4区 P21	IV-2・3層	※12.8	5.9	6.0	外面：坏～脚部ハケメ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：褐灰色	
397	116	1247	弥生土器 器台	6-4区 P21	IV-2・3層	-	-	△8.1	外面：受け部ヘラミガキ・沈線3条・渦文(スタンプ文)・ 沈線3条、脚柱部ヘラミガキ 内面：受け部ヘラミガキ、脚柱部ヘラミガキ	密 良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
398	116	1091	弥生土器 大型器台	6-4区 P21	IV-2・3層	-	-	△7.7	外面：受け部口縁端部ハケ状工具による刻み、受け部 口縁帯波状文 内面：受け部ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
399	116	1261	弥生土器 器台	6-4区 P21	IV-2・3層	※20.6	-	△7.0	外面：受け部平行沈線31条 内面：受け部ヘラミガキ	密 良好	外面：灰白色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	
400	116	1043	弥生土器 器台	6-4区 N21	IV-2・3層	-	※15.7	△8.9	外面：脚柱部平行沈線8条・ハケメ、脚台部平行沈線 13条 内面：脚柱部ナデ、脚台部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～橙色 内面：橙色	
401	116	1261・ 1345	弥生土器 器台	6-4区 P21	IV-2・3層	※21.2	-	△8.4	外面：工具によるナデ・ヨコナデ 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
402	116	1080	弥生土器 鼓形器台	6-1区 N21	IV-2・3層	※23.4	-	△7.9	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 良好	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	
403	116	998	弥生土器 器台	6-4区 O21	IV-2・3層	-	※10.4	△7.9	外面：脚柱部ヨコナデ、脚台部平行沈線4条・渦文(ス タンプ文) 内面：脚柱部ナデ、脚台部ヘラケズリ・ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄褐色	
404	116	1080	弥生土器 台付甕か壺	6-4区 N21	IV-2・3層	-	11.8	△5.2	外面：平行沈線7条・ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：灰白～赤褐色 内面：灰白色	外面赤色塗 彩
405	116	1288	弥生土器 台付甕か壺	6-4区 N21	IV-2・3層	-	6.0	△3.1	外面：平行沈線4条・ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
406	116	1261	弥生土器 器台	6-4区 P21	IV-2・3層	-	-	△2.4	外面：ヘラミガキ・渦文(スタンプ文) 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
407	116	1288	弥生土器 無頸壺	6-4区 N21	IV-2・3層	※14.2	-	△3.9	外面：口縁部ヨコナデ、刺突文、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙～灰白～褐灰色 内面：浅黄橙～橙色	
408	116	998	土師器 甗形土器	6-4区 O21	IV-2・3層	-	-	△13.4	外面：ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙～黒色	
409	116	968	土師器 甕	6-4区 M・N21	IV-2・3層	※14.5	-	25.0	外面：口縁～体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ヘラケズリ・指頭圧痕	密 良好	外面：明赤褐～褐灰色 内面：橙色	
410	116	616・ 834・ 842	土師器 甕	6-4区 O21	IV-2・3層	19.2	-	△26.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ・指頭圧痕	密 良好	外面：浅黄橙～褐灰色 内面：浅黄橙～黒褐色	
411	117	979	須恵器 坏蓋	6-4区 O21	IV-2・3層	天井部 ※12.0	-	△4.1	外面：天井部回転ヘラケズリ、天井～天井端部回転ナ デ 内面：天井～天井端部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
412	117	708・ 1288	須恵器 坏蓋	6-4区 N21	IV-2・3層	天井部 ※13.0	-	△1.2	外面：天井部回転ヘラケズリ、天井～天井端部回転ナ デ 内面：天井～天井端部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
413	117	1121	須恵器 坏身	6-4区 M21	IV-2・3層	※12.2	※8.4	3.8	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁～底部回転ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰白色	
414	117	1270	土師器 坏	6-4区 N21	IV-2・3層	12.9	11.5	3.1	外面：口縁～底部ナデ 内面：口縁～底部ナデ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	内外面赤色 塗彩

表27 土器観察表(14)

掲載 番号	挿図 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
415	117	1242	須恵器 長頸壺	6-4区 M20	IV-2・3層	-	103	△16.6	外面：頸～底部回転ナデ 内面：頸～底部回転ナデ	密 良好	外面：灰白～灰色 内面：灰色	
416	117	902	土師器 坏	6-4区 M21	IV-2・3層	※16.4	※10.7	3.6	外面：口縁～体部ヨコナデ、底面ナデ 内面：口縁～底部ハケメ・ナデ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
417	117	843	土師器 坏	6-4区 M21	IV-2・3層	※18.5	※14.0	3.2	外面：口縁～体部ヘラミガキ、底面ナデ 内面：口縁～底部ハケメ・ナデ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	内外面赤色 塗彩
418	117	1267	土師器 甕	6-4区 M20	IV-2・3層	※29.7	-	△9.7	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙～橙色 内面：にぶい橙色	
419	117	952	土師器 甕	6-4区 N20	IV-2・3層	※30.8	-	△9.3	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐～にぶい橙色 内面：浅黄橙色	
420	117	952	瓦質土器 鍋	6-4区 N20	IV-2・3層	※32.0	-	△11.5	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	密 良好	外面：黒色 内面：灰～灰白	外面煤付着
424	118	1342・ 1358・ 1412	弥生土器 甕	6-1区 K19・20	IV-4層	※11.9	-	△8.9	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	密 良好	外面：にぶい褐～黒褐色 内面：褐灰色	外面煤・炭 化物付着
425	118	1321・ 1361・ 1520	弥生土器 甕	6-1区 J20・L20	IV-4層	※22.3	-	△4.6	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
426	118	1357	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-4層	※16.8	-	△5.8	外面：口縁部凹線2条、肩部ハケ状工具による刺突文・ ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～黒色 内面：灰白色	外面煤付着
427	118	1343	弥生土器 甕	6-1区 M20	IV-4層	※13.0	-	△4.8	外面：口縁部凹線2条、肩部貝殻腹縁による刺突文・ ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙～淡赤橙色 内面：橙～浅黄橙色	外面煤付着
428	118	1318・ 1342・ 1412・ 1484	弥生土器 甕	6-1区 K19・20	IV-4層	※13.8	※5.9	20.0	外面：口縁部平行沈線2条、体部ハケ状工具による刺 突文・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐～にぶい橙色 内面：褐灰～にぶい橙色	外面煤付着
429	118	1345	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-4層	※18.0	-	△6.6	外面：口縁部平行沈線6条、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙～橙色	外面煤付着
430	118	1388	弥生土器 甕	6-4区 M20	IV-4層	※20.8	-	△5.9	外面：口縁部平行沈線7条、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙色 内面：橙～にぶい橙色	
431	118	1357	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-4層	※17.9	-	△5.0	外面：口縁部平行沈線4条、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙～黒褐色 内面：にぶい黄褐～黒褐色	外面煤付着
432	118	1370	弥生土器 甕	6-1区 L20	IV-4層	※14.9	-	△10.4	外面：口縁部平行沈線3条、体部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	外面煤付着
433	118	1404	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-4層	※16.3	-	△11.7	外面：口縁部平行沈線3条、肩部ハケ状工具による刺 突文、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩～体部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄橙～黒褐色 内面：浅黄橙～褐灰色	外面煤付着
434	118	1394	弥生土器 甕	6-4区 N21	IV-4層	※17.0	-	△9.5	外面：口縁部平行沈線9条、肩部貝殻腹縁による刺突 文、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ・ヘラケズリ	密 良好	外面：黒～にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	外面煤・炭 化物付着
435	118	1417	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-4層	※10.0	※3.3	15.0	外面：口縁部平行沈線4条、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ・ヘラケズリ	密 良好	外面：黒色 内面：にぶい黄褐～灰黄褐色	外面煤付着
436	118	1323	弥生土器 甕	6-1区 M21	IV-4層	※27.7	-	△7.3	外面：口縁部平行沈線3条、肩部摩滅により不明瞭 内面：口縁部ナデ？、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙色 内面：浅黄橙色	
437	118	1345	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-4層	※14.2	-	△6.5	外面：口縁部平行沈線16条、ナデ消し、肩部ハケメ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙～褐灰色 内面：橙～褐灰色	外面煤付着
438	118	1345	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-4層	※20.2	-	△5.7	外面：口縁部平行沈線17条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガ キ	密 良好	外面：橙～褐灰色 内面：橙～褐灰色	
439	118	1345・ 1398	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-4層	※24.8	-	△6.7	外面：口縁部平行沈線19条、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：黒～にぶい黄褐色 内面：橙色	外面煤付着
440	118	1318	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-4層	※21.1	-	△6.5	外面：口縁部平行沈線13条、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガ キ	密 良好	外面：にぶい橙～褐色 内面：にぶい橙～褐色	
441	118	1357	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-4層	※21.0	-	△7.2	外面：口縁部平行沈線11条・ナデ消し、肩部平行沈線 9条 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：黒色 内面：橙～黒色	外面煤付着
442	118	1349	弥生土器 甕	6-1区 J19	IV-4層	※20.3	-	△10.3	外面：口縁部平行沈線16条、肩部波状文 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
443	118	1223・ 1345・ 1357	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-4層	※16.4	-	△14.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ後ヘラミガ キ	密 良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい橙色	外面煤付着
444	118	1349・ 1368・ 1517	弥生土器 甕	6-1区 J19・K20	IV-4層	※23.3	-	△20.1	外面：口縁部ヨコナデ、肩部波状文・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩～体部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～灰黄褐～黒褐色 内面：浅黄橙～灰白色	外面煤付着
445	118	1345	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-4層	※20.1	-	△6.2	外面：口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、頸部ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガ キ	密 良好	外面：暗赤灰色 内面：にぶい橙～灰褐色	外面煤・炭 化物付着

表28 土器観察表(15)

掲載 番号	押回 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
446	118	1345	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-4層	※10.5	-	△5.4	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：黒褐～灰褐色 内面：にぶい橙色	外面黒・炭 化物付着
447	118	1412	弥生土器 甕か壺	6-1区 K19	IV-4層	-	※5.7	△8.3	外面：体部ハケメ、底面ナデ 内面：体～底部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：暗灰黄色	外面煤付着
448	119	1351	弥生土器 壺	6-1区 L20	IV-4層	※15.3	-	△5.0	外面：口縁部ヨコナデ、頸～肩部ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ後ハケメ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
449	119	1390	弥生土器 壺	6-4区 O20	IV-4層	※13.5	-	△8.9	外面：口縁～頸部ナデ、肩部ハケメ 内面：口縁～頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～明褐灰色 内面：灰色	
450	119	1381	弥生土器 壺	6-1区 J19	IV-4層	※9.5	-	△13.1	外面：口縁部ヨコナデ、頸～体部ハケメ後一部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ・指頸圧痕、体部ヘラケズリ後一部ヘラミガキ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
451	119	1345	弥生土器 壺	6-4区 P21	IV-4層	-	-	△11.8	外面：頸～体部ハケメ 内面：頸～体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	
452	119	1342	弥生土器 壺	6-1区 K20	IV-4層	-	-	△7.8	外面：頸～体部ハケメ後ヘラミガキ 内面：頸部ナデ、体部ヘラケズリ後一部ヘラミガキ	密 良好	外面：赤橙～浅黄褐色 内面：赤橙～浅黄褐色	内外面赤色 塗彩
453	119	1345	弥生土器 壺	6-4区 P21	IV-4層	※14.2	-	△5.8	外面：口縁～頸部ハケメ後一部ヘラミガキ、頸部ハケメ 内面：口縁部ナデ後ハケメ・ヘラミガキ、頸部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
454	119	1383	弥生土器 壺	6-1区 K19	IV-4層	※14.0	-	△6.7	外面：口縁～頸部ナデ、肩部ハケメ状工具による刺突文・ハケメ 内面：口縁～頸部ハケメ後ナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
455	119	1381	弥生土器 壺	6-1区 J19	IV-4層	※13.1	-	△8.6	外面：口縁部平行沈線15条、肩部ハケメ後一部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙～灰白色 内面：にぶい橙～灰白色	
456	119	1361	弥生土器 壺	6-1区 J20	IV-4層	※14.6	-	△7.1	外面：口縁部多条平行沈線17～18条、頸～肩部ナデ後・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい橙色	
457	119	1281・ 1327	弥生土器 鉢	6-4区 P21	IV-4層	※13.6	※7.3	7.5	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：赤褐～灰白色 内面：橙～明褐灰色	内外面赤色 塗彩
458	119	1346・ 1347	弥生土器 高坏	6-4区 M20	IV-4層	※28.0	-	△4.0	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	内外面赤色 塗彩
459	119	1383	弥生土器 高坏	6-1区 K19	IV-4層	※16.6	-	△4.0	外面：凹線2条・ヘラミガキ 内面：ナデ・指頸圧痕	密 良好	外面：赤褐色 内面：褐灰色	
460	119	1436	弥生土器 高坏	6-1区 K20	IV-4層	-	-	△3.1	外面：ヘラミガキ・沈線3条・渦文(スタンプ文)・沈線1条 内面：ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
461	119	406・ 1383	弥生土器 高坏	6-1区 K19	IV-4層	-	※11.0	△3.8	外面：脚柱部ナデ、脚台部ヨコナデ 内面：脚柱～脚台部ヘラケズリ・ナデ	密 良好	外面：にぶい橙～赤灰色 内面：灰白～灰黄色	外面赤色塗 彩
462	119	1323	弥生土器 高坏	6-1区 M21	IV-4層	-	※15.8	△6.4	外面：平行沈線6条・ナデ 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ・ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
463	119	1354	弥生土器 高坏	6-1区 K19	IV-4層	-	※16.6	△3.0	外面：平行沈線7条 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	密 良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色	内外面赤色 塗彩
464	119	1382	弥生土器 高坏	6-1区 K20	IV-4層	-	※14.3	△4.9	外面：凹線3条・ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ・ヘラミガキ	密 良好	外面：褐灰色 内面：黒色	
465	119	1366	弥生土器 台付甕か壺	6-1区 L21	IV-4層	-	※17.0	△4.9	外面：ヨコナデ 内面：一部剥落・ナデ・ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	
466	119	1404	弥生土器 器台	6-4区 P21	IV-4層	※15.2	-	△11.2	外面：受け部口縁部平行沈線3条、脚柱部ヘラミガキ 内面：受け部ヘラミガキ、脚柱部ハケメ	密 良好	外面：浅黄橙～橙色 内面：浅黄橙～橙色	
467	120	1394	弥生土器 器台	6-4区 N21	IV-4層	※17.4	-	△4.3	外面：平行沈線7条・ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：赤～にぶい褐色 内面：赤～にぶい褐色	内外面赤色 塗彩
468	120	1368	弥生土器 器台	6-1区 J19	IV-4層	※20.4	-	△6.0	外面：平行沈線26条・ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
469	120	1346	弥生土器 器台	6-4区 M20	IV-4層	※17.0	-	△5.4	外面：平行沈線13条・ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
470	120	1368	弥生土器 器台	6-1区 J19	IV-4層	-	-	△6.3	外面：受け部平行沈線11条、脚柱部平行沈線3条・羽状文・ヘラミガキ 内面：受け部ヘラミガキ、脚柱部ナデ	密 良好	外面：浅黄橙～橙色 内面：浅黄褐色	内外面赤色 塗彩
471	120	1368	弥生土器 器台	6-1区 J19	IV-4層	-	-	△5.7	外面：平行沈線8条・渦文(スタンプ文)・ヘラミガキ 内面：ナデ後ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい橙～灰褐色 内面：にぶい橙～灰褐色	
472	120	1321	弥生土器 器台	6-1区 J20	IV-4層	-	※18.4	△8.6	外面：ヘラミガキ・平行沈線2条・渦文(スタンプ文)・平行沈線2条 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
473	120	1316	弥生土器 器台	6-1区 L21	IV-4層	-	-	△5.0	外面：平行沈線5条・渦文(スタンプ文)・平行沈線5条・ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
474	120	1321	弥生土器 器台	6-1区 J20	IV-4層	-	-	△4.0	外面：平行沈線4条・渦文(スタンプ文)・平行沈線5条 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：浅黄橙～灰白色 内面：浅黄褐色	

表29 土器観察表(16)

掲載番号	挿入番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm)長さ(cm)	底径(cm)脚径(cm)	器高(cm)厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
475	120	1368	弥生土器器台	6-1区 J19	IV-4層	-	-	△37	外面：平行沈線2条・渦文(スタンプ文)・平行沈線2条 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：明赤褐～橙色 内面：褐灰色	外面赤色塗彩
476	120	1383	弥生土器器台	6-1区 K19	IV-4層	-	-	△32	外面：渦文(スタンプ文)・平行沈線3条 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄色 内面：浅黄色	
477	120	1357	弥生土器器台	6-4区 P21	IV-4層	-	※15.8	△52	外面：平行沈線22条・ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ・ヨコナデ	密良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
478	120	1383	弥生土器器台	6-1区 K19	IV-4層	-	-	△8.7	外面：ヘラミガキ後凹線10条 内面：ヘラミガキ・ヘラケズリ・シボリ	密良好	外面：浅黄橙～褐灰色 内面：にぶい橙色	
479	120	1318・1354	弥生土器器台	6-1区 K19	IV-4層	-	※15.0	△38	外面：平行沈線14条・ナデ 内面：ヘラケズリ後ナデ消し	密良好	外面：赤～橙色 内面：橙色	
480	120	1381・1538	弥生土器器台	6-1区 J・K19	IV-4層	-	※14.0	△99	外面：脚柱部ヘラミガキ、脚台部平行沈線21条 内面：脚柱部ナデ、脚台部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
481	120	1321	弥生土器鼓形器台	6-1区 J20	IV-4層	※22.3	-	△6.9	外面：ヨコナデ 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：灰白～褐灰色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	
482	120	1349	土師器鼓形器台	6-1区 J19	IV-4層	※15.6	※13.4	96	外面：受け部タテヘラミガキ、脚柱部ヨコナデ、脚台部タテヘラミガキ・円形透かし孔 内面：受け～脚柱部ヘラミガキ、脚台部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい黄橙～橙色 内面：にぶい黄橙～暗褐色	外面赤色塗彩
483	120	1288・1384・1394	弥生土器裝飾壺	6-4区 N21	IV-4層	※13.3	-	△11.8	外面：口縁部平行沈線7条・小孔、体部平行沈線2～3条間渦文(スタンプ文)、貝殻腹縁による矢羽文 内面：口縁部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：赤灰～灰白～赤色 内面：赤～灰～褐灰色	内外面赤色塗彩
484	120	1357	弥生土器裝飾壺	6-4区 P21	IV-4層	-	-	△3.7	外面：平行沈線3条・ヘラ状工具による矢羽文 内面：ヘラケズリ後一部ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
485	120	1347	弥生土器台付裝飾壺	6-4区 M21	IV-4層	-	-	△3.5	外面：平行沈線3条・ヘラ状工具による矢羽文 内面：ヘラケズリ後一部ヘラミガキ	密良好	外面：浅黄橙～赤橙色 内面：灰白～赤褐色	内外面赤色塗彩
486	120	1368	弥生土器裝飾壺	6-1区 J19	IV-4層	-	-	△2.7	外面：平行沈線3条・ヘラ状工具による矢羽文 内面：ヘラケズリ後一部ヘラミガキ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	外面赤色塗彩
487	120	1321・1381	弥生土器裝飾壺	6-1区 J19・20	IV-4層	-	-	△5.8	外面：平行沈線3条・渦文(スタンプ文)・ヘラ状工具による矢羽文 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：浅黄橙～褐灰色 内面：浅黄橙色	
488	120	1319	弥生土器注口土器	6-1区 M20	IV-4層	-	-	△4.8	外面：ハケメ後ヘラミガキ・指頭圧痕 内面：ナデ	密良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
489	120	1368	弥生土器蓋	6-1区 J19	IV-4層	天井部※12.6	つまみ部4.2	6.6	外面：つまみ部ナデ・指頭圧痕、天井部ヘラミガキ 内面：天井部ナデ	密良好	外面：褐灰～橙色 内面：褐灰～褐色	
490	120	1347	弥生土器蓋	6-4区 M21	IV-4層	天井部※13.7	つまみ部2.9	7.9	外面：つまみ部ナデ、天井部ヘラミガキ 内面：天井部ヘラミガキ・ナデ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
491	120	1368	弥生土器蓋	6-1区 J19	IV-4層	天井部※13.7	-	△7.3	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：灰白～赤橙色 内面：灰白～黄灰色	
492	120	1354	弥生土器蓋	6-1区 K19	IV-4層	天井部※14.4	-	△4.2	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	
493	120	1345	弥生土器蓋	6-4区 P21	IV-4層	-	つまみ部4.9	△5.2	外面：つまみ部ヘラミガキ、天井部ヘラミガキ 内面：天井部ナデ後ヘラミガキ	密良好	外面：灰黄褐～にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
494	120	1320	弥生土器蓋	6-1区 K20	IV-4層	-	つまみ部4.2	△4.7	外面：つまみ部ヘラミガキ、天井部ヘラミガキ 内面：天井部ナデ・指頭圧痕	密良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	つまみ～天井部貫通孔
495	120	1349	弥生土器蓋	6-1区 J19	IV-4層	-	つまみ部4.2	△3.5	外面：つまみ部ナデ・ヘラミガキ、天井部ヘラミガキ 内面：天井部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
496	120	1358	弥生土器蓋	6-1区 K19	IV-4層	-	つまみ部3.4	△4.2	外面：つまみ部ナデ、天井部ヘラミガキ 内面：天井部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	つまみ～天井部貫通孔
497	120	1316	弥生土器蓋	6-1区 L21	IV-4層	-	つまみ部4.8	△4.9	外面：つまみ部ヘラミガキ、天井部ヘラミガキ 内面：天井部ナデ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい褐色	つまみ～天井部貫通孔
498	120	1349	土師器甗形土器	6-1区 J19	IV-4層	※15.8	-	△7.2	外面：口縁～体部ヨコナデ 内面：口縁～体部ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
499	120	1349	土師器甗形土器	6-1区 J19	IV-4層	※8.0	-	△5.1	外面：口縁～体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄色 内面：灰黄色	
500	120	1388	土師器甗形土器	6-4区 M20	IV-4層	-	-	△9.6	外面：体部ナデ、把手ナデ 内面：体部ヘラケズリ後ナデ	密良好	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：灰褐色	
501	120	1351	土師器甗形土器	6-1区 L20	IV-4層	-	※11.1	△7.6	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ・ナデ	密良好	外面：橙色 内面：褐色	
502	120	1345	土師器甗形土器	6-4区 P21	IV-4層	-	-	△11.2	外面：ヘラナデ後ハケメ・指頭圧痕	密良好	外面：灰黄褐色	
504	122	1358・1484	弥生土器甗	6-1区 K19・20	IV-5層	※19.7	-	△13.9	外面：口縁部凹線2条、肩部ハケ状工具による刺突文、体部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、体部ヘラケズリ後ナデ消し	密良好	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：橙～褐灰色	
505	122	1517	弥生土器甗	6-1区 J19・20・K20	IV-5層	15.5	6.3	25.3	外面：口縁部凹線3条、体部ハケ状工具による刺突文・ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、体部ハケメ・ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着

表30 土器観察表(17)

掲載番号	採回番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm) 長さ(cm)	底径(cm) 脚径(cm)	器高(cm) 厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
506	122	1517	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-5層	16.1	6.7	33.1	外面：口縁部凹線3条、体部ヘラ条工具による刺突文・ハケメ・ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、体部ハケメ・ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄～黒褐色 内面：灰黄～暗赤褐色	外面赤色塗彩
507	122	1538	弥生土器 甕	6-1区 K19	IV-5層	※15.1	-	△20.0	外面：口縁部凹線2条、体部ハケ状工具による刺突文・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ・ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付着
508	122	1517	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-5層	17.0	-	△24.8	外面：口縁部凹線3条、体部ハケ状工具による刺突文・ハケメ後ナデ消し 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：にぶい橙～褐灰色	外面煤付着
509	122	1484・1517	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-5層	15.6	7.0	25.0	外面：口縁部凹線3条、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄橙～黒褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付着
510	122	1484	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-5層	※15.0	-	△12.1	外面：口縁部凹線3条、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ・指頭圧痕	密良好	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	外面煤付着
511	122	1484	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-5層	※20.6	-	△10.2	外面：口縁部凹線5条、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ・凹線2条、体部ハケメ・指頭圧痕	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
512	123	1517	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-5層	※15.2	-	△12.5	外面：口縁部凹線4条、体部ナデ・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ヘラケズリ	密良好	外面：橙～黒褐色 内面：灰白～橙～黒褐色	外面煤付着
513	123	1484	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-5層	※12.8	-	△6.6	外面：口縁部凹線2条、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	密良好	外面：黒褐色 内面：黒褐～にぶい赤褐色	外面煤付着
514	123	1517	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-5層	※15.0	-	△6.7	外面：口縁部凹線3条、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ・ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：暗灰黄色	外面煤付着
515	123	1517	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-5層	※12.0	-	△10.6	外面：口縁部凹線2条、体部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄色 内面：灰黄色	外面煤付着
516	123	1517・1538	弥生土器 甕	6-1区 K19・20	IV-5層	※14.0	-	△16.0	外面：口縁部凹線4条、肩～体部ハケ状工具による刺突文・タタキ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ・指頭圧痕・ヘラケズリ	密良好	外面：黒褐～にぶい橙色 内面：黒褐～にぶい橙色	外面煤付着
517	123	1538	弥生土器 甕	6-1区 K19・20	IV-5層	20.4	7.2	33.8	外面：口縁部凹線3条、体部ナデ・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ・ヘラケズリ	密良好	外面：黒褐～橙色 内面：黒～橙色	
518	123	1461	弥生土器 甕	6-4区 M21	IV-5層	※21.6	-	△4.3	外面：口縁部平行沈線5条、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ・ヘラケズリ	密良好	外面：橙色 内面：にぶい橙色	
519	123	1456	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-5層	※17.6	-	△3.8	外面：口縁部平行沈線3条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：明褐色 内面：明褐色	
520	123	1474	弥生土器 甕	6-4区 P21	IV-5層	※17.4	-	△4.8	外面：口縁部平行沈線12条、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ一部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
521	123	1517	弥生土器 甕	6-1区 K20	IV-5層	※20.9	-	△9.7	外面：口縁部平行沈線14条、肩部ハケメ後ヘラミガキ・具股腹縁による刺突文 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：明褐色～褐灰色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	
522	123	1361・1517	弥生土器 甕	6-1区 J・K20	IV-5層	※25.0	-	△6.2	外面：口縁部平行沈線14条、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
523	123	1517・1538	弥生土器 甕	6-1区 K19・20	IV-5層	※14.6	-	△9.2	外面：口縁部ヘラミガキ、体部ヘラミガキ後波状文 内面：口縁部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
524	123	1517	弥生土器 甕か壺	6-1区 K20	IV-5層	-	9.5	△8.2	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：褐灰色	
525	123	1517	弥生土器 甕か壺	6-1区 K20	IV-5層	-	4.1	△13.9	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：橙～暗赤灰色 内面：橙～にぶい橙色	外面煤付着
526	123	1517	弥生土器 甕か壺	6-1区 K20	IV-5層	-	5.8	△5.4	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：黒褐色 内面：黒褐～褐色	
527	123	1517	弥生土器 甕か壺	6-1区 K20	IV-5層	-	6.7	△9.2	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄～黒褐色 内面：灰黄～暗灰黄色	
528	123	1517	弥生土器 甕か壺	6-1区 K20	IV-5層	-	4.9	△4.7	外面：ナデ後一部ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：橙～褐灰色 内面：灰黄～灰白色	
529	124	1538	弥生土器 壺	6-1区 K19	IV-5層	※15.3	-	△12.2	外面：口縁部凹線3条、頭部ハケメ後ハケ状工具による刺突文、肩部ハケメ 内面：口縁～頭部ハケメ後ナデ消し・シボリ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄褐～浅黄褐色 内面：黒褐～浅黄色	
530	124	1517・1538	弥生土器 壺	6-1区 K19・20	IV-5層	※16.3	-	△17.3	外面：口縁部凹線2条、頸～体部ハケメ 内面：口縁～頭部ハケメ後ナデ消し、体部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～浅黄褐色 内面：灰白～浅黄褐色	
531	124	1484・1538	弥生土器 壺	6-1区 K19・20	IV-5層	※16.5	-	△20.1	外面：口縁部凹線3条、頭部ハケメ後ハケ状工具による刺突文、体部タテヘラミガキ 内面：口縁～頭部ナデ・シボリ、体部ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	密良好	外面：灰黄～浅黄色 内面：灰黄～浅黄色	
532	124	1517	弥生土器 壺	6-1区 K20	IV-5層	※21.4	-	△9.4	外面：口縁部凹線5条、頭部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、頭部ハケメ後ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
533	124	1342・1484	弥生土器 壺	6-1区 K20	IV-5層	※17.4	-	△19.5	外面：口縁部凹線3条、頭部ハケメ後ハケ状工具による刺突文、体部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁～頭部ナデ、体部ヘラケズリ後ハケメ・指頭圧痕	密良好	外面：明褐色 内面：明褐色	

表31 土器観察表(18)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm) 長さ(cm)	底径(cm) 脚径(cm)	器高(cm) 厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
534	124	1538	弥生土器壺	6-1区 K19・20	IV-5層	※15.3	7.4	△36.5	外面：口縁部凹線4条、頸部ハケメ後ハケ状工具による刺突文、体部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ後ハケメ	密良好	外面：にぶい黄褐～灰黄褐色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	
535	124	1517	弥生土器壺	6-1区 K20	IV-5層	※16.0	-	△36.7	外面：口縁部凹線2条、頸部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケメ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：橙～にぶい褐色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	
536	125	1484	弥生土器壺	6-1区 K20	IV-5層	※17.0	-	△8.7	外面：口縁部凹線3条、頸部ハケメ・ナデ・凹線1条 内面：口縁部ハケメ後ナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄橙～黄褐色 内面：浅黄褐色	
537	125	1456	弥生土器壺	6-4区 P21	IV-5層	※14.5	-	△7.5	外面：口縁部凹線3条、頸部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケメ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
538	125	1461	弥生土器壺	6-4区 M21	IV-5層	※15.0	-	△6.5	外面：口縁部ヨコナデ・指頭圧痕、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ・指頭圧痕、頸部ナデ・指頭圧痕	密良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
539	125	1461	弥生土器壺	6-4区 M21	IV-5層	※10.6	-	△6.3	外面：口縁部ヨコナデ・穿孔、体部ナデ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
540	125	1474	弥生土器無頸壺	6-4区 P21	IV-5層	※12.0	-	△6.0	外面：口縁部ヨコナデ・円孔、体部ナデ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ハケメ・指頭圧痕	密良好	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	内外面赤色塗彩
541	125	1538	弥生土器台付甕	6-1区 K19	IV-5層	15.6	7.8	17.7	外面：口縁部凹線2条、体部ヘラミガキ・刺突文、脚台部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後一部ヘラミガキ、脚台部ヘラミガキ・工具痕	密良好	外面：にぶい黄橙～黄褐色 内面：にぶい黄橙～黄褐色	外面煤付者
542	125	1538	弥生土器台付鉢	6-1区 K19・20	IV-5層	14.8	9.8	13.6	外面：口縁部凹線3条、体部ヘラミガキ・凹線1条、脚台部沈線7条2段 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラミガキ、脚台部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい褐色	
543	125	1517	弥生土器台付鉢	6-1区 K20	IV-5層	16.2	-	△9.7	外面：口縁部凹線3条、体部ヘラミガキ・凹線3条 内面：口縁部ヨコナデ、体部上半ハケメ、下半ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：橙～明赤褐色 内面：にぶい橙～にぶい黄褐色	
544	125	1518	弥生土器台付鉢	6-1区 K19	IV-5層	14.2	-	△8.0	外面：口縁部凹線4条、体部ヘラミガキ・凹線3条 内面：口縁部ヨコナデ、体部上半ハケメ、下半ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい橙～褐色 内面：にぶい褐色	
545	125	1518	弥生土器台付鉢	6-1区 K19	IV-5層	-	※10.4	△2.9	外面：脚部沈線5条・ヘラミガキ、脚部裾凹線2条 内面：脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：褐灰～黄褐色 内面：浅黄褐色	
546	125	1473	弥生土器裝飾壺	6-4区 M21	IV-5層	-	-	△1.7	外面：平行沈線3条・連続渦文(スタンプ文)・平行沈線 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：赤～浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面赤色塗彩
547	125	1484・1517	弥生土器裝飾壺	6-1区 K20	IV-5層	-	※3.0	△8.8	外面：平行沈線3条・渦文(スタンプ文)・平行沈線3条・貝殻腹縁による羽状文・平行沈線3条・ハケメ 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい赤褐～灰黄褐色 内面：灰黄褐～黒色	
548	125	1368・1517	弥生土器高坏	6-1区 K20	IV-5層	21.4	-	△12.1	外面：坏部平行沈線13条・ヘラミガキ、脚柱部平行沈線8条・ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚台部ヘラケズリ後ナデ	密良好	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	
549	125	1461	弥生土器高坏	6-4区 M21	IV-5層	※16.2	-	△4.8	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：浅黄～灰黄褐色 内面：浅黄～灰黄褐色	
550	125	1538	弥生土器低脚坏	6-1区 K19	IV-5層	-	9.5	△2.7	外面：ハケメ後ナデ消し 内面：ヨコナデ	密良好	外面：にぶい黄橙～灰白色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	
551	125	1342・1472・1484	弥生土器高坏	6-1区 K19・20	IV-5層	※21.8	-	△17.9	外面：坏部ヘラミガキ、脚柱部ヘラミガキ 内面：坏部ヘラミガキ、脚柱部ナデ・指頭圧痕	密良好	外面：赤色 内面：赤褐～暗赤褐色	内外面赤色塗彩
552	125	1318・1484	弥生土器高坏	6-1区 K20	IV-5層	-	※12.8	△8.9	外面：ヘラミガキ・円形透かし孔 内面：ハケメ・ナデ	密良好	外面：浅黄～黒色 内面：浅黄～黒色	
553	125	1517	弥生土器高坏	6-1区 K20	IV-5層	-	※13.1	△4.7	外面：摩滅により不明瞭 内面：ヘラケズリ後ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：黄灰色	
554	125	1474	弥生土器高坏	6-4区 P21	IV-5層	-	※19.5	△5.2	外面：凹線3条、ハケメ後一部ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後一部ヘラミガキ	密良好	外面：灰褐～にぶい黄褐色 内面：灰褐～にぶい黄褐色	内外面赤色塗彩
555	125	1517	弥生土器器台	6-1区 K20	IV-5層	※19.3	-	△8.1	外面：多条平行沈線19条・ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
556	125	1461	弥生土器器台	6-4区 M21	IV-5層	※20.5	-	△5.8	外面：多条平行沈線25条 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい黄橙～灰黄褐色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	
557	125	1484・1517	弥生土器台付鉢	6-1区 K20	IV-5層	-	※11.5	△10.9	外面：体部穿孔・ハケメ・凹線3条・ナデ、脚台部ナデ、脚部裾凹線1条 内面：体部ハケメ後ナデ、脚台部ヘラケズリ後ナデ	密良好	外面：赤褐色 内面：にぶい黄橙～黒色	外面赤色塗彩
558	125	1538	弥生土器注口土器	6-1区 K19	IV-5層	-	-	△7.3	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ナデ	密良好	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：褐灰色	
559	125	1538	弥生土器水差形土器	6-1区 K19	IV-5層	-	-	△4.2	外面：ナデ・指頭圧痕 内面：ナデ	密良好	外面：にぶい褐～黒褐色 内面：褐灰色	
560	125	1456	弥生土器水差形土器	6-4区 P2121	IV-5層	-	-	△4.8	外面：ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：褐灰～黒褐色 内面：灰黄褐～黒褐色	外面煤付者
561	125	1538	土師器甗形土器	6-1区 K19	IV-5層	-	-	△9.5	外面：ハケメ後ナデ 内面：ヘラケズリ後ヘラ状工具によるナデ	密良好	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：にぶい橙～褐灰色	
562	126	167	弥生土器注口土器	6-1区 J19	層位不明・攪乱	-	-	△4.9	外面：ハケメ・沈線3条1組 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	

表32 土器観察表(19)

掲載 番号	挿回 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
563	126	1365	弥生土器 器台	6-4区 M21	層位不明・攪乱	※28.0	-	△5.3	外面：平行沈線6条・ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：灰黄褐色～橙色 内面：にぶい黄褐色～橙色	内外面赤色 塗彩
564	126	1365	弥生土器 器台	6-4区 M21	層位不明・攪乱	-	※19.4	△5.7	外面：凹線3条・ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ・ナデ	密 良好	外面：明褐色～暗灰色 内面：明褐色	
565	126	14	弥生土器 台付裝飾壺	6-1区 L20	層位不明・攪乱	-	-	△3.7	外面：沈線3条・矢羽文・沈線3条・渦文(スタンプ文) 内面：ヘラケズリ後ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
566	126	986	土師器 高坏	6-4区 N21	層位不明・攪乱	※17.6	-	△5.7	外面：磨滅により不明瞭・ハケメ 内面：磨滅により不明瞭	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：橙色	内外面赤色 塗彩
567	139	049	土師器 低脚坏	7区 M25	S006段状遺構 埋土最下部	-	5.6	△3.3	外面：坏・脚部ヨコナデ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ヨコナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	古墳時代前 期前葉
568	140	070	弥生土器 甕	7区 L25	S008段状遺構 埋土	※16.2	-	△5.6	外面：口縁部平行沈線5条、頸部ヨコナデ・工具による 刻み、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラミガキ・ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
569	140	055	弥生土器 甕	7区 L25	S008段状遺構 埋土	※17.8	-	△3.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
570	143	198	陶器 鉢	7区 P22	S091溝内穴 埋土	※19.2	-	△5.2	外面：回転ナデ、施釉 内面：回転ナデ、施釉	密 良好	施釉部：灰白色～にぶい黄色 露胎部：にぶい黄褐色	在地系
571	150	233	土師器 皿	7区 L22	S112土坑 埋土	※8.2	※4.4	2.0	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：口縁～底部回転ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色～橙色 内面：橙色～にぶい褐色	外面油煙付 着
572	160	285	弥生土器 甕	7区 O23	S178段状遺構 埋土上部	※14.9	-	△3.6	外面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
573	160	323・ 331	弥生土器 甕	7区 O23	S178段状遺構 埋土下部	※23.4	-	△6.1	外面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部平行沈線2条以上 内面：口縁～肩部上端ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色～灰褐色 内面：にぶい褐色～にぶい褐色	
574	160	288	弥生土器 甕	7区 O23	S178段状遺構 埋土	※15.8	-	△4.0	外面：口縁部平行沈線4条、頸部ヨコナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	ふつう 良好	外面：にぶい褐色～褐色 内面：浅黄褐色	
575	160	323	弥生土器 甕	7区 O23	S178段状遺構 埋土下部	※16.0	-	△8.6	外面：口縁部平行沈線6条、頸部ヨコナデ、肩部波状文・ 平行沈線2条以上 内面：口縁部ヨコナデ、口縁部下端～肩部上端ヘラミ ガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色～褐色 内面：褐色～褐色	
576	160	322	弥生土器 甕	7区 O23	S178段状遺構 埋土下部	※17.7	-	△10.3	外面：口縁部平行沈線18条以上、頸部ヨコナデ、肩部 平行沈線15条以上・波状文、体部ハケメ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
577	160	316・ 320・ 321	弥生土器 甕	7区 O23	S178段状遺構 埋土	※17.9	-	△11.7	外面：口縁～頸部ヨコナデ、肩～体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ、肩～体部ヘ ラケズリ	やや密 良好	外面：明赤褐色～にぶい褐色 内面：にぶい黄褐色～黒色	
578	160	316	弥生土器 甕	7区 O23	S178段状遺構 埋土	※15.2	-	△7.5	外面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ハケメ・平行沈線4 条以上(波状) 内面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ後ナデ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい黄褐色～褐色	
579	160	288	弥生土器 甕	7区 O23	S178段状遺構 埋土	※16.6	-	△5.9	外面：口縁～頸部磨滅により不明瞭、肩部平行沈線 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：褐色 内面：浅黄褐色	
580	160	288・ 316	弥生土器 甕	7区 O23	S178段状遺構 埋土	※16.6	-	△6.0	外面：口縁～肩部ヨコナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい褐色	
581	160	323	弥生土器 甕	7区 O23	S178段状遺構 埋土下部	※19.9	-	△5.2	外面：口縁～頸部ヨコナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：褐色	
582	160	282・ 316	土師器 壺	7区 O23	S178段状遺構 埋土上部	※21.6	-	△4.9	外面：口縁部ヨコナデ、口縁部沈線1条 内面：口縁部ヨコナデ	密 良好	外面：浅黄褐色～にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	
583	160	288	土師器 甕	7区 O23	S178段状遺構 埋土	※15.8	-	△4.5	外面：口縁～肩部ヨコナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
584	160	307	弥生土器 器台	7区 O23	S178段状遺構 埋土	-	※14.5	△9.1	外面：脚柱部平行沈線6条1組を2段・ヘラミガキ、 脚柱部平行沈線6条 内面：脚柱部ヘラケズリ後ナデ、脚柱部ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
585	160	295	弥生土器 高坏	7区 O23	S178段状遺構 埋土	※26.1	-	△3.3	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	やや密 良好	外面：にぶい褐色～褐色 内面：褐色	
586	160	308	弥生土器 高坏	7区 O23	S178段状遺構 埋土	-	※15.8	△5.2	外面：脚柱部～脚部ヘラミガキ、円形透かし孔(4箇 所) 内面：脚柱部上半ヘラケズリ、脚柱部下半ハケメ、脚 部ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色～褐色	
587	160	316・ 320・ 323・ 324	弥生土器 鼓形器台	7区 O23	S178段状遺構 埋土下部	※20.6	※18.8	13.0	外面：受け～脚部磨滅により不明瞭、脚部一部ハケメ 後ヨコナデ 内面：受け部磨滅により不明瞭、脚部ヘラケズリ、脚 部ヨコナデ	ふつう 良好	外面：褐色～浅黄褐色 内面：褐色	
588	160	320	弥生土器 裝飾壺	7区 O23	S178段状遺構 埋土	-	-	△6.95	外面：肩部無肋の貝殻縁線による刺突文、体部平行沈 線3条1組を2段、同心円文(スタンプ文) 内面：肩部～体部ヘラケズリ後ナデ	やや密 良好	外面：にぶい黄褐色～灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
589	160	288	弥生土器 器台	7区 O23	S178段状遺構 埋土	-	-	△3.4	外面：受け部口縁部平行沈線2条1組を2段、同心円 文(スタンプ文)、受け部ハケメ 内面：受け部磨滅により不明瞭	密 良好	外面：褐色 内面：褐色	
591	174	033	土師器 甕	7区 M25	S002袋状土坑 埋土上部	※18.6	-	△5.3	外面：口縁～肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	

表33 土器観察表(20)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm) 長さ(cm)	底径(cm) 脚径(cm)	器高(cm) 厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
592	174	344	土師器 甕	7区 L25	S002袋状土坑 埋土下部	※16.9	-	△21.3	外面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部平行沈線8条以上・波状文・平行沈線13条以上、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ、体部ヘラケズリ後ナデ	密良好	外面：灰黄色～にぶい橙色 内面：浅黄色～にぶい黄褐色	外面体部煤付着
593	174	044	土師器 甕	7区 L25	S002袋状土坑 埋土上部	※19.6	-	△9.8	外面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部平行沈線、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄褐色～にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
594	174	345	土師器 壺	7区 L25	S002袋状土坑 埋土下部	※15.1	-	△7.1	外面：口縁～頸部上半ヨコナデ、頸部下半～肩部ハケメ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
595	174	033	土師器 高坏	7区 M25	S002袋状土坑 埋土上部	-	-	△16.5	外面：脚柱部ヘラミガキ、脚部掘工具痕 内面：脚柱部ナデ、脚部裾ハケメ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
596	175	216	弥生土器 高坏	7区 L22	S107袋状土坑 埋土	-	-	△9.5	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	密良好	外面：褐灰色～灰黄褐色 内面：灰黄褐色～橙色	
597	175	343・ 330・ 340	弥生土器 甕	7区 M21	S198袋状土坑 埋土	15.8	-	△6.5	外面：口縁部平行沈線、頸～肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後一部ヘラミガキ	密良好	外面：橙色 内面：橙色	
598	188	249	陶器 碗	7区 K21	S150土坑 埋土	-	※7.2	△6.2	外面：体部上半回転ナデ、体部下半回転ヘラケズリ・施軸、削り出し高台・露胎 内面：体～底部回転ナデ、施軸	密良好	施軸部：にぶい黄褐色～明黄褐色 露胎部：浅黄褐色	
599	188	257	越前焼 壺	7区 K21	S150土坑 埋土	※12.2	-	△12.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰褐色～オリーブ灰 内面：灰褐色～にぶい橙色	
600	188	248	越前焼 甕	7区 K21	S150土坑 埋土	-	※13.6	△6.8	外面：ナデ 内面：ナデ、工具痕	密良好	外面：にぶい赤褐色～黒褐色～浅黄色 内面：灰色～灰黄色	
601	205	178	備前焼 四耳壺	7区 M24	S088 埋土	15.3	19.9	37.8	外面：口縁～体部ヨコナデ、口縁部下内線1条、体部下位ヨコナデ後板状工具によるナデ、底部回転ナデ後ナデ 内面：口縁～底部ヨコナデ、体部ヨコナデ後板状工具によるナデ、指頭圧痕	密良好	外面：にぶい褐色～にぶい淡黄色 内面：灰褐～青灰色	重量10.8kg
602	207	032・ 111	土師器 甕	7区 L25	S012段状遺構 貼床直上	※16.7	-	△6.0	外面：口縁～肩部ヨコナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色～黒褐色	S002袋状土坑埋土上層出土と接合
603	212	148	弥生土器 甕	7区 N24	S063段状遺構 埋土下部	※15.8	-	△5.2	外面：口縁部縦凹線3条、頸部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：褐灰色 内面：褐灰色	
604	221	167	縄文土器 深鉢	7区 M24	S081溝 埋土	-	-	△4.0	外面：頸部ハケ状細密条痕、体部上端部突起、沈線による直線文・曲線文 内面：頸部～体部ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色～灰白色 内面：灰黄褐色～にぶい黄褐色	
605	224	341	弥生土器 甕	7区 O23	I層 攪乱埋土	※17.0	-	△16.2	外面：口縁～肩部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁～頸部ヘラミガキ、肩～体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐色～黒褐色 内面：にぶい赤褐色	
606	224	192	弥生土器 注口土器	7区 P23	II層	-	-	△4.5	外面：ナデ 内面：ナデ、工具痕	やや密良好	外面：橙色～にぶい黄褐色～浅黄褐色 内面：灰黄色～橙色～黒色	
607	224	131	須恵器 甕	7区 K21	I層 攪乱埋土	-	-	△3.4	外面：頸部下端工具による刺突痕、体部沈線1条・波状文、 内面：頸～体部回転ナデ	密良好	外面：黄灰色 内面：黄灰色	
608	224	253	須恵器 高台付壺	7区 N23	II層	-	※10.8	△5.0	外面：体部回転ナデ、高台貼り付け 内面：体～底部回転ナデ、静止後一部ナデ	密良好	外面：黄灰色～にぶい黄色 内面：黄灰色～灰黄色	
609	224	236	陶器 播鉢	7区 O23	II層	-	-	△5.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ後播目	密良好	外面：淡黄色 内面：にぶい橙色～灰白色	
610	224	114	陶器 播鉢	7区 Tr.16エ リア 北部	II層	※28.0	-	△4.4	外面：口縁～体部回転ナデ 内面：口縁部播目後回転ナデ、体部回転ナデ後播目	密良好	外面：赤灰色 内面：にぶい赤褐色～赤灰色	関西系
611	224	236	越前焼？ 播鉢	7区 O23	II層	-	※15.5	△3.9	外面：ナデ 内面：回転ナデ後播目8本	密良好	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
612	224	72	青磁 碗	7区 N25	II層	-	-	△5.0	外面：施軸、鑄蓮弁文 内面：施軸	密良好	施軸部：灰オリーブ色 露胎部：灰黄色	
613	225	242	弥生土器 甕	7区 O23	III層 (南部包含層)	※16.7	-	△4.7	外面：口縁～肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ後一部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：橙色 内面：橙色	
614	225	242	弥生土器 甕	7区 O23	III層 (南部包含層)	※15.6	-	△5.4	外面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ後ナデ	密良好	外面：にぶい褐色～褐灰色 内面：にぶい褐色～橙色	外面煤付着
615	225	247	土師器 高坏	7区 O23	III層 (南部包含層)	※22.8	-	△6.7	外面：口縁部ヨコナデ、坏底部ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、坏底部ハケメ後ナデ	密良好	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	内外面赤色塗彩
616	225	002	弥生土器 壺	7区 北西部	III層 (包含層1)	-	つまみ部 3.6	△5.8	外面：つまみ部ナデ、天井部ヘラミガキ 内面：つまみ部内面ナデ、天井部ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
617	225	006	弥生土器 小型壺	7区 Tr.15エ リア 北西部	III層 (包含層1)	※8.3	-	△7.3	外面：口縁～体部摩滅により不明瞭 内面：口縁～頸部摩滅により不明瞭、肩～体部指頭圧痕	密良好	外面：にぶい黄褐色～褐灰色 内面：にぶい黄褐色～黒褐色	

表34 土器観察表(21)

掲載番号	採回番号	取上番号	種別器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
618	225	003	弥生土器 器台	7区 M25	Ⅲ層 (包含層1)	-	※139	△6.5	外面:脚柱-脚台部摩滅により不明瞭、脚部裾ヨコナデ 内面:脚柱部ナデ、脚台部ヘラケズリ、脚部裾ヨコナデ	密 良好	外面:明赤褐色~橙色 内面:黒色	
619	225	031	弥生土器 器台	7区 M25	Ⅲ層 (包含層1)	-	-	△5.7	外面:脚柱部ヘラミガキ、脚台部平行沈線11条以上 内面:脚柱-脚台部ヘラケズリ	密 良好	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	
620	225	058	弥生土器 器台か高坏	7区 M25	Ⅲ層 (包含層1)	-	※16.4	△6.3	外面:脚柱部ヘラミガキ、脚台部波状文・平行沈線4条、 脚台部上端、脚部裾ヨコナデ 内面:脚柱-脚台部ヘラケズリ、脚部裾ヨコナデ	密 良好	外面:橙色~浅黄褐色 内面:浅黄褐色	
621	226	074・ 079・ 121・ 124	弥生土器 甕	7区 M24・25	Ⅳ層上部 (谷部包含層1上)	※18.8	-	△8.8	外面:口縁-頸部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ 内面:口縁-頸部ヨコナデ、口縁-肩部上半ヘラミガ キ、体部ヘラケズリ	ふつう 良好	外面:橙色~褐灰色 内面:黒褐色~にぶい黄褐色	
622	226	086	弥生土器 甕	7区 M25	Ⅳ層上部 (谷部包含層1上)	※13.8	-	△8.5	外面:口縁-頸部ヨコナデ、肩部平行沈線9条・波状 文 内面:口縁部ヨコナデ後一部ナデ、口縁部の一部・肩 部上端ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面:灰白色 内面:浅黄褐色~黄灰色	外面煤付着
623	226	074・ 079	土師器 鼓形器台	7区 M25	Ⅳ層上部 (谷部包含層1上)	※21.6	-	△7.6	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	密 良好	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	
624	226	090・ 095・ 096他	弥生土器 甕	7区 M25	Ⅳ層下部 (谷部包含層1下)	17.6	-	△5.7	外面:口縁部平行沈線31条、頸-肩部ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	内面:明黄褐色 外面:明黄褐色	
625	226	020・ 087	土師器 壺	7区 M25	Ⅳ層上部 (谷部包含層1上)	※16.0	-	△7.8	外面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ、肩部ヘラケ ズリ後一部ヘラミガキ	ふつう 良好	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	
626	226	014	弥生土器 器台	7区 N25	Ⅳ層上部 (谷部包含層1上)	-	-	△6.6	外面:受け部口縁部平行沈線6条以上、脚柱部ヘラミ ガキ 内面:受け部ヘラミガキ、脚柱部ナデ	やや密 良好	外面:にぶい橙色~灰黄褐色 内面:にぶい橙色	
627	226	088	弥生土器 甕	7区 M25	Ⅳ層上部 (谷部包含層1上)	※19.9	-	△9.4	外面:口縁部平行沈線14条、頸部ヨコナデ、肩部平行 沈線17条・波状文 内面:口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 やや良 好	外面:浅黄褐色 内面:灰白色	外内面煤付着
628	226	024	弥生土器 甕	7区 M25	Ⅳ層上部 (谷部包含層1上)	-	-	△4.6	外面:体部平行沈線3条1組を2段、貝殻腹縁による 羽状文、同心円文(スタンプ文) 内面:体部ヘラミガキ	密 良好	外面:にぶい橙色 内面:にぶい橙色	外面体部下 半煤付着
629	226	088・ 089	弥生土器 蓋	7区 M25	Ⅳ層上部 (谷部包含層1上)	天井部 ※11.0	つまみ部 2.9	6.0	外面:つまみ部ヨコナデ、天井部ヘラミガキ 内面:天井部ヘラミガキ	密 良好	外面:橙色 内面:橙色	
630	226	084・ 085	弥生土器 器台	7区 M25	Ⅳ層上部 (谷部包含層1上)	※16.0	※11.0	△13.0	外面:受け部口縁部平行沈線4条以上、受け部ヨコナ デ、脚柱部ハケメ後平行沈線3条と5条・同心円文(ス タンプ文)3列、脚台部平行沈線5条 内面:受け部ヘラミガキ、脚柱部ヘラケズリ後ナデ、 脚柱部下端-脚台部ヘラミガキ	やや密 良好	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色	
631	226	081	弥生土器 甕	7区 M25	Ⅳ層上部 (谷部包含層1上)	※18.8	-	△6.9	外面:口縁-肩部ヨコナデ 内面:口縁-頸部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	やや密 良好	外面:浅黄褐色 内面:浅黄褐色~褐灰色	
632	226	080	土師器 壺	7区 M25	Ⅳ層下部 (谷部包含層1下)	※15.2	-	△6.9	外面:口縁-頸部ヨコナデ、頸部工具による刻み、肩 部ハケメ後ヨコナデ 内面:口縁-頸部上半ヨコナデ、頸部下半ハケメ後ナ デ、肩部ヘラケズリ	ふつう 良好	外面:橙色 内面:橙色	
633	226	081	弥生土器 甕	7区 M25	Ⅳ層上部 (谷部包含層1上)	※16.4	-	△5.8	外面:口縁部平行沈線13条以上、頸部ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ、口縁部の一部・ 肩部ヘラミガキ	密 良好	外面:橙色 内面:橙色	外面煤付着
634	226	006	弥生土器 甕	7区 M25	Ⅳ層上部 (谷部包含層1上)	※23.0	-	△10.3	外面:口縁部多状平行沈線7条以上、頸部ヨコナデ、 肩部平行沈線5条と7条・波状文 内面:口縁部ヨコナデ、口縁部下半-肩部上半ヘラミ ガキ、体部ヘラケズリ	やや密 良好	外面:橙色 内面:橙色	外面口縁部 煤付着
635	226	097・ 100・ 120他	弥生土器 甕	7区 M25	Ⅳ層下部 (谷部包含層1下)	※16.3	-	△19.0	外面:口縁-頸部ヨコナデ、体部ハケメ 内面:口縁-体部摩滅により不明瞭	やや密 良好	外面:橙色~にぶい褐色 内面:橙色~にぶい褐色	
636	227	036・ 094	弥生土器 甕	7区 M25	V層 (谷部包含層2上)	※20.0	-	△8.6	外面:口縁-頸部ヨコナデ、肩部ハケメ後ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	やや密 良好	外面:橙色 内面:橙色	外面煤付着
637	227	063・ 083・ 088・ 097他	弥生土器 壺	7区 M25	V層 (谷部包含層2上)	-	-	△33.9	外面:肩部貝殻腹縁による平行沈線19条・押しき状連 続刻突文、体部ハケメ後体部下半ヘラミガキ 内面:肩-体部ヘラケズリ	密 良好	外面:橙色 内面:橙色	
638	260	0178	肥前系陶器 高台付皿	8区 S21	S224水田	※14.0	※4.2	3.5	外面:口縁-体部灰軸施軸、高台脇に胎土目付着、畳 付のみ露胎 内面:口縁-底部灰軸施軸、底部砂目付着	密 良好	施軸部:灰白色 露胎部:浅黄色	
639	260	0168	肥前系陶器 高台付皿	8区 S20	S224水田	※14.2	※5.0	3.9	外面:口縁部灰軸施軸、体部下半ヘラケズリ、高台内 兜巾 内面:口縁部溝縁、灰軸施軸、底部に胎土目付着	密 良好	施軸部:灰白色 露胎部:にぶい褐色	
640	260	0103	肥前系陶器 皿	8区 S20	S224水田	-	4.6	△1.8	外面:体部以外露胎・砂目付着、底部回転糸切り 内面:底部施軸・砂目付着	密 良好	施軸部:オリブ灰~灰白色 露胎部:にぶい黄色	
641	260	0205	肥前系陶器 碗	8区 R20	S227擬似畦畔 盛土	※14.7	-	△4.9	外面:施軸 内面:施軸	密 良好	施軸部:にぶい褐色 露胎部:にぶい褐色	
642	260	0205	肥前系陶器 皿	8区 R20	S227擬似畦畔 盛土	※15.4	-	△2.7	外面:口縁部施軸、体部露胎 内面:口縁-体部施軸	密 良好	施軸部:にぶい黄褐~灰白色 露胎部:浅黄褐色	

表35 土器観察表(22)

掲載番号	挿入番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm)長さ(cm)	底径(cm)脚径(cm)	器高(cm)厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
643	260	0204	肥前系陶器高台付皿	8区R20	S243擬似畦畔盛土	-	※4.8	△16	外面：露胎、蛇の目高台 内面：灰釉施釉	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：橙色	
644	260	0173・0265	瀬戸・美濃系陶器壺	8区R20・21	S224水田・S228自然流路埋土	※17.4	-	△35	外面：玉縁、灰釉施釉 内面：灰釉施釉	密良好	施釉部：灰黄色 露胎部：灰黄色	
645	260	0169	肥前系陶器高台付碗	8区R20	S225水田	-	※5.0	△21	外面：見込輪状掻き取り 内面：底部一部施釉	密良好	施釉部：灰褐色 露胎部：にぶい橙色	
646	260	0169	肥前系陶器皿	8区R20	S225水田	-	※4.4	△15	外面：体部上半施釉、下半～底部無釉、筆筒底状、底面内兜巾 内面：体部施釉、底面無釉	密良好	施釉部：オリーフ黄色 露胎部：灰白～赤褐色	
647	260	0169	肥前系磁器碗	8区R20	S225水田	※11.6	-	△26	外面：施釉 内面：施釉、染付草花文？、砂目付着	密良好	施釉部：明緑灰色 露胎部：灰白色	
648	260	0161	肥前系陶器高台付皿	8区R20	S225水田	-	4.7	△28	外面：体部上半灰釉施釉、体部下半～底部露胎、高台内砂目付着 内面：体～底部灰釉施釉、底部に砂目付着	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：明黄褐色	
649	260	0335	土師器小皿	8区R20	S228自然流路埋土	※7.9	※6.4	1.4	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転系切り 内面：口縁～底部回転ナデ	やや密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	在地系
650	260	0199	肥前系陶器小碗	8区R20	S228自然流路埋土	-	-	△22	外面：無釉 内面：施釉	密良好	施釉部：緑灰色 露胎部：灰白色	埴野釉
651	260	0284	肥前系磁器高台付碗	8区R20	S228自然流路埋土	-	4.4	△31	外面：染付、高台内露胎、高台に圈線1条、高台内兜巾 内面：施釉	密良好	施釉部：明緑灰色 露胎部：灰白	
652	260	0335	波佐見焼？高台付碗	8区R20	S228自然流路埋土	-	※4.5	△27	外面：陶胎染付、高台畳付以外施釉 内面：施釉	密良好	施釉部：明オリーフ灰色 露胎部：灰白色	
653	260	0284	肥前系磁器高台付皿	8区R20	S228自然流路埋土	-	※4.4	△27	外面：体部下半～底部以外施釉、高台内兜巾 内面：体部施釉、底部蛇の目細剥ぎ・砂目付着	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	
654	260	0284	波佐見焼？高台付碗	8区R20	S228自然流路埋土	-	※4.4	△33	外面：陶胎染付、畳付のみ無釉 内面：施釉	密良好	施釉部：明オリーフ灰色 露胎部：赤褐色	
655	260	0284	肥前系磁器高台付皿	8区R20	S228自然流路埋土	-	※4.2	△23	外面：体部下半～底部以外施釉、高台に砂目付着 内面：体部施釉、底部蛇の目細剥ぎ・砂目付着	密良好	施釉部：白色 露胎部：灰白色	
656	260	0335	備前焼甕	8区R20	S228自然流路埋土	-	-	△45	外面：ナデ 内面：ナデ	密良好	外面：灰～灰白色 内面：灰色	
657	260	0335	越前焼掃鉢	8区R20	S228自然流路埋土	※29.6	-	△66	外面：口縁部下凹み、ナデ 内面：口縁部外剥ぎ、指頭圧痕、掃目11本以上	密不良	外面：浅黄橙色 内面：浅黄褐色	
658	260	0171	備前焼掃鉢	8区R20	S228自然流路埋土	※31.5	-	△42	外面：口縁部沈線3条・ナデ 内面：ナデ、掃目	密良好	外面：灰赤色 内面：赤褐色	
659	260	0335・0347他	越前焼大甕	8区R20	S228自然流路埋土	-	※18.0	△90	外面：タテヘラケズリ後ナデ 内面：タテヘラケズリ後ナデ	密良好	外面：にぶい赤褐色 内面：灰褐色	
660	260	0343	備前焼大甕	8区R20	S228自然流路埋土	※35.3	-	△99	外面：口縁部玉縁、口縁～肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黄灰色 内面：にぶい褐色～灰黄褐色	
661	263	0315	須恵器甕	8区Q21	S244溝埋土	-	-	△39	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：灰白色	在地系
662	263	0195	青磁碗	8区Q21	S244溝埋土	-	-	△33	外面：施釉、鎚連弁文 内面：施釉	密良好	施釉部：オリーフ灰色 露胎部：灰白色	
663	266	0626	弥生土器甕	8区R23	S349溝埋土	※18.4	-	△52	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
664	266	0630	肥前系陶器掃鉢	8区Q23	S349・350溝埋土	-	※11.6	△45	外面：体部ヘラケズリ後ヨコナデ、高台内ナデ 内面：掃目	密良好	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	須佐唐津
665	270	0627	肥前系磁器高台付碗	8区R23	S348土坑埋土	-	※4.6	△31	外面：体部上半施釉(緑色)、下半～底部露胎 内面：体～底部灰釉(緑色)	密良好	施釉部：にぶい黄色 露胎部：にぶい橙色	
666	272	0714	肥前系陶器高台付掃鉢	8区R22	S371土坑埋土	-	※11.0	△85	外面：体部中位で段有、ヘラケズリ後ヨコナデ、高台内も含め鉄銹 内面：体～底部掃目、鉄銹	密軟質	施釉部：にぶい赤褐色 露胎部：浅黄褐色	須佐唐津？
667	277	0951	肥前系陶器高台付皿	8区S20	S591土坑埋土	※13.2	4.7	3.5	外面：口縁～体部施釉、体部中位で回転ヘラケズリ、高台内兜巾、砂目付着 内面：口縁部溝縁、薄い灰釉施釉、底部砂目付着	密良好	施釉部：灰オリーフ色 露胎部：にぶい黄褐色	
668	288	0164	須恵器甕	8区Q21	S230ピット埋土	-	-	△49	外面：平行タタキ 内面：車輪状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：灰色	在地系
669	288	0709	備前焼小德利	8区R21	S367ピット埋土	-	※5.4	△45	外面：体部回転ナデ、底部回転系切り・ナデ 内面：体部～底部回転ナデ	密良好	外面：暗赤褐色 内面：褐色	
670	288	0786	肥前系陶器皿	8区R22	S381ピット埋土	※14.2	-	△24	外面：口縁～体部薄い灰釉施釉 内面：口縁部溝縁、薄い灰釉施釉	密良好	施釉部：灰白色 露胎部：にぶい赤褐色	
671	288	0793	肥前系磁器碗	8区S22	S396ピット埋土	-	-	△20	外面：施釉、ヘラ掻きによる連弁文 内面：施釉、ヘラ掻きによる連弁文	密良好	施釉部：明オリーフ灰色 露胎部：灰白色	染付、芙蓉手の皿？遺物番号672と同一個体
672	288	0793	肥前系磁器皿	8区S21・22	S436ピット埋土	-	-	△20	外面：施釉、ヘラ掻きによる連弁文 内面：施釉、ヘラ掻きによる連弁文	密良好	施釉部：明オリーフ灰色 露胎部：灰白色	染付、芙蓉手の皿？遺物番号671と同一個体

表36 土器観察表(23)

掲載番号	採回番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm)長さ(cm)	底径(cm)脚径(cm)	器高(cm)厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
673	288	0870	越前焼甕	8区 R23	S506ピット1層	※26.0	-	△11.6	外面：口縁～体部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部指頭圧痕・ナデ	密良好	外面：灰褐色 内面：灰赤～にぶい赤褐色	
674	288	1003	弥生土器壺	8区 R21	S617ピット埋土	※31.7	-	△4.2	外面：口縁部凹線4条、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ	密良好	外面：灰白～黄褐色 内面：灰黄～黄褐色	
675	288	0925	石見焼蓋	8区 S23	S574ピット埋土	天井部6.4	つまみ部1.8	2.5	外面：つまみ～天井部施軸・回転ナデ 内面：天井部無軸・回転ナデ	密良好	施軸部：灰黄～浅黄色 露胎部：灰黄色	
675	288	0925	石見焼小壺	8区 S23	S574ピット埋土	7.8	5.1	7.3	外面：底部以外施軸、口縁～底部回転ナデ、削り出し高台 内面：頸部軸抜き消し、体～底部施軸、回転ナデ	密良好	施軸部：灰黄～浅黄色 露胎部：灰黄色	
676	288	1050・1057	弥生土器甕	8区 R22	S696ピット1層・V層	※12.6	-	△5.5	外面：口縁部平行沈線3条、体部ハケメ・ナデ・刺突文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
677	294	0292	肥前系陶器皿	8区 S20	S262土坑埋土	-	-	△1.3	外面：体部無軸 内面：体部灰軸施軸、底部染付凹線2条・蛇の目軸刺き	密良好	施軸部：灰白色 露胎部：灰黄色	
679	296	0253	須恵器高坏	8区 S20	S254ピット埋土	-	-	△4.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰～灰白色 内面：灰白色	
680	300	0633	瓦質土器鍋	8区 Q20	S315溝最下層	※25.0	-	△2.4	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	密不良	外面：暗灰色 内面：灰色	在地系、外面煤付着
681	300	0615	越前焼？甕	8区 R20	S315溝最下層	-	-	△8.8	外面：タテヘラケズリ後ナデ 内面：ヨコヘラケズリ後ナデ	密良好	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
682	301	0843	須恵器甕	8区 R20	S533杭列	-	-	△4.6	外面：口縁部玉縁状、ヨコナデ、頸部ヨコナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ、一部ハケメ	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
683	308	0942	弥生土器壺	8区 R21	S727溝埋土	※15.8	-	△4.0	外面：口縁部平行沈線5条、頸部ハケメ・ナデ 内面：口縁部ハケメ・ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～にぶい黄褐色 内面：灰白～にぶい黄褐色	
684	308	0942	弥生土器壺	8区 R21	S727溝埋土	※14.9	-	△4.6	外面：口縁部平行沈線5条、頸部ナデ 内面：口縁部ハケメ、頸部ヘラケズリ・ナデ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
685	308	0942	弥生土器高坏	8区 R21	S727溝埋土	-	※21.0	△4.2	外面：ヨコナデ 内面：ハケメ後ナデ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
686	308	0938	土師器瓶形土器	8区 R20	S727溝埋土	-	※35.5	△19.5	外面：体部タテハケ、裾部ヨコナデ 内面：体部ヨコヘラケズリ、裾部ヨコナデ	密良好	内面：にぶい黄褐色 外面：灰黄褐色	
687	308	0973	須恵器甕	8区 Q20	S727溝埋土	-	-	△7.1	外面：羽状文、カキメ、沈線2条、羽状文 内面：回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
688	308	0916	須恵器甕	8区 S20	S727溝埋土	※19.2	-	△6.5	外面：口縁端部一部剥落、ヨコナデ、突帯2条、波状文 内面：ヨコナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
689	308	0973	須恵器甕	8区 Q20	S727溝埋土	-	-	△4.8	外面：口縁部玉縁、口縁～頸部ヨコナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
690	308	0938	須恵器甕	8区 R20	S727溝埋土	-	-	△4.7	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
691	308	0938	須恵器甕	8区 R20	S727溝埋土	-	-	△8.3	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
692	308	0916	須恵器甕	8区 S20	S727溝埋土	-	-	△5.8	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密不良	外面：黄灰色 内面：灰黄褐色	
693	308	0916	須恵器甕	8区 S20	S727溝埋土	-	-	△5.2	外面：ハケメ 内面：青海波状当て具痕	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	遺物番号694と同一個体の可能性
694	308	0916	須恵器甕	8区 S20	S727溝埋土	-	-	△4.2	外面：ハケメ 内面：青海波状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：灰白色	遺物番号693と同一個体の可能性
695	308	0418	須恵器甕	8区 Q20	S727溝埋土	-	-	△3.0	外面：ハケメ 内面：青海波状当て具痕	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
696	308	0938	須恵器甕	8区 R20	S727溝埋土	-	-	△4.7	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
697	308	0938	須恵器甕	8区 R20	S727溝埋土	-	-	△9.0	外面：格子目状タタキ 内面：青海波状当て具痕	密良好	外面：暗灰色 内面：灰色	
698	308	0955	須恵器甕	8区 R21	S727溝埋土	-	-	△7.4	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕・指頭圧痕	密良好	外面：灰白色 内面：灰色	
699	308	0916	須恵器甕	8区 S20	S727溝埋土	-	-	△10.8	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕・ナデ消し	密良好	外面：暗灰色 内面：灰褐色	
700	308	0916	須恵器甕	8区 S20	S727溝埋土	-	-	△6.9	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕、ナデ消し、指頭圧痕	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
701	309	0955	須恵器甕	8区 R21	S727溝埋土	-	-	△8.1	外面：平行タタキ 内面：ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰色	
702	309	0973	須恵器甕	8区 Q20	S727溝埋土	-	-	△16.2	外面：格子目状タタキ 内面：格子目状当て具痕	密良好	外面：暗灰色 内面：灰白色	

表37 土器観察表 (24)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
703	309	0955	須恵器 甕	8区 R21	S727溝埋土	-	-	△8.4	外面：格子目タタキ 内面：格子目状当て具痕	審良好	外面：灰色 内面：灰白色	
704	309	0919	亀山焼 甕	8区 R20	S727溝埋土	-	-	△6.5	外面：格子目タタキ 内面：カキメ	審不良	外面：暗灰色 内面：灰色	
705	309	0904・0938・0973	須恵器 甕	8区 Q・R20	S727溝埋土	-	-	△11.5	外面：平行タタキ 内面：格子目状当て具痕	審良好	外面：灰色 内面：黄灰色	
706	309	0942	備前焼 大甕	8区 R21	S727溝埋土	※34.2	-	△13.2	外面：口縁部玉縁、口縁～肩部ナデ 内面：口縁～肩部ヨコナデ	審良好	外面：灰赤～灰黄褐色 内面：灰～暗灰黄色	
707	309	0916	備前焼 大甕	8区 S20	S727溝埋土	-	-	△8.5	外面：ナデ 内面：ナデ	審良好	外面：褐色 内面：にぶい黄色	遺物番号706と同一個体か
708	309	0942	備前焼 大甕	8区 R21	S727溝埋土	-	-	△11.9	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	審良好	外面：褐色 内面：灰色	遺物番号706と同一個体か
709	309	0938	瓦質土器 鍋	8区 R20	S727溝埋土	※25.4	-	△4.3	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	審良好	外面：灰白色 内面：灰白色	外面煤付者
710	309	0955	瓦質土器 鍋	8区 R21	S727溝埋土	※28.2	-	△3.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ	審良好	外面：灰黄色 内面：黒色	外面煤付者
711	309	0938	瓦質土器 鍋	8区 R20	S727溝埋土	-	-	△7.1	外面：体部ナデ・指頭圧痕 内面：体部ヨコナデ	審良好	外面：黒褐色 内面：暗オリーブ色	外面煤付者
712	309	0955	瓦質土器 鍋	8区 R21	S727溝埋土	-	-	△4.3	外面：体部ナデ・指頭圧痕 内面：体部ヨコナデ	審良好	外面：黒褐色 内面：灰黄色	外面煤付者
713	309	0919・0955	瓦質土器 鍋	8区 R21	S727溝埋土	※30.1	-	△4.7	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	審良好	外面：黒色 内面：灰～灰白色	外面煤付者
714	309	0938	瓦質土器 鍋	8区 R20	S727溝埋土	※23.4	-	△5.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	審良好	外面：黒色 内面：灰色	外面煤付者
715	309	0955	瓦質土器 羽釜	8区 R21	S727溝埋土	※29.0	-	△7.6	外面：口縁部ヨコナデ、鏝部ナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁～体部ハケメ	審良好	外面：黒色 内面：暗灰色	外面煤付者
716	309	0955	瓦質土器 羽釜	8区 R21	S727溝埋土	※18.2	-	△2.5	外面：口縁部ヨコナデ・ハケメ、鏝部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ	審良好	外面：黄灰色 内面：灰白色	外面煤付者
717	310	0938	須恵器 環	8区 R20	S727溝埋土	※12.8	※6.4	4.8	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体～底部回転ナデ	審良好	外面：灰～灰白色 内面：灰～灰白色	
718	310	0938	土師器 高台付坏	8区 R20	S727溝埋土	※11.8	※7.2	△5.2	外面：口縁～底部回転ナデ、高台内ナデ 内面：口縁～底部回転ナデ	審良好	内面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	在地系
719	310	0938	土師器 高台付坏	8区 R20	S727溝埋土	-	5.2	△1.8	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体～底部回転ナデ	審良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	在地系
720	310	0916	白磁 小坏	8区 S20	S727溝埋土	※9.9	※5.8	3.1	外面：口縁～体部上半施釉、下半～底部露胎、底部回転ヘラ切り 内面：口縁口剥ぎ、底部胎土目付着	審良好	施釉部：明オリーブ灰色 露胎部：灰白色	
721	310	0919	青磁 碗	8区 R20	S727溝埋土	-	-	△3.9	外面：施釉、鎚蓮弁文 内面：施釉	審良好	施釉部：オリーブ灰色 露胎部：オリーブ灰色	
723	312	0295	須恵器 甕	8区 Q21	S290溝埋土	-	-	△8.2	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	審良好	外面：灰白色 内面：灰白色	在地系
724	312	0386	土師器 甕	8区 Q21	S290溝埋土	※29.3	-	△9.0	外面：口縁部ハケメ後ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	審良好	外面：にぶい橙色 内面：浅黄褐色	
725	312	0393	弥生土器 甕	8区 Q21	S312ピット埋土	※16.0	-	△7.7	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ後一部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	審良好	外面：明褐色 内面：橙～浅黄褐色	
726	312	0393	弥生土器 甕	8区 Q21	S312ピット埋土	※18.4	-	△5.0	外面：口縁部多条沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	審良好	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
727	312	0393	弥生土器 蓋	8区 Q21	S312ピット埋土	天井部 ※15.8	つまみ部 5.0	6.2	外面：つまみ部ナデ、天井部ヘラミガキ 内面：つまみ部ナデ、天井部不定方向ヘラミガキ・部分的にナデ	審良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
728	313	0176	肥前系陶器 皿	8区 S21	S220土坑埋土	※15.8	-	△2.0	外面：口縁～体部上半部施釉、体部下半露胎 内面：口縁～体部施釉、絵付草花文	審良好	施釉部：灰オリーブ色 露胎部：にぶい橙色	絵唐津
729	313	0165	須恵器 壺	8区 S21	S232土坑埋土	-	-	△8.4	外面：回転ナデ、自然釉 内面：回転ナデ	審良好	外面：浅黄褐色～にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	
730	314	0282	土師器 甕形土器	8区 R21	S277土坑埋土	-	-	△8.7	外面：体部ヨコナデ後ハケメ、裾部ヨコナデ 内面：体部ヨコナデ、裾部ヨコナデ	審良好	外面：灰白～浅黄褐色 内面：にぶい褐～褐色	
731	317	0449	須恵器 甕	8区 Q21	S339土坑埋土	-	-	△6.1	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	審良好	外面：灰色 内面：灰色	
732	317	0461	弥生土器 甕	8区 Q21	S339土坑埋土	※17.4	-	△4.7	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	審良好	外面：褐灰色 内面：褐灰～にぶい褐色	外面煤付者
733	324	0554	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑2層	※14.0	-	△7.2	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ状工具による波状文、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩～体部ヘラケズリ	審良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付者

表38 土器観察表(25)

掲載 番号	挿回 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
734	324	0495	弥生土器 甕	8区 Q21	S216土坑 2層	※16.7	-	△6.2	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、口縁部と肩部の境ヘラミガキ	密 良好	外面：灰白色 内面：明褐色	
735	324	0481	弥生土器 甕	8区 Q21	S216土坑 2層	-	-	△6.2	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
736	324	0095	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※17.6	-	△4.4	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：褐灰～灰白色 内面：灰白色	
737	324	0557	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※17.0	-	△5.0	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、口縁部と肩部の境ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
738	324	0525	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※17.4	-	△6.0	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
739	324	0536・ 0560	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※17.8	-	△4.3	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	密 良好	外面：褐灰～にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色～灰白色	
740	324	0044	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※17.0	-	△4.8	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ・一部ヘラミガキ、肩部摩滅により不明瞭	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
741	324	0539・ 0551	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※17.4	-	△4.7	外面：口縁部丸みを帯び、つまみ上げる、口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
742	324	0507	弥生土器 甕	8区 Q21	S216土坑 2層	※18.8	-	△5.0	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
743	324	0484	弥生土器 甕	8区 Q21	S216土坑 2層	※16.4	-	△3.8	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
744	324	0038	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※17.0	-	△5.5	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	ふつつ 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
745	324	0039	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※19.5	-	△4.6	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ハケ状工具による平行沈線 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	ふつつ 良好	外面：灰褐～褐色 内面：灰白色	
746	324	0075	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※17.9	-	△4.8	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ハケ状工具による平行沈線・波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
747	324	0551・ 0552	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※18.7	-	△10.5	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ハケ状工具による平行沈線・波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩～体部ヘラケズリ	ふつつ 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
748	324	0090	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※13.3	-	△12.1	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ・あまい凹みを呈する、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
749	324	0510	弥生土器 甕	8区 Q21・22	S216土坑 2層	※19.0	-	△6.8	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ハケ状工具による平行沈線 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
750	324	0070	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	18.4	-	△8.3	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ハケ状工具による平行沈線 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	ふつつ 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
751	324	0555	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※16.6	-	△18.1	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ハケ状工具による平行沈線、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩～体部ヘラケズリ	ふつつ 良好	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	外面体部煤付着
752	324	0553	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 2層	※19.0	-	△5.4	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩～体部ハケ状工具による平行沈線・波状文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	外面体部煤付着
753	324	0377・ 0486・ 0494・ 0500	弥生土器 脚付無頸壺	8区 Q21	S216土坑 2層	※10.3	-	△9.3	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ・一部指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ・指頭圧痕	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
754	324	0530	弥生土器 壺	8区 Q22	S216土坑 2層	-	-	△4.2	外面：口縁部平行沈線5条、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	密 良好	内面：浅黄褐色 外面：浅黄褐色	
755	324	0050・ 0055・ 0056	弥生土器 鼓形器台	8区 Q22	S216土坑 2層	※21.0	※19.0	14.1	外面：受け部ヨコナデ、脚部ヨコナデ 内面：受け部摩滅により不明瞭、脚部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
756	324	0516	弥生土器 鼓形器台	8区 Q21・22	S216土坑 2層	-	-	△7.9	外面：受け部ヨコナデ、脚部ヨコナデ 内面：受け部ナデ、脚部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
757	324	0562	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 3層	※15.0	-	△5.5	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ハケ状工具による波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
758	324	0537	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 4層	-	-	△4.4	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
759	324	0085	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 4層	※20.4	-	△5.8	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	ふつつ 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	

表39 土器観察表(26)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm)長さ(cm)	底径(cm)脚径(cm)	器高(cm)厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
760	324	0082・0084	弥生土器 甕	8区 Q22	S216土坑 4層	※14.6	-	△12.1	外面：口縁端部丸みを帯びる、口縁部ハケ状工具による波状文、肩部波状文、体部ハケメ 内面：口縁部ココナデ、肩～体部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～褐灰色 内面：灰白～浅黄橙色	外面体部煤付着
761	324	0081	弥生土器 注口土器	8区 Q22	S216土坑 4層	-	-	△6.0	外面：注口部欠損、上から沈線3条、貝殻腹線による羽状文、沈線3条、刺突文 内面：体部ヘラケズリ、注口基部ナデ	密良好	外面：暗灰色 内面：にぶい黄橙色	
762	329	0705	弥生土器 甕	8区 R21	S355炭化物集中	※20.2	-	△5.0	外面：口縁部平行沈線5条、肩部貝殻腹線による刺突文 内面：口縁部ココヘラミガキ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	外面煤付着
763	334	0993	弥生土器 器台	8区 R21	S626溝埋土	※21.0	-	△4.5	外面：口縁部平行沈線9条、受け部ココヘラミガキ 内面：受け部ココヘラミガキ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：明褐色	内外面赤色塗彩
764	335	1049	弥生土器 甕	8区 S20	S606土坑埋土	※14.2	-	△8.4	外面：口縁部凹線1条、肩部ハケメ・刺突文、体部タテヘラミガキ、黒斑 内面：口縁部ココナデ、体部上半ハケメ、体部下半ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
765	335	0915・0988	弥生土器 甕	8区 S21	S600溝埋土	※24.2	-	△33.1	外面：口縁部凹線、肩部ハケメ・刺突文、体部タテヘラミガキ 内面：口縁部ココナデ・指頭斑・ハケメ、体部ハケメ後ナデ、体部下半ヘラケズリ	密良好	外面：明赤褐色 内面：にぶい褐色	
766	336	0995	弥生土器 甕	8区 R21	S630溝 1層	※16.5	-	△2.9	外面：口縁部凹線3条、頸部ココナデ 内面：口縁～頸部ココナデ	密良好	外面：橙色 内面：褐色	
767	336	0995	弥生土器 高坏	8区 R21	S630溝 1層	-	-	△6.3	外面：タテヘラミガキ 内面：シボリ・ナデ・ヘラケズリ	密良好	外面：明褐～灰白色 内面：灰白色	外面赤色塗彩
768	336	0995	弥生土器 器台	8区 R21	S630溝 1層	※14.2	-	△3.2	外面：口縁～受け部ココヘラミガキ 内面：口縁～受け部ココヘラミガキ	密良好	外面：黒褐～灰褐色 内面：黒褐～灰褐色	
769	336	1056	弥生土器 甕	8区 Q21	S650溝 1層	※18.0	-	△5.1	外面：口縁部凹線2条、肩部ココナデ 内面：口縁部ココナデ、体部上半ハケメ・ナデ、下半ヘラケズリ	密良好	外面：灰白色 内面：にぶい橙色	
770	337	1036	弥生土器 甕	8区 R20・21	S629土坑埋土	※21.8	-	△4.8	外面：口縁部平行沈線7条、肩部ココナデ 内面：口縁部ココヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
771	342	1013	弥生土器 甕	8区 S20	S613ピット埋土	※18.5	-	△16.4	外面：口縁～頸部ココナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ココナデ、頭～体部上半ヘラミガキ、体部下半ヘラケズリ後ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
772	342	1042	弥生土器 甕	8区 Q21	S641ピット 1層	-	6.4	△4.4	外面：体部タテヘラミガキ、底面ナデ 内面：体部～底部ヘラケズリ・ナデ	密良好	外面：褐灰～灰褐色 内面：褐灰色	
773	344	0016	肥前系陶器 皿	8区 エリア1 表土中	I層	-	-	△1.9	外面：口縁～体部薄い灰釉施軸 内面：口縁部溝線、口縁～体部薄い灰釉施軸	密良好	施軸部：灰オリーブ色 露胎部：褐色	
774	344	0015	肥前系陶器 高台付皿	8区 エリア2 表土中	I層	-	※4.4	△1.5	外面：底部無釉、高台内兜巾 内面：底部蛇の目刺き・砂目付着	密良好	施軸部：灰白色 露胎部：浅黄橙色	
775	344	0003	肥前系陶器 皿	8区 エリア2 表土中	I層	※12.8	-	△1.9	外面：口縁部錆釉(緑色)、体部無釉 内面：口縁～体部錆釉(緑色)	密良好	施軸部：オリーブ黄色 露胎部：褐色	
776	345	0375	須恵器 甕	8区 Q20	II-1層	-	-	△5.8	外面：平行タタキ 内面：ナデ	密良好	外面：暗灰色 内面：灰～黄灰色	
777	345	0375	須恵器 甕	8区 Q20	II-1層	-	-	△8.2	外面：平行タタキ 内面：車輪状当て具痕	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
778	345	0290	肥前系陶器 高台付皿	8区 R20	II-1層	※13.0	4.4	3.2	外面：口縁部銅緑釉施軸、体部無釉、回転ヘラケズリ、高台内兜巾 内面：口縁～底部銅緑釉施軸、口縁部内面端周線1条、見込み周線2条、底面砂目付着	密良好	施軸部：暗オリーブ色 露胎部：にぶい黄褐色	
779	345	0216	肥前系陶器 皿	8区 S20	II-1層	-	-	△2.2	外面：口縁端部張り出す、灰釉施軸 内面：口縁部灰釉施軸	密良好	施軸部：灰白色 露胎部：灰白色	
780	345	0289	肥前系陶器 高台付皿	8区 S20	II-1層	※11.5	※4.1	2.7	外面：口縁部銅緑釉施軸、体部無釉、回転ヘラケズリ、高台内兜巾 内面：口縁～底部銅緑釉施軸、草花文、底面砂目付着	密良好	施軸部：オリーブ黄色 露胎部：灰黄色	
781	345	0116	肥前系陶器 高台付皿	8区 R21	II-1層	※13.0	※5.2	3.5	外面：口縁～体部灰釉施軸(緑色)、高台内砂目付着 内面：口縁部溝線、口縁～底部灰釉施軸(緑色)	密良好	施軸部：灰オリーブ色 露胎部：灰色	
782	345	0290	肥前系陶器 皿	8区 R20	II-1層	※15.9	-	△2.8	外面：口縁～体部薄い灰釉施軸 内面：口縁部溝線、口縁～体部薄い灰釉施軸	密良好	施軸部：灰白色 露胎部：褐色	遺物番号784と同一個体の可能性
783	345	0290	肥前系陶器 皿	8区 R20	II-1層	-	-	△2.8	外面：口縁部灰釉施軸(緑色)、体部無釉 内面：口縁～体部灰釉施軸(緑色)	密良好	施軸部：灰オリーブ色 露胎部：灰黄色	
784	345	0290	肥前系陶器 皿	8区 R20	II-1層	-	-	△2.0	外面：口縁～体部灰釉施軸(緑色) 内面：口縁部溝線、灰釉施軸(緑色)	密良好	施軸部：灰オリーブ色 露胎部：灰黄色	
785	345	0290	肥前系陶器 高台付皿	8区 R20	II-1層	-	※5.0	△2.1	外面：体～底部無釉、高台内兜巾 内面：体～底部薄い灰釉施軸	密良好	施軸部：灰白色 露胎部：褐色	遺物番号781と同一個体の可能性
786	345	0462	肥前系陶器 高台付皿	8区 R20	II-1層	-	※4.0	△1.3	外面：体～底部灰釉施軸、底部無釉 内面：体～底部灰釉施軸、底部蛇の目刺き	密良好	施軸部：灰オリーブ色 露胎部：にぶい黄褐色	

表40 土器観察表(27)

掲載 番号	挿回 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
787	345	0290	肥前系陶器 高台付大皿	8区 R20	II-1層	-	※9.7	△3.3	外面：底部無軸 内面：底部蛇の目軸剥ぎ、砂目付着	密 良好	施釉部：暗オリーブ色 露胎部：にぶい黄褐色	
788	345	0375	陶器 灯明皿	8区 Q20	II-1層	※7.7	3.1	2.0	外面：口縁部施釉、体～底部無軸・回転ナデ 内面：口縁～底部灰軸、回転ナデ	密 良好	施釉部：にぶい黄色 露胎部：橙色	在地系
789	345	0462	陶器 高台付皿	8区 R20	II-1層	-	※9.1	△2.1	外面：体部上半施釉、体部下半～底部無軸、体部下半 回転ヘラタズリ 内面：体～底部施釉	密 良好	施釉部：灰オリーブ色 露胎部：灰黄色	在地系
790	345	0290	瀬戸美濃系 陶器 皿	8区 R20	II-1層	※11.1	-	△2.4	外面：口縁～体部鉄軸施釉、口縁下括れ持つ 内面：口縁～体部鉄軸施釉	密 良好	施釉部：オリーブ褐色 露胎部：灰白色	
791	345	0375	肥前系陶器 鉢	8区 Q20	II-1層	-	-	△3.4	外面：口縁部外反、口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：褐色	須佐唐津
792	345	0290	瀬戸美濃系 陶器 碗	8区 R20	II-1層	-	※4.7	△7.3	外面：体部施釉・貫入・草花文、高台内無軸 内面：体～底部施釉・貫入	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	
793	345	0239	肥前系磁器？ 高台付皿	8区 R20	II-1層	-	※4.0	△1.8	外面：体部施釉、底部無軸 内面：底部蛇の目軸剥ぎ・砂目付着	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	
794	345	0239	肥前系磁器？ 高台付皿	8区 R20	II-1層	-	4.1	△2.5	外面：体部施釉、底部無軸・兜巾、畳付軸掻取り 内面：底部蛇の目軸剥ぎ・砂目付着	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	
795	345	0239	肥前系磁器 高台付皿	8区 R20	II-1層	-	※5.6	△2.0	外面：施釉、畳付の軸掻取り 内面：施釉、染付、圏線2条	密 良好	施釉部：明青灰色 露胎部：灰白色	
796	345	0289	肥前系磁器 高台付皿	8区 S20	II-1層	-	※4.5	△1.5	外面：底部灰軸施釉 内面：底部灰軸施釉・網目文	密 良好	施釉部：青灰～オリーブ灰色 露胎部：灰白色	
797	345	0290	肥前系磁器 高台付皿	8区 R20	II-1層	-	※7.4	△1.7	外面：体～底部施釉、体部下半圏線1条、高台外面圏線 3条・砂目付着、高台内圏線1条・渦福文 内面：底部施釉、圏線2条、五弁花の印判手	密 良好	施釉部：明オリーブ灰色 露胎部：灰白色	
798	345	0462	磁器 猪口	8区 R20	II-1層	※7.1	2.6	3.5	外面：施釉、染付、笹文、畳付無軸 内面：施釉	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	在地か出石 周辺の染付 か
799	345	0435	陶器 小坏	8区 Q20	II-1層	※8.0	-	△3.8	外面：口縁～体部灰軸施釉、口縁部下染付、圏線1条 内面：口縁～体部灰軸施釉	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	
800	345	0289	陶器 皿	8区 S20	II-1層	※12.9	-	△2.0	外面：灰軸施釉 内面：灰軸施釉、染付、草花文？	密 良好	施釉部：灰オリーブ色 露胎部：灰白色	在地系陶胎
801	345	0290	肥前系磁器 碗	8区 S20	II-1層	-	-	△3.7	外面：灰軸施釉、口縁部下圏線3条、染付、草花文？ 内面：灰軸施釉	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：灰白色	波佐見焼？
802	346	0437	瓦質土器 播鉢	8区 S20	II-1層	-	-	△2.6	外面：ヨコナデ 内面：播目5本1組	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	在地系
803	346	0239	備前焼 播鉢	8区 R20	II-1層	-	-	△2.0	外面：底部工具によるナデ 内面：播目	密 良好	外面：灰赤～褐灰色 内面：にぶい赤褐色	
804	346	0289	備前焼 播鉢	8区 S20	II-1層	-	-	△5.9	外面：ヨコナデ 内面：播目3本以上、自然軸	密 良好	外面：灰色 内面：黄灰色	
805	346	0109	備前焼 播鉢	8区 S20	II-1層	-	-	△3.9	外面：口縁部拡張、ヨコナデ 内面：口縁部内面屈曲部、ヨコナデ	田土 良好	外面：暗赤灰～暗赤褐色 内面：暗赤褐色	
806	346	0290	備前焼 播鉢	8区 R20	II-1層	-	-	△4.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、浅い播目	密 不良	外面：にぶい橙色 内面：にぶい褐色	関西系播 鉢？
807	346	0464	備前焼 播鉢	8区 S20	II-1層	※28.8	-	△5.8	外面：口縁部拡張、ヨコナデ 内面：口縁部下凹線・ヨコナデ、播目5本1組	密 良好	外面：赤灰色 内面：赤灰色	
808	346	0239	備前焼 播鉢	8区 R20	II-1層	※35.2	-	△5.9	外面：口縁～体部ヨコナデ、口縁部凹線2条 内面：口縁～体部ヨコナデ、体部播目9本1組	密 不良	外面：橙色 内面：明赤褐色	
809	346	0290	備前焼 播鉢	8区 R20	II-1層	-	※12.8	△3.6	外面：体部ヨコナデ、底部回転ヘラナデ 内面：体～底部ハケ状工具による浅い播目	密 良好	外面：灰褐色 内面：灰褐色	
810	346	0239	備前焼 壺	8区 R20	II-1層	-	※19.8	△8.9	外面：体部ヨコナデ、底部ナデ 内面：体部ヨコナデ、底部ナデ	密 良好	外面：オリーブ黒色 内面：暗赤褐色	
811	346	0239	備前焼？ 壺	8区 R20	II-1層	-	-	△9.2	外面：ヨコナデ、連続弧線文、平行沈線3条 内面：ヨコナデ	田土 良好	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
812	346	0347	土師器 鍋	8区 R20	II-1層	※24.2	-	△4.6	外面：口縁部ヨコナデ、頸～体部ハケメ後ナデ 内面：口縁～体部ヨコナデ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
815	347	0316	須恵器 甕	8区 R20	II-2層	-	-	△4.6	外面：平行タタキ 内面：青海波状状で具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
816	347	0378	亀山焼 甕	8区 R20	II-2層	-	-	△5.5	外面：格子目状タタキ 内面：カキメ	軟質 不良	外面：灰色 内面：暗灰色	
817	347	0316	須恵器 甕	8区 R20	II-2層	-	-	△8.6	外面：ハケメ後ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰色	
818	347	0325	肥前系陶器 皿	8区 R20	II-2層	-	※4.3	△2.0	外面：体～底部削り出し高台・高台内兜巾・砂売布着 内面：体～底部灰軸施釉、底部胎土目付着	密 良好	施釉部：にぶい黄褐色 露胎部：灰白色	

表41 土器観察表(28)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm)長さ(cm)	底径(cm)脚径(cm)	器高(cm)厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
819	347	0405	肥前系磁器高台付皿	8区R20	II-2層	-	4.1	△25	外面: 体部上半施釉、底部下半~底部無釉・砂目付着、高台内兜巾 内面: 体部施釉、染付、圏線1条、底部蛇の目軸剥ぎ	密良好	施釉部: 明オリブ灰色 露胎部: 灰白・橙色	
820	347	0325	肥前系陶器皿	8区R20	II-2層	※15.3	-	△19	外面: 口縁部灰軸施釉、体部露胎 内面: 口縁~体部灰軸施釉、体部鉄軸による染付	密良好	施釉部: 明オリブ灰色 露胎部: にぶい橙色	
821	347	0325	肥前系陶器皿	8区R20	II-2層	※13.8	-	△10	外面: 口縁部灰軸施釉 内面: 口縁部溝縁・灰軸施釉	密良好	施釉部: オリブ黄色 露胎部: 灰オリブ色	
822	347	0325	肥前系磁器碗	8区R20	II-2層	※12.7	-	△22	外面: 口縁部施釉、染付、圏線2条 内面: 口縁部施釉、染付、圏線2条	密良好	施釉部: 灰白~灰色 露胎部: 灰白~灰色	化粧土あり
823	347	0394	瀬戸美濃系陶器高台付皿	8区R20	II-2層	※11.4	※6.9	2.5	外面: 口縁部折縁、口縁~底部施釉(緑色)、高台内砂目付着 内面: 口縁~底部施釉(緑色)	密良好	施釉部: オリブ灰色 露胎部: 灰色	
824	347	0325	瀬戸美濃系陶器高台付皿	8区R20	II-2層	-	※5.2	△0.9	外面: 底部施釉(緑色)、高台内圏線2条 内面: 底部施釉(緑色)	密良好	施釉部: 緑色 露胎部: 淡黄色	折縁皿または丸皿の底部?
825	347	0622・0660	瓦質土器羽釜	8区Q20	II-2層	※20.2	※18.8	△8.7	外面: 口縁部ヨコナデ、罅部ナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面: 口縁~体部ヨコナデ	密良好	外面: 褐灰~灰白~黒色 内面: 黄灰~灰色	外面煤付着
826	347	0378	瓦質土器鍋	8区R20	II-2層	26.7	※22.0	△9.3	外面: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面: 口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ・指頭圧痕	密良好	外面: 灰白~黄灰~黒色 内面: 黄灰~灰白色	外面煤付着
827	347	0388・0394	瓦質土器鍋	8区R20	II-2層	※27.2	※25.6	△10.4	外面: 口縁部ヨコナデ、体部ハケメ・ナデ・指頭圧痕 内面: 口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	密良好	外面: 黒褐~黒色 内面: 黄灰~灰色	外面煤付着
828	347	0394	瓦質土器鍋	8区R20	II-2層	※28.2	※25.7	△9.9	外面: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面: 口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	密良好	外面: 黄褐~黒色 内面: 灰色	外面煤付着
829	347	0316	越前焼甕	8区R20	II-2層	-	-	△8.6	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	密良好	外面: 褐灰色 内面: 褐灰色	
830	347	0325	備前焼播鉢	8区R20	II-2層	※26.4	-	△29	外面: 口縁部ヨコナデ・凹線1条 内面: 口縁部ヨコナデ	密良好	外面: 暗赤灰色 内面: 暗赤灰色	
831	347	0316	備前焼大甕	8区R20	II-2層	-	※27.2	△6.8	外面: 体部タテハケ・ヘラナデ 内面: 体部ヨコナデ、底部ナデ	密良好	外面: 灰赤色 内面: 明褐~灰赤色	
832	348	0108・0338	肥前系陶器甕	8区R20・Q22	II-2層	※29.5	-	△27.5	外面: 口縁部押印有・ナデ、体部に刻み突帯2条・ヨコナデ 内面: 口縁~体部ヨコナデ	密良好	外面: 暗赤灰~灰赤色 内面: にぶい褐色	
834	349	0283	須恵器甕	8区S20	III層	-	-	△6.8	外面: 平行タタキ 内面: 青海波状当て具痕	密良好	外面: 灰白色 内面: 灰色	
835	349	0212	須恵器甕	8区Q21	III層	-	-	△14.5	外面: 平行タタキ・ハケメ 内面: 青海波状当て具痕	密良好	外面: 灰白色 内面: 灰白色	
836	349	0901	須恵器高台付坏	8区S20	III層	※16.0	※11.0	4.1	外面: 口縁~底部回転ナデ 内面: 口縁~底部回転ナデ	密良好	外面: 灰色 内面: 灰色	
837	349	1011	須恵器高台付坏	8区S20	III層	-	※11.2	△13	外面: 底部回転ナデ 内面: 底部回転ナデ	密良好	外面: 灰色 内面: 灰色	
838	349	0901	須恵器坏	8区S20	III層	-	※9.0	△1.4	外面: 体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面: 体~底部回転ナデ	密良好	外面: 灰色 内面: 灰色	底面に墨書有り
839	349	0451	瓦質土器鍋	8区S20	III層	-	-	△4.8	外面: 口縁部ヨコナデ 内面: 口縁部ハケメ	密良好	外面: 灰白色 内面: 灰色	在地系
840	349	0451	陶器播鉢	8区S20	III層	-	-	△3.9	外面: 片口、ヨコナデ・指頭圧痕 内面: ヨコナデ	密良好	外面: 赤褐~黒褐色 内面: 灰褐色	備前模倣品
841	349	0451	備前焼甕	8区S20	III層	-	-	△6.2	外面: ヘラ状工具によるナデ 内面: ナデ	密良好	外面: にぶい赤褐色 内面: 灰色	
842	349	0417	備前焼甕	8区Q20	III層	-	-	△7.5	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	密良好	外面: 暗赤灰色 内面: 黄灰色	
843	349	0211	肥前系磁器碗	8区R20	III層	-	-	△6.4	外面: 口縁~体部施釉、染付、口縁部圏線2条、体部圏線1条 内面: 口縁~体部施釉	密良好	施釉部: 明緑灰色 露胎部: 灰白色	
844	349	0913	青磁碗	8区R20	III層	-	-	△2.9	外面: 施釉 内面: 施釉	密良好	施釉部: 灰オリブ色 露胎部: 灰白色	龍泉窯
845	349	0222	肥前系陶器高台付皿	8区R21	III層	-	※4.4	△1.6	外面: 灰軸施釉、高台内砂目付着 内面: 灰軸施釉、底部胎土目・砂目付着	密良好	施釉部: 灰白色 露胎部: 灰白色	
846	349	0913	青磁香炉	8区R20	III層	※16.2	-	△4.8	外面: 施釉、口縁端部内折、片口 内面: 施釉	密良好	施釉部: 灰オリブ色 露胎部: 灰白色	龍泉窯?
847	349	0348	瓦質土器鍋	8区S20	III-1層	※30.0	-	△5.3	外面: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面: 口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	密良好	外面: 灰色 内面: 灰白色	外面煤付着
848	349	0334・0394	瓦質土器鍋	8区R20	III-2層	※26.8	-	△7.0	外面: 口縁部ヨコナデ、体部ハケメ・ナデ・指頭圧痕 内面: 口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	密良好	外面: 灰~灰白~黒色 内面: 灰色	外面煤付着
849	349	0360	須恵器高台付坏	8区S20	III-3層	-	※9.6	△1.9	外面: 体部回転ナデ、高台内ナデ 内面: 体~底部回転ナデ	密良好	外面: 黄灰色 内面: 灰色	
850	350	0589	弥生土器甕	8区S20	III-4層	※11.2	-	△5.2	外面: 口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面: 口縁部ヨコナデ、肩部ヘラズリ	密良好	外面: 灰白色 内面: 灰白色	

表42 土器観察表(29)

掲載 番号	挿回 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
851	350	0589	弥生土器 甕	8区 S20	Ⅲ-4層	※11.0	-	△5.9	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
852	350	0589	弥生土器 甕	8区 S20	Ⅲ-4層	※17.7	-	△4.2	外面：口縁部平行沈線11条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
853	350	0589	弥生土器 甕	8区 S20	Ⅲ-4層	※17.2	-	△3.7	外面：口縁部平行沈線 内面：口縁部ヨコナデ	密 良好	外面：灰白～にぶい黄橙色 内面：灰白～浅黄橙色	
854	350	0589	弥生土器 甕	8区 S20	Ⅲ-4層	※14.1	-	△4.8	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部 摩滅のため不明瞭 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～明濁灰色 内面：灰白～明濁灰色	
855	350	0589	弥生土器 甕	8区 S20	Ⅲ-4層	※17.0	-	△5.3	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部 ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部摩滅のため不明瞭	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	内外面赤色 塗彩
856	350	0589	弥生土器 甕	8区 S20	Ⅲ-4層	※16.0	-	△4.7	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部 ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～灰黄褐色 内面：灰白色	
857	350	0589	弥生土器 甕	8区 S20	Ⅲ-4層	※16.8	-	△6.1	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部 ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
858	350	0589	弥生土器 甕	8区 S20	Ⅲ-4層	※15.8	-	△5.4	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部 ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	外面煤付着
859	350	0589	弥生土器 甕	8区 S20	Ⅲ-4層	※16.3	-	△21.2	外面：口縁部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、体部 ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ・指頭圧痕	密 良好	外面：灰黄褐～橙色 内面：にぶい黄橙～橙色	外面煤付着
860	350	0589	弥生土器 高坏	8区 S20	Ⅲ-4層	-	※13.9	△8.3	外面：脚柱部タテヘラミガキ、脚部裾円形透かし孔、 ハケメ 内面：脚柱部ナデ、脚部裾ハケメ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	外面赤色塗 彩
861	350	0589	弥生土器 鼓形器台	8区 S20	Ⅲ-4層	-	※17.0	△5.2	外面：脚部ヨコナデ 内面：脚部ヨコナデ・ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
862	350	0603	弥生土器 器台	8区 R21	Ⅲ-4層	※20.0	-	△4.1	外面：口縁部凹線3条、脚柱部ヘラミガキ 内面：受け部ヘラミガキ	密 良好	外面：淡橙～赤褐色 内面：淡橙～にぶい赤褐色	内外面赤色 塗彩
863	350	0589	弥生土器 器台	8区 S20	Ⅲ-4層	13.0	-	△5.9	外面：口縁部平行沈線18条、受け部ヘラミガキ 内面：受け部ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄褐色	
864	350	0589	弥生土器 器台	8区 S20	Ⅲ-4層	-	※15.8	△3.2	外面：脚台部平行沈線9条 内面：脚台部ヨコヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	外面赤色塗 彩
865	350	0603	弥生土器 台付鉢か甕	8区 R21	Ⅲ-4層	-	13.1	△5.3	外面：脚台部ヨコヘラミガキ 内面：脚台部ヨコナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：暗灰～灰白色	
866	350	0328	須恵器 甕	8区 S20	Ⅲ-4層	※18.0	-	△4.3	外面：口縁～肩部回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ、頸部格子目状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
867	350	0364	須恵器 甕	8区 S20	Ⅲ-4層	-	-	△4.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰～暗灰色 内面：灰色	
868	350	0867	須恵器 甕	8区 R・S20	Ⅲ-4層	-	-	△5.1	外面：平行タタキ・ハケメ 内面：青海波状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰白色	
869	350	0364	須恵器 高坏	8区 S20	Ⅲ-4層	-	※11.0	△3.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰白～黒褐色 内面：灰色	
870	350	0377	土師器 甕	8区 Q21	Ⅲ-4層	※25.0	-	△6.7	外面：口縁～体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙～褐灰色 内面：灰黄褐～黒褐色	
871	350	0395	土師器 坏	8区 S20	Ⅲ-4層	-	※8.0	△2.9	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体～底部回転ナデ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：黄褐色	在地系
872	351	0395	瓦質土器 鍋	8区 S20	Ⅲ-4層	※22.2	-	△5.7	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁～体部ヨコナデ	密 良好	外面：灰色 内面：黄灰色	外面煤付 着、在地系
873	351	0684	瓦質土器 鍋	8区 S20	Ⅲ-4層	※24.6	-	△4.6	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁ヨコナデ、体部ハケメ	密 良好	外面：灰色 内面：黄灰～灰白色	外面煤付 着、在地系
874	351	0601	瓦質土器 鍋	8区 R20	Ⅲ-4層	※25.0	-	△5.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	密 良好	外面：灰白～黒色 内面：灰白色	外面煤付 着、在地系
875	351	0660	瓦質土器 羽釜	8区 Q20	Ⅲ-4層	※20.4	-	△5.9	外面：口縁部ヨコナデ、鈿部ナデ、体部ナデ 内面：口縁～体部ヨコナデ	密 良好	外面：灰～暗灰色 内面：灰色	外面煤付 着、在地系
876	351	0665	瓦質土器 羽釜	8区 Q20	Ⅲ-4層	※25.1	-	△6.5	外面：口縁部ヨコナデ、鈿部ナデ、体部ナデ 内面：口縁～体部ヨコナデ	密 良好	外面：灰～黒色 内面：灰色	外面煤付 着、在地系
877	351	0589・ 0593	瓦質土器 羽釜	8区 S20	Ⅲ-4層	※21.6	※19.5	△9.5	外面：口縁部ヨコナデ、鈿部ナデ、体部ナデ・指頭圧 痕 内面：口縁～体部ヨコナデ・指頭圧痕	密 良好	外面：灰白～黒褐色 内面：暗灰黄～灰白色	外面煤付 着、在地系
878	351	0867	備前焼 播鉢	8区 R・S20	Ⅲ-4層	-	-	△3.9	外面：体部ヨコナデ 内面：播目7本1組	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
879	351	0867	備前焼 播鉢	8区 R・S20	Ⅲ-4層	-	※17.3	△4.4	外面：体部ヨコナデ、底部粗いナデ 内面：体～底部丁寧なヨコナデ、播目10本1組	田土 良好	外面：褐灰色 内面：灰色	
880	351	0867	越前焼 播鉢	8区 R・S20	Ⅲ-4層	※32.4	-	△7.0	外面：口縁～体部ヨコナデ 内面：口縁～体部ヨコナデ、口縁下凹線1条、体部播 目12本1組	密 良好	外面：褐灰～にぶい赤褐色 内面：赤灰～にぶい赤褐色	

表43 土器観察表(30)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm)長さ(cm)	底径(cm)脚径(cm)	器高(cm)厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
881	351	0867	備前焼 甕	8区 R・S20	Ⅲ-4層	-	-	△92	外面：ハケ状工具によるタテナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：灰～にぶい赤褐色 内面：黄灰色	
882	351	0867	石鍋	8区 R・S20	Ⅲ-4層	-	※17.4	△60	外面：体～底部ハケメ・ナデ 内面：体～底部ナデ	密 良好	外面：灰黄褐～にぶい黄褐色 内面：灰黄褐～にぶい黄褐色	地元の石材
883	351	0867	青磁 高台付碗	8区 R・S20	Ⅲ-4層	※14.1	5.6	7.4	外面：口縁～底部施釉、口縁端部外反、体部無文、高 台盤付施釉・高台内鉄釉 内面：口縁～底部施釉、見込みにスタンプ文	密 良好	施釉部：オリープ灰色 露胎部：にぶい橙色	
884	351	0377	青磁 高台付碗	8区 Q21	Ⅲ-4層	-	-	△33	外面：施釉・鋤逆弁文 内面：施釉	密 良好	施釉部：明オリープ灰色 露胎部：灰白色	龍泉窯
885	351	0589	青磁 高台付碗	8区 S20	Ⅲ-4層	-	※4.3	△24	外面：施釉・逆弁文、高台鉄釉 内面：施釉	密 良好	施釉部：明オリープ灰色 露胎部：灰白色	龍泉窯
888	352	0599	須恵器 甕	8区 S20	Ⅱ～Ⅲ層	-	-	△8.7	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
889	352	0606	須恵器 甕	8区 R20	Ⅱ～Ⅲ層	-	-	△7.8	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
890	352	0610	須恵器 甕	8区 R20	Ⅱ～Ⅲ層	-	-	△5.2	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
891	352	0142	須恵器 甕	8区 R20	Ⅱ～Ⅲ層	-	-	△7.9	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
892	352	0606	須恵器 甕	8区 R20	Ⅱ～Ⅲ層	-	-	△3.3	外面：平行タタキ 内面：ナデ	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
893	352	0140	須恵器 高台付壺	8区 S21	Ⅱ～Ⅲ層	-	※14.5	△100	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 良好	外面：灰～灰白色 内面：灰色	
894	352	0610	越前焼 甕	8区 R20	Ⅱ～Ⅲ層	-	-	△15.4	外面：ハケメ 内面：ナデ	密 軟質	外面：褐～にぶい褐色 内面：にぶい褐・橙色	
895	352	0599	越前焼？ 甕	8区 S20	Ⅱ～Ⅲ層	-	-	△7.6	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：灰黄褐色	
896	352	0606	備前焼 播鉢	8区 R20	Ⅱ～Ⅲ層	※27.4	-	△8.8	外面：口縁部片口・ヨコナデ、体部ヨコナデ 内面：口縁～体部ヨコナデ、体部播目6本1組	密 良好	外面：明赤褐～黒褐色 内面：灰赤色	
897	352	0599	越前焼 播鉢	8区 R20	Ⅱ～Ⅲ層	※34.9	※11.2	12.2	外面：口縁～体部ヨコナデ、底部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ・凹線1条、体部播目12本1組	密 良好	外面：灰赤～橙色 内面：灰赤～橙色	
898	352	0606	越前焼 播鉢	8区 R20	Ⅱ～Ⅲ層	-	-	△7.3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・播目5本1組	密 やや軟質	外面：にぶい褐色 内面：褐灰色	
899	352	0609	備前焼 播鉢	8区 S20	Ⅱ～Ⅲ層	-	-	△6.0	外面：ヨコナデ 内面：丁寧なヨコナデ、播目8本1組	田土 良好	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
900	352	0599	瓦質土器 捏鉢	8区 S20	Ⅱ～Ⅲ層	-	※17.8	△5.4	外面：体部ヨコナデ・指頭圧痕 内面：体部ヨコナデ	密 良好	外面：灰～灰白色 内面：灰～灰白色	
901	352	0599	陶器 甕	8区 S20	Ⅱ～Ⅲ層	-	※20.8	△4.1	外面：体部タテナデ・ヨコナデ 内面：体部ヨコナデ	密 良好	外面：暗赤褐色 内面：にぶい黄褐色	
902	352	0610	越前焼？ 大甕	8区 R20	Ⅱ～Ⅲ層	-	※39.0	△7.3	外面：体部ヨコナデ 内面：体部ヨコナデ	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：オリープ褐色	
903	352	0140	肥前系陶器 皿	8区 S21	Ⅱ～Ⅲ層	※13.4	-	△2.5	外面：口縁部灰釉施釉、体部無釉 内面：口縁部溝縁、口縁～体部灰釉施釉	密 良好	施釉部：灰オリープ色 露胎部：灰黄色	
904	352	0036・ 0142	肥前系陶器 皿	8区 R20	Ⅱ～Ⅲ層	※11.3	※3.2	3.0	外面：口縁部灰釉施釉(緑色)、体～底部無釉、底部砂 目付着 内面：口縁～体部灰釉施釉、草花文、底部一部露胎、 砂目付着	密 良好	施釉部：オリープ黄色 露胎部：灰白色	絵唐津
905	353	0438	須恵器 甕	8区 S20	Ⅲ～Ⅳ層	-	-	△10.7	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
906	353	0907	土師器 播鉢	8区 S20	Ⅲ～Ⅳ層	-	-	△4.9	外面：口縁～体部ヨコナデ 内面：口縁～体部ヨコナデ、体部播目6本1組	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：灰白色	東播磨模 倣？
907	353	0438	瓦質土器 羽釜	8区 S20	Ⅲ～Ⅳ層	※21.2	※19.2	△9.1	外面：口縁部ヨコナデ、鐙部ナデ、体部ナデ 内面：口縁～体部ヨコナデ	軟質 良好	外面：灰白～黒色 内面：灰白色	外面煤付者
908	354	0638	弥生土器 甕	8区 S20	Ⅳ-1層	※15.6	-	△11.3	外面：口縁部ヨコナデ、体部タテハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ・指頭圧痕	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：褐色	体部煤付者
909	354	0619	弥生土器 甕	8区 R21	Ⅳ-1層	※20.6	-	△4.3	外面：口縁部凹線3条、肩部タテハケ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：褐灰～にぶい褐色	
910	354	0453	弥生土器 甕	8区 S21	Ⅳ-1層	※20.9	-	△4.8	外面：口縁部凹線3条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：褐色 内面：褐色	
911	354	0852	弥生土器 甕	8区 Q21	Ⅳ-1層	※16.6	-	△5.6	外面：口縁部凹線3条、肩部タテハケ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ・指頭圧痕	密 良好	外面：灰白～暗灰黄色 内面：灰白色	
912	354	0662	弥生土器 甕	8区 Q21	Ⅳ-1層	※15.2	-	△4.9	外面：口縁部平行沈線4条、肩部タテハケ 内面：口縁～肩部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
913	354	0639・ 0659・ 0970	弥生土器 甕	8区 R21	Ⅳ-1層	※18.2	-	△5.4	外面：口縁部平行沈線4条、肩部タテハケ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：褐～灰褐色	

表44 土器観察表(31)

掲載 番号	挿回 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
914	354	0854	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※18.8	-	△3.4	外面：口縁部平行沈線6条、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰褐～にぶい赤褐色 内面：にぶい橙～にぶい褐色	
915	354	0662	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※15.4	-	△4.0	外面：口縁部平行沈線4条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙色 内面：橙～灰褐色	外面煤付着
916	354	0639	弥生土器 甕	8区 R21	IV-1層	※17.3	-	△5.0	外面：口縁部平行沈線3条(摩擦により不明瞭)、肩部 ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐～黒褐色 内面：灰褐～黒褐色	
917	354	0851	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※18.4	-	△5.3	外面：口縁部平行沈線5条、肩部ナデ 内面：口縁部ナデ後ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙～にぶい褐色 内面：にぶい橙～にぶい褐色	内外面煤付 着
918	354	0619	弥生土器 甕	8区 R21	IV-1層	※19.6	-	△4.7	外面：口縁部平行沈線4条、肩部タテハケ 内面：口縁部ヨコナデ・ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケ ズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい黄褐色	
919	354	0029	弥生土器 甕	8区 S21	IV-1層	※14.1	-	△4.2	外面：口縁部平行沈線9条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
920	354	0722	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※19.0	-	△4.8	外面：口縁部平行沈線10条、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
921	354	0662	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※15.8	-	△5.2	外面：口縁部平行沈線7条・ナデ消し、肩部タテハケ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ハケメ・ヘラケズ リ	密 良好	外面：褐色 内面：褐色	
922	354	0854	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※18.0	-	△4.2	外面：口縁部浅い平行沈線、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：浅黄褐色	
923	354	0662	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※15.3	-	△4.2	外面：口縁部平行沈線9条、頭部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガ キ	密 良好	外面：にぶい黄褐・黒色 内面：浅黄褐色	
924	354	0662	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※15.8	-	△5.1	外面：口縁部平行沈線7条、肩部ナデ 内面：口縁部摩擦により不明瞭、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：褐色 内面：橙～にぶい黄褐色	外面煤付着
925	354	0413	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※19.4	-	△5.8	外面：口縁部平行沈線13条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
926	354	0640	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※18.4	-	△4.8	外面：口縁部平行沈線13条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐～褐灰色 内面：にぶい黄褐～褐灰色	外面煤付着
927	354	0367	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※14.4	-	△4.4	外面：口縁部浅い平行沈線、体部ナデ 内面：口縁部ハケメ・ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付着
928	354	0640	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※16.0	-	△5.6	外面：口縁部平行沈線9条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：暗褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
929	354	0619	弥生土器 甕	8区 R21	IV-1層	※18.7	-	△4.7	外面：口縁部平行沈線9条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：褐灰色 内面：褐灰色	
930	354	0854	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※16.6	-	△6.4	外面：口縁部平行沈線9条、肩部摩擦により不明瞭 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガ キ	密 良好	外面：にぶい黄褐～黒色 内面：浅黄褐色	外面煤付着
931	354	0733	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※16.8	-	△5.1	外面：口縁部平行沈線20条、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラ ミガキ	密 良好	外面：黒色 内面：にぶい褐色	外面煤・炭 化物
932	354	0854	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	-	-	△5.6	外面：口縁部端部欠損・平行沈線11条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙～浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
933	354	0848	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※17.6	-	△4.7	外面：口縁部平行沈線19条、頭部ナデ 内面：口縁部ハケメ後ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐～褐灰色 内面：浅黄褐～褐灰色	
934	354	0662	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※18.3	-	△4.8	外面：口縁部平行沈線15条、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：明褐～褐色 内面：にぶい褐色	
935	354	0852	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※21.3	-	△5.2	外面：口縁部平行沈線11条、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：褐色	外面煤付着
936	354	0619	弥生土器 甕	8区 R21	IV-1層	※18.8	-	△7.1	外面：口縁部平行沈線19条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐～褐色	
937	354	0662	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※16.2	-	△3.8	外面：口縁部平行沈線5条・ナデ消し、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラ ミガキ	密 良好	外面：橙～黒褐色 内面：灰褐～褐色	外面煤付着
938	354	0640	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	-	-	△6.6	外面：口縁部端部欠損・平行沈線12条、肩部平行沈線 7条以上・ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
939	354	0847	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※13.0	-	△5.5	外面：口縁部平行沈線11条、肩部平行沈線9条 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
940	354	0619	弥生土器 甕	8区 R21	IV-1層	※17.1	-	△5.8	外面：口縁部平行沈線13条、肩部ヨコナデ・貝殻腹縁 による押引文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：黒褐～にぶい褐色 内面：にぶい橙～黒褐色	
941	355	0662	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※16.9	-	△4.9	外面：口縁部平行沈線17条、肩部平行沈線5条 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：黒～褐色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
942	355	0687	弥生土器 甕	8区 Q22	IV-1層	※20.0	-	△5.7	外面：口縁部平行沈線7条、肩部平行沈線 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐～灰白色	外面煤付着
943	355	0422	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※17.4	-	△4.8	外面：口縁部平行沈線6条、肩部ハケメ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐～黒色 内面：灰白色	外面煤付着

表45 土器観察表(32)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm)長さ(cm)	底径(cm)脚径(cm)	器高(cm)厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
944	355	0852	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※16.2	-	△5.3	外面：口縁部平行沈線13条、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
945	355	0733	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※20.4	-	△5.2	外面：口縁部平行沈線12条・ナデ消し、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	審 良好	外面：にぶい橙～黒褐色 内面：橙～にぶい褐色	外面煤付着
946	355	0711・ 0730	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※17.1	-	△7.5	外面：口縁部平行沈線11条、肩部平行沈線後ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：橙～黒褐色 内面：褐色	
947	355	0422	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	-	-	△5.2	外面：口縁部平行沈線12条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色～にぶい褐色	外面煤付着
948	355	0452	弥生土器 甕	8区 S20	IV-1層	※19.2	-	△4.2	外面：口縁部波状文、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：浅黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	外面煤付着
949	355	0422・ 0638・ 0712他	弥生土器 甕	8区 S20	IV-1層	15.0	-	△4.2	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：黒色 内面：褐色	外面煤付着
950	355	0724・ 0728	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※17.2	-	△6.6	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：浅黄橙～黒色 内面：橙～にぶい黄褐色	外面煤付着
951	355	0662	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※18.2	-	△4.5	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ後一部ヘラミガキ	審 良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：褐色	外面煤付着
952	355	0662	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※18.5	-	△5.5	外面：口縁部平行沈線・ナデ消し、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
953	355	0662・ 0711	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1・IV層	※14.5	-	△4.0	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい褐色	
954	355	0640	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※19.5	-	△6.7	外面：口縁部ヨコナデ？(摩滅により不明瞭)、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：褐灰～褐色 内面：灰褐～褐色	
955	355	0452	弥生土器 甕	8区 S20	IV-1層	※17.8	-	△5.3	外面：口縁～肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：灰白・にぶい黄褐色 内面：灰白色	
956	355	0447	弥生土器 甕	8区 S21	IV-1層	※18.1	-	△7.9	外面：口縁部波状文、肩部ハケメ後波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：浅黄褐色 内面：灰白色	
957	355	0452	弥生土器 甕	8区 S20	IV-1層	※12.6	-	△5.8	外面：口縁部ヨコナデ、肩部波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：灰白～明褐灰色 内面：灰白色	外面煤付着
958	355	0452	弥生土器 甕	8区 S20	IV-1層	※15.0	-	△4.3	外面：口縁～頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：灰白～黒褐色 内面：灰白色	外面煤付着
959	355	0452	弥生土器 甕	8区 S20	IV-1層	※16.4	-	△12.6	外面：口縁部波状文、肩部ハケメ後平行沈線15条・波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：灰白色 内面：灰白～にぶい黄褐色	外面煤付着
960	355	0452	弥生土器 甕	8区 S20	IV-1層	※15.0	-	△6.8	外面：口縁～肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
961	355	0662	弥生土器 甕	8区 Q21	IV-1層	※15.0	-	△3.6	外面：口縁～頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	審 良好	外面：灰黄褐～浅黄褐色 内面：灰黄褐～浅黄褐色	外面煤付着
962	355	0723	弥生土器 壺	8区 Q21	IV-1層	※17.8	-	△3.6	外面：口縁部平行沈線6条、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	審 良好	外面：灰白色 内面：灰白～黄灰色	
963	355	0414	弥生土器 器台	8区 Q21	IV-1層	※18.4	-	△6.0	外面：口縁部平行沈線19条、受け部ヘラミガキ 内面：受け部ヘラケズリ後ナデ・ヘラミガキ	審 良好	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：にぶい橙～褐灰色	
964	355	0711・ 0730	弥生土器 器台	8区 Q21	IV-1層	※20.9	-	△4.3	外面：口縁部平行沈線12条、受け部ヘラミガキ 内面：受け部ヘラミガキ	審 良好	外面：灰白～赤褐色 内面：灰白～浅黄褐色	外面赤色塗彩
965	355	0422	弥生土器 壺	8区 Q21	IV-1層	※17.0	-	△4.8	外面：口縁部平行沈線5条、頸部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ、頸部ヘラミガキ	審 良好	外面：黒～にぶい赤褐色 内面：黒～赤褐色	内外面赤色塗彩
966	355	0850	弥生土器 器台	8区 Q21	IV-1層	※20.6	-	△7.2	外面：口縁部平行沈線19条、受け部ヘラミガキ 内面：受け部ヘラミガキ	審 良好	外面：灰白～浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
967	355	0846	弥生土器 器台	8区 Q21	IV-1層	※20.1	-	△7.1	外面：口縁部貝殻腹線による刺突文・波状文・平行沈線3条、受け部ヘラミガキ、脚柱部平行沈線4条 内面：受け部ヘラミガキ	審 良好	外面：浅黄褐色～褐色 内面：褐色	
968	355	0708	弥生土器 器台	8区 Q21	IV-1層	-	※12.7	△5.9	外面：脚柱部ヘラミガキ、脚台部平行沈線8条 内面：脚柱～脚台部ヘラケズリ	審 良好	外面：褐色 内面：褐色	外面赤色塗彩
969	355	0619	弥生土器 器台	8区 R21	IV-1層	-	※14.6	△6.4	外面：脚柱部ヘラミガキ、脚台部平行沈線13条 内面：脚柱部ヘラケズリ、脚台部ヘラミガキ・ナデ	審 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄橙～褐灰色	
970	355	0662	弥生土器 器台	8区 Q21	IV-1層	-	※14.5	△6.6	外面：脚柱部ヘラミガキ、脚台部平行沈線8条以上(摩滅により不明瞭) 内面：脚柱～脚台部ヘラケズリ	審 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	外面赤色塗彩
971	356	0730	弥生土器 高坏	8区 Q21	IV-1層	※9.0	-	△4.9	外面：ヘラミガキ 内面：摩滅により不明瞭	審 良好	外面：灰白～赤褐色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	外面赤色塗彩
972	356	0704	弥生土器 高坏	8区 Q21	IV-1層	※26.6	-	△5.9	外面：ヨコヘラミガキ 内面：ヨコヘラミガキ後放射状にヘラミガキ	審 良好	外面：にぶい橙～赤色 内面：にぶい橙～赤色	内外面赤色塗彩
973	356	0645・ 0968	弥生土器 高坏	8区 Q21	IV-1層	-	※17.8	△14.0	外面：脚柱部摩滅により不明瞭、脚部沈線4条・円形透かし孔(4箇所)・ヘラミガキ 内面：脚柱部摩滅により不明瞭、脚部ハケメ	審 良好	外面：にぶい橙～淡赤褐色 内面：にぶい橙～淡褐色	

表46 土器観察表(33)

掲載 番号	挿回 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
974	356	0854	弥生土器 高坏	8区 Q21	IV-1層	-	※10.0	△3.1	外面：ヘラミガキ、円形透かし孔 内面：ヨコナデ	密 良好	外面：浅黄橙～明褐色 内面：浅黄橙～明褐色	
975	356	0711	弥生土器 高坏	8区 Q21	IV-1層	-	※17.5	△4.5	外面：ヘラミガキ、円形透かし孔 内面：ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
976	356	0852	弥生土器 高坏	8区 Q21	IV-1層	-	※14.8	△3.6	外面：ヘラミガキ、円形透かし孔 内面：ヨコナデ	密 良好	外面：灰白～浅黄橙色 内面：灰白色	
977	356	0662	弥生土器 高坏	8区 Q21	IV-1層	-	※24.0	△5.4	外面：脚台部ヨコナデ 内面：脚台部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白～浅黄橙色	
978	356	0730	弥生土器 壺	8区 Q21	IV-1層	-	-	△3.6	外面：肩部ナデ・ヘラ状工具による弧線文 内面：肩部ハケメ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
979	356	0662	弥生土器 注口土器	8区 Q21	IV-1層	-	-	△6.0	外面：沈線3～4条間に爪形文・貝殻腹線による刺突 文 内面：ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：暗灰色	
980	356	0711	弥生土器 装飾壺	8区 Q21	IV-1層	-	-	△5.8	外面：沈線3条・ハケメ後ヘラ状工具による羽状文・ 沈線3条・渦文(スタンプ文)・沈線3条・羽状文 内面：ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～黒色 内面：灰白～黄灰色	
981	356	0711	弥生土器 蓋	8区 Q21	IV-1層	天井部 ※9.8	つまみ部 3.9	△3.6	外面：つまみ部ヘラミガキ、天井部ヘラミガキ・ナデ 内面：天井部ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：灰白色	
982	356	0703	弥生土器 蓋	8区 Q21	IV-1層	天井部 ※11.4	つまみ部 2.4	△4.9	外面：つまみ部穿孔、天井部摩滅により不明瞭 内面：天井部ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	つまみ～天 井部貫通孔
983	356	0443	土師器 高坏	8区 S20	IV-1層	※15.5	-	△5.6	外面：口縁～体部ナデ 内面：口縁～体部ナデ	密 良好	外面：浅黄橙～褐色 内面：浅黄褐色	外面赤色塗 彩
984	356	0465	須恵器 高坏	8区 S20	IV-1層	-	※10.6	△6.6	外面：回転ナデ・方形透かし孔(2箇所)、自然釉 内面：回転ナデ	密 良好	外面：オリーフ黒色 内面：灰オリーフ色	
985	356	0702	土師器 罍鉢	8区 Q21	IV-1層	※33.8	-	△6.8	外面：口縁～体部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、罍目	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
987	357	0571	弥生土器 甕	8区 R21	IV-2層	※21.0	-	△4.0	外面：口縁部凹線7条、頸部タテハケ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：にぶい黄橙～褐色	
988	357	0581	弥生土器 甕	8区 S21	IV-2層	※15.8	-	△5.3	外面：口縁部凹線4条、肩部摩滅により不明瞭 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～褐色 内面：灰白～浅黄褐色	
989	357	0578	弥生土器 甕	8区 R21	IV-2層	※18.9	-	△3.9	外面：口縁部平行沈線、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	密 良好	外面：明赤褐～褐色 内面：にぶい橙色	
990	357	0572	弥生土器 甕	8区 S21	IV-2層	※20.2	-	△5.2	外面：口縁部平行沈線12条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～暗灰色 内面：灰白色	
991	357	0581	弥生土器 甕	8区 S21	IV-2層	※17.4	-	△3.3	外面：口縁部平行沈線5条、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	密 良好	外面：黒色 内面：灰白～浅黄褐色	外面煤付着
992	357	0587	弥生土器 甕	8区 S21	IV-2層	※18.0	-	△6.4	外面：口縁部平行沈線6条、肩部摩滅により不明瞭 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙～褐色 内面：にぶい橙～にぶい黄褐色	
993	357	0572	弥生土器 甕	8区 S21	IV-2層	※14.1	-	△7.4	外面：口縁部平行沈線18条、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
994	357	0572	弥生土器 甕	8区 S21	IV-2層	※17.0	-	△4.9	外面：口縁部平行沈線5条以上・ナデ消し、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
995	357	0571	弥生土器 壺	8区 R21	IV-2層	※14.9	-	△4.6	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
996	357	0572	弥生土器 鉢	8区 S21	IV-2層	※9.4	-	△5.6	外面：口縁部ヘラミガキ、体部摩滅により不明瞭 内面：口縁～体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
997	358	0905	弥生土器 甕	8区 Q21	IV～V層	※13.4	-	△2.5	外面：口縁部凹線3条、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ後ナデ・ヘラケズ リ	密 良好	外面：にぶい褐色 内面：褐色	外面煤付着
998	358	0905	弥生土器 甕	8区 Q21	IV～V層	※19.2	-	△5.1	外面：口縁部凹線2条、肩部ハケメ後ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ後ナデ、肩部ヘラ ケズリ	密 良好	外面：浅黄橙～灰褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付着
999	358	0905	弥生土器 甕	8区 Q21	IV～V層	※13.7	-	△4.6	外面：口縁部凹線2条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰褐色 内面：明褐色～褐色	
1000	358	0904	弥生土器 甕	8区 Q20	IV～V層	※13.7	-	△5.0	外面：口縁部平行沈線5条、体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ハケメ後ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
1001	358	0905	弥生土器 甕	8区 Q21	IV～V層	※15.6	-	△4.3	外面：口縁部平行沈線10条、頸部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガ キ	密 良好	外面：黄灰～黒色 内面：灰白～黄灰色	外面煤付着
1002	358	0905	弥生土器 甕	8区 Q21	IV～V層	※17.1	-	△4.4	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄橙～灰黄褐色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	外面煤付着
1003	358	0905	弥生土器 甕	8区 Q21	IV～V層	※17.0	-	△5.5	外面：口縁部波状文、肩部平行沈線2条以上 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
1004	358	0904	弥生土器 壺	8区 Q20	IV～V層	※17.2	-	△16.1	外面：口縁部ヨコナデ、肩部平行沈線13条・同心円文(ス タンプ文) 内面：口縁部ヨコナデ・指頭瓦痕、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白色 内面：にぶい黄橙～灰白色	

表47 土器観察表(34)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm)長さ(cm)	底径(cm)脚径(cm)	器高(cm)厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
1005	358	0905・0982	弥生土器器台	8区Q21	IV-V層	※21.2	※15.0	15.3	外面：口縁部タテヘラミガキ、沈線間に渦文(スタンブ文)、脚柱部沈線7条、脚台部沈線間に同心円文(スタンブ文)、ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ、脚柱部タテヘラミガキ、脚台部ヘラケズリ	密良好	外面：橙～褐灰色 内面：橙～にぶい橙色	
1006	358	0905	弥生土器器台	8区Q21	IV-V層	-	※20.0	△5.6	外面：脚柱部ヘラミガキ、脚台部ヨコナデ 内面：脚台部ヘラケズリ・ナデ	密良好	外面：にぶい橙～灰褐色 内面：にぶい橙～灰褐色	
1007	358	0905	弥生土器甕か壺	8区Q21	IV-V層	-	※10.6	△4.5	外面：体部ハケメ、底部ナデ 内面：体底部ナデ	密良好	外面：にぶい灰～褐灰色 内面：にぶい橙色	外面黒斑
1008	358	0904	須恵器平高台付坏	8区Q20	IV-V層	-	※6.4	△2.8	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体～底部回転ナデ	密良好	外面：灰色 内面：灰色	
1010	359	0918	弥生土器甕	8区R21	V層	※16.2	-	△2.8	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ	密良好	外面：灰白～黒色 内面：浅黄橙色	外面黒斑
1011	359	0982	弥生土器甕	8区Q21	V層	※16.7	-	△5.3	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、口縁部ハケメ、頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：橙～明赤褐～黒色 内面：にぶい赤褐～灰褐色	外面煤付者
1012	359	0970	弥生土器甕	8区R21	V層	※19.8	-	△4.6	外面：口縁部凹線2条、肩部ナデ・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ	密良好	外面：橙～灰白色 内面：灰白～にぶい橙色	
1013	359	1012	弥生土器甕	8区S20	V層	※15.8	-	△8.8	外面：口縁部凹線1条以上・ヨコナデ、体部上半ナデ、体部下半ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、体部下半ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～黒褐色 内面：浅黄橙～褐灰色	外面煤付者
1014	359	0968	弥生土器甕	8区Q21	V層	※16.0	-	△4.1	外面：口縁部凹線4条、肩部タテハケ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	外面煤付者
1015	359	0968	弥生土器甕	8区Q21	V層	※17.9	-	△6.6	外面：口縁部凹線3条、肩部ナデ・ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄橙～灰白色 内面：灰白～浅黄橙色	
1016	359	0982	弥生土器甕	8区Q21	V層	※21.6	-	△10.3	外面：口縁部凹線2条、肩部ハケ状工具による押し文、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：灰褐色	外面煤付者
1017	359	0915	弥生土器甕	8区S21	V層	※18.0	-	△4.9	外面：口縁部凹線3条、肩部タテハケ 内面：口縁部ヨコナデ・ハケメ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：褐～黒色 内面：灰黄褐色	外面煤付者
1018	359	0942	弥生土器甕	8区R21	V層	※18.8	-	△6.7	外面：口縁部浅い凹線2条、肩部ヘラ状工具による刺突文・ナデ 内面：口縁部ナデ・ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ・指頭圧痕	密良好	外面：灰褐～褐色 内面：明赤褐～にぶい褐色	外面煤付者
1019	359	1012	弥生土器甕	8区S20	V層	※16.0	-	△20.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部上半ハケメ、体部下半タテヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部上半ハケメ・指頭圧痕、体部下半ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～黒褐色 内面：灰白色	外面煤付者
1020	359	1016	弥生土器甕	8区S21	V層	※26.9	-	△16.5	外面：口縁部凹線3条、体部ハケ状工具による刺突文・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	密良好	外面：浅黄橙～橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙色	
1021	359	0915	弥生土器甕	8区S21	V層	※13.8	-	△20.8	外面：口縁部凹線4条、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ・ハケメ、体部ヘラケズリ・指頭圧痕	密良好	外面：浅黄橙～灰白色 内面：灰白～褐灰色	外面煤付者
1022	359	968	弥生土器甕	8区Q21	V層	※19.5	-	△3.9	外面：口縁～肩部ヨコナデ 内面：口縁部ハケメ・ナデ消し、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	
1023	359	0942・0918	弥生土器甕	8区R21	V層	※18.4	-	△5.1	外面：口縁部平行沈線5条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐～褐色 内面：にぶい褐色	外面煤付者
1024	359	0915	弥生土器甕	8区S21	V層	※19.4	-	△3.2	外面：口縁部平行沈線5条、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：明褐灰色 内面：にぶい黄橙色	外面煤付者
1025	359	0918	弥生土器甕	8区R21	V層	※19.3	-	△3.2	外面：口縁部平行沈線7条、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：橙～黒褐色 内面：にぶい橙～灰白色	外面煤付者
1026	359	0942	弥生土器甕	8区R21	V層	※17.6	-	△3.5	外面：口縁部平行沈線7条、頸部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：明褐灰～灰白色 内面：灰白～にぶい褐色	外面煤付者
1027	359	0942	弥生土器甕	8区R21	V層	※16.6	-	△5.1	外面：口縁部平行沈線6条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黄灰～黒色 内面：灰白色	外面煤付者
1028	359	0942	弥生土器甕	8区R21	V層	※14.2	-	△4.0	外面：口縁部平行沈線5条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：褐灰～灰黄褐色 内面：褐灰～灰黄褐色	外面煤付者
1029	359	0942	弥生土器甕	8区R21	V層	※21.6	-	△4.9	外面：口縁部多条平行沈線9条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい赤褐～灰褐色 内面：にぶい橙～灰褐色	外面煤付者
1030	359	0918	弥生土器甕	8区R21	V層	※15.7	-	△4.4	外面：口縁部平行沈線6条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい褐色	外面煤付者
1031	360	0918	弥生土器甕	8区R21	V層	※15.2	-	△3.9	外面：口縁部凹線4条、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黒～灰白色 内面：灰白色	外面煤付者
1032	360	0918	弥生土器甕	8区R21	V層	※16.0	-	△4.2	外面：口縁部平行沈線6条、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後一部ヘラミガキ	密良好	外面：黒～褐灰色 内面：灰黄褐～灰白色	外面煤付者
1033	360	0915	弥生土器甕	8区S21	V層	※20.9	-	△4.2	外面：口縁部平行沈線6条、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：褐灰～浅黄橙色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	外面煤付者

表48 土器観察表(35)

掲載番号	挿回番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm) 長さ(cm)	底径(cm) 脚径(cm)	器高(cm) 厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
1034	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.4	-	△3.3	外面：口縁部凹線4条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：褐灰～黒褐色 内面：褐灰色	外面煤付着
1035	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※14.3	-	△3.5	外面：口縁部平行沈線6条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ・指頭圧痕	密良好	外面：灰白～灰褐色 内面：灰白～明褐色	外面煤付着
1036	360	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※19.0	-	△4.8	外面：口縁部凹線3条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
1037	360	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.1	-	△4.5	外面：口縁部凹線5条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～橙色 内面：にぶい橙色	
1038	360	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.0	-	△4.5	外面：口縁部凹線3条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラミガキ・ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄橙～灰白色 内面：浅黄橙～灰白色	外面煤付着
1039	360	1005	弥生土器 甕	8区 S21	V層	※18.8	-	△3.2	外面：口縁部平行沈線4条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
1040	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※17.2	-	△6.4	外面：口縁部凹線5条、肩部ハケ状工具による刺突文・ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：橙～明褐色	外面煤付着
1041	360	0918	弥生土器 甕	8区 R21	V層	※14.6	-	△4.4	外面：口縁部凹線3条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラミガキ・ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄褐～褐灰色 内面：灰黄褐～褐灰色	外面煤付着
1042	360	0918	弥生土器 甕	8区 R21	V層	※17.0	-	△4.4	外面：口縁部平行沈線10条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
1043	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※21.6	-	△4.4	外面：口縁部平行沈線7条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	
1044	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※15.6	-	△3.1	外面：口縁部多条平行沈線19条、頸部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい橙～色	糊圧痕
1045	360	0918	弥生土器 甕	8区 R21	V層	※18.5	-	△4.7	外面：口縁部平行沈線9条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ・一部ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい褐～灰褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
1046	360	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.3	-	△3.6	外面：口縁部平行沈線7条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラミガキ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白～浅黄褐色	
1047	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※18.0	-	△4.0	外面：口縁部平行沈線8条、頸部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：褐灰～灰黄褐色 内面：浅黄褐色	外面煤付着
1048	360	0942	弥生土器 甕	8区 R21	V層	※17.0	-	△4.1	外面：口縁部平行沈線7条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：橙～黒色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
1049	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※15.5	-	△3.1	外面：口縁部平行沈線9条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
1050	360	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※13.1	-	△4.1	外面：口縁部平行沈線6条・ナデ消し、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～にぶい褐色 内面：にぶい橙～明褐色	
1051	360	0918	弥生土器 甕	8区 R21	V層	※18.8	-	△3.7	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ハケメ後ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～灰黄褐色 内面：褐灰～灰黄褐色	
1052	360	0915	弥生土器 甕	8区 S21	V層	※17.8	-	△5.6	外面：口縁部平行沈線11条・ナデ消し、肩部貝殻腹縁による刺突文、ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～にぶい褐色 内面：灰白～にぶい褐色	
1053	360	0918	弥生土器 甕	8区 R21	V層	※16.0	-	△3.1	外面：口縁部平行沈線8条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黒～黒褐色 内面：褐灰色	外面煤付着
1054	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※17.4	-	△3.7	外面：口縁部平行沈線14条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい赤褐～にぶい褐色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
1055	360	0918	弥生土器 甕	8区 R21	V層	※15.6	-	△4.5	外面：口縁部平行沈線10条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ？、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：褐灰～黒色 内面：灰白～灰黄褐色	外面煤付着
1056	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.4	-	△4.0	外面：口縁部多条平行沈線22条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
1057	360	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※19.5	-	△6.0	外面：口縁部多条平行沈線16条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
1058	360	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※18.8	-	△6.0	外面：口縁部多条平行沈線12条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
1059	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※13.0	-	△3.8	外面：口縁部多条平行沈線15条、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黒～黒褐色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
1060	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※15.8	-	△4.9	外面：口縁部多条平行沈線19条、頸部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黒色 内面：灰黄褐色	外面煤・炭化物付着
1061	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※17.0	-	△5.3	外面：口縁部多条平行沈線8条・ナデ消し、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黄褐～褐灰色 内面：灰黄褐～にぶい黄褐色	
1062	360	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※17.0	-	△5.1	外面：口縁部多条平行沈線11条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	外面煤付着
1063	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※15.3	-	△5.4	外面：口縁部多条平行沈線16条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ・ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	
1064	360	0915	弥生土器 甕	8区 S21	V層	※18.9	-	△5.1	外面：口縁部多条平行沈線9条、肩部ナデ・ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐～黒色 内面：にぶい褐色	外面煤付着

表49 土器観察表 (36)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
1065	360	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※14.9	-	△6.2	外面：口縁部多条平行沈線10条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	外面煤付者
1066	360	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※14.4	-	△5.9	外面：口縁部多条平行沈線20条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコハラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～灰白色 内面：浅黄橙色	
1067	361	0915	弥生土器 甕	8区 S21	V層	※15.0	-	△5.7	外面：口縁部多条平行沈線13条、頭部ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：褐灰色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	
1068	361	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※20.3	-	△5.0	外面：口縁部平行沈線12条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコハラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい黄橙色 内面：褐灰色	
1069	361	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.2	-	△4.6	外面：口縁部平行沈線18条、頭部ナデ 内面：口縁部ナデ後ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
1070	361	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※12.6	-	△5.6	外面：口縁部多条平行沈線15条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコハラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～黒褐色 内面：灰白色	外面煤付者
1071	361	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※19.4	-	△6.1	外面：口縁部多条平行沈線15条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコハラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：灰黄褐～黒色 内面：灰黄褐色	外面煤付者
1072	361	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※19.4	-	△6.6	外面：口縁部平行沈線11条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙色	外面煤付者
1073	361	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※13.8	-	△4.8	外面：口縁部平行沈線7条、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：褐灰～橙色 内面：橙～にぶい橙色	外面煤付者
1074	361	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※21.6	-	△7.1	外面：口縁部平行沈線18条、肩部ナデ 内面：口縁部ハケメ後ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～灰白色 内面：にぶい黄橙～灰白色	
1075	361	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.7	-	△4.3	外面：口縁部平行沈線11条、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐～黒褐色 内面：灰白～灰黄褐色	外面煤付者
1076	361	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.4	-	△5.3	外面：口縁部浅い平行沈線・ナデ消し、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコハラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：黒色 内面：にぶい褐色	外面煤付者
1077	361	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※18.8	-	△5.8	外面：口縁部平行沈線8条、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：浅黄橙色 内面：灰～浅黄褐色	
1078	361	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※18.9	-	△5.7	外面：口縁部多条平行沈線20条、頭部ナデ 内面：口縁部ヨコハラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黒色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付者
1079	361	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※18.4	-	△5.0	外面：口縁部多条平行沈線14条、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコハラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：灰白色	外面煤付者
1080	361	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※21.9	-	△6.6	外面：口縁部多条平行沈線18条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付者
1081	361	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※17.7	-	△5.4	外面：口縁部多条平行沈線11条、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ後ハケメ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
1082	361	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※12.4	-	△3.8	外面：口縁部平行沈線8条、頭部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
1083	361	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	-	-	△7.7	外面：口縁部平行沈線13条、肩部平行沈線6条 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～灰黄褐色 内面：にぶい橙色	
1084	361	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※27.4	-	△7.0	外面：口縁部多条平行沈線19条、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコハラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：浅黄橙～灰褐色 内面：にぶい橙～にぶい褐色	
1085	361	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.8	-	△7.5	外面：口縁部多条平行沈線16条、肩部ハケメ・ナデ 内面：口縁部ヨコハラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：明褐灰～黒色 内面：明褐灰色	外面煤付者
1086	361	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※20.0	-	△7.5	外面：口縁部多条平行沈線8条、肩部ナデ後平行沈線 内面：口縁部ハケメ後ナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付者
1087	361	0422・0968・0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※17.8	-	△12.9	外面：口縁部多条平行沈線12条、体部ハケメ・波状文 内面：口縁部ヨコハラミガキ、体部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：橙色 内面：にぶい赤褐色	外面煤付者
1088	361	0975	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	19.3	3.4	30.5	外面：口縁部多条平行沈線17条、体部ハケメ・波状文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄褐色	
1089	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※19.8	-	△10.3	外面：口縁部多条平行沈線21条、肩部ハケメ・平行沈線16条・波状文 内面：口縁部ヨコハラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付者
1090	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※17.5	-	△7.9	外面：口縁部多条平行沈線12条、肩部平行沈線15条、具股腹縁による刺突文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：橙色 内面：浅黄褐色	
1091	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※17.2	-	△5.8	外面：口縁部多条平行沈線10条、肩部ナデ後平行沈線2条 内面：口縁部ヨコハラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～黒色 内面：灰白色	外面煤付者
1092	362	0959・0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	22.5	-	△7.9	外面：口縁部多条平行沈線17条、肩部ハケメ後ナデ・波状文 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	外面煤付者
1093	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※18.3	-	△5.9	外面：口縁部多条平行沈線12条、肩部具股腹縁による刺突文 内面：口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密良好	外面：褐灰色 内面：にぶい黄褐色	

表50 土器観察表(37)

掲載番号	挿回番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm) 長さ(cm)	底径(cm) 脚径(cm)	器高(cm) 厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
1094	362	0976・0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	16.6	-	△9.7	外面：口縁部多条平行沈線21条、肩部ハケメ・平行沈線7条・波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	外面煤付着
1095	362	0915	弥生土器 甕	8区 S21	V層	※17.2	-	△6.5	外面：口縁部多条平行沈線9条、肩部ナデ後ヘラ状工具による刺突文 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黒褐～にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	外面煤付着
1096	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.1	-	△4.7	外面：口縁部多条平行沈線12条、肩部ナデ後平行沈線2条・貝殻腹縁による刺突文 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰褐～にぶい褐色 内面：灰褐～にぶい褐色	外面煤付着
1097	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※14.1	-	△5.1	外面：口縁部多条平行沈線15条、肩部貝殻腹縁による押し波状文 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
1098	362	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	-	-	△7.3	外面：口縁部多条平行沈線8条、肩部平行沈線3条・貝殻腹縁による押し波状文 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ・一部ヘラミガキ	密良好	外面：浅黄橙～黒色 内面：浅黄褐色	外面煤付着
1099	362	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※13.7	-	△9.5	外面：口縁部多条平行沈線12条、体部波状文・ハケメ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい赤褐～黒色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	外面煤付着
1100	362	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※12.9	-	△5.9	外面：口縁部多条平行沈線11条、肩部貝殻腹縁による押し波状文・平行沈線3条 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：橙色 内面：にぶい黄褐色	
1101	362	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※12.8	-	△8.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄橙～黒色 内面：にぶい黄褐色	外面煤付着
1102	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※18.7	-	△5.7	外面：口縁部波状文 内面：口縁部ヨコヘラミガキ	密良好	外面：橙～黒色 内面：にぶい褐色	外面煤・炭化物付着
1103	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※15.6	-	△5.5	外面：口縁部波状文、肩部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：明褐灰～灰褐色 内面：にぶい黄褐色	
1104	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.4	-	△7.0	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
1105	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※7.4	-	△5.8	外面：口縁部ヨコナデ、肩部貝殻腹縁による刺突文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黒褐～橙色 内面：橙～にぶい褐色	外面煤付着
1106	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※17.0	-	△4.5	外面：口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
1107	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※20.2	-	△6.3	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
1108	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※19.6	-	△5.3	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：明褐～にぶい褐色 内面：にぶい橙～にぶい褐色	外面煤付着
1109	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※20.4	-	△5.8	外面：口縁部工具によるヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい褐～橙色	外面煤付着
1110	362	0933・0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.4	-	△6.7	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～浅黄褐色 内面：灰白～にぶい橙	
1111	362	0968	土師器 甕	8区 Q21	V層	※21.8	-	△6.2	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：橙色 内面：褐色	
1112	362	0982	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※17.6	-	△5.7	外面：口縁部ヨコナデ、肩部平行沈線・ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黒色 内面：灰褐色	外面煤・炭化物付着
1113	362	0915	弥生土器 甕	8区 S21	V層	※11.9	-	△7.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部刺突文・指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
1114	362	0918	弥生土器 甕	8区 R21	V層	※15.4	-	△5.9	外面：口縁部波状文、肩部波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ一部ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
1115	362	0968	弥生土器 甕	8区 Q21	V層	※16.2	-	△5.2	外面：口縁部平行沈線後ナデ消し、肩部ナデ 内面：口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄褐～黒色 内面：にぶい黄橙～にぶい褐色	外面煤付着
1116	362	0037	弥生土器 甕	8区 S20	V層	※16.4	-	△7.3	外面：口縁部端部丸み帯びる、口縁部ヨコナデ、肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
1117	363	0968	弥生土器 壺	8区 Q21	V層	※19.5	-	△6.8	外面：口縁～肩部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ・指頭圧痕、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：黒褐～にぶい黄褐色 内面：黒褐～にぶい黄褐色	
1118	363	0915・0917・0918・0920	弥生土器 壺	8区 S20・21・R21	V層	※12.2	-	△8.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後クテヘラミガキ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐～黒色 内面：にぶい褐色	外面煤付着
1119	363	0956	弥生土器 壺	8区 Q21	V層	14.5	-	△10.5	外面：口縁～頸部ナデ、肩部ハケメ後ヘラミガキ 内面：口縁～頸部ナデ、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：橙～灰白色 内面：橙～灰白色	
1120	363	0982	弥生土器 壺	8区 Q21	V層	※13.0	-	△2.3	外面：口縁部凹線4条 内面：口縁部ナデ	密良好	外面：褐色 内面：褐色	
1121	363	0731	弥生土器 壺	8区 Q22	V層	※14.2	-	△3.1	外面：口縁部平行沈線7条、頸部ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
1122	363	0966	弥生土器 壺	8区 Q21	V層	※14.8	-	△6.5	外面：口縁部凹線3条、頸部ナデ・ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケメ・指頭圧痕、肩部ヘラケズリ	密良好	外面：灰黄褐～褐灰色 内面：黒色	

表51 土器観察表(38)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm) 長さ(cm)	底径(cm) 脚径(cm)	器高(cm) 厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
1123	363	0933	弥生土器壺	8区Q21	V層	※16.0	-	△39	外面：口縁部平行沈線7条、頭部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコヘラミガキ、頭部ヘラケズリ	密良好	外面：褐灰～灰黄褐色 内面：褐灰～灰黄褐色	
1124	363	0731	弥生土器壺	8区Q22	V層	※20.6	-	△46	外面：口縁部凹線3条、頭部凹線2条 内面：口縁部ヨコナデ、頭部ヘラケズリ	密良好	外面：灰褐色 内面：にぶい褐～黒褐色	
1125	363	0915・0929	弥生土器壺	8区S21	V層	-	-	△9.7	外面：頭～体部ヘラミガキ 内面：頭部ハケメ、体部ヘラケズリ・指頭圧痕	密良好	外面：浅黄褐色 内面：オリープ黒色	
1126	363	0968	弥生土器壺	8区Q21	V層	※8.5	-	△7.5	外面：口縁～頭部ナデ、頭部穿孔、頭～体部ハケメ・ナデ 内面：口縁～頭部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～明褐色 内面：にぶい橙～灰白色	
1127	363	0982	弥生土器壺	8区Q21	V層	※9.5	-	△4.5	外面：口縁部ナデ、頭部ハケメ 内面：口縁部ナデ後ヘラミガキ、頭部ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい橙～褐色 内面：にぶい黄色	
1128	363	0982	弥生土器壺	8区Q21	V層	※14.8	-	△5.7	外面：口縁部ナデ、頭～肩部ハケメ・ナデ 内面：口縁～頭部ナデ後ヘラミガキ、肩部ヘラケズリ後ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
1129	363	0917	弥生土器壺	8区S20	V層	※11.8	-	△6.4	外面：口縁～体部ナデ(摩滅により不明瞭)、頭部穿孔 内面：口縁～頭部ナデ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：灰白～灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面赤色塗彩
1130	363	0920	弥生土器壺	8区R21	V層	※13.0	※5.7	28.7	外面：口縁～頭部ハケメ・ナデ、体部ハケメ 内面：口縁～頭部ハケメ、体部ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
1131	363	0982	弥生土器甕か壺	8区Q21	V層	-	※7.7	△4.4	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	密良好	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	
1132	363	0968	弥生土器甕か壺	8区Q21	V層	-	※8.8	△4.8	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：橙～にぶい黄褐色 内面：黄灰色	
1133	363	0982	弥生土器甕か壺	8区Q21	V層	-	※1.8	△2.3	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
1134	363	0968	弥生土器甕か壺	8区Q21	V層	-	※10.2	△3.1	外面：ハケメ後ヘラミガキ・指頭圧痕 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：褐灰～黒褐色 内面：にぶい橙色	
1135	363	0968	弥生土器甕か壺	8区Q21	V層	-	※5.5	△4.3	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：黒褐色 内面：黒色	
1136	363	0968	弥生土器甕か壺	8区Q21	V層	-	※5.2	△8.8	外面：ハケメ 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	内面煤付着
1137	363	1016	弥生土器高坏	8区S21	V層	※26.0	-	△3.6	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ後ヘラミガキ	密良好	外面：灰白色 内面：にぶい橙色	
1138	363	0982	弥生土器高坏	8区Q21	V層	-	-	△3.4	外面：口縁～体部ヘラミガキ 内面：口縁～体部ヘラミガキ	密良好	外面：赤色 内面：赤色	外面赤色塗彩
1139	363	0982	弥生土器高坏か器台	8区Q21	V層	-	※9.9	△2.4	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
1140	363	1062	弥生土器高坏	8区S21	V層	-	-	△4.4	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
1141	363	0915	弥生土器高坏か器台	8区S21	V層	-	※13.5	△2.2	外面：脚部ヘラミガキ、脚部裾ヨコナデ・沈線1条 内面：脚部ヘラケズリ、脚部裾ハケメ	密良好	外面：黒褐～灰黄褐色 内面：にぶい黄褐色	外面赤色塗彩
1142	363	1016	弥生土器高坏か器台	8区S21	V層	-	※11.0	△3.0	外面：脚部タテハケ、脚部裾凹線2条 内面：脚部ハケメ、脚部裾ナデ	密良好	外面：褐色 内面：橙～にぶい橙色	
1143	363	0918	弥生土器高坏か器台	8区R21	V層	-	※11.4	△4.4	外面：脚部ヘラミガキ、脚部裾平行沈線5条 内面：脚部ヘラケズリ、脚部裾ナデ	密良好	外面：褐色 内面：褐色	外面赤色塗彩
1144	363	0968	弥生土器高坏か器台	8区Q21	V層	-	※14.4	△4.2	外面：脚台部ヘラミガキ、脚部裾凹線2条 内面：脚台部ハケメ後ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい橙色 内面：褐色	外面赤色塗彩
1145	363	0982	弥生土器高坏か器台	8区Q21	V層	-	※17.8	△4.5	外面：脚台部ヘラミガキ、脚部裾凹線5条 内面：脚台部ヘラケズリ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：にぶい橙～褐色	
1146	363	0941・0933	弥生土器高坏か器台	8区Q21	V層	-	※15.5	△6.1	外面：ヨコナデ？(摩滅により不明瞭) 内面：ヨコナデ？(摩滅により不明瞭)	密良好	外面：灰白～浅黄褐色 内面：灰白～浅黄褐色	
1147	363	0968	弥生土器高坏か器台	8区Q21	V層	-	-	△2.8	外面：脚部凹線1条・円形透かし孔・ハケメ 内面：脚部ハケメ	密良好	外面：にぶい橙～にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
1148	363	0982	弥生土器台付甕か壺	8区Q21	V層	-	10.7	△6.1	外面：脚部～脚部裾ナデ 内面：脚部～脚部裾ナデ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：褐色	
1149	363	0968	弥生土器台付甕か壺	8区Q21	V層	-	7.5	△4.8	外面：脚部ヘラミガキ・指頭圧痕・ナデ 内面：甕底面ナデ、脚部ヘラミガキ	密良好	外面：橙～にぶい褐色 内面：にぶい橙～褐灰色	
1150	363	0982	弥生土器台付甕か壺	8区Q21	V層	-	※7.7	△4.6	外面：脚部ヘラミガキ、脚部裾ヨコナデ 内面：甕底部ヘラミガキ、脚部裾ヘラミガキ	密良好	外面：灰黄褐色 内面：暗灰色	
1151	363	1067	弥生土器台付甕か壺	8区S21	V層	-	※6.3	△4.6	外面：脚部ヨコナデ 内面：甕底部ヨコナデ、脚部ヨコナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
1152	364	0982	弥生土器器台	8区Q21	V層	※24.9	-	△7.0	外面：受け部多条平行沈線20条、脚柱部ヘラミガキ 内面：受け部～脚柱部ハケメ後ヘラミガキ	密良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
1153	364	0982	弥生土器器台	8区Q21	V層	※20.0	-	△4.4	外面：多条平行沈線17条 内面：ヘラミガキ	密良好	外面：にぶい褐色 内面：褐色	
1154	364	0968	弥生土器器台	8区Q21	V層	※12.6	-	△4.3	外面：受け～脚柱部ナデ 内面：受け部ヘラミガキ、脚柱部ナデ	密良好	外面：灰白色 内面：灰白色	

表52 土器観察表(39)

掲載番号	挿回番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm) 長さ(cm)	底径(cm) 脚径(cm)	器高(cm) 厚さ(cm)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
1155	364	0968	弥生土器 器台	8区 Q21	V層	※22.3	-	△5.3	外面：多条平行沈線14条・ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい黄褐～黒褐色 内面：にぶい橙～褐灰色	
1156	364	0968	弥生土器 器台	8区 Q21	V層	-	-	△7.8	外面：受け部多条平行沈線14条、脚柱部ヘラミガキ 内面：受け部脚柱部ヘラミガキ	密 良好	外面：橙～にぶい橙色 内面：橙色	
1157	364	0982	弥生土器 器台	8区 Q21	V層	-	-	△11.0	外面：ハケメ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ナデ・ヘラミガキ	密 良好	外面：橙～褐灰色 内面：橙～褐灰色	
1158	364	0918	弥生土器 器台	8区 R21	V層	-	※19.1	△4.7	外面：平行沈線・ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	密 良好	外面：黒褐～暗赤褐色 内面：灰黄褐～黒褐色	外面赤色塗彩
1159	364	0941	弥生土器 器台	8区 Q21	V層	-	※14.8	△5.6	外面：脚台部多条平行沈線21条 内面：脚台部ヘラケズリ、脚部裾ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙色	
1160	364	0982	弥生土器 器台	8区 Q21	V層	-	※16.0	△4.9	外面：脚部ヘラミガキ、脚部裾平行沈線8条 内面：脚部ヘラケズリ、脚部裾ナデ	密 良好	外面：にぶい黄橙～にぶい橙色 内面：にぶい黄褐色	外面赤色塗彩
1161	364	0965	弥生土器 器台	8区 Q21	V層	※24.7	-	△16.0	外面：受け部ココヘラミガキ・平行沈線4条・渦文(スタンブ文)・平行沈線4条、脚柱部ヘラミガキ、脚台部平行沈線4条・同心円文(スタンブ文)・平行沈線4条 内面：受け部ヘラミガキ、脚柱部ナデ、脚台部ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～浅黄褐色 内面：灰白色	
1162	364	0968	弥生土器 器台	8区 Q21	V層	※16.1	-	△7.8	外面：受け部脚柱部摩滅により不明瞭、受け部同心円文(スタンブ文) 内面：受け部脚柱部摩滅により不明瞭	密 良好	外面：灰白色 内面：灰白色	
1163	364	1016	弥生土器 器台	8区 S21	V層	※17.6	-	△5.8	外面：波状文・ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
1164	364	0968	弥生土器 台付鉢	8区 Q21	V層	※16.1	-	△5.1	外面：口縁部凹線4条、頸部穿孔、体部凹線2条後ヘラミガキ 内面：口縁部ココナデ、体部ハケメ後ヘラミガキ	密 良好	外面：橙色 内面：にぶい橙色	
1165	364	0918	弥生土器 台付壺	8区 R21	V層	-	-	△6.6	外面：体部ヘラ状工具による羽状文・平行沈線3条・ヘラ状工具による羽状文・平行沈線3条・S字状文(スタンブ文)、突帯2条・連続渦文(スタンブ文) 内面：体部ヘラケズリ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい橙色	外面赤色塗彩
1166	364	0982	弥生土器 壺	8区 Q21	V層	-	-	△7.3	外面：体部平行沈線6条・渦文(スタンブ文)、把手外面渦文(スタンブ文) 内面：体部ヘラケズリ後ヘラミガキ	密 良好	外面：灰白～黒色 内面：灰白色	外面煤付着
1167	364	0982	弥生土器 水差形土器	8区 Q21	V層	-	-	△5.9	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～黒褐色 内面：橙色	
1168	364	0918	弥生土器 ミニチュア土器	8区 R21	V層	※6.2	-	△4.2	外面：口縁部体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁部体部ナデ・指頭圧痕	密 良好	外面：暗灰色 内面：暗灰色	
1169	364	0982	弥生土器 ミニチュア土器	8区 Q21	V層	-	※4.6	△7.3	外面：ヘラ状工具によるナデ 内面：ヘラケズリ	密 良好	外面：灰白～褐灰色 内面：灰白～褐灰色	
1170	364	0968	弥生土器 蓋	8区 Q21	V層	-	つまみ部 4.2	△3.4	外面：つまみ部ヘラミガキ 内面：つまみ部ナデ・指頭圧痕、天井部ヘラミガキ	密 良好	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：浅黄橙～褐灰色	
1171	364	1062	弥生土器 蓋	8区 S21	V層	-	つまみ部 4.6	△4.2	外面：つまみ部ナデ・天井部ナデ 内面：つまみ部ナデ	密 良好	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
1172	364	0941	弥生土器 蓋	8区 Q21	V層	-	つまみ部 5.8	△6.4	外面：つまみ部ナデ、天井部ヘラミガキ 内面：つまみ部ナデ・指頭圧痕、天井部摩滅により不明瞭	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	
1173	364	0968	弥生土器 蓋	8区 Q21	V層	天井部 ※13.0	-	△5.8	外面：つまみ部下端ナデ、天井部ナデ 内面：天井部ナデ	密 良好	外面：にぶい橙色 内面：橙色	
1174	364	0968	弥生土器 蓋	8区 Q21	V層	天井部 ※11.7	-	△3.6	外面：ナデ後ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ後ヘラミガキ・指頭圧痕	密 良好	外面：灰褐～にぶい橙色 内面：黒～にぶい橙色	
1175	364	0957・ 0933・ 0958・ 0968	土師器 瓶形土器	8区 Q21	V層	※12.7	-	△31.1	外面：口縁部ココナデ、体部把手・ヘラケズリ 内面：口縁部ナデ・指頭圧痕、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：橙～にぶい褐色 内面：明赤褐～にぶい褐色	
1176	364	0917	縄文土器 深鉢	8区 S20	V層	-	-	△3.0	外面：突帯貼付け・突帯状刻み 内面：ハケメ	密 良好	外面：にぶい黄褐～灰黄褐色 内面：灰黄褐～黒褐色	
1179	368	0734	須恵器 甕	8区 エリア3 Q23	斜面流土中	-	-	△5.9	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰白色	
1180	368	0355	須恵器 甕	8区 エリア3 Q23	斜面流土中	-	-	△3.9	外面：平行タタキ 内面：ナデ	密 良好	外面：暗灰色 内面：灰色	
1181	368	0734	須恵器 甕	8区 エリア3 Q23	斜面流土中	-	-	△11.9	外面：平行タタキ 内面：青海波状当て具痕	密 良好	外面：灰色 内面：灰色	
1182	368	0111	越前焼? 甕	8区 エリア3 R23	斜面流土中	-	-	△8.7	外面：ハケメ 内面：ナデ	密 軟質	外面：暗灰黄～黄灰色 内面：にぶい黄褐～灰黄褐色	
1183	368	0734	越前焼 甕	8区 エリア3 Q23	斜面流土中	-	-	△4.3	外面：ナデ 内面：ナデ	密 良好	外面：黄褐色 内面：褐色	内外面鉄釉

表53 土器観察表(40)

掲載 番号	挿図 番号	取上 番号	種別 器種	調査区 グリッド	遺構 層位	口径 (cm) 長さ (cm)	底径 (cm) 脚径 (cm)	器高 (cm) 厚さ (cm)	調整・文様	胎土 焼成	色調	備考
1184	368	0734	越前焼? 甕	8区 エリア3 Q23	斜面流土中	-	-	△8.5	外面：ハケメ 内面：ナデ	密 軟質	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
1185	368	0734	備前焼 播鉢	8区 エリア3 Q23	斜面流土中	-	-	△6.4	外面：体部ナデ 内面：体部ヨコナデ、播目	密 良好	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい橙色	近世
1186	368	0629	土師器 手づくね皿	8区 エリア3 Q23	斜面流土中 トレンチ5	8.6	5.5	3.0	外面：口縁～底部指頭圧痕 内面：口縁～底部ヨコナデ	密 良好	外面：明赤褐色 内面：明赤褐～黒色	内面煤付着
1187	368	0392	越前焼 甕	8区 エリア3 Q23	斜面流土中	※36.8	-	△6.9	外面：口縁端部凹み、口縁部凹線2条、体部ナデ 内面：口縁～体部ヨコナデ	密 良好	施釉部：灰赤～暗赤灰色 露胎部：暗赤灰色	
1188	368	0228	肥前系陶器 皿	8区 エリア3 Q23	斜面流土中	※13.6	-	△1.8	外面：口縁部灰釉施釉 内面：口縁部灰釉施釉	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：にぶい黄褐色	
1189	368	0228	肥前系陶器 皿	8区 エリア3 Q23	斜面流土中	-	-	△2.2	外面：口縁部灰釉施釉(緑色) 内面：口縁部灰釉施釉(緑色)	密 良好	施釉部：オリーブ黄色 露胎部：オリーブ黄色	
1190	369	0025	弥生土器 甕	8区 S20	層不明・廃土	※15.6	-	△5.9	外面：口縁端部丸みを帯びる、口縁部ヨコナデ、体部 ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 良好	外面：浅黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
1191	369	0027	土師器 高坏	8区 S21	層不明・廃土	※19.0	-	△5.2	外面：摩滅により不明瞭 内面：摩滅により不明瞭	密 良好	外面：浅黄褐色～灰白色 内面：灰白色	
1192	369	0020	備前焼 播鉢	8区 S22	層不明・廃土	-	-	△7.1	外面：口縁部拡張、体部ヨコナデ 内面：口縁～体部ヨコナデ、体部播目6本1組	密 良好	外面：暗赤褐～にぶい赤褐色 内面：暗赤褐～にぶい赤褐色	
1193	369	0396	瀬戸美濃系 陶器 小皿	8区 Q20	層不明・廃土	※5.9	※3.7	1.6	外面：口縁部灰釉施釉(緑色)、体部無釉、底部回転糸 切り 内面：口縁～底部灰釉施釉	密 良好	施釉部：灰オリーブ色 露胎部：灰黄色	
1194	369	0025	青白磁 合子	8区 S20	層不明・廃土	※7.6	-	△1.5	外面：双鳥文、施釉 内面：施釉	密 良好	施釉部：明緑灰色 露胎部：灰白色	
1196	370	0110	土師器 坏	8区 S22	攪乱	※11.2	※6.8	1.9	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁～底部回転ナデ	密 良好	外面：橙色 内面：橙色	
1197	370	0385	瓦質土器 鉢	8区 Q20	攪乱	※27.3	-	△3.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ・指頭圧痕 内面：口縁～体部ヨコナデ・ナデ	密 良好	外面：灰白～黒褐色 内面：白色	外面煤付着
1198	370	0110	肥前系陶器 皿	8区 S22	攪乱	-	※4.4	△1.8	外面：体部上半灰釉施釉、削り出し高台、高台内兜巾 内面：体～底部灰釉施釉	密 良好	施釉部：灰白色 露胎部：橙～浅黄褐色	
1199	370	0127	肥前系陶器 高台付皿	8区 R22	攪乱	※12.8	※3.8	3.4	外面：口縁部片口、口縁～体部上半施釉、体部下半ヘ ラケズリ、高台内兜巾 内面：口縁～底部施釉	密 良好	施釉部：明青灰～オリーブ灰色 露胎部：にぶい橙色	芙蓉手の皿

表54 土製品観察表

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	調整・文様	胎土焼成	色調	備考
4	8	604	土鍾	4区 L10	IV層	△4.6	1.9	0.4	13.0	ナデ・面取り	密良好	外面：にぶい黄橙色	
13	27	56	土鍾	6-2区 L19	III層	△3.2	1.1	0.3	2.7	ナデ	密良好	外面：にぶい橙色	
14	27	79	土鍾	6-2区 L19	III層	3.8	1.2	0.3	4.1	ナデ	密良好	外面：にぶい黄橙色	
15	27	79	土鍾	6-2区 M19	III層	4.0	1.2	0.3	4.3	ナデ	密良好	外面：にぶい黄橙色	
17	27	228	土鍾	6-2区 M18	IV-2層	3.8	1.5	0.3	7.7	ナデ	密良好	外面：にぶい黄橙色	
28	28	649	土鍾	6-3区 O19	III層	5.3	2.1	0.6	17.1	ナデ・指頭圧痕	密良好	外面：にぶい黄橙色	
31	28	856	土玉	6-3区 O19	IV層	3.2	3.5	0.8	16.2	ナデ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色	
68	43	1277	土玉	6-1区 K19	SS1下層	3.0	3.0	0.6	22.4	ナデ	密良好	外面：にぶい黄橙色	
69	43	149	土鍾	6-1区 L20	SS1上層	△5.7	2.1	0.5	16.1	ナデ	密良好	外面：橙～黒色	
70	43	177	土鍾	6-1区 L20	SS1上層	△4.9	1.9	0.5	15.7	ナデ	密良好	外面：黒～にぶい黄橙色	
71	43	1233	土鍾	6-1区 K19	SS1下層	△4.6	1.2	0.3	6.1	ナデ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色	
72	43	1252	土鍾	6-1区 K19	SD1下層	△3.4	1.8	0.4	8.1	ナデ・面取り	密良好	外面：にぶい黄橙色	
142	68	1081	土玉	6-1区 L21	SI3床下	△2.3	2.8	0.8	13.4	ナデ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色	
156	72	981	土玉	6-4区 N20	SS2	2.3	2.4	0.6	9.9	ナデ	密良好	外面：にぶい黄橙～黒褐色	
194	84	1090	土玉	6-4区 M21	SS4上段4層	3.6	3.9	0.6	21.0	ナデ・刻み	密良好	外面：褐～明褐色	
267	106	98	支脚	6-1区 K19	I層	△14.7	△10.7			手づくね成形後ナデ・ハケメ・指頭圧痕	密良好	灰黄褐～橙色	背面に孔有り
268	106	107	勾玉	6-1区 L20	I層	4.9	2.7	最大厚1.9	15.0	ナデ・面取り	密良好	外面：橙色	
269	106	475	土玉	6-4区 N21	I層	2.3	2.3	0.5	8.9	ナデ	密良好	外面：黒褐色	
270	106	637	土玉	6-4区 O21	I層	2.3	3.0	0.6	16.9	ナデ	密良好	外面：明黄褐～黒褐色	
271	106	23	土鍾	6-1区 J20	I層	△3.4	1.1	0.4	3.0	ナデ	密良好	外面：にぶい黄橙色	
284	108	168	支脚	6-1区 K19	II層・IV-1層	△8.7	△8.6			手づくね成形後ナデ	密良好	橙～にぶい黄橙色	
421	117	1043	土玉	6-4区 N21	IV-2・3層	△2.4	2.9	0.6	13.6	ナデ	密良好	外面：灰黄褐色	
422	117	1109	土玉	6-4区 P21	IV-2・3層	2.2	2.3		11.4	ナデ・穿孔なし・表面一部剥落	密良好	外面：にぶい黄橙～黒色	
423	117	1261	土玉	6-4区 P21	IV-2・3層	2.4	2.4		11.8	ナデ・穿孔なし	密良好	外面：橙色	
503	120	1412	土玉	6-1区 K19	IV-4層	3.3	3.2	0.8	21.4	ナデ	密良好	外面：黒色	
590	160	332	土玉	7区 O23	S178段状遺構埋土	3.1	3.0	0.8	23.1	ナデ	密良好	外面：にぶい橙色～にぶい黄褐色	
678	294	0288	玩具亀	8区 S20	S262土坑埋土	6.0	3.9	最大厚2.3	18.8	脚3本欠損	密良好	外面：浅黄橙色	
722	310	0930	土玉	8区 S20	S727溝埋土	2.3	2.9	0.5	16.2	ナデ	密良好	外面：にぶい黄褐～褐灰色	
813	346	0139	土玉	8区 Q21	II-1層	1.9	2.4	0.8	9.0	ナデ	密良好	外面：褐灰～にぶい黄橙色	
814	346	0376	土鍾	8区 Q20	II-1層	△3.8	1.2	0.5	5.3	ナデ	密良好	外面：にぶい橙色	
833	348	0623	土玉	8区 Q20	II-2層	2.7	2.9	0.8	15.7	ナデ・面取り	密良好	外面：橙～灰白色	
886	351	0739	土鍾	8区 Q21	III-4層	2.9	1.7	0.5	4.4	ナデ	密良好	外面：橙色	
887	351	0073	土玉	8区 S20	III-4層	△1.8	2.5	0.6	8.5	ナデ・面取り	密良好	外面：にぶい褐～黒色	
986	356	0845	土玉	8区 Q21	IV-1層	2.4	2.7	0.7	12.5	ナデ・面取り	密良好	外面：灰黄～黄灰色	
1009	358	0903	土玉	8区 Q20	IV～V層	2.9	3.0	0.6	25.0	ナデ・面取り	密良好	外面：灰～黒色	
1177	364	0936	土玉	8区 R21	V層	3.0	3.0	0.5	23.9	ナデ・面取り	密良好	外面：灰黄褐色	
1178	364	0806	土玉	8区 R20	V層	2.2	2.8	0.6	13.0	ナデ・面取り	密良好	外面：にぶい黄橙色	
1195	369	0073	土鍾	8区 R20	層不明・廃土	3.5	△2.6	0.8	9.1	ナデ	密良好	外面：にぶい橙～明褐灰色	
1200	270	0641	土玉	8区 Q21	攪乱	2.7	3.2	0.6	23.2	ナデ・面取り	密良好	外面：にぶい褐～黄灰色	

表55 石器観察表(1)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
S1	27	68	砥石	6-2区 M19	Ⅲ層	△6.6	4.2	3.7	83.0		砥面4面
S2	27	133	砥石?	6-2区 M19	Ⅳ-1層	10.5	10.5	4.8	501.0	砂岩	
S3	28	839	剥片	6-3区 O19	Ⅳ層	3.8	2.6	1.5	12.0	緑色凝灰岩	
S4	64	1056	砥石	6-1区 K20	SI 1 竪穴建物床直上	18.9	12.0	6.1	1112.4	アブライト	
S5	64	1057	台石	6-1区 K20	SI 1 竪穴建物床直上	35.2	24.9	11.8		安山岩	
S6	66	305	敲石	6-1区 K21	SI2 平地建物下層	9.7	4.3	3.4	153.9	デイサイト	
S7	72	926	石庵丁	6-4区 N21	SS2 段状遺構下層	△5.7	5.2	0.8	27.0		
S8	106	498	硯	6-4区 N22	Ⅰ層	△4.7	△3.2	0.8	14.0		
S9	107	71	敲石	6-1区 K20	Ⅰ層	16.5	7.4	7.1	1225.0	安山岩	
S10	107	102	石楯	6-1区 L20	Ⅰ層	11.8	5.4	1.7	172.0	安山岩	
S11	110	221	砥石	6-1区 L20	Ⅳ-2層(4層上面)	△23.1	11.2	8.8	1885.0		砥面2面
S12	110	221	砥石	6-1区 L20	Ⅳ-2層	25.7	8.2	9.1	1571.0		砥面3面
S13	113	391	敲石	6-1区 K19	Ⅳ-3層	14.6	13.9	8.9	2560.0	安山岩	
S14	117	997	磨製石斧	6-4区 O21	Ⅳ-2・3層	7.5	3.5	1.6	53.1		
S15	117	879	磨製石斧	6-4区 N21	Ⅳ-2・3層	9.4	4.4	2.3	181.0		
S16	117	875	砥石	6-4区 O21	Ⅳ-2・3層	12.4	5.5	2.3	225.0		砥面4面
S17	117	906	敲石	6-4区 M21	Ⅳ-2・3層	14.5	6.1	4.9	703.0	安山岩	
S18	121	1383	素材剥片	6-1区 K19	Ⅳ-4層	4.1	2.8	2.5	27.0	赤瑪瑙	
S19	121	1352	凹石	6-4区 P21	Ⅳ-4層	12.8	10.1	4.6	583.0	デイサイト	
S20	143	197	砥石	7区 P22	S091埋土	△6.7	8.0	2.5	157.1	アブライト	砥面2面
S21	205	172	蓋石	7区 M24	S088埋土	16.7	12.2	1.1	375		
S22	224	179	硯	7区 P23	Ⅰ層	13.1	6.5	1.1	180.2		
S23	224	177	五輪塔水輪	7区 P23	Ⅰ層	△25.5	34.1	22.9		安山岩	
S24	224	165	五輪塔水輪	7区 L22	Ⅱ層	27.0	27.9	16.4		安山岩	
S25	226	082	敲石	7区 M25	Ⅳ層上部(谷部包含層1上)	13.8	7.9	5.0	721.1	安山岩	
S26	261	0319	石臼上臼	8区 R20	S228 自然流路埋土	△19.0	△24.0	10.8		安山岩	もの入れ・軸受け・副溝
S27	263	0717	砥石	8区 Q21	S244 溝埋土	△4.7	△4.2	△1.3	13.0		砥面2面
S28	266	1089	軽石	8区 R23	S349 溝埋土	△6.2	7.1	△4.9	43.7	軽石	
S29	276	1091	砥石	8区 R22	S546 土坑埋土	△7.4	△3.5	0.9	22.6	粘板岩	砥面4面
S30	286	0803	敲石	8区 S21・22	S410 柱穴埋土	7.9	7.1	4.9	336.0	デイサイト	
S31	288	0777	敲石	8区 R22	S437 ビット1層	11.9	6.2	4.7	434.0	安山岩	
S32	300	0672	敲石	8区 R20	S315 溝最下層	14.8	4.9	4.0	322.0	安山岩	
S33	300	0676	石皿	8区 R20	S315 溝最下層	△10.8	14.3	3.7	586.0	安山岩	
S34	300	0666	五輪塔空風輪	8区 R20	S315 溝最下層	21.3	14.9	14.7		角閃石安山岩	
S35	310	1092	砥石	8区 S20	S727 溝埋土	△4.2	△3.0	0.7	10.2	粘板岩	砥面3面
S36	310	0939	凹石	8区 R20	S727 溝埋土	12.5	10.2	6.6	1043.0	安山岩	
S37	325	0503	敲石	8区 Q21	S216 土坑3層	10.2	7.2	4.6	361.0	デイサイト	
S38	344	0214	五輪塔水輪	8区 Q24	Ⅰ層	21.7	23.6	16.5		安山岩	
S39	346	1009	砥石	8区 S20	Ⅱ-1層	△4.7	5.5	7.9	152.0	安山岩	
S40	349	0137	碁石	8区 R21	Ⅲ層上面	1.8	1.8	0.5	2.34		
S41	349	0349	砥石	8区 R20	Ⅲ-2層	△13.5	5.0	4.1	334.0	砂岩	砥面3面

表56 石器観察表(2)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
S42	349	0474	五輪塔水輪	8区R20	Ⅲ-2層	24.0	△22.8	15.0		角閃石安山岩	
S43	351	1093	砥石	8区R20	Ⅲ-4層	△4.25	2.6	△1.1	15.5		砥面4面
S44	351	1084	硯	8区R・S20	Ⅲ-4層	△8.6	7.7	1.2	112.0		
S45	357	0584	軽石	8区S21	Ⅳ-2層	6.8	△6.0	△4.1	36.4	軽石	線状痕
S46	358	0912	凹石	8区Q20	Ⅳ～Ⅴ層	14.0	9.6	6.5	1181.0	安山岩?	
S47	369	0032	五輪塔空風輪	8区S20	層不明・廃土	25.1	17.8	17.4		角閃石安山岩	
S48	369	0014	五輪塔火輪	8区エリア2	層不明・廃土	26.8	26.1	16.0		多孔質安山岩	
S49	370	0361	砥石	8区Q22	攪乱	△12.1	5.1	4.8	452.0	アブライト	砥面4面
S50	370	1069	砥石	8区R23	攪乱	△12.1	10.4	6.1	756.6	アブライト	砥面4面

表57 金属器観察表

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
M17	263	0353	鎌先?	8区Q22	S306溝下層	△8.1	△5.1	△1.2	59.9	
M18	300	0674	鎌a	8区S20	S315溝下層	△16.6	刀身中央3.8	刀身中央0.3	283.4	刀身先端部欠損
			鎌b			△14.1	刀身中央5.3	刀身中央0.4		刀身先端部欠損
			鎌c			△21.8	刀身中央4.5	刀身中央0.3		刀身先端部欠損
M19	348	0312	切羽	8区R20	Ⅱ-2層	3.8	2.0	0.2	7.0	
M20	349	0835	鉄鍋片?	8区Q20	Ⅲ層	△5.6	△4.1	0.7	32.3	
M21	351	0740	不明鉄製品	8区Q21	Ⅲ-4層	△7.5	△4.0	0.4	46.9	

表58 ガラス製品観察表

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別器種	調査区グリッド	遺構層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・文様	備考
G1	351	0383	薬瓶	8区Q21	Ⅲ-4層	0.9	2.2	5.3	胴部「星製薬株式会社」「ホシ 目薬」	

表59 銭貨観察表

掲載番号	相図番号	銭貨番号	取上番号	地区 グリッド	遺構 層位	銭貨名			国名	初鑄年	銭径 (A/mm)	銭径 (B/mm)	内径 (A'/mm)	内径 (B'/mm)	内部外縁 (C/mm)	内部外縁 (D/mm)	内部内縁 (C'/mm)	内部内縁 (D'/mm)	銭厚 (mm)	銭厚(mm)詳細				量目(g)	備考
						名	書体	背文字												a	b	c	d		
M1	136		191	7区 L22	S104道路遺 構 埋土	寛永通寶		元	日本	1741	21.66	21.68	18.01	18.31	8.24	8.11	6.81	6.61	0.80~ 0.85	0.80	0.80	0.85	0.85	1.39	新発水 大阪高津 新地
M2	176	29-b	204	7区 L22	S105上塚墓 床面直上	元祐通寶	篆書		北宋	1086															調査のた め不明
	176		204	7区 L22	S105上塚墓 床面直上																				調査のた め不明
M3	176		204	7区 L22	S105上塚墓 床面直上																				調査のた め不明
	176		204	7区 L22	S105上塚墓 床面直上																				調査のた め不明
M4	176	11-c	203	7区 L22	S105上塚墓 埋土下層	至道元寶	草書		北宋	995	—	—	—	—	—	—	—	—	1.00	1.00	—	—	0.55		
M15	224	28-c	227	7区 O23	表土	元豊通寶	篆書		北宋	1078	23.56	23.03	18.92	—	7.20	7.17	5.71	5.65	1.40~ 1.50	1.40	1.40	1.50	1.40	2.27	
M16	224	28-b	235	7区 N23	掘乱土	元豊通寶	行書		北宋	1078	—	—	—	18.46	—	—	—	—	1.25	—	—	1.25	—	1.17	S137東側

表60 木器観察表(1)

掲載番号	挿入番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	最大長・高 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	特徴	樹種 ※()は目視	木取り	備考
W1	39	975	円形曲物	6-4区 O21	SE 1	30.7	53.9	0.3		(広葉樹)	板目材	井戸枠転用
W2	40	965	円形曲物	6-4区 O21	SE 1	△10.4	△106	0.7		(広葉樹)	板目材	遺物番号W1と同一固体
W3	40	964	円形曲物	6-4区 O21	SE 1	△6.5	△99	0.4		(広葉樹)	板目材	遺物番号W1と同一固体
W4	40	974	円形曲物	6-4区 O21	SE 1	△17.8	△112	0.6		(広葉樹)	板目材	遺物番号W1と同一固体
W5	40	962	曲物底板	6-4区 O21	SE 1	△17.3	△36	0.7		(広葉樹)	板目材	
W6	40	963	曲物底板	6-4区 O21	SE 1	△23.9	△50	1.2		(広葉樹)	板目材	
W7	40	972	板材	6-4区 O21	SE 1	△25.8	8.1	0.6		(広葉樹)	板目材	
W8	40	972	板材	6-4区 O21	SE 1	△35.4	6.6	0.7		(広葉樹)	板目材	
W9	76	1414	杭	6-4区 N21	杭 1	73.1	15.0	11.9		(針葉樹)	芯去材	AMS試料番号IAAA-142705
W10	76	1415	杭	6-4区 N21	杭 2	71.8	15.7	12.3		(針葉樹)	芯去材	
W11	76	1418	杭	6-4区 M21	杭 3	71.0	13.8	12.9		(針葉樹)	芯去材	AMS試料番号IAAA-142706
W12	76	1422	添木	6-4区 N21	杭 3	17.3	13.0	7.5			芯去材	
W13	87	1594	礎板	6-4区 M20	SB6-P2(P241)	△31.5	6.4	5.5		(針葉樹)	芯去材	
W14	87	1594	礎板	6-4区 M20	SB6-P2(P241)	27.7	7.2	5.0		(針葉樹)	芯去材	
W15	87	1594	礎板	6-4区 M20	SB6-P2(P241)	28.4	7.6	6.2		(針葉樹)	芯去材	
W16	92	1600	地中梁	6-区	SB5	408.0	18.0	6.0				
W17	92	1604	地中梁	6-区	SB5	212.0	14.0	8.0				
W18	97	1616	板材	6-1区 J20	SK21	35.0	△31.9	4.8		(針葉樹)	板目材	
W19	98	1373	杭	6-4区 M21	杭 4	13.7	12.5	10.4			芯去材	
W20	98	1326	杭	6-1区 M21	杭 5	19.0	15.8	10.9		(広葉樹)	芯去材	
W21	101	1516	礎板	6-4区 N21	P138	37.0	23.3	1.7		(針葉樹)	板目材	
W22	101	1590	礎板	6-4区 N21	P138	34.9	18.1	2.5		(針葉樹)	板目材	
W23	104	1591	礎板	6-4区 M20	P281	18.2	14.9	13.9		(広葉樹)	芯去材	
W24	104	1593	礎板	6-4区 M20	P226	26.4	5.1	2.7		(針葉樹)	板目材	
W25	104	1593	礎板	6-4区 M20	P226	27.1	△120	2.8		(針葉樹)	板目材	
W26	104	1612	礎板	6-1区 K20	P464	31.6	6.7	2.3		(針葉樹)	板目材	
W27	104	1612	礎板	6-1区 K20	P464	32.1	10.5	2.4		(針葉樹)	板目材	
W28	114	267	不明	6-1区 K21	IV-3層	△9.9	9.4	1.8		(針葉樹)	板目材	
W29	121	1405	不明	6-4区 N21	IV-4層	29.7	6.2	2.1		(針葉樹)	板目材	
W30	121	1405	不明	6-4区 N21	IV-4層	26.9	9.6	1.5		(針葉樹)	板目材	
W31	121	1405	不明	6-4区 N21	IV-4層	26.5	8.4	2.2		(針葉樹)	板目材	
W32	261	0321	差歯下駄	8区 R20	S228自然流路埋土	△17.8	9.0	1.3	遺存状況不良	(広葉樹)	板目材	
W33	263	0196	著	8区 Q21	S244溝埋土	△23.4	0.7	0.7		(針葉樹)	柱目材	
W34	268	0647	杭	8区 R23	S354杭列	△28.8	6.4	5.7		(針葉樹)	芯持材	杭No1
W35	268	0649	杭	8区 R23	S354杭列	△29.3	5.3	4.5		(針葉樹)	芯持材	杭No3
W36	268	0650	杭	8区 R23	S354杭列	△52.8	6.3	5.8		(針葉樹)	芯持材	杭No4
W37	268	0651	杭	8区 R23	S354杭列	△45.8	5.8	5.5		(針葉樹)	芯持材	杭No5
W38	268	0652	杭	8区 R23	S354杭列	△23.7	4.6	5.0		(針葉樹)	芯持材	杭No10
W39	268	0653	杭	8区 R23	S354杭列	△23.4	2.6	2.5		(針葉樹)	芯持材	杭No11
W40	268	0654	杭	8区 R23	S354杭列	△32.6	4.6	4.2		(針葉樹)	芯持材	杭No6
W41	268	0655	杭	8区 R23	S354杭列	△43.6	4.0	2.4		(針葉樹)	芯持材	杭No7
W42	268	0656	杭	8区 R23	S354杭列	△27.8	8.2	3.8		(針葉樹)	芯持材	杭No8
W43	268	0657	杭	8区 R23	S354杭列	△38.9	5.7	5.0		(針葉樹)	芯持材	杭No9
W44	268	1065	杭	8区 R23	S354杭列	△14.7	5.4	4.4		(針葉樹)	芯持材	杭No16

表61 木器観察表(2)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	最大長・高(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	特徴	樹種※()は目視	木取り	備考
W45	268	0755	杭	8区 Q23	S354杭列	△45.6	5.5	5.4		(針葉樹)	芯持材	杭No24
W46	269	1031	杭	8区 R22	S531杭	△29.7	13.3	10.5		(針葉樹)	芯持材	
W47	286	0897	柱根	8区 S21	S548柱穴埋土	35.5	20.4	18.4		(針葉樹)	芯持材	
W48	286	0929	礎板	8区 R21	S577柱穴埋土	18.1	11.8	3.0		スギ	板目材	AMS試料No22、樹種同定
W49	286	1019	柱根	8区 R22	S511柱穴埋土	42.7	15.1	15.3		(広葉樹)	芯持材	
W50	286	0960	柱根	8区 R21	S364柱穴埋土	41.6	19.1	18.6		マツ属複雑管束亜属	芯持材	AMS試料No6、樹種同定
W51	286	1025	柱根	8区 S21	S402柱穴埋土	25.8	21.6	19.5		クリ	芯持材	AMS試料No8、樹種同定
W52	286	1054	柱根	8区 S22	S569柱穴埋土	20.5	9.7	7.0		クリ	芯持材	AMS試料No15、樹種同定
W53	286	1020	柱根	8区 S22	S375柱穴埋土	16.6	12.8	12.2		ヤブツバキ	芯持材	AMS試料No7、樹種同定
W54	286	1032	柱根	8区 S22	S579柱穴埋土	28.9	9.1	8.5		クリ	芯持材	AMS試料No18、樹種同定
W55	300	0667	漆器椀	8区 R20	S315溝最下層	口径：※19.6	底径：-	器高：△5.2	外面：口縁～体部黒漆、体部赤漆の文様 内面：体部黒漆、赤漆の文様	(広葉樹)	横木取り	
W56	306	0800	連歯下駄	8区 S20	S533	△11.8	10.1	4.0		(針葉樹)	框目材	
W57	305	0898	杭	8区 S20	S533杭列	△70.2	7.8	5.9		(広葉樹)	芯持材	杭No1
W58	305	0839	杭	8区 S20	S533杭列	△70.8	14.5	7.9		クリ	芯持材	杭No2、樹種同定
W59	305	0832	杭	8区 S20	S533杭列	△50.0	5.7	5.7		(針葉樹)	芯持材	杭No4
W60	305	0831	杭	8区 S20	S533杭列	44.3	9.5	10.0		サクラ属	芯持材	杭No5、AMS試料No23、樹種同定
W61	305	0931	杭	8区 S20	S533杭列	△53.9	8.0	6.2		(広葉樹)	芯持材	杭No8
W62	305	0837	杭	8区 S20	S533杭列	△28.5	7.0	7.2		(広葉樹)	芯持材	杭No7
W63	305	0829	杭	8区 S20	S533杭列	△29.3	9.3	8.1		(広葉樹)	芯持材	杭No11
W64	305	0853	杭	8区 R・S20	S533杭列	△66.8	20.1	14.2		ケヤキ	芯持材	杭No13、樹種同定
W65	305	0810	杭	8区 S20	S533杭列	△15.0	4.3	3.9		(広葉樹)	芯持材	杭No12
W66	305	0825	杭	8区 R20	S533杭列	△22.4	4.0	3.9		(広葉樹)	芯持材	杭No18
W67	306	0811	杭	8区 R20	S533杭列	△53.2	6.6	6.8		サクラ属	芯持材	杭No14、樹種同定
W68	306	0828	杭	8区 R20	S533杭列	△74.3	12.0	13.1		クリ	芯持材	杭No15、樹種同定
W69	306	0827	杭	8区 R20	S533杭列	△52.0	7.2	5.2		(広葉樹)	芯持材	杭No16
W70	306	0824	杭	8区 R20	S533杭列	△31.9	8.2	8.1		(広葉樹)	芯持材	杭No19
W71	306	0818	杭	8区 R20	S533杭列	△23.4	6.7	6.4		(広葉樹)	芯持材	杭No26
W72	306	0840	杭	8区 R20	S533杭列	△67.1	7.1	5.8		クリ	芯持材	杭No20、樹種同定
W73	306	0844	杭	8区 R20	S533杭列	△65.5	16.9	13.5		(広葉樹)	芯持材	杭No23
W74	306	0822	杭	8区 R20	S533杭列	△38.2	6.3	6.5		(広葉樹)	芯持材	杭No22
W75	306	0820	杭	8区 R20	S533杭列	△17.7	3.8	3.6		(広葉樹)	芯持材	杭No24
W76	306	0819	杭	8区 R20	S533杭列	△25.5	5.4	4.9		(広葉樹)	芯持材	杭No25
W77	306	0817	杭	8区 R20	S533杭列	△30.6	6.2	5.2		(広葉樹)	芯持材	杭No27
W78	306	0814	杭	8区 R20	S533杭列	△19.8	6.2	6.0		(広葉樹)	芯持材	杭No30
W79	306	0946	杭	8区 S20	S533杭列	△61.6	8.0	7.9		(広葉樹)	芯持材	杭No35
W80	310	0944	漆器皿	8区 R20	S727溝埋土	口径：9.1	底径：-	器高：△2.6	外面：口縁端部黒漆、体部赤漆、高台内黒漆 内面：口縁端部黒漆、体～底部赤漆	(広葉樹)	横木取り	
W81	310	0945	漆器椀	8区 R20	S727溝埋土	口径：-	底径：7.8	器高：△6.4	外面：口縁～底部黒漆、体部赤漆の文様 内面：口縁～底部赤漆	(広葉樹)	横木取り	
W82	310	0949	漆器椀	8区 R21	S727溝埋土	口径：-	底径：※6.8	器高：△3.0	外面：体～底部黒漆、体部赤漆の文様 内面：体～底部赤漆	(広葉樹)	横木取り	
W83	310	0934	蓋板	8区 R20	S727溝埋土	20.1	△5.2	0.8		(針葉樹)	框目材	
W84	310	0926	蓋板	8区 S20	S727溝埋土	12.2	△7.3	0.6		(針葉樹)	框目材	
W85	310	0940	蓋板	8区 R20	S727溝埋土	△10.0	△3.1	0.7	一部炭化	(針葉樹)	框目材	
W86	310	0927	桶	8区 R20	S727溝埋土	14.9	6.0	1.3		(広葉樹)	板目材	

表62 木器観察表(3)

掲載番号	挿図番号	取上番号	種別	グリッド	遺構層位	最大長・高(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	特徴	樹種※()は目視	木取り	備考
W87	310	1014	杭	8区S20	S727溝埋土	24.1	11.8	10.5		(広葉樹)	芯持材	
W88	318	0476	板材	8区R21	S316柱穴埋土	28.2	10.9	2.9		(針葉樹)	板目材	
W89	328	0868	礎板	8区Q21・22	S523柱穴埋土	25.7	6.2	5.3	一部炭化	(針葉樹)	芯去材	
W90	328	1060	柱根	8区R21	S633柱穴埋土	53.5	17.3	13.5		クリ	芯持材	AMS試料№17、樹種同定
W91	332	1059	柱根	8区Q21	S750掘立柱建物(S656柱穴)埋土	62.2	11.8	10.0		マキ属	芯持材	AMS試料№14、樹種同定
W92	332	1066	柱根	8区Q21	S750掘立柱建物(S707柱穴)埋土	70.0	12.2	11.1		マキ属	芯持材	AMS試料№12、樹種同定
W93	340	1024	礎板	8区S21	S596柱穴1層	17.1	11.9	4.9		(広葉樹)	芯去材	
W94	340	1017	礎板	8区R21	S620柱穴1層	△30.8	5.7	4.0		(広葉樹)	板目材	
W95	340	1053	柱根	8区S21	S709柱穴1層	5.9	10.5	9.9		(広葉樹)	芯持材	
W96	340	1070	柱根	8区R21	S668柱穴埋土	28.6	15.0	12.9		(針葉樹)	芯去材	
W97	340	0997	柱根	8区Q21	S651柱穴埋土	37.3	16.3	11.8	運材加工	(針葉樹)	芯去材	
W98	341	1073	柱根	8区R21	S694柱穴埋土	39.5	15.7	12.1		カエデ属	芯持材	AMS試料№11、樹種同定
W99	343	1072	杭	8区Q・R21	S717杭	△45.3	9.5	9.3		(針葉樹)	芯去材	
W100	346	0467	漆器皿	8区R20	Ⅱ層	口径：※10.2	底径：※3.8	器高：2.9	外面：口縁～底部赤漆 内面：口縁～底部黒漆	(広葉樹)	縦木取り	
W101	349	0914	漆器碗	8区S20	Ⅲ層	口径：-	底径：-	器高：△3.3	外面：体部黒漆、体部赤漆の文様 内面：口縁～体部赤漆	(広葉樹)	横木取り	
W102	351	0861	漆器碗	8区S20	Ⅲ-4層	口径：8.2	底径：※5.9	器高：2.9	外面：口縁～体部、底部高台内黒漆・家紋 内面：口縁～底部赤漆	(広葉樹)	縦木取り	
W103	365	0928	桶	8区R21	V層	28.3	9.4	4.3		(広葉樹)	縦木取り	
W104	365	0950	桶?	8区R21	V層	△16.4	△7.0	1.6		(広葉樹)	縦木取り	
W105	365	0969	桶底板?	8区Q21	V層	14.1	△5.0	1.2		(針葉樹)	板目材	
W106	365	0969	棒状製品	8区Q21	V層	41.7	1.8	1.4		(針葉樹)	板目材	
W107	365	0969	棒状製品	8区Q21	V層	△8.5	2.1	1.4	表面炭化	(針葉樹)	板目材	
W108	365	0969	棒状製品	8区Q21	V層	△27.3	2.0	1.8	表面炭化	(針葉樹)	板目材	
W109	365	0969	棒状製品	8区Q21	V層	△41.8	2.2	2.0		(針葉樹)	板目材	
W110	365	0969	棒状製品	8区Q21	V層	△44.3	2.1	1.8		(針葉樹)	板目材	
W111	366	1034	角材	8区Q21	V層	△26.3	8.5	6.7		(針葉樹)	芯去材	
W112	366	0962	板材	8区Q21	V層	△41.8	4.6	1.8	一部炭化	(針葉樹)	板目材	
W113	366	1035	角材	8区Q21	V層	△27.8	△7.0	4.7		(針葉樹)	芯去材	
W114	366	1033	角材	8区Q21	V層	△31.7	8.6	6.6		(針葉樹)	芯去材	
W115	366	0969	棒状製品	8区Q21	V層	△21.2	3.6	3.7		(針葉樹)	芯去材	
W116	366	0969	棒状製品	8区Q21	V層	△43.7	2.3	2.4		(針葉樹)	板目材	
W117	367	0961	不明	8区Q21	V層	△103.9	4.5	3.8	一部炭化	(針葉樹)	芯去材	
W118	367	0980	不明	8区Q21	V層	△86.3	2.6	2.2	一部炭化	(針葉樹)	芯持材	
W119	367	0969	杭	8区Q21	V層	△50.1	6.2	3.7		(針葉樹)	板目材	
W120	367	0969	杭	8区Q21	V層	△31.4	5.3	1.8		(針葉樹)	縦木取り	
W121	367	0977	容器等の素材	8区Q21	V層	20.6	17.0	8.7		(針葉樹)	芯去材	
W122	367	0964	建築部材	8区Q21	V層	43.9	15.5	16.2		(広葉樹)	芯去材	
W123	367	0969	不明	8区Q21	V層	△25.0	2.9	0.9	一部炭化	(針葉樹)	板目材	
W124	367	0969	不明	8区Q21	V層	△53.6	△29	△3.5		(針葉樹)	板目材	
W125	370	0006	蓋板	8区エリア2	攪乱	11.6	△3.9	0.5		(針葉樹)	板目材	
W126	370	0472	連歯下駄	8区R20	攪乱	20.0	18.6	2.9		(針葉樹)	板目材	

第7章 自然科学分析

第1節 6区出土遺物放射性炭素年代測定

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

下坂本清合遺跡の測定対象試料は、竪穴建物SI1床面で出土した木炭等の4点 (IAAA-142163～142166)、掘立柱建物SB5の掘方内で出土した礎板や柱等と、第3遺構面で検出された杭から採取された木片の7点 (IAAA-142700～142706) の合計11点である (表63)。試料の状態と採取に関するデー

表63 分析試料一覧

測定番号	試料名 取上番号	試料種別	大きさ・数量・採取位置・辺材 と心材の別など	色	乾湿	付着物	残試料	備考 掲載番号
IAAA-142163	① 500	樹皮(葺材)	樹皮40×10×2mm1個と、30×10×2mm以下5個あり。うち最大片より一部を採取。	黒褐色	やや湿	表面の一部に土	あり	
IAAA-142164	② 1258	カヤ?(壁材)	カヤかとされる植物片45×4×2mm以下5個あり。うち20×5×2mm1個を採取。	黒色	やや湿	表面の一部に土	あり	
IAAA-142165	③ 1105	木炭(北西主柱)	木炭50×30×20mm1個あり。その外側より一部採取。丸木が割れた状態で、表面は樹皮ないしその直下の可能性がある。	黒色	やや湿	表面の一部に土	あり	
IAAA-142166	④ 1118	木炭(南西垂木2)	木炭40×30×20mm1個あり。その外側より一部採取。丸木が割れた状態で、表面は樹皮直下の可能性がある。	黒色	やや湿	表面の一部に土	あり	
IAAA-142700	1598	木片(南西礎板)	長29×幅14×厚2cmの板目板材(辺材)で、約16年輪確認され、最外1～2年輪分を採取。	暗赤褐色 5YR3/2	湿	なし	なし	
IAAA-142701	1600	木片(南地中梁)	長400×幅18×厚5cmの板目板材(辺材)で、約50年輪確認され、最外2年輪分を採取。	暗赤色 10R3/6	湿	なし	なし	
IAAA-142702	1604	木片(北地中梁)	長230×幅14×厚6cmの板目板材(辺材)で、約77年輪確認され、最外3年輪分を採取。	暗赤色 10R3/6	湿	なし	なし	
IAAA-142703	1606	木片(北西礎板)	長22×幅11×厚2cmの板目板材(辺材)で、約40年輪確認され、最外2～3年輪分を採取。	暗赤色 10R3/4	湿	なし	なし	
IAAA-142704	1608	木片(北中柱)	長15×幅10×厚15cmの芯去丸材(辺材)で、約152年輪確認され、最外5年輪分を採取。	暗赤色 10R3/6	湿	なし	なし	
IAAA-142705	1414	木片(杭)	長75×直径15cmの芯去丸材(辺材)で、約52年輪確認され、最外から6～7年輪目を採取。	暗赤色 10R3/6	湿	なし	なし	最外約5年輪分は腐っており、試料に不適。 W9
IAAA-142706	1418	木片(杭)	長70×直径14cmの芯去丸材(辺材)で、約43年輪確認され、最外2～3年輪分を採取。	暗赤褐色 2.5YR3/6	湿	なし	なし	W11

タを表63に示した。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 $1\text{mol}/\ell$ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表64に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HO_xII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表64)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表64に、補正していない値を参考値として表65に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表64に、補正していない値を参考値として表65に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正

曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2較正プログラム (BronkRamsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表65に示した。暦年較正年代は、14C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表64～65及び第371～372図に示す。

試料4点の14C年代は、 $1910 \pm 20\text{yrBP}$ (試料③) から $1850 \pm 20\text{yrBP}$ (試料①) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、最も古い③が72～125cal ADの範囲、最も新しい①が130～213cal ADの間に2つの範囲で示され、いずれも弥生時代後期頃に相当する (小林2009)。

なお、これらの試料が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾寄2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いてこれらの測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

掘立柱建物SB5出土試料5点の14C年代は、 $2150 \pm 20\text{yrBP}$ (試料1598) から $1910 \pm 20\text{yrBP}$ (試料1604) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、最も古い1598が347～166cal BCの間に2つの範囲、最も新しい1604が70～125cal ADの範囲で示され、古い方から1598、1606が弥生時代中期頃、1608が中期から後期頃、1600、1604が後期頃に相当する (小林2009)。同じ建物跡に属する5点の試料の間には年代差が認められ、また出土土器から推定される時期よりも古い値を示したものが見られる。

ただし、いずれの試料にも樹皮が確認されないことから、試料となった樹木の本来の枯死、伐採年代は、ここで記載された年代値よりも新しい可能性がある。この点も考慮しながら、試料の出土状況、土器の詳細な時期認定等と合わせ、さらに検討する必要がある。

杭2点の14C年代は、1414 (W 9) が $1610 \pm 20\text{yrBP}$ 、1418 (W11) が $1600 \pm 20\text{yrBP}$ となり、誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で一致する。暦年較正年代 (1σ) は、1414 (W 9) が403～530cal AD、1418 (W11) が412～533cal ADの間に各々複数の範囲で示され、いずれも古墳時代中期から後期頃に相当する (佐原2005)。推定される時期より新しい年代値となっており、杭の検出層位や埋没状態、出土土器等と合わせた検証を要する。

なお、1600、1604、1608が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾寄2009、坂本2010など)。その日本版較正曲線を用いてこれらの測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表64 6区出土遺物AMS暦年代値一覽(1)

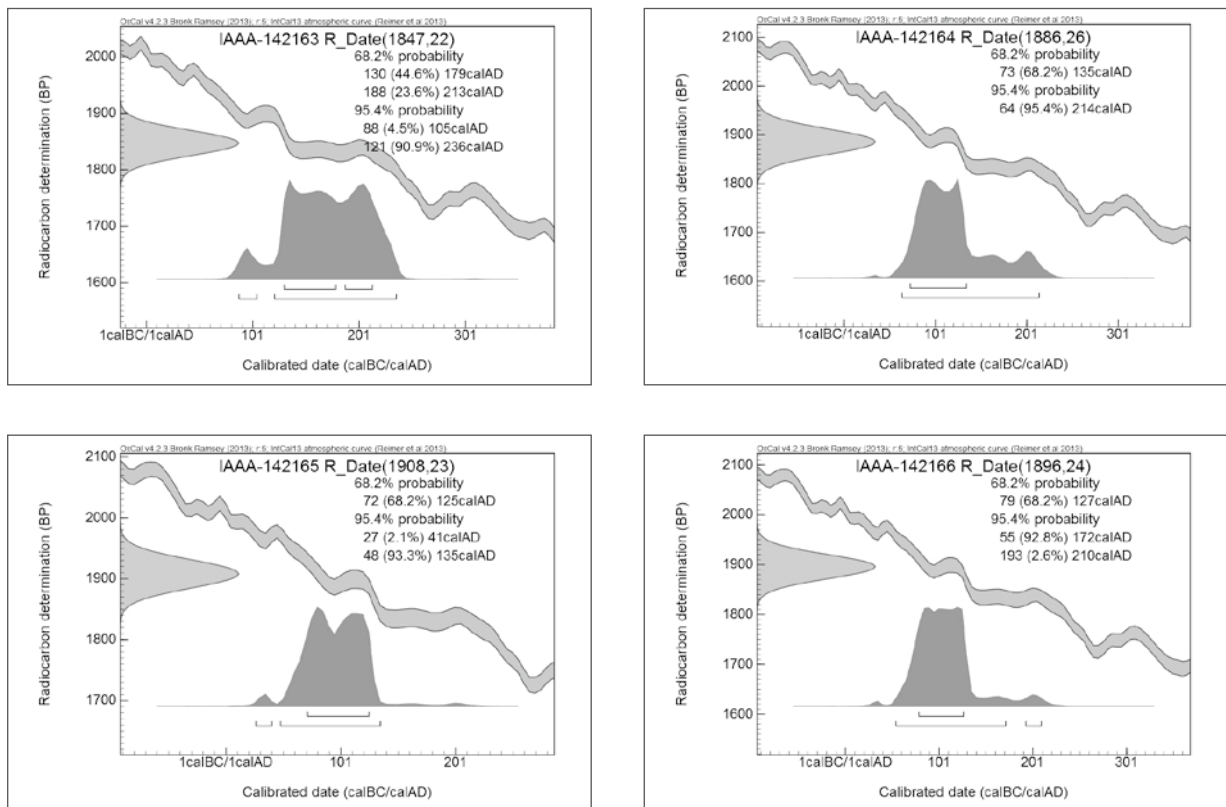
測定番号	試料名 取上番号	採取場所	試料種別	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり		備考 掲載番号
						Libby Age(yrBP)	pMC(%)	
IAAA-142163	① 500	竪穴建物跡SI1 床面	樹皮(葺材)	AAA	-26.81 ± 0.22	1,850 ± 20	79.45 ± 0.23	
IAAA-142164	② 1258	竪穴建物跡SI1 床面	カヤ?(壁材)	AAA	-10.87 ± 0.23	1,890 ± 30	79.07 ± 0.26	
IAAA-142165	③ 1105	竪穴建物跡SI1 床面	木炭(北西主柱)	AAA	-27.66 ± 0.22	1,910 ± 20	78.85 ± 0.23	
IAAA-142166	④ 1118	竪穴建物跡SI1 床面	木炭(南西垂木2)	AAA	-28.04 ± 0.24	1,900 ± 20	78.98 ± 0.25	
IAAA-142700	1598	掘立柱建物跡SB5 掘方内	木片(南西礎板)	AAA	-22.05 ± 0.34	2,150 ± 20	76.51 ± 0.22	
IAAA-142701	1600	掘立柱建物跡SB5 掘方内	木片(南地中梁)	AAA	-23.17 ± 0.27	1,920 ± 20	78.69 ± 0.23	
IAAA-142702	1604	掘立柱建物跡SB5 掘方内	木片(北地中梁)	AAA	-24.33 ± 0.23	1,910 ± 20	78.83 ± 0.23	
IAAA-142703	1606	掘立柱建物跡SB5 掘方内	木片(北西礎板)	AAA	-22.98 ± 0.28	2,070 ± 20	77.26 ± 0.23	
IAAA-142704	1608	掘立柱建物跡SB5 掘方内	木片(北中柱)	AAA	-24.39 ± 0.23	2,000 ± 20	77.98 ± 0.23	
IAAA-142705	1414	杭1 第3遺構面	木片(杭)	AAA	-26.48 ± 0.27	1,610 ± 20	81.82 ± 0.24	W9
IAAA-142706	1418	杭3 第3遺構面	木片(杭)	AAA	-26.33 ± 0.28	1,600 ± 20	81.91 ± 0.24	W11

表65 6区出土遺物AMS暦年代値一覽(2)

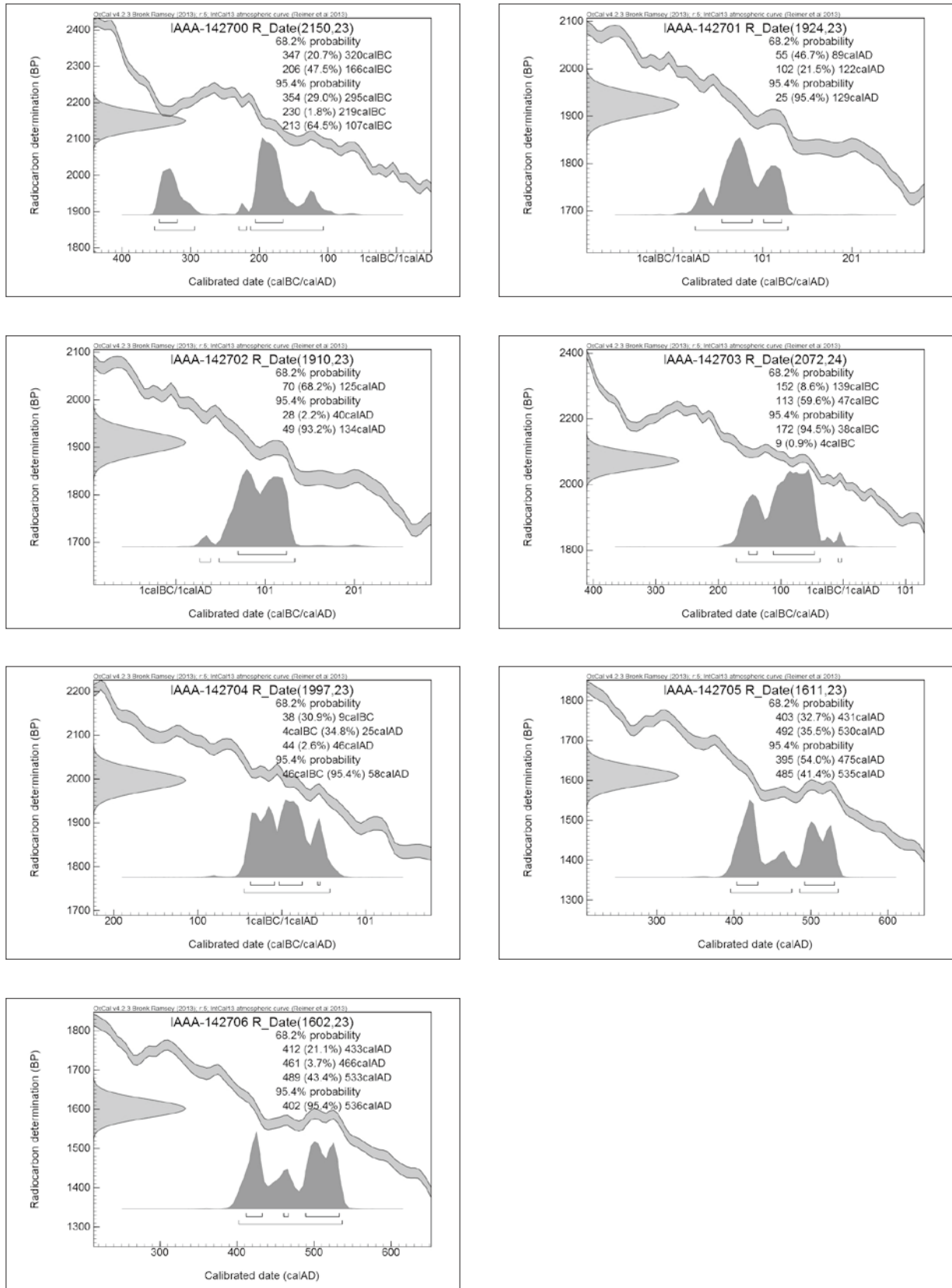
測定番号	試料名 取上番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	備考 掲載番号
		Age (yrBP)	pMC (%)				
IAAA-142163	① 500	1,880 ± 20	79.16 ± 0.22	1,847 ± 22	130calAD - 179calAD (44.6%) 188calAD - 213calAD (23.6%)	88calAD - 105calAD (4.5%) 121calAD - 236calAD (90.9%)	
IAAA-142164	② 1258	1,660 ± 30	81.37 ± 0.26	1,886 ± 26	73calAD - 135calAD (68.2%)	64calAD - 214calAD (95.4%)	
IAAA-142165	③ 1105	1,950 ± 20	78.43 ± 0.23	1,908 ± 23	72calAD - 125calAD (68.2%)	27calAD - 41calAD (2.1%) 48calAD - 135calAD (93.3%)	
IAAA-142166	④ 1118	1,950 ± 20	78.49 ± 0.24	1,896 ± 24	79calAD - 127calAD (68.2%)	55calAD - 172calAD (92.8%) 193calAD - 210calAD (2.6%)	
IAAA-142700	1598	2,100 ± 20	76.98 ± 0.21	2,150 ± 23	347calBC - 320calBC (20.7%) 206calBC - 166calBC (47.5%)	354calBC - 295calBC (29.0%) 230calBC - 219calBC (1.8%) 213calBC - 107calBC (64.5%)	
IAAA-142701	1600	1,890 ± 20	78.99 ± 0.23	1,924 ± 23	55calAD - 89calAD (46.7%) 102calAD - 122calAD (21.5%)	25calAD - 129calAD (95.4%)	
IAAA-142702	1604	1,900 ± 20	78.95 ± 0.22	1,910 ± 23	70calAD - 125calAD (68.2%)	28calAD - 40calAD (2.2%) 49calAD - 134calAD (93.2%)	
IAAA-142703	1606	2,040 ± 20	77.59 ± 0.23	2,072 ± 24	152calBC - 139calBC (8.6%) 113calBC - 47calBC (59.6%)	172calBC - 38calBC (94.5%) 9calBC - 4calBC (0.9%)	
IAAA-142704	1608	1,990 ± 20	78.08 ± 0.23	1,997 ± 23	38calBC - 9calBC (30.9%) 4calBC - 25calAD (34.8%) 44calAD - 46calAD (2.6%)	46calBC - 58calAD (95.4%)	
IAAA-142705	1414	1,640 ± 20	81.58 ± 0.23	1,611 ± 23	403calAD - 431calAD (32.7%) 492calAD - 530calAD (35.5%)	395calAD - 475calAD (54.0%) 485calAD - 535calAD (41.4%)	W9
IAAA-142706	1418	1,620 ± 20	81.70 ± 0.24	1,602 ± 23	412calAD - 433calAD (21.1%) 461calAD - 466calAD (3.7%) 489calAD - 533calAD (43.4%)	402calAD - 536calAD (95.4%)	W11

【参考文献】

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株) 加速器分析研究所, 85-90
 Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363



第371図 6区出土遺物暦年較正年代グラフ(1)



第372図 6区出土遺物暦年較正年代グラフ(2)

第2節 6区SI 1出土炭化材の樹種同定

(株) 加速器分析研究所

はじめに

鳥取県鳥取市下坂本清合遺跡の発掘調査で検出された竪穴建物SI 1は、弥生時代末から古墳時代初頭頃と推定され、床面に炭化した建築部材等が良好に遺存していた。

今回、建築部材の木材利用を検討する資料を作成するため、出土した炭化材について樹種同定を実施したので、以下報告する。

1 試料

試料は、竪穴建物SI 1の床直上等から検出された建築部材とみられる炭化材20点である(表66)。なお、樹種同定試料⑫(取上番号:1105)、試料⑭(取上番号:1118)と同一試料を含む4点について放射性炭素年代測定が実施されている(第7章第1節参照)。

2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)、柁目(放射断面)、板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

電子顕微鏡観察と写真撮影後の炭化材は、試料台から外してスライドガラスに瞬間接着剤で接着し、遺跡名、遺構名、取上番号を記して保管資料とする。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を表66、写真25～31に示す。炭化材は、針葉樹2分類群(マツ属複維管束亜属、スギ)、広葉樹6分類群(ヤナギ属、クリ、スダジイ、エノキ属、ニガキ、ゴンズイ)とイネ科に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (Pinus subgen. Diploxyylon) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道及びエピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・スギ (Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

表66 6区出土木材樹種同定結果

分析No.	炭No.	取上番号	地区名	遺構名	層位名	名称	形状	種類
①	炭2	1059	6-1区 K20	SI1-2	床直上	東大屋根垂木①	丸木	ゴンズイ
②	炭4	1061	6-1区 K21	SI1-2	床直上	東垂木②	丸木	ゴンズイ
③	炭7	1064	6-1区 K21	SI1-2	床直上	東垂木⑤?板垂木?	板	スギ
④	炭8	1065	6-1区 K20	SI1-1-2	床直上	東ハリ?	丸木	エノキ属
⑤	炭10	1067	6-1区 K21	SI1-3	床直上	西垂木①	丸木	クリ
⑥	炭11	1068	6-1区 K21	SI1-3	床直上	西垂木②	厚板	スギ
⑦	炭12	1069	6-1区 K21	SI1-3	床直上	西垂木③	角材	スギ
⑧	炭15	1072	6-1区 K21	SI1-3	床直上	西垂木5	丸木	マツ属複雑管束亜属
⑨	炭16	1073	6-1区 K21	SI1-4	床直上	西垂木6	角材	スギ
⑩	炭18	1075	6-1区 K21	SI1-4	床直上	西垂木8(板)	板	スギ
⑪	炭22	1102	6-1区 K21	SI1-4	床直上	北西垂木②	丸木	ヤナギ属
⑫	炭25	1105	6-1区 K21	SI1-4	床直上	北西支柱①?	丸木	スタジイ
⑬	炭28	1115	6-1区 K21	SI1-1-4	床直上	北梁?	丸木	スタジイ
⑭	炭31	1118	6-1区 K21	SI1-3	床直上	南西垂木②	丸木	ニガキ
⑮	炭40	1257	6-1区 K20	SI1-1	壁面	北東垂木③(板)	板	スギ
⑯	炭47	1334	6-1区 K21	SI1-3		南西隅壁杭①	角材	スタジイ
⑰		859	6-1区 K21	SI1-4	床直上	0929-3	樹皮	イネ科
⑱		1340	6-1区 K21	SI1-4		壁面壁材	カヤ?	イネ科
⑲	炭49	1540	6-1区 K21	SI1		中央ピット東側板	板	スギ
⑳	炭50	1539	6-1区 K21	SI1		中央ピット貼材	薄板	スギ

・ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-15細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・スタジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で鞘細胞が認められる。

・ニガキ (*Picrasma quassioides* (D. Don) Benn.) ニガキ科ニガキ属

環孔材で、孔圏部は2-3列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独あるいは2-4個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-6細胞幅、1-40細胞高。

・ゴンズイ (*Euscaphis japonica* (Thunb.) Kanitz) ミツバウツギ科ゴンズイ属

散孔材で、道管は横断面で円形、ほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状～対列状に配列する。放射組織は、異性、単列で1-20細胞高前後の組織と、5-10細胞幅、20～60細胞高の組織とがある。

・イネ科 (Gramineae)

横断面では、2対4個の道管の外側に篩部細胞があり、これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

取上番号859と取上番号1340は、稈の大きさ、厚み、維管束の形状や大きさが違っており、異なる種類に由来する可能性があるが、種類を特定することはできなかった。

4 考察

弥生時代末から古墳時代初頭頃と考えられる竪穴建物SI1から出土した炭化材には、8種類の木材とイネ科が認められた。各種類の材質等を見ると、針葉樹のマツ属複維管束亜属は、二次林や海岸などに生育する常緑高木である。木材は軽軟な部類に入るが、強度と保存性は比較的高い。スギは、沖積地や谷沿い等の適潤地に生育する常緑高木であり、木材は木理が通直で割裂性と耐水性が比較的高い。広葉樹のヤナギ属は、湿地、河畔、山地など、属としては様々な環境に生育する落葉低木から高木である。木材は軽軟で強度と保存性は低い。クリは、二次林等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。

スダジイは、暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種の一つとして、主に山地や丘陵地の尾根筋に生育する常緑高木で、木材は比較的重硬で強度が高い。エノキ属は、河畔等に生育する落葉高木で、木材はやや重硬な部類に入る。ニガキは、低地の林内に生育する落葉高木で、重さや硬さ共に中庸とされる。ゴンズイは、暖地の二次林や林縁に生育する落葉小高木であり、木材は軽軟で強度は低い。

建築部材の部位は、主柱、垂木、梁、壁杭、壁材、側板及び貼材等がある。主柱は、丸木でスダジイが使われており、比較的高い強度の木材を利用したことが推定される。垂木は、今回の分析試料の中で最も試料数が多い。丸木の他に、板、厚板及び角材があり、樹種を見ると、丸木ではマツ属複維管束亜属、ゴンズイ、クリ、ヤナギ属及びニガキが認められるが、板、厚板及び角材等の分割加工された試料は全てスギであり、丸木と分割材とで選択された樹種が異なる。丸木については利用される種類数が多く、比較的高い強度のクリが利用される一方で、強度や保存性が低いゴンズイやヤナギ属も利用されている。こうした状況から、本遺跡周辺で入手可能な様々な木材を利用していることが推定される。

一方、板、厚板及び角材の垂木では、スギ材の選択的な利用が推定される。スギは大径木になる種類であることから、分割して目的の大きさ、長さの木材を得ていたことが推定される。

梁は2点とも丸木であり、エノキ属とスダジイが利用される。点数が少ないが、利用状況は丸木の垂木に似ている。また、側板や貼材は板状でスギに同定されており、分割加工された垂木の利用状況に似ている。

南西隅壁杭は、角材のスダジイが利用されており、今回の試料の中で唯一、スギ以外の分割材となる。この結果から、スダジイは利用部位によって分割加工されたことが推定される。

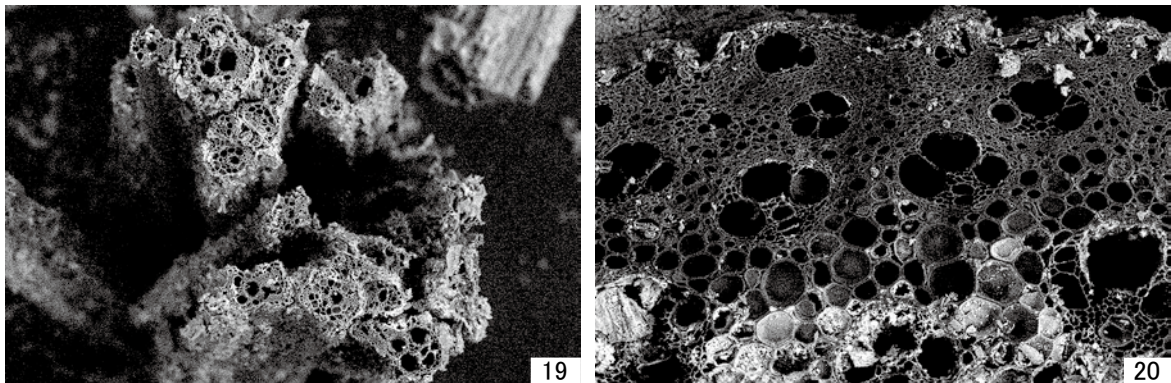
床面直上の樹皮とされたNo.17試料と壁面壁材とされたNo.18試料は、いずれもイネ科の稈であった。このうち、樹皮とされたNo.17試料は、薄く脆いイネ科の稈が密集している状況が見られたことから、藁束のような状態であった可能性がある。なお、両試料は共にイネ科に同定されているが、樹皮と考えられたNo.17試料の方は稈が薄く脆いこと、維管束の形状や大きさが異なること等から、2点のイネ科は異なる種類に由来する可能性がある。

伊東・山田(2012)のデータベースによれば、周辺地域では近い時期の住居跡出土炭化材について樹種を明らかにした例がほとんどない。一方、鳥取県内の弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡出土炭化材の樹種をみると、クリやスダジイを中心に多くの広葉樹材が見られる一方、今回多く見られたスギ材を含む針葉樹は、下張坪遺跡でヒノキ属が1点確認されているのみである。

今回確認されたスギや広葉樹の利用状況が、本遺跡に特異な傾向なのか否かについては、今後の資料蓄積を待って検討したい。

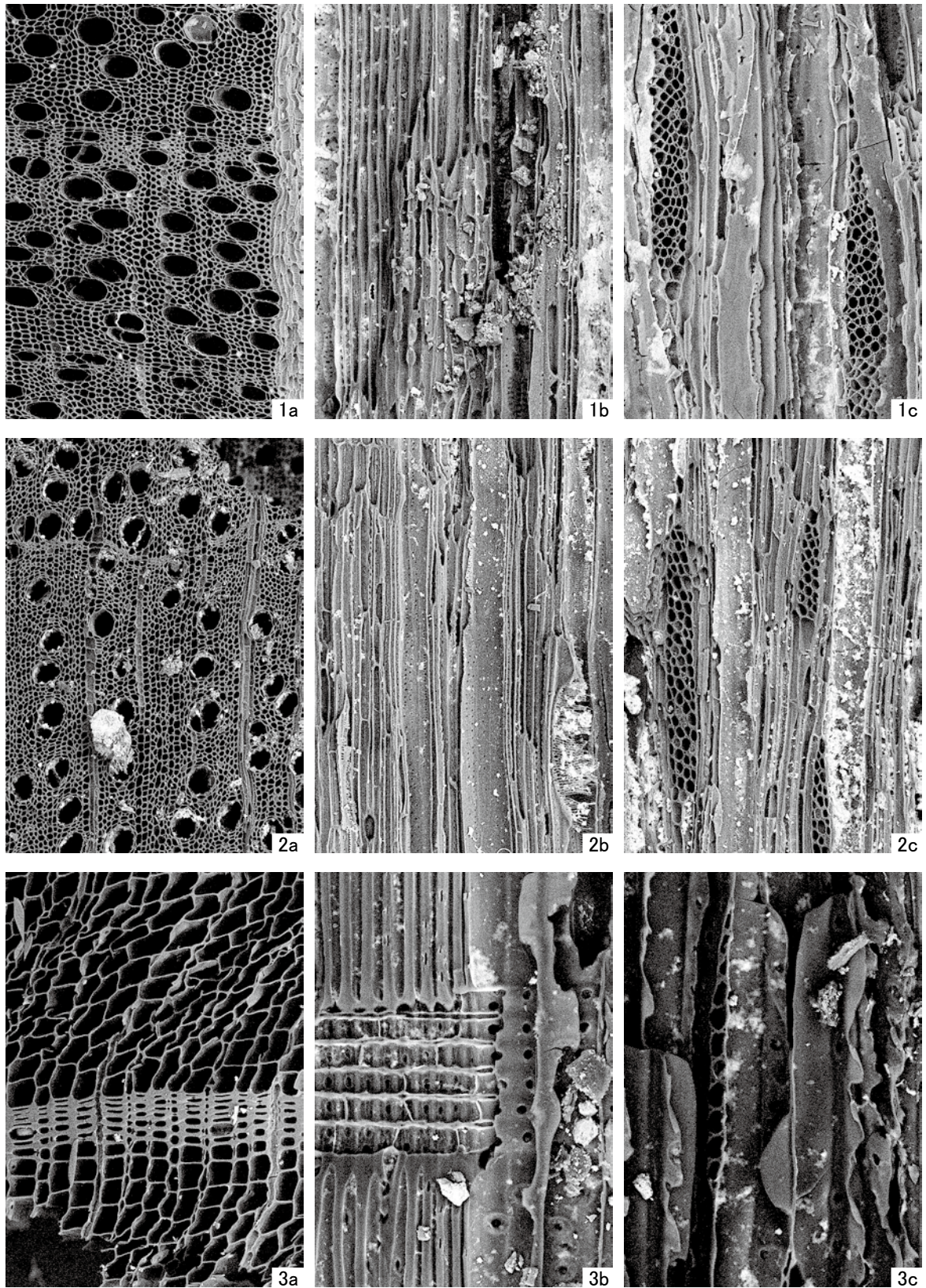
【参考文献】

- 林昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
島地謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .
※) 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。



19.イネ科(試料⑰:取上番号859) 横断面
20.イネ科(試料⑱:取上番号1340) 横断面

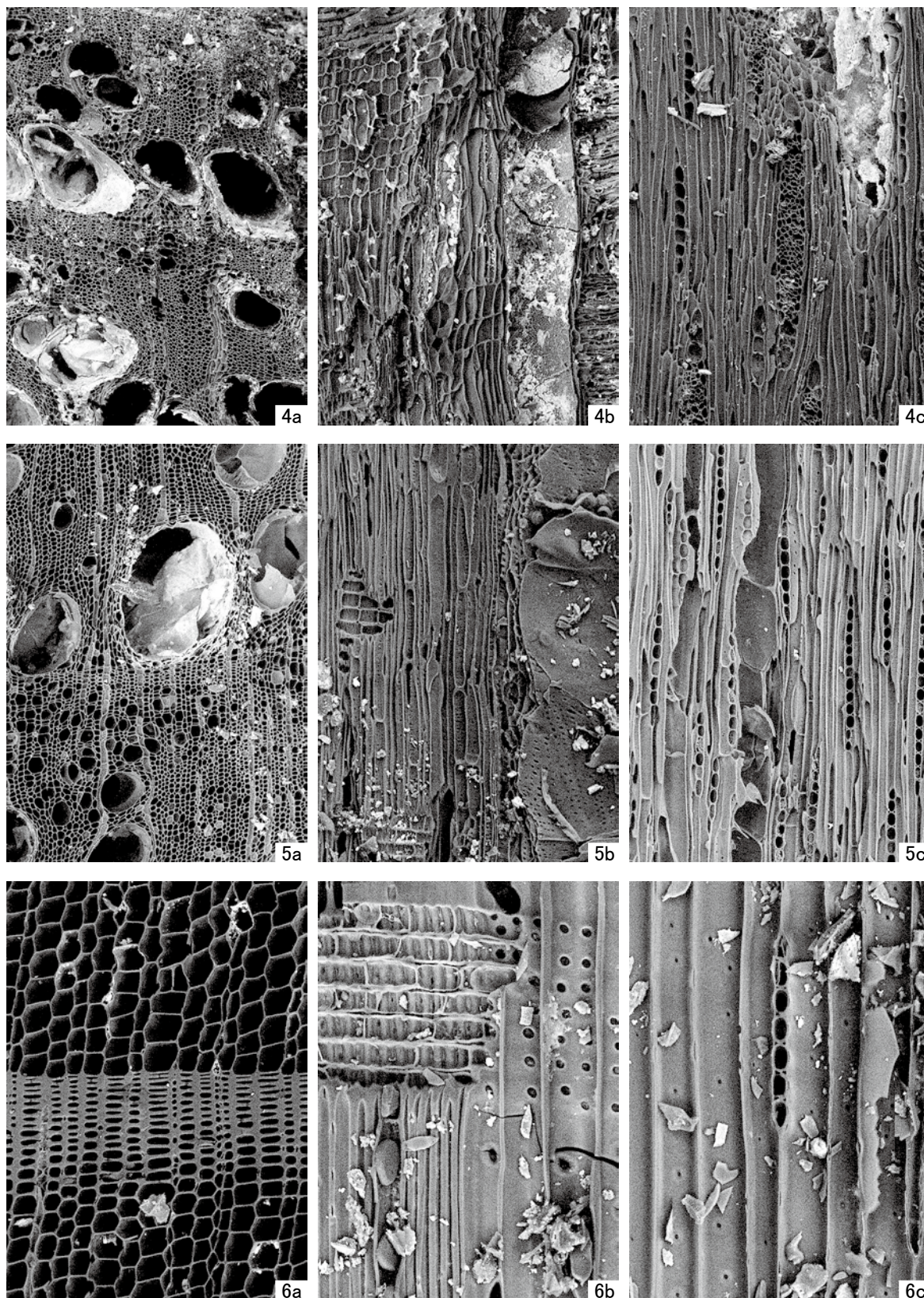
写真25 6区SI1 出土炭化材顕微鏡写真(1)



1.ゴンズイ(試料①):取上番号1059)
 2.ゴンズイ(試料②):取上番号1061)
 3.スギ(試料③):取上番号1064)
 a:木口,b:柀目,c:板目

100 μ m:1-2a
 100 μ m:3a,1-2b,c
 100 μ m:3b,c

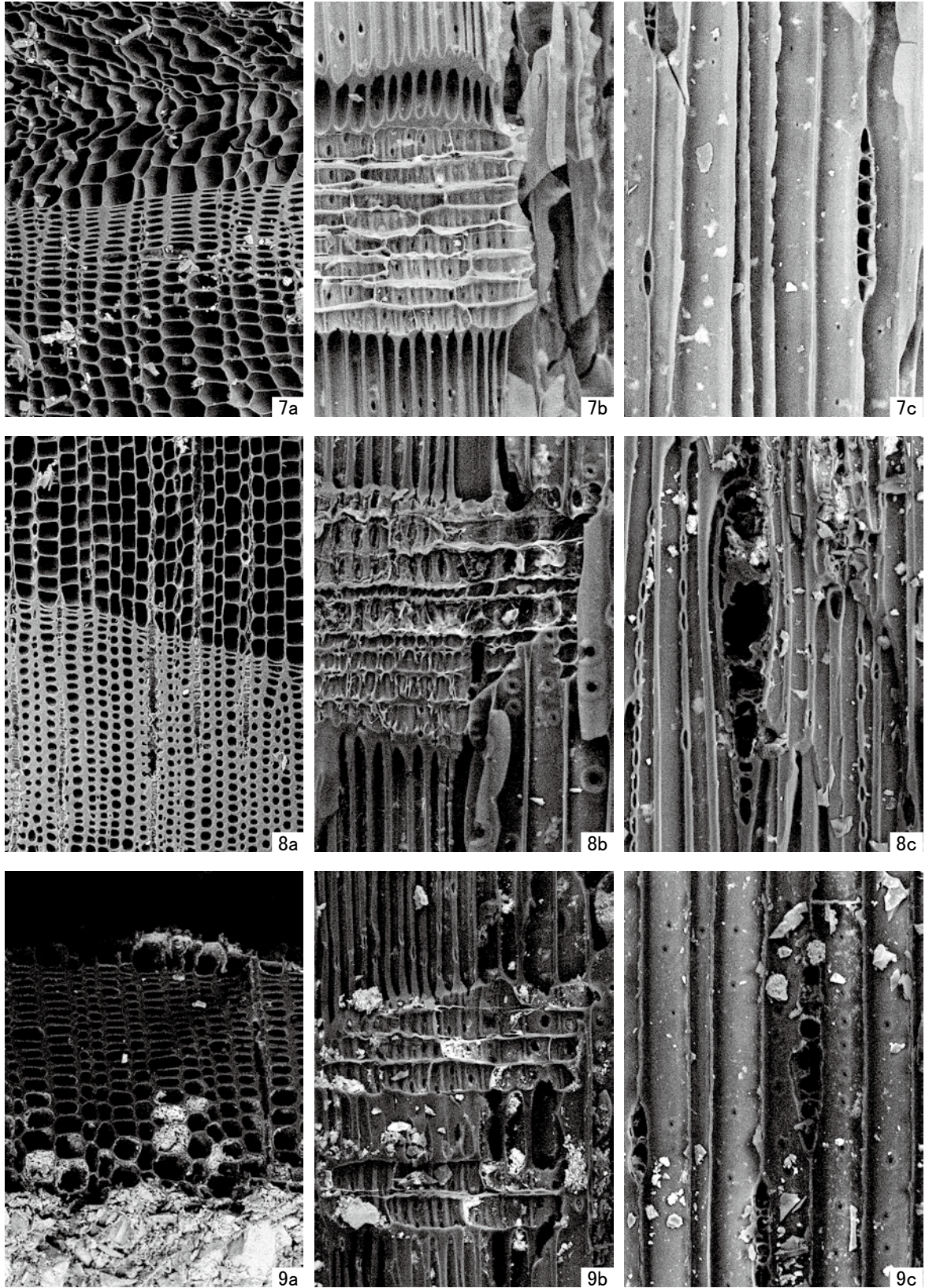
写真26 6区SI 1 出土炭化材顕微鏡写真(2)



4.エノキ属(試料④):取上番号1065)
 5.クiri(試料⑤):取上番号1067)
 6.スギ(試料⑥):取上番号1068)
 a:木口,b:柱目,c:板目

100 μ m:4-5a
 100 μ m:6a,4-5b,c
 100 μ m:6b,c

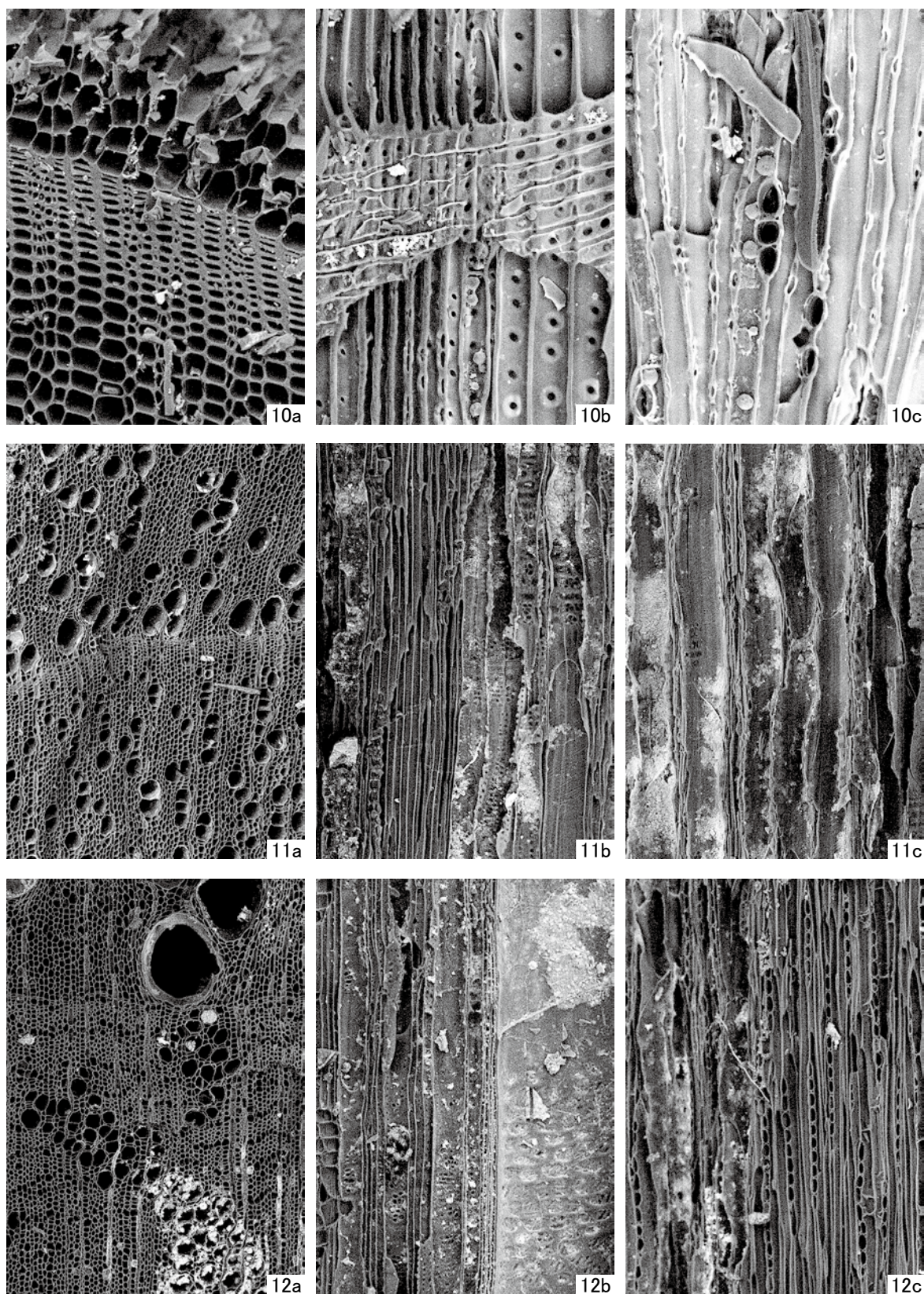
写真27 6区SI1出土炭化材顕微鏡写真(3)



7.スギ(試料⑦):取上番号1069)
 8.マツ属複雑管束亜属(試料⑧):取上番号1072)
 9.スギ(試料⑨):取上番号1073)
 a:木口,b:柱目,c:板目

100 μ m:a
 100 μ m:b,c

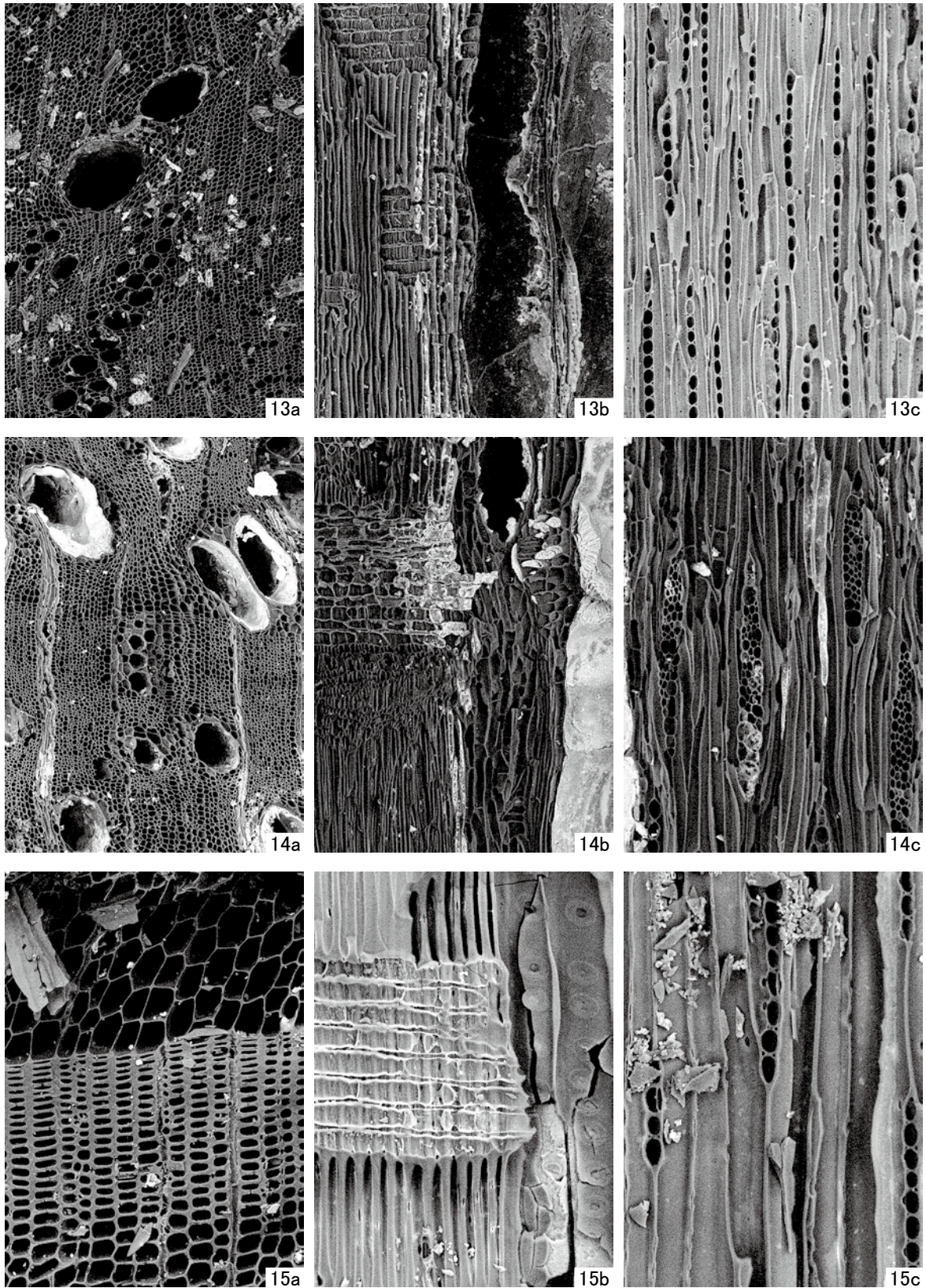
写真28 6区SI 1 出土炭化材顕微鏡写真(4)



10.スギ(試料⑩:取上番号1075)
 11.ヤナギ属(試料⑪:取上番号1102)
 12.サダジイ(試料⑫:取上番号1105)
 a:木口,b:柾目,c:板目

100 μ m:11-12a
 100 μ m:10a,11-12b,c
 100 μ m:10b,c

写真29 6区SI1出土炭化材顕微鏡写真(5)



13.スダジイ(試料⑬:取上番号1115)

14.ニガキ(試料⑭:取上番号1118)

15.スギ(試料⑮:取上番号1257)

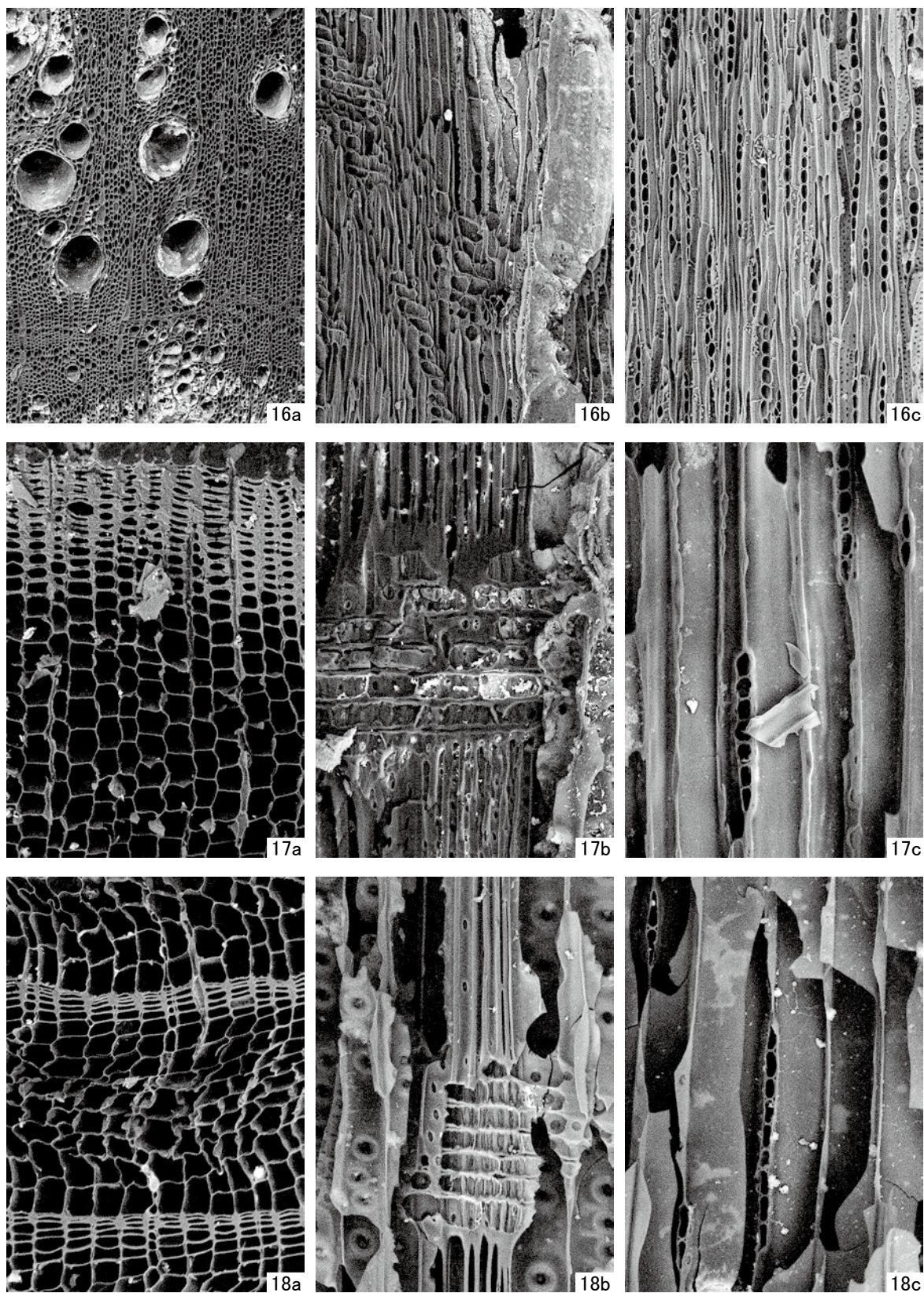
a:木口,b:柱目,c:板目

100 μ m:13-14a

100 μ m:15a,13-14b,c

100 μ m:15b,c

写真30 6区SI 1 出土炭化材顕微鏡写真(6)



16. スタジイ(試料⑩: 取上番号1334)
 17. スギ(試料⑱: 取上番号1540)
 18. スギ(試料⑳: 取上番号1539)
 a: 木口, b: 柱目, c: 板目

100 μ m: 16a
 100 μ m: 17-18a, 16b, c
 100 μ m: 17-18b, c

写真31 6区SI1 出土炭化材顕微鏡写真(7)

第3節 8区植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定と定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定及び古植生や古環境の推定などに応用されている (杉山,2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山,1984)。

2 試料

分析試料は、8区北壁から採取された試料① (第Ⅲ層:古代から中世包含層、遺構埋土)、試料② (第Ⅳ層:弥生から古墳時代包含層、遺構埋土)、試料③ (第Ⅴ層:弥生時代包含層、遺構埋土)、試料④ (第Ⅲ層:古代から中世包含層、遺構埋土)、及び8区南壁から採取された試料⑤ (第Ⅴ層:弥生時代包含層、遺構埋土) の計5点である。試料採取箇所を分析結果の土層断面図に示す (第373図)。

3 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原,1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃、6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W、42KHz、10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡、計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山,2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表67および第373図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真 (写真32) を示す。

表67 8区植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

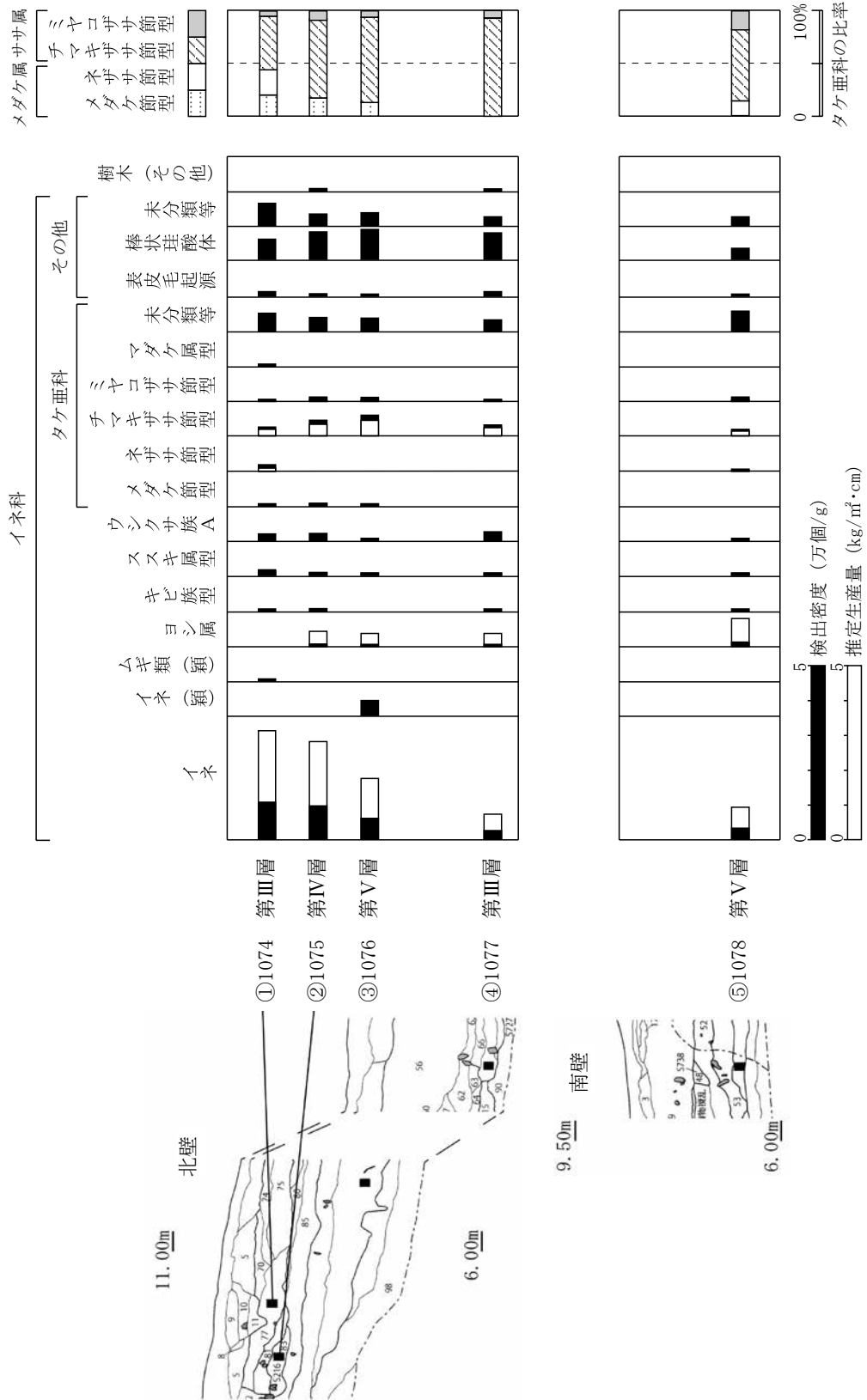
分類群	学名	地点・試料	北壁			南壁	
			1074	1075	1076	1077	1078
イネ科	Gramineae						
イネ	<i>Oryza sativa</i>		109	98	61	25	32
イネ籾殻(穎の表皮細胞)	<i>Oryza sativa</i> (husk Phytolith)				43		
ムギ類(穎の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum</i> (husk Phytolith)		6				
ヨシ属	<i>Phragmites</i>			7	6	6	13
キビ族型	Paniceae type		6	7		6	6
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		13	7	6	6	6
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		19	20	6	25	6
タケ亜科	Bambusoideae						
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		6	7	6		
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		19				6
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.		26	46	61	32	19
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>		6	13	12	6	13
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>		6				
未分類等	Others		51	39	37	32	57
その他のイネ科	Others						
表皮毛起源	Husk hair origin		13	7	6	13	6
棒状珪酸体	Rodshaped		58	79	86	76	32
未分類等	Others		64	33	37	25	25
樹木起源	Arboreal						
その他	Others			7		6	
植物珪酸体総数	Total		403	367	367	259	223

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	3.20	2.89	1.80	0.74	0.93
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		0.41	0.39	0.40	0.80
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.16	0.08	0.08	0.08	0.08
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.07	0.08	0.07		
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.09				0.03
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.19	0.34	0.46	0.24	0.14
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.02	0.04	0.04	0.02	0.04

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	20	17	13		
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	24				14
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	51	75	81	93	68
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	5	9	6	7	18
メダケ率	Medake ratio	44	17	13	0	14



第373図 8区植物珪酸体分析結果

[イネ科]

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節、リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節、チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

[樹木]

その他

5 考察

(1) イネ科栽培植物の検討

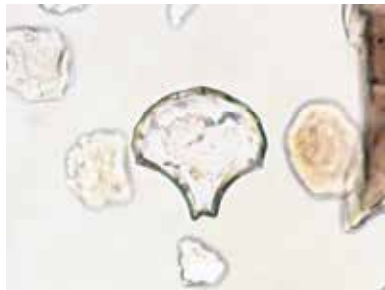
植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型及びトウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネとムギ類が検出された。

イネは、分析を行ったすべての試料から検出された。このうち、8区北壁の試料①、試料②、試料③では密度が6,100～10,900個/gと高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを上回っている。また、試料③ではイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体も4,300個/gと比較的多く検出された。8区北壁の試料④と8区南壁の試料⑤では、イネの密度が2,500個/gおよび3,200個/gと比較的低い値である。これらのことから、各層準の時期には周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形でイネの植物珪酸体が混入したと推定される。なお、いずれも遺構埋土であることから、ここで検出されたイネについては周辺で利用された稲藁に由来する可能性も考えられる。稲藁の利用としては、建物の屋根材や壁材、藁製品（俵、縄、ムシロ、草履など）および燃料や堆肥など多様な用途が想定される。ムギ類（穎の表皮細胞）は、8区北壁の試料①から検出された。密度は600個/gと低い値である。このことから、当時は周辺でムギ類が栽培されており、そこから何らかの形でムギ類（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体が混入したと考えられる。

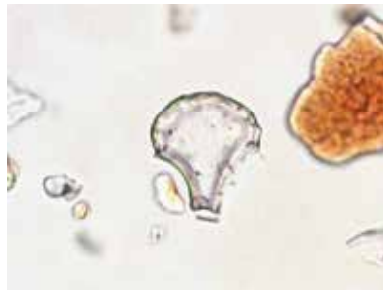
(2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、チマキザサ節型及びミヤコザサ節型などが検出され、部分的にメダケ節型、ネザサ節型、マダケ属型及び樹木（その他）なども認められたが、いずれも比較的少量である。

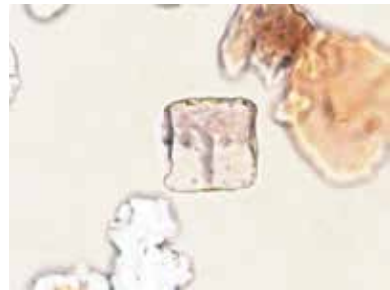
以上の結果から、各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような比較的湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはキビ族、ススキ属、ウシクサ族、メダケ属（メダケ節やネザサ節）及びササ属（おもにチマキザサ節）などが生育していたと推定される。



イネ
試料①



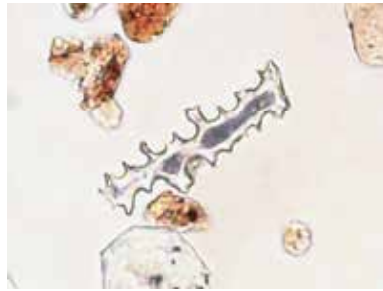
イネ
試料③



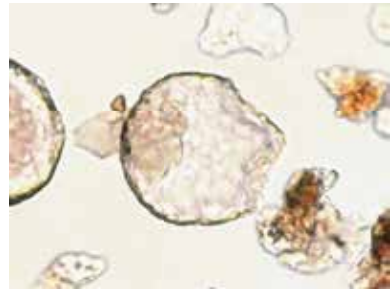
イネ (側面)
試料①



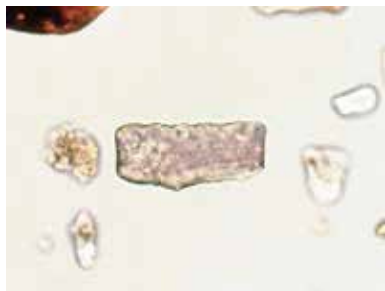
イネの籾殻 (穎の表皮細胞)
試料③



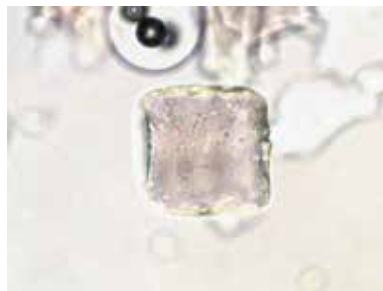
ムギ類 (穎の表皮細胞)
試料①



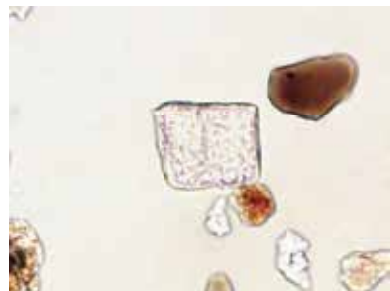
ヨシ属
試料⑤



キビ族型
試料②



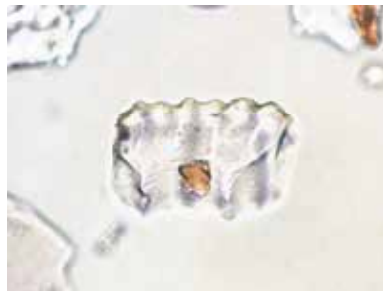
ススキ属型
試料②



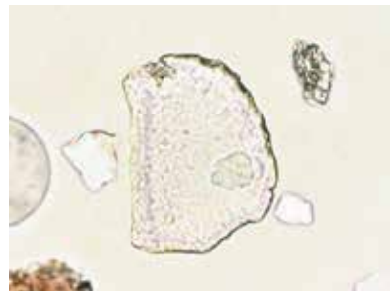
ウシクサ族A
試料②



メダケ節型
試料③



ネザサ節型
試料①



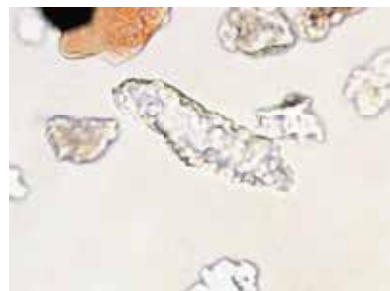
チマキザサ節型
試料③



メダケ属型
試料①



表皮毛起源
試料④



樹木 (その他)
試料④

50 μm

写真32 8区植物珪酸体(プラント・オパール)

6 まとめ

植物珪酸体分析の結果、8区北壁の試料①（第Ⅲ層）、試料②（第Ⅳ層）、試料③（第Ⅴ層）ではイネが多量に検出され、その他の試料でもイネが検出された。このことから、各層準の時期には周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形でイネの植物珪酸体が混入したと推定される。なお、いずれも遺構埋土であることから、ここで検出されたイネについては周辺で利用された稲藁に由来する可能性も考えられる。また、8区北壁の試料①ではムギ類（穎の表皮細胞）が検出され、周辺でムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

各層準の堆積当時は、おおむねヨシ属が生育するような比較的湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはキビ族、ススキ属、ウシクサ族、メダケ属（メダケ節やネザサ節）及びササ属（おもにチマキザサ節）などが生育していたと推定される。

【参考文献】

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－. 考古学と自然科学, 19, p.69-84.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）. 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

第4節 8区珪藻分析

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度及び流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

2 試料

分析試料は、8区北壁から採取された試料①（第Ⅲ層:古代～中世包含層、遺構埋土）、試料②（第Ⅳ層:弥生～古墳時代包含層、遺構埋土）、試料③（第Ⅴ層:弥生時代包含層、遺構埋土）、試料④（第Ⅲ層:古代～中世包含層、遺構埋土）、及び8区南壁から採取された試料⑤（第Ⅴ層:弥生時代包含層、遺構埋土）の計5点である。試料採取箇所を珪藻ダイアグラムの模式柱状図（第374図）に示す。

3 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）

- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、真塩性種（海水生種）1分類群、真-中塩性種（海-汽水生種）2分類群、中-貧塩性種（汽-淡水生種）1分類群、貧塩性種（淡水生種）99分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。分析結果を表68に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第374図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe(1974)の記載により、陸生珪藻は小杉(1986)により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉(1988)により、淡水生種は安藤(1990)による。また、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata, *Achnanthes minutissima*, *Achnanthes* sp.-1, *Amphora montana*, *Caloneis bacillum*, *Cocconeis placentula*, *Cymbella silesiaca*, *Fragilaria capucina*, *Frustulia vulgaris*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema* spp., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta*, *Navicula cryptotenella*, *Navicula elginensis*, *Navicula gallica*, *Navicula ignota*, *Navicula kotschyi*, *Navicula mutica*, *Navicula veneta*, *Neidium ampliatus*, *Nitzschia debilis*, *Nitzschia palea*, *Nitzschia* spp., *Pinnularia borealis*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia schoenfelderi*, *Pinnularia schroederii*, *Pinnularia subcapitata*, *Pinnularia viridis*, *Pinnularia* spp., *Surirella ovata*

(2) 珪藻群集の特徴

1) 調査区北壁 第Ⅲ層から第Ⅴ層（取上番号1074～1077）

下位より珪藻構成と珪藻組成の変化の特徴を記載する。（第374図）

第Ⅴ層（1076）：弥生時代の包含層では、陸生珪藻が優占し、69%を占め、次に流水不定性種が23%を占める。陸生珪藻では、*Amphora montana*の出現率が高く、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、*Navicula mutica*、*Pinnularia schoenfelderi*などが伴われる。流水不定性種では、*Navicula veneta*が比較的多く、*Nitzschia palea*、小型の*Nitzschia* spp.が低率に出現する。真・好流水性種では、中流から下流性河川指標種の*Achnanthes lanceolata*が低率に出現する。

第Ⅳ層（1075）：弥生時代から古墳時代の包含層では、陸生珪藻が88%を占めるようになり、*Amphoramontana*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*の出現率が高く、*Pinnularia schoenfelderi*、*Navicula contenta*などが伴われる。低率に沼沢湿地付着生種の*Navicula elginensis*も出現する。

第Ⅲ層（1074）：古代から中世の包含層では、陸生珪藻の占める割合が77%になり、第Ⅳ層（1075）

で出現率の高かった *Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*が激減し、*Navicula mutica*、*Pinnularia schoenfelderi*も減少する。一方で *Navicula contenta*が高率に出現する。他に沼沢湿地付着生種の *Navicula elginensis*もやや増加する。

2) 調査区北壁 第Ⅲ層 (取上番号1077)

第Ⅲ層 (1077)：古代から中世の包含層では、真・好流水性種が49%、流水不定性種が25%、真・好止水性種、陸生珪藻がそれぞれ13%を占める。真・好流水性種では、中流から下流性河川指標種の *Achnanthes lanceolata*が優占し、*Gomphonema parvulum*、沼沢湿地付着生種の *Cocconeis placentula*、*Navicula elginensis*が伴われる。流水不定性種の *Fragilaria capucina*、小型の *Gomphonema spp.*などが低率に出現する。

3) 調査区南壁 第Ⅴ層 (取上番号1078)：弥生時代の包含層

珪藻密度は低く、陸生珪藻が85%を占める。陸生珪藻では、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*の出現率が高く、*Pinnularia borealis*、*Amphora montana*、*Pinnularia schoenfelderi*が低率に出現する。

5 推定される堆積環境

1) 調査区北壁 第Ⅲ層から第Ⅴ層 (取上番号1074～1077)

第Ⅴ層 (1076)：弥生時代の包含層の時期には、陸生珪藻が優占し、湿った程度の環境が主であったと考えられる。流水不定性種や中流から下流性河川指標種が低率ながらも出現することから、部分的ないし短時期に流水の影響も受ける環境であったとみなされる。珪藻の生育から肌地の状態であったと推定される。

第Ⅳ層 (1075)：弥生時代から古墳時代の包含層の時期になると、概ね陸生珪藻で占められるようになり、優占種は、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種で、湿った程度の環境であったと推定される。珪藻の生育から肌地の状態であったと推定される。

第Ⅲ層 (1074)：古代から中世の包含層の時期には、変わらず陸生珪藻が優占し、湿った程度の環境が主であったとみなされるが、沼沢湿地付着生種が出現することや、比較的流水を好み好清水性の性格も有する *Navicula contenta*が高率に出現することから、部分的ないし短時期に流水域の影響を受ける湿地の環境が示唆される。

2) 調査区北壁 第Ⅲ層 (取上番号1077)

古代から中世の包含層の時期には、中流から下流性河川指標種の出現率が高く、沼沢湿地付着生種も伴われることから、河川からの流水の影響を受ける湿地から浅水域の堆積環境であったと推定される。

3) 調査区南壁 第Ⅴ層 (取上番号1078)：弥生時代の包含層

陸生珪藻が優占し、密度も低く、珪藻の生育しにくい乾燥した堆積環境であったと考えられる。

6 まとめ

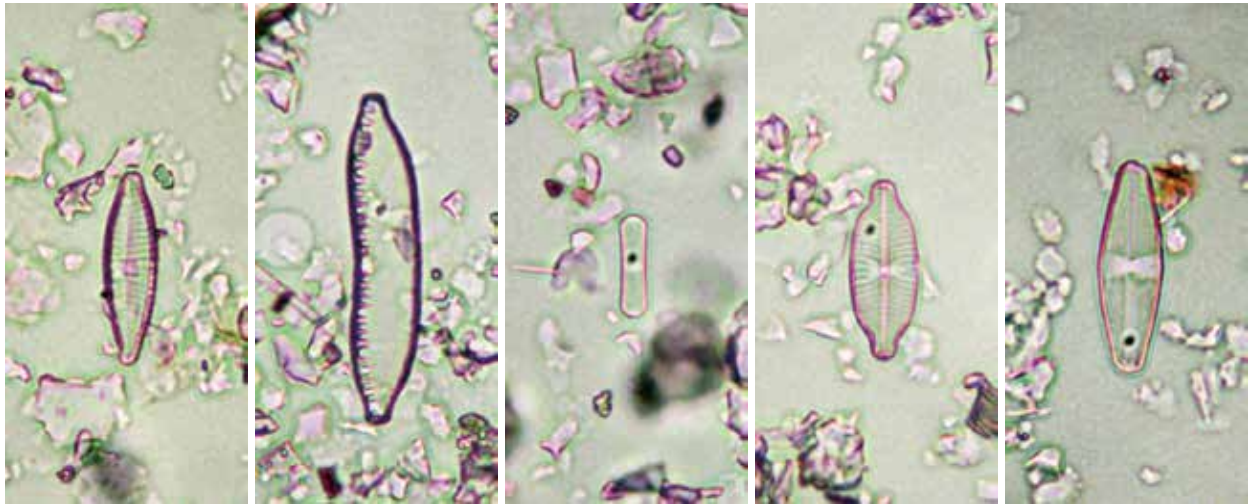
下坂本清合遺跡8区における珪藻分析を行った結果、北壁第Ⅴ層 (弥生時代の包含層、1076) では、概ね陸生珪藻が生育する湿った環境でやや流水域の影響を受け、第Ⅳ層 (弥生時代～古墳時代の包含層、1075) の時期になると、より乾燥し湿った程度の環境のみになった。第Ⅲ層 (1074) の時期にな

表68 8区珪藻産出表

分類群	北壁				南壁
	III層	IV層	V層	III層	V層
	1074	1075	1076	1077	1078
貧塩性種 (淡水生種)					
<i>Achnanthes crenulata</i>				1	
<i>Achnanthes hungarica</i>			1	3	
<i>Achnanthes lanceolata</i>	1	2	13	92	
<i>Achnanthes minutissima</i>			5	6	
<i>Achnanthes</i> sp.-1		3			7
<i>Amphora copulata</i>			1	5	
<i>Amphora montana</i>	3	70	125	6	9
<i>Aulacoseira ambigua</i>				1	
<i>Caloneis bacillum</i>	3		4		1
<i>Caloneis hyalina</i>	1				
<i>Caloneis silicula</i>				2	
<i>Cocconeis disculus</i>		1			1
<i>Cocconeis placentula</i>	1			28	2
<i>Cymbella cuspidata</i>				1	
<i>Cymbella gracilis</i>				1	
<i>Cymbella lanceolata</i>				1	
<i>Cymbella naviculiformis</i>				2	
<i>Cymbella silesiaca</i>				6	1
<i>Cymbella sinuata</i>		1		5	
<i>Cymbella tumida</i>				1	
<i>Cymbella turgidula</i>				2	
<i>Diatoma mesodon</i>				1	
<i>Diploneis elliptica</i>		1		1	
<i>Epithemia adnata</i>			1	1	
<i>Eunotia bilunaris</i>				1	
<i>Eunotia minor</i>				6	
<i>Eunotia praerupta</i>				1	
<i>Fragilaria brevistriata</i>				1	
<i>Fragilaria capucina</i>				7	
<i>Fragilaria construens</i>				1	
<i>Fragilaria construens</i> v. <i>venter</i>		1		2	
<i>Fragilaria exigua</i>				2	
<i>Fragilaria parasitica</i>				1	
<i>Fragilaria virescens</i>				1	
<i>Frustulia rhomboides</i> v. <i>saxonica</i>				1	
<i>Frustulia vulgaris</i>	1		5		1
<i>Gomphonema acuminatum</i>				4	
<i>Gomphonema clevei</i>		1		1	
<i>Gomphonema gracile</i>				1	
<i>Gomphonema minutum</i>				3	
<i>Gomphonema parvulum</i>	7	2	3	17	3
<i>Gomphonema truncatum</i>				1	
<i>Gomphonema</i> spp.			1	9	
<i>Gyrosigma</i> spp.	1			1	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	15	67	51	2	60
<i>Melosira varians</i>				1	
<i>Meridion circulare</i> v. <i>constrictum</i>				1	
<i>Navicula americana</i>				1	
<i>Navicula bacillum</i>				1	
<i>Navicula capitata</i>				1	
<i>Navicula confervacea</i>				2	
<i>Navicula contenta</i>	133		24	6	1
<i>Navicula cryptotenella</i>		1		6	1
<i>Navicula cuspidata</i>				1	
<i>Navicula elginensis</i>	21	8	2	12	3
<i>Navicula gallica</i>	7	2	3		
<i>Navicula goeppertiana</i>				1	
<i>Navicula ignota</i>	2		3	1	3
<i>Navicula kotschyi</i>	6		3	3	
<i>Navicula laevisima</i>				5	
<i>Navicula mutica</i>	49	74	25	10	54
<i>Navicula mutica</i> v. <i>ventricosa</i>		3	1		
<i>Navicula placenta</i> v. <i>obtusata</i>				1	
<i>Navicula protracta</i>				1	
<i>Navicula pupula</i>				2	
<i>Navicula radiosa</i>				1	
<i>Navicula veneta</i>	4	2	48	2	
<i>Navicula</i> spp.			3		1
<i>Neidium affine</i>	1			1	
<i>Neidium alpinum</i>				2	
<i>Neidium ampliatum</i>	6		1	1	
<i>Nitzschia amphibia</i>		2			
<i>Nitzschia debilis</i>	12		7	1	
<i>Nitzschia palea</i>	3	1	6	1	
<i>Nitzschia</i> spp.		2	10		
<i>Orithoseira roseana</i>		1		1	
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>				1	
<i>Pinnularia appendiculata</i>	6				
<i>Pinnularia borealis</i>	6		1	3	11
<i>Pinnularia divergens</i>				2	
<i>Pinnularia gibba</i>			1	2	
<i>Pinnularia hemiptera</i>				1	
<i>Pinnularia lagerstedtii</i>	2	1			
<i>Pinnularia micrastaeron</i>			1	6	
<i>Pinnularia obscura</i>	2	1	2		
<i>Pinnularia schoenfelderi</i>	11	29	15	1	5
<i>Pinnularia schroederii</i>	5	4	1		
<i>Pinnularia subcapitata</i>	7	3	1	1	2
<i>Pinnularia viridis</i>	1	1	1	6	1
<i>Pinnularia</i> spp.	5	3	1	3	1
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>				5	
<i>Rhopalodia gibba</i>				1	
<i>Rhopalodia gibberula</i>	3			3	
<i>Stauroneis acuta</i>				1	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>			1	3	
<i>Stauroneis smithii</i>	1			1	
<i>Surirella angusta</i>	1	2	2		
<i>Surirella ovata</i>		1	6		
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>				2	
中-貧塩性種 (汽水-淡水生種)					
<i>Nitzschia levidensis</i>				1	
真-中塩性種 (海-汽水生種)					
<i>Cocconeis scutellum</i>		1			2
<i>Diploneis interrupta</i>	1				
真塩性種 (海水生種)					
<i>Cocconeis pseudomarginata</i>			1		
合計	328	313	380	338	170
未同定	6	9	10	4	4
破片	209	221	130	157	74
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	6.4	2.6	2.0	1.3	3.5
×10 ⁵		×10 ⁵	×10 ⁶	×10 ⁶	×10 ⁴
完形殻保存率 (%)	61.5	59.3	75.0	68.5	70.2



1 *Achnanthes lanceolata* (北壁第Ⅲ層 1077) 2 *Amphora montana* (北壁第Ⅴ層 1076) 3 *Cocconeis placentula* (北壁第Ⅲ層 1077) 4 *Cymbella silesiaca* (北壁第Ⅲ層 1077) 5 *Fragilaria capucina* (北壁第Ⅲ層 1077)



6 *Gomphonema parvulum* (北壁第Ⅲ層 1077) 7 *Hantzschia amphioxys* (北壁第Ⅴ層 1076) 8 *Navicula contenta* (北壁第Ⅴ層 1076) 9 *Navicula elginensis* (北壁第Ⅲ層 1077) 10 *Navicula mutica* (北壁第Ⅳ層 1075)



11 *Navicula veneta* (北壁第Ⅴ層 1076) 12 *Nitzschia debilis* (北壁第Ⅴ層 1076) 13 *Pinnularia schoenfelderi* (北壁第Ⅴ層 1076) 14 *Pinnularia viridis* (北壁第Ⅲ層 1077) 15 *Surirella ovata* (北壁第Ⅴ層 1076)

— 10 μm

写真33 8区珪藻

ると、優占する陸生珪藻に変化があり流水の影響が示唆される。北壁第Ⅲ層（1077）では、河川の影響を受ける浅水域の環境が示唆された。また、南壁第Ⅴ層（弥生時代包含層、1078）からは、珪藻の生育しにくいやや乾燥した堆積環境が示唆された。

【参考文献】

- Hustedt,F.(1937-1938)Systematische und ologische Untersuchungen uber die DiatomeenFloravon Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol,Suppl.15,p.131-506.
- Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center. K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae・1-4.
- Asai,K.&Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.
- 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6,p.23-45.
- 小杉正人(1986)陸生珪藻による古環境解析とその意義-わが国への導入とその展望-. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.
- 小杉正人(1988)珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.
- 渡辺仁治(2005)淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAI_{po}, pH耐性能. 内田老鶴圃, 666p.

第5節 7・8区出土遺物放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（¹⁴C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌及び土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村,2003）。

2 試料と方法

試料は、7区の袋状土坑、段状遺構内ピット、竪穴状遺構、土坑より出土した炭化物（炭化材）、8区の掘立柱建物、ピットより出土した柱根、炭化材、礎板及び溝より出土した杭の計23点である。表69に、測定試料の詳細と前処理及び調整法および測定法を示す。

3 結果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（¹⁴C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。表70にこれらの結果を示し、第375～377図に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

1) δ(デルタ)¹³C測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比（¹³C/¹²C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ¹³C値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

2) 放射性炭素（¹⁴C）年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5730

年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差(±)は1 σ (シグマ)(68.2%確率)である。14C年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中14C濃度の変動および14Cの半減期の違いを較正することで、放射性炭素(14C)年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な14C測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と14C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 13、較正プログラムはOxCal 4.2である。

暦年代(較正年代)は、14C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1 σ (シグマ)(68.2%確率)と2 σ (95.4%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、7区の袋状土坑(S002)より出土した炭化物は、1860±20年BP(2 σ の暦年代でAD 84～220年)、段状遺構(S161)内ピット(S166)より出土した炭化材は、355±20年BP(同AD 1460～1527年、AD 1555～1634年)、竪穴状遺構(S149)より出土した炭化材は、370±20年BP(同AD 1452～1523年、AD 1574～1627年)、段状遺構(S189)より出土した炭化物は、830±20年BP(同AD 1170～1258年)、土坑(S156)より出土した炭化材は、155±15年BP(同AD 1668～1694年、AD 1727～1782年、AD 1797～1813年、AD 1837～1842年、AD 1853～1858年、AD 1862～1867年、AD 1918～1954年)、8区のピット(S364)より出土した柱根(W50)は、330±20年BP(同AD 1489～1604年、AD 1610～1640年)、ピット(S375)より出土した柱根(W53)は、325±15年BP(同AD 1491～1603年、AD 1614～1640年)、ピット(S402)より出土した柱根(W51)は、220±20年BP(同AD 1646～1677年、AD 1766～1772年、AD 1777～1799年、AD 1940～1952年、AD 1952～1954年)、ピット(S404)より出土した柱根は、385±20年BP(同AD 1446～1515年、AD 1598～1618年)、ピット(S447)より出土した柱根は、340±15年BP(同AD 1474～1530年、AD 1541～1635年)、ピット(S694)より出土した柱根(W98)は、1910±20年BP(同AD 54～130年)、ピット(S707)より出土した柱根(W92)は、1940±20年BP(同AD 17～90年、AD 98～124年)、ピット(S563)より出土した柱根は、280±15年BP(同AD 1522～1574年、AD 1629～1660年)、S750掘立柱建物の柱穴(S656)より出土した柱根(W91)は、1915±20年BP(同AD 52～130年)、ピット(S569)より出土した柱根(W52)は、205±20年BP(同AD 1653～1681年、AD 1738～1753年、AD 1762～1802年、AD 1937～1954年)、ピット(S571)より出土した柱根は、145±20年BP(同AD 1669～1699年、AD 1703～1706年、AD 1720～1780年、AD 1798～1818年、AD 1833～1880年、AD 1915～1944年、AD 1951～1954年)、ピット(S633)より出土した柱根(W90)は、115±20年BP(同AD 1683～1734年、AD 1806～1894年、AD 1905～1929年、AD 1954～1954年)、ピット(S579)より出土した柱根(W54)は、170±20年BP(同AD 1666～1691年、AD 1729～1783年、AD 1796～1810年、AD 1921～1922年、AD 1925～1954年)、

ピット (S228) より出土した炭化材は、 400 ± 15 年BP (同AD 1441 ~ 1494年、AD 1602 ~ 1612年)、ピット (S519) より出土した木材は、 285 ± 20 年BP (同AD 1521 ~ 1576年、AD 1585 ~ 1590年、AD 1626 ~ 1655年)、ピット (S528) より出土した礎板は、 1945 ± 20 年BP (同AD 5 ~ 89年、AD 101 ~ 123年)、ピット (S577) より出土した板材 (W48) は、 785 ± 20 年BP (同AD 1220 ~ 1271年)、溝 (S533) より出土した杭No.5 (W60) は、 380 ± 20 年BP (同AD 1447 ~ 1519年、AD 1594 ~ 1619年) の年代値であった。

【参考文献】

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- Hua, Q., Barbetti, M., Rakowski, A.Z. (2013) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. *Radiocarbon*, 55(4), 1-14.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haffidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

表69 7・8区測定試料及び処理

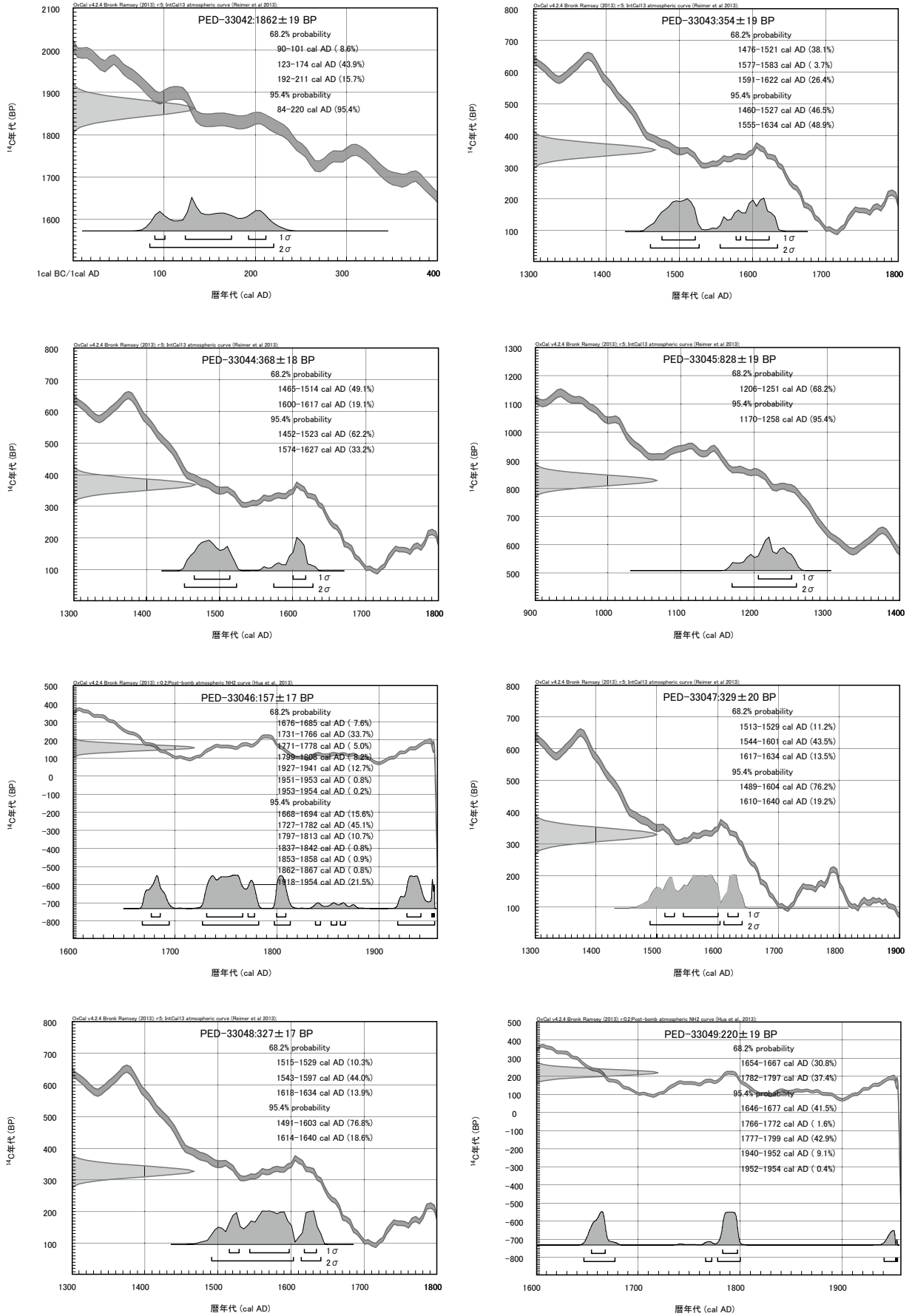
試料番号	取上番号	採取場所・試料種別	種類	前処理・調整・測定法	測定法	掲載番号
1		7区 袋状土坑 (S002)	種類：炭化物 状態：乾燥、付着物無 備考：黒褐色、付着物無	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	
2		7区 段状遺構 (S161) 内ピット (S166)	種類：炭化材 状態：乾燥、付着物無 備考：心材、2.5×2cm、黒色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	
3		7区 堅穴状遺構 (S149)	種類：炭化材 状態：乾燥、付着物無 備考：心材、1.5×1.5cm、黒色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	
4		7区 段状遺構 (S189)	種類：炭化物 状態：乾燥、付着物無 備考：黒褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	
5		7区 土坑 (S156)	種類：炭化材 状態：乾燥、付着物無 備考：心材、4×1.5cm、黒色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	
6	0960	8区 ピット (S364) 柱根	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：辺材(最外)、3×2cm、茶褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	W50
7	1020	8区 ピット (S375) 柱根	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：心材、0.5×2cm、黒褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	W53
8	1025	8区 ピット (S402) 柱根	種類：生材 状態：湿潤 備考：辺材、3×0.5cm、茶褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	W51
9		8区 ピット (S404) 柱根	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：辺材、1×1cm、黒褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	
10		8区 ピット (S447) 柱根	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：心材、2×1cm、茶褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	
11	1073	8区 ピット (S694) 柱根	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：辺材、2.5×1.5cm、茶褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	W98
12	1066	8区 ピット (S707) 柱根	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：辺材部、3×1cm、茶褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	W92
13		8区 ピット (S563) 柱根	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：心材部、1.5×1cm、黒褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	
14	1059	8区 掘立柱建物 (S750) の ピット (S656) 柱根	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：心材部、1.5×1cm、茶褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	W91
15	1054	8区 ピット (S569) 柱根	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：辺材、6×1.5cm、赤褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	W52
16		8区 ピット (S571) 柱根	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：心材部、2.5×1cm、黒褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	
17	1060	8区 ピット (S633) 柱根	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：心材、3.5×1cm、茶褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	W90
18	1032	8区 ピット (S579) 柱根	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：心材、3.5×1cm、茶褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	W54
19		8区 ピット (S228)	種類：炭化材 状態：湿潤、付着物無 備考：心材、2×0.5cm、黒色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	
20		8区 ピット (S519)	種類：生材 状態：乾燥、付着物無 備考：心材、3×2cm、茶色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	
21		8区 ピット (S528) 礎板	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：心材、4×1.5cm、茶褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	
22	0929	8区 ピット (S577) 礎板	種類：生材 状態：湿潤、付着物無 備考：心材、2.5×2cm、茶褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	W48
23	0831	8区 溝 (S533) 杭No.5	種類：生材 状態：乾燥、付着物無 備考：辺材、3.5×2cm、黒褐色	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS	W60

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

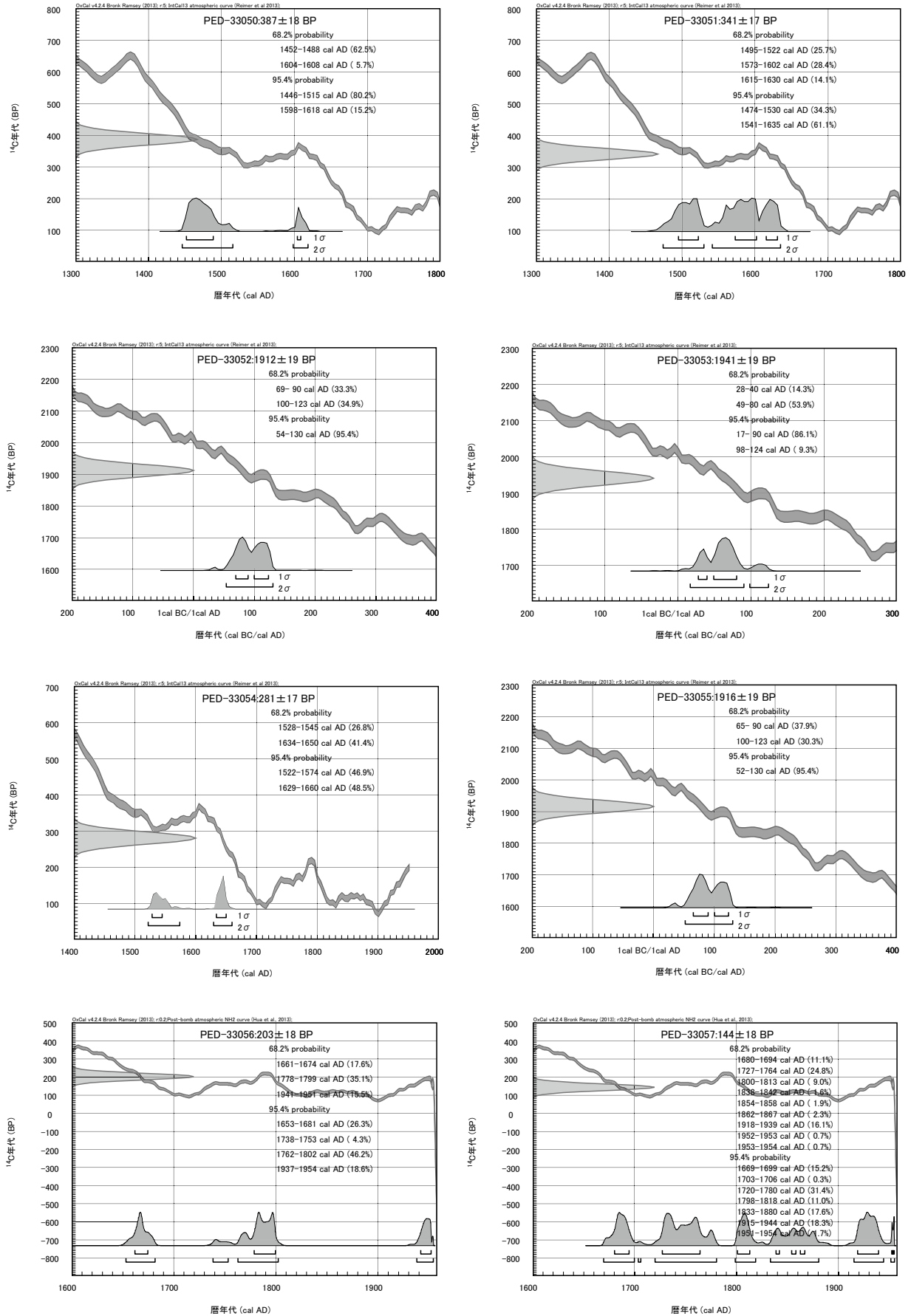
表70 7・8区測定結果

試料番号	測定No. (dED-)	取上番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年Ba)	^{14}C 年代 (年Ba)	暦年代 (西暦)		掲載番号							
						1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)								
1	33042		-26.62±0.21	1862±19	1860±20	cal AD 90-101 (8.6%)	cal AD 84-220 (95.4%)								
						cal AD 123-174 (43.9%)									
						cal AD 192-211 (15.7%)									
2	33043		-24.26±0.17	354±19	355±20	cal AD 1476-1521 (38.1%)	cal AD 1460-1527 (46.5%)								
						cal AD 1577-1583 (3.7%)	cal AD 1555-1634 (48.9%)								
						cal AD 1591-1622 (26.4%)									
3	33044		-30.57±0.16	368±18	370±20	cal AD 1465-1514 (49.1%)	cal AD 1452-1523 (62.2%)								
						cal AD 1600-1617 (19.1%)	cal AD 1574-1627 (33.2%)								
4	33045		-25.74±0.22	828±19	830±20	cal AD 1206-1251 (68.2%)	cal AD 1170-1258 (95.4%)								
5	33046		-25.84±0.17	157±17	155±15	Post-bomb NH2 2013 :	Post-bomb NH2 2013 :								
						cal AD 1676-1685 (7.6%)	cal AD 1668-1694 (15.6%)								
						cal AD 1731-1766 (33.7%)	cal AD 1727-1782 (45.1%)								
						cal AD 1771-1778 (5.0%)	cal AD 1797-1813 (10.7%)								
						cal AD 1799-1808 (8.2%)	cal AD 1837-1842 (0.8%)								
						cal AD 1927-1941 (12.7%)	cal AD 1853-1858 (0.9%)								
						cal AD 1951-1953 (0.8%)	cal AD 1862-1867 (0.8%)								
						cal AD 1953-1954 (0.2%)	cal AD 1918-1954 (21.5%)								
						6	33047		0960	-30.37±0.30	329±20	330±20	cal AD 1543-1529 (11.2%)	cal AD 1489-1604 (76.2%)	W50
													cal AD 1544-1601 (43.5%)	cal AD 1610-1640 (19.2%)	
cal AD 1617-1634 (13.5%)															
7	33048	1020	-26.23±0.17	327±17	325±17	cal AD 1515-1529 (10.3%)	cal AD 1491-1603 (76.8%)	W53							
						cal AD 1543-1597 (44.0%)	cal AD 1614-1640 (18.6%)								
						cal AD 1618-1634 (13.9%)									
8	33049	1025	-30.47±0.18	220±19	220±20	Post-bomb NH2 2013 :	Post-bomb NH2 2013 :	W51							
						cal AD 1654-1667 (30.8%)	cal AD 1646-1677 (41.5%)								
						cal AD 1728-1797 (37.4%)	cal AD 1766-1772 (1.6%)								
							cal AD 1777-1799 (42.9%)								
		cal AD 1940-1952 (9.1%)	cal AD 1952-1954 (0.4%)												
9	33050		-26.80±0.23	387±18	385±20	cal AD 1452-1488 (62.5%)	cal AD 1446-1515 (80.2%)								
						cal AD 1604-1608 (5.7%)	cal AD 1598-1618 (15.2%)								
10	33051		-25.91±0.17	341±17	340±15	cal AD 1495-1522 (25.7%)	cal AD 1474-1530 (34.3%)								
						cal AD 1573-1602 (28.4%)	cal AD 1541-1635 (61.1%)								
						cal AD 1615-1630 (14.1%)									
11	33052	1073	-27.34±0.16	1912±19	1910±20	cal AD 69- 90 (33.3%)	cal AD 54-130 (95.4%)	W98							
						cal AD 100-123 (34.9%)									
12	33053	1066	-27.28±0.20	1941±19	1940±20	cal AD 28-40 (14.3%)	cal AD 17- 90 (86.1%)	W92							
						cal AD 49-80 (53.9%)	cal AD 98-124 (9.3%)								
13	33054		-26.44±0.17	281±17	280±15	cal AD 1528-1545 (26.8%)	cal AD 1522-1574 (46.9%)								
						cal AD 1634-1650 (41.4%)	cal AD 1629-1660 (48.5%)								
14	33055	1059	-27.17±0.16	1916±19	1915±20	cal AD 65- 90 (37.9%)	cal AD 52-130 (95.4%)	W91							
						cal AD 100-123 (30.3%)									
15	33056	1054	-29.00±0.21	203±18	205±20	Post-bomb NH2 2013 :	Post-bomb NH2 2013 :	W52							
						cal AD 1661-1674 (17.6%)	cal AD 1653-1681 (26.3%)								
						cal AD 1778-1799 (35.1%)	cal AD 1738-1753 (4.3%)								
						cal AD 1941-1951 (15.5%)	cal AD 1762-1802 (46.2%)								
		cal AD 1937-1954 (18.6%)													
16	33057		-28.60±0.18	144±18	145±20	Post-bomb NH2 2013 :	Post-bomb NH2 2013 :								
						cal AD 1680-1694 (11.1%)	cal AD 1669-1699 (15.2%)								
						cal AD 1727-1764 (24.8%)	cal AD 1703-1706 (0.3%)								
						cal AD 1800-1813 (9.0%)	cal AD 1720-1780 (31.4%)								
						cal AD 1838-1842 (1.6%)	cal AD 1798-1818 (11.0%)								
						cal AD 1854-1858 (1.9%)	cal AD 1833-1880 (17.6%)								
						cal AD 1862-1867 (2.3%)	cal AD 1915-1944 (18.3%)								
						cal AD 1918-1939 (16.1%)	cal AD 1951-1954 (1.7%)								
						cal AD 1952-1953 (0.7%)									
						cal AD 1953-1954 (0.7%)									
17	33058	1060	-28.39±0.17	115±18	115±20	Post-bomb NH2 2013 :	Post-bomb NH2 2013 :	W90							
						cal AD 1692-1707 (10.6%)	cal AD 1683-1734 (27.4%)								
						cal AD 1719-1728 (6.6%)	cal AD 1806-1894 (55.6%)								
						cal AD 1811-1826 (9.6%)	cal AD 1905-1929 (12.1%)								
						cal AD 1832-1886 (37.4%)	cal AD 1954-1954 (0.3%)								
						cal AD 1914-1920 (4.0%)									
18	33059	1032	-28.52±0.17	168±18	170±20	Post-bomb NH2 2013 :	Post-bomb NH2 2013 :	W54							
						cal AD 1670-1682 (12.1%)	cal AD 1666-1691 (16.8%)								
						cal AD 1736-1779 (42.7%)	cal AD 1729-1783 (48.3%)								
						cal AD 1799-1805 (5.9%)	cal AD 1796-1810 (9.9%)								
						cal AD 1935-1943 (6.8%)	cal AD 1921-1922 (0.1%)								
						cal AD 1951-1952 (0.7%)	cal AD 1925-1954 (20.4%)								
19	33060		-23.83±0.17	402±17	400±15	cal AD 1447-1474 (68.2%)	cal AD 1441-1494 (90.6%)								
							cal AD 1602-1612 (4.8%)								
20	33061		-25.79±0.16	285±18	285±20	cal AD 1528-1551 (35.7%)	cal AD 1521-1576 (54.3%)								
						cal AD 1634-1649 (32.5%)	cal AD 1585-1590 (1.0%)								
							cal AD 1626-1655 (40.1%)								
21	33062		-26.10±0.22	1944±20	1945±20	cal AD 27-41 (18.0%)	cal AD 5- 89 (88.2%)								
						cal AD 48-79 (50.2%)	cal AD 101-123 (7.2%)								
22	33063	0929	-25.47±0.16	785±18	785±20	cal AD 1225-1234 (17.8%)	cal AD 1220-1271 (95.4%)	W48							
						cal AD 1242-1265 (50.4%)									
23	33064	0831	-29.36±0.16	382±18	380±20	cal AD 1453-1490 (57.8%)	cal AD 1447-1519 (76.0%)	W60							
						cal AD 1603-1611 (10.4%)	cal AD 1594-1619 (19.4%)								

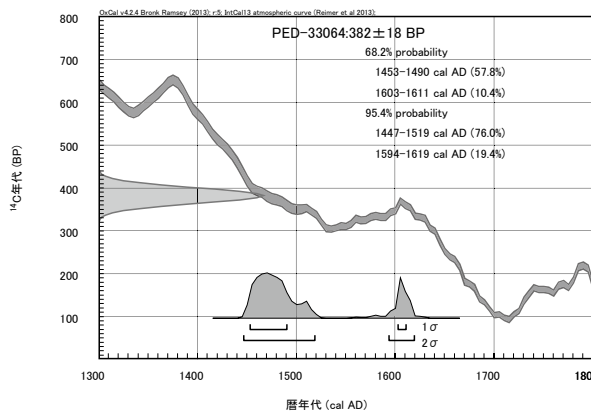
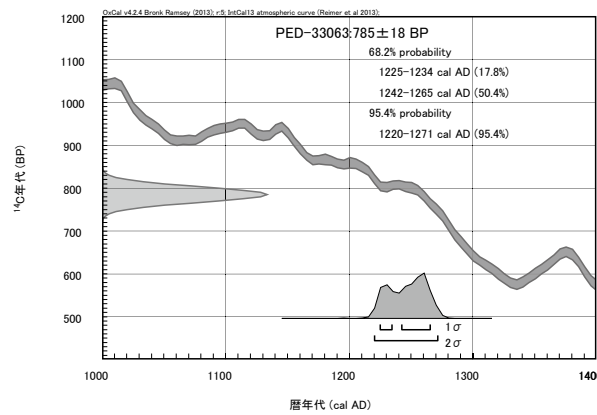
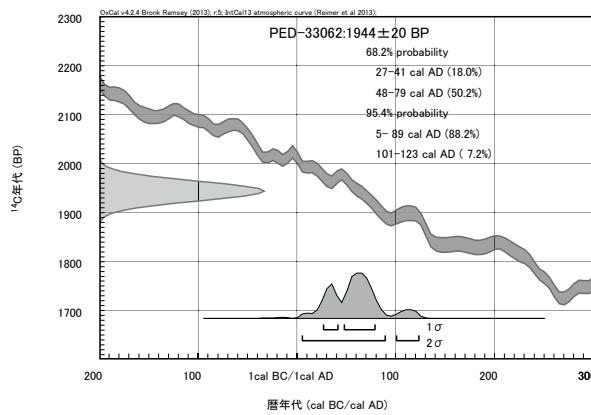
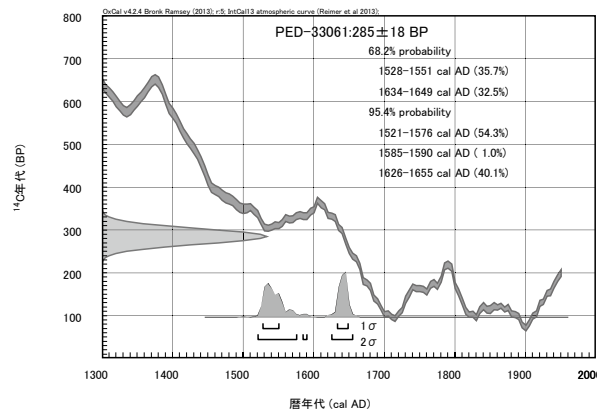
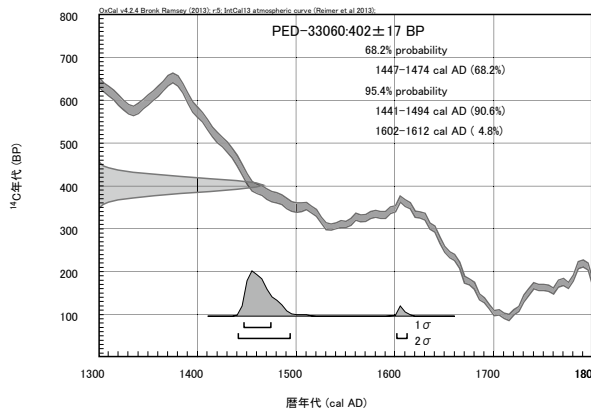
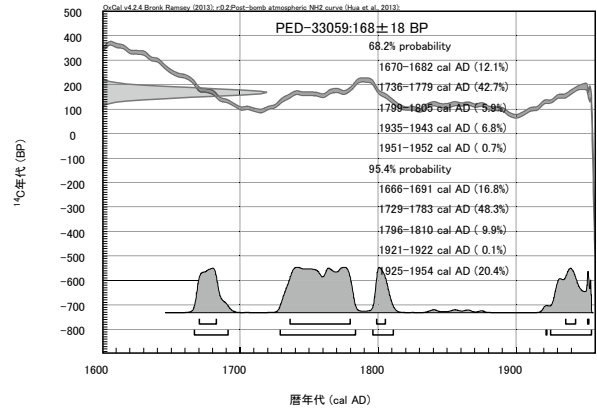
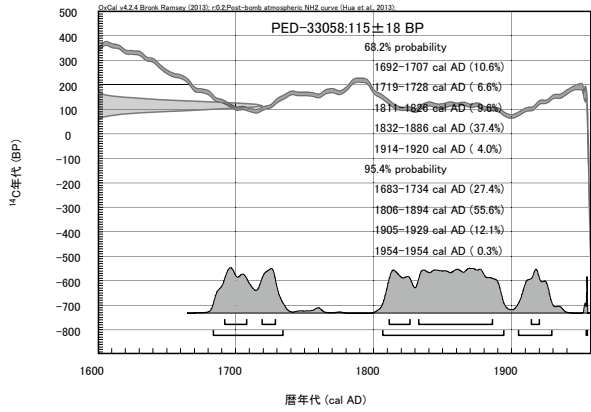
BP : Before Physics (Present) , AD : 紀元



第375図 7・8区出土遺物暦年較正結果(1)



第376图 7·8区出土遺物曆年較正結果(2)



第377図 7・8区出土遺物暦年較正結果(3)

第6節 8区出土木材樹種同定

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

本報告では、下坂本清合遺跡より出土した木製品について、木材組織の特徴から樹種同定を行う。

2 試料

試料は、下坂本清合遺跡（弥生時代から中世）の掘立柱建物、ピット出土柱根13点、ピット出土礎板2点、溝出土杭6点の21点の木製品である。試料の詳細は表71に示す。

3 方法

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

4 結果

表72に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

1) マキ属 *Podocarpus* マキ科 写真No.34

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、散在する樹脂細胞が多く存在する。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。

以上の特徴からマキ属に同定される。マキ属にはイヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州及び沖縄に分布し、暖地に分布する常緑高木で、通常高さ20m、径0.5～0.8mである。材は耐朽性や耐水性が高く、建築、器具、桶、箱及び水槽などに用いられる。

2) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 写真No.34

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急である。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴からマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、いずれも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材はいずれも水湿によく耐え、広く用いられる。

3) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 写真No.34

表71 8区出土木材試料一覧

取上番号	調査年度	調査区	試料の種類	掲載番号
0960	H28	8区	ピット(S364)出土柱根	W50
1020	H28	8区	ピット(S375)出土柱根	W53
1025	H28	8区	ピット(S402)出土柱根	W51
1015	H28	8区	ピット(S404)出土柱根	
0892	H28	8区	ピット(S447)出土柱根	
1073	H28	8区	ピット(S694)出土柱根	W98
1066	H28	8区	ピット(S707)出土柱根	W92
0986	H28	8区	ピット(S563)出土柱根	
1059	H28	8区	掘立柱建物(S750)の ピット(S656)出土柱根	W91
1054	H28	8区	ピット(S569)出土柱根	W52
1055	H28	8区	ピット(S571)出土柱根	
1060	H28	8区	ピット(S633)出土柱根	W90
1032	H28	8区	ピット(S579)出土柱根	W54
0910	H28	8区	ピット(S528)出土礎板	
0929	H28	8区	ピット(S577)出土礎板	W48
0839	H28	8区	溝(S533)出土杭No.2	W58
0831	H28	8区	溝(S533)出土杭No.5	W60
0853	H28	8区	溝(S533)出土杭No.13	W64
0811	H28	8区	溝(S533)出土杭No.14	W67
0828	H28	8区	溝(S533)出土杭No.15	W68
0840	H28	8区	溝(S533)出土杭No.20	W72

表72 8区出土木材樹種同定結果

取上番号	調査年度	調査区	試料の種類	結果(学名/和名)	掲載番号
0960	H28	8区	ピット(S364)出土柱根	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> マツ属複維管束亜属	W50
1020	H28	8区	ピット(S375)出土柱根	<i>Camellia japonica</i> Linn. ヤブツバキ	W53
1025	H28	8区	ピット(S402)出土柱根	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	W51
1015	H28	8区	ピット(S404)出土柱根	bark 樹皮	
0892	H28	8区	ピット(S447)出土柱根	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima スダジイ	
1073	H28	8区	ピット(S694)出土柱根	<i>Acer</i> カエデ属	W98
1066	H28	8区	ピット(S707)出土柱根	<i>Podocarpus</i> マキ属	W92
0986	H28	8区	ピット(S563)出土柱根	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	
1059	H28	8区	掘立柱建物(S750)の ピット(S656)出土柱根	<i>Podocarpus</i> マキ属	W91
1054	H28	8区	ピット(S569)出土柱根	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	W52
1055	H28	8区	ピット(S571)出土柱根	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	
1060	H28	8区	ピット(S633)出土柱根	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	W90
1032	H28	8区	ピット(S579)出土柱根	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	W54
0910	H28	8区	ピット(S528)出土礎板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	
0929	H28	8区	ピット(S577)出土礎板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ	W48
0839	H28	8区	溝(S533)出土杭No.2	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	W58
0831	H28	8区	溝(S533)出土杭No.5	<i>Prunus</i> サクラ属	W60
0853	H28	8区	溝(S533)出土杭No.13	<i>Zelkova serrata</i> Makino ケヤキ	W64
0811	H28	8区	溝(S533)出土杭No.14	<i>Prunus</i> サクラ属	W67
0828	H28	8区	溝(S533)出土杭No.15	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	W68
0840	H28	8区	溝(S533)出土杭No.20	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. クリ	W72

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高

木で高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

4) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真No.35

年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少し、晩材部では小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国及び九州に分布する落葉高木で、通常高さ20m、径0.4mぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性や保存性が極めて高い材で、現在では建築、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭及びほだ木など広く用いられる。

5) スタジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科 写真No.35

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からスタジイに同定される。スタジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性・保存性がやや低いが、建築、器具などに用いられる。

6) ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 写真No.36

年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外的小道管は多数複合して円形および接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の方形細胞の中には大きく膨らんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ20～25m、径0.6～0.7mぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船及び土木などに用いられる。

7) サクラ属 *Prunus* バラ科 写真No.36

丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。早材部から晩材部にかけて道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性放射組織型である。

以上の特徴からサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ及びモモなどがあり、北海道、本州、四国及び九州に分布する落葉の高木または低木である。材は概して堅硬で耐朽性や保存性が高く、現在では家具、建築及び楽器などに用いられる。

8) カエデ属 *Acer* カエデ科 写真No.37

小型で丸い道管が単独ないし2～3個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細な螺旋肥厚が存在するがやや不鮮明になっている。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、1～6細胞幅である。

以上の特徴からカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ及びチドリノキなどがある。北海道、本州、四国及び九州に分布する落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性や保存性が中庸であるが、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻及び薪炭など広く用いられる。

9) ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科 写真No37

小型でやや角張った道管が単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径は緩やかに減少する。軸方向柔細胞は晩材部において短接線状となる。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の特徴からヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国及び九州に分布する常緑の高木で、通常高さ5～10m、径0.2～0.3mである。材は強靱で耐朽性が高く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

10) 樹皮 bark 写真No37

師部柔細胞、師部放射柔細胞が見られる。以上の特徴から樹皮に同定される。

5 所見

同定の結果、下坂本清合遺跡（弥生時代から中世）出土の木製品はクリ9点、スギ2点、マキ属2点、サクラ属2点、マツ属複維管束亜属1点、スダジイ1点、ケヤキ1点、カエデ属1点、ヤブツバキ1点及び樹皮1点であった。器種別では、ピット出土柱痕13点はクリが6点で最も多く、次いでマキ属2点、マツ属複維管束亜属1点、スダジイ1点、カエデ属1点、ヤブツバキ1点及び樹皮1点であった。また、ピット出土礎板2点はいずれもスギで、溝出土杭6点はクリ3点、サクラ属2点及びケヤキ1点であった。

柱根ないし礎板にはクリが使われることが多いが、スギ、マキ属、マツ属複維管束亜属、スダジイ、カエデ属及びヤブツバキと多様な樹種が使われる。クリ、スダジイ、ケヤキ、サクラ属、カエデ属及びヤブツバキは概して重硬で弾性に富む材である。特にクリ、ケヤキ、サクラ属及びヤブツバキは耐朽性や保存性が高く水湿にもよく耐える材であり、柱などの建築材や杭などの土木材に適している。今回最も多く同定されたクリは山陰地方において建築材や土木材などとして古くから利用され、鳥取県では福岡遺跡（平安時代）や桂見遺跡（古墳時代）などからクリの柱材や杭材が出土している。マキ属、マツ属複維管束亜属は針葉樹の中ではやや重硬な材で、耐朽性や保存性が高く水湿に強い材である。また、スギは木理直通で大きな材がとれる良材で、割裂性が高く板材への加工が容易な材である。杭には多様な樹種が利用されるが、ここではクリ、サクラ属及びケヤキが用いられ、本遺跡周囲に生育していたと考えられる。

以上から、下坂本清合遺跡（弥生時代から中世）のピット出土柱痕や溝出土杭には様々な樹種が使われているが、クリをはじめとした重硬かつ耐朽性や保存性の高い材が多く利用されている。また、ピット出土礎板には割裂性が高く加工工作が容易なスギが使われている。いずれの木材も当時の遺跡の周辺ないし周辺地域に生育し、比較的容易にもたすことができたと考えられる。

【参考文献】

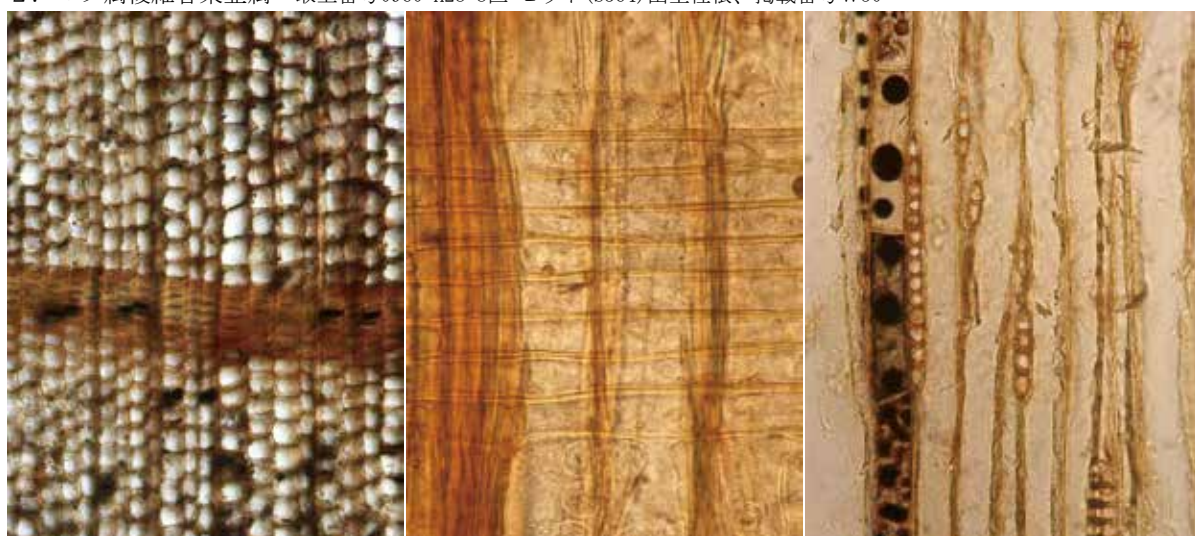
- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学。出土木製品用材データベース。海青社，449p。
 古環境研究所（1992）木製品。鳥取県西伯郡淀江町 福岡遺跡 一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ。鳥取県教育文化財団調査報告書27，鳥取県教育文化財団，p.143-145。
 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.20-48。
 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100。
 嶋倉巳三郎（1978）木製品の樹種。桂見遺跡発掘調査報告。鳥取市文化財報告書Ⅴ，鳥取市教育委員会，p.60-61。
 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p。
 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別第1号。植生史研究会，242p。



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 1. マキ属 取上番号1059 H28 8区 掘立柱建物(S750)出土柱根、掲載番号W91



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 2. マツ属複維管束亜属 取上番号0960 H28 8区 ビット(S364)出土柱根、掲載番号W50



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 3. スギ 取上番号0910 H28 8区 ビット(S528)出土礎板

写真34 8区出土木材顕微鏡写真(1)



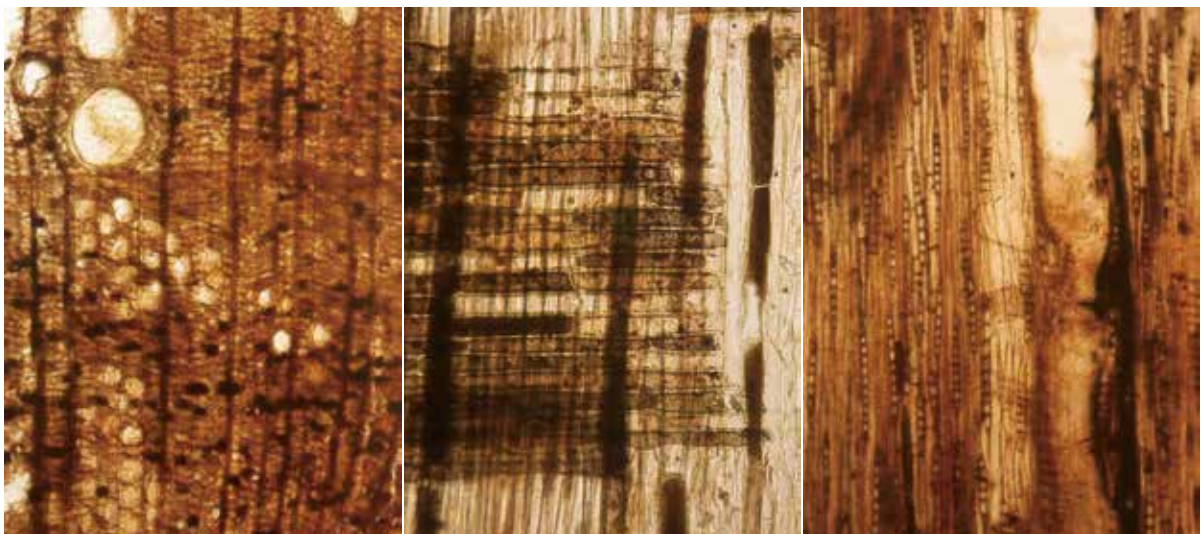
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

4. クリ 取上番号1025 H28 8区 ピット(S402)出土柱根、掲載番号W51



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

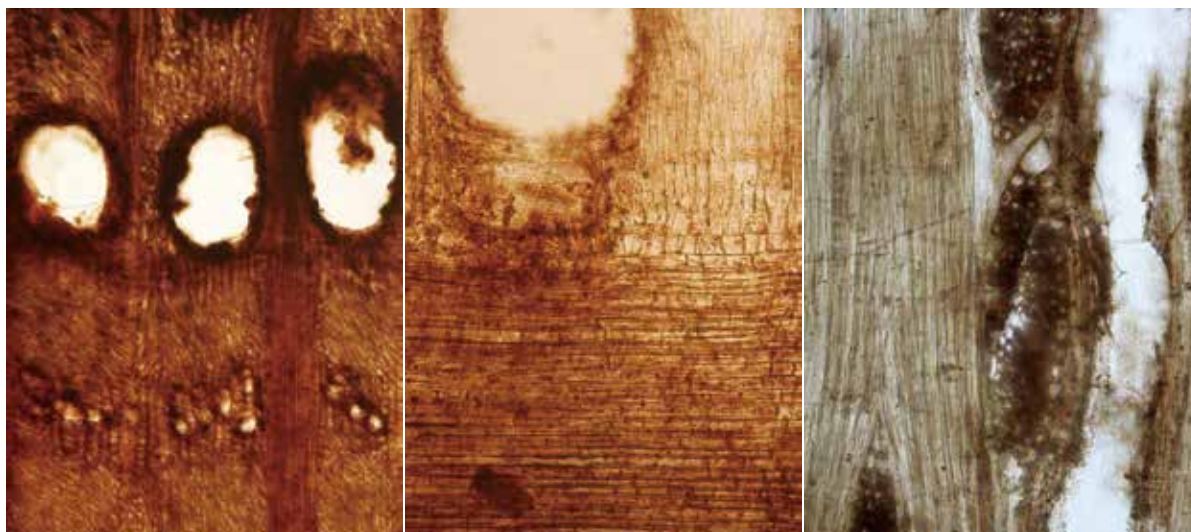
5. クリ 取上番号1054 H28 8区 ピット(S569)出土柱根、掲載番号W52



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

6. スダジイ 取上番号0892 H28 8区 ピット(S447)出土柱根

写真35 8区出土木材顕微鏡写真(2)



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 7. ケヤキ 取上番号0853 H28 8区 溝(S533)出土杭No.13、掲載番号W64



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 8. サクラ属 取上番号0831 H28 8区 溝(S533)出土杭No.5、掲載番号W60

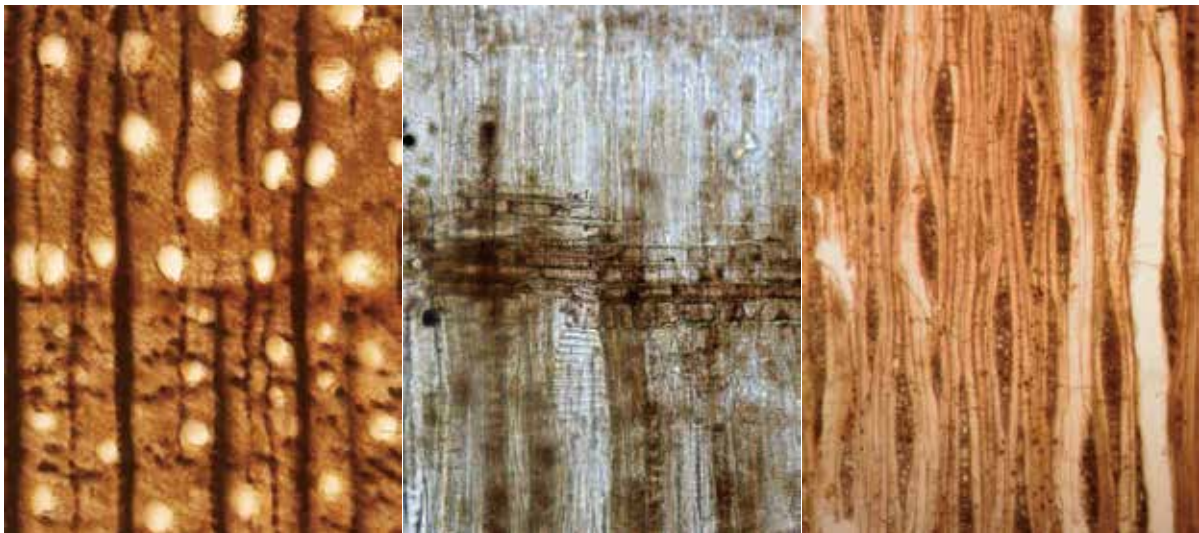


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 9. サクラ属 取上番号0811 H28 8区 溝(S533)出土杭No.14、掲載番号W67

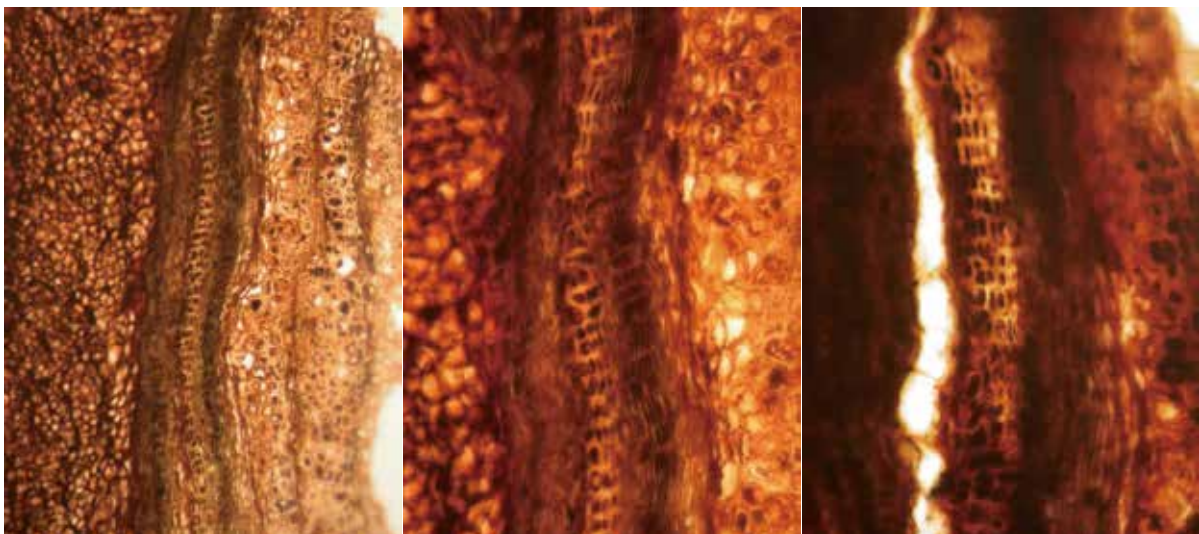
写真36 8区出土木材顕微鏡写真(3)



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 10. カエデ属 取上番号1073 H28 8区 ピット(S694)出土柱根、掲載番号W98



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 11. ヤブツバキ 取上番号1020 H28 8区 ピット(S375)出土柱根、掲載番号W53



放射断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 放射断面 0.1mm
 12. 樹皮 取上番号1015 H28 8区 ピット(S404)出土柱根

写真37 8区出土木材顕微鏡写真(4)

第8章 総括

第1節 下坂本清合遺跡における地すべり地と丘陵斜面地の土地利用

1 はじめに

下坂本清合遺跡7区の調査では、縄文時代後期前葉以降の人々の活動痕跡を確認したが、大きくは弥生時代後期から古墳時代前期の丘陵斜面を中心とする遺構群や遺物と、中世後期の丘陵裾部を中心とする遺構群や遺物が主な調査成果である。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、丘陵の急な斜面地を積極的に利用している様相は、近隣では、下坂本清合遺跡が位置する宝木谷の西側、勝見谷の丘陵部と丘陵裾部に位置する乙亥正大角遺跡、乙亥正屋敷廻遺跡でも同様で、丘陵斜面地に構築された居住域に伴う段状遺構などが検出されている⁽¹⁾。

下坂本清合遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構のほとんどは、丘陵斜面の中でも花崗岩を基盤とする谷状の凹地に堆積する堆積物の上面で検出している。

本節では、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構群を検出した谷状の凹地とその凹地に堆積する堆積物の形成について述べ、形成後の遺構の構築に関して、丘陵斜面地の土地利用という観点から考察し、7区調査の総括の1つとしたい。

2 谷状の凹地の形成とその堆積物

弥生時代の遺構群を検出した谷状の凹地とその凹地に堆積する第Ⅶ層と第Ⅷ層は、平面とトレンチ断面で確認した(第130～132、379、379図)。谷状の凹地(第Ⅶ層と第Ⅷ層の堆積範囲)は、7区を概ね東西方向に横断し、最大幅18mである。断面形状については、場所により異なるが、逆台形(第379図)ないし緩やかな半円形(東側の造成で切られた部分)である。丘陵裾部に当たる東側は、後世の土地造成等により切られるため全容は不明である。

まず、7区で確認した谷状の凹地の形成について述べる。

この谷状の凹地は、これに平行するように、花崗岩に貫入する石英脈が走っており、この部分を中心に形成されていることが確認できる。この岩脈の周辺は、岩脈の形成に伴う熱水変質作用による影響で花崗岩が軟質化している。この谷状の凹地は、軟質化した部分が風化し、豪雨などにより含水率が上昇し、剪断応力の限界を超えることにより滑動し、斜面崩壊を起こし形成されたものと考えられる⁽²⁾。岩脈自体も節理に従って割れており、この部分への水の浸み込みも、風化を進め、斜面崩壊による地すべりを引き起こしたと推定できる。まとめると、この谷状の凹地は、斜面崩壊による地すべりで滑動した削剥域に形成された凹状の緩斜面地形—地すべり地—であると判断できる。

Ⅷ層下部は、凹状の緩斜面地形との直接的なつながりを確認できる部分はわずかであるが(第132図)、凹状の緩斜面地形の形成を伴う地すべりにより、押出域である丘陵裾部に堆積した堆積物の一部と推定できる。しかし、風化基盤や岩脈に由来する礫を含むが、その含有は少ないことから、この斜面崩壊による礫を主体とする堆積物は、第Ⅷ層下部の下位、かつ東側の深い部分に堆積していると推定される。

次に、7区の凹状緩斜面地形(以下、谷状の凹地、凹地と略称する)の堆積物とその層序について

第8章 総括

概観する。各層については、第4章第2節第2項の基本層序に記載しているのので、ここでは、凹地とその周辺に堆積する堆積物を、堆積構造などから考えられる堆積環境により3つに分け、凹地の形成からその後の土地利用に至るまでを概観する。

第1期：第Ⅷ層、第Ⅶ層

第Ⅷ層と第Ⅶ層は、斜面崩壊後に削剥域の滑動した表層土壌や風化岩盤が、ほぼ完全に凹地内から流出した後に、斜面上方から崩落、流入した堆積物が母体となっている。

一般的に、斜面崩壊を起こして形成された凹地には、下位に粗い礫質の堆積物が堆積し、上位に細粒の堆積物が堆積する。成因的には「修復相」「被覆相」に分けられ、この順の累積層序を持つ⁽³⁾。しかし、7区の凹地にはこのような累積層序を持たない。このことは、7区の凹地に堆積する堆積物が、斜面上方から崩落や流入した堆積物を母体としながらも、修復相から被覆相という過程で堆積したのではないことを示している。

そこで、凹地に堆積する第Ⅷ層と第Ⅶ層を断面で見ると、不整合に堆積する部分があることを確認できる。このことは、凹地が埋まる過程で、下位の堆積を切る何らかの作用があったことを示している。この作用は、部分的な堆積物の移動を引き起こすもので、堆積物の粒度に幅があり淘汰が悪いことも含めると、凹地内の斜面の小規模崩壊のような斜面浸食と再堆積であり、第Ⅷ層と第Ⅶ層はこれに伴い水を含んだ状態で堆積した堆積物と判断できる。このことは、局所的に当時の表土に近い土壌化層と推定できる暗褐色シルトから細粒砂の小ブロックを層状に含むことから窺える。

凹地の形成と第Ⅷ層の堆積時期は、第Ⅷ層上面で検出した溝（S081）埋土から縄文時代後期前葉の全く磨耗していない土器が出土していることから、縄文時代後期前葉以前に比定できる。さらに、縄文時代中期までは、西日本で内湾におけるデルタの前進と扇状地の発達が続き、沖積地に大量の堆積物が供給された時期で、その後背地である山間部、丘陵地の斜面崩壊と浸食が活発であったことから、縄文時代中期ごろと推定できる。そして、第Ⅶ層の堆積した時期は、第Ⅶ層上面で検出した遺構のうち最も古いものが弥生時代後期後葉に帰属することから、縄文時代後期前葉から弥生時代後期後葉までの間に比定できる。

第Ⅷ層と第Ⅶ層の堆積した時期は、人為的な植生改変は行われず、集中豪雨の頻度が高いなど、降水量の増大による斜面不安定期であると考えた方が妥当である。

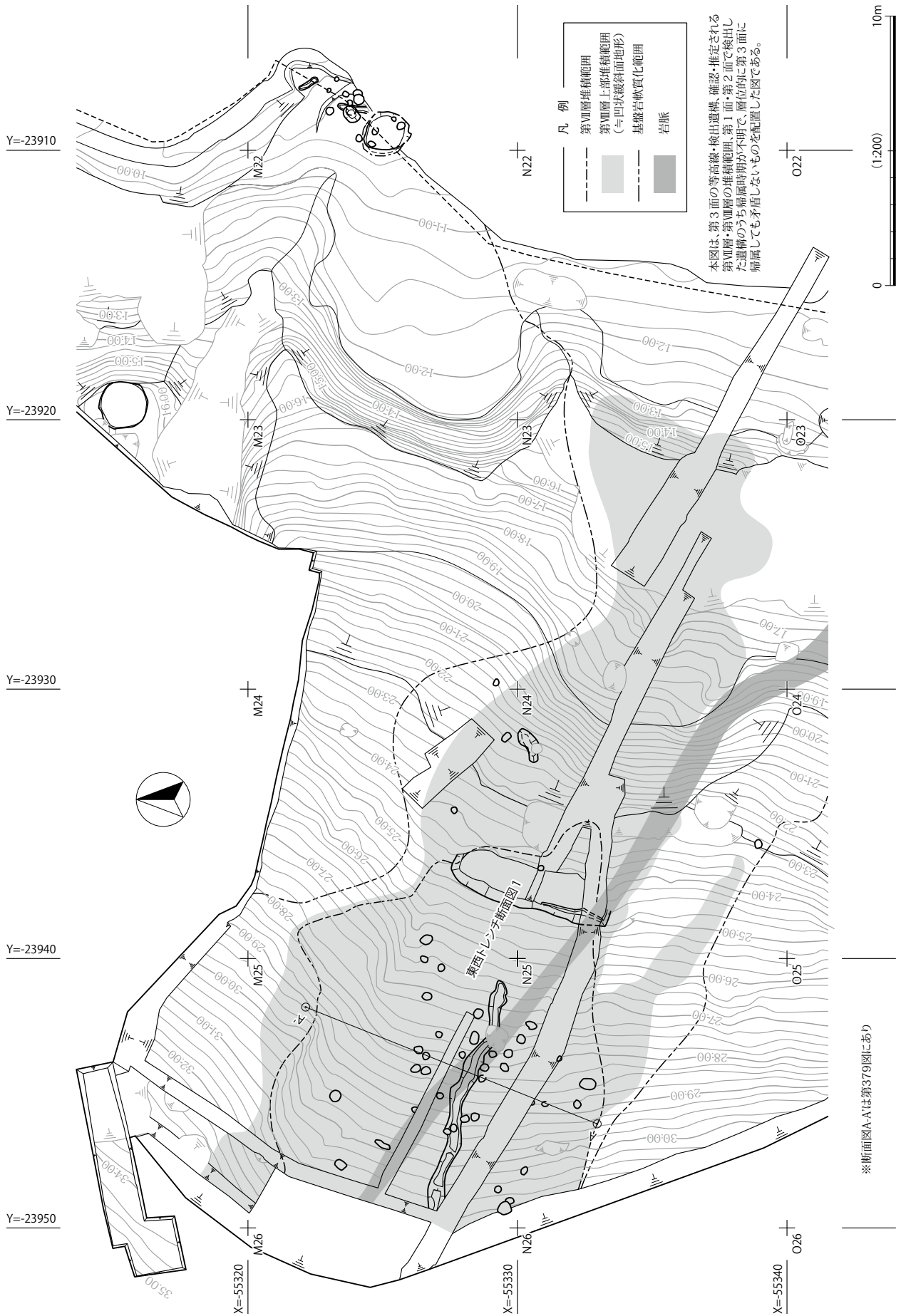
第2期：第Ⅵ層

見た目黒色の砂礫混シルトから粘土を主体とする数層の単層からなり、クロボク由来のものと思われる。丘陵裾部の第Ⅷ層下部、第Ⅷ層の堆積が薄い谷状の窪地に堆積したものである（第133図）。間に挟む砂の薄層や葉層の互層を確認でき、堆積過程で砂を堆積させる一時的かつ局所的な水の流れがあったと考えられる。

隣接する6区や8区の丘陵裾部で、弥生時代後期後葉の遺物や遺構群が帰属する層が、本層の上位に堆積することから、弥生時代後期後葉よりは以前の堆積であることがわかる。

クロボク由来のものと思われる第Ⅵ層は、野焼き等により生じた微炭粒の含有が多い黒土が、現地で生成もしくは斜面上方から窪地に流れ込むことにより堆積したものと考えられる。斜面崩壊に伴う堆積物がほとんどみられないため、斜面崩壊後の凹地に第Ⅷ層と第Ⅶ層が堆積した後に、丘陵裾部の

第1節 下坂本清合遺跡における地すべり地と丘陵斜面地の土地利用



第378図 7区第3遺構面等高線図及び弥生時代遺構配置図

窪地に堆積したものであると考えられる。このことから、斜面崩壊が非常に少なく、丘陵斜面が安定して一定の植生に覆われていた時期と考えられる。斜面不安定化を引き起こす大規模な伐採と植生改変は行なわれず、人為的な管理は主に野焼きにとどまった可能性が高い。

第3期：第V層、第IV層

第Ⅷ層と第Ⅶ層の堆積後も、現代に至るまで、この部分は凹地として存在しており、弥生時代後期中葉から終末期までの遺物を含む第V層、弥生時代後期中葉から古墳時代前期前葉までの遺物を含む第IV層が堆積する。

見た目黒褐色の第V層と見た目褐色の第IV層は、当時の表土に近い部分が斜面上方から崩落や流入した堆積物が母体となっていることを窺わせる。しかし、第V層と第IV層に局所的に含まれる黄褐色土のブロックの中に、基盤岩のブロックを含むものが確認できることから、崩落や流入という自然的な要因だけではなく、人為による造成等の要因を認めることができる。

斜面上方からの表土の崩落や流入は、斜面上方の土壌が不安定化したことを示す。その原因としては、植生破壊や集中豪雨の多発などがあげられる。7区周辺の丘陵部においては、古墳時代前期前葉には、凹地の北西側の基盤岩（第Ⅸ層）上面で段状遺構や袋状土坑が構築されることから、古墳時代前期前葉には、これらを構築する際に植生破壊があったことがわかる。前代の弥生時代後期後葉から終末期においても、凹地で検出した遺構群の構築に伴い、周辺の丘陵部の植生が破壊されたことは容易に想定できる。第V層と第IV層の人為による造成等については、斜面上方からの表土の崩落や流入に対して、凹地を利用するために行なったものであると考えられる。

3 下坂本清合遺跡における丘陵斜面地の土地利用

前項で下坂本清合遺跡7区の谷状の凹地の形成と凹地の堆積物の層序について概観したが、丘陵の斜面地において、谷状の凹地で弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の遺構密度が高いことについて、本来、基盤岩（第Ⅸ層）上面にも遺構があって、後に基盤岩が削平されたために遺構が検出されなかったとも想定できる。しかし、丘陵斜面全体が大きく均一に同じ厚さで削平されるような人為的、自然的な出来事があったと想定しがたいことと、密度は薄いですが基盤岩上面でもこの時期の遺構が検出されていることから、本来の遺構分布をほぼ反映していると判断できる。

したがって、谷状の凹地の遺構密度が高いことは、当該時期の人々が、この凹地－地すべり地－を選び、遺構群を構築したことを示している。

そこで、凹地で検出した遺構と凹地で出土した遺物を概観し、これらの遺構が何のために構築されたのかについて考えていく。

凹地で検出した遺構を下位から順に見ていく。第Ⅷ層上面で土坑とこれに伴う溝とピット、第Ⅶ層上面で段状遺構、ピット群及び溝、第V層上面でピット群、第IV層上面で段状遺構、土坑及びピット群を検出している。このうちピット群については、ピットの中に柱痕や柱を抜き取った痕跡が残るもの、根石を伴うものがあり、建物もしくは塀を構成していたと考えられる。また、凹地の第V層、第IV層、遺構埋土から出土した当該時期の土器を見ると、壺、器台、甕、高坏及び蓋で、量的には甕が主体である。

これらのことから、地すべりにより形成された谷状の凹地は、丘陵裾部と同じく、当該時期の居住

域として利用されていたと判断できる。

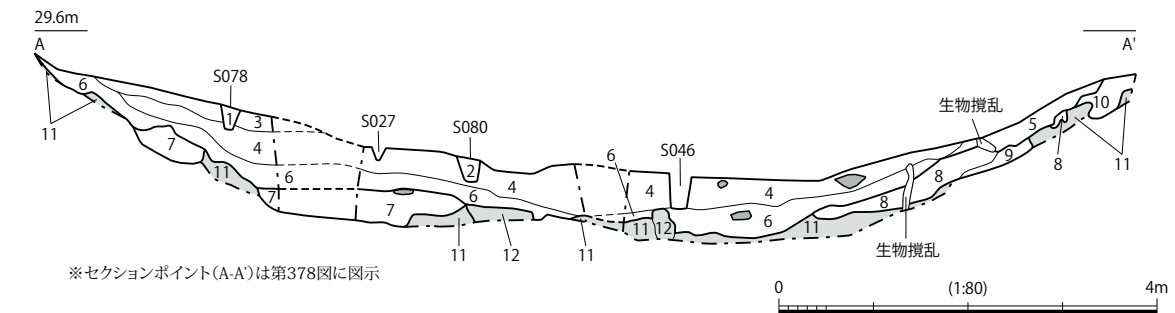
それでは、何故、当該時期の人々が、丘陵斜面地に居住するに際して地すべり地を選んだのか。

そこで、まず、斜面の傾斜角度（勾配）を見ると、第Ⅷ層上面が19度（34.9%）、凹地内の第Ⅶ層上面が26度（50.3%）、凹地の底面が31.6度（60.8%）であり、凹地外の基盤岩の35度（68.8%）に比べて傾斜角度が小さい（勾配が低い）。第3面の等高線図（第378図）を見ても、遺構密度が高い谷状の凹地部分での等高線の幅が、まわりに比べて広いことがわかる。このことから、傾斜が緩いことが地すべり地を選んだ理由の一つであることがわかる。凹地内の傾斜が緩いということは、当然ながら、傾斜が急な凹地外よりはヒトが活動しやすく、段状遺構を構築する上で、造成に掛る労力を減らし、建物などの構造物を築くのに適している。

次に、凹地の形成後に堆積した第Ⅷ層、第Ⅶ層を見ると、前項で概観した通り、堆積物の粒度に幅があり淘汰が悪いことから、斜面上方から崩落や流入した堆積物を母体としながらも、凹地内の斜面の小規模な崩壊のような斜面浸食と再堆積による堆積物である。斜面浸食と再堆積を繰り返すことにより、凹地内の斜面の傾斜がより緩くなり、ヒトが活動しやすい土地を形成したと考えられる。

このような下坂本清合遺跡7区の谷状の凹地を居住域とする土地利用は、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉にかけて行なわれた。古墳時代前期前葉に入ると、凹地の北西側の基盤岩（第Ⅸ層）上面で段状遺構や袋状土坑が構築されることから、凹地の中だけではなく、凹地の外側にも居住域が広げられたことがわかる。

ちなみに、調査前の地形測量図（第127図）を見ると、この凹地を中心として段状に造成されている



〔遺構埋土〕

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂・10YR5/6 黄褐色シルト～中粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 粗粒砂～細礫混
礫(径5～8mm)含 10YR6/8 明黄褐色シルト～極細粒砂ブロック(径1cm前後)わずかに含 炭粒含〔S078埋土〕
- 2 10YR6/6 明黄褐色シルト～細粒砂・7.5YR5/6 明褐色シルト～細粒砂の混土(径2～3cmのブロック状) 粗粒砂～細礫混
礫(径5mm～1cm)含〔S080埋土〕

〔第Ⅶ層〕

- 3 10YR5/6 黄褐色中粒砂～シルト・10YR4/6 褐色シルト～細粒砂の混土(径3～5cmのブロック状) 粗粒砂～礫(径5mm)混
礫(径8mm～10cm)含 7.5YR6/6 橙色シルト～細粒砂・27のブロック(径3cm前後)含
- 4 7.5YR5/6 明褐色シルト～細粒砂(不均質なブロック状) 中粒砂～細礫多混 礫(径5mm～15cm)多含
7.5YR6/6 橙色シルト～細粒砂ブロック(～径5cm)含 炭片(～径2cm)含
- 5 10YR6/6 明黄褐色シルト～極細粒砂・10YR7/6 明黄褐色シルト～極細粒砂の混土(径5cm前後のブロック状) 細粒砂～極粗粒砂混
礫(～径8mm)含 11のブロック(～人頭大)多含 局所的に10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂ブロック(径2cm前後)含
- 6 7.5YR6/6 橙色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径5cm前後の不均質なブロック状)
中粒砂～細礫多混(4より多) 礫(径5mm～15cm)多含(4より少) 炭片含(4より少)

〔第Ⅷ層〕

- 7 7.5YR6/6 橙色シルト～細粒砂・10YR5/4 にぶい黄褐色シルト～細粒砂の混土(径5cm前後の不均質なブロック状) 中粒砂～細礫混
礫(径5mm～10cm)含 炭片含
- 8 10YR6/6 明褐色シルト～細粒砂 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径8mm)含 11のブロック(～拳大)含
- 9 10YR7/6 明黄褐色シルト～細粒砂 中粒砂～粗粒砂混 極粗粒砂～礫(径8mm)少含 11のブロック(～拳大)含
- 10 10YR7/6 明黄褐色シルト～極細粒砂 細粒砂～細礫混

〔第Ⅸ層：基盤岩〕

- 11 10YR7/6 明黄褐色岩盤
- 12 岩脈 割目に7.5YR5/6 明褐色シルト～細粒砂が入る

第379図 谷状の凹地断面図

ることが確認でき、地すべりにより形成された緩斜面上で、現代に至るまでも何らかの土地利用がなされていたことがわかる。

4 まとめ

下坂本清合遺跡7区で確認した谷状の凹地が、地すべりにより形成されたものであると結論付け、凹地で検出した弥生時代後期から終末期の居住域に伴う段状遺構やピット群などの遺構が、丘陵の斜面地の中でも地すべり地を選んで構築されていることについて述べ、その理由について地すべり地が周りの斜面より傾斜が緩いことによると考えた。

下坂本清合遺跡の例では、居住域としての土地利用について述べたが、現代に続く事例として、山の斜面地において生産活動を行なうに際しても地すべり地を選んでおり、棚田はその代表的なものである。生産地として地すべり地を選ぶ理由として、斜面地の中では、地すべりにより生じた地形が棚田や畑地として利用しやすいこと、地下水を得やすいことなどを挙げることができる。

このように、地すべりには破壊的な側面だけではなく、地すべり地の特性を活かした積極的な土地利用がなされてきているという側面もある。よって、地すべり地の土地利用は、斜面地における土地利用を考える上で、一つの型として踏まえる必要があるものと言える。

本節では、山の斜面地で居住や生産活動を行なわざるを得なかった環境的要因や歴史的な背景については、地域や時代によって異なるので述べなかった。今後行なわれる調査での事例の積み重ねと、それに基づく地域や時期ごとでの検証が必要である。

【註】

- (1) 鳥取県埋蔵文化財センター 2016 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書62『乙亥正大角遺跡』一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X X X II
地すべりの痕跡は、乙亥正屋敷廻遺跡でも確認されており、乙亥正大角遺跡で開析谷として報告されている谷状の凹地も、堆積物や現地地形から地すべり痕であると考えられる。
- (2) 三浦清 1967「豪雨によって発生する花崗岩山地の崩壊現象とその特質」(『応用地質』第7巻第3号)で挙げられている花崗岩山地の崩壊形式のうち、脈岩型崩壊に属する。
- (3) 山野井徹 2015『日本の土—地質学が明かす黒土と縄文文化—』pp.161-168. 築地書館

【参考文献】

- 山野井徹 2005「地すべり地の堆積物の諸相とシーケンス—山形県朝日町八ツ沼地すべりを例として—」(『日本地すべり学会誌』第42巻第1号)
- 松田順一郎ほか訳 2012『ジオアーケオロジー—地学にもとづく考古学—』朝倉書店

第2節 下坂本清合遺跡出土埋蔵銭の評価

1 はじめに

第5章第4節では下坂本清合遺跡出土埋蔵銭の分類結果及び銭貨の内容について述べた。それを踏まえ、本節では文献史学におけるいわゆる「撰銭令」の評価等の成果も援用しつつ、精銭、悪銭とは如何なるものかを検討したうえで、本埋蔵銭の位置付けについて考察したい。

2 撰銭令記載の悪銭、精銭について

「撰銭」及び「撰銭令」の評価やその背景等、諸研究の嚆矢は、戦前におけるグレシャム法論争にさかのぼるが、現在においても、撰銭令は日本中世の貨幣流通の実態を解明していく上で重要な研究対象の一つであり続けている⁽¹⁾。

著名な、守護大名大内氏によって最初に発令された文明17年(1485)の撰銭令から、織田信長による永禄12年(1569)の撰銭令までのうち、主要なものを抜粋したのが表73である⁽²⁾。撰銭令とは、「撰銭禁令」などと呼称されることもあるが、撰銭の絶対的な禁止ではなく、むしろ、厳しい限定付きではあるが容認を示したものと解釈できる(坪田1996)。すなわち、排除を認める「悪銭」を指定する、もしくは一定比率において混用を認めて精銭と同じ扱いとする、といった規定を行うことで、それ以外の銭種に対する排除を禁止し、良し悪しの基準の統一を図ったものと捉えられる。

撰銭令の初見である大内氏による文明17年令より、具体的な記載が継続するのは、「打平(うちひらめ)」「京銭(きんせん)」など、排除対象となっている悪銭と、「根本渡唐銭」「渡唐銭」などと称される明銭の2者である。前者の悪銭は、室町幕府による明応9年(1500)令における「日本新鑄料足」が著名だが、同じく幕府による永正2年(1505)令では、「京銭、打平」と言い換えられていると考えられ、両者が同一である可能性が想定されている(田中2007、中島圭2005)。打平については、中島圭一氏が永禄9年(1566)発令の大名浅井氏による撰銭令の記載内容から、「うちひらめ」と「文字のなき」が同一銭種を示し、各地における出土銭に当てはめた場合、無文銭が最も相応しいと指摘した(中島圭2005)。永井久美男氏も、無文銭の多くが文字や輪郭を持たず、打ち叩いたような薄肉の粗悪銭である点を指摘し、打平を同銭に充てており(永井2005)、この見解は定着しつつあると言える。一方の京銭は、先述の「日本新鑄料足」の内部分類であるという解釈と、永正元年(1504)の和泉国日根野荘で定められた撰銭規定にある「今銭」は同じく「きんせん」と読み、さらには天文年間の東福寺や興福寺といった大寺院が発令した撰銭令において記載される「新銭」との同義性が窺えること、などの指摘がある(田中2007、中島楽2012)。打平と同様に、現在確認されている出土銭を当てはめるならば、唐宋銭などの「古銭」に対し、当時、新規に鑄造され流通したのものとして、模鑄銭が該当する可能性を指摘しておきたい。

割れ銭や欠け銭は、文字通り破損銭と捉えられる。割れ銭は、破損度合の軽微な「ワレトヲラサル」銭について、永正年間の幕府による撰銭令では精銭との一定数混用が認められているが、下って、同じ幕府による天文11年(1542)4月8日令以降は排除対象に変化する。一方の欠け銭は同じ天文11年4月8日令において精銭との混用対象として初出するが、割れ銭と同様、永禄年間の興福寺や幕府(三好氏)発令の撰銭令では排除対象に転落している。

後者の明銭についてであるが、初出である大内氏の文明17年令から永樂通寶、宣徳通寶の一定度混

表73 主要な撰銭令の概要

発令年月日	発布者	排除対象	撰銭不可及び制限付混用対象	備考
文明17年(1485)4月	大内氏	さかひ銭、洪武銭(なわ切)、打平	永楽・宣徳銭の一定度混用規定 ・段銭収納:20文/100文 ・一般賃借・売買:30文/100文	
延徳4年(1492)3月	大内氏	同上	同上	悪銭での取引を禁止、段銭への悪銭混入を禁止(豊後)
明応9年(1500)10月	室町幕府	日本新鑄料足	根本渡唐銭(洪武・永楽・宣徳銭)	
永正元年(1504)5月1日	和泉国日根野荘九条政基	破銭、今銭、洪武銭	永楽銭混用:20文/100文以下	
永正2年(1505)10月10日	室町幕府	京銭、打平等	渡唐銭(永楽・洪武・宣徳銭)、割れ銭(われとおらざる銭)	悪銭を売買すること(悪銭売買)の禁止規定(初出)
永正3年(1506)7月22日	室町幕府	京銭、打平	根本渡唐銭、割れ銭は一定度混用 32文/100文	明銭等の混用規定は幕府令では初出
永正6年(1509)閏8月7日	室町幕府	京銭、打平	根本渡唐銭、割れ銭は一定度混用 33文/100文	・悪銭売買禁止規定 ・撰銭による取引拒否、価格吊り上げの禁止 ・違反者に対する罰則規定
永正9年(1512)閏8月30日	室町幕府	日本せに、割れ銭	・(100文中、口さしの分)ふるせに(古銭)10文、洪武銭2文、宣徳銭2文、永楽銭6文 ・(地せにのうち)よき永楽5文、大観、嘉定以下うらに文字のある銭、欠けが軽微なもの	・詳細不明な点が多いが、多様な銭種による、かつてない細かな規定 ・撰銭による取引拒否、価格吊り上げの禁止
天文11年(1542)4月8日	室町幕府	京銭、打平、割れ銭	渡唐銭(永楽・洪武・宣徳・嘉定・かけ銭)は少々難があっても32文/100文混用	・排除対象に割れ銭が追加 ・混用対象に嘉定(通寶)、かけ(欠け)銭が加わる
天文11年(1542)8月16日	興福寺	新銭、破銭	(100文のうち)永楽銭+古銭で50文、残る50文は「金銭」混用規定	・古銭=渡唐銭 ・悪銭売買の禁止規定
天文14年(1545)12月13日	東福寺	・新銭、磨(すり)、恵明、洪武銭、宣徳銭、破欠 ・粗製の永楽銭、状態の悪い古銭	永楽銭:10文/100文混用規定 古銭	
永禄8年(1565)12月25日	興福寺(多聞院)	新銭、ワレカケ(割れ欠け)、コロコロ、宣徳銭、ウラニ字ノアル、文字不見	-	
永禄9年(1566)3月17日	室町幕府(三好氏)	宣徳銭、新銭、洪武銭、恵明、割れ銭、欠け銭	其外(古銭、永楽銭)	・旧借や質物に関する規定 ・悪銭を理由とした取引停止の禁止 ・洪武・宣徳銭が悪銭扱いへ
永禄9年(1566)9月1日	浅井氏	割れ銭、打平・文字のなき	其外	・他国商人による精銭持ち出し禁止規定
永禄12年(1569)2月28日	織田氏	・ころ、宣徳銭、やけ(焼け)銭、下々の古銭:精銭に対して2倍枚数で適用 ・恵明、大かけ、割れ、磨り銭:5倍 ・打平、南京:10倍	其外	・商取引において精銭と悪銭とを半額ずつ併用することを規定

用が規定される一方、洪武通寶は既に排除許可対象として記載されている。幕府令においては、洪武、永楽、宣徳銭の三者共に一定比率による混用を命じ、精銭との等価値使用対象とする価値付けを堅持するが、逆に、このような規定が明銭の市場における忌避対象であった証左との見方が通説的理解となっている(川戸2007)。16世紀中期に至るまで、幕府令に比して荘園領主や大名、寺院が発令する撰銭令の明銭に対する規定は厳しく、天文14年(1545)の東福寺令では宣徳通寶も排除対象となり、永禄9年(1566)3月17日には遂に幕府令においても洪武銭と共に悪銭へと降格している。明銭では永楽通寶のみが撰銭適用外に位置し続け、16世紀後半、東国においては基準通貨と呼べるまでに至る(中島圭1992、鈴木1999)。明銭は、15世紀前半に盛んに行われた朝貢貿易により、大量にもたらされた(佐久間1992)。実際に出土資料においても、特に15世紀中期以降永楽通寶を中心として出土数は増大し(永井2005)、次項で詳述するように組成率において一定以上の割合を占めることとなるが、

撰銭令から読み取れる忌避の要因については明確になっていない。しかしながら、東アジア史分野の研究成果から、明銭忌避は、日本における最初の撰銭令発令と概ね同時期（15世紀後半）の中国⁽³⁾においても存在したという指摘がある。具体的には、該期（1460年代～）の中国では制銭（公鑄銭）鑄造途絶に伴う銅銭流通量不足が起こり、私鑄銭が氾濫したことにより市場では「揀銭（かんせん）」と呼ばれる撰銭行為が広がり、粗悪な私鑄銭と共に明銭が忌避ないし減価通用されたという。すなわち、明銭忌避、撰銭行為の拡大は、15世紀後半における中国、日本共通の現象という理解である（足立1992、大田1997）。この私鑄銭が、まとめて日本に流入したか否かについては意見が分かれているが⁽⁴⁾、いずれにせよ、明銭忌避、撰銭といった現象が中国や日本において共時的に認められるのは偶然とは言えず、国内の事情のみで説明することは困難となっている（本多2006）。

一方、問題なく使用できる銭、すなわち精銭については、明銭以前の唐宋銭を中心とした一群であることは論を待たないが、撰銭令においては「古銭」との記載が散見される。天文年間頃から、状態の悪い古銭が排除対象となる記載が現れ、織田信長による永禄12年（1569）2月28日令に至ると、「下々の古銭」との表記があり、精銭の貶質化、明らかな不足を示すと考えられている（田中2007）。この織田氏による撰銭令は、精銭を基準とし10種の銭貨にそれぞれ打歩（2倍、5倍、10倍）を付けての使用を初めて容認した著名な法令である。市場における銭貨通用の実態を認めて政策転換し、かつて悪銭として排除対象とした銭種を打歩付きでいわば「復活」させ、銭貨取引の回復を図ったことが窺え、従前より中央政権が維持に努めてきた精銭中心の貨幣体系の大きな動揺が法令上においても顕在化したものと評価されている（本多2006）。

以上を踏まえ、主要な撰銭令記載内容より推測される悪銭、もしくは忌避対象銭の具体像についてまとめると、先述した織田氏の撰銭令が発令される16世紀中期以前においては、無文銭、模鑄銭、破損銭、そして条件付で精銭と等価値使用が認められたものの市場では評価の低さが如実な明銭、ということになるだろう。ただし、先述のように明銭の中には格差が認められ、永樂通寶は精銭に準じた価値を維持したのに対し、洪武通寶、宣徳通寶は相対的に評価が低く、特に洪武通寶は早くから排除対象になっていた点が指摘できる。次項では以上の所見を踏まえつつ、全国の埋蔵銭調査によって得られたデータを援用し、まずは銭種別の組成に着目して、検討していきたい。

3 埋蔵銭事例における銭種別組成及び順位

既述のとおり、下坂本清合遺跡出土埋蔵銭においては模鑄銭が検出されなかった。また、判読不明銭も本埋蔵銭には含まれず、さらには破損銭についても無いと判断できる。こうした所見から、本資料は永井氏が夙に指摘する「精銭の埋蔵銭」と評価できる（永井2005、永井・藤崎2013など）。以下、模鑄銭を含まない埋蔵銭事例については、記述が冗長となるのを避けるため、「精銭の埋蔵銭」と記載することとする。

本項では、本事例のような埋蔵銭における特徴を抽出するための一手段として、銭種別枚数の観点から検討していきたい。撰銭令の内容からすれば、唐宋銭を中心とする精銭、忌避傾向が認められる明銭、模鑄銭と無文銭及び破損銭を主体とした悪銭の3種における数的な関係性が着眼点の一つと考えられる。ただ、無文銭は別として、本銭の鑄写し銭である模鑄銭の抽出に関しては、その識別の困難さが拭えず、調査担当者によって認識に差が生じている現状がある（永井2001a・2005）。したがって、模鑄銭識別に起因するデータ上の誤差は無視できないことは認識しているものの、ここでは傾向

の大枠を把握するため、模鑄銭に係る数値は参考に止め、データの実際と齟齬がより少ないと考えられる明銭に重きを置き、検討を加えていくこととする。

表74～77は全国の主要埋蔵銭事例⁽⁵⁾のうち、本遺跡を含め40例を選択し、最新銭による時期区分（第4節表5）の順に並べたものである。表中には各事例を構成する銭種のうち上位15種を掲載し、その枚数と調査枚数⁽⁶⁾全体における比率（%）を示した。鈴木公雄氏は、各備蓄銭（埋蔵銭）事例における銭種の出現率を検討し、3、4期以降に出現する明銭（主に洪武通寶、永樂通寶）を除き主要銭種を形成する唐宋銭について、出現率のまとまりを根拠に4つのグループに分類した。すなわち皇宋通寶と元豊通寶による最上位グループ、熙寧元寶、元祐通寶及び開元通寶の3種から成るグループ、天聖元寶、紹聖元寶、政和通寶及び聖宋元寶の4種で構成するグループ、祥符元寶以下元符通寶に至る計9種から成るグループに4大別した。そして各グループを構成する銭種は、各時期を通じて常に同一のグループ内に留まり、グループ内における順位入れ替えは起こるが、別のグループに移行することは全く見られない、と述べた（鈴木1999）。本項ではこの分類を援用することとし、上位から順にグループ①～④と呼称する。表74～77の銭貨名称には、各グループを網掛けの濃淡で示し、明銭を黒塗りとした。

まずは表74における1期から3期までの8事例を概観する。1期に帰属する上千葉出土銭（東京都）、2期の吉田若宮2次出土銭（長野県）では、すでに模鑄銭が上位に入っている。ただし、模鑄銭を除いた他の銭種を参照すると、鈴木氏の指摘する通り、各グループにおける序列の乱れは全く見られず、グループ間の枚数差も明瞭である。こうした斉一性から、当該比率は中国から輸入した状態そのものと捉えられ、唐宋銭を骨格とした「精銭」の実態を示すものと言える（永井2005）。3期は大中通寶、洪武通寶の明銭が最新銭となるが、まだ枚数は僅少で、混入としても大過ないレベルである。

続く永樂通寶を最新銭とする4期から明銭（洪武通寶、永樂通寶）の出土数が増加し、銭種別枚数において上位に入ってくる。広島県の善福寺南遺跡出土銭のように、永樂通寶が1位となる事例も確認できる。ただし、全体に占める明銭の比率は事例により格差があるのが特徴である。浪岡城跡SP11出土銭（青森県）や善福寺南遺跡のように15%を超える事例、能ヶ谷出土銭（東京都）や四ツ枝遺跡出土銭（静岡県）のように10%を切る事例がある。続く5期（最新銭：朝鮮通寶）は、事例数が少ないものの、基本的な状況において目立った変化は認められない。ただ、全体に占める明銭の比率は15%に迫り、上昇傾向を示す。このように、明銭が本格的に組成に加わる4、5期の銭種別枚数上位を参照すると、永樂通寶と洪武通寶の順位は事例により上下するが、組成の骨格を為すグループ①～④の序列は引き続き揺らいでいない。すなわち、唐宋銭の序列内に明銭が単純に加わった状況を示している。

6期以降の時期区分は、表5に記載している7期以降の時期決定銭の出現率が非常に低いことから、最新銭初鑄年による時期区分では帰属時期を絞り込むことが困難となっている（永井1996など）。すなわち、最新銭を宣徳通寶とする6期と、最新銭を琉球銭（大世通寶、世高通寶）とする7期とでは、両者の初鑄年の違いから上限に関しては20～30年弱の差があるものの、下限は上記の理由から共に16世紀第3四半期（1560年代）となり、実質は近似した時期区分となっている。続く8期は時期決定銭が弘治通寶（初鑄1503年）及び嘉靖通寶（初鑄1527年）であるため、言うまでもなく帰属は16世紀前半以降となるが、下限は6、7期と同じである。以上の状況を踏まえ、6～8期の事例については一括して述べることとする。明銭比率は6期の武部出土銭（石川県）のように例外はあるが（9.52%）、

表74 埋蔵銭事例における銭種別枚数上位一覧(1) 丸数字は文献番号(本節末尾参照)

名称		時期	調査枚数	名称		時期	調査枚数	名称		時期	調査枚数	名称		時期	調査枚数				
①草戸千軒町第35次(広島)			1期	12591	②上千葉(東京)			1期	14071	③吉田若宮2次(長野)			2期	5820	④引土(京都)			2期	11943
順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)
1	皇宋通寶	北宋	1695	13.46	1	皇宋通寶	北宋	1820	12.93	1	皇宋通寶	北宋	754	12.96	1	皇宋通寶	北宋	1521	12.74
2	元豊通寶	北宋	1499	11.91	2	元豊通寶	北宋	1697	12.06	2	元豊通寶	北宋	692	11.89	2	元豊通寶	北宋	1397	11.70
3	元祐通寶	北宋	1158	9.20	3	熙寧元寶	北宋	1373	9.76	3	熙寧元寶	北宋	559	9.60	3	元祐通寶	北宋	1090	9.13
4	開元通寶	唐	1154	9.17	4	元祐通寶	北宋	1259	8.95	4	元祐通寶	北宋	526	9.04	4	熙寧元寶	北宋	1068	8.94
5	熙寧元寶	北宋	1138	9.04	5	開元通寶	唐	1138	8.09	5	開元通寶	唐	447	7.68	5	開元通寶	唐	932	7.80
6	天聖元寶	北宋	636	5.05	6	天聖元寶	北宋	696	4.95	6	天聖元寶	北宋	297	5.10	6	天聖元寶	北宋	576	4.82
7	政和通寶	北宋	515	4.09	7	紹聖元寶	北宋	577	4.10	7	紹聖元寶	北宋	244	4.19	7	政和通寶	北宋	553	4.63
8	紹聖元寶	北宋	505	4.01	8	政和通寶	北宋	575	4.09	8	政和通寶	北宋	220	3.78	8	聖宋元寶	北宋	511	4.28
9	聖宋元寶	北宋	500	3.97	9	聖宋元寶	北宋	533	3.79	9	聖宋元寶	北宋	214	3.68	9	紹聖元寶	北宋	506	4.24
10	祥符元寶	北宋	331	2.63	10	模鑄銭	日本	515	3.66	10	祥符元寶	北宋	156	2.68	10	嘉祐通寶	北宋	323	2.70
11	嘉祐通寶	北宋	308	2.45	11	祥符元寶	北宋	337	2.39	11	模鑄銭	日本	151	2.59	11	祥符元寶	北宋	276	2.31
12	天禧通寶	北宋	258	2.05	12	嘉祐通寶	北宋	316	2.25	12	景德元寶	北宋	137	2.35	12	景德元寶	北宋	262	2.19
13	景德元寶	北宋	254	2.02	13	景德元寶	北宋	288	2.05	13	嘉祐通寶	北宋	123	2.11	13	天禧通寶	北宋	252	2.11
14	治平元寶	北宋	238	1.89	14	天禧通寶	北宋	273	1.94	14	天禧通寶	北宋	121	2.08	14	治平元寶	北宋	209	1.75
15	咸平元寶	北宋	217	1.72	15	治平元寶	北宋	241	1.71	15	咸平元寶	北宋	101	1.74	15	元符通寶	北宋	197	1.65
明銭総計			0	0.00	明銭総計			0	0.00	明銭総計			0	0.00	明銭総計			0	0.00
最古銭：八銖半兩				最古銭：開元通寶				最古銭：開元通寶				最古銭：開元通寶							
最新銭：淳祐元寶				最新銭：咸淳元寶				最新銭：至大通寶				最新銭：至大通寶							
名称		時期	調査枚数	名称		時期	調査枚数	名称		時期	調査枚数	名称		時期	調査枚数				
⑤塩野(兵庫)			2期	50555	⑥中村岡の久保(愛媛)			2期	62028	⑦吉田若宮1次(長野)			3期	74740	⑧社口田(愛知)			3期	26532
順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)
1	皇宋通寶	北宋	6377	12.61	1	皇宋通寶	北宋	8514	13.73	1	皇宋通寶	北宋	9681	12.95	1	皇宋通寶	北宋	3540	13.34
2	元豊通寶	北宋	6117	12.10	2	元豊通寶	北宋	7383	11.90	2	元豊通寶	北宋	8851	11.84	2	元豊通寶	北宋	3294	12.42
3	熙寧元寶	北宋	4706	9.31	3	熙寧元寶	北宋	6028	9.72	3	熙寧元寶	北宋	7281	9.74	3	熙寧元寶	北宋	2553	9.62
4	元祐通寶	北宋	4656	9.21	4	元祐通寶	北宋	5809	9.37	4	元祐通寶	北宋	6935	9.28	4	元祐通寶	北宋	2357	8.88
5	開元通寶	唐	4354	8.61	5	開元通寶	唐	5214	8.41	5	開元通寶	唐	6272	8.39	5	開元通寶	唐	2100	7.91
6	天聖元寶	北宋	2433	4.81	6	天聖元寶	北宋	2999	4.83	6	天聖元寶	北宋	3679	4.92	6	天聖元寶	北宋	1283	4.84
7	政和通寶	北宋	2022	4.00	7	紹聖元寶	北宋	2684	4.33	7	紹聖元寶	北宋	3232	4.32	7	紹聖元寶	北宋	1177	4.44
8	紹聖元寶	北宋	2006	3.97	8	聖宋元寶	北宋	2538	4.09	8	政和通寶	北宋	3124	4.18	8	聖宋元寶	北宋	1103	4.16
9	聖宋元寶	北宋	1911	3.78	9	政和通寶	北宋	2381	3.84	9	聖宋元寶	北宋	3105	4.15	9	政和通寶	北宋	1093	4.12
10	祥符元寶	北宋	1360	2.69	10	祥符元寶	北宋	1581	2.55	10	祥符元寶	北宋	1921	2.57	10	嘉祐通寶	北宋	671	2.53
11	嘉祐通寶	北宋	1131	2.24	11	嘉祐通寶	北宋	1490	2.40	11	嘉祐通寶	北宋	1768	2.37	11	祥符元寶	北宋	641	2.42
12	景德元寶	北宋	1058	2.09	12	景德元寶	北宋	1345	2.17	12	景德元寶	北宋	1621	2.17	12	天禧通寶	北宋	577	2.17
13	天禧通寶	北宋	1011	2.00	12	天禧通寶	北宋	1345	2.17	13	天禧通寶	北宋	1616	2.16	13	景德元寶	北宋	538	2.03
14	治平元寶	北宋	911	1.80	14	治平元寶	北宋	1109	1.79	14	治平元寶	北宋	1451	1.94	14	治平元寶	北宋	514	1.94
15	至道元寶	北宋	823	1.63	15	至道元寶	北宋	1035	1.67	15	至道元寶	北宋	1247	1.67	15	至道元寶	北宋	490	1.85
明銭総計			0	0.00	明銭総計			0	0.00	明銭総計			1	0.00	明銭総計			23	0.09
最古銭：四銖半兩				最古銭：四銖半兩				最古銭：八銖半兩				最古銭：四銖半兩							
最新銭：至大通寶				最新銭：至大通寶				最新銭：至大通寶				最新銭：大中通寶							
名称		時期	調査枚数	名称		時期	調査枚数	名称		時期	調査枚数	名称		時期	調査枚数				
⑨浪岡城跡 SP11(青森)			4期	5971	⑩能ヶ谷(東京)			4期	81831	⑪四ツ枝(静岡)			4期	4133	⑫善福寺南(広島)			4期	16353
順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)
1	皇宋通寶	北宋	546	9.14	1	元豊通寶	北宋	9693	11.85	1	皇宋通寶	北宋	456	11.03	1	永樂通寶	明	1772	10.84
2	洪武通寶	明	533	8.93	2	皇宋通寶	北宋	9550	11.67	2	元豊通寶	北宋	422	10.21	2	元豊通寶	北宋	1736	10.62
3	元豊通寶	北宋	500	8.37	3	熙寧元寶	北宋	7769	9.49	3	熙寧元寶	北宋	351	8.49	3	皇宋通寶	北宋	1709	10.45
4	永樂通寶	明	483	8.09	4	元祐通寶	北宋	7316	8.94	4	元祐通寶	北宋	326	7.89	4	熙寧元寶	北宋	1322	8.08
5	熙寧元寶	北宋	407	6.82	5	開元通寶	唐	6033	7.37	5	開元通寶	唐	296	7.16	5	元祐通寶	北宋	1281	7.83
6	元祐通寶	北宋	401	6.72	6	天聖元寶	北宋	3703	4.53	6	永樂通寶	明	295	7.14	6	開元通寶	唐	1082	6.62
7	無文銭	日本	378	6.33	7	永樂通寶	明	3519	4.30	7	天聖元寶	北宋	215	5.20	7	洪武通寶	明	742	4.54
8	開元通寶	唐	367	6.15	8	紹聖元寶	北宋	3049	3.73	8	紹聖元寶	北宋	159	3.85	8	天聖元寶	北宋	685	4.19
9	天聖元寶	北宋	225	3.77	9	洪武通寶	明	3030	3.70	9	聖宋元寶	北宋	155	3.75	9	紹聖元寶	北宋	610	3.73
10	聖宋元寶	北宋	200	3.35	10	政和通寶	北宋	2947	3.60	10	政和通寶	北宋	146	3.53	10	政和通寶	北宋	562	3.44
11	紹聖元寶	北宋	194	3.25	11	聖宋元寶	北宋	2923	3.57	11	洪武通寶	明	109	2.64	11	聖宋元寶	北宋	554	3.39
12	政和通寶	北宋	179	3.00	12	祥符元寶	北宋	1864	2.28	11	嘉祐通寶	北宋	109	2.64	12	祥符元寶	北宋	378	2.31
13	祥符元寶	北宋	107	1.79	13	嘉祐通寶	北宋	1656	2.02	13	祥符元寶	北宋	90	2.18	13	嘉祐通寶	北宋	343	2.10
13	嘉祐通寶	北宋	107	1.79	14	天禧通寶	北宋	1626	1.99	14	天禧通寶	北宋	89	2.15	14	天禧通寶	北宋	303	1.85
15	景德元寶	北宋	93	1.56	15	景德元寶	北宋	1618	1.98	15	景德元寶	北宋	82	1.98	15	景德元寶	北宋	300	1.83
明銭総計			1020	17.08	明銭総計			6593	8.06	明銭総計			405	9.80	明銭総計			2527	15.45
最古銭：開元通寶				最古銭：四銖半兩				最古銭：開元通寶				最古銭：五銖							
最新銭：永樂通寶				最新銭：永樂通寶				最新銭：永樂通寶				最新銭：永樂通寶							

特に7、8期において15～20%前後の事例が主体となり、総じて明銭比率の増加傾向は続いている。また、多くの事例で永樂通寶が銭種別1位となっている。その中で目を引くのが6期の宮出出土銭(三重県)、7期の下石原遺跡出土銭(東京都)で、永樂通寶が極端に多数を占める事例である。前者は全体の68.06%、後者は75.40%にも達する。両事例共、容器の年代観は16世紀後半の帰属が推定されており(生田1996、荒川2001)、9期に帰属が降る可能性を持つ。該期の唐宋銭における銭種別順位について見ると、6期以降、グループ間における序列が若干乱れた事例が散見されるようになる。6期の葛西城第6次調査出土銭(東京都)では、グループ①の皇宋通寶が枚数を減らしてグループ②に順位を下げ、栃木出土銭(熊本県)では、グループ③、④間の銭種で順位の入替わりが生じている。7期の大久保山遺跡ⅢA地区出土銭(埼玉県)、8期の小重遺跡出土銭(新潟県)では、共にグループ①、②間での順位の入替わりが確認できる。このように6～8期の資料では、グループを超えた銭種順位の移動が認められる事例と、従前と変わらずグループの序列に乱れない事例とが混在する⁽⁷⁾。

続く9、10期では、事例が少数のため今後の資料増加に際して再度検討が必要と考えるが、現状ではグループを超えた順位移動を為す事例が主体となる(表76)。既述したように、最新銭初鑄年による時期区分では帰属時期幅を絞り込めなため、当該現象の初現時期は不詳だが、6期の葛西城における遺構(第83号井戸)、栃木の容器(備前焼三耳壺)の帰属時期を参考に勘案すると⁽⁸⁾、現状では大掴みながら15世紀後半から16世紀前期頃に求められる。このような唐宋銭におけるグループを超えた順位変動の発現は、1期～5期に見られた精銭における安定状態が変容する嚆矢と評価したい。

9期は、ヴェトナム銭が年代決定銭となっている(表5)。ヴェトナムの後黎(前期)や莫朝における諸銭の出土状況を検討した永井氏は、15世紀代に鑄造された後黎(前期)銭は16世紀の中頃まで渡来していないことを明らかにし、その背景をヴェトナムとの交易ルートの変化に求め、当該諸銭の渡来はヴェトナムとの直接交易によるものという興味深い見解を示した(永井2001b・c)。この成果により、ヴェトナム後黎(前期)、莫朝の諸銭を含む資料は、16世紀第3四半期(1560年代)から17世紀第1四半期に比定されることとなり、時期区分における9期が設定された。表76の菊間出土銭(千葉県)は、明銭(永樂通寶)の比率がやや高いが上位銭種グループ間の順位変動はなく、8期以前における多くの事例と同様な傾向を示す。一方、一乗谷朝倉氏遺跡第57次調査出土銭(福井県)は、銭貨を検出した井戸が朝倉氏が滅亡した天正元年(1573)まで機能していたとの調査所見から、滅亡時に一括投棄されたと推定されている(永井2001b)。その内容は8期までの主たる傾向とは異なり、明銭比率は2.13%と低く、唐宋銭による上位銭種の順位も①～④の全てのグループで入れ替わり、前段階までの事例と比較して変動が顕著となる。さらに、16世紀第4四半期に比定される青森県の新城第2次出土銭は、続く10期の堺環濠都市遺跡SKT448-3出土銭(大阪府)と共に、模鑄銭が極めて多数を占め、従前事例とは全く異なる組成となる。少数派となった唐宋銭の銭種別順位の乱れは著しく(表76)、もはや比較対象とならないことは明らかである。一方、先述した宮出(三重県)、下石原遺跡(東京都)例は、永樂通寶の占める比率が極端に高い事例であるが(表75)、いずれも菊間と同様に唐宋銭のグループ序列に乱れないことを重視すれば、9期帰属と仮定しても新城第2次の帰属時期(16世紀第4四半期)までは降らない可能性を考える。いずれにせよ、該期事例の内容は多様ながら、悪銭が極端な高率を示す事例が現れ、銭種構成の乱れが顕在化する画期と考えられる。

上述した9、10期における銭種構成の大きな変化の背景については、文献史学による成果が参考となる。繰り返しとなるが、永禄12年(1569)の織田信長による撰銭令以前は、撰銭による排除対象を

表75 埋蔵銭事例における銭種別枚数上位一覧(2) 丸数字は文献番号(本節末尾参照)

名称					時期					調査枚数					名称					時期					調査枚数																																		
⑬石白1次(新潟)					5期					169872					⑭北坂梨(熊本)					5期					14559					⑮葛西城第6次(東京)					6期					4718					⑯武部(石川)					6期					11008				
順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)																									
1	皇宋通寶	北宋	18151	10.69	1	皇宋通寶	北宋	1642	11.28	1	元豊通寶	北宋	544	11.53	1	元豊通寶	北宋	1261	11.46																																								
2	元豊通寶	北宋	17218	10.14	2	永樂通寶	明	1600	10.99	2	永樂通寶	明	491	10.41	2	皇宋通寶	北宋	1190	10.81																																								
3	永樂通寶	明	15722	9.26	3	元豊通寶	北宋	1580	10.85	3	熙寧元寶	北宋	433	9.18	3	元祐通寶	北宋	997	9.06																																								
4	熙寧元寶	北宋	14719	8.66	4	元祐通寶	北宋	1125	7.73	4	皇宋通寶	北宋	404	8.56	4	熙寧元寶	北宋	906	8.23																																								
5	元祐通寶	北宋	13274	7.81	5	熙寧元寶	北宋	1124	7.72	5	元祐通寶	北宋	356	7.55	5	永樂通寶	明	881	8.00																																								
6	開元通寶	唐	10927	6.43	6	開元通寶	唐	956	6.57	6	開元通寶	唐	302	6.40	6	開元通寶	唐	798	7.25																																								
7	天聖元寶	北宋	7121	4.19	7	天聖元寶	北宋	652	4.48	7	洪武通寶	明	214	4.54	7	天聖元寶	北宋	514	4.67																																								
8	洪武通寶	明	6969	4.10	8	洪武通寶	明	549	3.77	8	天聖元寶	北宋	212	4.49	8	紹聖元寶	北宋	446	4.05																																								
9	紹聖元寶	北宋	5990	3.53	9	紹聖元寶	北宋	507	3.48	9	聖宋元寶	北宋	166	3.52	9	聖宋元寶	北宋	391	3.55																																								
10	聖宋元寶	北宋	5845	3.44	10	政和通寶	北宋	479	3.29	10	紹聖元寶	北宋	141	2.99	10	政和通寶	北宋	380	3.45																																								
11	政和通寶	北宋	5434	3.20	11	聖宋元寶	北宋	465	3.19	11	政和通寶	北宋	139	2.95	11	祥符元寶	北宋	279	2.53																																								
12	祥符元寶	北宋	3992	2.35	12	祥符元寶	北宋	371	2.55	12	祥符元寶	北宋	109	2.31	12	景德元寶	北宋	262	2.38																																								
13	天禧通寶	北宋	3286	1.93	13	景德元寶	北宋	308	2.12	13	嘉祐通寶	北宋	108	2.29	13	天禧通寶	北宋	237	2.15																																								
14	景德元寶	北宋	3231	1.90	14	嘉祐通寶	北宋	301	2.07	14	治平元寶	北宋	90	1.91	14	治平元寶	北宋	218	1.98																																								
15	嘉祐通寶	北宋	3169	1.87	15	天禧通寶	北宋	295	2.03	15	景德元寶	北宋	89	1.89	15	嘉祐通寶	北宋	211	1.92																																								
明銭総計					22772					13.41					明銭総計					2157					14.82					明銭総計					721					15.28					明銭総計					1048					9.52				
最古銭：開元通寶										最古銭：開元通寶										最古銭：開元通寶										最古銭：開元通寶																													
最新銭：朝鮮通寶										最新銭：朝鮮通寶										最新銭：宣徳通寶										最新銭：宣徳通寶																													
名称					時期					調査枚数					名称					時期					調査枚数					名称					時期					調査枚数																			
⑰宮出(三重)					6期					12619					⑱石在町(兵庫)					6期					19803					⑲下右田遺跡(山口)					6期					13495					⑳栃木(熊本)					6期					7870				
1	永樂通寶	明	8588	68.06	1	永樂通寶	明	2224	11.23	1	永樂通寶	明	1709	12.66	1	永樂通寶	明	1294	16.44																																								
2	皇宋通寶	北宋	497	3.94	2	皇宋通寶	北宋	2047	10.34	2	元豊通寶	北宋	1382	10.24	2	元豊通寶	北宋	886	11.26																																								
3	元豊通寶	北宋	469	3.72	3	元豊通寶	北宋	1962	9.91	3	皇宋通寶	北宋	1297	9.61	3	皇宋通寶	北宋	785	9.97																																								
4	元祐通寶	北宋	372	2.95	4	元祐通寶	北宋	1593	8.04	4	熙寧元寶	北宋	1028	7.62	4	元祐通寶	北宋	605	7.69																																								
5	熙寧元寶	北宋	365	2.89	5	熙寧元寶	北宋	1559	7.87	5	元祐通寶	北宋	992	7.35	5	熙寧元寶	北宋	565	7.18																																								
6	開元通寶	唐	279	2.21	6	開元通寶	唐	1196	6.04	6	開元通寶	唐	891	6.60	6	開元通寶	唐	413	5.25																																								
7	政和通寶	北宋	188	1.49	7	天聖元寶	北宋	868	4.38	7	洪武通寶	明	650	4.82	7	天聖元寶	北宋	356	4.52																																								
8	天聖元寶	北宋	181	1.43	8	洪武通寶	明	733	3.70	8	天聖元寶	北宋	514	3.81	8	紹聖元寶	北宋	249	3.16																																								
9	聖宋元寶	北宋	180	1.43	9	紹聖元寶	北宋	646	3.26	9	紹聖元寶	北宋	461	3.42	9	祥符元寶	北宋	223	2.83																																								
10	紹聖元寶	北宋	154	1.22	10	聖宋元寶	北宋	625	3.16	10	政和通寶	北宋	433	3.21	10	聖宋元寶	北宋	220	2.80																																								
11	景德元寶	北宋	91	0.72	11	政和通寶	北宋	587	2.96	11	聖宋元寶	北宋	417	3.09	11	天禧通寶	北宋	187	2.38																																								
12	天禧通寶	北宋	87	0.69	12	祥符元寶	北宋	444	2.24	12	祥符元寶	北宋	303	2.25	12	政和通寶	北宋	186	2.36																																								
13	祥符元寶	北宋	83	0.66	13	嘉祐通寶	北宋	395	1.99	13	天禧通寶	北宋	260	1.93	13	洪武通寶	明	179	2.27																																								
14	大觀通寶	北宋	82	0.65	14	景德元寶	北宋	389	1.96	14	嘉祐通寶	北宋	243	1.80	14	景德元寶	北宋	175	2.22																																								
15	宣徳通寶	明	81	0.64	15	天禧通寶	北宋	382	1.93	15	治平元寶	北宋	225	1.67	15	至道元寶	北宋	164	2.08																																								
明銭総計					8738					69.24					明銭総計					3066					15.48					明銭総計					2545					18.86					明銭総計					1575					20.01				
最古銭：開元通寶										最古銭：開元通寶										最古銭：開元通寶										最古銭：開元通寶																													
最新銭：宣徳通寶										最新銭：宣徳通寶										最新銭：宣徳通寶										最新銭：宣徳通寶																													
名称					時期					調査枚数					名称					時期					調査枚数					名称					時期					調査枚数																			
㉑大和田(青森)					7期					11147					㉒大久保山ⅢA地区(埼玉)					7期					8949					㉓福生市文化財包蔵地19号遺跡(東京)					7期					5075					㉔下石原(東京)					7期					10027				
1	永樂通寶	明	1443	12.95	1	永樂通寶	明	1253	14.00	1	永樂通寶	明	681	13.42	1	永樂通寶	明	7560	75.40																																								
2	模範錢	日本	1300	11.66	2	洪武通寶	明	1003	11.21	2	皇宋通寶	北宋	519	10.23	2	元豊通寶	北宋	285	2.84																																								
3	元豊通寶	北宋	981	8.80	3	模範錢	日本	894	9.99	3	元豊通寶	北宋	471	9.28	3	皇宋通寶	北宋	265	2.64																																								
4	皇宋通寶	北宋	964	8.65	4	皇宋通寶	北宋	691	7.72	4	熙寧元寶	唐	409	8.06	4	開元通寶	唐	232	2.31																																								
5	元祐通寶	北宋	749	6.72	5	熙寧元寶	北宋	593	6.63	5	開元通寶	北宋	381	7.51	5	熙寧元寶	北宋	223	2.22																																								
6	洪武通寶	明	744	6.67	6	元豊通寶	北宋	568	6.35	6	元祐通寶	北宋	354	6.98	6	元祐通寶	北宋	191	1.90																																								
7	熙寧元寶	北宋	712	6.39	7	開元通寶	唐	566	6.32	7	洪武通寶	明	248	4.89	7	天聖元寶	北宋	125	1.25																																								
8	開元通寶	唐	630	5.65	8	元祐通寶	北宋	441	4.93	8	天聖元寶	北宋	191	3.76	8	紹聖元寶	北宋	98	0.98																																								
9	天聖元寶	北宋	345	3.10	9	政和通寶	北宋	267	2.98	9	聖宋元寶	北宋	181	3.57	9	聖宋元寶	北宋	96	0.96																																								
10	紹聖元寶	北宋	341	3.06	10	天聖元寶	北宋	262	2.93	10	紹聖元寶	北宋	163	3.21	10	洪武通寶	明	92	0.92																																								
11	聖宋元寶	北宋	301	2.70	11	聖宋元寶	北宋	227	2.54	11	政和通寶	北宋	159	3.13	11	政和通寶	北宋	88	0.88																																								
12	政和通寶	北宋	297	2.66	12	紹聖元寶	北宋	212	2.37	12	祥符元寶	北宋	108	2.13	12	祥符元寶	北宋	80	0.80																																								
13	祥符元寶	北宋	193	1.73	13	祥符元寶	北宋	142	1.59	13	嘉祐通寶	北宋	103	2.03	13	景德元寶	北宋	59	0.59																																								
14	景德元寶	北宋	175	1.57	14	天禧通寶	北宋	138	1.54	14	景德元寶	北宋	87	1.71	14	天禧通寶	北宋	55	0.55																																								
15	天禧通寶	北宋	161	1.44	15	治平元寶	北宋	119	1.33	15	天禧通寶	北宋	84	1.66	15	祥符通寶	北宋	54	0.54																																								
明銭総計					2234					20.04					明銭総計					2376					26.55					明銭総計					964					19.00					明銭総計					7670					76.49				
最古銭：開元通寶										最古銭：開元通寶										最古銭：開元通寶										最古銭：開元通寶																													
最新銭：世高通寶										最新銭：世高通寶										最新銭：世高通寶										最新銭：世高通寶																													

表77 埋蔵銭事例における銭種別枚数上位一覧(4) 丸数字は文献番号(本節末尾参照)

名称					時期					調査枚数									
名称					時期					調査枚数									
③下坂本清合遺跡(鳥取)					4期					15446									
⑨山内(大阪)					4期					10951									
⑩一乗谷朝倉氏第52次(石川)					6期					3784									
⑭虫生館(滋賀)					6期					4692									
順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)					
1	元豊通寶	北宋	2160	13.98	1	元豊通寶	北宋	1678	15.32	1	皇宋通寶	北宋	495	13.08					
2	皇宋通寶	北宋	2015	13.05	2	皇宋通寶	北宋	1605	14.66	2	元豊通寶	北宋	474	12.53					
3	元祐通寶	北宋	1627	10.53	3	元祐通寶	北宋	1201	10.97	3	熙寧元寶	北宋	394	10.41					
4	熙寧元寶	北宋	1338	8.66	4	熙寧元寶	北宋	944	8.62	4	元祐通寶	北宋	352	9.30					
5	天聖元寶	北宋	887	5.74	5	天聖元寶	北宋	579	5.29	5	開元通寶	唐	253	6.69					
6	紹聖元寶	北宋	793	5.13	6	紹聖元寶	北宋	551	5.03	6	永樂通寶	明	169	4.47					
7	開元通寶	唐	692	4.48	7	聖宋元寶	北宋	467	4.26	7	紹聖元寶	北宋	167	4.41					
8	聖宋元寶	北宋	593	3.84	8	祥符元寶	北宋	349	3.19	8	天聖元寶	北宋	152	4.02					
9	祥符元寶	北宋	451	2.92	9	開元通寶	唐	327	2.99	9	聖宋元寶	北宋	138	3.65					
10	嘉祐通寶	北宋	448	2.90	10	嘉祐通寶	北宋	322	2.94	10	政和通寶	北宋	126	3.33					
11	天禧通寶	北宋	436	2.82	11	景德元寶	北宋	292	2.67	11	嘉祐通寶	北宋	100	2.64					
12	景德元寶	北宋	386	2.50	12	咸平元寶	北宋	264	2.41	12	祥符元寶	北宋	98	2.59					
13	政和通寶	北宋	378	2.45	13	天禧通寶	北宋	256	2.34	13	天禧通寶	北宋	90	2.38					
14	治平元寶	北宋	354	2.29	14	治平元寶	北宋	246	2.25	14	景德元寶	北宋	75	1.98					
15	祥符通寶	北宋	305	1.97	15	至道元寶	北宋	229	2.09	15	治平元寶	北宋	72	1.90					
明銭総計					290					1.88									
最古銭：開元通寶					最新銭：永樂通寶					最古銭：開元通寶					最新銭：宣德通寶				
名称	時期	調査枚数	名称	時期	調査枚数	名称	時期	調査枚数	名称	時期	調査枚数								
⑪岸田(兵庫)					8期					8752									
⑯中屋遺跡(岡山)					9期					5133									
⑰根岸遺跡(埼玉)					4期					4851									
⑱平人触(長崎)					9期					4165									
順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)	順位	名称	国名	枚数	率(%)					
1	元豊通寶	北宋	1095	12.51	1	開元通寶	唐	729	14.20	1	天聖元寶	北宋	608	12.53					
2	皇宋通寶	北宋	992	11.33	2	元豊通寶	北宋	623	12.14	2	天禧通寶	北宋	427	8.80					
3	元祐通寶	北宋	810	9.26	3	皇宋通寶	北宋	522	10.17	3	皇宋通寶	北宋	394	8.12					
4	永樂通寶	明	786	8.98	4	元祐通寶	北宋	398	7.75	4	元豊通寶	北宋	388	8.00					
5	熙寧元寶	北宋	725	8.28	5	熙寧元寶	北宋	379	7.38	5	永樂通寶	明	381	7.85					
6	天聖元寶	北宋	435	4.97	6	天聖元寶	北宋	306	5.96	6	熙寧元寶	北宋	338	6.97					
7	開元通寶	唐	434	4.96	7	政和通寶	北宋	207	4.03	7	元祐通寶	北宋	310	6.39					
8	紹聖元寶	北宋	382	4.36	8	紹聖元寶	北宋	193	3.76	8	開元通寶	唐	256	5.28					
9	聖宋元寶	北宋	333	3.80	9	聖宋元寶	北宋	158	3.08	8	至道元寶	北宋	256	5.28					
10	祥符元寶	北宋	267	3.05	10	祥符元寶	北宋	152	2.96	10	洪武通寶	明	175	3.61					
11	天禧通寶	北宋	209	2.39	11	天禧通寶	北宋	134	2.61	11	聖宋元寶	北宋	135	2.78					
12	政和通寶	北宋	207	2.37	12	嘉祐通寶	北宋	123	2.40	12	紹聖元寶	北宋	130	2.68					
13	景德元寶	北宋	192	2.19	13	景德元寶	北宋	120	2.34	13	政和通寶	北宋	110	2.27					
14	嘉祐通寶	北宋	183	2.09	14	治平元寶	北宋	111	2.16	14	祥符元寶	北宋	100	2.06					
15	治平元寶	北宋	176	2.01	15	祥符通寶	北宋	94	1.83	15	嘉祐通寶	北宋	93	1.92					
明銭総計					814					9.30									
最古銭：開元通寶					最新銭：弘治通寶					最古銭：開元通寶					最新銭：洪順通寶				

4 「精銭の埋蔵銭」における銭種別組成及び順位

前項にて、時期区分1～10期における埋蔵銭の主要事例について、明銭との組成比率と出土銭の骨格を為す唐宋銭(精銭)における上位銭種の順位変動に着目し、概観してきた。表77には、下坂本清合遺跡出土銭と同様に模鑄銭を含まない、「精銭の埋蔵銭」と評価される事例(本遺跡を含めて6例)を示した。これらは模鑄銭を排除した、すなわち撰銭行為が介在した資料と位置付けられており、本項では「精銭の埋蔵銭」における銭種比率・構成における詳細や、国・王朝別組成の比較等によって、特徴の抽出を試みたい。また、表77には、人的な操作が加わったことが明瞭な二事例(埼玉県根岸遺跡出土銭、長崎県平人触出土銭)のデータも併せて掲載した。

まず、明銭の組成率に注目すると、全般に低率であることが明瞭で、「精銭の埋蔵銭」6事例のうち、岸田出土銭(兵庫県)を除き、5%以下となる。山内出土銭(大阪府)の0.06%を筆頭に、中屋遺跡出土銭(岡山県)の0.08%、そして下坂本清合遺跡の1.88%はとりわけ低率と言える。一乗谷朝倉氏遺跡第52次調査出土銭(福井県)の4.60%、虫生館出土銭(滋賀県)の3.28%についても、前項で示

した諸事例に比して明らかに低い。さらに明銭における内訳を参照すると（表78）、特に洪武通寶の検出数が少ないことが指摘できる。そもそも中国における鑄造規模が小さいことから（大田1997）、宣徳通寶と弘治通寶の検出数が少ないのは当然として、前項で示した各事例の銭種別順位に示すように、洪武通寶は永樂通寶に次いで度々上位銭種に名を連ねており、一定量以上の流通が確認できる。その中で表78の「精銭の埋蔵銭」諸事例における洪武通寶検出率（0.01～0.55%）は、際立って低い。比較的明銭を含む岸田出土銭においても、洪武通寶は27枚（0.31%）で少数となる。本知見は、前項で概観した撰銭令において、明銭の中でも洪武通寶が特に低評価であったこととリンクすると考えられる。

既に永井氏により指摘が為されているが（永井2005）、銭種分類上の注目事項として、元銭がある。中世の出土銭に見られる元銭は、至大通寶、大元通寶（当十）及び至正通寶（小平、折二、当三）があり（永井2002）、そのうち至大通寶は最新銭による時期区分における2期の時期決定銭となっているが、概して検出量は多くない。永井氏によれば、平均検出率は1枚/4,779枚という（永井2001a）。今回示した「精銭の埋蔵銭」6例のうち、虫生館（至大通寶1枚検出）を除き、元銭は含まれていない。ここで全国の主要埋蔵銭データを参照すると、注目すべきは元銭（至大通寶もしくは至正通寶）は検出量こそ少ないものの、2期以降ほとんどの事例において確認できることである。元銭を含んでいないのは上記「精銭の埋蔵銭」5例と、5期の野田山出土銭（福岡県）、6期の宮出出土銭（三重県）、7期の島野口出土銭（岐阜県）、9期の菊間、平人触出土銭（長崎県）、10期の堺環濠都市遺跡SKT448-3となり、「精銭の埋蔵銭」事例を除けば僅か6例となる。宮出は先述の通り永樂通寶の割合が特に高い事例で、他銭種の検出数は4,031枚に止まる。島野口（5,404枚）、菊間（3,269枚）も調査枚数は比較的少数であり、「偶然」元銭を含まなかった可能性について指摘はできるだろう。平人触は全体の9割以上を永樂通寶が占める特異な事例で（残る銭種の枚数は僅か338枚）、各銭は容態の良さから特定の銭種を恣意的に収集した可能性が考えられており（櫻木2009）、むしろ恣意的に選択するという意味では「精銭の埋蔵銭」に類似するが、選択の程度が極端に過ぎ、ここでの検討対象からは除外できよう。同様に、洪武通寶が全体の99.46%を占めるという野田山（櫻木1997）もイレギュラーな事例と言える。堺環濠都市遺跡SKT448-3も、先述したように模鑄銭が大多数を占める極端な組成となっており、元銭検出の有無について他資料と同列には扱えないと考える。以上から、基本的には、埋蔵銭事例において元銭を含有する確率は極めて高いことが指摘でき、「精銭の埋蔵銭」における元銭不含率（5/6）の高さは明白である。元銭のうち、検出数の中心を担う至大通寶は、肉厚でやや小ぶりであることから、人為により省かれる対象であった可能性が指摘されている（永井2002・2005）。先述した撰銭令の多くにおいて忌避対象であった洪武通寶も手替りが多く、銭形も大小あることが指摘されており、両銭には共通点が見出せる（永井2002・2005）。至大通寶は洪武通寶のように数的に主要な銭種ではないことから法令等史料には現れず、不文律に止まっていたとしても不思議ではないだろう。

次に、前項で検討した、銭種構成において基幹となる唐宋銭のグループ間移動について、概観していきたい。「精銭の埋蔵銭」6事例のうち、下坂本清合遺跡、山内、岸田、中屋遺跡においてグループ間の順位変動が確認できる。その中で、下坂本清合遺跡、山内、岸田の3事例は、順位が変動する銭種が同じとなり、興味深い結果となっている。すなわち、いずれもグループ②の開元通寶とグループ③の政和通寶が率を減じ、開元通寶は下坂本清合遺跡・岸田ではグループ③へ、山内ではグループ

表78 精銭主体の埋蔵銭における明銭の内訳

時期	名称	所在地	洪武通寶 (比率%)	永樂通寶 (比率%)	宣徳通寶 (比率%)	弘治通寶 (比率%)	明銭総計	
							枚数	組成比率 (%)
4	山内	大阪府能勢町	3 (0.03)	4 (0.04)	0	0	7	0.06
4	下坂本清合遺跡	鳥取県鳥取市	2 (0.01)	288 (1.86)	0	0	290	1.88
6	一乗谷朝倉氏第52次	福井県福井市	4 (0.11)	169 (4.47)	1 (0.03)	0	174	4.60
6	虫生館	滋賀県野洲市	15 (0.32)	137 (2.92)	2 (0.04)	0	154	3.28
8	岸田	兵庫県宍粟市	27 (0.31)	786 (8.98)	14 (0.16)	2 (0.02)	829	9.47
9	中屋遺跡	岡山県赤磐市	28 (0.55)	16 (0.31)	1 (0.02)	0	45	0.88

④に順位を落としている。政和通寶は3例共にグループ④へ順位を落とし、特に山内では15位圏外となっている。一方、中屋遺跡では、逆に開元通寶が率を増やし、グループ③からグループ①へ移動している（検出枚数1位）。上記ではいずれも開元通寶もしくは政和通寶が順位を違えており、何らかの意味を持つ可能性が想起されるが具体的には判然とせず、今少し類例の蓄積が必要である。一方、一乗谷朝倉氏遺跡第52次調査、虫生館ではグループ間順位変動が認められず、「精銭の埋蔵銭」中においても差が確認できる。すなわち、「精銭の埋蔵銭」には撰銭行為が強く反映すると考えられるが、その程度は個々で差があり、それがグループ間における銭種順位変動の有無に表れた可能性がある。

ここで、特異な事例として根岸遺跡出土銭（埼玉県）を取り上げたい。この事例は最新銭による時期区分では4期で、銭種の意図的な選択を経たことが明瞭な希有な事例である。具体的には、天聖元寶、天禧通寶及び至道元寶を意図的に集めた緡が11緡確認でき、さらには天聖元寶は真書体、至道元寶は行書体と草書体のみを選別しており、書体選択にまで人為が及ぶ（深谷市教育委員会2000、中島圭2005）。ただし、表77において銭種別上位を見ると、上記3種と明銭を除けば各グループの序列に乱れは認められない。また、上述した元銭について参照すると、根岸遺跡では至大通寶を検出しており（11枚）、銭種構成において人為が加わったことは確かだが、「精銭の埋蔵銭」におけるそれとは異なる観念によるものと理解できる。

下坂本清合遺跡・山内出土銭は最新銭の時期区分においては4期で、既述のとおり他事例では6期よりグループ間における銭種の移動が散見されるため、一見時期的に先行するように見えるが、容器の帰属時期から下坂本清合遺跡は16世紀前半、山内の丹波焼壺は15世紀後半頃（鋤柄1995、荒川2001）に比定されており、第3項で述べたグループ間における銭種順位移動が確認されはじめる時期に対して、齟齬はないと考える。中屋遺跡出土銭はヴェトナムの後黎（前期）銭を含む9期の資料だが、該期における銭種別順位序列が大きく乱れる、もしくは破綻する他事例と比較して、グループ間移動は開元通寶一種のみと度合いは小さく、従前の時期区分でみられた現象とは逆に、撰銭行為により組成が整ったと感じさせる。

以上からグループ間における銭種順位の変動は、撰銭行為との関連性は高いと考えられるが、第3項の事例にもあるように、模鑄銭排除の有無に関わらず当現象は確認できるため、「精銭の埋蔵銭」を特徴付ける必須の属性ではなく、他の要素を踏まえた上での総合的な解釈が必要となるだろう。

5 国・王朝別組成比率

本項では、埋蔵銭の銭種構成における唐宋銭を中心としたいわゆる「精銭」の国別及び王朝別組成を素材として、検討を加えてみたい。この視点に関しては、永井氏による詳細な検討が既に為されており（永井2005）、本項の記載の多くが重複するが、本遺跡埋蔵銭を含め新事例が加わっていることもあり、このことを事前にお断りした上で、記述を進めることとする。表79は、各時期の埋蔵銭事例⁹⁾における国又は王朝別組成比率のうち、多数を占める唐宋銭（唐、北宋、南宋）、明銭を抜粋してその枚数と全体における比率を示したものである。表80は、集計対象から明銭とそれ以降に渡来した諸銭、模鑄銭、無文銭、慶長通寶を除いた組成比率で、その結果残るのは、埋蔵銭の基幹を為す唐宋銭を主体とした「精銭」のデータとなる。このような埋蔵銭の基礎となる部分は、時期区分のほぼ全体を通して普遍的であるため、比較対象としては有効と考える。精銭に該当する諸銭は、具体的には唐銭、北宋銭、南宋銭及びその他（古文銭、五代十国、遼、西夏、金、元、元末地方政権、高麗、ヴェトナムの丁・前黎、皇朝銭、島銭）となる。表中に網掛けを付したのは、前項で検討した「精銭の埋蔵銭」と評価される事例である。

1～3期は明銭の本格的な流入前に当たるため、表79において集計上除くのは模鑄銭、無文銭及び判読不明銭となる。該期において模鑄銭の検出率は低く、当然ながら表79、80の比率において大きな差は生じない。ただし、上千葉出土銭（東京都）は模鑄銭が515枚（3.66%）検出されており（表74）、若干の影響が認められる。表80において精銭の組成を参照すると、唐銭は8.85～9.61%、北宋銭は87.36～88.17%、南宋銭は2.46～2.70%と、事例による差はないと言っていい振れ幅である。

4期以降、永樂通寶が渡来銭の組成に加わると共に明銭の比率が総じて増加することは前項で述べたとおりである。その結果、表79における唐宋銭の組成比率は軒並み下がることになるが、表80の精銭に絞った組成比率では、4期の能ヶ谷出土銭（東京都）、5期の石白1次出土銭（新潟県）、6期の葛西城第6次調査出土銭（東京都）、石在町出土銭（兵庫県）においては、唐銭が8.12～8.52%、北宋銭が88.17～89.41%、南宋銭が1.89～2.36%と、1～3期とほぼ同様な比率を示しており、埋蔵銭の基盤を為す精銭の組成は、明銭の本格流入後も変化していないことが指摘できる。

一方、4期以降は本遺跡事例を含む「精銭の埋蔵銭」が認められるが、そのデータを参照すると、表79における北宋銭比率の高さが目を引く。特に本遺跡（92.33%）と大阪府の山内出土銭（95.94%）の数値は際立っている。当該事例において、明銭の検出率が極めて低いことは前項で述べたが、唐銭や南宋銭の比率も併せて低く、上述した時期区分を越え安定していた精銭の組成率に対して、その差はかなり明瞭である。6期の一乗谷朝倉氏遺跡第52次調査出土銭（福井県）、虫生館出土銭（滋賀県）も上記2例ほど顕著ではないが傾向は同じで、表80ではいずれも北宋銭の組成率は90%を超える高率を示している。このことから、程度の違いはあるものの模鑄銭を排除した埋蔵銭では北宋銭を意識的に選択したことが窺え、興味深い。

続く7・8期は、前項でも述べたように明銭比率の増加傾向は基本的に続き、模鑄銭検出数も増えてくる。7期の大和田出土銭（青森県）、大久保山遺跡ⅢA地区出土銭（埼玉県）は、明銭、模鑄銭共に比較的多数検出されており、その反映により表79における北宋銭の比率は50%台と従前事例に比べ低率となる。ただし大間見友久出土銭（岐阜県）に見るように、7期の埋蔵銭事例の全体を俯瞰すると、6期以前の組成に準じる事例もみられ、実際は時期区分による比定年代幅の広さを色濃く反映している。8期の小重遺跡出土銭（新潟県）は模鑄銭の実態は不明瞭ながら、大和田、大久保山遺跡

表79 王朝別組成比率(全体：抜粋)

時期	名称(略称)	所在地	最古銭	最新銭	調査枚数	唐		北宋		南宋		明	
						枚数	比率(%)	枚数	比率(%)	枚数	比率(%)	枚数	比率(%)
1	①草戸千軒第35次	広島県福山市	八銖半両	淳祐元寶	12591	1201	9.54	10922	86.74	338	2.68	0	0.00
1	②上千葉	東京都葛飾区	開元通寶	咸淳元寶	14069	1216	8.64	11945	84.90	338	2.40	0	0.00
2	⑥中村岡の久保	愛媛県新居浜市	四銖半両	至大通寶	62028	5586	9.01	54452	87.79	1521	2.45	0	0.00
2	④引土	京都府舞鶴市	五銖(後漢)	至大通寶	11943	1038	8.69	10385	86.95	323	2.70	0	0.00
3	⑦吉田若宮1次	長野県塩尻市	八銖半両	大中通寶	74740	6585	8.81	65594	87.76	1942	2.60	1	0.00
4	⑩能ヶ谷	東京都町田市	四銖半両	永樂通寶	81831	6390	7.81	66404	81.15	1773	2.17	6593	8.06
4	⑨山内	大阪府能勢町	開元通寶	永樂通寶	10952	349	3.19	10507	95.94	57	0.52	7	0.06
4	⑬下坂本清合遺跡	鳥取県鳥取市	開元通寶	永樂通寶	15446	733	4.75	14262	92.33	123	0.80	290	1.88
5	⑬石白1次	新潟県湯沢町	開元通寶	朝鮮通寶	169872	11447	6.74	125835	74.08	3010	1.77	22772	13.41
6	⑮葛西城第6次	東京都葛飾区	開元通寶	宣徳通寶	4718	329	6.97	3495	74.08	105	2.23	717	15.20
6	⑮朝倉氏第52次	福井県福井市	開元通寶	宣徳通寶	3784	261	6.90	3297	87.13	32	0.85	174	4.60
6	⑯虫生館	滋賀県野洲市	開元通寶	宣徳通寶	4689	298	6.36	4150	88.51	52	1.11	154	3.28
6	⑰石在町	兵庫県西宮市	開元通寶	宣徳通寶	19803	1307	6.60	14332	72.37	303	1.53	3066	15.48
7	②大和田	青森県鯉ヶ沢町	開元通寶	世高通寶	11147	688	6.17	6590	59.12	165	1.48	2234	20.04
7	②大久保山ⅢA地区	埼玉県本庄市	開元通寶	世高通寶	8949	653	7.30	4744	53.01	133	1.49	2376	26.55
7	⑤大間見友久	岐阜県郡上郡大和町	開元通寶	世高通寶	10766	688	6.39	8327	77.35	198	1.84	1409	13.09
8	②小重遺跡	新潟県上越市	開元通寶	弘治通寶	28986	2791	9.63	16833	58.07	635	2.19	7543	26.02
8	⑦岸田	兵庫県宍粟市	開元通寶	弘治通寶	8752	464	5.30	7249	82.83	134	1.53	829	9.47
9	⑨新城2次	青森県青森市	開元通寶	弘治通寶	7019	82	1.17	418	5.96	9	0.13	48	0.68
9	⑨朝倉氏第57次	福井県福井市	開元通寶	嘉靖通寶	16594	1846	11.12	13273	79.99	485	2.92	354	2.13
9	⑨中屋遺跡	岡山県赤磐市	開元通寶	洪徳通寶	5133	768	14.96	4163	81.10	130	2.53	45	0.88
10	⑩堺環壕 SKT448-3	大阪府堺市	開元通寶	慶長通寶	4851	19	0.39	337	6.95	13	0.27	504	10.39

※調査結果全体のうち、唐宋銭、明銭を抜粋

表80 王朝別組成比率(明銭等を除く)

時期	名称(略称)	所在地	最古銭	最新銭	対象枚数	唐		北宋		南宋		その他	
						枚数	比率(%)	枚数	比率(%)	枚数	比率(%)	枚数	比率(%)
1	①草戸千軒第35次	広島県福山市	八銖半両	淳祐元寶	12502	1201	9.61	10922	87.36	338	2.70	41	0.33
1	②上千葉	東京都葛飾区	開元通寶	咸淳元寶	13547	1216	8.98	11945	88.17	338	2.50	48	0.35
2	⑥中村岡の久保	愛媛県新居浜市	四銖半両	至大通寶	61912	5586	9.02	54452	87.95	1521	2.46	353	0.57
2	④引土	京都府舞鶴市	五銖(後漢)	至大通寶	11816	1038	8.78	10385	87.89	323	2.73	70	0.59
3	⑦吉田若宮1次	長野県塩尻市	八銖半両	大中通寶	74394	6585	8.85	65594	88.17	1942	2.61	273	0.37
4	⑩能ヶ谷	東京都町田市	四銖半両	永樂通寶	74972	6390	8.52	66404	88.57	1773	2.36	405	0.54
4	⑨山内	大阪府能勢町	開元通寶	永樂通寶	10918	349	3.20	10507	96.24	57	0.52	5	0.05
4	⑬下坂本清合遺跡	鳥取県鳥取市	開元通寶	永樂通寶	15156	733	4.84	14262	94.10	123	0.81	38	0.25
5	⑬石白1次	新潟県湯沢町	開元通寶	朝鮮通寶	141025	11447	8.12	125835	89.23	3010	2.13	733	0.52
6	⑮葛西城第6次	東京都葛飾区	開元通寶	宣徳通寶	3964	329	8.30	3495	88.17	105	2.65	35	0.88
6	⑮朝倉氏第52次	福井県福井市	開元通寶	宣徳通寶	3604	261	7.24	3297	91.48	32	0.89	14	0.39
6	⑯虫生館	滋賀県野洲市	開元通寶	宣徳通寶	4516	298	6.60	4150	91.90	52	1.15	16	0.35
6	⑰石在町	兵庫県西宮市	開元通寶	宣徳通寶	16029	1307	8.15	14332	89.41	303	1.89	87	0.54
7	②大和田	青森県鯉ヶ沢町	開元通寶	世高通寶	7486	688	9.19	6590	88.03	165	2.20	43	0.57
7	②大久保山ⅢA地区	埼玉県本庄市	開元通寶	世高通寶	5595	653	11.67	4744	84.79	133	2.38	65	1.16
7	⑤大間見友久	岐阜県郡上郡大和町	開元通寶	世高通寶	9248	688	7.44	8327	90.04	198	2.14	35	0.38
8	②小重遺跡	新潟県上越市	開元通寶	弘治通寶	20495	2791	13.62	16833	82.13	635	3.10	236	1.15
8	⑦岸田	兵庫県宍粟市	開元通寶	弘治通寶	7867	464	5.90	7249	92.14	134	1.70	20	0.25
9	⑨新城2次	青森県青森市	開元通寶	弘治通寶	516	82	15.89	418	81.01	9	1.74	7	1.36
9	⑨朝倉氏第57次	福井県福井市	開元通寶	嘉靖通寶	15733	1846	11.73	13273	84.36	485	3.08	129	0.82
9	⑨中屋遺跡	岡山県赤磐市	開元通寶	洪徳通寶	5083	768	15.11	4163	81.90	130	2.56	22	0.43
10	⑩堺環壕 SKT448-3	大阪府堺市	開元通寶	慶長通寶	372	19	5.11	337	90.59	13	3.49	3	0.81

※明銭、朝鮮通寶、ヴェトナム後黎(前期)銭、ヴェトナム私鑄銭、琉球銭、模倣銭、無文銭、慶長通寶を除く

ⅢA地区と全般的な組成は似通っており、表79における北宋銭比率は58.07%と低い。上記事例を精銭における比率で見ると(表80)、大和田、大間見友久は6期までの事例に概ね通有な比率を示すが、大久保山遺跡ⅢA地区と小重遺跡は北宋銭比率がやや低く(84.79%、82.13%)、一方で唐銭の比率が上昇している(11.67%、13.62%)。この傾向は9期の諸例にも認められ(表80)、従前とは異なった方向性が看取できる。該期の「精銭の埋蔵銭」である岸田出土銭(兵庫県)は、明銭比率は比較的高

いものの、精銭における組成に目を移すと、北宋銭が92.14%と高率で、相対的に唐銭・南宋銭比率が低率となっており、4～6期における「精銭の埋蔵銭」と同傾向を示し、上記大久保山遺跡ⅢA地区と小重遺跡の組成とは一線を画する内容となっている。ここでも、加えられた人為的所作の度合が明瞭に反映している。

9・10期は、既述とおり13世紀以来続いてきた渡来銭を主体とした銭遣いの変容が著しく、精銭を中心とした貨幣体系の大きな動揺が、埋蔵銭における銭種構成にも表出する。したがって、模鑄銭が極めて多数を占める9期の新城第2次出土銭（青森県）、10期の堺環濠都市遺跡SKT448-3出土銭（大阪府）では、表79における数値では従前事例との比較はあまり意味を持たない。ただし、唐宋銭を中心とした王朝別比率で両事例を参照すると（表80）、それなりに従前事例と比率が近似することは、いかに唐宋銭の流入量が甚大で、かつ銭種構成において強固な基盤を為すものであったかを示すものであろう。9期の一乗谷朝倉氏遺跡第57次調査出土銭（福井県）と、模鑄銭が検出されなかった中屋遺跡出土銭（岡山県）は王朝別比率において近似する（畑地2014）。さらには、従前の「精銭の埋蔵銭」事例との比較では中屋遺跡の組成率は異なり、むしろ7、8期における大久保山遺跡ⅢA地区や小重遺跡の組成に近い。すなわち、表80における北宋銭比率の若干の低下と、唐銭（開元通寶）比率の上昇である。模鑄銭を排除したと見做しうる中屋遺跡においても、その点で同傾向にあるのは注目される。検討の対象枚数が少ない新城第2次（516枚）、堺環濠都市遺跡SKT448-3（372枚）は除外し、7～9期の4例（大久保山遺跡ⅢA地区、小重遺跡、一乗谷朝倉氏遺跡第57次、中屋遺跡）の精銭中における唐銭比率は11.67～15.11%となり、1期以来で最も高い比率となる（表80）。初鑄年が621年に遡る開元通寶がこの時期になって比率を増すことは不審である。いずれにせよ、この現象が普遍的か否かは該期、とりわけ8期以降の事例蓄積が必要であらう。

6 下坂本清合遺跡出土埋蔵銭の位置付け

ここまで、下坂本清合遺跡出土埋蔵銭がどのような位置付けに該当するかを明らかにするために、いくつかの観点で検討を重ねてきた。ここでは、検討で得られた所見の総括を行いたい。

繰り返し述べてきたように、本遺跡埋蔵銭の最たる特徴は、模鑄銭を含んでいないことである。加えて、銭文の判読不明銭や破損銭を含まないことから、高次の撰銭行為を経た資料である可能性が想定された。既述のとおり、本遺跡埋蔵銭と同様に模鑄銭を含まない事例は永井氏を中心としてその内容が報告され、現在、本遺跡を含めて6例存在し、最新銭による時期区分や遺構年代、壺や甕等容器の年代から、15世紀後半頃から16世紀後半に亘って確認されている。

本節第2項において、撰銭令に関する研究成果を参考に整理した結果、排除対象としては、無文銭、模鑄銭、破損銭が挙げられる。そのうち、模鑄銭は現在、銭種分類においてその識別に困難が伴っており、その要因の一つは厚く付着した錆である（永井2001a・2005）。当時の人々が如何にして識別できたのかという問いに対しては、撰銭令中に「日本新鑄料足」「新銭」「今銭」などと記載があるように、「新しい」ことにあった可能性を考えている。歴代の唐宋銭、すなわち精銭は、「古銭」との記載も認められるように、経た時間を反映した使用感（青錆も含む）、銭様があったはずである。それが独特の存在感を生み、市場における貨幣としての信用を培った可能性が考えられ、いわば鑄出されたばかりで光沢が眩い新銭、すなわち模鑄銭との識別が容易であったと想像する⁽¹⁰⁾。逆に、1期などの初期の埋蔵銭に少数含まれる模鑄銭のうち、踏み返し初期のものであれば、後世において精銭に混同

する可能性はあると考える。このことに関連して、本埋蔵銭には1枚のみであるが中世日本鑄造とされる鳥銭を含む。「精銭の埋蔵銭」事例では虫生館、岸田、中屋遺跡（再調査で判明：畑地2014）において、鳥銭は検出されており、いずれも1枚というのは示唆的だが、具体的には判然としない。渡来銭に比して銭文の珍奇な鳥銭が排除対象外となった理由として、流通が極少数であったことと、やはり外観的に真新しくなかったことを想定する。鳥銭は14世紀代の鑄造が指摘されている（永井2007）。

明銭は撰銭令において、一定程度混用を条件に精銭との等価値使用が度々命じられており、総じて低評価を喫していたことは明白である。既述のとおり明銭の本格的流入は15世紀前期で、第3項で述べたように永樂通寶、洪武通寶は相当規模での流通が判明している。その明銭が忌避された要因の一つは、明銭は歴代の唐宋銭に比較して、やはり外観の新しさを含めその歴史が浅く、市場において唐宋銭がおそらく持っていたであろう強固な信用に対して、分け入ることが叶わなかった可能性を考える。鳥銭とは逆に、その流通量が一定以上を占めたがゆえに、忌避感情は地域を超え普遍化したものと想定する。私見が冗長となったが、「精銭の埋蔵銭」において明銭、とりわけ洪武通寶の検出率が極めて低いのは明確で、上述の明銭忌避を裏付け、多くは排除された蓋然性が高いと考えられる。宣徳通寶については検出数が少ないため、洪武通寶と同じ検討はできないが、本遺跡における容器の年代観と最新銭初鑄年による時期区分との齟齬は、宣徳通寶の排除が影響している可能性は高い。

洪武通寶に関連して、同銭に類似した形態的特徴、すなわち厚肉、小ぶりの元銭、至大通寶が撰銭によって省かれている可能性は注目される。既述のように永井氏の指摘する同銭の検出率は4,761枚に1枚と、微妙な数字とも言えるが、各事例では少枚数ながら極めて高確率で検出され、データの無視できないレベルであり、今後の追加事例においても注意が必要である。この所見は、銭貨における法量及び形態的特徴が撰銭における基準の一つであったことを裏付ける可能性を持っており、重要と考える。

国及び王朝別組成の検討においては、特に明銭や模鑄銭等のノイズを取り払い、精銭に特化した王朝別比率において、興味深い結果が得られた。「精銭の埋蔵銭」では9期中屋遺跡を除いた5例で、軒並み北宋銭の組成比率がはっきりと高率を示した（表80）。当然ながら相対的に唐銭、南宋銭の比率は低下しており、撰銭の過程において北宋銭が特に選好されたことをこの所見は示していると考えられる。一方、7期以降確認できる唐銭（開元通寶）比率の上昇が窺える点は注意される。中屋遺跡においても同様な状況にあり、事例の追加に際して今後注意が必要な事項である。

以上、いくつかの視点において検討してきた内容を振り返ったが、得られた所見をまとめると、下坂本清合遺跡出土埋蔵銭は、当時流通していた銭貨のうち、ほぼ最上位と見做しうる内容を持つものと評価できる。すなわち、全国の主要埋蔵銭データと比較した結果、撰銭令の内容により推定される悪銭（明銭も含む）が極めて少なく、更には精銭に特化した組成比率において、最も選好されたと考えられる北宋銭の検出率が最高率に近い数値を示すためである。ただし、この結果が高次の撰銭行為を経て以上、当時における銭貨流通の全てを反映していることにはならない。撰銭令にみえる排除対象となる悪銭の指定や悪銭売買の禁止規定は、裏を返せば悪銭による取引が盛んに行われていたことを意味する。文献史料においては、早くは明応2年（1493）成立の『相良氏法度』第5条が著名で、低品位銭名が具体的に記載され、買地における精銭との交換レートが記載されている（中島圭1997、田中2007など）。また、16世紀前期の豊前国においては「清銭」とその4分の1の価値を持つ「並銭」

の存在が確認されるなど（本多2006）、黒田氏が指摘する「銭流通の階層化」、銭種間の「補完的な関係」が史料により確かめられる。すなわち富の蓄銭や高額決済及び遠隔地交易には精銭を用い、日常の小取引では悪銭を用いていた実態である（黒田1999、桜井2007）。具体的には本多博之氏が明らかにしたように、16世紀半ばの史料からは大名大内氏における公金貸付の返済や段銭収納において精銭を求め、領内取引に関しては取引の円滑化を重視し、撰銭の禁止を命じるといった対応が認められる（本多2006）。こうした実態の一つの帰結が本節第2項においても言及した、法的に流通銭貨の階層化を認めた永禄12年（1569）の織田信長撰銭令となる。16世紀前半に帰属する本埋蔵銭の内容は、上記における価値保蔵や遠隔地決済の使用に特化した、まさに精銭主体の資料である。さらには、他事例との比較により、明銭が本格的に組成に加わった後の15世紀後半以降、埋蔵銭の中においても、経た撰銭の度合の相違に端を発すると考えられる、内容の多様性がデータから窺えた。具体的には、本節第3・4項で確認した唐宋銭における上位銭種のグループを超えた順位変動、第5項で概観した精銭における王朝別組成比率により得られた知見が該当しよう。以上を総合すると、6期（15世紀後半）以降の埋蔵銭は、介した撰銭行為の度合により個体差を有し、本事例を含めた「精銭の埋蔵銭」は今のところその最上位に位置付けられる、ということになる。

以上のような状況の下、さらに銭貨流通の実態に迫るためには、近年「個別発見貨」と呼称され、廃棄貨、遺失貨などと別称される調査成果との比較が必要であろう。個別発見貨の概念は、遺跡で発見される銭貨のうち、今回検討した埋蔵銭やいわゆる六道銭など、何らかの意思を伴うと考えられるものを除く偶然的な出土状況、すなわち遺失した銭貨を基本的に対象とする（高田2007）。現状で出土数がまとまっているのは中世都市遺跡となり、博多遺跡群、中世大友府内町跡、堺環濠都市遺跡等で出土銭貨の組成比率といったデータが提示されている（出土銭貨研究会2006）。中でも博多遺跡群は調査が多次に亘り広範囲に実施されており、出土銭貨は四銖半両から寛永通宝までの89種類、13,753枚を誇るが、銭種が判明したのは半数を切る5,679枚に止まる（小畑・西山2006）。また、銭貨流通の実態を考える上では、可能な限り時期幅を絞った上で、各時期における銭種あるいは国・王朝別組成の集計が必須であるが、遺失貨という性格上、帰属時期が推定できる事例は少なくなり、ほとんどが埋蔵銭データとの比較検討に堪えられる出土数に達していないのが現状と見受けられる⁽¹¹⁾。また、ここでも問題となっているのは模鑄銭の抽出で、博多遺跡群においても現状では明らかに模鑄銭と判断できる銭貨は少数に止まり、銅質的にその可能性が考えられる銭貨は存在するものの、比率的には決して多くはないという（大庭2010）。このように模鑄銭識別に係る問題は、今後銭貨流通における実態の解明を進めていく上で避けられない共通の課題と言える。

7 「精銭」の具体像について（量目データの提示）

先述した通り、本埋蔵銭は表土掘削中の不時発見であったため、収納されていた銭貨の一部（969枚）が容器外へ散乱した。表81は、調査後に容器を含めて測定したデータである。総重量は68kgを測り、容器の備前焼四耳壺が10.8kgであったためそれを差し引き、整理作業後に判明した壺に収納されていた枚数（14,554枚）で除した銭貨1枚あたりの重量は、3.93gとなった。

銭種分類をはじめとする調査を進めるうち、本資料は前項まで述べてきたように、銭種別組成や国及び王朝別組成率の検討から、高次の撰銭を経た精銭を主体とする埋蔵銭であり、錆に覆われていたものの個々の銭貨における状態も良好であることが判明した。このような精銭比率の高い埋蔵銭調査

に際し、考古資料として精銭とは如何に説明できるかという課題が生じた。従前までの研究は、中世都市遺跡における銅銭鑄造鑄型の発見や模鑄銭、無文銭の出土などにより、悪銭の方に主眼が置かれてきた。一方、精銭が唐宋銭を基礎とした諸銭であることは論を待たないが、考古資料として精銭を見た場合、具体的に、かつ詳細に精銭の定義付けを検討した事例は、管見の限りながら皆無である。そこで、この課題を検討していく手がかりとして、銭種毎1枚あたりの重量に着目することとした。重量に注目した理由としては、測定の便宜も含まれる。銭径や銭厚などは各銭種の比較検討に際して有用な属性だが、埋蔵銭を構成する銭貨全ての計測は数量的に非現実的である。一方、重量はまとまった数量を一度に計測することが可能な上、平均重量の算出も容易である。また、銭径や銭厚における差異は、重量データに反映されるため、現状では最も有用な属性と考えられる。

本調査において銭種分類した銭貨は、最大100枚でタグファスナーで縋状に綴じ、銭種や書体毎にタッパーに収納している(写真38・39)。これらの重量を電子秤で計測し、その平均重量を算出して纏めたのが表82である。こうした計測データは統計処理を経て有効となると考えられるため、個体差を考慮すれば一定数以上の測定枚数が必要なのは言うまでもない。したがって、測定枚数の少ない銭種のデータに関しては参考程度と捉えておきたい。測定は全枚数の15,523枚において行い、その結果一枚当たりの平均重量は3.57gとなった。銭貨調査着手前の計測では一枚当たり3.93gであり、この差の主因と目される錆の重量は無視できない数値を示していることが分かる。永井氏のご教示によれば、中世出土銭における1枚の平均値は3.45gとのことであり、本遺跡例の数値はそれをやや上回る結果を示している。

上記データは、他事例との比較により初めて意味を為すものと考えるが、本報告においてはデータの提示に止め、今後検討を要すると予想される事項を列挙し、結びとしたい。精銭の特徴を抽出する上で、先ず考慮されるべきは模鑄銭との比較であろう。模鑄銭が踏み返しを経て法量を減じているのは明白なため、如実にデータに反映されると考えられる。続いて忌避対象であった明銭との比較であ

表81 各種重量データ(出土時)

①総重量 (kg) 【容器+銭貨】	②容器重量 (kg)	③ (容器内) 銭貨重量 (kg) 【①-②】	④容器内銭貨枚数※	銭貨一枚あたりの重量 (g) 【③÷④】
68	10.8	57.2	14554	3.93

※ 15,523 (総枚数) - 969 (検出時容器外に出た枚数) = 14,554 枚



写真38 銭貨を綴じた状況



写真39 タッパー収納状況

表82 錢種毎量目(／枚)一覧

錢種番号	錢名	書体	国名	初鑄年	測定枚数	全重量(g)	平均重量(g/枚)	錢種番号	錢名	書体	国名	初鑄年	測定枚数	全重量(g)	平均重量(g/枚)
1	開元通寶	-	唐	621	692	2260.25	3.27	27a	熙寧元寶	真	北宋	1068	699	2570.76	3.68
2	阜元重寶	-	唐	758	34	110.73	3.26	27b		篆	北宋	1068	639	2319.70	3.63
3	開元通寶 紀地錢	-	唐	845	7	23.27	3.32	28a	元豐通寶	隸	北宋	1078	1	3.40	3.40
4	軋徳元寶	-	前蜀	919	1	3.09	3.09	28b		行	北宋	1078	1163	4229.31	3.64
5	周通元寶	-	後周	955	3	10.11	3.37	28c		篆	北宋	1078	996	3640.70	3.66
6	唐國通寶	篆	南唐	959	4	12.82	3.21	29a	元祐通寶	行	北宋	1086	838	3037.80	3.63
7a	開元通寶	真	南唐	960	5	17.34	3.47	29b		篆	北宋	1086	789	2873.19	3.64
7b		篆	南唐	960	11	39.25	3.57	30a	紹聖元寶	行	北宋	1094	426	1549.70	3.64
8	宋通元寶	-	北宋	960	62	215.15	3.47	30b		篆	北宋	1094	367	1342.40	3.66
9	太平通寶	-	北宋	976	125	396.08	3.17	31a	元符通寶	行	北宋	1098	128	467.61	3.65
10a	淳化元寶	真	北宋	990	60	209.80	3.50	31b		篆	北宋	1098	147	530.52	3.61
10b		行	北宋	990	39	140.37	3.60	32a	聖宋元寶	行	北宋	1101	292	1053.51	3.61
10c		草	北宋	990	57	204.02	3.58	32b		篆	北宋	1101	301	1080.58	3.59
11a	至道元寶	真	北宋	995	96	339.54	3.54	33	大觀通寶	-	北宋	1107	38	133.47	3.51
11b		行	北宋	995	72	255.19	3.54	34a	政和通寶	隸	北宋	1111	204	719.04	3.52
11c		草	北宋	995	81	289.64	3.58	34b		篆	北宋	1111	174	602.99	3.47
12	咸平元寶	-	北宋	998	299	1046.88	3.50	35	政和通寶 折二	隸	北宋	1111	1	3.06	3.06
13	景德元寶	-	北宋	1004	386	1363.60	3.53	36a	宣和通寶	隸	北宋	1119	14	47.68	3.41
14	祥符元寶	-	北宋	1008	451	1609.46	3.57	36b		篆	北宋	1119	18	58.02	3.22
15	祥符通寶	-	北宋	1008	305	1095.73	3.59	37	宣和通寶 折二	篆	北宋	1119	1	3.79	3.79
16	天禧通寶	-	北宋	1017	436	1586.37	3.64	38	建炎通寶 折二	篆	南宋	1127	1	3.42	3.42
17a	天聖元寶	真	北宋	1023	509	1848.37	3.63	39	淳熙元寶	真	南宋	1174	55	186.34	3.39
17b		篆	北宋	1023	378	1393.40	3.69	40	紹熙元寶	-	南宋	1190	11	37.53	3.41
18a	明道元寶	真	北宋	1032	37	137.94	3.73	41	慶元通寶	-	南宋	1195	20	69.98	3.50
18b		篆	北宋	1032	45	166.90	3.71	42	嘉泰通寶	-	南宋	1201	4	13.64	3.41
19a	景祐元寶	真	北宋	1034	183	638.95	3.49	43	開禧通寶	-	南宋	1205	3	8.94	2.98
19b		篆	北宋	1034	102	355.96	3.49	44	嘉定通寶	-	南宋	1208	8	28.21	3.53
20a	皇宋通寶	真	北宋	1038	1163	4061.75	3.49	45	紹定通寶	-	南宋	1225	4	14.04	3.51
20b		篆	北宋	1038	852	2939.64	3.45	46	嘉熙通寶	-	南宋	1237	1	4.06	4.06
21a	至和元寶	真	北宋	1054	118	414.22	3.51	47	淳祐元寶	-	南宋	1241	4	13.40	3.35
21b		篆	北宋	1054	83	284.34	3.43	48	皇宋元寶	-	南宋	1253	7	23.87	3.41
22a	至和通寶	真	北宋	1054	34	120.96	3.56	49	景定元寶	-	南宋	1260	3	10.15	3.38
22b		篆	北宋	1054	41	143.61	3.50	50	咸淳元寶	-	南宋	1265	2	6.40	3.20
23a	嘉祐元寶	真	北宋	1056	95	338.99	3.57	51	正隆元寶	-	金	1157	12	42.87	3.57
23b		篆	北宋	1056	65	230.82	3.55	52	大定通寶	-	金	1178	1	3.74	3.74
24a	嘉祐通寶	真	北宋	1056	246	871.07	3.54	53	洪武通寶	-	明	1368	2	7.04	3.52
24b		篆	北宋	1056	202	703.41	3.48	54	永樂通寶	-	明	1408	288	1089.66	3.78
25a	治平元寶	真	北宋	1064	191	701.57	3.67	55	天元通寶	-	中世日本	14世紀代	1	3.26	3.26
25b		篆	北宋	1064	163	594.79	3.65	未剥離・未判読資料			77	273.99	3.56		
26a	治平通寶	真	北宋	1064	20	70.76	3.54	測定資料総計・平均重量(／枚)			15523	55457.86	3.57		
26b		篆	北宋	1064	30	103.95	3.47								

る。特に低評価を受けた洪武通寶は検出数的にも有用なデータとなり得る。永樂通寶の様態が極めて整っていることは誰しもが認めるところと考えるが、洪武通寶や宣徳通寶との扱いになぜ差が生じたのか、法量の視点から具体化して検討する必要はあると考える。明錢のうち、唯一完全な排除対象に陥らず、16世紀中期以降は精錢に並ぶ扱いを受ける永樂通寶は、たびたびその製作の良さがその主因として指摘されているが、精錢との比較を含めデータによる具体化は必要であろう。

中世における撰錢令中には、特定の錢種や状態、又は100文における混用規定などの枚数について記載されることはあっても、量目には特に言及していない。また、省佰法に関連した緡についても、まずはその枚数が重視される印象である。しかしながら、第4項で述べたように元錢の至大通寶や明錢の洪武通寶がその錢容により選ばれた可能性があり、量目による検討も意義を持ってくるだろう。

唐宋錢を主体とする精錢については、個々の錢種における数値を総括することにより、精錢の中で

も個性を抽出できる可能性はある。ただ、それよりも注目するのは、時期区分を通した各銭種における量目の変遷である。撰銭令の記載中には、特に天文年間以降、状態の悪い古銭についての記述が散見される。そこから精銭における貶質化の進行が指摘されており、主要銭種の量目における、時期に伴う変化の有無も検討できるだろう。また、第5項で触れた7～9期に認められる唐銭（開元通寶）の増加傾向についても、該期と他時期の同銭におけるデータの比較により、新たな所見が得られる可能性がある。より根本的なところでは、本埋蔵銭を含む「精銭の埋蔵銭」と模鑄銭を含む事例における比較である。例えば同じ唐宋銭でも、介在する撰銭行為の度合と、量目すなわち銭貨の状態は相関するのか、といった観点である。

以上、現状で考え得る検討事項をとりとめも無く述べたが、埋蔵銭における量目からのアプローチは、進めていかなければ分からない部分もあるものの、精銭の定義という根本的な課題を含め、多くの視点における検討手段の一つとして有効と考える。今後の研究の進展により、本埋蔵銭の評価内容が更に深まるとともに、本報告が中世における銭貨流通の実態に迫る一助となれば幸いである。

【註】

- (1) 撰銭令に関する研究史をはじめ、これまでの日本中世貨幣史研究成果をまとめた論考が近年、相次いで発表されている（高木2005、川戸2006、本多2006）。
- (2) 表73は次の論考を参考にして作成した（中島圭1992・2005、滝沢1996、坪田1996、本多2006、田中2007、中島楽2012）。なお、表中の銭種等名称の表記については、原文のままではなく、撰銭令間において同対象を示すことが明確と判断した場合は任意に名称を揃えて記載している。
- (3) ここでいう中国とは、北京から江南に至る沿岸地域や福建や広東などの東南沿海部の一部を示す。該期の中国における銅銭使用地域は限定的であった（中島楽2012）。
- (4) 大田由紀夫氏は、15世紀後期における汎東アジア規模での交流拡大、日本の銅銭需要を背景とし、該期の渡来銭（公・私鑄銭共）流入を主張する（大田2015）。一方で中島楽章氏は該期は公的交通、密貿易、中継貿易は減少しており、むしろ海外からの銅銭輸入が急減したことを背景に撰銭現象が拡大したと述べる（中島楽2012）。
- (5) 全国主要64例大量出土銭一覧（永井2002）に、近年追加の事例を加えた計73事例を参照した（永井2016）。
- (6) 出土状況の保存等により未判読資料が存在することが多々あるため、総枚数ではなく調査枚数を各比率算出に適用する。
- (7) 管見の限り（註5参照）において、先述のグループを超えた順位変動を示す事例は該期の26例（「精銭の埋蔵銭」事例を除く。詳細は後述）のうち、5例と少数派である。
- (8) 栃木の容器である備前焼三耳壺については、南阿蘇村教育委員会の御厚意により、実見させていただいた。
- (9) 先述のように、事例により模鑄銭の識別状況に差が生じているため、可能な限り同様な調査法による事例（ここでは現状で最も模鑄銭抽出を念頭におき、調査を実施している兵庫埋蔵銭調査会による事例）に絞り、記載した。
- (10) 黒田明伸氏は、中国において15世紀末から16世紀前半には、歴代古銭（唐宋銭）の私鑄銭が跋扈したと述べる。北京周辺で出回り始めた私鑄銭に対して、その様態が良ければ官銭、悪ければ私鑄銭という構図はもともと当てにならず、あからさまな私鑄を示す新しさが低評価を招いたと指摘している（黒田2007）。
- (11) 出土数において多数をみる博多遺跡群について参照すると、時期別の王朝別組成比率（小畑・西山2006）や上位5銭種における時期別出土数の変遷（櫻木2009）が示されており、この両データは埋蔵銭事例との比較においても重要である。しかしながら、例えば同遺跡群の時期区分における、V期（15世紀後半から16世紀前半）帰属の遺構において89枚の洪武通寶が一括出土したが、その一遺構の数値が両データグラフにおいて強く反映してしまっている。すなわち、統計処理対象として現状では脆弱と考えられ、本データの援用は慎重に行う必要があるだろう。ただし、データそのものの有効性は言うまでもなく高く、今後のデータ蓄積が望まれる。

第8章 総括

【参考文献】

- 足立啓二1992「東アジアにおける銭貨の流通」『アジアのなかの日本史Ⅲ 海上の道』東京大学出版会
- 荒川正夫2001「埼玉県大久保山遺跡の一括出土銭と模鑄銭」『中世の出土模鑄銭』東北中世考古学叢書1 東北中世考古学会
- 生田周治1996「東京都府中市の大量出土銭について」『中世の出土銭 補遺Ⅰ』兵庫埋蔵銭調査会
- 浦長瀬隆2001『中近世日本貨幣流通史－取引手段の変化と要因－』勁草書房
- 大田由紀夫1997「15・16世紀中国における銭貨流通」名古屋大学東洋史研究報告21号 名古屋大学東洋史研究会
- 大田由紀夫2015「『撰銭の世紀』をめぐる応答」鹿大史学62号 鹿大史学会
- 大庭康時2010「中世後半の出土銭貨を中心とした博多遺跡群の考古学的成果」博多研究会誌20周年記念特別号 博多研究会
- 小畑弘巳・西山絵里子2006「中世博多における出土銭貨と流通」市史研究ふくおか 第2号 福岡市史編集委員会
- 川戸貴史2006「中近世移行期日本の貨幣流通史研究を振り返って」歴史学研究812 歴史学研究会
- 川戸貴史2007「中世後期の流通構造と撰銭」年報中世史研究 第32号 中世史研究会
- 黒田明伸1999「16・17世紀環シナ海経済と銭貨流通」『越境する貨幣』歴史学研究会 青木書店
- 黒田明伸2007「東アジア貨幣史の中の中世後期日本」『貨幣の地域史－中世から近世へ』岩波書店
- 佐久間重男1992『日明関係史の研究』吉川弘文館
- 桜井英治2007「銭貨のダイナミズム－中世から近世へ－」『貨幣の地域史－中世から近世へ』岩波書店
- 櫻木晋一1997「黒木町の出土備蓄銭」出土銭貨 第8号 出土銭貨研究会
- 櫻木晋一2009『貨幣考古学序説』慶應義塾大学出版会
- 出土銭貨研究会2006『歴史空間における銭貨の出土状況』第13回出土銭貨研究会大会報告要旨 出土銭貨研究会
- 鋤柄俊夫1995「容器からみた蓄銭埋納－土器・陶器を中心に－」摂河内文化資料 第44号 摂河内文庫
- 鈴木公雄1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 高木久史2005「日本中世銭貨史研究の現在－16世紀を中心に－」歴史評論667 歴史科学協議会
- 高田倫子2007「中世から近世移行期の銭貨流通－中国地方における考古資料を中心に－」社会経済史学 第73巻第4号 社会経済史学会
- 滝沢武雄1996『日本の貨幣の歴史』吉川弘文館
- 田中浩司2007「貨幣流通からみた16世紀の京都」『貨幣の地域史－中世から近世へ』岩波書店
- 千枝大志2007「15世紀末から17世紀初頭における貨幣の地域性－伊勢神宮周辺地域を事例に－」『貨幣の地域史－中世から近世へ』岩波書店
- 坪田良江1996「篩の統一－撰銭の横行と撰銭令－」方泉處 13号（株）ハドソン 東洋鑄造貨幣研究所
- 永井久美男1996「最新銭による一括埋納銭の時期区分」『中世の出土銭 補遺Ⅰ』兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男2001a「模鑄銭の全国的様相」『中世の出土模鑄銭』東北中世考古学叢書1 東北中世考古学会
- 永井久美男2001b「16世紀後半における流通銭の変化」『福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2000』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- 永井久美男2001c「中世と近世初期の埋蔵銭の時期区分－ヴェトナム銭の後黎（前期）銭と莫銭による新説－」出土銭貨 第36号 出土銭貨研究会
- 永井久美男2002『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
- 永井久美男2005「渡来銭時代における流通銭の変遷」出土銭貨 第22号 出土銭貨研究会
- 永井久美男2007「『鳥銭』による埋蔵実年代の推定」出土銭貨研究 第2号 出土銭貨研究会
- 永井久美男・藤崎高志2013「虫生館遺跡出土の埋蔵銭－滋賀県、中世埋蔵銭の再調査－」出土銭貨 第36号 出土銭貨研究会
- 永井久美男2016「中世の出土銭の概説及び調査について－基礎知識と調査・分類（整理）法－」平成27年度埋蔵文化財専門職員研修「遺物調査検討課程」資料 鳥取県埋蔵文化財センター
- 中島圭一1992「西と東の永楽銭」『中世の村と流通』吉川弘文館
- 中島圭一1997「中世貨幣の普遍性と地域性」『中世日本列島の地域性－考古学と中世史研究6－』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集 名著出版

中島圭一2005「中世貨幣システムにおける私鑄銭の位置」出土銭貨 第23号 出土銭研究会
 中島楽章2012「撰銭の世紀－1460～1560年代の東アジア銭貨流通－」史学研究277号 広島史学研究会
 畑地ひとみ2014「中屋遺跡の大量出土銭」出土銭貨 第34号 出土銭貨研究会
 深谷市教育委員会2000『根岸遺跡（第3次・第4次）－北通り線建設工事に伴う発掘調査Ⅱ－』埼玉県深谷市発掘調査報告書 第61集

本多博之2006『戦国織豊期の貨幣と石高制』吉川弘文館

毛利一憲1974「ビタ銭の価値変動に関する研究 上・下」日本歴史 第310・311号 吉川弘文館

【表74～80埋藏銭事例の引用文献】

- ①兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ②葛飾区郷土と天文の博物館2000『平成12年度特別展 埋められた渡来銭－中世の出土銭を探る－』
- ③兵庫埋藏銭調査会1996『中世の出土銭－補遺Ⅰ』
- ④舞鶴市教育委員会2003『引土出土銭－中世期大量埋藏銭の調査報告書－』舞鶴市文化財調査報告第41集
- ⑤兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ⑥新居浜市教育委員会1999『中村岡の久保出土銭 中世期大量埋藏銭の調査報告書』
- ⑦兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ⑧兵庫埋藏銭調査会1996『中世の出土銭 補遺Ⅰ』
- ⑨兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ⑩兵庫埋藏銭調査会1996『中世の出土銭 補遺Ⅰ』
- ⑪兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ⑫兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ⑬兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ⑭兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ⑮葛飾区郷土と天文の博物館2000『平成12年度特別展 埋められた渡来銭－中世の出土銭を探る－』
- ⑯兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ⑰兵庫埋藏銭調査会1996『中世の出土銭 補遺Ⅰ』
- ⑱兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ⑲兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ⑳兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ㉑工藤清泰2002「青森市域の出土銭－模鑄銭と無文銭－」市史あおもり5 青森市
- ㉒早稲田大学本庄校地文化財調査室1998『大久保山Ⅵ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告6
- ㉓兵庫埋藏銭調査会1996『中世の出土銭 補遺Ⅰ』
- ㉔兵庫埋藏銭調査会1996『中世の出土銭 補遺Ⅰ』
- ㉕小野木学1997「岐阜県郡上郡大和町 大間見友久出土銭について」出土銭貨 第7号 出土銭貨研究会
- ㉖永井久美男・小野木学1997「岐阜県郡上郡大和町の大量出土銭について」出土銭貨 第8号 出土銭貨研究会
- ㉗財団法人新潟県埋藏文化財調査事業団2002『小重遺跡』新潟県埋藏文化財調査事業団調査報告書第108集
- ㉘兵庫埋藏銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
- ㉙工藤清泰2002「青森市域の出土銭－模鑄銭と無文銭－」市史あおもり5 青森市
- ㉚高橋照彦1997「千葉県市原市菊間出土銭」出土銭貨 第8号 出土銭貨研究
- ㉛永井久美男2001「16世紀後半における流通銭の変化」『福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2000』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- ㉜永井久美男・近藤康司1997「堺環濠都市遺跡（SKT448-3地点）出土の埋大量埋納銭」『近世の出土銭Ⅰ－論考篇－』兵庫埋藏銭調査会
- ㉝本書
- ㉞尾上実1995「備蓄銭の特集に当って（Ⅱ）」撰河内文化資料 第44号 撰河内文庫
- ㉟福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館2010『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅹ 第51・52次調査』
- ㊱永井久美男・藤崎高志2013「虫生館遺跡出土の埋藏銭－滋賀県、中世埋藏銭の再調査－」出土銭貨 第36号 出土

第8章 総括

銭貨研究会

⑳⑦兵庫県宍粟郡山崎町教育委員会1994『山崎町の中世・近世銭貨－中世大量備蓄銭と近世銭貨の調査報告書－』文化財シリーズ第4集

⑳⑧岡山県赤磐市教育委員会2013『向山宮岡遺跡・丸田遺跡・中屋遺跡の大量出土銭』赤磐市文化財調査報告第6集

⑳⑨深谷市教育委員会2000『根岸遺跡（第3次・第4次）－北通り線建設工事に伴う発掘調査Ⅱ－』埼玉県深谷市発掘調査報告書 第61集

⑳⑩兵庫埋蔵銭調査会1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』

第3節 焼失住居SI 1 の構造復元

1 SI 1 の細部

6-1区で検出した竪穴建物SI 1は、弥生時代終末期の焼失住居である。湿気が多い環境にも助けられて、保存状態は他にほとんど例を見ないほど良く、竪穴内には屋根が崩落したままの状態に貼り付き、葺材までがかなりの範囲で遺っていた。この屋根に覆われていた竪穴の壁面や床面も最後の使用時の状況をよく保っていて、壁面には内装が、床面には使用による凹凸が確認できた。そればかりか、竪穴内ほど完全ではないものの、竪穴外の遺構もある程度遺っていて、垂木穴・周溝・周堤・入口・炉などに関してさまざまな情報が得られた。

本節では、竪穴建物SI 1の構造を明らかにし復元案を提示する。これまで行われた建物復元の多くは、柱穴などの「穴」や、部分的に残った材に基づくものが大半であった。今回の復元は、1本1本の材そのものから建物を組み上げることを基本的な方針とする。「穴」や一部の材から復元した建物とは異なる、リアルな竪穴建物の様子を示すことができるであろう。

まず、第3章では説明し切れなかったSI 1の構造と特徴について、部分ごとに見てゆく。

(1) 遺構

竪穴：竪穴は長径3.5m、短径3.1mの隅丸方形を呈する。長軸はN-30°-Eと北東方向に30度振れるが、以下では記述の便宜上各辺を東西南北で表す。東西南の3辺がやや弧状に張り出すのに対し、西辺は直線的である。後述するように西側の垂木列が上屋を支える構造であることと関連するとみられる。竪穴の深さは構築面が残っている東北角で41cmと、竪穴建物としては浅い。これには地下水位の高さが関係するだろう。床面積は約8.2㎡である。床面はローム層まで掘り込まれているが、地形が下る北東側ではローム層に達せずに黒色土が露出する。この部分約1.3㎡には貼床が施されている。貼床はロームを用い、厚さは約5cmを測る。床面積が小さいためか周壁溝は設けられない。

床面：炭化物に覆われていた上に表面が火を受けて硬化したこともあって、床面の凹凸が最後の使用時のまま非常によく保存されていた。

床面は総じて、西南側で高く東北側で低く、最も高いところと低いところとの差は約14cmある。最も低い東北の壁際は、竪穴外の屋内炉に近く、そこの出入りの結果床面が沈下した可能性がある。同様なことは南壁際の中央部でも観察され、周囲より最大4cm低い。この部分に竪穴の出入り口があったと考える根拠の一つとなる。

注目されるのは、西辺に沿ったくぼみである。南北172cm、東西50cm、深さ3cmを測る。北端から54cmのところにくびれ、最深部は南端から77cmの位置にある。細部の寸法や断面形が身長160cm程度の人間の体格によく一致するので、このくぼみは寢床の痕、それも北枕で寝た男性のものと考えている。

このくぼみのすぐ東側には平石が置かれていた。34cm×23cmの自然石で、下面は床面にめり込み、上面は折れた垂木や葺材に覆われていた。上屋の崩落以前から床面に置かれていたことが明らかであり、使用痕や工具痕が全く見られないことから台石ではないだろう。中央ピットの真正面にあることから、腰掛として使われた石と推定する。寢床痕を遺した男性が日常的に使用した腰掛と考えてよいのではないか。もう一つの興味深いくぼみが南東部の床面に存在する。49cm×40cm、深さ2cmを測り、浅い皿状を呈する。床面の同じ位置に繰り返し座ったことによる臀部の痕と考えられ、大きさからふ

くよかな女性が想像される。短軸が中央ピットの南辺に向いており、後述するように、この辺にのみ板が立てられていないことと、その外側では床面のくぼみや傷みが顕著で掻き出した内容物の仮置き場と推定されることから、中央ピットの管理は主にここに座った人物に委ねられていたと考える。

第380図に竪穴内の空間分節の推定図を示す。竪穴外の屋内炉が北東にあることや中央ピットが中軸よりも東に位置することを考慮すると、入口から向かって右側は火処がまとまる女性の空間となる。向かって左側は、後で述べるように柱の無い空間で、男性に充てられていたと考える。

なお、床面上の中央やや北からも径13cmの弱い焼土面が検出されているが、中央ピット周堤に覆われていたことから、日常的に使用された炉ではなく、建物を建築する作業で用いられたものの可能性が高い。



第380図 空間分節の推定

主柱穴：主柱穴は3基で、竪穴の長軸上に1列に並ぶ。中と南の主柱穴は中央ピットの掘方に接して設けられる。北と中の主柱穴間が芯々間で65cmを測るのに対し、中と南の間は85cmとやや広い。各主柱穴の深さは北から60.6cm、49.8cm、36.0cmと、南に行くほど浅くなる。柱痕を計測すると、北主柱は径9cm、中主柱は径11cmに復元できる。どちらの柱痕も床土に覆われて床面上で平面的に検出する

ことはできなかったが、抜き取り痕は無くしまりの悪い土が入っていたことから、火をかけた時点で柱は立ったままだったようである。北主柱については部分的に炭化材が残っていた一方、南主柱についてはそれらしい炭化材はなく柱痕も明瞭ではない。ただ、柱穴底面の南端に10cm程低い部分があり、柱のあたりとみられる。それに基づくと、南主柱は浅いだけでなく径も小さく、長径12cm、短径7cmの断面楕円形に復元される。この位置で床面が深さ2.2cmほど楕円形にくぼんでいたことは、柱が立っていたことと関連するだろう。

最終的には床面を5cm程削り込んで入念に精査を行い、他に主柱がないことを確認した。東西の屋根の葺材がほとんど乱れることなく竪穴内に落ち込んでいる状況を考慮すると、隅丸方形の竪穴建物で一般的な4本柱を想定することは無理がある。中軸上にのみ主柱列があったことを裏付けるものであろう。

副柱痕：床面上の東半部では、副柱痕と推定されるくぼみが2箇所確認された。

1箇所目は東南部で、東壁際から約55cm内側で南主柱痕の57cm東である。主柱列に対して垂線を引くと、南主柱痕の方がわずかに南にずれた位置関係にある。直径約10cm、深さ4.2cmの円形のくぼみで、その周囲は床土が環状に盛り上がることから、柱が立っていた可能性が高いが、同じ位置で柱穴は検出されなかった。床面に直接立てた置柱と推定される。なお、この周囲の床面では、削り屑のような薄くて四辺形を呈する木片が4点出土した。上屋に火を掛ける前に、この柱を切り倒す作業が行われたことを示すものかもしれない。

2箇所目は東北部で、東壁際から約75cm入った北主柱痕の東約45cmで検出された。これも東南副柱痕と同様に、北主柱痕の方がわずかに南にずれている。径約10cm、深さ2.7cmのくぼみで、この周囲のみ床土がわずかにくぼむ。近くにこの柱の一部と考えられる炭化材が存在する。柱穴はなかったもので、これも置柱と考えられる。

竪穴の西半では、床面のくぼみも柱穴も全く検出されなかった。後述するように、構造材についても、東半には東桁が2つの副柱痕に挟まれる位置に存在しているのに対し、西屋根の残りが非常に良いにもかかわらず西桁の存在を示すような炭化材はない。以上から、西半部には副柱は設けられず、柱のない空間になっていたとみられる。

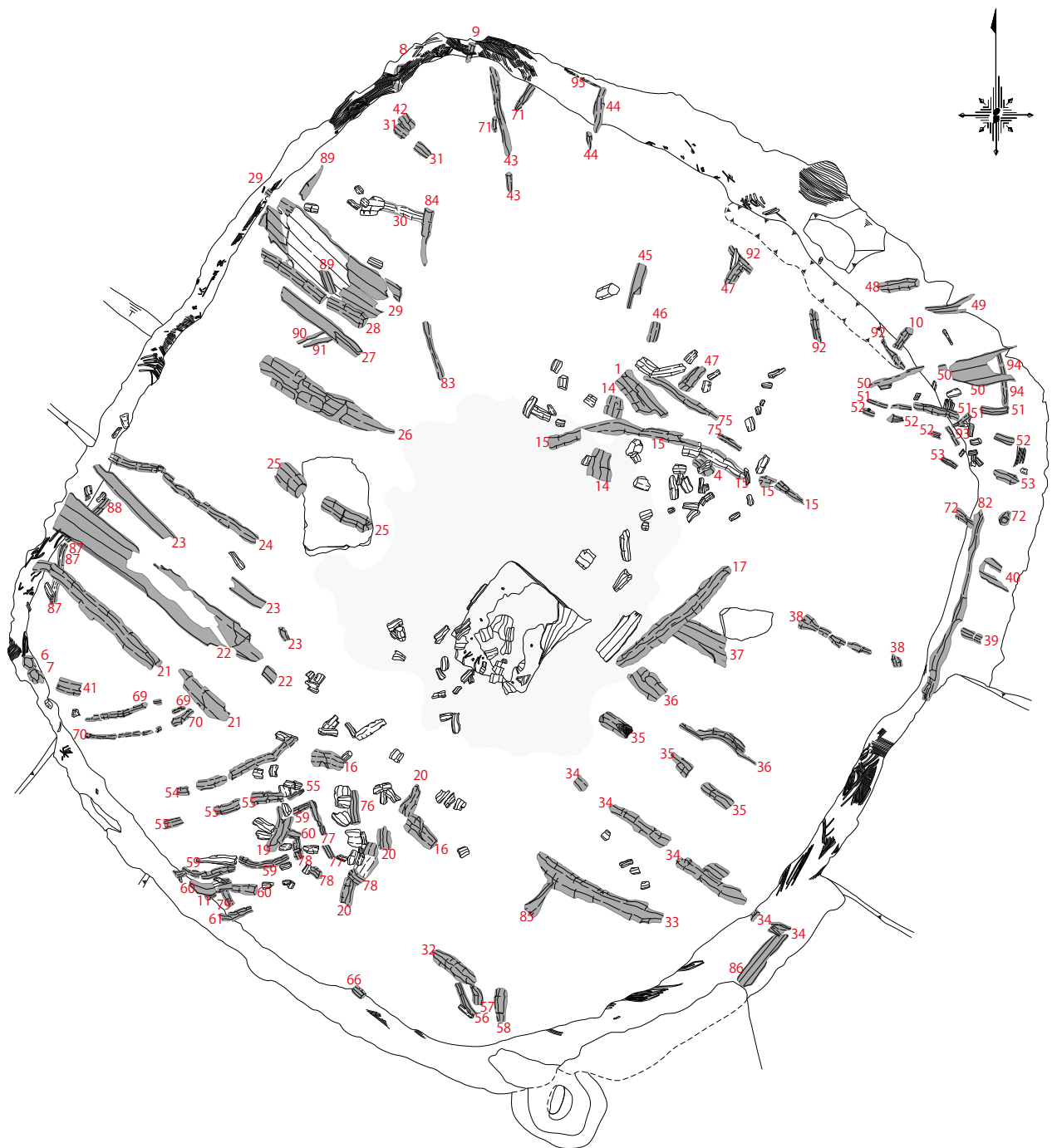
中央ピット：中央ピットの掘方は径55cmの不整形な円形を呈し、深さは25～29cmを測る。床面の中心から南に20cm、東に10cmほど偏った場所に位置する。南辺を除く3辺に薄い板を立てて外側を埋め、1辺35cmの正方形のピットとして機能した。ピット内は南側が深いすり鉢状で、底面には樹皮がパッチ状に貼られている。内部からは多くの炭化物と熱によって発泡した小礫が数点出土しており、火処として用いられたことが分かる。別に屋内炉があることからすると、暖房用の囲炉裏としてよいだろう。床面の項で述べたように、南辺に接する床面に小さなくぼみがあり、内容物を掻き出して置いた痕とみられる。南辺のみ板が立てられないのはこのためであろう。

中央ピットには外径約1.1m×1.0mの周堤が伴う。貼床とは異なり砂質土が用いられていて、最も高いところで7cmを測る。南東部で幅が極端に狭いのは、内容物の掻き出しに関連すると考えられる。

(2) 構造材 (第381図)

屋根土の存在により蒸し焼きになったことと、湿気の多い堆積環境に加えて、固く埋め立てられていたことも手伝って、竪穴の床面と壁面に張り付くような形で、上屋や内装などに用いられた木材や草本類などが非常に良好な状態で遺っていた。

構造材の残存状況が良いのは、東屋根と西屋根である。屋根土と草本類を主体とする葺材の下から元の配置をほとんど崩さずに垂木が平行に並んで出土している。炭化が不十分で生に近い状態の部分や、腐食によって欠落する部分がある。これに対し竪穴の長軸付近では、中央やや北寄りから南端に向かってラッパ状に開く形で焼土が分布し、その下から炭化が進んだ材の細片が多数検出された。この部分は開口部であったため酸素の供給が良く、燃焼が進んだものと考えられる。ここでは細片が多く本来の位置や役割を推定するのに困難がともなう。中央部では、燃え尽きてしまったものか構造材はほとんど検出されなかった。以下では上屋のパーツごとに見てゆく。



第381図 構造材の識別

柱：先述のように、この建物は長軸上に3本の主柱を配している。柱と推定される材は少なく、確實そうなのは1点のみである。第381図1はこの遺構で最も太い丸太材で直径9cmを測る。北主柱穴のすぐ近くに位置することから、北主柱としてよいであろう。中主柱と南主柱に対応しそうな破片は確認できない。柱穴埋土の観察から屋根の崩落後も柱は立っていたとみられ、腐食により失われたのかもしれない。

棟木：中軸上にある3点の破片(14)は、棟木の可能性がある。径約9cmの丸太材である。

梁と桁：20cmほど離れて出土した丸太材の破片2点(16)は、太さと方向から同一個体とみられる。南梁であろう。15は径6cmのやや湾曲する丸太材で北梁と推定される。17は径5cmのしっかりした丸太材で東桁である。西屋根は最も残りがよいにもかかわらず、桁材の可能性がある炭化材が細片すら出土していないことは注目される。西桁が存在しないという遺構からの推定を補強する。

東屋根：東屋根を構成する部材と考えられるのは32～40の垂木と木舞状の材82と86である。垂木32～36は径4～7cmの丸太で、37と40は板材。20cm前後の比較的広いピッチを取って平行に並べられる。32と33のピッチは43cmと広く、39と40は壁にかかる部分しか残っていないが、葺材の分類からこの範囲が東屋根と考えられ、屋根幅は225cmに復元される。

東桁17と垂木36との関係は興味深い。桁の上に垂木が載るのではなく、桁の側面に垂木の断面が接している。さらに、垂木の一方の側面にはカヤを数本束ねたものが沿っていて桁までかけられており、その上にカヤを9本以上束ねたものを今度は桁に沿わせて重ねる。あたかもカヤを使って桁と垂木を突き付けて連結しているかに見える。カヤに乱れがないことと板垂木37も同様の状況を示すことから、垂木をかけるのではなく桁と突き付けるような組み方が存在した可能性を指摘したい。桁の上に窓か明り取りを設けるためであろうか。

東屋根では垂木に直交する材がほとんど存在しない。東壁にかかる水平方向の板86はちょうど垂木33と34の間隔に相当するので木舞の可能性はあるが局部的である。木舞状の材82は垂木の上に位置するので、木舞ではなく、別の機能で用いられていると考えられる。

東屋根は材の太さ・間隔・配置のいずれの点においても華奢であり、土屋根に最適とされる35度前後の角度で屋根土を載せた場合、荷重に耐えられるかに関しては疑問が残る。

西屋根：西屋根は21～31までの11本の垂木で構成される。内訳は丸太材が7本、角材が2本、板材が2枚で、丸太材は径5～7cmのものが多く、板材も幅12cmと16cmで、東屋根に比べて頑丈なものをを用いる。ピッチも東屋根より狭く、15cm前後のところが多い。特に板材の近くではほとんど間隔を開けない箇所もある。西屋根全体の幅は210cmに復元できる。西屋根が東屋根より幅狭なのは、東屋根両端の垂木が西屋根両端の垂木の外側にくる構造だからと考える。

西屋根には東屋根にあるような桁や置柱は確認できないが、その代わりに仕組みが存在したようである。南西部の隅木41は径5.2cmを測り、他の隅垂木と比較して明らかに太い。すぐ近くでは壁面に接して2本の杭(6、7)が打たれている。隅木41を棟木まで延長すると、南梁16を下から支えることが可能で、西半に桁や柱がないことを解決できる。杭6、7はそのために隅木41を支えた小柱と推定される。残りは悪いが、北西隅にも隅垂木42と杭8があり、北梁を支える同様の仕組みが存在したものと考える。

竪穴外の西方は、昭和の住宅建築の際に山裾に法面が切られてコンクリートが打たれたため削平されている。そこの間にわずか20cm幅ではあるが古い土層が残っていて、断面に周溝や周溝外堤とと

もに、垂木穴が確認できた。位置と形状が棒垂木21と板垂木22と完全に一致することから、西側では堅穴外を段状に削り出し、その崖面を筋状に掘って垂木を据えていたことがわかる。この垂木穴を縦割りして垂木痕の角度を計測すると、棒垂木21が43°前後、板垂木22が53°前後であった。中間の48°で西屋根を立ち上げると、ちょうど身長160cmの人間が堅穴の西辺で立つことができる。一般的な堅穴建物と異なり、この建物の場合、西屋根の垂木は周堤の上に置かれるのではなく、崖面に固定して、主柱と棟木とともに主要な構造材を構成していることになる。逆に東屋根には構造材としての役割は乏しく、ほぼ立て掛けてあるだけである。西辺のみが直線的で他の3辺が膨らんでいる堅穴の形状も、東屋根の桁と置柱に対して西屋根の隅木と小柱という非対称な配置も、この独特な構造と関連するだろう。地形的な制約で小ぶりにせざるを得なかった堅穴のスペースを最大限利用するための工夫であり、その地形的な制約を逆に活かして崖面で屋根を支えた工夫でもあると評価できる。

北屋根：北屋根は扇形に配列した小垂木43～53と、隅垂木71と72、連結材92～95で構成される。小垂木は45が角材、50が板材を用いる他は丸太材で、直径は3～4cmの細いものが多い。位置的にみて壁際に打たれた小柱9と10がそれぞれ、小垂木43と49を支えていたようである。連結材は板垂木50の下にあることから木舞ではなく、数本の小垂木を内側から部分的に補強する役割のものであろう。垂木71は崩落時に小垂木43に折られているので、方向や性格が異なる部材である。西屋根から架けて小垂木の間隔が広がる部分を埋めた隅垂木とみる。

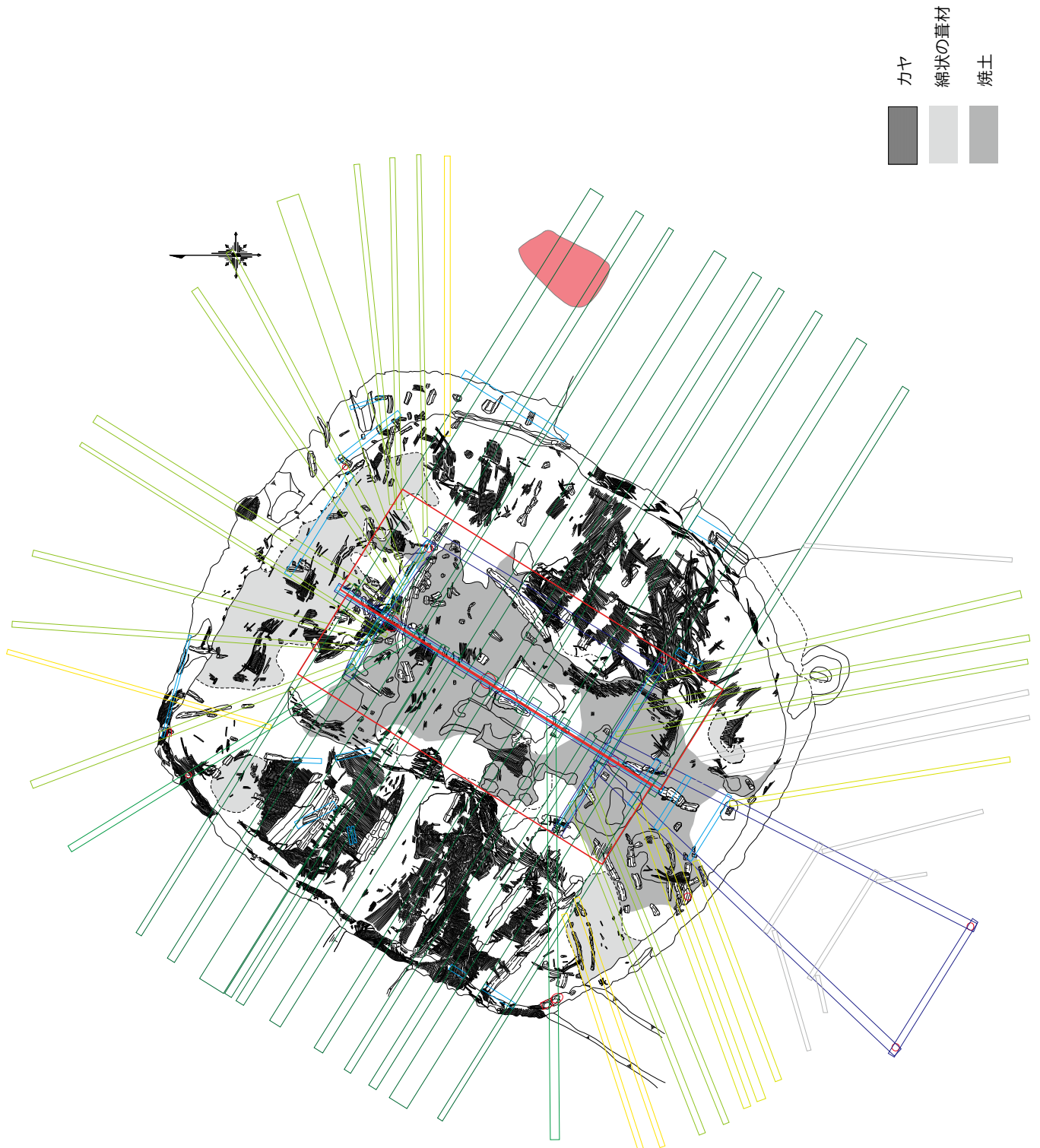
南屋根：南屋根を構成する材は細いものが多く、構造は複雑である。中軸近くに並ぶ太めの材19と20が構造の中心となるもので、入口桁とみる。この上に並べて渡される細い材77～79は入口横架材で、これと90度前後の角度で組み合う細い材59や60は入口垂木であろう。2本の入口桁を軸に入口垂木と入口横架材とで門形をなしていたと推定する。やや太めの小垂木54と55は南梁16に架けられていたようで、付近で途切れる。一方2～3cmの細い丸太材69と70は西屋根南端の垂木21までなので、隅垂木である。南屋根東側は材の残りが悪いが4本分の垂木の断片が確認でき(56～58、66)、西側と同様な構造と考えられる。

以上からこの建物は、中軸に並べた3本の主柱列に棟木を渡し、そこから東西の大屋根を下した三角屋根を基本的な構造とする。上屋を主に支えるのは主柱列と棟木と、崖面に裾を固定した西屋根からなる三角形で、東屋根はほとんど懸けてあるだけで全体の強度には大きく関与しない。南北の梁はそれぞれの主柱と近くの垂木に固定し、強度が弱い東側は置柱で、桁と柱を入れない西側は棟木に固定した隅木を用いて支える。南にある入口は、2本の入口桁をおそらく南梁と南主柱を使って固定し、横架材を渡して門形を組んでいる。反対側の北屋根は扇形に小垂木を配る。その始点は北梁であったであろう。

(3) 葺材 (第382図)

葺材の残りの良さは他にほとんど例をみない。東西の大屋根にはイネ科植物(以下カヤと呼称)を用い、南と北の曲面を描く屋根には主に綿状の素材を使っている。

東屋根と西屋根：葺材が残っているのは堅穴内に落ち込んだ部分で、上屋全体では上半部分にあたる。東屋根では高さ0.7m分、西屋根では0.8m分である。カヤは、残存部分の裾から上0.3mは縦方向に、それより上は横方向に葺く(写真40～44)。基本的には1層のみで薄いのが、縦横の境目では横方向のカヤの方を上重ねている。縦横を編み込んでいるように見える箇所もある。カヤの直上にはすべて、粘性が強く均質な黒褐色土が厚さ8cm程度乗っていたので、カヤは土屋根の下地である(写真



第382図 葺材分類と構造材の配置

45)。一方、東屋根南端付近で検出された長いカヤは、斜め方向にやや乱雑に置かれている。屋根土が流出した箇所を補修したものであろう（写真46）。

西屋根のほぼ全体と東屋根の南半で、葺材が残る部分の上端側に幅約10cmの帯状のカヤ束が認められた。その上には縦方向に重なったカヤの裾が部分的にみられる。いずれも主な葺材よりも高い位置で検出されていて間には屋根土が挟まれている（写真47）。この上にさらに屋根土があり、薄板状の炭化物が部分的に残っている。これらは屋根の頂部付近の飾りと考えられる。頂部以下0.5mは土屋根の上にカヤを縦方向に葺き下ろし、その裾に俵状に束ねたカヤ束を置き、その上にさらに土を葺いて、薄板（樹皮？）をかぶせたのであろう。あたかも2段伏屋の上段部分のようであるが、この建物は三角屋根であるから、ほぼ痕跡器官的な装飾である。帯状のカヤ束は東西の大屋根と北屋根の境付近でも二等辺三角形を呈しているのが認められる。破風飾りとしてカヤ束を括り付けた可能性がある。

北屋根と南屋根：北屋根の小垂木43から53までの間ではほぼ全面にわたって、細断したカヤが混ぜ込まれた綿状の炭化物が検出された（写真48）。綿の素材が何に由来するものか不明であるが麻綿ではないかと推測する。西屋根の北端と南屋根でも同様の炭化物が検出された。さらに北屋根では部分的に、数本から十数本のカヤを平たく束ねたものが格子に組まれた状態で検出されており、綿を載せるための下地とみられる（写真49）。扇垂木の上にカヤを網状に組んでその上に綿を載せ、土屋根の下地にしたのである。綿状炭化物が見つかったのはいずれも屋根が曲面を呈する範囲で、カヤでは出し切れない曲線を出すための工夫であろう。扇垂木では間隔が広くなることを考えると、綿を直接載せることは困難であるから、刻んだカヤを混ぜて強度を高め予めマット状に固めたものを用いたのであろう。これまでの研究では想定されてこなかった素材である。

（4）壁材

竪穴壁面の全周近くで、内装として貼られているカヤを検出した。最も残りが良かった西壁を見てみると、十数本のカヤを薄い帯状に束ねたものを斜め方向に交互に重ねて貼り、最後に葉を混ぜた帯を鉢巻状に2段回している（写真50・51）。南辺中央の入口部分と、北東角の屋内炉付近では全くカヤが確認できないのは、昇降に伴って剥落した可能性もあるが、邪魔になるか剥落することを見越してもともと貼られていなかったのではなかろうか。いずれにせよ、この箇所に昇降口があったことを示唆している。

（5）竪穴外の遺構

入口：竪穴の南辺中央から1.2m南方に、径0.5m前後のピットが2基、0.4mの間隔で並んでいる。深さは西側のP102が0.25m、東側のP103が0.55mで差があるが、どちらにも大型礫が入れられており、その上面での標高は9.3mと9.2mと近い。竪穴との位置関係と、P103から炭化材が出土したことを踏まえると、これらのピットは入口柱穴で、礫は入口柱の固定用に入れられたものであろう。入口の幅は0.75m程度に復元できる。

炉：竪穴外の北東部、竪穴から0.6m離れた位置に、南北0.52m×東西0.31mの範囲をもつ強度の焼土面が存在する。竪穴の構築面上にあり、焼土上と付近にはS I 1の構造材とみられる炭化材の断片が分布していることから、S I 1と同時に存在したものとみてよい。次に述べる周堤土の残存範囲から考えると、屋内炉と判断できる。中央ピットに比較してかなり強く焼けているので、この建物の主要な炉はこちらである。火力を保つには、湿気の多い竪穴内よりも竪穴外の方が好都合で、調理はここで行ったと推測する。したがって、中央ピットの機能は主に暖を取るための囲炉裏であったであらう。

う。

周堤（内堤）：構築面が残っている範囲で3箇所、主に黒色土上でロームが薄く検出された。竪穴の埋め立てに用いた周堤土が削り残されたものである。近くの竪穴から外縁部までの距離は0.8m～1.1mで、最も残りのよい部分では内縁部までの距離は0.45mである。竪穴の外0.45mに幅0.5mの周堤が盛られていたことがわかる。

周溝と周溝外堤：構造材の項で述べた垂木穴を検出した断面の南側延長線上では、周溝と外堤が確認できた。周溝は竪穴から1.85mの場所に掘られていて幅0.7m、外堤は幅0.65mを測る。どちらも上部を攪乱で失うため深さと高さは正確にはわからないが、周溝は深さ0.13m、外堤は高さ0.1m分が残存している。構築面が残る北辺では検出されず、南辺でも確認できないので、周溝も外堤も西側にしか存在しないと思われる。斜面からの下がり水を防ぐためのもので、主要な構造材である西側垂木列の裾を守るための特別な仕組みとみられる。

2 竪穴建物 S I 1 の C G 復元

以上で述べた内容を踏まえて、竪穴建物 S I 1 をコンピューターグラフィックス（CG）を用いて復元した。実際の作業は調査員の指示のもと、株式会社イビソク文化財技術開発室が行った。木村寛之室長はじめ担当者の皆さんには、細部へのこだわりを御理解いただき長期にわたる度重なる手直しにお付き合いいただいた。感謝いたします。

復元の基本的な方針は、これまでの常識にとらわれず、実際に出土した材のみを出土位置に近い場所で用いることである。ただこれには例外があり、材の残存状況が悪い部分（入口付近・南東部）については残存する部分からの類推を、残存しないが確実に存在した材（中主柱・南主柱・南東副柱）については柱痕からの復元を行った。そうして追加した材は95本中14本で、必要最小限にとどめた。以下では、復元の手順に従って要点を述べる

（1）竪穴および竪穴外の構造物の復元（第383図）

竪穴は深さ0.41mとし、竪穴の構築面や壁面には堆積状況に合わせてロームと黒色土を色分けし、床面の北東部は貼床を施して全面を黄色とする。床面の中央には1辺0.35m、深さ0.25mの中央ピットを設けて南辺以外の3方に板を立て、中央ピットの周囲には高さ7cmの周堤をやや白みがかった黄色で巡らす。

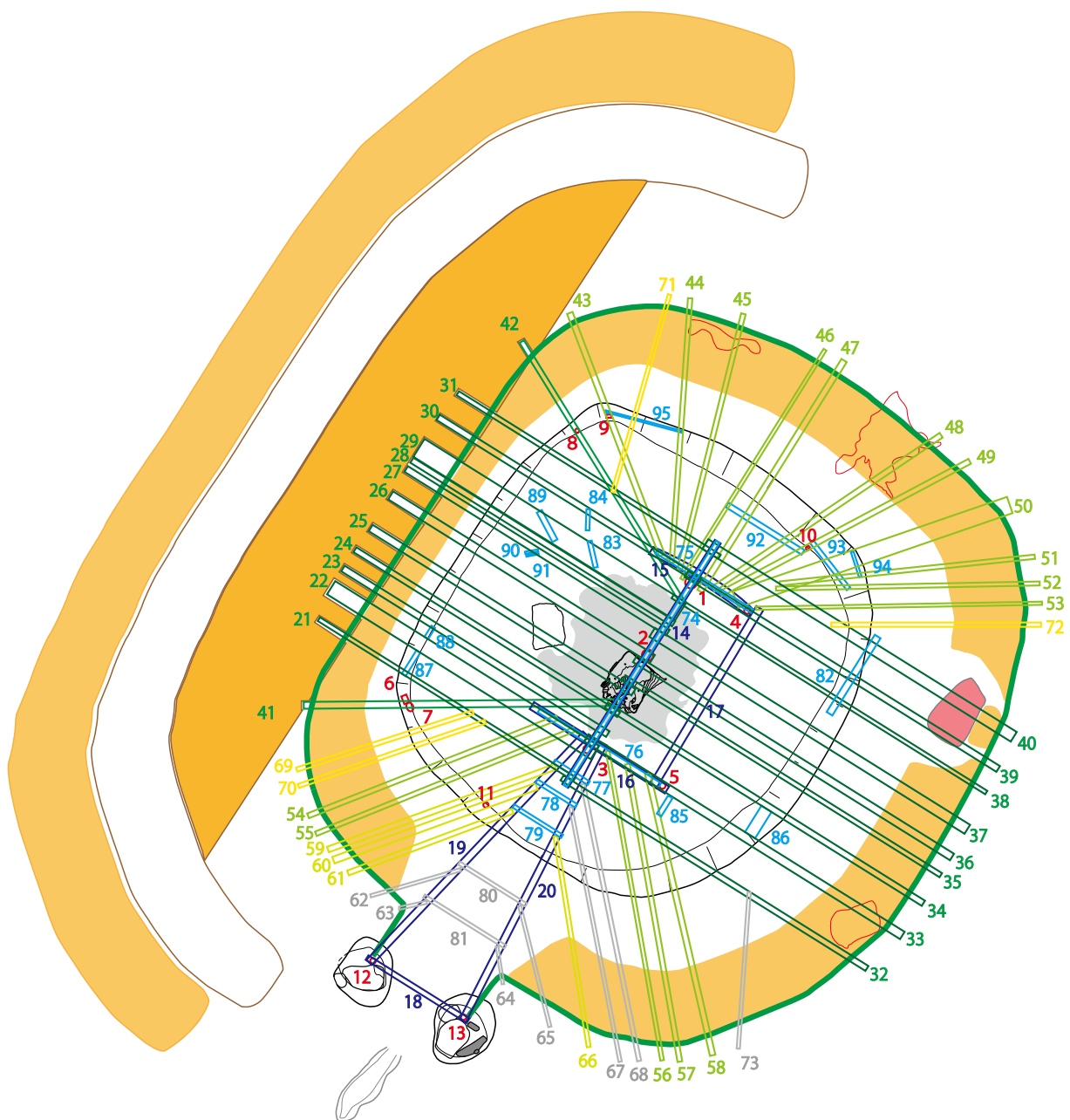
竪穴から0.15～0.6m離れた位置には内堤を築く。内堤は西辺ほど竪穴に近く、竪穴の埋め立て時に削り残された内堤土の分布範囲から判断して、東辺では屋内炉の西端を内縁とする。西辺には無かった可能性がある。屋内炉の両端では内堤は途切れるが屋根への延焼を防ぐため屋内炉の奥に障壁を設ける。内堤は入口でも1.05mの幅で途切れる。内堤の幅は0.5m、高さは垂木を支えるために0.25～0.3mとする。

西辺には垂木を据えるために地山を段状に削り残す。実際の状況を反映させて高さは0.23m、幅は1.0mとするが、本来はもっと大きかったかもしれない。竪穴西辺が直線なことからすると竪穴に接していた可能性もあり、そのほうが隅木までしっかり据えられるので具合が良いからである。垂木穴は段の上面から0.33mの深さまで、それぞれの垂木の幅に合わせて櫛歯状に掘り込む。

段の外側には幅0.65mの周溝と幅0.7mの周溝外堤を入口の近くまで弓形に設ける。

(2) 部材の復元

実物が確認できた81本の材については、径と残存長を計測し、それに基づいてそれぞれの材を復元する。問題は長さである。算出の基準としたのは西屋根の垂木で、垂木穴が遺っていた2本のうち板垂木22について、48°で垂木穴の裾から主柱列まで延長すると、約3.43mという長さが得られる。これに東屋根の垂木とかみ合わせる分を0.1m足した、3.53mを西屋根の垂木の長さとする。次に、西屋根の高さから主柱の長さを割り出す。屋根頂部から棟木の径9cmを引くと、床面までの高さは約28mとなる。これに各主柱穴の深さ分を足したのが主柱の長さになる。さらに、今度は棟木から内堤外縁まで東屋根を下ろし、西屋根とのかみ合わせ分と地中部分を足すと、東垂木の長さは3.87mになる。その次に、副柱を東屋根までのばして東桁の高さ約2.3mを割り出し、その高さで東西の大屋根内を水平に結んで南梁と北梁の長さを算出する。残りが非常に良い北梁は0.95mの推定値が得られた。こ



第383図 SI1復元平面図

れは残存長0.94mとほぼ一致するため、この算出方法と結果は概ね正しいだろう。最後に各梁から入口柱穴上や内堤外縁に入口桁および小垂木を下ろして、それぞれの長さを推定した。

各材の復元図には、残存部位を色塗りして示している。最も残りの良い垂木22や23でも、全体のうち残っていたのは28%程度に過ぎない。炭化材から建物を復元することの難しさの一端を示すものだが、この建物は比較的シンプルな構造の屋根をもつため、影響はさほど大きくないと思われる。

(3) 構造材の組み上げ

いよいよ復元した構造材を使って上屋を組み上げる。まず3本の主柱（1～3）を竪穴中軸付近に1列に立て、棟木14を渡す。ここから西屋根垂木21～31を下ろして、垂木裾を垂木穴に48°の角度で固定する。次に西屋根垂木の1本1本とかみ合わせながら東屋根垂木32～40を配置して葺き下ろす。西屋根の幅2.1mに対し東屋根の方が2.25mと大きいので、東屋根の端の垂木32と40は西屋根を挟む形になる。東屋根の裾は主に内堤で支え、角度は43°と西屋根より少し緩い。屋根頂部の東西垂木のかみ合わせの上には半割材74を押さえ棟木として置く。

西屋根垂木30と東屋根垂木39の下側には北梁15を、22と33の下には南梁16を据え付ける。ほぼ全体が残る北梁は弓なりの材であることから、反りを活かして北主柱1の外側に取り付けて支えとしたと考えられる。南梁は残りが悪いが、同じように南主柱の内側に据える。西屋根のように法面に固定した隅木42を棟木の下面に取り付けて、北梁の西端を下から支える。隅木42は竪穴の壁際に立てた小柱8で補強する。南梁の西端も同様に、隅木41を小柱6と7を使って支える。それぞれの梁の東端は、床面に置いた副柱4と5をかませて支える。北梁の下面と南梁の上面と、東北副柱の外側と東南副柱の内側とでそれぞれ挟む形で東桁17を渡す。したがってこの東桁には構造材として強度を高める役割は乏しい。垂木36や37が東桁に突き付けるように組まれていることも符合し、東桁は明り取りに関連する仕組みと考えられるが、詳細が不明のため今回の復元では明り取りは設けなかった。

南梁からは入口柱12と13に向けて入口桁19と20を下ろす。北端は南主柱を挟んで固定することができ、南主柱が平面楕円形を呈することと関係するかもしれない。問題は入口の高さである。床面の寝床痕から住人は身長160cm前後と推定されるため、入口も160cmの高さで復元したが、もっと低くてもいいかもしれない。2本の入口桁の間には5本の入口横架材（77～81）を配り、それぞれの端に入口垂木（59～63、64～68）を取り付けて門形を組む。扉の種類を推定する材料は無く、桔上戸としたが、構造的には開き戸を付けることも可能である。

南北の梁からは小垂木を扇形に配る。北屋根の小垂木46と47は間隔が狭いので、北主柱を挟んで固定していたと考える。この部分での屋根の角度は西屋根と同じ48°となり、具合が良い。垂木の根本には、横架材（75・76）を重ねて梁と挟んで固定する。その上には細い丸太材を立てて格子とした。材番号は付けなかったものの、北梁の南側と南梁の北側でまとまって検出された多くの細い丸太材はこの格子の破片とみられる。破風の高さは南破風が50cm、北破風が33cmとなる。南破風が大きいのは明り取りの役割があるからであろう。梁からの垂木では覆い切れなかった隙間は、東西大屋根の端の垂木から下ろした隅垂木で埋める。

なお、検出した材には柄や割り込みをもつものは皆無であった。端部ではなく中央部が残ったものが大半であることが関係するだろうが、比較的細い材が多いことからすると、材自体の強度を保つために加工は最小限であった可能性がある。そこで、復元においては材どうしの固定は主に縄による緊縛とした。ただ、縄は最初に燃え尽きてしまうものか確認できなかった。

株式会社イビソク文化財技術開発室によれば、以上のような小屋組で構造計算上の問題はないとのことである。

(4) 葦材と壁材の貼付け

東西の大屋根には、土屋根の下地として、カヤを1層だけ縦方向を主体に葺き下ろす。木舞が無いこの屋根の場合は、ただ載せるだけでは垂木の隙間から落ちてしまうはずであるから、復元では葦簀のように紐で結束した。やはり構造材の結束と同様に紐は確認できなかったが、残存している部分には結束部分が含まれないのか、紐が燃え尽きてしまったのであろうか。入口桁の間も同様に縦方向のカヤを置いた。曲面を描く北屋根と南屋根には、カヤ束を縦横に格子に編んだものを垂木の上に置き、さらにその上に麻綿をマット状に固めたものをかぶせた。

下地の全面をすっぽりと覆うように、黒褐色の屋根土を厚さ8cm載せる。43°～48°の角度では、ふかふかの土を載せただけでは流出するおそれがあり、粘性のある土を壁を塗るように重ねた。復元には反映させていないが東屋根南端のようにカヤを用いた補修が認められることからすると、時には流出することもあるような角度や構造の屋根だったと考えられる。

屋根の最上部から約0.6m分は、縦方向のカヤを土屋根の上に重ね、裾には俵状に束ねたカヤ束を置く。その上にさらに土をかぶせて、最頂部には薄板を重ねる。破風の3辺にも俵状のカヤ束を括り付ける。主な意図は装飾であろうがかなり念が入っているので、屋根土の流出防止も兼ねているかもしれない。外面から見ると破風飾りのカヤ束や頂部の板以外はほぼ全面真っ黒で、内面から見ると葦簀のようなカヤ束に覆われた屋根ができあがる。

問題は、竪穴外にある屋内炉と屋根の距離がかなり近いことである。そこで、延焼を防ぐために山陰型甑形土器を試みに煙突として用いた。屋根の内部では、下方の把手に通した紐を垂木39と40に縛り付け、その間に固定する。屋根の外部では、横架材82を利用して、上方の把手に紐を通して吊るした。山陰型甑形土器は現在までのところ機能が不明とされるが、他の遺物がほとんど出土しない竪穴建物跡に残されていることがあることから、建築部材の可能性もある。特に南谷大山遺跡B S I 20では、竪穴のコーナー付近から垂木の間で正立して出土しており、今回の想定に近い状況を示している。もっとも、包含層から破片が出土しているとはいえ、復元にこの土器を加えることに関しては、出土した材のみから復元を行うという方針からは飛躍していることになる。

内装は、入口と屋内炉との昇降部分を除いた全面に施す。カヤ束を束ねたものを斜め方向に交互に貼り付けるのが基本である。大阪府八尾南遺跡では竪穴建物の壁面にアンペラのような素材が同じように貼られているので、同じ意匠をカヤで表したものとも考えられる。

第384図～第388図に完成した復元CGの画像を示す。実物は3D技術により回転や拡大、縮小ができ、さまざまな方向から細部まで見ることができる。

3 まとめ

最後に、竪穴建物S I 1のCG復元を行った結果浮かび上がってきた問題点を記す。

第一に、竪穴建物の小屋組は実際にはかなり華奢だったのではないかとということである。S I 1の構造材は、これまでの研究や実際の復元で考えられてきたものに比べて細く、本数も少ない。特に木舞などの水平方向の材がほとんど存在しないのは驚きである。S I 1だけの特徴であるかどうかは検討課題であるが、これでも建物として成立することは確認できた。

第二に、小屋組はそれぞれの建物の置かれた状況にあわせて、かなり変異に富むのではないかということである。S I 1では、地形的な制約から小振りの建物となり、柱や桁を減らさなければならぬ一方で、制約を逆に活かして、西屋根の垂木や隅木を法面に固定することで強度を保っている。2本柱や4本柱の一般的な建物の場合でも、条件や目的に応じて構造は多様で、特に細部に関しては各種の工夫が凝らされていたのではないかと推測する。

第三に、土屋根にもさまざまな構造のものが存在する可能性があるということである。S I 1の43°～48°の屋根勾配は、土屋根に最適とされる35°よりも急な角度で、普通に土を盛った場合には屋根土の流出を引き起こすおそれがある。この建物で粘性の強い土を薄く用いるのは、壁のように塗り込んで流出を防いだものであると推定される。下地に関しても、カヤを薄く敷いたものと、カヤを格子に組んだ上に綿を載せたものの2種類が1棟の中で使い分けられている。この薄い下地も、壁塗りの際の木舞のようなもので、塗り込める土屋根と関係する可能性がある。これまでの研究で想定されてきたような、緩い勾配の屋根に厚く土を盛り、その上に雑草が生えるようなタイプとは根本的に異なる、「壁のような」土屋根が存在したことは、土屋根の多様性を示唆するものかもしれない。

謝辞

公立鳥取環境大学環境学部 浅川滋男教授には現地指導を賜り、建物の細部の構造にいたるまで多大な御教示をいただいた。一戸町教育委員会 高田和徳氏には土屋根についての御教示をいただいた。感謝いたします。

【参考文献】

- 浅川 滋男編 2001 『竪穴住居の空間分節に関する復元研究』
鳥取県教育文化財団 1994 『南谷大山遺跡Ⅱ 南谷29号墳』
財団法人大阪府文化財センター 2008 『八尾南遺跡』



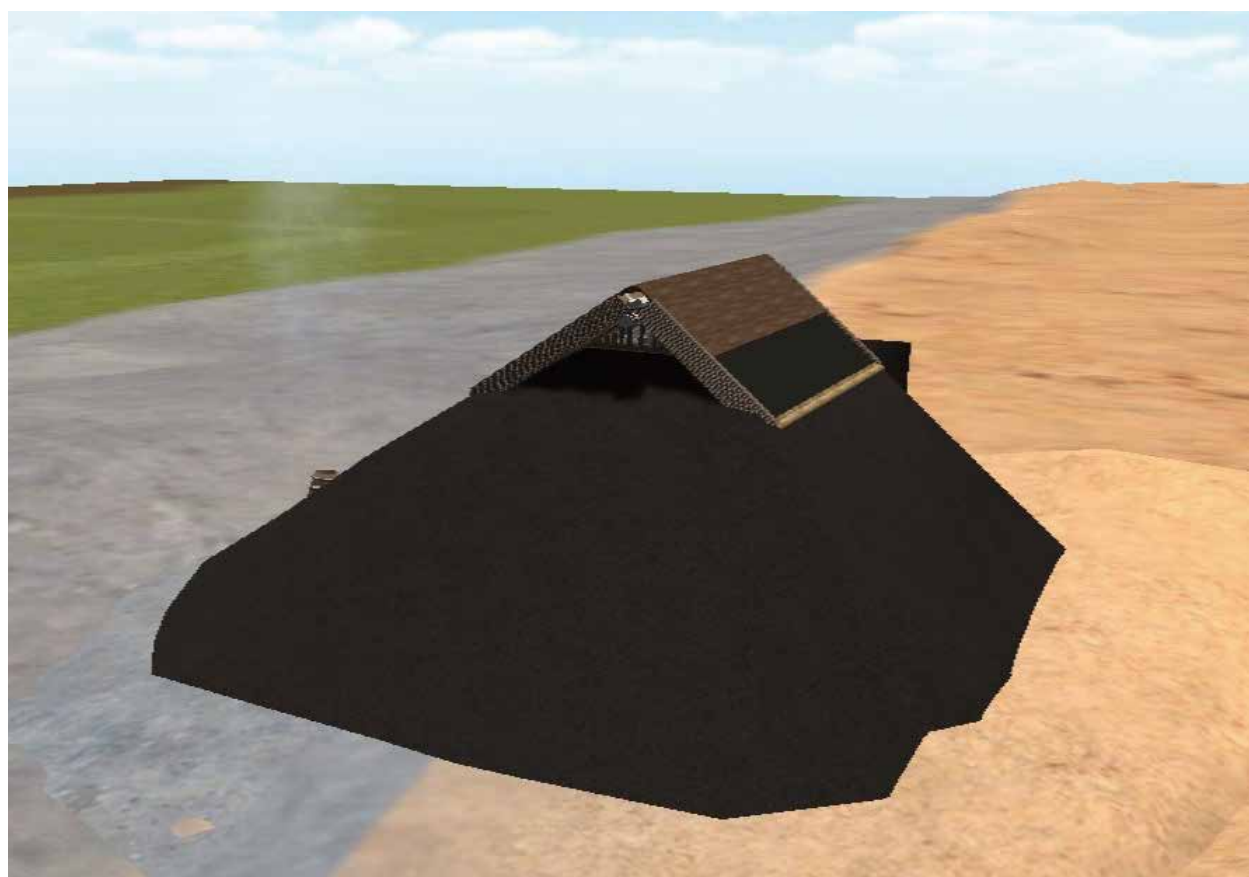
第384図 小屋組平面図



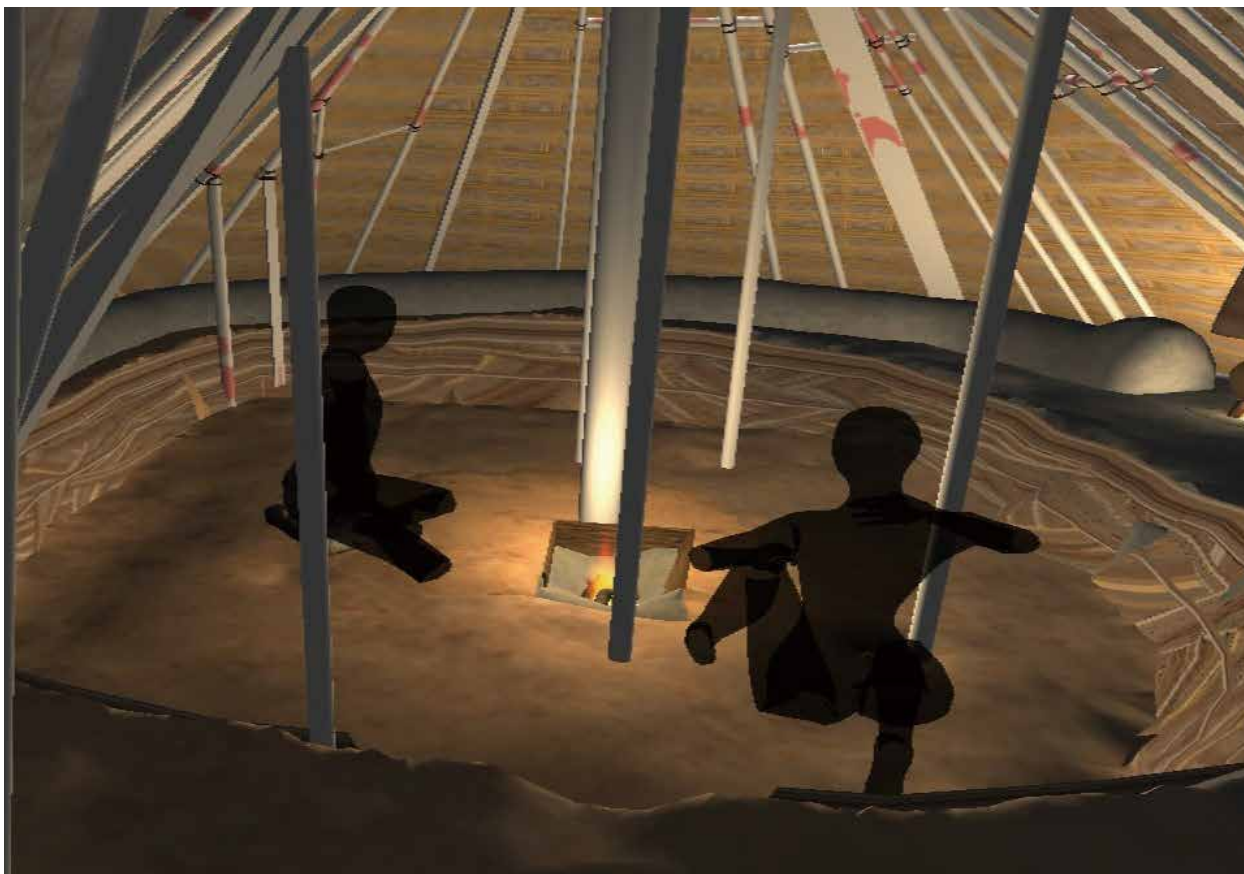
第385図 小屋組(南から)



第386図 外観(南から)



第387図 外観(北から)



第388図 内部(入口から)



写真40 西屋根垂木と葺材



写真41 西屋根葺材



写真42 東屋根垂木と葺材



写真43 東屋根葺材



写真44 東屋根葺材細部



写真45 西屋根と屋根土



写真46 東屋根補修状況



写真47 西屋根上部屋根飾り部分



写真48 北屋根綿状葺材



写真49 綿状葺材と格子下地



写真50 西壁内装



写真51 西壁内装細部

第4節 下坂本清合遺跡の変遷

下坂本清合遺跡では、平成26年度から同28年度までの3箇年にわたる発掘調査によって、弥生時代から近世に至る遺構、遺物が確認された。本節では、遺跡全体の変遷を概観するとともに、中世以降の土地開発について触れ、調査の総括としたい。

1 下坂本清合遺跡の変遷と土地利用

弥生時代～古墳時代

弥生時代中期後葉から人々の活動が始まり、後期前葉以降には6区と8区の丘陵裾部が段状に掘削整地(SS 4～7)され、その平坦地に後期後葉から終末期の竪穴建物(SI 1)、平地建物(SI 2、4、6)、掘立柱建物(SB 6～8、S750)、布掘建物(SB 5)及び杭列が構築される。7区丘陵斜面部にも後期後葉から開発行為が及び段状遺構(S006、S008、S013、S063、S178)や建物柱穴と考えられる小穴群、貯蔵穴(S002、107、198)が確認され、集落は古墳時代前期前葉まで継続する。なお、丘陵裾部から平地部にかけては緩斜面で軟弱地盤のため、建物には礎板や礎盤石が多用される。

古代

6区丘陵裾部の中心部で、大小の礫と黄色土が底面に貼られ、1m四方の枅形に礫が配置された溝(SD 5)が確認されている。本遺構の埋土上層から多数の須恵器や土師器が出土している。西隣では一辺0.5mの平石がテーブル状に積み上げられた遺構が検出された。これらは一体として水の祭祀に関連する遺構と推定され、古代の丘陵裾部は祭祀場として利用されたと考えられる。同時にやや距離を置くが6区丘陵裾部南部では、掘立柱建物(SB 3、4)が確認されており、居住域としても利用されていたことが明らかとなっている。

中世

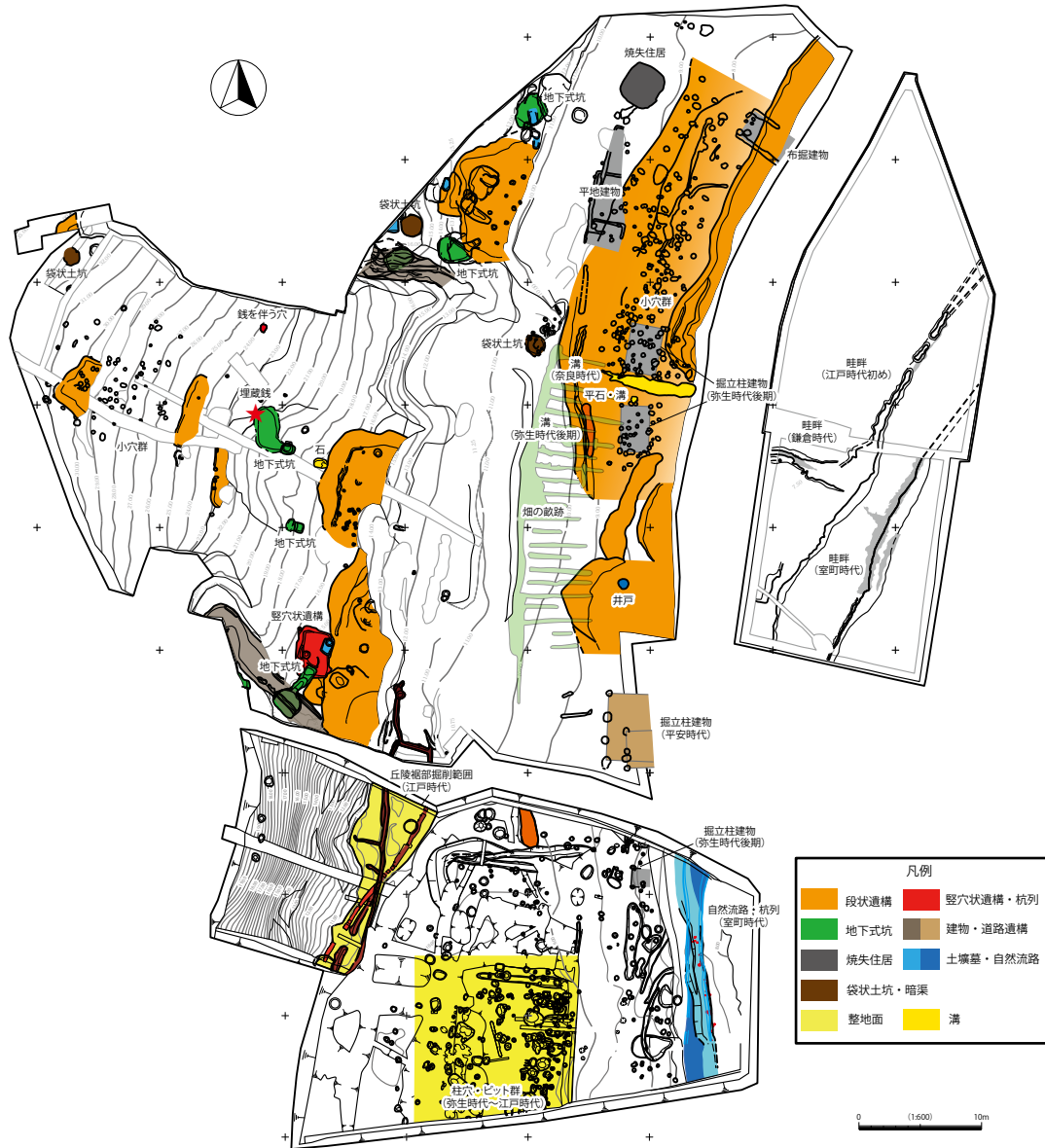
中世に至り、開発行為の大規模化が進む。中世前半には、6区平地部において畦畔で区画された水田が営まれる。また、丘陵裾部と平地部の境界付近では整地面(SS 3)の中心部に井戸(SE 1)が構築され、生産域(耕作地)として利用され始めたことがわかっている。

中世後半には、7区丘陵山裾部に近い範囲で土墳墓(S061、S105、S109、S113、S180)が、それより標高が高い斜面部には段状遺構(S100、S110、S161)や、地下式坑(S075、S098、S135、S137、S138、S145、S147、S153)が構築される。16世紀前半には埋蔵銭(S088)が埋められる。8区丘陵裾部では、多数の柱穴群が確認され、屋敷地として利用されていたこと、丘陵裾部沿いを縦走する自然流路(S315、S727)や平地部を埋め立てて造成を行い、屋敷地や耕作地を拡張していった状況が確認された。造成に伴う杭列(S533)も検出されている。8区では16世紀から17世紀の陶磁器が数多く出土していることから、埋蔵銭の行為者の屋敷地の可能性を指摘しておきたい。

以上、中世における土地利用のあり方は、丘陵斜面部は墓域や非日常の場、丘陵裾部は屋敷地、平地部は耕作地として利用されていた状況が確認された。

近世

8区丘陵裾部、平地部は継続的に整地や造成がされている。丘陵斜面裾を掘削し、その排出土を平地部造成へ利用している状況が確認された。丘陵斜面部では、小規模ながら崩落が2回発生し、その対策として石詰暗渠(S349～S350)及び土留柵の杭列(S354)が構築された。屋敷地拡張行為は、

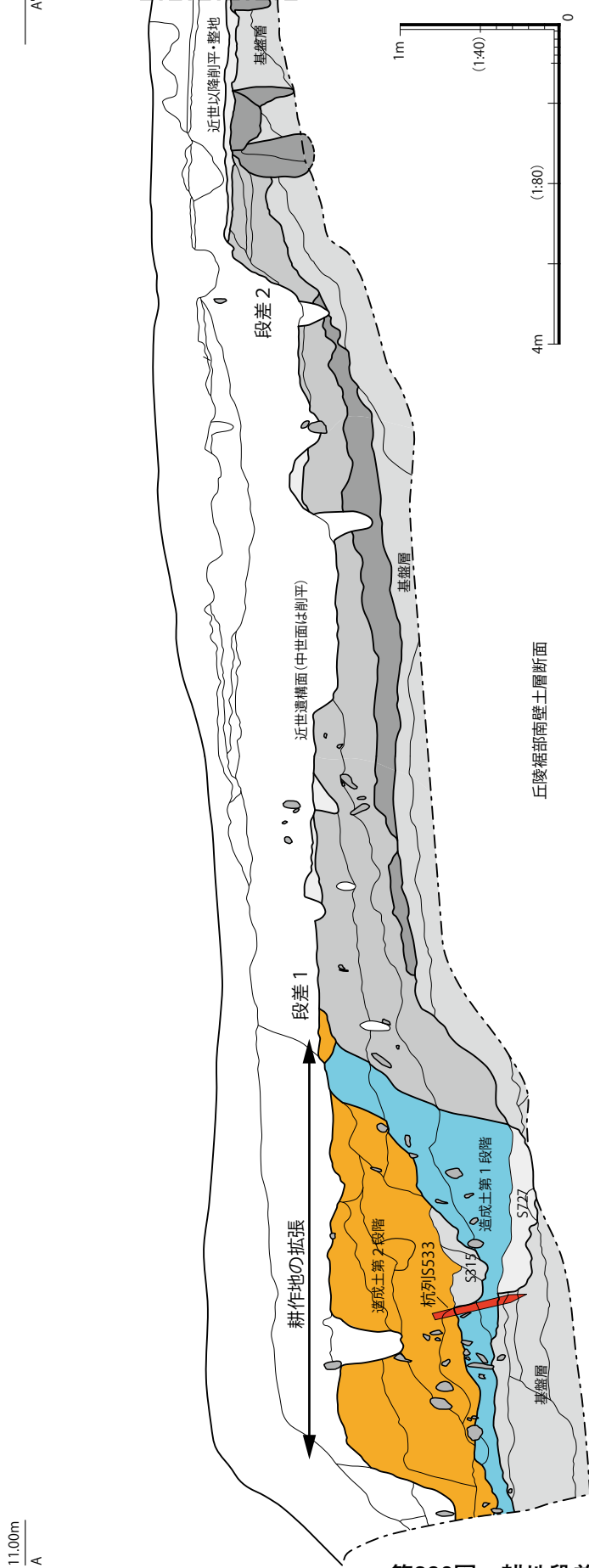


第389図 主要遺構変遷図

背後の急傾斜地の災害対策と密接に関連していることが明らかとなった。6区丘陵裾部は、近世以降の耕作痕が検出され、畑地として利用されていたようである。6区平地部では、水田及び畦畔が確認されており、中世以降継続的に水田耕作地として利用されていた状況が窺える。

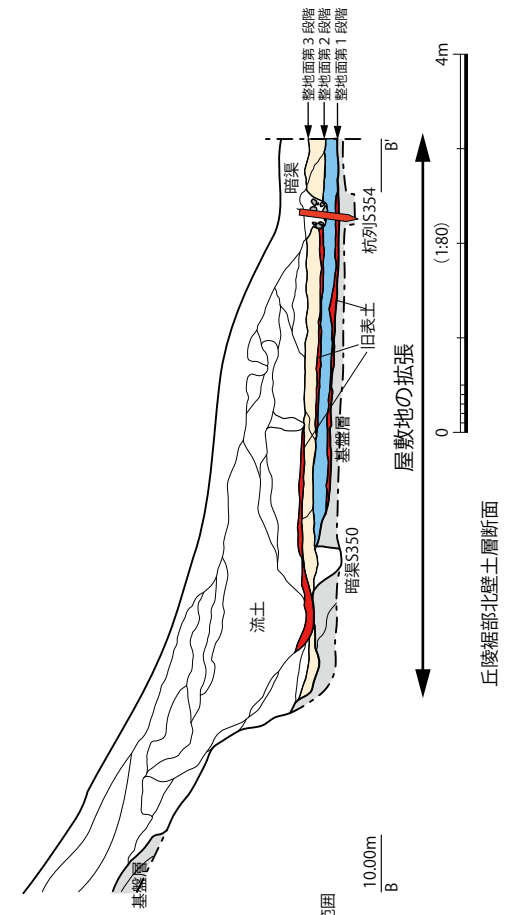
2 中・近世における開発行為

8区では西側の丘陵部から東側の低地部に向かって、中央部と東部の2箇所段差が認められる(以下、東部の段差を「段差1」、中央部の段差を「段差2」と呼称する、第393図)。段差1は丘陵裾部と平地部の境を為しており、自然流路であるS727が走行する。S727は未調査部分である6区丘陵裾部(6-1・4区)と平地部(6-2・3区)の区境に走行する用水路へと延長するものと考えられる。この用水路を境として地盤の高低差が認められ、遺構の様相も異なっていることで6区と8区は共通している。S727は拳大から人頭大までの礫を含む砂礫層が堆積することから、比較的水勢が強かったと想

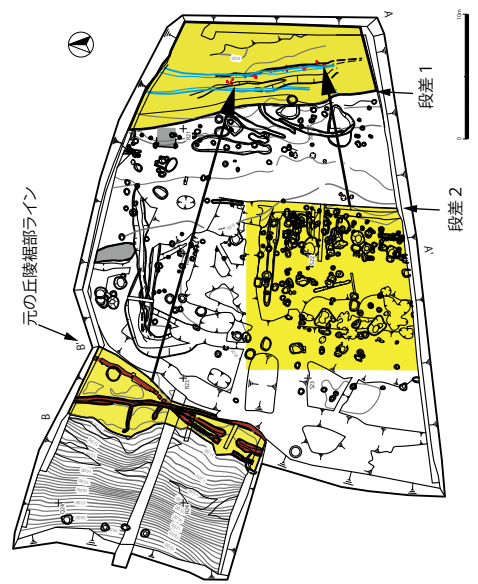


第390図 耕地段差模式図

丘陵裾部南壁土層断面



丘陵裾部北壁土層断面



11.00m
A

定される。砂礫層の上部にはシルト層が堆積し、再び溝S315を形成する。溝S315からは自然木や礫などを中心に、板状木製品、漆器椀、五輪塔及び鉄鎌などが出土している。このことから、S727と異なり水が滞留している状況が想定され、同時に生活残滓の廃棄場にもなったと考えられる。本遺構上部は黄褐色土の地山ブロックを含む土が堆積しており、人為的に埋め戻されたことが確認された。南北方向走行する溝S315の東壁にほぼ沿って打ち込まれた杭列S533は、幅0.2～1.2mの間隔、深度0.05～0.6mを測る。遺存状況が良好な杭は根入れが深く、頭部が東側に大きく傾斜、変形した状態で出土した。これは、当初から斜めに打ち込まれたわけではなく、西側段裾の土圧の影響で傾斜、変形したものであろう。杭列S533が段差を埋め戻す際の土留め施設の一部と考えられる。検出された杭の放射性炭素年代を測定した結果、15世紀中頃から17世紀初頭の年代値が得られており、その頃には段差を埋め戻す行為が始まっている（第7章第6節参照）。

この段差1を埋め戻す行為は、調査地南壁土層断面から継続的に複数回行われていたことがわかっている。ここでは、土質や色調などから、少なくとも3回は行われていたことがわかる（第393図）。S727上部に堆積するシルトをベースとする土層群、S315西側に堆積する堆積土は中世から近世前半の造成土と考えられる。そして最上部の黄褐色地山ブロックをベースとする土層群が近世後半に該当する。最終段階の埋立ては段差2の下端とほぼ水平を保ち、第1遺構面で調査を行った水田遺構（S224、S225）が検出されている。このことから、埋立ては屋敷地の確保とともに耕作地の確保もその目的であったことが推定される。

ところで、近世後半に至り丘陵斜面裾の開発も行われた。斜面裾では、断面L字状に掘削して平坦面を確保した後、斜面裾に沿って南北方向の石詰暗渠S350を構築している。暗渠の設置は、屋敷地の地盤改良及び湧水による斜面崩壊を防止する意図があったものと推測される。近世陶磁器が出土した土坑S407は、斜面崩落後の地山面で検出されており、平坦部に伴う遺構と考えられる。石詰暗渠S349に先行し、近世陶磁器を含む土坑S348もこれに近接した時期と推測される。斜面掘削は、屋敷地の拡張のためと考えられ、この掘削土が段差1の最終段階の造成土に利用された可能性が高い。屋敷地の拡張とともに耕作地の確保も同時に行ったものといえよう。

その後、近世後半から幕末にかけて、主に斜面中腹で大規模な斜面崩壊が発生したとみられ、斜面基盤層が馬蹄形に窪む箇所を複数検出している。これは基盤層の表層が斜面下方へ崩落したことにより生じた地滑り地形と考えられる。この斜面崩壊の結果、斜面裾が広範囲に埋没し、東側は4m程寄った緩斜面の地形に変化する。斜面崩落土は最大1m程の厚みに達する。斜面崩壊後は、斜面裾を急角度で掘削することは避け、新たに形成された緩斜面裾に沿って土留め杭S354を打ち込み、その後、新たに石詰暗渠S349を設けている。この石詰暗渠に平行して現代の暗渠が確認された。

当地は、現在鳥取市急傾斜地崩落危険箇所指定されている。当初から周辺の丘陵部は急傾斜で斜面崩壊が生じやすい軟弱な地盤であった。そのことは、第8章第1節でも触れているが、斜面裾を急角度で掘削した影響により、結果的にさらに斜面崩壊が生じ易い状況をもたらした可能性がある。

報告書抄録

ふりがな	しもさかもとせいごういせき							
書名	下坂本清合遺跡（4～8区）							
副書名	一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XXXVI							
シリーズ名	鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	66							
編著者名	小口英一郎 高橋章司 加藤裕一 荒川和哉							
編集機関	鳥取県埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地 TEL (0857) 27-6711							
発行年月日	2018（平成30）年10月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもさかもとせいごういせき 下坂本清合遺跡	とっとりけんとっとりし 鳥取県鳥取市 けたかちょうしもさかもと 気高町下坂本 114ほか	31201	15-585	35°30'05"	134°04'22"	20140422～ 20141128	2,703㎡ 1,260㎡ 1,191㎡	一般国道9号 （鳥取西道路） の改築
						20150414～ 20150918		
						20160524～ 20161013		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
下坂本清合遺跡	集落 生産	弥生時代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑	弥生土器、石器、 木器	焼失建物跡			
		古墳時代	溝 土坑	土師器、須恵器、 土製支脚				
		古代	掘立柱建物跡 溝	土師器、須恵器				
		中・近世	埋蔵銭坑 地下式墓戸 土井田遺構 杭	瓦質土器、陶磁器、 銭貨、漆器、木器	埋蔵銭15,524枚			
要約	<p>下坂本清合遺跡（4～8区）は鳥取市気高町に所在し、瑞穂谷と宝木谷の合流部、河内川西岸に位置する集落跡及び生産遺跡である。今回の調査では、丘陵裾部（6-1・4区、8区）を中心として竪穴建物や掘立柱建物が弥生時代後期から構築され、その後、古墳時代から近世に至るまで断続的に集落が営まれたことが明らかとなった。低地部（6-2・3区）では鎌倉時代から江戸時代に至る水田遺構が確認され、継続的な生産域として利用されていた。丘陵斜面部（7区）では、県内で初調査事例となる室町時代の埋蔵銭（15,524枚）が発見された。南側の丘陵裾部（8区）では同時代の屋敷地が確認され、江戸時代まで継続している状況が明らかとなった。</p>							

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 66
一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XXXVI

鳥取県鳥取市気高町

下坂本清合遺跡 (4～8区)

第1分冊 本文編

発行 2018年10月30日

編集 鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 鳥取市国府町宮下1260番地

電話(0857)27-6711

発行者 鳥取県埋蔵文化財センター

印刷 中央印刷(株)